九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ヴィルヘルム・ラーベ：『著作集』（II）

ラーベ，ヴィルヘルム

恒吉，法海
九州大学大学院言語文化研究院 ： 名誉教授 ： ドイツ文学

https://hdl.handle.net/2324/7341485

出版情報：pp.1-505, 2025-03-21
バージョン：
権利関係：

ヴィルヘルム・ラーベ：『著作集』(2)
恒吉法海訳

九州大学リポジトリ翻訳研究・第二期
Nr.3.　2025 年 3月 21日　　Wilhelm Raabe (1831-1910):Werke(2)

目次

アブ・テルファン 3頁
（Abu Telfan 1867）

ドイツの月光 228頁
(Deutscher Mondschein 1873)

ホラッカー 242頁
(Horacker 1876)

フォーゲルザングの文書 342頁
(Die Akten des Vogelsangs 1896)

解説 464頁
あとがき 479頁
付録 ハインリヒ・フォン・クライスト『**逸話集**』 480頁
(Heinrich von Kleist[1777-1811]: Anekdoten)

アブ・テルファン
（Abu Telfan 1867）
あるいは
月山脈からの帰郷

ムハンマドは言っています、私が知っていることを、汝らが知れば、汝らは大いに泣き、笑うことは少ないだろう、と。

[このモットーは、M.Solitaire: Erzählungen bei Nacht 『夜のお噺』より、1858.。少し類似の言葉にコーランでは、汝らはこの話しに驚くかな、そして笑い、また泣かないかな、と53スーラにあるらしい。しかしこのドイツ語訳は疑問文となっているが、当該箇所を日本語訳で参照すると、以下の通り。それでこの話（クルアーン）におまえたち（マッカの多神教徒たち）は驚くのか（５３：５９）そして、おまえたちは（嘲）笑い、（警告があるのに）泣くことはない（５３：６０）『クルアーン』中田考、監修]

序言

この楽しい夏とは言えない時節に出来上がった本を読者の両手に渡して、読者の善意の心に委ねながら、昔より物怖じした時代と昔より含羞の作家達の立派な習慣を想起して、厳しく、あらゆる誤読を戒めたい思いを禁じ得ない。全く衷心よりお願い申し上げることは、アブ・テルファンの地も、トゥムルキー州もアフリカの地図で探さないで欲しいということである。月山脈に関しても、私同様誰もが承知していよう、この山脈は本当に発見されているのか、発見者達の間でさえもまだ意見の一致に至っていないのだ、と。何人かの者は、少し昔の地理学者達がそれをメモしている箇所に、大きな沼地を発見したと主張していたり、また別な者達は、広がった塩の砂漠を、更にまた別な者達は、単に取るに足りぬ丘の連なりを発見したと主張したりしているのである。こうした一切は、私が個人的に、絶対にこうだと信ずるのを少しも妨げるものではない。　ー

シュトゥットガルト、　　一八六七年十一月　　著者

第一部
第一章

この、我々皆が承知の、いとも恵まれて、啓発され、愛すべき十九世紀の六十年代当初の五月十日、アレクサンドラ出港のロイド汽船から、トリエスト[イタリア]のモロ桟橋で、一人の個人が吐き出された。この人物はその他の多彩な乗客の群れの中で、幾つかの風変わりな点で目立っていて、人間や民衆の多様な風采に慣れたテルゲスト人[トリエスト人の旧称]にとってさえ、若干新奇に思われた。半ばヨーロッパ人風な衣装にもかかわらず、より野生的な、比較的アシャンティ[ガーナ]人、カフィール人、マンディンゴ人風な奴で、随分前から、もう税関前の自分のトランクに座っていず、当惑して見回してもいなかった。この男は外国人登録帳や、あるいは黒鷲亭の宿泊簿に大胆に「異例ノ者」と記入して良かったかもしれない。しかし彼はそのようにせず、単に自分の名前、レオンハルト・ハーゲブーハーを記帳して、警察の注意書きに従って、こう添えた。「戦争捕虜、ダルフール王国、トゥムルキー州のアブ・テルファンより、　ー　ザクセン王国、ライプツィヒへ向かう」。勿論十五分後に、帝国王室領の役人が彼の許へ伺候して、奇異の目で若干詳しい情報を求め、しかしまたその後十五分して、更にもっと奇異な目をして、古典的な見解を述べて、去った。「アフリカからはいつも新奇なことがやって来る」。[プリニウス『博物誌』：アフリカはつねに新種をつくり出すと、Ⅷ16,42、中野定雄他訳]。

黒鷲亭での勘定を支払い、更なる旅費を捻出するために、この異邦人はポスト通りの或る商人に象牙を売却し、鉄道でウィーンに向かった。途中でアーデルスベルクのグロッタ[ポストイナ鍾乳洞、スロヴェニア]を見物することもしなかった。ウィーンでは若干の持参した砂金を立派な手数料と引き換えに紙幣に替える機会を見いだせたであろう。しかしながらトリエストの象牙商が同様にすでに紙幣で支払ってくれていたので、それを考慮して止めた。勿論ウィーンでも、周知の自分の修道院のために寄金を募る慈悲深い修道士の他に、一人の警察が彼の部屋に現れて、同様にとても丁重に、彼の身分証を正確に査察することを許して頂きたいと述べた。そして同様に、奇異の目で、満足して、帰って行った。この役人が背後でドアを閉めると、この旅行者は再びベッドで横になった。彼はこのベッドにプラハへ出発するまで留まっていたので、それで彼は当然聖シュテファン大聖堂の塔に上がることも、プラーター[遊園地]に行くことも出来なかった。プラハに彼は夕方到着した。そして彼は翌朝早くドレスデンへ旅立ったので、チェコ国の帝国王室領の役人は、この役人もトリエストやウィーンの役人達と同様、より詳細に彼のことを調べるのを自分の義務と見なしていたが、登場するのが遅すぎて、三尾の鯉亭の亭主に、このような奇妙にいかがわしい場合には、将来、客人を一番列車に乗せるべきではないとただ文句を言った。このトゥムルキー州からの戦争捕虜は、まだ急行列車の中でプラハの鐘が聞こえるとき、すぐにまた穏やかに微睡み始めていた。彼は眠っているとき、ボーデンバッハの帝国王室領の関税役人に起こされ、自分の所有物に関する戦いで元気になって、ドレスデンまで目覚めていた。ドレスデンで彼はノイシュタット[新町]のパレ広場の三本棕櫚枝亭の影の中、新たに眠った。

警察はどこでも直接姿を現すよう定められていない。ドレスデンでは警察は旅行者の部屋へ現れず、帝国王室領の諸国家より余り親切ではないが、彼を警察署まで呼び出した。

これは読者にとって前とは違うことで、目新しく思えようが、しかしこの神秘的異邦人にとっては少しも都合良くなかった。彼は定められていたので、すべての善良なドイツ人がそうするように、赴いて、寝惚けて戻って来て、システィーナの聖母[ラファエロ作]像もブリュールのテラス[遊歩道]も見物せずに、ライプツィヒへ出発して、ドレスデンの保安当局も彼の身上書に関して不穏な懐疑を差し挟まなかった点に、甘美な意識を抱いて、穏やかに休んだ。

ドレスデンとライプツィヒの間にリーザの駅がある。そこで立派な卵ビールが飲める。ライプツィヒ近郊で、シュヴァルツェンベルク侯爵[1771－1820]は皇帝ナポレオンを打ち負かしたと言われる[実際は臆病に兵を進めた]。これが証明されれば、いずれにせよ、とても刮目すべきことであろう。しかし我々はこの件を、我々の父祖からの伝承通りに、不明のままにしておくことにしよう。　ー　元来ライプツィヒ近郊で皇帝ナポレオンを打ち負かしたのは誰か、昔の殿方らも我々よりも正確に知っていたわけではなかろう。

ザクセン人が立派な行動に踏み切ったパウンスドルフ[ナポレオンの同盟軍であったが、プロイセンに寝返った]をこの戦争捕虜は眠ったまま通り過ぎ、ライプツィヒに到着した。そこでは警察は、数百の書籍商会の出版品目で啓蒙化され、年に三回再来する書籍市の人出の混雑で寛大になっており、彼は初めてドイツ同盟の領域に到着して以来、そっと放置されて、外国人帳簿への彼の届け出の不備を咎められなかった。我々は警察にこの点とても感謝するものである。というのは、お蔭で、我々は一息つくことが出来て、この休みを利用して、我々はこの興味深い異邦人のかなり縁遠い体験や冒険について、若干のわずかばかりの言葉の説明で紹介出来るからである。

我らの長いとは言えなくても、疑いもなくはなはだ有意義な文学上の経過の中、我らは大いに手ひどく苦しみながら、誤解された諸人物、色々な有徳で立派な倫理的鑑、反抗心や我意、不作法の恐ろしい例、歴史や博物誌からの教訓的で愛らしい範例を、古い記録であれ、新しい記録であれ、路地であれ、小部屋であれ、屋根裏であれ、地下室であれ、教会であれ、居酒屋であれ、森であれ、田畑であれ、嗅ぎつけて、そしてそれらを出来るだけ、埃を払って、洗い出し、梳って、正当な明かりの下に置いて来た。一八五四年以来、[1854年11月15日、ラーベは『雀路地年代記』に取り掛かった]、幾多の汗が滴り落ち、幾多の愚行がなされた。余りに饒舌であったり、余りに平板であったり、短すぎたり、細かすぎたり、余りに高尚であったり、余りに深淵であったりした。気取っていたり、わざとらしかったり、センチメンタル過ぎたり、瑣末過ぎたり、余りに超自然的であったり、余りにリアルであったりした。我らの唯一の慰めは単に、いつでも常に謙虚でありすぎたに過ぎない。

今日はとにかく謙虚になりすぎず､我らの功績分をそれなりに誇りに思うことにしよう。

またしても我らの背後には、まことにモグラ風の詮索、掘り返しの跡が歴然である。そして我らの前にはまことに真実の出来事の素材が並んでおり、今からこの出来事の関連に従事しよう。読者方の関心、同意を無条件に信頼して、モグラ塚を投げ飛ばすことにしよう。「どちらさんも、素敵な朝、お早うございます」。

再びまた鼻を深みから突き出すことは、何という快楽か。ドイツ文芸の庭園は何と豪華で壮麗なことか。何と情感一杯の読者の目からすべての美しい花の許、露が煌めき、何と青空では、抒情的な雲雀が喜びの歌を歌い、郭公が何と歓呼し、何と諧謔的な蛙がその斑

な腹の底から喜悦していることか。

自分のありのまま、その国民として、まだ存命であるのを実感するのは、まこと一つの喜びである。しかしまた我々は何と詮索し、掘り返すことか。我らにこの正当に然るべき称賛がなされるべきであろう。すべての人間的知識や意欲は、単に継ぎ接ぎ細工[中途半端な仕事]であると、我らはまた認めるものであるだけに、それだけ一層この称賛は我らに率直に与えて欲しいものである。我らのすべての概念に及ぶ豊かな素材も、後世の関心を十分に満たすほど完全なものとは、とても言えない。どのような老いたおばさん、おっかさんも、自らの箪笥や長持ち、編み物袋を開けるよう頼んでも、梃子でも同意しなかったもので、かくて最重要の書類が、惨めな具合に消えてしまったものである。一つ以上のいとも尊いドイツの同盟国の一つ以上の尊い政治当局、司法当局が、我らにその文庫を一瞥させるよう頼んでもすげなく断ったものである。

我々は確証が欲しいところで、推察に留まらざるを得なかった。我らの空想はしばしば、我らの悟性よりも、あるいは我らが理性と呼びたがるものよりも、奔放に広大に羽ばたいて来た。

我々は称賛を大桶単位で得たり、スプーン単位で得たりする。我々は真理、真面目さ、公正中立に関し、出来る限りのことを果たして来た。我々はその日々の趣味によっても、我らの文芸上の手仕事の手軽な器用さによっても、狼藉に至ることはなかった。どのような関連でも、我々は非難に対する改善に努めて来たし、公私の災難があっても、地球の一自転以上に長く我らの前進を阻むことはなかった。いや我々はそれどころか、眠れない夜の度に、それを一つの恵みと見なした。というのは、その夜は通常少なくとも一歩先に、我々を、その高い小道で進めるからである。しかしこの

レオンハルト・ハーゲブーハー

の帰還の話しほどに困難で、かつ責任に満ちた作品が我々によって企画されたことはない。この話しは最初容易に見えたとすれば、そう見えるほど、一層難しくなるものであった。

一人の主人公を新鮮に、敬虔に、自由に、[Frisch,fromm,froh,frei、体操用語、Massmann発案]極めて未知の、極めて内奥のアフリカからトリエストに上陸させることは、とても快適なことであった。嘘であると証明される恐れは皆目ないまま、盛大に嘘を付くことが出来たことであろう。そこで我々はそうすることに決めた。ゴリラやツェツェ蠅、チャド湖、ザンベジ川、等々の珍しい点に関し、我々は何と周知のように身を乗り出して喋々して来たことか。いつでもそれは誰もが何か聞いたことがあっても、しかしそれ以上正確なことは何も知らない事柄であった。

申したように、我らの文芸上の運命で、我らの友ハーゲブーハーと知り合いになる幸運が恵まれたのであれば、彼のことを、その長い不在の後、仰天しているヨーロッパ世界に紹介するこのようなやり方が唯一正解であろうと我々はまず確信した次第である。そして我らの恍惚となった心は、月の山脈、ジェーベル・アル・コムリ[青い山脈からの誤訳]の千もの花々の上に酔った蝶のように動悸して、舞い飛ぶように思われる。

しかしながらどのように酩酊しても、すぐに覚醒が続くように、この目覚めもこの最初

の、昂揚して甘美な作家的麻痺の後、すぐに生じた。我々はこの大いに遍歴した立派な男と昵懇になるにつれ、我らの心は更に一層こう確信するに至った。つまり彼はその多種多彩極まる、危険一杯の、神秘に満ちた冒険を、エジプトやヌビア、アビシニア、ダルフール王国で体験したのではなく、昔からの習慣で神秘的名前ドイツが地図上に記載されているところ、即ち、この地上で最も愚直な民が古代から誠実と実直さ[Treu und Redlichkeit: Hölty作詞、モーツァルト作曲]を披露しているところ、そしてその民は、根源の泥土から生じて以来、その政府に対し、ただの一回も、正当な根拠を上げて苦情を言ったことのないところで体験したのである、と。

かくて一つの大きな課題が別の課題で圧迫されることになった。もはやエチオピアは問題ではなく、ゲルマニアが問題である。エジプトのハスの花[Nymphaea lotus]ではなく、煙草[Herba nicotiana]である。神々の処罰されない寵児ではなく、しばしばひどく処罰された人類の贖罪の山羊である。[我々はたとえ、神々の寵児たる賢明な、処罰に値しないエチオピア人ではないとしても、『ビュットーの鵞鳥』]

月の山脈のこの蝶は再び通常の白黄色の蝶[バター鳥]となった。これは快適なドイツの野原上を短い夏の間、舞い飛び、静かにその卵を産み付け、おびただしい数の鮮やかな緑色の太った青虫の親となるもので、これはある種の場合、長編小説の執筆に耽ると呼ばれたりするものである。

しかし今回は例外的にこのような場合とは言えない。我々は一編の長編小説とは全く異なるものを書くことになり、固くこう確信している、つまり存命の者、あるいは物故者についての伝記作者が一つの偉大な対象をかくも低く評価してペンを執ったことはかつてなかったことである、と。そしてこのように表明しながら、我々は更に、ライプツィヒの棕櫚亭旅館で、望むらくは短期間のうちに多くの紳士淑女にとってとても昵懇の者となるであろうこの異邦人に注視する資格を有する者であると宣言する。

すべて発端は難しいと諺に言う。しかしこれは全くここでは当たらない。ダルフールのスルタンの戦争捕虜をトリエストのモロ桟橋からライプツィヒの棕櫚亭まで追跡し、彼をその旅館の81号室でアフリカの箱と共に預けることほど簡単なことはなかった。しかしその後、この男と箱はどこへ行くのか。

砂漠のユダヤ人達に似て、エホヴァの謂れある怒りを買って、その隊列の先に出現する火柱がそのユダヤ人達の鼻先に吹き付けられるように、[出エジプト記、13,21]、またジャスミンの園亭で月見をしていて、接吻を期待していたのに平手打ちをくらう恋情の心持ちの者に似て、一つの明かりが点されるすべての瞬間におけるドイツ国民に似て、我々はとても当惑して、最も濃い霧の中の状態である。

ライプツィヒは美しい町で、民謡を信じようとすれば、海辺の町でさえある。[洪水があった]。その間近な周辺には、すでに我らが微かに触れたように、かなり以前から、諸国民の戦いが行われる恒例であり、その書籍市と書籍業はヨーロッパで著名なものの一つであるという点についてはすでに述べた。ライプツィヒは諸記念碑の町である。その地で一つの記念碑の資格を有することは、偉大な長所となろう。　ー　しかしハーゲブーハーはその資格はなかった。ハーゲブーハーは数十万人のモンゴル人やスウェーデン人、あるいはフランス人の指揮官としてやって来たのではなかった。彼は革製品や狐の皮の商人としてやって来たのではなかった。詩人や美食家に同等に重宝される雲雀を求めているのでも

なかった。[焼き菓子にライプツィヒの雲雀がある]。　ー　彼はライプツィヒに何の用があったのか。

彼は「一般ファッション新報」も「文芸娯楽草紙」も何ら関係なかった。　ー　彼はライプツィヒに何を求めていたのか。

いや、彼はライプツィヒに何を求めていたのか。それを聞き出すために、我々は言いようもなく苦労した。我らのすべての探求が、単に彼は眠り尽くしたいのであると一つの推論に達したとき、我々は歓声を上げた。何という新鮮な、威勢の良い、明るい目の主人公を我らは読者に提供できることだろうと思ったのである。しかしながら、早速次の瞬間には、まさにこうした主人公の痕跡が一切消えてしまった。我々は、申したように、混乱し、当惑して立っており、濃い霧の中でじたばたしている。我々はアウグストゥス広場を横切り、グリマイシェ通りを通って、薄暗い痕跡を追って行った。しかしそれは下の大地の内蔵に通じていて、子宮ではなくても、しかしアウエルバッハの地下室[『ファウスト』鴎外訳：ライプチヒなるアウエルバハの窖あなぐら　ー　面白げなる連中の酒宴]であって、そこで痕跡は消えた。二番目の、更に漠たる痕跡は、フランクフルト市門を通って、大きなフンケンブルク城館を過ぎて、クー[雌牛]塔へ向かい、そこで恐ろしい飲み物「ゴーゼ」[地ビール]との生死を賭けた戦いの末、極めて惨めな具合に途方に暮れることになった。

ロイドニッツのクーヘンガルテン[菓子庭園]でも一般文芸宝庫にとって成果は上げられない。このアフリカ帰りの山師、ダルフール統治者の戦争捕虜が、ローゼンタール[薔薇の谷公園]のニンニクの匂いとヤブ蚊踊りの中、あるいはゴーリスの間近のベンチで、欠伸をしながら、その旅日記を仕上げたという定かならぬ噂も、永遠に噂として留まるであろう。というのは、この旅日記の実在は、一つの確証にまで至ることは決してなかったからである。

第二章

地球は再びまたその東側を太陽に回転させた。この太陽が、人間には旧世界と呼ばれるところに昇った。かくて、もはや少しも異例とは言えない方法で、有り難や、ヨーロッパは新しい一日を迎えた。しかし小都市ニッペンブルクは東側の半球と共に回転した。これはいずれにせよ、まことに称賛に値することであった。というのはすべてのドイツの共同体同様、この自治体も若干その自立性を重んじていたからであり、いつもは頑固にその立場、旧来の権利、無法を主張していたからである。

ノネンベルクがオリエントの方へ沈み、太陽がその扁平な頂きからゲルマンの春を覗いた。すでに何時間も日光のことを歌っていた小鳥がすべて、今やもっと落ち着いて、元気に、日課に取り掛かることになった。人類も早速、日々の仕事に取り掛かったが、しかし人類に見られる活動への無尽蔵の意欲を考えれば、ことさら言及するまでもないであろう。しかし大事なのは、ブムスドルフ[村]、ニッペンブルクの町から1.5小銃射程、西側にあるこの村も一般的なこれらの動向から外れていなかったということである。この村、ブムスドルフ[村]、同様に緑野における鳥の巣という按配であったが、さえずるメロディーで一杯というよりは、呻吟、沈吟、があがあ、がたごと、きいきい、ぐわっぐわっ、呪詛、怨詛、悲鳴、裏声で一杯であり、太陽は陽気に教会、牧師館、荘園、料亭、水車池、自作農

[7-15ヘクタール所有]、半農、小百姓、小作人、借家人、移民の各住まい、それに年金暮らしの税検査官、ハーゲブーハーの家を照らしていた。このハーゲブーハーはその立派に勤め上げてからの引退生活を、地方の風紀正しい孤独な地で、しかし快適な町での生活からも離れすぎていない地で享受していた。コウノトリがこの税検査官の屋根でがたがた音を立て、燕がその壁に支障なく巣を作って住んでいた。敬虔な鳩に対しては繁殖がしやすいようにあらゆる手立てが講じられていた。小門には、聖書の文句が記されていた。汝の到来と出立は祝福されるべし。[詩篇121:あなたの出で立つのも帰るのも、主が見守ってくださるように]　ー　しかしそのドアの背後には、恥知らずの乞食や職人、余所の犬用に太い棍棒が立てかけられていた。というのは税検査官の家は国道沿いに密着していたからで、そのキッチンの窓は単に国道とはその一本の溝で距てられているに過ぎなかったからである。この家の正面は、ニッペンブルクの国道に直角に接していて、残りの三面は、さほど大きくないが、手入れされた庭園となっていて、野菜畑や花壇、芝地、果樹、それに三つの園亭が取り巻いていた。

表側の下の階の居間からの明かり、それに右側側面のキッチンの窓から、夏も冬も同様に快適な照明が黄昏や漆黒の夜に漏れ出ていた。煙突からの煙は、昔エホヴァやジュピター、スペインの異端審問の神の不死の鼻に対して上って行く何らかの生け贄の煙同様かぐわしいものであった。ちなみに、こうした生け贄の教会的美味なる捧げ物から、誰かが焼き肉を嗅ぐ[身の危険を察知する]という素敵な言い回しが生じている。国道沿いの税検査官の側を通り過ぎる何千人もの疲れた旅人が、冬の夕方一層陰気に日が沈み、雪雲が一層低く大地に下りて来るとき、この検査官を羨んだ。しかし我々はこの春の朝の彼を羨ましく思う。彼の息子レオンハルトの帰還に続く翌朝だったのである。

犬と猫が税検査官の家の前、石のベンチで日を浴びていた。税検査官自身は、そのドアと薔薇の木の間の上等の砂の撒かれた場所で、朝のパイプを、瞑想的に、吸っていた。税検査官夫人は、犬を目の上に持ち上げて、日光に眩まされないようにしていて、上の階の窓の方を見上げていた。しかしリーナ・ハーゲブーハー嬢は、家の内部、階段に座っていて、膝の上で両手を組んでいた。静かなこと子鼠のようであって、昨夕から自分と両親の家で生じたあらゆる仰天動地を心の中で転がしていた。

エジプトの副王に仕えて、ヌビア人に対する戦いで戦死したと思われていた兄が、この兄については、全く幼い頃からほんの薄暗い記憶しかなくて、次第に空想の中で、とてもロマンチックなお伽噺のような人物になっていたのであるが、突然ニッペンブルクからの街道を歩いて来て、外見はジプシーよりもひどい恰好で、生垣越しに忍冬の園亭を覗き、父親と母親のことを尋ね、それから突然神経質になり、声高に嗚咽しながら、自分の匿名を棄て、リーナの首を掴んで、まだ彼女が経験したことのないような接吻をしたのであった。

そのようなことが生じたとき、ニコラ・フォン・アインシュタイン、領邦首都の女官、あるいは、この女官の言では、「休暇中」で、こちらの荘園を訪問中の女官、それにゾフィーとミンヘン、この両ブムスドルフの騎士の令嬢はこれを目撃していた。というのは三人は皆この出来事に居合わせていて、皆して助けを求めて叫んだからである。父親と母親は大変驚いて、家から飛び出て来た。そしてニコラ嬢はこの晩のうちにも、この出来事全部を詳細に、自身の感情や、他の者達皆の感情も良く分かるように描写して領邦首都に送

った。　ー　彼女はブムスドルフでの牛乳療法や乳清療法に少しばかり飽いていて、今や当地で初めて、報告に値することを体験したのであった。

階段上の、小さな動悸する心の娘よ、そなたは、そうだろう、眠れない夜だったのだろう。薄い壁の向こうでは母親がむせび泣いて、父親は最初の鶏鳴まで、あちこち歩き回っていた。そしてそなたは、そなたは、泣いたり、笑ったり、こもごもで、この奇蹟の中、月が昇ってから、沈むまで、漂っていた。その後、このことについて、短い、落ち着かない、不安げな夢を見た。かくて朝となり、太陽が昇って、自分が目覚めていて、自分の五感はすべて揃っていると確証するために、もはや鼻をつねる必要はない。ニコラが領邦首都へ書き送った話しは、疑いもなく真実であった。野蛮なムーア人達は、兄のレオンハルトを打ち殺したわけではなかった。　ー　兄は帰って来た。そして青い部屋で眠っている。世間と時代が一気に変わってしまった。ほんの些細なことも、もはや昨日そう見えていた具合ではない。すべての音色、微光、光輝が別の意味を有している。それでも、木や茂み、庭園や野原が一夜にして、緑色の服を脱ぎ捨て、青色の服を着用したとすれば、このことは、少しも意味はなく、全く珍しいこととは言えなかったことであろう。

「実際珍しい話しだ」としかし父親のハーゲブーハーは語った。そのパイプに火を着けること十三回目であった。「この事実を熟慮して、的確に把握するよう努めてみた。しかし上手く行かない。お母さん、しっかり分別して、頭を上に上げなさい。冷静になって、相談事を矢継ぎ早に並べないことだ。老妻、吠えなさんな。そんなことをしても意味ない。ー　息子がまた戻って来た。これはいずれにせよ、一つの慰めで、これは差し当たり貸し方として記帳出来よう。その先のことは段々と明らかになろう」。

「我が子が、我が子が、我が哀れな子が」と母親はむせび泣いた。「何とあの子のことを案じて来たことでしょう。何という姿になって。我が子が奴隷になって、　ー　雄牛とラクダの間、犂の許に繋がれるなんて。十年間象の乳とスペインの胡椒[唐辛子]しか口にしていないなんて。我が放蕩息子、我がレオンハルトよ。我が子が黒人奴隷だなんて。私には分からない、分からない。あの子に巡り会えて、あの子が上の自分のベッドに寝ていて、ここであの子をコーヒーのために待っている、このことが私にはまだ余り分かりません、神様ご免なさい」。

「身内の者達に混乱を招くことではある。まあ、静かにすることだ。じたばたしても始まらない。そういうことだ」と税検査官は呟いた。「足し算、引き算が出来ること、これが結局肝要だ。技芸があると人間は困らない。ただこの技芸を正しく使う術を知らなければならない。お早うございます、フォン・ブムスドルフ殿、　ー　いや、そんなわけで、ー　彼が戻って来ました、　ー　帰郷したのです」。

「おめでとう、心からおめでとう」と騎士は叫んだ。生垣から半身乗り出していた。「しかし検査官、彼は本当に鼻輪を付けているのですか」。

「まさか、そんなことはありません」と母親は憤然と叫んだ、「この哀れな子は十分にむごい目に遭っています。しかしそのような悲しみにまでは幸い至っていません」。

「領邦首都からの女官は絵に描いたような嘘を付いています。その上私の娘どもの心を全く堕落させています」と荘園の殿方は語った、「衷心よりお詫び申し上げます、検査官ご夫人。　ー　それでは緑色と黄色の刺青の話しも当然、　ー」。

「それも嘘です」と母親は結んだ、「ニコラ嬢をこちらへ呼んでください。私は私の意

見を申しましょう、哀れな子。ムーア人や異教徒の許でもう十分に耐えて来たというのに、まだ足りないというかのようです」。

「周囲六マイルの一帯すべて、この話しでもちきりです」とフォン・ブムスドルフ騎士は明るい熱を帯びて叫んだ。「このような話しは全く聞いたことがありません。誰もが想定外です。これはすべての新聞紙、「エードアルトとクニグンデ」[民謡]の小説の話し、『寝取られたジークフリート』、『園亭新聞』、それにアレクサンドル・デュマ・ペール[1802-1870]の全作品を越えています。ハーゲブーハー、旧来の友よ、貴方は幸運な親父殿だ。貴方に都合が良ければ、私は即刻我が少尉を貴方のアフリカ人と入れ替えよう」。

「私ども夫婦はこの点に関し、まだ結論を出していません、フォン・ブムスドルフ殿」と税検査官は言った、「息子がまた戻って来たというのは、勿論結構なことです。すでに老妻にとってそうです。私どもはこれらの年月、辛い夜を送って来ました。しかし今、昔どのような思いでいたか、語っても始まりません。それで快適な朝を感謝して味わいたいと思います。確かに大きな喜びです、もっとも大きな混乱、珍しい紛糾も混じっています。四人の仲間内では皆、紛乱していて、目に涙が浮かんで来ます。この見本が頭と足がきちんとしたものになれば、この見本について話したいと思っています」。

「まこと」と騎士は語った、「熊ペッツはどのようにして家に帰ってくるのか、誰も知らない。[ゲレルトの寓話、踊る熊：熊ペッツはポーランドで踊りを習ったが、踊りを披露し、周りのそれが出来ない昔の仲間の熊に嫉妬され、嫌われた]。私の少尉もしばしば十分に再会の楽しみを洗練さで台無しにしてくれた。いずれどのような具合になるのか、分かることだろう。検査官殿、　ー　いずれにせよ、私は再三衷心より御多幸を祈っている。誰もが私の心根を承知していよう」。

「はい、存じ上げています」とレオンハルトの母親は言った。それからフォン・ブムスドルフ騎士は、自分のライ麦畑の視察に向かい、ハーゲブーハー一家はその興奮と震える不穏の状態に残された。税検査官はパイプに火を着けることを諦めて、パイプをくわえたまま、「苛立った」まま、アスパラガスの苗床にまで歩んで行った。母親はその動悸する心を家の中へ運び、リーナが自分の横、階段の上に席を空けた。両人ともこれまでの生活で、かくも聞き耳を立てたことはなく、かくも入り乱れて考えたことはないと確信していた。しかし我々は、ライプツィヒでこの奇妙な旅人の痕跡を見失って、またブムスドルフで再発見して、この階段上でのこうした聞き耳と乱れる思いに羨望を感じるものであるが、ここでこの旅人本人に目を向けることにしよう。

彼は勿論まだベッドに寝ていて、ここで彼の感情や気分に正確に移入するために、彼と同じようにトゥムルキー州での捕囚から戻って来る必要はない。エピメニデス[57年間眠り続けたといわれるクレタの奇蹟の人]、デキウス皇帝の統治下、洞穴に入り、テオドシウス皇帝の統治下、155年後にまた出て来た、エフェソスの七人の眠り聖人、そして最後に『リップ・ヴァン・ヴィンクル』[アメリカの小説家ワシントン・アーヴィングによる短編小説であり、作中の主人公、20年眠る]が夙に、彼のすべての感情に移入出来るようにしている。

彼は仰向けに寝ていて、そして両手を後頭部の下に入れていた。彼はいびきをしていて、母と妹はそのいびきを聞いていた。今や彼は、電気の火花に打たれたかのように、ぴくっとして、突然起き上がった。呆然として、半ば驚いて周りを凝視した。　ー　溜め息を一回吐いて、沈み込み、疑わしげに、身じろぎもせず、陽光を一杯に浴びた窓のカーテンを

見つめた。自分がどこにいるのか、一つの予感が生じて、次第に、全く次第に、この予感が最も確かな確信に変わった。そして夜の魔王達にまたしても玩弄されたという恐れは、漸次消滅した。唇が震えた。そしてこの荒れた顔に、傷跡のある額に、もはやダルフール王国とは何の関係もない事柄が浮かんだ。レオンハルト・ハーゲブーハーは起きて、聞き耳を立て、それから叫んだ。

「いやはや、またしてもノミハムシが老公の若い野菜を荒らしている、いやだ、いやだ」。

それから彼はまた沈み込み、両手を黒ずんだ顔に置いた。それから　ー　それから彼は泣いた。彼は強靱な男で、ほとんど六フィートの背丈で、ブムスドルフ村全体とその上、ニッペンブルクの町の人々よりも多く体験していたのであるが。

昨日までは、アブ・テルファン、サイの皮の鞭を持った黒人の仲間達、蚊、巨大蛇、刎頸、切腹、マラリア、猿の焼き肉、ガラ族焼き肉であった。今日からはブムスドルフ、両親の家、ドイツのコーヒー淹れ、ドイツの西風、　ー　雀　ー　ナイトガウンにスリッパ。これは違う。

部屋の外、階段でリーナが囁いた。

「お母さん、聞こえる？動いているよ。目が覚めたのだ」。

そして二人の愚かな女どもは目眩を覚えながら、立ち上がって、寝室のドアを引っ掻き、笑いと涙の混じった声で、叫んだ。「お早う、レオンハルト」。そしてレオンハルトが全く似たようなことを叫び返して、こう付け加えた、「五分したら、そちらへ行く」と。その後は、過ぐる夜、軒端の燕の巣の一つに新たな民謡が生まれて、今やそれが世の中を飛翔する按配であった。　ー　しかし歌いながら階段を下りて行ったのは、リーナ・ハーゲブーハーのみで、彼女は外の庭に飛び出し、豌豆畑にいる父親のナイトガウンの裾を引っ張った。

「兄が間もなく来ます。兄が間もなく来ます」。

「結構」と老父は言って、眼鏡を直した。「日光の許では、どんな風采か、びっくりすることだろう。昨日は、黄昏時、それにランプの明かりだった。　ー　それで、どんな風かな」。

「お父さん、見てみましょう」とリーナは叫んで、目を輝かせて、起き上がった。

「目が覚めた、目が覚めた、目が覚めた」とレオンハルトが叫んだ。玄関で自分の母親を両腕で抱いて、母親に接吻をしていた。まさに昔からの正直な言葉の許であった。汝の到来と出立は祝福されるべし。

第三章

ブムスドルフの周りでは、数マイル先までこのドイツ国内をつま先立って、フォン・ブムスドルフ男爵同様に生垣越しに税検査官ハーゲブーハーの庭園を覗き込んでいた。勿論この奇妙な事件は極めて多様に解釈されていた。というのは、年齢や性別、身分に応じて、人間の観点は異なるからである。全く同じ具合に両手を頭上で打ち合わせるものではない。この者は類い稀な硬貨の一つとして銘打たれて、流通することになった。裁判所の部屋、産婦の部屋、市場や路地、レストランや、亡くなったばかりの、しかしその他さほど我らの興味を引かないニッペンブルク人のために教会墓地まで随行する長い葬列の中で、この

トゥムルキー州からの男について話題にされた。しかし我々の任務は、とりわけレオンハルト・ハーゲブーハー氏自身の話しに耳を傾け、その後でようやくこれを世間に紹介し、帰郷したこの冒険者に対する世間の意見の、快適な印象とか不快な印象について考察することにしよう。

そんなわけでレオンハルト・ハーゲブーハーはその両親と妹相手に語ることになって、『ヘルマンとドロテーア』に記載されているように、「意義深く口を開けた」のであるが、しかしその際更に注意すべきは、この語りは、中断されることなく続いたのではなく、当然このような報告を遅延させたり、直線進行を邪魔するに違いないことによって引き留められ、聞き手や話し手自身の古来からの権利に従って、ジグザグに進み、日々や週の経過の中、巻くようにして長引いたのである。

「一人の人間に、自分の罪や悪徳について反省し、これらを後悔するというかくも得がたい機会が与えられることはめったにしかないことでありましょう。私にはこの機会が、全く私の意志に反してですが、与えられることになりました。家のあなた方は、私をまたその中に受け入れてくださり、昔のお叱りをまた蒸し返すこともありません。それで私も出来る限り、あなた方家の両親がご存じで、我が妹が幸いもう恥と思うことのない点については省略することにします。退学処分になった神学生の私は、まこと父親殿の不肖の息子でありましたし、今日では私ももはやそのことについて言及いたしません。この鼻の上に傷跡を残してくれて、すべての希望、期待、ハーゲブーハー一家の前提条件を、私の軽率な個人性に関し、台無しにしてくれたかの決闘相手に対し、何らかの上品なやり方で回避策はなかったのか、私は今では詮索いたしません。私は、母親から一体どんな妖精が私の洗礼のために招待されなかったのか、知りません。しかしこの妖精は丁重さや一般的品性に対する違反ということで、私に重い償いをさせたと招致しています。私はいばら姫のように眠りに陥りました。大変不愉快な苛立たしい夢で一杯の眠りでした。そして一回の接吻で目覚めることもなかった。今日の時間と一八四五年の間には、描き出せない一つの生活時間が横たわっています。額への一撃の作用に似た何ものかです。あるいはもっと良く言えば、　ー　ブリッゲ[二本マスト帆船]の座礁です。私は切り剥がされ、砕かれて、浜辺で起き上がり、火傷の鈍い意識のまま、マストの残骸や厚板を探し求め、空いた水用樽に乗って、このように半ば無意識で、大洋の威力や勢力と戦いました。私は、数学や近代語の分野で、自分の能力を新聞紙上で読者に宣伝したことや、私立教育施設の教師として、自分の運試しを試みたことや、詩人として機会詩や装飾通知の試みをした、漠とした思い出があります。しかしながらどれを試みても、月桂樹をスープの時用にも材料にも得られなかった。イタリアから私は何度かブムスドルフ宛に手紙を書き、自分の状態について報告しました。私はヴェネツィアの大きなホテルの門衛となりましたし、ローマではベルギーの貴顕氏の近習となりました。ナポリでは、その地で折々、無邪気に、快適に、自由に、乞食衆、紳士衆として暮らしました。そして有り難やと思う間もなく、この楽園生活は奪われて、もんどり打って、私はスエズ地峡の掘削という怪しげな世界的問題に投げ込まれました。[1840年代、スエズ運河建設、1859-69に先だって調査が行われた]。私は、残念ながら否定できないことですが、かなり評判の悪い、放浪癖のある若造であったとしても、今や偶然のお蔭で、私の愛する両親や、こちらドイツで祖国と呼ばれているものにとって、はなはだ名誉に思える機会を得ました。エジプトの副王閣下の上級技師であるリナン・ベイ氏

の書記の書記となりまして、当時副王は、一八四七年にフランス国王陛下との契約関係に基づき、実際紅海は地中海より三十フィート[9メートル]も高いのか調査させていたのですが、私は我が四千万ドイツ人同胞のこの問題に関する利害を立派に代弁するという喜びを得ました。イギリス人やフランス人は三本マスト軍艦や外交官、学者の一団を送り込みましたが、ドイツの守護霊は私を派遣したわけで、いずれにせよ、万代に渡って、ニッペンブルクとブムスドルフにとって輝かしい名声となるであろうものです。『いかさまだ』とジョン・ブル[イギリス人]はぶつくさ言いました。この濠にはほとんど、あるいは何も関心なかったのです。『世界史的名案だ』とロベール・マケール[フランス人蔑称]は金切り声を上げました。フランス人にとって、周知のように地中海は摂理により、我が物、洗面器として譲渡されているのです。リナン・ベイとブルダルー両氏の下で、水平化探検が熱心に実行されました。イギリス人達を論破するためです。ドイツの同盟都市トリエストや健全なる人間の分別、それに私自身の立場を考えて、私は勿論フランス人の側、それにマムルーク人[トルコ奴隷]排除のムハンマド・アリー[1769-1849、暴君]の側に付きました。まことに心地良く我々はペルシアとスエズの間の砂の中に身を置いて､棒と距離測量チェーン、視準板定規、四分儀、六分儀、磁気コンパスを持って、あちこち駆け回り、計算し、測量し、それで頭から汗をかき、この好意的エジプトの太陽の影響下、我らのシャツ同様しばしば肌も変えることになりました。その間、我々はあらゆる想定されるヨーロッパの新聞や、非ヨーロッパの新聞のために、新聞記事を編集して、運河ばかりでなく、世論も正しい方向に導くことにしました｡私は数ヵ国語で意思疎通が出来る才能に恵まれていたので、次第に私は雇用主に注目されるようになって、このことは、ちなみに当時義務的にブムスドルフ宛報告したことです。しかし四七年の年末頃になると残念ながら、すでに我らの調査も終わり、ポーラン・タラボ[1799-1885]氏、スエズ運河研究協会会長が、この人は母国パリに静かに快適に残っていたのですが、その成果を公刊して、ヴィクトリア女王陛下[在位1837-1901]の政府の最大の怒りを買うことになりました。この乙に澄ました先のオールド・ミス・エウローパ[ヨーロッパ]は、よく議論の的となるこの地峡を掘り進めても、大英帝国側の主張していたかの洪水を引き起こすものではない、と確信して、再び安穏と座っていたのです。　ー　ジョン・ブルの方は議論に負けた気になりました[地中海より9メートル高くない]。というのは、インド洋はせいぜい二フィート[60センチ]、地中海よりも上回っているだけで、いや最も引き潮の時には、ティーネ[イラン北部]付近の海はそれどころか、スエズ付近の水面より1.5パリ・フィート高いのです。運河は拒絶し難い必要なものとなって、五千人ものエジプト人農夫の供給に関し、エジプトの陛下との契約が焦眉の急となりました。フランス人探検派遣隊員は三本マスト軍艦でマルセイユへ大いに凱旋して向かいました。そして私は　ー　砂の中、ピラミッドやイビス[鳥]、鰐、エジプトマングース、ムハンマド・アリーの投機的工場企業に囲まれて残っていました。エジプト人とフランス人は、私が自分の才能をもっと遠方の奉公に従事させたいと申し出ると、両肩を竦めて、残念がってくれました。私は探検隊の金庫から四百フラン貰いました。そして私はかなり心地良く、カイロの路地をさまよいながら、静かにこう展望を立てていました。困った時には、ヨーロッパの大きなホテルの一ホテルで、多言語を話すボーイの職が得られるであろう、と。この考えは、ニッペンブルクの名士達にとって、余り魅力的なものには思われなかったことでしょう。しかし私にとって、このような職でも、余り時間をかけず

に、かなりの実入りがあるという根拠のある見込みは、少しも臭うものではなかったのです。[non olet、公衆便所や金洗浄の語源]。しかし運命は私に対し別な風に考えていました。私はまさに、肘掛け椅子やナイトガウン、スリッパ生活のために生まれていません。ピラミッドについての周知の発言によれば、[ナポレオン、1798: 兵士諸君、ピラミッドの頂から、四千年の歴史が諸君を見つめている]、数千年間、砂漠を見下ろしてきたといえども、この傑出したルーカ・モロ殿、別名セミベッコーほどのひどい悪漢を見下ろしたことはありますまい。私はこの白ナイルの悪評高い象牙商と面識を得る光栄に預かりましたが、高い代償を払うことになりました。。かの古典的文言、人間的なことで存知しないことは何もない[Terentius、紀元前190-159]この文言ほど詩人の言葉として、多くの哀れな魂を沼地に誘ったものはないように私には思われます。この文言で人生を渡ろうと考えている人間は、いつの時代でも、この文言のせいで、この文言通りに、何という不都合に陥ることか思い知らされることでしょう。私も思い知らされました。それで私が馴染んだ人間的なことの享受をブムスドルフの人の誰にも勧めたくありません。我が友、ルーカ・モロ、あるいはセミベッコー、それに一群の卑劣な下知劣根と一緒に、アラーの神の命ずるまま雨と日光を浴びているこの連中と一緒に、私はハルツーム州[スーダン]へ行き、そこから更に流れを遡って、カカへ向かいました。そこへ我々は一八四八年一月当初頃、足を踏み入れ、この国の人々、つまりシルクスと商取引を始めました。この連中も我が山師的仲間とは救い難い点でほとんど選ぶところがありません。我が武器は丈夫な二連銃、これに必要な弾薬、それにニュルンベルクの体操人形が一杯詰まった箱です。この箱はオーストリアのロイド汽船でアレクサンドリアに陸揚げされたものです。私は残念ながら白状しなければなりませんが、私はドイツ人やイギリス人の宣教師が十年かけてやめさせるであろう呪物信仰よりももっと多くの呪物信仰を一年間で、バハル・エラビアドとバハル・エラスラクの間一帯で広めたのです。それでもしかし、人々が我々と商取引をし、雌牛用鐘、ガラスの真珠、ひげ剃り用鏡等々の貴重品と引き換えに、文明化され、より感傷的な人間が、その『最愛のもの』と呼ぶものを提供したというわけで、我らの評判はやはり最良のものとは言い難いものでした。我々はその稼ぎでバブ・エル・マンデブ海峡から遠く、スルタン国ワダイまで知られました。我々がすでにナイルのデルタ一帯から月山脈まで人々の記憶の中で記載されたほどに、黒々と塗られたドイツの指名手配書はあり得なかったことでしょう。まあ、このようなことも全く不思議なことではなく、単に余りに長く延期された神々の正義に過ぎなかったわけで、バガラ族黒人に対する我らの探検出動は突然、夜間の襲撃を受けて終わることになりました。彼らは槍や棍棒、ナイフを持って我らに襲いかかりました。今回領収のサインをしようと、我らが少しも予期していなかった時です。彼らは長い時間をかけずに、我らのために正当に然るべき分、支払ってくれました。私の旅仲間の大部分は、即座に叩き殺されました。単に少数の残りが、差し当たり、肉体的、倫理的感情を何ら斟酌されず、アロエや棕櫚の繊維綱で縛り上げられました。自余のことはすぐでした。我らの哀れなセミベッコーは我ら一味徒党の中で、最も有名で、従って最も憎悪されていると分かりました。彼は突き刺されて、余りに残虐であったとは言えないのですが、しかしこの不幸な男の処刑と三日間の死との戦いを見守らなければならないのは、快適とは言えないことでした。同じような具合に、太陽の鋭い矢の光線を受け、喉の渇きと蚊の一群に晒されるという展望は、人間的なことで存知しないものは何もないという格言に関連しかね

ないものです。幸いなことに私は、この『人間的なもの』とは疎遠に終わりました。私は単に値の変わる商品として、手から手に、一族から一族に渡され、最後はトゥムルキー州のアブ・テルファンの月山脈[Dschebel al Komri]の影、私自身の体操人形の一人、青いズボンと黄色の軽騎兵長靴､赤い上着のぎょろ目のにやりと笑う男に　ー　預けられました。ドイツ人の神学生がこれほど安い値段に落ちたことはなかったことでしょう」。...

我々はこの章の冒頭で、レオンハルト・ハーゲブーハー氏にその冒険を語らせなければならないが、彼を遮ることや、世間の質問や感嘆符を間に差し挟むことをさせないという我らの意見表明をした。しかしここで我々はこの見解を変えざるを得ない。ニュルンベルクのこのじたばた人形は、このブムスドルフの親戚達の神経に余りに強く触れることになった。口を開けて、息を潜めて、この語り手を凝視しながら、この親戚達は座っていて、また話せるようになると、彼らは叫んだ。

「それから、それから、まあ、神様、その次は」。

「何もない」とこのアフリカ人は一つ冷静に言った。この冷静さは若干幽霊的不気味さを帯びていた。彼の目の輝きは、霧の中に消えて行くように見え、彼の姿全体沈み込み、母親は彼の腕を声高に泣きながら掴み、リーナは両手を組み合わせて、陰気に驚いて震えながら、動かずに立っていて、父親のハーゲブーハーのパイプからはまたしても火が消えた。

「何もない」とレオンハルトは繰り返した､「禿げて、燃えるような岩の隅にくっ付けられたローム[粘土]の小屋が二十から三十余り、　ー　百五十人の黒人の男女が、とても似通った猿の顔と､あらゆる年齢層から成り立っていて、　ー　時々､撲殺された兵士や､熱病や高齢のため亡くなった者を弔う唸り声が上がり、時々、上手く行った遊撃や狩猟についての勝ち鬨の声、　ー　時々、谷全体を越えて移って行く黒々としたイナゴの群れ、　ー　雨期には岩の隙間や、洞穴で、旧石器人のように匍匐して暮らす生活。かの襲撃があったのは、一八四九年の六月のことで、　ー　指で年月を　ー　数え、また数え、　ー　計算し、　ー　そして我らの井戸から一杯の水を与えて貰い、まことに、そこはトゥムルキー州のアブ・テルファンは、ひどい暑さで、蒸し暑い」。

「我が哀れな息子よ、あなたを解放してくれ、私どもに返してくれた善良な男性に神のすべての祝福が恵まれますように」と母親が叫んだ。

「ヴァン・デル・モーク、ヴァン・デル・モークです。その通り、その通り。彼はこの国[州]にやって来て、若い獅子や猿、その他珍しい獣をヨーロッパの動物園に送り込むために取引します。私は次第に彼の取引材料の範疇にかなり適合することになって、彼はその商売の話しの外に出ると、私のことも値切り始めました。コルネリウス・ヴァン・デル・モーク、その名前は勿論、私の魂の中に、燃える文字で記されています。彼は私を安く買いました。多分ほんの一時的気まぐれからでしょう。しかし彼が私を購入した。これが最も大事なことでした。彼は私にチャンスを与えて、ダルフールやコルドファンを経由しての我らの途次、様々な小さな支援行為で、彼の投機に私を参加させて、少なくともハルツーム州[スーダン]までの私の旅費を稼ぐようにさせました。ハルツーム州ではカトリックの伝道所が私を受け入れ、私の冒険はそこで終わりました。というのはここから河口までは、十一年間アブ・テルファンに捕囚されていた一人の人間にとって、ナイル川はほとんど英語化されたドイツのライン川と変わらないし､赤い旅行案内書が､二連銃や回転銃､

ヌビア人の狩猟ナイフの代わりを完璧に務めたのです。こちらでは、ここはブムスドルフであり、私はレオンハルト・ハーゲブーハーであると言われます。　ー　私はその言葉を信じたいと思いますし、この結論を自らに引き受ける必要があると思っています」。

第四章

森や野原、耕作地、教会の塔の先端、家々の屋根、青い、はるか遠方までの高台の列、ー　すべてが見事に整列していて、極めて優美に輝いている。万事、とても可愛く、清潔で、多様で、上品、とても考えられる限り好意的で平穏であるが、しかしこうした一切にも関わらず、この装飾に慣れた男を、慣れない恍惚に導くことは出来なかった。

しかし誰もがこれに慣れているわけではなかった。

森は野原の縁にその影を投げかけていた。そして前列の木々の下、柔らかな草叢にレオンハルト・ハーゲブーハーは寝ていて、指の内から、外の陽光の中を覗いていた。彼、個人の方としては、天や地上に、ブムスドルフやニッペンブルクをすべて合わせたよりももっと多くを見る権利を有していた。彼は妨害されず、夢想的に快適に自分の権利を行使していた。大きな子供のように、彼は故郷の揺り籠に横たわっていて、揺さぶられ、雲雀やアトリ、それにブナの木の枝を揺する風が歌う、世界の永遠の若さと美しさの歌を聞いていた。

森の前の野原では、娘達の軽やかな春の服が輝いていて、この若い生き物達のすべての動作が、このような状況下、このような明かりを受けて、可愛く、優美に見えざるを得なかった。娘達の叫び声や笑い声、それに高い金切り声さえも、彼女らが戯れて、花々や草地、それに個々の茂みの周りを駆け巡るとき、その他のすべての音色や響きと、完全にメロディー的に調和していた。荘園の二人の善良なる子供達、つまりゾフィーとミンヘン・フォン・ブムスドルフさえも、二人は滋養ある、屈託のない現実生活と、牛乳や酪農経営の影響下、まことに福々しく丸々と乙女らしい姿に成長していたが、ここではキッチンや、父の荘園の良く踏み固められ、壁で囲まれた、余りぶらつかない飼育牛で活気付いている床でよりも、もっと鹿やガゼル[カモシカ]らしさを発揮していた。リーナ・ハーゲブーハーは小さなブロンド髪の妖精のように漂っていて、ニコラ・フォン・アインシュタイン嬢は、ティターニア[妖精の女王]本人のように見えた。これはアブ・テルファンに対する気質や色合い、明かり、姿の点で一つの対照であった。そしてこの月山脈の男は、この対照をごく細かいニュアンス、振動に至るまで、感知、感得していた。魔法の国を見るかのように、レオンハルト・ハーゲブーハーはその木々の影の中から、金緑色の風景を眺めていた。そしてニコラ嬢は、三人の他の娘達にその遊びをその三人だけで続行させて、ゆっくりと森の縁に歩み寄り、自らと、野原の花々で一杯のその懐を、リビアとエチオピアの魔女の一味から救出されたこの男の側、下の方に据えたとき、それは一つの魔法であった。

「アフリカ人の殿方、天が貴方の眺めを祝福されますように。今日の良き一日の語る言葉は何でしょう」。

「今日はこう言っている。口を噤み、静かに寝て、動くな、と」とレオンハルトは答えた。女官は笑って、言った。

「そうかもしれません。私どもは先ほど貴方に叫んだでしょう。向こうの野生の薔薇を

取ってください、と。大抵極上の苔みは高い所に育ちますから。貴方は、私どもの叫び声に、せいぜい、すぐに行くよと呟いたでしょうけど、長々と手足を伸ばして、寝たままです。でもこれは、神秘的な自然との交流がありましても、丁重とは言えません」。

「再び文明の世界に適応するのはとても難しい、御令嬢」とレオンハルトは深く溜め息を吐いて、語った。「再度、人生のイロハから始めなければならないのは、難しくて、悲しい仕事だ」。

「どうして苦労する必要がありましょう」とニコラ・フォン・アインシュタインは尋ねた。素早く、明るく、目を自分の花々から上に上げていた。「私なら無理をしません。私ならこのまま、留まり続けましょう。確かに、確かに、私ならこのように、運命によって自分に割り当てられた魔術的な例外的立場を、きっとヨーロッパの日常生活というこの哀れな退屈なルーティーンと再度取り替えることはしないでしょう」。

「あたかも貴女は、私の哀れな魂の状態について、かなり深く沈思されたように、聞こえます、お若いレディー」。

「勿論です。貴方は、だって、私の経験の範囲内で、全く新奇な方なのですから。貴方の冒険の話しを耳にして、私は少なからず興奮しました。私が当地に滞在している間に貴方をブムスドルフへ戻らせた親切な神々に私は感謝しています。貴方は、ハーゲブーハーさん、一つの問題です。このような問題を、教養ある人間と貴方に呼ばれるような者なら、これを様々な面から、回転させ、点検せずには、今日では簡単に手放しませんよ」。

「フォン・アインシュタイン御令嬢、貴女は何歳ですか」とレオンハルトは、半ば身を起こしながら、尋ねた。この女官は再度高く笑い声を上げて、満足げに横を向いて、答えた。

「考えられないほど年取っています。どんなイロハの年よりも、はるかに、はるかに越えています。二十七年以上、この世間は私の姿を見て喜んでいます。貴方がいつか領邦首都の私の許へ訪問をなさったら、洗礼証を披露してもよろしゅうございます、アフリカ人の殿方」。

「二十七歳ですか、二十七歳、これは勿論、若い娘にとっては立派な年です」とレオンハルト・ハーゲブーハーは物思いに耽って、語った。

「私の手や足の関節には、トゥムルキー州の鎖がまだ音立てていますので、それだけ一層素敵なことです」。

「マサーカ[マシャラー]」とレオンハルトは可愛い関節を覗き見て叫んだ。衣服の縁からその関節が少し覗いていた。「それは勿論、ヨーロッパの日常への私の歩み方を指導してくれそうなお話しに見えます。ニコラ御令嬢、貴女の鎖について少しばかり私に語ってください。この地上全体で、貴女の信頼を損なうことは少なくて、かつ貴女からもっと学ぶべきである人間は、他にいないとお分かりでしょう」。

ニコラは新しい花を自分の花輪に加えて、ハミングした。

「起きよ、汝ら名誉ある騎士、
汝ら、小姓、弓の射手よ、
乾坤一擲の時が来た、
扇を一気に開くがごと、

今や夜が朝となり、
クリュメネー[女神]が現れ出づ」。

それから彼女は、ほとんど息も吐かず、素早く散文に移った。
「私はニコラ・フォン・アインシュタインと申します。閣下、私の父親殿はフォン・アインシュタイン将軍でした。私の恵み深い母親殿は、旧姓フォン・グリメルン男爵令嬢で、私の洗礼名は亡きオロシャのニコラウス一世皇帝陛下から頂いております。もっともこの方は私の名親ではありません。私の父親はセヴァストポリ占領[1855年9月8日]の後、卒中で倒れました。父の死後、父は期待されていたほどの立派な会計係ではなかったことが判明しました。私に身分に合った教育を授けるために、支配の君主が介入せざるを得なくなりました。私の母は体面を保った隠居生活を送っています。私はマリアンネ公妃陛下の女官となって、目下、神経を休ませるために、こちらのブムスドルフの縁者の許にいまして、特に今申したことにつき、摂理を報告するよう言われています」。
「私は恭しくその摂理に感謝申し上げる」とレオンハルトは言った、「しかし、　ー」。
「これはまた、アフリカ出身の野蛮な男を除き、誰であれ、とても不謹慎な『しかし』と言えましょう。それでも、私どもの上の青い空に誓って、私は実際、この都合の良い折、貴方に少しばかり私の人生についてお喋りしたくなりました。こうした機会、並びに、運命の気まぐれにかくも翻弄された聞き手というものは、ひょっとしたら二度とないかもしれないものです。レオンハルト・ハーゲブーハーさん、貴方は月から落ちた方です。私はマリアンネ公妃の女官です、殿下。私ども両人は二つの世界全体を持ち寄っています。共にとても変わった世界です。　ー　私ども両人は互いを決して誤解することがないでしょう。ハーゲブーハーさん、つまり、

彼女は輪の中でお辞儀した、
レディー達が小声で囁く、
アノ娘ニハ棘ガアル。
薔薇が何故それを気にしよう。
クリュメネーは穏やかに微笑んで、
一歩一歩進ンデ行ッタ。

つまり人々は私のことをクリュメネーと呼ぶのです、殿方。その名前は、或る羊飼いのカドリーユ[社交ダンス]以来、私に付けられたものです。でも、格別意味はありません。私どもは自ら詩作します。私の好きな詩人は、マルティン・オーピッツ・フォン・ボーバーフェルト[1595-1639、後年貴族]殿です。私はシュレージエンのリーグニッツかブリークで女官となることを最も好んだことでしょう。私がこの人生で受けた最初の印象は、私の戦闘的な父親への強力な敬意、大いなる畏怖でした。父は、勇敢で良き兵士として活動する機会が与えられていたら、きっとそのような兵士になっていたことでしょう。ジョージ三世が国王であったその熱い血潮の青春の時[バイロン『ドン・ジュアン』]に、父が何をしていたか、私は知りません。私はそれを知っていても、多分口にしないでしょう。私どもの細密画風国家、細密画風居城、その細密画風軍隊での人生は、その周囲の誰にとっても、

ましてや父の部下達には更に何の価値もない一つの型に強制するものであったとしか言えません。ハーゲブーハーさん、兵士はそれぞれの制服で、幾つボタンを付けていることでしょう。アブ・テルファンでは知られていないことですか。トゥムルキー州ではさっぱり分からないことですか。それが、私こと、ニコラ・フォン・アインシュタインは一つの予感以上のものを有しています。私の小さな従兄弟のブムスドルフが、最近、少尉試験で不合格にならなかったのは、これは自分自身の学習の成果というよりは、私の学習のお蔭なのです。あの人の崇高な権利や義務についての教理問答を、あの人から聞き出し、私が詰め込んでやったので、あの人は士官学校に残らずに済んだのです。私の父はその主君に忠実な僕でした。そして亡き陛下同様に、ニコラウス皇帝を信じていました。この感動的に壮麗な信仰を強化するために、私はその名前を頂いているわけですが、でもその他、この名前は、ちょっと前のフランス喜劇の小間使いも良く名乗っています。私の母は未亡人となった公爵母后を友としていまして、この友と一緒に育てられました。二人はヘルダーや、ヴィーラント、ゲーテ、シラーといった殿方を私どもの宮廷へ呼んだのか、それとも宮廷で我慢して拝聴していたのか、存じません。　ー　私は私です。そしてこれが悩みの種です。すべての品位ある考える人間同様に、私は武器を持って世間に立ち向かおうとしました。でも人々は、この色鮮やかな五色鶸を間近な生垣ですぐにまた捕獲して、それでこの五色鶸は鳥籠に止まっていて、水や麻の実への自分の欲求を高く上げています。私はそこを逃げ出して、とても興味深い盗賊の首領セミベッコーと一緒に像狩りに出掛けなかったとしても、それでも私はトゥムルキー州まで行っています。しかし最悪なことに、私はまだ籠に残っています。最愛のアフリカ人殿、陛下、私の公妃様、宮殿の左翼に住んでみることです。私どもは窓から広場のまこと美しい光景が見られます。陽の照る時であれ、雨の時であれ、私どもは歩哨パレードの行進を見守り、トルコのシンバルやターキッシュ[軍楽器]や、大きなティンパニー、一番若い少尉に夢中になっています。歩哨があちこち歩き、私どもの鶸色[黄緑色]の守衛や蟹赤色の従者が、私どもの存在の栄光を口をぽかんと開けた市場の民衆に自覚させます。宮殿視察のための家族チケットは二ターラー要します。お一人様は一ターラーです。私の友、城代に問い合わせて、私はそう承知しています。あらゆる等級の侍従殿閣下、カラバ侯爵殿[ペロー『長靴をはいた猫』]が馬車で乗り付け、出立します。私どもは馬車で散策し、戻って来ます。守衛が太鼓を叩きます。そして監視役の将校が遅刻したり、チャコをあべこべに被って駆け付けると、それは単に交替となるだけです。宮殿の右翼との緊張のせいで、大気が若干程度蒸し暑くなると、これも一つの交替となります。幾多の危険な、容易に消された境界線も存在します。それに私どもは左側で、合理主義を代弁していて、チョッケ[1771-1848: キリスト教を科学の知識に近付けようとした]の『敬虔の時』を読んで、ウィンザーの従姉妹[ヴィクトリア女王、在位1837より]同様に心を高めています。向こうの右側、そして中央棟では、より選別された器の一員が、恩寵への途上で、少なくとも私どもよりも、十郵便マイルほど先んじています。ハーゲブーハーさん、貴方はチョッケの『敬虔の時』をご存じですか。ご存じないのですか。ただぼんやりとした記憶ですか。私はもっと良く知っています。それを朗読させられて、様々な箇所を記憶しています。一つか二つ朗誦してよろしいですか。駄目ですか。小さな親切のつもりではないのですよ。いや、ハーゲブーハーさん、アブ・テルファンにも人類の一部が憧れるような魅力がありますよ。ひょっとしたらまだ覚えていらっしゃるかもしれませんが、

金鍍金された鋭い先端の、可愛い鉄格子が、私どもの宮殿広場を町の中央道路と区分しています。腕に小包や籠を持って、口にくわえ煙草をして、子供や犬を連れて、この神聖な一画を散策することは禁じられていますので、通常の世間は、立派に外部として留まっています。私どもは単にこの格子を通じてのみ眺め、観察していまして、自らを余りに高く持していましても、分に甘んずることが出来ないわけではありません。分に甘んずる点に関しましては、私どもは摂理によって、自らが欠かさざるを得ないこと、あるいは余りに多く有することの一切に対し、言いようもなく豊かに補償されますので、それだけ一層分に甘んじられます。私どもの豪華特別の日々は、私どもを高くこのガラ国[昔のケニア付近、豪華国]よりも持ち上げます。私どもの崇高な誕生日には、黄金海岸、胡椒海岸のどんな荘重さも競争相手になりません。すべての天上的帝国からの更に高貴な訪問は、こうした帝国の重要性についてほんの少しでも予感出来さえすれば、最深部のアフリカをも嫉妬の余り外へ裏返すことが出来ましょう。いや、神様、私どもは様々な君主の、副官とか、侍従とか、色々な侍医を有していないでしょうか。いや、神様、神様。春になるのを見、夏や冬になるのを見、人はますます年を取り、ますます年を取り、ますます崇高に優美になります。宇宙全体が、ますます畏敬に満ちた囁き声となります。そして糧食や、自然の食事というものは、これは我が小さな従兄弟ブムスドルフの命名ですが、いつも素晴らしいものです。舞踏会のドレスや、あるいは新しい腕輪も、時々私どものために用意されます。そして作法上、私どもは仮面舞踏会で、不動産として壁の花とならないよう、気難しく強調されて配慮されます。そして再三、春となり、再三、夏となり、冬となります。でも、ヴァン・デル・モークさんは、この穏やかな、ビロード張りの悲惨さから私どもを解放するために、現れそうにありません。アフリカ人さん、貴方は、私に、このか弱い神経がなくて、そして善良なブムスドルフおじさんがブムスドルフにいなかったら、私はどうなっているだろうと思いますか」。

レオンハルト・ハーゲブーハー氏がこの突然の質問に対応出来ないうちに、息を切らして彼の妹御が戻って来た。彼女は二人の他の娘達と一緒に生垣の背後、村の方へ消えていたのであるが。

「レオンハルト、レオンハルト。あなたは急いで家に戻らなくてはいけません。シュネードラーおばさんが来ています」。

このアフリカ人は、若干の、ひょっとしたら余り好意的ではないかもしれない言葉をダルフール語で語ったが、しかし彼は故郷に戻って来てまだ余り経っていなかったので、故郷の呼びかけにはすべて従わざるを得なかった。ニコラ・フォン・アインシュタイン嬢も笑って飛び上がった。

「いつもこんな具合です。　ー　私が最も調子良く、自分の心をぶちまけているときは、いつもこうです。でもまだ貴方は私のことを少しもご存じない。貴方がこの先永遠の間、もっと通暁されるか、疑わしい。良い時は、過ぎてしまった。シュネードラーおばさんがいらした。レオンハルト・ハーゲブーハー殿に関する偉大な家族会議が始まります。　ー　家に帰って、諸事、諸関係、諸厄災に身を投じましょう、私どもの意志は聞かれていないけど」。

レオンハルトは、若干急な傾斜を下りるとき、彼女に加勢をするため、手を差し出そうと思った。しかし彼女は笑って、彼の助けを断った。

「結構よ、結構。もっと良く考えて見たら、今いるここにむしろ残りましょう。そしてこの花輪を仕上げましょう。私はどんな家族会議よりも、森の方が好きです。だって私もこうした会議では悩んで来て、これについて歌いたいことがあるし、言いたいことがあるのですから」。

第五章

女官の高い笑い声は森の角から奥に消えた。頭を垂れて、レオンハルト・ハーゲブーハーは小道を大股で歩いて行った。この小道は野原に沿って間近の村に通じていた。妹御は彼の腕にすがって、彼の側を息も継がず小走りであった。彼女は時々、黙って、しかし愛くるしく、不安げに、兄の真面目な、ほとんど陰気な顔を見上げていた。

今日の日まで、このアフリカでの捕虜が帰還して以来、丁度三週間が経過していた。ブムスドルフ村では、人食い人種と一つ鉢から食べていたこの大きな、褐色の男に対して、神秘的で、魂消るような驚愕と完全に無縁になった子供は一人もいなかったように、リーナ・ハーゲブーハー嬢にとっても、この兄は、相変わらずまだ相当に、言い難く不思議で、神秘的なものであって、更にかなり長期間、その全体的中身や意義を究明し尽くすことは出来ないことであったろう。しかしニッペンブルクとブムスドルフの全体や大方の人々に関しては、未知の内奥のアフリカから帰還した一人の男は、いずれにせよ、どんな冒険的アメリカ渡航者よりも、更に目新しい者であるが、この人々は彼のことをすでにはるかに比較的冷静に、比較的悠然と考えていた。そして今日税検査官の家に集合する予定の、愛しい、広義の縁者達は、それどころか彼のことをとても冷静に、とても悠然と考えていた。トゥムルキー州出身のこの男にとって、トゥムルキー風に刈り取られた頭蓋の上の髪の毛と共にまたより不快なヨーロッパ人風感情もまた育って来ていて、我々は彼に対し、幾多の道で、そしてこのブムスドルフ村を通っての道でも、頭を垂れて進む権利を完全に認める必要があろう。

コルネリウス・ヴァン・デル・モーク氏による、自らの解放に至るまで、彼は多くのことに耐えなければならなかった。それから彼は自分の両親の家で目覚めて、完全な、確実な幸福というかの稀なる瞬間を味わった。しかしいつものようにこの瞬間は素早く過ぎ去った。　ー　ある朝の微睡み、忍冬園亭での陽の当たる一日、夕方、野原や穀物畑を通っての森への散歩。すでに次回目覚めると、苦い潮流に微かに最初の沐洗が反復される。そして一週間すると、レオンハルト・ハーゲブーハーは完全に故郷に落ち着いていた。つまり彼は事情が分かり、事情が分かっていると耳にして、通常のように、少しもこの幸せとはかみ合わなかった。

多分彼はまだ国道沿いの忍冬園亭に座っていて、祖国の太陽や、老いた両親の声や歩み、小柄な、可愛い妹の愛らしい笑い声を喜びとし、多分町や村で何百もの好意的青春時代の思い出を求めて、見いだしたことだろう。人々は相変わらず、大方の土地で、衷心からの挨拶や握手で彼を迎えた。相変わらず彼のオデュッセイアを心躍らせて聞き入り、この方面で彼が提供してくれることすべてに感謝する多くの人々がいた。しかし、　ー　しかし、この疲れた旅人の魂に固く、ますます固く巻き付いて、日々増大する、ちょろちょろ舌を出して吸い付く不快感というポリープの腕が育って来た。世間はすでに承知していた、つ

まり税検査官ハーゲブーハーの息子は哀れな男となって異郷から戻って来た、と。そしてニッペンブルクの人々が抱いていた奇妙な幻想は、すぐにその反対物へ転換した。人々は互いに疑わしげに頭を振りながら、こう伝え合った。一人の浮浪者は永遠に浮浪者のままであろう、ひょっとしたらムーア人は、赤道の奥で、この無益な人間を係留していた方がはるかにましであったかもしれない、と。哀れなレオンハルトに後からブムスドルフまで一輪車で送られて来た木箱の中には、ダイヤモンドや真珠の袋はなく、砂金で一杯の箱もなく、せいぜい親しい友や親戚のための記念品としての若干のアフリカの珍しい品に過ぎなかった。レオンハルト・ハーゲブーハー殿は、この旅の木箱の中身を基に、邸宅を建設出来ないし、その公園の影の中、自らの竈の許、より良い身分の出の愛らしい妻と一緒に日々を送ることは出来ない。ニッペンブルクの母親で、このような霞を食っている個人に娘を嫁に差し出す者はいないであろう。しかしこれとてまだ大した問題ではない。レオンハルト・ハーゲブーハーは、トゥムルキー州で捕囚の間、我ら文明化された状態の人間にとって、その処世の加勢となるもの、いや、その人間をその場でとにかくただ応急に立たせてくれるもの、そのすべてをかなり忘れていた。すべての学問、すべての芸術、すべての技術が彼の上を越えて進歩していた。以前高い波が打ち寄せていたところが、今や荒れた砂地とか豊饒な耕作地となっている。以前、砂地や野原であったところが、今や波が寄せて来ている。トゥムルキー州のアブ・テルファンでは、この哀れな囚人を妨げるものは、物理的粗野な暴力であったり、自由への憧れであったり、祖国への郷愁であったりした。今や故郷では一切が、彼を妨害し始め、不安にさせ始めた。彼は文明世界で、ヨーロッパ、ドイツ、ニッペンブルク、ブムスドルフで異邦人となっていた。物事や、自分自身に対する、果てしない不安、どの場合でも根拠のある不安に彼は襲われていた。　ー　一歩進むと、彼は微かにトゥムルキー州に戻りたくなった。ヨーロッパの人間の威厳と自由、教養と風習が余りに強力に畏敬の念を呼び起こした。ところで今はまず、彼には村への彼の道を進んで貰って、その間、友人や親戚の中、彼の両親の家での大いなる助言やコーヒーのために、誰がやって来るのか、あるいはすでにやって来たのか、見てみることにしよう。

おばのシュネードラーはその黄色の馬車でやって来た。これには本来おじのシュネードラーも加わっているのだが、しかしこのおじは、おばが金を握っていて、彼、　ー　おじは、　ー　金を才覚でも、精力でも、わずかな男性的粗野でも補うことがなくて、一緒に数えられていなかった。彼女、シュネードラーおばさん、レオンハルトの母親の従姉妹は、すでに、どんな状況でも対応して、ハーゲブーハー家の客間のソファーに座っていて、ルイ十四世同様に、自分がコーヒーも、「コーヒーの国」からの甥をも待たされていることに大変無礼な思いでいた。

国道の方を見ると、伯父の、ニッペンブルクの商人にして市議会議員、ハーゲブーハー議員殿がいた。肉体的にも精神的にも重みのある一人の男で、三人の娘を結婚生活で設けていて、娘達と共に鵞鳥の行進[縦一列]をブムスドルフに向けて行っていた。昨年よりも陽気であったが、昨年はまだ亡き妻が常に行列の先頭で、彼は単に殿であった。二人の年若な従兄弟もいて、彼らはすでにその役人としてのキャリアでひどい目に遭っていて、国は彼らの給与を三ヵ月ごとにある種の嘲笑と明白な皮肉と共に支払っていたけれども、自らを最も理想的、かつ実質的な諸力に、ドイツ共和国の熱狂者達に、また最も豊かな銀行家の娘や工場主の娘に相応しい者と信じていた。このような裕福な工場主の娘にして従姉

妹の、レオノーレ・ザッカーマン令嬢も、別な方角から、とても立派なジャガイモ原料酒を生産する両親の翼の下、税検査官の玄関前に到着した。馬に乗って、道路建設検査官のヴァッサートレーターもやって来た。六十三歳で、軽蔑すべき若造で、仕事や天候のせいで酒に耽っていて、おばさんのクレメンティーネ・マウザー嬢が、このおばさんも同じように一人っきりで、こちらは徒歩でやって来たのであるが、春分の日頃の嵐という不愉快な時期には、処女らしく寝床に苛立って身を任せていたいように、この若造も酒の方がましと思っていたことであろう。

他にまだ誰が来るのか。我々はそのリストを作成し始めたばかりであるが、すぐこのリストを閉ざすことにしよう。すべての従兄弟ミヘルといった者がかなり集まって、レオンハルト・ハーゲブーハー氏は、この仲間内の中へ入って来て、この仲間に馴染みの「今晩は」ではなくても、アラビア語の「アッサラーム」[皆が平和であらんことを]を述べ、これに対しシュネードラーおばが答えた。

「甥殿、あなたに感謝致します。あなたが礼儀正しく、キリスト教徒らしい上着に、ズボン、チョッキ姿で、再び私どもの中に現れて、嬉しく思います。あなたは以前、挨拶なしに去って行ったけど、でもこちらに私どもは、然るべきこととして、集まって、あなたに親戚一同、ニッペンブルクへようこそお帰りと申し上げます。今度こそは、あなたの放浪癖や、非現実的なこと、その他の絵空事もお仕舞いになったことであろうと、私どもは推測しています。シュネードラー、一言仰有い」。

「その通りだな、ミネッテ」とシュネードラーおじは語った。そしてそれ以上の言葉は彼に期待されていなかった。話せば、逆に、とてもひどく受け取られていたことであろう。しかしレオンハルトは、最近までトゥムルキー州の彼の所有者の、継母に当たるクラ・グラ夫人が、彼に対してしばしば行っていた謁見を思い出されるように感じていた。夫人はいつも、彼に足裏打ちの刑二十五回を課して終えるのであった。

それは大いなる一日であった。若い従姉妹達は、ブムスドルフの子供らに似て、相変わらず、驚愕と同情こもごもの賛嘆の思いで、この従兄弟を眺めていたが、より年上の親戚の者達は、どのような神秘的臆病さをも根本的に投げ棄てていて、彼らの土着の人生観や感情に何ら堰を設けていなかった。ゲルマン人の小市民根性は、こうした運命的な、転落して、常軌を逸した、こうした根無し草的、脱線して、路上から投げ飛ばされた存在に対して、すべての国税、自治体税を支払い済みの、教会椅子を賃貸確保して、警察からは守られ、すべての侯爵領当局の監視下にある栄光の安心安全の中にいると感じていて、それに従って語っていた。父親のハーゲブーハーは、自分のアフリカ人のために賛同の言葉を述べるような者ではなかったであろう。

それは父親ハーゲブーハーのための一日であった。彼はこの集会を招集して、集まった人に自分の内奥の考え方を承認して貰いたかった。彼は息子の喪失をまだとても残念に思っていて、いや、哀悼の思いでいた。突然の、全く普通でない帰還は、彼にとって当然ながら、更にもっと致命的なものに思えたに違いない。喜ばしい驚きは、次第に不機嫌な、不愉快な物思いに移行した。　ー　ここではもはや何も計算されない。すべての数字は消されてしまっていて、ただ一つの事実だけが、最後、明瞭に残っていた。「この若者は、こちらでは使いものにならないと知ったので、余所に去った。余所でも使いものにならなかった。それで帰って来た。彼はまた私の厄介者だ」。

この計算は明瞭であった。しかし慰めとなるものではなかった。いずれにせよ、愛しい友人達や、縁戚者が、そのサインや三本の十字架[無筆者の署名]を評決に添えてくれることが願わしく思われた。世間に対し自分を正当化する必要があったからで、一同を最初から共同責任者とすることほど、これに重宝なものはなかった。結婚生活の緑色のカーテンの背後で、シュネードラーおばさんの判断や、兄の市議会議員や、従兄弟のザッカーマンの意見を援用出来るのは、瑣事ではなかった。　ー　いずれにせよ、責任を一人で負いたくないのである。

とても大いなる一日であった。そしてリーナ・ハーゲブーハーは最後、全く不安げに彼女の兄の拳を握った。というのは、彼女は母親よりもはるかに鋭く、彼のために感ずることが出来て、彼の額が一瞬ごとに一層暗くなって行き、彼の目からますます憤然とした閃光が放たれるのを震えながら見守っていたからである。誰もが助言を与えることが出来、好んで、詳細に助言を与えた。上品に人生を渡って行くことは、その善良な意志がありさえすれば、少しも難しいことではない。まだ、ろくでもないものから、極めて願わしい尊敬されるべきものへの道は、様々に存在している。そして誰もが喜んで十字路での道案内の役を買って出た。主に、シュネードラーおばさんで、彼女は咳払いをして、語った。

「仕立屋を呼び寄せて、新しい服のため寸法を計らせるだけでは十分でありません。再び上品な、大公爵領国民にして臣民となるためには、もっとそれ以上のものが必要です。どんな乞食がやって来るか分かりません。自分の古くなった襤褸の胴着を溝に棄て、皆の反吐を誘った後、盗んだ新しい胴着を着て来るかもしれない。人間なら、野蛮なインディアンでも、精神的にも床屋へ行かなければならず、国内に留まっていて、敬虔に二十五年間実直に身を養って来た者達が語って聞かせるとき、しかめっ面をしてはなりません。ちなみに、この実直な暮らしということでは、ただこの立派な縁戚の者達を称えておりますと言いたいのです。そこで私がこのレオンハルトに助言したいことは、すべて高慢な、外国人風のものを棄ててしまいなさい、自分が止めてしまったところから、また始めなさいと言うことです。つまり、牧師となることは、今となっては難しいでしょうから、従兄弟の市議会議員の許へ行き、新たに書記の仕事を習うことです。さすれば、時が経ち、親戚の協力を得ながら、また有益な一員となって共同体に加わり、議会書記にまでなれましょう」。

「これには、甥殿は余り乗り気でないように見えるな、その表情から判断する限り」とハーゲブーハー伯父は、アブ・テルファンからのこの親戚の男を余り好意的とは言えない横目で見ながら、語った。

「シュネードラー、一言仰有い。レオンハルト、あなたの意見は。税検査官、それに従姉妹のハーゲブーハー、あなた方も発言なさい。従兄弟のザッカーマン、同様に、必要なことを仰有い」とシュネードラーおばは叫んだ、「でも私は言っておきますが、私どもはこちらニッペンブルクに住んでいるのであって、ここはアフリカのムーア人の国ではありません。私どもがムーア人に順応するよう、誰も要求出来ません。ムーア人は私どもの家に住みたいなら、ムーア人が私どもに順応しなければなりません。ニッペンブルクの議会書記、　ー　百六十五ターラー、それに八十ターラーの副収入に、二クラフターの薪、ー　まあ、そんな顔をするなんて。ひょっとしたら私どもは、ムーア人の国で、支配の君主となった経験があるのかしら。もしそうなら、勿論私どもはもはや何も言う必要があり

ません。勿論ただ郵便馬車とアフリカへの鉄道での帰路の切符が問題となりましょう。私は別れを申し上げて、何ももはや言いません」。

甘美な故郷が、奇妙なインディアンの戦勝踊りを哀れなレオンハルトの周りで挙行し始めた。母親はハンカチを目の前に当てていた。父親は不機嫌そうに、消えたパイプを吸っていた。リーナはますます兄に密着して来た。二人の年若な従兄弟が、このアフリカ人と一緒に大学へ通ったこともある二人であったが、笑っていた。ザッカーマン一家は据わった目で周りの一同を眺めていた。クレメンティーネはこっそりと一つまみ嗅ぎ煙草を取って、誰とも知れない親戚の合唱団が、小声で呟きながら、コーヒーカップとこの偉大な一日の祭日菓子を味わっていた。ヴァッサートレーターおじが言いかけようとしたとき、レオンハルトが先に発した。

彼、　ー　トゥムルキーからの男、　ー　彼は、これまで数多くの水路陸路の危機の際、冷静に対応して来ていたが、彼、白ナイルでの象牙商人の生涯をそのすべての恐怖と共に承知していて、偉大なルカ・モロ氏、人呼んでセミベッコーの幸運と不運、バガラ黒人による最後のその晒し台を観察し、調べることを許された彼が、今はこの会合に対処し得ないと感じていた。彼の目に涙が浮かんで来て、周りの親戚が回転して、シュネードラーおばさんはクラ・グラ夫人よりも恐ろしいほどの大きな姿になって、その赤みを帯びた鼻の先端は、ヘンナ染料で赤く塗られた鋭い爪のトゥムルキー女の鉤爪に劣らず危険なものに思われた。父親の家の雰囲気は、アブ・テルファンのローム小屋の暑い空気よりも不安を掻き立てた。

どもりながらレオンハルト・ハーゲブーハーは語って、苦労して慣れない外国語で表現しなければならない者に似ていた。

「いや、親戚、縁者の皆さん、私の心の裡が分かって頂けたらと思います。私が故郷に持ち帰った血の滴りはすべて祖国からのものです。悪魔に取られようとも。しかしまた何という大きな子供が皆さんの両腕の中に落ちて来たものか、お考えください。いや、皆さんの誰であれ十五分間私の身になって頂ければと存じます。さすれば、きっと昨日内奥アフリカの捕囚から戻って来た者が、今日ニッペンブルクの議会書記になれるものではないと、一層明確に分かることでしょう。私がそれほど間違っていなければ、私はそれどころか、書き方を失念してしまっています。そしてひょっとして私がその代わりに外国で習得したかもしれないこと、つまりあらゆる誘惑に辛抱して耐えることは、これはそれ自体、立派なことですが、しかしどこの自治体でも年俸百六十五ターラーと二クラフターの薪で報われるものではありますまい。尊敬する縁者の皆さん、十年以上鉢に指を入れて食べなければならなかった者は、ナイフとフォークの使用にはただ時間をかけて慣れる必要がありましょう。それでその時間が与えられなければ、どんな立派な食べ物も喉につかえることが有り得ますし、哀れに窒息死しかねません。こんな私でもまだ何か出来るものがあると知っておれば、即刻申し上げるのでしょうが、しかし分からないのです。　ー」。

「我が少年、それですべて言い尽くされておる」と従兄弟のヴァッサートレーターは叫んだ、「それで私に話させてくれ。私の鼻を眺めて、これについての君の意見は胸に収めておいてくれ。これについて必要なことは、親戚の無駄話やシュネードラーおばさんの興奮が収まり次第、私自身が話すつもりだ」。

家庭内のコンクラーヴェ[教皇選挙]は勿論ぶつぶつ言って、湧き上がり、シュネードラ

ーおばさんは実際興奮していて、そのハンカチの背後でいつもの落ち着きを求めていた。しかし従兄弟ヴァッサートレーターは人差し指を、このアフリカ人に注目させていた部分に当てていて、ずる賢い、破廉恥な微笑を浮かべて、再び静かになることを待っていて、それからその語りを続けた。

「我が息子よ、この鼻に注意してくれ。この鼻は、君を沼地から救い出す、ラテン語でイン・ホック・シグノ・ヴィンケスと言うように、つまりこの旗印の下、君は勝利することだろう。[312年天に十字架を見てローマの皇帝Konstantinが言った]。一日中、国道の周りにたむろしていることになる我ら如き者、道路建設はお天気同様、気まぐれだからで、このような者は、何と言うか、世間の流れを研究する暇と機会に恵まれている。それで人々がまだこの流れをいかがわしくねじ曲げて見ている場合、適した折に自分の意見を述べることが出来るものだ。公爵領街道では色々なことが起きる。飲み物もどんな居酒屋の看板の下でも同一とは限らない。するとあちこち自分の老いた駄馬に乗ってさまようことになる。他の人々なら夢にも思わないような哲学が思い浮かぶものだ。そして従姉妹のマウザー、従兄弟のザッカーマン、あるいは従兄弟の市議会議員から、皇帝ルイ・ナポレオン[ナポレオン三世、在位1852-1870]に至る。シュネードラーおばさんから、教皇、ペトロの相続領[1860からローマ教皇領]、あるいはサルタン宮殿[コンスタンティノープル]に至る。そして帽子を下げて、『お早うございます、検査官殿』と言う溝の砕石夫[賤業]から、自分自身に至る。すると分別が行き詰まる。これは人間が自分に注意を払うと、体験することだ。つまり人は自分が被造物に過ぎないと分かる。いや、汝、どこまでも善良な天よ。このように我が息子よ、人々が私を一八二一年、一蹴りでヴァルトブルクから恩赦に送り込んだとき、私は君がアフリカの最深部から帰って来たように、帰郷した。カールスバートの決議は、私に、君がトゥムルキー州で鞭を受けた具合に私にその作用を及ぼした。[1819年、反動政府の措置で、すべての民主化が抑圧され、学生組合は禁止、大学は警察の監視を受けることになった]。我々は一八一七年十月十八日、元気な正直な若造として集まった[この日、ヴァルトブルクに五百名の学生が集まって、1517年の宗教改革の開始と、1813年10月16日から18日のライプツィヒ近郊の戦いを偲んだ]。しかし一体何という臆病な道化師どもが、我々を裁判にかけて、我々を我らの青い空から、我らのドイツの主なる神から、我らの中、我らの上にあるものの一切からでっち上げたことか。家では勿論老人どもが、我らの鼻先でドアを閉めたり、あるいは少なくとも子供用テーブルに座らせたりしてくれた。我々はそれ以上のことを望んでいなかった。そして私の法学に関し残っていた部分は、大胆にフォン・カンプツ氏[Heinrich von Kamptz 1769-1849:学生組合弾圧]に対し放棄して、大して損害はなかった。そして私も腹這いになって、背中に陽光を浴びることになった。そしてニッペンブルク全体がこのルンペンに口を歪めた。あそこのシュネードラーおばさんは、当時まことにきれいな娘だった。しかし彼女も、大昔だが、すでに製酢工場、含水硫酸塩工場に関し、詳しく精通していた。従兄弟の市議会議員は、いつも大物風の生まれで、面倒見が良かった。レオンハルトよ、言っておくが、この日の下、新しいことは何もない、それで快適な親戚がレールから外れた哀れな間抜けについて公会議を公示して、自らを天地創造七日目の愛する神様よりも賢いと自惚れることになる。その結果たとえ退学勧告とならなくても、親戚が悪いわけではない。いや、従姉妹のマウザー、いつも邪悪な世間は存在していた。だから、多感で感じやすい心同士は結託すべきであろう。しかし、　ー　クレメンティーネ、私は貴女と視線

が会うたびに、いつも頭が混乱してしまう。　ー　私は何の話しをしていたか。そうだ、分かった。いつものように、劣等で、策謀的で、無益な世間に接して、そしてその気まぐれな悪巧みに接して、私が言いたいことは、次のことだ、レオンハルトよ。私がここに座っていると、ニッペンブルクは言うのだ、私は深酒すると。しかし実情はそうではない。単にチューリンゲンのヴァルトブルクから当地のいとも称えられる道路建設課までは長い道のりであり、また込み入った道でもあって、この道は単に哲学と忍耐を持ってのみ見いだせるのであり、その道を見いだしたら、精神的強壮剤を飲まずには、散策しないのだ。内的直感が我が輩の力だ。そして私は、君に、レオンハルト・ハーゲブーハーよ、母なるゲルマニアの温かい母胎へようこそとその名前において申し上げる。そして君とこちらにご列席のいともご立派な親戚に、我が輩の意見を申そう。だってそのために我々は従兄弟、税検査官の招待に応じて参列したのだから。私は老いた男で、我が輩の評判も最良とは言えない。金と財産を私は有しない。しかし哲学は私の喜びだ。そしてこの哲学を私は君と共有したい。汝、古代フランク族のろくでなしよ。他の者達が君を望まないとき、レオンハルト・ハーゲブーハーよ、私の許へ来れば良い。数年間、まだ生きる意欲は残っていよう。古参の若造[学ラン]は相手を放さないぞ。　ー　ゲルマニアがその旗印たるべし。ニッペンブルクの書記だと。一八二五年の時、我が少年よ、私が君よりもまだ数段下であったとき、彼らは私にそれを提案しなかったかな。レオンハルトよ、私と一緒に国道へ行こう。　ー　おや、シュネードラーおばさん、どちらへ行かれる」。

「私は私への当てこすりや粗野な話しを我慢して聞いていました。しかしもう辛抱堪忍出来ません。馬車を探して、シュネードラー。　ー　従姉妹のハーゲブーハーに、従兄弟殿、私の助言や言葉がこちらの家で邪推や苛立ちを引き起こしたとしても、悪く取らないで頂戴。良かれと思ってのことです。でもそれほど多く案は思い浮かびません。シュネードラー、馬を探して。そして皆さんにお別れの挨拶をなさい。それでアフリカ人殿に関しては、ご自分の好きなようになさればいい。そして道路検査官ヴァッサートレーター殿に関しては、私はあの方の忠実な端女でありますとしか申し上げません。しかしこの人への私の意見は、ただ慈悲深いキリスト教徒として自分の胸の内に仕舞っておきます。良い晩を」。

誰でも良い晩をと言えよう。しかしこのシュネードラーおばさんは、この好意的願いを全く独特な風に表現し得た。　ー　見よ、さながら鶏小屋への灰鷹の叫び声、雀の群れへの一個の投石のようであった。親戚がばたばたと羽根を広げて起き上がった。どの気質の者もその気質を発揮した。レオンハルトの母親が頼んで宥めて、興奮した者達を落ち着かせようとしたが無駄であった。どの善意の言葉も、火に注がれる一滴の油のようであった。この集会の雄七面鳥の騒ぎを根絶やしにするためには、誰かが市議会議員と従兄弟ザッカーマンの首を捻る必要があったであろう。白ナイルの象牙商人でさえ、教養あるヨーロッパ人の境界内に留まっていて、この行為をしなかった。

家父長の税検査官は、親戚の大多数、とりわけシュネードラーおばさんの見解に完全に同意していて、その数字に詳しい魂の内奥で、従兄弟ヴァッサートレーターを粉微塵に砕いていたが、「分かりました」としか言わなかった。

彼は自分のパイプの雲の背後に隠れて、自分の椅子から動かなかった。というのは、彼は自分の郎党を評価していたように、その郎党の癖も承知していて、このような状況下で

は、天上の力といえども、いわんや地上の力では、今夕のこの仲間、愛着や愛情の結束を再び固くはほとんど締められるものではないと知っていたからである。家族会議は個々の構成要素へと解体し、親族や血族が、やって来たときと同様に出発した。どの男女も、極めて実用的に、分別正しく、好意的に、とても壊れて、しくじった状態に対して、従兄弟関係の名誉と声望とを代弁したという満足感を抱いて去った。黄色の馬車は国道の埃の中へ消えた。ポプラの木々は再び、とても長い影を投げかけることが出来るぞと示していた。従兄弟ヴァッサートレーターも、自分も同じことが出来、長くおれると示していた。彼は持ち堪えて、憤然と黙している税検査官に対し、黙って、しかし機嫌良く対峙していて、完全に黄昏となったとき、ようやく短いパイプを胸ポケットに収めた。

「どうか好意を見せて、この若者に猶予を与えてくれ」と彼は起き上がりながら言った、「そう行かなければ、君は善良な心根の者だということを見せて、この嘆きを終わりにし、その襤褸を家からすぐに投げ出してしまえ。従姉妹のご夫人、この心地良い話し合いに感謝申し上げる。リーナ、私に接吻を一回。そしてこのレオンハルトに、　ー　いや、止めておこう。私はいつか自ら私の意見を言うつもりだ。聞くがいい。小夜啼鳥が茂みで鳴いている。向こうでは銀色の月が、村の平和な小屋どもの上に昇っている。これから居酒屋の馬小屋まで忠実な馬を取りに行きます。孤独な者は孤独に自分の孤独なテントに速歩で帰ります。良い晩を」。

「良い晩を」と父親のハーゲブーハーはとても短く言って、今回もその場から動かなかった。レオンハルトの母親はこの道路検査官を庭の木戸まで送った。

「従兄弟さん、従兄弟さん、どうなることでしょう」。

「いや、ハーゲブーハー従姉妹、私はこの質問をしょっちゅう運命相手にして来た。私は自分が聞きたいと思う返事を得られたことはめったにない。結局のところ、ただそのせいで生きているわけで、これが少なくとも一つの慰めです。道路建設では、摂理は時間を欲していると学びます。従姉妹さん、安心して休まれい。いいかな、家の中の老公は今動かれた。　ー　いや、私は一八一七年以来、我らは奇妙な世界に生きていると思っています。どうぞ、ゆっくりと休まれい。ハーゲブーハー従姉妹さん」。

第六章

旧石器時代からの男はどこへ行ったのか。シュネードラーおばさんとそして彼女と一緒にすべての縁戚がざわざわと憤激して飛び上がった瞬間、彼は身を屈めて、彼の愛しい妹の背中に隠れて壁に沿って忍び出て、一つ跳びで玄関に達し、二回目の跳躍で父親の家の背後の庭園生垣を越えて、戸外の野原に出ていた。バガラ黒人に追われて捕まって以来、彼はこのような肢体の敏捷さを鍛えていなかったし、このような跳躍力や素早さを自覚したことがなかった。しかしバガラ黒人同様に、彼にも踵への郷愁が残っていた。この感情を忘れることが出来なかった。彼は生垣の下の草原に寝て、深く息をし、若干シュネードラーおばさんに関連するコーランの箇所を漏らした。それから夕方の影は彼の上にも落ちて来て、月が同じように彼の上に昇った。そして彼、　ー　レオンハルト・ハーゲブーハーは、　ー　予言者が述べていない別の言葉を語った。これは礼儀作法を由々しく傷付けずには、追って書くわけに行かない言葉であった。

ただ全く漸次に彼の側、スローベリーの茂みのコオロギは彼の心の裡、甲高い故郷の色々な音色の中でドミナントとなっていた。微かにゴボゴボと呻って、浅い野原の溝の水が大地の深みへ流れて行くように見えた。同じようにゴボゴボと、一時間前、また父親の居間でとてもひどい波となっていた高い水流も流れ去った。このアフリカ人は、溝の縁に座っていて、顎に膝を高く引き寄せて、両手で脛骨を抱いて、この瞑想に適したポーズで、こう確信していた。今日の一日は、自分にとって無駄な一日ではなかった、と。

珍しいことだ、珍しいことだ。過去の時代を昔からの、楽しい、多彩な活発さを呈するほどに再生しようというどんな最良の意志であれ、ニッペンブルクからの黄色の馬車の到着と比べたら何ほどのものであろう。市議会議員のおじ、ザッカーマンおじに比べれば、どんなに過去に憧れ、過去を夢想し、過去を追想しようと、何ほどのものであろう。この両人は、実際血と肉を有し、過去であったもの、今もそうであるもの、これを極めて堅牢に出現させている。感情、分別、理性、空想でもって、最も甘美な予感能力でもって、故郷の事物に再び立ち向かおうとする最も内密で熱心な努力といえども、一つの無駄な、とても空しい苦労と判明した。しかしこの家族のコンクラーヴェ[教皇選挙]で、自ずからの如く、七つの封印[不可解なこと、ヨハネ黙示録]が跳ね飛ばされた。極めて明るく照らされて、少年時代と青年時代の静かな平野が、レオンハルト・ハーゲブーハー氏の前に広がっていた。それらの神秘を深堀して、そのことで頭を患わせることはもはや必要なかった。

ドイツの月がより高く昇るにつれ、すでに述べたゴボゴボの音で、溝を流れていた水流が、あちこちで愛らしく微光を発し始めた。そして残念ながら、すでに正直なヴァンツベックの使者[マティアス・クラウディウスのこと、1740-1815『夕べの歌』]によって、抒情的に記されている白い霧が同様に野原に出現していた。月はトゥムルキー州からの男の頭上に輝き、霧が彼の鼻に昇った。そして彼、　ー　ハーゲブーハーは、脛骨を放して、飛び上がって、優しい夜の中、高く身を起こして立っていて、両手を揉んで、　ー　小声で思わず知らず、笑い始めた。彼は、この野蛮人は笑った。彼は、この荒廃した非人間は、それどころか、敢えて声高に笑った。それから彼は身震いをした。彼は敢えて身震いをした。そしてシュネードラーおばさんの感情に配慮せずに、彼は今たった今勃発した浄福の発作に対し、自ら祝福した。残念ながら、彼は、人間の心のすべての優しい情動にもかかわらず、正しいのであった。このように笑うことによって、彼は自分の将来の生存のために、溜め息で一杯の袋や、一ダースもの自らの溜めた涙の壺が自分に対してもたらしてくれるものの、その千倍もの益を得たのであった。今や彼は少なくともある関連で、こう確信していた。つまり、月山脈での彼の七人の睡眠聖人の眠りの間、故郷でさほど遅れを取ったわけではなく、それでこうした空想的喪失に関するすべての切れ切れの、度胸のない、夢うつつの、メランコリックな物思いは、まことに余計なことであり、馬鹿げている、と。彼が不在の間に、彼の現在の環境が獲得したもの、これはいつでも彼が所有出来るものであって、彼がそれ以上を望むならば、すべての無益な浮遊状態の彼岸で、有益な活動をしながら、再び足場を固めるべく、トルコ人風な休息がひょっとしたら必要かもしれない。彼は自分の関節と筋肉を試して、跳躍を行った。即ち、彼はまず、霧状の野原と父親の屋敷とを距てる溝を越えて、そして両腕を組んで、思わしげに、まず湿った草地を歩いて、それから狭い歩道を村の庭園に沿って行った。

これはまたコフキコガネの最後の祭典の夜、記念日の夜であって、この恵まれた年、コ

フキコガネは相当数見られた。この虫どもは、自分らの時が今や終わったと知っているように見え、今日を最後に、夜の露や香りの中、酩酊していて、必ずしも不当とは言えない軽率さで、不死の世界へ群れて移行していた。虫どもは大気の中、ぶんぶん言い、茂みや木の周りで舞っていた。虫どもは、陶然として、少しも進路に注意を払わず、同様に純粋に酔っているレオンハルトの鼻に向かって飛んで来たり、彼の髪の毛や髭に止まったりした。

「やあ、無頼漢」と彼は言った、「おまえらもそうか、まこと、それっ、酔うがいい。おまえらに定められた時を楽しめ。　ー　陽気に、陽気に、ブーン、ブーン、その通り、明日になれば、お仕舞いだ。カフの山[イスラムの精霊の山]にかけて、従兄弟ヴァッサートレーター万歳」。

彼は再度高く笑い声を上げて、しかし素早く聞き耳を立てて、止めた。彼の野蛮な陽気さは、茂みの奥で一層メロディー豊かな反響となっていた。生垣の上に巻き毛の頭部が現れた。　ー　最後の五月の月光の夜の守護霊も、これ以上巫山戯て、好ましく具体化され得なかったであろう。

ニコラ・フォン・アインシュタイン令嬢、　ー　御年二十七歳、　ー　マリアンネ公妃陛下の女官、　ー　未婚であった、　ーーー　嗚呼。　ー

「リーナ、あの人よ」と令嬢は言った、「馬鹿ね、もうこれ以上泣かないの。あの人は、自殺念慮を持っているとは、少しも見えない。好い子、安心なさい。折れた百合という風情では、この人全然ありません。今晩は、ハーゲブーハーさん」。

彼女はこのアフリカ人に手を垣根越しに差し出して、叫んだ。

「まあ、何て不躾なんでしょう。でも、不躾な口にとっては、また何と素敵な夕べでしょう。とても陽気そうな貴方を窺って、本当に嬉しく存じます、ハーゲブーハーさん。こちらに私は妹御と一緒に、貴方のことを大変案じて座っていました。一体どういうわけで、月が出て以来、この世間で、陽気になられたのか、お尋ね申したら、余りに不躾でございましょうかしら」。

「若いレディー、お聞きください」とレオンハルトは言った、「異教徒の許での捕囚から帰郷しますと、まことに神経が弱くなっています。お考えください、私は野バラやサンザシの中からかくも愛らしい吶喊には全く慣れていません。私の脈を計ってください」。

「結構よ、結構。有り難く、貴方のお言葉を信じます」とニコラは笑った、「でもここは私のおじの帝国の国境です。ここから向こうを覗く権利を、私は手放しません」。

「私も手放さない」とアフリカ人は、お辞儀しながら、語った、「リーナ、どこに隠れている」。

「ここよ」と泣きそうな妹御の声がした。妹はベンチに座っていて、女官はその上に立っていた。「いや、レオンハルト、私はあなたのことが口惜しくて、私はとても腹が立ちました。まあ、神様、御身と一緒にまた広い世間に出てみたい。レオンハルト、うちらは一緒に力を合わせましょう。母親もうちらの味方です。父親もきっとそんなにひどく考えていません。うちらにはシュネードラーおばさんとか、他の阿呆な連中は関係ありません。まあ、神様、神様、何と腹が立ったことか」。

「そうなんです、レオンハルト・ハーゲブーハーさん、この娘駆けて来て、私の腕の中に飛び込んで来ました、丁度私が毛髪箒を持って、コウモリ狩りに出掛けようと思ってい

た矢先。それで公会議の話題がすべて分かりました。それで貴方にまこと助言致します、最良のことをお考え遊ばされ、出来るだけ早急にニッペンブルクの議会書記におなり遊ばされますように、と。ちょっと待って、十歩先の方に生垣に一つの穴があります。　ーリーナ、行こう」。

この話し手の女性の美しい頭が、下に沈んだ。このアフリカ人は二回跳んで、上述の穴を見つけた。茂みで物音がして、寝惚けた小鳥のペアが、夏の夜の素敵な夢から起こされて、舞い上がった。妹御と一緒にニコラ・フォン・アインシュタイン令嬢が枝の中から体をくねらせて出て来た。三人が狭い小道に並んで立って、リーナは兄を抱擁して、すすり泣いた。

「まあ、落ち着きなさい、落ち着きなさい。私はそなたの許で我慢出来よう。案ずることはない、これから、そうだな、これから、　ー」。

「手回しオルガンを買って、私どものお話しをカンバスに描いて貰い、それに関し一つの歌を作り、祖国のすべての路地で歌い上げましょう」、この文を女官が結んだ、「面白いわ、私どもの貯金箱をすべて振って見て、この企画の最初の資金にしましょう。万歳、万歳、茂みから出ておいで。オベロンにティターニア、パック、豆の花、蜘蛛の巣、衣蛾、辛子の種[シェークスピア、『真夏の夜の夢』より、妖精達]、出て来なさい、審議委員会です、妖精達。私どもも知恵を出しましょう。私どもも指を鼻に当てましょう。ヴァッサートレーターおじさんを黄金の車輪亭から呼びましょう、参事官の勢揃いです。　ー　私は手回し箱に賛成。オルガンの歌を音楽にして、歌ってみせましょう」。

月光が流れる銀のように自然の中を走った。レオンハルトは胸一杯にこの明るい夜の魔法と生命とを吸い込んだ。一つの恍惚に彼は襲われた。彼は両脇を押さえて、ますます声高に笑い声を上げたくなった。一人の阿片吸引者の陶酔のようであった。彼はそのことを承知していて、自分の冷静な魂の奥底でこの状態に自ら驚いていた。十五分間逆立ちをして、このような方法で過剰な自分の陽気さを放下していたら、ひょっとしたらとても快適であったかもしれない。一日の諸人物、グループ、意見、経過が彼の眼前で極めて戯けた宙返りをした。しかしニコラ・フォン・アインシュタイン令嬢が、平静さを回復させた。レオンハルト・ハーゲブーハー氏は、バガラ黒人やその他のトゥムルキー州からの変人がそうするようには逆立ちをしなかったのである。彼女、　ー　ニコラ嬢は、　ー　今や彼の腕に手を置いて、全く真面目に言った。

「哀れな友の方、私どもは元来、そのように高笑いすべきではないでしょう。殊にこのような愚かな月光の許では。明るい日中や、陽光の中では、これにさほど反対は致しません。貴方の話しはまことに、まことに悲しいものです、私の友の方。向こうの境界石の上、あるいはもっと良いのは、国道の道標の下に、腰掛けましょう。ハンカチを取り出して、私どもの運命について、そして道について、その側に静かに座っているわけですが、思いを巡らしましょう。今日の午後、私も貴方に私の馬鹿げた人生について笑いながら語りました。いや今も、話して、少しでも、自分や貴方にとって役立つものなら、貴方に別な調子で、私の別な話しを語りたくなりました。私は自分が男であれば、どこか世の中で高貴な戦争を求めて、自分を喜ばせること、あるいはせめて休ませてくれること、あるいはせめて平然と血を流す機会となることを何か企てることでしょう。私はこの月光が嫌いです。私はこうしたぶんぶん言う虫が怖い。これはもはや存在しない春の幽霊です。これらはた

だ生命を騙るものです。私はこれらと類似のもので、神経のせいでブムスドルフに滞在しています。　ー　コフキコガネ、飛んで行け、コフキコガネ、飛んで行け。いや、レオンハルト・ハーゲブーハーさん、私ども、貴方と私は、まことにお似合いです。こちらにいらして、国道沿いの石の上に腰かけて、待ちましょう、　ー　待ちましょう。ひょっとしたら貴方にまたいつか、日の光の中、私の人生の本から或る暗い頁を朗読するかもしれません。泣かないで、リーナ、愛しい人。素敵な夜じゃない。あなたにとってもいつか、あなたが、暑い国アフリカでの捕囚について話せるであろうような時が来るかもしれませんよ。陽気に、陽気に、あそこの蛙の声に耳を傾けてご覧なさい。　ー　何という喜劇役者でしょう。満腹で、満足して、感謝しています。　ー　大した若造蛙。聞きなさい、あれは誰。従兄弟のヴァッサートレーターよ、これも大したものよ。従兄弟のヴァッサートレーター、万歳、従兄弟のヴァッサートレーター」。

新しい人生の潮流が、押し寄せる波となって、次々にうねって来て、増大しつつ高くなり、このアフリカ人の心を洗った。息をするたびに、自らが強壮化されるのを感じた。彼の心の中で起きていることを、言葉で表現するには、長い演説を必要としたことであろう。娘さん、口を閉じなさい。この夜とこの月光を叱ってはいけません。そなたは余りに美しく、叱ることは出来ない。そなたを泣かせるわけにはもっと行かない。そなたは何と美しいことか。啓示の明かりがそなたと共に茂みから上昇して来る。私は迷い子だ。しかし私は自分の小道をまた見つけた。何という悲哀、嫌悪か、何という沈思、悲憤か、何という敗北感、無気力か。娘さん、そなたが私を助けてくれるなら、私は自分の帝国で再び領主となれよう。私の人生は壊れてしまって、右腕が折れたようなものであった。私は長いこと吊り包帯であった。そして今や再度、その強度を調べている、娘さん。私はまた、どのような思いで自分の人生を始め、狂気に陥ることなく、どのように人生を続けて行きたいのか、承知している。　ー　シュネードラーおばさん、ドイツの月、それにそなたよ、ー　美しい、美しいニコラ・フォン・アインシュタインよ、祝福されてあれ。

このように、あるいは似たような具合に、このアフリカ人は表明することが許されたことであろう。しかし彼はまた、次のように話したかもしれない。

恵み深い御令嬢、貴女はすぐ、我々が最初出会ったとき、私に珍しい印象を残されました。というのは、貴女は、私にとって、私のこれまでの生存に対する珍しい対照を形成されているからです。恵み深い御令嬢、十年間、アブ・テルファンで、毎日クラ・グラ夫人、夫人の女友達、娘達、姪達等々と付き合って暮らして来た者にとって、たとえほんの二週間であれ、毎日数回貴女の目を覗くことが許されさえしたら、祖国の概念が、不思議なほど明澄に優美に把握されるのです。フォン・アインシュタイン御令嬢、青春時の最も美しい幻想が私にとって必然的に貴女の姿で実現されているに違いありません。シュネードラーおばさんに関しては、貴女も、このおばさんに対して、心地良い対照を形成しています。恵み深い御令嬢、そして一度、ドイツの月明かりの中、一年の最後のコフキコガネのざわめく間、私の状況下、トゥムルキー州と祖国とが入り乱れて渦巻き、笑い声が悲惨さから最良のものを得るとき、どの明察者も、この笑い声をこの地と、時と、状況の折々に対し、全く適したものと思うことでしょう。

レオンハルト・ハーゲブーハー氏は先の方法でも、後の方法でも表明せず、彼は叫んだ。

「従兄弟のヴァッサートレーターだ、まこと、従兄弟のヴァッサートレーターだ」。

月は全く満足げに微笑して見下ろしており、国道の方から、若干粗野に、覚束なく、しかしいずれにせよ、とても陽気に響いて来た。

「我々は建てた、
豪華な家を、　ー」。[学生歌]

この道路建設検査官にして従兄弟は、ハーゲブーハーおばさんのもてなしも軽視していなかった。しかし黄金の車輪亭も軽視していなかった。彼はタフに家族会議に耐え、同じようにタフに居酒屋での村の名士達に耐えていた。彼は、自分の酒友達であろうとなかろうと、誰とでも酒の応酬をしていた。今や強壮化され、穏やかになり、機嫌良くなって、自分の街道を家路について、手綱で自分の馬を後に引いていた。ドイツ学生組合の建物も、ハーゲブーハー家の平和も完成しなかったは、彼の責任ではない。彼は自分の責務を誠実に果たし、後から悪口を言われようと少しも気にしなかった。彼にリーナが呼びかけ、他の二人が彼の道を塞いだとき、彼は少しも尋常でない不思議がりようを見せず、この良い機会をそのまま受け入れ、帽子を更に少しばかり後頭部へ押しやり、短いパイプをしっかりくわえて、言った。

「今晩は、若い諸君には、お互いただ出来るだけ青春を謳歌して欲しいものだ」。

「有り難う、従兄弟殿」と女官は答えた、「私はすでにいつものように、貴方を称える歌を歌いました。どうしてなのか、私どもは分かっています。たった今、私どもも茂みの中で、レオンハルト・ハーゲブーハー殿の件で、会議を開いていまして、道路検査官様のご不在を嘆いていました。貴方は上手に四つの壁の間[屋内]で話されました。私どもに更に一言、ここ月光の中、緑野で話されませんか」。

「阿呆の諸君、緑野で、月光の中か」と老公は呟いた、「まことこれは、我々にとって助言を与えたり、受け入れたりするに適した時であり、機会であろう。勿論、互いに相性の良い小鳥どもは、互いを見つけて、垣の中の小鳥が誘えば、二十羽の同類がライ麦畑や森、あるいは野原から答える。月光に青菜、我ら如き、一七九八年からの者は、勿論そのことについて話題に出来よう。十九の春秋を経験していて、勇敢で誠実なドイツの侯爵達やその敬虔な大臣達と一緒の中隊で、新たな神聖な帝国を樹立したとき、それは素晴らしい時代であった。一八一五年までの粗野な大砲の爆音の前で、雲塊は散って、全ドイツが超銀色に照らし出され、我らの山頂の下に横たわっていた。若い民よ、こん畜生のこんこんちき、素晴らしい時であった。素敵な時であった。幻覚の時、悪太郎どものための時だな。いや、自由よ、つまり私の言う自由は、[私の心を満たす自由は、そなたの顔、可愛い天使の顔をしている。Schenkendorf,1813]、　ー　神の恩寵により、すべての監獄と兵舎が、ゴチック様式の大聖堂に変貌して、すべてのビロードの黒い制服青年のためにドイツの母親は、ブロンド髪と青い目のドイツ乙女を育てた。いや、畜生、　ー　これはすべての描写を越えている。しかしクレメンティーネおばさんが当時ようやく壁に泣き声を上げていたのは、幸いであった。さもないと彼女はきっと私の最も甘美な感情に訴えて、私を掴んでいたことだろうから。月光にコフキコガネか。フォン・アインシュタイン御令嬢、私が昔キフホイザーの皇帝[バルバロッサ]を信じて、ギターをかき鳴らしたことがあると、信じて頂けますかな。いやはや、我々は皆、ユートピアに向かって、行軍していた。向こうの、大学

から逐電したときの、あのアフリカ人に似てな。そして、我らが、彼同様に、トゥムルキー州で再会し、この『良き国、つまり愛と忠誠とが地上生活での痛みを静めている国で』[Veit Weber,Unser Vaterland]、　ー　要するに要塞禁固だな、　ー　そこで我々は運命のカールスバートの決議を感謝して受け入れ、我らの五月の夜の酩酊を、じたばたの悪あがきも、雌鶏の連れ合いもなしに、眠って過ごした。それから我々が目覚めると、極めて居心地の良くない一日が白み始めて来た。天は我々にとても哀れな灰色、我々に似合いの灰色でにやりと笑いかけ、そしてすべての道化師、阿呆、愚かな少年、逆上せ者が蹴飛ばされて、下の沼地に、陰気な地下室に、片隅に発送された。私は片隅に落第したままである。この穴蔵が閉ざされている場合には、レオンハルトよ、鍵は玄関の時計箱の下にある。キッチン箪笥は、そなたの少年時代から覚えていよう。安煙草のロールは、ドアの背後、側の小部屋に保管されている。そなたはいつでも歓迎だ。すでに先ほど申したようにな、我が少年。そなたはやはり、従兄弟のヴァッサートレーターよりも幸運なのだ。このことは夙に私には明瞭であった」。

この瞬間一つの流星が落ちた。素早く女官が尋ねた。

「リーナ、今何を考えた」。

「私の兄の幸せよ」。

「その考えは一つの願いだわね。　ー　疑いもなく。ここで会議を開く必要がまだあるかしら。従兄弟の寝室への鍵は時計箱の下にあるのだって。従兄弟が不在の折にはね。レオンハルト・ハーゲブーハーさん、覚えていてくださいね。従兄弟殿、私は貴方の助言に賛同します。リーナ、私はあなたの甘美な願いに賛同します。ところでひんやり湿ってきました。私どもは皆、賢明で利口だということを、またしても証明し、経験しました。お休みなさい、お休みなさい」。

「お休み、恵み深い御令嬢」と道路検査官ははなはだ懇ろに言って、女官がブムスドルフの荘園庭園の生垣の穴を通って消えると、親戚の二人に向かって言った。

「リーナ、健やかに眠りなさい、愛しい子よ。また参上するときは、そなたに砂糖菓子の大きな袋を持参しよう。いつか同様に立派な夫を探すことにしよう、月まで探しに行かなければならなくなってもな。レオンハルトよ、時計の下の鍵のことを忘れるなよ。どうしようもない世の中だ。しかし、

まことの学ランの心は、
決して冷めることはない。
真面目になると、巫山戯の時と同じく、
いつも正義感に駆られる。
その身なりは古びてしまったが、
その心意気は変わらない。
この心意気で団結しよう。
嗚呼、嗚呼、嗚呼。
諸行無常、無常迅速」。[O alte Burschenherrlichkeit、昔の学ランの栄光]

古い学生歌の結びのリフレインが遠く、ニッペンブルクの国道で木霊した。この国道は

従兄弟ヴァッサートレーターがかくも貴重な状態で得たものであった。レオンハルトとリーナは、爪先立ってこっそりと家に帰った。このアフリカ人はシュネードラーおばさんの夢を見なかったとしても、ニコラ・フォン・アインシュタイン令嬢の夢を見たかもしれない。月は決められた時間に沈んで、コフキコガネも最後を迎えた。今一度まことに薄暗く、冷ややかになって、その後新しい一日の曙光となった。自然の中を一つの戦慄や悪寒以上のものが走り、それで最初の夏の夜、大気中や枝の中の群れた精霊や、楽手達は、落下したり、消滅したり、あるいはおずおずと水中に沈んだり、地を這ったりした。

第七章

「この一帯は四十巻のゲーテ全集のように横たわっていないか、どうだい」と従兄弟ヴァッサートレーターは叫んだ。両頬で噛みながら、パチンと出したナイフの先端で空中に広い半円を描いていた。レオンハルト・ハーゲブーハーは、相変わらず、黙したまま、勇敢で、その比喩に同意して頷き、そして同様に、愛を込めて、開けられた背嚢の滋養豊かな中身を味わっていた。先の章で記述された場面からおよそ八週間、経過していた。素敵な、陽気な朝の時刻で、この時刻には、早起きの健康な人間は、空虚[真空]なことへの恐れ[アリストテレスによる]を高度に感受する資格を有する。二人の老若の従兄弟が、王侯領街道沿いの一本の林檎の木の下、砕けた玄武岩の一山の上に座っていた。道路検査官の駄馬は、のんびりとおとなしくその側に立っていて、長く首を伸ばして、排水溝の草を食んでいた。遠方と近隣が香りと輝きに包まれていて、従兄弟ヴァッサートレーターが繰り返した。

「ゲーテ全集だ。この砕石の山から、地平線まで、そして地平線を越えた向こうまで、すべてが快活にこう言っている。更に頁をめくってください、次の頁にも陽が輝いています。...四十巻の世界的名声、そして享年八十二、そしてわずか四週間の曇りなき幸運、あるいはもっと良く言って、本来の快活さだ。[エッカーマンとの対話：1824年Ｉ月27日]　ー　このヴァイマルの王侯廟墓にいる古参の少年は、我々皆にとって、何という慰めであろう。偉大な詩人にして政治家であろうと、ちっぽけな阿呆の道路検査官であろうと、結局は、こん畜生、同じなのだ。　ー　水路、陸路での、平らな地上、青いエーテルの中の黄金の雲の上にいる、すべての善良なる実直なる若者達にとって、一つの万歳だ。我慢しいしい、迷うことなく、どのような天候になろうとその一日を称える、善良なる実直なる若者達にとってな。レオンハルトよ、そなたの思い通りにしろ。しかし、どのような状況であろうと、この老枢密顧問官[ゲーテ]と従兄弟ヴァッサートレーターとをお手本にするのだ。若くして亡くなったら、そなたは自分の分を満喫したわけだ。老いて亡くなったら、そなたは平然と、一人の虚無僧[静寂主義者]、ルンペンと、あるいはその他平民どもの好きなように呼ばせて、嘲りを受け流せばいい」。

「すべてはまことに結構なことです」とレオンハルト・ハーゲブーハーは情けない声で言った。「しかし、差し当たり、私にとって鼻を高く持することよりも、鼻を泥土から引き出すことが大事です。両手や両足で幾ら叩いても、私はただ一層深く泥土の中に沈んで行きます。後一時したら、この哀れな代物は消えてしまいましょう。従兄弟のヴァッサートレーターは、此奴の上に記念碑を置いて、こう銘に記すことでしょう。ここに迂闊者眠

る、その運命に相応しく、故郷のトゥムルキー州に、と」。

「故郷にか」と従兄弟は、このアフリカ人よりもほとんどもっと惨めな調子で叫んだ、「トゥムルキー州の故郷にか。では、そなたはすでにそんな境地なのか。勿論、驚くべきことではない。しかしやはり悲しいことだ。哀れな若造よ、捕囚でそなたは果てしもなく粋になった。　ー　我々はクラウディーネ夫人を訪問することにしよう。夫人ならば我らに助言を有していても、不思議ではない。この助言を求めて、我らはすでに何週間も空しくすべての僻地、片隅を歴訪しているのだが」。

「このクラウディーネ夫人とは誰です」とレオンハルトは尋ねた、「この名前を聞くのは初めてではありません。いつもある種のメランコリックな影を帯びて発声されます。この神秘的クラウディーネ夫人とは誰です」。

「アフリカの息子よ。そなたが夙に早く訪問をしておくべきであった一人の女性だ。これから我々は更に幾つかの修復された排水溝とノネンコプフ沿いの道を、そこで私は最近猛烈な驟雨に襲われたのだが、検査しなければならない。その後でクラウディーネ夫人の許へ行こう。一日の経過の折々、私はこの夫人について、あれこれ、そなたに話そう。残りのパン屑を集めて、先に進もう」。

レオンハルト・ハーゲブーハーは、起き上がり、従兄弟ヴァッサートレーターは再度、馬に乗った。彼らは朝、予定通りに過ごし、砕石の山を数えて、水路や排水溝を調べ、すべての緑野を音高く進んで来る鉄道列車にもかかわらず、その道を綺麗にし、立派な状態にした。

この従兄弟の紹介では、共感と粗放さとが、自分の職務上関連する際の状況や人物に応じて、交互に出現し、そしてクラウディーネ夫人について語るべきことを、語ってくれた。レオンハルトは再び、幾多の事柄に通ずる機会を得たが、これらの事柄は、彼にはとても目新しく見えたが、しかし実際はそうなのではなかった。

「フリーゲンハウゼンをそなたはまだ覚えているだろう。同じくカッツェンミューレ[猫水車小屋]もまだ忘れてはおるまい」と従兄弟のヴァッサートレーターは語った。「このようにドイツの村は、その外観、臭気を奇妙に頑固に維持している。そしてその地面からはいつも同じ種族が育って来る。雄牛亭では樫のテーブルが、五十年前と変わらぬ所に置かれている。水車小屋[粉屋]、これは違う。水車小屋はどれほど残っているか、そなたには分かろう。小川を悪魔が、　ー　つまりだ、十九世紀が片付けてしまった。小川の鱒にとっては、悲しいこと、災難だな。カッツェンミュラー[猫粉屋]の奴を家族全員と共に、本当に悪魔がかっさらって、ブレーメン経由でアメリカへ送り出した。そこで、分相応以上に上手くやっているそうだ。一八五一年まで、小川や、水車小屋、ミュラー[粉屋]、ミュラー夫人、ミュラーの娘は、陽気で花盛りであった。しかし五二年のクリスマスの頃、クラウディーネ夫人がやって来たとき、皆がお仕舞いになった。可愛いカロリーネは土地の監獄送りとなって、老いた両親は海を越えての渡航の準備をし、そして先の土地では、すでに大地が工場用に整地され、工場が小川を食い尽くした。これは単純な話しで、一種の村の歴史だ、きらきらしたワックスも、ポマードも、オーデコロン[ケルンの香水]もない。美しいミュラー[粉屋]の娘が勿論この悲劇の主役だ。刑事裁判が開かれ、色々な村の噂が追求された。　ー　一人の子供の死体がどこかで発見された。　ー　小川か、唐檜の地面か、堆肥の下か、知るか。　ー　やはり、同じことで、この話しはそれ以来、すでに何度

か、この周辺で起きている。その可愛い罪の女は、八年の刑期を終えて、六〇年にその両親を追って、ミズーリへ渡り、ある噂によると一人のクエーカー教徒と結婚したそうだが、しかしもう一つのより確かそうな噂によると、モルモン教徒の国ユタで女の定めを果たすことになったそうだ[一夫多妻制の暗示]。こうしたことすべては、クラウディーネ夫人とは全く何の関係もない。夫人は自分自身の過去[話し]を有している。しかしこの過去は根本的にカッツェミューレの一家の話し同様に、単純なものである。一八五二年二月にこの土地では強烈な雪が降った。この雪については、そなたらはその赤道直下のアフリカでほとんど経験したことがなかろうほどのものである。あたかも最新の過去の年月の政治的興奮の後、世間に半世紀もの健康な眠りのため掛け布団を用意したかに思われるものである。一週間この冗談は続いた。これは我ら如き者、人類のために公道を用意すべきではあるが、自らは通えない者にとって、まことに適した時であった。いやはや、その後、拙者の赤い鼻を、シュネードラーおばさんや、従姉妹マウザー、その他すべての親戚が、つまんで引っ張り、おばさんらは自分の鼻に不快そうに皺を寄せた。日夜、首まで雪や水の中に浸かっていた．　ー　日夜、休みなく、　ー　検査官殿は前に、検査官殿は後に、　ー　崇高な上司の当局から、足蹴にされ、どつかれ、小突かれた。それでがんがん頭痛がし、どこでも乾いた麦藁束の上で喜んで、呻いて、自分の魂の憂を晴らしたい思いであった。レオンハルト、そなたも色々な体験をしたろう。それで想像出来るだろう。さて、このような状況下、その当時、私の職務上、フリーゲンハウゼン奥のアイヘンタール[樫の木谷]へも行くことになった。そこの郵便馬車通りは雪塊のため完全に埋まっていて、百姓達が全力を傾注して、一日中ずっと、この除雪作業を行っていた。しかしこの雪を側に投げるシャベル一杯ごどに三シェッフェルの頭上の高さに達していた。風は黄昏が更けるにつれ、ますます邪悪になって、我々の努力を無にしようと、能う限りの力を発揮していた。実際、この折ほどに心地良く馴染みになるより良い機会は考えられなかったであろう。天は我が街道で、クラウディーネ夫人と私とを邂逅させた。天候がひどくて恐怖障害となっていたけれども、領邦首都からやって来る特別郵便馬車が、フリーゲンハウゼンの谷の入口まで進んで来た。しかしそこで立ち往生した。一人の若い、堂々たる、しかし興奮した男が、　ー　平服の将校であったが、吹雪の中、懸命に、我々に救助を求めて叫んでいた。私は最初彼を酔っ払いと見なした。しかしそうではなかった。やがて、彼はそう興奮する理由があると私には分かった。彼の御者が、何の疑いもなく、酔っ払っていた。馬どものうち一頭は倒れていて、馬車自体ひどく沈み込んで、ほとんど見えないほどであった。馬車の中でレディーは気を失っていて、　ー　熱を出していて、　ー　瀕死であった。両手を揉みながら、この若い紳士は呼びかけていた。『私の母は、瀕死の状態です。私を助けてください。我々を助けてください。私の母は、瀕死の状態です。母をほんの数時間でも、家の中で休ませてくれませんか』。今やフリーゲンハウゼンのすべての者が、沈んだこの馬車を取り囲んで、耳の後ろを引っ掻いた。私個人にとって、この話しは十分に奇妙で、不思議なものであった。この人々は、上品で高貴な風に見えた。しかし、この事故と荒れた天候のせいだけで、この人々が困窮しているのではないということも一目瞭然に違いなかった。この人々は、突然勃発した火事のせいで、眠りから目覚めさせられ、燃えている火宅から追い出されたように見えた。野蛮で、性急で、それでいて放心したような絶望が、そのすべての言葉から、この若い男の身振りのすべてから、発せられていた。私の労働者

達や百姓達の最も愚鈍な者でさえ、この病的性急さには、当惑して、尻込みしていた。このような苛立たしくて、労多い日には、最も間近で、喫緊なことに注目していても、十分に果たすべき仕事があったが、少なくともこの一瞬には、差し当たり関係ないことを、脇に置いておけた。間近な家として、カッツェンミューレ[猫水車小屋]があった。そちらへ、我々は苦労しながら、この疲れ切った夫人を運んだ。ドアを開けて貰うために、我々は長いことノックして、叩かなければならなかった。二人の老夫婦は、世間に対し慈悲深く、穏やかに振る舞う気分ではなかった。老夫婦にこのことを悪し様に考えることは出来なかった。悲惨な者が、悲惨な者の許に保護を求めていた。これはいつものことで、勿論幸福な者が笑って、幸福な者を踊りに要請するのとは、別な事である。粉屋の妻ミュラーは勿論、夫のミュラーよりも強情で、憤然としていて、自分の薄暗い、嘆きの片隅で、我々の侵入に対し最も長く抵抗した。しかし最後には夫人も、半ば強引さと、半ば説得に対し譲歩して、恨みながらも暖炉奥の夫の許に這って行った。我々はこの病気のレディーを老妻のベッドに置いて、ほとんどもはや何かレディーのためにしてやれることはなくなった。私は、出来ればニッペンブルクから医師をこちらに派遣したいと約束した。しかし病気のレディーは、同じように大変激しくこの派遣を断った。それで私は別れを告げて、百姓達や道路建設の下僕達と一緒にフリーゲンハウゼンに戻った。我々は打ち負かされた軍に似ていた。嵐と雪とが勝者として陣地を占領していた。この余所者達の馬車を見つけた場所に放置しなければならず、それにまだしも駄馬と御者をも救い出したことを喜びとしなければならなかった。早速翌日カッツェンミューレを再訪すると私は固く決心していたけれども、この決心を実行することが私には許されなかった。私はここ数日の雪のために、同じく熱病にかかる羽目になり、私の主なる神は怒っていなさることが判明し、私は羽布団の中に半ば窒息して眠り、半ばカミルレ茶の奔流に溺死することになった。数週間後にようやく私はまたフリーゲンハウゼンを通って騎行し、それから初めてまた、そなたに描写した雪の中でのかの出会いを思い出した。雪は今や疾うに水に解けていて、春がすでに至るところ、茂みの中や、茂みの下にうごめいていた。私はまことに快適至極になっていて、このようなとても幸福で、軽快な心持ちで、カッツェンミューレ[猫水車小屋]にも速歩騎乗して行った。そして大声でミュラーに対しハローと呼びかけ、その客人達と客人達の更なる運命のことを、ミュラーの家で尋ねることにした。しかし人間は、耳の上までナイトキャップを被ったまま、ベッドで寝ていて、汗をかき、お茶を飲んだ後、世間はまだ自分を待っているものと思ってはならないだろう。カッツェンミューレはまだあった。しかしカッツェンミュラー夫妻はもはやいなかった。夫妻はアメリカへ発っていた。二人の代わりにカッツェンミューレ[猫水車小屋]にクラウディーネ夫人が座っていた。クラウディーネ夫人とは、かの気を失っていたレディーのことで、私がフリーゲンハウゼンの百姓達の助けを借りて、雪の中から掘りだした女性である。一人の女中が最初私をドアから突き放した。かの嵐の晩、夫ミュラーが我々を拒絶したようなものである。少尉殿は余所に立ち去って、クラウディーネ夫人は具合が芳しくなく、話せませんということであった。従兄弟ヴァッサートレーターは伊達に道路建設に従事して来たわけでなく、この神秘的夫人に至る道を見いだしたし、それに夫人にとっても悪い話しではなかった。というのは、フリーゲンハウゼンの敬虔な羊飼い達[牧師達]や愚直な農夫達はすでに十分夫人の生活を酸っぱいものにしていたからである。私はしばしば機会を見つけては、夫人のために尽力して、

夫人の『人となり』が少しも気に入らない近隣住民に対する夫人の平静さや快適さの確保に努めたのである。私が私自身の中に、何か信頼するに足るものを有していることを、クレメンティーネおばさんはまだ否定したことがない。それで私は年月の経過の中、クラウディーネ夫人と良い友達となったし、我々は互いの良い点を承知している。夫人はある大きな痛みの中、静かに耐えているし、きっと自分の運命を、そなたの捕囚やアブ・テルファンと喜んで交換してもくれることだろう。しかし彼女の苦難と言っても、同じように新しいものでもなく、夫人の過去[話し]も美しいミュラーの娘の話し同様、この地上で初めて生じたものでもない。我々がここでクラウディーネ夫人と呼ぶこの女性は、ある高位の役人の妻であったが、この夫は、自分に逮捕状が示されたその瞬間に、人々の噂では、卒中で亡くなって、ただそのお蔭で、刑事取り調べを免れたそうなのだ。彼女の一人息子は、父親の名誉と一緒に自分の名誉も失われたと思って、無分別に絶望して、これまで自分の生涯の前提となっていたものすべてを投げ棄ててしまった。彼の両親の家が破局に見舞われたとき、彼女は息子を軟弱な、甘やかされた少年に過ぎないと思わざるを得なかった。彼は自分の自我、自分の人格性を住み慣れた生活圏で自己主張する力を有せず、すべてを自分の背後に放置して、そなたの同郷人たる鳥、駝鳥の如く、逃げて、どこかの砂の中に頭を突っ込んだからである。母親は勿論、息子の振る舞いの正しさを理解していた。彼女も同様に勿論、運否天賦、転換の時に、彼と一緒に逃げて、世界の果てまで、不確かな灰色世界への逃走に従っていたことであろう。しかし幸い大雪がすべての鉄道路線を吹き飛ばして、従兄弟ヴァッサートレーターの郵便馬車通りすらもフリーゲンハウゼンのアイヘンタール[樫の木谷]の入口で封鎖してしまったのである。かくて彼女は今や十年以上も長く、カッツェンミューレ[猫水車小屋]に住んでいて、息子の帰還を待っている。私が思うに、他の人々も彼女と一緒にそれを待っている。その若い息子の紳士がまだ存命であることを、母親は疑いもなく確信している。しかしそれだけ一層、息子が何になっているのか、私には疑わしく思える。この十年の間、話しの種が尽きたことはない。我々は夏であれ、冬であれ、何についてお喋りすべきか分かっている。やむを得ない場合には、我々は好きなように夢を見ればいい。そなたは、レオンハルト・ハーゲブーハーよ、美しい老夫人、賢明な夫人、一人のヒロインと知り合うことになろう。そなたがトゥムルキー州でそなたの悲惨な境遇をこのクラウディーネ・フェーライゼン夫人のように品良く耐えたのであれば、そなたに私の衷心からの世辞を申し上げるのに吝かでない。すっとこどっこい、まあ見てみろ、こちらの無頼漢どもが冬の道にしてくれることと言ったら。すべての法面が台無しだ。何と多くの飲んだくれの小作人や小百姓どもが、その糞尿車をこちらの溝に流し込むことか。人間性に対する信頼を失って、代わりにカールスバート決議への信頼を見いだすべきなのか。これはまことに、いや、　ー」。

「不幸な女性、ヒロインの女性」とレオンハルトは深く没頭して、思わず知らず、語った。そして従兄弟は、再び悠然たる調子で、自分の語りに移行して、言った。

「そなたは夫人に会うことになろう。そなたが私の気に入ったように、夫人の気にも入れば良いのだが。そなたは夫人のことが良く分かるようになることだろう。これは多くの人々以上に、そなたにとって益のあることだ。ところで、そこがフリーゲンハウゼンだな。いずれにせよ、最短の道で、雄牛亭へ行こう。このような真昼の時、私は弓の弧[曲線]よりも弦を行くのをいつも好む。暑い国アフリカから来たそなたにはどちらでも構わんだろ

うが」。

第八章

彼らは、極めて清潔な道とは言えないものの、それでも影の多いもう一方の側の道を通って、雄牛亭に達し、小門の所で、亭主夫妻の田舎風の親しみのこもった歓迎を受けた。田舎風に彼らは昼食を摂って、食後、従兄弟は柔らかな材質のベンチに手足を伸ばし、同伴者に同様にするよう助言し、蠅のことは気にするなと言った。蠅が従兄弟のことを気にかけてくれなければ、いずれにせよ、まことに五月蠅くない蠅であったろう。レオンハルト・ハーゲブーハーは、両腕をテーブルに置いて、頭を腕で支えて、道路検査官の手本を真似ないと固く決めていた。そして一時間後に、目覚めたとき、アブ・テルファンのクラ・グラ夫人の粘土の穴にいず、フリーゲンハウゼンの雄牛亭の客室にいるのを知って、とても不思議な気がした。従兄弟も狼狽して立ち上がった。田舎の人々はコーヒーを中身のせいよりは、行儀作法のせいで、飲むのであった。駄馬は雄牛亭の馬小屋に喜んで残っていた。従兄弟とアフリカ人は、クラウディーネ夫人への訪問に出掛けて、今やまた街道に沿って行った。二人は村の上半分を抜けて行き、やがてアイヘンタール[樫の木谷]の涼しい影に達した。フリーゲンハウゼンから十五分ほどしてから二人は右側に折れて、往来でへこんだ切り通しをより低く森へ向かった。小道は側面の小さな谷の中で、ますます狭小になり、飛び出た岩角を短く旋回して、カッツェンミューレ[猫水車小屋]に通じていた。すぐその背後を釘を打ち付けた板で世間と距てているのではなく、およそ五十から六十シュー[1シュー：30センチ]の高さの花崗岩壁があって、この岩壁の向こう側に広がっている平野部の穀物畑とを仕切っていた。この岩塊の上から以前は陽気な小川が水車に流れ込んでいたが、しかし、すでに述べたように、向こうのこの地方の大きな新工場が夙に河川の主要な流れを自らのために確保していて、谷の謙虚な妹分の小川には、単に必要な分だけを放出して、古い壁や岩場や梁構造や壊れた水車の回りに植物が芽を出し、育つようにしていて、どんな画家でも、これらより一層優美に、一層豊饒に、一層新鮮に、一層緑色に思い描けないほどであった。荒れた小庭園が家の前に広がっていて、生きた生垣がどこで森の茂みへ移行しているのか、ほとんど分からなかった。野バラと植えた薔薇とが互いに絡み合っていて、広葉昼顔や忍冬がそれだけ一層互いに分かちがたく巻き付いていた。水車小屋の屋根の上には木蔦が、まことに珍しい具合に這っていた。古く黒い水車のスポークや桶の周りで、それが花咲き、緑に茂っている様は、ほとんど描写し難い。この家の窓がボンボン入りの板で出来ていないのは、不思議であった。レオンハルト・ハーゲブーハーが全く驚いて、立ち止まって、叫んだのも、不思議ではない。

「これがカッツェンミューレ[猫水車小屋]ですか。いや、これは何と変貌したことだろう。これを見たら、赤道下、シリウス日[盛夏]、涼しく思われましょう。これは素敵だ」。

「そうだろう。しかしいつでもそうなんだ。どこの箇所もな。自然にはただその戯れを更に展開させさえすればいい。自然は与えられた補助手段で豊饒に茂る。カッツェンミュラーの統治下では、事物は別様に見えた。クラウディーネ夫人は、昔からの母親イシスに、その道を任せる術を学んだのだ。単に家と垣根の周りだけではない」。

「アラーよ、ここにいるのは何だ」とアフリカ人は叫んだ。突然、森と庭園の茂みから

白い馬の頭が起き上がって、鼻息を立て、親しげに彼の肩に乗りかかった。[アラブの精霊の国]ジニスタンの一切の力にかけて、プロスペロよ[シェークスピア『嵐』より、ここでは白馬の名]、そなたもこちらへ来たのか。こちらへの道を知っていたのか」。

「まことにこれはブムスドルフ荘園の英国産の馬だ」と従兄弟は呟いた、「では、まあ、見てみよう。連れはこれより一層可愛いぞ」。

「私が馬小屋から盗んで来たのです。いつものように自ら鞍を置かなければならなかったのです。従兄弟殿」とニコラ・フォン・アインシュタインが語った。「お二方、ようこそ。クラウディーネ夫人は、お二人をご覧になって、喜ばれましょう。私どもは二人っきりでもう十分に長く、座っていましたから」。

黒い服の中年の夫人が今や水車小屋の開いた窓から姿を見せ、好意的に道路検査官に頷きかけた。この女官に案内されて、二人の男性は家の中へ入った。ニコラは言った。

「辛抱夫人、こちらが彼です。彼の冒険譚や創作譚を六回目拝聴することになっても、私には構いません。辛抱夫人、ただこの人を問い質してください。辛抱夫人、私はその間、従兄弟殿のお相手をします。この方もご自分のお話しを、それも毎日、体験なさっています」。

「有り難う、美人の姫」と検査官は言って、今や同伴者を正式にクラウディーネ夫人に紹介した。夫人はレオンハルトにその上品な痩せた手を差し出して、衷心より自分の静かな領国にようこそと述べた。しかしこのアフリカ人には、自分が今や本当にリビア砂漠の灼熱から、従兄弟ヴァッサートレーターの国道へ、ニッペンブルクの路地へ、すべての皮膚刺青の、絶えず新たに出現する敵対者の追跡から、哀れな叫び声、野蛮な荒くれた蛮声、騒動、立ち回りから、幸い逃げおおせて、今や本当に安全な地に腰掛けて、一息つけるような気がした。かくて彼はそうした。

クラウディーネ夫人は、落ち着いた、穏やかな声と、落ち着いた目の、美しい老夫人で、静かな表情であった。夫人の動作はゆっくりしていて、少しばかり大儀そうで、重大の病気から癒えつつある者の動作であった。夫人は黒い服を着用していて、その小屋の中では、外部の自然同様に管理していた。ほんのわずかな費用と、ごく普通の手段で、カッツェンミュラーとその一家のこの荒れた建物と滞在地とを、趣味の良い妖精の如く、他の人々が金を使ってするように、夫人は魔法の杖を十分に振るって変身させていた。彼女、クラウディーネ夫人は、コーヒーも可愛い百姓娘に持って来させた。従兄弟ヴァッサートレーターは遠慮せず、パイプに火を着け、皆が談笑のため腰掛けた。

「ニコラ令嬢は、彼女らしい作法で、貴方を歓迎なさっています。ハーゲブーハーさん」とクラウディーネ夫人は語った、「しかし私の言葉を信じてください。貴方は私にとってとても歓迎です。それに、　ー　私どもはすでに立派に知り合っています。この若いレディーが貴方の体験のお話しを拝聴すること六度目としても、その都度彼女は立派に拝聴しています。私は沢山尋ねました。彼女はいつも素敵に解説してくださった。いや、私に今一度貴方の手を差し出してください、レオンハルトさん。貴方は私に貴方の生涯のことを沢山、沢山話してくださらなければなりません。貴方について、沢山知りたいのです」。

「我々が参上したのも、持参して来たものに対して、幾つかのことを土産話に頂きたいのです」と道路検査官が口を挿んだ。

「私どもは立ち往生していて、何が何だか分からないわ」とフォン・アインシュタイン

令嬢が笑った。「私どもは文明の焼かれた鳩が最も丸々と大気中に飛んでいるのはどこか[棚ぼたの情報はどこで得られるか]知りたがっています。　ー　私どもはクラウディーネ夫人に頼んで、どこで、どのように腰を下ろしたら、古いヨーロッパの中心にいながら、トゥムルキー州の方がまだましと思えないのか、教えて欲しがっています。パパやママ、シュネードラーおばさん、それに従兄弟ヴァッサートレーターも余り慰めとはならなかったのです。それでカッツェンミューレ[猫水車小屋]まではるばる来たのです。そうなんです、何人かそんな具合なのです」。

「いや、ご夫人」とレオンハルトは宮中女官を一瞥してどもって言った。この女官は、好奇心を起こして窓の中へ侵入して来た忍冬の蔓と戯れ始めていた。「ご夫人、　ー　クラウディーネ夫人、根本的には、令嬢の話されている通りです。ただ今、始めてまた、久しく経験していない涼しい手を額に感じています。私が勿論貴女の許にお伺いしたのは、多くの人々が、貴女のみが私に私の浪費された人生に対する助言を与えられるであろうと言っているからです。貴女は善良な女性であるばかりでなく、利口な女性であり、単に利口な女性であるばかりでなく、賢明な女性であると言われています。おこカッツェンミューレ[猫水車小屋]で暮らすのは、簡単な芸当ではない、と人々は言っています。しかし貴女のように有能な女性は、クラウディーネ夫人、多くのことを手中にしていて、それで他人に対し上手にお裾分け出来るのであろう、とも。それ故、私は、数千人の前で、自分に助言を与えて頂き、そして私の生涯の如き、一つの人生で何を始めるべきか教えて頂く必要がありまして、そう願っています」。

クラウディーネ夫人は、再びこのアフリカ人の手を取っ手、落ち着いた、しかしとても悲しそうな眼差しで彼を見つめた。

「それでは、外の世間の人々は、私についてそのように話していて、貴方を私の許へ送ったのですか」と彼女は尋ねた、「まあ、私がメルリーン[魔法使い、予言者]をあなた方に演じて、藪の中で思わず知らず、混乱した呪文を称えて、あなた方が、古い謎々に対する新しい謎々を解くように導くのですか。人々は何ということを考え、親愛なる友の方、貴方も何ということを考えているのでしょう。私は老婆です。貴方は若い青年。私は疲れていて、眠ってしまいます。貴方は再び目覚めさえすれば、芽から眠りをこすり取ることでしょう。私はひどい痛みの中、厳しい戦いの中、貴方が全力で取り戻したいことを、棄ててしまいました。あなたの場合が、私の場合よりも、容易なことであっても、しかしその道を示すことは、私にとって、難しいこと、とても難しいことです」。

「辛抱夫人、その話題は止めてください」とニコラは叫んだ、「簡単に満足させられないのは、忘恩の殿方です。まあ、神様、人々が私をニッペンブルクの議会書記官にしたいと言うとき、私は何のお礼を差し出しましょう。でも、彼同様に、私が自分の過去をオルガンとカンバスの絵に合わせて、路地で歌い上げることを許されたら、そのときには、この幸運に対して更に何も要求せず、きっと、満更でもなく、悲しがることもせずに、徘徊して、人々を退屈させないことでしょう。クラウディーネ夫人、人は単にやる気を出して、挑戦しさえすれば、どんなに上手くやってのけるか、知っている人はわずかです」。

従兄弟ヴァッサートレーターが、手回しオルガンの思い付きは若干まことに魅力的な点を有する、いずれにせよ、もっと詳しく考えるべきと証している間に、水車小屋の住人女性は、更にメランコリーを募らせて宮中女官を見つめていて、かなり長く沈黙していた後、

再度言葉を発した。

「ハーゲブーハーさん、この森へ来て、七人の小人の許で暮らすよう、貴方を招待できません。それは良きこと、有益なことではないでしょうから。貴方は十分に長く、ただ自分一人きりで自活して来られました。それ故貴方は一時的な弛緩や疲労に誘惑されることもありません。いや、私は、人々が言っているとしても、利口な女性でもなく、ましてや賢明な女性でもありません。でも、そんなでもなくても、貴方にとって致命的なことは何か、それは分かります。貴方は再び市場へ出て行く必要があります、という助言の他、一体どんな助言が考えられましょう。貴方の友と自称する者なら、そのお手伝いとして、どんな状況下であれ、貴方にとって現在の一日が、全く快適なものとなるようお手伝いすることではないでしょう」。

「我が少年よ、私は考えてもいなかったことだ」と力を込めて、従兄弟ヴァッサートレーターが叫んだ、「私がそこに座っていてはならないのであれば、安楽椅子に用はない。クラウディーネ夫人、更にお話しください。私は自分の意見はとうに分かっていたのですが、ただそれを言葉に出来なかった。待ちな、我が倅よ、我々はそなたがどこにも座っておれないよう、針を育てることになろう。愛しいクラウディーネ夫人、更に話してください」。

微笑してクラウディーネ夫人は続けた。

「手回しオルガンとそれに合わせる素敵な歌の提案は、私にも法外に気に入りました。これを出来る限り早急に実行に移すことよりも立派なことはないというのが、私の確かな意見と申せましょう。いや、愛しい友の方、これは私の完全に真剣な意見です。それにこんなことをしても、時代の習俗に違反しないとも思いますし、　ー」。

「少しも違反しません」とニコラ・フォン・アインシュタインは叫んだ、「もっと立派なことでしょう。皆目、違反しません」。

「誰もがすることは、内奥アフリカ出身の男でも出来よう」と従兄弟は呟いた、「レオンハルト、すぐに決心しろ。立て替え費用は私に任せろ。そなたはまことに上手くやってくれることだろう」。

「皆がその関心の笑いを添えてくれましょから、私の嘆きはまこと滑稽なものに違いありません」とレオンハルトは惨めに言い、若干非難がましくクラウディーネ夫人を見つめた、「もっともなことです。片輪の者は、嘲笑されることを案ずる必要はないという言葉は十分に古いものです。とても滑稽です。私も他の人々同様に笑いましょう。従兄弟殿、私がするつもりのことをご存じですか。手回しオルガンで私は諸国を巡回致しません。私は貴殿の国道で、貴殿の石を砕くつもりです。従兄弟殿、アラーの神にかけて、私はそうします。明日にも始めます。これは一つの決意です。誰からももはや介入されません。アラーの神にかけて、人間は何と愚かになれるものか。私は、自分がトゥムルキー州にいるとき理論的に開発した哲学を、ドイツの国で実践に移せるとまだ思い浮かばなかったのです。ソロモン王の指輪にかけて、今や私には立派な助言は沢山です。私はもはや何も聞きません。毎日、貴殿の国道で玄武岩を砕きます。貴殿らの文明は、私の思いや幻影の上を通り過ぎ、去って行けばいい。私には関係ありません」。

「ニコラ、どこへ行くの」とクラウディーネ夫人が尋ねた。令嬢が今や素早く立ち上がって、自分の小さな帽子と鞭を手に取っていた。

「プロスペロに乗って、ブムスドルフに帰ります、最愛の方」。

「貴女は待って、一緒に帰らないのですか」と従兄弟ヴァッサートレーターは叫んだ。

「いえ、結構。向こうのあの方をこちらにお連れするのに、何用あってのことだったのです。こちらへ伺っても、一時間楽しい思いをすることも、なかなか稀です。招待もされていないのに、陽光の中、しかめっ面なさるのは、全く不必要なことです。辛抱夫人、とにかく、まことに辛抱なさることです。私どもは意見や助言を、ブラックベリーのように[無数にplentiful, 『ヘンリー四世』Ⅰ,2,4]差し出すことはしませんとムーア人の国からの殿方に仰有ることです。あるいはもっと良いのは、クリスティーネに箒を持って来させて、貴女の家の掃除を言い付けることでしょう。良い晩を、ご夫人。良い晩を、紳士の方々。私は自分に特有の癖が出始めると抑えられません。私は剛毛用箒を持った方が来ても、この嫌な時をやり過ごせないのです。良い晩を、皆さん。良い晩を、レオンハルト・ハーゲブーハーさん。　ー　ひょっとしたら私どもはもっと良い気分のとき、再会出来ましょう」。

彼女はクラウディーネ夫人の額に接吻をして、ドアから外に飛び出した。彼女は白い馬に乗って、生垣越しに、美しく高笑いして挨拶した。その美しさは彼女の苛立った言葉とは奇妙に対照的であった。この陽気で、優美な姿が森の中へ消えると、二人の男性は、なおもしばらく呆然と座っていて、宙を見つめていたが、やがてクラウディーネ夫人が溜め息を吐いた。

「哀れな子、まあ、行きなさい。あなたの性急さを叱る人は誰もいません。親愛なる殿方のお二人、あの子は滑らかな額ですが、その下の考えはねじれています。外の世界の誰一人、彼女の遊び友達の女性も、彼女の母親も、このことについて私ほどに承知しているわけではありません。彼女も同様に私の許へ来て、私の水車小屋の壊れて無用な車輪から響く滴の音に耳を澄ましますます。でも、彼女も若すぎて、この響きの教えの真実の意味を把握出来ていません。貴方も若すぎます、レオンハルトさん」。

この最後の言葉と共に、カッツェンミューレ[猫水車小屋]の住人女性は、再度アフリカ人に面と向かって、今や話し続けた。

「我が子、貴方を嘲笑うつもりはありません。これも幾多の他の技芸同様、一つの技芸です。私は以前これらの技芸についてもっと多く知っていましたが、他の幾多の技芸同様、こちらの静寂の中、忘れてしまいました。一人で座っていて、水滴の落下に、そして森の中より深くカケスの声に耳を澄ますのは、カッツェンミューレ[猫水車小屋]での不吉な笑いです。一人っきりでいると、笑いや嘲りを学べません。　ー　何故、貴方は、貴方が砂漠で体験し、考えたことを、カンバスに描いて、それを人々に示して、教えようとなさらないのです。多くの利口で善良な人々が同じことをして、偉大な貢献をなして来たのです。この人々は自分達の運命、自分達の辛い労苦や仕事、自分達の幸運、不運を歌や格言にして来ました。貴方は体験なさったことについて熟考してみてください。　ー　こちらの森の中、従兄弟殿の国道、貴方のご両親の家、至る所で、そのことについて熟考してください。そして貴方がお望みなら、貴方が有益であり、新しいことと思うことを執筆なさってもいいのです。今は素敵な夏で、日は長い、秋がこの国にやって来るまで、色々なことを熟考するのに、たっぷり時間があります。　ー　その後、貴方が十分にまとめて思考されたら、民衆にそのことについて話されたらいい。貴方は千人もの聞き手を得るでしょうし、貴方がご自分の件を立派に仕上げたら、どれほど素早く、石が黄金に、嫌悪が快感に、大

いなる悲惨さが、更にそれ以上に大いなる、そしてとても長続きする幸福へと変貌することかと驚かれることでしょう」。

「レオンハルトよ、そなたは何と言うか。私はそなたに何と言ったか」と道路検査官は明るく夢中になって叫んだ、「我らは正しいドアをノックしたろう。いや、クラウディーネ夫人、貴女が一八一九年にマインツの中央調査委員会のドアの許、私を待機なさっていたら、私は何に成り上がっていたことでしょうか。レオンハルトよ、起き上がり、クラウディーネ夫人の手に接吻しろ。さもないと私は自分の手を完全にそなたから引き離すぞ、昔レビの一族[民数記18]が、教会の十分の一税が、危機に陥ったとき、他の[税を収める]イスラエルの人々から縁を切ったようにな、バッカスやヴィーナス、バール神やバベルの竜の方がもっと安いからと称してな」。[ダニエル書補遺、ベルと竜]。

「従兄弟殿、従兄弟殿、いつの時であれ、貴方に、貴方が進もうとなさらない道を案内するのは、きっと難しい仕事だったことでしょう。今はどうぞ口を閉ざして、私に最後まで話させてください。ハーゲブーハーさん、貴方は月から落下されました。それで貴方には沢山お話しされることがあります。色鮮やかな絵の前で貴方の歌を歌ってご覧なさい。すると、貴方が苦労の末に再発見しようとなさっている現在の生活が、きっと手許にやって来て、貴方にとってとても快適なものとなりましょう、その苦く、悲しい潮流が貴方を溺れさせ、窒息させない限り」。

レオンハルト・ハーゲブーハーは額を深く沈めていた。従兄弟ヴァッサートレーターは再度自分の膝をしたたかに殴って、夢中になって叫んだ。

「クラウディーネ夫人、この若造はやってのけましょう。私は彼の手伝いをします。万歳、ニッペンブルクとブムスドルフのみが耳目を見開くことにはなりますまい。万歳、これで冬の間の仕事が出来た、　ー」。

「道路検査官殿、貴殿の立派な馬はどこです」とクラウディーネ夫人は、この夢中になった男を遮った。もっと長く話したがっていた従兄弟は、答えた。

「それは、雄牛亭です、いつものように」。

「それでは最愛の方、こうして頂けませんか。雄牛亭へぶらぶら行かれて、家へ馬で帰る。そしてこちらの方を今しばらく私一人とお話しさせてください。貴殿の許に、出来るだけ早くこちらの方を追ってお返し致します。従兄弟殿、貴殿の大事な方をこちらまで案内されて、私への篤い信頼を示して頂きました。私はこの信頼に背かないことをご存じでしょう。更に小一時間、こちらにレオンハルト殿をお任せください。約束致します、この方のことで更に貴殿は多くの喜びを感ずることになりましょう、と」。

従兄弟ヴァッサートレーターは、両手を洗うかのような仕草をして、ゆっくりと立ち上がりながら、愚痴をこぼして言った。

「クラウディーネ夫人、貴女は利口な女性であり、たとえ貴女がドアの前に椅子を置く場合であっても、いつでの貴女は信頼するに足るということは確かです。私はすでにこれまでこの従兄弟ハーゲブーハーよりも脆いものを貴女の両手に預けて来ました。それで、こう述べまして、良い晩をと挨拶し、ご要望に従い雄牛亭へ行軍致します。どうぞ彼を、つまりアフリカ帰りのこの青年を説得してください。この未熟者が両足で立てるようにしてやって、解放してください。レオンハルトよ、良い子になって、どれほどの愛情と名誉とがそなたには注がれているか、良く考えるのだ。そなたが、朝方の二時頃まで、まだ私

に話したいことがあるなら、私の窓の下まで来れば良い。私の寝付きの悪さは承知していよう」。

「良い晩を、道路検査官殿」とクラウディーネ夫人は、少しばかり苛立って叫んだ。従兄弟ヴァッサートレーターは大変懇ろに、彼女の手に接吻し、ようやくパイプを吹かしながら、茂みの奥に消えた。道のかなりの部分を、カッツェンミューレ[猫水車小屋]の番犬、堂々たる白いスピッツが同伴した。このスピッツと同じ血筋の犬が、ブムスドルフの貴族屋敷という恵まれた環境下に暮らしていた。

第九章

この従兄弟が背を向けて、そして彼がそのアナバシス[遠征]に随伴させているメロディー的響きが森の中に消えないうちに、この水車小屋の住人女性は、大きな変化を見せていた。彼女の顔から落ち着いた陽気さが消えた。彼女はまだ一瞬、自分の窓前の静かな荒野の中を不安げに臆して見つめていた。それから彼女はほとんど野蛮な性急さで、レオンハルト・ハーゲブーハーの腕を掴んで、すぐ彼の前に立ち、ますます深く彼の目を覗いて、囁いた。

「それでようやくやって来ましたね。何故もっと早く来なかったのです。私をこれほど待たせるとは、とても酷なことです。私をからかってはいけませんよ、とてもひどい目に遭いましょうし、それを防ぐ武器もないでしょうから。どれほどこの隠者の女が貴方に会いたがっているか、誰も言わなかったのですか。ニコラでさえ、私のことを話さず、貴方をこちらへ呼ばなかったのですか。まあ、良くないことです、良くないことです。でも貴方には感謝しています。貴方はこちらへいらしたのですし、簡単にまた手放しは致しません。私にすべて話してください、あらゆることについて話してください。　ー　どんな些細なことも、取るに足りないことも無視してはなりません。貴方にとっては無意味なことでも、私には死活問題となり得ますから」。

レオンハルトはこの謎めいた非難や質問、依頼の驟雨の中、途方に暮れ、狼狽して立っていた。自分は一人の気の触れた女性に向かい合っているのかもしれないという思いが強烈に襲って来て、彼は、従兄弟ヴァッサートレーターが、この神秘的水車小屋と夫人の許へ自分を案内して、その後、自分をこの運命へ放置してしまった経緯にさほど感謝の念を覚えなくなっていた。彼はどもって、つかえながら言った。

「多くの人々が、それにフォン・アインシュタイン令嬢も、貴女について私に話してくれました。クラウディーネ夫人が、私の訪問をかくも心待ちになさっていると承知していましたら、もっと早くこちらへ伺ったことでしょう。私は実際、もう一度、自分の過去について話したい気持ちですし、喜んでどんな情報も提供しましょう。ここは座り心地もよろしいですし、クラウディーネ夫人のお許しがあれば、まことに度々伺いましょう」。

クラウディーネ夫人は、悲しげに頭を振った。「貴方に私のことが十分に伝わっていないと分かります。いや、私のことを一人の痴女とお考えにならないでください。私は単に不幸な母親に過ぎなくて、人々に自分の子供のことを問い合わせているのです。親愛なる友の方、私の興奮を許してください。いえ、思うに、私どもは、まことに何度も、そして長時間一緒に話し合うことになりましょう。そして次第にお互いもっと良く知り合うこと

にしましょう。それで、カッツェンミューレ[猫水車小屋]のこの隠者の女について人々は貴方に何と話していましたか」。

レオンハルト・ハーゲブーハーは、時折会話の中で、ついでに話されたことや、それから従兄弟のヴァッサートレーターが今日のこちらへの途上、クラウディーネ夫人の過去について彼に知らせたことを伝えた。水車小屋の住人女性は、それでまた静かに落ち着いて聞いていて、ほんの時折、頭で頷いた。彼が報告を終えると、彼女は言った。

「勿論、隣人の気持ちは誰にも分からないことでしょう。隣人の手から一つの鉢が落ちて、砕けた場合であれ、隣人が自分の生涯の幸せの瓦礫を前にして立っている場合であれ。私は私の子供を探しています。　ー　私の息子です、レオンハルト・ハーゲブーハーさん。息子は私の許を去って、広大な世間に消えてしまいました。息子は人々の嘲罵から逃れて、私をここから動けなくし、ここに残しました。私は一人の痴女です。レオンハルト・ハーゲブーハーさん、奇蹟を信じていて、もしこの奇蹟を信ずることが許されなかったら、すでに疾うに亡くなっていたことでしょう。それで私はここカッツェンミューレ[猫水車小屋]に座っていて、日夜耳を澄ましています。いつか風に乗って、一人の声が私の許に届くに違いない、一個の石が話し始めるに違いない、と。そして私はそのことを待っている間、遠方世界からやって来て、ここの敷居を越える人が現れると、その人が自分の路上でのこと、この路上で出会った人々皆について、私に話し終えない限り、私は手放しません。私は人々皆に私の息子のことを尋ねます。私は百歳になって、自分の子供は疾うに亡くなっていると承知していても、それでも尋ねるでしょうし、尋ねなければなりません。　ー

私はただ、息を止めて、聞き入るために生きています。何ということでしょう。しばしば、かくも一人っきりで住んでいて、あそこの窓の前で水滴の落下しか耳にしないということは、とても恐ろしいことです。いえ、あのニコラ、彼女が、すべての人間の中で、最もこのことについて知っています。でも彼女はこれについて話すことを最も禁じられています。私が彼女のことで立腹していたと彼女に言わないでください、ハーゲブーハーさん。私は誰に対しても怒ることは出来ません。私を支配している運命は、私にその償いをしてくれましょう。すでに私はとても長いこと、とても悲しく、長いこと、待っていました。ただ辛抱だけが私を救い出せます。私は辛抱するつもりです。私は時計の時針を動かすつもりはありません。外の世界からやって来る人々に、外界はどのような具合で、どのように人々は営んでおり、誰に出会ったのか、私は話して貰います。いつか私の息子を知っていて、人混みの中で息子に触れて、息子と一言、言葉を交わした人がやって来るに違いありません。でも、私はこの古い水車小屋の中で静かにしていて、辛抱して息子を待つつもりです。私は数十万人の方々よりも、外界はどのような具合であり、この地上の往来での営みはいかに辛く、残酷で、血まみれのものであるか、余りにも良く承知しているのです」。

感動して、レオンハルト・ハーゲブーハーは叫んだ。

「親愛なる夫人、今ようやく私は貴女をすべて理解し、深く後悔を感ずる謂れを察知しています。やはり十年間、捕囚されていて、辛抱して自らを律しなければならず、辛抱さえ残っていず、ただ鈍感さと、宙を空ろに凝視して傾聴することしか出来なくなっている者ほどに、クラウディーネ夫人を良く理解できる人間はいないでしょう。いや、それで私は他の人間の誰よりも、クラウディーネ夫人に対して話しかけたいと思いますし、他の人間の誰よりも、話し相手となりましょう。だって、夫人の如く、この慰めのない状態、こ

の底なしの虚無に対し、一つの意味を誰が与えられましょうか、となりますから」。

「私どもは互いに沢山話し合うことを有していて、お互い、出来る限り、助け合いましょう」とカッツェンミューレ[猫水車小屋]の夫人は語った。それから、　ー　ハーゲブーハーは再度、自分の話しを物語った。しかし今回は別の調子で、別のやり方であり、正しい聞き手の女性に対してであった。この最初の日は、勿論、単に一つの眺望を提供するのみであった。すでに黄昏は、森のより深い底に巣くっていて、すでに水車小屋の周りの木々の最も高い梢や枝が、沈む太陽の赤い光りの中、輝いていた。すでにレオンハルトは百人もの人物を、その中には奇妙な若造達もいたが、陸路、海上で、哀れな母親の切望する心の前、過らせていた。しかし夫人は、自分の探している息子を、その人々の中に見いだせなかった。黄昏は四方八方から、ますます冷ややかに、森から水車小屋に対し忍び寄って来た。屋根の上に見える、苔むした岩が、夏の夕方の純なる天に対し、黒々と聳えていた。最初のコウモリが一匹、その隠れ処から離れて、クラウディーネ夫人の朽ちた煙突の周りを覚束なく旋回して、その飛行を試していた。遠く森の中で、夜の声が湧き上がって、庭木戸の前のスピッツが小声で吠えて、水車小屋のドアまでの狭い道の中を行き来した。暗闇での自分の職務を良く司るべき準備している忠実な番犬風であった。

相変わらずレオンハルトとクラウディーネ夫人は、開いた窓の側に座っていて、明かりと時間とがどのように経過して行ったか、両人とも気付いていなかった。相変わらずレオンハルト・ハーゲブーハーが語っていたが、今や疾うにこの聞き手の女性を、アブ・テルファンの黄色に燃え上がる岩の谷の中、自分の粘土小屋に案内していて、今や果たして初めてヴァン・デル・モークの名前を語ったのであった。

「それでは今一度、私に貴方の解放者の名前と貴方の救済の時を教えてください」とクラウディーネ夫人は叫んだ。「貴方を救出するために、摂理が送り届けた男の方を描写してください。枷が地面に落ち、恐ろしいことが過去のものと鳴ったとき、どのような気分であったか、語ってください。御自身の口で、どのように解放されたのか、仰有ってください。さすれば、私自身の救済への思いも強化されましょう。いえ、余りに多くの人々がこう言っているのです。あの女性は救われないだろう、と。私はかくも一人っきりで、それで私は奇蹟や信仰、そして起き上がり、歩いてみよと言われた来た人々を、　ー　とても必要としています。とても必要としています」。

この女性の熱にうなされたような性急さに拉致されて、ハーゲブーハーはアフリカから帰還して以来、初めて、このような体験に相応しく、そのような語り口で語った。つまり彼はすべての事柄に正当な色合いを付与して、自分で語りながら、自らそのことに驚いていた。今この現在の瞬間まで、自分が全く自覚していなかった一つの才能が彼の中で目覚めたのであり、この才能に関して、彼はその後、ブムスドルフへ帰還の折、更にもっと自ら不思議に思い始めたのであるが、我々もやがてその次第を知ることになろう。

奴隷を連れた野蛮な黒人の狙撃兵[狩人]は、アル・バーブ峡谷、つまり砂漠の通路を通じて、彼らの岩の村へ戻って参ります。頭痛や悪寒、負傷した両足、若干のとても赤いみみず腫れ、これが税検査官ハーゲブーハーの息子にとっての一日の成果です。そこで彼は愚鈍になって、長く手足を伸ばして寝て、顔を砂の中へ押し付け、もはやその一日の救いのない明かりを何も見ないようにします。そして子供らしい遊びで、哀れなこの死体を遊び場に選んでいる楽しげな若者に対して、抗議の声も上げずにいます。甲高く、クラ・グ

ラ夫人の声が、子供らのキイキイ声や、ラクダの鼻息、牛の鳴き声、牛番のがらがら声、狙撃兵達の勝ち鬨の歌を通じて響きます。老人達や賢人達は最近のイナゴの群れの移動について話し、その中の何人かは、地中海北方の一族と同様に立派に政治を行っています。夜食を準備するための火が早速熾されて、　ー　レオンハルト・ハーゲブーハーは、自ら朝方、ラクダの糞を寄せ集めていまして、　ー　何匹かの吠猿や、若いゴリラ、二匹の巨大トカゲがすでに串に刺されています。一時間すると漆黒の夜です。アブ・テルファンの夜食の準備は目にしない方がよろしいでしょう。さすればもっと食欲も湧き、食べられます。ヨーロッパの人間にとっては、耳も砂の中に沈めてしまうのが、もっとよろしい。その一日を締め括るコンサートの楽器の声は、ほとんど聞いて楽しいものではありません。一匹の亀になること、亀のすべての精神的才能を備えて、それ以上にはもはやならずにいること、　ー　いや、この考えは、至高の王座の恩寵世界への展望を開示してくれます。頭を甲羅の下に引き入れることが出来、何も感じないし、見ないし、考えないというこの考え、　ー　この考えは余りに至福のもので、大地のすべての泉や流水を飲めないものにしてしまう、かの苦よもぎの星[ヨハネ黙示録、8,10f.]よりも苦いものとなります。満月は黒人を酩酊させるという事実は、確かにまだ完全に実証されていません。しかしすべての旅行者、商人、宣教師、探検者が、無邪気なエチオピア人の魂に対する満月の作用を語っていて、この点には何かがあると暗示しています。そして私ハーゲブーハーの経験も、この[満月の]事実に全く明瞭な確実性を感じ取っています。まだ炎の太陽の球は、谷間の西側の縁にあります。ようやく三十分後に夜となります。すると真実の、まことのアフリカ的安息日が始まるに違いありません。　ー　レオンハルト・ハーゲブーハーは慄然として、そのことを思い出して、自分の額をより深く砂の中に入れること三度目となります。

　切り拓かれた岩山の谷間の中に、百倍もの反響を伴う一発の銃声です。赤い山の斜面を転がり落ちる二発目の爆音。村と陣地は静まり返っていて、その後、甲高い、百もの声の雄叫びやわめき声が聞こえます。男達や兵士達は武器を取って、女達や子供達は小屋の最も薄暗い片隅や、洞窟の最も深い隠れ場に潜みます。ミセス・ラヴィニア・ドローボディーは、広くて、赤色のアラジン・ズボンと広くて黄色のフランネル・チュニックを着用し、雌ラクダに乗って、青色の針金メガネである。　ー　アウグストゥス・モンタギュー・ドローボディー氏は、あらゆるポニーの中で、最も珍しくて、もじゃもじゃ毛のポニーに乗って、全く、黄色のフランネル生地で、回転銃に、二連銃、猟刀を持っています。　ー　コルネリウス・ヴァン・デル・モーク氏も同様に歯の中まで武装していて、髭面で日焼けしており、空想的気まぐれの点で、イギリス人レディーの衣装に何ら引けを取らない衣装です。堂々たる駃騠[雌ろばと雄馬の交配]に乗って、　ー　果てしない、引っかき回す、埃を巻き上げる、吠える、ギャアギャア泣く、前と後に蹴り出す、宙返りする従者ども、つまりアラブ[馬]や猿、ヌビア人、アビシニア人、シルック人、バガラ人、ドシュル黒人、更に、水牛、ロバ、あらゆる種類の荷運びの獣、若い獅子や虎の檻、鰐や蛇や様々な小鳥の箱が見えます。アブ・テルファンの柵での行列の停止。議員や通訳のヒステリックな交渉、　ー　一般的相互理解と気違い染みた歓声。偉大な双方の紹介、つまり旧英国とトゥムルキー州、ミセス・ラヴィニア・ドローボディーとクラ・グラ夫人、　ー　焼き串のゴリラとこのゴリラを瞑想的に眺めているアウグストゥス・モンタギュー・ドローボディー氏、　ー　コルネリウス・ヴァン・デル・モーク氏とドイツ同盟の某大公領のニッペンブ

ルク出身のレオンハルト・ハーゲブーハーです。

「クラウディーネ夫人、彼の出現する偉大な潮時であったのです」とカッツェンミューレ[猫水車小屋]での語り手は嘆息した、「もう少し後であれば、彼とは私、縁がなかったかもしれません。一日遅れていたら、捕獲されていない動物のみが残っていたことでしょう。これ以上ない詰まらない話しに過ぎなかったことでしょう。十年間辛抱出来ても、十一年目の最初の数時間のうちに耐えられなくなったりしますから。『まあ、何て恐ろしいこと』とミセス・ラヴィニア・ドローボディーでさえも、この珍しい話しを旅日記に記入しながら、そう語りました。そして彼女の夫は私の周りを三回回って、言いました。『ワンダフル、ワンダフル』」。

「まあ、このイギリス人どもは放っておきなさい」とクラウディーネ夫人は叫んだ。「ヴァン・デル・モーク殿は何と言ったのです。この方について話してください。この人こそ貴方を解放して、貴方の鎖を外してくださったのですから。この人についてすべて語ってください。　ー　この人の姿を目にすることが出来、この人の声の響きを耳にすることが出来れば、何も惜しくありません」。

「彼は私の地面に伸びていた体に転けたのです。彼がクラ・グラ夫人をアブ・テルファンの市役所へ案内して行くときのことです。彼も同じように地面に這ってしまいそうになったので、思わず無礼な言い回しになって、それがドイツ語だったのです。私は飛び上がって、同じようにドイツ語で叫びました。それから興奮の余りしばらく私の五感は目覚めていず、私が再び意識を取り戻したとき、私の身柄の交渉はすでにこの上なく順調に進んでいました。しかし私はこの交渉の経過を辛抱して待つ他、更に何も出来なかったのです。アウグストゥス・モンタギュー・ドローボディ氏は、私以上の大物をその生涯で査定したことがあって、私の価値を六本のボヘミアの人工真珠飾り、二本の英国王室廃棄の撃発銃、三本のゾーリンゲン製山刀、十二ポンドの煙草、六本のラム酒に値するとしました。ドローボディー夫人は、その上更に、バニヤンの『天路歴程』[1678]を添えてもいいと申し出ました。この最後の気前の良い提案は、しかしながら、トゥムルキー州ではとても冷淡に受けとめられ、それどころか、ほとんどこれ以上の交渉がすべて打ち切られそうになりました。早速、旧英国は両肩を竦めて、背を向けて、自らの仕事へ赴こうとしたところ、ヴァン・デル・モーク氏がアラビア語とリンガ・フランカ[地中海共通語]とで、自分は二本の提示された銃の他に、更に何ダースかの立派な猟銃を蔵しており、立派な和解が出来ない場合、武力による交渉に導く用意もあると述べた。ちなみに彼は相手の支配者達に、自分がアブ・テルファンに来たのは、全く別の、まことに儲かる取引のためであって、それにまた人々が自分に友好的に公正に対応してくれるよう希望していると慎重に述べました。自分は山刀と人工真珠飾りとを取り下げて、代わりに三本のラム酒と、更に半ロールの煙草を差し出す用意があり、また自分はこの提案が受け入れられ、同郷人が自分のものになることを期待しています、と。

この素敵な演説の間、月が昇りました。その刺激的影響下、交渉が締結されました。クラ・グラ夫人は、私に最後の一蹴りを入れて、私の任務を解きました。そしてヴァン・デル・モーク氏が私に言いました。『我が最良の者よ、阿呆なことをするな』。というのは私は今や子供のように泣いていたからです。彼が、このヴァン・デル・モーク氏が、私を両腕で抱いて、崩れ落ちないようにしている間、アフリカ人の悪霊踊りが、彼と私、ドロ

ーボディー氏、それにその夫人の周りで始まりました。彼はこのレディーの小瓶から、ケルンの化粧水[オーデコロン]を私のこめかみに擦り込みました。いや、クラウディーネ夫人、教育と倫理の数千年、文明の数千年がこの香りの中に感じられました。この香りとなって、ヨーロッパ世界が再度、私の周りに立ち上がって来たのです。私が感じたこと、感受したこと、そして吸収したことを把握するためには、クラウディーネ夫人、野蛮世界を嗅いだことがあり、この世界を十年以上嗅いでいたことがなければならないでしょう。このオーデコロンの一滴は、言葉の完全な意味で、私の人生を救いました。と申しますのは、その香りの中に、ヨーロッパのすべての文化が込められていて、この香りは血流の致命的停滞を解き放ち、私にとって危ない動悸を逸らしてくれたのです。いずれにせよ、ミセス・ラヴィニア・ドローボディーがバッグに所有していた本物のケルンの化粧水だったのです」。

「貴方の解放者について、もっと別な点を話してください」と水車小屋の住人女性は呟いた。ハーゲブーハーは、しかし、叫んだ。彼は、ほとんど、痙攣の時のように、両手を擦り合わせていた。

「済みません、いや、済みません、クラウディーネ夫人。でもこのように語るしか、私はかの日々を説明出来ませんし、かの人物達から離れられないのです。臆病なことです。しかし私はこの救いようのない過去の顔を直視出来ません。戦慄が余りに深く神経の中に巣くっています。　ー　いや、私の全生涯がこのような藪睨みになっていました。勿論、私はこのコルネリウス・ヴァン・デル・モーク氏を心の最も静かな片隅に温存しています。もっともこの方は、英雄主義と犠牲心で合成された、空想的で、好意的な人々の意見によれば、しばしばこの世に出現するが、しかし丁度良い瞬間には極めて稀にしか登場しないというかの博愛家連中の一人ではありません。ヴァン・デル・モーク氏は不機嫌で寡黙な男性の一人で、すべてのアフリカでの商売人の如く、水牛革製の鞭をベルトに有して、この鞭を、必要な場合、とても無茶に人間や家畜に行使するというような方でした。彼は的確に、すべての、ロンドンから月山脈までの地域流通の貨幣で勘定をして、彼がアブ・テルファンに滞在している間、彼にとってより一層大事であったのは、私の感情や気分よりも、クラ・グラ夫人の感情や気分だったのです。彼は私のより以前の支配者達との仕事をしなければならず、この仕事で妨害を受けないようにしていました。我らの二分の一か四分の一の同郷意識に関しては、彼は真のオランダ人の如く、これをほとんど尊重しておらず、彼に対してはなはだ恩義を感じているこの男［私]に対して、もっと詳しいことを知ろうという熱意を少しも見せないのでした。彼は言動のすべての面において、自分をとても実用的で、冷静、かつ鋭利な計算家として自称しており、我々がアブ・テルファンを出発してから、ようやく彼は私に対し若干より身近に歩み寄って来ましたが、しかし彼が本当に、真のオランダ人であるかどうか、私は見極めることが出来なかったものです。我らのキャラバンでの話し合いは、あらゆる考えられる限りの言語でなされましたが、ただドイツ語は使用されず、いずれにせよ、ドイツ語を解し、話すこのヴァン・デル・モーク氏は、この言語[ドイツ語]を私との付き合いで利用することをはなはだ用心しているように見えました。彼がドイツ人について、そしてドイツの諸関係について、話すことを望んでいないことが、私には次第に明瞭になって来ました。私が努力して、彼をこの方向での表明や告知へ導こうとしますと、いつもかの古代からのヴァタウィ人的言い回しになって、

この言葉でもって、すでにキヴィリスもヴェレダ[両者とも、ローマ人に対するヴァタウィ人蜂起の指導者､69年から70年:ラーベはヴァタウィ人をオランダ人の先祖と見なしている]もすべての不愉快な議論を幕とさせたものです。つまり、わしゃ分からん、です。　ー　彼の助言、彼の腕、彼の財布、それに彼の信用を、私に対して、いつでも彼は、アブ・テルファン同様に、ナイルでも、アレクサンドリアでも、率先して用立ててくれました。しかし情緒では、私には彼の支援は何もなかった。かくて私どもは、菓子店かクラブハウスの玄関で別れるように、お互いに別れました。他の不愉快事に加えて、私はここでもまた、自分にとって大事で、愛しいものとして死ぬまで銘記されるに違いない歩みが、砂漠へ消えて行くという思いを引きずることになりました。これは、私の背後のすべての路上で出現して、私の希望や、心配事、仕事、喜びや苦しみと共に結び付けている糸を鋭いナイフで切断するという、手ひどく、憤然とした亡霊です。私は異郷から何も、全く何も故郷に持参していません。故郷が少しもそのことを信じないし、このような事実を皆目理解できないということも、不思議ではないと思っています」。

語り手はこう話して、今回その報告を十分に声を落として、終えた。クラウディーネ夫人も、しばらく全く静かであった。ようやく彼女は深く嘆息して語った。

「誰でも、その遍歴では、自分が発見したものより、失ったものが多いことでしょう。実直な人間で、故郷に持参したものを得意に思い、それを喜び人がいましょうか。単に卑小な、取るに足りない人物のみが、自分の乞食袋をぶちまけて、その凱旋を得意に思っていいのでしょう。偉大なる人、高貴なる人は、いつもそっぽを向いて、こう言いましょう。我々は最良のものを手にしていない。誰からその最良のものを入手したらいいか、我々には分からない、と。私どもは皆、封印された贈り物を未知の人々に届ける使者以外の何者でもありません。最大の会戦と最高の詩、これらは誰の許に由来し、誰の許へ向かうのでしょうか。戦場でのまことの勝者が、いつかこう叫ぶことは有り得ません。これは私の作品であり、この作品は影響を及ぼすであろう、と。[シラー『見霊者』第二の書、第四の手紙に関連し、ラーベは、詩人の十五分の夢想は、時に会戦よりも重要と述べている。1864]。　ー　我が友の方、私は貴方に、今回話して頂いたこの時間に対し、感謝申し上げます。私どもはいつもより良き友であり続けたいと願っています。貴方に、私、それにニコラ・アインシュタイン、更に何人かの方々です。私どもは互いに助け合い、苛立つことのないようにしましょう。貴方が恐ろしい捕囚状態にあった長い期間、私はここで、孤独に、苦悩と単調な苦痛の中、座っていて、今日も自分の探しているものを見いだせなかったのです。出来る限り、私どもは、辛抱を学び、教え、互いに助け合いましょう。今や夜となりました。貴方は去らなければならず、私はまた一人っきりです。このことを貴方は帰路、お考えになることでしょう。これは貴方にとって結構な点です。貴方はしばしばこの水車小屋に戻って来られましょう。これは私にとって結構な点です。レオンハルト・ハーゲブーハーさん、貴方の額に接吻をします。そして貴方にお休みなさいと申し上げます。今日、邪悪な幽霊が貴方の後を付けることのないよう、そして貴方をカッツェンミューレ[猫水車小屋]と結び付ける糸が断ち切られないよう祈念致します。私はこのことを良く見守るよう留意致します。明日にも貴方は、水車小屋のこの老婆を称えられることでしょう」。

第十章

「お休みなさい、クラウディーネ夫人」とレオンハルト・ハーゲブーハーは言って、その帰路に、あるいは人々の名付けたい路に、就いた。というのは、彼は自分の路についてほとんど知らず、いずれにせよ、その路を自分の足許でほとんど感じていなかった。森の最後の木々のところから、彼は今一度、岩壁の下の小さな小屋の方を振り返って見た。岩は薄暗く、小庭園は深い黄昏の中にあった。今クリスティーネがクラウディーネ夫人のランプに点火して、その明かりが水車小屋の窓から森の中の躊躇っている傾聴者の方に漏れ出て来たとき、純然たる魔法の観がした。レオンハルトは今一度、木々の間でより低くこの明かりにお辞儀して、それからようやくスピードを上げて進み、一本の古い樫の幹のため、彼の視線は遮られた。老夫人の最後の言葉が今ようやくその全き重さを得た。どんな策謀的悪霊も、彼の今日の足取りを消したり、あるいは乱すことは許されず、彼が長いこと忘れていた一つの安らぎと安心の思いに、彼の心は満たされ、彼の魂は自分の周りの美しい夜のように静寂と化した。彼が今日、見聞し、体験したことのすべてが必ずしも、彼の心に実生存の願わしい明澄さを付与するに適したものではなかった。しかし新しい一日の息吹が彼に吹き付け、彼の熱い額を涼しいものにしてくれた。かくて彼は身震いをし、更に元気に歩んで行った。まずは陰気な谷底、森の底を通るほとんど判然としない小路を、その後はフリーゲンハウゼンを通る国道を、最後に国道側の別の狭い小路を、高い穀物の間、抜けて行った。彼は穀物の茎の上、絶えず両手を滑らせていた。

彼はクラウディーネ夫人に、アブ・テルファンでの滞在の最後の瞬間に関して、描写しながら、大変興奮していて、半ば熱に浮かされて話しかけていた。しかし壊れた水車の微かな滴や水車小屋の住人女性自らが、興奮や高熱よりも勝利を収めていた。絶えずその水滴と、老夫人の穏やかな声が彼の耳の中で響いていた。彼はニコラ・フォン・アインシュタインが腰壁に座って、窓の中を覗き込んでいる花々や、緑の小枝と戯れている様を目に浮かべた。彼は『トリスタンとイゾルデ』の狩りの女性の如く、彼女が白馬に乗って、森へ消える前に、生垣越しに挨拶する様を思い描いた。彼女の声と彼女の高笑いもこの夜と彼の心とを満たした。　ー　彼の路は、穏やかに谷底から高台へと上昇していて、今や彼は相変わらず穀物畑の間であったが、一本の古く、朽ちた、とても余計な道標の側に立っていて、振り返って見て、叫んだ。これは彼がすでに一度ブムスドルフの荘園庭園の生垣の許で発した言葉であった。

「神かけて、祖国はやはり素晴らしい。クル、クル、クル、マッシュ、ビクヴァ・シラ・クヴァ・バガラ」。

最後のガラガラは月山脈の国歌であって、その冒頭を忠実に翻訳するとこうなる。

黒人の祖国はどこか。
それはシルク国か、バガラ国か。
ニジェル川が轟然と流れて行くところか。
砂漠の砂塵が舞い上がるところか。
いや、違う、違う、違う等々。　　[ドイツの祖国とはどこか。
プロイセンの国か、シュヴァーベンの国か。
ライン河畔でブドウの花が咲くところか。

ベルト海峡でカモメが飛ぶところか。
いや、違う、違う、違う。
その祖国はもっと大きくなければならない。
アルントの詩、1813年、のもじり]

この国歌は、彼自身がごく若い時期から好んで、しばしば歌っていた歌と見紛いようもない類似性を有するもので、それ故、ドイツ人にとって興味深く、文学的意義と政治的歴史的意義とを有するに違いないものである。

いや、祖国は大変偉大で、大変美しい。そしてとても可愛くて、快適で、分別ある国民、しかしまたとても奇妙な国民が、祖国では歩き回っている。手に一本のむしり取った歩先を持って、このアフリカ人は更に歩いた。スエズの地峡の掘削の手伝いをするという考えが、彼を今日ライプツィヒ大学から逐電するよう彼を唆すことはなかったであろう。これに対し、ドイツ国民に対して、トゥムルキー州に関して、公の、立派な報酬のある講演を行うという考えは、実際まことに的確で、容易に実行に移せるように思われた。

「出来ないことがあろうか」と彼は薄暗い地平線に、温かい夜風に、そして瞬く星々に尋ねて、そして言い添えた。

「ただ、勇気を出すことだ、　ー　ハーゲブーハーよ、破廉恥なまでに自信を抱くことだ。そなたが旧石器時代人の学校にかくも長く通ったのも全く無駄ではなかったし、月山脈でこのロバの頭を有していて、豌豆を敬って、鞭を受けていたとしても、若干有益なことであったと人々に示すことだ。老公よ、この馬鹿げた文明との戦いを再度始めることに躊躇うべきではない。　ー　いかほど蜜蜂は、蜂蜜を自らの裡に有するか、誰が知ろう。いずれにせよ、我が子よ、そなたは評判も名声も失うことにはならない。それらを得るには、　ー」。

彼は中断して、深く溜め息を吐いた。しかしこの夜には一つの魔法があって、彼は勝利の考えをも勇敢に自ら払い落とすことが実際出来た。彼の歩みは次第によりゆっくりしたものとなって、彼は肉体的にも精神的にも切り抜けて、彼が癒えた肢体で、再びブムスドルフの国道に達したのは、一つの偉大な奇蹟であった。

今一度彼は、立ち止まって、従兄弟ヴァッサートレーターの立派に管理された小路から側面のざわめきに耳を傾けた。側の木立の中に流れ出る泉と一つの岩のベンチがあって、これは彼の幼少の頃から馴染みのものであった。彼はその場所にすでに日中、何度か訪れたのであったが、今回のこの夜もまた、噴水が相変わらず新鮮に力強く水盤に噴き出していて、この噴射とざわめきとか彼の不在の間も涸れていなかった点、快適なことに思われた。彼は腰を折り曲げて、古代の冷笑家風に、空ろの手で水を掬おうとし、しかし、より良いことを思い出して、昔と同様に水路に手を入れて、一気に水を飲んだ。アブ・テルファンの暑い、灼熱の岩場の谷にいたとき、しばしば彼はこの泉を思い出さざるを得なかった。彼はそのときしばしば、自分の人生の一年を、この場所での一分間と取り替えたいと喜んで思ったことであろう。さて、彼はそのことを思い出して、再び感謝して、より賢げに高みを見上げた。彼は更にもう一息休んで、ベンチに座り、この善良で澄んだ気分を利用して、自らとカッツェンミューレ[猫水車小屋]の老レディーに対し、こう約束した。つまりこれからも余り満足することなく、やむを得なければ、ヨーロッパでの人生も、トゥムルキー州の粘土小屋同様に継続して行き、自分の愛しい隣人達の言葉や仕事にさほど立

腹せず、辛抱して日々や事物の自分への要請を引き受け、更には神々の助けを借りて、自らの意見を明瞭に述べて、またこの意見を、これも同様に神々の助けを借りて、静かに自らのために堅持して、それから自分の健康に留意し、最後に熱心な学問のために立派な会話辞典を作成することにした。ただ分別正しくて、名誉ある、有益な諸計画、約束、企画ではあるが、しかしすべてはほとんど十分に独創的とは言えず、それでより詳細に、何故我らはそれらの計画を彼が自ら熟考すべく、彼に任せてしまうのか、そして何故我々は、その上彼の方はまこと快適にこのざわめく泉の側に座っているので、別の歩行者の方へ目を転ずるのか、言及するまでもないことであろう。この歩行者は同様にこの頃ブムスドルフへの途上にあったのである。

ニッペンブルクの町の市場広場では、輝かしく鏡のような窓ガラスと灰緑色の窓鎧戸のある堂々たる家があった。この家には広大な門道と背丈の低い毛むくじゃらの下僕がいた。黄金の孔雀亭で、この町の第一級の料亭であった。はるか昔から、その名声は確立していて、このニッペンブルクでばかりでなく、遠く国中に知られていた。名士達は何世代もその舞踏会をこの広間で行っており、太った公務員と太った牧師や痩せた牧師がその
客人用小門の前で、馬車から降りた。商用旅行者の何百もの世代の者達が、その価値を歌い上げていて、以前はハンザ同盟の境界をはるかに越えていたが、現今では関税同盟の境界を越えている。黄金の孔雀亭は、このすべてに値した。この料亭はまた今日でも、快適に過ごせる場所であり、どのような状況下でも当てになる場所であった。

黄金の孔雀亭には勿論、ニッペンブルクの「名士クラブ」もあって、税検査官のハーゲブーハーは勿論同様に、この立派な社交界の傑出した、声望ある一員であった。火皿に蠅[フリーゲ]の絵のある彼のパイプは給仕によって、郡裁判所長官や管区総監督[新教]のパイプにほとんど劣らぬ尊敬を受けて保管されていた。彼、　ー　税検査官殿は、　ー　自分のパイプに関してはなはだこだわりがあった。彼の席が、生意気な、あるいは破廉恥な強奪者によって占領されることはなかった。彼、　ー　検査官は、　ー　新聞を最初に手にすることを要求したことはなかった。しかし彼は新聞を自分の時間に手にしていて、一人の偶に現れる上司や、その他のより高い地位の男性以外の別人が、生意気な政治的好奇心から旧来の順番を乱したという記憶はなかった。

何年もの、何年もの間、税検査官ハーゲブーハーは、このアリストイ、つまりニッペンブルクの最良の者達のこのサークル内で、はなはだ居心地良く感じていた。年金生活以前であれ、以降であれ、何らかの事情で、自分のパイプ、椅子、新聞をとにかく断念せざるを得ないその一日は、カレンダーで黒く塗られていた。そうなると彼の実生存に一つの隙間が生じて、これに対しその度に家の者達がかなり難しい償いをし、自ら快適にもてなし保証しなければならなかった。

しかし人間とは何であり、人間の満足とは何か。両者ともその時期があり、残念ながらとても短い。暖炉の背後であれ、窓辺であれ、我々は我らの趣味に応じて、確実に地位を確保したいと思う。すぐにまた、どんな柔らかな絨毯の下からも、どんな美しい平土間の下からも、イラクサが出現し、我らの足の周りで生え、我らの背丈を越えて、生長し、伸長する。常連であること、この緑の大地、並びに黄金の孔雀亭で、常連であることは、それ自体高貴な感情である。しかしこの享受は少しも持続するものではない。税検査官ハーゲブーハーは、しばらく前から、夙に黄金の孔雀亭で以前ほど快適ではないと感じていた。

その咎は、他ならぬトゥムルキー州から思いがけず帰郷した息子のアフリカ人にあった。

奇妙なことである。我らの実直な友、レオンハルトが神秘的異郷で、不明瞭に、影絵のようにニッペンブルクの人々の眼前に映じて踊っているとき、いやそれどころか、一人の行方不明者として敬意を受けざるを得ないとき、その父親は孔雀亭で、この息子から一種憂愁の敬意という享受を味わっていた。人々は実際スエズの地峡での彼の活動について、ナイル上方への彼の旅について承知していた。この若い男は、言わば町にとって一つの誇りであった。たとえ実際彼は破滅していても、ニッペンブルクの町は、彼のことを、「学問のための一人の殉教者」として敬慕して、彼のことを誇り高く、すべての他の英雄的探検者の中で、「当市の者」と名付けるという争う余地のない権利を有していた。それどころかすでに、この英雄気質の青年に対し、どこかの人目に着く場所か、あるいは生家に、大理石の盤を設置する必要があるのではないかという議論もあったのである。父親のハーゲブーハーは、このような交渉があるたびに、いつも黙って、感動して、しかし意気揚々と酒場を去って、自分の背後での敬意に満ちた囁き声を心の内奥にまで感じたのであった。

さて、こうした一切が突然変化し、それどころか逆のものに転換した。深く遺憾に思われていたアフリカ人が帰郷した。しかし栄光の探検者としてではなかった。次第にとても騙され、侮辱されて来たと感ずる者、これがニッペンブルクの善良な町の人々であった。彼らがいかに一般的に彼をその黄金の帳簿から消したか、すでに第五章で語られている。しかしいかに黄金の孔雀亭で、格別に彼について、彼とその父親に対し対応がなされたか、これについては尚、言及されなければならない。

黄金の孔雀亭は、全く甘美に、穏やかに、静かに、その気分を表明し始めた。しかしこれらの鳥類は、自分達の意見表明が真剣なものとなるとき、どのような発声手段に訴えるか、よく知られている。崇高なものから滑稽なものへの歩みは、確かに遺憾なものから嘲笑への歩みよりも短いものではない。[崇高から滑稽まではわずか一歩である、ナポレオンの言葉、モスクワ退却の時]。そして父親のハーゲブーハーは、すぐにこうした世間知の権威として出現することが許されたが、しかしこのことから少しも快適なことは生じ得なかった。人々はやがて彼をまったく恐ろしいことに、「有名な」息子のことで冷やかし、この息子が自分にあてがわれた地位を断るほどに生意気であったと分かると、クラブの名士達の誰一人歯に衣着せず、トゥムルキー州からの男のことを、単に一人のルンペンと見なした。

さて、税検査官は黄金の孔雀亭で、胆汁や毒素を小分けにスプーンごとに、丸薬や散薬風に飲み込んでいたが、最悪なことに、彼自身全く、肩竦めの連中や、溜め息製造所、嘲笑家達の側であって、人々が彼に対し、息子の件で、一緒に煮立てたり、醸造することのすべてを自ら、自らの胸中で憤然と掻き回すのであった。毎晩彼は孔雀亭からより辛辣な気分となり、苛立って帰って来た。というのは名士達は精力的にこの豊かな娯楽話題に固執したからで、これは元来名士達が悪いのでもなかった。この話題は立派なワインに似て、日毎に内容が充実して来たからである。悲しいことだが、真実のことであって、我らの友レオンハルトが、黄金の孔雀亭で敬意が沈下するにつれ、それだけ一層レオンハルトは好まれたからである。税検査官には勿論息子のことがより好ましい風にはならなかった。一つの危機は必定で、その危機がやって来た。というのはどんなに辛抱強い男でも、居酒屋では自分の快適さを欲するからである。[『ヘンリー四世』フォルスタフⅠ,3,3]そして父親のハーゲブーハーは、必ずしも最も辛抱強い者達の一人ではなかったということも、我々はす

でに承知している。

この夕べ、多くの善良な精霊がより自由に息をするレオンハルトのブムスドルフへの帰路、彼の後を追いかけていたこの夕べ、カッツェンミューレの老婆は穏やかな、しかし勇敢な手で、すべての邪悪で意地悪なコーボルト[悪戯の妖精]が彼の小路に現れないよう祈念していたのであるが、この夕べ、孔雀亭の一同はいつもより当てこすりが強すぎた。高次低次の聖職者が高次低次の法学者に勝り、税専門家が森林専門家に勝り、商人階級が学者階級に勝り、つまり町の非学者的学派同様に、的確ではあるが、しかし不愉快な見解を述べる点で勝っていた。たとえ父親のハーゲブーハーは、普段従兄弟のヴァッサートレーターに対し、自ら進んで慰謝や庇護を求めたことは決してなかったにせよ、今日はこの善良なる者も欠けていて、この老公は一人っきりであった。

黄金の孔雀亭はこの従兄弟ヴァッサートレーターの不在を不吉極まるほどに利用した。遠慮なく、立腹させる意図を隠さずに、人々はこの哀れなレオンハルトを世俗の意見で浮揚させるようなこと一切に対し、疑念を表明した。人々は躊躇わずに、スエズ運河のことを一つのナンセンスと宣言し、もはやトゥムルキー州のことも、アブ・テルファンでの捕囚のことも信じなかった。いや、すんでのところで、このアフリカと呼ばれる大陸の存在さえもが疑われてしまうところであったろう。すべては単に、称えられる無邪気な意図、つまり楽しい夕べ、そしてアフリカ人の父親にとってはいつものようにとても不愉快な夕べを演出するためであった。

かくて人々は老公を十時まで焼いたが、おじのシュネードラーがフライパンをひっくり返してしまった。税検査官はおじのシュネードラーを心の奥底で、少なからず軽蔑していた。市民としても、私人、シュネードラーおばの夫としても、軽蔑していた。さて、この無価値の、女房の尻に敷かれた男が、更に尚、自分の、　ー　いや、偉大なる神よ、何と自分の、　ー　見解を、放蕩息子について、この息子の父親についてキンキン声で語り始めたのである。

老公は、裁判所長官、管区総監督、森林参事官、簡易裁判所判事、副校長、従兄弟ザッカーマンの言を甘受して、彼らの邪推に対しては、ほとんど内密のぶつぶつ声や呻き声を対置するだけであったことであろう。しかしシュネードラーおじに対しては、　ー　天国と地獄にかけて、宇宙のすべての元帳の総額にかけて、肉も血もこれには耐えられない、これは余りに卑劣であり、余りに侮辱的であり、余りに屈辱的である。

一同に対し、一般的に向けられた弁明、つまり、彼、　ー　税検査官ハーゲブーハーは、　ー　二度と黄金の孔雀亭に足を踏み入れないと、老公は言い添えた。特に恐怖で青ざめ、口と目とを開け放って、凝視しているシュネードラーおじに面と向かって言った。彼、　ー　シュネードラーおじこそは、　ー　まことロバの如き間抜けであって、まことに情けない意気地なしであって、たとえ然るべき平手打ちを力強くお見舞いしても、何の甲斐もないし、何の楽しみにも仕返しにも値しないほどだ、と。

軽蔑を顕わに、アフリカの山師の父親は、シュネードラーおばの夫に背中を向けて、今回はもはや震えながら待っているルイにパイプを渡さず、憤然と自分の帽子と杖とを要求した後、深く侮辱を感じて、しかしとても威厳のある男として、パイプと共に孔雀亭を後にした。名士達のクラブ一同は、冗談を少しばかり手加減せずに行ってしまったと反省したが、しかしこの思いがけない破局の責任は、惨めなおじのシュネードラーのしょんぼり

肩に押し付ければいいので、そのことを喜んでいた。思いがけない出来事という印象下、一同は通常よりも早く解散する、　ー　ということには一同は思い至らず、逆に一同は普段よりも長く一緒にいて、この件を十分に長く論じ尽くした。ただシュネードラーおじだけは、皆の軽視を浴びながら、去って行き、自分の後悔の念を家の竈で近寄りがたい不機嫌な様で威張っている妻殿に打ち明けた。この打ち明ける様も同様に、ニッペンブルクの社会的諸関係に陽気さと無邪気さをもたらす結果となっていた。

さて我々は、再び恐るべき憤懣の中、夜の中に歩み出た税検査官に目を向けることにしよう。彼は自分の生涯で初めて、勘定の支払いをせずに、黄金の孔雀亭を後にしていた。このことも彼が市門の下に来たとき、思い浮かんだに違いなく、彼のような性格の者にあっては、哲学的魂の平衡をきっとまた損なったことであろう。彼は道すがらずっと自らと語っていて、ブムスドルフ街道の両側のポプラの木々は同じ一つの意見を彼について小声で述べ続けているように思われた。ニッペンブルクからブムスドルフまでポプラは軽く慄然と身震いしていて、従兄弟ヴァッサートレーターの国道に沿って、小声の囁き声、ざわめきがあった。

「ハーゲブーハーの家よ、哀れ。老公がやって来るぞ。何という落胆ぶりか。年増よ、哀れ、娘よ、哀れ。とりわけ、息子よ、哀れ。神々と人間の父親が我らの高く飛翔する兄弟パエトンをその致命的光線で射落として以来、パエトンをエーリダノス川に墜落させて以来、類似の怒りを目にしたことがない。哀れなレオンハルトよ、汝よ、哀れ。汝の若々しい願いはどのような処遇を受けたことか。ご覧あれ、汝らパエトンの姉妹よ、かの老公ゼウスを。すでにゼウスは処罰の棒を持ち上げている。我らの兄弟に当たった一撃の前のように、一瞬の醜い休止だ。実際一撃が走る。ゼウスが同意して、オリンポスの高みから頷くぞ」。[パエトンは日輪の馬車の操作を誤って大地に炎上墜落させ、父ゼウスの怒りの稲妻で殺される。パエトンの妹達、ヘリアデス達は彼を悼み、ポプラに変わった]。

このようにブムスドルフの国道沿いで、ヘリアデス達[ポプラ]は囁いていた。ますます憤怒を募らせて、冷たくなったパイプを吸い続けている税検査官ハーゲブーハーは、通り過ぎながら、その陰気なラレスやペナテス[家の守護神]に向かって言う。

「終わりだ、お仕舞い。終止符が打たれた。　ー　今日にも、　ー　この時間にも。ハハハー、私にこのことを五ヵ月前に予告した者があろうか。昔一人の父親がこのような処罰を受けたことがあろうか。ハハハー、しかしこの時間にも終わりとなるのだ」。

運命はこのようなものである。お互いに和解するという最良の意図を持って、二人の敵対者が、長いことそれに適した快適な機会を窺っていたかもしれない。しかし誰かがまこと衷心から、時や状況に恵まれて、最初に出会ったとき、相手の髪に掴みかかることを祈念していたら、この出会いは、きっと間近の通りの角で生じ得るもので、そして時や状況は、他にこれ以上望むものはないほどに何も残っていないであろう。ハーゲブーハー父親が西側から、自分の小門に達した瞬間に、ハーゲブーハー息子は東側から急ぎ足でこの小門に達した。言い争いが即刻開始し得たことであろう。

「今晩は、親愛なる父上」とレオンハルトは穏やかに、心から言った。「素敵な一日です。幸い運よく出会いました」。

老父は、軽く席をして、震えながら家の鍵で、鍵穴を探しながら、答えなかった。

「何という収穫でしょう」とレオンハルトは彼の側で会話を続けようとしていた。「何

という穀物畑でしょう。何という小麦でしょう。これはアフリカの砂漠、トゥムルキー州の私の友人達にとっては、ちょっとしたものでしょう、　ー」。

老父はこの時、鍵穴を探し出していて、家の玄関を怒りにまかせて開け放って、今や敷居に立って、家の入口を自分の体で塞いでいた。

「私はアフリカの砂漠のことなど何ももはや聞きたくない。トゥムルキー州のことも聞きたくない。両方とも当てにしていない」と彼は叫んだ、「もうそのことは十分すぎるほどだ。そのことは終わりにしてくれ。孔雀亭から嫌がらせを受けて出て来たのだ。十頭の馬が来ても、私を連れ戻すことは出来ない。しかし我が家では静かに過ごすぞ。生涯私は堅気の敬意に値する男であったのだ。私はそのような評価を受けて来た。しかし今私はアフリカの猿を乗せた一頭のラクダのようなもので、私が現れると、路地では囃し声と指さし、口笛の連中が私の後を付いて来る。これは誰のせいだ。誰がハーゲブーハーの名誉ある名前をかくも下落させ、無頼の輩の口の端に掛かるようにしたのだ。他ならぬ内奥アフリカからの殿方、空想家、浮浪者だ。　ー」

「父上、父上」とレオンハルトは叫んだ。しかしより甲高い調子で、老父は叫んだ、「何が父上、父上だ。清潔な殿方の帰郷以来、私は自分の実存が怪しまれる。全世界が回旋病に罹ってしまった。　ー　もううんざりだ。黄金の孔雀亭から連中は年金生活の税検査官ハーゲブーハーを投げ出すことが出来よう。しかし私の四本の杭[家]の内部では、全世界が何と言おうと、私は主権を有するのだ。それで、自分の勘定を簡単に忘れはしない」。

レオンハルトの母親と妹、それに家の女中が、この瞬間仲裁に割り込んで来なかった方が、ひょっとしたらもっと良かったのかもしれない。しかし玄関での騒ぎにびっくりして、彼女達は青ざめ、震えながらやって来て、誰が夜の暗闇の中、言い争っているのか知ると、甲高い不安と悲嘆の叫び声を上げて、この二人の間に割り込んで来た。これは炎の中に、油ではないが、石油を注ぐことになって、炎の後、すさまじい爆発となった。

「私は自分の勘定を忘れないぞ」と老父は叫んだ。「計算違いを私は嫌う、計算違いは我慢ならない、投げ出してしまえ」。

こう言って、彼はびっくりした女どもを家の中へ戻らせ、彼女らの後に従い、息子の鼻先でドアを閉めて、一切のこれから先の交渉を今日のところは不可能にするために、閂をした。ブムスドルフの教会の塔から真夜中の時が告げられ、レオンハルト・ハーゲブーハーは立っていて、差し当たり何も言えなかった。しかしながら三十分後にはブムスドルフ街道のヘリオスの娘達[ポプラ]、それに妖精メローペ[パエトンの妹]も彼について自らの意見を述べることが出来た。そして朝方の一時頃、従兄弟ヴァッサートレーターは窓の下で小声で呼びかける声を耳にして、フェルトのスリッパを引きずりながら、階段を下りて、ドアを開け、それまでの出来事を聞いた後、こう話した。

「疾うにこうしたことを予期していたわけではなくても、このことに私は驚きはしない」。

第十一章

まさに描写された夜同様に素敵な夜、しかしこの夜の後さほど経過していない時に、ニコラ・フォン・アインシュタインはブムスドルフの荘園の出窓小部屋に座っていて、手紙を書いていた。

この小部屋はすでに何年も前から荘園で、「ニコラの巣」という呼び名で知られていて、そのような部屋として誰もが愛情と称賛を伴って微笑で尊敬していた。そこはチーズで一杯の籠の中の薔薇の苔みのようであった。封建領主はただ爪先立って入り、常に用心して振る舞い、しかし部屋の中心で賛嘆の同意を示していた。封建領主夫人はいつも、ドアの前で靴を脱ぐ必要はないとかろうじて説得されていた。従姉妹達は「接吻したくなるほど魅力的」と称して、それからうっとりとなって、それだけ一層この魔法の領域の女主人に対して夢中になっていた。

しかしまたニコラにとっても、この広大な世界の中で、ひょっとしたらカッツェンミューレ[猫水車小屋]を除いて、ブムスドルフ荘園のこの自分の小部屋ほどにかくも快適で安心と感じられる場所は他になかったかもしれない。彼女は子供の時からこの部屋の中に自分の好みのものをすべて揃えて来た。新しい爽やかな夏のたびに、この巣はより優しく、より可愛いものとなり、その飾りの品が増えた。子供や幼い少女として、彼女はここで不安なく、心易く、陽気に、幸せに過ごし、より年を重ねた、分別盛りの少女、マリアンネ公妃の女官として、彼女はここで、　ー　いや、彼女の人生のかなりの部分が、領邦首都の女友達エマ宛に目下記述しているものに窺われ、これを読めば、彼女の実生活の書を抜粋するという、容易なことではない、いずれにせよ、重責の課題を我々は免除されることになるのであって、彼女自身が、語るべきことを語るのである。

「いとも高貴な少佐夫人、それに大好きな貴女、

森や田畑は眠っていて、村も眠り、善良な縁者達も、ほとんど自らのことを、旧来の具合に、父祖の慣習に従って、有益な活動に従事した一日の結果、自覚していません。私の周りはとても静かです。家の中も、窓の前も同様で、周辺の広大な薄暗い世界は良心に疚しさがない状態で、ただ私だけが落ち着かない気分、あたかも私の良心は必ずしも順調ではないかのようです。私は興奮していて、神経質であり、その他あなたは随意に名付ければいいのですが、私はただあなたとお喋りしたいのであり、眠れないのです。

あなたは以前、あなたの少佐とまだ結ばれていないとき、よく私の戯けた頭をあなたの胸に受けとめてくださり、夜間私の奇妙な話しを聞いてくださった。　ー　まあ、お待ちなさい、明日、日光の中、流血の魂のこの告白があなたのお手元に届いて、あなたは、困惑し、頭を振りながら、同情し、狼狽して、読み続けて行き、あなたの明澄な分別を、感嘆符ごとに、疑問符ごとに、宙づりにせざるを得ないとき、こちらはすでに報われていて、あなたのことを笑う算段なのです、　ー　以前の素敵な日々と同様に。

差し当たり私は笑えません。たとえ頓狂な舞踏会の音楽、鈴が鳴り、飛ぶような、愚かなワルツの音が生じて来ても。でも小夜啼鳥は、　ー　有り難や、夏至を越えた日であって、　ー　すでに庭では静かになっていて、これは幸いです。思うに、この鳥が今夜、突然全く自然史を無視して、私の窓の下で歌い始めたら、私の身の破滅でしょう。

私は本来、悪しき良心を抱いているはずだ、というのは本当でしょうか。私は何をしたのでしょう。何をしなかったのでしょう。私は単に病気なのかしら。すべての善良で健康な子供らにとってはとても穏やかだという枕が私にとっては厄介なのは、単に私の神経のせいかしら。どうして私はこんなに苦しんで、苦労して、この謎を解いて、ベッドに就こうとしているのか、分からない。

ねえ、あなた、私はうんざりしていて、自分のことが不満です。春になってから私があなた宛に書いていないからではありません。だって、このような音沙汰無しは、約束通り、私の無事の印と受け取るよう取り決めていると承知しているのですから。黄金の余暇の時が過ぎてしまったからでもないし、今や御領主達がまた糸を引いて、胸赤鶸を青空から呼び戻し、恵み深い手から芥子の種をついばむよう、そして金鍍金の鳥籠内で、木の葉の紅葉について考察するよう強いるからでもありません。いえ、違います。私は私の春や夏を今や水彩絵の具で紙面に描けるのであって、私はブムスドルフおじに、おじの新しい火酒蒸留場を修復された牛小屋と共に、そしてこの人、　ー　おじをその中央に置いて、油絵に仕上げると約束したのです。それでコレ以上ナイ苦痛[神曲、地獄編、第五歌]に対する自分の救助方法を私は有しています。　ー　でも、あなたは、立派な方、まだうら若い青春時に、イタリア語の文法をかじることをなさっていません。それでダンテ・アリギエーリに従えば、不幸な時に、幸福な時を思い出すことほど、大きな痛みはない[神曲、同上]、とご存じではないでしょう。このことが本当なら、イタリア語文法はかくして間接的に私の現在の気分の不調に責任を負うているのでしょうか。いや、あなた、あなたの少佐、あらゆる少佐達の中の少佐殿が、どんな狭小な裏門や側のドアからも我が乙女の告白という神聖な世界に足を踏み入れることはないという条件の下で、あなたとこの件につき、お喋りする所存です。少佐殿は一瞥も許されません。このことを約束なさって、少佐殿を子供部屋に閉じ込めてください。

それで私はすでにあなたが、立っていらして、羽箒を持ってあなたの人形台を綺麗にしながら、郵便配達夫から私の手紙を受け取る様を目に浮かべます。私はあなたが発する小さな喜びの声を耳にします。　ー　あら、羽箒を脇に置かずに、あなたの優しい手で私を少しばかり払ってください。私はそれがとても必要で、分かっていらっしゃるでしょう。いや、私もマイセン焼きの女羊飼いのような者であればいいのに。あるいは少なくともあなた同様に、理性的で、分別があり、善良であればいいのに。両方の方法で私は救われましょうし、両方の方法で、人生は享受されるものとなりましょう。ちなみにあなたは善良であることが、他の人々よりも容易です。運命はあなたを優しい両手で運んでいて、あなたを優しい両手の中に置いています。あなたの少佐によろしく。でもまだほんのしばらく少佐を錠と閂の背後、子供らの許に残していてください。それだけ一層後々愛敬を振りまく方になりましょう。いや、子供らがあなたの生涯、あなたに子守歌を歌ってくれましょう。でも私はカドリーユ[社交ダンス]の騒音の下、生まれています。クラリネットが私の楽器です。それでお願いを思い付きました。あなたが私より長く生きることになったら、私は墓場までのティンパニーやトランペット伴奏は我慢なりません。私は最初の白いアトラスの靴を履きつぶさないうちに、もう沢山という思いです。

あなたの善良な心ばえを神様が嘉されますように。エマ、あなたへのご褒美を静かに享受なさればいい。私はあなたの窓の鎧戸をノックすれば、あなたがいつでも私のためにドアを開けてくださると承知しています。ほら、私はここあなたの足許に座っています。ベッティーナ[Bettina Brentano,1785-1859]が顧問官夫人[ゲーテの母親、ラート夫人]の部屋の「床几」に座っている按配です。あなたは辛抱強く阿呆なこともそうでないこともこもごも聞き入れなければならないことでしょう。あなたは私の顧問官夫人ではないかしら、それも私の若い顧問官夫人。あなたが私の若い顧問官夫人だとしたら、あなたの少佐にとってこ

れは誇りになるばかりでなく、他の人々にとってもそうです。勿論私には更に老顧問官夫人がいます。その方の部屋でも私は同じように「小さな床几」を持っていて、七つの山々の奥、七人の小人の許で、カッツェンミューレ[猫水車小屋]と言うけれども、　ー　でもどうしたら私はクラウディーネ夫人に、自分の言わなければならないことを言えましょう。どんな小声の言葉も、あの人の静かな目の下では、甲高い叫び声のようなものになってしまいます。あの方に何を語ったらいいのでしょう。あの方は魔法のような目で万物の奥底を深く見ていらっしゃる。あの方が私は怖い。　ー　あの方が。一人の人間の愛情を、このような愛情を、怖れなければならないのは、最悪のことではないかしら。

私は昨日、穀物の束、収穫祭の花輪の下、何をしたのかしら。当てて見て。...腹這いになって、　ー　あらあら、宮中女官がこれ以上自然に、これ以上おぞましく表現できるでしょうか。それで私の公妃は、このことに何と仰有ることでしょう。私は刈り手や刈り手女性の輪の中で、寝そべっていて、『リチャード三世』を読んでいて、

悪漢となり、

これらの日々の徒な喜びが嫌になる、[思ひきり惡黨になつて見せるぞ、ありとあらゆるこの世の慰みごとを呪つてやる。福田恒存訳、第一幕第一場]

つもりでした。エマ、それで私は今日何をしたでしょうか。私は自分の心を埋葬して、世間を在るが儘受け入れました。私は自分の希望や夢想の書を閉じて、変えがたい定めに順応しました。

フリードリヒが手紙を寄越して、それに私の恵み深い母上も手紙を寄越しました。両人とも私の約束の言葉を思い出させました。私が振り出さなければならず、私の心臓の血でサインをした手形が満期なのです。私の体と魂は、満期となって、かくて真夜中の十二時の鐘の音と共に、私は迎えに来られます。これはとても時間厳守なのです。

フリードリヒは愛想良く、分別正しく書いて来ました。母上はとても気を悪くしています。でも両人とも同じ一つのことを書いています。ただ母上は、とても粗野な言い方ではあっても、いつも最も真実であることを言っています。母上は私のことを、端的に、オールド・ミス、熟し過ぎたスモモと呼んでいます。　ー　ヨーロッパのすべての式部官夫人は、この後者の比喩の的確さを寛恕して欲しいものです。　ー　そして母上はこう言っても残念ながら何ら新奇なことを述べているわけではないと、とても上品にかつとても意地悪に嘆いています。哀れな母上。かくも多くの嫌悪を私は母親に覚悟させなければならず、そのことで私は母親を洒落た言い回しの人にまでしてしまっています。でも母上は正しくて、そのことは神様もご承知で、誰も母親に異議を申せません。

私は次第にオールドに、オールド・ミスになってしまいました。私はいつも哀れな乙女であったので、それでお仕舞いに、世間の感覚、情緒にとって、戯けたニコラ・アインシュタインとして喜ばしいものは、残り少なくなっています。私は新鮮な朝を迎えるたびに、何が動機となって、フォン・グリメルン殿は、かくも頑固に、取るに足りない私のような人物手形の受け戻しを要求なさるのであろうと不思議に思います。

いえ、エマ、エマ、でもこうしたすべては別の可能性があります。これは本来何か別様のことに違いないのです。こうなると、女官でさえ、死ぬほど泣かなければならないでし

ょう。いえ、まさに女官は、　ー　女官こそは、ここですべての他の地上の女達よりも、湿った雲の中、哀れさを克服する資格があります。私は自分の生涯で、かくも大きな疑問符が付くほどの何をしたことがありましょうか。私は自分のことを、健気で、正直な娘と見なす時間をまだ相変わらず確保しています。これは私の最悪な時間です。だってこの時間に私はかの疑問符について最も深く熟考しなければならないからです。そしてこれは何の役にも立たないのです。このとき私はすべてに見放されています。自分ノ心からも、あなたからも、クラウディーネ夫人からも。

でも結局、今一度素敵な夏だったのです。この夏の香りと輝きとが深く未来の中へ救出されることを私は願っています。何度か私は考えました。ニコラ、冬が来たら、死神だ。利口になって、朝早く起きて、余りに早く就寝しないことだ。自分が掴めて、引っ張れるものを、まとめて運ぶことだ。最後の陽光を不機嫌に閉じこもって片隅で過ごすな。救い出せるものを救い出せ。それで私はシェークスピアを家に残して、哀れなヘルティー[抒情詩人 Hölty:1748-1776]を持って、森へ出掛けます。このヘルティーはブムスドルフおばさんの文庫からのもので、空色のビロードの装丁です。小口には以前金鍍金が施されています。私はこの本をいつも開くとは限りません。この本をポケットに有するという意識だけで、このブムスドルフおじの年二度刈りの野原では十分です。これらの日々、私は子供の時の全く神秘的な自然感情を再び会得しました。これらの日々、社交の堕落した奴隷の目と鼻は、再度、神の真実の国の自由な市民となったのです。これらの一切が、でも、健康であることの一つの印でありさえすればどんなに幸いだったことでしょう。いえ、クラウディーネ夫人は、これがどういう意味か多分分かっていらしたのでしょう。いいこと、エマ、水車小屋、荒野の古い水車小屋とこの小屋の老夫人、これらが私を見張っていて、私を休ませてくれないのです。水車は勿論疾うに壊れていて、私の頭の中でも回れません。でももはや存在しない時代の精神がその屋根を取り巻いていて、朽ちた小屋の敷居にうずくまっています。これらの精霊に対して私はどうしたらいいでしょう。私は引きずり込まれたり、後戻りさせられたりします。私は全力で抵抗します。私は藪や小枝に掴まろうとします。でも負けてしまって、私の手に葉や樹皮が残っています。更に私は行かなければなりません。私を打ち負かしているのは、野蛮な、頑固な、不機嫌な、怒った威力ではありません。私自身の意志が、私の外部のこの諸力の中に見られます。このカッツェンミューレ[猫水車小屋]の老夫人の許には、すべての私の好み、すべての私の憧れ、願いが住んでいます。それで私は再度このカッツェンミューレ[猫水車小屋]に来ていて、この母親の足許に座っています。いえ、母親です。そして私の頭にとって、この方の膝の中ほど休まるところはないのです。　ー　すべての大陸のすべての庭園の中で、私にとって貴重な不思議なものであるこの森や小庭園の木々が私どもの低い窓を覗き込んでいます。あるときは一頭の獐鹿も覗きにやって来ました。結構なことなのでしょう。万事人間達の間で、然るべく進行しているとき、元来どんな具合でなければならないか、全く小声で話されます。矢車菊の花輪が私どもの空想同様に、かくも青色であることはなく、そして突然黄昏となって、森が涼しげに呼吸し始めます。するとどのような微笑を浮かべて、クラウディーネ夫人は、私の額の髪の毛を払ってくださることでしょう。私は去らなければならず、すべての美しい色彩が色褪せています。私は白馬に乗って帰ります。道の左手では、全く単調にこう言う声がします。『彼は亡くなっている、彼は亡くなっている』。そして右手では

別の声が地面に密に這って、同じように単調に言います。『十年間も、十年間も』。それ以上何も言いません。でも私がしばしば息せき切って、とても息を切らした馬に乗って、ブムスドルフ荘園に到着し、その後おじが憂わしげに頭を振って、その寵愛するプロスペロ[ここでは白馬の名]の周りを回って、私に馬の扱い方について、特に自分の馬の扱い方について、長目の講義をなさることになるのは、不思議なことではありません。

山々の向こう側、あなた方の許に住んでいる人々は一体どんな方々ですか。私に一体どんな関係がありましょうか。私はこの方々とどのように付き合うべきでしょうか。一時間前、カッツェンミューレ[猫水車小屋]で、クラウディーネ夫人の足許の小さな床几にいるとき、この方々は勿論何の意味もなかったのです。でもこの方々はすでに、その方々の現実存在を信ずるよう私に強いています。この方々は、私を森の中、水車小屋まで導く精霊と同じような力強い両手を有しています。でも、同じように逆らうことを甘受しない、厳しく、怒って、嘲りながら私をこの秘密の隠れ場から引きずり出す、この威力の中には、私自身の意志の部分はほとんどありません。どのようにしてこれらは私に対する支配権を得たのでしょう。これらは言います。自分らは私を一緒に連れて行く権利を有するのだ、と。これらは自らの権利を自慢し、この権利の中でまだ自らに不足しているものを主張し、これは自分らに疾うに私の方から自発的に申し出られたものだと述べられていて、それで私にはもはや疑いの余地がなく、これらの話しは真実なのです。

フリードリヒはパリから手紙を寄越しました。とても可愛くて、機知豊かな手紙で、これは私にとって極めて丁重なこと、上手な世辞を述べていて、この手紙を十二年後に、私の両手にするようなことがあったとき、私がまことに喜ばしく思うならば幸いです。このような手紙はその額に、失ワレタ幻想という標語を必ずしも通例のように有していませんが、しかし次の事実だけはともかく確かなものでしょう。つまり私どもは対の分別臭い、冷静な、落ち着いた人間であって、両人とも休息に憧れているということです。フリードリヒははなはだ私どもの家政を楽しみにしていて、この件に関する彼の計画や提案に私は完全に同意しています。彼は言っています、私どもの社交的責務は容易にかなりの部分が縮小されるであろう、と。きっと自分らは、他人にその存在を快適にすべくその責務を果たして来ており、それで立派な良心を抱いて、薔薇の生垣を、ともかく一つの生垣を自らの快適さの周囲に育てることが許されましょう、と。了解です。それが本当に彼の意図であれば、このすべてをそのようにアレンジすればいいのです。私が更に望むのは、ただ出来るだけしばしば、一杯のお茶を、エマ、あなたと、かの生垣の背後で飲めることです。そして私はいずれにせよ、世間に対し、尋常でなく立腹することのないよう努めます。ねえ、あなた、あなたに都合が悪いのであれば、私は結婚式をなお数ヵ月延ばすようにしましょう。でも、あなたのことを考えて、結婚式は冬の始めに挙げます。あなた宛のこの手紙と一緒に、うぶなハンスが、二通の他の手紙を、この手紙よりももっと立派な文体で、より明瞭なものだけど、ニッペンブルクの郵便局まで届けます。幸せに結ばれることへの許可を、何の非難の余地もない文体で認めることは、一種満足感の得られることで、私は自分の人生で初めて、罫線のある紙片に書きました。まあ、エマ、愛しい、善良なエマ、この哀れなニコラがすべての幸運を手にいれる手伝いをしてください。そしてこのニコラのことを我慢してください。だってニコラの誘惑は大きなもので、ニコラの諸力は弱く、その頭は愚鈍だからで、どんな田畑の小兎でも、その狩りの期間、花嫁の日々のクリュメ

ネーほどに震え戦く生活を送ったことがないでしょうから。今夜よりも昨夜は私、良く眠れましたが、でもほとんどもっと恐ろしい夢を見ました。それもアレクサンダー・フォン・フンボルトの『自然の見解』[1808]からのものです。この素敵な本の中で、この本については、あなたの聡い少佐殿がきっと快適な冬の夜、あなたに朗読なさったことでしょうが、どこか中央アメリカか、南アメリカで、ある大きな奔流河畔の泥土の中、鰐が暑い夏のことで、日干しになって、ようやく雨季に再度目覚める様が描写されています。この件はとてもありありと描写されています。土塊が音高く弾けて、空中に飛びます。甲冑を付けた怪物が長い昼寝から目覚めるのです。怪獣は恐ろしく欠伸します。目を擦ります。とりわけとてつもない食欲で目覚めます。それで朝の二時と三時の間、私の甲高い不安の叫び声を誘って、私は枕から高く飛び上がります。でも、ねえ、あなた、あなたの夢の本を覗いてご覧なさい。そしてこれが意味するものを、私どもがまず出会ったら、教えてください。

私はそもそも、最近とても熱帯風な夢を見始めています。この理由は私自身が説明できます。疑いの余地なく、アフリカ出身の野蛮な男のせいなのです。

この野蛮な男の噂は、多分すでにあなた方の領邦首都にも届いていることでしょう。あなた方のことだから、きっとあなた方はまこと陽気にこの人をむしり取って、粉々にしてから、他のあなた方の玩具同様にぽいと投げ棄てたことでしょう。でもこの人は私のとても良き友達の一人であって、野蛮人の許での捕囚からの帰郷を通じて、そしてまたこの捕囚生活の報告を通じて、苛酷な運命の意志に対し、私の意志をより上等の諧謔で屈服させるという風に多大な貢献をなさってくださったので、この人のことをあなた方の結構なご意見とご好意に対し推薦せざるをえません。と申しますのは、この人はひょっとしたら間もなくこの結構な両者を本当に必要となさるかもしれないからです。

この私の友の方は、レオンハルト・ハーゲブーハーと言いまして、ほぼ四十年前、ニッペンブルクの生まれです。ほぼ十二年間、月山脈で、奴隷生活を送っています。そしてこの夏の始め、ここブムスドルフの父親の家に再び戻って来たのです。珍しいことに、こちらの私どものご立派な社交の境界線を踏み出たことのない私どものご立派な知り合いの何人かよりも、鈍感にもなっていないし、獣化もしていません。勿論私はすぐにこの方と心の隔てない関係を結びました。と申しますのも、一人の人間がかくも相手の気分や状況に対して、つまりこの砂漠の男の方が私の気分や状況に対して出現したほどに、かくも適した折に出現したことはなかったからです。

まあ、エマ、このハーゲブーハーさんは、十年か十二年間、黒人の鞭の下で耐えて来たのです。そしてまた彼は戻って来ました。あたかも何も起きなかったかのように。そして文明とニッペンブルクのすべての恵みを享受しています。十二年間、最も勇敢な英雄さながら、この人は猿や化け物に対して戦ったのです。向こうの人らは彼の勇敢な耐久力のある心を打ち負かせなかった。この人は、全く一人っきりで、　ー　十二年間もの長い、長い年月、全く一人っきりで彼らの間に潜んでいたのだけれども。彼は言っています。ムーア人男性はまだ耐えられた。でもムーア人女性はひどかった、と。まあ、エマ、エマ、クラ・グラ夫人とか言う人はほとんど我慢ならないほどだったそうです。この方はとても上手に話します。というのは自分が話す間にも肩を擦らなければならないからです。それですべてはとても具体的です。それに誰にとっても、自分がいつかどこかに座って、自分の

捕囚生活の話しや、解放の話しを、このレオンハルト・ハーゲブーハー殿の如く座興に供せられるという希望を失わずにおれるということは、実際慰めになることです。

そう、とても愛しいあなた、このアフリカ帰りの野蛮な男性がいなかったら、母上とフリードリヒは今しばらく辛抱の必要があったかも知れません。でもあの方は月山脈からあれこれ多様の土産を持参なさっていて、これを私どもはちょっと困った時や腹が立った時、的確に使用すればいいとなっております。そして今ニッペンブルクとブムスドルフがこの人のことを正当に、功績に応じて、然るべく取り扱っていまして、私の心も、同様に自分が屈服させられる際、強化されました。

この人、我が哀れなアフリカ人は、役立たずの浮浪者です。すでにごく若い頃から、この人は余り役に立たず、学校生活から早々と逃げ去っています。この人が陸路、海路で色々なことを試みて、スエズの地峡の掘削をお手伝いしたとしても、この人は一度も、どのように分別正しい人間は、自分の無事、安寧のために配慮するのか、これについて把握したことがなかったのです。そして最後、バガラ黒人によって、トゥムルキー州の人々に売却されたとき、この人は、まさにこの時初めて商品として世間の市場に出て来たわけではなかったのです。現在、ニッペンブルクは疾うにまたこの人のことには飽き飽きして、二週間前にはこの人の父親も同様にこの人を家から投げ出しました。人々がこの父親、老公を息子のせいで、黄金の孔雀亭から追い出したからなのです。皆の手が私のこの友に敵対しています。勿論誰もがそうして得意がっています。それでその靴の分、より高くなっています。でも私にとっては、この哀れな罪人は、私の良き戦友として得がたいものです。だって、この人は自分の同類よりもより穏やかに扱ってくれと何の注文も仰有らないのですから。

私はこのハーゲブーハー殿と多くの交誼を重ねました。最初は彼の父親の家で、その後は、森や田畑の幾多の散歩道でです。クラウディーネ夫人の許でも、この最近の両週の間、しばしばお会いしました。私どもは互いに率直に発言して、奇妙な考察や経験を話題にして楽しみました。そして両者共にそのことで得るものがありました。運命の手の中で、「死んだ振りをすること」、これはどんな状況下でも、最も理性的で、最も快適なことです。クラウディーネ夫人がこれを最も良く理解しています。でもレオンハルト・ハーゲブーハーとニコラ・アインシュタインも、この芸を学ぶ立派な途上にあります。

それで、エマ夫人、私は結婚します。人々がそれを臨んでいますから。そして自信を持って、フォン・グリメルン夫人として、自分の役目をごく優美に遂行する所存です。いえ、きっと現実のニコラ・フォン・アインシュタインに関して、何も気付かれないように致します。現実のニコラは死んでおり、その結婚式で踊る皆にとって、深く埋葬されています。全く静かに、暗く、安全な深みに横たわっていて、単に半ば閉じられた瞼越しに、重い石の下、眠たげに見上げて、こう考えます。人間はただずるくなければならず、出来るだけ死んでいなければならない、そうしてきっと人生は耐えられるものとなろう。少佐夫人はいかなるご意見ですか。これは快適な考えではないでしょうか。

明日、私は私の木箱、箱、それに小箱をまとめにかかります。そしてまたお別れの訪問挨拶を始めます。これはブムスドルフやその周辺で多くの数をこなさなければなりません。水車小川に沿って、幾多の古い頑固な柳に私は挨拶を申し上げます。幾多の大気のような高い山、幾多の愛らしい片隅、幾多の静かな小道、幾多の古い岩の塊にさよならを言わな

ければなりません。人間や動物どもは本来いうまでもありません。最も理性的なのは、その中心から、夜陰、霧の中、忍び出て行き、手に靴を持ったまま、ニッペンブルクの郵便宿駅に到着するよう試みることでしょう。でもこれはやはり正しいことではなくて、おじは決してこのことを私に対して許さないことでしょう。それで私は然るべく、一巡して行くつもりです。それに私はどの人も、哀れなニコラのことを忘れないと約束してくださることをとても必要としているのですから。そして最後に私は、おじ、おば、それに従姉妹に、すべての馬小屋や貯蔵部屋、野菜畑、花畑を通じて、それに養殖池の周りを、案内して貰います。そして誰に対しても遠慮せず、ニッペンブルクの郵便駅まで、私の同伴をして頂きます。

カッツェンミューレ[猫水車小屋]とクラウディーネ夫人との別れはいかなるものになるのか、今この時間には分かりません。私自身の全体のより良い部分が、突然、我を忘れて、自分を両腕で強く抱き締めて、夢中になってこう依頼する人物そのものとなります。『ニコラ、しっかりなさい、しっかりなさい』と。まあ、死んだ振りをするのは、簡単な芸ではありません。私が少佐夫人にどのようにして、壊れた車輪の水車小屋で、この芸を駆使したのか、ご報告するときが来るまでには、かなりの時の経過が必要となりましょう。

私の窓前の庭の上は、相変わらず暗いままです。でも最初の鶏鳴はすでにブムスドルフで発せられました。三日間片頭痛がきっと続くだろうと、ニコラは満足感を覚えながら、ベッドに就くことになります。

昔馴染みの方、あなたの少佐によろしく。私の名前で、あなたの子供らに接吻なさってください。でもどんなことがあっても、私に手紙を寄越さないでください。手紙は不要です。聞いてね、聞いて頂戴。エマ、手紙は要らないのです。だからお利口して、いつものように、そして明日、あなたの意見をあなたの胸の裡に収めてください。外では雄鶏が二回目鳴いています。丁度エルサレムの大祭司カイアファの屋敷中庭で鳴いた按配です。[マタイ、26,34等：ペトロ、イエスを知らないと言う]。私は頭の上に掛け布団を引き寄せます。

ー　手紙は本当に不要なんです。

ニコラ・フォン・アインシュタイン」。

第十二章

うぶなハンス、荘園の単細胞、ブムスドルフおじの選り抜きの寵児にして贖罪の山羊は、神聖な灰色の朝まだき、まさしく自分の支配の主人夫妻達の手紙類を持ってニッペンブルクへびっこを引いて行った。そして時間の規則的経過の中、領邦君主は自分の新聞を得て、首都の少佐夫人エマは、ニコラの野蛮な、涙過多の手紙を得た。夫人はその手紙に返事を求められていなかった。それでこの点について、夫人がどう考え、どのようにして夫人が少佐に自分の不安や自分の苛立ちを伝えたのか、あるいは全く伝えなかったのか、これはそれ故、差し当たり我々にとって一つの秘密である。後に我々は必ずや、エマ夫人ばかりでなく、他の幾多の人々も、この件にどのように対処したのか知るであろう。しかしまだこの田舎は一つの章全体を通じて我々を引き留めるのであり、我々はフォン・アインシュタイン令嬢の如く、どこへ波が我々を運ぶであろうか、知らないまま、目を固く閉ざして、歯を食いしばって、まっしぐらに奔流の中に飛び込むつもりはない。我々は前もってゆっ

くりと体を冷やしてから、ゆっくりと水の中に入って行くつもりである。我々は我らの諸力を集中させる、というのは、我々は自らの課題を承知しており、我々は冒険を始める前に、とても憧れて眺めている向こう岸のかの箇所に、深く息をしながら、しかし確実に到着することよりも、流れに任せて行く方がより容易であると知っているからである。その際、我々はフォン・アインシュタイン令嬢のコースを他のすべての者達のコース同様しっかりと目に留めておかなくてはならないことは言うまでもないことである。

「そうか、そなたはそなたと愛しい祖国の間に月山脈を二回目押し込んでしまった按配なのか」と従兄弟のヴァッサートレーターは自分のドアの閂を外しながら、このアフリカ人に話しかけた。実際そうであった。別な折、レオンハルト・ハーゲブーハーは、ニッペンブルクとブムスドルフの一つの神話となるための最良の途上であった。月山脈[Dscheb el al Komri]が再び彼をその影の中に受け入れて、彼はどうなることか、言える人は、多くなかった。

ニッペンブルクは、黄金の孔雀亭でのかの厄災に満ちた破局以来、相変わらず湯気の立つ興奮状態にあった。ブムスドルフの税検査官の家での深夜の出来事について奇妙な噂が入り混じっていて、この出来事を様々な観点から考察し、論評する色々な党派、グループが形成されていた。シュネードラーおじは、その悪しき良心という苦渋の重荷と、その銀色髪の頭の天辺へのますます増大して行く皆の軽蔑のせいで、地面に押し潰されて、この小都市の路地をよろよろ歩き、他の胡椒入り菓子上のはるかにより利口な若者達やより偉大な哲学者達の顔や、良き友達の表情の中に、自分にとっては恥ずべき具合に消失してしまった間抜けな実生活の静穏さを求めて空しかった。レオンハルト・ハーゲブーハーは消えたままであった。ただ噂では、時折彼の姿が捉えられた。彼は暗い夜、家々に沿って忍び歩く姿が目撃されたと言われた。ある霧の深い朝、彼は従兄弟ヴァッサートレーターの窓からくしゃみをした。その向かい側で立派に番をしていたクレメンティーネ・マウザーおばは、「お大事に」と言ったとされた。遠くの山々や、周りの森で、彼はしばしば徘徊していると噂され、彼は道路検査官の仲間と、王侯領国道に時々出没すると必ずしも信憑性のないわけでない証人達の口からニッペンブルクの市民の男女に対して確かなこととして証言された。しかし彼がどのようにして、自分の出入り口を、何百人もの人に見られないまま、コメントされないまま、確保しているのか、謎のままであって、これは誰にとっても極めて不気味なアフリカ人的砂漠風技に見えて、いずれにしても人目を避ける本性と、「人々の背後に遁走する」大いなる技を証していた。我々も同じように人々の背後に遁走することにしよう。

いつものように、遠方で忙しく、音立てて、呻りながら、笛吹きながら、騒がしい工場の営業がカッツェンミューレ[猫水車小屋]にまで流してくれる水流が微かな響きと共に、黒くて無用な水車に滴って、その純なる真珠のような滴りのそれぞれが一人の逃亡者となっていた。その逃亡者はただ苦労して、その純粋さと明澄さとを、有益ではあるが、しかし汚れて、情け容赦ない威力、諸力に対し、その向こうの高さの中に救出していたのである。水車小屋の住人女性、クラウディーネ・フェーライゼン夫人は、青ざめて、疲れて、その枕に寝ていて、水滴の落下を聞いていた。一人の病気の男が、時計のカチカチに聞き入るようなものであった。クラウディーネ夫人は、全く一人っきりで、この水の微かな戯れを耳にしていた。女中はパンを買いに、村へ出掛け、ブムスドルフ荘園のスピッツは森

の奥深く散歩中で、針鼠に出会って、当然、差し当たり、水車小屋や女主人、その義務について考える時間を有していなかった。

クラウディーネ夫人は、しばしば、とても長く、自らの奥深い意志のせいで、一人っきりになっていて、通常ほとんど自分の孤独についてもほとんど自覚していなかった。しかし今日、夫人は思わず知らずまたしてもこのことに思いを巡らさざるを得なかったし、勇敢で忠実なクリスティーネも、ブムスドルフおじの実直でうぶなスピッツもこの考えを夫人の魂から遠ざけることは出来なかった。これらの孤独な思いは、恐れるものではなかったが、しかし招かれてもいないのにこの辛抱強い聖母の許へやって来るもので、これらは明るい陽光の中、陽光の塵埃の如くやって来て、その踊りを踊った。まさに一日が晴れて、空が青いからであり、まさに太陽が輝いて、窓を閉ざし、カーテンを閉めることは一つの罪であったろうからである。暗く重なる雨雲で一杯の嵐のような日には、これらの孤独な思いは、ひょっとしたら遠慮して、水車小屋の領域に侵入する勇気はなかったかもしれない。しかし申したように、クラウディーネ夫人は、いかなる時も、これらを恐れなかったし、いつでもこれらは、来る気になったとき、勝手にやって来た。

他の女性なら、このような時、秘密の引き出しを開けて、手にし得る記念のものを一杯に膝に抱いて座り、過去の流涕か快活かの付き合いを行ったであろう。クラウディーネ夫人は、この荒れ野への逃走の際、幸福な時や不幸な時の、あるいはそうした人生の時期でのこうした予兆や象徴を持ち出さなかった。夫人は自分の少女時代の記念帳や花嫁花冠、それに自分の子供の最初の靴も失っていた。夫人は他のすべての女性達同様に、昔自分が大切な宝石としてしっかりと保存していた百もの他の事物を、余所の人間達に預けなければならなかったし、誰がそれと戯れることが許されているのか、どこの片隅にそれらは零落しているのか、知らなかったのである。

クラウディーネ夫人は、もはや存在していないこうしたすべての宝物について視察を行った。かのアルバムに載っていた名前のどの一つも夫人の記憶から消えていなかった。夫人は目を閉ざすと、はっきりと長いこと消えていたハミングや忍び笑いが聞き取れた。そしてここ　ー　そこ　ーに可愛くとりどりの、陽気で軽薄な一日が現れた。アシュエリュス[アハシュエロス]、ペルシア王、クラウディーネ、　ー　エステル、ペルシア王妃、ロザーリエ、　ー　マルドケ、エステルの伯父、ユリアーネ、　ー　アマン、アシュエリュスの寵臣、フランス語スイスのローザンヌ出身のユーフロジーヌ　・バビヨ夫人、その他すべてジャン・ラシーヌの人物[『エステル』1689]。いや、カッツェンミューレ[猫水車小屋]で水の微かな落下とかの声に耳を傾けることは幾ばくかのことである。

皆サン、急ギマショウ、従イマショウ。
王妃ガ呼ンデイマス。
オ出デナサイ、ト。王妃ノ側ニ並ビマショウ。

しかし女友達の花輪は千切れて、クラウディーネが結婚式で被ったかの別な花冠同様散っていた。小さな赤い子供の靴はゴミの中に棄てられた。[『ローラントの近習』ムゼーウス作、1735-1787の]錆びた幸運のヘック銅貨、姿を見えなくする魔法の親指サック同様であった。水車小屋のクラウディーネ夫人が幾多の静かな愛らしい時間、つまり何年も前、自分

の豊かな堂々たる家の中で、人生のあらゆる快適なものに揺すられて眠り、あれこれのすべての宝物を夢見ていた時間を思い出していた。しかし彼女はまた、自分がしばしば果てしなく不機嫌に、気難しく、不愉快になって、これらの宝物の下にうずくまっていたことを思い出し、それから突然の突風を思い出していた。この突風が、我々が何か支えを掴めないうちに、我々を捉え、脇に投げ棄て、この突風が我らの壁を押し壊し、我らの屋根を剥ぎ取り、我らの所有物、我らにとって愛しく大事なものすべてを世間のあらゆる所にまき散らして、死ぬまで安心と思っていたものを一切掠って行ったのである。

クラウディーネ夫人は、こうした思い出をもはや怖れなかった。辛抱強くその思い出の顔をも覗き込んだ。そして夫人は深く、静かな湖の中へ沈むように沈んで、その明るく静かな表面に何の波も生じさせなかった。一つの希望でこの老女性には十分であった。その希望を抱いて、普通人間の人生を形成しているものすべての代わりとした。この隔離小屋の外部では、これについてはある固定観念のようなもの、狂気のより軽い形式の如く語られた。その他のすべてを何の躊躇いもなく諦めてしまったこの女性も、ただ一つのことだけは奪われなかった。

聞きなさい、森で一頭の馬の蹄の音がする。水車小屋のこの隠者の女性は耳を澄まして起き上がり、その安楽椅子で前傾姿勢となる。

彼女だ、彼女がやって来る。...大きな河川、輝かしい奔流がざわめいて流れて行く、こちらへは単に行方不明の水滴のみが来るに過ぎない。しかし彼女がやって来る。私の小川が再度目覚めて、岩から陽気に落下して、向こうの私の哀れに壊れた水車でさえ、眠りから目覚めるのも不思議ではないだろう。彼女がやって来る。道はその馬の足許で笑う。彼女が私の青春のようにやって来る。　ー　いや、違う、違う。私の青春のようにではない。私ほど多くの幸せが彼女に恵まれているわけではない。痛みや苛立ちが彼女の甘美な心をすでに早期に圧迫している。誰もこれらの苛立ちから身を守るよう彼女に手助けすることは出来ない。プロスペロよ、跳ねなさい、でも用心しながら、彼女を安全に私の庭まで運んで来なさい。彼女だ、　ー　ようこそ、娘よ、ようこそ。我が哀れな野蛮な高貴な鷹よ。ようこそ、ニコラ。

次の瞬間、英国産の白馬の頭が森の最後の茂みと、水車小屋庭園の立葵の背後に現れ、手綱がいつもの太枝に結ばれ、フォン・アインシュタイン令嬢が再びクラウディーネ夫人の足許で跪いた。しかし老女性は、この若い女友達の顔を目に留めると、激しく驚いて、叫んだ。

「まあ、熱くなって、あなた、何と興奮して、何と荒れているの。何があったのです。今何を考えているのです。静かに振る舞うということを、いつまで経っても、学習しないのね。あなたは一生、こんな風に嵐のように吹き荒れるつもりですか」。

ニコラは、嗚咽し、ハアハア息をして、最初お母さんという言葉しか言えずにいて、それを小声で、絶えず繰り返して、突然起き上がり、叫んだ。

「違います、違います、　ー　あなたの手を私の額から外してください。私をあなたの腕から離してください。あなたは、私が済ませたこと、それにこれから話すつもりのことをご存じありません。私を見つめず、背を向けてください。あの方々の勝ちなのです。あの方々の言いなりです。あの方々に私はすべてを委ねました。もはやあなたのため、私のために、残されているものは何もありません。私はここであなたを抱き締めます。私の魂

はすべてあなたの許に捧げられています。でもこれから先、私ども両人の間に共同生活はありません。　ー　私をここから突き放して、出て行くよう命じてください。私はここの家、あなたの心に対してもはや何の権利もありません」。

クラウディーネ夫人は、はなはだ青白くなった。夫人の唇も震えた。しかし夫人は、ここで自分に襲いかかって来るこの性急な自然の暴力に対して素早く気を取り直した。熱にうなされたニコラを固く押し留めて、また下に跪くようにさせて、甲高い大声の涕泣が絶え間なく勃発すると、かなりの間、遠くの宙を荒々しく凝視していて、それから静かに穏やかに言った。

「落ち着きなさい、あなた、しっかりなさい。それは誰も変えられなかったことでしょう。そのようにならざるを得なかったことでしょう。何故私のことを恐れるのです。私も、生起せざるを得なかったことについて熟慮する時間がなかったと思われるのですか。予見もせずに、思いがけずに、その不意打ちに私が驚いていたら、勿論結構なこととは言えないでしょう。でもカッツェンミューレ[猫水車小屋]での日中は長く、夜はしばしば更にもっと長いものです。この世紀から水車小屋の老婆にまで、森を通じて前もってその足音が遠くから響くことなくやって来るものはほとんどありません。あなたは今日、悲しみと喜びとをこもごも伝えています。でも、私はあなたの御意志、そして屈服なさることを祝福致します。あなたはご自分を長いこと勇敢に守られて、今日でも何も非難を受けることはありません。愛しい娘さん。その方々は善意であって、あなたに対し優しい、素敵な、輝かしい運命と人生を望んでおられ、そのようにその方々も理解され、準備されていらっしゃることでしょう。その方々も長いこと辛抱なさって、あなたの同意を待っていたのでしょう。そう、あなたは去って行かなければなりません。あなたは、幸せになれなくても、落ち着きとゆとりとを得られることでしょう。いつか或る朝目覚めてびっくりなさるでしょうが、そのときにはあなたも、置いた、老婆となっています。祝福の時、今日の辛い時は、ほんの遠くの、遠くの小声の響きとなります。そのときには、あなたもこのカッツェンミューレ[猫水車小屋]とクラウディーネ老婆とを思い出されて、一体何というメルヘンかと思われることでしょう。落ち着きなさい、静かに横になって、あなたの額を私のこの両手の中に置いていなさい。だって、あなたと別れなければならないのは、私にとってとても辛く、悲しいことですから。それで再度あなたがあなたの縁者の方々の中に入って行かれたときには、辛抱なさって、些細な弱点や瑣事には耐えることです。いいですか、その方々は本来あなたのことを恐れているのです。　ー　立派な主婦におなりなさい。立派な主婦にね。...まあ、我が子、我が子、我が娘のあなた、何故このような振る舞いにならなければならないのでしょう」。

「あの方々は私のことを恐れているのですか」と辛辣にニコラは笑った、「いえ、違います。あの方々は私をとても愛していて、それで私をあの方々と結び付ける縁組みを、私の血で署名させたのです。時が移り、借用証が満期になりました。　ー　その、　ー　行方不明の者達は帰って来ず、私の債権者達は肩を竦めて、手を心に当てて、そして、　ー　私は、向こうの領邦首都の私の母親の願いに従って、フリードリヒ・フォン・グリメルンの花嫁となります。はい、私は彼の立派な主婦となるよう努めましょう」。

「娘さん、戻って来られない行方不明の者達とはどういうことです」と今や老夫人は声を張り上げて叫んだ、「あなたは別の言葉を言うつもりだったのでしょう。でもそれを発

しなかった。死人達は戻って来ませんとあなたは言おうとなさって、でも私を驚かしたり、そうしたくはなかったのです。いえ、哀れな子、周りを見て、向こうをご覧なさい。行方不明の者達も帰郷します。誰ももはや彼らを待っていなくても。勿論あなたはこれから御自身の道を行かなければなりません。でも私の希望と待機の時は、変わることがありません。誰であれ、母親に対して、その子供を待つ有効期間の時間や日々、年月を定めることは許されません。ニコラ、向こうをご覧なさい。私はあなたのどんな暗い、深い考えも恐れていません。　ー　私には長いこと一つの予兆が約束されていました。ようやくあの方が私のドアの中に入って来たのです。それであの方同様に、私の息子、我が子も私の許に帰郷しましょう。いえ、神様、息子は死んでいません。彼が生きていると今私が承知しているように、そのことが私には分かるのです」。

ニコラ・フォン・アインシュタインはクラウディーネ夫人の指し示す手に、素早い、涙と不安に満ちた視線を送った。プロスペロの側、外の庭木戸の所に、レオンハルト・ハーゲブーハーが、美しい馬の首を撫でながら、たてがみを揃えていた。彼は物思いに没頭していた。女達は彼を観察する十分な余裕があって、主にニコラはたっぷり時間をかけて、目の涙を拭いて、少なくとも外面的に、必要な冷静さを再び得られるようにした。

この最後の夏の日々、時の経過は、このアフリカ人に対して目に顕著な変化をもたらしていた。彼が従兄弟ヴァッサートレーターの指導下、励行していた隔離生活と倫理的身体的食養生は、これまでのところ、的確に彼に作用して、偉大な文明化の影響を彼に及ぼしているように見えた。百科辞典での勉強は、彼にとって全く立派な効果があった。彼の目には再びヨーロッパ風明かりが点っていた。この明かりは彼が地中海を越え、トリエステのモロ桟橋まで持参して来ていなかったものである。白馬の額の毛を揃える手の仕草でさえ、疑いの余地なく教養と礼儀作法が表明されていた。要するに従兄弟ヴァッサートレーターが「脱皮過程」と呼んだものが、まことに満足すべき進展を遂げていて、道路検査官の二番目の表現によれば、この新たな表皮は、「まことデリケートに」、覗き見ていた。

今や英国産白馬との会話を終えて、レオンハルト・ハーゲブーハーはすっかり茂みの中から向き直って、カッツェンミューレ[猫水車小屋]の窓辺の両女性に挨拶した。彼は庭の中を急ぎ足でやって来て、再度ドアの許でお辞儀をして、そのアラブ風な挨拶の言葉を述べた。フォン・アインシュタイン令嬢は黙して頭を垂れ、クラウディーネ夫人は衷心からの表現で、叫んだ。

「ようこそ、愛しい息子。貴方は二人の全く悲哀の困惑した人間にとって、最適の折にいらした。こちらの我が娘はその老いた友からの別れに来ていまして、彼女はこちらを去るのです。彼女は結婚をするのです。それで様々な理由から泣いているところです」。

「そうなんです、砂漠の方」とニコラは叫んだ。興奮して、性急に地団駄を踏んでいた。「何故立って、私を見つめているのです。私へお祝いの言葉を頂けないのかしら。ちょっとしたお上手もないのかしら」。

「ありません」と精力的に粗放に言い放った、彼の性格にとてつもなく名誉を添えそうであった。「貴女が花嫁ですか。フォン・アインシュタイン令嬢、一人の男との婚約ですか。それは私には面白くありません。それはまこと面白くない。これは茂みから毒入りの矢を受けるよりもひどいもので、悪魔の襲来です。　ーー　いやはや、アインシュタイン令嬢」。

この最大級の不快の表明は、とても真実で、とても戯けていて、とても思いがけないもので、両女性とも一切の悲哀の鬱積にもかかわらず、微笑を禁じ得なかった。いや、ニコラはそれどころか甲高く高笑いして、高く飛び上がり、叫んで、このアフリカ人の手を力強く握り締めた。

「最愛の友の方、あなたのことを誤解していました。どうぞお許しください。不機嫌にならないでください。昨日今日の話しではないのです。この幽霊はかなり以前から徘徊していまして、でも今ようやくその鎖をがちゃがちゃ言わせながら、世間に姿を現しているのです。これは私のせいではありません、ハーゲブーハーさん。勿論、私はブムスドルフにいる方が好きで、カッツェンミューレ[猫水車小屋]にいたいのです。私の話しが本当でなければ、悪魔とジニスタン国のすべての他の領主どもが私をも拉致すればいいのです」。

レオンハルト・ハーゲブーハー氏は間近の椅子に両手を膝に置いて座っていた。ルクソール宮殿の前のラムセス大王[エジプト、紀元前1317-1251]のようであって、首都テーベの瓦礫の上でかの君主のように両女性を同様に機知豊かに、分別溢れる表情で見つめていた。彼はただ漸次その驚きから立ち直って、ようやく自分の勘定を言葉にすることが出来るようになると、こう言った。

「いや、私もお許しを願います。恵み深い御令嬢よりももっとお許しを願う理由があります。どうしてこれほど愚かで、厚かましくなれるのでしょう。しかしこれも、ニコラ令嬢、必ずしも全面的に私の咎とは言えません。貴女のおじ上の庭園の生垣でのかの月光の夜を覚えていらっしゃいますか。貴女は生垣越しに覗かれて、混乱している私に呼びかけられました。あの夜感じた魔法に私が何の抵抗が出来ましょう。かの夜、かの時間、私はひょっとしたらドイツのその時のどこか他の人間よりももっと瘋癲病院の間近にいまして、貴女の出現によって、この実存在の明るい側面に気付かされたのです。貴女が当時、緑の茂みから出現されなかったら、私を現代史に関し、時代に遅れないよう導くことが、甲斐あることであると、従兄弟のヴァッサートレーターでさえ考えたかどうか、怪しいことでしょう。私はアフリカ奥で掴まっている間に、故郷に関する風変わりな理想をでっち上げて来ました。これがどのようになったか、貴女も知らないままではありますまい、ー」。

「それで、シュネードラーおばさんから自らを救出なさるために、貴方は私のスカートに掴まったのですね」とニコラは叫んだ、「そして私が自分の惨めさを笑い飛ばそうとしているが故に、私は愚かでもなく、これに上手に太刀打ち出来るが故に、それに私はいつもこの今まで、自ら権利を有する世襲貴族と見なしてきているが故に、貴方は私をいわばかの理想の代わりに置いて、遠くから、トゥムルキー州からドイツ同盟を見るが如く、私を崇めたのですね。あら、レオンハルトさん、今一度貴方の手をください。生涯お友達のままでいましょう。でも、私どもの理想を出来るだけ深く埋葬しなければなりません。私どもは対の昔からのボロボロの冒険家で、両人とも甲冑を着て亡くなることでしょう」。

「ニコラ、ニコラ」とクラウディーネ夫人は、両手を組んで、震わせながら、叫んだ。宮中女官は夫人の許に屈み込み、夫人の額に接吻をした。

「お母さん、そうなんです。誰もこれを変えられません。私が甲冑を付けた心であなたの許から去らなければ、私はどうなることでしょう。私のお母さん、あなたを運び、救うのは、あなたの辛抱と希望、それにこの荒れ野での隠者生活です。この方と私は別の武器

が必要です。私は自分の武器を知っていて、それを使いましょう。ハーゲブーハー殿も、チャイルド・ハロルド[バイロン作]もスペンサー詩節[八行五歩格プラス一行六歩格」のベーデカー[旅行案内書]に他ならないと理解なさったら、同様にご自分のを見つけられることでしょう」。

「レオンハルト、もう彼女の言うことに注目しなくていいですよ　とクラウディーネ夫人は憂鬱そうに言った。「彼女は病んでいます。でも彼女は良い娘で、利口で、治癒に導く道を知っています。私どもにこれからは、少しばかり貴方御自身の生活について、世間は従兄弟ヴァッサートレーターの安楽椅子からはどのように見えるものか、語ってください。貴方は大きなヨーロッパの絵本のどの箇所に一つの印を付けられましたか」。

「そうです、貴方について話しましょう。あるいはむしろ、御自身のことだけを話してください」とニコラも、涙を拭きながら叫んだ、「水車小屋の私ども三人は、珍しいクローバーの葉でしょう。私どもが告白を、思いの丈を最後まで話していたら、百歳にまでなれましょう。このようなよりどりみどり故の困惑者には、皆が用心すべきでしょう。ハーゲブーハー殿、従兄弟ヴァッサートレーターとヨーロッパのABCの本で、どのような次第になりましょうか」。

レオンハルトはそこで詳細に、自分のハムスター風生存について、そして自分が差し当たり地下で掘り進めているという世間知という最も有益な学習について語った。彼は自分がいかに蟹のように、政治的文学的新聞やジャーナルを一八五〇年の年まで遡って読み進めているか、そしてそのことは途方もなく有益でした、と語った。例えば西ヨーロッパ人のタウリス[クリミア]へのかの遠征や、セヴァストポリの町の包囲についての伝説といった、曖昧で混乱した伝説を自分は容易にすべて根こそぎ深みから掘りだし、時代の夜の中から、明瞭に取り上げて、楽しく快適に、自分のこの探求の結果を、自分のその他の抜粋帳に整理しました。一人の者が月山脈で不在の間に、何と色々なことが生じ、そして人々が忘れてしまっているものか、不思議なほどです、と彼は言った。とりわけ自分ははなはだドイツ文学の諸傑作を楽しみにしています。これらを五〇年の時まで遡って後から読むわけで、これらを自分は、素っ気なくこれらに関して否定的な従兄弟ヴァッサートレーターの言にもかかわらず、これからの冬の夜、夢中に読み込むつもりです。しかし、従兄弟ヴァッサートレーターも、しばしばその濛々たる煙草の雲の中から、劣等ではない神託や注釈を述べられて、それで自分、　ー　レオンハルト・ハーゲブーハーは、一つ一つ片付けており、自分の学童的定めに、必須の学童的ユーモアを添えて受け入れ、全く陽気に居残り[落第]学習をしています。自分の父の家に関して、勿論、ほとんど結構なことは話せません。フォン・アインシュタイン令嬢が、哀れな妹リーナを通じて、もっと自分、つまり放蕩息子の追い出された息子よりも父の家の気分や出来事についてご存じでしょう。母親のことは、とても気の毒です。元来、老いた、不機嫌な父親のことも、それに劣らず気の毒です。というのは、父上はどの面から見ても、正当なのであり、心理的にも倫理的にも極めて正しく振る舞ったからです。しかし黄金の孔雀亭では、従兄弟ヴァッサートレーターがハーゲブーハー家の復讐の守護神として座っていて、ニッペンブルクのすべての名士達に対して、この倍にも負けない勢いであり、冬が過ぎてもこの立派な一同の中、唯一の肝臓を患っていない、胆石の苦しみを免れた会員であって欲しいと願っています。

こうしたことや、更に幾多の他のことについて、相手から要求されたとき、このアフリ

カ人は語った。しかし彼は悲しげな表情で語って、両女性は闊達な心で聞いていたわけではなかった。再び夕方となった。スピッツは針鼠を連れずに森から帰って来た。しかしクリスティーネは黒パンの全塊を持参した。

「お母さん、黒パンの一部をください。その後去りましょう」とニコラ・フォン・アインシュタインは言った。

震える手で、老夫人は一切れ切り落として、それを黙ってフォン・グリメルン殿の花嫁に渡した。

「私はこれを私の新しい人生の中に持参します」とニコラは更に話した。「私は然るべき時に、いつもこれを食べることにします。　ー　これはどんなに固くなろうと、私には効き目がありましょう。いや、お母さん、お母さん、あなたはその豊かで優しいお心から、私に沢山くださいました。でも、今はこれがあなたから頂ける最後のものです。哀れなニコラの門出に黒パンの一切れ、これが最後の御印です」。

彼女はそのパンをハンカチに包んだ。そしてレオンハルトに向き直った。

「それでは、私の友、貴方から先に出てください。私はプロスペロで、貴方を後から追って、貴方に格別のお別れを申し上げます。でも今は私をちょっとだけ、私のお母さんと二人っきりにさせてください。最後の接吻をしたいのです」。

深く感動して、無言で、レオンハルト・ハーゲブーハーは退出して、ゆっくりと水車小屋を去り、振り返って見ることもなかった。森では黄昏がすでに更けていた。フリーゲンハウゼンの国道では、最初のかなり冷たい夕方の風が砂塵を所在なげに巻き上げていた。彼は森の出口で、この美人の乗馬の女性を待機していたが、甲斐なかった。彼はしばしば立ち止まったり、また歩きながら肩越しに振り返って見たりした。しかしようやく村の背後で、彼は後ろに白馬の蹄の音を耳にした。それからニコラ・フォン・アインシュタインはなおしばらく無言で彼の側を騎乗して行った。彼は彼女の方を見上げる勇気がほとんどなかった。果たして、彼女がこう言って、会話を始めた。

「ハーゲブーハーさん、素敵な夏でした。再び私どもが出会うことになりましたら、その立派な恵みを、今のこの黄昏の時よりも、きっとより正しく評価することが出来ることでしょう。いずれにせよ、私どもはまた再会しましょう、戦友殿。その時には、別世界の作法、慣習に従って、挨拶しましょう。そして向こうの山の背後、利口な阿呆の民が私どもを足蹴にしないよう、どのように私どもは振る舞うべきか、注意致しましょう。でも、私ども両人とも、かの民は何も存知しないある領国での市民権を有しています。この市民権は、何の力であれ、私どもから奪えないものです。それでは握手をして、しばらくお別れしましょう。美辞は私どもには通用しません。貴方は武器を鍛えられたら、向こうのカッツェンミューレ[猫水車小屋]で老夫人からそれに対する祝福を受けてください。その後で私を追ってください。ご機嫌よう、レオンハルト・ハーゲブーハー」。

「ご機嫌よう、フォン・アインシュタイン令嬢」と月山脈の男は言った。ニコラは谷の下の方へ、国道を騎乗して行った。レオンハルトは再びかの我々にも馴染みの田畑の道に従って、大きく弧を描いて、ブムスドルフを迂回して行き、いつものように暗い夜、従兄弟ヴァッサートレーターの宿舎に達した。

第二部
第一章

以前の、より暗黒の数世紀の間、残念ながらすでに多くのドイツの歴史が視野の狭いものになっているが、それはこのような具合に著述家として従事するどの僧侶も、ただ自分の修道院の歴史のみを永遠のために執筆しているからであって、それで我々もこの箇所ではハノーヴァーや、ブラウンシュヴァイク、ダルムシュタット、カッセル、シュトゥットガルトの町の歴史や類似のことを三十回も何回も書かないようにしよう。我々は我々の中小諸国家の素晴らしさを指折り数えることが出来ても、しかし真のゲルマン的羞恥心を発揮して、一つの名前も挙げないことにしよう。ガラクタはまさにどこでも同じであって、由緒ある侯爵家への愛着と尊敬も、その他の旧来の、快適、不快適、慣習や設備への敬慕も同様である。

このようなドイツの文化の地は、国民の総体的にかなり取るに足りない部分によって、その領邦首都と呼ばれているが、それは一つの谷にあるか、あるいは一つの平地であって、決して山の上にはない。しかしながら、常にその周辺には、大地の自然的、あるいは人為的高台を有しており、そこから人々はその華麗さを一望し得るのであって、この高台に当地の人々は、折々に、その客人を案内して、客人の驚く様、喜ぶ様を、謙虚な誇りと共に好んで満喫するのである。

このようなドイツの領邦首都は、常に、ローマの町と同様、一日で出来たわけではないというローマの町との類似性を有している。その古さもしばしばとても重要で、これは皆が共通して有効利用している事情にあるが、しかしいずれにせよ、この古さの最終的理由は、必ずしも大袈裟な風景的魅力にはない。

濃い霧、沼地、原生林が二千年前、今日では習俗と教養とがその最も美しい花を咲かせている箇所を覆っていた。今日ホテル・聖ペテルスブールの前で警察官が公序良俗に注視しているところで、昔は野蛮な原初ゲルマン人がもじゃもじゃの熊を待ち伏せしていた。今日、国の参事官、陸軍少将、最高裁判所と長老会の長官、館長、本省部長、作戦会議議員、合議議員、市の理事、税検査官、国庫出納係、高位聖職者、衛生顧問官、古文書館員、図書館司書が至高の文明の勝利を演出しているところで、昔はせいぜい不器用な水牛が自らを披露していたのである。幾多の気候上の差異にも慣れていたローマ人達でさえ、ここでは鼻風邪を引いて、くしゃみして引っ込み、粗野な原住民どもは彼らにほんのお大事にをも呼びかけることがなかったのである。このローマの民は一つのランタンの如く、原生林を照らし出した。この小さなランプが吹き消された後、また原生林は暗くなり、かくて長い間暗いままであった。諸部族は旧来の結構な慣習で、お互い殴り合って殺害し、異邦人達、フン族や同様の侵攻者どもがその諸力に応じてその加勢をして来た。キリスト教界がこの荒野に差し込んだ明かりも、父祖の習俗に従って誰もがその好意を隣人に対して示す振る舞いを妨げなかった。しかしローマ風邸宅[eine Villa]が突然、原典の暗がりの中、出現した。後代、敬虔なるアエネアスやその他のうぶなトロヤ人に由来すると主張する作り話しめいた王朝の氏族[伝説のトロヤの英雄アエネアスはローマ人の祖とされる]が沼地と森の間に、粗野な壁と家屋を築いた。　ー　これがこの大地で一人以上の歴史教授にとっての曙光となった。一度原典の中に出現した土地の名前は、原典の中で容易に二度と消えるも

のではない。所有権が文書に記され、そして結局、文書は、他のすべての素材よりも長持ちする現世の素材である。昔の父祖プリアムス[トロヤの国王]の子孫は、ゲルマン人の良心の咎で不安に思いながらも、教会や修道院を築き、そして自らのものを文書に明記する聖職者に不足することは確かになかった。　ー　教授殿にとってはますます明瞭になって行く。教会と砦の周りに、聖職者と世俗の腕力の庇護の下、とても庇護を必要としていて、寄る辺なく、半ば動物的人間の群れがその粘土の小屋を建て、そして我らの友、教授殿は眼鏡を拭いたり、詳しく説明をし始めるのを好むようになる。今日の社会的連帯の基礎が出来上がるのである。皇帝ガヤッテ来ル。つまり別の王朝が、　ー　灰鷹との関連では一頭の鷲が、　ー　何千もの立派な騎士や下僕達の先頭に立って、イタリアの国に入り、その軍勢を無事イタリアに配置し、その地に集結させ、そして別の聖職者の頭目に対し、ドイツ国民に対する身体的倫理的統治に関し、若干の取るに足りない譲歩をした後、正式なローマ皇帝として帰還するのである。教授殿はその者の名前を呼んで、この者が、定住民に都市権利を許可し､年の市の開催権を認可したその年月を我々に詳しく教えるのである。我々は極めてロマンチックな中世に至っている。猥雑さは甚だしい、しかし由緒ある侯爵家は立派に栄えており、宗教改革の時まで、沢山の奇妙な花々を咲かせて、その付加語的形容詞はいずれも珍しいことにすべての神聖ローマ帝国を通じて同じである。怠慢王、肥満王、邪悪王、鉄鋼王がいつでも支配していて、いつでも同様の文明的成功を目指しており、今日でもとても理想化された模造画の中、立派な謁見の間で、城代[宮殿管理者]によって言及される。アーヘンやインゲルハイム、トレーブーア、ローラ、ゴースラーの帝国宮殿の中で一人の城代が当時の旅行者に対して何を指摘していたか、我々は不問にしておこう。

十四世紀の終わり頃、古文書で最初の市長が出現している。しかし領邦首都の市民は、帝国都市に昇格したそこの暮らしと比べるととても平伏したものである。王朝はますます繁栄して、[神聖ローマ]皇帝よりも、ハンザ同盟とか、同様な不埒な同盟に対して苛立ち始めている。帝国直属の貴族は、宮廷の雰囲気を嗅ぎつけ始め、宮廷修道院の[カトリックの]僧侶は、ヴィッテンベルクのアウグスチノ派僧侶[マルチン・ルター]を嗅ぎつけている。教会改革に関し、王侯の恩寵は、大きなジレンマを抱え、三十年戦争の間、王侯の恩寵は、致命的、不愉快な状況に陥る。ポスト・ヌービラ・ポエブス、つまり嵐の後、太陽。偉大ナ君主、ルイ十四世。ティンパニーにトロンボーン、皆のトゥーシュ[ファンファーレ]。...

奇妙なことに、ドイツの歴史は、そして同時に我らの領邦首都の歴史も、その輝かしい再生のこの時期、我らの教授の関心をいずれも失っている。教授はそれどころかもはや何も言及しない。厳かに自らの研究をミュンスターとオズナブルックの和平[1648年10月24日、ヴェストファーレンの和平、三十年戦争終結]にまで進めることが許されるならば、それで十分である。しかし碩学の厳めしさを主張する必要のない我々は、微笑して、日の出の勢いのフランスの太陽から、我らのへいこらした背中に陽射しを受け、暖めて貰う。我々は平伏して、いともやんごとなき領主達の前で消え入り、領主達が豪華な馬車で、モンブリリアン[我が光輝宮]、モンプレジール[我が安楽宮]、モンルポ[我が泰平宮]、ルートヴィヒ砦[Stuttgart]、ルートヴィヒ悦楽[Mecklenburg-Vorpommern]、ヘレンハウゼン[名士館、Hannover]、ザルツダールム[Wolfenbüttel] 、シュヴェツィンゲン[Rhein-Neckar]、あるいはニンフェンブ

ルク[München]へ緊張の公務から休息へ出掛けるとき、万歳を叫ぶ。我々は美しい宮中の、頭目の、お抱えイタリア人女性の馬車の前で深々とお辞儀をする。殿下が罪深い水の町、ヴェネツィアから連れて来た異教徒のムーア人を見て、我々は尊敬の念と共に驚く。宮中のユダヤ人に対して、我々はどのように振る舞うべきか、余り良く分かっていない。このユダヤ人は状況によって、とても危険な人物となり得る。このユダヤ人の前でも帽子を取るのが最善であろう。家々や路地で何と奇妙な生活、営為が見られることか。何という忠誠の市民や、何と素晴らしい侍従長、ハンガリー傭兵、宮廷詩人が存在することか。何と立派な祝婚歌、誕生日祝い歌、挽歌が歌われることか。何と素敵な喜劇、悲劇、それにとりわけ、何というオペラか。

これらと何も関知したくない教授殿の気持ちは良く分かる。しかし我々は教授殿とは別の目的を追っているので、それが結構に思われたら、我らは教授殿の如く、我らの対象をアスパラガスのように切り取ることは出来ない。我々はそれを明るい、今日まで生長させなければならない。教授殿はただ事実を利用するのみである。しかし我々は花々や果実を必要とする。アスパラガスも、我々が時を恵みさえすれば、このようなものを生み出す。

ドイツ精神はその源泉をどのような深みから得ているにせよ、その諸「領邦首都」はすべてヴェルサイユのこの「神ノ恵ミ深イ」、「朕は国家なり」国王に由来する。何と一切が彼[ルイ十四世]のお蔭であることか、考え尽くすことも、書き尽くすことも出来ない。エルザスのようなドイツ国の襤褸切れ一枚でさえ、すべての殿下やすべての侍従長職にとって、これ以上利益を上げて売却できない。ハイデルベルクの炎上[1689]以来、初めて、すべての宮中御用達の玄関の看板は、いずれも、ドイツ人の舌が発する限り、我々の能力以上にまさしく上手に表現され、まさしく上品に言い換えられて、そのすべてが真に誠の花盛りとなったのである。ドイツ人的人間性の高みでの何という栄光か。まさにそれは併合戦争[1679-81]とスペイン継承戦争[1701-14]の赤い血の反映であった。[ラーベはここで、ルイ十四世がドイツ領を荒らした遠征について述べている。1681年フランス軍はエルザスを征服、1689年プファルツに侵攻し、ハイデルベルクを焼き払った。にもかかわらず、ルイ十四世は、ドイツの多くの侯爵のお手本となった。またスペイン継承戦争では、バイエルンとケルンがフランス側、その他ドイツ諸国がスペイン側で戦った]。しかしさて、それはニンフ[美少女]の太股の色合いであり、櫟の生垣の上、長い、長い、真っ直ぐな並木道の上、演習広場の上、砂岩の神々や女神の上、宮殿や町の上の甘美な薔薇色の黄昏であった。何という立派な噴水仕掛け、曲馬、フープスカート[鯨骨入りスカート]か。何という鬘にお辞儀か。宮廷や町では何というカフスや襞襟、黄金の縁取りチョッキが見られたことか。皇帝と町の文書目録係の男[Johann Friedrich Böhmer,1795-1863]が憤然と軽蔑して、リーディンガー[Riedinger,1698-1769]の銅版画やリューニヒ[Lünig,1662-1740]の歴史書『歴史的政治的儀式劇場』からそっぽを向くとしても不思議ではないだろう。

原初の樫の木の背後で、原初の雄牛を待ち伏せしている野蛮な原初のゲルマン人が、この同じ一帯を同じ箇所から一七八〇年に眺めてよろしいという許可を得たら、とても驚くことであろう。殿下らは十八世紀の経過中、沢山の金を得て、沢山の金を使った。猪猟、狐猟、追い猟、回転木馬、バレエ、喜劇で幾多のライン・グルデン貨幣や帝国ターラー貨幣が使い果たされた。プロイセンの老フリッツ[フリードリヒ大王]に対する政治的投機も、期待し願っていたほどの成果を上げなかった。この原初ゲルマン人が、「広い空き地」や

「平地」、あるいは領邦首都でのその他それに相応しい広場で、自らの子孫が、中隊ごとに号令をかけられて、ピカピカのイギリスのギニー貨幣や重々しいオランダのドゥカーテン貨幣と交換されるのを見物するのは楽しいことかもしれない。この原初ゲルマン人は、殿下らが前線を用意し、いとも尊い領民に対し、異郷にあっても、「ヘッセンやヴュルテンベルク、あるいはブラウンシュヴァイク・リューネブルクの名前」を穢すことのないよう、勇敢に祖国と、「我らの」弥栄のために身体髪膚を犠牲にするよう訓戒するのを見聞することになろう。

カルロス万歳、フリデリクス、あるいは類似のもの、万歳。太鼓の連打、　ー　横笛が響き、シンバルが打たれる。　ー　今晩は劇場で、ゲーテ博士の悲劇、『義手のゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』が上演され、　ー　明日は侯爵夫人妃殿下の誕生日祝いに、大きなイルミネーションと、若きモーツァルト殿、管弦楽の名誉の騎士と呼ばれる方のオペラ、『クレタの王、イドメネオ』が用意される。

しかし西側、ライン川の向こうでも、とても風変わりな、若干不気味な楽器の音がし、突然ある鈍い、長く続くティンパニーの打音が聞こえる。オノレ・ガブリエル・ヴィクトール・リケティ、ド・ミラボー侯爵[伯爵1749-1791]...王室顧問会議弁護士の市民ジョルジュ・ジャック・ダントン[1759-1794]...市民（シトワイヤン）マクシミリアン・ジョゼフ・ロベスピエール[1758-1794]...国王殿下らの縮み上がりと全く正当な憤激が見られる。この憤激は数年後、ナポレオン皇帝によって平均的にまた良く補償されることになる。ライン同盟の好ましい時代が続き、ドイツ同盟が続き、ロシアとイギリスとの優しく懇ろな関係が続き、この関係では祖国の風景的魅力が増大することになった。[1815年神聖同盟]。ギリシア的モスクワ的礼拝堂や霊廟、イギリス的ノルマン的様式の王侯田舎屋敷が代わりに栄えることになり、そのことから現地の領邦国歌の住民とその領国を列車で通過する異郷人に対し最良の印象を与えている。

バーカ、　ー　いや、こちらへ、こちらへ、諸兄諸姉の方々。覗き箱のレンズが磨かれ、小さな明かりが点される。両手を膝に置いて、何千年もかけて仕上げられ、磨かれ、綺麗にされた素晴らしい時間の作品を一瞥する甲斐がございます。

野原や丘、河川が快適に晩秋の太陽のヴェールを帯びた明かりの中、広がっている。灰色の芯の上、町の蝟集した塔の先端の上に、勿論、より濃い靄の塊が浮かんでいる。...しかし近代的郊外は快活に白く輝き、イタリア風、ゴシック風の別荘がさながらニュルンベルクのおもちゃ箱から庭の茂みに威勢良くぶちまけた如く、あるいは可愛くシナノキやクリの木の並木道に沿って建っている。

我々は枯れた葉が可愛く重なっているこれらの並木道を歩いて行く。すると多くの上品に着飾った人々に出会ったり、その人々と一緒に歩いたりする。その中にはとてもカラフルなレディーやまたとてもカラフルな将校がいる。馬丁が全く優雅に馬を散歩させていて、公園では音楽が演奏され、夜になると花火が、セヴァストポリの爆撃を模して打ち上げられるそうである。二頭の眠たげな砂岩のライオンの見張っている一つの市門があり、眠たげな歩哨の見張っている一つの哨舎がある。一人の欠伸している関税徴収官、陽の当たる一つの広場、その中央には、休憩用ベンチに囲まれて、預けられた子供と一緒の子守娘や乳母がいて、ブロンズ像の祖国の若干眠たげな主君が立っていて、右手の散歩道と左手の散歩道に分かれる。再び色々な散歩者、馬丁、辻馬車、自家用馬車、再びまた沢山のカラ

フルなレディーに、とてもカラフルな将校である。右側の並木道を行くことにしよう。すると郵便配達人の速歩で行くうちに､四十五分後に左手からのブロンズ像の祖父公が見え、元に戻ることになる。我々が左手の道を行くと、同じ時間の後、右手からのこの立派な老公の顔が見えることになる。我々が観察者のこの道路を行くと、随時、ひょっとしたら幾らか有益に、我らの生命の糸の半分ほどは、まさにこの円環と同じと思うかもしれない。我々がこの円周の半径の道に従って、町の中に進むと、すると、　ーー　いや、何故この道を行く必要があろう。夕方はとても快適で、大気は優しく、昔の町のお濠の河川の残滓に沿った砂利道はとても固く､清潔で､ベンチはとても可愛らしく､休むよう誘っている。劇場は七時にようやく開演である。腰掛けて、夢想の額を手に収めよう。この時刻、何と素晴らしいもの、素敵なもの、有益なものが見られるものか、予想できない。殿下や妃殿下が六頭立ての馬車で通過されるかもしれない。この領邦首都の　ー　最も美しい娘が現れ､その衣装の裳裾に我らは触れるかもしれない｡我らの運命は､ここでも他と変わらず､我らの肩を叩いて、我らの採用通知をまこと枢密の内閣秘書官として、あるいは類似のものとして、札入れから取り出すかもしれないし、あるいはこっそりと指で示して、合図するかもしれない。ほら、ご覧、と。全く小声で、小声で囁く、注意しなさい、最良の友よ、と。今回この最後のことが生じた。我々は見て、聞いて、注意する、それも熱心に注意する。もっとも合図しているのは、単に我らの文学上の運命であったのであるが。　ーーー

彼が通りを一つ抜けてやって来た、その通りは、町の中心部から町の周囲を回っている遊歩道に通じていた。他のかなり平凡な人並みに、黄色のシナノキやクリの木の下を散歩するために、町の中心部からやって来たのは誰か。平凡な男ではなく、他の人々よりも頭一つ分背の高い男であった。我らのとても善良な友、ブムスドルフとトゥムルキー州出身のレオンハルト・ハーゲブーハー氏であった。とても変貌していた。それは絵画的側面に関して言えば、彼の利点となる変貌ではなかった。　ー　我らが彼の姿を彼の少年時代の平野から見失って以来、一年が経過している。一年は、人間によってとても強力なものであると見なされ、人間自らも強力なものであると見なす多くの事柄を受け入れて、そしてそれらの事柄との戦いでしばしば優勢に立っている一つの力が育つ。まず、この一年で、このアフリカ人は皮がむけて、いや、皮が剥がれた。肌の赤茶色は、気持ち悪い灰黄色となった。目の周りの灰色の隈は、逆に黒色に変わった。目そのものは、その輝きを保っていたが、この目は酷使されていることが見てとれた。野蛮な髭は大部分ナイフで剃り落とされていた。これに対し、以前アブ・テルファンのファッションに完全に同化しなければならなかった髪の毛は、文明世界の同意の下、そのまま生えることが許されていた。それは生えて、再度伸びていたが、しかし残念ながらこの男を美しくしていなかった。それは言わば、あらゆる色彩で生えていて、褐色、灰色、黄色、白色であって、とても剛毛で梳かし難い髪となっていた。　ー　どの髪の束も、櫛とクリームに反抗的であった。

レオンハルト・ハーゲブーハー氏はもはやターバンを巻いたり、トルコ帽を被ったりしていず、とても素敵な、黒くて、輝かしいシルクハットを被っていた。彼は輝かしい黒の燕尾服、黒のビロードのチョッキ、黒のズボンを着用し、そして帽子から長靴までの衣装のすべての部分が博物誌に通じているすべての者達にかの長靴を思い出させていた。つまり意地悪な人間が内側に黐を塗りつけて､原生林で捕獲のために木の下に仕掛けるもので､その木の上ではもじゃもじゃの従兄弟[猿]が眺めているかもしれないのである。我らの友

の目には、この毛深い従兄弟[猿]と類似するものが多く見られた。いずれにせよ彼はこの靴とくっ付いてしまったと感じていた。しかし彼はこの状態に野蛮な度胸で耐えた。これは自分達のジャケットを居心地良く感じて着用しているすべての仲間にとって、彼を一人の危険な奴にしている一つの皮肉な度胸と言えた。此奴は歯を剥き出しにすることだけでよしとするのではなく、状況によってはしたたかに噛みつくであろうと感じられた。かくて人々は警告されることになって、一つの不幸が生じたら、それは自己責任ということになった。このアフリカ人が昨年何をしたのであれ、何を忘れ、何を学んだのであれ、一つのことだけは確かであった。彼はどのような種類の自分の同郷人であれ、その人の顔を鋭く見つめた。たとえ以前のうぶな内気さが、時にその逆のものに反転したのであっても、誰もそのことに驚いてはならなかった。レオンハルト・ハーゲブーハーは、もはや誰をも当惑故に避けることはなく、ただせいぜい丁重さ故に道を避けた。しかし差し当たり彼は首都の他の住民同様、散歩に出掛けていて、自分と共に新鮮な空気を吸っている者達を好意的に瞑想的に眺めていた。

人波と共に、また人波に逆らって、彼は他の人々と同様に町の周囲を散策し、祝福する国の祖父公像まで来て、その像の側を通り過ぎ、最後に一つのベンチに腰掛けた。そこからは前述の広場の一部を眺めることが出来た。ここに彼は座って、すでに知り合いになっている色々な人々に挨拶した。そしてすでに彼と馴染みになっている多くの人々が、通り過ぎながら、彼に集中して注目した。一群れの少年達が彼の周りに集まって、若干離れたところから彼を凝視して、彼が彼らに話しかけようとすると、すぐに逃げ出した。最後に広場を横切って、覆いのない馬車が、二人のレディーを乗せて、彼の方にやって来た。極めて驚いて、いや甲高く驚愕の声を上げて、彼は飛び上がり、叫んだ、「ニコラ、...ニコラ」。

レディーの一人は小さな白い帽子を被って、もう一方は、青い帽子で、かの白い帽子のレディーが柄付き眼鏡を持って、こちらへ屈み込んで見た。しかし馬車は素早く先に進んで行った。そしてレオンハルトは、追いかけたいかのように数歩先に進んだ後、またしっかりと腰掛けて、語った。「では、待つことにしよう」。

馬車の中で､ニコラ・フォン・グリメルンは自分の女友達のエマ少佐夫人の手を握って、叫んだ。

「今の人は誰。あなたもあの人をご覧になった？あの人かしら。まあ、何とおぞましい姿。何という戯画でしょう。まあ、エマ。...ヨーハン、もう一度、町の周囲を回ります。でも速くして、全力疾走よ、速く、速く」。

御者は馬を駆り立てた。エマは言った。

「あれは､生身のあなたのアフリカ人でしたよ。とても素敵な社交服を着用して。実際、戯けた英雄だわね。しばらく前からあの人は領邦首都に出現しています。人々はあの人の話しで持ちきり。私の夫もすでに数回あの人と出会って、あの人のことをはなはだ褒めています。でも私はもっと良くあの人と知り合いになることをとても楽しみにしています。多分まだあの人はベンチにいて、また出会えるのではないかしら」。

「きっとね」とニコラは言った。しかし彼女は女友達の言葉に上の空であったであろうと、彼女の様子から気付かれたかもしれない。彼女はぼんやりと宙を見つめていたのである。他のすべてのこと同様、今や彼女はエマが微かに頭を振っているのも見逃していた。

馬車は素早く先に進んだ。多くの人々が挨拶して、多くの人々が言った。「ご覧、美貌の男爵夫人グリメルンだ。立派な縁組みを彼女は手にした」。　ー　更に他の人々が他の人々に尋ねていた。「あれは、野蛮なフォン・アインシュタイン令嬢、宮殿通りの小柄な老将軍夫人の娘ではないか」。これに対する答えがなされた。「勿論、その彼女だ。我々はクラブで彼女のことを野獣美女と呼んでいた。しかしそれもお仕舞いだ。彼女はとうとう角隠しの下に押し込まれた。今は秋風が吹き始めて、まこと図々しく薔薇の花弁と戯れている時だ。ちなみに我らの友グリメルンのことを知っているか。このような戯れを極端なほどやってのけるには、まさに彼のような性格が必要だな」。　ー

似たような幾多の見解が更に散歩者のグループの中でなされて、その後馬車が二回目、ブロンズ像の祖国ノ父[キケロの称号]の許に達した。この像が再度目に入ったとき、実際またレオンハルト・ハーゲブーハーもベンチのその場に、台座の亡き主君同様、座っていた。

「エマ、止めさせて」と男爵夫人は囁いた。御者は手綱を引いた。ブムスドルフのアフリカ人は帽子を頭から取って、馬車の扉へ歩み寄った。

「ただ今、再会ですね」とニコラは、彼に手を差し出しながら、言った、「親愛なる友の方、ほら、私の申した通りでしょう、そしてすでに貴方も御自身の経験から仰有ったかもしれませんが、人間そう簡単に行方不明にはなりません」。そしてほとんど従来の陽気さ、冗談半分で、エマ夫人の方を向いて、叫んだ、「こちらは船乗りの私のシンドバッド、これまであなたに沢山、この方の素敵な点や不思議な点についてお話しして来ました。お願いだから、この方をよくご覧なさい。かつて現実が空想に対し、これほど苛立たしく足をかけたことがありましょうか。おぞましい、おぞましい。まあ、親愛なる殿方、もはや誰も貴方のことを信じないでしょう、貴方がグリフィン[怪鳥]に乗って、あるいはロック鳥[中東伝説]に乗ってニッペンブルクへ飛んで来たなんて。私どもはお互い、沢山、沢山話すことがありましょう。でも、とりわけ、貴方のその仕立屋の名前を知りたいものです」。

「フェーリクス・ツェレスティーン・トイブリヒ、ケッセル通り五十五番地です」と返事があった。少佐夫人エマは微笑して頷いた。あたかもこの仕立屋芸術家は、彼女の馴染みの一人であって、馴染みであることに相応しい者であるかのようであった。

「私どもは昨日帰郷しました、ハーゲブーハーさん。貴方を近いうちに私の夫に紹介できればいいと願っています」とニコラは続けた。「貴方も私を同様に憂わしげに見つめていらっしゃる。いや、昔のニコラをこれ以上求めないでください。お互い外面をもはや気にしない時がやって来ましょう。そのときには、別の事柄をもっと真面目に論評しましょう。野次馬がうるさくなって来ています。こちらは、私の女友達、エマ・ヴィルトベルク夫人、ご立派なご主人の妻です。この夫人に次の再会の面倒を見て頂きましょう。御者の方、出発。　ー　野次馬にはかないません」。

両レディーが、このアフリカ人にお辞儀した。アフリカ人はこの馬車を見送った。彼の考えのすべては、かの黒パン、クラウディーネ・フェーライゼン夫人がカッツェンミューレ[猫水車小屋]で一切れ切り分けた黒パンに固執していた。フォン・アインシュタイン令嬢、フォン・グリメルン殿の婚約者に、広い世間への門出として与えたものであった。

第二章

単に噂であったが、国王フリードリヒ・ヴィルヘルム四世陛下の自然探求家にして侍従の、偉大な旅行家が昔、我らの領邦首都の仕立屋の職人宿で、個人的に、もう一人の偉大な旅行家を探していて、この目当ての者が見つからず、自分の名刺の縁を折り曲げて[用件があって訪問した印]、この目当ての者に残して行ったそうである。これは単に噂に過ぎなかった。しかしこの噂は、トルコ人一角のすべての圏内にしぶとく残った。今日の人気ある挿絵入りの文芸によってかの著名な男の名はこの圏内に知られているものである。それでこの偉大なアレクサンダー・フォン・フンボルト[1769-1859]は、このフェーリクス・ツェレスティーン・トイブリヒ以外の誰を訪問するつもりであったろうか。この男も自分の遍歴職人証を呈示しなければならず、人々はこの男のことをトルコ人一角を越えて、パシャ・トイブリヒの名で知っており、評価していたのである。

彼の父は煙突掃除人であった。得体の知れない[黒っぽい肌の]紳士で、どのようにしてこのような息子が生まれたのか、知らなかった。彼の母親は、昔育ちの良い帽子製造女工で、自らの清潔さと魂の優しい情動と比べて、他の人々の火床や煙道での、あらゆる匍匐、掻過、登攀をとても低俗なこと、全く耐え難いことと見なしていた。主に世間はこの魂のお蔭で、このような人物を得たのであった。この性格は、勿論、大地のどのように高い煙突をも低く、自らの眼下に見ていた。パシャ・トイブリヒはフォン・フンボルト氏の訪問を、自らの実存同様、固く信じていた。しかしいかに彼が自らの実存を信じていたかは、ただ彼と比較的長く、正確に付き合うことによってのみ明らかになろう。

白く、優しく、可愛らしく、彼はこの世に生を享けた。そして甲高い小声でこの世に挨拶した。黒い父親とその黒い職人達は訝しげに頭を振って、彼のことを全く「珍しい魚」と呼んだ。すべての予想に反して、彼はとても入念な母親の看護の下、立派に生長した。母親は彼に、とても感じやすい神経繊維と、細い、赤みがかった髪の毛と、かなりの量の雀斑を恵んでいたが、しかし男の飾りたる髭は、これは生来の婦人服仕立屋としてはやはり必要のなかったもので、一切育たない按配であって、実際この善意の母たる自然は、彼に対しまことに正しい気遣いを見せていた。彼は生みの父親の一切の不平、文句の言葉にもかかわらず、婦人服仕立屋となった。　ー　次第に自分の職業にとっては余りに太りすぎて来ていたこの老父は、自らの煙突に怒鳴りながら登って、煙突に嵌まってしまい、かなり長い間見つからずにいて、後に日中発見されたが、それは夕食のスープの準備のために点火されたとき、彼が煙の道を塞いでいたからであった。人々は彼の足を引っ張って下ろしたが、彼はこの好意に対し謝辞を言えなかった。彼は卒中に見舞われていて、どのような手当も甲斐がないとすぐに判明した。彼の未亡人は、更に数年、小さな、しかし選り抜きの貸し出し文庫の読書好きな所有者として生活し、それから同様に亡くなったが、かなり困窮した生活状況であった。これに対し、フェーリクス・ツェレスティーンは、あらゆる麗しき、ロマンチックな感情を一杯に抱えて、遍歴に向かい、我らの友ハーゲブーハーに似て、コンスタンティノープルをはるかに越えて行き、ハーゲブーハー同様、長いこと行方不明者に数えられていた。

しかし彼もハーゲブーハー同様戻って来た。それも履き物を惨めに履きつぶしており、エルサレムからであった。彼はまず数日前、アブ・テルファンからの男に、この帰郷について一つの報告をしていたので、我々はここでも我らの報告の代わりに、彼自身の報告を聞いて楽しむことにしよう。

「いや、エルサレムは素敵なところです」と彼は夢中になって叫んだ、「アドリアノープル、コンスタンティノープル、イズミル[スミュルナ]、ブルサ[トルコ]、[テルアビブ・]ヤファは、それぞれに良さがあります。しかしエルサレムは、感情豊かな人間にとって、すべてに勝ります。そこでは一年中、あらゆる種類のユダヤ人、キリスト教徒の許で、異教徒、トルコ人の許で、青い月曜日[職人休日]というわけで、異教徒やトルコ人は警察を有します。貴方はエルサレムに行ったことがないでしょう、旦那、行ったことがあれば、貴方も話せましょうから。　ー　まあ、まあ、私は二年間、ヴュルテンベルク地方のベーブリンゲン出身の親方の許で奉公していました。残念ながらただの紳士服仕立屋としてです。女性用はすでにアドリアノープルで、涙ながらに鉤に吊さなければならなかったからです。一八五九年の復活祭まで、このベーブリンゲン人の許でとても順調に過ごしました。それから私は親方と仲違いしました。この喧嘩はそんなものなのです。聖なる復活祭に皆がエルサレムでは仲違いします。すでに一週間前、総督のムスリムがトルコ人駐屯軍に革の鞭の扱いを教えます。すべては敬虔な巡礼者をからかうためです。そんなもので、どこでもまず、反撥しないためには、その土地の風習を知る必要があります。最初の年、緑の木曜日[洗足木曜日]、親方が、強情になって、私のことを、ただ歯ぎしりしながら、罰当たりのならず者、役立たずの鈍根阿呆と呼びます。そこで私は考えます。トイブリヒよ、自重しろ、この神聖な土地で、スキャンダルを起こしちゃいかん、と。しかしこの時期、それは少しも相応しいことではないのです。南無三、　ー　翌年私はもう事情に通じています。我がシュヴァーベン人親方が、今回私のことを北ドイツの風袋野郎と呼びまして、上を下への大騒ぎです。アトリエの混乱は、墳墓教会の扉の如きもので、勿論私は投げ飛ばされ、その後私の旅嚢が続きます。立派な知り合いがいなければ、ひどい目に遭っていたことでしょう。それはマル・サバ修道院の一人の僧侶でした。その修道院は、死海に向かう、ケドロンの谷にあって、この僧侶が、包帯を頭に巻いて、角石に座っている私を見つけたもので、右手にはロバが一頭死んでおり、左手には酔っ払いの巡礼がいたのですが、この人は、つまり僧侶のことですが、この祭りの後、私を自らの修道院のシュテールに採用してくれました。これは賄いと寝場所付きの仕事のことです。そこで私はこれらの聖人方の衣装をすべて改善しなければならなくなりました。修道士の方々も繕うべきものを沢山お持ちでした。これはひどい仕事でしたが、しかし手当はそこそこありました。ここの砂漠と敬虔な孤独生活の中、ハーナウとかオッフェンブルク同様に、手仕事で上手く糊口を凌いで来たのですが、この楽しみもまたしても棍棒でお仕舞いとなったのです。これに関しては誰も先が読めないというのは、オリエントでの珍しい点です。その他は余りに素敵すぎるほどなんでしょうが。つまりナビー・ムーサーから一人の男が修道院長の許へやって来て、自分は炎の谷[Wadi en-Nar]、これも同じくケドロンの谷の一部ですが、そこにある宝物を知っていると申し出たのです。そこで、旦那様、修道院は好奇心を抱きまして、実に信じ難い話しです。どこで、どのようにして、どのようにして、どこでだと様々に取り交わされ、このベドウィン[遊牧民]は何にでも講釈します。一人のキリスト教徒がその宝物を埋葬したのだと称しまして、ただ一人キリスト教徒のみがそれを持ち上がる能力があります。明日の夜がまさに適した夜で、そのときにはアラブの魔神が、死海のバール・ロトへ気晴らしの旅に出掛けて留守であり、魔神仲間らと塩の柱沿いの町エン・ゲディ[子ヤギの泉]で宴会を開きますと言うのです。これは多分オッフェンブルクやハーナウ、マイ

ン河畔フランクフルトでは信じられない話しでしょう。しかしマル・サバでは楽しげにこれは信じられます。そして次の夜、我々は正しく宝物を掘り出しました。修道院長と共に、修道院の大半がベドウィンの案内で炎の谷に向かいました。峡谷はほぼ千フィートの深さです。我々がそこにいて、ほとんど出口が見えないでいたとき、キリスト教の精霊がその狼藉に気付いて、素早く戻って来て、自分の権利を確認している具合に勃発しました。最初は四方八方の高みから石が降って来て、それから間近で殴り合いの雨となりました。すべての方面で、我らにとって嘆かわしい具合にそれが勢い付きました。周辺4マイルから、ミルト、ナビー・ムーサー、カーン・フドルール、いや、ギルガルやヘロディウム[Jabal al-Fureidis]、フランケンの山々から、住民が呼び寄せられて、その姿を見せて、この冗談を楽しむのでした。一本の棍棒を持てる者は、それを持って身を隠し、日没以降、我らの到着を辛抱強く待っていたのです。修道院長はまずその聖人達に、それからエルサレムの総督に祈願をしましたが、そのどちらも救援には来なかった。私がこの月光の夜、目にした最後の者は、私とは昵懇の同僚、ミルト出身の仕立屋で、彼はパンの恨みと、技芸上の嫉妬から拳大の砂利石をそのターバンの布に結び付けていて、それで私の頭蓋を殴り付け、私の目の前は、彼の魂同様に真っ黒になって、私は気を失って、私の聖職者の友人達の頭蓋の許に沈み込みました。彼らはすでにケドロンの小川の縁の地面でジタバタしていました。これは、旦那様、とてもロマンチックな冒険でした。しかし私は自分の麻痺から目覚めたとき、例えば炎の谷とかマル・サバ修道院とかエルサレムの病院で目覚めたのではなく、ここ私の祖国の町、ここトルコ人一角、ここケッセル通りの入口で目覚めたのです」。

「何だと」とトゥムルキー州出身の男は、この男も幾多のことを体験していたが、仕立屋がその話しでこの点にまで来たとき、叫んだ。しかしパシャ・トイブリヒは冷静に言った。

「いや、一つの奇蹟です。しかしこの件はそうではないでしょうか、下の家で訊かれたらよろしい。いや、もっといいのは、ここの私の遍歴職人証です。ハーゲブーハー尊台[ハッジ]、そこにどのような経過であったか、記されています」。

実際、そこに分かるように記されていた、それも英語であった。

「我々、モルモン教の書に記載されている通り、御言葉の教師にして説教家の下記署名者達、末日聖徒[モルモン教徒]のイエス・キリスト教会の長老は、民衆の父祖レーヒの出身地にして、主の許に身罷っているこの国内を旅して、そして聖なる町エルサレムからヨルダン川まで馬で行き、水を汲み、黄金の書の子供らを洗礼し、清めんとしていた。各人が小さな樽に、五十クヴァルトほど汲んで、川の流れに沿って下流に、死海、あるいは塩辛い海、怒りの地を知るために行き、そこからまた馬で川に沿って上流へ、我らの修道士と従者と共に行った。そこはケドロンの谷と呼ばれるところであった。我らが炎の谷[Wadi en-Nar]まで来たとき、我々はこの帳面の所有者を発見し、彼を起こして、彼はまだ存命であったので、雌ロバに乗せ、我らと共にエルサレムまで来て、そこで我らは彼を放した。

J.J.ジョンスタッフ
J.W.スミスフィールド
両人
末日聖徒教会の
使者にして聖職者」

「勿論彼らはそこで私を放したのです」とパシャ・トイブリヒはその話しを続けた。「しかし他の者達が私を、半ば冗談で、更に面倒を見て、皆がその名前を私の遍歴職人証に記して、そしてここにはウィーン人のドクトルが[テルアビブ・]ヤファで記しています。私の例は珍しいもので、足は達者であるが、しかし頭がいかれている、と。そしてここにはベイルートからの私の通過証があります。そして私はトリエステからヨーロッパへ送られたのです。すると、私は、たとえ望んでも、もはや勿論行方不明になることはありません。旦那様、ご覧なさい、スタンプ一つ、警察の鉤爪一つ欠けていません。それで私はどなたに対しても、どこの役所でも、自分を証明できます。もっとも私は、最後の警察がその手から私を手放したケッセル通りで、申し上げましたように、目覚めたわけですが。これに対し何と仰有いますか」。

「不思議な話しだ、とても不思議な話しだ」とレオンハルト・ハーゲブーハー氏は言っていた。しかしこの奇妙な遍歴者に衷心から惹き付けられると感じたのは、不思議なことではなかった。殊に約束の地からのこの遍歴者の帰還後、ケッセル通りでのこの帰還者に対する受け入れは、ニッペンブルクとブムスドルフでの彼自身に対する対応と大変類似するものを有していたからである。驚異と賛嘆の日々に続いて、無関心と軽蔑の時がやって来た。気の触れた仕立屋はやがて、偉大なアレクサンダー・フォン・フンボルトにもかかわらず、流行の現象ではなくなった。そしてヴィラフランカの和平以来[1859年7月11日イタリア・ヴェローナでナポレオン3世はオーストリアと単独講和]、緩慢な飢餓にとても慣れて、ほとんどこれを解消できずに、満腹の胃を何か例外と思うことが出来るようになっていた。同様にファッション界も彼の技芸の届かぬ別世界にあって、かくて彼は半ば惨めな繕いの仕立屋、半ばなぶられた使い走り、時給の召使いとしてかろうじて露命をつなぎ、しかし言いようもなく幸せであると感じていた。ケドロンの小川からの自分の砂利は、いかなる魔力を有しているかかのミルト出身の仕立屋が予感していたら、彼はもっとしたたかに殴ったか、それとも決して殴らないでいたことであろう。そしてこの幾多の、立派な、分別のある、威厳のある男にとって、衷心からの願いと恵みは、自分が自分の最良の友から類似の打撃を両耳の周りに、フェーリクス・ツェレスティーン・トイブリヒ殿、俗称パシャ・トイブリヒのように受けることであろう。　ーーー

一つの椅子、一つの机、一つの木製ベッド枠の中のマットレスと毛布、これらが、若干の些細なものを除いて、ケッセル通りのこのエルサレムの仕立屋の全家財であった。彼の部屋の唯一の窓は、流れない沼状運河の溜まり下水へのさほど楽しくない眺めを供していた。

ドアの背後、釘にかかっている彼のズボンのポケットにはわずか二グロッシェン銀貨と若干の銅貨があって、両貨幣とも、大地の侯爵達がその肖像画を刻印させていないものであった。そしてこの周囲三マイル以内には、このツェレスティーン・トイブリヒ、俗称パシャ・トイブリヒほどにかくも気楽にかくも幸せに感じているものは二人といなかった。

彼は自分の臥所に両脚を組んで、第七の天の名誉席にいる、ムハンマド・イブン＝アブドゥッラーフ[Mohammed Abulkassim ibn Abdallah 570-632]のように座っていた。彼はトルコ帽を被っていた。これはベイルートの市場で アブル・アブドゥッラーフ・イブン＝ムハンマド親父から買った、本物のトルコ帽であった。彼は青色と黄色の花柄のキャラコの上

着を着て、黄色のフランネルのズボン下を履いていた。腹巻きにウールのショールを使い、パイプを吸ったが、これは残念ながらトルコ製ではなかった。ハーレムにいるどんなパシャも、屋根裏部屋のこのパシャ・トイブリヒほどに幸せではなかったし、どんな阿片吸引者も、予言者の旗のなびく限り、これ以上美味しいものを見なかったし、感じなかったし、嗅いだことがなかったし、これ以上に卑俗な人生の悲惨さや、苦労、欠乏を免れてはいなかった。　ー

「トイブリヒよ、...」。

それは我らの友レオンハルト・ハーゲブーハーであった。彼はいつもより早く散歩から家に戻って来て、早速この友のドアをノックして、今や彼の両肩を抱いて、彼を劣等な現実の中へ戻して、揺さぶっていた。

「トイブリヒよ、ほんの五分間だけ、目を覚ましてくれ、　ー　ほんの五分間だ、トイブリヒ、若干の意見と若干の質問のためだ。私はたった今フォン・グリメルン男爵夫人と出会った」。

仕立屋は深く息をした。最良の眠りの邪魔をされた人のようであって、重たげな瞼を半分開けて、寝惚けた視線を周りに投じて、全く薄い煙草の煙を自分の本性のエキスのように吹きだして、言った。

「彼女は一昨日旦那様と一緒に新婚旅行から帰って来た。　ー　フィレンツェ、　ー　ローマ、　ー　ナポリ、　ー　パリ、まあ風習の定番です。いや、立派な天候、立派な両替ならば、お二人とも、陸路、海路、快適な旅に恵まれましょう。　いや、エ　ー　ルー　サレム。道中素晴らしく楽しまれたことをご祈念してよろしいかな。フォン・グリメルン殿はとても気安い社交人です」。

このアフリカ人は、唯一の椅子、これは夢想家の仕立屋が自慢して良い所有物であったが、これを臥所のすぐ近くに、あるいは臥所というよりはむしろこの珍しい友の座席に、引き寄せた。彼はこの友の痩せた膝を親しげに叩いて、しっかりと囁いた。

「トイブリヒよ、私がかのレディーに若干の興味を抱いていることは、貴方もすでに承知していよう。お願いだ、もう少し、目を覚ましてくれ。グリメルン男爵のことをどう思っているのだ。この男について貴方の意見を話してくれ」。

トイブリヒは今や、大きく目を見開いて、それから完全に閉ざした。彼の首はほとんど不気味に長く伸びて、素早くまた元に引っ込んだ。彼は、今一度目を開けて、比較的威勢良く語った。

「どんな人であれ、類似のご質問には、まともに返事することを私は躊躇しましょう。私の立場のような哀れな代物には、危険がないとは言えません。どんな仕打ちが待ち受けているかしれません。しかしながら、旦那、貴方に対しましては、　ー」。

「この男の人生について話してくれ」とレオンハルトは苛々して叫んだ、「貴方は幾多の椅子の背後に立ったことがあり、この町のあらゆる諸々の案件や関係に通じていようし、きっとこの場合も、多くの人々、　ー　つまり我々両人ほど用心の必要のない諸人よりも、もっと知り得ていよう」。

「まあ、そうです」と仕立屋は情けなく言った、「勿論、私はここ数年、幾多の椅子の背後に立っていまして、毎日のように多くの人間から、事情に通じているに違いない阿呆と見なされております。いや、エ　ー　ルサレム。私の頭の中はどうなっていましょう。

黒は黒なのか、白は白なのかといつも再三思案しなければならないというのは、何という苦痛でしょう。これは私の鼻か、それとも違うのか、と。私はイブン・トイブリヒのトイブリヒ親父、ダマスカスのパシャなのか、それとも違うのか、と。いや、男爵殿は、自分の正体をより正確にご存じでしょう。アラーの神は彼の分別を嘉し給え。メルゼブルクへ旅支度をしながら、スミルナ[イズミル]へ行ってしまい、眠っているとまたケッセル通りで下ろされます。エリコの宿で語り手がアブ・ハッサンについて語っていますが、この戯けたアブ・ハッサンのメルヘンのようなものです。或る人の周りに人々が立っていて、笑っています。どのパンも、単に自ら高い評価を得てから得られるのです。子供達が路地を追いかけて来ます。老人達は家々でこの者を弄びます。こうして自分の地位を築くのです。目を見開くほど、人はより盲目になります。より固く閉じるにつれ、自分は誰で、自分の本来の家はどこか、より明瞭になります。人は人生を単に、自分の周りの無駄話の如く、人間にとって何が大事かと、聞き取ります。人は自分自身の売店に座っていまして、 ー」。

「ビスミラー[アラーの名において]、貴方の首に絹の紐をかけてやろう」とこのアフリカ人はダマスカスの哀れなパシャに噛みついた。苛々して我を忘れていた、「貴方が語るべきは、フォン・グリメルン男爵であって、滑稽なアブ・ハッサンではない。私はスルタンのシャハリアルでもないし、貴方は利口なシェーラザードでもない。いいか、しっかり気を確かに持て。グリメルン男爵について、貴方はどう思っているかなのだ」。

パシャ・トイブリヒは胃の上部で両手を組んで、次のような話しを、一本調子の時計のような調子と表現で語った。

「男爵殿はそのキャリアを当地の親衛大隊で見習士官として始め、すぐに少尉に昇進しました。この地位で、ライナルト皇子陛下の篤い信頼を得る光栄に浴されました。この陛下は伯父殿、支配の君主陛下のご寵愛深い方です。つまりこのお若い方、御両人とも、当地でまことに順調な人生となりました。陽気な時代となりまして、自らのポケットに沢山のお金が、他の人々のポケットには更に沢山のお金が入る次第となりました。これはあらゆる隅や角で転がる音がしまして、これに異議を称えたい人は、せいぜい我慢して肩をすくめることに留めれば、最も良かったのです。かの陽気な日々、何人かの少なからぬ偉いさんが、指で示してひどい火傷を負ったものです。しかしこれに関しましては、我らの如きものでさえ、究極の真実なんて分かりません。まこと厚くて可愛いヴェールを被せることが死活問題である人々がうようよなのです。それで、例えば、旦那、宮廷顧問官夫人フェーライゼンご本人が貴方にご自分の話しとか、宮廷顧問官殿とヴィクトル少尉殿の話しをなさらなかったのであれば、貴方に私もお話し出来ません。私がオリエントから帰郷した時、ライナルト皇子陛下は疾うに美しい、有名なドレスデン生まれのバレエの踊り子、アルミダ令嬢と左手[身分違い]結婚をなさっていて、彼女と一緒にパリに住んでいました。その当時宮廷顧問官夫人とご子息殿は長いこと行方不明になっていました。しかしフォン・グリメルン殿は健在でした。ライナルト皇子がアミルダと結婚したのは、グリメルン殿のせいではなかったのです。この殿は、出来る限りのことをして、それを防ごうとした。だから、例えば、顧問官フェーライゼン殿の死去をこの殿のせいにするのは、とても不当でありましょう。いや、エルサレム。シリアは素敵です。しかしこちらでも生活は出来ます。いや、フォン・グリメルン殿は絶えず昇進なさって、現在の君主の許でも、 ー 大尉、少佐、中佐、そして今では結局、侯爵宮廷劇場の監督の閣下、美しいフォン・アイン

シュタイン令嬢の結婚生活の夫です。いやいや、私はしばしば砂漠の奥、あるいはその他オリエントでこう考えました。トイブリヒよ、今そなたが突然ヴィクトル・フェーライゼン殿と出会ったら、ちょっとした出来事だ、と。しかしそうはならなかった。彼はセヴァストポリの手前で戦死なさったそうです。旦那、貴方は私に仰有います。老母は、このご子息の死去を信じていない、と。しかし私は、砂漠で彼を待っていましたが、彼は亡くなっていると思います。待っていようがいまいが、関係ありません。それにフォン・グリメルン男爵殿にとってもどうでもよろしいことでしょう。男爵殿は運が良くて、花嫁を連れて来ました。昔の恋は錆びません。これが分かるはずの周囲の人々も、こう主張しています。若い人々はもはや若くはない、と。勿論、勿論、人間がいかに年取ってしまうか、何か顕著なものです。棕櫚の木の下に行って、不在であった期間のうちに。時々、生まれたばかりの子供のような気がします。ハーゲブーハーの旦那、貴方もそう思いませんか」。

夢想家の仕立屋は、この最後の質問で、今やアブ・テルファン出身の男を起こすことになった。

「その通り、トイブリヒ、貴方の言う通りだ。...何と仰有ったかな」と彼は、極めて混乱した沈思と夢想の織物からもがき出ながら、叫んだ。しかし同じ瞬間、パシャ・トイブリヒは再び兎のように、目を開けて眠っていた、あるいはむしろ素早く再度、レヴァントの棕櫚の木の下へ戻って行った。

「良い晩を」とハーゲブーハーは言った。

「サラム・アライクム[御安寧を]」とトイブリヒは、上体を傾げて、言った。

仕立屋のドアと自らのドアとを隔てている暗い通路の向こう側、自分自身の小部屋の前で、このアフリカ人はヴィルトベルク少佐のとても丁重な手紙を持った一人の若い将校と出会った。少佐は自らの名前と少佐夫人の名前で、尊台レオンハルト・ハーゲブーハー殿を翌日の昼食に招待していた。

第三章

いつか疑いもなく「領邦首都」なるものが、大小を問わず、もはや我らの大陸に存在しなくなるような時代がやって来ましょう。そしてその後、ひょっとしたら合衆国はヨーロッパから、その代理公使や公使、総領事、領事を大西洋の向こう側、支配の侯爵家の諸宮廷で受け入れることになるかもしれません。そして啓蒙されて自由の市民が、ニューヨークやオハイオ、イリノイ、ヴァージニア、ルイジアナ等々の各閣下の許、偉大な共和国を満足げに代理することになるかもしれません。かくて作法とかその他すべての王侯的玩具は、市民の手でまこと確実に廃止されましょう。これは事実です。しかしこの浄福で、真に正常な状態が確立されるまで、我々としては現今の状況下でも出来る限り、人生を快適なものとするよう努めたいものです。

「このような政治的状況は常に最も正常規範的なものでして、人間達の大方のささやかな虚栄心にかなうものです」とレオンハルト・ハーゲブーハーは言った。ヴィルトベルク[野生山]少佐は、学者的外見の上品な気の良い男、金縁眼鏡の紳士、ブロンドの髭、禿げ始めている頭であったが、この主張を受け入れていた。もっとも意味深な肩竦めを伴っていないわけでなかった。

ハーゲブーハーは少佐の許で昼食を食べていた。それも全く素晴らしいものであった。今や別れて行く秋の陽の最後の光線が、デザートを金色に染めていた。子供達が大人の間に割り込んでいて、実存の芳しい点の分け前に与ろうとしていた。ある馬車の車輪の音が路地でして、家の玄関前で止まると、その瞬間、ようやくエマ夫人の顔から極上の快適な微笑が消えた。

エマ夫人は少佐に一つの視線を投げかけ、起き上がりながら、言った。

「彼女でしょう。殿方は私の部屋へお出でください」。

このアフリカ人は飛び上がって、夫人にドアを開けるために、様々な椅子を片付けた。少佐は嘆息しながら、最後の胡桃を割って、再び両肩を高く上げて、言った。

「最良の友、今一度貴方のグラスを満たし給え。良き戦友として乾杯しよう。ところで多分、ニコラ、つまりフォン・グリメルン夫人がたった今着いたのだろう。しばらくは私の妻の言う通りにしよう」。

そこは閑静な、かなり広い通りで、そこ、この町の中心部に、ヴィルトベルク少佐は住んでいた。この路地の中を諸世紀は進捗していて、この諸世紀がこの路地を一層居心地悪くすることはなかった。この小国家の比較的声望のある軍や文民の役人達は、ここの堅実な市民階級の許、賃貸で住むことを好んだ。兵舎や官房、協会へ、それがどの方向であれ、ここから容易に、足を濡らすことなく行けたし、この国で最も快適に響く肩書きの者達が、それ故、道を隔てて、玄関前の歩道でもっともらしく挨拶し合っていた。そして幾多の、侯爵と人民に対して功績顕著な者達が、町のこの一帯で、その合法的年金生活を然るべき品位と乱されない閑暇の中、過ごしていた。例えばドイツの領邦小国制が終焉を迎えていず、少佐がその客人をレディー達の許へ案内しているこの移行期間を利用して、我々はこのトゥムルキー州からの男の意見に完全に迎合して、人類の諸感情を最大限に慮って、その市民を国家がただ十人に一人、枢密顧問官や、中将や、あるいはその他立派な給与と肩書きの役人に任命する仕組み[市民登用]によって、その市民を減少させるならば、この国家を、最も人間的に自己を体現している最良の国家と宣言することにしよう。女性市民もこれと一緒に減少されなければならないのは、勿論自明のことであります。

太陽は夙に全く満足して、少佐の食卓から引っ込んでいた。しかしまだ幾多の窓に反射していて、幾多の路地の出窓や、切妻、煙突を金色に染めていた。自分の戸口の階段から少佐の家主は、馬車と馬、劇場支配人の堂々たる御者を査定していた。その向かい側では老財務顧問官が散歩から帰って来て、この税顧問官はその妻を劇場へ案内した。クラブに向かうフォン・プンショルト殿と一緒であった。ルイーゼ・フォン・プンショルト令嬢は、侯爵家宮中手袋工場の優雅な店シュラーダーについて歌い、アマーリエ・フォン・プンショルト令嬢がピアノ伴奏をした。ロココ調バルコニーのある角家の歩哨はとてつもない欠伸をした。同様に町営警察官も欠伸をした。この警察官は路地を何の目的もなくぶらぶら歩いていた。エマ夫人は、窓の壁龕の自分の花や観葉植物の下、両手に編み物の靴下を持って座っていた。ニコラ・グリメルンは小部屋の最も薄暗い片隅にいて、出来るだけ深く寝椅子のクッションに沈んでいた。少佐とレオンハルトはこの寝椅子の近くで、同様に全く快適な座席を見つけていて、事情を知らない者は誰でも、時間はこの人々皆にとって、外の閑静で、清潔な路地の人々と、あるいは、周りの小さな、自負心において完全に充足している首都の人々と全く同様に、快適な夢見心地で静止していることであろうと想像し

たかもしれない。勿論我々は、消息通に数えられるものであって、このシエスタ[昼休み]の気分は必ずしもこれに合致せず、人生は少なくとも居合わせている人物の二人を、赤い、好意的な黄昏が、この会長路地やエマ夫人の編み物道具、少佐の新聞紙上に投げかけているよりも全く別の光輝で包み隠していたと承知している。

寝椅子の柔らかなクッションの中の美しい閣下は、とても内容豊かな旅日記の中身を手短な概要にして、小さな一同に知らせ、次回、適した折に、この輪郭を出来るだけ色彩豊かに充実させるつもりだと約束した。しかし自分は今日そのために馬車を路地の玄関先に止めさせたわけではありません。自分は今日質問することがあります。ハーゲブーハーに説明して貰います。質問は次々に生じます。ローマやフィレンツェは、フリーゲンハウゼンの丘や谷と比べて、カッツェンミューレの周りの森やカッツェンミューレそのものと比べて、何の意味がありましょうか。

「古い水車では滴が滴っていますか」とニコラは叫んだ、「幾多の埃っぽい小道で、岩や神殿の瓦礫の中で、幾多の暑い祝賀会場で、私はその滴りの音に聞き入りました。パリのプロイセン公使、フォン・デア・ゴルツ殿の広間で、私はトルコ公使にそのことを話しました。公使は、ヴィルトベルクさん、貴方のようには笑わなかったものです。少佐、エマをご覧なさい、彼女はそれが分かっています。貴方もご存じでしょう、私はただこっそりとこちらへ忍んで来て、クラウディーネ夫人のことを話して貰うのだ、と」。

「ニコラ、貴女の仰有る通りです」と少佐はかなり真面目に語った、「後の話しは笑いごとではありません。しかしやはり正常ではない。貴女の道がご自分でも明瞭になられていると私が気付くようであれば、エマも安心するでしょう。貴女は、どのような前提があったにせよ、ご自分の運命をやはりご自分の意志で撤回の余地なく定められたのです。いや、親愛なる友の女性、これからはもはや脇見をしたり、昔を振り返ったり、なさらないことです。いかに多くの目や耳が貴女に向けられているか、お考えください。辛抱なさることです。勇気や陽気さは次第に行軍していると湧いてきます。　ー」。

「でも時と共に人はまこと頑固な猪武者になるものでしょう」とフォン・グリメルン夫人は呟いたが、しかしこう付け加えた、「ヴィルトベルクさん、感謝致します。貴方は正しい。百倍正しい。貴方は物分かりのいい男性で、貴方が向こうの観葉植物[ゴムの木]の背後の女性を妻になさった時、ただ向かって来たものを受け入れたのでしょう」。

この数分間、いつもより編み物針を甲高く合わせていたエマ夫人は、今やその手仕事から顔を上げて、言った。

「ハーゲブーハーさん、これから貴方のお話しを更に続けてくださいませんか。どうぞ、そうなさってください。貴方がブムスドルフを去って以来、どのように露命をつながれたか。ニコラも喜んで聞きましょう。その前史は、ニコラ、この殿方がすでに食事中、話してくださいました。　ー　これは全体、まことすべて、メルヘンのようです。私はまだランプを呼び寄せないつもりです。このような摩訶不思議は薄明かりで聞くのが一番です。正常な世界、慣れ親しんだ環境、明るい日中の光はほとんど役立ちません」。

「いや、恵み深いご夫人」とレオンハルトは言った、「摩訶不思議について、これ以上報告することはありません。カッツェンミューレとその中の老レディーは勿論変わらず、一つの軌跡[摩訶不思議]です。しかしニッペンブルクの町は確かに付加語的形容詞『不思議な』に達するものではありませんし、従兄弟ヴァッサートレーターとその月山脈からの

従兄弟にしても、ニコラ夫人は両人を余りに正確に良くご存じで、その片隅で両肩を竦めながら、様々な、全く問題とならないお考えにより良く没頭出来ましょう」。

「友の方、貴方のお望みのまま」と小声で笑いながら、閣下は言った、「話し続けてください。でもお話しの間、私に対する呼びかけは止めてください。そうした呼びかけは少佐か少佐夫人に向けてください。差し当たり、私はただ聞くことだけを希望します、　ー　さあ、続けて、続けて、レオンハルト・ハーゲブーハー」。

「壊れた水車の滴る雫は、相変わらずクラウディーネ夫人に時の存在を教えています」とレオンハルトは語った、「しかし冬、水車小屋は深く雪に覆われます。すると魔法は更に大きくなります。このカッツェンミューレがなければ、私はどうすれば良かったことでしょう。反吐の山が私の喉にまで上がって来て、私は窒息しそうになると、フリーゲンハウゼンへの道を行くしか他に救いの道はなかったものです。百回となくこの道を進みました。冬も夏も、この上ない嘆きと荒れ狂う憤怒の中、打ちのめされた魂はいつでもこの老レディーによって鎖から解放されました。呻き声を上げ、歯ぎしりしながら、私はカッツェンミューレのドアの前に達しましたが、しかし敷居に来るとその度に、しかめっ面は消え失せるのでした。いや、皆さん、私が野蛮人の下に捕囚されていた時代、皆さんは何を仕上げられたことでしょう。あなた方の文明の成功の中、仰向けになって、あなた方の勝利の事蹟を後から読むのは、取るに足らぬことではありません。あなた方は希有な民族です。しかし率直に申して、私の良き友セミベコがそのバガラ黒人の杭に刺されても、それは私が従兄弟ヴァッサートレーターの奥の小部屋で反故紙の山の下、もがいて苦しんだほどひどいものではなかったことでしょう。この善良なる従兄弟は皇帝ヘリオガバルス[奇矯、贅沢な皇帝、218-222]がその薔薇の花弁を客人達に振る舞ったように、　ー　これは上手な古典からの引用なわけですが、　ー　私の上にぶちまけてくれたものです。再度全く、私は実存、本性、世界の概念を明確にしなければならず、再度全く、諸事象の力学、物理学、有機学を習得しなければならなかったのです。こうした人間の五感の此岸、彼岸におけるあらゆる名手、教師、予言者にもかかわらず、従兄弟ヴァッサートレーターの立派なブラック・コーヒーがなければ、クラウディーネ夫人がいなければ、そして老ゲーテのマント[穏和なクセーニエンⅤ：諸君、哀れな罪の子らよ、我がマントを引っ張って、いい加減にしろ。私は激昂して、マントを脱ぎ捨てよう。それを拾うとき、意気揚々となっていよう]がなければ、私は今頃きっと国の精神病院にいて、指で数えていることでしょう。a主観的精神、　ー　b客観的精神、　ー　c絶対的精神、と。そして私が新たな範疇への移行の度に、新たな憤激発作に襲われていなければ、この状態はまことに的確に診療命名されていることでありましょう。クラウディーネ夫人は、語りました。我が息子よ、それは一つの鐘の音で、すべての鈴の音よりも響きます。的確な方法で静かに瞑想出来る者は、その音を聞くことでしょう。　ー　我が子よ、どんな熱い額にも、運命は冷却の手段を有します。ある者に対して運命はその額に優しい手を置きます。別の者には明瞭な仮象です。そして最後にすべての者に一個の土塊を置きます。あなたは静かになさって、あなたの目が見通せるまで、待ちなさい。　ー　老ゲーテは言っています。親愛なるハーゲブーハー、どんなにみすぼらしい駱駝でもろば数頭分の荷物ぐらいは担うことができる[箴言と省察、岩崎英二郎他訳]と。しかしちなみに、私は私の全集本のポケット版第三巻を引用しておきます。その116頁にこう記されています。[穏和なクセーニエンⅥ]。

全体を観照し、まずは内部に
侵入させて、それからまた
外部に戻すことが出来れば、
最良の覚知が得られよう。

それから若干先の下の方に、私の主要な、お好みの箴言があります。

人間のことを考えないこと、
事柄を考えなさい。

従兄弟のヴァッサートレーターは、そのコーヒーを沸かしから見上げながら、叫びました。あの男[ゲーテ]はほとんどいつも正しい。貴殿はこの枢密顧問官殿を頼りとしなさい、従兄弟殿。私は四十年以上、ニッペンブルクで暮らして来た。それに個人的にも彼と知り合っている。ただ後ろ姿を見た関係だが。というのは残念ながら黄金の孔雀亭にやっと出入りするようになったとき、彼は長い外套を着て、馬車に乗って冬の旅に出掛けたからな。ニッペンブルクに四十年間いて、彼はただの一度も私を苦境に立たせなかった、従兄弟殿。[ゲーテ、1749-1832、ラーベ、1831-1910、従兄弟は1798生まれと推定される]。

そなたの運命は決まった、作法に従え。
道は始まった、旅をやり遂げよ。
不安と苦悶に惑わされるな。
これらは永遠にそなたの平衡を乱す。[『西東詩集』箴言の巻]

それで、私のレディーの方々、それに少佐殿、私は自らの我慢と他人の立派な救援で、次第に私の混乱から抜け出ています。私は月山脈から論理学の紙の貼られた輪を通じて、あなた方の明るく、自足した現在の中へ跳躍して来まして、ここに存在しています。十分に厚かましく、槍や投石器で立派に武装しています。人間にとって、自分がその時代の高みにいること、自分の民族の梳る波に揺られることに満足感があるのであれば、私はこのような満足感を高い程度に、それも少しも自慢せずに、享受していましょう。あなた方の一八四八年の革命の騒音は、私のいたスエズにまでその余韻が響いて来ました。その他のすべては砂漠が飲み込みました。アブ・テルファンに鈍い、混乱した噂が届いて、真夜中、血の海になっていて、世界の果て、全く暗闇の中にある魔法使いや悪霊の町が、北方世界の偉大なスルタン達によって襲撃されているらしい。イスラム教は立ち上がって、パディシャ[トルコのスルタン、1853－56年、ロシアに対し、イギリス、フランス、サルデーニャとクリミア戦争を起こした]は、白馬に乗って、地中海を駆け巡って、預言者のすべての子らに戦い勝利するよう呼びかけているらしいと。私は今頃、このパディシャと立派な西側勢力に遅ればせながら、亡きニコライ皇帝に対するその過たぬ対処に関し満腔の敬意を表します。私は楽しくそれに関連する文献を追いかけて読んでいます。バスティーユに生きながら埋葬された男がパリの町の出来事に耳を澄ますように、私はトゥムルキー州で世界史のざわめ

きを聞き取りました。ナポレオン三世とパーマストン卿[英国首相1784-1865]について、丁度隊商宿でアルボンドカーニや偉大な大臣、ジャファル・アル・バルマキー[千夜一夜物語関連]について語られる具合に語られました。[1851年卿はナポレオン三世のクーデターを支持し、外相を罷免された]。一八五九年の出来事も、アラビア風把握で我々に届きました。いや、皆さん、政治的にも、また一般人間的にも、再度適応するのは難しいものです。しかし申し上げましたように、私は出来ました。私は再度、個人的権利や社会的権利について学んでおります。家族について、市民社会について、東洋、西洋について、あなた方について講義出来ます。私は他の人同様、造型美術について、音楽について、最新のこちらの詩について話せます。叙事詩をご希望なら、　ー　お任せください。叙情詩でしたら、十八番です。あなた方のドラマについて私の見解を所望されるなら、　ー　さっぱり存じませんが、しかしそれでもこの弁士は立ち上がり、話し手としてお世辞を言い、この方面でもあなた方の足許に最良のお世辞をお届けしましょう。ロシアとの戦争で倒れた最初のイギリス人の名前は何でしたか、少佐殿」。

「知らんよ」と少佐は笑って答えた。

「ウィリアム・ソルターと言いまして、オデッサ沖、テリブル号甲板で首に木材破片が刺さったのです。ご覧なさい、これを言えるようになるためには、トゥムルキー州から戻って来ることが必要です。私に時間をください。私は以前、牧羊神達や、運命の予言者達が歌ったように[キケロ『ブルートゥス、有名な弁士達について』]、散文や詩で、あなた方に話すことでしょう」。

エマ夫人は夙にびっくり感嘆して、その編み物靴下を膝に落としていて、時々とても憂わしげに額を拭っていた。彼女の夫は笑っていた。しかしニコラは笑わず、頭を少しばかりクッションから起こして、肘で体を支えていた。彼女は小声で悲しげに言った。

「哀れな友の方、貴方の立っていらっしゃるところは、貴方が砂漠から帰郷された折、私の立っていたところです。貴方はご自分の破壊された人生を野蛮な皮肉で総合総括なさろうとしています。笑いの中に自らを救出なさっていますが、同時にあらゆる諸対立の中に転げ落ちています。熱く震える両手で、現在の色鮮やかな塵をかき混ぜています。貴方の方が、時代と共に生きてきた私どもよりも、この時代についてご存じであると、これは確かに言えることでしょう。でももう今日は、貴方のご研究の話し、貴方の涙とあざ笑いで一杯のご成果について披露していただかなくて結構です。聞いていて楽しくありません。少し怖気に襲われます。親愛なるハーゲブーハー、私ども両人は、カッツェンミューレの側に私どもの小屋を二つ、辛抱の私どもの聖母の庇護と魅力の許、建てていたら、その方が私ども両人にとってましであったろうと思われます。これからは、どのようにして貴方はこちらへお出でになって、どのように暮らしておられるのか、更に手短にお話しください。その後辞去しましょう。すでに全くの夜となっています」。

「貴女はいつも正しいことを仰有る、神の恩寵の如く、恵み深いご夫人。貴女が私の勉強成果と名付けられるものについて、もはや話しません」とレオンハルトは真面目に言った、「post spiritum tandem commotio、これはヴルガタ[ラテン語訳聖書]からの一箇所です。レディーの方々、私が訳しますと、風[息吹]のあとようやく動きとなった。聖書はこれに付け加えています。しかし主は動きの中におられなかった、と。　ー　しかしこれについて、差し当たりまだより正確なことを何もお知らせできません。私の現在の歩みの

後に、初めて結果が生ずるはずですから。私が時代の風[息吹]を飲み込んだ後、私はしばしば肉体的目眩の発作に襲われ、私は激しい頭痛と目の痛みに悩みました。従兄弟ヴァッサートレーターは勿論、私を最も鎖に留めて置きたかったことでしょう。彼は、何故自分より他の人々が懐具合がいいのか、分かっていなかったのです。それで二十年後も、私は彼同様にニッペンブルクで心地良く感じるであろうと主張していました。ただクラウディーネ夫人が、ようやく私も自由を得るべく働きかけてくださった。しかし従兄弟は最後の時までその後見役を手放さなかった。彼は神秘に満ちた諸手紙を書き、これらに対する神秘に満ちた諸返事を得ました。そしてある日、彼は自らとても不機嫌に私をこちらへ案内して、ライエンシュラーガー教授に引き渡しました。この古参の若者[学ラン]は、コプト語の文法の作成に無尽蔵に苦心していたのです。私はこの教授に協力しろというわけです。それで我々は素晴らしい契約に至りました。我々は互いに全く似合っていまして、彼は固くこう確信しています。運命は私を単に、彼とその文法のために、エチオピアへ派遣したのである、と」。

「それでセレナは」と少佐夫人は尋ねた。

「セレナは可愛い子で、良い娘です。彼女は私をこの世で最初のメルヘンの語り手であると見なしています。それで私は自分の評判を出来るだけ落とさないよう努めています。この娘が私の背後で、私のことをからかっていないならば、とても真面目で、物分かりの良い小柄な人物と彼女を見なして、間違いではないでしょう。彼女は可愛い」。

「それでパシャ・トイブリヒは」とニコラ・フォン・グリメルンは尋ねた。

「パシャ・トイブリヒはケッセル通りでの壁を隔てた私の隣人です。彼は教授の助手です。教授の家で神々は彼と知り合いになる幸せを私に恵んでくれました。我々は一緒に暮らしていて、一緒に夢見ています。彼ともお互い馬が合い、我々二人も運命は、十分な理由があって、遠く離れたところから、互いを引き合わせたように思えます」。

「運命がそうして貴方の外見を改善しようという意図を有していたのであれば、その手段に関しては残念な点がありましたね」とニコラは言ったが、しかし起き上がりつつ、真面目に付言した、「衷心より貴方に感謝申し上げます、私の友の方。今日貴方の言葉を聞いて甲斐がありました。それではあなた方皆に、今一度お願い致します。これからもこの気難しい気まぐれな女をよろしく辛抱なさって、お付き合いください。聖書は更に続きます、ハーゲブーハーさん。そして動きの後は火となった。そして火の後は、静かな、穏やかな呻り声となった。　ー　この最後のささやく主の声を私は期待しています[列王記上、19,12参照:エリヤに対して主の指示があった]。それでは今日のところはご機嫌よう」。

一人の従者がランプを持って来て、家の主人夫妻が閣下の伴をして玄関まで行き、レオンハルトは彼女の馬車が出発して去る物音を聞いた。さて、彼が同じように辞去しようとすると、少佐も縁なし帽を取って、幾つかの路地、彼の同伴をして出た。何か心にかかるものがあるが、しかし如何にしてこれを最も上手く胸から晴らすことが出来るのか分かりかねている男のようであった。ケッセル通りの角でようやく彼はこのアフリカ人のボタンを掴んで、言った。

「親愛なるハーゲブーハーよ、他の人の案件に余りに深く鼻を突っ込むのは、私の趣味ではない。しかし今私は貴方に一つの質問をせざるを得ない。まこと正直に答えてくれ。貴方は私の妻の美しい女友達と如何なる関係にあるのだ。この女性は一年前、ニコラ・ア

インシュタインとして、貴方とブムスドルフで花輪を作った仲だし、今日もグリメルン男爵夫人として、貴方と一緒にカッツェンミューレの側に小屋を建てたいと言っていたのだが」。

ライエンシュラーガー教授の家庭の友[ハーゲブーハー]は少佐の腕を軽く叩いた。

「彼女は或る世界、つまり私にとって、私の出自とは無縁のアブ・テルファンでは、女主人クラ・グラ夫人の支配下、失われていた世界における美しさのすべてを最初代弁していました。運命は私を隷属化されたキャリバン[シェークスピア『嵐』の怪獣、奴隷]のように私を彼女の道に導き、その彼女は最初また、頭を起こして太陽を見つめるように教えました。私は何らかの仕方で、私の鈍重で悲惨な中へ彼女を引きずり込もうと考えたことはありません。従って社交界で或る関係と呼ばれるような関係に私と彼女はいません」。

「心のつかえが取れたよ」と少佐は叫んで、力強くアフリカ人の両手を握った、「ハーゲブーハーよ、貴方は全く私の心にかなう男だ。明日私は貴方を我らのクラブへ案内しよう」。

レオンハルトは心から笑った。かくて両紳士は、最良の了解の下、互いに別れた。しかし少佐が家で、最高機密の封印の下、まさにずる賢く聞き出したことを夫人に語ると、エマ夫人は彼に対して、更に一層気転の利いた表情をして、一体夫は妻のことをどう思っているのか、夫は夫人が、妻として、主婦として、女友達としてそのことをとっくに承知していなかったと本当に思っているのかと尋ねた。

「フィリップ、私は自分の義務を承知しています」と彼女は語った。

第四章

ライエンシュラーガー教授は持ち家に住んでいて、御料馬門の手前、数百歩の所で、その庭は王侯領公園に接していた。しかしこの公園は、その良さを知る人によってすべての人間に解放された行楽地といったものではなく、すべての押し寄せる民衆に対して少なからぬ歩哨が見張りに立っている所で、これ以上我々には関係ない所である。[ウィーンのアウガルテンをヨゼフ二世は開放した]。

十月の太陽は教授の庭の多彩な葉の上にちらちら反射していた。そしてセレナ・ライエンシュラーガーは可愛く優美に、まだかなり密に葉の茂った藪の背後で聞き耳を立てて、屈んで立っていて、別の茂みの方へ行く曲がった小道に、こっそりと、しかし絶え間なく目と耳とを傾注していた。かの道を父君はアフリカ帰りのおかしな男と熱心に会話しながら歩いていた。セレナはしばらく前から、このおかしな男が言ったり為したりするすべてのことに奇妙に不安げな興味を抱き始めていた。

セレナ・ライエンシュラーガーは、亡き母君が以前、父君の襟を掴んで、祭壇に一緒に進み結婚したその時の母君より、はるかに出来た娘であった。セレナは確かに亡き母君同様に、父君は絶えず監視が必要と知っていたが、しかし彼女は母君のようにそのことを父君に明確に気付かせず、はるかにより繊細な紐に繋いで、父君を正しい道に導いていた。この紐はいわば浮遊する蜘蛛の糸と、少女らしい冗談半分の説得術によって織られていた。しかしこの哀れな子は、また難儀な状況にあった。というのは、すべての厄介事と途方もない責任を伴うこのまことに奇妙な家政がただ彼女の肩にのみ掛かっていたからである。

母君は父君と父君の罪深い花盛りの五月青春[『ハムレット』Ⅲ,3. A.W .Schlegel 訳]に結婚したのではなく、すでに立派な禿げ頭の高等学校教諭となっていた父君をその独身生活の荒れた粘液の沼地から引き上げたのであった。しかし彼女は、祭壇の前で約束した通り、死ぬまで、彼の主人であり続けた。十年間彼女はこの善良なる夫に対して規律の王笏を握っていた。その後、高熱の胆汁熱を発して、彼女の権力の広範囲の乱用に終止符が打たれたとき、彼女はその家を清潔にして残し、またその夫の教授を内的に若干破損しているものの、外面的にはとても尊敬の出来る体面の良い状態にして残した。彼女のひどく内気な小娘は、彼女の埋葬の日、まだ人形と遊んでいた。それ故、教授が家政に関し、極端な蛮行状態に、そこから引き上げられたときよりもほとんどもっと急速に沈み込んだのは不思議なことではない。この両方に対し、彼は何も抵抗できなかった。

物事は全く自然な経過を辿った。この没落のすべての段階について、頭を振りながら帳面に記す幾人かの比較的若い未亡人や、幾人かの比較的老いた乙女が町にいた。しかし無責任にも、この哀れな男はこのどの女性にも、彼のために歩み寄って、家の手綱を取ってくれと頼まなかった。

かくてこの男やもめの文庫は由々しく増大したが、一方生活に必要なその他のすべてが減少した。家政婦達や女中達、小間使い達は、彼を神から授かった獲物のように見なして、破廉恥にも、すべての同情して、憤慨している未亡人達や乙女達の鼻先で、教授を子羊のように刈り取った。かつて、自分の先祖の王座に達したその王座要求者の中で、セレナ・ライエンシュラーガーがその父親の家での支配権を獲得する道で戦ったほどに大きな面倒と戦わなければならなかった者はいないであろう。

珍しいことに、彼女の名前セレナ[陽気な娘]は、洗礼の時、父君によってではなく、母君によって名付けられた。しかし彼女の性格形成には父親と母親とが同程度に寄与した。この点に彼女の勝利の芽が隠されていた。多くの他のレディー達が狙っていた手綱をようやく自分自身の小さな両手に握るという日がやって来た。これはどの面から見ても、ライエンシュラーガー教授にとってとても祝福に満ちた日であった。今やまた素早く家屋敷や台所、地下室に秩序が戻って来た。この家はもはや不正やあらゆる荒廃の宿ではなくなって、庭はもはや、ブラックベリーや刺草、毒人参、育ちすぎたアスパラガスの非ロマンチックな荒れ地ではなくなった。教授自身がもはや人間の目におぞましく映じなかった。コプト族の英知が袖の穴から湧き出すことはもはやなく、教授の後を行く者が、彼の上着のカラーをもはや鏡[襟章]として識別出来なくなった。文庫の増大は家計簿の数字の列と適正な比率関係になった。

そのとき彼女は　ー　セレナ・ライエンシュラーガー令嬢は、　ー　十九歳であったが、しかし胸の中では、来月二十歳になると固く確信していた。そのとき彼女は茂みの背後に立っていて、必ずしも幸せな結婚生活の中の娘とは言えず、悪評と無秩序の中の子供であったが、純粋で、丸々とし、誠実で質朴、良い娘であって、この娘にはいつでも、どんな状況下でも、信頼が置けた。そのとき彼女は大きすぎず、小さすぎず、冬の夕べの若干のお伽噺めいたもの、陽光の月、六月の干し草刈りの時の歌めいたものを帯びた目をしていた。そのとき彼女は策謀的に茂みの背後に立っていて、変わり種ではないイヴの他の娘同様、両耳を欹てていた。しかしながらこの両紳士の、娘にとってとても興味深い会話を、この本の頁を前にした我らの友に伝える前に、今しばらく数行を父君ライエンシュラーガ

ーに捧げることにしよう。
彼は、いつも自分の意志を貫くことに慣れている男のようには見えなかった。彼は両肩を高く上げて、頭を両肩の間に沈めて歩いた。両手を彼は深く、自分の黒い上着のポケットに入れていた。彼の腕が十分に長かったので、彼はそうすることが出来た。彼の髪は白く、上着のカラーの上から下に長く垂れていた。本来彼の人目に着くものは、その広くて、澄んだ、清潔な額であった。しかし彼はこの額のお蔭で、彼はこの世で、最も羨望に値する市民の一人となっていて、彼が人生で甘受しなければならないすべてのことに対して十分な償いをしていた。そして我々が承知しているように、これの総額は小さなものではなかった。結婚生活での不愉快事、雨の日、霜焼け、雑巾、毛箒、枝箒がこの男に対し襲いかかって、彼に対して狼藉を企てようとも、この栄光の、白い額が結局、勝利を収めた。教授ライエンシュラーガーはその純粋な、真の意志を常に貫徹した。
セレナ・ライエンシュラーガーは穏やかな心の持ち主であった。しかし両紳士の会話がまたコプト語に戻ったり、あるいは一年の最後の葉のざわめきが会話の部分の理解を妨げると、その度に彼女は苛立って、小さな足で地団駄踏んだ。この会話の何一つ消失していないのは、我らにとって大きな幸運と思われる。
この件ははなはだ学術的に始まっていた。
「言語の起源は何かな。喉全体からのがさつな自然の声だ」と教授は庭に入るとき、言った。「原人間はとてつもなく驚嘆して、すべて賛嘆は、オー、アーだな。原人間は蹴飛ばされると、頭に一つ穴ぼこを食らうと、鋭い岩に膝蓋骨が当たると、鈍い母音、ウーが、全体的に取って代わる。原人間は、近代の人間も同じだが、口を閉ざして、不機嫌の鼻息を立てる。鼻音は、二人が共同体本能の名で集まる所では、いつも否定して、却下して、共同体の原理を転覆させようとする、　ー」。
「人間は、原人間ばかりでなく、自分の口を狭くし、口の先端を微笑しながら引き戻して、エーとかイーを、愛しい、好ましい、楽しいものを目にすると、発します。これで今日は、言語学から別の同じく高尚な学問への移行と致しましょう」とハーゲブーハーは言った。「教授殿、一般的に女についての貴方の見解は何でしょう。特にヨーロッパの女について」。
教授は全く思いがけず、通りの角で債権者の拳でチョッキを掴まえられた負債書の如くピクッとした。
「な　ー　ん　ー　ですと。私に何をお尋ねです、この質問は、　ー」。
「貴方には若干奇妙に思えましょう。いずれにせよ、とても不意打ちでしょう。実際、私はこの質問にもう少し詳しい理由付けをする必要があります。お聞きください。美学や、世界史、社会的権利の分野で、脂汗を流しながら、私は再度学習しました。個人は私にとって以前より一つの謎になっています。大衆[塊]になると、どのように動き、どのように浮き、沈むか、分かります。個人に向かい合うと、私は今日でもまだかの日、つまり私がロイドの蒸気船からトリエストのモロ桟橋で下りた日同様、見当が付きません。それで私の達した結論は、この確信に他なりません、即ち、人間を知ろうと思う者は、誰でも、ー」。
「比較言語学に専念しなければならない」と教授は賛同した。
「女で始めなければならない」とハーゲブーハーは少しばかりむっとして、自分の文を

締め括って、続けた。

「私は女で始めました、しかし進展しなかった。従兄弟ヴァッサートレーターは単にシュネードラーおばさんと従姉妹クレメンティーネを知っているだけです。私の母と妹は勿論、考察の対象になりません。このような親戚関係は、目を澄んだものにするよりも、更に混乱させるからです。私に対し形式でも気質でも最高の輝きと豊かさで向かって来たのはかのニコラ・フォン・アインシュタインです。彼女は今、フォン・グリメルン夫人となっています。しかし私は彼女のことを調べなかった。単純な理由からで、彼女の方がむしろ私のことを調べる能力があったからです。トゥムルキー州はまだ私の背後に余りに生々しく残っていて、この輝かしい目を見て、私は目を眩まされたというわけです。クラウディーネ・フェーライゼン夫人については､どこかまだ日常生活を送っている人々の間では、全く問題にならないでしょう」。

「いや、それで、この問題で私が何の役に立てるであろうかね」と教授は叫んだ､「比較言語学の男が、このような乱痴気に踏み込む時間はきっと皆無であろうぞ」。

「しかし貴方は結婚されていて、長年幸せな結婚生活を送っていらした」。

「そう、...その通りだ、...そうだったな」とこの学者は若干とてもゆっくりと発した、「そうか、私が貴方を正しく理解しているとすれば、貴方は思索する人間が、どうしてこのようなノーマルとは言えない関係に適応するのか、知りたいのだな。いや、ハーゲブーハーよ、ハーゲブーハー。私を悲しませてくれるではないか。私は今この時、深く貴方の未来を見て、何も喜ばしいものが見えない。貴方はどうして貴方の運命女神に忘恩の振る舞いをするのだ。この運命女神は、これまで適切に貴方を導き、貴方の道から邪魔となる一切を片付けて､内奥アフリカの言語の闇における一つの明かりとなるようにしたのだぞ、コプト語は言うまでもなく。ハーゲブーハー、用心しなさい、結婚するな。その有益さは些少で、エレア派の陽気さの構えは、哲学的人間にとって、余りに手強いぞ。両脚を大きく広げて、両足をしっかりと踏ん張って、抵抗し、反抗するのだ。いや、ハーゲブーハーよ、ハーゲブーハー、私にとっても、貴方にとっても、我々にとっても、私が知っている他の多くの者達同様、敗北しちゃいかん。他の多くの者が、純粋な学問にすげなく背を向けて、応用虚無学の両腕になすすべもなく落ちてしまっている」。

藪の背後の傾聴娘はここで父君同様深く溜め息を吐いた｡しかし別な理由からであった。しかしハーゲブーハーは、感動して言った。

「私をこの、私も認めますが、危険がないとは言えない人間研究の分野に駆り立てているのは、純粋学問上のことです。この研究の実用的応用は多分まだかなり先のことです。これは私がこれまで詰め込んだものすべてと同じで、将来の応用のためのものです」。

「それなら分かる。結局それが真の学者の唯一正しい立脚点だ」と教授は微笑して言った､「しかし貴方に何を話したもんだろう。私の経験はとても主観的なもので、私のテレーゼも私は独特の現象と思っているから、私が私の妻を描写しても、貴方は女性全体の客観的把握には至らんと思うぞ」。

「別な場合以上にこの場合、多くの滴は一つの滝となりましょう」とレオンハルトはこのテーマに相応しい真面目さで語った､「夫は妻について、主観的なこと以外述べられましょうか」。

「彼女は、つまり私の亡き妻は、私と私の安寧のために自らを捧げてくれた」と教授は

嘆息し、家庭用帽子を右側の耳から左側の上へ押した。「妻は確かに毎日それを口にしていた。しかし残念ながら、彼女がもはやいなくなってから、私はようやくそれに気付いた。いや、親愛なる友よ、私はかのとき、青年で、一人っきりで座していて、何も考えず、本と四つの壁に囲まれて、出来る限り快適に暮らしていた。誰も私のことは気にかけず、私も同様にほとんど世間を気にかけていなかった。昼食はコーヒー店で済まし、ボタンが千切れたら、自らまた縫い付けた。　ー　自分がどんなに幸せで、どんなに結構な按配か少しも分かっていなかった。誰も、白昼や夜に夢想することを妨げなかった。人は夢想する、そうだろう、親愛なるハーゲブーハー、夢想するよな。私はいずれにせよ夢想に耽っていた。この夢想で最良の点は、白昼でも暗闇の中でも、夢想に耽ることが出来て、この夢想を自分の書き物机から外の路地へ、あるいは野外へ、そしてそこからまた書き物机の許へ持ち戻ることが出来る点であって、この夢想について人に説明する必要もないわけだ。それはある快適な日のことで、この日私は彼女[夢想]に、つまり私のテレーゼのことだが、尋ねたのだ、彼女が私のものに、つまり私の妻になる気があるか、と。まこと神秘的な時であった。しかし我が最良の友よ、彼女がハイと返事をしてくれて、私がそれから真夜中頃、また私の独身小部屋に一人っきりになって、自分の途方もない浄福についてきちんと整理してみると、やはり私の目に明るい涙が浮かんで来た。もはや何も本来の場になかった。私が考えられないほど昔から俺おまえの関係[ため口関係]にあったすべてのものが、今や私を全く余所余所しい目で見つめるのだ。私はそれでまこと怯えるほどであった。我が煙草箱、我が収集本、我が靴脱ぎ器、いや、我が昔からのナイトガウン、これらすべて、これまで我が友人で、我が所有物であったものが、今や一気に余所のもの、私に対しまだ奉仕してくれるが、しかしすべての素敵な親密さを厳格に自分から切り捨てる諸力に変わっていた。我が新しい幸せが、その影を私の古い快適さに投げかけたのだ。最初これは何か実際不気味であった」。

「まあ、この父君、...何て可愛いことを」とセレナは藪の背後で呟いた。しかし教授は中断せずに、その今や極めてよどみなくなったテキストを更に進んで行った。

「いや、ハーゲブーハー、こんな具合にもはや自分の実存で一人っきりではないとなると、それは疑いもなく甘美な状態だ。しかしそれには慣れなければならない。とても素晴らしい満足にもかかわらず、人はとても剥き出しの、甲殻のないウミザリガニのように柔らかなものに感じられ、人は羞恥し、昔からの友人ばかりでなく、靴脱ぎ器やコーヒー沸かし、ナイトガウンに対しても恥ずかしいのだ」。

「まあ、この武者どもは、この武者どもは」とセレナは呟いて、ツィーテン[名将]のように藪から飛び出して[Fontane:Der alte Zieten,1846、バラード]自分の意見を述べたい気に大いになった。しかし今やハーゲブーハーが述べて、ヨーロッパの女が教授殿に及ぼした最初の印象は、かなり不安を喚起する性質のものであったように見えます、この事実は是非に及ばず集中して熟考するに値します、と結んだ。

「とても不安を喚起する性質のものだ」と教授はいずれにせよ集中的に頭を振りながら繰り返した、「まあ、待ちなさい、　ー　ともかく、文法は脇に置いて、我々の目下のテーマを更に追ってみよう。珍しいことに、昔の思い出がこの際、戻って出て来る。いや、そもさん、自分の幸せにさえ馴染むことが出来ないのであれば、特に、愛によってかくも柔らかく温かく覆われたときに、馴染めないのであれば、そもそも何のために哲学的素養

のある男なのであろうか。テレーゼは天使のように善良であった。それが今や彼女の親戚が突然、出現することになった。極めて快適な展望、明察が四方八方から開示された。何故かくも幸せになるのを長く躊躇っていたのか、自問していたその期間が完全に花開いた。親戚は総力を上げて、私にその得たものの全体の量を明瞭にした。クラブに大きな嗅ぎ煙草缶と共に、かの赤鼻の無愛想な殿方がおった。私は彼を相手に、三年間毎週ドミノをしていた。彼の名前も知らずに、いわんや彼の名前を聞くこともなかった。それが突然、彼女のおじのプフェファーミュッツェという風になって、こう尋ねた。『では彼女はようやくそなたを得たのか、我が息子よ』と。　ー　そしておばのプフェファーミュッツェという人がやはり霧の中から現れて、私の下着や私の借金の正確な記録を取って、その際恐ろしく異端尋問風、嘲笑的であった。いや、我が善良な妻よ、こうした古い、良き、甘美な思い出が出て来る。彼らの上[墓]の草は何度刈られたことか。そうそう、ハーゲブーハーよ、私はよく教会墓地を散歩する。そして夙に管理人と知り合いになっている。この男は草のために雌牛を飼っている。しかし危険もある。というのは、この牛は、弔いの花輪の針金も一緒に飲み込むことがあって、同じように早々と幾度も生ある者の道を逝くことになる。　ー　しかし脱線したな」。

「ここでまた一つ確認したい点があります」とハーゲブーハーが言った。「ヨーロッパの女は、謂わばそのもの自体を土の中から取り上げられないのですか、つまりすべての根や何ポンドかの土塊を共に引き上げず、ただ花だけを胸に抱き締めることは出来ないのでしょうか」。

「めったに出来ん」と教授は言った。

「とんでもないわ」とセレナ・ライエンシュラーガーは呟いた。しかし父君は続けた。

「私は結婚した、親愛なるレオンハルトよ、これから貴方に三言で、私の結婚生活のすべての理論と実践を解説しよう。三十五年間私は角を左手に曲がっていた。そして九月二十九日、昼の十二時二十五分、三十六歳の時から、我が善良なテレーゼの死去まで、私は右手に曲がることになった。貴方があらゆる幸不幸の結婚生活を探求しても、貴方はいつでもこの同じ核心に達し、これを支えに出来よう。いや、ハーゲブーハー、あるとき、ほんのただ一度だけ、私はそれでも左手に曲がろうと試みたことがある。しかし私はこの試みで止めにした。しかしながら、ちなみに、私が結婚生活で体験したすべての快適な時間は、この試みのお蔭であったのだ。というのはこの試みで夫は何の恩義を妻から得ているか、夫は妻に少なからず恩義があると分かったからだ」。

「得難い親方、貴方のこの言葉を、私の根本的疑問への返事と解してよろしいでしょうか」。

「そうだ」とライエンシュラーガー教授確言した、「女どもについての私の見解はこうだ。女どもには二種類あり、未婚の女と既婚の女であり、この女どもとの交易では、人間の男どもは最高の用心が肝要となる、だ。主は、自分の贔屓する者を、惚れさせることによって、したたかに懲罰していると、私はまさか言うつもりはない。[箴言、3,12:かわいい息子を懲らしめる父のように、主は愛する者を懲らしめられる]。しかし一人の人間に対しその主を認識させる立派な手段である。ちなみにまた私は、レディー達は一般的に、個別的にもお互い似ていると信じているし、またトゥムルキー州で注意していたであろう者は、このことについて哲学博士にして、当地の高名なアウグスティーノ・カレッジのオリエント言

語学教授、クリスティアン・ゲオルク・ライエンシュラーガー同様に知り得るであろうと信じている」。

レオンハルト・ハーゲブーハーは、今や最後の質問をこの立派な碩学にした。この質問は厚かましさにおいては、先の質問に少しも劣らないもので、それどころかこの上なく破廉恥であった。

「教授、貴方は一人、娘さんを有しておられます。この娘さん、セレナ嬢は幾多の艱難に対し、豊かに、実害を上回って補償して来たのではないですか。いや、このことについて更に話してください。即刻、貴方と共にコプト語へ戻るとお約束します」。

教授はこのアフリカ人をごく間近に引き寄せて、囁いた。

「その通り、ハーゲブーハー、あの娘は補償してくれている。あれは良い娘だ。あれは一人の女で、揺り籠の時からそうであった。以前我が家に同宿の生徒、フェルディナント・ツヴィックミュラーというのがいて、立派な少年だが、今ジュネーヴ近くの国際的学校にいる。私は心を鬼にして、彼を解雇せざるを得なかった、と承知していただけるかな。彼を破滅させないためだ。この阿呆は、自分はこの若い鵞鳥小娘を愛していて、この小娘は自分なしには暮らせないと確信していた。しかし私は彼に記念帳を出すように頼んで、こう記した。クルル・ムスキリューン・ハラーム、即ち、すべて酩酊麻痺させるものは禁止、だ。そして彼に然るべき両替手形を渡して、新鮮な空気の戸外へ追い出した。今日、彼はとても私に感謝している」。

「確かにそうお思いですか」とハーゲブーハーは深く、思いに耽って尋ねた。

「そのことは、彼が私に書き送るすべての手紙から読み取れる。しかし、友よ、もう来給え。冷たくなってきた。私の書斎へ上がることにしよう」。

両紳士は向きを変えて、庭を去り、家の中へ入った。藪の背後の小兎は疾うに屈んでいて、同じように庭から消えた。しかしハーゲブーハーは、父君の後に従って階段を上がる前に、その小兎を今しばらく探し、見つけ出した。このことを差し当たりうっちゃっていた方が良かったのではないかという点に関しては､未決の問いに留めておくことにしよう。

庭へと続く家の戸口のすぐ側に､この家の台所があった｡竈では陽気に炎が燃えていて、一つの鍋と一つのヤカンが、熾火の側、秘かなデュエットを歌っていて、まさに沸騰せんとしていた。そしてこの竈の前、陽気な炎と鍋とヤカンの前、セレナ・ライエンシュラーガー嬢が立っていた。両の小さな手、これらは普段、対の小燕のように絶えず行ったり来たり羽ばたいて、協力し合っていたのであるが、この時は何もせず、背中で一緒になっていて、手仕事を全く徹底して休止していた。

「セレナ嬢、よろしいですか、少しばかり両手を暖めていいですか」とアフリカ人は竈に近寄って尋ねた。

小柄なこの家の女将は、別な側へ移って、窓の方へ視線を送って言った。

「貴方は丁度今、庭で父君とまこと活発な会話をなさっていました、ハーゲブーハーさん、何についてのお話しだったのです、お尋ねしてよければ」。

極めて情けない表情をして、若いレディーも自分自身も深い遺憾の意と同情とを当てにしていいかのように、両肩を高く竦めて、溜め息を吐いた。

「いやはや、ただいつもコプト語文法です、　ー　恐ろしいもので、長くは耐えられません」。

この瞬間、本当に鍋とヤカンは沸騰を始めて、これ以上に適切な時はあり得なかったであろう。そして火と湯とが、互いにその意見を強力にシュッと撥ねたり、弾けたりしながら語った。強烈な蒸気が生じて、この蒸気の中、セレナ・ライエンシュラーガー令嬢が叫んだ。

「その通りです、ハーゲブーハーさん、本当に長く続くと耐えられません。どうか私の台所から出てください。邪魔です。台所では手が回らないのです」。

咳をし、くしゃみしながら、月山脈からの男は戻って行き、階段を教授の後、上がりながら、何度か呟いた。

「クルル・ムスキリューン・ハラーム[すべて酩酊麻痺させるものは禁止]」。

読者はこれらの言葉がドイツ語では何を意味するかすでにご承知であろう。

第五章

これは、トゥムルキー州のアブ・テルファンで十二年間捕囚生活を送ったレオンハルト・ハーゲブーハーの真実にして珍しい物語の第二部、第五章である。そこで著者のお願いは、著者がいかに並外れた繊細さで、二回目の試験を間近に控えたその主人公をここで描いているか、注目して欲しいということである。この主人公は第一部、第五章で、一回目に臨まなければならず、そのときは情けなく落第したのであった。

警察に対して許可が請願され、認可されていた。ホールが準備され、連邦首都と周辺地域の住民に国内知性新報やその他の幾つかの新聞を通じて、十分に周知されていた。ブムスドルフ出身のレオンハルト・ハーゲブーハー氏は光栄にも、いとも尊い聴衆に、内奥アフリカについて、またこれに対するヨーロッパの人間の関係について、その初回の講演を開催させていただきます、と。

ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりとその偉大な日が忍び寄って来た。しばしば、しばしば、しばしば、その日は決して到来しないように見えた。しかし今やその日が到来して、余りに急なほどに薄明かりとなっていて、その前夜、大きな風が先駆けて吹いていた。

すでに、丁度一時にパシャ・トイブリヒは或る夢から飛び起きた。この夢は今回エリコの棕櫚の木々やゲッセマネやベツレヘムのオリーブの木々の下に彼を案内したのではなかった。咄嗟に彼は飛び上がり、額を自分の臥所の上の斜めの屋根に打ち付けて、こう発して、沈み込んだ。

「いや、エ　ー　ルサレム、　ー　その通り」。

彼は屋根裏部屋で直接かの激しい風を受けていて、自分がある逆らいがたい厄災によって持ち上がられ、板壁を通じて頭をぶつけさせられているという夢を見たのも不思議ではなかった。通路の向こう側の彼の隣人も全く同じ夢を見ていた。これも諸関係を考慮すると、夢の性質にも、この夢想者のこの折の気分や感受性とも矛盾するものではなかった。

この仕立屋が点火器を手探りして、ランプに火を点けたとき、まだ完全な夜であった。五時と六時の間に、彼は命令通りに、自分のパトロンのベッドの前に立っていて、パトロンの上に死刑判決を受けたコンラッドの上のギュルナーラ[バイロン『海賊』1814]のように屈んで、こう囁いた。

「おや、寝ている。穏やかに、可愛く、無邪気に、微睡む子供のように寝ている。これ

から何が起きるか知らないのだ」。

深い喘ぎ声がこれに返事をして、掛け布団の下からハーゲブーハーが呻いた。

「トイブリヒよ、それは間違いだ。何が起きるか、とても良く承知している。微睡んで、無邪気で、可愛いか。いや、トイブリヒよ、阿呆なことを言うな。　ー　貴方は私より結構な夜を過ごされたことでありましょうと衷心から願っているぞ」。

「旦那、いつになく風が強かった」。

「トイブリヒ、そのことは言わないでくれ。私はそのことをまこと不吉な前兆と大いに見なしたい気になっている。いや、神よ、私は何故こんな戯言と関与しなければならないのだ」。

ハーゲブーハーがたった今同様に起きたとき、彼が思い付いた想念や想像は、パシャの頭上の梁よりもはるかに酷薄なものであった。この仕立屋がどんな慰めを口にしても、それは彼自らの軟弱な試み、つまり自分はすでにもっとひどいことを体験済みであると自らに納得させる試み同様、空しいものであった。

黙りこくったままこの両中近東人は、コーヒーを準備して、それを飲んだ。二人の朝のパイプは、陰気な朝の中に、陰気な煙を出した。そして月山脈からの男が、自分のノートを目の前に置いて、暗誦し始めると、妄想が人物となってドアを開け、頭を差し入れ、今晩また伺いたいと約束した。トイブリヒが死産の子供のように、この弁士の黒いズボンを小部屋に運んで来た。そして燕尾服の重要なボタンが一つ見つからなかったとき、彼の胸からとてつもない溜め息が漏れて、ハーゲブーハーは長いこと、自分が話そうと思っていたことの糸口を完全に見失ってしまい、震えているパシャはただ大いに苦労して、単に一つボタンが見つからないだけであると納得させた。

それは偉大な一日で、そのような日によく生ずるように、次々と慌ただしく事が起きた。

すでに八時に息を切らして、フーゴ・フォン・ブムスドルフ少尉が現れて、かくも早くお騒がせしますと許しを切に請うて、はなはだ懇ろに、注意深く、このアフリカ人のご機嫌を伺い、同時に要請もされていないのに、微力を尽くして、夕べの会の成功のために働きたいと約束した。しかし同時にまた自分には心配事があって、この心配事を敢えて、この著名なブムスドルフの同郷人にして、父上の立派な友[ハーゲブーハー]に具申したい。疑いの余地のないことであるが、「老父上」はきっと今日この町へ来て、ハーゲブーハー殿の講演を拝聴するであろう。しかしこの善良にして、しばしば気難しい老人が、早速様々な邪悪な、策謀的な、欲深い民衆の手に落ちて、もし穏やかではあっても、しっかりした友人の手で、正しい、現在の人生観に一致した事象の理解へと導かれることがないのであれば、極めて不都合なことであろう。自分、この少尉殿は、人間の劣等生についてただ余りに良く存知しており、この人間との付き合いにおいて如何なる慎重さが求められるか正確に弁えております。自分の子供としての心は、愛しいが、しかし若干武骨な生みの父親が、その田舎者的固陋さ故に、このような劣等さの渦巻きに分別ある友人の推奨される協力もなしに巻き込まれると思いますれば、立腹致します。父親に対し是非ともこの忠実な下僕エッカルト[警告者]として振る舞って頂きたいという自分の心からのこの依頼に対し、この少尉は多種多様な混乱極まる請け合いの洪水を結び付けていた。彼は後悔や憂愁について、改心と望郷について、自分の鼠捕り犬ホイッグについて、ブムスドルフの税検査官の家の前のジャスミンの園亭について語った。彼は自分の母親について、レオンハルトの

母親について、友情と恋愛について、歩兵の兵舎について、自分自身の竈[世帯]について語った。この竈[世帯]は、これに勝るものはないのであります[黄金の価値がある]が、しかし自分は再度借金をすることになって、そのため自分は息を切らして駆けて来て、出来れば必ずや運命の奸計を市門の所で払い除けて、更にもっと悪巧みに長けた老父上を食い止めて、果てしない愛敬と優しさで、父上を魅了し、完全に　ー　盲目にするのであります。

フォン・ブムスドルフ少尉に続いて、九時にフォン・グリメルン男爵夫人から一通の短い手紙が届いた。この日の成功を願うものであったが、若干遠回しに余りの不用心を警告していて、ヴィルトベルクが今日のうちにも述べるであろうことを、出来るだけ顧慮するよう頼んでいた。

熱にうなされたように興奮して、九時半にライエンシュラーガー教授が現れた。彼はすべてのポケットに、自分がまだ草案の中に挿入しておきたいと思ったメモを一杯入れていた。それにまたセレナ嬢からの挨拶も述べたが、しかしそれは単にレオンハルトの側からの切なる要望に応じたもので、幾らか当惑して口に出した。

セレナ嬢はハーゲブーハー氏に朝の挨拶と今晩恥をさらさないよう願っていた。ちなみに自分はいずれにせよ講演に出席するつもりですし、どんなことがあっても楽しんで聞きたいと希望していた。

「自分では思っていなかったことばかり降りかかって来ます」とアフリカ人は呻いた。「教授、神経発作にかかったとか類似のことを通知したらどうでしょう」。

「それはもっと良くて、実際恥をさらすことであろう」とコプト語の教授は叫んだ。「度胸だ、度胸。無邪気なエチオピア人には反抗した男が、どうしてこのような退化したヨーロッパ人世界に対してかくも臆病になれるものかな」。

「口で言うのは易しいことです」とこの日の主人公は溜め息を吐いた。「貴方はこのヨーロッパ人世界の密な群れの中に悠然と座して、聞いておれます。しかし私は、...いや、神様、神様、刻々と私は息が出来なくなります。私の唯一の希望は、息が八時までに完全に消えてしまうことです」。

「その徴候は承知している。不安喚起状態だな。しかしそれ以上に危険なものではない」と老教授は、すでに一人以上梯子から突き落とした死刑執行人の平静な心持ちで言った。「沸騰散と自負心があれば、最も確実にそれは除ける。沸騰散はベテラン実務家として携帯している。こちらが炭酸水素ナトリウム、こちらが酸だ。トイブリヒ、井戸水を一瓶用意してくれ」。

パシャは東洋の風習に従って、胸の上で腕を組んでいたが、その依頼に取り掛からないうちに、階段でとても物音がして、激しくドアがノックされ、彼はびっくりしてドアから退いた。

「従兄弟のヴァッサートレーターだ。きっといたたまれずやって来たのだ。ほら彼だ」とレオンハルトは叫んだ。ドアが開け放たれて、疑いもなく従兄弟のヴァッサートレーターであった。彼はサモイエード人のように毛皮を着て、入口に立ったまま三回万歳を響かせた。この叫び声は、二番目の更にもっと毛皮を重ねた殿方の力強い肺の中で反響したが、この殿方は道路検査官に踵を接して現れたのであった。フォン・ブムスドルフ領主であって、その息子フーゴの憂鬱極まる予感通りに現れた。彼も「いたたまれなかったのであった」。彼は領邦首都のすべての慶事、祝い事に対する最良の食欲を共に、すべて住民達に

関連する事柄に最大の好意を抱いて現れた。領主はまだ自分の少尉の顔を見ていなかった。

従兄弟ヴァッサートレーターは、まずアフリカ人を腕に抱き締めた。それから彼は教授も、昔からの若造[学ラン]綽名の「茸[ピルツ]」を声に出して、歓呼して抱き、その後、このライエンシュラーガー教授も、かろうじて押し潰されないようにしながら、喜びの歓声を上げて発した。

「万歳、泡取りスプーン[シャウムレッフェル]よ、君がいなければこうは行かなかったことだろう。君が来たのは、健気なことだ」。

「ここで君に我が友ブムスドルフを紹介しよう。ピルツちゃん。レオンハルトは知っている、質朴な男で、第一級の合理的農業主だ。いいかい、ピルツよ、こちらブムスドルフ、古い家系で、とても面白い人物だ。...ブムスドルフさん、こちらはライエンシュラーガー教授です。我が善良な友にして、学生仲間、　ー　博学の泰斗、エジプトの闇[出エジプト記、10,22]に関する論考、コプト語の文法的辞書の鬼です。ブムスドルフさん、話すと途方もなく楽しい相手です。　ー　レオンハルト、ドアを閉めなさい。我々はニッペンブルクから厳しい冬も持参して来ている」。

「いや、開けておきなさい」と領主は叫んだ、教授の手を半ば握手したまま放して、勢いよく入口の方を向いた。

「ジーヴァス、入って来て、下ろしなさい」。

そして、ジーヴァス、ブムスドルフの封土の肩幅の広い、脚の短い、雄牛の首の家来が部屋の中へどしどしと入って来た。瓶[ワイン]の籠を持ち、食料品の背負籠を背負っていて、両者を床に置き、殿方らに素敵な朝の挨拶をし、びっくりしているパシャ・トイブリヒを絶えず目に留めて、壁の方へ後向きに歩いて戻った。

「それで、我々は心おきなく戸を閉めることが出来よう」とブムスドルフの領主は語った、「今や必要なものが全部揃った、　ー　食べ物は内密にハーゲブーハーの母親からだ、レオンハルト。飲み物は私の提供。それでは、何はさておき、立派に、ブムスドルフ風に朝食を摂ろう。その後は、それだけ一層大きく食欲を刺激されて、ホテル・プロイセンの定食を頂くわけだ」。

「トイブリヒ、テーブルをこちらへ寄せてくだされ」と従兄弟ヴァッサートレーターは叫んだ。するとエルサレムの仕立屋は、これまで、まだ飽きずにずっとブムスドルフの家来を見ていたように見えたが、この掛け声で突然極めて元気溌剌となった。十一時にこの件は途方もなく心地良くなっていた。四人の殿方は即興の朝食に大いに敬意を表していた。パシャと家来は殿方と自らに対し称賛に値する熱意で給仕していた。レオンハルト・ハーゲブーハーでさえ、一時、自分の頭上の暗い雲のことを忘れた。ブムスドルフとニッペンブルクから、この従兄弟は不可解なことに、些細なニュースも何も持参していなかった。しかし誰でも、自分の借りを承知していて、自分の立場を立派な自負心と共に堅持していた。特にハーゲブーハーの家に関して、老父は勿論相変わらず日々ぶつぶつ不機嫌で、家の同居者達の生活は十分に暗く酸っぱいものとされた。しかし従兄弟ヴァッサートレーターはここでも未来を明るく見ていて、松明行列と音楽の一行という最良のものを夢見ていて、この一行が怒れる老父を戸口へ呼び出し、老父を丁重に黄金の孔雀亭へ連れ戻す算段をしていた。

「レオンハルトよ、そなたは相変わらず、まだ十全に私のことを知っていないし、私の

期待に応えていない」と従兄弟は叫んだ。「仕掛け全体が疾うに揃っているのだ。明日十時に我々は故郷に帰る。午後の三時に我々はニッペンブルクに着く。実験は即刻、実施されよう。私はアブデラ人の一行の前でデモクリトスのように踊る[ヴィーラント作『アブデラの人々』]。私が演説する。その後孔雀亭で祝宴だ。シュネードラーおじが詫びを述べて、老公には名誉のパイプが贈呈される。そしてクラブの会員が全員後で写真に収まる。それで老公には、子牛製革の、小口金のアルバムが渡されることになる。これが何の役にも立たないのであれば、私は勿論、人間の心についての私の知識を間近の古物オークションに出すしかない、ニッペンブルクの者がそれに対し誰も申し出なくても、何ら不思議ではないわけだ」。

十二時に最後に夕べの会の成功を祈念して、杯が打ち合わされた。ライエンシュラーガー教授は短いスピーチを行って、アフリカ人に、今この時の、来るべき偉大な時に対する自由な陽気な展望の視線をしっかりと銘記するように忠告した。レオンハルトはこのことを約束したが、しかし残念ながら守らなかった。この時間の間に、お互いにもっと良く知り合って、真価を認め合った家来とパシャは、仲間の乾杯をして飲んでいた。一時頃少尉フーゴ・フォン・ブムスドルフがハーゲブーハーの住まいに二度目の訪問をして、懇ろに父親の腕の中へ引き入れられ、この何も知らない老父の肩越しに出席者の一同に感動と感謝の眼差しを投げかけた。

「まことに上機嫌のようです」と彼はアフリカ人に囁きかけた、「これから父をホテル・プロイセンへ案内します、　ー　その後、　ーー　そうですか」。

そして彼らはホテル・プロイセンへ向かった。明るい時間はただ余りに速やかに飛び過ぎて行った。自分の状況を完全に自覚して、この弁士は朝食テーブルの瓶や皿の前に立って、再度暗誦を始めた。パシャ・トイブリヒは更に食べ続け、その一日ずっと食べ続けるという意志を有しているように見えた。

「これは唯一ただ興奮のせいだ」と彼は言い繕って、嘆息した。そしてこう述べて、自分の丈夫な消化組織に少しばかり急ブレーキをかけた。

時間の経過に対して、砂時計をひっくり返しても、何の役に立とう。砂時計を乱暴に揺すって、時間を速めようとするのと同様、ひっくり返しても、時間を遅くはできない。一時頃、トイブリヒは自分の小部屋で自分の燕尾服を叩き、ブラシをかけた。四時頃、再度レオンハルト・ハーゲブーハーのドアがノックされて、再び彼はアブ・テルファンで鞭を受けるかのように縮み上がった。

今回はヴィルトベルク少佐が入って来た。この弁士がフォン・グリメルン夫人の短い手紙を貰ってから、少し苛々して待機していた唯一の人物であった。彼は少佐が何か有益なことを伝えてくれるであろうと期待していて、喜んで挨拶した。果たしてそうであったが、しかし必ずしもトゥムルキー州からの男が想定していた通りではなかった。少佐殿は、エマ夫人からの極上の挨拶と最良の願望を伝えたが、しかしそれを言上するときの表情はとても憂わしげであった。幾つかの普通のどうでも良い口上の後、彼はすぐに本題に入った。しかし我々はこの注文の抜粋を報告することで、満足することにしよう。というのは、分別ある人間なら誰でも、少し考えてみれば、言うべきことは自ら言えるからである。

領邦首都では様々の声や気分があった。すでにこのアフリカ人のことを十分に知っていて、彼に万事を託す多くの人々がいたし、またこの夕べの会を全幅の信頼を置いて見てい

ない人々がいた。最上級の一同の中にさえ、ハーゲブーハー殿への興味は浸透していた。しかしここでも頭が振られて、劣等なアフリカ人的不躾さが恐れられ、かくてアビシニア[エチオピア]の皇帝や、エジプトの副王、ワダイ国のスルタンとの極めて厄介な紛糾に巻き込まれる事態が案じられた。少佐は、このアフリカ人弁士にこう依頼することを自分の義務と見なしていた。つまり、自分と他人とを余りに笑いものにしてくれるな、その表現や冗談、比喩は出来るだけ節度を保ってくれ、常に出来るだけ情緒的側面をひけらかして、自分の利点にもなることだから、常に人間の分別よりも、心情に訴えてくれ、と。多分すでにこのような公の講演の場合には、許可や妨害に関し、幾つかの策謀があった筈であろうと軽く仄めかして、この丁寧な警告は終わった。残念ながら、レオンハルト・ハーゲブーハーはこのことすべてに対して、憤然と微笑して答えるのみであった、つまり自分以外の他の誰も虚仮にするつもりはありません、と。こう請け合っても、余り安堵は見られなかった。少佐は最上級のやんごとない一同同様に、ほとんどまさに憂わしげに頭を振って、この友と握手をして、深く溜め息を吐いて、退出した。この嘆息には、すべての共感の他に、このアフリカ人に対するほんのわずかな一片の羨望が含まれていた。

夕方七時にニコラ・フォン・グリメルンは夫と更に或る会話を行って、この会話は次第にかなり辛辣な調子となった。しかし美しい閣下の化粧の仕上げを妨げるものではなかった。しかしながらこのやり取りのせいで、男爵は今一度ベッツェンドルフの警察長官の許へ馬車で出掛け、この長官と同様に長目の会談を行った。しかしこの会談は物別れとなるものではなく、一つの点以上で、この両勢力の申し分のない一致が得られるものとなった。

この暗い夕方、ガス燈は揺らめく明かりの中、最後の眺めとして、我々にケッセル通りでの一台の辻馬車とライエンシュラーガー教授、従兄弟ヴァッサートレーターを映し出していて、この二人は打ちのめされたハーゲブーハーを馬車に押し込むというよりは、持ち上げていた。二人は彼の後、乗り込んだ。パシャ・トイブリヒは扉を閉めて、御者の側、御者台に飛び乗って、言った。「アラーの他に神はなし、ムハンマドはその預言者」。

ブムスドルフの領主とその跡取りは、異なる小道を通って、講演の地に着いていた。素朴な老父は夙に心からの願いを発していた。息子は差し当たり、二度と目の前に現れてくれるな、と。

第六章

これは、トゥムルキー州のアブ・テルファンで十二年間捕囚生活を送ったレオンハルト・ハーゲブーハーの真実にして珍しい物語の第二部、第六章である。これは形式的にも内容的にも、この真実にして珍しい物語の中心を形成するもので、アフリカ人のこの講演者が座っていて、その美しい魂[ゲーテ由来]のボタンを外して、最善の意志を持って、自らの有り難い話しを目に浮かぶように[Rückert 由来]領邦首都の人々に披露しているピラミッドの先端に当たるものである。パシャ・トイブリヒは小門の所に立っていて、入場券を受け取っていた。選ばれた聞き手がピラミッドの階段の上、講演者の周りに集まっていた。ホールは身動き出来ないほど満員、しかしながら。

「民衆、私は民衆を紹介したくない、民衆を名付けたくない。たとえ十人分の喉、十人

分の舌が私に恵まれようと、たとえ壊れない声と鉄の心臓とが私に恵まれようと」。[こう大勢では、到底私も語り得ず、その名とて述べおおせぬであろう、たとえ、またわたしらに舌が十枚、口が十あったとしても、また声はさらさら疲れを知らず、心は青銅づくりにしたとて：『イリアス』第二書、488以下、呉茂一訳、ドイツ語は Voß の訳]

我らの物語の進行に何らかの影響を有する人々だけでも目に留めるのは、すでに十分難しいことであった。

とりわけ上品な唇に扇を当てて、美しいニコラが母親と夫の間に座っていた。あたかも膝に野の花の花輪を持って、ブムスドルフの野バラの下に座っていたことなどなく、偉大な家族会議への途上のこの月山脈からの男を笑って見送っていたことなどなかったかのようであった。フォン・アインシュタイン中将夫人は、小柄の虚弱な心配症のレディーで、彼女に対し、九十九人の人々が、彼女はかくも堂々たる娘の意志や魂を挫いて、令嬢を三十枚の銀貨[ユダの報酬、マタイ、26,15]で売り払うことが出来たとは信じなかったことであろう。しかしその代わり百人に一人は、このことばかりでなく、更に幾多のもっと悪辣なことをやりかねないといとも容易に、全く確信して認めていたことであろう。この貫禄ある年増の婿殿閣下は、四十二歳から四十四歳の上品なほっそりした男で、痩せこけてはいなかったが、少しばかり草臥れていて、それは脚ばかりでなく、目にも現れていた。彼は頬髭の最新様式を披露していた。彼は鬘を使用していなかったが、その種のものを品良く、人目に着かず着用することは上手いであろうという点に関しては疑念の余地がなかった。これは神々の恩寵であって、この恩寵はすべての禿げ頭の死ぬ定めの人間に恵まれるものではない。彼は警察長官殿とほとんど同じように穏やかに、好感の持てる微笑をした。長官は彼の左手の安楽椅子に座っていた。この微笑はただ彼の義務であった。というのは、このような人々や車掌がもはや微笑しないときには、いかに馬車の車輪が回転し、いかに車輪のボスや車軸が蒸気を発し始めるかという話しになるからである。以前この閣下が大きな声を発したことがあるかについては、彼の軍人生活での最初の時期を知っている者のみが言えたことであろう。ちなみに彼はアフリカ帰りのこの野蛮な男をもっと良く観察するために、優美な柄付き眼鏡を利用した。そしてこの男に対しその夕べずっと極めて好意的に自分の関心と注意を向けていた。それ故、講演者を前にした他の友人達も辛抱して、やはり自分達の好意を表明することがそれだけ一層願わしいことに思われていた。

エマ少佐夫人は極めて誠実な目をして、口元には子供部屋での騒ぎの際のかの不安げな表情を浮かべて座っていて、「正確に注視していた」。少佐は一本の柱に凭れていて、彼のすぐ側にライエンシュラーガー教授が立っていて、緊張の余り震えながら、彼の娘セレナの椅子の背もたれに寄りかかっていた。セレナはすべて自分の不機嫌を言葉にしていて、それだけ一層自由に気まぐれに発言できるようにしていた。もっと奥の方にニッペンブルクの従兄弟ヴァッサートレーターは立っていた。ブムスドルフ出身のフォン・ブムスドルフ殿の側にいて、場違いな脱線や宙返りをして、皆の不興を買わないようにしていた。この領主は法外な借金支払いと手形現金支払いとでまことに悲歌的気分になっていて、それだけ一層「あらゆる説教」を聞き入れる能力があって、とても理解不能なことでも理解できると思っていた。フーゴ・フォン・ブムスドルフ氏は、彼の父親よりも顕著に陽気であって、ただ全く取るに足りない程度、良心の呵責を感じていて、側面のドアからホールに

入った。彼は間近のコーヒー店から一群れの若者らの感激家達を引き連れていた。彼は今日すべての債務[責務]の現金支払いをして、かくて朝約束した言葉、微力を尽くして、夕べの会の成功のために働きたいと固く決めていた。　ー

最後のざわめき、内緒の声、ひそひそ声が広間に見られ、最後の咳払いと椅子の動きがあった。

緑色の覆いのある小卓と二本の蠟燭の背後、講演者の三回のお辞儀があり、かつてアブ・テルファンを去ったという鈍い後悔の感情があり、早速向こうへ戻って、顔を深く、深く、深く、クラ・グラ夫人の膝の中へ埋めたいという、深い憧憬があった。　ーー

「紳士淑女の皆さん、...」。

おや、という囁き声が広間全体を通じて、また或る一角から、小声の、しかし極めて感嘆した意見が漏れた。「おやまあ、あの人はドイツ語を話す」。　ー　講演が始まった。レオンハルト・ハーゲブーハーは是非に及ばず言葉を遣い、ほぼ二時間堅持した。

勿論彼は最初自分自身について語った。しかしかなり控え目であった。そして普通公に講演する男達の慣例以上に素早く本題に入った。スエズの地峡とその地峡掘削での自らの関与についての手短な、しかしまことに目に浮かぶ描写の後、下部エジプトでの滞在に触れ、ただ全く警察長官の予想に反して、副王陛下に対し、かなり気の利いた社交辞令を述べ、その後、象牙商人達や自分の友セミベコと一緒にナイル川を遡り、周知の快適なアブ・テルファンの地に参上していて、ほとんど何故かくもスムーズに確実にそこに到着したのか分からないほどであった。彼は赤道に一層近付くにつれ、自らの自信も増大した。民族の上皮下の色素が一層濃くなり、黒くなるにつれて、彼の考えは一層明るくなった。そして今や彼がトゥムルキー州の岩を自らと文明との間に無事押し込んだとき、彼は現在のヨーロッパの聴衆に対して、とても陽気に、屈託なく、いや破廉恥にすらなっていて、彼はフォン・グリメルン氏の願望や期待、それにヴィルトベルク少佐の最悪の危惧をはるかに凌駕していた。彼は実際比較を行った。それはただ並外れて堕落したドイツ人市民や家臣のみが快適と感じられるような比較であった。彼は敢えて、トゥムルキー州の諸事情と自らの甘美な故郷の諸事情について語り、政治、宗教、国の憲法や民法、司法の養育、税、商い、伝承、ドグマ、無知や偏見を一種独特に処理して自らの講演で話し、それで聴衆は驚いてしまい、国のブロンズ像の亡き陛下が、遊歩道の偉大な侯爵が、石像の騎士団管区長の如く[モーツァルト『ドン・ジョヴァンニ』1787]現れて、この陛下自らが正義を発揮して、この恥辱にいとも恵み深く、ストップを命じられて、このやくざな嘲笑家の耳を御手ずから掴まれて、連れ去られるとしても少しも不思議なこととは思わなかったであろう。

警察の許可がやんごとない貴族と教養ある聴衆の前でかくも不面目に乱用されたことはなかった。このおぞましさの頂点は、この罪人が自分がいかに劣等であるか、いかに欠陥的に振る舞っているか、予感すらしていず、自分は皆に無上の満足感を供給しているのであって、ここでは真理に極めて快適な形式と至上の磨きとが加えられていると感じない者は誰もいないはずだと固く確信して、夢中になっていた点にあった。講演者は弁舌のこの段階で、自分の聴衆と一体化していて、まこと喜んでいた。彼の目に最初浮かんでいた霧は疾うに晴れていた。レディー達の輝かしい社交服は、狂気に陥ったチューリップの花壇のようにもはや互いに揺れることはなかった。段々とレオンハルト・ハーゲブーハー殿は、顔や形姿の見分けがついて、極めて心地良い会話の時のように、個々人に語りかけ始めた。

敬虔さが目覚めるとき、自我は、
この薄暗い専制君主は死ぬ。

とジャラール・ウッディーン・ルーミー[1207-1273]は言っている。そして警察長官殿は座して、まずます甘美に、甘美に微笑して、あたかも関税同盟のすべての甜菜糖工場や製糖所と競争をすることが彼の固い決意であるかのようであった。そしてこの講演者はその語りの中で特に好んで彼を相手にしていた。というのは、フォン・グリメルン殿も座っていた第一列の顔の中で、かくもこの本題へのより一層内心からの没頭が見られるのは他になかったからである。フォン・アインシュタイン将軍夫人は、座していて、婿殿にかなり大きな声で、自分の感嘆を発した。「このようなもの」が、関係当局によってよくも許可されたものだ、と。ニコラ男爵夫人は座していて、深く魂の奥底で溜め息を吐いた。いや、哀れなレオンハルト。ライエンシュラーガー教授は額を何度か擦って、呟いた。「彼は自分の草案をどうしたのだ。これが彼の草案か。これが彼の案の中にあったのか」。エマ夫人は座していて、肩のショールを引き合わせ、全く不安げに目で夫を探した。夫はこっそりと足で行進曲を踏み、妻の視線を出来るだけ避けた。セレナ・ライエンシュラーガー令嬢は目を大きく見開いていて、王侯のように楽しんでいた。そもそも自らの快適さを隠さず、両蠟燭の背後の不思議な人物に対し、関心を絶えず募らせて、その話しを追いかけ、かくて後々の予防措置に対し自らの振る舞いでとても立派に正当化の貢献をした多くの者達がいた。新奇なもの、大胆なものは、当惑させると同時に夢中にさせるものである。必ずしも皆がイロニー[皮肉]を感じていなかったし、深い辛辣さを感じた者はとても少なく、ほとんど皆が、レディー達を除いて、滑稽なものを感じていた。レディー達はこれに対し、それだけ一層、ロマンチックなもの、恐ろしいもの、同情を喚起するものに惹き付けられていた。

否定し得ないことであったが、レオンハルト・ハーゲブーハーは自らの課題に完璧に応じていた。彼は瞠目に値する描写の才能を示して、地中海から月山脈に至る国が聞き手の眼前に生き生きと描かれた。彼の講演は確かにただ一つの蜃気楼であって、幾多のものが歪み、転倒していたが、しかしというか、まさにそれ故しばしば十分魔術的にこのドイツの小連邦首都民、その女達や娘達に作用した。何人かの男は、このクラ・グラ夫人の捕虜に対する自分の興味の中に、羞恥すべき感情が混じっていると感じていた。狭いが、しかしまだ清潔に装飾されているこの環境の中での快適さとは完全には折り合えないはずの感情であった。これらの役人や銀鉱家の魂は何かが揺さぶられて、ホールのドアの許の警察官や聞き手の最前列の警察長官を越えて、退去を命じていた。ここでは誰かが、多くの汚泥や血を経て、あらゆるニュアンスの、トルコ人やムーア人、異教徒達の下、脆く、混乱した状況を通じて、勇敢に切り抜けて、憤激の奴隷状態から、全く救いのない屈辱から、立派な自由の息吹を、この合理的に整然とした通常世界に持ち帰っているのであり、俗物根性の自己意識は、そのため不安な反吐や嫌悪感を覚え、もっと高貴な性情の人間の場合、暗い痛みを覚えて、葛藤状態に陥ったのである。人々の中には、高熱の枕の許、青い海と遠方の一枚の帆を夢に見ている病人の気分の者がいた。一人以上の若者の両目から涙が溢れた。そして様々な禿げ頭の試補や数字にうんざりした出納係が、この次上司と出会った

ら、まず上司から先に挨拶させようと固く決心していた。従兄弟ヴァッサートレーターに関しては、ほとんど描写できない恍惚状態にあった。彼のレオンハルトは、彼の最上の期待を、しかしまた最も邪悪な、最も奸計的な、最も破廉恥な期待をも越えていた。彼は偉大になり、また卑小になった。彼は素早く息をして、ほとんど或る満足のために、窒息しそうであった。この満足に対しては、きっと功労ある文民役人に対するこの国の位階の最低クラスであれ、その要求を認めないものであったろう。

「まことそうだ、まことそうだ、我が息子よ」と彼は呟いていた。古い塀から我らの感情の常緑樹[ジャン・パウル由来]を引きずり倒してしまえ。木蔦を千切れ。緑の葛がなければ、事物はどんなものか、下種どもに見せてやれ。我々は若い頃、何と阿呆だったことか。何と草のように青い阿呆であったことか。まこと、どうしようもなくて、空色の猿用ジャケットを、寸法を取られたまま、着用していたというのが、唯一の慰めだ」。

フォン・ブムスドルフの騎士は、従兄弟に手こずることになって、後にこう主張した。一匹のウナギの尾を掴むのは、簡単なことだ。しかし二十匹のウナギを支配せよとなるとな。自ら弱って、疲れていると感じているのに、午後になってまず自分の唯一の息子に関し、かくも卑劣に窮境に陥った一人の家父長の男に対して、さようなことを要求されても困るではないか、と。

勿論我々に対し、ここでこの講演全体を印刷することは要求されないだろう、講演者の写真を添えることも同様にほとんど要求されないだろう。しかしこの箇所で、結末の断片を添えることにしよう。これは誰も予見していなかった或る破局に導くものであった。それは講演者自身も、彼の友人達も、珍しいことに警察長官も予見していないものであった。

極めて愛想の良い微笑を浮かべて、今また言及された殿方から向きを変え、再度全聴衆の方へ向き直って、ハーゲブーハーは、自分のアフリカでのリアルな経験の個々の話しから最後に一般的な考察へと昇華して、以下のように語った。

「皆さん、私は貴方らに語りつつまず頭に浮かんだ幾多のことをお話ししました。私は出来るだけ、憤然とする真剣なことを、陽気な照明の下、紹介しました。余りに退屈でなかったならば、幸いです。世の中の対立には何か暴力的なものがあります。アラビアンナイトの第九十二夜はそのことを報じています。スリランカの国王が白い象に乗って出掛けますと、王の前に座っている侍従長が時々大声で叫びます。『これなるは偉大な国王、インドの畏れ多い勇猛スルタンなるぞ、偉大なソロモン、偉大なマハーラージャもかすむ、偉大な国王なるぞ』。　ー　この後、陛下の後ろにうずくまっている首席式部官が叫びます。『これなる偉大な勇猛国王も、死を免れない、死を免れない、死を免れない』と。ー　すると民衆のコーラスが答えます。「存命の者で、死を免れる者は、幸いなるかな」と。いとも尊い皆さん、その身分や性別が何であれ、この三つの叫び声によって、揺り籠から墓場まで、絶えずその途上で呼びかけられない者は、この地上にいません。人間界の能力、威力、卓越を知っていて、体と魂のすべての血管、繊維を通じて感じている者は幸せです。十分に強くて、傲慢にならず、十分に落ち着いていて、如何なるときでも、空の眼窩の虚無を覗くことが出来る者は幸せです。とりわけ、先の最後の呼びかけが、いつでも、そして常に最初の呼びかけとなる者は幸せです。この人にとっては、創造に対する途方もない称賛の歌が、どこであれ、如何なる時であれ、無意味な陶酔でもなく、ましてや嫌な酩酊でもなくて、どんなに苦しくても、どんなに暗くても、手を上げてこう叫ぶこと

が出来るのです。私は生きている、だって全体が私の上に、私の周りで生きているのだから、と。淑女、紳士の皆さん、対立というのは、何かとても素敵なもので、事情によってはまことに快適なものです。　ー　今晩かくも多くの方がこのホールに列席されますよう貴方ら皆様の原動力となったのは、コントラストへの誘いではなかったでしょうか。貴方らはお互いに、あるいは自らにこう語っておられたことでしょう。ここ我らの許に、十二年間、地下で生活した者が、来ている。その間、我々は間断なく喜ばしいエーテルの明かりの中、我らの生存を更に紡ぐことが許されていた。彼奴は奇妙な、珍奇な事柄を話してくれることだろう。『墓塚の向こう側の思い出』[de Chateaubriand,1833]を聞いてやるか。この鬼火、この幽霊が、自らの実存の墓場で踊る様を見て、楽しむことにしよう、と。いとも尊い皆さん、この幽霊は踊りました。皆様には、まずこの幽霊が語りたいと思っていることの発端を聞いて頂きました。貴方らは一人の夢想者に対する数多くの覚醒者でありましたし、一人の眩惑された者に対する数多くの目明者であったわけです。しかし私は今ただ一つの願いを持つだけです、つまり皆様貴方らがその計算を、　ーー」。

揺れている小卓で、両蠟燭が揺れ始めた。従兄弟ヴァッサートレーターが、自分のレオンハルトは無事、この夕べのすべての危険、深み、浅瀬、砕け散る波、渦巻きから陸地へ救出されたと思ったとき、この夕べは、従兄弟の何年にもわたるニッペンブルクでの経験を上回る一つの衝撃を与えた。

この演説者はその演説の最良の流れの途中、止まってしまい、ホールを凝視した。今や彼自身に対して、その聴衆の列の中から一つの幽霊が、この瞬間呼び寄せたわけではないのに、一つの精霊が出現したかのようであった。

実際そうであった。そして集会の一同が、この見霊者自身と同様に、思いがけない客人がその中央に押し入ったのであろうと気付いていた。一同は彼のようにその客人を見ていたわけでもなく、その姿を見ても、誰かは分からなかったことであろうが。

全くホールの奥、しかしガスの明かりに照らされて、郵便参事官ツヴィルネマンの両娘の可愛らしい小顔の上に、別の顔が起き上がった。髭面で、日焼けし、皺が寄り、虎の広げられた爪でえぐられたかのように、引っ掻かれていた。

ヴァン・デル・モーク氏だ。...この野蛮なぐしゃぐしゃ顔の余所者が飛び上がり、一っ飛び、アブ・テルファンとクラ・グラ夫人の美しい挨拶を持って、この弁士の首に飛び込んで来ていたら、この方が、この余所者が自分の再会、再認識の喜びを表明したときの、別なやり方よりも、弁士の頭を混乱させなかったかもしれない。つまり、ヴァン・デル・モーク氏は、左手の人差し指を口に当てて、硬直したハーゲブーハーに脅すように右拳を振ったのである。　ー　講演は是非に及ばず、終わりとなった。従兄弟ヴァッサートレーターの脈拍も、演説者の言葉同様、止まった。

今一度講演者は話しの糸を再び見いだそうとした。しかし彼はすぐに諦めて、混乱し、不分明にどもりながら、こう請け合って結びとした。自分は一週間後、運命が許すならば、今終えた話しの続きを話すことになりましょう、と。運命は、それが今晩、警察長官ベッツェンドルフによって代行されている限り、上品に愛想良く微笑していた。これは周知のように、しばしばそうする習慣であって、最終結論がまだまだ確定していない場合でもそうである。

散会の群衆が続いて、皆、ホールから通常の、心地良くない雑然とした様で出て行った。

青白く、興奮したニコラは、母親と夫とフォン・ベッツェンドルフ氏によって守られていた。様々な感情を抱いて、友人達が、混乱し、汗をかき、麻痺した講演者の周りに集まって来た。講演者は、自分に発せられている言葉の一言も理解していなかった。

「ヴァン・デル・モークだ、ヴァン・デル・モーク」と彼は呟いて、ドアの方へ向かった。しかしこの解放者は消えていた。パシャ・トイブリヒはドアで見張りをしていたが、単に聞いていただけで、見ていなかった。幽霊めいた指と妖魔のような拳は声高な、余りに人目を引く追跡を拒んでいた。このトゥムルキー州出身の熱にうなされている男にとって、後は再び友人達の許に戻って、祝宴でのとても散漫な、放心した主人公となるしかなかった。この祝宴はライエンシュラーガー教授が、というかむしろ教授の娘が、彼と従兄弟ヴァッサートレーター、それに騎士フォン・ブムスドルフに対して用意させていたものであった。

第七章

それは心のこもった食事で､小柄で実直なセレナの性格を大いに顕彰するものであった。ただ会食者達の気分状態が晴れやかなものであれば良かったことであろう。これが皆に望まれることであった。従兄弟ヴァッサートレーターの陽気な魂でさえ、段々と黒い雲に覆われて来た。ホストは静かで、物思いに耽りがちで、娘は更に一層静かで、物思いに耽っていた。騎士フォン・ブムスドルフは飲み食いをしたが、しかし味わっていなかった。逆転した昔のエジプト人の如く、彼は自分の亡き祖父ではなく、自分の存命の息子殿を自らの壁に描かせていて、この息子殿によって、昔のテーベやメンフィスの土地所有者が四千年前、悪評この上ない累代の先祖によって不機嫌になったように、同じ仕打ちで機嫌を損じていた。

いつものことで、この日の、あるいはこの時の損得を少しも計算出来ない者達が、最も良く楽しんでいた。パシャ・トイブリヒは、自分のパトロンが、彼自身の表現によれば、今日まさにギリシアの国王クセルクセスが、ペルシアの皇帝アレクサンダーに対して打ち勝つような按配で、まさに領邦首都の人々に対して偉大な勝利を収めたと固く確信していた。ジーヴァス、このブムスドルフ家の剛毅な家臣は、若主人のフーゴから一ターラー貨幣を貰っていて、この貨幣を至福の思いで絶えず温かく、その黄色の革ズボンの左ポケットの中、左手に握り締めていた。このパシャと家臣の両人は、ライエンシュラーガー家の台所に座っていて、この家の二人の女中には、この両人の台所での滞在を出来るだけ快適なものにするよう命令がなされていた。真夜中の鐘が鳴ったとき、この家の下の部屋の方が、上の部屋よりも、時間がはるかに迅速に、快適に経過したことが判明した。この両徒弟を促し、右の膝から女中リーケを放し、騎士に毛皮を着せる手伝いをさせるためには、かなり長い、強引な説得が必要であった。

ピルツ[茸]とシャウムレッフェル[泡取りスプーン]は大いに学生時代のことを話した。しかし令嬢が居合わせていることを考えると最良の滑稽譚も内緒にせざるを得なかった。フォン・ブムスドルフ氏も令嬢と、　ー　農業経営、園芸、酪農、家禽飼育、　ー　について話した。講演についてはほとんど話題にならなかった。それでレオンハルト・ハーゲブーハーは、自分の胸騒ぎする考え、疑問符の連続に関し、自らの魂の中で、邪魔されず

に没頭することが出来た。列席者は皆、夕べの会についての自分の意見を落ち着いた折、詳細に伝えようと決めていた。しかしこの静かな時が、誰にとっても見いだされなかった。ちなみにその方がましであったろう。

殿方らが出発するとき、コプト語の教授は、偉大な文法に対する自分の協力者と握手して、こもった声で語った。

「親愛なるハーゲブーハー、ではまた明日」。

ハーゲブーハーはぼんやりと答えた。

「万事、相応しい時がありましょう。　ー　セレナ令嬢、ご親切なおもてなしに心から感謝致します」。

「いえ、私こそ感謝申し上げます」と学者を父親に持つ賢い娘は叫んだ、「貴方は、私の料理の本に載っているものとは、全く別の事柄を、かき混ぜられて、提供されました。親愛なる神様が、皆様に興奮の後、安らかな眠りをお恵みくださいますように」。

「結構な願いだ。可愛い娘、そのために接吻してくれるかな」と従兄弟ヴァッサートレーターは叫んだ。しかしセレナは笑って、頭を振りながら父君の背後に隠れた。道路検査官もとうとう毛皮に収まった。人々は別れることになった。三回別れをした。最初は食堂のドアの所で、その後は階段の上の方で、最後は階段の下の方でした。しかし家の玄関で、従兄弟はホストを両腕で掴んで、彼の右肩の上に頭を伸ばして、呻いた。「いや、ピルツ、君のワインときたら」。そして左肩の上に頭を伸ばして、溜め息を吐いた。「いや、ピルツ、君のハートときたら」。それから彼を放して、両手を彼の肩に置いて、感動して、彼の両目を見て、長い、長い接吻をしながら、どもって言った。

「いや、ピルツ、君の娘ときたら、...お休み、ピルツ」。

二人の老いた殿方と家臣とをホテル・プロイセンの彼らのベッドまで運ぶのは若干の苦労を要した。しかし辛抱して愛情を持って取り掛かればすべてそうなるように、最終的には万事上手く行った。一時頃、ハーゲブーハーとトイブリヒは二人きりでケッセル通りの住まいまで歩いて向かった。　ー　パシャは酩酊して涙もろく、レオンハルトは完全に素面であったにもかかわらず、この夜の領邦首都の他の住人の誰よりも混乱し、麻痺していた。

自分が多大な恩恵を蒙っているかの男の突然の出現と消滅とを、より一層考えるにつれ、一層このことは彼には理解し難いものに思えて来た。自分は本当に正しく見たのか。錯覚ではなかったか。この現象は本当に真実で、血肉を備えたものであったのか。この現象は単に自らの言葉で刺激された空想による戯れではなかったのか。この夕べの圧倒的興奮のせいではなかったのか。この疑問に対する答えはいつも同じであった。ヴァン・デル・モーク氏は、ハルモニーの広間にも、ダルフール王国のトゥムルキー州のアブ・テルファンに以前現れた時と同様に、思いがけず現れたのである。自分のベッドの縁にズボン下姿で座って、この講演者は、眠たげなパシャにこの途方もない事実を出来る限り明瞭に語った後で、最後の気高い言葉を発した。

「トイブリヒよ」と彼は言った、「トイブリヒ、私が明日早くもう目覚めないのであれば、貴方が入手し得るもので最大の木製スプーンを私の側に置いてくれ、そして墓石にこう刻むのだ、天命により土に帰す[彼は食べ終わった]と」。

「いや、エ　ー　ルサレム」と仕立屋は嘆息した。そして嘆息しながら、レオンハルト

・ハーゲブーハーは両足を高く引き上げて、パシャがよろめいてドアから出て行くのを見て、明かりを吹き消した。ヴァン・デル・モーク氏がこの時まで、二度と彼の前に現れなかったことは、同様に存命の者達の間での彼の日常の息災の印と考えられたし、またレオンハルトが果たして翌朝まだ存命の者達の許で目覚めたことは、明らかに彼はまだ若干早まってスプーンを深皿の側に置こうとしていたと証明していた。

朝になって、町の郵便を通じて、一通の短い手紙がもたらされた。ヴァン・デル・モークの署名のある一枚の葉書で、こう記されていた。

「私を探さないでくれ。私のことを話さないでくれ。ひょっとしたら夕方どこかで我々は落ち合えるかもしれない。だから八時以降、貴方の住まいを離れないで欲しい。貴方がかくも速やかに、かくも好意的に変化した環境下に再び適応しているのを見て、まことに同慶の至り。ひょっとしたら私は幾多の折、貴方の善良な意志と貴方の援助とを頼みとするかもしれない。ご機嫌よう」。

干涸らびた穀物畑への豪雨のように、この書状はアフリカ人の講演者へ作用した。すぐに元気になって、彼は深甚の倫理的破断、惨め極まる悲惨な二日酔いの沈殿から起き上がった。電光石火、彼はベッドから出て、服を着た。彼の足取りで床は揺れ、パシャ・トイブリヒは、驚きを露わにして、その人物の本性と外見の珍しい変貌を眺めていた。そして喜んでその処方箋を知りたかったことであろう。しかしハーゲブーハーは彼に余り注目していなかった。すぐに帽子と雨傘を手にして、ホテル・プロイセンに急いで、従兄弟ヴァッサートレーターと騎士フォン・ブムスドルフがニッペンブルクへ出発するのを見送りに出掛けた。

かなり温かかったとはいえ、それでもひどい霧であった。しかし灰色の朝といえども、この月山脈からの男を陰鬱なものにする力をもはや有していなかった。彼は大股で汚れた路地を抜けて行き、何も気にかけていなかった。幾人かの人々が立ち止まって、彼の姿を見送り、囁きながら、頭を寄せ合ったり、中には彼を指差したりする者達までいた。彼は構わず、もはや頭を肩の間で竦めなかった。人々が自分について何を考え、何を語ろうと、自分には関係ない。

ホテルでは二人の老いた殿方が、静かに朝食に取り掛かっていた。領主は皿の横に開いた札差を置いて、不機嫌に長いこと、うんざりする数字の列をメモしていて、色々な計算を試みて、シャトー・ラ・ローズ[ワイン]の味を台無しにしていた。彼は一度もその計算を満足の行くように解けなかった。

「いや、幸い、やっと彼が来た」と従兄弟は叫んだ、「これは嬉しい心遣いだ。彼に敬意を表すために、我々は来たのだ。嵐の中、雪と雨の中、世界の果て、ニッペンブルクとブムスドルフからやって来て、ここに我々は袋に一杯お世辞を入れて座っている、結婚の申し込みを待っている若い娘の按配で、我らの世辞もこの男にはこの娘同様余り甲斐がなくて、我々はこの殿方がご機嫌いかがと尋ねる気分になるまで、待たざるを得ない。万歳、我が息子よ。さあ、倍速で私の胸に飛び込んで来い。そなたは、その性格にしても、才能にしても、偉大な男として、途方もない人間として、従兄弟ヴァッサートレーターの奥の小部屋から出現した。我が子よ、私に接吻してくれ。昨日のような演説をもう一度してみ

ろ、人々はここでも丁度、ブムスドルフの老父同様、そなたをドアの外へ投げ出すことだろう。しかし鍵は相変わらず時計箱の下にあるからな。それ以上言う必要はないだろう。いや、レオンハルトよ、レオンハルト。このことを存命のうちに体験出来ようとは。老ゲーテは後ろ姿を見ただけだ。しかし私はそなたを後ろからも前からも眺められる。これはほとんどもっと大きな喜びだ。いや、男はそんな風に見えなければならんのだろう。何ものもほろぼし尽くす眼光を持った[シラー『群盗』Ⅲ,2久保栄訳]男、一グルデンの入場料で、人間を、ドイツの俗物どもの頭をアフリカ人式に洗ってやるよう召命されている男はな。いやはや、ここ領邦首都の民衆は差し当たりきっと、そなたがスペイン風にして来る[ゲーテ『エグモント』Ⅲ,2内垣啓一訳]のを二度と要求しないことだろう」。

「そうだな、貴方は父親を喜ばせる息子だ」と騎士は言って、自分の札差を七重の革紐で結び、それを深い溜め息と共に深く胸ポケットに入れた。この言葉が漏れた後、ハーゲブーハーの親父も、自分の幸運を辛抱せざるを得ないのだと思い出して、幾らか当惑して講演者を下から上まで見つめて、自分の溜め息を意味深な、「いや、そうだったな」で補って、それで従兄弟は、再度、心を活性させる哄笑を弾けさせることになった。立派な食欲を抱いて、レオンハルトは、食卓に腰を下ろし、噛みながら、飲み込みながら、同様にへこたれない活力と威勢の良い迅速さで再度食事に取り掛かっている老公達に、故郷へ向けて、ブムスドルフの領主農園に向けて、クラウディーネ夫人に向けて、母と妹に向けて、可能ならば父親にも向けて、最良の挨拶を委託した。九時半に感動的な別れとなった。家来のジーヴァス、は、首都で絶えざる軽い目眩に襲われるように見えて、こう伝えた。郵便馬車は三十分後に出発の予定です、と。ボーイ長が勘定書を持って来て、一台の辻馬車が玄関前で待っています、と。人々は最後のグラスを空けて、互いに多幸を祈り、いつでも互いの息災を念ずることを誓った。ニッペンブルクとブムスドルフより、更に教授と教授の娘御に向けて、そちらからの美辞の挨拶がなされて、領主はこの両人に近々、二つの珍しく立派な、旋毛虫に関して何の疑念も生じないハム、並びに同様の保証付きの、新鮮なソーセージで一杯の籠を届けさせるという固い意図を語った。更になおレオンハルトは、まこと余計なことに、少尉殿が生みの[生殖の]親殿との別れの挨拶に姿を見せていないことに対して自らの訝しさを表明すると、この農業主の老人は、自分はこのならず者など一向気にしていない旨、精力的に自分の意見を公表して、その後、馬車が出発した。即ち、レオンハルトは食堂の小門から両老公と家臣が出発するのを見送って、彼らの姿を次の角まで真面目に目で追った。家臣が御者席から帽子で最後の合図をした瞬間、このアフリカ人は肩に一回打撃を感じ、すぐ自分の側で満足げな叫び声を耳にした。

「奴らは出発したな。彼は去った、万歳。ブムスドルフとニッペンブルクよ永久に」。

少尉フーゴ・フォン・ブムスドルフ殿は、ホテルのビリヤード部屋に隠れていて、自分の子供らしい感情を出来る限り抑制していた。しかし長くは我慢出来なかった。今や彼は立って、自分の魂の最も素晴らしい、内実の、懇ろな情動を放恣に発散していた。

「ハーゲブーハーよ、貴方に話すと、昨日は我ら両人にとって熱い一日であった。昨日が貴方にとっても私同様に骨身に応えるものであったとすれば、今日は早くからベッドに入って、貴方の守護霊[Leonhardは囚人の守護霊、聖名祝日は11月6日]にまこと上等の蠟燭を約束していいだろう、貴方の頭の上に静かに掛け布団をかけてくれる日であればな。私は幾多のことに対して、構えていて、幾多の些細なうんざりごとに対して、然るべき禁欲主義

で武装していた。しかしいいか、この退化した老人には、もう二番目のユダヤ人だけで沢山なのだ。三番目のユダヤ人となるともう荒れ狂う。それで会話の流れで、話しが哀れなローラントに及ぶと、　ー　貴方はあの立派な馬を知っていようし、あの血統、素姓を承知であろう。ハーゲブーハーよ、　ー　それで　ー　ハーゲブーハー、子供らしい敬虔さの立派な最後の残滓があって、私はその言葉を発せられない。 これは黙っていることにしよう。父祖ノア[の陰部]には静かに外套を掛けて覆うことにしよう[創世記9,23]。そして陽気に屈託なく我らの青春を楽しもう。だってほら、いつか我々にも、ブムスドルフからこちらへ参上して、我らの息子どもの借金を支払う時代がやって来るのだから」。

「最後のことを考えると、貴方のような若い衆は、現在を出来る限り楽しもうという気になることだろう」と笑ってレオンハルトは叫んだ。「私のような古参の少年となると、そのようなことを考えても、良き日であれ、悪しき日であれ、そそられもしないし、その逆でもない」。

しかし少尉が誠実にこう話すと、彼は少しばかり立腹した。

「ハーゲブーハー、貴方の言う通りだ」。

彼ら両人は腕を組んで、ホテル・プロイセンの門道を去って、親しげに並んで通りを歩いて行った。しかし今や突然、フーゴ・フォン・ブムスドルフ殿がこのアフリカ人の腕から自らの腕を引き離して、言った。

「いいかい、ハーゲブーハー、この私の黄色のジャケットが疾うに反吐を催すものになっていなかったら、そして出世して十四年目には中尉になることを後生大事に思っていたら、私は小心翼々となっていて、貴方とこちらで白昼堂々、首都の人々の面前で、腕を組んで歩く勇気はなかったことだろう。貴方は枢密陸軍参事官カニーニ殿の視線に気付いていたかい。気付かなかったのか。それは貴方の哀れな魂の安寧のためには、一層結構なことだ。言っておくが、あの方はお偉いのだ。然るに貴方は少しも偉くない。逆に、昨日の夕べ以来、貴方ほど支配者達一同の中で、尊敬と愛着の点で、貴方ほど低い位置のものは二人といない。最良の友よ、国家が将来、真理をしゃべることに特別報酬を出すことに決めたら、そのときには、我々は貴方を再び呼ぶことだろう。しかしそれまでは自ら甘んじて黒人の色を塗って、静かにまた灼熱のアフリカへ引っ越すことだな。貴方はきっとその方がこちらの我らの許でよりも、涼しく座っておれることだろう。我が哀れな従姉妹ニコラに尋ねてみるがいい。あの娘もこう言っていたのだ、享楽的な、元気な、正直な人間であることは、簡単なことで、すべての人間の生来の権利だ、と。しかし人々は彼女を然るべく鞭でもって片隅に追い払った。そして彼女も今や十分静かにこの片隅に座っている。何でそんな目で見るのだ。我がダチ公よ、私同様親父殿によって頭をしごかれた奴に対しては、少尉心得たる者、どんな哲学的考察も出来て、立派な教訓や警告の上品なおこぼれを良き友人達に振り撒くものだ。良い朝を」。

「良い朝を」とハーゲブーハーは言って、脇へ踊るように去って行く若い兵士をかなり長いこと見送っていた。しかしアブ・テルファンの桎梏からの解放の日の思い出、コルネリウス・ヴァン・デル・モーク氏への思いが他のすべてに上回った。そして彼は確かな足取りでケッセル通りに達した。

家の玄関前で、パシャ・トイブリヒが両腕を力なく垂らして、今にも泣きそうな唇で立っていて、彼の側に立派な、制服姿の、恰幅の良い、冥府と夜の娘の使者が立っていた。

この娘はある者達にはアドラステイア[遁れることの出来ない者]と、別の者達にはネメシスと、また他の者達には別の風に呼ばれる者達である。この節度や禁止、そして復讐の女神の使者は、何もだらりと下げさせず、入って来るアフリカ人に、いとも称えられる警察部局からの分厚い、大きな封蝋のある書状を渡した。この使者は微笑していなかった。しかし警察長官殿はこの書状から満面の微笑を浮かべていた。この書状の中で、彼は、いとも尊い、レオンハルト・ハーゲブーハー、その他敬称略、殿へ、光栄にも言上仕るが、自分は、　ー　即ち警察長官殿は、　ー　昨夜の多大な関心の下開催された講演の如き、公の諸講演は、聴衆の教養と啓発の涵養に有益であると確信しているが、しかしまた次の確信も認めざるを得ない、つまりここでも善なるものはより高い善なるものに、即ち、聴衆の享楽は聴衆の息災のために譲らなければならない、と。かくて自分は、　ー　警察長官殿は、　ー　こう告白せざるを得ない。自分は残念ながら、ハーゲブーハー殿が、社会に物語を語るという問題を把握する際のその仕方、作法に全く一致出来ず、更にまた他の規範的側面から是非に及ばずこれに対して抗議すべしの声が生じている、と。衷心から遺憾に存ずるが、自分は、　ー　警察長官殿は、　ー　それ故やむを得ず、いとも尊い殿方にこう伝達しなければならない。やんごとない当局は、熟慮の末、こう確信するに至った、と。即ち、この種のいかなる将来の公表であれ、これに静かな、しかし確かな拒否権を行使することが、自らの責務である、と。

この丁重な、内密の役所書状の結末で、手紙の発信人は宛先の者に、立派な敬意と共に結びの挨拶を述べ、最後に飾りとして、技巧豊かな渦巻模様でその洗礼名、家系名、並びに肩書きを下に添えていた。

ヨーハン・フォン・ベッツェンドルフ
王侯領警察長官

パシャは溜め息を吐いた。「いや、エルサレム」。しかしレオンハルト・ハーゲブーハーはこの紙屑をポケットに入れて、公安部の従者を通じて、この公安部長官宛にまことに立派な挨拶を委託して、自分の住まいの中には上がらず、ライエンシュラーガー教授の許へ向かった。助言や慰謝を求めるためというよりは、そこの娘っ子に一杯のコーヒーを頼むためであった。

コプト語の碩学も、助言や慰謝を言えなかった。彼は倫理的にもまた肉体的にも打ち砕かれて、ソファーに横になっていて、この下劣な世界からすっかりピラミッドの腹の中へ隠棲したいという願望だけを語った。セレナは、以前よりも明るい目をしていて、逆にその陽気さをほとんど抑えきれないでいた。ハミングし、歌いながら、彼女はコーヒー沸かしの周りを歩き、こう主張した。警察長官殿は、全く自分の心にかなった男の方です。この方は、品のあるものは何か良く承知されています。父君とハーゲブーハー殿は本来、長官殿に丁重に感謝すべきでしょう。速やかにこのような『パレード』に終止符が打たれたのですから。セレナ・ライエンシュラーガー令嬢はこう主張するほどまでに至った。そもそも気の利いたまともな人間は、自分を公然と笑いものにするような不作法は致しません、と。

「私は名前を言いたくありませんけど」と彼女は語った、「でも私は、ご自分達の奥イ

ンドの辞書やそのトルコ語の文法についてお二人で意見を述べることに対して、誰からも茶々が入らないのであれば、そのことを神様に感謝すべきであろう方々を存じています。誰かが自分の家の中で逆立ちをすることと、公開の市場で綱渡りの踊りを披露することとは、いつも若干異なるものです。これが、この件についての私の見解です」。

「セレナ令嬢、まことに理にかなった見解です」とレオンハルトは叫んだ、「いや、分別ある人々がその立派な助言をいつも適した折に仰有るのであれば、何とも素晴らしい世界に我々は生きていることになりましょう。それでは二杯目のコーヒーを願い奉ります」。

「我が娘よ、私のパイプにも詰めてくれ」と教授は言って、若い家の友の方を悲劇的言葉で向かって見た。「今日最初のパイプだ」。

第八章

丁度七時にこのアフリカ人は全くお伽噺めいた心地よさの世界からとても無愛想な薄暗い夕方の世界に出て行った。娘っ子とパイプとコプト語の辞書というこの三重の鎮静剤効果で、教授は、男らしく学者らしく、確固と垂直に、しかし寛いだ風に自分の安楽椅子に就任することになった。またレオンハルト・ハーゲブーハーは自分の注意を、辞書と可愛く周囲を動いているセレナとの間に振り分けることになって、彼にとって秒針は、暗くなるまでの間、素早くまた好ましく進展したのであった。黄昏になると、勿論、玄関の前で待っているかの男のことがより一層強く思い出されてきた。レオンハルトはライエンシュラーガー教授の許で夕食を摂らず、辞去して、ケッセル通りへの帰路、しばしば肩越しにヴァン・デル・モーク氏を探し、自分の背後で、暗闇の中、男の足音が近付いてくると、一度ならず立ち止まってみた。しかしヴァン・デル・モーク氏は路地で近寄って来ることはなく、家の玄関で待ち受けてもいなかった。しかしアブ・テルファン出身のこの男が自分の部屋のドアの錠に鍵を差し入れたとき、トイブリヒが自分の部屋の入口に現れて、合図し、囁いた。

「旦那、私の許に一人の客人がいます。貴方を一時間以上お待ちしています」。

一っ飛びで、レオンハルトはこの夢想的仕立屋の屋根裏部屋に入った。しかしまたしてもこれはヴァン・デル・モーク氏ではなく、自分には全く面識のない、中年の、軍人風の風貌の殿方と向かい合うことになった。

テーブルには物憂くランプが燃えていて、部屋の中にはほとんど十分ではない明るさを届けていた。テーブルの横、パシャの客人が、パシャの唯一の椅子に座っていた。しかしハーゲブーハーが入ると、すぐに身を起こして、手短にお辞儀をして、硬い声で語った。

「私の名前はキントと申しまして、　ー　ヴァレンブルクの囚人部隊の退役少尉です。私は貴方がご存じの男、ヴァン・デル・モーク氏の依頼で参りました。同氏は、今私の住まいにいまして、少しばかり外せないところです。それで彼は、ハーゲブーハー殿、私を通じて、今晩にも貴方のご尊顔を拝したいとこう望んでおります。私は貴方のお役に立つべく、貴方を早速彼の許へご案内する所存です」。

この男は若干奇妙に錆びた物腰であって、この語りかけは、人の足許へ投げかけられる一片の脆い鉄に似ていた。しかし興奮して息を切らして、レオンハルトは即刻、自分の解放者の呼びかけに応ずる用意があると述べて、そして自分の溢れる感情のまま、いつもの

自分の流儀、習慣以上に言葉を費やした。

「結構です。参りましょう」と少尉は言って、帽子を目深に被り、腋に杖を抱えて、後に続くよう手で仕草をして、ドアから出て、玄関で「明かり」と司令して、この殿方と一緒では少しも心地良くなかったように見える、不安げに先を行く仕立屋に、先にランプで階段下を照らすようにさせた。路地で彼は右をの方を指して、パシャには家に戻るよう司令して、そして誰かを連れて来る際の技法は、出来るだけ単純な原理に還元したいと望んでいる男らしい歩き方で進んで行った。

レオンハルトはそれでも、この沈黙がちの男と会話をしようと何回か試みて空しかった。少尉は何も聞き入れず、どの質問にもこう答えた。

「私はその関連では依頼されていない。ただヴァン・デル・モーク氏に尋ねられたらよろしい」。

彼の足取りも、アフリカ人の性急さに合わせたものではなく、早足にはならなかった。落ち着いた行軍のテンポで、彼は同伴者を、町を横切って池までの遠い道のり、案内した。これらの池から、領邦首都は火事の際、必要な水を調達していた。こちらのかなりまばらの建物の、悪評の一帯に、半ば荒れた庭園や、粘土坑、土砂の山、普請場に混じって、荒涼たる、禿げた、塗料の剥げたり、塗られていない家があって、ここに囚人部隊の先の少尉は住んでいた。ただ彼のような男だけがこの地に居を構えられたのであろう。

急な、新しい、しかし脆そうな階段を上に、ヴァン・デル・モーク氏のこの使者は同伴者を案内し、左手を進むように助言した。というのは、右手は「快適になるよう」、手摺りが欠けていまして、すでに若い一人の不用心な娘がこちらから二階分転げ落ちて、背骨を折りましたので、ということであった。

三回目の踊り場で、キント少尉は、「ここだ」と語り、ハーゲブーハーの手を握って、深い暗闇の中、あるドアまで導いた。彼はそのドアを、ノックもしないで開けた。照明の乏しい部屋で、どの部分もこの家全体の印象と矛盾していなかった。二，三の劣等な家具や、鉄製の折り畳みベッド、その上では壁に将校用サーベルが掛かっている。そのベッドには男の人影があったが、彼は服を着たまま、ベッドに身を投げかけていた。ヴァン・デル・モーク氏である。

「ようやくお会いできました」とレオンハルト・ハーゲブーハーは叫んだ、「貴方に信頼されているすべての神慮が称えられよ」。

彼は最敬礼をした。寝ていた男は半ば身を起こして、トゥムルキー州出身の男に熱い手を渡して、力強い握手となった。

「新郎に憧れる娘のように、私は、ヴァン・デル・モーク殿、貴方に憧れていました。今ようやく会えました。以前ハルツーム州[スーダン]での別れのように、今回、私から消えないでください。貴方は、それでは、やはりドイツ人なのですか。まことに、まず哀れな奴に多大な恩恵を施していながら、他のすべての機械仕掛けの神のように、また雲の中に隠れてしまうのは、不作法につれないことです」。

「私が貴方に恩恵を施したかな。貴方は、今日、この時間、本当に私が偶然アブ・テルファンの小屋を訪問したことに対して、謝意の必要性を感じているのかい」とヴァン・デル・モーク氏は、粗放に笑いながら尋ねた、「いや、それだったら、実際、私が解放者、救済者として貴方に手の接吻をさせなかったのは悪かったな。もしそうであれば、心から

許しを請うし、自分の以前の怠慢の罪に対してどんな償いでも致そう。それでは、私が貴方をかの黒人の魔女から買い戻した時、私は貴方に対し、本当に親切に振る舞ったわけだ。それで、それ以来、何千回とどん底にいるとき、貴方の運命に対する私の厚かましい介入に関して、私のことを呪わなかったわけだな。私はしばしば、静かな時間、自分がしたことに関して良心の呵責を覚えたのだが、貴方は私を祝福してくれる。　ー　これはとても不思議なことだ、とても奇妙なことだ。それで私はほとんど貴方に対して祝賀したい気持ちになる、必ずしもまだ半信半疑ではないのだが」。

レオンハルト・ハーゲブーハーはかくもワイルドに話す男の臥所へ椅子を近付けて、今や珍しく平静に語った。

「親愛なる貴殿、貴方がアブ・テルファンの私を見いだしたとき、私は愚鈍な者として、貴方の道の上に寝ていました。当時貴方は偶然、私と出会いました。私は自分の最後の力の息を振り絞って、貴方が私の上を踏み越えて行かれたとき、呼びかけました。貴方の助けで私は救い出され、勿論、大いに努力して、自分のヨーロッパ人としての実存の断片を再び接合しました。さて、今日は何という日でしょう。今、我々は役割を完全に取り替えてしまったのでしょうか。我々を今この時、再会させているのものは、もはや偶然ではありません。貴方は病んでおられ、私が以前貴方に呼びかけたように、私に呼びかけています。では過去の更なる詮索はすべて放棄しましょう。ここに私はいます。私は何をしたらいいのです。私は貴方を貴方の鎖から解き放つために、何のお役に立てましょう。貴方は昔、貴方の国籍について否定なさっていた。今やすべての仮装を棄ててください。お互いはっきりと目の中を覗こうではありませんか。思いますに、我々両人とも同じ流派の卒業生で、この流派は美辞麗句への一切の迷いを断つものです」。

「おや、おや、戦友よ、聡明だな」とヴァン・デル・モーク氏が、今やすっかり臥所から起き上がっていて、叫んだ、「しかし貴方はまだ如何に貴方の言う通りなのか、まだ分かっていないだろう。今一度私に貴方の手を貸してくれ。そうだ、私は心から貴方を歓迎する。トゥムルキー州の懐かしい向こうでも、万事恙ないことだろう。昔の友人達や知人達がとても愛しく貴方のことを偲んでいよう。さて、ひょっとしたらこうした心地良い思い出を語るための時間もいずれ設けられるかもしれない。しかし、今は、貴方が的確に述べられたように、美辞麗句は要らない。いや、レオンハルト・ハーゲブーハーよ、私は貴方を必要としている。それ故貴方を呼んだのだ。貴方に、現在の私のこと、過去の私のことを知って貰わなければならない。このことは今貴方が夢にも思わないほど、必要なことなのだ。では少尉、話して頂きたい」。

キント少尉はこの時まで腕を組んで、テーブルに寄りかかっていて、この二人の他の男達の会話が自分にとっても関係があることを、何の動きによっても、筋肉の痙攣によっても示さずにいた。さて、今や彼は少しばかり身震いをして、壁に向かって語った、というかむしろあたかも自分の語りを鉄製折り畳みベッドの上のサーベルに向けているかのようであった。

「ハーゲブーハー殿、私について自己紹介すると、私は当地の小市民出身の通常の者、キントでして、学者的教育やあるいはほんの十分な教育も受けていません。私は平時の兵士でしたし、生涯でただ一度だけ、実際の砲撃を指揮しました。軍隊組織は私の肌に合っていていました。時間厳守の整然とした職ですし、この中では身綺麗に、時間通りに行動

しなければならず、その義務や任務が予め広く明確に了解されている職は他にないからです。それで自分の性分に従って、兵士となりました。私は賢くて学のある男ではないとしても、それでも、読み書きや計算は出来、軍人服務規程通りに静止したり行軍したり出来ます。かくて、時の経過と共に出世しまして、申したように、生来の規律性、時間厳守、清潔好きで、一等軍曹となりました。それが性に合っていて、それ以上の高望みはしなかったものです。一等軍曹のとき、私は一人の女を娶りました。他の人間をどうしてかくも好きになることが出来たのか、今日でも私には分からない。というのは、残念ながら、私は根本的に厳しい男でして、これは自分には分かっていることで、人生に余り喜びを感じないからです。これもまた私の性分です。しかし私は自分の妻を愛しました。自分自身に逆らっているわけで、それで彼女も最後は気付いたに違いありません。自分がどんなに私に好かれていることか。確かに気付きにくいことだったでしょうが。彼女は良い女で、礼儀正しく遇せられる大方の者同様です。今はもう彼女は亡くなっていて、私の子供も死んでいます。それで私は構わないのか、それとも心が蝕まれるのか、私には分かりません。少なくとも私はこの蝕まれる場合に備えて、最善の覚悟で構えていました。それでどうなっても、大丈夫です。私の子供も私は愛していました。その子供がまだ全く小さくて、私の膝に座っていたとき、私は他の人々、つまり一等軍曹キントのように材木と革から出来ている者ではない他の人々同様に、この世を薔薇色に赤くまた金色に眺めるそういう時間にも多分恵まれていました。息子の方でしたら、多分私にはもっと良く似合っていたことでしょう。しかし私は娘も感謝して受け入れました。しかも美しい娘となりました。我ら如きものには、もったいないほど美しく、上品でした。　ー　どんな物事でも、若干正当ではないと思ったり、それが最も大事なことであるかのように、どんなわずかな悪もしないとなったら、何という人間になってしまうことでしょうか。私は哀れな間抜けのままであって、私は単に平時の兵士であったわけですが、私はそのように生涯悪を寄せ付けなかったのです。私は自分に対する非難を誰にも許さなかった。人間が一度、自分の性分に従って、一人の軍人になったら、その人間は自分の領主の紋章付きボタン同様、自分の名誉を真っさらに保たなければならない。自分の評判にも、自分の制服にも一点の埃を付けてはならない。ならず者となっては良くありません。良くないこと、これはこの世で神様が許さないし、連隊では大佐が許しません。お二方、お分かりでしょう。どんなに防いで、閉じ込めても、出てくるものは出て来ます。万事潮時が来ます。長めの猶予であろうと、短めの猶予であろうと。それでライナルト皇子の野蛮な時代、フォン・グリメルン男爵殿と、私は同じ中隊に所属していました。そしてこの男爵のお蔭で、私はヴァレンブルクの囚人部隊の少尉としてサーベルの革緒[士官の標章]とポストを得ました。ただ我らのような者にのみ与えられる邪悪なポストで、まさに鉄の玉の付いた鎖のように、私の足に授けられたものです。もっとも私の妻にとっては至福のポストで、妻の背丈を自らの縁戚の女達より一フィート高くしてくれるポストでした。しかし我々が自分の身分を越えて出世したのは、妻や私のせいではなく、我らの娘のせいでした。フォン・グリメルン中尉殿は、私の宿舎で娘と知り合っていたのです。この宿舎に彼はしばしば好んで公務の件で訪れていました。この娘が純粋で、清潔な、可愛い女であることは、疑いありません。しかしこの娘はすでに十分固く約束した若者がいて、この愛しい男を愛していました。兵士は右顧左眄すべきではなく、真っ直ぐ前を見るべきです。これは兵士の仕事には結構なものです

が、しかし勿論人間にとっては不快なことをもたらします。そして私にとっては今回、最悪な結果となりました。この娘の新郎は立派な、正直な若者であって、法律顧問フェーライゼン殿の書記で、立派な生計という展望も確かで、私の頭の中で是認されておれば、多分兵役を免除することが出来たことでしょう。しかし私はこれを是認しない。私は自分の強情な考えを変えなかった。それで、アドルフは然るべき期間、兵役に就くべしと要求しました。というのは、前もって整列した経験がなければ、元来きちんとした家父長、家の主人にはなれない、というのが私の意見だったからです。私の意向通りになったのは、自明のことです。この若い人間は適した時期に入営させられました。家での邪険な顔のことは私はほとんど気にかけず、中隊では然るべき具合に進行して、かくてこの若者は私にとって日に日に大切なものとなって行きました。我々、つまりフェーライゼン少尉殿と私はこの若者を更に半年間、ここ領邦首都で躾ました。その後、私はヴァレンブルクへ配置換えとなりました。私はアドルフの件で自分の頭が一杯であったので、今や私の妻が、娘の件で妻の頭を一杯にすることになりました。かくて私は自分の生涯で初めて、虚弱なもの、憐れむべき阿呆となってしまいました。私はサーベルの革緒[士官の標章]を持って、妻は鼻高々で、我々は引っ越して、子供をこちらに残しました。思うに、私の妻が別れの際に娘に差し出した妻の手が、腕から落下したとしても、妻はそれを悪い予兆とは思わなかったことでしょう。

お二人とも、ヴァレンブルクをご存じでしょう。一八一三年以前、ここは防塁や溝、外堡、遮蔽通路、要するにすべての造作を有する要塞でした。そのうち今日では単に二，三の丘や水溜まり、国の刑務所が囚人部隊の駐屯所と共に残っています。その気があれば、この地で全く心地良く過ごすことが出来ます。そんなわけで、私は老妻と我が暴れん坊達と過ごしました。これは、兵役を好んで務める者にとっては、利点のある仕事です。この仕事を通じて一層温和になることはありません。そんなわけで、私は娘のことを不適切なほど早く忘れてしまって、若干自分の規律好きを誇りに思って、他の人々なら別な風に名付けるかもしれませんが、義務の遂行と呼びました。いや、私は自分の義務を果たし、ただ自分の義務だけを、単に自分の義務ばかり果たしました。そう私の報告をまとめることが出来ましょう、ハーゲブーハー殿。私が自分のポストに就任してから、八ヵ月、まさにイギリス人やトルコ人、フランス人達がロシアに対して偉大な戦争を始めたとき、私の許にあのアドルフが軍務で連れて来られました。書類には反抗違反とあります。私は勿論、野獣の如くなって、この若者のことを、まことの人食い人種と罵声を浴びせて、彼の顔に面と向かって誓ったのです。自分の身分、自分の名誉、自分の名前をかくもはなはだ恥辱的に穢すような無頼漢には、我が、この少尉キントの婿になって貰うわけには行かない、と。彼がこれを平然と受け入れたので、私は多分訝しく思ったかもしれない。しかし私はこれを単に、非人間的に、道徳的に堕落しているせいと思ってしまった。というのは、以前はとても機敏な明るい目の若者が、一個の石のように、丸太のようになっていて、結構です、何でも自分には相応しい、射殺されるのが、自分には最も良いと言ったのです。私とか私の妻が、この不幸な間抜けと対処する術を心得ていさえすれば、万事まだ取り返すことが出来たかもしれません。しかし我ら老夫婦以上に、阿呆な二羽の鵞鳥は有り得ません。いや、後に、我々が絶望して髪をかきむしることになったとき、やっと真相が分かったのです。だって、この阿呆は何と言っていたでしょうか。これはヴァレンブルクへの少

尉昇進と領邦首都からの移転と関連する卑劣な八百長の芝居だと彼は信じていたのですから。一等軍曹キントは、自分の魂と娘の体とを一対の肩章のために悪魔に売り払ったと信じていたのです。何と、糞、忌々しい。ご覧ください、お二方、私のベッドの上には銀色の総の付いたサーベルが掛かっています。あなた方に申しますが、嗜眠症に罹っている者は、このシンボルの下に寝て、私が更に語るはずのものを夢に見ればいいのです。そんなわけで、このアドルフと私はお互いにらみ合っていて、それぞれ相手を見て、歯ぎしりし、その歯の間から、相手をならず者と呼んでいたのですが、これは陛下の命名日が間近という日まで続きました。貴殿らは、　ー　ヴァン・デル・モーク殿は、その慣習、風習をご存じでしょう。ハーゲブーハー殿のために説明しましょう。この陛下の命名日には、つまり、この囚人部隊に編入された者の何人かが、余り厳罰と感じないよう、再び恩赦となるのです。そんなわけで今回を迎えました。それでフォン・グリメルン男爵殿が副官として、領邦首都から特別郵便馬車でヴァレンブルクへ、リストを読み上げるためにいらして、勿論私の宿舎で下車されました。我々は一緒に朝食を摂り、私の老妻は、名誉なことと幸せの余り舞い上がっていました。男爵殿は大変気さくで、陽気であって、我らの娘からの挨拶を添え、極めて丁寧にこの日の行事についてすべて論じ合いました。その後、我々は兵舎の中庭へ、ピカピカの小綺麗な姿で出動し、また私はこう考えました。これは私の記念日でもある、自分の家庭的不幸、この強情な、反抗的馬鹿なアドルフを除いて、皆で面目を施せる、と。よろしい、副官殿は正装して、正面に立たれて、私の部下達は絵のように並んでいます。私の下士官達はそれぞれ規則通りに弾を銃身に装填しています。鼓手が太鼓を叩きます。フォン・グリメルン殿は、こうした式典のときいつも話されることを述べ、自分の書状を開き、その名前を読み上げ、祝典の時は、副官殿が発声されるいとも恵み深い国主に対する三回の万歳で終了する予定です。予定通り行われました。　ー　つまり私が指令します、捧げ銃。鼓手が二度目太鼓を叩き、そして連隊は三回万歳を叫びます。すべては規則通りです。規則違反はこの三回目の叫び声の後、ようやく起きました。あのアドルフが列から飛び出してきて、果たして実弾を装填していて、男爵殿を狙って、引き鉄を引いたのです。その射撃音が誰の耳にも地震のように響きました。副官殿は胸を掴み、よろけて、地面に倒れています。しかしアドルフは男爵に、銃剣を持って、獣のように飛びかかって行きます。このような時、目が見えずに、聞こえない者ならば、何をするだろうか。知るか。囚人部隊の少尉は指令しました。撃て。二人の伍長が引き鉄を引いて、アドルフも宙に飛んで、逆さになって、その血の中に転倒しました。これまた規則通りです、ハーゲブーハー殿。私は後々、十分時間があって、このことについて熟考しました。これは全く軍人服務規程通りで、誰もこれ以上立派に義務や責任を果たせなかったことでありましょう」。

「恐ろしいことだ、恐ろしいことだ」とレオンハルトは深く動揺して叫んだ、「しかしもっと怖いのは、貴方がこの全体を話されるときの調子です」。

「いや、違う」と少尉は頭を振って言った、「調子は全く正しい。私が聞き手の心をこのことで得て、何になりましょう。最もひどいことは、まだこの後起きたのです。アドルフは死んでしまった。死んで、これは彼の最悪の敵のみか、あるいは彼の最善の友のみが彼に対して願ったかもしれない死です。しかしフォン・グリメルン殿はまた地面から起き上がることになったのです。彼は体の回転や、制服の金鍍金とか、その他の類似の理由で、

殺害の犯行や致命傷から、彼の良心や彼の心、彼の名誉からよりもより良く守られていたのです。勿論この件に関して、裁判が開かれました。そして、　ー」。

「今度は私にその続きを話させて頂きたい、その他更に付言すべきこと、説明すべきことだな」とヴァン・デル・モーク氏は語って、自分の臥所から、レオンハルト・ハーゲブーハーに向き直った。「私はとても関与していて、私の父が法律顧問として引き込まれていたのだ」。

アフリカ人は震える手で、自分の椅子の背もたれを握った。

「いや、クラウディーネ夫人」。

第九章

猿や若い尾長猿を入手するためにアブ・テルファンへやって来て、当時コルネリウス・ヴァン・デル・モークと称した野蛮な猟師は、今やキント少尉の折り畳みベッドに垂直に座っていて、額を擦り、耳の後ろを引っ掻いて、もつれた髪に手を入れ、こう語った。その間、レオンハルト・ハーゲブーハー殿は少しも心落ち着かず見つめていた。

「これ以上長く否認するのは、無駄なことであろう。いや、朋輩よ、私は貴方が丁度名付けたかの老レディーの息子だ。私は顧問官、フェーライゼンの息子で、この顧問官は少尉に関する裁判に同席していた。キント、静かにしてい給え。貴方が私を呼んだのだ、そして私はここにいて、それで貴殿は、私のことを有りの儘考えてくれ。　ー　リンガ・フランカ[地中海共通語]では若干田夫野人、つまり若干野狐風かな、だろう、ハーゲブーハーよ。そこでレオンハルト殿、貴殿には私がどう見えるかね。これは地面から少し浮き上がっていて、根や土塊が付着していて、苔や腐って行く葉に覆われているかな。我々はまた頭を引っ込めて、再度深みへ沈んだ方が、良いのではないだろうか。貴殿次第なのだ。今夜にもこの獣は、元の所へ消えてしまってもいいのだ、　ー　貴方の意見はどうだ、友のハーゲブーハーよ」。

レオンハルトは短く息をしながら、上唇を噛んだ。それではこの人がクラウディーネ夫人の希望なのか。それでは静かな水車小屋の水車の滴は魔法のような森の中で、この人のことを歌っていたのか。何と奸計的に偽って、何というまやかしか、何というまやかしか。

ー　アフリカ人は二回の春や夏、しばしば目撃した水車の周りの森を思い浮かべていた。彼は野バラが小さな庭園の垣根越しにより気高い同類の木に枝[手]を伸ばす様を思い描いて、遠く茂みの中で鳥のツグミやアトリの声を聞き、この老夫人の上品な頭を低い窓辺に見た。彼は深く、母親の静かな心を覗き込み、その微かな動悸を耳にした。息子は存命であり、また現れるであろう。するとようやくすべてがまとまる。するとようやく真の喜び、真の美しさが戻って来る。... 忌々しい。そのとき空のテーブルの上、キント少尉のランプは煙を出して、この世界に正しい明かりを当てていた。こちらでは真理が剥き出しの壁からにやりと笑い、窓の中を覗いている漆黒の冬の夜は、嘘偽りではないもので、乱れたベッドの上の少尉のサーベルも嘘偽りではなかった。ゆっくりと一滴の血がその刃を下に滴って、クラウディーネ夫人の息子の頭の背後、密接に刃の先端に留まっていた。レオンハルト・ハーゲブーハーは刃を見、少尉を見、そしてヴァン・デル・モーク氏を見て、語った。

「フェーライゼン殿、私はアブ・テルファンにいて、古来のヨーロッパ風の社交上の虚偽世界の練習、訓練をする機会がほとんどなかったのです。それで申し上げますと、私に力があれば、貴方の母親へ至るすべての道で貴方に対し立ち塞がるであろう所存です、仮に、貴方がかの神聖な母親の地への貴方の全き権利を私に明瞭明確にご説明なさらない場合です。私は貴方に果てしない恩恵を蒙っています。しかし貴方の母上の恩恵の方がもっと大きいのです。私は総力を上げて母上の安寧を守る覚悟です。ヴィクトルよ、貴方の母親に対する権利はいずこにありますか。かくも長い不在の年月の後、母親の許への護送状はいずこにありますか。貴方は私に質問をされましたが、これに対しては、貴方の生涯の話しをすべて私が承知しない限り、答えられません。ですからお話しください。さすれば、貴方がなすべきこと、放棄されるべきことを申しましょう」。

「少尉よ、聞いたかい」とヴァン・デル・モーク氏が叫んだ、「そこの方は、貴方ほど自分の件を納得していないぞ。彼は我々よりもっと党派を越えたところにいるから、ここで彼の声を聞いてみることにしよう。彼の了解なしには、箒を角から取って来られない」。

「そのために呼んだのです」とキント少尉は不機嫌に語った。「彼に必要なことを話してください。更に進めてください」。

「ドン・レオナルドよ、聞いて、喜び給え」とヴィクトル・フォン・フェーライゼンは叫んだ、「貴殿は私の母を知っている。私の父はローマ人の美徳を持った男であった。そして私の本性、これを今から貴殿に明らかにしようと思う。しかしまずは死者達について話そう。私の父は仕事に厳しい男で、徹底して正義を追求し、義務遂行の気鬱症者であった。万事、筆跡に至るまで、父は頑固で、強固であった。アテネであれば、父は陶片追放に遭っていたことであろう。ローマであれば、皇帝が百人隊の隊長を通じて、死ぬ際の選択を自由に選ばせていたことであろう。この国では人々は、父に関しては、両肩を竦めるもので、そして人々が幸いでっち上げて、父のことを微笑するとき、千人もの人が、父のことを知りもしないで、悦に入って、一人のならず者と呼んだし、百人もの人が、父のことを知りながら、父のことを一人の阿呆と呼べば、それでもまだとても穏やかな言い方だと思っていた。早期の私の子供時代からの思い出に、夜間の足音があって、これは私の寝室の隣りの小部屋で、真夜中から朝の彼誰時まで続いたものだ。その時私の父は、自分の高貴な真面目な生涯の女神、いとも尊い生まれのレディーたる正義の女神のために眠られなかったのだ。この自分の臥所での仕事に続いて、日中の仕事があり、いつも再び仕事に追われていた。日中父は鎖に繋がれて裁判に従事し、彼の頑固さは、甲冑が武人のものであるように、父に必須のものであった。勿論父は様々な方面から見て、不興を買っていた。父にとって最悪であったのは、父は夙にこの小さな国家より大きなものとなっていて、自身の見解を隠さなかったことだ。彼は議員としてとても憎まれていた。しかしまことこの憎しみが個人的なものになったのは、かの軍事法廷以降のことで、これについては少尉がたった今話した通りだ。この法廷の時と、この法廷の結果、父はある党派からすっかり嫌われて、この党派はこの時以来、手段を選ばず、いつでも父の根底を掘り崩そうとした。侮辱や降格、中傷が間断なく続いた。父が長期の病気になると利用されて、その間いつでも迫害され、自分自身の同じ志操の仲間達の信頼さえも失ってしまい、それで父がベッドからまた回復してきたとき、以前は公の生活で、父に誠実に味方をしていた人々でさえ、冷淡に控え目に父に接するようになった。父を捕まえる網が名手の手で仕上がった。人々

は最後に父の小役人の一人の逃亡を利用して、管理不行届、赤字の責任等々のことが父自身に対して告訴され、かくてこの策謀は完成して、ナイフが極めて丁重にこの犠牲者の足許に投じられ、フェーライゼン家は永久にお取り潰しとなった。私はこの家の息子だ。いやはや、私はその昔、何と浅はかな、空疎な頭の、見栄坊の若造であったことか。キントよ、貴方はこれについて話せよう。我らは黄金の紐の付いたカラフルな上着をだてに着ていたわけではない。楽しい日々であった。まことこれらの日々を満喫していた。いや、ハーゲブーハーよ、父は自らの家に最悪の敵対者を蔵していた。　ー　ごく若い時から私は父の真面目さ、厳格さへの反抗児であって、父の人生を陰鬱なものにすることに生き甲斐を感じていた。母親が、私の軽率な血が日々借財するものを、一緒に償っていた。私は勿論、老父の意志に逆らって、兵士になった。しかしこの不毛な制度が、そこの少尉の性格に合っていたように、別の具合にまさに私の性格に合っていた。我々は暖かい夏の日の蚊のようなものであった。ただそれほど無邪気ではなかった。一群れの少女達や若造どもとなって、我々はあの野生の皇子の周りを踊っていた。少女達はほとんど我ら若造どもよりもっと役立たずだ。ハーゲブーハーよ、貴方は美しいフォン・グリメルン夫人にそのことを尋ねる機会があったろう。彼女はその答えをきっと保留したままではないだろう。ニコラだ、ニコラ。ドン・レオナルドよ、貴方に申しておくが、この世で私の母の名前の他に、私の喉を更に激しく締め付ける名前はない。ニコラ・フォン・アインシュタインだ。少尉よ、貴方の言う通りだ。我らは清算することにしよう。フォン・グリメルン殿の借方を通じてまこと赤い線を引こう[合計を出す]。かかれ、すべての犬よ、この悪漢の肌に、差し込め、すべてのナイフを、奴の心臓に。バーカ、何といつも不必要に新たに興奮することか。彼女、この私の美しいニコラも、ハーゲブーハーよ、さわがしいどら[コリントの信徒への手紙、13,1]であった。彼女の教育をもってしても、まことこれにしかなれなかったのだ。我が哀れな、哀れなニコラよ。我々は互いにこの蚊のダンスで出会って、このシャボン玉実存、そう我らの周りでは人生のことを呼んでいたのだが、この実存から我らの分を取り込んでいた。我らはイローニッシュな[皮肉な]メヌエットの歩調で交際し、軽薄に青春の最も素晴らしい時間を冗談半分に過ごした。我らは最良の感情でいちゃついて、我らのすべての黄金を短い二夏の後、最劣等の補助貨幣に改鋳してしまった。私は私の母親すら笑いものにして、その古びたポケット判感傷性と私に呼ばれるものを取り出す度に、私は母のことを、愛しい善良な痴女と呼んだ。私の母は、我々のせいで、千もの苦痛を蒙っていて、この軽薄な戯れを母は、苦悶して眺めていた。しかし母も自業自得の我々を救えなかった。母は、ニコラ・アインシュタイン自身以上に、ニコラ・アインシュタインが何に値するかもっと良く知っていた。そして彼女のことを、自分の子、自分の愛しい娘と呼んでいた。　ー　いや、呪わしい、呪わしい。今日でも私はしばしば自問して、額を叩く。何故汝らは、理性的目覚めの時に、手を差し出して、こう言わなかったのだ、もう馬鹿騒ぎは沢山だ、と！ - ？　ー　我々両人が礼儀正しい人間になるには、たいした手間ではなかったのだ。一回の息、一回の視線、静かな夕べの一回の鐘の音があれば、十分で、我らは永遠に結ばれていただろう。それが　ー　今では彼女はグリメルン男爵夫人だ。臆病な殺人者の、欺瞞者の妻だ。そして私は野生化した、手に負えない浮浪者、故郷喪失の、名誉喪失の、名前喪失の男だ。頓狂な動物商、野獣調教師コルネリウス・ヴァン・デル・モークだ。彼女もその間に老いた女となった。これはこの話しで最良のことだ。だろう、

少尉、だって、指針が数字盤で進まなかったら、我々は何にもなりようがないからな」。

「指針は進みます。辛抱する者、そして生きて行く者は、時が幾多の者にとって、一つの願いを、また幾多の者にとって一つの仕事を告知するのを耳にします」と老公は呟いた。ヴァン・デル・モーク氏はアフリカ人の一つのボタンを握って、囚人部隊の少尉を示して、叫んだ。

「ハーゲブーハーよ、見給え、こちらは幸福な男だ。何と彼は確固と立っていて、待っていることか。何と彼は適した時に、何の躊躇いもなく、何の興奮も見せず、打ちかかることか。彼は自分の子供らを埋葬した。そして辛抱した。何年もの愛しい長い歳月、彼は大変耐え忍んだ。しかし今や彼は向かって行くのだ。　ー　両手でもって、情け容赦なく。私の父の書記と将来を約束していた小柄な娘はドリスと言った。可愛い名前だ、ハーゲブーハーよ、一人の羊飼いの名前、我が友、フリードリヒ・フォン・グリメルンはその羊飼いの恋の牧歌を、何の危険もなく、あるいはもっと都合の良いことであったろうが、何も並外れた人目も引かず遊べると信じていたのだ。キント父君は、ヴァレンブルクに座していて、そしてその無法者達と一緒に乗馬している。哀れなアドルフはこちらの町で整列して立っている。アドルフが平静に振る舞うことは、正当に期待されていたであろう。ドリスは周知の上品な教養を学んでいた。フォン・グリメルン殿は彼女にしめしめとあらゆる手管を弄したことであろう。畜生、面白くねえ。何と人生はしらけたものになったことか。少女は名誉正しかった。若い人間、阿呆な書記は、命令に服従しなかった。しかしまた二人の不幸な間抜けどもは、互いに正しい言葉を交わさず、勿論互いに最悪のことを想定して、とうとうヴァレンブルクの兵舎中庭での破局が真実を明るみに出した。いや、少尉よ、ひょっとしたら、すべての党派にとって、貴殿がこの真理を勝手に流布させていた方が、一層快適であったかもしれない。しかし人の噂は心と同様、貴殿を傷付けた。しかし貴殿のような若造には、自由に道を譲るべきであろう。貴殿が死者達を丁重に埋葬する時に、貴殿に口を挿むべきではなかろう、その憤怒も一緒に墓に埋めてしまえ、と」。

「埋めないよ」と少尉は言った、「何が相応しいことか、承知している。それで、自分が辛抱して、入念に、立派な意志で、一人で準備できることを果たすために、全世界に助けを求めることはしない。人々の間では騒ぎが大きくなる。自分で自制出来る者は、自分の悲痛を反吐と混同してはならない。いや、貴方の頭上の屋根が壊れた時、盲目になって狂ったように遠くの世界へ逃げ出さずに、フォン・フェーライゼン殿、私の許へ来られていたら、我々はきっと貴方をまともに耐えられる生活へと救出していたことでしょう」。

「ひょっとしたらな、...そう、ひょっとしたらな」とヴィクトルは溜め息と共に呟いた。しかしすぐにまたこれまでの調子に戻って、笑って叫んだ、「勇敢な少尉殿、我らはまさに、皆が貴方のように同一の得難い金属で鋳造されているとは限らないのだ。　ー　それでは私の話しを最後まで語らせてくれ。これは如何に貴方の見方がすぐれたものであるか、他のすべての話しよりももっと明確にハーゲブーハー殿に証明するものであろう。ヴァレンブルクでの破局に続いて、すぐに我が父の家での破局が続いた。私は自分の中に、如何に男たるもの、考え、行動すべきか、その力を持っていなかった。拳の一撃が空の額に当たったのだ。これですべて言い尽くされている。私は一人の臆病者のように、人々の騒ぎ声から、失われた名誉という幽霊から、我が戦友達の視線や肩竦めから、私の制服のボタンから逃げた。誇り高い、亡き父親ではなく、人々が父親について、我々について噂する

ことが、私を追い出したのだ。私は狂人のようになって、母親を一緒に、母親の家から、夫の血まみれの死体の側から引き連れて、冬の夜の世界へ出て、その母を国道で放置した。それは子供っぽい、動物のような、怖じ気づき、単に精神の虚弱者が見舞われるような、一つのパニックであった。一頭のラバが嵐に遭っても、これほど狂ったように大草原に逃げ出すものではない。氷のように、冷静、沈着、豪胆であるべき時に、わずかの分別や思慮も、石を投げられた鏡のように、百もの破片に砕けた。私は母親の許を去って、数百マイル南方を行くようになって初めて、何とか正気になり始めた。ご立派な正気で、狒々の正気だな、番人から鞭を受けた狒々の正気で、　ー　恥辱と憤激と悪意の混淆物だ。かくて私はフランスの外国人部隊の縦隊と共に、トゥーロンからクリミアへ行き、ペラの野戦病院でコルネリウス・ヴァン・デル・モーク分隊長からその洗礼証を買い受けた。それから私はポーランド人達と一緒に小アジアへ行き、猟師となり、野獣取引商となり、下って、トゥムルキー州のアブ・テルファンまで行き、眠れる七殉教者たるレオンハルト・ハーゲブーハーをダルフール王国のその洞穴から救出し、今ここ、キント少尉のベッドに座って、同ハーゲブーハーに私の物語を語っているわけだ。私は仕方なく大いに金を稼いでいる健康なならず者で、それ以上ではない。しかしもっとひどいならず者がいる。その中の一人を少尉と私は明日からの日々、木からもぎ取ると考えている。私はこれまでの五年の間に、二回四つんばいになって、カッツェンミューレの周りを這って、老母を見、そして美しいニコラも見たことがある。しかしこのジャッカルは、もじゃもじゃ毛と悪態を吐く喉を披露せず、小声で遠方で吠えて、臥所でその存在に気付かれないうちに、這って去った」。

「自分でそのように判断して去ったのですか」とレオンハルトは叫んだ。彼はそれまで黙っていて、怒りと同情の間で、極端に感情が揺れる中、この荒々しい自己懺悔を聞いていた、「まことに、それならば、貴方のその他のあらゆる弁解以上に、貴方のことを証しています」。

「しかし私は自分の弁解のために話しているのではない」とヴィクトル・フェーライゼンは叫んだ、「それは臆病と反抗心だった。それ以外ではない。私は老母を恐れており、以前の恋人には面目がない。私はナインの若者の復活[一人息子の死からの蘇り：ルカ、7,11]を演じて、そのことでかの水車小屋の安寧を壊してしまうその労に値しないと思っている」。

「それは一つの嘘です、フォン・フェーライゼン殿」と今度はハーゲブーハーが怒って叫んだ、「貴方は、かくも長く、現実に本当に瘋癲病院生活を過ごした後で、狂人の振りを続けることはありません。貴方は誰を騙すつもりです、かくも幾多の現実に対し、頭をぶつけてきた貴方が。貴方の母親に対して、貴方は実際以上にひどく振る舞うべきではありません。貴方は今新たに帰郷されて、幾多の悲しい運命のひどい結び目を解こうとなさっています。ご自分に対しても、我々に対してもこの使命を困難なものにすべきではありません」。

「キント少尉、私は何の目的のために呼ばれたのだ」とヴァン・デル・モーク氏は尋ねた。

「叩きのめし、殺すためです」と少尉は言って、もう片方の男は再びハーゲブーハーに向かって話した。

「貴方がこれを一つの解決と呼ぶのであれば、　ー　とても結構。十年間この老公は立

派な証拠を集めてきた。これの利用をこれ以上引き延ばすことを老公は考えているのか、この老公にお尋ねしたらよろしい」。

「私はその気はない」と少尉は語った、「私は書類を綺麗にまとめている。明日それを持って、正式に王侯領の犯罪課に出頭して、詳細を調べて貰う」。

「一体どんな書類です」と息を飲んで、緊張して、ハーゲブーハーは叫んだ。少尉は胸ポケットから赤い、草臥れた軍曹札入れを取り出し、慎重にテーブルのランプを元の位置に戻し、その横に黙って、彼が書類と呼ぶものを広げた。大方はマリナンネ公妃の家政のための領収書、副署領収書、建築見積もり、供給契約であった。これらの書類の一部は、不慣れな筆跡で仕上げられた写しであった。しかしまた一部には、フリードリヒ・フォン・グリメルン男爵の手ずからの署名があった。すでに三番目の書類がレオンハルトの手の中でとても重く感じられて、彼はそれを下ろして、手をその上に載せて言った。

「いかさま師だ、ペテン師だ、ニコラよ、ニコラ。何ということです、少尉。貴方はどのようにして、この破廉恥極まりない不忠の恐るべき証明、証拠を得られたのです」。

「清潔好きとそれに男爵殿の道や通路を絶えず、忠実に注視していたことによります。支配者達の奉公に兵舎から何人かの立派な馴染みの戦友が就いています。勘定方や森林番、あるいは監視人とか守衛、その他の従者です。あるとき一枚の羽毛が鼻先に飛んで来て、それを追跡すると、目に珍しいものと焼き付けられる秘密に達しました。奇妙な世界です。一本の蜘蛛の糸は大したものではない。しかしそれを十分により合わせると、極めて有益な丈夫な綱が得られます。何故閣下は、赤貧のフォン・アインシュタイン令嬢に求婚することが大事であったのか。令嬢は常にマリアンネ公妃の寵愛を受けていたのではなかったか。フォン・グリメルン殿は陛下のすべての家政を自らの両手で仕切っていたのではないか。まことに奇妙な世界です。ハーゲブーハー殿、　ー　私は勘定を習得していました。一等軍曹としての以前の地位でとても必要であったからです。この数年の分をすべて計算してみました。まず最初に小さな、合わない違反を見つけました。しかしそれから何千もの違反が生じました。そこに計算があります。これはこの件が私の人生運、フォン・フェーライゼン少尉殿の人生運に関連する限り、合っています。これに対し、相手の党派は何の異議を称えるか、明日聞きに行くつもりです。その後帳簿を閉じても私は構いませんし、死者達も構わないでしょう。ヴィクトル殿がそれから何をなさるか、私は存じません。しかしキント少尉は、辛抱して最後の帰営ラッパを待つもりです。人生は、もはや自分の前に何も有しない人間、昔のことを止めて、新しいことをもはや何も出来ない人間にとって、反吐を催すものです」。

第十章

熱い炉の中にいる三人の男達[ダニエル書、3:ネブカドネツァル王の命令を無視した]は、心地良かった。彼らは涼しい気分であった。残忍な国王ネブカドネザルがへどもどするほど自分らに敵対すると、ただ一層明るく彼らは歌った。キント少尉の部屋の三人の男達は黙した。自分のなすべきことを、正確に知っていた者はその中の一人のみであった。一つの小休止の後、少尉はその悲しい記録をまとめて、それらを急がずポケットに戻して、言った。

「では明日、諸君」。

しかしこの時、レオンハルト・ハーゲブーハーはその硬直から解き放たれて、言った。

「明日ですか、ヴィクトルよ、ヴィクトル。聞きましたか。どうして決行出来るのです。貴方はその手を貸されるのですか。明日ですよ、明日。ニコラを考えてください、考えてみてください。何をなさるつもりです」。

「私は国外逃亡者だ、名誉失墜者だ。しかし貴方は美しいフォン・グリメルン夫人の友だ。私の母の友である。私がどうしたらいいのか、教えて欲しい。そのために貴方を今晩呼んだのだ。そのために我々は貴方に今我らの些細な秘密を打ち明けたのだ。レオンハルトよ、レオンハルト・ハーゲブーハー、私の胃や脳はずたずただ。私の周りの壁は回転している。いや、貴方はしっかりと立って、哀れなニコラのために助勢してくれ。彼女をどのようにしてこの死人達の中から救出出来よう。誰がこの憤然としたキントとその商会から救い出せよう」。

クラウディーネ夫人の息子は、再度ベッドに身を投げ、呻きながら顔を枕に沈めた。レオンハルトは囚人部隊の先の少尉を意味深に見つめた。しかしこの少尉は、先の時から少しも表情を変えず、この視線に対して、ただ一回肩竦めをして答えただけであった。レオンハルトは彼に近寄って、その手を握って、囁いた。

「明日はいけません。私と、ご自身と、我々皆とに、時間をください、少尉」。

「それは私には面白くない」と老公は語った、「それは私にも、フォン・フェーライゼン殿にも似付かわしくない」。

「そうなさってください、老いた頑固な方」とハーゲブーハーは足で地団駄踏みながら、叫んだ、「十年間復讐を猶予出来たのでしょう、であれば、貴方は今数時間の延期を問題になさらないでしょう。ヴィクトルよ、明日我らは貴方の母親を訪って、もう一人の逃亡する女性、惨めな女性のために、カッツェンミューレでの避難場所を用意することにしましょう。いや、キント少尉、貴方の墓が教えてくれたのは、一人の悪漢の道を調べて、其奴を結局一息で吹き消すという簡単な技のみではありますまい。いや、ご老体、私は皆のために、貴方の死者達や貴方自身のためにも、尽力するつもりです。ですから、我々に時間をください。救うべきものを救うためです。貴殿は盲目の憤怒に駆られて飛び込まず、貴殿の素晴らしい希望を壊さないでいたら、貴殿は今頃幸せな人間として孫達に囲まれて座っていたはずとお考えになってください。キント少尉、運命は貴殿の魂に、重大な裁判官職を授けられています。貴方はこの職務に完全にかなう者であることを示されて、邪悪な学童のような振る舞いをなさらず、自分の義務をどの面から見ても自覚している男として振る舞って頂きたい。明日はまだ、フォン・グリメルン殿に対するこの破壊力十分な告訴を提出しないでください。明日はクラウディーネ夫人の許へ参りましょう。夫人もかの男には縁があります。貴殿は夫人の言葉を聞く必要がありましょう」。

「夫人は私を引き留めようとなさることだろう」と少尉は口ごもった。「私は、私の娘の最後の病気の時、知り合った。夫人は余りに善良で、まともな世界に暮らしていない。私は夫人から両手を縛られることに対して、責任を持てない。しかし夫人はそうしようとなさるだろう」。

「夫人にはそのようなことはさせません、またそうはなさらないでしょう。このことは私が貴方に保証します、キント少尉。犯罪者にその罰を免ずる権利は、誰にもありません。ヴィクトル・フェーライゼン、お話しください、でしょう、我々は明日、貴方の母親の許

へ伺いましょう」。

野獣取扱商は深く嘆息して、頷いた。キント少尉は何回か部屋の中を歩いて、それからレオンハルト・ハーゲブーハーのすぐ前に立ち止まった。

「私は十分に長いこと待っていた、貴殿よ。しかし貴方は私の気に入った。だから、仕方ない、貴方の意志を尊重することにしよう。私は貴方の囚人生活の話しを拝聴した。それはとても面白かった。貴方は苛酷な困難、あらゆる災難の中でもいっぱし男を貫いた。だから今回も貴方を信用することにしよう。私は人非人ではないし、怪獣でもない。貴方はたった今、短い言葉で多くの真実を話された。それで明日はヴィクトル殿と水車の善良な夫人の許へ行かれて、哀れな女性ニコラのためにあんじょう配慮されたい。しかし私のことは常に忘れないで欲しい。私は老いた男で、私自身の案件に他人の手出しを受けたくないのだ」。

「少尉、貴方に感謝申し上げます」とレオンハルトは語って、今や再度クラウディーネ夫人の息子の方を向いて、言った。というのはこのときでも幾多の良き言葉や、幾多の厳しい言葉が、この荒れた魂を制御し、決定させるために必要であったからである。しかしここでもアフリカ人は、自分の意志を貫徹させることが出来た。真夜中頃、彼は、勝利と叫ぶその機会を許されていたら、勝利と叫ぶことが出来たかもしれない。かくて彼はただ疲労困憊して、別れを告げ、静かに一人っきりで歩いて家に向かった。しかし静かに立ち止まることはなかった。冬の夜風は心地良かった。やがて彼はまた気分を直して、独自の気分に浸った。

悲劇的事柄を彼は耳にし、悲劇的諸関係を彼は知ったのであった。しかし彼の勇敢な心は、打ちのめされた思いではなかった。そして身体上の疲労困憊が若干克服されると、彼は全く陽気に胸を叩くまでになっていて、こう言った。

「やったぜ、ハーゲブーハー」。

そして彼の言う通りであった。自分はたった今別れたこの両仲間に対し、多分こう発しても良かったであろう、つまり、自分は色々あろうと、筋を通す男であって、自分の生き方を恥ずかしく思う必要もなく、これを孤立したものと見なす必要もないのだ、と。怒りのせいでも、同情のせいでも、自分の目は曇らず、それがためにトラモンタナ[アルプスおろしの北風：北極星]を目から逸らしてしまう危険に陥らなかった。自分はキント少尉の部屋で珍しく悠然と構えていたという証拠を出せよう。そこでフリードリヒ・フォン・グリメルン閣下の堂々たる家の前で、彼はカッツェンミューレでも平静に振る舞うぞと自らに誓った。

彼は数瞬間、静かにニコラの住まいの前に立って、暗い窓を見上げて、そしてクラウディーネ夫人のテーブルの上の黒パンを思い出していた。すると彼は更に落ち着いてきて、こう呟いた。

「彼女に食べさせて、治癒させよう」。

ようやく彼は自分の住まいに達して、パシャがベッドにいるものの、口に長いパイプをくわえて、極めて邪悪な安煙草の煙に包まれて、至上の夢に耽りつつ目覚めているのに気付いた。彼は動かないよう目で合図して、そのベッドの縁に腰掛けて、懇ろに彼を見つめて、言った。

「いや、トイブリヒよ、自分がどんなに心地良げに見えるか、知っているかい。外はこ

の暗闇の中、とても寒くて、異様に不気味だ。路地に冷たい風が吹いている。あらゆる種類の魑魅魍魎が我が物顔だ。しかし、トイブリヒよ、オリエントの棕櫚にかけて、我ら両人は真の世間知を会得していて、この古いヨーロッパにとって、我らの眼前でこの世間知の勝負を決するのは簡単ではないぞ。そのまま横になっているがいい。貴方を眺めるのは私の目の保養になる」。

「いや、怖気のする奴でした」と仕立屋は嘆息した。「あの椅子に相変わらずあの人の姿が見えます。いや、旦那、貴方を邪悪な場所に案内されるのであろうと、思っていました。奴が貴方に何をお望みであったか、教えて頂けませんか」。

「トイブリヒよ、今は出来ない。　ー　明日別な折にな。今は私もベッドに寝たい。ドアの外には幽霊が潜んでいるからな。お休み、私は明日から数日旅に出る」。

トゥムルキー州出身の男は、この夜、警察長官ベッツェンドルフ氏の夢を見なかった。彼はそもそも、自分自身に関係する事柄について夢を見なかった。翌朝彼は、二，三の必需品を旅嚢に詰めて、パシャに、自分の不在に関する手短な文書のメモを渡して、来園者ラーガー教授の許へ送った。

教授は面会し、その短い手紙を開けて、頭を振って、言った。学問的人文主義の企画に対するこのような警察の介入は確かに好ましいことではなく、それどころかとても苛立たしく、平静な国民としてあらゆる現行の諸関係と調和的に生きることに全く相応しくないことであろう。しかし自発的に亡命しても、根本的にこの当事者にとって解決とはなるまい、と。彼はこの件について娘の意見を求めた。セレナ・ライエンシュラーガー嬢は、この件について自分の意見を申し上げる立場にはありません、自分は父君の意見に喜んで従います、と言った。

レオンハルト・ハーゲブーハーはコルネリウス・ヴァン・デル・モークと一緒にカッツェンミューレへ行く途上であった。

母親達の許へ、この両人の魂の中には、ファウストが、手に神秘に満ちた鍵を手にして、かの別な母親達の許へ下りて行ったときの、[『ファウスト』第二部、第一幕]、かの戦慄のようなものが若干あった。それは暗く、嵐のようであった。これは結構なことであった。というのは、レオンハルトもヴィクトル・フェーライゼンも、極めて温和な天候であれば、どのように取り掛かったらいいか、若干困惑したであろうからである。両人は以前、ヴィクトルが、クラウディーネ夫人と一緒に父の家での厄災から逃れた時と同じ道を馬車で向かった。最初は、荒れた、歯をガタガタさせている群れと一緒に郵便馬車で、その後は国道を、森や田畑や雨の中の汚い村々を馬車で抜けて行った。...膝の萎えた駄馬や、不機嫌な御者、ひどすぎる道をわざわざやって来る甲斐はないと言い張っている不平たらたらの国境遮断機の番人。森や田畑、山を上に、山を下に。孤立した美しい奇蹟たるクラウディーネ夫人の許に達するための、何という一日か、何という小道か。

野獣取扱商は、馬車の片隅に黙っておとなしくしているか、あるいは自分の興奮を野蛮に勝手に叫んで、発散し、その間途切れ途切れに、同行者に対して、昨夜、自分には取るに足りないどうでも良いことに見えていたことを、つまり自分の生涯に関して、文明から逃亡後の自分の旅や冒険に関して語った。しかしハーゲブーハーも、彼に対して微細な点に至るまで、話さなければならなかったが、それはアブ・テルファンでの自分の滞在に関してではなく、自分の故郷への帰還に関して、ニッペンブルクやブムスドルフ、その周辺

への自分の到着とその生活に関してであった。ヴィクトルはごく正確に今や知りたがっていた、いつどのようにしてこのアフリカ人は初めて自分の母親の名前を知ったのか、どのようにして面識を得たのか、と。そしてレオンハルトは、彼から要求される度に、喜んで答えた。彼は、この後悔して、怒りっぽくなっている息子、この野蛮な虚弱児の心を落ち着かせて、いずれにしても、この奇妙な再会への心構えがより良くなるようにした。しかしヴァン・デル・モーク氏は余りに老獪な自己虐待者で、すぐには屈服しなかった。馬車が目的地に近付くと、しかし、彼は完全に自分の中に沈潜していて、今このときレオンハルトが自分の手の中でこの野獣取扱商を感じたときほどに、クラ・グラ夫人でも自分の捕虜がかくも柔らかに心折れているのを感じたことはなかったであろう。それはクラウディーネ夫人の息子にとって、恐ろしい受難への道であった。彼は自分の流儀で、その受難の道のその留[駅]ごとに、懺悔を行った。

彼らは、ヴィクトルが母親を残して、かの吹雪の時、従兄弟ヴァッサートレーターとその部下[ミュルミドーン人、アキレスに率いられてトロイア戦争に参加]達の助けを求めた箇所に達した。彼らは今日も止めさせて、馬車から降りて、その馬車を返した。悪寒にうなされて、ヴァン・デル・モーク氏は国道に立ち、その同伴者、あるいはむしろ案内者の腕を握った、丁度子供が母親のエプロンにすがる按配であった。木々の梢には千切れた雲が掛かっていて、霧雨の重たく、暗い塊がゆっくりと山腹に沿って転がり、小枝から滴り、周囲は静かに荒涼となった。

午後四時頃、両遍歴者はカッツェンミューレのあるその小さな支谷へ至るすでに描写した入口に達した。森そのものはすでに半ば黄昏の中にあった。　ー

覚悟はできてますか、
あけるべき錠まえも、かんぬきもありません。
[『ファウスト』第二部6224f.高橋健二訳]

彼らは水車の前に立っていて、見つめた。彼らの心臓は、その冒険的な、危険に満ちた人生のどんな危機の際でも見られないほど動悸した。

いや、このような箇所を目や空想にとって愛らしいものとするためには、どんなに新鮮なその年の緑を必要としたことであろう。今日その魔力は消滅していて、事物のヴェールは落下して、お伽噺は終了していた。そして現実が剥き出しに、素っ気なく迫って来て、心情と分別に声高に叫びかけていた。岩が水車小屋の朽ちた屋根に冷たく空ろに脅迫していて、カッツェンミューレは幽霊めいた、寄る辺ない廃墟に他ならなかった。その煙突から薄い煙が、乞食の小声の嘆きのように、天に上がっていた。

秘かな反響と共に、甘美に時を刻みつつ、浄福の、成就に満ちた未来に関して数多く語ってきたかの輝かしく戯れる滴は、どこへ行ったのか。汚れた水の陰気な流れが、黒く、壊れた水車の上に注ぎ込んで、道を沼状にして、かなりの道のり、小森が醜い湿地に変貌していた。これも嘲笑や冷笑のようであった。

「これが我らの本当の偽らざる顔だ」と周りのすべてが叫んでいた、「汝らが、我らは汝らとは異なると思うような阿呆であったら、我らは汝らのことを笑い、汝らの愚かさを嬉しく思うことだろう。我らも汝らと同様、偽りであり、醜い。我らも汝らと同じように、

我らの晴着を着用し、上品な表情を浮かべる。汝らは去れ、消えよ。汝らは我らの領域へ侵入すべきではない。我らは、我らの所有物を維持し、それを差し出さない。汝らは去れ、消えよ。汝ら、徒な、利己的な感情の小売商よ。我らは何と言われようと、我らは立派な見張りであり、我らの領域への汝らの侵入を許さない」。

レオンハルトは、自分の道を横切っているこの跳ねつつ素早く流れて行く小川を飛び越えたとき、深い戦慄を克服しなければならなかった。　ー　ヴァン・デル・モーク氏は帽子を地面に投げ、唇を噛んで、ハーゲブーハーが水車小屋のドアをノックしたとき、唇から出血していた。彼は思わず知らず、側に立っていた樫の幹に自分の体を押し付け、極めて無残な自己告発の、脈絡のない言葉を呟いた。それから彼は笑った。しかしこれは一層無残なもので、森で反響することもなかった。

馴染みの、粗野な、実直な犬の声が、ノックするレオンハルトに対し、まず返事をした。それから女中クリスティーネが、用心深く窓から覗いた。しかし素早く頭を引っ込めて、急いでドアを開け、思いがけぬ客人を女主人の許へ案内するためにやって来た。

「あら、ハーゲブーハーさん、こちらにいらしたのですか。とてもお気の毒なことです。こちらのご夫人も、貴方とブムスドルフの母親、それに妹御のことでとても悲しんでおいでです」と彼女は叫んで、今や居間のドアも開けた、「まあ、お入りください。余りに心痛なさらないことです。　ー　ご夫人、こちら、レオンハルトさん、早速いらっしゃいました」。

クラウディーネ夫人は、すでに、近付いて来る者の足音と声とに耳を澄ましながら、美しい、老いたその顔を手仕事から上げていたが、今やすっかり安楽椅子から起き上がって、入室して来る者に両手を差し出した。

「レオンハルトさん、レオンハルト、本当に貴方ですか。そんなに早く不幸の知らせは届いたのですか。神様の祝福がありますように、友の方。　ー　しかし貴方は村からいらしたのではないでしょう。無理ですね。　ー　何故、貴方は今こちらの水車へいらしたのです」。

これは妙な挨拶であった。レオンハルトは当惑して、クラウディーネ夫人の表情に更に詳しい説明を求めた。

「まだ彼は存命です。しかし残念ながら、大きな痛みの中にあります。フォン・ブムスドルフ殿がまず一時間前にこの小屋へいらして、悲しい知らせをこちらの窓の中へ叫ばれました。まあ、お入りなさい、哀れなレオンハルト、森から突然現れて、　ー　何という不穏さ、何という不安げな圧迫でしょう、神様」。

「何のことです」とレオンハルトはどもった。「誰がかくも重篤な病気です。フォン・ブムスドルフ殿は一体何の知らせを持参されたのです」。するとクラウディーネ夫人は引き下がって、叫んだ。

「それではただ偶然、貴方はこちらへいらしたのですか。貴方のご両親の家で起きたことを何もご存じないのですか」。

「何も知りません、何も」。

「これが人生ですね。いつも老獪な、厳しい手が機織りしています。貴方の父親が昨日重篤な病に陥っています、レオンハルト。望みはほとんどないとか。従兄弟のヴァッサートレーターはとても悲しんで、興奮していて、このような不幸が突然生じたのは、自分の

せいだと言っているそうです」。

一瞬、レオンハルト・ハーゲブーハーは、眩んで、動揺して、理解出来なかった。しかし長く続くことはなかった。今や二つの潮流が彼の胸の中でぶつかり合って、そこでこの瞬間少なくとも極めて澄んだ内面が生じた。

彼は身を屈めた。するとクラウディーネ夫人は彼の額に接吻をしたので、彼は囁いた。

「これは偶然ではありません。確かに偶然ではありません。いや、クラウディーネ夫人、私は一人で参っていません。私の昔の知人を連れて来ています。彼はドアの外に立っていて、外で跪いています、クラウディーネ夫人。しかし私は彼をどのように案内していいか分かりません。と申しますのは、この出会いに耐えるには、強靱で勇敢な心を必要とするからです。私はヴァン・デル・モーク氏、つまり私の捕虜生活からの解放者を連れて来ました。しかし彼はすでにこの水車小屋への道を承知しています。クラウディーネ夫人、貴女は私に死神について話されました。私は貴女に、生命を、長く、苦しい憧れの成就を、死神と同じほどにやはり強いものである愛の成就を連れて来ています」。

彼はヴィクトルの母親をその安楽椅子へ導いて、夫人を腰掛けさせた。夫人は導かれるまま、意志もなく、従っていた。

「私はこれから私の母親の許へ参ります」と彼は強調して語った。「私がこちらへ戻って参りましたら、　ー」。

彼は言い終えなかった。彼はクラウディーネ夫人がもはや彼の言うことを理解していないと知ったからである。夫人は青白く、無言で座っていた。そしてレオンハルト・ハーゲブーハーは、自分の手を夫人の震えて握っている手から離して、部屋を去り、カッツェンミューレの玄関へ近寄った。そこでは連れの男がすでに立っていて、額を朽ちた門の柱に当てていた。

黙って彼は家の中を示した。彼は息子が母親の部屋へ入って行くのを見て、一人っきりで、振り返って見ることもなく、更に歩き、狭い谷を経由して戻って行った。素早く彼はフリーゲンハウゼンを通って、国道を急ぎ、ほとんど駆けて、ブムスドルフの父の家に向かった。

第十一章

以前踏みしめた道、これは人間の生活で、最も美しい道とか、最もひどい道と計算されるようなものではなかろうか。その小道はどこであろうと、寂しい地であろうと、大都会の人の蝟集する路地であろうと、あるいは緑の森の中を通じていようと、いつでも足の下から大地が語りかけ、こう警告する。思い出すのだ、思い出すのだ、と。

すでに一度踏みしめた道ほど、何か憂愁を掻き立てるものはない。それが幸福へと導いた道であれ。というのはこの道ほどに、人間がどのような夢を抱いてさまようものか、執拗に教えてくれるものはないからである。

絶えず馬の騎乗に似て、耳の中で音が鳴り、絶えず薄明かりの時の側の白い馬からの反映のような白い明かりがあった、臨終の父やすでに亡き父のことを考えていたけれども。以前何とこの遍歴者は、美しい、騎乗の女性、花輪作りの女性の顔を眺めたことか、そして永遠の若さや、この世の実存のすべての陽気さや、素晴らしさを見いだしたことか、そ

のときには老齢や、心配事、深い人生の困窮という皺は引き締まっている。わずか二年前、月光の夜、茂みから、そして故郷の大地から、美しい、笑う顔となって浮かび上がっていた一切の中で、まだ何が残っているか。

「夫には一太刀を、妻にはクラウディーネ夫人の黒パンを」とこの遍歴者は呟いた。その小道は数多くの瓦礫や錯覚の中を曲がりくねって行くものであった。

丘が現れて、またレオンハルト・ハーゲブーハーの足許には暗い谷が横たわっていた。しかし彼はこの時もはや手に穀物の穂を持っていなかった。

「戦いだ、戦い」と彼は声高に叫んだ、「皆のための戦いだ、だって我々は皆戦いを望んでいるのだから。谷では動きを起こし、丘では武器を煌めかそう。戦いを生き延びられたら、その不思議の勝利を喜んでも、許されることであろう」。

彼は、あたかもこれから千ものトランペットの音色が夜間響き渡るに違いないと思っているかのように耳を澄ました。しかし静かなままであったので、彼は再度、老いた、風変わりな父親のことを考え、また自分が父をとても立腹させ、父のごく単純な、ごく自然な期待をも裏切ったことを考えた。かくて彼はまたより速やかに、前方へ駆り立てられ、すると一年前、全くの道化として、また半ば惚れた若者として飲むことになった泉の許に達した。それは国道側、彼の前で湧き出ていた。当時彼は、我々が承知しているように、比較的長いこと腰を下ろして、希望や人生の勇気といった新たに湧出して来る源泉を喜んだ。今回彼は単に須臾の一瞬立ち止まって、かの夏の夜と同様に、澄んだ輝く水を飲んでみた。彼は起き上がったとき、圧迫を覚える一切のことにもかかわらず、再び微笑した。かくて彼は先へ歩いて行き、頭の中で、自分の哀れな友、夢想家の仕立屋フェーリクス・トイブリヒ、人呼んで、パシャ・トイブリヒに、今日一日で経験したすべての情緒、感情、言葉、行動について報告し、最初のブムスドルフの鶏鳴を聞くことになった。そして彼の視界の中、父の家の外部で動いているすべての人影が、クラウディーネ夫人とヴァン・デル・モーク氏の人影さえも消えてしまった。家族が初めてまた全くの前景へ出現して、当然なことに、自分自身の生存、あるいは他人の生存のための、そしてこれに関するすべての闘争、戦いが一切休止して終わざるを得なかった。というのは家庭内に一人の臨終者あるいは死人がいたからである。死人達は、静寂さを命ずる術を心得ている。　ー

雄鶏が鳴いた、しかし雄鶏は思案した、そして雄鶏は時計の方を見ているように見えて、目覚ましの声を完全に響き終わらせないうちに、くちばしを閉ざしてしまった。暖かい家畜小屋では雌牛達が動いた。一頭の駄馬は、ひどい夢で難儀しているように見え、立腹した、寝惚けて、呪い声の下僕によって、落ち着くように叱られた。真夜中をようやく過ぎたばかりのとき、この遍歴者は村はずれの路地で、村の唯一の明かり、彼の両親の寝室からの明かりを目にした。そして至急、駆歩で彼は家に着いた。

庭園の通路にある普段は小綺麗に平されている砂利も、多くの足跡で踏み潰されて、いや、花壇枠のブナの木さえも、これは老父の自慢作であるが、幾つかの箇所で踏み砕かれていた。玄関のドアは開いていて、この家の主人はもはや自分の家の監視が務まらないというこの明白極まる印が息子の心に重く応えた。

鍵束はもはや税検査官ハーゲブーハーの枕の下にはなかった。痛みと恐れとで震える一人の手がその鍵束を、細心の、配慮に長けた、不安げな頭の下から取り出していた。　ー

最強の王国も、同じような具合に瓦解し得るし、あるいは別の王国の威力の中へ移行し

得るのである。

廊下でレオンハルトは湿った外套と、その中の一人の男にぶつかった。ハーゲブーハー家の帝国総代理[次の皇帝が決まるまで]、つまり従兄弟のヴァッサートレーターで、たった今、庭と村を通っての気分転換の散歩から戻って来て、このときアフリカ人に小声の「誰だ」を発して、すぐに極めて驚いて、両腕で抱いて、永劫からの、慰めのない、「遅すぎた」を囁きかけた。

クラウディーネ夫人同様、彼もこのレオンハルトが突然現れたことの説明が出来ないでいた。しかしまだこのような説明の時ではなかった。

「九時頃、彼は亡くなった」と彼は言った、「いや、神様、そなたが来たのは、心強い。いや、レオンハルトよ、私は負い目を感じている。たとえ死に際が綺麗でも、私は生涯、彼を死に追い込んだ自分の不手際を許さないだろう。我が少年よ、そなたはまず一服したいか、それとも我が告解を即刻聞きたいか」。

「母は何をしています。妹はどこです」とレオンハルトは尋ねた。道路検査官の独自の自己呵責にはほとんど注意を払っていなかった。

「二人は勿論我を忘れている」と従兄弟ヴァッサートレーターは叫んだ。「しかし二人ともそなたの到着をはなはだ心強く感ずることだろう」。

彼はこのアフリカ人に家の下の階にある居間のドアを開けて、以前シュネードラーおばさんの司会でかの大いなる家族会議が開かれた部屋へ案内した。

「妹御を呼んで来よう。勿論老母は老父の側に座っていて、離れようとはしないだろう。飲めるなら、一杯引っかけろ。哀れな小娘に、普通の顔で接してくれ。小娘は普通を必要としている」。

従兄弟はこっそりと自分の背後でドアを閉めた。そして冷えて行く暖炉の中の最後の暖かい空気が漂っている部屋にレオンハルトは残っていた。父親が最後に巻いた時計が、今もその片隅で時間と共にその歩みを続けていた。部屋の中央にある丸いテーブルは相変わらず同じ箇所にあって、この家の息子が、そのテーブルを支えにしようとすると、息子の手は老父の嗅ぎ煙草缶に当たって、とても驚くことになった。その部屋は、昨夜のキント少尉の部屋と同様に、幽霊達で一杯であった。ニッペンブルクとブムスドルフの幽霊は、ヴァレンブルクと領邦首都の幽霊にほとんど劣らず、神経をつまんで引っ張った。その上今やこの遍歴者は行路の終点に来て、徹夜の疲労という最初の感情の震えが十二分に染み込んで来た。彼は深く溜め息を吐いた。しかし椅子を引き寄せて座る勇気がなかった。両目を閉じて、両腕を組んで、テーブルに寄りかかっていると、リーナが手に明かりを持って、よろよろ入って来て、その青白い、驚愕した、涙の溢れる顔を兄の胸に埋めた。

「父上が、哀れな父上、父上が亡くなった」。それ以上彼女は口に出来なかった。しかしレオンハルト・ハーゲブーハーは、自分がこのような時、この若い、震えている、臆病な小娘が、自分の両腕の中で流すようなこのような爽やかな涙と引き換えに出来るものであれば、ひょっとしたら、自分の生涯の幾多の土砂降りの日を提供したかもしれなかったであろう。彼は余りに長く、異郷と故郷の野蛮人達の下で暮らしていて、幾多の人々の死去を聞いたり、それどころか死に行く姿を見たりしていて、このような折、更に得難い涙を見せることが出来なかった。

しかしその代わり、彼は一層良く、一層分かりやすく、小声で、取り入るような慰めの

言葉をこの悲しみに沈む小娘に語りかけて、この小娘を案内するというよりも、むしろ運んで、階段を上がって、老母の許へ向かった。

「いや、とても怖いこと、とても怖いことだわ。私は恥ずかしい、だって、父上がとても好きだったし、とても好きで、　ー」。

「良い子だ、従兄弟殿はどこだ」と兄は尋ねた。

「やはり向こう、中の母上の許です、　ー　つまり父上の許です」。

「従兄弟殿には出て貰おう。落ち着くのだ。我らはまこと素直に助け合わなければならないぞ。哀れな子よ。万事は然るべき時に、原初のものに戻るのだ。昔々あるところにだな。しっかりしろ、リーナ。このひどい夜も過ぎて行く。そもそも死者達に敬意を払うことは、悪いことではない。生きている者達の方が恐ろしく思え始めさえしたら、もはや死人は恐ろしくは思えないぞ」。

丁寧に配慮して、彼は今や妹を、両親の寝室の前にある椅子に座らせ、明かりを彼女の足許に置いた。それから彼は臨終の部屋へ入り、従兄弟ヴァッサートレーターを部屋の外に出して、死者の側の老母の腕を穏やかに握った。しかしこの再会、この悲しい挨拶について、言葉は余り交わされなかった。老いて、黙した[亡き]主人がまさに主役を演じていて、この主人は生前すでに、多弁や饒舌を好んでいなかったのである。

この主人は横たわっていた。生前の最も陽気で快活な時にもまして、色をなして不機嫌であるとは少しも言えなかったが、しかしいずれにせよ、変わらず色をなして不機嫌であった。

「この人はとても良い人でした、とても良い人」と老レディーは嗚咽した、「四十年間一緒に暮らして、苦楽を共にして来た。人からこうして欲しいと頼まれたとき、この人はどんなに良い人か、私ほど理解している人はいません。この人は意地悪な言葉を私に言ったことはありません。でも起き上がらない。一昨日コーヒーの時にはまだ、どこに豆を植えるか、サラダ菜と豌豆はどこにするか、すべて決めていました。全く私の意見に反対であったけど、でも私は自分の意見を再び通さなかった。今となっては、これが私の唯一の慰めです。逝ってしまった、逝って。いや、あなた方は、そんなものだと、気楽に仰有るけど。でも私はまだ長いこと、これは本当のことか、こんな事が有り得るのかと、考えざるを得ません。四十年間です、四十年間。それがあたかも何もなかったかのような按配です。信じられない。いや、レオンハルト、あなたが来てくれて、嬉しい。でもあなたでも、この老いた母親を助けられないわね。誰も私を助けられない」。

「でも母上、母上が家や我々を見棄てようとなさったら、この家と、この家に付属するもの一切がどうなることでしょう」と息子は感動的に知恵を働かせて尋ねた、「今やすべてがあべこべに転倒しています。明日になったら始末に負えません。父親が嘆きや不憫さをもはや目にされないということが、まだしも慰めとなっています。この様を父上がご覧になったら、はなはだ立腹されましょう。かくもきちんとした男でした。母上、私は確信しています、母上が気を確かに持って、父上の代わりに秩序を保ち、父が気にしていたことの一切を父の流儀に従って配慮したら、まさに父上に対して正しい愛を手向けることになる、と。思うに、母上はこれから万難を排して、お力の維持に努めることが肝要となります。ご承知のように父上は自分が笑いものになることを嫌っていました。父上はとにかく厳密な方でしたし、これは私の承知している父に関し、明白なことです」。

「我が子よ、あの人はそんなだろうね。いやはや、良く分かるよ。私は人間として出来る限りのことをすることにしよう。でももう今から怖い思いがする、あの人の引き出しや、箱、帳簿に触れるなんて。あの人はとてもやかましくて」。

「しかし他に誰が父親の意に沿うように出来ましょう。いや、母上、これから母上を哀れなリーナの許へ連れて行きます。母上は妹と一緒にベッドに寝てください。父上はきっと天から我々を見守っていましょう。親戚は最も朝早い乗り物でやって来て、父との最後の別れの儀に臨まれましょう。何もその準備がなされていません。いや、母上、母上のお力が、我々や父に対して、残っていなかったら、一体どうなることでしょう」。

これはまことに、慰めて、力付ける正しいやり方であった。従ってこれはまた百もの涙もろい感傷よりももっと良く目的にかなっていた。老夫人を蒸し暑い寝室から遠ざけて、この老夫人を、道路検査官の協力を得ながら、妹に引き渡すことに成功した。これを成し遂げた後、レオンハルト・ハーゲブーハーは、深く嘆息しながら、窓を開け、冬の空気をむっとする臨終の部屋へ入れた。すると雄鶏どもが再度鳴いたが、今回は正当に全面的な声を出していた。朝になっていた。従兄弟ヴァッサートレーターが入室して、言った。

「有り難や、ようやく二人は分別が付いて、ベッドの中へ入った。両人とも一つベッドで、着替えていない。これから二人は眠っても泣くことだろう。しかしそれでも、眠れば、我々にとってこの新鮮な北風同様に、恵む深く作用しよう。いや、気持ち良いな」。

両男性は今やまた死者の側に立っていて、死者を黙って眺めた。

深く悲しむ中、レオンハルトは、自分がしばしば捕虜時代にこの頭部が立派な光輝に包まれているのを目に思い浮かべたことがあって、今や、自分の立派な、素敵な空想の一つも実現しなかったことを追想していた。しかし彼の名誉のために付言しておくべきであろうが、この栄誉の件は自分自身のことで沈思したのではなかった。何千もの些細な、詰まらない苦悶や心配事を生涯紡いで来たこの老父に対する果てしない同情がすっかり彼の心を占め、彼の考えのすべてを支配した。自分の胸のすべての片隅から自己非難を収集して、彼は苦く自らを苦しめた。しかし彼がどんなに後悔しようと、老父は果たしていなかった。一向に老父は、白髪の家父長として、リンデンの木の下、ベンチに座って、賢明な教訓や立派な人生経験を畏敬の念に満ちた聴衆一同に話しかける機会を窺っていなかった。

「レオンハルトよ、良いようにしよう」とようやく従兄弟が言った、「女達に立派な教えを垂れるばかりでなく、我々自身もそれに従うことにしよう」。

「そうです」とレオンハルトは悲しげに言った、「我々もその必要がありましょう。しかし今は、　ー」。

「今そなたは我が告解を所望で、どうしてこの不幸が家の中に入って来たのか知りたいことだろう。残念ながらただ繰り返すことになるのだが、私一人のせいであって、万事は最良の意図の下で生じたことであって、それだけに最悪の良心の呵責を覚える次第ということだな」。

「その奇妙な言葉はすでに耳にしました。一体どういう意味です」。

「私は自分の約束を守って、彼を人類と和解させようとしただけなのだ。しかし彼の本性はそれに向いていなかった。それで、　ー　その結果がここそなたの前にある」。

「いや、従兄弟殿、今は謎々を止めてください」。

「まことそれは私の意図ではない。逆に、私はこの話しをそなたのために出来るだけ明

瞭に記録として残したい。自分の両手を洗って、安眠したいと切に願っている。では、聞いてくれ。私は盛大に挙行したのだ」。

「何ですと」。

「松明行列と町の音楽隊、孔雀亭からの代表団、演説、そしてシュネードラーおじの謝罪、それから三回のトゥーシュと万歳だ。上手く行った、はなはだ上手く行った。従兄弟ヴァッサートレーターは、多分両手を[嬉しくて]擦り合わせて良かったことであろう。最後に老父が、万事見事に進行していたとき、この失策をしなかったらな。老父には確かに多くのことを信頼していたが、しかしこればかりはな」。

大きな明かりがこのアフリカ人の中で点った。再度彼は頭を振りながら、枕の上の、この皺の寄った、顰めた顔を眺めた。しかし更に意見を述べて、悲しげな従兄弟の話しを中断せず、また、従兄弟は極めて情けない調子で続けた。

「私はそなたがニッペンブルクを去って以来、何と働き、策を練り、扇動したことか。周囲二十マイル以内のどのモグラであれ、その仕事をもっと上手には出来なかったであろう。何という梃子を私は動かしたことか。ニッペンブルク全体が、予感しないまま、私に協力しなければならなかったのだ。人類は私の中で、その最大の勝利の一つを祝った。一つの芸術作品だ、真の、まことの芸術作品だ。これは、この今の時となっても、私が手放さないものだ。それに彼の死去は、浄福なものであった。レオンハルトよ、このことが私の二番目の慰めだ。死んでしまえ、もはや何も願わなくていいぞと呼びかけられたかの古代ギリシア人の名前は何と言ったか、私が知っていたら、まこと適切な引用をそなたに味わって貰えるのだが。[ディアゴラスはオリンピア競技で無敵で、その二人の息子も勝利し、それである人が言った、死ね、これ以上の幸せはないときに、と]。いや、親愛なる神様、ニッペンブルクの市場で、我々は一昨日、私がそなたに約束していたように、夜が明け始めると、隊列を組んだ、　ー　すべての名士連中、射手仲間、合唱協会、それに勿論都合がつく民衆だ。そなたも承知だろうが、我々は皆がニッペンブルクでは都合がつく。曇り空、風のない、まことに快適な天候、窓辺には、玄関には、そして家々に沿って、すべての優しい女達。幟や旗、要するに然るべきもの一切だ。各人が自ら松明持ちで、すべてのニッペンブルクの俗物達が、自ら明かりを持参して来ている。　ーー　素晴らしい。いや、レオンハルトよ、私が後ろ姿を知っている我がゲーテの翻訳から承知の五月五日についての頌歌にあるマンゾーニの感情とそなたの父に関する私自身の感情との間に違いはない。[Alessandro Manzoni(1785-1873)、ナポレオンの死について、1821]。彼は静かに黙って、横になっている。彼のために最近大きな動きがあったばかりというのに。　ー　我々は三人の選り抜きの男達をシュネードラーおばさんの許へ送った。つまり、市長に郡長、それに税参事官だ。そして彼を、つまりシュネードラーおじを連れてきて、彼を音楽隊のすぐ後に置いて、ブムスドルフへ向かった。この音楽隊は私の特別な推挙で、『タンホイザー』からの入場行進曲をこの偉大な企画用に練習していた。しかし残念ながらこの行進曲は仕上がらずに、すでに次の角では頓挫してしまって、勿論また昔からのリラ[音楽]となった。『皇帝陛下万歳[勝利の栄冠、万歳]』、『謳歌せよ人生を』、『我はプロイセン人、我が旗の色を知るや』、その他の馴染みのものだ。構わない、上首尾だ。市門で松明が点火され、我らはこの滑稽劇への警察の許可と共に、ブムスドルフへ行軍して行った。常に先頭には、金管楽器や大きなティンパニーで、私と税参事官の間にシュネードラーおじがいて、これは町の音楽隊の後、

しかし合唱団の前なのだ。村人は当然すでに戸外に出ていて、我らを万歳で出迎えたり、あるいは最初の堆肥の箇所で、息を飲んで緊張して待っている。下僕や女中、それに姿を見せている者すべてを引き連れて、同様に松明を持って、フォン・ブムスドルフ騎士が出動する。彼には私が必要な指令を授けている。そして老公の家の前で、ここに、『我らが汝に編むは乙女の花輪』[『魔弾の射手』]のメロディーの許、到着すると同時に、偉大な、ハーゲブーハー万歳とか税検査官、ハーゲブーハー殿、万歳を唱えて、我らの出現を知らせて、我らの訪問目的の開始となったのだ。いや、レオンハルトよ、レオンハルト。どんなに抜け目ない外交官でも、覆水しては盆に返らずだ。どんな極上の計画でも、弱点が一つあるもので、これはその発案者に責任があるもので、より良く考えて見れば、この弱点は避けられるであろうものだ。我が少年よ、何故私はブムスドルフ騎士同様に、そなたに指図をしなかったのであろう。何故私はそなたも一緒にこちらへ連れて来なかったのか。そなたが然るべき時に現れて、絶頂の時を収束させて、必要な冷や水を浴びせてくれるようにとな。私はこの老公のことは長年の付き合いで十分に承知していたのだ、そなたが直接出現すれば、すべての感情過多に対して、的確に水を差せると分かっていたのだ。ホテル・プロイセンで私の思案がそこまで至らなかった点に関し、私は悔やんでも悔やみきれない。　ー　さて我々は玄関を取り巻いて立っていた。すべての主役達が前列にいた。庭園は満員で、国道も人間や松明で一杯で、男性合唱団がまず口火を切って、お祝いの当人に歌いかけた。

我らが連れ戻しに来た男は、
かの実直可憐な男、
ニッペンブルクが、ニッペンブルクの全員が
恋しゅうてかなわぬ男。

等々だ。この歌詞は私の家にある。私が文責であるが、メロディーの責任者ではない。こちらは中央教会の楽長テューテに責任がある。トゥーシュと市長の演説があり、市長は言った。我々はここに、町と並びに黄金の孔雀亭協会の名において、参上しており、我々はここに参って、光栄の至りです、と。その後、市長はうつ伏せに倒れて、音楽がタンホイザーの行進曲となる。そして私がシュネードラーおじと一緒に市長の代わりに現れる。私とシュネードラーおじだ。私は弁士であり、生贄の説教家である。おじは花輪を被った生贄の家畜だ。『従兄弟殿』と私は語った、『従兄弟殿、我らはここに参っている。しかし単にニッペンブルクの町、並びに黄金の孔雀亭の名の許ばかりではない、永遠の正義の名の許でもある。ここに私は、恥知らずに、策謀的に小川を汚した子羊を連行して来ている。シュネードラー、一言述べられたい。いや、一言も発せられなくてよろしい。私が代わりに話そう。誰もがすでに貴方の口は何とだらしないことか承知しているのだから。従兄弟のハーゲブーハー殿、フルートや松明、ティンパニーやトロンボーンと共に、我々はおじと我々とを貴方の足許に置くが、おじは貴方の憤然たる復讐に委ねるとしても、しかし我々には、貴方の衷心からのご好意、並びに明澄なるご明察を賜りたい。従兄弟の税検査官殿、いかに貴方の最良の市民仲間が、貴方のことを大事に思っているか、お分かりであろう。従って、貴方も我らのことを大事に思って欲しいし、また孔雀亭に足を運ばれた

い。私は領邦首都から戻ったばかりだ。いや、私と一緒に、従兄弟殿、出掛けていたら良かった。いかに貴方のご子息が上流社会から評価され、尊敬されているか、貴方も経験できたであろうに。これが嘘か本当か、ただブムスドルフ騎士にお尋ねになればよろしい。美人に、貴族、富裕層に高学歴、皆が高額の入場料を払って、ご子息を見て、聞いて、その話に感嘆していた。ご子息は貴方とニッペンブルクにとって一つの誇りだ。彼は誤解されていただけに、それだけ一層誇りなのだ。すべての罪人を大目に見て頂きたい、従兄弟のハーゲブーハー殿。こちらにシュネードラーおじが来ている。彼を受け入れ、我々皆を受け入れて頂きたい、　ー　世界全体からの一回の接吻[シラー『歓喜に寄す』]を受け入れて頂きたい。　ー　祝宴が、和解の宴が孔雀亭では用意されている、名誉席が両腕を開けて待機している。　ー　ハーゲブーハーよ、ハーゲブーハー親父殿、すべての税検査官の中で最も威厳ある者よ、とにかく我々はここに楽しく集合している。ニッペンブルク全体の代表たる私を抱擁して欲しい、シュネードラーおじは別だが、それでも貴方はこのおじを格別に抱擁したいことだろう』。　ー　そして、音楽、トゥーシュ、響き渡る万歳だ。射手組合が捧げ銃をし、合唱団がその感情を、全く関係ない歌、『汝、美しい森よ、汝は誰のものか』[アイヘンドルフの詩、『狩人の別れ』]で表現して、老公は、この老公は、私の肩にすがって、嗚咽した。『いや、従兄弟殿、これは過ぎたる好意だ』と。　ー　私は老公がまだ正気付かないうちに、その向きを変え、階段を下りて、夢中になっているアブデラの人々[愚者]の輪の中へ連れ出した。人々は行進行列の向きを変え、シュネードラーおじとも腕を組んで、歓声の中、太鼓の連打、トランペットの響きの下、百五十ものピッチ松明の赤い光輝を浴びて、老公は我らと一緒にニッペンブルクへ行軍して戻り、輝かしい照明の黄金の孔雀亭へ入った。老母とリーナは、庭園から、明るい喜びの涙を流しながら、我らを見送った。いや、レオンハルトよ、何故、そなたは我らの許へ来なかったのか。何故、私はそなたを一緒にニッペンブルクへ連れて行かなかったのか。老公がその安楽椅子に凭れて座っていたとき、そなたはどこにいたのだ。そのとき、老公に向かい合って座っていた町の医官が、狼狽して飛び上がって、食事の音楽が止み、町のこの外科医が、彼はナイフとフォークを持っていて、十分に素早くランセットを使用して、しかし頭を振ることになったのだが、そのときどこにいたのだ」。

「私はヴァン・デル・モーク氏とキント少尉から話しを聞かされていました」とレオンハルトは口ごもった。しかし従兄弟は至急、続けた。

「我々は彼を自分の家まで連れて帰った。今回は、松明も、射手組合も、町の音楽隊もなしだ。フォン・ブムスドルフ殿は先に女達の許へ疾駆して行った。昨日、一日中彼は静かに横になっていた。夕方九時頃まで。神かけて、彼は、彼なりに礼儀正しい、正直な奴であった。私はとても、とても残念だ。彼を静かに、その気まぐれやむら気の中に放っていたら、何も惜しくはない気がするが。いや、レオンハルトよ、私はそなたにこのことを約束していなかったな、私が火曜日、ホテル・プロイセンの前で馬車に乗り込んで、老公を口説くと約束した時には」。

第十二章

レオンハルト・ハーゲブーハーは、従兄弟ヴァッサートレーターの話しを遮らずに、話

させていたが、しかし主要な点、話しの核心以上のことをもはや把握していなかった。それでも話しが終わると、彼の手を握って、嘆息した。

「従兄弟殿、良かれと思ってのことです。そう考えましょう。その他の一切は我らの責任ではありません。従兄弟殿、私は貴殿に心から感謝します。最善のことを、貴殿なりになさったのです。しかし今、最も必要なことは何でしょう。すでに何らかの具合に、明日以降の準備がなされていましょうか、それとも、　ー」。

いびきの音を聞いて、このアフリカ人は素早く振り返って見た。従兄弟ヴァッサートレーターは、両手を膝の中で組み合わせて、ベッドの横、自分の椅子でしっかり眠っていた。彼は自分の話しの最後の言葉と同時に寝入ったに違いなかった。爪先立ってレオンハルトは窓辺に行って、彼誰時の薄明かりを最後に見た後、こっそりと窓を閉めた。彼は目覚めていようと思い、目覚めていなければならないと思った。しかし、彼も死者の頭の側、椅子に座って、自分の考えを、自分の意志同様に明瞭に保とうとした。

これは難しいことで、やがてそれどころか不可能なことと分かった。これまでの興奮の週の後、星々ニ視線ヲ向ケルコト[オウィディウス『変身譚』Ⅰ,86]、つまり博物学が要求する通りに鼻を保つことは、超人的力を必要としたことであろう。それでもレオンハルトは、五分間、硬直した父の顔を目に留めていた。それからこの部屋は一つの霧で覆われて、この霧も、この週を彩る多彩な魔女達の踊りで一杯になった。講演の際のガス燈で照らされ、人間の詰まったホール、フォン・ベッツェンドルフ氏、フォン・グリメルン氏、フォン・グリメルン夫人、ライエンシュラーガー教授、それにセレナ・ライエンシュラーガー、ヴァン・デル・モーク氏、　ー　キント少尉の部屋とキント少尉本人、　ー　カッツェンミューレへの道、水車小屋、それにクラウディーネ夫人、　ー　ブムスドルフへの道、　ー

取り乱した父の家、亡き父親、従兄弟ヴァッサートレーターの話し、そして奇妙なことに、従兄弟の話しからは、専らシュネードラーおじが現れ、これらが彼の魂の中で入り乱れて転げ回り、子供の手で弾かれるピアノの音に似ていた。そしてやがて、　ー　とうとう母なる自然が最後に休息を命じて、野蛮極まる騒ぎの後に深甚の静寂が、精一杯の思考の後に絶対的な無意識が続いた。

再度、異郷から故郷に戻って来たこの息子が目覚めたとき、明るい日中となっていた。死体はベッドから移されて、隣室の別の臥所に収まっていた。臨終の部屋の冷えた暖炉では再び火が点されていた、下の家族室では朝食が用意され、従兄弟は弔問客に応対していた。

この寝過ぎた男が素早く起き上がって、窓辺によろめいて行くと、一台の手車が庭木戸の前、国道で止まって、指物師の親方がその職人と一緒に棺を下ろした。家の女中は、左手に屠殺したばかりの雄鶏を持って、右目にエプロンの先を当てて、この悲しい仕事を痛ましそうに、しかし不愉快というわけではなく、興味深く見つめていた。狼狽して、レオンハルトは引き下がって、素早く空のベッドの方を見た。両手を彼は額に持って行き、壁から壁を、天井から床を、古い銅版画、つまりイサクの犠牲の絵から、油絵の祖父の肖像画を凝視した。ここはブムスドルフだ。ここは両親の家だ。ここは両親の寝室だ、...。名付けがたい不安の中、今一度、二歩、窓辺に近寄ると、ー　黒い櫃が家の敷居の上に置かれた。　ー　澄んだ冬空の下、この件はこのような次第であって、階段を下りて行き、未亡人となって静かに喪に服している老夫人に挨拶するのが、最も理性的なことであろう。

我らの物語の一つの窓から離れるように、我々も離れることにしよう。自分達が出入りする家に不幸が生じたら、まことに良き友人達がその訪問を遠慮するのが習慣であるように、我々も、今やハーゲブーハー家が見舞われた物忌みの日々を、訪問せずにやり過ごしことにしよう。

すべての河川が北方からの冷たい息吹で凍っていた。森や谷は、あたかもその中で音色が生じたことはないかのように、横たわっていた。今や孤独のまことの時が、カッツェンミューレに到来していた。このカッツェンミューレは普通に周辺の人間的住まいの有り様よりも、更に隠れてひっそりとしていた。他の河川同様、勿論、小川の細い流れも黙していた。壊れた水車の上、遠方の生命世界からの個別の滴という微かな響きも止まっていた。水車小屋の母親と息子は二人っきりであった。誰も二人を邪魔しなかった。レオンハルト・ハーゲブーハーさえも邪魔しなかった。

我々は死の家から出て来た。死は真面目な事柄である。しかし死は、我らが確かな足取りで歩き回り、分別正しく、甲高い声で我らの意見を述べることを邪魔しない。さて、我々は森の中で反響を起こすことを恐れている。　ー　これは何故か。生は死よりも大きな神秘を有するのであろうか。

こちらでは一つの奇蹟があった。クラウディーネ夫人は背が伸びた。頭一つ分、夫人は一夜で高くなった。夫人は自分の前のテーブルに両手を置いて支えにして、そしてゆっくりと起き上がった。大きな、澄んだ、真面目な眼差しで、夫人は自分の運命を見つめた、

ー　これまでの運命で、これから先ではなかった。

夫人は孤独の中、希望を抱いて、強力な意志を獲得していた。夫人は恐れなかった。夫人は強靱な女性、女主人となった。夫人の前で制御し得ないものはなかった。かの野蛮な山師の人生行路は、この山師が自分の母親の敷居を越えた瞬間、終わった。クラウディーネ夫人の人生行路がこの同じ瞬間、再度始まった。

彼は病人として、廃人として、一人の乞食として、カッツェンミューレのドアをノックすることも考えられた。彼が追跡された犯罪者として戻って来ることも考えられた。千もの眠られない夜、この母親は近寄って来るに違いない足音に耳を澄ました。彼が森を通って、無意味で、動物的笑い声を上げてよろめく場合、彼が両手を縛られて連行されて来て、こう尋ねられる場合、これはこちらの息子ですか、と、彼が一群れの荒くれて、酩酊した仲間と共に入居を求める場合、このいずれも母親はすべて想定していて、母親はこれらすべてに挨拶を考えていた。さて、今はどうか。...

レオンハルト・ハーゲブーハーは父の埋葬後の日中、従兄弟ヴァッサートレーターの駄馬に乗って、ブムスドルフからやって来た。どうなっていることだろうとはなはだ心配していた。彼は疲労と混乱とを感じ、何を為すべきか、何を放棄すべきか問われることを大いに案じていた。いや、彼は自分の目的地の人々の運命に関して、一種利己主義的倦厭感を覚え、それを恥じてすらいた。休息への欲求が彼の骨髄に見られたばかりでなく、すべての魂の繊維が萎えていた。しばらく彼の途上、前方で跳びはねていた二羽の太ったカラスが今や高く飛び立ち、力強く羽ばたいて、森の上方、左手に消えると、彼はそれらのカラスに拳を力なく振って、呟いた。

「おまえらは、自分らが如何に幸せか、存知しないだろう。ところで、　ー　あの娘と、教授殿とコプト語とに呉々もよろしく伝えてくれ」。

従兄弟の駄馬は、従兄弟本人同様、独自の歩き方をした。しかしこの駄馬は、任せていると、目的地へ連れて行くのであった。そしてレオンハルトは、誰であれ完全に任せる気分であったので、彼はこの駄馬に乗ると、この駄馬と一緒に、快適に、しかも本来の自分の都合よりも更に早く、フリーゲンハウゼンの雄牛亭旅館に着いた。ここで駄馬は暖かい家畜小屋までの道を自ら進み、ハーゲブーハーは徒歩でカッツェンミューレに向かって、途中、幾つもの、小道の上に垂れ下がって、氷柱の付着している枝を揺すって音立てながら、姿勢を保つことになった。

水車小屋の、霜の下りた屋根には、太陽が冷たく輝いていたが、しかしやはり太陽であって、凍った大地が足許で反響した。沼や泥が、今日、クラウディーネ夫人のドアへの道を邪魔することはなかった。喜ばしげに吠えて、スピッツが近寄って来る者を跳ねて迎えた。家の敷居では、ヴァン・デル・モーク氏が現れて、黙って、少しばかり当惑して、レオンハルトと握手し、彼を部屋に案内したが、そこではクラウディーネ夫人が執筆しながらテーブルに着席していた。しかし夫人は素早くペンを置いて、そして一瞥して、ハーゲブーハーのびっくりしている魂から、あらゆる不明なこと、あらゆる疲労を追い払ってくれた。

「ほらね、ヴィクトル」と彼女は言った、「この人がいらっしゃるであろうことは分かっていました。私はここ最近の数日、一時間ごとにこの人の足音を確かめていました。ー　私がどうして錯覚しましょう。レオンハルト、私どもは死の影の中を歩いていました。しかし私どもは生を信じています。そうでしょう、そうでしょう。あなたは私どもの信仰に、私どもの希望に、私どもの勝利に灰を振り撒くために来たのではないでしょう。あなたの勇気は私の勇気です。あなたの幸せは私の幸せです。私どもは同じ戦場に立っています。私どもは百万人に対する少数の者です。私どもは野蛮な一つの全世界に対して小さな領国を守っています。でも勝利を信じています。勝利を得るにはそれ以上必要ありません」。

明るい鐘の音のように、クラウディーネ夫人のこの「あなた」は、レオンハルトの心に響いた。かつて彼自身の生涯において、あるいは一冊の本の中で、この夫人のように、歴史家や詩人が何かとても畏敬の念を与えたことはなかった。この夫人はかの星苦よもぎ[ヨハネ黙示録、8,10f.]であって、どの井戸をも、どんな真水の井戸をも飲めないものにするのである。かくも王侯のように夫人はその黒服を着て、彼の前に立っていて、それで彼は整った話しで夫人に返事をしようとは思わず、猟師の子息に手を差し出して、どもってこう言うことしか出来なかった。

「ヴィクトルよ、最善のことを果たすことにしよう」。

馴染みの荒々しい笑い声はまだ克服されていなかったが、しかしより一層静まって響いた。

「ハーゲブーハー親方、貴殿は一風変わったパトロンだ。アブ・テルファンで時間を無駄に消費したわけではない。悪魔とか、偶然とか、あるいは厄災とか、その他何と貴殿が名付けようと、これらに唆されて、私の足が道の途中、丸太のようなもの、死体とか類似のものにぶつかって、そしてこれが起き上がって、こう言ったら少なからず驚いたものだ、『済ミマセン、旦那、ちょっと聞いてください。ほんの一時、私のために貴重な時間を割いて頂ければ、恩に着ます、と』。　ー　それに私はまだかなり威勢が良くて、力が漲って、長靴を履いており、いざとなれば銃や猟刀で応戦出来ようから、私はこう思ったのだ、

こちらにいる人物は少尉殿にとって一人の味方となろう、この同郷人は、このコルネリウス・ヴァン・デル・モーク分隊長よりも、更に一エレ分深く、沼地に沈んでいる、と。これは、母上、まこと動物的な勝利でした。それで今や我が友、カルス[コーカサス山脈南の要塞]のムスタファ・バイの快活な爆笑、クスクス笑いを生き生きと思い出します、我らの眼前で、地雷により二百人ものロシア人が空中に投げ飛ばされた時のことです。呪わしいことに、降伏の寸前のことで、この騒ぎ全体がかなり余計なことになってしまった。我々はその奥地で我らの馬の尾を垂らして、我らの銃を差し出す仕儀となったように、今私も防塁の前に進み出て、こう言うのみです。よろしく頼む、友のレオンハルト、と。　ー
母上、彼に対する私の意見でしょうか。彼は説教壇から民衆に真実を語りました。彼は真実を二人っきりのときも語ります。それにすごいのは、自分の話す内容を彼が承知していることです。どこでも彼に行き当たります。彼はニコラの生涯に片手を置いています。彼はここでも母上のテーブルと母上の心の中で、自分の席を有しています。彼は自分の意志を貫徹しないでしょうか。彼はキント少尉の口に一回施錠しています。彼は私の両手両足を縛って、こちらへ連れて来ました。いや、彼は自由で、利口で、賢明です。私の方は、我が儘な餓鬼で、灰色髪、惨めな奴隷で、一匹の犬で、鎖に繋がれています。そうじゃありませんか。あなた方は私に対し、痛々しい同情だけを覚えていて、この犬はいつか凶暴化しかねないぞ、間近な友人達に対してさえ噛みつきかねないぞ、と内心ひやひやでしょう」。

クラウディーネ夫人はレオンハルトを促すような眼差しで見ていて、それでレオンハルトは野獣取引商の方を向いて、言った。

「たった今、ヴィクトル・フェーライゼンよ、君はまこと追従的に私のことを話してくれた、そしてここの屋根の下でそもそも誇りに居場所があるとすれば、私が多分誇りに思って良いような力を有しているような話しぶりであった。ただ私の承知しているのは、一点で、それを話しておこう。私が自分自身の砕け散って、行方不明の、踏みにじられた生存という中で、ここに住んでおられる高貴な力と知り合いになれて、この度も君のための治療をこの夫人から期待していなかったら、君がこの家に私の意志と共に足を踏み入れることはなかったであろうという次第なのだ。私はすでに一度君に、別の場所で、君の母親に対する君の権利を問い質したことがある。、ヴィクトルよ。今、その権利に対する返事を君に与えよう。その権利は君の不幸と我ら男ども皆の知恵のなさにある。こちらに我ら二人の、あらゆる雷雲によって砕かれた男どもがいて、一方の男は、陸路、水路、戦争や森の中で、鍛えられ、叩かれて、物質世界が人間を脅かすあらゆる危機を高笑いしながら、また一方の男は捕虜生活によって、鍛錬されて、事実の論理学に精通し、幽霊どもに対する精神のための武器をすべて十分に備えて来た。しかしながら、　ー　両人とも、いかに行動し、判断しようとも、いかに意欲し、成就しようとも、所詮弱くて、よろめいており、脆くて、無効であった。我々はどちらを向いても、黒い手が我々に対して構える壁にぶつかった。我々が怒って、不安の中、歯ぎしりしながら、喘ぎながら、努力しても空しく、我々を嘲る諸力からの反撥を受けた。我々は息を求めて、明かりを求めて、大気を求めて戦い、ある瓦礫の高みから遠方を一望し、自由と平和の黄金の明かりの中に横たわっている世界を眺めることに成功したこともあった。しかし我々は偉大で強力であると自惚れ、勝利を叫び、我らの背後で黒い防塁が我らの徒な短い勝利の間により高く築かれて、一時

間前までは明るい日中であったのに、今や夜となっていることに気付かずにいた。我らが瓦礫の山の高みから勝利を叫んでいるとき、我らの足許の隙間や割れ目から嘲笑の笑い声が響いて来る。我らの勝利の中でまたこうはっきりして来る。下へ、下へ、低く下って、再度空しい仕事だ、右手か左手に、咳き込んで、戦いながら、死ぬまでだ。さて、諸君、この夫人を見給え。そして諸君の戦利品を夫人の前で敢えて数え上げればいい。この夫人は山のように高い苦悶の下、生き埋めにされていて、敵どもが夫人の至聖所に侵入して来て、妻と母としての感情を打ち砕かれて、その故郷からこの荒野に追放され、そこに一人残され、夫人は我々のように、胸を叩いて、こう言う必要もなかった。こんな目に遭うのが、ただ私の持ち分だ、と。この夫人に対して、我々は何という様だろう、ヴィクトル・フェーライゼン。世間は夫人に何も残さなかった。今日世間は、夫人の宝は無尽蔵と気付いている。我らは乞食で、夫人は金持ちだ。我らは空の手で夫人の許へ来て、夫人一人が、我らに、我らの必要とするものを与えることが出来る。力と勇気と、不屈の意志だ。いや、我々は夫人の英雄的辛抱と比したら、何と臆病なんだろう。夫人は我々皆よりもより深く屈服していた。しかしこっそりと夫人は起き上がって、砂漠を自分の希望で満たした。夫人は孤独に、静かに座っていて、誰とも争わず、ただ怒りや、憎しみ、復讐を自分の開け放たれたドアから追放した。いや、夫人のドアは開けられていた。そして日々がこのドアの側を通り過ぎて、異様に、不審に思って、覗き込んだ。しかしクラウディーネ夫人は微笑して応じた。『何を不審に思っているのです。勿論私はここに座っていて、暮らし、そして私の最上の晴着を紡いでいます。あなた方はやって来て、一人の死んだ女を捜しながら、一人の生きた女を見いだしましょう。いえ、私は生きています、生きるつもりです。　ー　森の小枝が私の窓の中に伸びて育つように、私の心の中へ明るい考えが伸びて来ます。　ー　私は野蛮な世界で迷っている私の子供達のために新しい家を、新しい竈を建てます。子供らはいつかここに落ち着くことでしょう、そして私に自分達の苦労や受難を語ることでしょう。　ー　私が静かに暮らさずして、そして哀れな旅人達、追放され迫害された人々に駆け込み寺を提供せずして、　ー　何の甲斐がありましょう』と。　ー　まことにこう叫ぶのは、英雄達や国王達ばかりの使命ではない。太陽よ、立ち止まれ[ヨシュア、10,12]、そして我らの勝利の完成を照らし出せ、と。最も弱い者、最も哀れな者、最も取るに足りない者でも、自分の頭や心の上の輝かしい星を、万事が完成するまで、しっかり確保できるのです。そしてクラウディーネ夫人はそれが出来た。今我らの周りの夜が以前よりも暗くなっている時、我々は夫人の許へ来て、一点の明かりを求めています。　ー　夫人の勇気が我らの勇気に、夫人の幸せが我らの幸せにならずして、我々が夫人の許に来て、夫人の陣地に立って、夫人の太陽の穏やかな明かりの中、夫人の神々に呼びかけずして、どうして我々が救われましょう」。

「母上、彼は確かに真実を語ってくれました」とヴィクトル・フェーライゼンは震える声で叫んだ。「我々男どもはただ恥じ入るばかりです。母上はこの防塁の内部と外部で勝利を収めています。私はもはや協議で発言権を有しません。母上の命ずるがままに、行動し、味方します。しかし他の者達も母上の指揮に従うべきでしょう。私がもっと上手に話せて、どんな時でも平常心を失わないのであれば、そのことを自ら人々に話しましょう。アブ・テルファン出身のそこの男は、物事を十分に良く理解していて、すでにキント少尉の穴蔵でも実証済みです。　ー　私は呪われようが憎まれようが構わない。ニコラのドア

の前での番を彼に任せましょう。以前私はどこに足を向けても、かのフリードリヒ・フォン・グリメルンに遭遇しました。今もこちらでは私がどこに出頭しても、どこでもこの男が立っています。いずれにしても、私にとってうんざりなのは、明らかです。しかし私にとって最も不名誉なんことを、私はまだ考え出していません。しかし時間と共に考え出すことを期待しています」。

「我が子よ、我が子、あなたはあなたの母親の家にいるのです。過去のこと、これを巡って、これに関するこうした詮索や計算、訴訟とあなたとの間に、あなたの母親は割り込んで行きます。レオンハルト・ハーゲブーハーの言う通りです。私は新しい家、新しい竈を私の子供達のために建てたのです。　ー　子供達が私の許に戻って来るであろうと知っていたからです。　ー　どのようにして帰って来るだろうか、それを母親は気にしません。私は晴着を、私のために、私の家族のために、織り上げました。私どもは皆これを着ることにしましょう。皆です、皆。それではレオンハルト、今度は貴方の喪の父親の家のこと、母親と妹のことを話してください。いや、間近の墓というのに、しばしば人生にかまけて、それを話題にしていません。でも私の考えは、いつも貴方のこと、貴方の家族のことだったのです、我が友の方」。

彼らは今や、実直な税検査官の死去と埋葬のこと、そして従兄弟ヴァッサートレーターがとても誠実に、そして一切の悲しみにもかかわらず、とても陽気にハーゲブーハー家に関与していることについて語った。ヴァン・デル・モーク氏は黙って、片隅に座っていて、膝の間にはスピッツの利口な頭を挟んで、自らの頭を深く垂らしていた。クラウディーネ夫人は心から思いやって、諸関係について、またレオンハルトの境遇について話した。しかし夫人は片時も息子を視線から逃さず、いつも肩越しに息子の方に落ち着かない視線を送って、息子を気にかけていた。一度ならず、夫人は、自覚しないまま、息子の手を求めているかのように、手を差し出した。息子が立ち上がって、ドアの外に出て、二度と帰って来ないかもしれないと、とても案じているかのようであった。しかしヴァン・デル・モーク氏はほとんど動かなかった。しかし会話の流れで、再びニコラ・フォン・グリメルンの名前が出ると、別であった。その時、彼は突然飛び上がって、それでびっくりした犬が不安の声を上げて、彼の前から後ずさったのだが、彼は激しくハーゲブーハーの腕を掴んで、叫んだ。

「私の友となって、私の味方をしてくれ。私はハシッシュ[インド大麻]の酩酊から覚めた男のような気分だ。子供の分別や指示でも私は負けてしまうだろう。君はいつ領邦首都に戻るのだ。私のために考えて、私のために行動してくれ。君がトゥムルキー州のアブ・テルファンで私との握手を求めたように、私は今君との握手を求めている」。

「いや、月山脈の野蛮人相手のように、文明の諸勢力相手に我々が行動できさえすれば、済むことであろうが」とレオンハルトは陰気に嘆息した、「ただクラウディーネ夫人だけが我々を皆救うことになりましょう。夫人のみが、風を抑え、波を静める魔法の杖を持っています。夫人のみが、様々の魂を隷属の絆から解放する身代金を支払うだけの十分な資金を有します。夫人は生命のパンと水とを持っていて、飢えた者に食事を供し、渇している者に飲み物を与えることが出来ます[マタイ、25,35]。しかしニコラ・フォン・アインシュタインはこのことを承知していて、このことを明瞭に経験しています。それ故、私はほとんど心配していませんし、いっそ何も案じていません。我々が止めることも、禁ずるこ

とも出来ない嵐のせいで、彼女の美しい頭は深く下がることになりましょう。しかし彼女の生命の木は、嵐で根こぎにされることはありません。以前彼女は私に、世間が何も存知しないある領国の市民権について話してくれました。然るべき時に彼女はこの特許状を提示することでしょう。そして外の皆が、この特許状を渋々か、あるいは喜んで認めざるを得なくなるまで、このテーブルの許に彼女は着席して、こう話すことでしょう。『お母さん、感謝します。あなたのパンのお蔭です』と」。

第三部
第一章

クリスティアン・ゲオルク・ライエンシュラーガー教授は書斎に座って、比較言語学の研究に取り組んでいた。セレナ・ライエンシュラーガー嬢も、自分の部屋に座っていて、同様に或る比較の学問に取り組んでいた。澄んだ一月の午後で、太陽は、温かいとは言えなかったが、快活に窓を覗き込んでいた。しかしこの日中のようには、父君の魂も、娘の魂も、すっかり明るくはなかった。つまり二人の魂には薄いヴェールが掛かっていた。しかし不機嫌の灰色のヴェールでもなく、倦厭の黄緑色のヴェールでもなく、一人の善良な、心地良い仲間、一人の好意的な、話しの面白い同居人への不快ではない憧憬という青みがかった菫色のヴェールであって、この仲間は旅に出掛けていて、コーヒー卓でのこの人物の空いた席のため、すでに何度か、その時間とその場に相応しい意見や発言への切っ掛けとなっていた。

「しかしコプト語の文法は全く抜きにしても、この若者の性格に関して、我らが彼の不在のことを、ただ少しばかり知り合ったばかりというのに、かくも寂しく思うのは、まこと結構な印だ」と教授は言っていた。そしてセレナは砂糖挟みを弄びながら、これに対して述べていた。

「多分恐らく、あの人は全く若いとは言えないでしょう。でも私もあの人のことが好きです。話しがとても面白くて、自分は笑うのが嫌いではなく、おかしな人をおかしな時に正しく笑う能力があるのだろうと直に分かりました。それ以外に退屈な学者の生活で得られるものがあるかしら。いえ、この家ではこれまでかなり我慢していて、それに大きな洗濯日が幸いまた済んでいると考えて、パシャをその主人の代わりにこちらへ呼んで、パシャとお喋りして楽しむことにしたのです。だって、神様、神様はこの私を藪から棒にアフリカやコプトやインディアンの動物園にぶち込んで、何を考えていらっしゃるのか、皆目全然見当が付かないのだから」。

「オーム[バラモン教由来]」と教授は言って、両方の目の視線を自分の鼻先へ向けて、スリッパを履き、カフタン[丈の長い前開きの服]姿で、再び自分の領国へ上がって行った。彼は自分の小娘が主宰する謁見に居合わせることは稀であった。パシャに関しては、教授は彼を人間として尊重していたが、しかし世界観の明瞭さに関して、珍しく自分を彼よりもはるかに凌駕すると感じていて、自ら自分の貴重な時間の一部を彼のために割くことはなかった。

「オーム」、　ー　目を輝かせて、トイブリヒは椅子の端、全く先の方に座っていて、

彼に向かい合って、同じように目をパチパチさせながら、揺り椅子に座って、小柄な[異端]審問官嬢が両手の指先でとても愛らしい踊り[コントルダンス]を披露していた。

「それでは、トイブリヒ、貴方の主人、親方は、その堅実な分別と同様に、立派な心も持っていると同じように確信しているのですか」。

「いや、御令嬢」と仕立屋は溜め息は吐いた、「御令嬢、彼の分別の方は、私は単に予感するのみです。我ら如きは分別を評価出来ません。しかし彼の心の方は、私が裏返したことのある上着同様、両面存じています。彼の心は両面とも本物です。だってどうしてそれ以外私と上手くやって行けましょう。分別ある人々の許へ再び警察によって強制連行され、今もってどうしてこうなったか承知していない私相手にです。私は自分が何であるか知っています。それに私は彼が何であるか知っています。私は必ずしも全く正常であるとは言えないとすでに私に対し何人かが言っています。しかし彼は言ったことがありません。私は玩具でしょうか。私は洒落を浴びせられるだけの哀れで間抜けな悪漢でしょうか。全世界と近隣連中はそう言います。しかし彼は違います。思うに、彼は私を気の毒に思っていて、私のことを遺憾に思っています。これは無用のことですが、しかし私にはまこと嬉しい。しかし別な時、また私は考えます。これればかりではないぞ、つまりただの同情だけで彼はおまえに接していない。トイブリヒよ、これはやはり人生での仲間意識だ、彼が夕方おまえの側に腰掛けたり、あるいは真夜中に、おまえに対し、まともな人間とか、そのような人間として話しかけ、おまえにその善良で賢明な心全体をぶちまけてくれるのは、と」。　「そうなの、トイブリヒ、あの人はそんなことをするの」と令嬢は尋ねた。「それはとても珍しいこと、とても気立ての良いことですね。コーヒーがまだ十分に甘くないのであれば、砂糖缶はあなたの側、あなたの肘の左手にあります。では、あの人は貴方にその善良で賢明な心全体をぶちまけてくれるのですか。それで貴方はあの人の話す言葉が分かるのですか」。

「皆目分かりません」とパシャははなはだ強調して語った「時々、あたかも一つの隙間から、私の青い霧の中、自由な国を覗く気がします。しかし長くは続きません。私はまさにダマスカスやエルサレムから離れられません。これは致命的です。しかし問題ありません。一人の方が自分のしたいことが分かっておれば、それで二人には十分です」。

「まあ、トイブリヒ」と深く憂慮して令嬢は嘆息した。まあ、フェルディナントとか同様なことを嘆息しても、同じであったろう。

「いやね、御令嬢、私は言わば生涯を通じて哀れな孤児でありまして、仕立屋なんてものはそれ自体、人類に畏敬の念を与えるものではありません。まこと長い勘定書を持って上がらない限り。私は単に仕立屋職人にしかなれなかった。上昇志向が徒となりました。それで私は天上的なオリエント、エルサレムに向かい、砂漠を遠く、棕櫚の国々にまで深く進んで行きました。我がハーゲブーハー殿がアフリカの内奥まで行ったようなものです。そしてそれから突然またこちらの生国に戻りまして、私の母のドアの前に帰ったのです。人々は言います。警察による強制移転と。しかし私には魔法のようなものです。それ以来私は二度と正常になれず、夢の世界にいるようなもので、多分これからも続くことでしょう。人々は言います、まさに癲癇病院のドアの前に私を置いた方が良いだろう、と。多分大方の人々はそう主張する権利があるのかもしれません。しかし必ずしも皆が正しいわけじゃない。私自身に関しましては、私は良くこう考えます、とても高い山に怪鳥グリフィ

ン[獅子の胴、鷲の頭と翼]が私を置き去りにした、と。というのはそれ以外どうしてハーゲブーハー殿が私を探し出して、私と交誼を結ばれましょうか。キント少尉殿も少しもこの点を不審に思われずに、それでこの点が、この方と面識を得てからも一つの慰めとなっています」。

「キントですか、キント。このキント少尉て、誰です」とセレナは尋ねた。

「この方は、今申しましたように、同じく私の知り合いです。しかし棕櫚の国や、我が山頂からの知り合いではなく、全く新品ピカピカの、少しも快適ではない知り合いです」。

「貴方には実際とても沢山の知己がいますね、トイブリヒ」。

「そうなんです。地中海のこなた、かなた、雲々のこなた、かたなにいます。いや、御令嬢、貴女はこちらの可愛らしい部屋に座っていらして、ケッセル通りの我ら如きには、太陽が冬というのに、かくも緑の茂みや、このような花々を通して輝くというのは、まるで真新しい世界のように見えます。とても居心地良くて、こうありたいものです。それで貴女が邪悪な世界について、そしてこのような世界で経験せざるを得ない知己について、そこのカラフルな鳥籠の真鶸よりももっと沢山知る羽目になりましたら、とてもご愁傷様となりましょう。ここに私も座っていて、安心ですし、私の目は今日十分に澄んでいます。しかし私が数分後、あるいは一時間後、また私の背後でドアを閉めたら、これはその後全く別の具合になります。御令嬢、貴女の澄んだ目が守られますように。我らが存在し始めて以来、我らの知っている個々のものにとって、我らの周りに二十もの事柄があって、これらは宇宙の創造よりももっと大きな神秘を有しています。すると何も信用を置けなくなります。笑い声にも、泣き声にも、開いた手にも、固めた手にも信用を置けません。御令嬢、貴女が家々の側を通り過ぎても、窓の奥で何が起きているか分かりません。たとえ貴女が一度窓の中を覗かれても、奥の小部屋や寝室が十分にあって、貴女はきっと覗かせて貰えません。しかし何も害はありません。貴女はこちらの明るい小部屋に座っていらっしゃればいいのです。許される限り、座っていることです。貴女が一度外出されたら、貴女は私の棕櫚か、レオンハルト殿の棕櫚か、あるいは癲癇病院か、その間での選択しかありません。　ー　そんなものです。それで教授殿も、向こうの書斎にいらっしゃる私をご贔屓のパトロンですが、象形文字か、ピラミッドか、オベリスクかの間の選択で同様にそのことをご存じです。しかし貴女は私の名において、そのことをお尋ねになる必要はありません。私の英知を教授殿は信用していませんから」。

「でもキント少尉殿は多分、貴方の英知を信用なさっているのでしょう、トイブリヒ。大体、ハーゲブーハー殿が幾らか信用なさっている具合に」。

「違います、我が御令嬢。だって、少尉殿、これは、我がパトロンとは全く別の出身ですから。棕櫚とか高い山の頂とは何も関係ありません。キント少尉殿、これは夜間邪悪な夢の中に現れる知己のようなものです。夢ではすでにひどい恐怖を引き起こして、髪の毛が逆立ったり、肢体が震えてしまっても、これは、この知り合いが翌朝血肉となってドアの中へ侵入して来て、別の普通の人間の如く、日中に、それぞれの流儀で披露する驚愕に比べれば、全く問題になりません。我々は、つまり少尉殿と私とはお互い快適な面を見いだしております。これはつまり彼の方が私に対してもっと快適な関係にありまして、彼があの偉大な講演が終わった後の日に、つまりその暗い夕方にハーゲブーハー殿のことをお尋ねになって、私の部屋で彼をお待ちになって以来のことです」。

「その方は我らのレオンハルト殿に、父親の死去の知らせを持って来たのですか」とセレナは尋ねた。

「そうは思いません。レオンハルト殿は、この件をひょっとしたら訳があって、曖昧にしているのでしょう。彼が私宛に書いた手紙でも、貴女の父親宛に書いた手紙でもそうでしょう、御令嬢」。

「だったら、とても他人行儀だわ。つまり私どもは全幅の信頼に応えたいと思っているのですから」とセレナは肩を竦めて、叫んだ。しかしパシャ・トイブリヒはただ憂わしげに頭を振って、語った。

「御令嬢、興奮なさらないことです。申しましたように、貴女の部屋に、温かく、可愛らしく座っていることです。貴女の立場でしたら、私は少しも騒がず、自分の片隅に静かに鼠のようにしています。　ー」。

「そして夜になって、皆がベッドに就いたら、出て来て、貯蔵庫を点検して、砂糖を舐めるのね。有り難う、パシャ・トイブリヒ親方。でも私は真鶸や、鶯、カナリアにすっかりなりたいとは思いません。更にキント少尉のことを話してください」。

「彼は一度道を知ってから、よく私の許へ来られます」とトイブリヒは言った、「そして同様に自分の許へも来るようにと私を招待し、私は出掛けました。しかし少しも心地良くありません。長く居すぎると体に悪寒が生じます」。

「でも二人であれこれお喋りして楽しむのでしょう」。

「勿論です、憚りながら申しますと、我々は喫煙します。それぞれ自分のパイプで、互いに数時間向かい合って座り、どちらも一言も話しません。私は何も知らないから話さないし、少尉殿は、多分に、話したくないからです」。

「それは面白いわね」とセレナは笑いながら叫んだ。

「いえ、どうも、面白くはありません」とトイブリヒは言った、「しかしそれでもその方が、少尉殿が話す気分になられて、私をぞっとさせることに満足感を覚える場合よりも、はるかに快適です。彼の満足感ときたら。彼がそれで満足感を得ているとか、満足げに見えると言いたいのではありません。しかし大変な嗜好を有しています。それは確かです」。

「何について話すのです、トイブリヒ」。

「彼は自分の亡き妻、自分の亡き娘について、他の人々、死んだ人や生きている人について話します。それもある流儀で話しますが、これは哀れな仕立屋職人にとっては、たとえこれがエルサレムやダマスカスに行って、自分の生涯をあらゆる種類のトルコ人やベドウィン人[アラブ遊牧民]、ユダヤ人、キリスト教徒と付き合って来たとしても、それでも賛同出来ない流儀なのです。私は確信しています、このような情動のとき、彼は私が居合わせているとは考えていなくて、自分はただ壁に向かって話しているつもりなのであろう、と。いや、御令嬢、ケドロンの谷のマル・サバで眠り込んでしまって、またケッセル通りで目覚めた者にとって、彼は所々、高貴な貴族や立派な聴衆を相手には、容易に恥をかいてしまうような流儀を有しています。だって、びっくりした子供のように大声を上げて、叫びたくなりましょうし、このように劣等で、汚れた流血の恥辱、困窮から、地団駄踏んで家に帰りたくなりましょうからです。あたかも太陽や月、すべての星々が、血と糞とで丸められて、永遠の中に投げ付けられるかのように、そしてこの深甚の深みから至高の天に至るまで、万事ただ罪と死によってつながっているかのように思われるからです。いや

はや、親愛なる御令嬢、キント少尉殿のことは、その話しは、お忘れください。我らのハーゲブーハー殿について話しましょう、さもなくば私を家に帰してください」。

セレナ・ライエンシュラーガーは疾うに、その揺り椅子でのぞんざいで快適な姿勢から起き上がって、前屈みになって、両腕を椅子の肘掛けに置いて支えにして、驚いて仕立屋の目を見ていて、そして語った。

「トイブリヒ、私が貴方を、完全に無害な人間と思っていなかったら、貴方に実際、良い晩をとお祈りして、ドアに閂をした後で、貴方についてあれこれ何でも考えることでしょう。ちなみに構わないことです。私は貴方や老いた人狼の殺害噺や絵空事に介入したくありません。殊にすでに黄昏になって来ています。貴方のアフリカ人のご主人について話してください。その方がもっと貴方にとって話しやすいでしょう。この殿方は夜中の十二時に墓地に現れても私を笑わせてくれましょう。トイブリヒ、貴方はこの方を何歳と見積もられていますか」。

「その運命を勘案しても、彼はまだ純然たる若者です。しかしそれ以外、多分四十歳間近でしょう」とパシャは言った。セレナは更に少しばかり起き上がって、右足で床にその憂わしげな数字を数え始めて、しかしやがて諦めて、小声で笑った。しかしはなはだ満足げであった。

「四十歳、四十歳。まことに堅実で、分別ある年齢です。でも一体全体貴方は何を本来彼の運命と呼んでいるのです。運命を勘案しての純然たる若者とは何です。ムーア人の許での向こうでの滞在のことですか。あら、バーカ。これは例えば私の運命と比較して何なのです」。

「貴女の運命ですか、いや、御令嬢。詰まらぬことを仰有ってはいけません」。

「全くそうじゃありません、友のパシャ・トイブリヒ。私は以前からも、この神の広大な大地で、他の女性よりももっと深くあらゆるムーア人の生計に関与していましたし、今も関与していませんか。この世の他の女性で、私ほどにかつて退屈や倦厭に耐えなければならなかったものがいるでしょうか。教えて欲しいわ。私にエジプト語の辞書やコプト語の文法は何の関係があるのでしょう。私は蟻の巣の中に生まれる定めで良かったのに、我が愛する父君の家に生まれたし、父君は私にとって余りに学がありすぎるし、第二に余りに優し過ぎます。いえ、イエス様、私は第一に秩序を築くために、そしてそれからこの秩序に反吐を感ずるために生まれたのかしら。トイブリヒ、貴方は私の望みの男の方です、貴方となら笑いものにならずに、そしてあけすけに話したからと言って、笑われることなく話せるからです。貴方は情感豊かな人間で、人間化された薄明かりの時刻です。オリエントにも行っていらっしゃる。貴方は私のことを理解してくださる唯一の方で、私の見えない所で、恥知らずの陰口を叩くことがありません。あら、何かしら、お聞きなさい、あれは何かしら」。

「駅の機関車の汽笛です、御令嬢」。

「勿論、フランクフルトの急行の汽笛です。私は時刻表を良く頭に入れています。そしてこれが私の情けない点です。以前のロマンチックな騎士の時代には、レディー達はバルコニーに立って、月の上昇や沈降を眺めていて、騎士とかその他の者が、到着したり旅立ったりして、下の森の中で猟笛を鳴らしたのです。幾らか下がって、人々は駅馬車のラッパに聞き入り、自分の仕事を考えました。そして率直に言って、これにはかなり納得出来

る点があります。というのは騎士の時代はそれほど確実には信じられないからです。今日では、私どもの憧れの、旅への欲求のために、鉄道の汽笛があります。それでこの汽笛は、確かに陶酔的な、不安げな魂にとって、極めて刺激的なもので、殊に駅が余り遠くに離れていない場合そうです。乗車願います、皆さん、乗車願います。いや、トイブリヒ、トイブリヒ、やがて真夜中過ぎに出発して、その時でも私が良く起きていることがある列車があります。この列車は私を今一度、絶望とか、逐電とかに誘います。しかし静かな晩に、かなり明瞭にポーターの鐘の音を耳にします。するとすべては夢に終わって、『急ぐ雲よ、大気を駆ける帆船よ』[シラー『メアリ・スチュアート』Ⅲ,1空に帆かけて、飛びゆく雲よ、岩淵達治訳] ー とか、『私が小鳥であれば』[『少年の魔法の角笛』] ー とか、類似の感傷的なものはどうか勘弁くださいとなります。こうした詩文を信じなくなります」。

「こうしたものは、勿論、情感豊かな人間がある時期感ずることになる感情です」と夢想家の仕立屋は深く沈思して嘆息した。「私にはよく分かります。いや、勿論、十分に注意していないと、これは最初有り得ると思っていたよりもはるか遠くへ、間近の青い山々を越えて、人間を連れ去るものです。これが私とかレオンハルト殿をどこへ導いたか、私はまことに良く承知しています。しかし我が御令嬢、貴女がいつこのような思いに駆られるのか、これが実際不思議でなりません」。

「それを貴方が明らかにしてくだされば、まことご親切なことに存じます。まこと貴方にお礼を申し上げましょう。私自身そのことを深く考えてみました。でも思いますに、そんなことよりもっと有益なことに時間を割くべきだったのです」。

パシャは丁度、彼が普段老いた乙女エウロパ[ヨーロッパ世界]の案件とは少しも関知しない、かの時のような表情となった。彼の目は、周知のどんよりとした空色に凝固した。彼は呟いた。

「例えば、美しいニコラ・フォン・アインシュタインがいて、彼女はフォン・グリメルン男爵殿と結婚せざるを得なかったわけです。彼女は雲に乗っていて、人々は路地に立っていて、舗石を示しながら、口を歪めていました。この夫人の額がこれからどこに寝ることになるのか、良く分かっていたのです。いや、御令嬢」。

「トイブリヒ」とセレナ・ライエンシュラーガーは囁いた。「トイブリヒ、今私どもはまた、先ほど脱線した箇所に来ました。私どもは二人っきりです。貴方の夢想について話してください。学校の外ではお喋りしないと約束します。でもどうしても知りたいのです。レオンハルト・ハーゲブーハー殿は、この珍しいブムスドルフのフォン・アインシュタイン令嬢と何を行っていたのか。二人は一緒にタンポポや菫を探して摘んだのでしょう。二人は一緒に白い子羊達を一本の薔薇色の絹の紐でもって、野原の上、散歩したのでしょう。この令嬢は、雪のように白い馬、プロスペロという名の馬に乗って、ハーゲブーハー殿はその横を息を切らして駆けたのでしょう。それから更に向こうには神秘的レディーがいます。古い、朽ちた水車小屋の隠者の女性です。こうしたことすべては、とても間近な鼻先のことで、手で掴めそうなのに、何もそのことが分かりません。だから貴方が、私の穏やかなトイブリヒ、私のとても大好きなパシャ・トイブリヒ。貴方はこうしたすべての神秘について何をご存じです。これについてはハーゲブーハー殿から、本来私どもに説明して頂きたいことですけれども」。

「静かに、静かに、御令嬢」とパシャは囁いた。「タンポポや菫、子羊や緑の野原、こ

れは放っておくことです。私には一軒の家、堂々たる家が見えます。こちらのこの町です。貴女も同様にその家をご存じです、ライエンシュラーガー嬢。重たくて、粗野な拳が打ち壊します。　ー　黄金の縁取りの高い鏡が割れて、シャンデリアが消えるのが見えます。私には声が聞こえ、私の背後で嘲笑的な笑い声がします。　ー　ある声は絶望の声のようで、ある声は呪詛の声のようです。私は劇場の第四の天井桟敷にいて、『ヴァレンシュタインの死』の第五幕を見ていると考えます。シラーが死体を上手く処理しているもので、　ー　この死体は絨毯に包まれて奥へ運ばれるのです。この場面を全身で感ずるためには、仕立屋でなくても構いません。これは印象的です。我が令嬢、丁度先ほど、どこかでドアが打ち壊されるのを聞いたような按配で、そして　ー」。

令嬢は金切り声を上げて、仕立屋は両手で席にしがみついた。　ー　この瞬間、誰かがドアをデーヴェルやマクドナルドの如く[シラー『ヴァレンシュタイン』の殺人者]、ドアを打ち壊したのではなかったが、しかしノックの音が耳に聞こえたのであった。そして二人のお喋り屋のどちらも、お入りと言わなかったので、再度ノックされ、それは一層聞き取れた。

「あらまあ、どうぞ、お　ー　入り」とセレナは喘いで言った。一方パシャは今や真っ直ぐに立って、壁に身を押し付けていた。するとこっそりと開けられた門口を好意的に微笑してレオンハルト・ハーゲブーハー殿が覗いて、丁重に尋ねた。

「入ってよろしいでしょうか、ライエンシュラーガー令嬢」。

「これはびっくり、この人はいつも間が悪いのだから」とセレナは笑って叫んだが、しかしかなり苛立っていた。

第二章

「我がトイブリヒもいるな。父君はいずれにせよ、向こうで、仕事に没頭して、顔に汗して、掘り返しつつ語根を探しておられよう。万事正しい場所にあって遺漏なし、しかし玄関の外では、一人の役立たずの、髪の乱れた、黒い妖魔がいて、憤然と嗚咽していて、両拳で頭を押さえていて、そして家の中で階段で、二人の小人が袖をまくり上げて、言っていた、『彼奴に仕返しをしてやった、すべての蜘蛛の巣や瓦礫の鉢やその他の厭わしいガラクタ共々、投げ出してやった、しかし面倒であった』と。　ー　セレナ令嬢、こんな寒い時に戻って来まして、こんな温かい暖炉の許で両手を暖めることが許されまして、嬉しく存じます」。

「トイブリヒ、火を熾してください。それから父君に伝えてください。ハーゲブーハー殿が戻られました、ほとんどお変わりありません、と」とセレナは笑った。パシャ・トイブリヒ[鳩]は、この瞬間、パシャ・ゲンゼリヒ[鵞鳥]と呼ばれても良かったであろう。というのは彼は一方の足で立ったり、もう一方の足で立ったりしていたからであるが、ドアから跳びだして、階段を駆け上がって行った。すると向こうで、重たい椅子が鈍い物音を立てて、後ろに下がり、続いて騒音が生じた。あたかも『古代の知の宝庫』の全四十五巻のフォリオ判が書架から落ちて、そして偉大な巨匠のペーテル・ヴァン・デル・アーからグレーヴィウス[1632-1703]とグローノヴィウス[1645-1716]の博士達までの全編集者がそれに続いて転げ落ちて来るかのようであった。今や階段でそれ以上にもっとひどいガタガタ

音がして、ライエンシュラーガー教授がその娘の部屋に駆け込んで来て、干涸らびた両手で家の友のアフリカ人の襟を掴んだ。

「万歳、万歳。私は一日中、横隔膜の辺りに収縮を感じていた。私は天候のせいと思っていた。有り難や、戻って来たな、レオンハルト。私はスーダンの方言に掛かりっきりで、ソマリアの言語を思うだけで、熱が出る。そこの娘については話すことはない、率直に言って、余り気に留めていないからな。しかしこのトイブリヒが貴方のいない間、以前よりも多く油を売っていたぞ。ハーゲブーハーよ、ほとんど何も知らせず、消えるのは、そして高貴な、この唯一の学問を朝食のように放置するのは、感心しないぞ。さあ、これから私と一緒に私の部屋へ行こう。貴方に色々見せるものがあり、知らせることがある。貴方の関心をとても引くであろうものだ」。

「すごいわ、父君、そうこなくちゃ、行きなさい」とセレナは叫んだ、「この殿方は氷柱のように鉄道からやって来て、寒気を持参して来ています。赤道でお金と引き換えに披露出来るような寒気です。その上、この方は故郷で哀れな父親を埋葬して、涙に暮れる母親と妹とを残して来たのです。それなのに父君は、その文法とソマリアの言語、それにスーダンの方言とで迎えています。あたかもこの世で、この人にとって父君のために語彙を調べることより大事なものはないかのようです。いえ、父君、私の生涯でもこれほどの利己主義者を見たことがありません」。

「それはまことだな、そのことは忘れていた」と教授は情けない声で言った。「レオンハルト、心から貴方に許しを請いたい。貴方は半ば凍えて旅から帰っており、貴方の家庭ではまことに悲しい葬儀があったのだ。トイブリヒにワインを一本貯蔵庫から持って来て貰おう。この娘が立派な夜食を準備してくれよう。レオンハルトよ、貴方は、言うまでもないことだが、固くこう確信していよう、我々は、貴方の関係する一切に衷心より深い関心を寄せるものである、と。それで貴方に、貴方の旅、並びにブムスドルフとご両親の家での貴方の滞在について、必要なことを語って貰おう。そして我々は貴方に弔意を表して、貴方に然るべくお悔やみを申し上げることにしよう。勿論、　ー　今日は我らの家庭の事情について話すことにして、明日から再度船出して元気よく、学問の高い波の海を渡ることにしよう」。

「父君は改善の余地なしです」とセレナは言った。しかしレオンハルト・ハーゲブーハーは教授と握手し、それから令嬢とも握手し、パシャとの握手も忘れなかった。そして教授の夕方のプログラムは同じように遂行された。このプログラムは諸事情に完璧に合っており、快適さと憂愁の双方に最適な仕方で対処していたからである。

セレナは窓の白いブラインドを自分の可愛らしい手で閉めた。ライエンシュラーガー家の夕方の明かりを磨りガラスの球に運ぶブロンズのインディアン女性像をトイブリヒはテーブルに置いて、お茶のやかんが歌い始め、教授はハミングを始め、ハーゲブーハーはニッペンブルクとブムスドルフについて、母親と小柄の悲しみの妹について、亡き父親について、生きている従兄弟ヴァッサートレーターについて語り始めた。しかしカッツェンミューレについて、クラウディーネ夫人について、ヴァン・デル・モーク氏については語らなかった。セレナ・ライエンシュラーガー嬢はとても関心を示して、幾多の思いやりのある質問をした。教授は確かに、想像される通り、何度も会話をそれでもコプト語に導こうとして、しかしその度に、この試みの不適切さ、無益さを察知して、ほとんどすぐに許し

を請うて、娘御の肩竦めとか尖った口先で指摘されることもなかった。

考えるべきこと、話されるべきことは多くて、一般的な比較言語学や、特殊的なエジプト語の辞書に言及する必要はなかった。これまでのところ、ヴァン・デル・モーク氏はライエンシュラーガー教授のお茶の席ではまだ全く余計な存在であって、領邦首都ではレオンハルトが不在の間、ニュースと言えるものは何も起きていなかったので、会話は中断されることがなかった。ここではハルモニー[調和]館のホールでのかの講演は、これは極めて不調和な終わり方をしていたが、汲み尽くせないテーマとなって、別の照明の下、別の色合いとなり、この話題に関しては、教授でさえも、この件に妥当すると思われる幾多のことを口にした。しかしつい最近の日々の出来事の後、この講演はアフリカ人[ハーゲブーハー]にとって、快適にお喋りするための快適な素材以外の何ものであったろうか。

キント少尉の薄暗い姿でさえも、出現して来たのは、ようやく十一時になった時であった。お互いに別れの時となって、レオンハルトはパシャとケッセル通りまで帰ることになり、パシャをライエンシュラーガー家のキッチンから連れ出したのであった。　ー

「まことに愛らしい、とても快適で、気の利いた人間だ。彼が学問にとっての自分の重要性をほとんど予感していない点が、私にとって、可能ならば、彼の価値を一層高めることになろう。彼がまた戻って来ていると考えると、私はこれからもっと良く眠れることだろう。お休み、セレナ」。

「お休み、父君」と娘っ子は言った。しかし頭を老紳士の方へ向けていなかった。彼女はその後かなりの時間、テーブルを前に座っていて、上品な額をその両手で支えていた。比較言語学に最も深く没頭している時の父君との紛れもない類似点が可愛い顔に浮かび上がっていた。セレナ・ライエンシュラーガー嬢は何かを比較していた。それも徹底的であって、しかも立派な学者がスーダンの方言やソマリアの言語に執着する時に劣るものでなかった。

「でもひどすぎるわ」と令嬢は半ば怒って、半ばべそをかいて、叫んだ。しかし頭を同じ瞬間、頭を聞き耳立てて、持ち上げた。真夜中の時が告げられた。鐘の最後の打撃の反響が止むと、かの南西へ出発する列車が、遠方からその甲高い別離の挨拶を寄こした。微かな、しかし相変わらずふくれっ面の微笑が令嬢の顔に浮かんで、それから彼女は真面目に決然と言った。

「やっと何をしたらいいか分かった。私もベッドへ入って、何も気にしないことにしよう」。

そのように彼女はした。しかし彼女が枕を満足の行くように整えて、掛け布団を自分の上に引き寄せた時、すでに半ば眠っていたが、欠伸をし、赤面しながら、こう呟いた。

「構わないわ。パシャ・トイブリヒがもう一方の阿呆に今夜のことをどう話して、この相手がそれにどう答えるのか、知りたいものだけど」。　ー　我々もかの二人がケッセル通りへ向かうのに同伴しており、我々はそのことを承知しており、後世にこの珍しい会話を割愛する権限はないであろう。

「いや、旦那、両の可愛いお目々でした」と仕立屋は語った。長い自己会話の結びとしてその言葉を同伴者に向けた。するとハーゲブーハーは言った。

「そうだな」。

「極上の緑の森を抜ける澄んだ鱒の小川からのきらきら閃光です。彼女が口を開けて、

右手にえくぼ、左手にえくぼ、顎にえくぼで話されますと、つまり『トイブリヒ殿、貴方に会えて嬉しいわ』と、そうしますと、実に、　ー　まるで　ー　あたかも、　ー」。

「その比喩は結構、客人の友。そのようにお喋りして何になる。小川はさらさら流れて行けばいい。口を慎め」。

「いや、旦那。ヤッファ[テルアビブ]の隊商宿で私は昔、お伽噺の語り手から聞きました。彼はこう言っていました。立派な音楽には四つの楽器が必要だ。バイオリンにリュート、ツィター、それに、ハープです。まともな花束には四種の花です。薔薇に、ミルテ、アラセイトウ、それに百合です。まともな人生には、ワイン、お金、若さ、それに愛です。しかし私は思います。この両目の中には、すべての音楽、すべての花、そして楽しい人生に必要なものがすべて含まれており、それでその他自余のことは、案ずるに及ばない、と」。

「すべて陶酔させるものは禁止だ」とハーゲブーハーは嘆息した。

「それは私の見解でもあります。しかしながら私どもは沢山貴方のことについて話しました、レオンハルト殿、　ー」。

「アラーの名において[ビスミラー]、彼女は私について何と言ったのだ」と立ち止まりながら、ハーゲブーハー尋ねた。そしてはなはだ激しく仕立屋の体を揺すって、それでトイブリヒは、縮み上がり、ほとんど間近の角石にへたり込みたくなった。「結構なことをそなたら二人でお喋りしたんだろう。　ー　では、その可愛い娘は、トゥムルキー州とこのトゥムルキー州からの男についてどのように考えているのか、話して貰おう」。

「いや、旦那、しばしば黄昏時、親密にあの娘の部屋で一緒に座っていたのです。それで、　ー　そのとき　ー　そのとき　ーいや、奇妙なことです。私どもが一体貴方について何を話したか、言葉では再現出来ません。本当に珍しいことです。私の魂の全体、それに記憶も、それで一杯なんですが、今となっては彼女が何とも愛らしく、悪戯っぽく座っていらしたこと以外何も覚えていません。　ー　しかし私どもは、レオンハルト殿、貴方のことを話したのです。それに鉄道のこと、遠方への憧れのこと、その他百もの事柄ですが、しかし主に私どもの夢や、ニッペンブルク、ブムスドルフについてなのです」。

アフリカ人は笑った。

「トイブリヒよ、それ以上言わなくても良い。貴方の報告は、願ってもないものだ。ちなみに我々はここで我らの天幕に着いた。祝福されて入室したいものだ。神々が我らの足許にどのような明かりを投げかけられようと、思い上がってはなるまい。パシャ・トイブリヒよ、ベッドへ入って、目覚めて生きていた時同様に、夢を見るがいい。貴方に対してはそれ以上の願いはない」。

彼らは玄関の前に立った。しかしレオンハルト・ハーゲブーハーは差し当たりベッドに入れない定めであった。

「私はすでに駅で貴方の到着を耳にしたのだ」とヴァレンブルクの囚人部隊の先の少尉キントが言った、「それで、ここで私は貴方を待っていた。ようこそ、ハーゲブーハー殿」。

仕立屋は家の壁に身を押し付けた。しかしレオンハルトは陰気に言った。

「少尉、貴方は約束時間の悪魔同様、時間厳守です。結構、結構。貴方もようこそです。だって、丁重な作法では、そう申し上げる必要がありましょうから。私は何をしたらいいのです。貴方は今夜にも、グリメルン家に警報を鳴らしに出掛けるつもりですか。貴方を妨げる者は誰もいません、　ー　進め、進め。すべての犬を解き放てばいいのです。　ー

そして一番乗りをなさるがいい。貴方に加担しないものを、貴方は我々から切り離す所存なんでしょう」。

「そんな風に私と話さないでくれ、ハーゲブーハー殿」と少尉は言った、「とりわけ貴方はそうするいわれはないのだから」。

「そうです、そうです、キント、貴方の仰有る通り。貴方は貴方の約束を守られた。我らは我らの約束を守ることにしましょう。それで、こんな遅い時刻に、私に対し更に何を話したいのです。私と一緒に私の部屋に上がりますか」。

老公は頭を振った。

「四つの壁[家]の中で、息をするのは、しばらく前から私にはますます苦しく感じられる。貴方を長く引き留めるつもりはない。戸外に残ることにしよう」。

レオンハルトはパシャを家のドアの中へ押し込んで、その後ドアに施錠した。それから彼は老公の腕に自分の腕を入れて、一緒に更にケッセル通りを歩いた。しかし十五分後には彼は戻って来て、すべての眠っている階をのろのろと上がって、帽子を床に投げ付け、辛辣に怒りながら、笑った。

「それではこれが彼の望みか。...彼は私からヴァン・デル・モーク氏を取り戻して、一緒に悲劇を終わらせたいのか。一緒に鎖に繋がれていた仲間がいなくなったガレー船の奴隷同様、この同志を求めているのか。すると鉄の弾も、自分一人では重すぎるわけだ。神掛けて、随意に彼が決着を付けるべきであろう。誰も彼に救援の手を差し出すべきではあるまい。目には目を、歯には歯をだ。　ー　彼の眼前には自由な道が開けており、目標は立派なものだ。何の助けを求めて、何を見回しているのだ。彼はクラウディーネ夫人の許へ至る道と関係するものを、何一つ、何一つ持っていない。この道を見いだした者で、彼の手でナイフが震えるかどうか、気にする者がいようか」。

彼は憤然と部屋の中を見回した。仕立屋は暖炉に火を熾していて、テーブルには燃えるランプを置いていた。　ー　アブ・テルファンの粘土小屋から救出されて以来初めて、レオンハルト・ハーゲブーハーは、自分の今の滞在地の汚れた壁、低い天井に目を向けて、口を歪めた。彼は老いて、寒けがし、不機嫌であると感じて、切に明かりと休息、そして清潔さを求めた。昨日彼はようやく、クラウディーネ夫人に再度別れを告げて、今日すでに夫人との別れを深く、痛切なものに感じ、自分の哲学や経験を総動員して、夫人の安心立命の存在や、高貴で、静寂な英知の代替物を病的に探していた。今日の夜、彼はほんの短い一瞬、セレナの小部屋で、自分の元来の、混乱した実存を忘れることが出来た。しかし冷たく、無分別に、キント少尉がこの快適さの中に侵入して来た。このアフリカ人は、快適に眠りに入る代わりに、ただベッドの端に腰掛けて、最近の週の得失に関し、きちんとした家事管理人のように、自分の実生活の当該引き出しに分配整理した。

疑いもなく、ブムスドルフの老紳士は亡くなって、埋葬され、その放蕩息子がその代わりに家父長となる。従兄弟ヴァッサートレーターは現存する財産目録を現実と比較して、財産は靴脱ぎ器に至るまで、驚くほど一致していると知ったが、少しも驚いていない。ニッペンブルクでは夙に、税検査官ハーゲブーハーは、計算も農業も弁えた倹約家の男として、年月の経過の中、かなりの額の金を貯め込んでいると承知していた。しかしただ、この「素敵な金」が今やこの役立たずの手に落ちることを遺憾に思っている。摂理はこの手に落ちることに対して際限もなく無頓着に見える。摂理はこのアフリカ人山師の母親と妹

とを全く温かく守って来た。そしてまたしても明らかになっているのは、ニッペンブルクの名士達の一人である人間が、この舞台から去ることになっても、世間はそのことで何も脱線することはないということである。ちなみにハーゲブーハー親父の死去以来、ハーゲブーハー息子は、ニッペンブルクの人々の目に、はるかにより好意的な明かりの下、映じている。そして舞台への思いがけない再登場でこの息子が共同体に引き起こしている怒りや、不穏、興奮に関し、息子のことを大目に見始め、息子のことをたとえ「風変わりで」あろうとも、しかし全く尊敬に値する男として世論で盛り上げようと控え目に試みる人々がすでに存在している。このことは我らの友レオンハルトにとってどうでも良いことであろう。そしてすぐに手を振って彼は自分のベッドの端から、財産目録やこれに関する人々の噂話を片付けた。

谷にある、雪に覆われた水車小屋。この水車小屋はアフリカ人にとって、静かに喪に服している父の家よりも全く別の頭痛の種となった。多分母と息子は今一緒にいて全く幸せであろう。お伽噺の眠れる宮殿の周囲のように、この水車小屋の周りに不可侵の茨の生垣が生長していたら、この水車小屋の二人に対し、この生垣を望まない人というのは、単に道理の分からない人間と言えたであろう。しかしこの秘密はどれほど長く秘匿されるであろうか。従兄弟ヴァッサートレーターはこの秘密を知っている。そして十分に見張ると約束してくれた。しかし、ニッペンブルク、ブムスドルフ、それにフリーゲンハウゼンの村に知らせないでおくということが可能か、　ー　ほんの雪解けまでも可能か。

さて呟き声が一つの叫び声になったらどうか。突然、ある声がニコラ・フォン・グリメルン夫人の耳に叫んだら、死者達が蘇っている、と。哀れなニコラに対してはカッツェンミューレに彼女の避難場所が用意されている。しかしこの声を耳にして、そこに逃れるだろうか。彼女はヴィクトル・フェーライゼンの名前を聞いたら、そこから最も遠方へ逃れなければならないのではないか。

どこへも逃げ道はない。アフリカ人は息苦しくなって、高く飛び起きて、窓を開け、大きく身を乗り出した。「臆病者」と彼は歯の間で強く囁いた。奇妙なことに彼はこの言葉でキント少尉を指していた。彼は少尉の姿をその闇の中、追った。彼はあたかもその老いた男を自分の意志通りに操れる目に見えない糸を持っているかのように､両手を震わせた。路地から路地へと彼は一緒に進み、一歩一歩彼はそのすぐ後に付いて行き、かの家の敷居まで来た｡その家の影はとても暗く､彼のヨーロッパでの行動と思考の上に掛かっていた。彼は少尉を見た、　ー　彼は少尉を見た。少尉が手をドアの鐘の真鍮の握りに手を差し伸べる姿を見た。この鐘が甲高い、びっくりする音を市の過半の上に響かせるのを耳にしたことであろう。二回目の呪いを発して、しかし今回のこの呪いはキント少尉に向けられたものではなく、彼は宙を掴んだ、あたかも運命の武骨な骨張った手を引き戻したいかのようであった。彼女は今晩一晩、眠ったままにしておこう。...

彼は窓を閉めて、引き返して、再度ベッドに身を投じた。明瞭な思考、落ち着いて、冷静な概念の整頓、　ー　得失の整理は、　ー　もはや問題にならなかった。美しいニコラ・フォン・アインシュタインが森の外れに座っていて､自分の膝の中で花輪を作りながら、歌った。

「起きよ、汝ら名誉ある騎士、

汝ら、小姓、弓の射手よ、
乾坤一擲の時が来た、
扇を一気に開くがごと、
今や夜が朝となり、
クリュメネー[女神]が現れ出づ」。

何と空しい世界か。何の考えも、何の願いも、何の計画も、次の十五分間継続しない。アブ・テルファンに捕囚されて、鈍重に瞑想を重ねた方が、あるいはヴァン・デル・モーク氏の流儀で、全世界を股に、野蛮に無謀に突撃した方が、この正義に対する徒な煩悶、この熱に浮かされた探索よりも勝るのではないだろうか、クラウディーネ夫人。この世では誰もが正当な目に遭うのではないか。だから各人の運命に任せればいい。水牛のように体に鞭が当てられているのではないのに、動いてしまう阿呆は誰だ。かくも何千年分の経験をした後で、相変わらず、迷える騎士の演技をし、人類の頭脳、心、胃を正しく働かせようとはりきる馬鹿がいるだろうか。

最も幸福な者、最も無邪気な者は、常に、完全にパシャ・トイブリヒのように夢の中に救出されている者に他ならないであろう。しかしこれほど恵まれていない者は、自らかの利己主義に救出すべきであろう、つまり隣人を叱らず放置しておき、自分の巣を、自由に使用されるべく散らばっているこの世の羽毛や、渡屑、草の茎や芽から作り上げる利己主義だ。クラウディーネ夫人、我々はカッツェンミューレで最近、気高い言葉を話しました。そしてあらゆる混迷にもかかわらず、この世は我々両人の前で、平静な輝きを帯びて横たわっています。しかしこれは森の中、カッツェンミューレでのことで、そこではわずかな水も、もはや時を数えることがない。そこでクラウディーネ夫人、貴女も夢の中に救出されて座っています。しかし侯爵の領邦首都ではどのように振る舞うべきでしょう。キント少尉が現実にニコラ夫人の敷居に座っているのです。

「枕の下に剣を置いて眠ることにしよう」とレオンハルトは憤然と叫んだ。そして彼がやっと現実に眠ると、彼は、温かいナイトガウン、一足の素敵な柔らかいスリッパ、一本の長いパイプ、そして一つの沸いて歌い出すお茶のやかんについて夢を見た。

第三章

「お入り」。

神経質に緊張して、ハーゲブーハーは階段を急いで上がって来て、そして彼のドアの前で立ち止まる足音を聞いていた。しかしそれだけにより大きな快適さを感じて彼は早朝の訪問を受け入れた、つまりフーゴ・フォン・ブムスドルフ少尉殿、実入りの良い父親の陽気な息子であった。

「たった今、懐かしい故郷からの貴方の帰還について耳にしたのだ」と若々しい兵士は語った、「貴方に即刻、私の衷心からのお悔やみを言上するのが私の義務と思ったのだ。貴方は父上を亡くされたと私の父親が若干メランコリックに記して来た。それで先に申し上げたように、謹んで哀悼の意を表す。もっとも私に対する故人の敬意は、故人に対する私の敬意ほどには深いものではなかったと注釈出来ようが」。

「貴方の弔意に感謝致します、フォン・ブムスドルフ殿」とレオンハルトは答えた、「貴方のご家族はご健勝です。そして皆様からよろしくとのご挨拶を言付かっています」。

「結構」と少尉は全く動じずに言った、「老父は他に貴方に何も伝言していないですか」。

「いや」とハーゲブーハーは微笑した、「まあ、何と言うか、　ー　何と言うか、　ー」。

「何と言うか、むしろ高等な家父長主義的分野を、カンペの『我が娘に寄せる父親の助言』を、何と言うか深く倫理学教本を拝読風なものだろう。いや、我が最良の友よ、こちらでは如何に毎日、毎時刻、私は倫理を説かれているか、この我がアルカディアの生みの[生殖の]親が承知していたら、きっとこの父親はその倫理学を保留しておき、貴方に彼の股の子孫に対し、このとても難儀し、抑圧され、打ちのめされている子孫に対し、もっと実用的なこと、もっと役に立つことを伝言したであろうから、貴方は静かに黙しておればいい。しかし閑話休題。貴方の家族について、哀れなレディー達について話すことにしよう。まこと私はこのレディーの方々に衷心から同情するに吝かでない。我々は貴方がアフリカにいて不在の間、とても仲良く暮らして来た。私は国道側のライラックの園亭で幸せな時を過ごした。従姉妹ニコラが休暇で領邦首都から戻り、そして私が士官学校から戻って来た時、我が妹達や、貴方の妹御と一緒に、何という楽しく牧歌的一日を、レオンハルトよ、野原や干し草馬車、牛乳保管室で過ごしたことか。いや、これは称えられるべき生活であったし、勿論倫理学が鼻先で説かれる必要もなかった。ハーゲブーハーよ、貴方に言っておくが、私ほど合理的農業経営に向いている人間はいなかったのだ。しかも、誓って、これは世間や老父に今も証明出来よう。私にこれが出来ないなら、それも即刻出来ないのであれば、悪魔に掠われろだ」。

「貴方は現今の生活のための職にうんざりしているのか、少尉殿」。

「うんざりだと。この言葉は私の感情のヘソにまでも達しないな。うんざりだとも。博物学でもかつて新種の昆虫に対する新しい名前をより深く考えた者はいないであろう、この私が自分の現今の状態に対する新しい表現を考案するほどに深くな。この観点での私の唯一の希望は貴方のコプト語の教授だ。この教授がどこかのエジプトの岩石部屋かピラミッドで我が状態にぴったりの楔形文字とか象形文字を発見してくれない限り、私は言い得ずにいて、世に訴え、世に流布させる考えを諦め、黙って歯ぎしりするか、沈黙して無視するしか手立てはない。いや、笑ってくれるな、最愛、最良の友よ。私が今日、トゥムルキー州へ出掛けて、そこで一つの演説をするならば、私は確信している、そこのレディー達が私の痛みを理解すること、こちらの可愛い少女達や、快適な未亡人達、優しい妻達がこちらで貴方の痛みを理解するに劣らないであろう、と」。

「私もそう思うな」とハーゲブーハーは笑った、「しかし一体どうしたのだ。貴方は若くて、健康で、父親のことを、過度な優しさという通弊に陥らずに、的確に判断する術を心得ていよう」。

「呪わしい」と意気消沈した若い兵士は喘いで言った。「呪わしい。初等少尉の惨めさを信じてくれる者はいない。その絶望の空虚極まる胸からの言葉に、それどころか皮肉な請け合いが伴奏される始末だ、すべてよく分かります、ただどうしてこのような実存の塗炭の苦しみの中、一人の人間が馬齢を重ねて行けるものか、分かりません、と。いやかの、歌い上げ、口笛を吹き、鍵盤を叩くすべての連中は幸せだ。彼らはその痛みをその技芸で風通し良く晴らせるのだ。しかし私は何が出来るか。何も出来ない。いや、　ー　ある、

[トランプの]ホイストとロンブルだ。しかしこれは勿論、自分が何と苦しんでいるかほとんど口に出来ない二つの技芸だ。これで風通し良く晴らせるのは、自分の心より財布の方だ。神様よ、神様、ハーゲブーハーよ、いかに深く人間は沈淪出来るか、ご存じかな」。

「私はそれについて若干経験したと思っている」とトゥムルキー州からの男は語った。しかしフーゴ・フォン・ブムスドルフ少尉は彼の胸に手を当てて、二歩後ろに押して、叫んだ。

「貴方がですか。自惚れないことです。貴方がそれについて何をご存じです。貴方は黙って一礼されましょう。私こと、フーゴ・フォン・ブムスドルフ、第二狙撃兵大隊の初等少尉は、自分が、　ー　あの、　ー　その、人間の魂の不死について、瞑想するように強制される時間を有していると言上出来るのです」。

「それは勿論びっくりだ」とレオンハルトは叫んだ、しかし少尉は続けた。

「しかしまだそれほど驚くに値することではありません。付言すれば、私はそれどころか、この問題を喫茶店で、戦友達の間で言葉にして解決しようと試みたことさえあります。これについていかが思われます」。

「実際、私は黙って一礼するのみだ。しかし戦友達の意見はいかがです」。

「戦友達の意見ですか。私には彼らが確固たる意見を持っていたとは思えないし、そもそも彼らがそのことを傾聴するに値すると思っていたか怪しい。甲高い嘲笑と共に彼らは私と私の発議を無視して、日々の業務に散りました。私はこの殿方らが、明るい陽光の中、ニンフ達の間を、トンボ[水の精]や、その他の羽根があったり、無かったりする珍味を求めて猟に向かうのを放っておき、次第に病気の鯉に似て、再度自らの底なしの深みに沈潜して行ったのです」。

「はなはだ絵のように具象的だ」とハーゲブーハーは笑った、「貴方は実際まだ、この珍しい啓発的情緒を紙片に定着させようと試みたことがないのか。手にペンを持って、この情緒から自由になろうと試みたことはないのか」。

「紙片ですか、情緒、手にペンを持ってですか。貴殿に私はすでに語っていませんか。『我が胸の中に住む神、この神は外部には何も動かせない』のです。これは引用です。[己のこの胸のうちに住んでいる神は/心の深い底の底まで掻き乱すことは出来るが、/己のあらゆる力の上に超然と座を占めている神は、/外界の物を何一つ動かすことが出来ぬ。:森鴎外訳『ファウスト』書斎]。ポール・ド・コック[1794-1871、フランスの娯楽作家]からではなく、ゲーテの『ファウスト』からです。そんなに大きな目で私を見ないでください。私は『ファウスト』を読んでいます。私のサイド・テーブルにいつも広げられて置かれています。私は自分の部下に厳しく命じて、その本をいつもそこに置かせています。いや、このファウスト博士です。ほとんど信じて貰えないでしょうが、それでも感動的に真実なのです。私は時に自分の情動に関し、このファウストにとても近しいと感じています。夙に薄暗い予感が、完全極まる、明瞭極まる確信となっています。つまり私にとっても、至高の活動、最後の救出は、偉大なる河川工事に求められる、と。永遠に女性的なるものは、全く度外視致しましても。私は目下、排水研究に全霊を上げています。誓って、私はいつかこのことにより、ブムスドルフの我が故郷の大地で、顕著な業績を上げることでしょう。いや、握手してください。ひょっとしたら我々が互いにもっと理解し合えるような、互いにもっと歩み寄れるような時が近いうちにやって来るかもしれません。いや、ハーゲブーハーよ、私はいつも貴方を立

派な若造と思って来ています。貴方が私をその逆と思っているのであれば、実に残念至極です」。

「私は貴方を実直な、誠実な友と思っている。陽気な心の戦友と思い、そしていつでもそうであって欲しいと願っている。いや、我ガ喜ビ、クリヨンよ、[Moritz von Strachwitz,1822-47のバラードより]、私自身信じている、我々はいつか快適にこの領邦首都での日々をブムスドルフの国道側、ライラックの園亭でレディー達に物語ることであろう、と。しかしどんな時でも我々はタフに耐え抜くことにしよう。そして私は貴方に、ブムスドルフよ、貴方の排水工事、土壌工事が万事恙なく成功するよう祈っている」。

「アーメン」と少尉は叫んで、付け加えた、「貴方には我ら如き事情の人間が、何らかの冗談に達するにも、いかに苦労しなければならないか、さっぱり分からないことだろう。勿論楽しみとか、それどころか情緒深さの話しではない。我ら如き者より更にもっとひどい状況にいる人間を私は一人だけ知っている。それは私の従姉妹、ニコラ・フォン・グリメルンだ」。

この訪問者をすでにドアの所まで同伴して、この者がようやく別れようとしているのを心底喜んでいたアフリカ人は、今や再び素早く、この門口と少尉との間に身を置き、叫んだ。

「貴方にはもうしばらく留まって貰おう。たった今貴方が発せられたこのレディーについて一言話して欲しい。私が彼女の生活にどれほど関与しているかは、貴方もご存じであろう。そのためにカッツェンミューレから、クラウディーネ夫人の許から戻って来たのだ。貴方は私がこの町から離れている間、毎日ニコラと接触していたのだろう。心からのお願いだ、若干彼女の生活について話して頂きたい。私も言っておこう、私がこの夫人のために貴方の全部の力、貴方の最良の意志を拝借に伺う時は、ひょっとしたらそう遠い先の時ではないかもしれない、と」。

少尉は自分の帽子をまた下ろして、驚いて不審げにアフリカ人を見つめて、それから言った。

「一体何の噂があるのだ。何がかくも爪先立って幽霊のように徘徊しているのだ、手短に、ハーゲブーハーよ、　ー　何が起きている。黄金小口本の詩人なら、上層民にも下層民にもさらさら流れる噂話と言うことだろう。我らの社交界の天には一つの雲が流れており、この救い難い古巣のすべてのヒナゲシ[お喋り屋]や罌粟の頭[愚民]、ケイトウ[鶏冠]、クロタネソウ[野の乙女]の上に独特の影を投げかけている。誰もが何かを嗅ぎつけているように見え、しかし皆目何か、分からない。しかし貴方はより正確にこの膣を覗いているように私には見える。ハーゲブーハー、何なのだ。我が大事な従兄弟、グリメルンの家に関し、何が胚胎しているのだ。頼む、可能ならば、私にも合い言葉を教えてくれ。私は何でも、私の口髭でも頭でも、従姉妹のためなら切り取られても構わないのだ。躊躇しているのか。それならば、我が信用のための新たな証拠を差し出すことにしよう、これ以上、貴方に攻め込まずにな。しかし一つだけ、私は自分の権利として、要求したい。然るべき時に、私を呼ぶように、とな」。

「友よ、感謝する」とレオンハルトは真面目に言った、「然るべき時に私は貴方の窓の下で叫ぼう、しかし、今は、ニコラがどのように生活しているのか、あの後、つまり　ー」。

「貴方が立派な講演をして、その後、我々から消えてびっくりさせて以来のことか。い

や、友よ、貴方はこの質問を一万人の初等少尉にしても良かろう。そしていつも同じ返事が得られよう。恵み深いご夫人は至極ご健勝です。実存在の明るい面を把握するのに並外れて達者な、愉快なご夫人です。昨日は舞踏会で魅力的に見えました。明日の舞踏会で彼女は勿論、またしても女達の中で、つまり既婚夫人達の中で、最も素晴らしい方となりましょう、と。しかし、ハーゲブーハーよ、私は怒って嘆息している。この女性を人々はどのようにしたのだ。この女性をどんな道化女に仕立てたのだ。哀れな女だ。私は彼女とはいつも良い仲であった。ブムスドルフ全体が私をあらゆる罪人の中で、最も劣等な屑として全面的に唾棄していたかの時代、彼女一人が敢然と、憂愁と驚愕とに散って行く親戚どもを笑い飛ばして、私の魂のダイヤモンドへの篤い信頼を、我がより高貴なる本性への信頼を揺るぎないものにしてくれたのだ。私は彼女に対しこのことを決して忘れない。しかし私がこれ以上彼女の家に足を運び、嘆きの余り死ぬほど立腹することになったら、これはまずいだろう。いや、私は何を口走ったか。私は彼女の許へ行って、彼女の側に座れなければならないのではないか。昔の時代、騎士や、若くて勇敢な従兄弟は、レディーを苦しめるあらゆる竜を撲殺したのだ。今日ではその奉仕は別様になっていて、騎士は推参して、レディーの側に座り、その阿呆な言葉でレディーの気を紛らわせる。奪還スル、ブムスドルフだ。私は毎日哀れなこの娘の許に座って、出来るだけ彼女の気鬱を晴らしている。そしてこの竜、従兄弟殿に、私は彼女のことを思って、耐えている。このことも同様に変化したご奉公の一つだ。しかし彼が帽子と杖を取って、その炎を別な所で吐き出す、これがいつも一番快適だ。これはまことに丁重な竜で、この世間を熟知しており、そのベンガル花火の生来の才能で、物事に極めて不可思議な照明効果を出現させている。それも単に宮廷でばかりではない。ちなみに鶏の論理学に関する賞金問題が考えられよう、つまり、卵を生むことが雄鶏に出来るか、その卵から、　ー」。

「いや、それはいい、男爵のことはいい」とレオンハルトは空想豊かな少尉を遮った。少尉は叫んだ。

「結構、結構、喜んでそうする。このバジリスク[怪蛇]閣下とその故人の父親、コーチシナ雄鶏、ブラマプトラ雄鶏閣下は放っておこう。我々、即ち、ニコラと私は、そんなわけで貴方が不在の間も、ハーゲブーハーよ、一緒であった。何も注解に値するものは生じなかった。我々はいつものようにお喋りした。まさに私がここで貴方とお喋りしている具合にな。我々はブムスドルフについて、あのプロスペロについて話した。　ー　貴方はこのプロスペロを承知だ。レオンハルト、もっと暇な折、私がいかにして三年前この馬を老父からせしめて、いかにしてまた老父がこれを憤然と我が馬小屋から取り戻したか、語ることにしよう。我々はカッツェンミューレについて、クラウディーネ夫人について、この水車小屋の妖しいレディーについて話した。何を話したかというのか。いや、そこに嘆きがある。いかに、昔、我々は互いに満足し合っていたか、思い出すと、現在が一層ひどく思われる。彼女はまだ以前同様笑う。しかしもはや昔と同じ笑いではない。思うに、彼女が少しばかり泣いてみれば、これは我らの状態に幾ばくかの陽気さを取り戻すであろう。いや、ハーゲブーハー、心理学は普通、我ら如き者の得意な学問ではない。しかしここにいるのは、私が完全に了解している魂だ。この魂は十分に長く防戦して、最後に十分名誉ある契約を結んだ。しかし約束の条件が守られない場合、哀れな苦悩の女性は何を始められよう。レオンハルト殿よ、貴方のように彼女は逐電出来ない。彼女は消えることが出来

ない。つまり、いわば、かの阿呆、ヴクトル・フェーライゼンに倣って、一つの神話になることは出来ない。此奴については今なお幾つかの漠たる伝説が町に残っている。彼女は自分の惨めさを、私のように、新兵に当たったり、あるいは賭博台で支払えない。彼女は銃を足許に置いて、いつも立っていて、司令官の粗野な言葉、当てこすりを聞かなければならない。司令官、それから老いた女ども、宮廷、最後に変わりやすい降水量の天候、これらが情け容赦ないのだ。これらが結局、我が従姉妹ニコラの誇り高く立派な度胸を打ち砕かなければ、これは一つの不思議であろう。貴殿、貴方は男だ、貴方は赤道下で沈黙を習得し、私にただ今もその見本を見せてくれている。私はそれを尊重しよう。私は、悠然とその時が来るまで待機できる人間を尊敬している。私はそれが出来ない。それで私はここで貴方に敢えて言明したい、かの家につきまとっている幽霊がすぐには明らかにならないのであれば、最も良いのは、正午十二時、例えば衛兵交替パレードの間に、出現して欲しいものであり、そのとき、私こと、フーゴ・フォン・ブムスドルフは、この従兄弟グリメルン殿に対し無愛想になり、一度彼の体をドアと蝶番の間で揺すって魂を出すことに無上の喜びを感ずることであろう、と。それではご機嫌よう。ハーゲブーハー、私のことを嫌ってくれるな。明日の夕方、警察長官ベッツェンドルフの許で舞踏会だ。その時、勿論、貴方は現れないだろう。しかし私はそこの静かな片隅で、貴方からの好意的挨拶をニコラに伝えよう。では、良い朝を」。

このアフリカ人は、その誇り高い、活発な友に対し、自分の黙秘に関し、やはり堅いということを実証した。彼は去って行く友に、ひょっとしたら呼びかけたかもしれない言葉をすべて自分の内部に飲み込んだ。そして彼は自分の落ち着かない、自分の内面の逆上せた気持ちをライエンシュラーガー教授は書斎の許、かの対の愛らしい目の下に運んだ。この目はかの夢想的仕立屋、フェーリクス・トイブリヒがいたく賛美したものである。しかしセレナは微笑しても、ふくれっ面になっても空しく、教授は、最近の数ヵ月征服した学問的成果をこの家庭の友に展開しても空しく、彼の鼻先に、この期間生じた難点や障害を築き上げても空しかった。レオンハルトは少尉の訪問によって、ひどい頭痛を感じていた。彼はしばしば両手をずきずきするこめかみに当てなければならなかった。そして教授のコプト語の語彙といえども、相変わらずハーゲブーハーの記憶の中で、あの若い兵士の弁舌の洪水の中、溢れる奔流に乗って揺れる断片や残骸、流されるテーブルやベンチに対する堤防には全くならなかった。

「これでは駄目だ、娘よ」と教授は、このアフリカ人の友が辞去してから、頭を振って、言った。「セレナ、これではまことまずい。集中力はどこに行ったのだ。論理的思考、必要なことの内的理解力はいずこだ。何という残念な放心だ。すべての文献学的霊力が何と無様に散っていることか。いや、父なるゼウス神、それに自余の不滅の神々よ、この若者を守り給え、　ー」。

「四十歳、四十歳」とセレナは呟いて、瞑想して裁縫に屈み込んだ。

「私と彼の高貴な生涯の使命に対する全き認識をこの若者に回復させ給え。エレウシスの秘儀にかけて、何のために御身らは、彼をかの者達の捕囚から解放したのだ。かの者達は塩も知らず、滑らかな船の櫂を、穀物風選のシャベルと見なす連中なのに」。

「何のため、何のため」とセレナはピアニッシモで嘆息した。しかし大きな声で明確に付け加えた。

「父君、悪しからず、でも父君は日に日に一層滑稽になって行きます」。

レオンハルト・ハーゲブーハーは、まず遊歩道広場のブロンズの亡き国父象に表敬訪問をし、それからヴィルトベルク少佐の家を訪れて、ここでも自分がまた戻って来たことを知らせたが、しかしこの理由ばかりではなかった。人々の許から去って、一人になりたい反面、また人恋しく人々の許に押し寄せるものである。　ー　これは誰もが自らの苦い経験から知っている一つの状態であり、これ以上多言を要しない。

少佐の家にはすぐに達した。しかし階段を上に上がって行くのは、容易でなかった。素朴な戦術家と、正直なエマ夫人のほっぺの赤い後継者達全員が階段を、一人の子守娘と一人の乳母の庇護の下、占領していて、このアフリカ人の腕や脚、それに上着の裾に、甲高い歓声を上げて、群れる蜜蜂が女王蜂に飛びかかるように襲って来た。

「この人がまた来た、母上、ムーア人の国からの人がまた来た、万歳、万歳。父上、こちらにいるのは、象のお話しとライオンのお話しをしたおじさんだ。また来た、万歳。ムーア人の王様、大きな猿と鰐の話しをして。それに黒い男の人達について、この人達は何の甲斐もないから、体を洗う必要がなくて、それに服を持っていないから、服を着る必要もないのでしょう。そしてこの人達の靴をおじさんは長いこと磨かなければならず、上着の埃を払い落とさなければならなかったのでしょう」。

「万歳、万歳、いつかその話しをしよう」とレオンハルトは叫んで、子供達の両手や頭の喧噪越しにエマ夫人と握手をした。そして少佐は、サムター砦[1861年、アメリカ南北戦争の発端]の計画を練っていた書斎から出て来て、自分の家系の騒がしい願いを落ち着かせようと指令して、長いこと空しかったのであるが、路地に踊る熊が、一匹の猿とバッグパイプの奏者と共に現れて少佐を救出し、一方野蛮な群れは、猿のお話しを、現実の奇術のために諦めて、声高に階段を下りて、家から飛び出して行った。

「バッグパイプとは世にも有り難いものだ」と少佐は眼鏡を上に上げながら、叫んだ。「ようこそ、ハーゲブーハー、貴方が田舎から戻られたことは、すでに我らも承知していた。衷心より歓迎申し上げる」。

「急いでお入りなさい、ハーゲブーハー殿」と少佐夫人は叫んだ。「私にはいつも、人生は一匹のウナギを両腕に握るようなものに思えます。どうぞ私の夫の部屋へ入ってください。この部屋にはやんちゃな人達も幾らか敬意を払います。ここなら一番妨害を受けることが少ないでしょう」。

するとこのアフリカ人はまたしても馴染みの快適な部屋に座ることになって、葉巻を一本貰い、自分の心に支えていることを話す全面的許しを得られた。彼は果たして、この話しをしたが、いつも自分の道を横切って投げかけられている黒く重たい梁までであって、これを越えては話せなかった。彼はここでも父親の死に関して、好意的真面目な弔意を受け、更にここでもニコラ・フォン・グリメルンの生活について、幾多のことを耳にしたが、しかし少しも耳新しいことはなかった。

「彼女は普段のように、　ー」とエマ夫人は言った、「そそくさと現れたり、そのときは、少しだけ健全な空気を一息吸いたいからと言って、またあるいは夕方遅い時に来たりします。フォン・グリメルン殿が将校クラブの賭博台に向かっている時です。でもいつでも子供部屋が彼女の一番のお気に入りで、この子供らがベッドに就くと、彼女は余り語らず、私どもに話しをさせて、聞いています。これは悲しいことで、私の夫に尋ねてくださ

い、夫はもはや我慢ならないことでしょう。私としては心が裂けそうです。近々この劇場監督殿に私が風変わりな手紙を書かないとしたら、私の神経はどのように安まるのか、私には分かりません」。

「ハーゲブーハー、妻の言う通りだ」と少佐は語った、「実際とても心の痛む話しだ。しかし誰に介入する権限があろう。そのことで一体どんな改善が見られよう」。

アフリカ人はまたしてもキント少尉の影を壁に見た。しかしこれはすでにもはや彼にとって何ら驚くことでなかった。逆に、彼が自分の魂の奥底で、この老公の名前を発すると、このことで解放的なほっとする呼吸を得られた。恐らく少佐はベッツェンドルフ氏の舞踏会に参上するであろうが、少佐夫人は行かないと彼は更に聞いた後、帽子を取って、辞去した。

第四章

実生活の単調さについて、実際レオンハルトは今や嘆く必要はなかった。彼はこの観点で祖国と異国とを比較していたら、トゥムルキー州に対しても、ドイツの祖国に対しても不当であったことであろう。

トゥムルキー州では夏は通常とても暑くて、日の出前に現れる唯一の雲は、イナゴの群れの雲であって、これは輝かしい空を薄暗くしても、少しも涼しさをもたらさず、そもそもその意図は少しもないのであった。イナゴの群れの雲に続いて、冬の雨雲が続く習慣であった。トゥムルキー州では驚くほど雨が降り、住民の夏の住まいは泥状になり、誰もが冬の宿舎を求めた。家族の者達は、岩の中のかなり大きな洞窟に移り、若者達や自立した乙女達は、好意的母なる自然の岩山の中、より慎ましい隙間を借用した。奴隷達も自分達の避難所を有し、これは少しばかり薄暗くてむっとしても、野外での滞在に比べるとそれでも心地良い魅力を有していた。

レオンハルト・ハーゲブーハー氏はこのことを知っていて、申したように、この異国の事情を祖国の事情とは比べなかった。それでも彼は異国を祖国に対し軽んじなかった。特に先の章で記した後の朝、見くびらなかった。

それは不穏な朝で、この日、アフリカ人のこの人柄は彼が不在の間、この領邦首都人にとって、その重要性がいかほど大きなものになっているか、領邦首都人からはっきりと示されることになった。実際多くの人々が一晩で、このアフリカ帰りの異邦人が幾多の便利な、あるいは金銭上の儲け目的のために有益に利用され得ると思い付いたのは珍しいことであった。彼らは皆田舎からの彼の帰還について聞くと、彼らは皆、彼に挨拶するためにやって来て、あれこれのこと、例えば自らが気に入っている彼の実用的視線について、あるいは彼の優しい情緒や立派な気立てについて、しかしいずれにせよその鋭い注意力について一言添えた。この比較的取るに足りない町が何とも多種多様な要素を含有していて、これらが皆その関心をアフリカ人の存在に向けたり、あるいは向けていると思ったりしているのは信じ難いほどであった。

一人の書籍商がやって来た。彼は宮廷の書籍商ではなかったが、警察長官の禁止にもかかわらず、講演に至らなかった部分を紙の本にして、自分の書店で出したいとのことであった。一人の写真家が現れた。彼はハーゲブーハー氏の胸像と全身像が世間に深い感銘を

与えるものになり、立派な売り上げになろうと固く確信していた。様々な喫茶店での知り合いがこの「良き友」との私生活ので交誼を求めていた。二人の痩せたレディーが現れた。二人は、この「試練を経た男性」を信心のミッションという有り難い目的のために活用したいと願っていた。一人の若い男がやって来た。彼は現代の叙事詩の素材を求めていて、このアフリカ人の冒険にその素材を見いだしたと信じていたが、ハーゲブーハーは彼に対し、同時代や後世の人々の感情を斟酌せずに、こう述べた。自分を放置してくれ、ちなみに自分は、誰かが詩文を作れないならば、これをこの時代の全く紛れもない詩人的才能の一つの印だと思っている、と。政治的諸党派がその触角をこの朝の中へ伸ばして来た。要するに、付き合いが十分に活発化して、始動して来た。しかしレオンハルトは、残念ながら、頑固で、関知せず、悲しげで、そしてただ一度、彼があの若い詩人のあらゆる言葉の洪水の下、一体自分が結婚したら、この世は、つまり自分自身はどうなるであろうかと考えた時だけ、微笑した。それもセレナ・ライエンシュラーガー嬢と結婚したら？！

正午頃にかくて訪問客の洪水がようやく収まって、彼がパシャと二人っきりになったとき、彼はこの同じ考えを音高く思案していた。あるいはむしろ。何度か小声で「何故そうするのか」と述べた後、はなはだ明瞭に偉大な言葉を彼は発したのであった、「何故いけない法があろうWeshalb sollte ich nicht?」と。かくて彼は自分の新ヨーロッパ風の心的発展の一側面に、まことに満足し得る結論を出した。しかしこれは単に一側面だけであって、　ー　中央線は真っ直ぐに更にすべての混乱、闇の中に突入していた。

この騒ぎの全体をまとめるには、四語で十分であろう。どんなに情熱的な歓呼の手紙、喪の手紙も極めて素っ気ない封緘葉書に押し込められるようなもので、木霊の如く、パシャ・トイブリヒも模して発した。

「いや、何故いけません」。

「トイブリヒ、貴方が何を知っているのだ」とハーゲブーハーはほとんど苛立って、叫んだ。「我が溜め息に正しい注解が付けられるのか」。

「対の可愛らしいお目々のことです」と仕立屋は頭を一方の側に傾げて言った、「これほど可愛い顔のお嬢様は、この町に他にいません」。

「フェーリクスよ、それに貴方ほど変わった人間の女性服仕立屋は二人といないぞ。神かけて、何故いけない法があろう。しかしこれは中断して、昼食を摂ろう。その後はドアに閂をしてくれ。　ー　誰も入れない、聞いているか。『サンホニアトン』[ビュブロスのフィロン、60年頃-141、によるフェニキア史」を一瞥しなければならない。教授との約束だ」。

「サンホ　ー　サンホニアトン」と仕立屋は繰り返した。陶酔的目を天井に向けていた。この響きの良い題名は、その約束通りの内容であるのに違いない。自分のパトロンは目下の気分に適した本を選び出したと固く確信して、トイブリヒは爪先立って、ドアまで忍んで行き、閂を閉めた。

食後、ハーゲブーハーはサンホニアトンを読んだ。そしてパシャ・トイブリヒは自分の燕尾服にボタンを縫い付けた。というのは彼も、今晩ベッツェンドルフの舞踏会に自らの参加で花を添えると約束していたからである。それもある公的な身分のせいであった。彼はとても注意深くて、有能な人間であったし、領邦首都での大きめの祭典は彼の協力なしでは挙行され得ないのであったと、我々は承知している。

「我々は著者をビュブロスのフィロンとか言う者のギリシア語での翻訳でしか知らない

のだ。何人かはそれどころかもはや著者のことは分からないとさえ主張している」とレオンハルトは夢想的に自分の本越しに言って、付け加えて、「私は今こそ彼女と結婚できよう、我が老いたおっかさんは彼女を両手を上げて、歓迎しよう。この著者がセミラミス[紀元前800年頃のアッシリアの伝説上の女王]の時代にか、あるいはアレクサンダー大王[紀元前356年- 323年] の時代に生きていたのか、それとも存在しなかったのであるか、学者達の間では大きな疑問になっている。私には全くどうでも良いことだ。　ー　彼女は自分の父親の家で、阿呆学者と付き合う術を学ぶ機会が十分にあったことであろう。著者の先生は、フェニキアの祭司長のヒエロムバロスとヤロバロスであったともされている。いや、神よ、彼女がその父親の家で、私のような若造を断る術を学んだとは思えない。ヒエロムバロスとヤロバロスよ。思うに、我らは静かな、堅実な夫婦となるに違いない」。

「私もそう思います」とパシャ・トイブリヒは叫んだ。彼は興奮して、ほとんど針に糸を通すことが出来なかった。

「いや、何故そう行かんだろうか」とレオンハルト・ハーゲブーハーはますます物思いに耽って語った。

彼は古いフェニキア人をテーブルに投げて、飛び起き、部屋の中をあちこち歩いた。

「私は何かを翌朝まで延ばすのが得策な年齢ではもはやない。これが勿論、ここで更にまこと長いこと思案している一つの理由であろう。しかし　ーーー　私はこの戯けたヨーロッパの世界で、何を願い、何を達成出来よう。私は自分の杖の先で自分の周りに描けるサークル内で楽しく生きられる程度に今またこの世界を承知している。トイブリヒよ、私が黄昏になり始めた時刻に、上着を着て、教授の許に出掛けたら、貴方はどう思うか。多分私は、台所の、明るい炎の側にいる彼女を見いだすことだろう。彼女はその明かりの許にいるとき、最も愛らしく見える。私は一緒に数分炎を眺めていよう。それから両人が我らの思いを十分に煮詰めたであろうとき、こう言おう。セレナ、我が娘よ、私は一つの結論に達した。貴女は、一人の風変わりな、しかし全く正直な男の願いを聞き入れてくれないか、と。そして彼女がそれから両肩を竦めて、頭で頷いたら、私はかなり冷静にこう続けられよう。セレナ、我が娘よ、私はあらゆる面を考慮した。私は貴女をただ自分のためだけに所有したい、しかし父君に、その家庭的、学術的快適さが何一つ欠けることのないようにするつもりだ。私は更にもう一度自分の過去に触れるかもしれない。しかしこれはひょっとしたら未来への展望に対する障害とはならないであろう。この時、我がデーモンのせいで、これはこの時間も目覚めていて、鍋が沸騰してしまっていたら、私はこう確信することになろう、彼女は、ほんの少しばかり一層赤みを帯びて、鍋を熾火から離して、鍋蓋を手に持って、こう囁くであろう、と。『まあ、神様、ハーゲブーフ殿、　ー　レオンハルト』と。　ー　するときっとすでに最初の接吻はなされていよう、トイブリヒ。そこで我々はただ階段を上がって行き、父君にこの出来事を知らせればいいのだ」。

この時、この描写の間、パシャを観察することは、一つの楽しみであった。彼は針で糸を遠く右手へ引き延ばしていて、腕を硬直させ、口をぽかんと開けていた。全く有頂天になって、彼はその潤んだ青い目から、この根源的に陽気な空想、しかしとても不確かな根拠に基づいている空想にすっかり没頭しているパトロンを見つめていた。

さて彼は泣き始め、その間に叫んだ。

「いや、旦那、旦那、貴方は万事最も良く理解されます、そして万事然るべく整理され

ます。貴方がご不在の間、私はずっとどうしたら万事最も好ましく収まるのか、頭を悩ませていました。貴方は戻られて、ただ仰有るだけでいいのです。これがいい、と。するとこれがいいのです。旦那、貴方は丁度、私の至上の夢を実現される途上にあります。貴方は、運命が許さないが故に、私には出来ないことを、やろうとなさっています。貴方は私の愁いを、最も深く、しかしまた最も甘美に掻き回してくださいました。お礼に貴方の服の裾に接吻致します。いや、『私もアルカディアにいた』[注釈はシラーの詩Resignation]のです。私はシオンとゴルゴタで、しかしそれ以上に、我が友人達や僧侶達の古着を繕いながら、マル・サバで、そのことを瞑想しました。私は巣作りへの嗜好を、約束の地でもここのこの国でも、いつも有していました。そしてただ一回だけ、私は自分の持つ、完全な機会がありました。しかし私はそれを欲しなかったし、今でも悔いていません。つまりペラでのことで、そこではペルレベルク出身の一人の老いた靴屋の未亡人が、私を同郷人として、若い感情豊かな人間として伴侶へと確実に選んでいたことでしょう。しかし彼女は酒に溺れ、それにまた様々な肉体上の、不道徳な癖があって、私の反撥を受けていました。理想のために、夜の星々と天球の音楽のために生まれているといういうことは、利点であっても、しかしこれは人間生活にとって、またやはり欠点でもあります。ペラでは私の家庭的幸福は何一つ実現しなかった。私の嗅覚が鋭すぎたからです。後にまたエルサレムでも、我が親方、ベーブリンガーの家でもまた何も成果はなかった。私の視覚が鋭すぎたからです。いや、主よ、しかし今や我が至高の願いが貴方によって実現しました。しかし彼女は、つまり甘美な、可愛い、善良な御令嬢は、その心のすべてを貴方にかけています。貴方は全く彼女にお似合いで、それに老先生にも合っています、旦那。貴方が天幕を張るときには、私も一緒に連れて行ってください。いや、アラーの神、アラーの神、私は確かに理想を尊びます。しかし私は、単に夢の世界ばかりでなく、現実世界で生きることも、大きな喜びであることが、ここで明瞭に分かりました」。

「涙を乾かすがいい、しっかりしろ、トイブリヒ」とハーゲブーハーは言った。「貴方の最後の言葉は完全に正しいと貴方に賛同する。現実世界に生きることは一つの喜びだ。多くの鋭い角や、意地悪な鉤、悪巧みの裏切りの罠穴も見られるとしてもな。ちなみにあの利口な阿呆、ムハンマドにあの言葉、すべて陶酔させるものは、禁止と教えたのは誰だ。

ー　誰がこの哀れな、虐げられた人類に陶酔的なものを禁じ得よう。現実に苦痛や罪、死が徘徊する限り、その限り陶酔的なものも禁じられてはなるまい。今は、高貴なトイブリヒよ、貴方の燕尾服にどうぞ専念されたい。私は更に最後の協議をするつもりだ、それもクラウディーネ夫人とだな。サンホニアトン相手ではない。十五分したらその結果を報告出来よう」。

「旦那様に、神の祝福がありますように」とパシャは嗚咽した。そしてアフリカ人はゆっくりとパイプに煙草を詰めて、ガタガタするソファーに体を伸ばした。彼を見ていた人は、彼が誰と刺激的テーマを論じているのか、如何なる心臓や神経を揺さぶる問題を、すべての霊力と、すべての先天的、後天的に蓄積された諸経験を引き寄せて解決しようと努めているのか、きっと分からなかったことであろう。

そしてその一日は進捗し、更に黄昏が近付いて来た。夙に仕立屋は自分の社交服を仕上げており、夙に彼は手持ち無沙汰に、黙って、動かずに座っていて、固唾を呑んだ、しかし諦念した一つの絵図となっていた。アフリカ人は自分の問題の解決が進んでいないよう

に見えた。彼、レオンハルト・ハーゲブーハーは、時々はなはだ呻いた。彼はまた自分の姿勢を変えて、再度パイプに点火することになった。しかしそうしたからと言って、一つの明かりが点るようには思えなかった。

一度彼は語った。

「外ははなはだ冷たいように見える。一度、暖炉を覗いてくれ、トイブリヒ」。

すぐその後、彼はチョッキのボタンを外して、息を吹きかけ、とても暑苦しい気分の者のように、髪に手を通した。

五時に彼は情けない声で、鐘は何時を打ったか、尋ねた。そして十五分後に、パシャ・トイブリヒは一層情けない様子で両肩を竦めて、陰鬱に幻滅して、自分の魂の奥底で嘆いた。

終わった、過ぎた。彼は実行しない、彼は出来ない。

アフリカ人は薄暗い中、ソファーから平然と落ち着いて、眠っている子供のように呼吸していた。実際外見的には、彼は実行しないかのように見えた。しかし一層大きな驚きとなった、丁度六時に、この詮索者は、パイプを床に落として、両足で飛び上がると、極めて鋭い司令官の調子でこう叫んだのであった。

「トイブリヒよ、何ということだ、ランプに点火しろ。我らは二羽の梟で、生涯暗闇で過ごすのか。我がネッカチーフはどこだ、我が帽子はどこだ。何たる荒れようだ。さっさとしろ。前進だ、ビスミラー。私はこうした無様な家政は、中央であれ、周辺であれ、全くうんざりだ」。

「ここにあります、旦那様、ここにあります、旦那様」と仕立屋は叫んで、蛙のように、全身震えながら部屋の中を飛び回った。ランプが燃えて、ネッカチーフと帽子が見つかり、今一度パシャは洋服ブラシを持って、パトロンに飛びかかろうとした。しかし主人は厳かに自分から引き離して、尋ねた。

「今日は何日かな」。

トイブリヒは日付けを言って、ハーゲブーハーは語った。

「悪くない、不吉ではない」。

一つの引用を彼は続けた。

「我がカシウスよ、永久に、永久に、さらば、
また会うことがあれば、互いに笑顔を浮かべよう、
会えなければ、　ー　」[シェークスピア『ジュリアス・シーザー』Ⅴ,1ブルータス：ならば、とはの別れも取りかわしておかう。これを最後に、さらばだ、キャシアス！もしもふたたび相見る時が来たなら、そのときは、たがいに笑顔を、もし来なければ、　ー　福田恒存訳]。

彼はこの文を最後まで述べずに、こっそりと自分の背後でドアを閉めた。しかしパシャ・トイブリヒが彼が見えなくなった後行った踊りは、さほど奇矯なものではなかったかもしれないが、しかしこの人間の気分情緒に完全に合致していた。

第五章

トゥムルキー州でも人々は同様に結婚する習慣であった。若いムーア人男性は、然るべき時、然るべき具合にムーア人女性と出会い、この女性を娶った。その後、ヨーロッパ同様、小さなムーア人[アラベスク模様]が生まれた。最初のサンプルの子は、結婚後九ヵ月後で、次の子供らは、適宜、自然にかなった間隔を置いて生まれた。アブ・テルファンに捕らわれている間、レオンハルト・ハーゲブーハー氏はあらゆる局面、恍惚の、幸不幸の恋愛を十分に熟知していた。ヨーロッパもこの観点では、彼に何ら未知のもの、新奇なものをもたらさなかった。かくて白人社会がこの諸関係に関して、考えたり、述べたりすることは、かの黒人社会がこれに関し、同上する習慣であるものと、形式面及び内容面において、とても類似していると言わざるを得なかった。レオンハルト・ハーゲブーハー氏は、まだケッセル通りの階段を下りながら、この過程、及びその結果のすべてに完全に対応し得ると感じていた。この実験は、容易で、円滑、滑らかなもので、格別に緊張せずに遂行出来るように思われた。

この陽気な展望は、しかしながら、彼が路地に足を踏み入れた瞬間に変貌した。冷たい冬の大気が、彼のアフリカ人風神経に対して語りかけたせいか、それとも夢想的仕立屋との慣れて静かな共棲から異常に活発な路地へ突然に移ったせいであったろうか。彼はある不安を感じた。これは踏み潰された雪の上を歩くにつれ、増大した。

「勇気を持って前に進め」と彼は言って、今一度、偉大な時に対して笑顔を見せようとした。しかしこの微笑ははなはだ目も空ろなもので、直に息もとても苦しくなって来た。彼は鼻の上、目深に帽子を引き寄せ、あたかもこの世の外界とは、自分の現在の物思い何ら関係ないかのようにし、そしてまた帽子を高く上げて、事物を凝視した、あたかもただこの事物の許に一切の安らぎがあって、自分自身には全く何の安らぎもないかのようであった。更に幾つかの路地を進みながら、彼はこの試みを更に翌日へと延期する確たる理由をすでに必死に考えていた。聖ヨハネ広場では、彼はそれどころかまことに気分が悪くなって、汗が額に浮き出て、彼はハンカチを探し、もしこのハンカチが上着の内ポケットになかったならば、これを必ずやもっともな理由、不吉な予兆と見なして、家に戻ることにするつもりであった。しかし彼はハンカチを見いだした。そして彼は、男として、英雄、恋人として、冷たい汗を拭い、自分の道を進み続け、自分の運命に向かうしかなかった。ただし一人の知人と出会い、この知人が一緒に町を散歩しようとか、ドミノ・ゲームをしようとか､喫茶店のどこかの静かな片隅で葉巻を吸おうかと微かに提案しさえしていたら、喜んで彼はこの友の腕を腕に取って、求婚を引き延ばして、これを立派な、自分自身とパシャ・トイブリヒに対する自己正当化としていたことであろう。

彼が出会ったのは、他ならぬフォン・ベッツェンドルフ氏のかのミュルミドーン人[アキレスに率いられてトロイア戦争に参加] で、この人はかつて、この警察長官殿の優雅な手紙と講演の禁止とを手渡した人物であった。この男は全く丁重に制帽に手を挙げ、ハーゲブーハーは彼を一瞬、当惑して憂わしげに見つめて、それからポケットに手を入れ、彼に一グルデン渡して、叫んだ。

「いや、まさに結構、これでよろしい。我が善良な友よ、貴方はまさか思し召しではなかろう、貴方を不吉ナ予兆、神々の否定的な合図と拙者は考えたらよろしい、と」。

「私は全く何も思っていません。しかし感謝致します、ハーゲブーハー殿」とこの公共の安全の男は語った。法の目で[見張りとして、シラー『鐘の歌』]で合図しながら、こっそり

と貨幣をポケットに入れた。「この類いの[貨幣]はしょっちゅうではありません」と彼が頭を振りながら付け加えると、ハーゲブーハーはこの出会いが生じた時のガス燈の圏内から消えていた。

かくも運命は奸策的である。人間に対してこの種の障害より他のものを道に置くことはめったにない。つまりこの障害は、運命が人間に対し望む地点まで突き進むよう、まさに人間を励起するのである。運命は一人の母親が子供に歩行を教えるときのように、人間に対し、特に好んで、その小道の目的地に一つの楽しいことや、ほんの一つの快適なことさえ、設置することはないと、そう言えるであろう。

「まさに、結構、これでよろしい」とレオンハルトはより素早く前進して行きながら、繰り返し、もはやハンカチを忘れたとか、良き友達に出会ったとかで、自分の企画遂行の中止の口実にする気はなかったであろう。更に一つ角を曲がると、教授の家が見えて来る。家が立っている。アフリカの内奥からの邪悪な魔術師が、アフリカ人への嫌がらせとして、アラジンの不思議なランプを擦って、この家をランプの精霊達によって、彼の可愛くて、利口で、銀色の声のここに居住の娘共々、タタール地方の深部へ移動させることもなかった。すべてが、その正当な場所にあった。玄関の上の銘さえも変わっていない。　客人歓迎。

雪は玄関の両側に、ほとんど優美に寄せ集められ、重ねられていた。教授の書斎からのランプの明かりが、快適に誘うかのように、夜の中に輝いていた。白い屋根の上に、華奢な三日月が懸かっていて、セレナ・ライエンシュラーガー嬢の煙突から一条の煙が上がっていた。微笑して銀色の月はこの大変に意味深な煙の中から合図していた。一瞬レオンハルトは静かに立ち止まって、教授の窓の方、月、滋養の煙突、庭の黒い木々の梢の方を見上げた。　ー　最近のカッツェンミューレを前にした躊躇いとは別の静寂であった。しかしアラーの神にかけて、無頓着、無関心な凝視といったものは、今日も全く問題とならなかった。

セレナ・ライエンシュラーガーはいずれにせよ台所にいた。アフリカ人はそこへ至る道を全く正確に知っていた。かくも長き、辛苦に満ちた、世間でのジグザグ飛行の後、人生を一つの静かな、快適な圏内にまとめるという機会、つまり圏の中心部から神々に対し、神々が結局ようやく人生を結構なものにしてくれたと感謝する機会が与えられたのであった。

それに相変わらず障害はなかった。しばしばその人生で鼻から落下したハーゲブーハーも、家の敷居で躓くことはなくて、それ故賢しらにこう警告する囁き声も聞かなかった。「ローマ人なら引き返すであろうぞ」。逆に美味しい、旨そうな焼き肉の匂いが彼の鼻に入って来て、これを凶の印と考えるのは極めて滑稽であったろう。セレナの魔法圏ではジュウジュウ、シュッシュッと陽気に弾けていた。キッチンのドアの向こう側の壁では、赤みがかった明かりが踊っていて、　ー　家の通路では躓きの些細な石もなくて、この門口での敷居で、ほんの微かなよろめきもなかった。そして今や実際　ー　それ以外は考えられず、彼の話していた通りで、　ー　彼女は黒い竈の前に立っていて、とても愛らしい様子で、物思いに耽っていて、以前、絵の中の恋煩いの少女の如く、踊るような炎の反射の中、優美であって、この絵に関しては、その他すべてが、ピカピカに磨かれたヤカンやポットから、堂々たる白い雄猫に至るまで、絵画的部屋に合致していて、この雄猫は喉をゴ

ロゴロ鳴らせながら彼女の部屋着の襞にまとわりついていた。

彼女は優美な、上品な縞模様のエプロンを着用していて、それには二個の可愛らしいポケットが付いていて、それぞれ全く然るべき箇所にあって、鍵や針入れ、小型の櫛や恋文を素早く仕舞い込み、それらを世の好奇の視線から隠すことが出来た。この時、彼女は何も中に押し込まず、逆に何かを取りだした。つまりしわくしゃになった紙片で、この紙片はすでに何度か、それもこの所有者の女性の大いなる興奮の下、取り出されて、仕舞われたことが見てとれたし、そして初めて読まれるものでないことも、見てとれた。

そして彼女は再びそれを読み、珍しいことに、鍋を、これはレオンハルト・ハーゲブーハー氏パシャ・トイブリヒに対し共に先の夕方の出来事の際、とても具体的に描いてみせたのであったが、すでにこの時、沸騰していて、しかも彼女は蓋も外さず、鍋を脇に移すこともしなかった。

彼女は読んだ。若い作家が最初の校正紙を読むような具合であった。彼女は読んだ。老ペテン師が、刑期の残りを赦免する指令を飲み込む具合であった。いや、彼女はそれどころか、最初の恋文を読む少女の如く読んだ、あるいは、この少女の母親が同じこの恋文を読むが如くであって、この恋文はまず母親の住所宛に届いて、つまり、母親が玄関の背後にこっそり隠れている恋文男に飛びかかって、それで憲法で保障された通信の秘密に敬意を払う必要を認めない場合の如くであった。

彼女は読んだ。まことに彼女の顔は薔薇色を帯びて来て、かの二人の空想豊かな人々、月山脈からのレオンハルト・ハーゲブーハー氏や、エルサレム出身のフェーリクス・トイブリヒ、人呼んでパシャ・トイブリヒがまさに想像していたよりも、顕著に一層薔薇色を帯びて来た。彼女は読んだ。そしてレオンハルト・ハーゲブーハー氏がようやくもはや我慢出来ずに、自分の不安な、臆した居合わせを、当惑した咳払いで知らせると、彼女は完全に彼のプログラム通りの小さな叫び声を上げた。いや、彼女は更に正確にこのプログラムを遂行して、こう叫んだ。「まあ、神様、ハーゲブーハー殿」。勿論「親愛なるレオンハルト」を彼女は言わなかった。しかし誰がこのようなとき、一言や調子を気にかけようとするであろうか。

この時アフリカ人は、お邪魔じゃないですかの質問より他の何を言えたであろうか。そしてセレナ・ライエンシュラーガー嬢は、これに対し、こう答える他何を言えたであろうか。全く構いません、どうぞお入りください、ハーゲブーハー殿、　ー　。彼女がもしこう言ったら、つまり、またいらしたの、いつも間が悪いわね、これはプログラムに合っていなかったであろう。

相変わらずまだ障害はない。彼女は小さな密に書かれた小紙片を瞬時にポケットに隠し、鍋に対する集中を倍加して、まだ鍋の中身の救えるものを救って、彼女自身が失っていた倫理的バランスを直ぐにまた十分に取り戻して、家の友に対し、とても幸せな、笑顔を持ち上げて、言った。

「今晩は、親愛なるハーゲブーハー殿」。

「今晩は、セレナ嬢」と家の友は同じように微笑して、見下ろしていた。そして心の中で安んじて、ケッセル通りからの途中、この素敵な瞬間を恐れていたことが、途方もなく余計なことで、ほとんどロバのように愚かなことであったと伝えていた。彼は今やとても安全で、すべての苦痛や、すべての恐怖、苛立ちから安心であると感じていた。彼の心の

中も、体の中も、とても温かく充満して来た。彼が、赤道下での不気味な滞在の後、相変わらずまだ十分には慣れることの出来ないドイツの冷気は、この幸溢れる息吹の下、窓ガラスの氷のように消えた。この氷も同じように温かい息吹の下では消える習慣である。

「父君は書斎です。どうぞ行かれてください。すぐに後から参ります、レオンハルト殿」とセレナ・ライエンシュラーガー令嬢は言った。

「直ぐにですか」とハーゲブーハーは小声で優しく尋ねた。

「そうですね。女中が井戸から戻って来たら、私も追って参ります」。

「いや、セレナ嬢、ちょっとだけ、ここの長椅子に座らせてください」とハーゲブーハーは叫んだ。水汲みの女中への恐れとコプト語の父君への恐れの間で躊躇っていて、彼はこの両人を自分の計画にとって無用と思っていた。「セレナ、ほんの数分です。外はものすごく寒い、殊に、私の肌のように不慣れな肌にとっては」と喜びに震えて、付け加えた。親身に案じて、令嬢は、彼に一つの床几を竈の熾火の側に持って来た。彼女は竈の明かりと温かさとをいやますべく、新たな炎へと「掻き起こした」。

皆目障害はない。彼は竈の側に座っていて、彼女は彼の前に立って、手をエプロンのポケットに入れていた。そこに彼女はかのしわくしゃの紙片を押し込んでいた。すでに彼の前に何百万人もの者達が行って、自分達の願いを達成したように、自由に率直に腹蔵なく語り、思いの丈を話すことに、この世で妨害するものは何もなかった。

「いや、セレナ嬢」と彼は初めて、そしてまさしくかなりの間、　ー　全く約束事にかなって、　ー　爆ぜる炎を見つめた。

「いや、ハーゲブーハー殿」と令嬢は嘆息し、ポケットから手を出さないでいた。それから彼は、危険な溝を跳び越えようとする者の如く、助走して、両目を固く閉ざして、両手を丸めて、　ー　本当に飛び上がった。

「セレナ嬢、愛しい娘よ」と彼は再度始めた。彼は一度練習していたので、物事は流れるが如く、飛ぶが如く進んだ。「セレナ、　ー　私は　ー　我らは　ー　私は十分長く考えたのだ。そして頭も心ももはやこれ以上耐えられない。貴女も、私のことを知る機会が十分にあったし、私のことを劣等な性格の者ではないと思っていたら嬉しい。それに父君は、　ー　いや本来ここで父君に何の関係があろう。いや、セレナよ、我が愛しい娘よ。貴女が一緒なら、更に全世界もいらない。私の申し出を受けて欲しい、セレナ。そして私の妻になる気があるか、率直に返事して欲しい。貴女と、　ー　私、　ー　我々　ー　トイブリヒは、　ー　私は貴女を全く独り占めしたいのだ。しかし父君に不快な思いは何も生じないようにするつもりだ、　ー　我々の意向としては、　ー　我々に出来るのは、　ー　」。

勿論のことである。二人は何でも欲し、何でも出来たことであろう、仮に、　ー　仮にセレナ・ライエンシュラーガー令嬢が、二番目の、はるかに甲高い、恐怖、驚愕の叫び声を上げて、数歩後ずさりすることがなかったならば、両手を更に自分から拒絶するように突き出さなかったならば。

「何ということでしょう、ハーゲブーハー殿、でも、本当に。いや、神様、親愛至上のハーゲブーハー殿、それもまさに今日だなんて、まあ、イエス様」。

「セレナ、私は実際まこと衷心より貴女を愛しています」とハーゲブーハーは語った。相変わらず、両目を閉ざして、溝の上、空中を飛んでいた。「若さの欠乏は、愛想良く振

る舞って補います。私は耐え難い人間ではありません。世帯も多分快適至極に築けると思います。私の母は、この上なく喜ぶことでしょう。貴女の父君に関しましては、このような愛の絆で、私をコプト語文法にも喜んで引き留められることでしょう」。

「まあ、神様、神様、私もそう思います。でもこれはとても恐いことです。女中がすぐに戻りましょう。私は何と言ったらいいのかしら。何をしたらいいのかしら。親愛なるハーゲブーハー殿。彼がまさに今日、丁度この夕べに手紙を寄越したのです。済みません。三日したら彼本人がやって来ます。万事順調で、もはや障害はありません。それに上の書斎の父君もすべてを承知しています」。

「誰が書いて来たのです。誰が何を書いたのです」とハーゲブーハーは叫んだ。極めて当惑して、両目を大きく見開き、沼の中に落ちた者のようにパチャパチャ泥水を跳ね飛ばし、吐き出した。

「フェルディナントです、私のフェルディナントの他に誰がいましょう」と令嬢は嗚咽した。「ここに私は彼の手紙を持っています。彼は貴方以前にこの家にいました。貴方と同じように、父君の辞書と文法の手伝いをしていました。でも父君は彼を遠ざけました。これは彼に対して不当なことでしたけど、それで彼は遠方に去り、ハンブルクやエディンバラへ行き、結局ジュネーヴに行き、近代の言語の教師となっています。これらの研究所でいかに苦労したことか、血の涙を流す思いがしたことでしょう。そして今では他の人と共同で、彼は自らの研究所を設立しています。ここに彼は書いていて、許しを請うています。自分は長いこと手紙を寄こさなかった、と。明後日彼本人がやって来ます。父君はすべて承知で、自分が今やもう何も反対出来ないと分かっています。それで親愛なるハーゲブーハー殿、私が貴方に更に何を申し上げられるか、自らご判断ください」。

「私に残されている言葉があるか、私には分かりません」と月山脈からの男はとても空ろに言って、それから繰り返した。「彼は私以前にこの家にいて、私と同じように父君の辞書と文法の手伝いをしていた」。

ある間を置いて、彼は付け加えた。

「それでは私はまたしても、遅刻したわけでしょうか。いや、トイブリヒよ、トイブリヒ、パシャ・トイブリヒ」。そしてそれから　ー　それから彼は見上げて、この哀れな善良な娘がもはや両手をエプロンのポケットに入れていず、エプロンを両手で目の前に当てて、それに隠れて、恐怖と狼狽とを泣きはらしているのを見た。穏やかに彼はこの小さな震える両手を握って、深紅の顔からこの覆いを外して言った。

「親愛なる御令嬢、貴女が父君にこの愚かな話しを何も仰有らなければ、私もきっと申しません。そしてこの幸せな、　ー　この喜ばしい出来事に関しましては、貴女とフェルディナント殿とに衷心からご御多幸、御慶福を祈念致します」。

この娘はすでに再度エプロンを目の上に持ち上げ、それに隠れて更に嗚咽し、この祝意に対して謝意をただ素早い痙攣的な頷きによって知らせるのみであった。ハーゲンブーハーはライエンシュラーガー教授のキッチンにもはや用はなかったので、彼はキッチンを後にした。しかもまたしても爪先立っていた。彼は薄暗い玄関に戻って来て、一瞬階段で躊躇った。むしろ家に帰って、哀れなパシャ・トイブリヒを血が出るほどにしばき上げて、教えてやるべきではなかろうか。これからは軽率にある男の心底からの願いに余りに親密に介入して、この男を頓狂な振る舞いに使嗾してはならん、と。いや、教養ある男は鬱の

神経霊の憤懣をこのようなやり方で爆発させない。教養ある男は、このような状況下で、家に帰って、誰かをぶん殴らないし、また水に飛び込んだり、頭にピストル弾を撃ち込まない。レオンハルト・ハーゲブーハーは上のライエンシュラーガー教授の許へ行った。しかし我らがセレナ・ライエンシュラーガーのキッチンを一瞥するならば、令嬢はまた熱心に自分の鍋やフライパンを前に働いていた。この若いレディーの口許には、仄かな微笑が浮かんでいて、彼女の魂の中の分裂は完全に調停されているように見えた。

第六章

月山脈からの男は、自分が義父にしようかと思った男のドアをノックして、耳を澄まし、中から深い溜め息を聞き取れるように思った。そして入室の許可を待たずに入った。彼は長いこと待たされたかもしれない。ライエンシュラーガー教授のパイプは消えていた。パイプの火と共に、教授も消えているように見えた。外見は偽りであった。この書斎のランプは何と快適な明かりを冬の夜、雪の中に投じていたことか。そして何という不機嫌、何という心身の打撃が照らし出されていたことか。

その学術研究の備品の最中、立派な研究所所長のフェルディナント・ツヴィックミュラーの義父は座っていた。屈んで、折れていた。そして向かい側の壁の方を国王ベルシャツァルのように見つめていた。この国王の聖書外典の話しを彼は一時間前、まだ無邪気に、郵便配達人が家にもたらすものを予感せずに調べていたのであった。[ダニエル書、5,1：メネ・メネ・テケルと壁に描かれ、神に命数、仕事を量られた]。

どの岸壁に、どのオベリスクに、どの廟墓に楔形文字や象形文字で、この繋ぎ目の壊れた人生を再び修復し、繋ぎ合わせてくれる慰謝の銘が記されていようか。

「どこに、どこに、どこに」と教授は叫んだ。そしてオフェーリア[『ハムレット』IV,5]さながら、彼は自分の狼狽、自分の困惑を、半ば散文、半ば韻文にして晴らした。かくて、クロロフォルムの酩酊のように、その乱れた脳の中で、最も感動的な青春の詩[ラテン語文法記憶詩]が目覚めて来た。

「これは結構な驚きだ」と彼は呟いた、「千もの乳房のイシス女神にかけて、[小アジアの豊饒の女神アルテミスのこと]、私はどうなることだろう」。

男どもや、民族、河川、風、
暦の月、これらは男性名詞、　ー

秩序だった人生、静かな晩年、このためのすべての素材がごた混ぜになった。

女どもや、木々、都市、国々、
島々、これらは女性名詞　ー

そして老いて阿呆な私は、すべて片付いたと思っていたし、我が抜け目なさと鋭い洞察を誇っていたわけだ。

普通のもの[共同体、中性]は、男性とも
女性とも呼ばれ得る。[形容詞の名詞化]　ー

いや、フェルディナント・ツヴィックミュラーよ、これは普通の[卑しい]ことだ。いや、何という郭公を私は自分の巣で孵したことか。そして何という役をあの娘は完璧に演じたことか。私はどうしたらいいのか、どうしたらいいのか。

「変化させ得ないもの、
これは中性と見なさなければならない」。

とレオンハルト・ハーゲブーハーは発した。「貴方はこの件をこのような具合に見なす他、仕方ないように思われます」。教授は素早く起き上がって、両腕を広げて、アフリカ人を迎えた。

「貴方はもう知っているのか。これについてどう思う。家の下の方では貴方にはしゃいで伝えたのか。ハーゲブーハー、私を見棄てないでくれ。私の許に残ってくれ。いや、ここ[貴方]にこそ胸部がある。あらゆる滋養豊かな母親の千もの乳房の中で、私のために残されている胸部だ。この救いのない話しに対して貴方の意見は何だ」。

「まことに喜ばしく存じます」とまさにこの場で許容される限り、陽気に言った、「絶望するもっともな理由は皆目見当たりません」。

「そうかい。それならば　ー　謹んで感謝申し上げよう。我が友よ、これは実際珍しいことで、地上で見いだせる限り最大の珍しいことだ。どんなに理性的な者も、どんなに分別臭い者も、どんなにしらけて、没趣味な者でも、結婚に手を着けずに素通りすることをしない。絶望する理由を私も見いだせない。しかし思考する人間として、人間的愚行の偏見のない観察者として私ははなはだ憤慨している」。

「ツヴィックミュラー氏が普通に礼儀正しい若者なのであれば、　ー　」。

「黙っていてくれ。礼儀正しい人間だと。彼のことを直接貴方が知っておればと言いたいところだ」。

「勿論今晩そういう次第になれば、大いなる喜びでありましょう」とアフリカ人は呟いた。

「貴方も、私が彼のことを知っているように、知り合えばいいと願っている。このような立派な青年、優秀な数学者を、この現世の嘆きの谷で、容易に二人と見いだすことは難しいことだろう。彼は私にとって余りに善良過ぎる。彼の外見に関して、何ら非難する余地もない。彼は極めて散文的で、極めて分別臭い。　ー　いや、ハーゲブーハー、そこ貴方の椅子、そこに彼は座る習慣であった。ハーゲブーハーよ、それから下唇をまさに、今この瞬間の貴方のように下げる習慣であって、それで貴方も私にとって、まさにいつものように見えないという思いに私は駆られる。いや、私は今一度貴方の衷心からの祝意に感謝申し上げる。というのはこの祝意はやはり貴方の不機嫌を基に発生していると願うからだ。いや、私は何を言いたかったのか。いや、そうだ、そうだ、彼の下唇はしばしば垂れ下がっていた。彼に対してはとても遠慮して対処する必要があったのだ。いつでも、それと知らずに彼を深く傷付けてしまっていると、案じられたものだ。彼は少しばかり神経が

弱かった。良い奴で、それにどんな無邪気な意見であれ、六週間も根に持ちかねないのだ。しかしこれに関しては、全くあの娘と似合っていて、二人はまことに幸せな結婚生活を一緒に送ることだろう」。

「主がこのお二人を祝福してくださいますように」とハーゲブーハーはぶつぶつ言った。

「父親それに義父として私は義務的に同じことを願わなくてはならないのだろう。しかし私の不機嫌はそれでただ昂ずるのみだ。何年もこのツヴィックミュラーはそこ貴方の椅子に座っていた。何年も私は自分の額に汗して、彼の教養のために働いた。そしてこの二人の男女の関係については、より真剣な仕事の休憩の間、まこと十分念入りに指導した。彼が私の実の息子であったとしても、私はこのフェルディナントをこれほど懇ろに、これほど衷心から警告しなかったことであろう。私の思い違いでなければ、以前私は貴方に語ったことがあると思う、この一切が空しいという憂わしい徴候が生じた時、私が彼をあっさりと家から追いだしたが、彼は後に異郷から手紙を書いて来て、私の正しい処置に彼は心から感謝しているのだ、と。我々はごく親密な手紙のやり取りを続けて来た。いや、この策謀家の男はこう主張していた、何ごとも私の助言を聞かずには、果たそうとしなかった、と。その挙げ句この始末だ。私はここに静かに座っていて、何も考えていない。あるいはむしろ深く、Nについて、pno pneuma,[息をする、息、精霊]、snuf, nys, nas, snut[嗅ぐ、くしゃみ、鼻、鼻水]を考えている。しかし私は鼻先にあるもの、その臭いを嗅いでいない。あの娘が突如、旋風の如く飛び込んで来て、背後から私の両目を閉ざして、笑ったり、泣いたりし、盗笑したり、嗚咽したりし、私に接吻をして、私が驚いてこの騒ぎの訳を尋ねると、一片の紙片を私の鼻の下に差し出して、それで一切の精霊が即刻私の中から出て行った。このならず者は何と書いているか。父親の愛の鋭い目について書いている。私がそれを失うことはないだろう、云々。そして私に対する彼の敬意、尊敬は途方もないもので、云々。そして自分の財務状況はしかじかで、一人の妻を養う十分な自信があるのだ、と。ハーゲブーハーよ、ハーゲブーハー、貴方は木偶の坊とは何かご存じか。私も知らなかった。しかし今この瞬間にはその意味がはっきり分かる。私は木偶の坊然と座っていた。すると私の前にあの娘が現れて、ただ再三私の首にかじりついて、呻いたり、歓声を上げたりしながら、ただこうさえずるより他、何もましなことをしないのだ、『いや、父君、最愛の、最愛の父君、そうなの、そうなの、本当にそうなの。そんな昔話があるわ。あなたが私の老いた、愛しい、馬鹿な父君でなかったら、あなたはそんな渋い顔をしないことでしょう』と。　ー　さて、レオンハルトよ、貴方に尋ねるが、私は一体どんな顔をしたらいいのか。私は二週間後この点が明確になったら、自分は幸せだと思うことにしよう。私は神々と争いたくない。しかし何故まさに私がこんな目に遭わなければならないのだ。何故まさに私の許にいた最も分別のある、最も希望に満ちた人間達、最も堅実な若い人達が、阿呆どもにならなければならないのだ。私が可愛い娘を持っているからか。これが理由か。娘達ニハソノ運命ガアル[書物ニハソノ運命ガアル、のもじり]。しかしこれは本当に、マルクト・トゥリウス・キケロが神々と人間達の住まい、domus communis deorum hominumque[神々と人間の共同の住まい]と呼んでいるものの維持と美化のためには、私自身の血と肉とが、頭上の自らの屋根を覆うことが必要なのか。ハーゲブーハーよ、何故貴方はツヴィックミュラーという名前ではないのだ。何故運命は彼奴をカフィール族やホッテントット族の許に送らなかったのか。貴方なら私に対し、きっとこのような悪さ

をしなかったろう。いや、貴方は私の唯一の慰めだ。今この瞬間、貴方が居合わせてくれるのは嬉しい。しかし次の日々、あの阿呆がジュネーヴから現れて、娘と一緒にこまごま打ち合わせたら、あの娘は宝物だし、何とも取り替えがたいものとなろう」。

「教授殿、...」とハーゲブーハーはとても長い話しをして、沢山話すべく準備にかかっている者のように、そして自分が心に抱いていることを精神の中で整然と吟味している者のように深く息を吸って始めた。「教授殿」とハーゲブーハーは、極めて力強く強調して、深部から響き上がる胸声で話した。それから　ー　それから話し始めずに、止めて、黙って頭を振り、感動してライエンシュラーガー父君と握手して、三回空気を吸って、よろめいて外に出て、外の階段で演説を続け、話しを短縮してまとめ、話しを終えた。バガラ黒人の最大の侮辱的な呪詛でも夙に自分の感情の表現に十分でなかった。彼は自分の友セミベコの祝福を丁度の時にまた思い出した。　ー　その言葉を階段で発し、その言葉は快適に感じられた。

さてこっそりと彼は、手摺りに掴まって、階段を下り、足音を消してセレナのキッチンの側を忍んで行ったが、玄関の鐘の甲高い響きに驚くことになり、かくて自分の運命から逃れることが出来なかった。

「もうお帰りですか、ハーゲブーハーさん」と彼の背後でセレナの声が響いた。それも玄関の鐘同様に甲高く、その上楽しげに平然とした声で、一切の震えや、躊躇い、反撥の見られない声で、その声を聞くのは一つの楽しみであったが、ただアフリカ人にとってはそうでなかった。

「はい、もう帰ります。御令嬢、お休みなさい。貴女の夢の中でのフェルディナント殿に私からもどうぞよしなにお伝えください」。

彼はまた通りに立った時、右手人差し指の関節で額を叩いて、いつもより空ろな響きを叩き出しているように思った。彼が深い格言の汝自身を知れ[デルフォイのアポロンの神殿の銘]に込めた言い回しの意味を、先ほど友の象牙商人セミベコのこの愛用叫び声を記さなかったのと同じ理由で我々は記さない。かくて彼がこの真実からはなはだ遠ざかっていたわけでないことは、残念ながら、否定されない。

町はいつになく雑踏で一杯で、私有の馬車や辻馬車が鈍い物音を立てて、社交の招待者や選抜者をフォン・ベッツェンドルフ氏の祝典へ運んでいた。ある手袋店の輝かしく明るい窓越しに、レオンハルトはフーゴ・フォン・ブムスドルフ少尉が店番の女神と熱心に交渉しているのを見て、この若い兵士がその購入を終えないうちに素早く立ち去った。

家に帰るか。秘かに慄然として、このアフリカ人はそこではまだテーブルにサンホニアトンが置かれていて、そこにはこの昔のフェニキア人の仲間以外に仲間はいないことを思い出していた。

キント少尉の許へ出掛けて、お喋りして時間を過ごすか。これはまだましではある。この男なら完全に今の気分に合う。いや、彼は余りに合い過ぎる。怖気がして、ハーゲブーハーは自ら一人っきりを避けるという考えも退けた。この件がどのようになるかほとんど分からないまま、結局彼はかなり空席の目立つワイン酒場で一本のリューデスハイム・ワインを前にしていて、手にメニューを持っていた。

彼は、異常というわけではなく、立派に食べ、そして沢山飲んだ。彼は二本目のリューデスハイム・ワインとなった。彼の周りの客人達のお喋り、その行ったり来たりの継続、

亭主の広い、平然とした顔、給仕達の自動機械的な動作、いや、絵画や、時刻表、外国旅行業者のポスターでさえ、それにとりわけ、時計の振り子が彼の神経に好ましい嗜眠的影響を与えた。

彼は新聞を手に取って、再びそれを置き、再度それを握った。テーブルの別の隅に、一人の常連客が手足を伸ばして、はなはだ欠伸をし、辛辣に一般的なこの世の生活の、そして個別的にこの立派な領邦首都の生活の、退屈さを嘆いていた。その隣人はこの欠伸が伝染して、この常連に完全に賛同して、欠伸を更に続けた。レオンハルト・ハーゲブーハーはそれが口から口に伝染するのを目撃して、このような気分の際でも、自分に欠伸が生ずるようであれば、自分にこれに抵抗する力がどれほどまだ残っているであろうかと夢想的に考えた。そして彼はこれを考えている間に、すでに敗北していた。すると同様に、彼の気分にもかかわらず。全く陽気な高笑いに弾けてしまって、そしてこれが今晩、運命から恵まれた最初の現実的な爽快さであった。客人達は訝しそうにこの陽気な人間を見つめた。何人かは、いずれにせよ、彼の楽しそうな気分を羨んでいた。しかし彼は自分の勘定を支払って、別な葉巻に火を着け、丁度十一時の鐘が打たれたとき、再び寒い夜の中に出て行き、その途中格別風変わりなものを発見することもなかった。路地にはまだ大いに活気が見られた。人々はせいぜい、厳しい冬について、笑ったり、不平をこぼしたりしているだけであった。ただの一度も、このアフリカ人の耳を惹き付けたり、注目させたりするような言葉が耳に発せられることもなかった。路地でも人々の間でも、たった今この町で、何週間も、いや何カ月も、あらゆる種類の会話や討議、反撃への十分な素材となり得るような事、社交界の一同全体を拉致して、四分五裂させるような事、このとてもそれ自体完結した共同体の最高圏と最低圏の双方に最も深く触れるような事、そして言葉や文書、印刷物を通して、はるかにこの国の狭い境界を越え出て、かなりの期間、この小国並びに小首都を人々の劣等な噂話に導くに違いない事が生じたとは皆目感じられなかった。

「あのトイブリヒが家に居さえすれば」とハーゲブーハーは更に歩み続けながら、言った、「思うに、彼にこの不面目の幾分かを仕返し出来るのであれば、朝の日の出を全く心地良く待機出来ることであろう。しかしあのお人好しは、フォン・ベッツェンドルフ氏の許にいて、私が彼におごろうとしているものとは全く違う珍味をこっそり味わっていよう。誓って、私はまだ相変わらず自信がなくて、彼の肩にこの話しの全責任を押し付けることは出来ない。いや、アブ・テルファンは素敵であった。従兄弟ヴァッサートレーターの奥の小部屋でも素敵であった。奇妙なことではあるか、しかしそれでも真実ではある。サンホニアトンでさえ、この切迫した状況下の者にとってはまだ慰めになり得る。私は帰って、サンホニアトンを読むことにしよう」。

ケッセル通りの入口で、彼は自分が大胆に身を晒すことになったこの幻滅の明快な了解に襲われた。一つの新たな、しかし最後の発作であった。彼は興奮の余り、少しばかり雪の中で踊って、叫んだ。

「これは必ずしも全く自分一人を頼りとしてこなかったことの結果だ。人間の、益体もないトイブリヒの、絵空事の説得がなければ、今晩鼻を戸外に突き出すということを思い付いたであろうか。マイナス二十度の冷気の中。まことに私はパシャを生贄にするつもりはない。しかしパシャがいなくても、やはり感傷的な、愛に飢えた時が経過したことであろう。そして翌朝になれば、この件をもっとより良く了解することになろう。フェルディ

ナントか。余りに滑稽だ。...フェルディナント・ツヴィックミュラー。ツヴィック・ミュラー[相手を窮地に陥らせるミュラー]。あの娘は不当であって、何が最良か分かっていないと主張出来さえすれば良いのだが。あの娘は自分の心を誰に贈るのが最適か、多分良く分かっていたのであろう。誰が誰に自分の取り分は少ないと嘆く権利を与えられるものか知りたいものだ」。

彼は玄関に達して、ドアの握りを掴んで、同時に自分の上の空の気持ちをアブ・テルファンの甲高い口蓋音と舌打音とで伝えた。これはいずれにせよパシャ・トイブリヒにとってまことに由々しい状況を意味するものであった。しかし階段で彼はもっと穏やかな思いになって、この思いを彼は再びドイツ語で語った。

「私は彼の首を締め上げられない。彼はいないのだから。しかし彼はいないけれども、あるいはまさに彼はいないが故に、彼に説教することにしよう。素敵な説教を。いや、私はしばしばこの人生で即興で話したものだ。必ずしもこれほどもっともな理由があったわけではない。トイブリヒよ、私は話しを中断されたくない。このことには注意してくれ。ビスミラー、一度まことにきちんと話す機会というものは、世間で通常思われているほど、そう度々あるものではない」。

今や彼は自分の部屋に入って、自分の言うべきことをすっかり把握していると固く信じた。しかし眼前の光景を見て、彼はしばらく敷居で固まっていて、そして次第に彼の心の中で憤懣として残っていたものすべてが感動して解けた。その部屋はかつてないほど整然としていた。カーテンは下げられていた。足は可愛らしく技巧的に撒かれた白い砂を踏んだ。部屋の中央に白い布を掛けられたテーブルがあって、明るく燃えているランプの横に花束がグラスの中に収まっていて、とても美しく、これは庭師がこの季節、親しい友にわずかな金で提供するようなものであった。この花束の前に大きな白い便箋があって、その紙面に大きな文字で書かれていた。

「おめでとう」

そしてその下に名前「フェーリクス・トイブリヒ」とあって、抜け目ない注釈が添えられていた、「不在の折」。

レオンハルト・ハーゲブーハーは一粒の涙も目から拭えなかったが、それは単純な理由からで、目に涙が浮かばなかったからである。しかし彼が更に復讐心の微小な残余でも、この飾られたテーブルに対して抱いていたら、彼はバガラ黒人の中の最劣等な者に違いなかったろう。頭を振りながら、微笑しながら、頭に帽子を被ったまま、彼はこの誠実な好意の祭壇の前に立って、極めて生き生きと思い描いていた。いかなるダンスや跳躍をこの哀れな、善良実直な仲間、この夢想的仕立屋、フェーリクス・トイブリヒ、人呼んでパシャ・トイブリヒは、心を最も美しい希望と花咲く空想とで一杯にして、フォン・ベッツェンドルフ氏の許へ出掛ける前、この花束とこの紙片の周りで敢行したことか、と。そこでほとんど涙がこう考えると浮かんで来たことであろう、つまりいかなる劣等な阿呆世界に、この純真な真実の阿呆、この神意にかなった阿呆、この徹頭徹尾馬鹿げたエルサレム出身のパシャ・トイブリヒは今給仕人として椅子の背後に立っていることか、と。

そこで彼は自分の演説を始めて、賀詞のその便箋を自分の草案さながらに手に持った。

パシャに対し、全く直接に話しかけ、しばしばテーブルの方を向いて、力を込める箇所では、必要な身振りを欠かさないようにした。

「トイブリヒよ、貴方は私に祝意を述べられた。それで私はその祝意を大変有り難く受け入れることにする。彼女はその気がなくて、そうする幾つかの理由も有しており、これを我々はもっともなこととしなければならない。フェーリクス・トイブリヒよ、我々両人は思い違いをしていた。しかし神々は我ら子供の口に大いなる力強さを恵まれた。徒な希望を抱いて、私は外出したが、家に、一杯揺すって試された尺度の英知を持って帰って来た。私は心より、貴方の善意の祝辞に感謝している。このような祝辞は、全く時と状況に適って発せられている。我々両人は相変わらず子供である。我らは如何に利口になろうとも、常に鋭いナイフと尖った鋏を持って遊ぶ気持ちを忘れないようにしよう。トイブリヒよ、それでは少し話させてくれ。貴方は実際、このねぐらで、何かについて共に理性的に話せる唯一の人間だ。我らがすでにしばらく前に経験したように、自分の聞き手を選ぶことが出来るのは、必ずしも誰にとっても幸運なことではない。私は何故今晩出掛ける気になったのか、トイブリヒよ。この外出によって、私は何を得ようとしたのか。平穏か、ー　満足か、　ー　幸運か。私、トゥムルキー州からの男がか。私、月山脈[Dschebel al Komri]からの男がか。トイブリヒよ、貴方は頭で頷けば良かろう、パシャ・トイブリヒよ。貴方の戯けた頭の上、空想的梢のざわめきの中には、勿論、心身にとって甘美で快適なものすべてが一つの音色と化す音楽があろう。いや、トイブリヒよ、我が頭蓋の上には何らざわめきはない。東洋の棕櫚からのざわめきも、故郷のブナやシナノキからのざわめきもない。空虚で薄暗い青空が東から西へ、南から北へ広がっている。一人の哀れな子供っぽい者に対してこう言うのは、益体もないこと、救い難い嘘であったのだ。こちらへ来て、私の木々の影に腰掛けるがいい。幸せになれるぞ、と。　ー　私はそうしたのだ、トイブリヒよ。私がこのことをした時というのは、私が、せめて一つの雲が、たとえ真っ黒な雷雲であろうとも、この不吉に明るい太陽と私の哀れな頭脳の間に差し込まれることを願っていた時であったのだ。トイブリヒよ、頭を振らないでくれ。私が娘に差し出すことが出来たもの、私が差し出したものは、影であった。いや、素晴らしい青空の下、外の太陽の許では、私にとって余りに暑すぎたし、余りに退屈すぎたのだ。私は月山脈のことを忘れていたし、私のアブ・テルファンの市民権を、私の灰色の髪、長い耳のことを忘れていた。それに私は四十歳の年だというのに、周りの陽気な世界よりもまだ相変わらず若いと感じていたから、トイブリヒよ、相変わらず他の人々同様に幸せになれると勘違いをしていた。そして令嬢に約束していた質問をしたのだ。おめでとうか。いや、トイブリヒよ、貴方だけがおめでとうだ。そなたと、令嬢に対し、そして私に対し、しかし専らそなたに対しおめでとうだ。というのは私は帰路、貴方に対し、貴方の誘惑的な耳打ちや、まめな家政のことで、慄然とする残忍な見せしめを大いに披露したくなったからだ。ここで、私は貴方の花束を嗅いで、こう気付いている、　ー」。

月山脈の男が気付いたことは、後世には隠されたままである。下の玄関で物音がした。誰かが階段で躓いた。ドアにノックの音がする。アフリカ人の頭に閃くものがあった。教授が娘っ子から必要なこと、あるいは不必要なことを聞き知って、その思いから、自らこの遅い時間でも駆け付けて、家の友に対し、その衷心からの感謝を伝えに来たのであろう、と。

しかしながら、眠りからたたき起こされた家の女将に案内されて、別人が入って来た。レオンハルト・ハーゲブーハーが同じく予期していなかった者で、つまりヴィルトベルク少佐であった。

第七章

空中に投げ出された地雷の爆音を耳にしたのは誰か。ひょっとしたらこの爆音は、足下の深みの中の、不気味で、危機の迫る掘削や埋設よりも全く別の事柄に注意している間に生じたのかもしれない。物思いは遠くの方までさまよって行く。常に十字槍を腕にして、同じ場所に立ちながら、下の闇の営為に耳を傾けなければならないのは、とても疲れることであって、退屈なものかもしれない。胸に七重の鉄を帯びていても、魂は散歩に行き、我々はそれを阻止出来ない。一番遠くの砦や濠を越えて、魂は自由に野外を散策し、矢車菊やヒナゲシを小麦畑から摘み取り、ひょっとしたら庭の生垣越しに覗いている本物の薔薇を一本、あるいは湧き出る泉の縁から甘美な勿忘草を一本摘み取るかもしれない。そして戦争の最中、最も深い平和を夢見ている。そして魂が散策し、花々を摘み、「金色の喋々を笑う」[『リア王』V,3：リア：綺羅びやかな蝶の群を笑ひ、福田恒存訳]ときに、下の深淵では、野蛮な、憤怒の、嘲笑的顔が、ほとんど目に見えない火花に屈み込んで、その火花に吹き付け、輝く炎とする。赤い反映がその顔に過る。敵の高笑い。導火線に点火棒が触れ、時間であった[tempus fuit]。もはやさまよう魂を緑の野原から、過去あるいは未来の遍歴から、後悔あるいは希望から呼び戻す時間はない。主の祈りを半分称える時間も、最短の短祈祷の時間もない。

勿論ほとんどいつも、このような破壊的な花火の後、かなり無事な肢体、あるいは全く無傷の肢体のまま、ただ少しばかり麻痺して、この砕かれた梁や壁、仲間の間の瓦礫の中から救出されて、詳しくその気持ちについて尋ねられる人々がいる。これらの人々はその度、とても混乱して一同を見回して、また空中に飛ばされる前に自分達が立っていた場所やその場所と思われる所を見て、そして　ー　何も言えないでいる。逆に彼らは、そもそも何が起きたか、他の人々に話して貰わなければならない。いかに大地がものすごい爆音の下、裂けてしまったことか、いかに花火が吹きだして、空中、塔の高さにまで達したことか、いかに黒い煙雲が一気に扇のように高くこの災害の地で広がったことか、いかにすさまじく、黒い瓦礫や岩、残骸、灰、それに血まみれの人間の肢体といったものの雨が生じたことか、と。このような状況にその時、我らの立派な友レオンハルト・ハーゲブーハーはあった。彼は一緒に空中に、それと気付かないまま飛ばされていて、ヴィルトベルクは、ホイスト[トランプ]の卓から、髪の毛を逆立たせて、目を凝固させて、この恐ろしい出来事に気付く絶好の機会を有していて、今や急いでこの無事の患者に必要な知らせをするためにやって来たのであった。

ヴィルトベルク少佐はアフリカ人の部屋に確かに礼装で現れたが、しかし確実にこうした装いのとき是非とも必要な落ち着きと自制心を欠いていた。彼は厳しい寒さというのに、外套を腕に持っており、外套を直用したり、あるいは掛けさせたりする時間がなかったように見えた。制服は白いチョッキの上で間違ってボタン掛けされており、仮に少尉フーゴ・フォン・ブムスドルフ氏がいつか公の場で今少佐がしているように肩帯を着けていた

ら、彼はきっと一週間にわたって、孤独な禁足となって、前と後について、右と左について、重大な意味深いその違いについて沈思するための機会を用意されることであろう。

ハーゲブーハーは夢想的仕立屋の花束をテーブルに落として、ある声を発した。これは、何も意味がなかったので、すべてを表現していた。十全たる知識、最初の驚愕、そして同時に早速、最初の途方に暮れた当てのない手探りであった。

「今ですか。今。起きたのですか」。

「友よ、一息つかせてくれ。恐ろしいことだ。何という夜だ。何故私はこちらへ来たか、何の知らせか、分かるか」。

アフリカ人は頷いて、すでに帽子に手を伸ばしていた。少佐は間近の椅子に落ちて、咳き込みながら、ハンカチを探して、額を拭いた。

「私は警察長官の舞踏会からやって来た。床が踊っている者達の足下で崩れた。　ー　貴方はその物音、騒ぎ声を聞かなかったのか。ニコラは私の妻の側に座っていて、今、私はここにいる。何という夜だ。ギルモア[Harry Gilmore,南軍]が今やチャールストン近郊のムールトリー砦を滑らかな五百ポンド砲で攻めている。[アメリカ南北戦争、1861-65]。　ー

そのような爆弾が、直径25ツォルが我らに落ちた。これほどひどい災難はない。そこに居合わせた我らのうち、五感が揃っている者はもはやいない。フォン・ベッツェンドルフ氏がひょっとしたら最もひどいかもしれない。そこでハーゲブーハーよ、来て、助言をしてくれ。すべてを、憎しみや怒りも、友情や同情も、水に流してな。我らは明瞭な頭、力強い手、それのみを必要としている。来てくれ、来てくれ。我らの唯一の希望は、貴方が何ものによっても惑わされず、真っ直ぐに、動じずにこうしたとんでもない嘆きの中でも直立しているであろうことなのだ」。

これはまことに好意的、追従的言であって、アフリカ人、この月山脈からの男が数分前に想像上のトイブリヒに対して行っていた演説の立派な締め括りとなった。しかしそれほど完全に、我らの友の観点が平静に客観的であると保証されていたわけではない。さて、彼がとても恐れていながら、しかし最近の日々、半ば熱にうなされて再三熱望されていたかの時が来たのであった。キント少尉が最悪のことを実行した。いかになしたか、それはどうでも良いことである。しかし誰が、自らでは救出し得ない誰が、他人の手によってこのような災難から高みへと救い出されるのか。

「ニコラはどこです」とレオンハルトは尋ねた。

「それはすでに話した。彼女は付き添われて、貴方の従者、家の同宿人、かの奇妙な仕立屋兼給仕人トイブリヒ氏の庇護の下、　ー　私のエマの許へ逃れた。私はこちらへ走って来た。彼女が貴方を求めているからだ。ただ頭に岩の塊を受けて亡くなった者なら誰であれ幸運だと称えたくなるような一分間があったのだ」。

「彼女にはただ一つ抜け道があります。彼女はそれを知っていて、その道を行くでしょう」とハーゲブーハーは呟いた。それから彼は帽子をしっかりと頭に被って、ひどい嵐がドアの許では待ち受けていると承知している男のように少佐の腕を取って、言った。

「これから彼女の許へ参りましょう。私ではなく、彼女が、　ー　彼女の方が真っ直ぐに立っています。　ー　この女性について案ずることはありません。我が友、私の腕を取ってください。路地で、フォン・ベッツェンドルフ氏の家で何が起きたのか、話してください」。

彼らは脆い階段を再び下りて行き、外のケッセル通りへ出た。ケッセル通りは静かに眠っていて、何も心配していなかった。この路地はフォン・グリメルン殿との交誼の栄に浴していなかった。それにフォン・ベッツェンドルフ警察長官殿に関しても、この傑出した男は単にその下位の役人達を通じてのみ、この通りと関係していた。それ故、この貴族が自分の家でのこのド派手によってどのような手痛い状況に陥ったか、一向に無関心であった。ケッセル通りは、自分独自の心配、不安、興奮を有していた。それで向こうの別世界のかの人々のことで、この遅い時刻に、その藁布団から起き上がるよう要求することは出来なかった。

ケッセル通りは穏やかに眠っていた。しかし眠っていない多くの通りがあった。少佐とその同伴者の側を馬車が回転して行った。ランタンの明かりがその中の青白い、びっくりした顔を照らし出していた。

「あれは裁判所顧問官イーゲラーとその娘達だ」と少佐は言った、「彼は私の側のトランプ台に座っていたが、一瞬明かりが消えて、爆風でドアが吹き飛んだ。後生だ、ハーゲブーハー、なぜ貴方はこのパシャ・トイブリヒのような大層不気味な人間と付き合っているのだ」。

「哀れな男だ、彼がこの暗い話と何の関係がありましょう」とレオンハルトは叫んだ。

「彼がとは。神かけて、かの幽霊は彼なしにどうして入って来られたかな。彼がこの幽霊をいわば手に引いて、我らの中央に置いて、我らに紹介したのだ」。

「彼がキント少尉を案内したのですか」。

「キント少尉とは。勿論、捕囚部隊の年金少尉キントだ。まあ、ちょっと待たれい。思い出が、記憶が少しずつ戻って来る。霧の中から諸事物が明らかになるようなものだ。ー　まあ、待たれい。　ー　そうだ、そうだ。我々は一勝負していた。家の主人に、フォン・グリメルン殿、裁判所顧問官、それに私だ。ベッツェンドルフが私の右手に座っていて、 裁判所顧問官は左手、そしてフォン・グリメルン殿は私の向かい側であった。我々はある隣室にいて、グリメルンは背中を広間の開いたドアに向けていた。広間では踊っていた。私は立派な上手な賭博者ではない。しかし私はまこと快適な気分であった。私はこのような陽気な舞踏会音楽が楽しいマーチのように好きだし、いつでも明るい明かりや若い男女に喜びを感じている。それで私は元来、明るい部屋、ドアのカーテンの間、こうした威勢の良いカップルの移ろいゆく姿の方を自分のカルタよりも注視している。これは必ずしも勝負の得にはならん。フォン・グリメルン殿はすでに私に何度か警告の視線や、的確な注意を送っていた。しかし自分の性分に対して人間何が出来よう。私はまさに、すでに経過した年月、我がエマのことを考えていた。エマは当時、今のこの小うるさい閣下よりもはるかに可愛らしい相手であったし、そしていかに彼女は上手に踊っていたことか、我がエマは、それにあの微笑ときたら、どんな美女からも、誇り高いニコラ・アインシュタインからでさえその花冠を奪うものであった、と考えていた。そして私はどうして本来こういう具合になって、妻は家にいて、私がここに座っているのか深く考え込んでいたら、自分が誰のことをもっと怒っているのか分からなくなった、自分の方か、妻の方かと。それで当然、裁判所顧問官が再び私のエースにその切り札で勝った。　ー」。

「それでグリメルンは、グリメルンは」と苛立ってハーゲブーハーは叫んだ。

「彼はキケロのようにギリシア語で話した。[『ジュリアス・シーザー』Ⅰ,2]いや、彼はギ

リシア語を話していない。彼は自分の意見をフランス語のフレーズで微笑んで話した。しかし申したように、私は全く心地良く、温かく感じていて、要するに、すべてを出来る限り安易に考える気分に浸っていて、この快適な時間以上のことを考えていなかった」。

「ニコラはどこにいたのです」とアフリカ人は尋ねた。

「我々はこの晩の最初、ちょっとだけ一緒にお喋りした。しかし彼女はすでに午後、私の妻の許にいたので、ほとんど何か伝え合うこともなかった。私はそれからやがて彼女を見失って、正直に言うと、その後更に彼女を目で追うこともなかった。とても多くの人が居合わせた。私のいつもの癖の一つで、私は女達が、集団となって、大層な晴着を着て群れていると、自分のエマのことは別だが、とてもそれぞれを見分けることが難しくなるのだ」。

彼の興奮にもかかわらず、あるいはまさにひょっとしたらこの興奮のせいで、このトゥムルキー州からの男は、何とも多弁に、何とも冗漫、饒舌に、ドイツ同盟のこれらの老若の軍人どもすべてが、五十年の平和のため、報告する次第を一つの珍しい点として注目した。ほとんど彼はこの珍しさをやはり珍しいこととして、少佐に伝えたくなった。しかし時間がそれにはやはり足りないと思って、彼は沈黙して、多分それは正解であったろう。二人はまさに警察本部の前、その通りの向かい側に達して、達したと思って立ち止まり、堂々たる暗がりの建物の方を眺めた。まだ明かりの一部は消えていなかった。落ち着かない人影がカーテンの側を過った。半ば開けられているドアの前に男達の一群れがあって、小声で熱心に話していた。再び一台の馬車が角を曲がって来て、警察本部の玄関口へ向かった。

「あれは」フォン・ベッツェンドルフ氏本人だ。どこから戻ったのか貴方に言えよう。彼は宮殿へ、陛下の許へ報告に向かったのだ。そして、この件に関し、主君一家のご意見やご要望を伺って来た。哀れな男だ。彼はこのグリメルンと密接な関係がある。今夜の奔走のことで、彼を羨ましく思う謂れはまことない。明日はどんな具合だろうか」。

「大衆のことはどうでもいい」とレオンハルトはかなり乱暴に叫んで、この立派な兵士を更に引っ張って行った。「これは戦の後の戦場のようなものです。我らは死体を漁る者達や墓掘り人どものことを気にかける必要はありません。　ー　まず、どのようにして、キント少尉が舞踏会場に現れたか、話してください」。

「フォン・グリメルン殿がトランプを新たな賭けのために配った。私は貴方のトイブリヒから砂糖吸水一杯を取り寄せた。丁度広間でも新たなダンスが始まるであろうと思っていたとき、彼が戸口に立っていて、かのトイブリヒも震える両手に盆を持って、彼の横に立っていた。彼は制服を着用して、剣を脇に帯びていた。私は彼を最初仮装していると思っていた。彼は我らの許に達するために、広間を横切って来て、すぐに紳士淑女の間でかなり目立っていた。何人かの若者達は笑っていて、二，三人の可愛い娘の顔がカーテンの辺りで彼を覗いていた。フォン・ベッツェンドルフ夫人は素早く彼の直後に現れ、彼をとても訝しげに頭から足先まで見つめていた。グリメルン殿は彼を見ていなかった。彼は、申したように、ドアに背を向けていて、トランプに打ち込んでいたからだ。警察長官もようやく、自分の妻と裁判所顧問官と私のせいで、注目することになった。しかし長官は仕事柄、幾多の奇妙な出現には慣れていて、最初単に若干不思議そうに眉毛をつり上げただけであった。彼は起き上がろうとした。多分この奇妙な客人が自分の祝典をこれ以上妨げ

るのを阻止して、時と所を彼に弁えるよう諭すためであったろう。しかし貴方のトイブリヒが空気をパクつきながら、『キント少尉殿』と語り、そしてこの少尉はフォン・グリメルン殿の肩に片手を置いた。私はかなり神経質で、自分の注意力が喚起させられると、多くの些細な点を忘れない質だ。それで今もこうしたすべての細部を克明に覚えており、ハーゲブーハー、貴方にそのことを話せるのだ。彼は彼の肩に全くこっそりと置いて、あたかもそれを支えにしたいかのようで、全く物静かで、しかしこのことがこの時私にとっては一層不気味に見えた。フォン・グリメルン殿は、貴方のトイブリヒの知らせを聞き漏らしたに違いない、最初振り返って見ることさえしなかった。彼は一人の知人が自分に触れていると思ったに相違ない。彼は静かに微笑しながら最後のトランプを配った。それから彼が振り返って見ると、勿論微笑は消えた。彼は縮み上がって、唇をしっかりと上下噛みしめた。　ー　『私はキント少尉』と、さて少尉はこの言葉を発して、その言い方は少しも無愛想でも居丈高でもなかった。『貴殿、これはどういうことだ。私に何を望んでいる』と舞台監督は尋ねた。しかしこの老公は答えず、ただ軽く彼の肩を叩いて、我々の方を向いた。一方この家の主婦は、すでに他の従者達を求めて見回していた。この瞬間、ニコラもすでにドアの赤いカーテンの間に立っていて、キント少尉のすぐ後にいた。そして少尉は、申したように、我々の方を向いていて、あたかも騒ぎを望んでいない者のように、小声で語った。『殿方らは、誰を相手に賭博をなさっているか、少しばかり用心なさるべきでしょう。白い手袋には幾つかの汚い手が潜んでいます。多分幾つかのいかさまトランプがテーブルにあります』。我々は皆、飛び上がって、フォン・グリメルン殿はその椅子を投げ倒した。『これは錯乱者です。どうして入って来たのです』と家の主婦が叫んだ。しかし老公は言った、『いえ、マダム、錯乱者ではありません。キント少尉です。ここに入って来る権利を有しています』。そして今や彼は真っ直ぐにその背丈全体を伸ばして、大きな声で叫んだ、『私はフリードリヒ・フォン・グリメルン男爵を、彼自らの連隊の中、その友人達の間で詐欺師と告発します。これは私に一層似付かわしいことであり、皆様方はきっと喝采してくださいましょう』と。

「何と悪魔的なこと、何と巧妙に悪魔的なことでしょう。いや、復讐は偉大な芸人です」とレオンハルト・ハーゲブーハーは叫んだ。

「これがブレイクリー臼砲からの爆弾だ」と少佐は叫んだ、「それが我々の下に落ちて、百三十の部分に砕け散った」。

「彼の仲間達の前で、彼の友人達の前で」とハーゲブーハーは呟いた、「それで、ニコラは、ニコラは」。

「私はすべて炎のような霧を通して見ることになった。裁判所顧問官の両手に書類を見て、百もの青ざめた顔、　ー　制服、　ー　裸の肩、踊っている炎を見た。我々が座っていた狭い小部屋は突然消えた。私は踊りが止んでしまった広間にいて、　ー　私は酔っ払っていて、よろめき、そして今や周りのすべてが一気に静止して、ただ一人の背の高い人影が、白い服の一人の女性が私の側を通り過ぎ、広間を過って、そして彼女が進む前後では一つの路地が、花々と羽根飾りと明かりの見える路地が出現した。私は彼女の名前を叫んだ、ニコラ、ニコラと。しかし彼女は振り向かなかった。私は階段にいて、　ー　路地にいて、　ー　暗闇の中にいて、これが再びまた一つのガス燈の明かりとなった。私は無帽のまま人の群れの中にいて、この人々は家の窓の下、舞踏会の音楽に聞き入っていた。

娘達や女ども、従者どもであった。何人かは笑って甲高い声を出し、愚かに私を見つめている他の者達がいて、更にまた、路地を見下ろしている他の者達がいた。するとラウレンシュタイン伯爵の猟師が歩み出て来て、礼儀正しい男で、以前私の連隊にいたのだが、私に向かって言った、『一人のレディーがたった今通り過ぎました。少佐殿は彼女を探しておいでです』。彼はその言葉を、自分が的確に言っているか分からない風にどもって発していた。それから彼は更に貴方の人間、トイブリヒの名前を呼んだ。さて、　ー　ここに私はいるが、ニコラ・グリメルンは、このトイブリヒの腕にすがって、私の妻の許へ向かった。そこで私は彼女を見つけた。それから私は貴方の許へ来たのだ、ハーゲブーハーよ。というのは彼女が路地を通っての半ば錯乱した歩行から十分に回復して、話せるようになると、彼女は激しく貴方を求めて、トイブリヒを自分の侍女の許へ送り、私をケッセル通りへ送ったからだ。そこで私は貴方にお尋ねしたい。底なしの悲嘆の中にいるこの不幸な女性を救出するいかなる手段を貴方は有しておられるのか、と」。

レオンハルトは悲しげに頭を振って、それから言った。

「この祝典広間から抜け出すだけでは、まだ逃走は済んでいません。　ー　肩越しに覗いて見ると、追跡者達がすぐ後に見えましょう。彼女には夜を徹しての長い道のりが控えています。私がこの道中では、彼女が安心出来る所まで案内することになりましょう。いや、私はこのような魂の導師役をしたことが、先の　ー」。

彼は驚いて、立ち止まり、それから呟いた。

「いや、我が神よ、どうして彼女をあそこまで連れて行けよう。最も立派な救出となり得るものが、今や単に混乱を深めるばかりで、解決を困難にしている。ヴィルトベルクよ、　ー　ヴァン・デル・モーク氏は、　ー　いや、先へ、先へ、急ぎましょう。貴方の家でこのことについて説明しましょう」。

彼らはより急いで向かった。そして急いで通り過ぎながら、視線を幾つかの明かりの見える窓に向け、フォン・ベッツェンドルフ氏の客人達の名前を挙げた。彼らもそこでまだ目覚めていて、前代未聞の出来事の印象で心乱れて、あちこち歩き回ったり、ランプの周りに心砕けて座っていたりした。そこには某々氏が住んでいて、呻きながらその都度付言していた。「何という」話しだ、　ー　一体どうなることだろう」。

彼らはますます急いで向かった。しかし二人が少佐の住まいに達する前に、更に誰かがこの二人に向かって来た。この者は他の多くの者達以上に、一言述べる資格を有する者である。ヴァレンブルクの捕囚部隊のキント少尉である。二人はガス燈の下で彼と出会って、この男の陥っている肉体状態、精神状態を識別するに完全に十分な機会となっていた。彼の本性と外見に関して、一つの恐るべき、戦慄を呼び起こす変貌がなされていた。陰気で寡黙な老人は、一人の狂人、錯乱者となっていた。彼は長年にわたって、大いに憤然と、ほとんど超人的な自制克己を行っていたが、警察長官の広間で不倶戴天の敵に最初の言葉を放つと同時に、すべての尺度、あらゆる支点を喪失していた。

しわがれた、動物的な高笑いと共に、彼は両男性に対し立ち塞がり、彼らに拳を向けて、歯ぎしりしながら、叫んだ。

「いや、お揃いだな、親愛なる殿方らよ。貴殿らに日の出前、会うに違いないと思っていた。いやさ、これは私が生涯待っていた戦争だ。そのために私はボタンや革索具を磨いて来たのだ。ほら、ヴィルトベルク少佐、これほど立派で楽しげな素晴らしいボタンや、

ゲートル、パレードを我らは見たことがなかった気がする。戦争だ、戦争、そうこなくちゃ、結構毛だらけとはならん」。

「貴殿は病気だ、貴殿が高熱を発しているのは、不思議ではない、キント少尉」とハーゲブーハーは語った、「家へ帰って、寝室に閉じこもることだ。貴方は自分の権利を行使した。これ以上酩酊者のようにうろついてどうするのだ。貴殿は自分の意志通りに復讐を果たした。咎ある者を叩きのめす権利が貴方にはあろう。しかし今は我らに道を空けてくれ、貴殿の瓦礫の下、無実で埋葬されている者達を片付ける邪魔してくれるな」。

「我が若衆よ、風は向こうの方から吹いて来るのか」と少尉は囁いた。「道を空けろと、道を空けろと。一人の男が自分の権利を一人の男らしく行使したから、貴殿らも他の者達同様に、人殺しと叫んでいるのか。犬はいつでも、絹の靴下や、ビロードの裳裾に向かって行くとき、狂ったように吠えるものだ。ハーゲブーハー殿、貴殿に幸運を祈る。貴殿は帰郷して以来、すでに多くのことを学んだろう」。

「ご老体、私は沢山学んだ。貴方をその道中、引き留めるよりは、私は自分の手を切り落とすだろうし、貴方に一言抗弁するよりは、むしろ自分の舌をかみ切るだろう。それでは、私に自分の道を進ませてくれ」。

「そうは行かない。私は誰と歓声を上げ、我が喜びを分かち合うべきか。貴方は何故私からヴァン・デル・モーク氏を取り上げたのだ。行って、このヴィクトル・フェーライゼンを私に返してくれ。彼が今回私を一人っきりにさせたことは、呪わしい」。

ヴィルトベルク少佐は、ヴィクトル・フェーライゼンの名前を聞いて、よろめいた。そして再度レオンハルトの手を握った。しかしレオンハルトは静かに言った。

「コルネリウス・ヴァン・デル・モーク氏は我々の手とは違う勢力圏にいる。しかし、キント少尉、私は貴方をそこでも引き留めない。自ら出掛けて、彼の母親の屋根の下、そこの竈の許の彼を訪ねて、彼を連れ去ればいい。そして貴方と一緒に今夜の時の勝利を祝い叫ぶように仕向ければいい」。

老公は脇に避けて、再び憤然と笑った。

「仕方ない、貴殿ら、華奢な肌と優しい心根のお上品な輩よ。私は単独で向かい、単独で自分の取り分を他の連中から要求しよう。しかし賭け金分を完全に払って貰うぞ。血には血を、命には命をだ。カルタはテーブルにあったが、しかし奴らは皆インチキの賭けをしていた。フリードリヒ・フォン・グリメルンと同様にな。しかも払おうとしない。それが奴らの流儀だ。奴らは、自らがこの鼠の巣を統治しているから、自分達の好き勝手に行えると思っている。そして四平方マイル威張り散らせられるから、偉大だと自惚れている。彼は奴らの一員だ。彼は普通のならず者、盗人に他ならないけれども、しかしそのみっともない代物を銅版画にして、金箔を付けて、世にも最も素晴らしい崇高さの見本として称賛されているあの下種ども並に彼を処遇しなければならないとしたら、それは不埒なこと、我慢ならないことであろう。いつか多分時がやって来て、その時には競売者がテーブルをハンマーで叩いて、すべてのドイツ人民衆の前で、ガラクタをすべて競売にかけることだろう。十二名の長官が一グロッシェンだ。そして十三番目のおまけが添えられる。十二名の将軍が一グロッシェンだ、そして十三番目のおまけが添えられる。しかし気にすることはない。これを体験することになった人は、この恥辱に金を出せばいい。私は、この周辺のすべてのやくざどもを上回るもっと高い値を払うことになろう一人の者で満足すること

にしよう。我が名誉と我が幸運、我が子供達の命でもって此奴に対し支払ったのだ。そしてこの購入は成立だ。天の古い神にかけて、この購入は有効だ。奴らは計算に一つの間違いでも見つけられるものか、試せばいい。いや、奴らの計算すべてに一つの間違いがある。奴らはただ自分らのみ数え上げて、常に、奴らに対し下の方から突き出されるかもしれない手や拳を勘定しないのだ。この下に我らはいる。つまり死人と私だ。そして奴らが今や奴らの犬どもを鎖に繋ごうとすると、我らはそれだけ一層陽気に猛然と狩りを続けなければならないだろう。彼、つまりこの偽りの詐欺師、血まみれの殺害者は駆けるに任せるがいい。彼が我らの吠え声、噛みつきによって、我らの牙に対する不安によって、耳や心臓が破裂しないか、見守ればいい」。

この野蛮な怒りに対し、一言投入することは不可能であった。この荒れ狂う老いた男を、その途中で止めることは更に一層不可能であった。

「殿方らは棒立ちで、唖然としている」とキント少尉は叫んだ。「いや、彼はきっとずらかっていよう。旅行費用に不足することもあるまい。彼がずらかる前に、我が膝を彼の胸にお見舞いし、我が手を彼の喉に置くことを邪魔する連中は呪われよ。殿方らは何を見とれてなさる。彼が逃げるぞ。しかし死者達と私が彼の後を追う。我々は彼に追い付き、彼の清算をしよう、全体いかさまの、堕落した、偽善的世間であるにもかかわらず」。

今一度レオンハルト・ハーゲブーハーは両手を彼の方へ突きだした。しかし彼は身を振り解いて、駆け去った。彼自身の比喩によると、追跡するブラッドハウンドのようであった。

ヴィルトベルク少佐はランタンの支柱に寄りかかって、呻いた。

「神々の力が必要なとき、人間は何とも無力なものだ」。

しかしアフリカ人は叫んだ。

「彼が本当のことを話したのであれば、私はそれをほとんど疑いませんが、私は名誉を重んずる人間でありたいから、彼の武運を祈っています。少佐行きましょう、ヴァン・デル・モーク氏を彼の助けに送りましょう。神はまことに神であって、暗闇も明かりに劣らず、神の従者、預言者です」。

「ヴィクトル・フォン・フェーライゼンか。まことのことか」とヴィルトベルク少佐は叫んだ。「今夜の魔女の大鍋で沸騰しているのは、泡ではないのか、泡のように飛び散るであろうとしている泡ではないのか」。

「クラウディーネ夫人の息子は母親の許へ帰っていて、そこの忘れられた谷の、忘れられた水車小屋の母親の許にいます。ニコラ・フォン・グリメルンはそこへ逃げ、そこに隠れようとしています。平穏に暮らすために」。

「不幸な女だ」と少佐は呟いた。レオンハルト・ハーゲブーハーは肩を竦めて、黙っていた。かくて二人はヴィルトベルクの住まいの玄関に達したが、そこではまたしても誰かが全く不安げに苛立って彼らを待ち受けていた。すでに一時間前から、フーゴ・フォン・ブムスドルフ少尉が家の前であちこち歩き回って、その上品な口髭を噛みしめ、手袋を引き裂いていたが、しかし鐘を引く勇気がない状態であった。今や急ぎ足で家にやって来る両男性に彼が一っ飛びで向かって来て、叫んだ。

「ニコラだ、私の従姉妹のことだ、哀れなニコラ。いや、お二人、お二人。私はどうしたらいいのか。私は何をしなきゃいかんのか。私に出来ることは何か。私は彼女のために

何かしなければと、いてもたってもいられない。ハーゲブーハーよ、　ー　徒歩でも、馬ででも、私は誰を倒せばいいのだ、　ー　我が父上に、今夜私はどこの持ち場にいたか尋ねられたら、何と言えばいいのだ」。

「親愛なるフーゴ、誰も殺すことはない」とハーゲブーハーは言った。「気持ちを落ち着かせることだ。一緒に行こう。我らは実際貴方の助けをとても必要としている。余計な詮索をする時間はほとんど残っていない」。

「貴方に拝跪して、感謝する」と少尉は叫んで、三人皆が家に入った。

少佐は同伴者達をこっそりと階段を上がって連れて行き、まず二人を自分の部屋に押し込み、妻のエマに自分らの到着を知らせに行った。彼が不在の間に、レオンハルトは少尉に短い言葉で、事件の経過や人物、そしてヴァン・デル・モーク氏の目下の滞在地について話し、この若い兵士の混乱をやはり更に高めることになった。さて再び、ヴィルトベルクは爪先立って戻って来て、言った。

「ハーゲブーハー、それでは行かれたい。彼女は私の妻の部屋にいる。フーゴと私はここで貴方が戻って来るのを待つことにしよう。それから、話すべきことを語ってくれ」。

アフリカ人はこの極めて勇敢な少佐夫人のドアをノックした。この夫人が先に素朴で、平和育ちの少佐に戦場での合い言葉と喊声とを教えていたのである。

第八章

月山脈からのこの男、トゥムルキー州出身の七人の睡眠者が、少佐夫人のドアの前に立っていて、耳を鍵穴に当てたく[様子を探りたく]なったとき、自分がこの状況を完全に把握していると感じていたか、保証できない。しかし自分とクラウディーネ夫人とが、不幸な、男爵夫人グリメルンに相応しい助言を与えられる唯一の交際相手であると自らに告白せざるを得なかった。ここに二人の人間がいて、この両者の周りに運命は、さながら一つの問題を解くために、一つの円を描いていた。人生の煩わしい混雑を、この二人の忘れられた者達の深い内的孤独と隔てているこの陰気な境界線、この境界線を越える資格は今や百万人の中からニコラ・グリメルンにのみ与えられていた。

ドアが少しばかり開いた。「まあ、有り難い」とエマ夫人は叫んで、アフリカ人を小部屋に引き入れ、震える手で女友達を示しながら、囁いた。

「ご覧なさい、助けてください」。

輝かしい宮廷服、舞踏会服を着て、肩や腕は剥き出しで、ニコラ・フォン・グリメルンはあちこち歩き回っていた。白い裾をざわざわと引きずって、その乱れた晴着の中、素晴らしく美しかったが、しかしとてつもなく悲しげに見えた。

彼女は泣いていなかった。彼女は夙にその華奢な、白いレースのハンカチをずたずたに裂いていて、その白い、固く上下合わせた歯の間から笑っていた。そして彼女はアフリカ人に近寄って、腕を掴んで、喘いで言った。

「彼女は何を囁いたの、何と貴方に言ったの。何故いつものように、大きな声で、明瞭に話さないの」。

「ニコラ」とエマ夫人は叫んだ。

「あなた方は皆、今、私の居合わせる所では、ほんの小声で、全くこっそりと話さなけ

ればなりません。私もそれに慣れなければならないでしょう。ご免なさい、ニコラ、自ずと分かることなのに、私が愚かに声を上げて尋ねることはしないようになる時もやって来ましょう。今晩は、親愛なる友の方。私のせいで貴方が無理矢理ベッドから起こされたのでなければいいけど。こちらはとても寒い季節で、いずれにせよ、棕櫚の下の太陽に慣れた貴方にとって少しばかり応えることでしょう。それにまた少しばかり遅すぎます。眠ることが出来る者は、眠ればいい時間です。私どもは、自らの屋根が燃えていないのに、火事だと眠っている人々の戸口で叫ぶのは死罪も同然と承知はしているのです」。

「私は近隣の家での火事の知らせを耳にしたとき、まだ目覚めていて、元気でした」とハーゲブーハーは語った。彼は、病人の床で、町のニュースについて語る医師のように、自分のしている事をよく自覚していた。「私はまこと元気で、生気に溢れ、目をこする必要はありません。私は、ギロチン台で、籠[首を入れて見せる]を、空の籠を[女性からの肘鉄、拒絶]を見ていました。とても愛敬のある、若いレディーが、何の邪悪さも見られない娘が、私にこの籠をくれました。私が彼女を妻にしたい、日々、あるいはむしろ人生の末まで一緒に幸せに暮らしたいと私の意図を言明した後のことです。しかし、申しましたように、彼女は丁重に感謝して、自分は夙に、まことに立派に約束の準備がなされていると打ち明けたのです。　ー　それで、こちらの邪悪な警報を聞き逃さないのは、簡単なことでした」。

もっと平穏な時であれば、エマ夫人はこのような知らせを聞いたら、両手を高く頭上に上げて、驚きを表明していたであろう。今この時には、夫人は、かの若いレディーの名前を呼ぶことで満足し、ニコラ夫人を見つめていた。しかしニコラ夫人はレオンハルトの手を自分から離して、言った。

「私は色々な言葉を頂戴するけど、それで何らかの意味を結び付けるのが、とても難しいわ。誰かが結婚や幸せのことを、火災警報のこと、ギロチン前のかの籠のことを話しているわけね。まあ、待ちなさい。私はきっと警句を見つけます。籠ニ唾スルと革命広場でのかの陽気な喜劇を、手に編み物靴下を持って、眺めるレディー達はそのことを呼んでいます。ハーゲブーハー殿、貴方は私に助言を求めずして、結婚をなさってはいけません。私は賢い女で、多くの人をそうだと証言させることが出来るのだけど、今は人々の大きな声がとても恐いわ」。

「我々は以前一緒にカッツェンミューレを後にしたことがあります」とハーゲブーハーは平静に語った、「つまり貴女はプロスペロに騎乗して、私はその横、国道を並んで行きました。我々は先々の日々のことについて沢山のことを話しました。貴女はクラウディーネ夫人の黒パンを胸に抱いて去りました。そして我々がフリーゲンハウゼンを背後にした高台で別れる前､我々は自由と平静と誇り高い泰然の一つの領国について語り合いました。我々がその市民権を所有していると思っていた領国のことです。我々はいつかまた再会するであろうことも話し合いました。ひょっとしたら、劣悪な、死の迫る時であるかもしれない、と。そのときは互いにかの明るい領国、かの特許状を思い出すことにしたのです。そして森の水車小屋のかの静かな目に我ら両人を見守って貰うことにしました。ニコラ、これが今です。今こそ、我々は自らと世間に対し、約束し合ったことを果たす時です。貴女は、どんな鎖に繋がれようと、自由でいられると高笑いしながら主張した以前のニコラとはもはや違うと言ってはなりません。見上げてください。自らを見つめてください。我

らの領国では、敵対者達が我らに対し最も声高に勝利の雄叫びを上げるとき、まさに勝利を最も確実に確保するのです、ニコラ・アインシュタイン」。

「勿論それは問題です。でも私はそれを思い出せない。貴方は、私が百年前に、あたかも現実のことであるかのように夢見ていた夢想について語っています。でも、それは私にとって何の意味もない。私は何かしら。哀れな、打ちのめされた女、夏の夕べに白馬に乗って、森を駆けていて、酩酊と自然の心地よさとを自らの勇気と、自らの思索と感情と勘違いしていた者、ヒロインではありません。青春の最後の幻想の中の一つの魔法にすがっていた一人のオールドミス、それが私、私どもが最初出会ったときの私でした。そして今日では、私は老いた、病気の女で、その領国は単に全くの通常世界にあって、これと共に、再起不可能へと瓦解しています。頭を振らないでください。貴方は他の人々同様に了解されていて、他の皆同様に、ご存じです。つまり、今日私どもを嘲笑ってくれた人生は、やはり唯一現実の、本当の人生である、と。エマ、あなたは分別ある女性で、いつも私にそうだと言っていました。それではこの善良な方を説得して、溜め息と涙で償いをさせてください。今や私どもは必定然るべき地点まで来ていて、観客に有用な存在として振る舞うべき時です。この件はまこと教訓に富んでいます。永遠の正義が的確に現れて、全く適した瞬間に、適した場に書き割りから出現し、各人にその功績に応じて、その取り分を与えています。人間は結局、世界の大きなABC本の一枚の絵でしかなく、晒し台で素っ裸になって自分の自我に世間の視線や言葉、投石を浴びる者が、世間の最大の功労者であるというのは、どのような惨めな状況に陥っても、まこと楽しく、慰められる考えです。私の哀れな頭、この頭。こめかみがかくも動悸するなんて、誰が考えたことがありましょう。私に気付けの香水瓶をください。額にオーデコロンを擦り込んで、あなた方のご希望通りにおとなしくなって、満足することにしましょう。ほら、自賛出来ましょう。この件を上手く片付けて、立ち去って、片隅に座ることにしましょう。人々はもう帽子と雨傘を持って、衣服を整えて、座席で動いています。お休みなさい、お休みなさい」。

「ニコラ、ニコラ、しっかりなさい、愛しい娘、哀れな女[ひと]。錯乱に近いわよ」と少佐夫人は叫んで、大きな声ですすり泣いて、この女友達を両腕に抱いた。しかしニコラは語り続けた。

「良い女、私の分別を案じないでください。私は乱れません、大丈夫。でも、エマ、泣いて頂戴。泣くためには、私の分別の大部分を失っても惜しくない、でも私は泣けないし、泣くことは許されません。その権利はないのだから、泣くのは愚かです。いえ、勿論、可愛い女、あなたは幸せよ、あなたの幸運が祝福されますように。あなたはいつもすっかり得て来ました、笑いも涙も。笑うときは涙をほとんど気にかけなかった、その逆のときも。あなたは、自分の床几に静かに座っていようと思うとき、四方八方から声をかけられなかったし、甲高い呼び声を聞き逃しても、その夢想の邪魔をされなかった。あなたは落ち着いて自分の道を進めました。良き人々があなたを導いてくれて、良き人々が同伴していました。私も自分の考えや、自分の子供達をあなたのように揺すってみたかった。そうは行かなかったから、良い女、明日早朝出掛けて、私の恵み深い母に、私からの挨拶を伝えて、こう言上してください。私はかの奇妙なトゥムルキー州出身のハーゲブーハー殿と出奔しました、それで悪しからず、と。更に、私はこちらではもはや辛抱出来なかった、私はこのような状況下では、新鮮な空気と環境の変化とが、私の性格と気分とにとても効果的に

作用するに違いないと固く確信している旨、付言してください。七つの山々の奥、七人の小人とかその他のメルヘンの国一帯について、こちらへは郵便局の手紙や電信の急使も派遣出来ない一帯である旨仄めかしても構いません。更に全くの小声で囁いてください、すべては一切賭けに負けてしまい、この道で更に高い名誉や品位、満足に達する見込みはもうない。だから、またこのような状況下ではマリアンネ公妃陛下もきっとこのような失踪に異存はないでしょうから、母上もどうぞこのようにお心を決定ください、と。その気があれば、更にこう添えてもいいのです。ニコラは決して水の中に入って自死することはありません。それにこれが慰めとなるのであれば、こう伝えてもいいのです。ニコラは書けるようになり次第、手紙を書くことでしょう。そして余りに面倒な事態にならない限り、ニコラはこれから先も、従順な、万事に辛抱強い娘を続けます、と。エマ・ヴィルトベルク夫人、全権大使としてあんじょうお頼み申します。それに誓って、いや、皆さん、私は誓います。　ー　自分の惨めさから一つの長編小説を仕上げるつもりはないのです、誓って。野蛮なこと、根を掘り出すこと、どんぐりを食べること、これらを本気ですることが私の意図であって、それ故、私には自分の道を行かせることしか何も方策は残されていないと伝えてください。それからよしなに挨拶なさって、家に戻って、心を落ち着かせるために、私の背後に靴を投げ付けて、それから片隅に座って、あなたの子供達のために、教訓的で感動的なお話しを考案して、こう始めればいいのです。昔々あるところに上品な若い娘がいました。ニコラと言って、妖精や小人、魔法使い、野蛮な竜、それに金や銀、ダイヤモンドと色々なことを体験しました。その娘は森で行方不明になりました。どのような次第で失踪したのか、よく分かりません。でもそのことについて話すのはとても感動的で教訓的なのです」。

そのようにニコラ・フォン・グリメルンは話して、固めた両手を額に押し付けた。そしてまずとても疲労困憊して、完全に息切れして、沈黙した。レオンハルト・ハーゲブーハーは、彼女を静かに話すがままにしておき、一度も中断させようとしなかった。彼女が小声で嗚咽しながら、エマ夫人の寝椅子の枕に横たわると、彼は窓から外を覗いて、言った。

「雪が降り始めました。ビスミラー、自分の足跡を消したい者には、今が恰好の旅行日和です。少佐夫人、ニコラ夫人と私とはこの町を朝一番に出立して、ニッペンブルクとブムスドルフ経由で、カッツェンミューレへの道を行くことが、私の意見でもあります。現在フリーゲンハウゼン周辺の森はいたって静かです。最近そこまで向かった経験があります。自然は口に指を当てて、深閑としています。誰も野原や、田畑での歓呼、歓声を気にしなくて済みます。私どもはクラウディーネ夫人のドアをノックして、戸の中に入ると、現今甲高く鋭く耳に響いて来る音色が消えてしまっていて、驚きます。少佐夫人はカッツェンミューレをご存じありません。しかしニコラ夫人は知っています。この世で、大きな痛みを運んで行くのに、ここほど適した場所はありません。鉄や炎でも癒やせないこと、[シラー『群盗』モットー、薬、これを医さざれば、剣、これを医す。剣、これを医さざれば、火、これを医す。ヒポクラテス：久保栄訳]。これが我らの辛抱の聖母、クラウディーネ夫人の穏やかな手で癒やされることでしょう。これについて多言を費やす必要はありません。そこへの道を知っていることが肝腎です。ちなみに、エマ夫人にお約束しますが、ニコラ夫人を立派に案内し、夫人に対し、道中、私がこの度カッツェンミューレまで運ぶことになる私自身の嘆き節を披露して、極上の娯楽を提供します」。

少佐夫人はアフリカ人の両肩を抱いて、大きな音を立てて、心からの接吻をした。

「貴方は素晴らしい方です、ハーゲブーハー」と彼女は語った。

ニコラは起き上がって、この友に手を差し出して、言った。「貴方もまたなの。貴方は先ほど、自分の身に起きた不幸について、話されました。でも私の耳と目は機能していなかった。貴方は一体またどんな目に遭ったのです」。

レオンハルトは、自分が些細な自分の不幸をこのような時、この女性の不幸の横に、最良の意図の下ではあっても、押し込んでしまったことにほとんど若干の良心の呵責を感じた。しかしこの薬は効き目を発揮して、グリメルン男爵の妻をその最深部の麻痺から引き上げていた。

「貴女とクラウディーネ夫人に詳しいことは水車小屋で話しましょう。今は、いつ、どのようにして、我らの旅を遂行したらいいか、これについて考えましょう」。

この興奮したニコラに対し、今この時、このような心と体の状態で出発することは出来ないし、少なくとも朝まで待つ必要があろう、と納得させるには、苦心、つまり様々な説得術、幾多の賢い言葉や、また若干の厳しい言葉が必要であった。必ずしも類似の事情の下、平静な鼓動が、熱に浮かされた鼓動に勝利するわけではない。痛みや怒りは、劣らずに頑強な、分別や愛の好敵手である。しかし今回ハーゲブーハーは最終的に勝利した。彼はニコラを、疲れて、泣きはらした子供に似て、枕の上に寝かせて、少佐夫人の庇護に任せて、両紳士の許へ戻った。二人は彼が半時間前に置き去りにした時と同じ姿勢のままであった。

「レディーの方々はどんな様子です。我が哀れな従姉妹はどんなです」と少尉は叫んだ。「いや、ハーゲブーハー、私はすでに何度か、まこと心配して、ドアの側で待機していたことがある。しかし今のこのときほど絶対的に解体していたことはない。」いや、私にはスウェーデン軍の角笛[敵の突撃合図、『ヴァレンシュタインの死』、V、23]が今この時、幾多の他のものよりも好ましい。私はお人好しで、あれこれは本当であり、別のは法螺話だと、容易に説得されるのだが、それでも私は、　ー　どんなに頑張っても、このヴァン・デル・モーク氏のことは信じられない。少佐のご意見に関しては、ご自身にお尋ねなさるが良かろう」。

少佐は頭を振って、またしても読書家の兵士らしさを見せた。

「これは、
一斉射撃の如く、多くの傷と、
余計な死を私にもたらす」[『ハムレット』IV,5:王：おお、ガートルード、それ[あらぬ噂]が雨あられとこの身にふりかかり、やがては命を!福田恒存訳]

「私はそう思いません」とレオンハルトは言って、あらゆる困窮や不安にもかかわらず、この両軍人達のはなはだその性格特有の振る舞いに微笑を禁じ得なかった。「ヴィクトル・フェーライゼンは存命で、帰郷しています。そしてこれは我々皆にとって、幸運となる筈です。友のブムスドルフ、貴方はまず、この蘇生者に挨拶する機会を設けてください。貴方が我らに差し出された救援に我らは両手を挙げて頼ります。即刻カッツェンミューレを目指す必要があります。どのようにして水車小屋に最も安全、確実に到達するか、貴方

の腕の見せどころです。貴方は即刻出立されて、ヴァン・デル・モーク氏に、こちらで起きたことの一切を知らせなければなりません。彼は自分の為すべきことを理解して、ニコラの到着を、自分の母親の竈で待つことはないでしょう。彼にすべてのことを知らせてください。特にグリメルンの逃亡と、キント少尉の粗放な追跡について話すことです。そちら方面への次の列車はようやく明日の朝となります。ですから貴方は馬で行かなければなりません。お任せできますか」。

「私は老父のプロスペロを全く類似の天候のとき、同じような漆黒の夜、盗み出したことがある」と少尉は叫んだ。久しぶりに初めてまた片眼鏡を押し付けて、好意的にアフリカ人を覗き見た。「この犯罪は完全に成功して、つまり怒った老公は、この馬をこちらの私の馬小屋から連れ戻ったのだ。ハーゲブーハーよ、心から感謝するぞ。貴方はこの申し出で、私を再度男にしてくれた。かつて理性的人間には出来なかったような騎乗をして見せよう。任せてくれ、　ー　一時過ぎだ。私は哀れな馬ローラントをこの賭けに賭けよう。この馬と私が首を折らなかったら、六時にはニッペンブルクで、七時と八時の間に、カッツェンミューレ目前だ」。

「そうなれば、我らは救われましょう。正午過ぎ、私はニコラ夫人と共に、クラウディーネ夫人の玄関に達するだろう」。

少尉はすでにサーベルを正しい位置に付けていて、今や帽子に手を伸ばした。「我が従姉妹によろしく。　ー　十五分後に私は騎乗していよう。私は天馬、この四人のハイモンの子供達の馬[Haimonskinder,カール大帝時代の伝説]を彼女のために乗り潰してしまうことだろう。いや、哀れなローラント」。

「お父上はこの騎士の奉仕をきっとお褒め遊ばされることだろう」とハーゲブーハーは慰めて語った。フーゴ・フォン・ブムスドルフは片眼鏡を目から外して、叫んだ。「ソレハ、マコトダ」。そして付言した、「親愛なる友よ、私は騎士としてまた人間として、この立派な馬を良心の咎めなく賭けることにしよう。そして貴方自身の家にも、貴方の間近の到着を喜んで伝えることにしよう。またもっと和やかな時に再会したいものだ」。

彼は飛び出た。そして少佐は言った。

「貴方の使者は達者だ、ハーゲブーハー。ちなみに私はこのいかれた少尉に必要な休暇を追加で与えることにしよう。しかし更に私に出来ることは何か。私は自分がいかにも無益に感じられる。私としても今この真剣な時、行動して役立ちたいものだ」。

ハーゲブーハーは肩を竦めた。

「我々皆、何が出来ましょう。我々は我らの外套を道に広げますが、いずれにしてもこの道自体、ゴルゴタ[キリストが十字架に架けられた地]へ向かっています。劣悪な厄災に耐える力が、この犠牲者の自らの胸の中になければ、この危機を和らげるために我らの遂行するすべてが、どうでも良いもの、いや、ことによったら、害となりましょう。これから女性達の許へ行ってください。幾多の立派で真面目な言葉掛けが必要でしょう。私は自らの旅の準備にかかります。貴方が　ー　病気の女性を促して、しばらく安静にさせることが出来ますれば、大きな仕事を果たされたことになりましょう」。

フォン・ブムスドルフ少尉同様に、アフリカ人はこのヴィルトベルク少佐にもヴィクトル・フェーライゼンの帰郷について、かいつまんで話して、それからもう一度エマ夫人の部屋を覗き、何も変わっていないことを確かめた。彼は、分別や強靱な心、哲学について

お喋りを皆目せず、ただ静かに、真心を込めて、少佐夫人から別れ、八時に馬車に乗って戸口で待つ予定であると、述べた。ニコラ・フォン・グリメルンは彼のことにほとんど気付いていないように見えた。そのようにして、彼はその家を後にして、ゆっくりとケッセル通りへ戻って行った。

第九章

町は、このような遅い夜、単に小さなドイツ領邦首都に見られるような暗さと静かさであった。通りの角や家々の明かりは消えていた。この刺激的出来事について知らせを受けた人々も、わずかな人々を除いて、ベッドに就いていた。そしてこの例外的わずかな人々も、その片隅、密に閉ざされたカーテンの背後に座っていて、この時間、活気ある様相につながることは何もしていなかった。この町の最も元気な、明るい目の住民は、この時、月山脈からの男、レオンハルト・ハーゲブーハー殿であったかもしれない。

彼はヴィルトベルク少佐の玄関で、新鮮な大気の爽やかな風を吸い込んでいた。彼は雪の塊を一回跳躍して、自分の肢体を試して、すべて絶好調であると分かった。彼は自分が自由で軽快であると感じて、長いこと腋にあった銃弾が、今やようやくこの不快な銃弾が手の中にあって、これを暇に任せて観察している男のような気分であった。その気になれば、この弾を時計の鎖につないでもいいし、この弾と人間の身体や倫理との関係について深甚の哲学的考察をしてもいいのだ、と。

「パシャ・トイブリヒはこれについてどう言うか、興味があるな」とレオンハルト・ハーゲブーハーは、ケッセル通りの自分自身の戸口に達した時、言って、それから一つの考えが浮かんで、一層素早く階段を上がることになった。

「畜生、我らは互いに色々な告解をしなければならん。いや、英知の玉座よ[sedes sapientiae、聖母マリア]、何故此奴は、キント少尉をフォン・ベッツェンドルフ殿の社交場で、このような具合に紹介する次第になったのだ」。

急いで彼は自分の部屋に入ると、このエルサレム人は、両腕を祝賀の便箋に、鼻を祝賀の花束に乗せて、完全に放心の体で臥せっていたが、彼が、彼を起こすために、手を肩に置くと、この夢想中の仕立屋は不安げな叫び声を発して、この叫び声に自ら激しく驚いていた。パシャは甲高い叫び声を放って、テーブルから飛び起き、最も離れた壁に向かって行き、その壁から彼は狼狽した視線を投げかけ、痩せた両腕と両手とで、水車小屋風な、拒絶的動作を行った。

「やあ、友よ、私だ、トイブリヒ、目を覚ませ」とアフリカ人は叫んだ。

「誰です、誰。いや、イエス様、憐れみ給え」。

ハーゲブーハーはテーブルから明かりを取って、明かりを持ち、仕立屋の前まで進み、自らと彼とを照らして、言った。

「どうか安心してくれ。誰も貴方を取って食うとか、貴方を一緒に煙突から運び出そうとはしていない。しっかりしろ、　ー　誰を目の前にしていると思っているのだ」。

「相変わらず、あの人　ー　我が　ー　親しい友、　ー　少尉殿、　ー　キントかと」と仕立屋は喘いで言った。「いや、同じような具合に、彼は貴方が不在の間、いつもやって来ては、　ー　私を　ー　相手にする習慣だったのです。あの方はあの方の　ー　御

ー　好意で、私をすり潰すのでした。今夜あの方はその仕事の仕上げをなさって、私の
ー　神経　ー　組織を永久に破壊してしまいました」。

「トイブリヒ、こちらへ来なさい」とハーゲブーハーは説得して、言った。「一緒に腰掛けて、今夜のことを話そう。勿論、十分に動揺が見られた。貴方も一役買ったのだ。少尉はフォン・ベッツェンドルフ殿の家へどのようにして来たのか」。

「いつものような具合です。彼は控えの間、私の背後に立つという風に現れました。それで一ダースのレモン水のグラスが駄目になってしまった。すでに申しましたように、あの方に比べれば、ガラガラ蛇も天使に見えます。　ー　いや、ガラガラの音も立てません。そんなこと考えられません。あの人は現れています。あの人に睨まれると、何の意志も持てません。私は砕けたグラスの間に立っていまして、こちらへ貴方を迎えに初めていらした時、旦那様、主人は在宅かとお尋ねになった具合でして、私は別の盆を両手に持ちまして、私どもは二人して、広間の偉い衆の間を縫って行き、そして一気にこの舞踏会全体が派手な恐怖となって終わってしまい、楽しい着飾った盛装が最悪の混乱となったのです」。

「貴方は少尉と一緒に、フォン・グリメルン殿の椅子の背後に立っていたのか」。

「そうせざるを得なかったのです。あの方が私を連れて行きました。あたかも、あの方はこの件を、私がいなければ仕上げられないかのようでした。いや、私はその閣下の椅子の後ろに立っていまして、閣下が飛び上がって、少尉殿に向かわれた時、私は盆を落とすこと二度目となりました。それから、　ー　それから、フォン・グリメルン男爵夫人が私の腕を取って、広間を縫って、私を連れ戻してくださり、これはキント少尉と一緒に通る時よりもひどいものでした」。

「貴方に感謝する。貴方はこの件を立派に処理した。それも実直な、誠実な騎士のように遂行している」。

「本当ですか。いや、神様、私には分かりません。しかしそう聞きますと嬉しい。あの哀れな美しいレディーが、私にすがって来られた時、私の心は出血しました。それに私はクロークから外套を闇雲につかみ取って、それをこの方の肩にお掛けしました。このレディーが気付かれたかは分かりません。あのレディーは私のことをご存じだと、どうして私は分かったのでしょうか。旦那様、あのレディーは私のことをご存じで、私の名前と貴方の名前とを呼びました。様々な紳士淑女の方々が、彼女を引き留めようとか、彼女に話しかけようとなさっていました。しかし彼女はただこの方々を見つめていらっしゃるばかりで、この方々は後ずさって、とても驚いていました。この方々は我らに道を空けました、
ー」。

「それで良いのだ」とハーゲブーハーは呟いた。

「我々は路地に出ました。多分この時には、どんな光輝、明かりがあろうと、眠っているようなもので、極端な暗闇の中でした。すると彼女は震え上がって、それから初めて私に話しかけられ、こう仰有いました。『トイブリヒ、どこへ行きましょう』。私は勿論敢えてこう申しました。家に帰るか、あるいは恵み深いご夫人の母親の許へ、と。しかし彼女はこの両提案に頭を振って、こう答えられました。自分にはもはや家はない、母親の許へは行きたくない、と。いや、旦那様、私は彼女をその時最もケッセル通りへ案内したかったのですが、しかしこれは良くないということで、少佐夫人の許へ行きました。私はもっと良くは覚えていません。そちらへ彼女は静かに向かわれました」。

「神は案内役の選定をいつも的確に行うものだ」とレオンハルト・ハーゲブーハーは真面目に語った。微笑して彼は言った。「トイブリヒよ、これから多くの仕立屋がこの世の生を享けても、貴方に匹敵する仕立屋はなかなか出現しないだろう。そこで貴方に貴方の賀詞とこの立派な花束に対し、私の衷心からの感謝を申し上げよう」。

長く、ますます長くパシャは肩から首を引き延ばして、得も言われぬ微笑で彼の顔は神々しくなり、どの筋肉も春の太陽の活気ある光線を受けた冬眠者のように目覚めた。

「いや、天よ、いや、エ　ー　ルサレムよ。千回お詫び申します。私はすっかり忘れていました」。

「構わないよ、トイブリヒ」とハーゲブーハーは語った、「率直に言うと、私は元来貴方を迎合的誑かしととてつもない家庭的手練手管故に残酷にぶちのめそうと思っていた。しかし私ハヨリ良イモノヲ見テ、ソレヲ良トスルガ、シカシダ[オヴィディウス『変身譚』Ⅶ、20]、つまり今回もまた不問だ、それだけで済ませておこう」。

パシャは再度、ある幽霊を見て、再び壁の方へ退いた。

「彼女はその気がないのだ、トイブリヒ」とハーゲブーハーは溜め息を吐いた。

「彼女はその気がないのですか」と仕立屋は甲高い最上声部で、叫んだ。

「どんな条件でも、駄目だ」。

パシャ・トイブリヒは腰を下ろして、両手で髪を梳いて、論理学の正教授のように、つまり、天上や地上のもので自分が知りたいと思うことすべてを扱い得るが如く、尋ねた。

「いかなる理由で」。

「フェルディナントだ」とハーゲブーハーは空ろに答えて、更にもっと空ろに付け加えた。「ツヴィックミュラーだ」。そしてパシャ・トイブリヒは、どんな条件でも彼の後を追って行けない深みへ落ちた。というのは、我々も再びその深みから、急ぎ上がって、元の自分に戻る能力も力も自らの中に見いださないであろうからである。勿論アフリカ人は若干尽力して、彼を必要な自覚的活動へ目覚めさせようとした。しかしそれが上手く行くと、彼は神経的に砕かれていたが、とても元気になって、自分の助言を明確、明瞭に述べて、自分の行動命令を差し当たり目と耳をしっかり開けて、受け入れた。六時にレオンハルト・ハーゲブーハーは彼の仲介によって、ヴィルトベルク少佐の玄関前に一台の馬車と共に止まった。世間には新たな一日の夜明けがあった。フォン・グリメルン殿の道の上にも、キント少尉の道の上にも、勿論またフーゴ・フォン・ブムスドルフ少尉の道の上にもあった。

濃い霧がこの時刻、フリーゲンハウゼンの山々の上とその間に横たわっていた。小道は今や、真夜中過ぎの最初の数時間の頃、空気が澄んで、雪が夜間を少しばかりもっと明るくしていた頃よりも、更に見いだしがたく、更に進行は危険なものになっていた。しかしフーゴ・フォン・ブムスドルフ少尉は的確な騎乗者であった。そして目下の状況下でほとんど更に有益であったことに、彼は自分の故郷一帯の隅々、その片隅を諳んじていた。というのはこの一帯を彼はその無邪気な少年時にも、それほど無邪気ではなかった青春時にも、十分悪さをしていたからである。彼は想定していたよりも三十分早くニッペンブルクに達した。そしてこの地を駆けて行ったが、残念ながらこの一帯と寝惚けている俗物どもと自分とを結び付けている千もの愉快な思い出に完全に浸って享受することは出来なかった。彼はこの町の優しい乙女達の窓の方をほとんど見上げず、今回は、シュネードラーお

じやおばを茶番に誘う欲求を感じず、とても凍えて、そして自分の義務のために、ほんの一時、黄金の孔雀亭前で止まって、一杯のマデリア・ワインを求めて、まだ深く微睡んでいるこの店の地下室から切妻まで震撼させることすら許されなかった。彼は立ち止まることなく、ブムスドルフを抜けて騎行し、単に右手のかつての税検査官ハーゲブーハー家と左手の庭壁越しに見える父の荘園の神聖な屋根に懐かしさの視線を投げかけるのみであった。

「この瞬間、私のことを夢見るという親切心を誰が有しているか知りたいものだ」と彼は呟いた。「いや、ローラント、我が哀れな相棒よ。そこに奴らは温かく包まって、寝ている。　ー　バーカ、老父が向こうの左手で鼾しながら言っていることは、全くどうでもよろしい。しかし、あの小さなリーナの方は、　ー　いや、進め、進め、ローラント。我らの委託を果たして、奴らの前に立ったら、いずれにせよ、目を見張ることだろう」。

彼は再度、ひどく喘いでいる馬の脇腹に拍車を当てて、更に駆けて行った。その間ずっとフォン・グリメルン殿にあらゆる罵声を浴びせながら、ヴィクトル・フェーライゼンとニコラ夫人の名前を呟いていた。彼はともかく呪いの最中であったので、時に他のことも呪って、やがて七時過ぎに、無事に、しかし怒りや、憂愁の念や、ある種の不安とで奇妙に動揺して、カッツェンミューレ着いて、嬉しいことに濃い霧の中を通じて、一つの明るい輝きを目にした。では、すでに誰かが家の中で起きている。使者の自分は、伝えるべきことを遠慮なく述べられよう。都合良く行けば、即刻馬の頭の向きを変えて、領邦首都へ帰ることが出来よう。そう都合良くは行かなかった。彼は、凝固し、身震いして、苦労して、鼻息の荒い身震いしている馬から大地に下りて、葉巻の残りを背後の森の中へ投げ付け、庭を通って、明かりの微光が漏れ出ている窓の方へよろめきながら歩いて行った。彼はまず部屋の中を覗いて見たかったが、しかし窓の氷花のため、それは出来なかった。かくて彼は入室を求めて、ノックをせざる得なかった。早速小部屋では誰かが、椅子を倒して、薄暗い人影が窓と明かりの間に現れた。

「友よ」と凍える使者は叫んで、身震いしながら付け加えた、「いやはや、お騒がせ申す」。

この瞬間、カッツェンミューレのドアが開いて、ヴァン・デル・モーク氏が戸口に現れた。それも手に拳銃を持っていて、このような用心に対して、自分の以前の生活故と易々と弁解した。

「どうぞ、お構いなく」と少尉は入りながら言った。「私の名前はブムスドルフと言いまして、レオンハルト・ハーゲブーハー殿、私のとても親しい友の依頼で、領邦首都から参りました」。

「お手前は、　ー　ヴァン・デル・モーク殿、つまり、ヴィクトル　ー　殿と拝察致します、　ー」。

「私はヴィクトル・フェーライゼン、あるいは別名、獣取扱商、コルネリウス・ヴァン・デル・モークです」ともう一方は語った。びっくりして不安げに凍えた若い兵士を見つめていた。「何があったのです。ハーゲブーハーが貴方を遣わしたのであれば、それで、　ー　私がここにいることと、私の名前を貴方はご存じで、　ー　それでは、どうぞお入りください。　ー　よろしければ、少しばかり小声でお願いします。私の母がまだ眠っております。どのようなお知らせであろうとも、貴殿、どうぞ静かに歩いてください」。

とても暑い部屋の中で、少尉はほとんど床にくずおれるところであったろう。ヴィクトル・フェーライゼンは彼を腋の下で掴んで、自分の母親の肘掛け椅子に座らせた。暖炉は輝いていて、トルコ製煙草の煙が濃い雲となって、部屋を満たしていた。明かりの横、テーブルの上、地図や本や勘定書の乱雑の中、コーヒー沸かしがあった。フーゴ・フォン・ブムスドルフ少尉は自分の生涯で、ヴァン・デル・モーク氏がこの時差し出してくれた一杯のコーヒーほどに立派なものを飲んだことはなかった。

この使者がその知らせを話し始めるまでには、かなりの時間を要した。しかしその知らせの最初の言葉を聞くと、ヴァン・デル・モーク氏の表情に一つの変化が現れ、これはトゥムルキー州の男にとってはきっと満足出来るものであったろう。ヴィクトル・フェーライゼンは、少尉に対しても他の者達に対するのと同様、頑固に気難しく対応していて、他の者達の手を自分に敵対するものと思っていた。そしてフーゴ少尉は、自分の胸の奥底で、こう述べていた。これは私には他人を寄せ付けない奴に思える。こんな奴と一冬ずっと一つ洞穴に閉じこもることになったら、始末に終えない。哀れなニコラにクラウディーネ夫人だ。

彼はそれから、意識が十分に回復すると、最も重要なことを話して、ニコラ・フォン・グリメルン夫人が自分のすぐ後にやって来るということを、自分の話しの先端に置いて、素早く話し続け、あたかも自分の聞き手の眼前からまた消えたいと思っているかのようであった。

しかし聞き手の目は、申したように、奇妙に輝いて来た。彼は素早く、ますます素早く息をし始めて、彼はチョッキのボタンを外し、そればかりでなく、心のボタンも外した。語り手を遮らずに、彼は聞き入って、ただ一度だけその間に呟いた。「いや、母上、母上」。

そしてフーゴ・フォン・ブムスドルフ氏は、誰も彼に期待していないほどに、客観的に話した。彼は、自分自身の見方や、感受性、感情、並びに自分の私生活へのすべてのかの大好きな脱線を今回すっかり脇に置いて、それどころかキント少尉についてまで語り、それでいて自分自身の軍人的経験や歓喜、苦悩の領域に逸脱しないでいた。

キント少尉か、　ほう、すでにキント少尉は立ち上がっているぞ。　ー　彼はフォン・グリメルン殿を追って旅し、フォン・ブムスドルフ少尉の見解では、この両紳士はいずれにせよどこかで遭遇するであろうというものであった。ヴィクトル・フォン・フェーライゼン少尉はあちこち歩き回って、煮え切らずに、テーブルに置いていた拳銃の方に目をやったり、ドアの方に視線を向けて、小声で時々言っていた。「生きていると良いこともある、生きていると良いこともある」。

するとドアが開いて、急いで、とても青白くクラウディーネ夫人が入って来て、素早く起き上がったフーゴに手を差し出し、息子を固く両腕に抱いた。

外の雪の中での哀れな、疲れたローラントのいななきや、鼻息が夫人を朝の眠りから起こしていた。自分の寝室の下の小部屋での聞き慣れぬ男達の声を耳にしていて、息子のことを激しく案じて、夫人は臥所から飛び起きて、階段を下りて来た。すでにドアの所で夫人は幾つかの言葉や名前を聞き止めて、幾分かは安堵して、しかしまた幾分かはそれだけ一層心揺さぶられていた。そして夫人は立ち止まって、両男性の一方からもう一方を眺めた、叫んだ。「私にも起きたことを何も隠さないでください。フーゴ、貴方は夜通し騎乗して来られて、レオンハルトが貴方を遣わしたのですか。　ー　貴方はニコラについて話

されました。私の息子と私に何の知らせなのです」。

「母上に何も隠しはしません」とヴィクトルは穏やかに語った。これは普段の彼の流儀では全くなかった。「母上は私ども皆に勝利なさいました。しかし母上はまたしても再びお覚悟の必要がありましょう。ニコラは母上の許へ参ります。私は出て行きます。しかし今回は平和裡に出て行きます。母上も引き留めようとはなさらないでしょう」。

クラウディーネ夫人も同様に、フーゴ・フォン・ブムスドルフ少尉を通じて、領邦首都で起きたこと、更に起きるであろうことすべてを知ることになった。夫人は話しの間、深く顔を覆って座っていた。しかしフーゴ殿が二回目終わると、夫人も湿った目をきらきらさせながら、ほとんど陽気に見上げて、言った。「そうね、行きなさい、我が息子。私は長いこと、苦痛の中、あなたの不在に耐えて来ました。しかし今日は心安らかにあなたとの別れに祝福を添えられます。あなたの前にただ一筋の道があります。　ー　行って、あなたの昔からの因縁の仲間によって、かの不幸な男性に不当な裁きが生じないよう見守りなさい。あなたはフリードリヒ・フォン・グリメルン夫人と一つ屋根の下に住めません。

ー　行きなさい、それがいい、親愛なる我が息子。神は正義の神として私どもに顕現されました。ヴィクトルよ、ヴィクトル、新たな血が私どもの道に流れないよう、新たな蛮行が、天に復讐を請わないよう、配慮し、尽力なさい。これからはいつでも、誰があなたの老いた母親の側にいて生活しているか、考えなさい。勇敢な男、強靱な男、そして温和な男になってください」。

「まことにその通りです」とヴァン・デル・モーク氏溜め息を吐いた。「そのまま結構なものです。私にも分かります。夜を通して苦労して騎乗して来られたことに対して、若い戦友殿にここで篤く感謝します。私は温かいねぐらから追い出されます。善良な、老いた、誇り高い母上。しかし私には、百年間眠っていたかのように思われます。生命あるものすべてに誓って、私は自分の目覚めを喜んでいます。私のこれまでの人生は、夜間の幽霊どもの踊りのようなもので、幽霊どもを追い払う言葉を失念していました。もう一人の者が遠方から呼びかけています。私は目覚めました。　ー　私は生きています。私はまた国道へ出て行かなければなりませんが、再び一日が自分のものとなります。この一日を有益に、野蛮人としてではなく、酩酊者や錯乱者としてでもなく、理性的な男、礼儀正しい仲間として過ごします」。

さて、クラウディーネ夫人はすでに数分前からフーゴ少尉の手を握って、少尉に話し始めた。あたかもこの時の重大さ、心細さなど存在しないかのようであった。母親らしく気遣って、夫人は少尉の状態を尋ね、自分[少尉]は完全にまた凍えが解けており、夜間の疲労も自分にとってどの方面でも最も好ましい結果をもたらすことになろうと聞いて、とても喜んでいた。夫人はそれどころか、哀れなローラントに対する衷心からの同情の言葉も述べて、ヴァン・デル・モーク氏同様、フォン・ブムスドルフ少尉もますます、クラウディーネ夫人はやはり「誇り高い魂」であると確信するに至った。

十時に少尉はフリーゲンハウゼンの雄牛亭の栗毛に乗って、ブムスドルフのハーゲブーハーの家に立ち寄り、これは自分の家に向かう以前のことで、まことに心地良い、しかしかなり不必要な会話をリーナ・ハーゲブーハー嬢と行った。

十一時にヴィクトル・フェーライゼンはカッツェンミューレを後にした。クラウディーネ夫人は静かに両目を閉ざして、椅子に座って、遠くへ消えて行く足音に耳を澄まして、

そして遠方から近付いて来る足音に耳を澄ましていた。夫人はすべての人のために、　ー
すべての人のために祈った。しかしこの辛抱の我らの聖母のために誰が祈ったか。

第十章

我々も座っていて、一瞬、遠ざかって行く足音と、近付いて来る足音に耳を澄ましている。というのは、今や我らの前には二本の道があって、これらの道を行くと今回我らの遍歴の目的は達成されるからである。我々はコルネリウス・ヴァン・デル・モーク氏を刻々と、宿駅から宿駅へと追いかけて、どのようにして彼がグリメルン男爵並びに捕囚部隊キント少尉に追い付き、それでもこの両人がいかにしていつでもすれ違い、そして彼が根本的に、そして自分の性格形成全体に相応しく、このすれ違いを心から喜んでいたことか、もっとも彼は上品にそのことを恥じて、表には出さなかったと語ることが出来よう。そして我々は二番目の小道を辿ることも出来よう。この小道では野蛮な言葉や、苛酷な行動、劣悪な厄災が、甲高く鮮烈に耳目に迫ることはなく、ただ小声で、ヴェールを掛けられた遠方から、我々に警告するのみである。つまり、我々が生きていて、我らが喜びとしたいと思っていて､我らの諸力や感受性を発揮したいと思う世界はどのようなものであるのか、と。この両方の準備をしながら、我々は二番目の道を選ぶことにしよう。というのは刑事裁判所で記録を取ることが、芸術であるとは思わないし、楽しいこととも、皆目我らの天職であるとも思わないからである。

丁度正午十二時に、レオンハルト・ハーゲブーハーはフォン・グリメルン夫人と共に、フリーゲンハウゼンの森に着いた。そこは人々が以前意識を失ったクラウディーネ夫人をカッツェンミューレへ運ぶことになったその地点であった。彼は森の中、深くヴェールを着けたニコラの同伴をして、二人の周りで響くものは何もなく、たまに、重みに耐えかねた何らかの小枝が振り落とす雪の音以外聞こえなかった。

覗いてみよう。春や夏、秋には上の一帯では河川の激しいざわめき、流れがあった。河川は水車の上へ素早い勢いで導かれ、人為的な機械や、様々な力で、人間の意志にそれぞれ従って、高みへ引き上げられ、下に落下させられた。河川はその生来の川床から人為的運河へと上に導かれ、あるいは地下に通され、汚辱と倦厭の中、その澄んで純な衣装を失わざるを得ない。人間と同様、河川も存在して余り楽しくなかった。それは永遠の苦悩、昼も夜も、喜びのない作業である。そこの下の深みへ、隔離された谷に、七人の小人の許、水車小屋の古い、壊れた、緑の苔に覆われた車輪の上で個々の水滴が響かせるものに、また外の山の麓での生活について、ブラバント[ベルギーの州]の市場や路地での雑踏や営みについて、美しいリヒルデ[ムゼーウス『ドイツ人の民話』、ブラバントを含め、白雪姫の一原典]について話されることに、耳を傾けてみよう。

静かに、静かに。車輪の水滴の微かな落下は、この白い森では沈黙してしまった。クラウディーネ夫人はすでに長いこともはやその響きで時を数えていない。それに誰が、クラウディーネ夫人の屋根の下、竈の許で、ブラバントの雑踏について、リヒルデ王妃の宮廷について尋ねる権利を有していよう。

辛抱[女性名詞]と誠実[女性名詞]とが、それらと共に勝利[男性名詞]が最も美しい姿となって、家の戸口に立っていて、近寄って来る苦悶に満ちた[Schmerzensmutter,悲しみの聖母風

形容詞]ニコラを迎えて、こう語っていた。「ようこそ、あなたは今日、あなたが最も甲高い笑い声を上げて、ここに飛び込んで来た、かの日々よりも更に千倍歓迎です。ようこそ私ども二人のシスターがあなたの疲れた魂を抱き締めたいと思っています。あなたがここの領地を越え出ない限り、あなたをこの地へ追いやった諸権力を何も恐れることはありません。ようこそ、私どもは辛抱と誠実と申しまして、人々は沢山私どもについて噂しています。でも私どものことを理解している者はわずかです。でも私どもがその住まいを見張っているこの老いた女性同様に強い方には、私どもの同志[勝利]が花輪を与えます。この同志がクラウディーネ夫人に与えたものです」。

カッツェンミューレは教会の鐘の音を聞くことはなかった。しかし正午十二時であった。フリーゲンハウゼンでまさに百姓女達が湯気の出るスープ鉢をテーブルに置いたとき、月山脈からの男はニコラ夫人と一緒に水車小屋に着いた。

クラウディーネ夫人は叫び声を上げて、飛び上がらなかった。彼女はただ入って来る者達に両腕を差し出して、叫んだ。

「我が子よ、我が愛しい、愛しい娘。ようこそ、お帰りなさい。あなたをしっかり抱き締めて、これから決して離しません。ご覧なさい。行方不明の者達、死者達も戻って来るのです。百もの鎖に繋がれて、深甚の隷属状態にあった者達が、身を解き放てるのです。あるいは邪悪な主人達本人から、笑い声を上げて、自由の中へ突き出されるのです。ニコラ、我が娘。これからあなたの魂に注文を付けられるのは、私を措いてありません。　ー

聞いていますか。誰も、誰も出来ません。近くの者も、遠くの者も、過去の人も、未来の人も、誰一人として出来ません。広大な全世界の中、誰一人出来ません。ある者達は今やあなたに対する一切の権利を諦めました。また別な者達をあなたは自ら撥ね付けなければなりません。これからは私一人だけを愛する必要があります。あなたはただ私の娘、私の子であればいいのです。だってそうでしょう。この最も苦い痛みの中の最も内奥にある素敵な甘美なことは、そうでなければ、あなたは私の許に来ることは許されなかったということですから。あなたの心は麻痺しています。でもあなた自身があなたの自由を信ずるであろう時は、遠いものでありません。静かに辛抱なさい。数年が一日のように過ぎ去ります。これは古くからの言葉です。[千年といえども御目には昨日が今日へと移る夜の一時にすぎません：詩編90,4]でも必ずしも人間は、この内容の全く良きこと、慰めとなることを把握出来ないのです」。

最初ニコラ・フォン・グリメルンが聞き取ったのは、単にクラウディーネ夫人の声の響きだけであった。言葉の意味を彼女は、目下麻痺していて、まだ把握出来なかった。しかしこの母親が息子の帰郷について、もっと明瞭に、もっと定かに語ることが許され、そうする必要がある時、その心のどのような微かな震えや揺れに対しても反響が見いだされる時は、遠い日のことではなかった。

自分の状況の完全な了解が自分にもたらされた時、これはニコラにとってなおも恐ろしい時間であった。その露顕は黄昏時に起きた。森の霧や影が再び密にカッツェンミューレに蝟集して来て、肘掛け椅子に座っていたクラウディーネ夫人がニコラ夫人の頭をその膝に抱いていた時であった。最初の印象が圧倒的に思われて、その震撼は、フォン・ベッツェンドルフ氏の舞踏会場でのかの恐ろしい場面よりも更に大きなものであった。次第に目は据わって、凝固して、ニコラ・フォン・グリメルンは起き上がった。甲高い叫び声を一

つ発して、彼女は、庇護している誠実な老女性の腕を振り解いて、真っ直ぐに立ち、野蛮に笑って、叫んだ。「母上、私に隠しているのは、良くありません。これも偽りのお芝居です。私をこちらへ連れて来て、何と残酷なんでしょう。ここにももはや私のための部屋はないと私に知らせるためなんでしょう。そもそも私がこの世で住める部屋はなく、すべては過去の話しで、各人が自分の報いを受け、私は私の報いを受けたと知らせるためなんでしょう」。

彼女は素早い身振りでショールを肩に巻いて、ドアの方へ急いだ。あたかもクラウディーネ夫人の寵の許、水車小屋への滞在は、これ以上一瞬も許されず、あたかも即刻、夜の中、森へ、墓場へ、どこへであろうと、最終運命の許へ突進して行かなければならないかのようであった。

今一度彼女は大きな声で呻いた。半ば荒々しい痛みを覚え、半ば荒々しい怒りに駆られていた。しかしこの怒りはただ自分自身にのみ向けられていて、そして自分の感情のこうした分離分割によって、今やこれが狂気に対する唯一の救いとなり、再度目的もなく逃走することから引き留められた。この痛みはクラウディーネ夫人のものでもあった。この不幸な女性に対する老夫人の力は、この痛みの中に隠されていた。小声で、請うように、泣きながら、クラウディーネ夫人は、彼女の名前を呼んだ。すると彼女はドアの取っ手から手を放し、一瞬立ち止まって、こめかみに両手を当てて、それから駆け戻って来て、再度我らの辛抱の聖母の前で跪き、再び彼女の膝に顔を隠し、彼[息子]がどのように帰郷して、その彼が全体何を経験したのか、そして今や彼がどのように喜んで、より良い人間となって出て行き、自分の母親の心の席を、万事は最良のものへ転ずるであろう楽しげに確信して、空けて行ったか、その次第を最後まで語らせた。

母親は何も黙していなかった。夫人は息子のありのままを描写した。息子の微細な点まで、いかにこの狂って、荒涼たる人生が息子を形成して行ったか、躊躇わず表現した。この息子についてこれほど公平な判断を下すことは、レオンハルト・ハーゲブーハーも、友であれ敵であれ、出来ないことであったろう。彼女は息子のものではない輝きをすべて奪って語り、息子にいつも欠けている事柄、その上、失った事柄について黙っていなかった。しかし息子がその山師的途上で獲得した事柄についても黙っていなかった。彼女はニコラがどのようにしたら息子を助けられるか、息子を育てられるか、示した。彼女は、まさにこの故郷を喪失した女性が母親の庇護の下、母親の心の許に滞在することが、かくも長いこと故郷喪失者となっていた息子の平和にとって、最大の祝福であり、最も大事な保証となっている旨、示した。最後に彼女はキント少尉について語り、この名前が呼ばれると、ニコラはより一層夫人にすり寄った。

ニコラ・フォン・グリメルンは今やキント少尉の話しも同様に知ることになった。カッツェンミューレまでの困難な、涙に暮れる途上、ハーゲブーハーは慎重に、全く徐々にこの話しについて知らせた。しかしヴァン・デル・モーク氏の話しは全くしないでいた。今や彼女の眼前にすべての面で深淵が広がっているのが分かった。この間を彼女は歩き回っていたのである。そして今や慄然として、彼女は幽霊的な両腕や肉のない両手の蝟集を目にすることになった。これらが四方八方の深みから差し出されて、彼女を掴もうとしていた。彼女は一つの幽霊譚に襲われて、彼女はその後半生、この恐怖から二度と完全には脱却出来なくなった。この時から彼女はある部屋を後にする時や、あるドアを背後で閉める

時に、自分の本性の最深部まである感情を覚えずにはおれなかった、つまりこの空の部屋、たった今去った部屋にある不気味な何ものかが起き上がって、にやりと荒涼たる、死人のような、嫌な笑いを浮かべて、彼女の方を凝視して、しゅっとこう囁くという感情である。「自分はただ一人っきりだと思うのか。我らがいるのだ。我らがいて、そなたを見つめ、そなたに耳を傾け、そなたに注目して、そなたのことを笑っているのだ。反抗しても無駄だ。恥じても駄目。我らが見て、聞いている。我らはそなたを弄んでいる。我らはそなたの敵で、我らが睨むとそなたを殺せると分かっているのだ」と。　ー　クラウディーネ夫人の戸口と竈の精霊達は、こうした敵に対して厳しく対峙していた。　ー

「私は残りましょう。でも、私にはもはや意志が残されていません」とニコラは言った、「私は彼を再び追い出して、彼の席に私が座りました。母上、あなたは、それでいいと仰有います。そのことを信ずるよう努めましょう。でも、もはやこのことについて考えられません」。

「それでいいのです」と老女は語って、それ以上何も言えなかった。というのはその後、ニコラ・フォン・グリメルンは、勝者も敗者も知っているかの状態に陥ったからである、つまり患者に対しては、夏であれば蠅を追い払ってやるか、冬であれば、患者が寝てしまったままにしておくか、あるいはせいぜい枕を直すか、それ以上更に何もしてやれない状態に陥ったのである。

ニコラが陥ったのは病気ではなく、単に果てしもない疲労や嗜眠欲であって、こうした時には、万事が人間にとってどうでも良くなるもので、ドアの軋む音や、椅子やテーブルを後に退ける音、路地の騒音ばかりでなく、最良の友の訪問といえども、無関心になる。しかしこれらのこと一切が、冬の森の中の水車小屋、この魔法にかかった水車小屋では全く生じなかった。カラスや野生の鵞鳥の呼び声、これらが木の梢の上を飛んでも、邪魔にはならなかった。それどころか、自然の偉大な真実の領国からの慰めの声のように響いて来て、風は小声であれ、大声であれ、同じ作用をした。

以前ニコラ夫人の周りに群れていた広大な様々な人模様の圏から今やカッツェンミューレに出入り出来る唯一の人間、レオンハルト・ハーゲブーハーも邪魔にはならなかった。彼は爪先立って来て、爪先立って去り、ほとんど言わなかった。彼はしばしば水車小屋の片隅や窓辺に何時間も一冊の本を手に座っていて、読まずに、森の中を覗いていた。彼は何を考えているのか、尋ねられたら、例えばシュネードラーおばのことか、それとも利口な仕立屋フェーリクス・トイブリヒのことか、トゥムルキー州のアブ・テルファンのクラ・グラ夫人のことか、それともジュネーヴ湖畔のモントルーのフェルディナント・ツヴィックミュラー氏のことかと尋ねられたら、きっとしばしばその返事に窮したままであったことであろう。しかし彼はどの時間も考えざるを得ずに、それに一時間ごとに空ろな落ち着かない気持ちで待ち受けていることがあった。これはコルネリウス・ヴァン・デル・モーク氏からの知らせであった。氏は彼に口頭でも文書でも約束していなかったけれども、いつかは彼から届くに違いなかった。今日か明日、朝食の時か、就寝の時、明るい輝く正午か、あるいは真夜中、つまり精霊が許可を得て、地上に出現する時間である。この後者の時が、ひょっとしたら最も適した時と呼ばれ得るかもしれない。

第十一章

どこにでもカッツェンミューレは存在し得て、存在しており、ニッペンブルクもその周囲で存在感があって、一方がなければ、他方も想定し得ないというのは、ドイツの国の珍しい点ではなかろうか。トゥムルキー州からの男、月山脈出身の男は、シュネードラーおじやおばなしには出現し得ないというのは、珍しい点ではなかろうか。我々がどこを見ても、常にどこでもゲルマンの精霊はその力の三分の一を俗物界から引き出していて、この精霊は然るべき時に、また自分が育って来た大地に触れることに成功しない限り、この精霊が格闘する老いた巨人[アンタイオス、大地ガイアの子、大地に触れることが必要]、つまり思考によって、空中に投げ飛ばされて、窒息死してしまうことだろう。他の民族には、どのように呼ばれていようとも、幸運児[日曜日の子]が見られる。シェークスピア、バイロン[イギリス]、ダンテ、アリオスト、タッソー[イタリア]、ラブレー、コルネイユ、モリエール[フランス]である。彼らは種蒔きをしないし、糸紡ぎをしない。それでいて、どんなに輝かしいソロモンよりも立派な晴着を着ている。しかしヴォーゲーゼン山脈[フランス東部]とヴァイクセル川[ヴィスワ川、ポーランド]までの間の国は、永遠の平日の国であって、常に耕されたばかりの農地の臭いがして、豊かな干し草から上方に昇る炎のきらめきはすべて大地の匂いを有しており、この匂いは神々が我々に対し最終的に祝福されるであろうものである。我々を諸時代を通じて先導する高貴な男達は、皆種蒔きをし、糸紡ぎをする。彼らは皆、ニッペンブルク出身であり、その名もルターや、ゲーテ、ジャン・パウルと言い、どんな名であっても構わない。彼らは自分達の出自を少しも恥じないし、工房、書斎、会議室に対し快い理解を示している。我らのすべての精神的英雄達の中で、ひょっとしたらニッペンブルクやブムスドルフとは最も折り合いが悪いかもしれないフリードリヒ・フォン・シラーでさえ、時々、以前の官房や一族の親戚から挨拶を受け、素朴な「あのな、知っとろうが」の言葉と共に古来の自然な打ち解けた関係に入りたいという衷心からの欲求を感じている。

ニッペンブルクとブムスドルフ万歳。ビールジョッキにコーヒーポット、編み物靴下、それにインク壺。我々が立脚していて、我々が埋葬されることになる大地万歳。フォン・ブムスドルフ殿万歳。シュネードラーおじやおば万歳。ハーゲブーハーの伯父、市議会議員万歳。従姉妹クレメンティーネ万歳。とりわけ従兄弟ヴァッサートレーター万歳。

威勢の良いフーゴ・フォン・ブムスドルフ少尉はカッツェンミューレへの夜間の騎行の後、自分の家のラレス[家の神]やペナテス[竈の神]の下、溢れる心を堰き止め、秘密を隠すことをしなかった。自分の突然の出現を是非とも正当化する必要があって、実際とても見事な流儀で披露した。彼は迂遠な話しから始め、いつものようにしばしば脱線した。しかしその代わり重要なことは何も省かず、つまり普通、「悪臭のする田舎の沼地を大時化にするようなこと」を何も省かなかった。

そして田舎は大時化となった。このようなことはアフリカの捕囚からレオンハルト・ハーゲブーハーが帰還して以来、体験したことがないものであって、この帰還よりも、一般的意味、重要性においてはるかに上回るとまでは言えなくても、かの出来事と同列に置けるものであった。今回もまたブムスドルフ荘園の動揺は、ハーゲブーハー家を越えて、一層大きな揺れとなって続き、風評の翼に乗ってニッペンブルクに達し、至る所で反響を見いだした。普段は単に火災警報にのみその十分な反応が見られる反響であった。その後従

兄弟ヴァッサートレーターは自らをただ一人で国王ポルセンナの全軍に対しスブリキウス橋を防御した昔のローマ人ホラティウス・コクレスに比するという全く古典的で適切な権利を有することになった。かの実直な英雄さながら、彼は単独でフリーゲンハウゼンの街道を押し寄せる好奇なニッペンブルク人から守った。従姉妹クレメンティーネ・マウザーは、勿論やり方は異なるが、かの有名な乙女クロエリアと比較することが許されたかもしれない。彼女はテヴェレ川を泳いで渡ったのではないが、十人の中年の乙女達を連れて、従兄弟ヴァッサートレーターを出し抜いて、実際フリーゲンハウゼンの赤い雄牛亭に達したのであったが、しかし残念ながらレオンハルト・ハーゲブーハーに止められて、フォン・グリメルン男爵夫人は目下、訪問を受ける状態ではないと知らされて、　ー　退却させられたのであった。

従兄弟ヴァッサートレーターはこの時期もまた、レオンハルトがカッツェンミューレの外部で見いだせる唯一の慰めとなる支持者であって、実際またただ彼のみを相手にアフリカ人は最近の出来事とその意味について本当に話し合えたのであり、感嘆符の洪水で朦朧とさせられたり、質問の洪水で降参させられたりすることもなかった。

従兄弟ヴァッサートレーターは、まだ老ゲーテの後ろ姿を見た男として、簡潔に言った。

「我が息子よ。そなたは自分の件を立派に片付けた。ちなみにそなたはこれからここにしっかり座っていることだ。私が周知のように公の足蹴によって務所から解放された後、居座ったようにな。それが私の意見だ。構うことない。彼だってヴァイマルにくすぶっていなければならなかったのだ。しかし世間が彼にすり寄って来た。いやさ、ニッペンブルクも言い難い利点がある。そなたは、我が子よ、相変わらずニッペンブルクの議会書記になればいいのだ。そなたの野心がそれでは満足できないのであれば、我々はそなたに市書記官の肩書を用意しよう。それでヒナゲシやダリアの栽培をして、そなたの妹をしっかりと結婚させ、次第に偉く、威厳を整えて行けばいい。従兄弟や姪達の仲間内や黄金の孔雀亭でもそのようにしていけば、孔雀亭ではそなたの父親の椅子が両腕を広げてそなたを待っていよう。思うに、悪魔のルシフェルでさえ、片目をつぶられて、向こうの天上で類似の地位や生活が呈示されたら、様々な経験をした後、一瞬も躊躇うことはないだろう」。

月山脈の男が、この灰色髪の愉快な底意地悪の申し出に何と答えたか、歴史は答えていない。しかし彼が本来の意見、簡潔であるが、しかし深く哲学的な根本的思索を探り出すことが出来て、この思索を慎重に従兄弟の奥の小部屋からブムスドルフまでのブムスドルフ・ポプラ街道上で重ねたことは確かである。彼はこうしたより快適で、落ち着いた未来という優しい慰謝をとても必要としていた。　ー　というのは故税検査官の家で見られる静寂にもかかわらず、そこは差し当たり、かなり落ち着かない滞在地であったからである。

母親の老女性は、この老いて加算したり減算したりする気難しい夫の喪失を深く悼んでいて、四十年以上の夫婦生活は難儀なものであったが、それでも今は一層夫の不在が辛く感じられて、生前なれば見いだしても大いに不快に感じていたはずなのに、至る隅々に夫を求めていた。消えてしまった声には、以前は何かうんざりするほどガミガミした声、癇に障る声であっても、何か悲しいものがある。心の中では明らかに恐れていたような足音でさえ、とても切望して待つことがあるし、この足音はもはや隣室でも、外の通路でも聞き取ることはないと確信すれば、ただ重苦しい不安なその逆の悲しい心理が働いたりする。

この老婆には、自分が行き、立っているところに「お父さん」が欠けていた。息子は老婆にとって、この身罷った夫の代替とはなり得なかった。いや、シュネードラーおばも、クレメンティーネ従姉妹も、おじ達のザッカーマンやハーゲブーハーも、彼女にとっては今や黙して、瞑想的で、放心したレオンハルトよりもはるかにより大きな慰謝をもたらす、はるかにより好ましい交際相手であった。先の者達とは座って、過去のことについて、然るべく話しをすることが出来た。いや、世界はそもそも一気に変貌してしまった。そして死神がすべてを入れ替えてしまった。老婆は老夫が毎朝気難しく見張りをしている限り、首をすくめて、従っている必要があった。今や老婆は、すでに話したように、落ち着かず徘徊し、ただ話すことは、自分にはもはや夫の墓の隣りにしかより良い、より好ましい場所はなく、自分もそちらに運ばれて、休むことになったら、どんなに楽なことか、ということばかりであった。だって、自分に喜びをもたらしてくれたすべてがこの世から消えてしまったのであり、ただ何ごとも自分のために尽くしてくれた夫が、二度と戻らぬ人となって去ってしまったのだから、と。

こっそりとした足取りで、アフリカ人は母親の後を付いて行き、母親の千もの涙もろい、文句の多い気まぐれに、労せずに付き合っていた。しかし幾日かの暗く、荒れた天候の日々、彼は青白い、消沈して、内気な妹を家から、向こうの荘園の友人女性達の許へ送り出した。そしてフーゴ少尉殿は、自分の休暇をかなりの期間引き延ばしていて、このことでとても彼に感謝していた。

トゥムルキー州からの男がカッツェンミューレの窓辺で抱いていた物思いと、自分の家で老母を相手に抱いていた物思いは、それぞれ別なものであった。その間に色々な手紙が届いた。パシャ・トイブリヒは憧れのこもった不可解な手紙を送り、教授は憂愁と憤怒のこもった所々同様に不可解な手紙を送って来た。しかし一つのことが両文通者の心情の吐露から明瞭に浮かび上がって来た。つまり、最近の出来事に対する興奮は、相変わらず領邦首都で収まっていないということである。そして二人の立派な人物の私的興奮に関しても、これも全く沈静していなかった。

レオンハルトは、出来るだけ上手に返事をした。パシャに対してはすぐに楽しく再会出来よう慰め、差し当たり領邦首都に自分が残していたものを完全に任せると記した。愛想の良いフェルディナント・ツヴィックミュラー氏の陽気な登場（hicceitasと彼は名付けていた）をも知らせている教授に対しては、このフェルディナントは速やかに出発するであろうと慰めて、そして彼に、つまり教授に、ブムスドルフはドイツ国の多くの他の地同様に、その発生をローマ人に負うているという発見を餌として差し出し、娘の結婚後、夏休みに直接この件の正しさを確認するため、この事柄を証明している石[里程標]を採取するよう促し招待した。

こうしたこと一切は何を意味しているか。干潟で、あるいは浜辺の岩の上で大潮に襲われ、自分の周りに大波が押し寄せるのを見ながら、それでもこの情け容赦ない大波がチョッキのポケットに達する前に、火の着いたパイプを持ったまま、時計を引き上げることの出来る人々が存在したのである。こういうことが出来る人々は決してごく軟弱な性格の者どもなんかではなかった。今一度危機から救出される蓋然性は、ひょっとしたらこのようなとき、まるで絶望した両手揉みや、灰色の致命的津波を呆然と凝視することしか出来ない者達皆よりも高いかもしれないのである。ヴァン・デル・モーク氏は日々経過するうち

に手紙を寄越すに違いない。出来るだけ静かに郵便配達人のノックを待つこと、そして必要以上に彼に会うべく出掛けないことが、最も簡単にして最も自然なことであろう。二月当初の頃、果たしてヴァン・デル・モーク氏の手紙が届いた。次のような文面である。

サウサンプトンにて、ボルシア号の甲板で

親愛なるハーゲブーハー、

私はタフな性質だ。そして環境の許す限り、快適に感じている。しかし環境がひどいとなると、一体貴方や、私が呼びかける勇気を持てない方々が、この書状に対しいかなる顔をなさるか、想像することになると、お手上げである。我々両人がダルフール王国のアブ・テルファンで出会って、私が幸い、貴方をそのいずれにせよ格別快適とは言えない状況から解放すべく微力を用立てることが出来たとき、運命は更にいかなる負荷を我々両人の連結された肩に置く定めか、我々は皆目予感できなかったものだ。私は自分の中に巣くっている野獣の喉首をまたも両手で締め上げている。しかし私が述べるべき事柄の中で、この野獣は息抜きをしなければ、それは一つの奇蹟であろう。それで貴方が水車小屋へ向かわれるとき、悲しげな二人、哀れな二人の女性に、この汚れて血まみれの襤褸切れを綺麗なハンカチに包んで渡されたい。

パリでは私は探しているものを見いだせなかった。これは元来好ましいことであった。昔、まことに屈託なく過ごしたところだったから。この汚辱の世間では、このような無垢の緑の地点を出来るだけ清浄に保つよう努める必要があろう。よろしい。私は何でも、人間や動物を狩猟して、そう簡単には足跡を見失わない。その件が、　ー　人生やその皮や羽毛が大事なものである場合、見失わない。私はイギリス人の一人の昔馴染みの男と出会った。彼は私同様堅実な男となっていて、実直にその妻によって養われている。このレディーはとても有益な、実入りの良い施設を設立している。住所：分娩別荘、シャトウーブリアン通り、14（標示なし）。そしてこの旦那はこの大通りを散歩していて、時に暇な折、友のために付き合ってくれる。我々両人とも気まぐれな巻狩をしていて、港に遅刻してしまい、キント少尉と一緒に同じ郵便船でイギリスまで渡航することが出来なかった。ジューリア・ブラウン嬢が先延ばし出来ない件で丁度ランカシャーから到着していて、シャトウーブリアン通りの我が同伴者の細君に至急推薦されていた。ロビンソン氏は当然私の相手をする時間はなくなって、彼はジューリア嬢を英国まで同伴して送ることになり、そうした。私は嵐のような渡航を楽しみ、無事ドーバー[イギリス]に着いて、やがてピカデリーの私の窓の下に人波の奔流が流れているのが見え、そのざわめきを耳にすることになった。この奔流から周知の二滴が掴まえられる筈なのだ。

我が友よ、私が若干嫌々ながら、自分の任務に就いたことは、信じて貰えよう。私は自分の運命が再び有り得る限り不運なものとなるであろうことを、すでに私がカッツェンミューレと貴方の自信に満ちた表情とを後にした瞬間に明瞭に感じていた。貴方はすでに私の報告すべきことを予感されていよう。　ー　短期の狩猟であった。我が戦友は、とても敏捷で、その追跡に激しており、その結末に立ち会うことすら出来なかった。それで私はまたしても懸命な立志にもかかわらず、鼻の差でもう一人の者の固い意志に遅れを取ったのであろう。それで、我が人生に誓って、私は今や帰郷して、自分の旅を自慢出来ないことが残念なのではなくて、むしろかくも強力で名誉正しい人生が、かくも劣等劣悪な野獣

に対して消費されざるを得なかったことが残念でならない。我が戦友よ、いや、我が戦友。我がバニョ[奴隷の牢獄]からの実直で、親愛なる伴侶よ。バーカ、思うに、彼の方が私よりもっと恵まれていよう。

ロンドンの警察官達は親切な人々である。私はすでに昔の日々、別の案件のことで、警察の知遇を得るという光栄に浴していた。しかしすでにその件は当時私にとって深刻なものではなく、今日ではもはや気にならないものである。私は数日、下水道金属漁りのように、徒手空拳で探して、何も見つけられずにいた後、時間が迫り、不穏な気持ちが刻々と募っていたので、ボー通りの中央警察署で自分の名刺を差し出して、そこの紳士的警察官に助言と協力を請うことしか思い付かなかった。そこでそのようにして、好意的傾聴と前向きの対応を得た。私には一人の落ち着いた寡黙な殿方が紹介され、用立てられた。警部カッドラーで、これからもかなりの間二人っきりで連れ立って散歩したくなるであろう人物であった。彼は慎重に手袋を嵌め、雨傘を腋に抱え、一緒に路地へ入った。我々は二人の仲の良い友達、生粋のロンドン子で、ロンドン塔のライオン見物に出掛けるために休日利用を決めた者達のようであった。我々は歩き続け、昼から夜へと過ごし、夜から新しい一日へと続いた。徒歩であったり、オムニバスであったり、辻馬車であったりした。消えては、またよりはっきりと浮かび上がり、また消える足跡を追った、　ー　円を描いたり、ジグザグになったりであった。我々は握手して別れ、翌朝また約束していた場所で再会した。ベルグレイヴィアからセント・ジャイルズまで、ピムリコからイズリントンまで。我々は会議を開き、ウエストミンスター、メリルボーン、サザーク、テムズ通りの警察署でメモを取った。何も成果はない、何もない。この件は一人の素人にとっては退屈なものになったに違いない。今回素人とは言えない私は辛抱した。そしてこの世で他に心配事はなさそうに見えるカッドラー氏も同様であった。我々は通りの角やコーヒー店で待機し、我々はとうとう街娼達の間、ヘイマーケットで一人の人影を見つけた。一人の紳士がそこで辻馬車に乗った。私は警部に一突きした。我々はフリードリヒ・フォン・グリメルン氏を逮捕する権限を持たない。誰も彼に対して告訴していないからである。それに私はそのために海峡を渡ったのではない。しかし彼のアドレスのためには、　ー　王国を差し出すに値する。[『リチャード三世』V、4:馬をくれ！馬を！代わりにこの國をやるぞ、馬をくれ！福田恒存訳]。我々は別の馬車に飛び乗って御者に指示した。しかしエリン[御者アイルランド人]は勿論またしても四分の三正体がなく、つまり完全に酩酊していて、オレンジの売店に突っ込み、再度がっかりして家に帰り、お茶を飲むことになった。

友のハーゲブーハーよ、これ以上話しを引き延ばす必要があろうか。所は、下テムズ通り、三流ホテルの四階となった。　ー　時は、真夜中。　ー　天候、雨模様で風が強い。そのホテルは興奮に包まれた。殺人、と闇の中、叫び声が生じた。警察は部屋番号26の内部から施錠されたドアを破った。十一時に、25号室の住人トマス・ジブレッツ氏は隣室の紳士の帰宅を耳にしたが、しかし連れがあって、そして彼の、　ー　ジブレッツ氏の注意をしばらく激しい言葉のやり取りで引いた。このやり取りを、彼は、その証言によると、最初エコノミスト新聞を読みながら、快適に聞いていた。彼、ジブレッツ氏は苦労の多い、うんざりする日常業務を果たしていて、彼の意見では、　ー　他の人々も同じように色々面白くない仕事をしなければならないのだと思って、その時は心地良く感じていた。しかしそれから、　ー　彼の調書によれば、　ー　この件はようやく若干異常を呈して、

壁の背後で突然、　ー　ほとんど同時に、　ー　二発の銃声がして、これに続いて、重たい二つの体の落下の音と、その他の由々しい音が聞こえて来たそうである。

そのホテル中、人々が集まり、二時頃警部カッドラーがピカデリーの私自身の住まいの呼び鈴を引いた。大事な友よ、私が　ー　下テムズ通りで何を見いだしたか、想像して欲しいものだ。我々両人とも、人間どもの一切合財の戦闘や決闘を目にして来て、時々血溜まりの中に立ちながらも、さほど事柄の倫理を気にせずにいるが、しかし我々は常にある種の絵画的なものに対するむずむずする感覚を有している。果たしてこの夜のフォン・グリメルン氏の部屋は絵画的なものであった。

両人とも、路地から戻って来て、自分達の案件を、キント少尉がドアを施錠して、その鍵を窓から外に投げ飛ばした後、穏やかに話していた。とても穏やかなもので、お互いの言葉のやり取りは、申したように、ただ隣室の住民の心地良さを高めるだけのものであった。それから両人はテーブル越しに一つの了解に達し、両者の一切の不和を完全に調停する発砲に至った。二人はテーブルの両側で発見された。手に発砲されたピストルを持っていた。我が友のフリードリヒ・フォン・グリメルン閣下は死んで発見された。ヴェネツィアの背教者アルプのように[バイロン『コリントの包囲』1815参照]心臓を射抜かれていた。我が友にして戦友、ヴァレンブルクの捕囚部隊の先の少尉、フリードリヒ・キントは、必ずしも見事に射抜かれてはいなかったが、しかし同様に、あらゆる憂き世、現世の悩みから解放されていた。彼はドアが破られてから三十分間存命であって、まことに穏やかに冷静、悠然としていた。フォン・グリメルン殿のベッドで彼は静かに身罷った。五十年前からドイツ同盟軍の唯一本物の兵士であって、彼をその一員に数えるのは、同盟軍の誇りである。私が同伴者と共に到着した時、その死体の側に一人の市の宣教師がいた。この男は、多くの他の人間の民を相手にする職業柄、奇妙な事件に遭遇する機会が多い。ベスナルグリーンやスピタルフィールズ地区での臨終者の朽ちた麦藁の側で跪く仕事の者は、多分死神の神秘について一言述べることが許されよう。私は、少し落ち着いてから、彼に対し目下の事件について、手短な説明をした。彼はこの事件を　ー　悲劇的に爽快なものと呼んだ。年月が経ってから、私はこの事件をむしろ悲劇的と呼ぶべきか、それともむしろ爽快なものと呼ぶべきか決定することにしよう。目下のところ、私はまだ血の臭いの影響を味覚や嗅覚に少しばかり強烈に受けて、草臥れており、私の意見を差し控えたい。

若干のより細々した事務処理はドイツとイギリスの役所が文書で行うことであろう。私がこの点で更に付言して置くことは、死体の丁寧な埋葬のために配慮がなされたということであり、私は死体が一緒にすぐ隣接して埋葬されないようにした。そうすることで私は両死者の心情と嗜好にかなり的確に対処したと信じている。

そこで我々は今や然るべく悲歌的感傷的気分になれるわけである。白い波が我が船腹に音立てて当たっている。書きながら私の物思いは、苛立った海を越えて、ドイツの岸辺へと続いて行く。私はいかなる時にこの書状が貴方の家に届けられ、貴方がこれを受け取った後、何を始めるであろうか、極めて様々に思い描いている。私は少しばかり熱とか、その他これに類するものを帯びている。アラーにかけて、一つの阿片の酩酊、一頭のバーバリ馬、ロシア人的方陣、それに預言者の第七の天への展望であって、これら四つの事象から、この世の創造以来、人類にとって、　ー　理性的で結構な諸契機が出現したものである。アラーにかけて、私は、どこかの古いにせよ、新しいにせよ、トルコの戦場で、埋葬

され、休息したい気持ちである。

水車小屋では人々は何と言うことだろう。人々は何をすることだろう。いや、ハーゲブーハーよ、私は相変わらず、この狂った紙片を引き裂いて、自ら参上して、自ら窓の中を覗いて、自らドアに耳を当てたいという欲望を荒々しく感ずる。これは、出来ない。思うに、私自身が下テムズ通りでの血まみれの勝負に手を出していて、私が行ったと言えるのであれば、顔を出せることであろう。

私はこの考えを、少年がその独楽を回すように、鞭打って回転させている。我が哀れな娘よ、彼女は、貴方がドアの中へ入って、彼は亡くなったと話したら、何というだろうか。

ー

畜生、私はさっぱり知恵が浮かばない。しかし貴方ならば、ハーゲブーハーよ、異邦人の貴方ならば、この寝惚けた森の中で、このことを明瞭に語ってくれることが出来ようか。つまり私の心と喉とを干涸らびさせて、私の脳をかき乱して泡としてくれる事柄についてだ。　ー　それがいいことだろう。　ー　ご機嫌よう、私の母によろしく。

ヴィクトル・フェーライゼン

追伸。私は一人の女となって、それで追伸を書く権利を得た。午後一時にボルシア号はニューヨークへ向かった。昨日私はサウサンプトンで下船しなかった。私はグラント将軍[1865年リッチモンドの戦いで北軍を指揮、南北戦争終結]の許へ向かう途上にある。この殿方は神経衰弱、頭への血の充血、等々のものに対し一切の立派な治療法を有しており、こうしたものを廉価に片付けてくれるという噂である。

コルネリウス・ヴァン・デル・モーク

レオンハルト・ハーゲブーハーは一日と一晩、この手紙の内容を考量した。彼の天秤の一方の皿は深く下がり、一方は高く、すぐに高く上がった。彼は、自分が翌朝カッツェンミューレの女性達の許に運んだそのより軽い部分に、大変、大変手こずった。

第十二章

「これはすさまじい、私の予想していなかったものだ」とライエンシュラーガー哲学教授にして博士は喘いで、汗の滴る額をハンカチで拭って、押し上げられた眼鏡の下から、国道をずっと眺めて言った。「この道は歩み続けるにつれ、一層長くなる。埃は極めて厭わしい。太陽はこの雨傘を広げていても耐え難い。私の足の状態は言うまでもない。トイブリヒよ、どんな試みも、一度可能と判断したからには、最後までやり遂げるというのが我が信条でなければ、ニッペンブルクまで徹頭徹尾徒歩で向かうという我らの計画を、現時点ではもはや不可能と宣言して、ストア派のすべての教義を鼻であしらいたい気分だ。私の言うことが分かるか」。

「大体は分かりますが、しかし良くは分かりません」とパシャ・トイブリヒは、いつものように憂鬱そうに頭を振りながら、碩学の男を見つめて、言った。

「分かっていると思うが、しかし分からんと言うのか、　ー　よろしい。欲望は感覚的なものか、理性的なものだ。そのことから諸対象の性質に応じて、四つの情熱とか情動と、

それに三つの理性的意志作用が生ずるもので、これらに関し詳しいことはキケロの『トゥスクルム荘対談』を自ら繙けば良かろう。賢者なら、自分の欲望能力をただこの理性的な意志作用で決めるものであり、この中にストア派のアパティー[無感動]というのがあって、これに従って、我々は万難を排して、徒歩でニッペンブルクへ到達するつもりなのだ。分かるかな」。

「完全に分かります」と仕立屋にして学僕は、威勢良く雄山羊のように跳ねて叫び、付け加えた。疲労や夏の暑さに関しましては、これはまだ何でもありません。パレスティナでは全く違っています。どの道も終わりがあります。それにニッペンブルクにも多分正午前に着きましょう。石を見るたびに立ち止まったり、あるいはそれに躓いたりしなければ、と。教授は再度、深く溜め息を吐いて、すべての肉体的、精神的力を集中して、喘ぎながら、軽快な仕立屋の後、従兄弟ヴァッサートレーターの埃っぽい街道を、蒸し暑い盛夏の朝、ニッペンブルクやブムスドルフ、フリーゲンハウゼンの山々に向かって急いだ。しかし何故この滑稽な両人がこの国道を向かっているのか、これについて、いずれにせよ、若干のことを述べる必要があろう、その後に、レオンハルト・ハーゲブーハーの故郷への二人の到来の様子を満喫することにしよう。

教授は先の冬と春に多くのことを体験した。彼の家の友、レオンハルトは、極めて素っ気なく、彼とコプト語の文法から逃げ出すこと二回目となった。そして彼の娘は、勿論、何も意に介さず、聖霊降臨祭にフェルディナントと結婚し、レマン湖畔の国際的教育施設で精力的に料理と洗濯の仕事に邁進した。教授にとって、世界全体が転覆して、しばしば自分の頭がどこにあるか分からなくなった。そして自分の頭を直すために、彼に残されていたのは、パシャだけで、このパシャが勿論万事に頼りとなる一人の男にして助言者となった。

確かに娘っ子と義理の息子は、自分らと一緒に異郷へ移住し、自ら協力して、国際的施設を教育学的に完璧な至高の段階まで高めて欲しいと提案した。しかしこのとき教授は本気で粗野になって、ギリシアとラテンのすべての神々を証人に呼び出して、自分はこのようにして、正直なゲルマン文献学という誠実なドイツ人学者の徹底性と高貴な先祖達に対して罪を犯すぐらいなら、生きた体のまま火刑台に登るのが千倍好ましいと述べて、それで娘には自分が述べられる限りの父親としての祝福を与えて、娘を去らせ、玄関より先には娘の同伴をせず、閂をして書斎に閉じこもり、完全に存命の者達の世界から消えた。彼のインク壺には黴が生えて、彼の椅子の下では、虫の粉末が堆積した。彼の書類には埃が、彼の額には更に募る不機嫌が見られた。博識な重要な作品への仕事は、これは蒸気機関の力で進捗することはなくなって、次第に全く停止した。家は静かなこと、ピラミッドの内部の如くで、この老公は最も深く、最も暗い墳墓のミイラを的確に体現していた。そしてパシャ・トイブリヒは、メランコリックにナイル川の植物や鰐の卵を夢想している入口のイビス[古代エジプトの聖鳥]のように瞑想的に立っていて、入室を求める者達すべてに答えていた。

「教授殿は面会されません」。

この空ろな両エジプト人のどちらがまず偉大な考えを思い付いて、トゥムルキー州の友人に対し、彼自身の故郷まで、つまりブムスドルフまで訪問することを述べたのか、これは永遠に決められないことであろう。この考えはいずれにせよ、起死回生のものであった。

フリーゲンハウゼンのローマ人の石は確かに効果があって、この石は脇に押しやられずに、次第にますます明確な輪郭を帯びて来た。幾つかの誘いかける新たな手紙がレオンハルトから届いて、この月山脈からの男への憧れを募らせた。六月初め、彼を訪問するという願望は一つの決心となって、盛夏の初め、この冒険的で刺激的探検へのすべての準備が整った。出発を妨げるものはもはや何もなく、ある朝二人は本当に出発した。

二十年前から、教授は領邦首都の間近な周辺、周知の遊歩道やブロンズの大公爵を越えて出て行ったことはなく、自分が古代人の大胆不敵精神で「徒歩旅行」を決心したとき、自分が何をしているか、全く自覚していなかった。多分或るミイラの手に小麦の種が発見された話しを皆ご存じであろう。その種子は三千年の眠りの後、大地に植えられ、十分に水を注がれ、そして元気に芽を出し始め、緑色の茎を伸ばして、最後にはまことに立派に実ったのであった。それに似た覚醒の受動と能動とを今や今やこの老コプト人の気分と感情は経験していた。

彼は自分の妻を埋葬していて、自分の娘も同様に手放していた。彼は片隅からツィーゲンハイン[イエナ近郊]の杖を取りだした。四十年以上放置していたものである。彼は古い学生歌集を再び取りだして、ハミングした。「学ランは自由。学ランは自由」。彼はテーブルにツィーゲンハインの杖を、その横に学生歌集を置き、この二つを腕組みをして眺めた。ラマンチャの高貴な貴公子[ドン・キホーテ]が初めて外遊する前の晩に剣と丸盾を眺めた按配であったろう。パシャはすでにシリア砂漠横断の折に使った旅嚢に詰めて、以前色々な旅に携帯した籐巻ガラス瓶に活力ある飲み物を入れた。ある聖なる灰色の早朝、この二人の英雄は、爪先立って、家から忍び出て、そのすべての学術的、非学術的幽霊や塵を女中に任せて、二人は逃亡の犯罪者達あるいは腕白どもさながら、壁に沿って、間近の市門まで向かって、それから野外の自由で新鮮な大気の中に出て、更に遍歴して行った。

ー　どこへ向かうのか、我々は承知している。

ニッペンブルクまでの道のりは遠くなく、そもそも国の道は、地理学的理由からも、政治学的理由からも遠くはなり得ないと我々も承知している。しかしこの両遍歴者はこの途上、道すがら、不思議なことを様々体験した。或るポプラの最上の梢で或る仕事をしなければならない蝸牛であっても、その途上で、このコプト語の学者がその道のりで出会ったほどに、妨害や困難、様々な理由に遭遇して休息するに至ったことはないであろう。我々が我らの本の冒頭とか中間にいて、この遍歴を完全に描写堪能する状態ではもはやないということはただただ残念で仕方ない。彼らは二回途中で宿泊して、三日目の朝、彼らは先に記述した気分であって、ニッペンブルクの教会の塔目がけて急ぎ、今や我らが先を急ぎ、我らが従兄弟ヴァッサートレーターの窓から待ち構えておれば、この有名な境内に彼らが入るのを目撃することになる。

まだニッペンブルクは、我らの驚異的物語を始めた時とほとんど何も変わっていなかった。町の紋章は青地に灰色と白色の斑の編み靴下で、シュネードラーおじとおばが相変わらず、盾持ちで、自分達の任務をまさに周知の野蛮人やライオン、一角獣、あるいはハプスブルク家の双頭の黄金のグリフィン[獅子の胴に鷲の頭と翼]のように果たしていた。しかし従兄弟ヴァッサートレーターは相変わらず町にとって一つの嫌悪、一つの不潔であった。

そして従兄弟ヴァッサートレーターはいつものように窓のニッチに寄りかかっていて、その長いパイプから朝の十一時に軽い煙の雲を吐き出していて、自分の注意を、傷んだ通

りの舗石に向けたり、これはちなみに彼にとって全く構わないことであったが、従姉妹クレメンティーネ・マウザーに向けたりしていた。彼女はカナリアのご機嫌を伺っていた。彼は「せめて何か椿事に」憧れて、学校から帰って来る健気なニッペンブルクの学童を待っていた。ただ昔、寄生虫に苦しめられた鮭が奔流の深みから飛び上がるのを目撃したことのある者のみが、この従兄弟の飛び上がりという動作についての正しいイメージを想像することが出来よう。十一時五分にハウエンシュタイン校長からずらかって来る学童に交じって、ライエンシュラーガー教授とその教授の同行者が地平線上に、つまり間近の通りの角に出現したのである。

「あらまあ」と従姉妹クレメンティーネは息を吐いた。

「これは何だ」と従兄弟ヴァッサートレーターは叫んで、次の瞬間スリッパを階段で投げ棄て、玄関でパイプとその火皿を投げ棄て、新たな[ゲーテの]魔王のように、冠を被り裾を引いて、つまりナイトキャップを被り、長い襤褸のナイトガウンを着て、路地に飛び出し、昔の学友会仲間の首にほとんど絞殺せんばかりに夢中になって抱きついた。

「茸よ、茸、まじか、茸」。

「いや、泡取りスプーンよ、大体分かるんだが、良くは分からん」。

「あの二人は何の極道かしら」と従姉妹クリスティーネは喘いだ。しかし従兄弟は、彼女に二人を路上から紹介する労を取らず、教授を右手に、パシャを左手に自分の後に引き連れて、すでにこの到着余所者の周りに集まっていたニッペンブルク人達の訝しげな輪を抜けて、家の中、階段を上がって行き、一方の者を肘掛け椅子に、もう一方の者を寝椅子に座らせ、家中のすべてを探して飲み物等を求めて、すぐに独楽のように両客人の間を回って、絶えず繰り返していた。

「私はまだ大体も分からん、大体も分からん」。それから彼は黄金の孔雀亭に人を送って、昼食を、この料亭が至急の頼みでも、用意出来る限り、最も素晴らしいものを届けるよう、さもないとと呪いを添えて、注文した。

教授はニッペンブルクと泡取りスプーンとを全く予想通りのものと思った。彼は十一時半に少しばかりいつもより酩酊し、三時には二回目の若干更に大きめの酩酊に陥った。四時から六時まで、従兄弟のソファーで、至福の眠りに入り、その間従兄弟は、パシャに旅に関し千もの質問をして、ますます上機嫌になって両手を揉んだ。

「かつてコプト語を研究した者で最も優れた学ランだ。彼が目覚めたら、ブムスドルフへ出発しよう」と従兄弟は叫んだ。「万歳、これは後ろ姿の老ゲーテ本人よりももっと素晴らしい。彼にはそのローマ人のマイルごとの里程標[石]をやろう。しかしこの石は我が里程標の一つと思うが、しかしどちらでも全く構わない。やむを得なければ、他の二十個もローマ人のだと誓ってやろう。万歳、フレッ、フレッ、フレー」。

決闘用小剣を手に取って、
帽子に突き刺して、祖国の
弥栄のために乾杯だ」。

まだ半ば眠っていた教授がソファーから答えた。

「私は帽子に突き刺して、誓う。
私はいつでも名誉を守る、
健気な学ランでありたい、と」。

長いポプラの影がブムスドルフへの道に掛かっていた。二人の灰色髪の学友はその道を月山脈からの男の許へ急いだ。以前二人がラーゼンミューレやシュティフツミューレ[イエナとハイデルベルクの学友会集合地]に集合したであろう時と似たような気分、類似のよろめく足取りであった。パシャも両脚をまことふらふらと交錯させて、しばしば想像上の壁を支えに、平衡を保とうとして、三人皆が帽子を手に取って、それで扇ぎながら、激しく風を送りつけていた。彼らは草の生長の音を聞くことが出来、天と地の間で、他の人々がその哲学で夢想だにしないようなことを予感していた[ホレイショー、この天地のあひだには、人智の思ひも及ばぬことが幾らもあるのだ。『ハムレット』Ⅰ,5:福田恒存訳]。しかし彼らはその満足げな姿で、ドイツ国民に対し、更に何千年も続く心情の豊かさ[Gemütlichkeit]を保証していることに気付いていなかった。これは、空ろな手の中の三つのどんぐりに似て、一つの森全体を意味するかもしれないようなものであった。

さてブムスドルフの低い教会の塔が、木の梢から浮かび上がって来た。まさに赤い太陽の映像が西側の地平線上に、あたかも鏡面の縁に写るかのように置かれた。更に数歩進むと、彼らは　ー　教授と従兄弟とパシャは、　ー　以前レオンハルトがトゥムルキー州から帰郷した後、妹御や美しいニコラ、それに荘園の二人の娘をひどく驚愕させた覗き込んでいた同じ地点に立って、そこから垣根越しにライラックの園亭を覗いた。小さな驚愕の叫び声を上げて、今回もリーナ・ハーゲブーハー嬢は飛び上がった、そして、　ー

「おったまげた」とフーゴ・フォン・ブムスドルフ少尉殿は叫んだ。彼は灰色の短い上着と丈長の雨靴姿でその娘に向かって座っていて、熱心に農業の進歩について、フォン・リービヒ[Von Liebig,1803-1873]氏について、自らの独自の排水式の、合理的農業の未来について語っていた。

「ビスミラー。神はまことに偉大なり。ムハンマドは実際神の預言者だ」とレオンハルト・ハーゲブーハーは叫んだ。彼は一瞬後に、同様に長いパイプを口にくわえ、玄関の階段に現れ、彼の亡き父親に、その姿、顔の形、姿勢の点で、奇妙に似て見えた。しかし全く亡き老夫とは対照的に、彼は家から庭木戸までの間を大きく三回跳びでやって来て、三人の友に挨拶し、握手し、抱擁して歓迎した。下の部屋の開いた窓辺にいる猫は身繕いを止めて、明らかに興味を抱いて、トイブリヒとその両手にある赤い、青色の総のトルコ帽を見ていた。黒い喪服の老母は、びっくりして眼鏡をシュモルク [Benjamin Schmolck,1672-1737]の『朝の祈りと夕べの祈り』の頁の間に置いて、そして同じように好奇心を起こして出て来て、自分も挨拶や紹介に加わった。彼女は実際十分に引き回され、即刻教授に大層好感を抱いた。その古風な世辞と、真面目な人柄、自分には高尚すぎるその万般にわたる話しぶりが気に入った。これに対し、夢想的な仕立屋フェーリクス・トイブリヒに関しては、彼女は彼が自分の家に滞在する間中、彼に対するある種の恐れから逃れられなかった。彼の方を脇からいつも少しばかり不安げに見ていて、自分はこの人を信用しない、この人は教授殿よりはるかに賢いか、あるいは荘園の萎えたハンス、あのフォン・ブムスドルフ殿のお気に入りよりも、はるかに愚かなのかもしれない。仮にこの両者でなかったら、

この人はきっと全く邪悪な悪漢か、ひどく猫を被っているのだ。それともとても正直な人で、ただ少しばかり余りに間抜けすぎているのだ、大抵の他の人々も十分に賢いとは言えないけど。

こう考えながら、彼女はそのたびに、意味深に額を叩いていた。　ー

更にハーゲブーハーの庭の生垣越しに覗いて、こう叫ぶ者は誰か。

「これは願ってもない驚きだ」。　ー

これは当地の残忍な君主、この地のすべての封土権の憤然たる、情け容赦ない執行者、血に飢えて、恐ろしいフォン・ブムスドルフの貴公子にして世襲領主以外の何者であったろうか。そして彼は自分の突然の出現によって呼び起こされた驚愕を際限もなく拡大するために、何をなしたか。彼は自らの登場に対する悪寒に対し、発言に冷たい嘲りを添えて、自分の末子の、すぐ自分に踝を接して歩いて来ている令嬢に向かってこう叫んだ。

「ミンヘン、急げ。今だ、ジーヴァスが丁度荘園からやって来る。そなたは走れることを見せてやれ。急げ、鯉を絶対町へ出荷してはならん。ジーヴァスは籠をまた下ろすのだ。孔雀亭は、魚なしでどうしてやって行けるか、自覚すればいい。さあ、行け。陽気に進め、

ー　待て、そなたの母親に伝えるのだ、何かとても珍しいものを見たかったら、すぐにアフリカ人の許へ飛んで来ればいい。ここにハーフのエジプト人と生粋のトルコ人が到着して、無料で見物出来る、とな。...今晩は、教授先生、今晩は、パシャ・トイブリヒ。我々はこうしてお目にかかれることを夙に楽しみにしていたが、誰もまさかと本気にしていなかった」。

フォン・ブムスドルフ騎士が握手をした相手の人は、なおもその後時間が経ってからもこの握手のことを感ずるものであった。ミンヘンがニッペンブルクの街道を追いかけて、声をかけたその相手は、とても足取りが速くて、難聴でない限り、彼女から逃れられなかったことであろう。家臣のジーヴァスは、彼女から逃れられず、ブムスドルフの鯉は孔雀亭の女将の癪に障ったことに、孔雀亭の調理場に届かず、ご当地に留まって、ご当地に生まれた者達と二人の高貴な異邦人、その国の領邦首都からの親愛なる客人の口に入った。この田舎に到着してから三日目にようやく、ライエンシュラーガー教授はフリーゲンハウゼン近郊のローマ人の石[里程標]を思い出し、額を叩いて、語った。

「いや、そうだった。私はある目的のためにこちらへ来たことを忘れるところであった。ヴェルギリウスの牧歌にかけて。こちらの田園的快適な生活、この独自に新鮮な大気は私の性質には全く合わないように見える。ヨーロッパ諸言語における鼻音についての我が様々な仮説との関連において、これらの言語の根源として我らが感謝しなければならぬ語幹、これについて私は進捗していない。とても遺憾に思える。友のレオンハルトよ、是非とも我がローマ人の里程標を得たいものだ。ここブムスドルフでローマ人の存在を証明出来れば、本当に嬉しい。このような事情であれば、このささやかな、しかし冒険的な探検のために費やされた時間を、私は全く徒労とは見なさないで済むことだろう」。

「素晴らしい、茸」と従兄弟ヴァッサートレーターは笑った。レオンハルト・ハーゲブーハーも同様に笑ったが、しかしそれほど大きな声ではなかった。パシャは悲しげに下唇を垂らした。そしてフーゴ少尉は叫んだ。「向こうのフクスリュッケン[狐尾根]には小麦畑があり、探検ついでに森への遠足、ピクニックが出来ましょう。必要なバターパンや娘達、ワインの瓶、それに我々自身を食後、干し草馬車に乗せて、『絞首台の樫』の木の下、

あるいは『死人の男』の近く、あるいはその他ロマンチックな場所でコーヒーを沸かします。教授はその里程標の石を得て、誰もが今日はこの件についての教授の見解や意見に厳かに帰依します。その後は目隠し鬼ごっことなり、つまりそれをしたい者は、誰でも参加出来ます。娘達でさえもこの遊びから除外されません、　ー」。

「聞いたか、聞いたか」と従兄弟ヴァッサートレーターは叫んだ。

「破廉恥な人だこと」と真面目にゾフィー・フォン・ブムスドルフは語った。

「そして夕方、　ー　我々はまた家に干し草馬車で戻る」と少尉は自分の提案を結んだ。しかし脇の方を向いて、更に付け加えた、「つまり月明かりの中だな、リーナ嬢。　ー私は懇請されたら、我がヴァルトホルン[猟笛]も持参しよう。私の提案に異議のある者は、遠慮なくすぐそれを述べたらよろしい。すぐにその異議の愚かさを証明してみせよう」。

「コノ殿ニ賛成。私は無条件にこのお若い方に賛成する」と教授は語って、彼は教皇選挙で教皇を選ぶ際の一人の枢機卿の品位を持って、ハーゲブーハー家の食卓の背後の椅子から起き上がって、すべての出席者の完全な賛同を自らの起立と同時に引き上げていた。誰もが自分の改善案を熱心に述べた後、あたかも約束されていたかのように、それは実行された。

パシャは両手を組み合わせて、木の切り株に座っていて、ぼんやり間近の樫を見上げていた。ハーゲブーハーは彼の側の草叢に座って、長い脚を伸ばしていた。山腹のはるか下の方で教授と従兄弟ヴァッサートレーター、家臣のジーヴァスは懸命にローマ人の石から、数千年の汚れを取り除いていたが、従兄弟は以前にもましてこの石のことを信じていなかった。しかしはるか上の方の緑の間伐地では、爆ぜる炎やコーヒーポット、食料品籠の側、少女達とフーゴ殿が笑っていて、一方フリーゲンハウゼンに向かって、野外の畑ではフォン・ブムスドルフ君主が満足げにその小麦を眺めていた。最初木々の梢に微かなざわめきが見られたが、それもやがて消えて、今や森は全く静かであった。

「さて、トイブリヒよ、向こうの木の上でカケスは何と言っているかな」とレオンハルトは尋ねて、この質問の間に素早く起き上がって叫んだ。「おや、どうしたのだ。何を見ている。何を考えているのだ」。

夢想中の仕立屋は突然、長く、深い溜め息を吐き出した。今や彼は口を大きく開けて、空気にパクついた。二粒の大きな涙が彼の頬を転がり落ちた。アフリカ人は彼の背中を優しく叩いた。しゃくり上げる子供に対するように、彼は言った。

「しっかりしろ、明るい澄んだ一日だ。陽気にご老公、そんな顔はこの陽光と緑の森に合わないぞ」。

「いや、旦那、旦那、勿論明るい一日です」とパシャは嗚咽した、「どうしようもありません。陽は輝き、私はここの緑の森に座っています。私はこれまで寝て起きて夢見ていた中で、かつてなかったほどに幸せです。でもこれが本当であって、ダマスカスの棕櫚や素晴らしさ同様、夢ではないと分からないということが、まこと悲しいのです」。

「神々よ、我が心から溢れる思いの説教を誰にしたらいいのか」とハーゲブーハーは叫んだ。彼は今やパシャの前、両脚で立っていたが、しかしパシャに背を向けて、森と山々に向かって話した。「誰が自分の生きている世間について、そして自分自身について、この私の背後の戦友ほどに知っていましょう。人々は、若い時には、陽光の中で笑い、その遊びを続けています。また別の人々は、古い、朽ちた石を、つまり夢の中の一つの夢を掘

り出して、皆、自分達の玩具を信じています。ただ私の背後のこの利口な仲間は、自らの玩具を信じていず、自らを阿呆と称しています。彼は何で遊び、何を見ているのか。海と砂漠、雲の中の宮殿、棕櫚の森、美しい娘達に庭園、誰もこの地上では植えられないような素晴らしいものが、彼の前に、自由に勝手に使えるよう用意されています。それなのに、

ー　彼は泣きわめいています。いや、トイブリヒよ、トイブリヒ」。

「ムハンマドは言っています、私が知っていることを、汝らが知れば、汝らは大いに泣き、笑うことは少ないだろう、と」。

「そのアラビア語も貴方は知っているのかな。それが貴方と何の関係があろう。他の者達、つまり策謀と暴力とでエジプト人のプロテウス[変身し予言する海神]たる人生を制圧して、自らの意志の下に強いたい者達、そして死ぬまでこの人生と格闘しなければならない者達は、皆その言葉を言いたがるだろう。しかし貴方はそれをうっちゃっておけばいい。トイブリヒよ、トゥムルキー州から帰郷した人間にとって、貴方のような仲間を自分の壁隣に有することは取るに足らぬことではない。私は本気で、我らの向こうのかの上の連中や、向こうなかの下の連中が、明瞭で理性的な人間と呼びたがるであろう者に、貴方がなりたいと思うのであれば、そんな試みはすべて止めておけと言いたい。トイブリヒよ、貴方に申しておくが、連中の中で誰一人として確信を持ってこう言えるものはいないのだ。自分はその思考、願望、行動に関し、まこと現実に根差している、と。貴方のような戯けた奴に、神々が贔屓して貸与したものは、偉大なものと呼ばれるべきものだ。しかしこれから出掛けてみよう。我々は他の者達には穀物畑を眺めたり、結婚したり、遊んだり、昔の世の石を集めたりさせよう。我々は茂みの背後を忍んで行き、自らの小道を探すことにしよう。私はヨーロッパへ帰還して以来、様々なことを試した。私も千年もの古い石を集めた。私も遊んで、結婚して子供をもうけようと思った。しかし今は嘆きに満ちた大きな海[押し寄せる苦難に立ち向かひ：『ハムレット』Ⅲ,1:福田恒存訳]の中の小さな不幸に対する番人に過ぎず、差し当たりこれで十分満足している。トイブリヒよ、行こう。こっそり歩くのだ。貴方に大変珍しいものを光栄にも披露しよう。貴方が後に、冬の間、私の代わりに教授の比較言語学のお手伝いをするとき、この光景が貴方の夢の中に出現して欲しいものだ。

彼は素早くパシャに先立って、茂みの中を歩いた。山腹を斜交いに下りながら、その両側を慎重に見比べて、関係ない者に見つかったり、それどころか関係ない者にぶつかったりして、後を付けられるのを嫌っている者の如く進んで行った。しかしこの奇妙な二人の友を見送ったり、付けたりする者は誰もいなかった。やがて二人は谷の底に達した。そこでは二人は密な下生えの茂みを文字通り縫って行かなければならず、その後十五分ほどして、森の外、フリーゲンハウゼンの国道へ、カッツェンミューレに向かい合った小さな谷の入口に出て来た。こっそりと二人は更に、我らがしばしばこの物語の経過の中で歩んで来た狭い小道を進み、それから二人は胡桃の茂みの奥に立って、ハーゲブーハーは左手をパシャの肩に置いて、右手で自分の前を指し示した。

「トイブリヒよ、これがカッツェンミューレだ。我らが向こうの山々の森の通りの反対側に置いて来た連中は、皆この地を私同様に良く知っている。しかし彼らの誰ももはやこちらへ来ない。これは半ば約束のようなものだ、しかし必ずしも全面的にそうなのではない。不幸に対する最初の恐れや畏怖は、やがて快適な一つの習慣となってしまっていて、これが最も良いことだ。いや、トイブリヒよ、ヴィルトベルク少佐が私にリッチモンド近

郊での戦闘[1865年４月３日、アメリカ南北戦争終結へ]についてアメリカ領事の報告を知らせて以来、もはや向こうの敷居まで届く波は一つもない。向こうの花々の影で、向こうの朽ちた屋根の下で、彼女らはもはや泣かない。彼女らは静かに座っている。彼女らの周りは静かだ。彼女らはもはや何も望まない」。...

水車小屋の前の、小さな、半ば荒れた庭園は夏の真っ盛りで花咲いていた。下の階の窓と侘しい住まいのドアは、開け放たれていた。しかし向こうは生命の優美な印にもかかわらず、生命の動きはなかった。ただ蜂や蝿、蝶が花々の上、陽光の中に舞っていた。ただ水滴の落下が、また古い、黒く苔の生えた車輪から聞こえて来た。パシャ・トイブリヒは月山脈からの男の手を取って、かつてないほど愚直に、霧中になって眺めていた。　ー
すると一匹の白いスピッツが小屋のドアに現れ、頭を上げ、小声で呻り始めた。しかし犬は素早く思案して、庭の中、吠えずに、二人の聞き耳を立てている者達の許へ急いでやって来て、半ば喜ばしげな、半ば哀泣する声を上げた。

レオンハルト・ハーゲブーハーはこの犬に屈み込んで、その利口な頭を撫でて、囁いた。

「吠えるなよ、昔からのダチ公よ。行って、立派に番をするのだ」。

この犬は身震いをして、庭園の木戸まで引き下がり、そこの日向にうずくまった。ハーゲブーハーは振り返って言った。

「これからまた生きている者達の許へ行こう」。

ほとんど聞き取れない声で彼は付け加えた。

「私が知っていることを、汝らが知れば、汝らは大いに泣き、笑うことは少ないだろう」。

ドイツの月光
(Deutscher Mondschein 1873)

平静に、少しも騒がずに語ることにしよう。私はドイツにおいてさえも尋常でなく素面の人間であって、自分の五感を正常に保つ術を心得ている。その上、私は法律家であり、我が妻の夫であり、我が息子どもの父親である。ニワトコの花の季節であれ、立葵や向日葵、アスターの季節であれ、私は感傷的あるいはロマンチックな気まぐれに浸ってしまう習慣はない。私は日記を記さない。しかし私の暦に関する一切の行事記録は、私の書庫に整理されてしっかりと保管されている。こうした前置きをすべて記して、私は一八六七年、医師の勧めに従って、潮風と海水を求めて、ジルト島へ赴き、その地で一人の知己を得たこと、　ー　全く尋常でない知己であったことを報告する。[ラーベも1867年夏、ジルト島へ保養に行った]。

勿論私はこの機会に、しばしば感受されて来たこと、そして更にしばしば描写され、手紙や印刷によって流布していることを、再度自らの経験や感情の文書による再現を通じて、訂正したり、補強したりに努めざるを得ない。寄せる大波、浜麦、浜ライ麦、カモメの飛行、とりわけ西風は、ドイツの役人生活の汗と埃とを洗い落とす必要のある者すべてにとって、快適で爽快な印象を与えるものである。これらの効用は私にもあったが、殊に先の元気回復に先行して、半端ない緊張努力の連続があったからである。

私はティヌムとヴェスターラント両村の境に住んでいて、それで浜辺と新鮮な海水に達するためには、少なくとも三十分の道のりがあった。短めとは言えない道を行くと、立派な男の許に至って、ここでいつも昼、手堅い値段で内部から我々はまた蘇生するのであった。家庭的くつろぎとか、ましてや贅沢とか、私は足を知るに慣れたドイツ人公僕としてそもそもうるさいことを言わない。私は二十一本のパイプのうち七本を携帯していたので、島の巨石墳の中であろうと快適に生活し得たことであろう。

よろしい。　ー　私はあるパン屋の許に住んでいた。彼はそのパン焼き窯で浜の材木、つまり座礁した船の浜辺競売で得た梁や垂木、桁を燃やしていた。私は時折、彼の手伝いをして、こうした材木を割って、ここではこのことで心地良い情緒を感じていた。家ではこうした仕事は健康上の理由からすることになっていた。

家では私は暇な折、薪を鋸引きしたり、割ったりしているが、こちらでは私は悪戯をするか、幾つかの用心のために荷物に帯同して来たブラウンシュヴァイク家の世襲[1884年死去することになる公爵には継嗣がいなかった]に関する諸論文を読んでいる。仕事の時間に私は浜辺の散歩に出掛けた。

このような海辺滞在では万事引き延ばされる。家では私はどんな日でも、どのような天候でも、我が職務町の散歩用に整えられた防塁の周辺を歩き回る。ジルト島では私は食事をし、一時間砂丘で私は昼寝を取り、それから真っ直ぐに北へ、浜辺に沿って行き、時々赤い絶壁まで行く。しかし通常は単にヴェニングシュテットの海水浴小屋までである。

海[中性]は両性の洗濯女[Weib,女は中性、お喋り屋]のように、何も自らの許に留めず、すべてをまた投げ出すので、このコースは魅力に欠けることがなかった。というのは私は散文的男であったが、しかし死んだアザラシを見つけたら、ある種のメランコリーを抱いて、背と腹とをひっくり返して、思索に耽るからである。

よろしい、　ー　いや今回はむしろ、もっとよろしい。私はおよそ三週間、この南から北へかけて、あるいはその逆に、伸びた島に滞在していた時、我が関係について当初述べ知己と出会った。

夕方頃であった。太陽は沈んでいた。私は　ー　今日　ー　赤い絶壁から戻って来た。そして確かに少なからず疲れていた。というのは、引き潮で、浜辺の道がすべてのジルト島滞在の下半身を病んだ患者にとって力を尽くせば、通行可能となっていたからである。かなりしっかり固まった砂の上を十歩歩くとすれば、次の二百歩は一層深く歩くことになっていて、それでこうした健康のためにはなはだ有意義な小道の上を優美に滑って行くような我が読者方の妻や娘、従姉妹、恋人を実際一人の詩人の抒情的あるいは叙事的描写対象として推薦したくなるところであろう、仮にこうした詩人が、私の同僚やその他の友人、敵対者の中に　ー　あの郡裁判官のレーネフィンケの他に私の馴染みとして存在するのであれば。

私は、太陽は沈んでいたと述べた。しかし訂正する。私がヴェニングシュテットの南側、巨大な噴火口[穴]に面した砂浜に到着した時、丁度太陽が沈んだのである。ブランケネーゼ、あるいはククスハーフェンからの漁師の小舟が太陽と共に、水平線の霧の中へ消えた。喜ばしい、目に心地良い海の緑色は陰気な灰色となった。健康に良いが、しかし煩わしい道の左手の黄赤色の砂丘の色合いも消えた。左手も右手も灰色が優勢になった。砂丘の草がより涼しい風を受けて、囁き始めた。夕方となっていた。間もなく夜になるという確かな見込みが生じていた。

転けながら、夕方の涼しさにもかかわらず、汗をかいて、私は夕方のパイプを心当てに急ぎ歩いていた。その時思いがけないことが起きて、同僚ルーネフィンケと知り合うことになった。　ー

ジルト島の西側の浜辺を知っている人は誰でも、この砂丘はしばしば海に沿って、この砂地の健康小道に対して、垂直に切り立っているとご承知であろう。この切り立った箇所のある地点でこの同僚は私の首にすがって、私の現世での残りの期間、驚愕させたのである。尊敬する読者方は、私が私の記録をいつもの平静さで、騒がずに続けていることを了とされたい。

私は申したように、巨大な噴火口[穴]に面していた。そして太陽は五分前に去っていたが、突然左手、砂丘の高台に、私の頭上およそ七十フィートの所に、一人の人間が現れ、是非もない全速力でその斜面に達し、両腕を夕方の天に突きだし、それからうずくまって、それから一気に、私の髪が逆立つほどに恐ろしいことに、急峻な、ほとんど垂直な丘を下に滑り落ち、　ー　すると　ー　どんと来た。

半ば驚愕し、　ー　全体魂消た、私の叫び声が、木霊しないうちに、その人間は砂丘の麓、柔らかな砂の中、そこに洗われて、半ば砕けている樽と壊れた船のランタンの間に座って、目を大きく開けて、恐怖で青ざめていた。しかし同時に明らかなにやり笑いで歪んだ口をしていて、私を、駆け寄る私を見ていて、叫び、蛮声を上げ、あるいはむしろ喚いていた。

「私の背後に男が　ー　女が　ー　いる。済みません、貴殿。しかし、　ー　神経の発作のせいで、　ー」。

「誰が、何なのです、貴方の背後に誰がいるのです」と私は叫んで、灰色の砂丘の壁を見上げて、何ら脅威のものを見つけられずにいた。このまだ私の前、砂の中に座っていて、かなり太った、極めて上品な服を着た個人の大胆な　ー　滑りと、当人の埒もない狼狽とを正当化するようなものは何も見えなかった。

「誰が貴方の背後にいるのです。私には誰も見えません。お話しください。誰に追われているのです。どうしてこのような跳躍をされたのです。実際この上には何も見えません」。

「いや、確かだ。男が　ー　女が　ー　月が、　ー　ルーナ[月]だ、　ー　セレーネ[月]だ。いや、ルーナでも、セレーネでもない、あれだ、月だ。悪評高い、ドイツの月だ。たった今干潟の奥から昇って、数分後には向こうの高台の上から私を襲って来る。こちらには屋根も覆いもない、　ー　雨傘さえもない。隠れるための次の水泳更衣室荷台までは十五分かかる。私は終わりだ」。

通常私は雨傘を携帯しており、この時もそうであった。この狼狽している見知らぬ男は、しかし、雨傘に気付いていなかった。この阿呆に雨傘を渡す前に、勿論私は思案していた。

私が一人の精神錯乱者を眼前にしていることは、私にとって明瞭であり、法学的にも明瞭であった。このような状況下、私は彼に対しどう振る舞うべきか、素早く決断して、考えた。私は彼の独自の妄想体系を何も変えられない以上、この男を自らの運命に任せて、彼を掴まえることを彼の介護人達に委ねるべきであろうか。それとも彼と会話を行って、直接彼と不愉快な議論をするという危険を犯して、彼の状態をもっと詳しく調べるべきであろうか。

人間として私は前者を優先していたかもしれないが、しかし法学者として、刑法教師として、私は後者に惹き付けられた。私はこの誘いに従い、更に会話を続けた。

「親愛なる貴殿」と私は語った、「貴方は、雨傘があれば、　ー　貴方の敵から守られるとお思いになるのであれば、私の傘を喜んで用立てましょう。私の腕を掴んでください」。

私はすでに絹の雨具を広げていた。この精神錯乱者は同様にすでに喜びの叫び声を上げて高く飛び込んでいた。

「いや、貴殿。有り難いご縁です」。

彼は私の腕を取って、帽子を脱ぎながら、言った。

「しかしまあ、自己紹介させてください。私の名はレーネフィンケと申しまして、　ー　大ファウレンベルクのプロイセン王室領、郡裁判官、管区は、　ー」。

この時私は全く仰天して脇に飛んだ。

「貴殿、　ー　あり得ません」。

「どうして」。

「貴方がですか。月の出から逃れるために、慌てふためいて、転倒しかねない勢いで、ー　あちらを駆け下って来た貴方が、大ファウレンベルクの郡裁判官レーネフィンケだと仰有るのですか。あり得ません。貴方が郡裁判官レーネフィンケだとは、全くあり得ません」。

「いや、そうなのです。貴方にはお初にお目にかかるのであれば、私はそうなので、今呼ばれた名前です」。

私はかろうじて自制しながら、こう心の中で言っていた。今や何の疑念の余地もなく、これは幾つかの固定観念を持った一人の精神錯乱者だ。この不幸な男は、月を自分の敵と見なしているばかりでなく、その上自分を絶対或る別人と思っている、と。

「いや、私の名前はレーネフィンケでして、貴方が、立派な貴殿が、今度は私に名乗ってくだされば、光栄に存じます」。

これに対して、何が出来よう。私は自己紹介をして、私の名前と肩書を名乗った。早速

この狂乱者は再度帽子を取って、私の手を握り、心から握手して、叫んだ。

「いや、親愛なる同僚殿、奇遇です。運命の引き合わせです。まこと、十五分前までは夢想だにしていなかったことです。いやはや、我々はすでに長いこと昵懇の間柄です。覚えていらっしゃることでしょう。我々はランゲンザルツァー出身の偽のジプシーの首領、ヨーハン・ペーター・ミュラーの件で調書のやり取りをして、仕事上文通を致しましたな。どうでしょう、思い出しましたか。いや、嬉しいことです」。

これは一つの夢か。それとも現実か。この人間は狂っているのか。それとも私が狂っているのか。

この件は事実そうであった。大ファウレンベルクのプロイセン郡裁判所との文通のやり取りを私はすぐ克明に思い出した。私の奇妙な同行者は(我々はすでに並んで歩いていた)、この事実の単なる確実な点、間違いない点にばかり触れるのではなく、すぐに当該事件の個々の点に深入りして、私に以前文書で伝えていたすべての疑念の点を今や口頭で述べた。それで、　ー　私は彼が果たしてプロイセン王室領の役人であって、本当にレーネフィンケの名前であるかに関し、もはや私には何の疑念も残っていないかのように、彼に対して答えた。満月がその間に実際東の水平線上から昇っていて、我らの頭上を照らしていたが、私の同行者は月のことを気にしていなかった。腕を組んで、ヴェスターラントの海水浴浜辺を歩きながら、我々はますます我らの高尚な学問に没頭して、月はその随意に任せて、輝くがままにさせていた。かくて我々はほぼ男性用脱衣室に着いて、今や浜辺から砂丘高台まで導く階段に近付いた時、この同僚は、その最初の興奮にもかかわらず、私にとっては極めて明瞭な頭脳と鋭い法学者に他ならないと分かって来ていたが、突然、砂の中に立ち止まって、周りを見、見上げて、幽霊のように青ざめて、呻いた。

「いや、神々よ、直ちにその最中にいる」。

それに疑いはなかった。我々は直ちにその最中にいた。固定観念に再度、この不幸な男は襲われた。憤然と不安一杯になって、彼は私の広げられた傘をすぐ帽子の上まで下げて、私は　ー　彼の　ー　郡裁判官、レーネフィンケの　ー　肘をよりしっかり持つことしか出来ず、この立腹してのたうち、じたばたしている者にしつこく囁きかけた。

「しかし、貴殿、お願いです、心確かに、心確かに。同僚殿、これではご乱心です。このやくたいもない照明装置が一体何の悪さをしましょう。それともこれに対し罪深いことをしましたか。同僚殿、お気を確かに。安心なさってください。この無邪気な球は、我らの頭上に落下する素振りをみせていません」。

「いや、我が頭に、我が頭に」と郡裁判官は呻いた。この疑念の頭の部分を両手で支えていた。

「同僚殿、こちらへどうぞ。誰も貴方を追っていません。誰も貴方を目指していません。何と騒がしい狂癲です。いや、悪しからず」。

「誰もいませんか。誰もいませんか」とレーネフィンケは喘いで言った。

「誰もいませんよ。それで、これからあちらの上へ上がってみますか。休憩所には人々がいましょう。　ー　仲間がいて、何か気付けの飲み物とか、必ずや石油の吊りランプがあって、これには貴方の敵や敵のくのいちも退散することでしょう」。

「石油か」とレーネフィンケは呟いた。その言葉を掴んで執着すること、犯罪者が高等裁判所で「恩赦」の声にすがるような按配であった。

「まあ、耳を澄ましてください。それどころか、休憩所には音楽まであります。いかがです、そこで一杯のグロッグ酒を飲みながら、更にしばらく腰掛けることにしたら、そして　ー」。

「　ー　月が沈むのを待つのですか。いや、いや、それはいい」。

「しかし少しばかり長くかかると思われます。月はようやく朝の六時四十五分後に沈みます。しかしもう一つ慰めとなるものが上昇して来ます。ご覧なさい。向こうの海上に暗い雲が上がって来ています。　ー　同僚殿、一つの雲が月にかかるまで、待つことにしましょう」。

「そうだ、それがいい。喜んで賛成、決まり。同僚殿、私は完全に貴方の後見に従います。その建物に入り、雲がにやける月野郎に掛かるまで、待つことにして、その間グロッグ酒を飲むことにしましょう」と興奮したプロイセンの公僕は叫んで、それで我々は急な階段を上がって、首をへし折ることもなく、高台に達して、それから右手に転じ、砂丘草叢を通り、照明されて、音楽が鳴っている水泳客で一杯の砂丘休憩所に向かった。

しかし我々が木造円形建物のドアの中へ入った瞬間、突然、海辺の吹奏楽は止んだ。音楽家達は楽器を器に入れたり、ただ腋に抱えたりした。彼らもまたビュフェで一杯の賄いシュナプスを飲んで、引き上げた。そして聞き手の大部分も奇妙なことに音楽家達に続いて出て、音楽を聞いた後、しばらく息抜きをすることもなかった。分別ある男達の若干のグループだけが、その後グラスを傾けながら残っていた。

北海には今やかなり威勢の良い風が吹いていた。波はより声高にざわめいて、より白い、より乱れた泡の王冠を被せていた。我々が腰掛ける前に注文した、景気づけの暖める飲み物は、必ずや我らの気分と肉体上の快適さに心地良く資するに違いない。

さて、我々は座っていて、隣のテーブルでは元気な一行が陽気に喋り合っていてが、私はこの新たな知人を、ランプの照明の下、こっそりというのではなく、一層克明に見つめていて、私の驚きの念は、この精密調査の下、募った。

大ファウレンベルク出身の郡裁判官レーネフィンケは、およそ五十歳の男で、すでに述べたように太っていて、その他格別異常な点は何も見られなかった。大きな顎に、短く刈った、斑の灰色の髪、　ー　プロイセンの役人風の髭、両の灰色の、賢そうな目、両目はその目が捉えるどの対象も鋭く見据えていた。それでこの男を精神病院への候補生と宣言する切っ掛けはどこにも見いだせなかった。しかしながら、　ー　私は抑えられなかった。この同僚の腕に私の手を置いて、彼にすっかり近寄って、私は言った。

「親愛なるレーネフィンケ、気を悪くして欲しくないのだが、しかし今この時、もはや信じられないのだ」。

「何を信じられないのです」。

「先ほどの貴方の振る舞いだ。　ー　ま、その、砂丘を越えての、危険極まる逃走のこと、ヴェニングシュテット近くでのあの急降下、　ー　要するに、同僚殿、貴方の月憎悪のことです」。すぐに私の側に座っているこの人間全体に異常な変化が生じた。彼はまたしても屈んで、先ほど私の雨傘に手を伸ばしたように、今度は目の前にあるグラスを掴んで、一気にその中の熱い、湯気の出ている混合物を飲み込んで、歯の間から囁いた。

「しかしそうなのです。私は月を憎んでいます。月は私の不倶戴天の敵です。月が我らの上のランプに退散するように、私は月を見ると退散します」。

私はウェイトレスに合図した。彼女は私の合図を理解して、この同僚の鼻先に二杯目の湯気の出るグラスを置いた。

「有り難う」と郡裁判官は言った、「貴方にも有り難う。というのは、先ほどは貴方の腕と貴方の傘の助けがなければ、まこと、この影一つない浜辺ではいかなることになるか案じられたからです」。

「同僚殿」と私は語った、「私は冷静な男で、長年、私の同職の者達や、我が上司の役人達の不興を買わずに職責を果たしております。私の家の引き出しには、国の勲章があります。自分に打ち明けられた秘密を他人に裏切って話すことはありません。同僚殿、貴方は何故、我らの罪深い地球のかの無邪気な衛星と不和に陥っているのか、私に話してくださるよう貴方に要請しても、腹立たしく思われますかな」。

「私は毛頭腹立たしく思いません」と同僚は言った、「逆に、時々私は、自分の憎しみと怒り、それにまた残念ながら憤然とした困窮や不安をも共感してくださる魂に打ち明けたいものだという熱烈な欲求を感じます。貴方もどうぞ同じく一杯グロッグ酒を傾けながら、聞いてください。その後貴方は判断なさればいい、貴方の判決に従いましょう。私は貴方のことを、すでに我らの職務上の文書やり取りで、有能な法律家と存じ上げていますだけになおさらのことです」。

「はなはだ恐縮に存じます」と私は語って、とても緊張していた。私は今やこの同僚の目を見つめていた。二十五年前、私は私の花嫁の目もこれほど見つめはしなかったであろう。彼は再度湯気の出る飲み物をすすって、その告白を始め、こう述べた。

「まず」と彼は言った、「私は述べなくてはなりませんが、私の医師がこちらの海水浴場に私を送ったのは、私の妻の働きかけによるもので、妻が言いますには、まさに私のこの状態のためであり、医師が言いますには、私の神経のためであります。私と一緒に育って、私を若い時から知っているこの医師の男は、この状態のことを長年笑っていました。

ー　ようやく、私の妻の耳打ちのせいで、医師はこの件を由々しく思うようになりました。突然この医師は思い付いて、今が何かこの憂わしい状態に手を打つ潮時だ、と申しました。それで　ー　私はこちらに参りまして、毎日義務的に、貴方も今日の夕方からご存じのように、海に入っています、しかし、これまでのところ何も成果はありません。本題に入ります。一言で言うと、私は自分の青春の罪のために贖罪しています」。

「ははあ」と私は呟いた。しかし同僚は、　ー　私の考えをすぐに察して、強調して頭を振り、嘆息した。

「いや、違います、違う。まあ、そんなものであれば、私は自分を幸せに感ずることでしょう。貴方がお考えになっていることと全く正反対のことが、私の錯乱の理由となっていまして、これが、いやまさに私の惨めな点です。請け合いますが、酒も女も我が青春の日々、私には無縁でした。私はただ余りに堅物であったのであり、そのことを今日、苦悶、苦痛の中、ジルト島の水着姿で後悔しています。いや、私は我が青春の日々、放蕩三昧であれば良かった。私は我が空想の首の手綱を放り出して、投げ飛ばされ、首の骨を折るかもしれない冒険に、然るべき時、身を晒しておけば良かった。同僚殿、同僚殿、私を狂わせているのは、抑圧された詩文なのです。　ー　はるか四十年の人生経験の後、狂ってしまった。ドイツの月光が私に復讐しているのです。私に何らかの海水、酸っぱい水、苦い水が効き目があるか、私は懐疑的です」。

「ドイツの月光ですか」。

「勿論です。六回言われてもそう。月は私ににやりと笑いかけて、私を狂わせます。この大ファウレンベルクのプロイセン王室領、郡裁判官のフリードリヒ・ヴィルヘルム・レーネフィンケを狂わせます。そして私は単に自らの罪を償うばかりでなく、いや、その上我が先祖の無数の世代の借財[罪]をもこの輝く怪物に対して支払わなければならないのです。いや、同僚殿、私は時にとても不幸に感じています」。

「同僚殿、貴方はいずれにせよ、とても興味深い人間です。興味津々、固唾を呑んで、もっと正確な説明をお願い致します」。

「語るまいことか。我が父は王室領の役人でした。我が祖父も同様。我が曾祖父も王室領役人であったことを私が疑念に思うようであれば、私は阿呆でしょう。勿論我々同様、田舎の役人でした。私の母はドイツの女で、同様に私の祖母も、勿論曾祖母も劣らずそうでした。彼女らも皆王室領の田舎役人の家系の出です。詩文について彼女らは何も知らなかった。月に注目するのは、単に月が愛想良く、時が来て、髪を切る時だ、とかあるいは瀉血する時だと知らせてくれる限りのことだったのです。いや彼女らはこうした無視等閑に対する贖罪をただ私に任せたのです。私の母はクラウレルン[Karl Heun,1771-1854,通俗作家]を、私の祖母は聖書と賛美歌を読んでいました。私の曾祖母は多分何も読めなかったことでしょう。私の父方の先祖は、自分らの文書を読み書きし、官報を読んで、ひょっとしたら新聞も読んでいたかもしれません。私はつい最近まで彼らの立派な末裔でした。しかし四十八年の年が来て、私の月が昇ったのです」。

「ははあ」と私はまた叫んだ。しかし同僚の郡裁判官はまたしても頭を振って[急進リベラルとして排除されたのではない]、言った。

「いや、違います、違う。十二回違う。貴方は今回も先ほどに劣らず間違っています。貴方は我々が『昔の[穏健]リベラル』という言葉で理解しているものをご存じですか」。

私は中国磁器の絵柄に見られるスムーズな風に頷いた。

「それでは昔の穏健リベラルであれば、月を憎んだり、月を見て逃げ出すことは皆目ないと私に言明なさいましょうな」。

こう言明しないことは私には考えられないことであったろう。私はそのようにして、しかし同時に質問した。

「貴方は一八四八年のとき、何歳でしたか」。

「私は丁度プロイセンの司法官試補の年齢でした」。

「それは素晴らしい、話しを続けてください」。

「三月に月は屋根の上に昇り、ベルリンの我が部屋を照らしました。私は申しましたように、信じられない思いで、目を擦ることになりました。まだこの若造月[学ラン]の危険性について皆目予感していなかった。しかし翌年四九年になると、一つの予感以上のものを感じました。興奮した民衆の集会から熱い頭で戻りながら、私はまさにこの頭を窓台に置いて、眠っていました。そしてこの意地の悪い星が数時間、私の頭上で輝いていました」。

「それで」。

「すると翌朝、私は頭痛ばかりでなく、幾つかの事象や人々に対する明白な反吐を感じました。普段なら私が、感受性、感情、敬意の点で、とても大事にしていた事象や人々なのです。詩文が顕現したのです、　ー　同僚殿、詩文がプロイセン王室領の司法官試補に

顕現した場合、何を意味するかご存じですか」。

「いやはや、分かりません。我らの仕事はただ、我らのそれぞれの国境について互いにやり取りすることだけであったと思い出してください」。

「その通りです。しかし私は忘れておりましたが、しかし今日私はそのことを話すことが出来ます。貴方は夜の間、平静に堅気にローマ法の学説彙纂とラント法について夢見ていたとします。そして目覚めてからそれらの夢の内容をまた思い浮かべてみます。貴方はただ余りに上手にやってのけて、それから悲惨なことが始まります。貴方は枕から貴方の図書へ目が移ります。突然、飛び跳ねたいという抑えがたい衝動が生じて来て、この襤褸文庫全体を両腕に抱きたい、そして　ー　そして　ー　何ごとか　ー　言い難い何ごとかをこの文庫で敢行したくなります。しかし貴方は自制します。というのはいかほどの金を貴方はこの襤褸文庫に注ぎ込んだか、思い出すからです。　ー　そして貴方は幸い、貴方の更なるキャリアのために自制します。そして貴方のコーヒーの準備にかかります。それから同時に、自分は相変わらず相応に昇進しないまま、国家に奉公しているという思いが激震を伴って襲って来ます。そのことでまた貴方の胆汁ばかりでなく、貴方のコーヒーも煮えくり返ります。　ー　それでも貴方は胆汁をぐいと飲み込み、コーヒーも雨樋に投げ棄てず、これも飲み込みます。　ー　貴方は幻想から目覚めて、新たな幻想を抱きます。これが我らの敵、月の最初の効果の一つなのです。いや、貴方は奇妙な幻想を抱きます。最も奇妙な点は、このことで自分のことを少しも咎めないということです。ー　後で貴方は役所に行き、途中で上司に出会って、丁重に挨拶します。そして今や　ー　一気に　ー　別の夢が割り込んで来るのです。貴方は、頭を開いた窓台に置いて、月に頭を照らされながら夢見ていたことを思い出します。貴方は立ち止まって、上司長官を見送ります。すると唯一ただドイツの月のせいで、貴方は思い付きます。貴方は人間として、自分の先祖達よりも沢山読書して来たことを思い付きます。決まった新聞ではなく、複数の新聞を、その他にシラーやゲーテ、ヴォルテール、ルソー、ベルネ[Börne, 1786-1837]、シュタール[Stahl, 1802-1861]、ランケ[Ranke, 1795-1886]、ラウマー[Raumer, 1781-1873]、それに無数の最新の極めてリベラルな類いの詩人達の一群です。貴方は大学の酒盛りで歌った幾多のことを思い出します。ひょっとしたらまさに朝の空の透明な青さの中、貴方の上に優しい三日月として昇っているかもしれないその穏やかな愛らしい月が、口を嘲笑的に歪めて、大きくなり、　ー　大きくなり、　ー　再度満月となります。一方貴方は来る日も来る日も、週ごとに、職務に従事して行きます。貴方は際限もなく不快になり、言い難く愚かに、馬鹿に、没趣味に思われて来て、やはり愚かな議事録を作成し、全く貴方の鼻はそれにお似合いだというわけです。この鼻と共に貴方は家に帰り、偶々貴方の薄くなって行く髪の毛を鏡で見ます。その際、貴方の髭に白い毛が混じっているのを見つけますと、すると貴方の良き友、月はご機嫌になります。というのは月は、貴方をよりしっかりと呪縛出来るようになり、他のものの場合よりも、より容易に自分の道に連れ回すことが出来るようになるからです。次の時、貴方がまた孤独に夜、窓辺に座っていると、月は貴方の髪の毛を掴みます。貴方は一つの胸、優しく、情緒一杯の、柔らかな胸、貴方のすべての憂鬱を振り注ぐことの出来る胸、自分の憤怒を訴え、自分の嫌悪や苛立ちをぶちまけられる胸を求めます。貴方は目覚めて、夢見ており、月は以前よりも更に悪し様に嘲笑します、　ー」。

「レーネフィンケ、ちょっと止めてください」と私は両手を額に当てて、叫んだ。「い

つもまず、誰か他人がやって来て、その人が自分固有の過去や現在、未来の状態を明瞭に客観的に説明しなければならないのか。同僚殿、全く貴方の話される通りだ。　ー　神経質に、貴方自身同様、私も貴方の話しの展開を追っている。続けられたい。　ー　まこと、月は怪物だ」。

「月はそうです。とりわけ、このドイツの月はそうです。さて、この月は再度、屋根の上に昇り、貴方は肩に頭を乗せて、目は呆然と当惑して、その月の露骨なしかめっ面を眺めます。すると突然、高い小麦の実る畑が、貴方の眼前で揺れ、茂みで小夜啼鳥や他の小鳥が鳴いて、池が稲光し、小川が呟き、貴方も、同僚殿、同様に呟き始めます。何を呟くでしょう。勿論、何らかの響きの良い洗礼名、エとかアで終わる名前、クロティルデ、ヨゼフィーネ、マリーア、アマーリア、　ー　私の知ったことでしょうか、何でもよろしい。決定的です。　ー　月が貴方を得た。月は貴方を、貴方にとって大事なものすべてと共に押さえたのです。この策謀的な、奸計に満ちた寝業師、月は、このドイツのモ　ー　ント[月]は、押さえたのです。貴方は月を我が友と呼び、腕を月の方へ広げて、一粒の涙が月を見て流れ落ちる気分であると感じています。かくて貴方は明々白々に際限もなくうつけになっているのです」。

「その通り」と私は言って、更に何も言わなかった。しかし同僚は、メランコリックな瞑想の中、長い間、黙っていて、ようやく新たに言葉を発して、続けた。

「私は軍事改革の間、陛下が我らの首相にかの有名な象徴的杖を贈った時、国の領邦議会議員となっていました。私は勿論多数意見に属していて、この時、　ー　この時、一八六七年ですが、　ー　ソネットを、　ー　いいですか、ソネットですよ、　ー　かのいとも尊い首相殿に賛辞のソネットを作り、これを国民新聞の広告欄に印刷させました。私のこと、月に対する、ドイツの月に対する私の立場が分かりますか」。

「完全に分かります」と私は若干沈思して、述べた。

「ならば、手短にまとめてよろしいでしょうし、そうしましょう。とても響きが良くて、エとかアに終わる名前と当然その名前保有の女性、これは当人には分かっていて、　ー　月も承知です。というか当人は早速このような名前とその名前保有の女性を求め、そして月がいそいそとこの名前とこの名前の女性を探す手伝いをするというのは、自明のことです。どんな取り持ち屋も、これほど熱心に、これほど器用に、このような事例の手伝いをしてくれません。いや、月は、我々自身がミューズに求愛をする紙片を照らしてくれます。月は、我々が舞踏会場、コンサート会場、劇場ホールの出口で彼女を待っていると、我々を嘲笑います。いや、我々が彼女を家まで送ることをその老母が何も反対しない場合、月は夜遅く家まで同伴してくれます。いやはや、月以上に、誰が阿呆な人間の帰路を照らす術を心得ていましょう。どうでも良いことですが、しかし多分発せられる質問でしょう、つまり、彼女の老父がある朝『よろしい』と言ったら、その責任は月にあるのか、どうか。貴方も結婚されていましょう、同僚殿」。

この質問は唐突に私に浴びせられて、それで私はほとんど椅子から飛び上がり、まこと一瞬私はまず集中してから、ようやくそれに肯定の返事をすることが出来た。

「結構、それではこのテーマに関しては、これ以上余計なことを止めましょう。月はやはり頭韻に影響を与えているのでしょうか。ほら、月が窓から覗いています。　ー　貴方が私に先ほど慰めて指摘された雲も、月には無効無気力無駄骨です。野原は真っ白な光の

中にあります。いや、何と素敵で、何と素晴らしいことでしょう。同僚殿、この世界は何と刺激的でしょう。戦争と平和は何と壮麗でしょう。詩文は天辺から滴り落ちて、そして下の方から芽生えて来ます。耳を澄ましてください、　ー　永遠の海の音楽を聞いてください。波は、ドイツの月光の中、不滅の舞踏を踊っています。一緒に踊らない法がありましょうか。私の魂は、世界の調和的潮流の中、一つの滴、輝かしい、光に満ちた滴となります。同僚殿、優しい自然の中へ出て行きましょう。このむっとする部屋の中に座っているのは、罪です。円形建物の外の大地と海は、ドイツの月光の中、あり得ないほど美しい。行きましょう、飲み干して、さあ、これから　ー」。

「もはや恐くないのですか、...」。

「何を私が怖がるというのです。親愛なる、良き友、まさにご対面です。月は我々皆に勝利します。月の光の中、我々皆が勝利を得ます」。

「ケーニヒグレーツ近郊の戦いでもそうですか」[1866年、フリードリヒ・フォン・プロイセン皇子はこの戦いを「愚かさに対する知性の勝利」と述べた]。

「この戦いもそうです。これに対していかなる異議が称えられようとも。そして将来の偉大な、瞠目すべき勝利の戦争も同様です。いや、何という空気、何という光でしょう。もう一度砂丘に登って、もう一度神聖な海を一瞥しましょう」。

「そして後ほど、月光の中に立ちながら、更に貴方の人生展開を話して頂けますか」。

「喜んで、笑顔で、すぐ話しましょう。もっとも私見によればもはや話す必要ありませんが。よろしいですか、事実というものは、快適に、また、恐ろしく、確定しています。　ー　月は時折このプロイセン王室領の司法役人、レーネフィンケを圧倒します。このレーネフィンケは結局のところ、自らは、自分が巻き込まれた酩酊、陶酔に対し、何も異議を称えられないのです。いや、私はドイツの月光の中で、一人のドイツの娘を見つけました。私はこの娘の両親の同意を得て、この娘と婚約し、後に結婚しました。今日もなお十八歳になる娘も授かって、異議なく妻を所有しています。ひょっとしたら後にこの二人のレディーを貴方に紹介出来るかもしれません」。

「それでは、　ー　それでは実際一人っきりではなく、　ー　こちらジルト島を単独ではなく、散策されているのですか」。

「そうです。私は妻と娘と一緒にあちらのヴェスターラントに住んでいて、二人の監視の下、こちらへ海水浴に来ています。何と想像されていましたか」。

「同僚殿、私の馬鹿げた質問をお許しください。とても風変わりな夕べで、とても楽しい出会いです。とても余りに話しが面白かったので、すべてご容赦願います」。

「まあ、落ち着いてください。我々は互いに完全に了解し合っています。私は貴方をすでに何日も、貴方に気付かれずに、目に留めていました。貴方は人間として私の目を引いた。私は貴方をすぐに法律家と察しました。運命が先ほど私を貴方の腕の中に飛び込ませたのは、意図や完全な正当性がなかったわけではないのです。我々は今晩互いに話し合う必要がありました。これは治療の一環で、やはり大部分塩[機知]辛い海水の影響です。しかし月は、　ー　貴方に再三この立派な月のことを指摘しなければなりません。いや、私は月に呪縛されていて、死によって解放されるまで、私はこの呪縛に留まらなければなりません。同僚殿、月によって、そして現在の時節と世間状勢の加勢を得て、私は、私の家庭で詩人となりました。私の気分、並びに浜辺での出会い、並びに私の目下の精神状態に

関しまして、これをすべて受け入れてください、私のことをすべて理解してください」。

家庭の中の詩人、レーネフィンケ。私は数歩後ずさった。この狂った人間は、ドイツの月光の中、明瞭にジルト島の私の眼前にあったけれども、この詩人という言葉に私は目を見張った。目に柄付き眼鏡を当てて、砲手がどのようにして火縄に火を起こすか観察していたけれども、びっくりしてしまう砲声を聞いたようであった。

「私は、無限に続く散文生活の相続人ですが」と同僚は続けた、「私は我が敵に征服されました。そして月が水平線上に昇って、覗くと、そのたびにどんなにじたばたもがいても囚われてしまいます。私は政治では理想主義者で、我が世帯の指揮では、詩人となります。私は自分が帳簿をヘクサーメター[六歩格]やオッターヴァ・リーマ[Ottava rima、八行詩体]で記入するであろう時節の到来が見えます。時間の経過の際には、共鳴や情緒に憧れます。しかし　ー　同僚殿、同僚殿、　ー　私は私の妻と娘　ー　私のレディー達に理解されていません。不審がられます。これが私の神経を砕いているもので、私は　ー　彼女らの　ー　我がレディー達の　ー　監視の下、こちらのヴェスターラントへ連れて来られているのです。それでは、よろしければ、家へ帰ることにしましょうか。段々ととても涼しくなって来ています」。

彼は私の腕を下から、　ー　とても優しく取った。そして我々は腕を組んで、ジルト島の月の輝く荒野を歩いて行った。私はこれまで私の人生でかくも詩人的郡裁判官と腰を突き合わせて、並んで歩いたことはなかった。彼、この興奮した同僚は、声高に、ますます声高に朗詠した。彼はドイツ語や外国語で、まことに驚嘆する博識振りで、叙情詩を披露した。月に寄せる詩が、自由に対する賛歌や、あらゆる考えられる限りの、またあり得ない敵に対する戦闘歌と混じり合っていた。熱帯の風景や気分の絵柄が、馴染みや馴染みでないロマンツェやバラード、それも歴史的素材や非歴史的素材のもの共々、千切れた詩節となって入り混じり出現した。レーネフィンケは神々しくなって、彼の敵たる月は、本当に彼を見て喜んだことであろう。しかし彼や私の上司達の複数の者が、その倫理の面ばかりでなく、身体の面でも悪寒を覚えたことであろう。北の遠方で、カンペンの灯台から交互に煌めく明かりが嘲笑家の目のように点滅して、その周辺に何か異常に滑稽なものがあると注目を促していた。荒野の羊は、その繋牧索、つまりつなぎの綱に我々は躓いたのだが、我々をびっくりして見つめ、仰天して見送っていた。

かくて我々はヴェスターラント村に次第に近付いた。しかし我々は到達する前に、呼び止められた。そして外的姿やその声調から察するに、極めて愛想の良い仕草で、夢中の、夜間の、月光の散策から現実世界へ引き戻された。屋根から我ら両人は幸い落ちなかったのである。

月の光線から造られたかのように、荒野の地面の盛り上がった地点に、はなはだ可愛く、優美な少女の姿が我らの前にあって、まことに魅力的な少女の顔が、あたかもメルヘンのように愛らしくお辞儀をした。大ファウレンベルク出身の郡裁判官レーネフィンケが魅力的な顔をすることが出来たか、私は言えない。しかし彼は素朴な、それにまた一種陽気な顔をしていて、先の時間の逆上せでこの顔はそれどころかとても美しくなっていた。それだけ一層激しく、私は今や、彼がその可愛い娘を見つめるときの表情に驚かざるを得なかった。一層更に陽気に、一層更に幸せになるのではなく、突然彼のすべての面影が間延びして消滅し、すぐに不機嫌の乱れた皺に縮こまってしまった。

「パパ、ようやく見つけたわ。そうよ、やっとだわ」と妖精のような品のいい娘が我々に近寄って、叫んだ。

「まあ、ようやく帰った」と同僚は呟いた、「ここにいるのは、　ー」。

彼は言い終えなかった。この若いレディーがすぐにその言葉を遮ったからである。

「パパ、あなたを本当に長く待っていたのよ。ママはとても立腹しています」。

「そうかい、はて」と同僚は呟いた。「はて」と私も魂の奥底で言った。

「ヘレーネ、こちらへおいで。一緒に帰ろう」と美しい娘の父親は宥めて言った。しかし月光の中の妖精は更に素っ気なく応じた。

「結構よ、パパ。私はママと一緒に帰ります。ママがもうやって来ます。どんなに長く待っていたか、パパに話すことでしょう。ママ、パパはようやく見つかった」。

いや、勿論、父親レーネフィンケは、実際ここにいた。この時、彼はもはやドイツの詩人を引用せず、外国の詩人も引用しなかった。しかし同時にドイツの月光の中、ママが現れた。それもかなり素早く、精力的であった。私は夫人と出会う前に、喜んで別れを述べ、辞去したかった。しかしこの同僚は私をまこと竜騎兵の腕力で強く握って、囁いた。

「いや、友よ、私は貴方を紹介する必要がある。もう立ち去りたいのかい。いや、同僚殿、貴方を私の妻に紹介するのを許されたい」。

この同僚夫人とも、切に知り合いになりたいと述べる他、何が出来ようか。

ヴェスターラント地区の前列家並みの間を進みながら、この立派な夫人は、今や我々の許へ達して、自分の娘の腕を取った。彼女は私を最初、当然、見過ごしていて、唯一ただ家族の案件のことを述べた。

「レーネフィンケ、やっとだわ。また昔からの、いつもの無鉄砲ね。いつも言っているでしょう、レーネフィンケ、　ー」。

「いや、愛するヨハンナ、ご覧よ、いいかい、こちらは我が友にして文通相手の、　ー」。

かくて人間は屏風として、隙間風とリューマチ患者の車椅子の間に差し挟まれることが稀ではない。紹介が行われて、私は自ら生来のお人好しを発揮して、自分に割り振られた役目に適応した。若干の丁寧な言葉のやり取りの後、我々四人は一緒に素朴で、低い、平和的な、フリース人的小さな家々に向かって行き、これまで我が同僚の精神状態に関し、曖昧なまま最後まで残っていた一点も、今やこの短い帰路、完全に明瞭になっていた。

いや、何と月は、ドイツの月は、両女性とプロイセン王室領の郡裁判官を笑って見下ろしていたことか。このドイツの月は復讐の術を心得ている。月はその手段を有し、その手段を承知している。月はその手段の使い方を心得ている。我が友レーネフィンケの言は完全に正しい。前もって財産目録ノ利益[目録を越える債務は継承のとき免除される]という恩恵を受けることを許されないまま、数世代にわたる、数世紀にわたる遺産を継承しなければならないというのは、惨めなことである。まず、かの青白い、満ち欠けする若造月に注意を払わず、それから軽視し、最後にその影響力に何の大胆な抵抗もしないまま引き込まれ、

ー　身を委ねてしまうというのは、情けないことである。

この恐ろしいことを全体丸ごと、自らの許で体験するためには、まさに人は一人の男、

ー　ドイツの男にして役人であることが必要であろう。ヨハンネ・レーネフィンケ夫人とヘレーネ令嬢は、人間に対する月の注文をかつて顧慮したこともないまま、全く月の側に身を置いて、同様に彼を月に対する軽視者と見て、復讐していた。二人がいかほど夫と

父親とを更に引きずり下ろすことが出来るか、予測出来ない。　ー　十分に低いところまで二人はすでに彼を下ろしていた。

私は夕方遅く、また我がパン屋の許に座っていた時、この日の体験や経験を反芻しながら、半ダースのパイプを吸っていて、真夜中頃、こう決心するに至った。私の目下ゲッティンゲンで数学を専攻している息子に、ジャン・パウル・フルードリヒ・リヒターの全集を彼の間近の誕生日祝いとして贈ることにしよう、と。

ホラッカー
(Horacker 1876)

第一章

以前ニュージランドの野原でこれはとても頻繁に見られるものであったが、現在もはや見られない。捕まえた最後のものは、剥製にされ、とても稀なものと評されている。この鳥キーウィのように、　ー　最後の鳥キーウィのように、本来、最後の副校長も剥製にされて、二度と現れぬものとして尊重されるべきであろう。我々は善意でそのために協力できることを、喜んで差し出すことにしよう。ひょっとしたら別の者達は後で、麦藁や針金、樟脳を、樟脳は衣蛾に対する予防として、提供することであろう。というのは、気まぐれの虫に対しては、我々自身のためにもこの虫の絶滅を避けたいと思うからである。我々は楽しい話しを書きたいと願っている。そして我々が誰かにその恩義を負うているとすれば、それは我らの老公、最後の副校長がその人である。彼は自分に対し涙ながらに話された嘘話しをいつも見破っていた。その一方立派な戯け噺を自ら快適に信じられる話しに仕上げていた。勿論彼は自分が信じ込まされた話しの回数について帳簿を付けていなかった。しかし他の人々は意地悪に、あるいは軽率に、これに関し帳簿を付けていたそうである。例えば彼の生徒達ばかりでなく、彼の同僚達も。

さて我々が当地の最も高い山[Köterberg]、　ー　海面よりわずか一千八百フィート[550 メートル]以上でしかないが、　ー　これを登ってみると、我々は一望して地平線ばかりでなく、国境線をも把握できる、つまり彼エッカーブッシュが、大学時代の三年間を除いて、越え出て行かなかった国境線である。きっと生まれ出たとき相当な快適さを感じられたような一帯である。言葉の真の意味で、まことに美しい一帯である。

シラーの『クセーニエン』でも言及されているある川[ヴェーザー川]が、幾重にも葛折りにうねって蛇行している。山岳の一帯が、野原や耕地、森と優美に交替している。ある大きな、その本流と同じく無名でない森[トイトブルクの森]がかなりの距離、その本流のすぐ近くまで迫っていて、そしてはるか視界を越えて西へ延びている。きっとその周りで然るべき政治が営まれている多くの教会の塔が目に留まる。しかしとりわけ我々の目を惹き付けるのは、天を目指して先端の鋭い、スレート葺きの屋根の塔である。我々は或る風見の塔に惹き付けられる。つまり輝かしく、金鍍金されて、この塔の上で回転している風見で、この風見を副校長のエッカーブッシュは、その二級生[ギムナジウム]の窓から、風がどの方向から吹いているか正確に知りたいとき、見上げるのである。この老紳士は、すでに三十年以上前から、風に関し帳簿を記していて、この地区にとって、天候方面での尊敬される権威となっている。洗濯物のために陽光を必要としている心配症の主婦は、彼の許に人を遣わして、尋ねる習慣である。

「副校長のエッカーブッシュさん、今日は。明日雨が降るでしょうか」。

この老公はいつも一つの返答を与え得た。そして後で、自分が間違っていたと判明しても、彼は決してその間違いを自分のせいにせず、常に、通常気象学的観察に遅れを取っているハパランダや、ヘルネザント[両方ともスウェーデン]、あるいはコンスタンティノープル[いずれも気象ステーション]の忌々しい奴のせいなのであった。学問によって天候自身に錯誤の罪が着せられるまでには、まだ相当学問が発展する必要があろう。

我々が先に述べた山の頂上に立って、周りを見渡しているとき、太陽はその風景の上にあった。時折奇妙な形と色合いの雲の塊が青空の上を滑って行き、その影を野原に投げか

けるとき、これはただ立派な一日の魅力を高めるだけであった。我々は快適な気分、どんな地上の事物をも愛でる気分で下りて行った。このことこそが、我々がかくも高い、　—　千八百フィートの高さに及ぶ、　—　人間どもの頭や屋根の上の山頂にまで登ったまさに唯一の理由である。我々は山を下り、まず密なハシバミの茂みの藪を縫って行った。我々は丁寧に小枝を脇に折り曲げて、その小枝が額に当たらないようにした。いや、我々は克明に、副校長のエッカーブッシュがここの藪に座って、葦笛を作り損なった[陰徳による陽報とはならなかった]日々を思い出す。というのは彼は退任したとき、全く「満額の給料」とは言えない額で年金生活に入ったからである。　—　高い梢の森を通って、我らの道は続いていた。清潔で美しい森の草原を過り、かなり汚れた村々を抜けていた。とうとう我々は最後の生い茂った、更に難儀してよじ登る隘路の末、絶壁状の山腹の端に達した。この山腹の下では、川が勢いよく、元気に流れ去っていて、この川の上で見られる唯一の悠長なものは、ゆっくりとようやく山の方へ這って行く船であって、これは石ころの船舶用小道を咳き込む駄馬どもが曳航して行くのである。今や道筋は、右手下の方へジグザグに山腹を下って行き、野道を越えて、我々を別な村、この奔流河畔にある村に案内した。

ここで我々は渡し舟と船頭に出会い、川を渡った。二人の、丁度少年時代を卒業したばかりの、その上着とズボンが一夜にしてアスパラガスのように育った身体には短すぎるものになってしまった若造ども、　—　いずれにせよ、後期三級生、前期二級生が一緒に渡った。その一方が相手にこう語った。

「おい、カールよ、今日から四週間後、驚くであろう奴を私は知っているぞ」。

「誰のことだ」。

「勿論、我が老公だ。どんなにクソ勉強をし、猛勉強をしても、この三ヵ月あの老公が、俺のことをものぐさ太郎、臭いとぬかさない日はなかった。まずは、これらの大いなる休暇の後、今日から四週間後に、奴に嗅いで貰おう。彼奴が鼻を閉ざさなかったら、奴はきっとひどい鼻風邪なんだろうよ」。

優しい母親の別の理想を体現している若者は、大の字に渡し舟のベンチに寝そべっていて、何も答えず、現存在を無限に享受していた。ただぶつぶつ呻いて、自分の同意と快適さを表明していた。

大いなる休暇、　—　夏休み休暇[シリウス日]が始まった。二人の優しい少年は、その緑色の植物収集箱と手斧を持って、天上的束縛のない広大な自然への最初の自由な遠出から、父親の家へ戻って来ることになった。いや、もし人が、この二人の若い衆のうちの一人の気分、立場に立てるのであれば、何の物惜しみをしよう。この両人の立場、気分に最も好んで人はなりたいと思うであろう。人生の至福がスプーン一杯となって差し出されたとき、誰がその人生の至福を十分に味わい尽くしたであろうか。

少なくとも出来るだけ速やかに我々は先の副校長、ヴェルナー・エッカーブッシュ博士との正確な面識を得ることにしよう。良いチャンスはすべて過ぎ去ってしまい、めったに再来しない。　—　この世での立派な日々は皆、過ぎ去ってしまう。我々が手を老エッカーブッシュに置いた瞬間に、この夏休み休暇もすでにまた終わりに近づいていて、小舟の少年の気分はもはや、　—　四週間前の気分と同じではない。

第二章

さて、読者は全く別のことをこの話しの中で想像されていることであろうが、この話しの記述者は精神的にとても共感して体験した話しなのである。

千もの人々の窓の向こう側に一軒の新しい家が建てられるとする。すべての千もの人々が、地下室の撤去から最後の窓ガラスの設置までの建造を興味深く追跡するであろう。しかしその千人のうち九百九十九人はただこう言うだけであろう。「その家は私の気に入った」、 ― あるいは、「その家は私には気に入らない」、 ― しかしいずれにせよこう言うことだろう、「これは私にとって住まいとなろう。 ― ソファーを置いたり、 ― 図書を置いたり、戸棚を据えたりできよう。それに眺望も申し分ない」。 ― そして ―― 千人の中にある者がいて、その人は静かに若干メランコリックな物思いに沈んで、自分と運命とに問いを発することだろう。

「この新しい家の中で一体全体何が起きることだろう」。

この人は自分の立派に仕上げられた四壁の中から、向こうのまだ空の窓枠の中、大工の仕事や左官の仕事を覗き込み、額を窓ガラスや自分を向こう側と隔てている薄いガラス壁に押し付けて、生誕や性と死について、揺り籠について、棺について考えることだろう。我々が今日書いているのは、この一人の人物のためであって、常に我々はこの人のために書いて来たのである。しかし、それでも、我々は多数の読者を願っている。

我々は今一八六七年に入って半年である。北ドイツ同盟が設立された。先の副校長は、北ドイツ同盟の世界史的転回に関し、完全に了解している一員である。彼の以前の生徒のうち二人がプロイセン軍の下、ケーニヒグレーツ近郊で戦死した。[一八六六年7月3日、プロイセン軍がオーストリア軍に勝利した]。そして一人が、ハノーファー軍に加わって、ランゲンザルツァ近郊で戦死した。[1866年6月29日、プロイセンがハノーファーとオーストリア連合軍に勝利]、 更にもう一人、 ― 「仕様もないならず者だが、その他は立派な若者」がハンガリー軽騎兵の攻撃に加わって、クストッツァの戦いで消えた。[1866年6月24日オーストリア軍がイタリア軍に勝利]。

「この哀れな悪漢は、私をしばしば十分に猛然と怒らせて、天井を突き破らんばかりにさせて、私は何度も伝えたものだ。そなたは私の棺を閉める釘となろう、と。 ― それがこんな風になってしまった。…愛する天よ、結局このことが彼に対して許せない唯一のことになっている。今や夢の中でさえも、時折、彼のことを思い出さざるを得なくなっている」と老エッカーブッシュはよく言っていた。

「少なくとも私はこの問題を片付けました」と同僚の、あるいはセミ同僚のヴィントヴェーベルは言った。「本日まで私の夢の中に彼らが現れたことはありません」。

「いや、同僚殿、貴方には若い夫人がいらっしゃるし」と老副校長は言った。

一八六七年の七月、この月は珍しい月であった。驚くほど、あらゆる紛糾する出来事が世界で生じて、すでに混乱した人類に、更に慎重に考え、熟慮するよう要請がなされた。パリでは万国博覧会が開かれ、ルイ・ナポレオン、つまりナポレオン三世[在位1852-71]は，メキシコのマキシミリアーノ[Maximilian Joseph 1832-67 、ナポレオン三世によってメキシコ皇帝]がまさにケレタロで劣等なファレス[Benito Juarez 1806-72、フランスに抵抗]によって射殺されてしまっても、自分にとっては、とても簡単なことで、まことに心楽しい気分であるかのような振りを相変わらずしていた。レディーの髷の中では美食の胞子虫類が発見された。

サンタ・アンナ[Antonio Lopez de Santa Anna 1797-1876]、以前のメキシコ共和国の大統領もこの年に亡くなった。[ラーベの勘違い]。ハインリヒ六十七世[1789-1867]、侯爵領、ロイス家の、弟系家系の支配の君主もその父祖の許に身罷った。ゲーラ市[チューリンゲン]は喪である。ギリシアの国王オットー[バイエルンの王家出身、1862年追放]が逝去した。しかしアテネが悲しんでいるのか、定かでなかった。いずれにせよ、ドイツではトゥルン・ウント・タクシス侯が四百年間の郵便特権を放棄したとき[プロイセンの圧力、1867]、誰も弔意を表さなかった。相変わらず一八六六年の戦争については多くの本や冊子等が現れている。しかし最大の驚異はこの月末に生ずるであろう。トルコ人たちがライン河畔に登場するのである。スルタン、アブドゥル・アジス[1830-76]がコーブレンツに国王ヴィルヘルムを訪問する。

さてしかし考えて頂きたいのは、こうしたこと一切、それにその他の数え上げられなかった事柄も、まさに我々から、つまりこの高い山々から眺められた一帯の関心を十分に引き付けるものではなかったであろうという点である。全く、 — 真逆に関心を引かない。

この一帯は皆目、パリの万国博、皇帝ナポレオン三世、メキシコの皇帝、ロイス・シュライツ侯爵、サンタ・アンナ大統領、ギリシアの国王オットーを気にしていない。この一帯は単に — ホラッカーのことを気にしているのである。

ホラッカーは一帯で蔓延していた。

しかし副校長エッカーブッシュは七月二十五日の木曜日、つまりトルコ人襲来の日の後、高等学校教諭のノイバウアー博士と一緒に二時から三時の間、自分の庭園を散策していた。我々もその最中に居合わせている。 — 要するにラテン語生徒の言う、事ノ最中であって[ホラティウス、『詩論』148:常に本筋に飛び込んで、まるで周知のことのように、その物語の核心に聞き手を引き入れ：鈴木一郎訳]、我々はここでラテン語生徒を相手にしなければならない。いや、我らの時代錯誤の学識よ。顔に汗して我らの文学的パンを食する我々は、何かを昔学習したということは、何を意味するか承知している。

第三章

その若い文献学者は若干寝ぼけて、少なからずうんざりしているように見えたが、老公はとても青い目を輝かせて、元気であり、両人は木蔦壁沿いの庭園の影の側をあちこち歩いていた。

若い方は、「では、こんなことのために、この灰色髪の道化師は私の甘美な休暇の昼寝の邪魔をしてくれたのであろうか」と自らに呟いていた。

「食後、沈思の五分間があれば、私には十分です、同僚殿」と老公は語った。「すると私はまた何にでも取り掛かれます。では、貴方もガンゼヴィンケル[鵞鳥の隅]へ一緒に行かれますか。どうです。ひょっとしたら、自由な日々の中での最後の遠出となるかもしれません。ご存知のように、すぐにまた惨めな労苦が始まりましょうし、明日にも雨が降るかもしれません」。

「勿論、私にも分かります」と高等学校教諭は呟いた。「それだけに、 —」。

彼はその文を終えられなかった。しかし楽し気な老人は、彼の言いたいことをすでに察知していて、一枚の千切った木蔦の葉を彼が更にしばらく噛み続けるのを、他人の不幸を喜ぶ、陰謀家風に見守っていて、最後に追従的に言い添えた。

「ヴィントヴェーベル同僚殿も一緒に行かれます。まもなく現れると思います」。

「それは勿論、とても楽しみなことです」と高等学校教諭は喘いで、言った。咄嗟に立ったままでいて、イギリス木蔦の苦い茎を吐き出していた。「いや、私は丁重にお断り申し上げます。別の機会にお願いします。…　この休暇の最後の日々、私は全く別の用があります」。

「勿論、とても有益な御用があるのでしょう」と副校長は呟いた。そして自らの裡で言い添えた、「いや、汝、英知の神殿に新たに差し込まれた明かりよ。英知が、汝を至高の高みから送り込んで以来、勿論初めて、以前は何という暗がりの中で暮らしていたか分かるものだ」。

上品な年若な方の同僚は、より年長の男がその胸の中で温めている世辞に気づいたように見えた。

「いやはや、何という仲間だ」と彼は自らの裡で呟いた。そして学部一同は、一人の偉大な、新たに首都から田舎へ転出された自負心のげんなりした沈黙の発露を多とすることになった。

そしてまたしても老エッカーブッシュはノイバウアー博士が呟いたことに勘づいていた。

「いやはや」と彼ははなはだ満足気に言った、「世間が我々にとって、時折、現実にそうであるよりも、もっと瑣末であるように見えるのは、一種のエレウシスの秘儀であります」。

「貴方の同僚ヴィントヴェーベルがやって来ます」と高等学校教諭は言った、「ここだけの話し、同僚殿、一つだけ私に理解できない点は、なぜ貴方がこのような空ろな中身のない若造と親密なお付き合いをなさるのか、いや、これを毎日の交誼と親密な友情の礎となさっているのかという点です。この方を私の指関節で叩きますと、いつも空ろに響くものです」。

「本当に」と老公は尋ねた。そして更にこの発せられた言葉により静められた見解を付与した。

「張り子の、…」と彼は始めた、「筆達者」と彼は続けて、深く呼吸して結んだ、「まあ、必ずしも誰もが衒学的製本屋の目で世間を見ているわけではありません」。

彼はそう言って、激しく煙草のパイプを吸って、先を尖らせた唇から煙を七月二十五日へ吹き出した。

「痒みや引っ掻き傷のない地球はありえないでしょう。ようこそ、親愛なるヴィントヴェーベル。今この時ほど、貴方に会いたいと切望したことは長いことありませんぞ」。

高等学校教諭殿は木蔦の壁から新たに葉を一枚千切った。同僚のヴィントヴェーベルが旅支度をして、微笑しながら近寄って来た。

彼もすぐに近寄りたいと思っていたのであろう。彼は実際顔に笑いを浮かべて、この年長の同僚、それにこのお話しのスグリの藪を抜けてやって来た。

速やかに彼は近寄って、額から軽い麦わら帽を上げて、叫んだ。

「お二人、参上致しました。お待たせはしなかったと願っております。ただ私のヘートヴィヒのせいで遅れそうになりました。ご承知のように、若い妻を持ちますと、旅での良い行動規範を得ることがどういうことか知らされることになります。『お願いだから、こけないで。暑くなっても、冷たい水はダメです。…しっかり鼻は拭きなさい。ヴィクトル、接吻もしないで、出て行くつもり。…いいこと、無謀な登山は禁止です。副校長のエッカーブッシュ殿があなたを監視なさるそうだから、これが私の唯一の安心材料です』と」。

副校長のエアーブッシュ殿は心から笑った。しかし同僚のノイバウアーは、より一層謹厳さを保つことを自分の義務と見なしているように見えた。

「とても微笑ましい」と彼は言った。おそらく、こう述べて、この折の陽気さを更に高めるためであった。

「博士殿は我らの同伴をされないそうだ、ヴィントヴェーベル。彼の昼休みを邪魔して申し訳なかった。九人のミューズ全員の爪の中に彼は捕らえられている。我ら二人に関しては、我らの二人の女房とどんな歩調であるか、さっぱりわからない。貴方は貴方の若いヘートヴィヒと、私は私の健気な老イーダといかなる歩調にあるか。ヴィントヴェーベル、上へあがってください。行軍の前にコーヒーを一杯どうぞ。友のノイバウアー、貴方も一緒に上がりますか」。

「私は実際遺憾ながら辞去致さなければなりません」と高等学校教諭はあたかも実際まさにかの賢明なキケロがその威勢の良い斬首者のマルクス・アントニウスから[紀元前43年]、更に一時上に上がるよう招待されたかの如き調子と手の動きで語った。そう言って、彼は儀礼的に挨拶して去った。老公は彼を見送った。最初、少しばかり当惑して、憤然としていた。しかし一層陽気ににやりと笑った。

「さて、ヴィントヴェーベル。彼を静かにそのソファーに寝かせておこう。我らは我が老婆の許へ上がることにしよう」。

「喜んで、同僚殿」とギムナジウムのスケッチ教師は答えて、副校長の腕を取った。ノイバウアー博士は、再度眠るために、ソファーへ向かって行かなかった。彼は書き物机の許に堅苦しく腰掛け、自らへの全く特別な慰謝として、幾つかのアフォリズムを紙に書き記した。我々はこれらを賢明な読者の目から遠ざけようとは思わない。というのは、我らの読者の中の誰かにとって、同様に慰謝となるであろうからであって、これはまこと我らの喜びともなろう。

高等学校教諭殿は以下のように書いた。

A. 畏怖の念を与えるのは誰か。ただ悠然と自らの道を進む者のみである。
B. 動物が出現する時には、現実の人間にとって、無限に辛抱強くなる他ない。
C. 根本的に、誰も他人の人生における悲劇を理解しない。
D. 私は昨日、アウルス・ゲリウス[130-180]のローマの男女の誓いについての本を読んだ。　ーヘラクレスにかけて誓うのは男性のみで、カストルにかけて誓うのはただ女性のみである。しかし両性ともポルックスにかけて誓う。　—　Aedepo![ポルックスにかけて]、両性のどちらの動物の下で、この世で露命をつなぐべきであろうか。…
E. その国民の中では知られていないこと、あるいはその国民からは忘れられることが一つの名誉であるような国民は存在しないか。

この若い男が、つまり高等学校教諭のノイバウアー博士がその国民にとって忘れられないように我らは講じたと希望して、我々は差し当たり、彼をその性情と人生観の途方もない真面目さに委ねて、副校長とスケッチ教師と一緒に副校長夫人の部屋に上がることにしよう。夫人の善良で老いた顔は、ヴィントヴェーベルの姿を見て、いずれにせよ暗くはならなかった。

自分の編み物道具から元気よく見上げ、角縁眼鏡を額の上に押し上げて、老夫人は叫んだ。

「ヘラクレスにかけて、貴方はまた私の御老体を連れ出そうとなさっているのですか、同僚殿」。

「カストルにかけて」と副校長は言った、「今回もまた私が連れ出すのだ。主よ、イーダよ、我らに天が子供を授けていたら、そなたは何というグラックス兄弟の母親[コルネリア、母親の鑑]になっていたことだろう。しかし、さて急いで、ヴィントヴェーベル、一杯のコーヒーを飲みなさい。それから出掛けよう。ワイン、シャトー・ブルーベリーの瓶を一本ポケットに入れるのだ。 — ガンゼヴィンケル[鵞鳥の隅]に着けば、ヴィンクラー[そこの牧師]がその後の飲み物の手配をしてくれよう」。

「エッカーブッシュよ、エッカーブッシュ」と、コーヒーポットを下ろしながら、夫人が言った。「ヴィントヴェーベルさん、貴方のお心と良心とに彼のことをお任せします。彼が評判を落とさないよう気を配るのは、他の男の方にそうするよう説得されたときのみです。それでもまさに羽目を外してしまうのです。お願いです、ヴィントヴェーベルさん、夫に注意していてください。 —」。

「副校長夫人、すべて私にお任せください」。

「でもね。貴方も奥さんのヘートヴィヒも、夫がいつもの習慣のように森全体の中で最も湿った個所を居場所に求めたとき、熱いアイロンをかけて、夫の背中のリューマチに対処するような方ではありません。ですから私のことを思い出して、夫が今回そんなことをしないよう気を付けてください。時々夫はわざわざ蟻の巣を見つけて、その上に腰を下ろそうとします。 — 彼が生徒たちの一団と遭遇したら、どんなに自分の立場を忘れてしまう習慣であるか、ご存じでしょう。…ですからどうぞ夫のことを気にかけてください。 — 私の方では多分奥様の許に伺って、奥様が難儀なさらないように致しましょう」。笑いながら彼女はこう付け加えた。「あら、ホラッカーのこと。ホラッカーにも用心なさってください。この不安の種が最後に私の喉に上がって来ました。…ホラッカーです。確かに愚かな人だけど。でも私がもっと早くにこの人のことを思い出していたら、今日あなた方両人のどちらもガンゼヴィンケル[鵞鳥の隅]へ出掛ける許可は貰えなかったことでしょう」。

「ワイン[シャトー]の瓶をポケットに入れましたか、同僚殿。…よろしい。それではこの家から出発することに致そう。ここは全く救い難い。ヴィントヴェーベルよ、貴方は幸い韻律学の専門ではなく、それで幸い四弱脚[活性剤、刺激剤]は一体どんなものであり、殊に婦人がただの四弱脚で発して、いわば自らこのような自家製リズムの怪物になってしまうとき、耳に何と快く響くことか、ご存じありますまい。ホラッカーにリューマチ、評判と終わることがありません。おばあさん、さようなら。牧師とその夫人ビラに何か伝言はないのか」。

「エッカーブッシュ、よろしく伝えて。次回は私とヘートヴィヒ夫人がすっぱい牛乳を味わいに伺います、と。それでよろしいですか、ヴィントヴェーベルさん」。

親愛なるヴィントヴェーベルは勿論その気であった。それからこの町の人々はこの町の立派なギムナジウムの副校長とスケッチ教師もこの休暇を利用する様を目撃することになった。つまり、近隣に住んでいる人々が彼らの出発を目撃して、こう述べたのであった。「あの二人がまた出掛けるぞ」。このような言葉の裏には秘密の願望が隠されていた。

「あの二人と一緒に私自身も出掛けたい。あの老エッカーブッシュが今日また何かを体験するであろうこと、これは確かだ」。

ノイバウアー博士も手にペンを持って、窓辺に近寄り、二人の同僚が市門に向かうのを見た。またしても他にそうする人はいなかったので、彼は自らそれを行い、ほとんど不安げにあくびをして見送り、かくて格別に自らを称えた。

その後で、彼は自分が今日も、　―　今や偉大な文学的詩的文献学的人生課題に没頭しているという幻惑に世間を陥らせて、再度ソファーに『文学的娯楽草紙』[1826-1898]を持って寝そべった。

第四章

平和の巣のようにガンゼヴィンケル[鵞鳥の隅]はその庭園や野原、田畑と共に森の中へ押し込まれていて、それから勿論教会も到来して、牧師館を巣の卵としてこの牧歌に添えていた。来年の復活祭兎[彩色した卵をもたらす伝説、菓子]から我々はこの愛らしいイメージへの報酬を得たいものである。健気な老雌鶏エクレージア[教会]に抱卵させるためにしょっちゅう家鴨の卵が押し込まれさえしなければいいのだが。ガンゼヴィンケル人がどのような卵から孵ったのであれ、差し当たり、人々は皆、牧師の許からよちよち歩き、泳ぎ、ぴしゃぴしゃ音を立てて､人間的堕落の沼の中を嘲笑的に悦楽的に浮かんで来たのである。牧師ヴィンクラーはその岸辺に立っていて、そこをあちこち歩きながら、立腹したり、それどころか少しばかり不安に思ったりしていて、　―　毛を逆立てていた｡これはつまり、彼はすでに羽根ペンを持って、宗教局に文書で報告するところであった。

ガンゼヴィンケルの百姓達は、少しばかり密漁を行っているぞ。彼らは時折身内の中で（つまり村の隣人に対し）盗みを行っているぞ。彼らの喧嘩好きのせいで一人以上の弁護士が実直に暮らせるほどだ。これらはすべて彼ら自身の問題であって、老牧師ヴィンクラーはこれをどう考えるべきか承知していた。彼はこの件のための肉体と精神とを有していて、十九世紀の半ば、実直なクリスティアン・フュルヒテゴット・ゲレルト[1715-69]を一人の古典作家と見なし、この作家の寓話の擦り切れた冊子を、書斎の机でも頭脳の中でもとても尊重して、両方の場で毎日使用していた。彼はこのフュルヒテゴットを事があるたびにまことに適切に引用することが出来た。　―　彼は今日も教区の村長と長老達に対し、この引用で働きかけようとした。しかし今回は　―　上手く行かず、我々が、他のすべてのうんざり事の上に、更に不意に訪れたとき、彼は火の消えたパイプをくわえて、眉をしかめて、内心不平を鳴らしながら、書き物机に対し座っていた。右手は丸められて、索引の上にあり、左手は膝にゆるく、開けられたままであった。彼の子羊達は顔に嘲笑を浮かべて、去って行った。　―　彼ら、ガンゼヴィンケルの百姓達は、彼を今回は掴まえて押

さえていると思っていた。いずれにせよ、彼らは、牧師クリスティアン・ヴィンクラーを極端に当惑させて、それに彼の妻ビラをも当惑させていた。庭の生垣の胡桃の園亭では、そこから森の間近の縁までの道が見通せるのであるが、すでに一時間も前から午後のコーヒーが冷たくなっていた。コーヒーがそれ以上冷えなかったのは、単に七月の温かさのせいであった。

「牧師夫人、失礼します。たった今、牧師殿と話し合ったところです」と村長のネッダーマイヤーは、牧師館のキッチンのドアの側、百姓達のガチョウ[一列]行軍を導きながら、聖職者の妻ににやりと笑いかけた。村のこの代表団の最も太っちょ、自由土地保有者のハインリヒ・デーゲリングは「無骨な顔」を帽子で隠すこともせずに、遠慮なく高笑いをしたのであった。そして　―　妻のビラ・ヴィンクラーは、心の折れた夫に、夫の書斎で向かい合って座っていて、両手を膝の中、力なく置いていた。　―

「まあ、クリシャン[クリスティアンのこと、スラブ風]」。

そして牧師は、左手でハンカチを探して、汗を拭こうとし、再度、拳を聖書の索引の上に置いた。

「私の切望していることは、―――」。

我々はいとも尊い宗教局のことを知っている。それでガンゼヴィンケルの聖職者司牧のことを慮って、先のダッシュの代わりに、然るべき言葉を挿入することを、我々にも読者にも禁ずることにしよう。この折、クリシャン・ヴィンクラーが衷心から、そして自分の万感を込めて発したいと願ったことは、彼が飲み込まなかった言葉が十分過ぎるほどに語っていた。それは確かであろう。

「ご老体、あの人達はようやくあなたを追い詰めて、凱歌を上げているのよ」とビラ夫人は呻いた。「今居酒屋で彼らの話していることを聞いてみたい。きっとあの石頭を寄せ合って、あなたのことを笑っているわ。次の日曜日、あなたの説教を聞くのを楽しみにしているのよ。まあ、私は日曜日を越えられるか分からないけど、日曜日が待ち遠しい気持ち。この話しが片付くまで、私は自分の頭巾でさえ、垣根越しに見られたくありません。ヴィンクラー、今日のうちにも町まで出掛ける気はないの。この件に詳しい人々と語り合う気は？」。

「まずは自分の考えを自らまたまとめなければならない」と牧師は呻いた。「自分自身が転倒していないか、足の上に立っているか、分からないうちに、どうして他人とそのことについて話すことが出来よう。…これは、私の人の好さのせいだが」。

「そのお人好しで私はどうなるのです」と妻は尋ねた、「この床をご覧なさい。半ダースの子羊の一人として、この私の床に唾せずに去った人はいません。まだ楽長は現れていないのですか。この露見の後、どのような表情をしているか興味があります。いや、クリシャン、クリシャン、あなたが祝賀を述べることになりましょう。ベクセンダールが歌を歌うことでしょう。宗教局のやり方を私は知っています。宗教局は彼には歌を歌わせて、あなたには祝賀を述べさせます。私やあなたの件がそこまで進展しないうちに、この件に関し御領主殿の許へ出掛けてください。これが私の意見です。そして、　―　あら、　―

楽長が庭の中をやって来ます。言った通りよ、まあ、あの人の足の速いこと、何という顔をしているのでしょう。あの人のクラスで、百姓どもの息子の一人となりたくはありません」。

「しかし私ならなりたい」とグリューナウの立派な牧師[Heinrich VoßのLuiseより]は呟いた、「その方がガンゼヴィンケルの牧師より相変わらずましだ」。

この時ガンゼヴィンケルの楽長が書斎のドアを開けた。

「牧師殿、　—　済みません、牧師夫人、　—　牧師殿、お願いです、　—　よろしいでしょうか」。

「この時まではまだ、親愛なるベクセンダール、出来ないと思っていました。しかし残念ながら、古い羊皮紙はそう請け合っている。貴方は貴方の四季支払いのために笛を吹く。私は私の支払いのために踊る。四季ごとの四ペニヒのために、我ら両人とも、元旦のたびに、直接各家父長の許で挨拶するわけだ」。[19世紀ドイツでは、牧師の給与を教区税ばかりではなく、中央の教会から支払うシステムも検討された。この村の四季支払いは旧システムの名残]　—

「それで私は百姓の一人一人に讃美歌を歌うわけですか。いや、全能の神よ」。

「それで私は、百姓の一人一人に、文章を格調高く整えて、ご多幸とご愛顧を祈願する責務がある。彼らはそのことを文書にしている、ベクセンダールよ。この悪評高い四季支払いの廃止を申し出るよりも、もっと利口なことをなすべきであったろう、な」。

「しかし今では少なくとも百年以上前のことで、忘れられていたことでしょうもん。牧師殿、職務上の私の前任者の誰一人、七年戦争以来、　—」。

「それ故、これは古い慣習とも呼ばれている」と牧師は喘ぎながら、楽長の言葉に割り込んだ、「我々自身がまたそれを蒸し返したのだ。私は自分のガンゼヴィンケルの人々のことをよく承知している。　—　いや、ベクセンダールよ、ベクセンダール。私の妻にこの件への私の考えを尋ねたらいい。　ー」

「牧師夫人、私の妻がこの件に対し何と言っているか、見て、聞いて欲しいものです」とガンゼヴィンケルの楽長はしょげた牧師夫人に向かって言った。

「私はただ消えてしまうことでしょう」と善良な老レディーは呻いた、「ベクセンダール、宗教局が察しないのであれば、私は一八六八年元旦を迎えられないことでしょう。勿論これははるかにホラッカーよりも大きな問題です」。

「お聞きなさい、親愛なる友」と今や牧師は楽長に語った、「この話しは厭わしい。しかし少なくとも私の生涯で一回、私は貴方が村長と自由土地保有者のデーリングの前で歌うのを聞きたいものだ」。

彼はそう言いながら微笑して、その黒いビロードの帽子を立派な頭蓋の上で前後に揺すった。

「ヴィンクラー、あなたらしいわね」と妻は真面目に怒って言った、「では出掛けて、祝賀を述べなさい。　—　私個人としては彼ら全員の家屋敷に、さきがけて火を放つのを期待しています。私は誰にも邪悪なことを願いません。でもこの件では人類がお仕舞です。村から誰かが、私の痙攣に対する滴剤を持って、下痢に対する処方箋を持って牧師館へ駆け付けて来て欲しいものです」。

「親愛なるベクセンダールよ、我らの両人の伴侶も次第にまた落ち着くことだろう」と牧師は楽長に向かって言った、「分別して、慎重に、何をなすべきか、この遺憾な件を誰にとっても幸せな転回へと導くために、考えることにしよう。とりわけ、ホラッカーや、その他の非キリスト教徒的考えをこの件に混ぜ入れないようにしよう」。

我々、著者に関しては、まさにこの瞬間、ホラッカーを、　—　この芝居の中に引き入

れることが、我らの義務、キリスト教徒的責務となろう。

第五章

この夏、郭公がホラッカー、ホラッカーと我らの森で叫ばず、古来からの評判通り、クックック、クックックと叫んだのは、一つの不思議であった。郭公も多分、自ら一般的叫び声に和すことを余計なことと見なしていて、根本的にこの点、正しかった。村や町、山々や谷では、すでに十分に奇妙な単語の名詞が木霊していた。「ホラッカー、ホラッカー。コルト・ホラッカー」と。

こちらでガンゼヴィンケル出身のホラッカーが大きな森の中で、大胆な盗賊、残忍な殺害者としてその仕事を開始した日以来、つまりおよそ二，三週間前以来、一帯の住民がこれほどにもっと楽し気なパニック的驚愕に襲われたことはなかった。当地の検察官が、いわばメンツをかけて、この恐ろしい噂話は取るに足りぬこと、本来全く何でもないことだと郡報で請け合っても無駄であった。検察官に耳を傾けようとする各々に口頭で、ホラッカー自身は幽霊ではないとしても、盗賊ホラッカーは全くの単なる神話として解されなければならないと請け合っても甲斐がなかった。どの人間も、どの百姓も、ましてやどこの百姓の妻も、検察官の文書や口頭での請け合いを信じていなかった。その郡中心都市の市民や市民女性を相手にしても、検察は説得力がなく、可哀想であった。

いや、検察官殿は、十分気楽に話したり、書いたり出来た。検察官はその職務室で文書に囲まれて、安全に座っていて、どの道を行こうと、夕方九柱戯場へ向かうときでさえ、警察隊の庇護を受けられたであろう。しかし連中、森の村々の百姓達はこうは行かない。あらゆる藪からホラッカーが、連中や連中の妻や娘達のうなじに飛び掛かって来よう。しかし連中はバターやチーズ、卵や雌鶏を町へ送らなければならない。この新たなビュックラー、皮剝人ハンネス[ラインヘッセンの盗賊の首領、1777-1803]、あるいはバイエルン人ヒーゼル[Matthias Klostermeier、1738-1771]、フンツザットラー[十八世紀半ば南ドイツの盗賊]から無事なものは何もない。この点一帯のすべての百姓達は検察官ヴェーデキント殿よりもはるかに盗賊の方を信用していた。ホラッカーは実在が確実であった。検察官の方は、　―

気楽に話すだけである。

しかし村々ばかりでなく、郡中心都市でも人々は承知していて、ホラッカーの色々な悪行を語った。我々は先ほど、エッカーブッシュ副校長夫人がその軽率な夫とヴィントヴェーベル同僚に彼のことを警告する場に居合わせた。この殺人話しを笑う人々でさえ、一番好むのは、普段の散歩でも、太い杖を携えて、出来るだけ大勢と一緒に、自然を満喫し、大きな森の、三週間前まではまだ無害であった影の中の道の涼しさを楽しむことであった。彼らが互いに各人を信頼し合えるときでさえ、茂みで物音がすると、彼らは相変わらず臆して、肩越しに眺めて、彼らの杖を一層固く握り締めるのであった。

検察官は単に郡報を有するのみであった。しかし我々が神話からも承知しているように、噂は幾千もの舌を経由する。日ごとにホラッカーの話しは、より大胆な、よりどぎつい形態や色彩を帯びた。ホラッカーの行状は居酒屋や名士達のクラブで話題となった。ホラッカーはキッチンや化粧室で取りざたされ、ホラッカーについて、妻は夫に、子供は両親に、祖母は孫に、孫は祖父にお喋りした。陸路、馬車の旅で帰郷して来る家父長が、家の者た

ちの者に元気で、五体満足、財布をポケットに入れて現れると、家父長はいつものように、「何のお土産」と妻や子供から尋ねられることはない。家の者たちは彼の側、彼の周りに寄って来て、彼に叫びかけるのである。「あなたはホラッカーに出会わなかったの」と。するとホラッカーと出会わなかった者が、家に戻ってくることはめったになくて、直接本人と出会わなくても、人々の噂を耳にしている。ホラッカーがこちらの「フクロウの頭」山麓で、ディックビーレン出身の老乞食女と出会った日以来、比較的短期間に「新ピタヴァル[de Pitaval 1673-1743]」やクヴェードリンブルクのバセ出版[推理小説専門]由来のかくも多くの古い話しが蒸し返されたことはなかった。しかし我々がここで熱くなったり冷たくなったりして思い出すことは、今まで老エッカーブッシュとスケッチ教師のヴィントヴェーベルを野生の森に二人っきりにして放置していて、彼らに同伴していないという点である。　―　我々の怠慢故に、二人に何か不都合なことが起きていて、例えば我々がただ彼らの切断死体を森の小道の脇の方に、それも我らの嗅覚によって発見するといったとき、何と容易に我々でも後々検察官とごたごたやり合う事態を迎えることだろうか。

万歳、まだ二人は存命だ。何世紀も何世紀も存命であれかし。町から上方に散策しながら、両人は若干疲れる行軍の後、かなり深い渓谷と広大な、まことに日当たりの良い耕作地の間の狭い道に達し、かくて早期の青春時代以来、この老文献学者の枢要行楽地に到着した。彼の長い人生の中で、煩わしい支障となっていたことの全てを、彼はこの峡谷とライ麦畑、小麦畑に沿って、この三本の樫の木の許へ運んで行った。そこの森の端では、幾つかのベンチが、荒石で積み重ねられて、その木々の影の中にあった。百度といわず、千度も彼はこれらの木々から、単に夏や春、秋ばかりでなく、またどんなに厳しい冬の昼であれ、夕方であれ、故郷の町を見下ろして、それからあらゆることを、　―　自身の内部で片付けた。

副校長は町や田舎に多くの善良な知人や友人を有していた。しかしその最良のものはこの三本の樫の木であった。それにこの友情は相思のもので、これはこのような類では本来最良のものである。

「彼がまたやって来た」と山の精たちが満足気に叫んで、古い木々は陽気にざわめきながら、頭を寄せ合って、時々梢で問いかけが生ずる。「今日は更に誰を連れて来たのか」。

かくて今日も同じで、　―

「アポロンにかけて、ヴィントヴェーベル同僚だ」と三人の古典的木の乙女は叫んだ。更に楽し気にざわめく枝の間から森の道を覗いていた。

副校長エッカーブッシュも自分の寵愛する三本の木々に挨拶して、一瞬ベンチの一つに腰掛けて、喘いで登って来た後、息を継ごうとした。同僚は立っていて、河川とそれに谷にある町の向こう側の山々の反射光を調べていた。

「ここに私は第四級生徒として腰掛け、コルネリウス・ネポス[紀元前100頃-25]の予習をした。私がここで一切合切何をしたか、私のイーダに尋ねたらよろしい。ヴィントヴェーベルよ、貴方はこちらの我々の許へいらっしゃる以前、世間を広く遍歴されている。親愛なる友、貴方はいずれにせよ幾多の素敵な所をご存じだ。私に関しては、どんな古典作家を読んでも、ここより素敵な所を見いだせなかった。まあ、お考えください、貴方が立っていらっしゃる箇所、そこに私も昔立っていました。そして私の座っているこちらに、私の長年の活性剤妻[四弱格]が座っていました。『そよ風よ、来たれAura veni!』[オヴィディ

ウスの『変身譚』、7, 836]と私は叫んだ。とても蒸し暑い夏の夕べで、涼しい涼風がとても望まれていたのだ。しかし私のプロクリス[Cephalusの妻、そよ風Auraを恋敵と勘違いした]は何と言ったか、　―　いや、むしろ私のイーダと言うべきだろう。『まあ、イエス様、臨時教師殿、　―　親愛なるヴェルナー、本当にまことに本気なのですか。では、私も異存ありません』。…それでヴィントヴェーベルよ、かくて我々は『変身譚』から神の意志によって、『愛の技』[オヴィディウス作]の最中にトンボ返りをして入ったのだ。そして町へ下りて、両親に告げた次第。親切な天よ、何と時は過ぎて行くことか。しかし今は更に行軍せにゃならんだろう。ヴィンクラーは、当時下の町で副牧師として飢えていたが、我ら両人を夫婦にした。彼が当時何と痩せて、壁に姿を映していたか、今やガンゼヴィンケルで、その面影はもはや見られない。いや、彼の妻も、彼の百姓どもも彼を立派に養い育ててくれたものだ」。

スケッチ教師は自分の下手の左右を見回して、考えた。つまり自分のヘートヴィヒなら、この自分の給料と、それから自分と彼女に対し、個人的レッスンで添える収入とで、自分をどのように育ててくれるか、考えた。

「芸術家ならば、余りに太っていないのが、確かに結構ではある」と彼は呟いた、「しかし芸術家が今の私のように痩せているのは、必ずしもまさに必要なことではない」。

二人は進んだ。暗い樫の梢の中で、木の精たちが以前よりも陽気に忍び笑いをした。二人は同様に全く正確に、かの優美な夏の夕べの時を思い出していた。そのとき、臨時教師のエッカーブッシュは涼しさを求めて木の精たちに呼びかけ、イーダ・ヴェーニガー令嬢はその古典的引用を、とても誤解して、しかし全く正しく了解していたのであった。

勿論随分昔のことであった。しかしかくも古い樫の木のこのような木の精は、まことにタフなオールドミスの記憶を有していて、この精はエウトロピウス[紀元前四世紀の歴史家]やコルネリウス・ネポス、を思い出すばかりでなく、プブリウス・オヴィディウス・ナソも思い出していて、殊にオヴィディウスはこの木の精たちを何度もまことに愛らしく心を込めて歌っていたのである。　ー　同僚エッカーブッシュにとって、同僚ヴィントヴェーベル以上に好ましい道連れ、森の同伴者はいなかった。この件はその逆も全く同じであった。一方の者が、見落としたり、嗅いだり聞いたりするのを忘れたものを、きっと相棒が聞いたり、嗅いだり、見たりしていた。彼らは補い合って、あるいはむしろ同じ空想の呪縛下にあって、二人はこのためしばしば品のある人々の嗜好品になっていたが、しかしこの世に対する、そしてこの世の芝居に対する二人自身の嗜好をはなはだ高めていた。彼らは、楽しい森の小川が二人の道を横切って跳ね飛んで流れているとき、そのたびに橋を求めるような、ご立派な性質の者ではなかった。

「年取ってしまった」と副校長は嘆息した、「以前は私が口笛で真似のできない鳥は、茂みにも鳥かごにもいないものであった。しかしそのためには歯が必要で、この歯が次第に欠けて行く。すべて墓場が思い出される。　―　避けられない人間の宿命だ、ヴィントヴェーベル」。

「しかし　―　制限の中で初めて巨匠の真価が発揮されます」[ゲーテ、ソネット]とスケッチ教師は引用した。喧嘩中の犬や猫の真似にかけて貴方はいつもお手本です。尾を踏まれた雄猫としての貴方の業績はまさに感動的です」。

「親愛なる友よ、そう思われるかな」と老公は追従されて、尋ねた。「私が個人的に何

か完璧に仕上げてみせるかの耳障りな芸そのものが、私の妻には鼻つまみなのです。私は前もって阿呆なことは致しません、私と妻、つまりイーダを笑いものには致しませんと注文されずには、ポンス酒の夕べを開けないのです。まあ、次回は貴方の百姓夫人、子豚を袋にきちんと詰め込む夫人を紹介されたい。貴方の奥様、小柄なヘートヴィヒは、　—」。

「私に厳しく禁ずる女性でして、私どもが社交で招待されますと、ネッカチーフを結んでくれるとき、約束を守るよう、決まって目に涙をためて頼むのです」。

「バーカ。それはハネムーン時の禁止、そして約束だ。この関係では、私は何でも約束したものだ。…まあ、貴方もお静かにきいきい鳴きなさい。私もニャンニャン、ギャオーだ。他の人々、　—　才能ある者達、例えば同僚のノイバウアーはその才能を隠すものだろうか。彼は詩作しないか。その詩を我々に朗読しないか。まずは彼の一八六六年叙事詩の完成を待とう。それからどんなことを体験するか見ものだ。ヘクサメター[六歩格]では勿論私は自分のヒンツ[猫、ゲーテ『ライネケ狐』]やプードルを披露できないのだが」。

「同僚殿」とスケッチ教師は副校長のすぐ耳元でささやき、一帯の四方をおずおずと見回した。「同僚殿、私どもはここの森の中にいて、　—　私どものレディーも居合わせません。同僚のノイバウアー殿もいません。　——　私の喘息性のパグ[小型犬]が、私のレディーのソファーの上で何か不届きなことをしたのを、　—　ご存じないでしょう」。

「ありません」と老公は、全身緊張で震えながら、叫んだ、「話されたい、話されたい」。

そこは荒野の、人目に立たぬ緑の場所で、周囲は高く、ほっそりしたブナの幹で囲まれ、影に覆われていた。これまで元気に幹の周りを走っていた二匹栗鼠がしっかり座って、訳知り顔に見つめ、聞き入っていた。しかし同僚ヴィントヴェーベルが話し出したとき、イーダ・エッカーブッシュ夫人と小柄なヴィントヴェーベル夫人、高等学校教諭のノイバウアー博士が聞き手の中にいなかったのは、勿論より良いことであった。全く理想的な創作物が出現した。

「私に資金があったら、貴方用に独自の劇場を建てることだろう、ヴィントヴェーベル」と副校長は金切り声を上げた。「まだ体が言うことを聞けば、即刻とんぼ返りを披露するところです。もう一度、最良の、第一人者の名手。考えとか、イメージではなく、完全にその音色で表現されています。これはまさにメロドラマ的芸術作品です、ヴィントヴェーベル。これからは、すべての二回目のポンス酒の後の未来が貴方に開けています。私は単にその芸をネボ山[申命記34.1、主がモーゼの子孫に与える地を、山頂から見渡せるようにした]から覗いたにすぎない。パグとレディーに万歳、もう一度どうぞ」。

両栗鼠は素早く飛んで離れて行った。両同行者、芸術愛好家、心の同志は、更に森の中を進んで行った。副校長はバターパンを。スケッチ教師のヴィントヴェーベルはボルドー酒の瓶、シャトー・ブルーベリーをその背面の上着ポケットに持っていた。彼らは曲がりくねって、とても繁茂した小道を抜けて行った。各自が即座に自分の興ずるものに従って、

—　色彩の効果や、雲からの連想、甲虫や植物に興じ、両人が同様に、マッシュルームや鶏頭、その他の食用キノコの愛好家であったので、しばしば人の歩く道から外れた。そしてまたこのような具合に藪に突き当たったりして、老エッカーブッシュがそれどころかかなりしっかりと懇ろに食い込む茨の茂みの中に立ち尽くしたとき、ヴィントヴェーベルが述べた。

「同僚殿、今が最も都合の良い折と思います。私の願っていることをご存じでしょうか」。

老公は、最後は揺すって、自分の上着の裾を藪から引き離して、答えた。

「貴方は幾つか願い事を有している。私もそうだ。それで、二人の苦難の学校教師にとって、大いなる休暇末期頃の今日のような午後、最も有益なものは何か、多分ゼウスならご存じであろう。一体また貴方は、例えば何を願っておられる」。

「我々は彼に会いたいのです、あるいは彼は我らに会いたいことでしょう」。

「誰のことです、何のことです、一体」。

「勿論、ホラッカーです。我々が彼を捕まえて、一帯を彼から解放したら、そのときの凱旋、驚嘆、上々からの認証、ひょっとしたら至高の座からの名誉の表彰、これらをお考えください」。

「ヴィントヴェーベルよ」と副校長は叫んだ、「これはまた名案だな。まことにまたなるほどだ。ホラッカーか。我らは今、荒野に閉じ込められていて、何も考えていない。実際、我ら両人が、彼を捕まえたら、　―　彼を友のヴェーデキント[検察官]の九柱戯場へ連れて行ったら、一つの凱旋であろう。ホラッカーか、ホラッカー。勿論彼が我々を捕まえて、一帯を我々から解放するのではないことが前提となるが。…しかし同じことだ。私はこれにシャトーを賭けよう。同僚殿、呼び出してくれ。我が老婆に楽しいことをプレゼントできさえすればいい。　――　大胆に叫んでくれ。大声で叫ぶのだ。本来、元来、我らの前に現れる責務が彼にはあろう。大胆に、大声で叫んでくれ」。

「ホラッカーよ、ホラッカー、ホラッカー」と同僚のスケッチ教師は森の中へ叫んだ。すると　―

「クックック、クックック、クックック」と反響した。

「おや、お道化ものの声がする。カッコーだ。　―　ククルスだ、ククルス・カノルス[カッコーの分類名]だ、ヴィントヴェーベル。まさにあたかもイートヘン、それにヘートヘン、　―　つまり我が老妻と貴方の若嫁とが、　―　我らに我らの夫としての義務を、―　それに貴方は将来のパパとして、忘れないようにと後から送り付けたかのようではないか。ヴィントヴェーベルよ、言っておくが、我が活性剤妻は、同僚ノイバウアーの分別や理性を貴方にも私にも想定していないのだ」。

「彼奴は座って、律読していることでしょう」。

「彼はそうして構わん」と副校長エッカーブッシュは墓場の静けさの声で言った。「今やシュタインメッツ[1796-1877、1866年ボヘミアのシュヴァインシェーデルを征服した]がシュヴァインシェーデル[豚頭蓋]めがけて恐ろしく屠殺している。私のヘクサメターの文と史実が正しいかどうか、差し当たり私にはわからないし、分かろうとも思わない。同僚殿、我らの使命は、差し当たり赤ワインの瓶のコルクを、開けられないまま、ガンゼヴィンケルへ運ばないことだ。更に歩きながら、快適な場を探されたい、同僚のヴィントヴェーベルよ。乾いた糧食も同じように十分に長く、上着のポケットに入れたままだから」。

ギムナジウムのスケッチ教師はラテン語も理解していた。「英気ヲ養イマショウ」と彼は言った。そして老エッカーブッシュは同様に自分のラテン語をまだすっかり第二級生に渡してしまったわけでなくて、こう結んだ。「ヴィンクラー[牧師]は、我々が空腹も喉の渇きもすっかり満たされて参上したら、我らを許さないことだろう。つまり英気を一瞬だけ養おう。差し当たりここでは少しばかりということになる。従って、ガンゼヴィンケルで完全に英気を養おう」。

第六章

この森の山岳で、両友人の、たった今述べられた立派な計画にまさに適した場所を見つけるのは難しくなかった。エッカーブッシュとヴィントヴェーベルは、他の多くの誰よりも、一方は学者として、他方は芸術家として自然の古典的作品の中から最も素敵な箇所を選び出すことが出来た。今回はほとんど見て回る必要もなかった。　—

ハイデ[荒野]は花咲いていた。…

穏やかな上昇勾配の林間空き地､低い藪の密に生い茂った高い梢の木々に囲まれた所に、副校長とスケッチ教師は幾つかの快適な腰掛けへと誘っている木の切り株を見つけ、　—

花咲く荒れ野に　—　あらゆる兆候を見出していた。くしゃくしゃになったかなり古い新聞紙と赤いラッカーを塗られた栓で、これらはこう暗示していた。ここですでに人々が「まともな思い」を抱いていた、と。

「ここに最後に座っていたときのことをまだ覚えていますか」と副校長は尋ねて、同僚殿はその返事を弁えていた。三週間も経っていなかった。彼はすでに長々と、心地よく、花咲く荒れ野に寝て体を伸ばし、若干脂っぽい新聞紙の一つがかなり近くにあって、彼はそれを指先でつまんで読んだ。

「一八六七年のヒルテンフェルトのオーストリア軍事年鑑は昨年のオーストリア軍の損失合計を出している。これによると北方軍は、死者、負傷者、行方不明者の合計が、六二七八九人に達し、南方軍は八四九〇人で、全体では七一二五九人である」。

副校長は、木の切り株の一つに腰掛けて、嘆息した。膝の間に赤ワインの瓶があった。

「まさにこの世では、然るべき悲哀が付随せずには、何らまともなこと、分別あることが得られない。ヴィントヴェーベル、その紙屑を棄てなさい。今日ここに持ってきているフランス人[ワイン]を頼りにしよう。恐ろしいアレス[戦の神]よ、助け給え、コルク栓抜きを忘れていないだろう」。

幸い忘れていなかった。もっとも、忘れていても、両紳士はどうしたらいいか、承知していたであろう。つまりフランス人に「ただ自然の暴力」を加えていたであろう、つまりその首をへし折っていたであろう。

「ここにモルトケ[Graf von Moltke,1800-1891,1866年ケーニヒグレーツで勝利]がいる」と副校長は叫んだ。そして栓は分別して、より高度の戦術的知性に従った。かくて、この場合、全く特別に、　—　ドイツ人学校教師に従った。[ドイツ軍はプロイセンの教師効果で、規律正しく、1866年の戦いで勝利したとされた]。

スケッチ教師はすでにハム入りゼンメルパンを噛んでいた。

「同僚殿、ご健勝を祈念して、解放者ジュピターのために[死による奴隷状態からの解放、セネカ最後の言葉：この水を解放者ユピテルに捧げるのだと彼は言った。岡崎邦博訳タキツス年代記、ＸＶ、64]」と副校長は語った。ワインの赤い液を通して、太陽を眺めて、それからより若い友に乾杯しながら言った。「貴方はこの世間をかなり遍歴されている、ヴィントヴェーベル。貴方はイギリスに行かれて、　—」。

「リーツの教育施設でスケッチ教師をしていました。貴方もこれは楽しいと知って頂きたいものでした」。

「貴方はスイスに行かれた、　—」。

「三週間ほど、鼻風邪と一緒に。雨や霧のためアルプスを見ないままでした」。

「今日のこのような天候のときには、何度も再度、これと同じような場所に腰掛けるよりましなことをご存じかな。ノイバウアーに尋ねてみなされ。これは、世界周航の考えと詩的翼を持った人間で、表現の術を心得ている。彼はローマに行っているが、貴方がスイスに行ったときよりも幸運に恵まれている。彼は現実に教皇を目の当たりにしている。彼が最近私に何と言ったか、ご存じかな」。

「さっぱり分かりません」。

老公はにやりと笑って、その午後の才能をすべて、声色と物真似の全面展開に持って行った。うんざりした情熱を傾けて、彼は語った。「同僚のエッカーブッシュ殿、貴方は間違っていません。先の諸世紀においては、精神的に時代と共に生きようと思う者は誰でも、出奔して、直接、地上の騒動の中に参入しなければならなかったのです。今日、これは違います。今日、人々は静かに座っています。皆さん、静かに座っていてよろしいのです。大きな波が一人の許に押し寄せてきますが、大波はその理念の富と共に、　—　一人の頭上を越えて行きます。誰かがピラミッドを測量したり、あるいは或る戦闘に参加したりしたとしても、それは今日の日々、何の意味がありましょう。皆さん、ナイル川の源泉の発券や、北極探検も、それにライフル銃の手ずからの発射も、詮索吟味する思索家の内容豊かな沈思黙考に比べれば、余り大して意味がありません。電気的電信に比べれば、すべての自己体験や共同作業は奇妙な無意味に他なりません、　—」。

「一八六六年叙事詩を私は楽しみにしています。もっとも例外的にではありますが」とスケッチ教師は叫んだ。今やワイングラス越しに空の方を見つめていた。副校長は全く冷静にまた活性剤妻の旅の糧食へ移って、笑って言った。

「ホラッカーが思い出される可能性はある」。

その瞬間、彼の背後の茂みで何かざわめく音がして、彼が素早く振り向くと、行楽の連れも、ヒースの草の中から起き上がった。

ホラッカーだ。

両人とも微笑を浮かべたが、それでも散歩用杖の握りやすい所を握って、近寄せた。ヴィントヴェーベルはシャトーの瓶もより安全に保管したが、これは全く機械的で、全く本能的であった。

実際誰かがゆっくりと、一見とても用心深く茂みの中をやって来た。足音が、葉叢を通じてがさごそと二人の友人に近付いて来た。エッカーブッシュは帽子を被り、ヴィントヴェーベルは立ち上がり、しばらく期待一杯に立ち、瓶を左手に、杖をしっかりと右手に握っていた。

「大山鳴動して」[ホラティウス、『詩論』139]と副校長は呟いた。すると、　—　果たして鼠であった。ハシバミの茂みから、一人の老いた、襤褸を来たおっかさんが陶器の取っ手付き壺を唯一の攻撃兼防御武器として携えて出現し、即刻ギムナジウムのスケッチ教師から、「特別な輝かしい点景人物」と認められた。

老婆は両紳士を目にすると、両人よりもはるかに激しく驚き、震えて立っていて、高齢のためばかりでなく震えていて、どもって言った。

「救世主様、憐み給え」。

「森の女神よ、ようこそ。どうぞこちらへ。我らが食うのは、ただ生意気な餓鬼生徒どもです」老エッカーブッシュは優しい声で叫んだ。ヴィントヴェーベルは胸ポケットのスケッチブックに手を伸ばし、この老婆の哀れな体の上のすべての襤褸や布切れを実際的芸術家の夢中になった目で観察し､同時に自分の絵具箱の色彩のタッチを素早く考えていた。

「素晴らしい」と彼は呟いた､「ヴェヌス[ヴィーナス]・アフロディーテが茂みから抜け出て来ることがあるかもしれない。それとこれも比肩できることだろう。これはまこと心奪われる驚きだ。いや、アドリアーン・ブラウエル[Adriaen Brouwer,1605-38]よ、三倍聖なるレンブラント・ファン・レインよ、これはとんでもなく素敵におぞましい。おばさん、五分間どうぞ立ち止まっていてください。後で貴女にグロッシェン銀貨を二個半差し上げましょう」。

「私からは一杯のシャトー・ミロン[赤のボルドーワイン]だな」と副校長は言った。しかし眼鏡をしっかり嵌め直しながら、それから叫んだ､「ちょっと待ってくれ、ヴィントヴェーベル。この老婆はどうしたことだ。彼女は全身が震えている。いやはや、気を失っている。我々がこんな恐怖を引き起こしたのだろうか」。

そのように見えた、　―　実際そうであった。驚きで言葉を失って、果たして老婆は花咲くヒースの野に座っていた。両紳士は彼女の側に近寄った。

「『ピルモント記念』を渡してくれ」とエッカーブッシュは叫んで、スケッチ教師は丁度言及された標語の磨かれたグラスジョッキを渡した。

「元気を出されい、おっかさん」と老公は勇気づけて話した。「私に関しては、私のギムナジウムの餓鬼どもが、拙者が連中に対してするよりも、拙者をからかっております。あそこの奴はせいぜい貴女をスケッチブックに収めるだけです。ここに一杯の赤ワインがあります。森の女友達、お試しあれ。そしていつものように、拙者は騙されていたのだと、貴女も同じように思われるか、率直に貴女のご意見を述べられたい。ここにはゼンメルパンと一切れのハムもあります。どうです」。

老婆はまずパンとハムに手を伸ばした。それから「ピルモント記念」にも手を伸ばし、それから彼女は突然、大声の激しい涕泣、いや咆哮に弾けた。

「どうしようもありません、…駄目です、…食べるほどに、飲むほどに、体の中でかきむしられます。…親愛なる殿方、お慈悲に感謝します、…しかし私はこれ以上耐えられません。あの子は野外にいて、私はここに嘆いて、不安の中にいます。…いや、神に見棄てられた人生よ、何という気分、何というこの上ない浄福の中にいるのか、言えたものではありません」。

「これはしたり」と老エッカーブッシュは叫んだ､「どこに、誰がいるのです。いずれにせよ、我々はここにいるのだが、　―　しかし構わん、　―　構いません、貴女は腹蔵なく打ち明けたらよろしい。私は副校長エッカーブッシュで、この殿方はギムナジウムのスケッチ教師、ヴィントヴェーベル殿です。ルビーを一杯飲まれて、お心の地下牢のドアをどうぞ開放されたい」。

「いや、神様、私はホラッカー未亡人です」と老婆はどもって言った。「ピルモント記念」に澄んだ涙を流し落としていた。しかし副校長がすぐに、二回目、叫んだ､「これはしたり」。そして同僚ヴィントヴェーベルは、スケッチブックを落として、自分がまた腰を下ろしていた木の切り株を両手で握った。　―　すでに何人もの人々が、これよりも関

心を引かない知らせを聞いて、高く空中に飛んだと言われている。

しかし老婆はすべての堰が壊れていた。自分の活性剤妻がとうに涙を卒業していた副校長は、以前の年若な時代の幾つかの長雨やにわか雨を思い出し、ヴィントヴェーベルは敢えて、自分のヘートヴィヒの花嫁の涙を思い出していた。しかしこのようなものは両人ともまだ見聞したことがなかった。

民衆が泣くとき、然るべく泣く。そしてホラッカー未亡人はこの世のすべての悲哀を流水にするかのように呻いた。

「いや、殿方のお二人、殿方が私どもに憐みを感じて頂ければと思います。いや、神様、私はホラッカー未亡人です。茂みの中に私の息子は隠れていて、悲惨に飢えていて、お仕舞です。息子はこれ以上持ちません。私も持ちません。どうして私がここに座って、食べたり、飲んだりできましょう。私は息子にスープを入れた鍋を運んでゆこうと思いました。しかし人々は村で、私の足音に邪険に聞き耳を立てています。息子を無事また感化院に預けられたら、神様に日夜、感謝するところです。しかし息子は余りに心配し、またあまりに恥ずかしがっています。それで息子は野生の人間になって、人々に見つけられる時には、餓死していましょう。いや、殿方のお二人、　―　私はどうしようもありません。　―　私は母親です。そして息子は唯一の子供です。　―　息子は茂みから連れ出すべきでしょうか。貴方らは、その善良な、良い心映えから、そして神様とイエス様の慈悲心故に、一切れの食べ物と、一杯のこの赤ワインを恵んでくださいますか。私が貴方らに話しましたように、息子を連れて来てよろしいでしょうか。息子を一目ご覧になられましたら、おそらくこの私、息子の母親がここにのんきに座って、自分が気持ちよく飲み食いできないわけがお分かりになりましょう」。

副校長は喘いで、眼鏡を拭き、両手を膝の間で組み合わせて、彼の膝の間、木の切り株を這い上がる一匹の青虫を眺め、そして同僚の方を見て、言った。

「そうだな、ヴィントヴェーベル、今は貴殿のヘートヴィヒをここに願いたいところだな。私としては、私のイーダがここにいて欲しい」。

それから老婆の方を向いて、憤然としたように叫んだ。

「今はあの子とやらを連れて来なされ。貴女は、　―　貴女は、　―　ホラッカー未亡人よ、　―　あるいは、即刻、そのサイレンをやめて、グラスを飲み干すか、です」。

「瓶の残りは、ホラッカー用です」とスケッチ教師は叫んだ。

「瓶の残りはホラッカー用だ」と同僚エッカーブッシュが語った。「牢の番人さん、ホラッカーを連れて来なされ。つまり、　―　貴女、老婆殿、　―　貴女、母親殿、　―　不思議の御老体よ、貴女の息子さんを連れて来なされ。…いや、ヴィントヴェーベルよ、休暇の遠出で、ようやく、なんとか、　―　一つの所謂体験だ。家に帰ってから楽しみだ」。

その間同僚殿が偉大な盗賊の母親に手助けをしていて、ヒースの野から出られるようにしていた。老婆を再び歩けるようにするのに、若干苦労した。しかし彼女は立ち上がると、とても素早い歩き方で、茂みと高い木々の森にまた向かって行き、金切り声の、しかし相変わらず涙で半ば窒息した声で悲痛に叫んでいた。

「コルトよ、コルトヘン、我が息子よ、出て来なさい」。

副校長は年若な友の方を向いて、こう述べた。

「これは語る話しではないのであれば、友よ、一つこの話しの絵を描いてくれ。いや、

我らの女房達にこの状況への参加を願いたいものだ。せめてここに我らの九柱戯クラブがおればと思う」。

「それに高等学校教諭のノイバウアー殿もです」とヴィントヴェーベルは言った。

「そうだな」と老エッカーブッシュは語った、「私にはわからない。彼もこの件を我々二人と同じように理解するであろうと、完全に確信を抱けるかな、ヴィントヴェーベル」。

「そうですね」と同僚は呟いた、「ひょっとしたら彼は今この折、ホラッカーのおっかさんは我らの『ピルモンテ記念』を持ったまま藪に失踪したと固く確信しているかもしれません」。

実際そのような具合に見えた。片方の手にグラスを、もう一方の手にはゼンメルパンを持って、老婆は藪の中に忍び戻った。去年の枯れた葉叢の中にまだがさごそ入って行く彼女の動きが耳に聞こえた。しかしノイバウアー博士殿とは違う人々でも、用心して彼女の後を追ったかもしれない。

しかし森の中の震える声は、すべての不信の推測を打ち消すものであった。次第に遠ざかって響く声であったが。

「コルトよ、コルトヘン。我が息子よ、我が息子」。

副校長とスケッチ教師は静かにその木の切り株に座っていて、一方の者は顎をステッキの握りに据えて、もう一方の者は歯の間に鉛筆を持って、手に胸ポケット用スケッチブックを持っていた。

森の中は、突然、全く妙に静かになった。二人から遠からぬ或る唐檜の許で叩くキツツキの音を二人は聞き逃し、二人は郭公の声さえ聞き逃していた。　―　人間は二つの耳しか有しない。そして人間は余りに緊張して耳を澄ましていると、しばしばこの耳も役立たない時がある。

「フム」と副校長は言った、ただコオロギの鋭い声のみが聞こえ、未亡人ホラッカーの声がすっかり聞こえなくなっていた。「今や息子と交渉しているのであろう。息子が抗っているのか、　―　息子はもはや人間を信じたくないのか、どんなことがあっても出て来たくないのか。フム、フム、この件は、申したように、極めて興味深い、しかし段々辛く思える。同僚殿、どう思し召される。貴方は信頼性を喚起する人物に見える、それで、―　私の言いたいことは分かろう。貴方自身が藪の中に潜んで行かれたら、どんなものだろう」。

「そして撲殺されて、また出て来るのですか」とスケッチ教師は叫んだ、「それが少しでも役に立つのであれば、喜んでそうしましょう。しかし私の人間理解によれば、この盗賊、殺人者は即座に最も遠くに飛んで、荒野に消え失せましょう。しっ、聞こえますか。…まあ、あの老婆はやり遂げたと思われます。息子を連れて来ます。息子が来るでしょう。同僚殿、貴方と私が彼を世間に連れ出したら、世間は何と言うであろうか、野外で思い描いてください」。

「フム、フム」と老エッカーブッシュは呟いた、「貴方はこのことを実際我らの義務とお考えか。勿論この面に関しては、まだ考えたことがなかった。フム、同僚殿、我々が糧食の残りと赤ワインの残りをこの犯罪者用にここに置き、彼が現れないうちに、我々は遠ざかるとしたら、どのようなご意見かな。我々が最近、我らの、　―　残念ながら健気とは言えない一級生のブラーゼをギムナジウムから退学させなければならなかったとき、こ

れは十分ひどく神経にこたえたものだ。　―　親愛なるヴィントヴェーベルよ、我々は国家にホラッカーを引き渡す義務を国家に対し負うているのか。彼がたとえ自らの意志でやって来るとしても、この件はとても難しく思えよう、それに　―　私が貴方のことを承知しているように、貴方も同じ考えであろう」。

「副校長夫人は、　―」と同僚は返事を始めたが、しかしこの言葉以上に続けられなかった。すでにまた老公が話しに割り込んで来た。

「確かに、確かにそうだ。彼女は、我らの、全く善良とは言えないブラーゼに対する私の気持ちを、顕著な弱点と呼んでいた。しかし、それでもだ、我々が素早くガンゼヴィンケルへの道を更に進む前に、ここ瓶の側に一ターラー置くとしたら、どう思われるかな」。

「遅すぎます、同僚殿」とヴィントヴェーベルは語った、「ここに彼は来ています」。

ホラッカー、盗賊が藪から現れた。つまり、彼は両頬に副校長夫人エッカーブッシュのハム入りゼンメルパンを頬張って、ホラッカー未亡人によってジャケットの裾を握られて、森の暗闇の中から出て来た。この犯罪者が、食い物に飢えているばかりでなく、血にも飢えていたら、我らの女性読者達は、次章は恐ろしい場面になると期待して良かったであろう。

「おや、結構」と副校長はどもった。先ほど言及された褐色の森の青虫が静かに、慎重に、まさにチョッキの上を這ってきて、頭を上げて、彼のネッカチーフに向かって行き、その中に消えて行くかのような表情をした。青虫にとって、このような絶好の機会は二度となかったであろう。

第七章

「いや、結構」と我々は皆、叫び、完全に我々は正しいと思う。すると我々はまた、偉大に感ずる欲求にしっかり捉えられた気分とか気まぐれを感じていて、それでいてまたこの崇高な感情をどうしていいかさっぱり分からないでいる。血まみれになり、火傷して、征服された町や、沸き立つ海の中、火を噴く山々や、砕かれた頭蓋、吹き出す脳漿、こぼれ出る内臓の中をかき回す欲求が生ずるたびに、そのようなことになる。悪魔の承知していることだが、他の者どもは、いつも自らの意志を得て、自らの歴史的、悲劇的、ロマン主義的へっぴり度胸を好きなように晴らすことが許されるとしても、我らの高貴な突発心を気にする悪魔や、犬、猫はいないし、クリオ、つまり現在の教養身分に贔屓された継ぎ接ぎ歴史のミューズが気にすることも当然ない。

これは一八七〇年が明るく時を打つのを耳にし、これが空虚な音のない世界の中ではなく、古い、荘厳な鐘の反響の中、響くとき、生ずる。現在の時間の鋭い打撃の許、余韻や反響に聞き入る人々はいかほどの数であろうか。国の感化院がその困窮者達に提供する灰色のジャケットの裾を掴んで、老母はその息子を連れて来た。盗賊ホラッカーは、痩せて震える手に従って来て、自ら膝の箇所が弱っており、　―　震え、消耗し、草臥れていた、　―　野外での、かなりの期間の野宿生活による空腹と冷気、湿気、その他すべての不如意によって最底辺まで零落した人間であった。背の高い、　―　その上なお感化院育ちの十九歳の少年であった。一人の青年の姿で、これを目にすると、芸術家のヴィントヴェーベルはまた口の中に唾がたまったことであろう。

しかしスケッチ教師の彼は奇妙なことに、ただ両腕をだらりと下げたままで、口をぽかんと開けて、野生の息子[Halmaのドラマ]を見つめていて、遂に意を決して、同僚エッカーブッシュに対し、　—　盗賊に注意を向けさせた。

「あれなる岩の高みに、見えるは、
誇り高く、野蛮にして大胆な盗賊」[オベールAuber1782-1871によるオペラFra Diavolo]

と彼はどもった。そしてエッカーブッシュは、同様にかろうじて気を確かに持って、彼の方でも、どもって言った。

「森の最も深い峡谷、洞窟の中に深く隠れて、
大胆不敵な盗賊が、眠っていて、そのローザの手で起こされる」[Vulpius 1762-1827,盗賊の物語、Rinaldo Rinaldini]

「いや、私は未亡人ホラッカーです」と老婆は嘆いた、「これが息子です。まあ、息子を見てやってください。親愛なる最良の殿方、哀れを催す眺めではありませんか。自分に心があって、心が痛むとはどういうことか知るためには、この子の母親でなければなりません。この子は森の中を駆け回って、一帯を汚しました。感化院を抜け出してからのことです。感化院ではとてもいい成績で、半年後のクリスマスの時に釈放される予定で、仕立屋の奉公口も見つかる筈だったのです。ところが　—　警察が毎日この子のことでやって来て、他にガンゼヴィンケル全体と、すべての村々がこの子の動静を見張るようになりますと、母親の気持ちは人に言えなくなります。ところが貴方らは森に食事を持参され、息子の着物もきれいにしてくださる。…いや、コルトや、コルト、永遠も、私がおまえのことで麦わら寝床で看病した夜ほど続くものじゃないよ」。
「貴方は実際、きちんとした男に見える、ホラッカー」と副校長は喘いで言った。それから奇妙に音高く鼻をかみ、それから未亡人の腕を掴んで、叫んだ。「おっかさん、お掛けなさい、お掛けなさい、　—　私が座っていたところに、切り株は最も快適です。…ヴィントヴェーベル、我らの女房達もここにおればと思う」。
「あるいは同僚のノイバウアーも」とスケッチ教師は呟いた。
盗賊は小声でむせび泣き、老婆は座っていて、顔を両手の中に置いた。
「ヴィントヴェーベル、婆さんに一杯の赤ワインを差し上げろ、歯をがたがた震わせている兄さんにも一杯差し上げろ」と老エッカーブッシュは無愛想に言った。「ピルモント記念」を相変わらず機械的に膝の中に持っていた未亡人は自分に対しては断り、頼むように息子を指し示した。
「旦那様、この子にもう一杯やってください。貴方にまだ母親がいなさるのであれば、神様の祝福が母親様にも恵まれますように。息子は熱もあります。息子が自ら強引に人様から奪ったものは全部で脂肪入りの深鍋の一つだけで、これを息子は、ディックブーレン出身のブリンクマイヤー夫人が道端でうたたねしているとき背負籠から奪ったのです。すると後でその件で新聞に載りました、殺人者、処女凌辱者としてです。そして調査担当長官殿が私の許に来られて、私は二人の軽騎兵に連れられ、そこの村長の許へ出頭しました。

三回、森のすべての村々で、この子の件で警報が鳴らされました。そこで旦那様方もこの子を見つめて、自ら仰有ってください。これが毎日殺人を犯すような人間に見えるか、どうか。裁判官のお一人をもこの子は撲殺したと言われています。ガンゼヴィンケルの人々は私を撲殺しようと欲しています。私が、この哀れな骸骨人間、骨人間は三十名の徒党を従えていると白状しようとしないという理由からです。殿方らがこの子を豌豆畑に立たせようと思っても、雀一羽、この子のことを恐れる必要はないでしょう。では今度は、コルト、　―　不運な息子よ、　―　自らこのお二方に、自分がどんな気分か、直接このお二方に話しなさい。私の惨めなお話しはこれで御仕舞い」。

「待った、ホラッカー未亡人」と同僚エッカーブッシュは叫んだ。彼は恐ろしいこの盗賊の隊長を全く見飽きることがないかのように見えた。「まだ備蓄として残っているものを、まず彼の中へ入れてやることだ。彼の首のところで、瓶を支えろ、ヴィントヴェーベル。私のイーダに是非、彼の姿を見せたいところだ。…ヴィントヴェーベル、彼にすぐ瓶を丸ごと渡しなさい。すぐにソーセージを全部渡すのだ。…いやはや、涙の絵図だ。ホラッカー、本当に貴方はホラッカーか。…ヴィントヴェーベル、貴方によって描かれた彼の油絵が欲しいものだ。　―　今や同僚ノイバウアーはだらしなく寝床に横たわっていて、自分は空想でいっぱしの体験をするのだと思っていよう。たかが知れている。…いや、ホラッカーよ、ホラッカー、…急ぐことはない、ホラッカー、…最後の切れ端まで貴方のものだ。いや、私は活性剤妻をここに連れて来れば良かった」。

偉大な盗賊は、ただすっかり飢餓に陥っていた者のみが出来るような具合にがつがつ食い、飲み込んだ。その上小声で彼は病気の犬のようにめそめそ泣き、呻いた。彼は差し当たりまだ話せなかった。しかし彼は自分の上着の千切れた袖で、痩せた頬からの涙、赤く燃えた目からの涙を拭いた。

「ホラッカー、もっと楽だと思われるのであれば、腰掛けてもいいぞ」とスケッチ教師は提案した、「貴方の後ろに切り株がある。ゆっくりと。そうだ、…余り急がない、余り急がない、　――　この人が五千人の食事の場[マタイ,14,15-21]に居合わせなかったのは、まことに幸運だ。奇蹟の全体が損なわれたことであろう。ここでは一人用に対し五千個のパンでも足りない。私が更に有しているものは、ペパーミントの菓子袋だけで、私の妻がポケットに入れてくれたものだ」。

「それも彼に渡しなさい」と副校長は熱心に叫んだ。

偉大な盗賊は木の切り株に座っていて、右手と左手の二人の学校教師によって、看護婦による病気の子供のように、世話されていた。盗賊のおっかさんは、彼に向かい合って、両手を組み合わせて座っていて、彼が飲み、食い、がつがつ食い、飲み込むのを見ていて、絶えずむせび泣いて、果てしなく両紳士のための祝福の恵みを述べていた。彼女は自分の悲痛、自分の快感、自分の不安、自分の感謝をどんなに述べても十分でなかった。我々がいつかアペニン山脈の峡谷で、リナルド・リナルディ―ニ[Vulpius作、前出]の眠りを眠ったら、いずれにせよ我々はこの上なくきれいなローザよりもむしろ、このおっかさんから起こされたいことだろう。たとえガンゼヴィンケル全体が彼女の指先に警戒していようとも、このホラッカー未亡人がいつでも信頼できよう。これに対し美しいローザはいかなる条件下で、カラビニエリ[国家憲兵隊]に寝返り、その騎兵隊長の後の馬上の人になるか、まだ必ずしも確実に計算できないのである。

「コルトヘン、いや、コルトヘン」と老婆は呟いた、「ほらね、ほらね、もっと早く森からまた出ておればよかったろうに」。

しかしコルト・ホラッカーは単に粗野な、ほとんど動物的な声を出して、おずおずと肩越しに見た。「神様」と老婆は叫んだ。彼女は先の言葉にもかかわらず、不安の声を上げた。それは、遠く森の中、茂みの中を行く、一頭の獐鹿のせいであったかもしれない。小枝の微風にかつて彼女ほど不安げに聞き耳を立てている殺人者はいなかったであろう。どんなに確かな良心も、このように神経質に状況が動揺しているときには機能しない。未亡人はそれどころか副校長エッカーブッシュの上着の裾を掴んだ。エッカーブッシュが彼女と兎[ランペ親方]の間に腰掛けたとき、その裾を離した。兎は森の空き地に奇妙な一行を目にすると、すぐに反対側を向いた。

「騒がないで、ご夫人」と老エッカーブッシュは言った、「兎が、兎の、兎に、という第三変化に従って兎は行きました。全くの通性語[lepus兎は、文法としては男性であるが、雄、雌双方を表す]です。文法的性で、貴女と私、両方の性に通用します。ホラッカー未亡人。…いや、有り難や、単に一匹の兎でした。ヴィントヴェーベル、落ち着きなさい。リプス・トゥリアン[追剥 1675-1715、ゲレルトの寓話、『犬』]、座っておられたい」。

このリプス・トゥリアンはガンゼヴィンケルの牧師ヴィンクラー所有のゲレルトの本に由来する。最初、この盗賊を連れて、ガンゼヴィンケルのクリシャン・ヴィンクラー牧師の許まで行く案が思い浮かんだ。彼はこのことを、比較的気楽に、「一つの考え」と呼んだ。その通り、一つの考えであった。

「いや、殿方らは、私なら三週間持ちこたえるであろう分の生命を、一日と一夜で消化されるのであろう。それで元気なのであろう」と今やコルト・ホラッカーが呻いた。彼のかすれた咳声をそう呼んで良ければ、初めて言葉を遣った。「感化院では恵まれ過ぎている、更に言うことは何もない」。

「いや、コルトヘン」と未亡人はめそめそ泣いた。

「私はまた捕まったら、更に二年間服することになろう。老婆はそれで楽になることもない、　—」。

「皆さん、息子が逃げ出したのは、つまり、恋心の故です」とホラッカー未亡人は嗚咽した。盗賊の隊長は両腕を膝に、その両腕の上に頭を置いた。「貴方はこのことをガンゼヴィンケルの牧師夫人、それに牧師殿に話して貰ったらいい。その人ら皆が、最善の処置をしよう、　—」。

「私はここに座っていたい」とコルトは呻いた。しかし副校長エッカーブッシュは、ますます「厄介な風に」展開して行くように思われて、極めて彼らしいやり方で向き直り、「それで、同僚殿、貴方は何か分かるかな」とスケッチ教師に言った。

「ただ後ちょっと待ってください、同僚殿」とヴィントヴェーベルはスケッチブックから見上げて、呟いた、「後、三タッチです。すると彼が描かれます。どうぞ、ホラッカー、私のために後一分間、頭を上に上げてください、検察官が喜びましょう、　—」。

検察官とは！

同僚のヴィントヴェーベルは、この言葉を発しない方が良かったであろう。勿論、ホラッカー、盗賊はその後頭を持ち上げた。しかし単に、スケッチをしている芸術家に対し、ほんの一瞬、口を開けて、目を見開いて見つめただけであった。その次の瞬間、すでに彼

は飛び上がって、　―　駆けて、　―　姿を消した、　―　三回飛んで、木の切り株を越え、ヒースの野とゲニスタを抜け、大慌てで藪の中へ入って行った。　―　スケッチ教師の方は、口を開け、また目を見開いて、その姿を追って見つめることが出来るのみであった。

副校長は驚いて、その座席で平衡感覚を失っていた。老婆は極度に驚いて、両腕を突き上げて立っていて、ただ悲痛な声を上げた。

「コルト、コルトヘン、分別しなさい」。

しかしただ遠くの方、森の遠く離れたところでただざわめき過ぎる音がし、コルト・ホラッカーは分別しなかった。

「御覧の通り」と未亡人は嘆いた、「いつもこんなものです。またしても、捕らえられないまま、これから全世界に追いかけられます。またしても息子は、優に四週間逃げることでしょう。何でも、つまり何か恐ろしいことすべて、また私と息子のせいにされましょう。息子はいつもそんなでした。それは父親譲りと私は申しましょう、誰も私の言うことを信じなくても。いや、親愛なる、最愛の神様、私は息子の母親であり、この広い世間の中で、全くただ一人私だけが、息子の善良な心を知っているのです」。

「これは全く卑劣な、全く救いのない話しだ」と副校長エッカーブッシュは叫んだ。ようやく新たに両足で立っていた。「しかし、ヴィントヴェーベル、貴方はいつもそうだ。無神経ではないか。私は出来るなら、　―」。

「無神経ですと」とヴィントヴェーベルは叫んだ、「矢でも鉄砲でも来いです！」。そして検察官へのアルバム用のポケット版スケッチブックをポケットに押し込んで、サンザシの杖を取って、一つ飛びで今や、ヒース、ゲニスタ、藪を抜けて、盗賊ホラッカーの後を追った。

「当方としては、以前にもまして、ここに同僚ノイバウアーが一緒にいたらと願われてならない」と老エッカーブッシュはどもって言い、疲れて、再度腰掛けた。「ノイバウアーなら、シャトー[赤ワイン]を気付けに渡す前に、きっとこのならず者を逮捕していたことであろう。フム、フム、しかし私と同僚ヴィントヴェーベルが女房どもから解放されて、野外を出歩くことが許される場合、かくも分別臭い人間を連れていたら、より退屈な話しではあろうが、しかし利点もあることだろう」。

第八章

ガンゼヴィンケルの牧師館で、牧師夫人は、相変わらず両手の中に頭を置いて、園庭の中、冷たくなったコーヒーを前にしていて、牧師殿はその頭を、書斎の中、清書された記録の前に保っていた。その記録は百姓達に対して、司牧に対する先述された通りの全く取るに足りぬ勝利へと助勢するものであった。牧歌は以前のままであって、村と牧師職は相変わらず以前同様可愛く見えた。しかしビラ夫人の興奮とクリシャン・ヴィンクラーの昏迷は全く収まっていなかった。それらは、一層深く熟慮し、一層色鮮やかに生起しつつある状況を思い描くにつれ、逆に一層増大するものであった。

刻々と聖職者の司牧夫人は、教区民の不当な要求に詮方なく沈潜して行った。こうした不当な要求に彼女の感情がすべて一層激しく抗うと、それだけ一層強力に空想が活動し、

その百姓らをその妻らと一緒に自分の内面の裡に描き出した。彼女、牧師夫人ヴィンクラーは、いわば村の家から家を訪ねて歩き、前もって正月元旦を言祝いだ。

「めでたいなら、めでたがるがいい」と彼女は呻いて、老夫のために上で編んでいるウールの冬用靴下の落ちた網目をまた拾い上げるその日二十回目の試みを放棄した。「宗教局が分別を見せないとき、私としてはクリスマスを迎えられないことだろう。主はご存じだ、私が人々の病室の見舞いや、お産の見舞いを偉ぶって遠慮したことはない、と。しかし悪意のあるところ、悪意は永遠に残る。この点、私はこのガンゼヴィンケルの内、外を承知している。短白衣と襟飾りを付けて、　—　このベクセンダールがすぐ後を行く。それに彼らは文書でそれを得ている。そして百姓が何かを印刷物で持っていると、するとこれがどういう意味か、誰でも分かっている。教皇を連れて来ようと、トルコのスルタン、老フリッツ[フリードリヒ二世]、皇帝ナポレオンを連れて来ようと、百姓に何か提示する文書を有しない限り、百姓は譲歩しない。有していても、なかなか譲歩しない。ガンゼヴィンケルの人々のことは分かっている。この点で、村の阿呆どもは、より阿呆な者どもから、相変わらず更に学ぼうとしており、かくて最も阿呆な者どもが最も賢明な者達になっており、然るべきところに、極めて頑固に立っている。ベクセンダールは歌い、私の老夫は言祝いで、私は死んでしまう。いとも貴い宗教局はそれどころかなおも喜んで、牧師と教区民の間のより親密な、幸多い付き合いについて語ることになる。いや、宗教局の殿方のやり方を私は承知している」。

「せめて私が宗教局について、通暁していなければいいのだが」と同じこの時、クリシャン・ヴィンクラーはその書斎で溜め息を吐いていた。彼はその立派な頭をまさに両手から離して、この両手をだらりと力なく書き物机の上の書類や、教会の索引、その他の記録に置いた。彼はすべての、牧師職に関連する羊皮紙に囲まれていて、自分の職務の前任者を次々に、蒼古たる過去まで遡っていた。彼の窓から自分の教会と職務の前任者達の墓石が見えた。墓石は、教会の壁に沿っていて、十七世紀の初頭にまで達していた。

「彼らはそこに眠っていて、私はここに座っている」と彼は叫んで、それから彼は金メッキされた頁を叩くと、埃が舞い上がって、彼は叫んだ。

「私自身の悪霊が、これらの詰まらぬ四ペニヒのせいで、諸世紀の黴をかき回すよう吹き込んだのであれば、私には言う言葉もない。いや、私自身が、この種を自ら蒔いたのであろう。…今や妻は下の園庭にいて、妻がまず私にこの忌まわしい四季支払いの廃止案を吹き込んだことを当然否定していよう。後で、その上更に、一般的見方が現れて、人は全世界から見捨てられ、もはや慰めがなくなっても、相変わらず自分の忠実な妻の胸元に慰めが見いだせると信じ込ませようとするであろう。慰めがか、胸元でか。阿呆な。くだらん。しかし今、私は彼奴と面と向かい合いたいものだ。二世紀以前に詰まらぬ金銭のために、今日の午後の仕掛けを企んでいた奴だ。哀れな悪魔め。…偉大なる神よ、かの男は一体何という飢餓を有していたものだろう。…まあ、私はガンゼヴィンケルの牧師職の収入を承知している。　—　多分彼も壁沿いに眠っていることだろう。平和に安らっているかもしれない。…平和にか。何と静かに、　—　私も平和に安らっていたことか。しかしこの諍いの嘆きの谷で可能だろうか。

彼は重く嘆息し、自分の黒い帽子を前後にずらした。しかし彼の目は自分の好みの慰安者、老クリスティアン・フュルヒテゴット[ゲレルト]に落ちた。そして彼はこう引用した。

我らの諍いは自然の性、
だから、同志よ、権利を主張して、喧嘩しな。
おまえを圧倒しにかかって来よう。
しかし屈するな、全霊をかけて、
喧嘩を続けるのだ、
正義は正義でなければならんから。[ゲレルトの寓話『訴訟』]

そして再度彼の手は、今回は拳に丸まって、眼前の記録に落ちた。

「しかし残念ながら、彼らが正しい。完全に正しい。最後の点に至るまで正しい。私は受け入れなければならん。ベクセンダールは受け入れなければならん。ガンゼヴィンケルの人々は口笛を吹き、楽長は歌う。そして私は踊る。その後で私はやっとここ、ガンゼヴィンケルで平和に安らうことになろう。実際、そうでないとしても、 — ここ教会の壁の下に眠ることになろう。宗教局の長官でさえ、存命のうちに仕上げて安らうことは難しい。たとえ長官が明後日、とても甘く、穏やかに、そして牧師風に賢明に、私を見つめて、こう言おうとも、『我が大切な同志よ、至高の神のお蔭で、教会法的に貴方のために、教区民の心を得るための新たな道が拓けました』と。 — いやはや、結構な同志だ。この新しい道に対し、私もいとも恭しく感謝するしかない。私の観点からは、彼は好きなように言うがいい。彼の観点からは、勿論彼が正しい。 — いや、今度の正月元旦には、彼をガンゼヴィンケルの百姓どもの許に送り出したらいいだろう」。

宗教的長官殿を自分の代わりに、ガンゼヴィンケルの四季支払いに対する教化的等価物[説教]を供し、立派で敬虔な前任者達によって継承されて来た教会の権利と義務を、技巧的に、また新しい形式にして維持し、将来の世代へ更に伝達させるというこの考え、この理念、あるいは思い付きは、多分ガンゼヴィンケルの現牧師にとって、それ自体何かとても陽気なもの、喜ばしいものを有していたに違いない。彼は窓辺に近寄って、微笑する視線で、教会窓際の墓石の並びをざっと見た。

「これらの幾つかは満足気に起き上がって、見守ることだろう」と彼は呟いた。そして自分の沈思による脇道で見出した元気回復は顕著なもので、彼は再度消えたパイプに手を伸ばし、それを持って煙草箱へ歩み寄ることになった。

「その後で勿論ここ牧師館で長官をテーブルに迎える」と彼は更に呟いた。「私の善良なビラのことだ。 —— 長官殿をこの言祝ぎの後で自らのテーブルに招くという楽しみを妻に恵んでやろう」。

「あなた、コーヒーをどうぞ。これ以上冷やしてはいけません」とこの瞬間、丁度引き合いに出された女性の声が庭から上に呼びかけた。そしてガンゼヴィンケルの牧師はほとんど完全に修復された快適な調子と表現で返事した。

「すぐに行く、愛しい妻。ただフォスのホメロスか、フォスの『ルイーゼ』を持って下りて、この不機嫌をすっかり宥めようと、思案しているのだ」。

彼は丁度、最後の指先三つのパイプ煙草を火皿に押し込んでいたが、しかし運命は自らすでに再度彼を親指下に押し込んでいた。

「いや、クリスティアヌス・ヴィンクラーよ、古参の少年よ、ひょっとしたら後では許

されようが、今はそう行かん。お前さん、いつも優しく、平和に座っておれると思わんことだ」。

声高な物音が家の下の部屋から聞こえた。玄関の間でまず重々しい足音が続き、それから階段で続いた。男どもの声の鈍く、苛立った騒音の中に、一人の若い女性の声高な泣き声が混じっていた。

「何事だ、頼むが、　―」とガンゼヴィンケルの牧師はどもった。しかし彼には、自分の希望を更に述べる時間はなかった。早速、彼の部屋のドアが開け放たれ、再度彼は彼らを眼前に見る楽しみに恵まれた。　―　つまり村の長老達、最も太った者達、最も裕福な者達で、教区と時折彼の心の中で、最も重い目方となって、煩わしい者達であった。

再び彼らがやって来たのだ。村長のネッダーマイヤー、それにデーゲリング、クラーターマン、それにクムレーンで、その他、家屋敷と共に、その名前を父祖から受け継いで来た者達であった。かくて彼らは再び、気の好い司牧のこの静かな書斎へ互いに押し合い圧し合いしながら来たのである。そして村長は、およそ十八歳の若い乱れ髪の娘の手首を掴んで引っ張って来て、叫んだ。

「牧師殿、今がホラッカーを捕まえる二度とないチャンスです。これが私の意見です、牧師殿。　―　貴方の意見は存じませんが。今木挽き台から樹液を引き出せます。　―　この女、　―　この放浪の女がならず者の手掛かりを掴んでいます。娘っ子、ご挨拶しろ。膝屈めの礼をして、ロットヘン・アハターハングよ、牧師殿に対し、立派な教育のお礼を申し上げるのだ」。

「おやまあ、シャルロッテか、ロットヘンか」と善良な御老体はびっくりしてどもって言った。差し当たりとてもショックを受けていて、どこにも支えや掴まる箇所を得られないでいた。「本当におまえか、まじ、おまえか。何て恰好をしているのだ。どこから来たのか、何故こちらへ来たのだ」。

彼は、一同を頼りなく見回しながら、どもって、自分の妻の名前を呼んだ。これが気を取り直す最初のきっかけであった。

「ビラよ、ビラ」と彼はそれから最も大きな声で、窓から下の庭へ叫んだ。これが二番目のきっかけであった。

「勿論」と角張った村の偉丈夫は粗野に言った、「まずは牧師夫人を呼びなされ。我々はこの娘っ子、つまり浮浪の娘を、ハーネブルクの生垣の背後、藪の中で見つけた。生垣の背後にうずくまっていて、前掛けの中にはハーネブルクから盗んだ人参が一杯で、これはきっとお手本の娘にとってお上品な食べ物なんだろう。牧師殿、いや、御覧なさい。貴方のお手本の娘は、こんな風に村へ舞い戻っています。牧師殿、この娘っ子は何も話そうとしないから、貴方の部屋につべこべ言わず連れて行くのが最良だとこう思ったわけです。牧師殿、貴方はこの娘っ子の扱い方を心得ていましょうし、娘の口を割らせられましょう。そのために牧師夫人をも我々は丁重にお越し願っています。ようやくホラッカー究明が出来ようというものです。と申しますのは、この娘のいたところから遠く離れてホラッカーを探す必要はないからです。つまり残念ながら、天地開闢以来、即ち両人がこの村と教区とを悪評高いものにして以来、これは明らかなことです。私の言葉が不当であるというのであれば、その反対意見を聞きたいものです」。

「いや、彼の言う通りだ」と輪になっている百姓達が皆呟いた。しかしまさにこの瞬間、

牧師夫人ビラ・ヴィンクラーの声が一層明るく、一層分かりやすく、この善良な友人達、近隣の者達、教区民の一同の鈍く、ざわめく、ぶうぶう声の中に響いた。

夫人は人込みの中、進む術を心得ていて、先頭の場所まで来て、今や夫人も夫の書斎に立って、衷心からの願い、つまりまた何が起きたのか正確に知りたいという願いを述べた。勿論夫人は、この新たな騒動に関して、一気の解明をもたらしたであろう中心人物を最初の興奮の最中、すっかり見逃していて、夫のクリスティアンの無言の手の動きで、まずこの人物に注目させられる必要があった。

ビラ夫人は両手を上げて、長く驚きの叫び声を引き延ばした。

「まあ、イエス様、　—　ロットヘンだ。また同じ恰好、私どもが十年前引き受けたときと同じね。娘よ、娘、今回、本当に村の人々の言う通りで、私が間違っていたということになるのかしら。私があなたを躾けた通りのきちんとした人間なの。娘よ、娘。どこから来たの、こんな襤褸を着て。他にもぐれてしまって、ガンゼヴィンケルで今日は何をするつもりなの」。

この不幸な生き物は、疲労と恥辱、それにいずれにせよ、圧倒的惨めさのせいで、ゆっくりと牧師の肘掛け椅子の中に沈み込んで、嗚咽しながら頭を両腕の中に置いた。顔を上げずに、娘は今やすすり泣き続けた。

「牧師ネーレケ殿が新聞から読み上げられたのです。それで　—　私は奥ベルリンから徒歩で来ました。はい、私は私の雇い主に悪いことをしました。それにヴィンクラー牧師夫人と牧師殿に対しても悪いことをしました。　—　でも他に仕様がなかったのです。私は夜間、盗人のように逃げ出したのです。ネーレケ牧師殿が朝、新聞から読み上げられたその直後に」。

「ヴィンクラー、この意味分かるかしら」とビラ夫人は、両手を打ち合わせて、尋ねた。

「その娘が徒歩でベルリンから来たのであれば、それは勿論、完全に筋道立った意識の許で行っているとは言えない。では、ロットヘン、一度分別正しくなって、意識を集中させなさい、　—　今一度良い娘になりなさい。同僚ネーレケは新聞から何を読み上げたのだ」。

ほとんど荒々しい動作でこの哀れな娘は、日焼けして、痩せた、とても清潔とは言えない、流涕の顔を、古いクッション椅子の膨らむ馬巣織り[ホースヘア]から上げて、この地上の生活での最良の慰めがそこにあるかのように、善良な老クリシャン・ヴィンクラーの顔を見つめた。

「森の中でコルト・ホラッカーが探されているのです。コルトは盗賊に、コルトは殺人者になってしまったのです。これはどの新聞にも載っています。私は自分の部屋で、一通の手紙を自分のトランクの上に置いてきて、どうぞお許しをと暇乞いをしました。私は自分より他の誰も面目も本当に潰したくなかったのです。一週間前から私はベッドに寝ていません。畑に育っているものしか、食べていないのです。ただパンを一個あるとき一人の子供がくれました。それに一人の兵士が街道で二グロッシェンくれて、それで私はもう一個パンを、ある村で、暗くなったとき買いました」。

牧師夫人は両手を背中に置いて、半ば向きを変え、黙って一瞬、ガンゼヴィンケルの村長を見つめた。それから夫人は珍しく落ち着いて語った。一方夫の方は完全に分別を失っていて、すべての百姓達は鼻を人差し指と中指の間に掴んで、自分達の信じられない思い

を一般的な鼻啜りで知らせていた。

「ネッダーマイヤーさん、貴方にまずお話しをしましょう。今回このロットヘン・アハターハングをここ私の夫の部屋に連れて来られましたが、これは今回、これ以上のものはない処置です。でも、次の最良の処置として貴方らはどうされますか」。

「分からん」とすべての百姓が声を合わせて言った。

「それでは、貴方らに同様に打ち明けましょう。どうぞ、御好意を示されて、差し当たり今日、私と牧師、それにこの娘の三人だけにさせて頂きましょう」。

「はい、しかしホラッカーが、牧師夫人、　—」と村長は反論しようとした。「私は職務上、　—」。

「職務上は今ただ私一人がロットヘン・アハターハングに対して権限があります。私一人です。お分かりですか、ネッダーマイヤーさん。私はほとんど二十五年の節目の年までここの村の牧師夫人を務めて、無益であったわけではありません。いや、どうぞお静かに階段をお下がりください、村長殿。新年の言祝ぎ祝賀についても、私ども両人、更に一言話し合いましょうか。今日すでに村の他のすべての友の皆様が、互いに祝意を表してよろしいかと存じます。いずれにせよ、次の正月元旦に私は伺いまして、村の家々を回りまして、無駄なことにはならないと存じます。いえ、私は今日すでに私の祝賀と格言とを準備しております。いえ、いえ、この件は私にとりましても、この件の実際有りのままがとても好ましい。　—　その機会がいつも欠けていましたから。近隣の皆様、お任せください。牧師職はこれからもはや教区民から贈り物を受け取りません。　—　皆様が支払います。そして私と我が親愛なる老クリスティアンが参上します。私どもは伺って、感謝の辞を述べます。いえ、私は長いこと、かくも次の正月元旦を楽しみにしたことはございません。しかし今日のところはどうぞ好意を示されて、家にお帰りください。村長殿、この今の件のことで貴方も必要となりましたら、私は人を送りまして、　—」。

さてガンゼヴィンケルの牧師、クリスティアン・ヴィンクラー殿がこのすべてを、それも自分の妻と同じような調子で語っていたならば、この演説の成功を保証することは、全く慎んで遠慮しなければならなかったであろう。きっと確かなことは、ガンゼヴィンケルの百姓達が、幾つかの反論を述べ、幾つかの事に全く別の照明を当てて考え、きっと　—　差し当たり、出て行かなかったことであろう。

しかし牧師夫人の話しを聞いて、百姓達は出て行き、押し合い、固まって退却しながら、ドアから出て、階段へ向かった。

ただ村長のみが敢えて一言述べた。

「牧師夫人、貴女が我々皆よりもすべてを良くご存じなのは、我々皆が承知しています。牧師ヴィンクラーが貴女のご意見なら、我々も同じです。これはロッテ・アハターハングとコルト・ホラッカーに関して妥当します。さて、四季支払いに関しましては、我々がこの件を話題にしたのではありません。慣習が慣習である限り、我々もこれまで先祖時代の文書と共にこれまで来ていまして、一方の者にとって公正なものは、他方の者にとっても公正なものであり、この世で無駄なものは何もなく、このことは我々百姓どもが最も良く承知しています。　—　悪しからず。しかし貴女、牧師夫人は、この農園でいつも得難い、然るべき時の慈雨のようです。貴女が私に祝意を述べられるならば、私も貴女に祝意を述べます。我らの現物供与、債務履行、牧師十分の一税、その他のノルマに関し、我らはガ

ンゼヴィンケルのある限り、決して怠ったことはありません。しかし正しいことは、それが別な風に直されるまで正しいものです。そして私が村長として、皆の最善となるよう尽力することは、私の呪わしい義務です。全く好意的に尽力し、頭を教区民の拳と膝の間に置こうとするのが、真っ当な、選ばれた、上々の当局のお墨付きの村長の役目でしょう、突然、不意にある者が現れて、牧師や楽長に対する教区民の立派な権利を、千年前から誰も考えていなかった権利を聞き出し、止めさせようとする時のことです」。

「結構よ、結構、ネッダーマイヤーさん」とビラ夫人は喘いで；言った。「案ずることはありません。私はきっと正月元旦参上します。私の親愛なる老連れ合いが邪魔しても伺います。主なる神様はきっと私の善良な願い事に応分の繁栄をかなえて下さることでしょう。必要ならば、ベクセンダールの責務も私が引き受けましょう。そして賛美歌本から、まことに素敵な詩節を歌いましょう。その番号と詩節はすでに浮かんでいます。　―　愛する神様、　―

私の衝動は抑え難く
私の分別は無明のまま、
私の心は御身の愛を知らず、
私は自分の義務が分からない。[1857年、ブラウンシュヴァイク新賛美歌]

このように改心、改悛の歌の中には、幾つかの素敵な歌があります。ネッダーマイヤーさん、貴方の義務をお話しください。私も私の義務について話しましょう。悪しからず」。

「おおー、　―　魂消た」とすべての百姓どもがクリシャン・ヴィンクラーの書斎の外で話した。初めて彼らにある予感が浮かび上がった。つまり、教会に関し、自分らの古い羊皮紙と正当性を新たに蘇らせても、何ら全く穏やかな鞭を作り出したわけではない、と。彼らは奇妙に打ちひしがれて、自分らの平和な小屋に散って、本当に、差し当たり、ロットヘン・アハターハングを彼らの牧師と牧師夫人に任せた。人間は必然性に従う必要はない、とレッシングは言っている[『賢者ナータン』１,3：いやしくも人間たるものが、はたから迫られたからといって、せねばならんということがあるものか。篠田英雄訳]。しかしここではガンゼヴィンケルの百姓どもはそうしなければならなかった。

第九章

クリスティアンはその妻ビラを知っていた。彼はその夫婦生活の立派な長い年月の間に、しばしば、妻のことをますます詳しく知る機会に恵まれた。万事その限界があるとすれば、この場合もそうに違いないと人は思うであろう。しかしこれはそうではなかった。クリシャン・ヴィンクラーは相変わらず自分の妻について新たに驚くことがあった。その機会が絶えることはなかった。

このとき彼は体を前傾にして座っていて、両足を椅子の下に引き、両手を膝に置いて、自分の妻を見ていた。微笑していたが、しかし正直で、快活な額には一つ以上の皺があって、彼女を称えていたが、自分の帽子を今一度一方の耳から別の耳の方へ移したい気分に駆られていた。

そしてドアが彼の善良な友、土地の村長ネッダーマイヤーの背後で閉ざされると、彼は語った。

「フム、　—　ビラ、もう一度言わなければならないが、そなたは分かっていよう」。

「それは私の意見でもあります。少しばかり楽しい思いをしました。でも、今はそれは大事なことではありません」と誠実な夫人は答えた、「ロッテ、では私の許へ来なさい。しかめっ面をしてはいけません。では立ち上がって、牧師殿に顔を見せなさい。愛する神様に育てて頂いたその顔を。そして手短に言うべきことを言いなさい。つまり、あなたに思いをかけてきた二人のキリスト教徒に、然るべく、詳しく話しなさい。遠回しに言うのであれば、私のこと分かっているでしょう、その手は効かないと承知でしょう」。

「神様、いや、神様」と話しかけられた娘は嗚咽した。顔を可能な限り、もっと深く、ガンゼヴィンケルの牧師の椅子のクッションに沈めた。

その代わり、クリシャン・ヴィンクラーが立ち上がって、宥めるように片手を妻の腕に置いて、全くの小声で言った。

「愛しい妻よ、このことは私が最も良く理解していると思うぞ」。

先の章の結末で、我々が言及したゴットホルト・エフライム・レッシングは『古典古代的内容の手紙』[56.]のある手紙の中で、一匹の蜘蛛がもう一匹の蜘蛛を食べるのを見ることは、反吐の出る光景である、と言っている。どんな蜘蛛も必然性に従う必要はない、と彼はここでは言っていない。いや、世界はまさに、倫理の掟や美学を何ら考慮しなくても、全く古典古代的であり、つまり最初から一匹の蜘蛛は別の蜘蛛を食うことに基づいている。

そこで小さな、軽く離されて、素早く書き留められ、速やかに耳の中に響いて、印刷されてもほとんど目の中に入って来ない小単語の出番である。さあ、*人は*。[man、英語では、one,日本語では普通省略される。所謂空気として読まれる]。

人とは誰か。一方の蜘蛛がもう一方の蜘蛛を食うのを、人は見たいとは思わない。　—　人は牡蠣を食べるのが好きである。　—　人は商売を立ち上げて、それを通じて、誰とでも、極端に至るまで競争する。人はまもなく職務で昇進する根拠のある見込みを有している、そのポストを自分が得たいと思っている相手の男が、チフスで重病であって、その男は多分きっと、大きな家族を後に残して身罷る運命を承知していると噂されるからである。人は是非とも、最良の絵を美術展に出したいと思っている。人は、国民の中で、最近亡くなった偉大な人間の記念碑作製コンクールで、すべての競争相手を出し抜きたいと思っている。ある人は、これを欲し、またある人は別のことを欲し、そして、　—　どの人もそうする資格がある。というのは、人はこう尋ねるからである。それ以外人は何のためにこの世にいるのか、と。

そして人が存在する、　—　奇妙なことだ、　—　あるときはコルト・ホラッカーであったり、あるいはロッテ・アハターハングであったりする。人はそこにいない方がましだと村で毎日聞かされることになっても、人はなかなかこれを信じない。しかしその代わり、猛然と飢餓を感じ、そして自分の肌の外部、周囲に見えるものすべて他人のものである。

牧師館では多分人はこう言うだろう、「ビラ、そなたがまたアハターハング家の娘の面倒を見なさい。私は今日の午後、腕白のコルト・ホラッカーをこちらへ来るよう呼びつけた。あの未亡人には私の古着の冬ズボンを送りなさい。　—　あの若者はまたしても刺青のないインディアンのように走り回っている。それはいかん。それはいかん。これはもう

見逃しておけん」。
しかし村では同じ時間に人はこう言うことだろう、「昨夜、奴らはまたしてもキャベツやジャガイモのところに行ったことだろう。生きたまた人はこの愚連隊の皮を剥ぎたいところだ。人は自動銃を仕掛けてはならない。人は奴らを、兎のように、罠で捕らえられない」。いや、恐ろしく、奇妙で、崇高な、ちんけな言葉だ、

人は、とは。

これは表面にある飛翔し、光り輝く泡である。これは不動の黒い深みである。我々はこのまま進もう、　―　我々は慄然として、恥ずかしがって、この地上の国王達に似て、私という言葉を書く勇気がない。　―――　単に目立つことを繊細に臆しているだけのことが、しばしばとてつもない鉄面皮と思われたりする。
牧師館は、村の極貧の小作の家族の最後の末たるロッテヘンに対し、立派な躾けをした。ひどい汚辱、完全な精神的肉体的零落の中から、二人の健気な人々、クリスティアン・ヴィンクラーとその妻ビラは、この娘を家に受け入れ、まずは畑や庭園で、それからキッチンで採用して、この娘を牧師夫人が「一人の人間」と呼ぶものに仕上げたのであった。ビラ・ヴィンクラー夫人の許で躾けや教えを受けることによってのみ、この教育実験は成功した。そしてそれはガンゼヴィンケルのすべての人々の予期に反して成功したのであった。
「我々は思いもしなかった。しかし夫人はやり遂げた。　―　家畜から全く素敵なものが出来た」と村の人々は語った。
いや、コルト・ホラッカーさえいなければ良かったであろう。その後すべて順調に、経過、進展したことであろう。
しかしコルト・ホラッカーが存在していて、かつ、ロットヘン・アハターハングがこの世に生まれたとき、すでに彼は一年半存在していた[年上であった]。そして発端から彼はすでに、　―　とうに二人の両親がそうであったように、　―　教区民一同にとって彼はスキャンダルであった。ホラッカー未亡人はある日、自分の息子とこの世で二人っきりになった。然るに、　―　どんな劣等な仲間であっても、人間は仲間が必要である。そしてホラッカー未亡人とアハターハング家族は互いに寄り添い合った。他には誰も彼らに寄り添い合おうとしなかったからである。
人はこの世間に鼻を突っ込むときの、仕方やその機会を自ら選び出すことをしない。コルト・ホラッカーが今日、十九歳とか二十歳になっても、そもそも呈示する一つの鼻を有することは、すでにそれ自体一つの奇蹟である。彼の村の仲間は、老いも若きも、彼の鼻をしばしば、とてもしばしば、殴っていた。それも度々、まことに貧弱な理由で殴っていた。父親のいない孤児、　―　これは、殊にママが裕福な、あるいは言い寄られるような快適な環境下の未亡人であれば、全く可愛く響く。しかしホラッカー未亡人の穀潰し息子は、飢餓、凍傷、病気の中で、その寄る辺なさが感動的であると思われるよう期待することは許されない。
かくて、ただ辛辣なやむを得ない事情により、時にこの少年は自活せざるを得なかった。多分復讐という甘美さ故に（この哀れな若造には他の甘い物はさほど手に入らなかった）この取引には些細な悪巧みも含まれていたろう。

我らの原稿はガンゼヴィンケルの善良な牧師館について、何も悪しきことを語る意図のないことを証している。しかし自分達の愛着に逆らって、大いに成果を上げ得る人間は少ない。牧師館はまさにその愛着をロットヘンに向けた。牧師クリシャン・ヴィンクラーは後に少なくともこのことについて十分に自らを非難した。そして彼が冬、温かい暖炉からカーテンで閉められた窓まであちこち歩き回ったり、あるいはもっと元気の出る季節、アスパラガスを収穫したりする時期に、彼の信徒の群れの中の一員で、彼の夢の中にコルトほど頻繁に現れる者はいなかった。その都度、彼は歩き回るのや庭仕事を止め、考え込んだ。

「今日また私はあのならず者、コルトのことで、友人のトゥロレ宛に書くことにしよう」。

当該の国家役所は、つまり結局、身寄りのないこの少年とガンゼヴィンケルの教区民の件を引き受けた。この役所がこの古参の少年を引き受け、少年を洗い、梳って、清潔な灰色の衣服を着せて、間近の感化院で、世の発展と共に敬虔な人間となるべく、鋭い監視下、十分に働かせ、ただ適度の食事を与えて、育てた。これは高級な役所に任せなければならなかった。精神的な面でも役所はその細々とした下宿人の面倒を見た。ガンゼヴィンケルの牧師が実際その計画を遂行し、感化院の職員に、「ホラッカーの件」で手紙を書くと、いつも返事が返って来て、この立派な文通相手は最初勿論他のあらゆる事柄を話題にした後、この返事をこう結ぶものであった。

「貴兄のホラッカーに関しては、有り難や、ただ良いことのみお知らせできます。この人物はいつもなお立派に振る舞っています。通常の感化院落ち込みも（ちなみに、私が直接居合わせないとき、若者どもは仲間内で十分に快活です）、かなり落ち着いていて、私は心理学的にも生理学的にも彼の視線にすっかり満足しています。私が彼にこう言う時のことです。ホラッカー、今、私の目を真っ直ぐに見なさい、と。従って、貴兄にいつか、ハレでのかつての不肖の同室生、綽名、玄関の鍵によって再生させられた人類の個人を送り届けられる希望を私は抱いています。その代わり、私は貴兄のリューマチ軟膏用[支払い済み]の新しい処方箋を頂きたい。私は自分の分を先の牧師会議で他人に渡してしまい、誰に渡したのか思い出せないのです。

同僚夫人にくれぐれもよろしく。

貴兄の昔からの友にして血の兄弟、
トゥロリウス

追伸。貴兄は、我らの第三の仲間、善良な老ネーレケ、奥ベルリン在から長いこと何の連絡もないのか。

彼も我ら両人同様灰色髪になったろうか。徒な希望でないと信ずる。しかし彼はすでにハレで禿頭の素因が明瞭であった。それでこの禿を彼は今や歴然と証していることだろう。ついでに、貴兄はまだ覚えているかな。彼は月光の中、溶け入るようにフルートを吹く習慣であったし、フィリッポ・ディ・ネリ[イタリアの聖人1515-95]の後光に憧れていたことを。両方とも収まったことだろう」。

いや、そうだ、ネーレケだ。この名前はすでに前もって、我らの報告の中に出ており、その名前の持ち主はこの報告でも重要であった。…

「クリスティアン、でもすべて何の役にも立ちません。分かるでしょう、あなたが幾つ

かのことを最も良くご存じであることを、私は疑いません。でもここではあの娘に吐き出させることしか、差し当たり、何の役にも立ちません」。

このように牧師夫人は夫に語った。牧師が十五分間、故郷に戻って来たこの根無し草女性に語り掛けた後である。

「勿論、私はこの世で人間に可能なことすべてを体験する運命でしょう」と善良な夫人は続けた、「うんざりすること、不安、苦しみ、これらの全てが、ここガンゼヴィンケルで、私の頭に降りかかって来ます。そしてその後、更にある人がやって来て、最近ではエッカーブッシュが連れて来た高等学校教諭のノイバイアーのように、こう私に説得しようとします。ヴィンクラー、即ち私とあなたの存在は一つの牧歌であって、 — 純然たる牧師館の牧歌に他ならないと。いや、素敵な牧歌ね、ヴィンクラー」。

「高等学校教諭のノイバウアーは我々をまさに主観的に眺めているのだ、ビラ」と牧師はぶつぶつ言った。「彼はそれに町のギムナジウムで英語を教えている。多分今、生徒達と『ウェイクフィールドの牧師』[ゴールドスミスの小説、 1766]を読んでいるのだろう」。

「客観的であろうと、主観的であろうと、鳥瞰的であろうと、私には全く同じことです。でも私は眼鏡を付けずに見ています。あなたも、私も、ガンゼヴィンケルも、それにここの愚かな代物、あなたの肘掛椅子に頭を抱えている娘も、御老体、同じように見ています。あなたは娘と十分に長く分別を語りましたが、何の効果もありません、老骨さん。それで今私は我慢なりません。無分別に語ることにします。あなたは私に本当に度々ゲレルトをお手本として示しました。聞きなさい、ロッテ・アハターハング、これから私は本気でお願いします。いい加減、起き上がって、両手を顔から離して、そこの暖炉の側の椅子に腰かけて、出来る限りしっかりと私の目を見なさい。阿呆にわめいても、この世では何も改善されません。上品な外見、梳った髪の頭、修理したスカートに対してあなたもわめくことはないでしょう」。

「ビラ」と聖職者の夫は、頭を振りながら、呟いた。しかし妻は実際また言葉をしっかりと掴んでいた。

「ヴィンクラー、何を仰有います。御覧なさい、彼女は立ち上がり、今座りました。そう、我が娘、 — 目から手を離しなさい。待つほどもなくて、私はあなたのために一つの賛美歌の詩行を思い出すことでしょう。先ほど村長や教区委員、その他の村の人々のために思い出したように」。

「神様、神様」と哀れな娘はめそめそ泣いた。今や膝の間で両手を組み合わせて、実際暖炉の側の椅子に座っていた。「私は自分がまず正気にもどりさえすれば、すべてお学者のように話しましょう。ここには牧師殿の煙草箱がありますし、壁には十字架が掛かっています。ソファーもあります。階下では私の涙越しにヴァッカ―ロス[犬、ゲーテ、『ライネケ・フクス』より]を見ました。きっとまだ私のことを覚えていたのでしょう。この家ではすべてが、一切が、私が異郷へと送り出された日とまだ同じようです。そして今私はここに戻っていて、暑さの中、暗い夜、広大な世界を通って、 — 奥ベルリンから来ました。どうしたら正気になれましょう。出来るものなら、正気になりたい。牧師殿の誠実なお言葉は、すべて、私の心にとって、竈の燃え上がる石炭のようでした。でも、私は自分がこんな風に戻って来て、恥辱の余り、窒息しそうです。いや、最愛の神様、私はあの朝以来正気を失ってしまいました。私がコーヒー盆を持って部屋に入ると、ネーレケ牧師殿が新

聞からすべてを読み上げていました。私がその盆をテーブルに置こうとしていたとき、私の足元から床が、私の頭上から天井が消えました。　―　いや、私は、私だけがあの人から撲殺されておれば良かった思いです。あの人が斬首されたら、私は生き残れません。私はたとえ百歳になろうとも、私は牧師殿が朗読されたその朝を生き延びられはしないことでしょう。つまりこの地方では盗賊コルト・ホラッカーを、警察と巡査、兵士達、村々から動員された者達が探している、と。いや、親愛なる、親愛なる牧師殿と牧師夫人、私は他のどんな人にも、また決して、娘や夫人に対しても、願いません、私がガンゼヴィンケルへのこちらへの道すがら体験したことを体験して欲しいと願いません。ただ一度だけ私は途中、ある川の中に自分の姿を見ました。しかしその後、二度と見ていません。その見た時にはとても驚きました。

「後で一度あなたの前に鏡を置いてやるわよ」と司牧夫人は呟いた。しかし多分、ただ同情が募って、照れ隠しにこう呟いたのであった。クリスティアン・ヴィンクラーは自分の感情を少しも隠さなかった。

「何と言ったものか分からない。ますます深く、自然の情と人間の心とが見えてくる」と彼は呟いた。「この眼差しには驚愕と祝福が感じられる」。

「私はガンゼヴィンケルに近付くにつれ、一層自分が惨めな気持ちになりました。だって、私はいわば自分のひどい青春の時、森で育ったのですから。どんなにこの森は生来暗いものか、私は自覚していなかったのです。最初にブナの木が今回私にその影を投げかけたとき、そう感じました。私自身、殺人者や盗人のようでした。でも私は呼ばずにはおれなかった。森の中でそう呼ばなければならないとき、どんな気分か、私以外誰にも分からないでしょう。でも、コルト・ホラッカーからの返事はなかった。私は自分の声と全く一人っきりでした。でも考えました。ここ全体、巡査や軽騎兵、それにあの人が、うごめいている、と」。

「この話しは今一度印刷されて、年の市で売られることでしょう」とビラ夫人は呻いて言った。「私自身、永遠に記念として買うことでしょう。それは確かだわ」。

「風、藪の中の針鼠、道で出会う獐鹿、これらには私はほとんど死ぬ思いでした。コルトかもしれなかったし、あるいはもっとひどいことかもしれない。でも、私はここにいます。私はまず夜になったら、村の中に忍び込もうと思いました。でもハンネブルクの少年、ハンヘン[小さなハンス]がその前に私の顔を見ていました。それから少年達が叫び声を上げて、それから百姓達が私を捕まえて、村中の人々が私の後を付けて来て、私とコルト・ホラッカーについてからかい、嘲笑したのです。そして今、神様のお慈悲で、私はまたここにいて、私が相変わらず正直な娘であることをお二人に信じて頂けるかどうか、そして正直な娘であるとまた牧師ネーレケ殿に書いて頂けるか、私にはわかりませんし、そう願うこともできません。私はコルトについて知らせて頂いたら、喜んで死にましょう。死ぬまでは無報酬で、ネーレケ牧師殿の許で、私の恥の償いをして働きます。でも私は、あの人がすでに掴まえられたのかどうか、あの人の頭がすでに刎ねられたのかどうか、知らないうちは、自分の墓に入れません。その後でしたら、静かに入れましょう」。

「でもその前にまずは一杯コーヒーを飲みなさい、阿呆な馬鹿娘」とガンゼヴィンケルの牧師夫人は奇妙なしゃがれ声で叫んだ、「ヴィンクラー、お願い」。

「あの人の首はまだありますか。後生です、そのことをまず教えてください」とロッテ

・アハターハングは叫んだ。新たに跪いて、野蛮に両手を、牧師とその伴侶に対し、持ち上げ、揉んでいた。

「阿呆だな、勿論まだ大丈夫だ」と牧師は同じように強く叫んだ。「その無益で、愚かな類人猿頭を彼は勿論有している。そなた自身が聞いたろう。そなたを手懸りに、まず人々はこのならず者の胴着を掴みたいと思っているのだ。そなたが彼に対し森で叫びかけたとき、彼がそなたに返事をしなかったのは、彼のいつものうつけ頭のせいというよりも別の理由に違いない。ひょっとしたら彼は遠過ぎるところにいるのかもしれない。彼は人々を、　―　つまり我々をいつも森で愚弄するからな。　―　ビラよ、ビラ。主は今日でも世界の路上で説教されている。主は相変わらず、罪人や精神の貧しい者達を相手にされている。―　それなのに、我々は大学で研究し、試験を受けて、試験に落第しなかったら、我らの職を得ている。そして瑣事で立腹しながら、聖堂区支払いのことで喧嘩している、単に我々が我らの給与に関しては、郡の財務課を相手にしたいからだけなのだ。我々はこの世紀、またこれらの子供達[信徒]に向き合うために何をしたらいいのだろうか」。

「私にも分かりません。でも　―　でもそれはこの世紀からの話しとは思いません」と善良な聖職者の夫人は言って、鼻をかんだ。心の中の疼きが鼻まで上がって来ていた。

「でも、…いや、…いや、本当に、…有り難や、この世紀の話しだ」とクリシャンは話した。それから彼は自分の椅子から立ち上がり、ロットヘン・アハターハングが立ち上がるのを助けた。この最後の言葉の間、夫と妻の間では、主の祈りが称えられていて、そして丁度最後の願いに達していた。[我らの日用の糧を、今日も与えたまえ。他]。しかし牧師の発した叫びは正当なものであった。

今日でも幾つかの心休まることを経験し、体験することが出来よう。人はいつも出来るだけ静かに次の時を待てばいいのである。

第十章

人生で二回目となるが、ヴィンクラー牧師夫人はそのロットヘンを湯浴み室へ連れて行き、この世の道端の埃を徹底的に洗滌させた。しかし今回夫人は櫛と緑色の石鹸での仕事を自ら行うことはなく、櫛や石鹸をただドアの中へ差し入れた。というのは、「今やこの娘は十分に大人になっている」からであった。しかし自ら手を出して、夫人はこのような風変わりな仕方で故郷に戻って来た娘に古着を着せた。この古着は、「こうした目的を予期していたのではなかった」。そしてこうしたすべての間に、　―　善良なクリシャンは、ようやく、遂にようやく、自分の庭の生垣側の園庭で、その冷たくなったコーヒーの許に来たのであった。彼はまた同じように冷たく[火の消えた煙を]吸っているとは言えなかった。というのは彼はしたたかに、煙の雲を午後遅くに、夏の日の一群の蚊の下、吹き出していたからである。フォスの『ルイーゼ』も、またフォスのホメロスも彼は向こうの自分の部屋の書架に静かに放置していた。彼は時を経たせるために、もはや少しも文芸上の支援を必要としなかった。ホメロスの太陽は彼の正直で、威厳のある灰色髪頭に温かく好意的に射し込んでいた。このようなとき、何年も前に、いかほどの数のイオニア人の上に太陽は輝いていたか、全くどうでもいいように思われたことは、まさに真実であった。

「嗚呼」とガンゼヴィンケルの牧師は溜め息を吐いて、新しい雲を吹き付けて、次々に

雲の長い列を作り、同じようにテーブルの上にあった昨日の新聞に手を置いた。

ホメロスの太陽[シラーの詩『散歩』]は、ルクセンブルクの問題をも照らしていた。[1867年ルクセンブルクの帰属を巡って、フランスとプロイセンの間で緊張があった]。この時、庭の通路に沿って、家の柘植の木の生垣の間を歩いていたビラ夫人をも、それに劣らず照らしていた。牧師は昨日の新聞をまた置いた。妻の夫人は園亭に入って来て、緑のベンチに腰を下ろし、両手を疲れて膝に置き、溜め息を吐いた。

「やれやれ」。

「フム」と牧師は答えた。

かなりの間を置いて、牧師夫人が続けた。

「あの娘はとても腹を空かしていました。哀れな娘。今は正体を失ったように、横になって眠っています。私とミンナの介抱の下、眠り込みました。それでもあの娘の話しを信じてよさそうなのは、一つの幸運です。いえ、私どもを何一つ騙していないと、私は信じます。クリスティアン、あなたはどう思いますか」。

「私は、すでに向こうの私の書斎で私の見解をそなたに伝えたと思う。いいかい、私も信じている。有り難や、この娘の最初の言葉から信じていた」。

「フム」と今度はビラ夫人が言った。しかしそれから夫人は、新たに深く溜め息を吐きながら、背を正し、編み物道具を掴んで、語った。「いえ、私どもは根本的に善良な人間です、村の人々がこれに関し、どのような意見であろうとも。ねえ、あなた、私どもにはただ一つ欠けたものがあります。つまり、私はあなたに時々私の眼鏡を、あなたは私にあなたの眼鏡を貸し出す必要があるということです」。

「それは我々が毎日努めていないかな」と老公は敢えて質問した。しかし夫人は頭を振って、答えた。

「とても、しばしば、十分であったとは言えません」。

そして再び一つの間が生じて、その間牧師夫人は自分の編み針をきちんと整理して、クリシャン・ヴィンクラーは再度、ルクセンブルク問題を取り上げた。更に五分してから、牧師は新聞を再度置いた。

「ビラ」。

「何ですか、御老体」。

「長いこと、繰り返し考えて、煮詰まった物思いの結果を話そう。我らにとって、幾多のこと、　―　多くのこと、　―　とても多くのことが、我らのこの人生、ここガンゼヴィンケルでは起きなかったかもしれない、仮にだ、我々にその英知に関し至高の者である神が、　―　自らの子供を持つという幸せを恵んでいたならばな」。

「いえ、天上の父よ」とビラ・ヴィンクラー夫人はどもって言った。しかし夫は、この叫び声に邪魔されずに、続けた。

「愛しい妻よ、自らの子供達のことだ。我々はまさに聖職者仲間の中で一つの例外だ。我々は、何に対しても、時間、　―　余暇を、そなたが何と呼びたかろうと、有する。我々は残念ながら、いつもただ二人だけで、隣人であった。それで距離を保つことによってしか、我々二人は自活出来なかったのだ。ビラ、ここには何か純潔がある」。

ルター主義の聖職者夫人は編んでいる靴下の上で両手を組み合わせた。

「グレゴリウス七世は敬虔な男であるばかりでなく、賢明な男でもあった。ビラよ、彼

は人間の弱さを見積もる術を心得ていた。我々は、そなたと私は、子供のいない夫婦として、少なくとも半分純潔に暮らしている。それだけに全霊を上げて、特に我々にとって摂理がふさわしいものと見なしてくれた課題に取り組むことが、我々キリスト教徒としての義務であり、責務ということになる。創造主の助言は、不思議なもので、創造主が我々を自己満足へ導いて行く道は様々だ」。

妻はその編み物道具を膝からテーブルに滑るように移し、両手をテーブルに置いて、彼、夫を見つめた。人生でただ一度だけ夫を凝視した時と同じで、つまり紀元一八五六年の聖三位一体祝日後の十回目の日曜日のことであった。彼女はその教会席から、彼が説教の最中、話しを止めて、ハンカチの代わりに、彼女の白いナイトキャップの一つを取り出して、自分の額を拭いたのであった。

「クリシャン」。

「ビラ、私は摂理を言っている、　—」。

「私は、ここにじっと座っていて、言うことはただこうです。あなたが今、教皇と純潔について話されたことは、ルター博士と片付けてください。宗教局がこれについて何と言うであろうか、あなた自身が一番良くご存じでしょう。でも摂理に関しては、ヴィンクラー、これは全く私と同じになるはずです、つまり私は正確にこう承知しています。摂理は、生ずる出来事に関し、一人の人間の幸せを直接目に留めていて、必ずしもただ村全体ではないのだ、と」。

「ビラよ、…いや、ビラよ」。

「ノイバウアー博士殿は村全体とされるでしょう。彼が最近友のエッカーブッシュとこちらへ来たとき、私はあちこち行き来しながらこのことを耳にしました。あなた方二人は彼に反対の立場でした。でも、私には、老骨さん、悪く受け取って貰いたくないけど、彼の方があなた方二人をとても上手に負かしているように見えました。あなたはまず論争を諦めて、自らポンス鉢の仕上がりを見るために去って行きました。それに副校長がどのように高等学校教諭を片付けたか、摂理について彼らがどう決着したか、私は存じません。私は砂糖を加えたり、あなたは地下室に行ったりでしたから」。

ガンゼヴィンケルの牧師は、ルクセンブルク問題を鼻先へ持ってきて、何事か呟いていた。頭のおかしい男か女がいる、と。

「まあ、呟いていなさい」と妻は叫んだ。

後に、晴れた夏の午後の空の中から、新たな現象が出来して、このフィレモンとバウキスとを再度、座席から全く直立させたのでなければ、一体このガンゼヴィンケルの牧師の庭の生垣にある園亭では何と色々なことが話されたことであろうか。

この現象は長く、黒い、学校教師の上着と、広いつばの麦わら帽と角縁眼鏡を帯びていた。これは森からの野道を来ていて、それも急いでいた。駆けながら汗を拭いていて、そのハンカチで同時に極めて興奮した合図を園亭に送っていた。

「これはエッカーブッシュじゃない？」と牧師夫人は尋ねた。そしてクリスティアン・ヴィンクラーは、飛び上がって、垣根越しに眺めながら、叫んだ。

「勿論、彼だ。それも小走りだ。いや、完全なギャロップだ。ビラ、何が起きたのであろう。何とこの老公は駆けていることか。彼は何の合図をしているのか。…おい、まるで操り人形のようにばたばたしている。彼の二級生どもの目に、このギャロップの風車姿が

把握されて、鉛筆で描写されていないのは、まことに幸いなことだ」。

聖職者の夫婦は、今や同様に垣根越しにこの善良な友に合図を送って、牧師は生垣の戸を開けた。副校長は全速力で駆け込み、帽子、ハンカチ、杖を振った。

「諸君、諸君、椅子をくれ」。彼は間近の椅子に、完全に力尽きて、倒れこんだ。

「諸君、人間の身には何が起きるか分からん。学校教師が休暇のピクニックで何を経験することか」。

「ビラにすぐにグログ酒を一杯用意して貰おう。病気なら自宅のイーダの許まで送ろう。すぐに類似のものを類似のもので治すように[ホメオパシー]、何か全く熱いものを飲むのでなければ」と牧師は叫んだ。

「いや、風邪を引かないでください、エッカーブッシュ」と牧師夫人は叫んだ、「私はすぐに台所に行きます。でも、まずは、　—　手短に一体何に遭遇されたのか、人間としてまた学校教師として何を経験されたのか、話してください」。

「ヴィントヴェーベルがまさに追っかけています」と副校長は、次第にまた息を取り戻し、喘いで言った、「最良の友の女性、本当にグログ酒を頼みます。私と未亡人とは出来る限りのことをして、彼を呼び戻そうとしました。三十分ほど、喉と肺をからして叫びました、ヴィントヴェーベルよ、ホラッカーよ、ヴィントヴェーベルよ、ホー」。

「ラッカーですか」とクリシャン・ヴィンクラーと彼の妻ビラは一つ口からのようにどもった。

「ホラッカー以外の誰がいましょう。ホラッカー、盗賊の頭です。…我々、　—　ヴィントヴェーベルと私と彼と未亡人は一緒にシャトー・ミロン[赤ワイン]、の瓶を一緒に飲んだのです」。

「ホラッカーと一緒に」。

「ホラッカーとホラッカーの母親と一緒に、全く楽しくて、平和的で、レディーや子供達と一緒の森へのピクニックの時のようでした。私自身今では夢のようです。しかしこの事実の現実性への疑念は一かけらもありません。事実でした。…私どもは一団となって腕を組んで一緒に村の中へ下って行ったことでしょう。あの馬鹿、ヴィントヴェーベルが、無思慮に夢遊病者を目覚めさせ、このホラッカーを検察の言葉を発して、森の中へ追い返してしまったのです。すると、彼、同僚ヴィントヴェーベルは、彼、ホラッカーを追いかけて行きました、ホラッカーが我々の許から逃げた後です。　—　未亡人は木の切り株に座って残っていました、別の丸太さながら。ようやく私はこちらへ走って、君に、クリスティアンに尋ねることが最良だと思ったのです、つまり今一度村人を集めて、騎乗の使者を町へ送り出すのが、我らの義務ではないか、と」。

「いずれにせよ、私を中心に世界が回っている。実際目眩がする。我らはロットヘンを得たし、そして　—　彼が　—　このコルトを　—　ほとんど捕らえていた。では、何か言ってくれ、ビラ」。

「まずは彼が完全に息を回復されて、澄んだ分別状態になられる必要があります。その後、更にもう一度最初から話して頂きましょう。私が世界の周りを回っているのでない限り、私は出来るだけ澄んだ風に見たいし、とりわけ夢物語を信じたくありません」。

「全く私の活性剤妻だ」と副校長エッカーブッシュは語った。

「神に健気で賢明な妻を贈られた者は[箴言31,10]、小川の辺りに植えられた一本の木の

ようです」とガンゼヴィンケルの牧師は呟いた。[詩編1.3、主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人。その人は流れのほとりに植えられた木]。

「時には製粉所のようでもある」と副校長は呟いていた。しかし副校長はそれでも自分のグログ酒を得て、牧師の館で最初から、全く順を追って、自分と同僚のヴィントヴェーベルに森で何と奇妙なことが起きたか物語った。

第十一章

ハシバミの茂みの中を人間の屑を追いかけているのが、人間ではないとしても、全く疑いもなく芸術家ではあったろう。この芸術家は、紙の上にドイツ人リナルディ―ニ[盗人]を三分の一仕上げていて、まさにこの残りを手放したくない思いであった。そして自然は同僚ヴィントヴェーベルに悪漢追跡のこのような猟にふさわしい両脚を恵んでいた。長くて、贅肉のない、しかし強い筋力のこの両脚は、このような仕事、類似の仕事にかなったものであり、彼はこれを活用した。

「盗人よ待て」。

自分の前、雄山羊跳躍で数百歩離れたところに、彼はその盗賊の物音を察知していた。小川や沼地を越え、茂みや、高い木々の森を抜けて、この追跡はますます深く荒れ地の中へ侵入して行った。スケッチ教師は、その長い脚にもかかわらず、また先を行くこの哀れな奴の脆弱さ、零落にもかかわらず、すべてのエネルギーを集中させなければならなかった。

しかしこの茂みのまさにこのざわめきの音ほど追跡者の足取りと勝利の確信を強めるものはなかった。つまり人間であれ、動物であれ、逃走しているものの不安の音である。すべての猟師、兵士、弁護士、美しく若いレディーはこの音を承知しており、これを頼りに追いかける術を心得ている。勿論レディーの場合は、母親の同意と見守りの中であるが。

「いよいよこの悪漢は御仕舞いだ」と同僚は喘いで言った。「肺の最後の一葉を失うことになろうとも。おい、ホラッカーよ、ホラッカー、　―　観念しろ、悪漢よ」。

しかしこれはまたまことに政治的に賢明でなかった。できるだけこっそりと追跡猟は行うべきであろう。戦争とか、泥棒追跡、それに愛は、その旗には、口に錠をしたものを掲げるべきであろう。「コノ徴ノ下、汝ハ勝利スルデアロウ」[コンスタンティヌス大帝は対立皇帝に対する戦いで空に十字架を見たとされる、312年]。

今一度、最後の呼びかけで、逃亡者の足取りが、追跡者にとって、極めて遺憾な具合に速くなった。ざわめく音がますます遠ざかり、ヴィントヴェーベルは歯を食いしばって、両脚を更に長く伸ばさなければならなくなった。

二人は今やかなり深く、道なき一帯に陥っていた。周囲には森が静かにあって、沈む夕陽が森を鬱陶しい蒸し暑さで満たしていた。数週間もの飢餓がなければ、この盗賊は今回も逃げおおせたことであろう。しかし、すべてに、申したように、この世では、不安一杯の狂った追跡のこの世では、終わりがある。更に五分間この盗賊は走った。しかし新たな森の空き地で、ヴィントヴェーベルは彼を目撃し、これで競争は決着した。

両人ともこの空き地を、首を長く突き出して飛んで行った。すると急な、ブルーベリーとブラックベリーに覆われた山腹が二人の前に立ちはだかった。古くて見捨てられた石切

り場の切り立った岩々の間を、更に二十フィート、上方に喘いで駆けあがり、それからこの石切り場の中の地面に転げ落ちた。ヴィントヴェーベルは、彼の上に飛びかかり、同じ具合になって、しかしうつ伏せに落ちた。しかし盗賊は、横たわったままであった。一方ギムナジウムのスケッチ教師は、出来る限り速やかにまた両足で立って、鼻息荒く、親指と人差し指、中指、薬指の間から憤然と喘いで言った。

「これも絵のためだ」。　———

この山の砂岩の中に細工された窪地は、暑い日の涼しい箇所であった。植物がすでにかなり以前からまた占拠していて、人間の活動の痕跡を出来るだけ消していた。植物の茂みが岩の残骸からこの箇所に影を投げかけていた。大きな羊歯が、岩の苔の間に繁茂していた。そして一方の面から湿って、水滴がぽたぽた真珠のように落ちていた。小さな湧き水がこの岩の瓦礫の中、水路を作っていて、細密画の滝となり、更に谷へ通じようとしていた。山腹の更に上方に、高いブナの木があって、この地にその涼しい影の一部を投げかけていた。

「この周辺の風景は魅力的だ」とヴィントヴェーベル同僚は言った。岩塊の一つに腰掛けて、美術家の目で周りを見ていた。

彼は座っていた。しかし彼の足元には盗賊ホラッカーが相変わらず顔を湿った草や苔の中に置き、両足を遠く伸ばして、両手には老母たる大地を掴んでいた。　—　「自分にふさわしいものを私から受け取るために、まさにあたかも気持ちよく横になっているかのようだ」と相変わらず息を切らしている美術家は思った。

「丁度うずうずしているところだ。ハシバミの鞭がこの手の中に育って来よう。ホラッカー、怪物よ、そんなに寝そべって、その気にさせてくれるな。私は生まれつき優しいが、余りそれを当てにするな。このケースで、すでに貴方の尻に対し、完全な活動態勢に取り掛かるであろう人々を私は数十人知っているぞ。ほら、少なくともそのまま側転してみろ」。

「ウエー、ウエー」とこの犯罪者は呻いた。顔を更に深く、出来ることならば大地に埋めていた。

「まさにウエー、ウエーだ。それが貴方のために断念した立派な滴[ワイン]に対するお礼か、阿呆。ホラッカーよ、突然、何の毒蜘蛛に刺されたのだ。毒蜘蛛を知っているのか。

—　こんな奴と最後の一切れを分け合っていると、次の瞬間には、　—　走り出して、

—　どこまでも走って行き、この盛夏の一日に、後を追いかけなければならん、　—」。

「きっともう二度とないことです。この場から私は二度と起き上がれない」と地面の中に嚙みつきながら、盗賊は喘いで言った。

「二度とこの場から立てないのか」。

「はい、旦那様。どうぞ静かに村へ行かれて、百姓どもを連れて来てください。私はここでじっとしています。そのまま町へ行かれて、警察や検察官を連れて来てください。私は丸太のように連行されましょう。全能の神にかけて誓います。私はもううんざりで、これ以上逃げません」。

「それだったら、この最後の追いかけっこもしないで済んだろうに、ホラッカー」と同僚は呟いた。羊歯で扇いで、出来るだけ涼しくしていた。「貴方は全く気の良い雄鶏だ、ホラッカー、　—　良心が痛むなんてことはこれまでなかったんだろう」。

盗賊は小声で苔と草の中へ嗚咽した。そしてスケッチ教師は次第に途方に暮れた顔とな

って、この哀れな男を見下ろしていた。

「仕舞いにはこれはただの冗談じゃすまなくなってしまう」と彼は呟いた、「『怒り狂う前に、いつもまずゆっくりと十五数えなさい』と妻のヘートヴィヒは言う、『ヴィクトル、いつも私どもは早々と人々の笑いの餌食です』。この愛しい妻の言う通りだ、 — 勿論その通りだ。しかしまたここで私の軽率さ故に、とても素敵な状況に陥った。親切な天よ、私はこの阿呆をどうしたものだろう。これは、オールドミスのドアの前の外に出された乳飲み子よりももっと始末に困るものだ。上の樅の木のキツツキはここでは唯一の分別あるものだ。キツツキはまさに自分の仕事のことのみ気に懸けて、ほんの一回も脇見して、下のこの穴蔵の我々に気付くこともない。一帯には誰一人いなくて、その意見を求めることもできない。…せめて同僚エッカーブッシュの手を借りられたらいいのだが。しかし彼は座っていて、ホラッカー未亡人を慰めていよう。すでに静かに未亡人と一緒にガンゼヴィンケルの牧師の許へ出掛けているのでなければ。より控えめに言っても、三十分ごとに、このようなうんざり事に遭遇してしまうのは、まさにいつも我々の如き者に違いないのであろうか。いや、ヘートヴィヒよ、ヘートヴィヒ、彼、この盗賊ホラッカーが、まさに正しく私を鷲掴みしている。そなたが出発前に彼のことを警告したのは、いわれのないことではなかった」。

彼は頭を両手に抱えて、熟考しようとした。この緊張と、暑い日中による汗に加えて、ほとんど更になお不安の汗が額に生じた。コルト・ホラッカーは寝たままの状態であった。

「この男は私の鼻の下、純然たる悪意から昇天するのでなければ、次には鼻息を立てて眠ることだろう。この人間は何でも出来る奴だ。ホラッカー、 — おい、こら、ホラッカー、最後に私は要求しよう、少なくとも今一度私に貴方の愛らしい顔を見せてくれ。ホラッカー、私は本当にぶん殴るぞ。貴方が少なくともこれから五分間側転してくれないと」。

この強要はようやく効いた。無感覚のこの悪漢は再び魂の奥底から呻いて、半ば側転し、かくてスケッチ教師に、その洗っていない、荒れて、飢えた顔面を見せた。

「後々更に別種の人間の苦しみについて語る人がいるかもしれない」とヴィントヴェーベル同僚は呟いた、「しかし我々がここで必要としているのは、ドクトル、薬剤師、二,三人の慈悲深い看護婦であって、警察やガンゼヴィンケルの百姓達ではない。フム、ホラッカーよ、 — コルトヘンよ、残念ながら一杯の赤ワインを貴殿に差し出すことはもはやできない。 — それで、話してくれ、あれは、あの老いたレディーは貴殿の母親か、貴殿のジャケットの裾を掴んで、貴殿を砂漠から連れて来たのは」。

するとこの盗賊は溢れる流涕の下、吠えた。

「これはまだボタンにかかっている私の唯一のズボン吊りの片方だ。 — もう一方は追いかけられた別の折、茂みに放置して来た。私はとうに適当な枝が見つかり次第、これにぶら下がっていたことだろう、仮に、この老母と — それに、 — 更に — もう一人の女がいなかったら」。

「更にもう一人の別の女か」とヴィントヴェーベルは口笛を吹いた。「いや、今、同僚ノイバウアーがここにいたらと思う。同僚ノイバウアーにここでの享受を丸ごと提供したい。彼奴はこの体験のどんな些細なニュアンスをも見逃さない最適な男と思う。これは一つの牧歌にふさわしい素材であろう。これはヘクサメター[詩の六歩格]にすれば、幾ばくかのものが完成しよう」。

「そう、もう一人の女だ」と盗賊が歯ぎしりした。「我がロットヘンよ。これから何が出来上がるか、私は知らない。しかしこのロットヘン・アハターハング、それに老母、そして私、我々はこの三人だ。別の世界全体、私の眼中にはない」。

「友よ、我がロットヘンによろしく[シラー『戦闘』からの一節]とスケッチ教師は呟いて、この引用によって、途方に暮れながらも、一廉の古典素養のある人間として姿を見せた。「それでは貴殿らは三人一緒か。…ヘートヴィヒがここにおればと思うぞ。しかし妻は家で新たなカーテンを掛けていよう」。

彼の可愛い若い家庭生活からの明るい、愛らしい光線が、この時間の不快な狼狽の中、輝いた。ヴィントヴェーベルは身震いして、それから拳で間近な岩塊を叩いて、叫んだ。

「私がこれに詩行を付けることが出来れば、きっともっと私の心に気持ちの良いものに思われることだろう。しかし私はここでスケッチブックそのものも諦める。ホラッカーよ、我々はここで残念ながら、全く邪魔されずにいる。貴方は貴方の息を部分的に次第に取り戻したことだろう。私は段々の貴方の不埒さよりも、貴方の無邪気さを信ずる気になっている。私に貴方自身のこと、貴方のロッテヘンのことを語ってくれ。感化院には誰でも入れよう。しかし我々のそれのようなある一帯、ある住民の下で、盗賊団として身を立てようという不健全な考えに、通常の人間が毎日襲われるとは思えない。私は学校教師としてお喋りしているのではない。これについては任せて頂きたい、我が友よ」。

「それに貴方は本当に裁判官ではないのだろう」。

「我々が貴方に先ほどすでに伝えたように、　―　全くそんなことはない。愛する神は立腹して、我々を学校教師にされたのだ」。

「私は追剥にされました。もっとも私は仕立屋の学習をさせられたのだけど」とコルト・ホラッカーは叫んで、背を起こして座った。「最愛の旦那。ある者がその定めの者になって、何の責任がありましょう。学校や教会へ行っても、何もそれを防ぐことが出来ません」。

「同僚ノイバウアーがますますここにおればと切に願われる」とヴィントヴェーベルは呟いた、「彼は私のことを、それが文法的により正しいからと思って、スケッチ教師殿と呼んでいる。彼は一廉の哲学者だ。この世のすべてのニュアンスを解している。彼なら、ここのこの哲学者についてどう考えるか、言えることだろう」。

「私は自分についてどう考えるか、自分に分かる限り、自ら貴方に申し上げましょう、教師殿」とホラッカーは言った、「他の人々は一人の人間を全く正確には知らないものです。裁判官の殿方すら、牧師のヴィンクラー殿ですら知りません。　―　私は感化院に合法的に入りました。我々のような者にとって、これは結局全くどうでも良いものです。また私がその娘のことを良く知っているように、この娘にとってもどうでも良いものです。この感化院は娘にとっても私の改善を目指すものでしたから。私は実際満足して、感化院で仕立屋の技術を学びました。もっとも私は村で生来その資質はなかったのですが。いや、私は今日でも、この技術で世間を渡り、我が老母を助けられたらと思っています。御覧ください、旦那様。我らの如き者も時に考えを弄します。学者先生や豊かな百姓達の考えのようには繊細ではありませんが。これは麻の撚糸と絹の撚糸のようなものです。しかし撚糸なのです。そして感化院の牧師殿は自ら私の糸を解く手伝いをなさって、私がようやく自分の心根でも、また後では現実生活でもきちんとした人間となれるようになさったので

す。つまりそんなわけで、私は立派な成績で出所したら、まずは広大な世間に遍歴して、感化院での臭いを上着から消すようにしたことでしょう。　―　いや、私はきっとこのことを成功させていたことでしょう。すると私は異郷にいまして、仮にそれはアメリカのはずだとしましたら、一連の硬いターラー貨幣をかき集めるほどに働いたことでしょう。そしてその娘が、私に千回も固く約束していましたように、私を待っていてくれたら、そのときには、　―　そのときには、　―　」。

実際有り得たことを考えると、この哀れな貧乏人は完全に圧倒された。彼は激しく泣いて、明るい涙の粒を痩せて汚れた両手とジャケットの袖で拭った。肉体的に、そのことで彼はきれいになることはなかった。しかし精神的には、ヴィントヴェーベルの目に、ますます可愛らしく見えた。

「ゆっくりし給え、ホラッカー」とスケッチ教師は言った、「我々教師も戦いなしにはこの世で地位を得られない。

おまえ、愛しいおまえ、遍歴修業は
散歩なんかじゃない」。[多分ラーベ作、1875]

「貴方もその詩をご存じなのか。いや、貴方はまこと気楽に歌われる。貴方はいつでも使えるよう、ポケットにハンカチをお持ちであろう。我がロットヘンは、私が軽騎兵によって町へ連行されるとき、まさに生まれて初めて半ダースのハンカチを買ったのだ」。

「四百ターラーの給与、しかしポケットに一枚のハンカチだ」とヴィントヴェーベル同僚は呟いた、「いや、ヘートヴィヒがここにおればと思う」。

そして彼は自分の窓辺に植木鉢越しに太陽が輝く様を見、そして彼に呼びかける楽しい小声の声を耳にした。「ヴィクトル、あなた忘れ物ないでしょう。昨日はネッカチーフなしで出掛けましたよ」。　―　彼は実際もう一度、ハンカチで額を拭く機会に恵まれた。というのは色々な思いが去来したからである。つまり昔の、かなり乱雑な年月の話しになって、その時代、彼も遍歴修業に出掛けていて、自分はきっとこの世で頭角を現してみせると確信していたからである。

「友よ、更に話しを続けられたい」と彼は少しばかりぼんやりして言った。盗賊は一般的告白を続けた。

「一体人間は、その生身、その心の中で何と耐えなければならないか、これは私にはかなり自明なことでした。そしてガンゼヴィンケルは、私が育つ中、その耐える尺度を計って来ました。空腹、喉の渇き、悪寒、暑さ、病気、粗野、殴打、そして侮辱が次第に着実に私の身に着いて来ました。しかし一つだけ私に準備が出来ていないものがありました。つまり狂ってしまうことです。しかし丁度自分が最も幸運な目に遭おうとしていたとき、私はこれにすんでのところまで来ました。ある者がやって来て、貴方の耳元にこう囁いたら、貴方は何とおっしゃるでしょうか。『馬鹿、ここにぶち込まれていろ、そして国の費用で感化されろ。あの娘は野外をうろついて、くそったれ、そなたのことを案じている。いや、その反対、ただそなたのことだけを笑っていて、そなたを懲役囚と呼んでいる。いつでも結婚可能なまともな娘っ子が、この懲役囚をどんなに恨んでも恨みきれないのだ。

―　ヴィンクラー牧師と牧師夫人が、ルンペン風情のそなたにはもったいない、はるか

に上品で、敬虔な娘に育て上げたのだ。　―　コルト・ホラッカーよ、娘は今、そなたなど歯牙にもかけていないぞ』。　――　そこで、立派な教師殿はおっしゃることでしょう。『ホラッカーよ、何故もっと詳しく尋ねなかったのだ』と。しかし　―　まあ、感化院の中で、もっと詳しくお調べになってください。総裁殿、検査官殿、説教師殿、それに看守達もただの人間に過ぎません。誰もすっかり他人の心が分かるわけではありません。この世では万事、言葉で仕分けられます、善と悪、　―　しかし真っ先に悪と劣等なものが、仕分けられます。まあ、貴方が教導者として、貴方の総裁や説教師に貴方の娘のことをお尋ねになって、その返事を聞いてみてください。後でむしろ、貴方が頼みもしないのに、貴方の耳元に囁く道化師の許に戻りたくなりましょう。この道化師は自らが不調で、自らが怒り狂っているが故に、単に嘘を吐いているとしましても。私を怒り狂わせた者は、チフスで教会墓地に埋葬されました。しかし私は駆けて行き、自らの目で見、自らの耳で聞いて、我がロットヘンは私の味方をしていて、彼が嘘を吐いていたのであると、分かりました。彼が存命であれば、私は彼を狂犬扱いして殴り殺していたことでしょう。旦那様、彼が亡くなったのは、彼にとって幸いでした。人間は自分のことを泣いてくれる人がいると、喜んで耐えます。自分のことが笑われていると、耐えられません。感化院では、説教師殿や総裁殿、検査官殿の背後で、私について余りに多く笑われました。かくて私はここにいて、高笑いのせいで横たわっています。これは恐ろしいこと、滑稽なことではありませんか。貴方自らおっしゃってください」。

「貴方は全く奇妙な若造だ、ホラッカー」と、手にこの盗賊の顎を持って、極めて真剣な具合に見つめながら、このスケッチ教師は語った。彼、ヴィクトル・ヴィントヴェーベルは、同じように、人々から「王侯のように興じられる」者達の一人であって、それも自分では少しも滑稽とは思わない時でもそうなのであった。従って、いずれにせよ、ここで慎重な判断を下す資格があった。

「貴方は元来、私には滑稽に思われないぞ」と彼は述べた。

彼は世間を経由しての自分の道程を振り返ってみて、舌に色々な酸っぱく、甘く、苦い後味を感じた。色々な衝突なしには、平凡な画家にして、立派なスケッチ教師にはなれない。　―

「いや、ヘートヴィヒ、我々両人は互いに何と耐えて来たことか」と彼はめそめそ言った、「我が哀れな、小さな娘よ、何と運命は我らの快適な家までの我らの道を茨で覆って来たことか。今日でも老エッカーブッシュがいなければ、茂みの背後の取るに足らぬ巣[町]で、我らはどう処遇されよう。九柱戯クラブの連中にとって、我ら二人を荒野に追いやって笑いものにし、私をリナルド扱いにし、妻のそなたをローザ扱いにして笑うことは、最大の娯楽に違いない。いや、そんなものだ、ホラッカー。私も老ヴェーデキント[検察官]やクラブの他の殿方らと一緒に貴方のことを笑っていた。　―　友よ、私に手を差し出してくれ。我らのようなものにとっては、この地上に余りに多くの分別顔の人間がいることは、受難だ。我らが優勢であって、多数を占めるのであれば、きっともっと正常に、もっと落ち着いて、もっと堅気に進むことだろう。しかし今は私に好意を見せて、奮起してくれ。今は本当に、我がガンゼヴィンケルに歩いて下りて行き、あるがままの世界を、そしてあるがままの人々を受け入れる時だ」。

「私は牧師殿のお目に二度とかかりたくないし、ましてや牧師夫人のお目にはかかれま

せん。私はここに寝ています」とコルトは呻いた。

「感化院でそこの仲間が貴方に吹き込んだものがすべて真っ赤な嘘であったからか。牧師館の善良な人々は、貴方と貴方のロットヘンのことで、天国で上席を確保したからか」。

「旦那、貴方は他のすべての人よりもひどい。それにこれをしも憐みと呼ぼうとなさっている」とこの盗賊は嗚咽した。「まさにすべては真っ赤な嘘であったから、そしてまさに哀れなロットヘンは奥ベルリン三マイルのところで良き人々の許､私を待っているから、今私はここで石の如く、そして向こうのブルーベリーの茂みの如く、自らもはや何も感じず、もはや何も欲せず、人々が死んだ私を連れに来るまで、横になっています。私の母が、それが甲斐のあるものなら、とうに私を森から村に導いていたことでしょう。三カ月と数週間経ったら、解放されて、実直な男になる、　―　それが、　―　今この有様。人々の噂と警察に追い立てられ、すべての一帯で殺人者、放火犯として罵られる。　―　すべてはどうでもよいことになりませんか」。

「彼の立場であればどうするか分かりさえすればいいのだが」。ヴィントヴェーベル同僚はその魂の奥底で、自らに言った。声高に彼は語った。

「貴方は馬鹿だ、ホラッカー、悪く取らないでくれ」。

「気楽におっしゃいます」と盗賊の頭は呻いて、鼻を再度古い石切り場の声や草の中に押し込む覚悟に見えた。「貴方は名士達の一人で、ガンゼヴィンケルの肥えた百姓同様に、自活する術をご存じです。しかし私は十頭の馬がいても、もはや私の汚辱から高みへ引き上げられないし、少なくとも六人の軽騎兵が来なければ、私を町まで運べないことでしょう。たとえ私が腹を空かした仕立屋にすぎないとしても。いや、ロットヘンよ、我がロットヘンよ」。

「私のヘートヴィヒもこやつのことを笑っていたな、こやつについての新しい話しを家に持って帰るたびに」とスケッチ教師は叫んだ。「同僚の副校長は、こやつを冬、カジノの素人劇場で上演するつもりであった。それが今、　―　私はここで彼と一緒に座っている。…では、ホラッカー、貴方は私と一緒に静かに大人しく村へ下りて行く気はないのだな」。

ホラッカーは黙って頭を振った。

「よろしい、私は貴方を肩に担いでは下りられない。従って私は一人でガンゼヴィンケルへ行き、牧師夫人に貴方がどこにいるか話そう。夫人はそれから楽長のベクセンダールを、つまり貴方の昔の教師を送り出して、貴方を家に連れ戻すことだろう」。

「楽長殿ですか」とホラッカー、盗賊の頭はどもった。

「健気な同僚、ベクセンダールだ、彼は貴方を学校でも教えた。…何だ、私と一緒に行く気なのか」。

「はい、老ベクセンダールに連れ出されるよりはましです」とホラッカーは鈍く吠えた。すると同僚ヴィントヴェーベルは語った。

「おや、貴方は健気だ。いや、実に素晴らしい奴だ。空想の力で、踏み出す度胸の後方支援を必要とする最初の人物ではないけどな」。

第十二章

およそ午後五時頃、副校長エッカーブッシュは森から牧師の庭園に飛び込んだ。十五分後に村長のネッダーマイヤーは牧師クリスティアン・ヴィンクラーによって生垣越しに呼び出され、ホラッカーの件について最新のニュースを知らされた。すでに夕方六時三十分には、ガンゼヴィンケルの田舎鼠は郡中心都市の市門の下で、勿論とても驚いて両耳を立てている町鼠に対してこう言った。

「まだご存じないの。ホラッカーが今日こちらの森で一人の老いた学校教師を撲殺したのだって」。

しかし我々は、この恐ろしい知らせが、まだ夕陽の中、静かに黄昏れて行く共同体で広まり、この中でのあらゆる作用の展開を追う前に、まだ少しばかりより詳細にガンゼヴィンケルの牧師館での出来事を見てみる必要があろう。噂は静かにそのまま流布して行くということが、まさに噂の素敵な点である。噂は善きことにしろ、悪しきことにしろ、噂によって自分の仕事も意見も見解も妨害されたくない者による添加もなく流布して行く。

この折、牧師館の庭で人々はヴィントヴェーベルを称賛していた、それも格別に称賛していた。

「良い方です」と牧師夫人は言った。

「まさにそうだ」とその連れ合いが保証した。

「本当に良すぎる奴です」とエッカーブッシュは言った、「申し上げると、私は、彼が我らの立派なギムナジウムに採用されて以来、日ごとに、老婆のように、彼の感情、不安、困難を観察してきました。それで私は空想の中で、いつも彼のズボンの後ろベルトを握っていて、被害を受けないよう配慮して来ました。『注意しなさい、ヴィントヴェーベルよ、ほとんどまた貴方は鼻から落ちるところだった。またしても貴方はあの俗物に突っかかって行ったぞ。言った通り、今度は同僚ノイバウアーのことで躓いている。私の言うことを聞いていなかったのか』。　―　私が彼の世話を焼くように、私の老妻は彼の花嫁の世話をしています。　―　しかし同僚ノイバウアーに関しましては、私は彼の将来の妻にお祝いを申し上げたい。この高貴な男は彼の銀婚式の日に思い出すのはきっと蚊の方でしょうから、彼が愛の告白をした時、彼を刺した蚊なのです」。

「まあ、いい加減、君の永遠の同僚、ノイバウアーのことは勘弁してくれ、エッカーブッシュ」とガンゼヴィンケルの牧師はそれどころか少しばかり無愛想に叫んだ。

「喜んで、まあ、彼の方が私を勘弁してくれさえすればいいのだが。しかしこの若造は私に対し、いたくご執心で、私がヴィントヴェーベルに対するが如くだ。保母の如く私は自分の背後に寝ても覚めても彼の姿を見る、　―　忌々しい奴だ。この人間はいかに多くの立派な時間を自らの咎で失っているか、この阿呆、生涯で一度も自覚したことがない。つまり、自分が他の人々の立派な瞬間を、ことごとく、それも出来る限り頻繁に、台無しにして、その功績を楽しんでいるのだ。しかし私の活性剤妻との彼の交際は爆笑ものだ。すでにそのせいだけでも、彼は常に我が最愛の家庭の友の一人に数えられている。この両人がその交際で、愛想や毒素、皮肉や憤怒を互いに振りかけようとしている様は、余りに極楽の風景だ」。

「エッカーブッシュ、それでも貴方は良い人間であると今でも自負なさっているのですか」とビラ・ヴィンクラー夫人が尋ねた、「いや、あなたのイーダになりたいものです」。

「クリシャン、これに対する君の意見は」と副校長は言った。すると牧師は再び、しか

し今回は微笑を浮かべて、頭上の帽子に手を当てて、相変わらずまだ園亭に居合わせている村長の方を向いて、尋ねた。「その通り、我が親愛なる隣人にして友の方、我らは奇妙な世界、混乱した世界に暮らしていますが、結局この世界でまともに暮らすのは少しも難しすぎることはないと承知していましょう、このようにご承知ですかな」。

「我々両人が、今やがて半世紀にもなるほど、互いにいかにうまく歩調を合わせてきたか、牧師殿、このことは私も、貴方も、共同体も、貴方の愛する奥方も含めて、勿論有り難いことに良く知られたことです。これからもそうであり続けたいと願っています」。

「まあ、おっしゃること、ネッダーマイヤーさん」と牧師夫人は結んだ。「本気でそうおっしゃっているのだと願っています、村長殿。嬉しいことです。貴方もご存じでしょう、私の方もいつも最善を尽くして、一体となって平和を保つように努めています。でもまたホラッカーの件に戻りましょう」

「いや、これが勿論、差し当たり、最も重要な件でありましょう」と村長は述べた、「万事、その時節があります。　―　新年には凍てつく寒さとなろうとも、盛夏の日に暖房する必要は少しもありません」。

「私どもは結局、何人かの落ち着いた、きちんとした共同体一員と一緒に森へスケッチ教師殿を追いかけに行くべきではないでしょうか、ネッダーマイヤー」と牧師は尋ねた。

「そんな」と最大限の強調をして、ガンゼヴィンケルの愚直な村長は言った、「その人物が、皆さんがおっしゃるように、その悪漢の後を追ったというのは、結構なことです。しかしそれ故、可能ならば、その人物がやはり一人で悪漢を連れて来るべきでしょう。とにかく一人の人物が骨折って悪漢を追いかけているというのは、まことに安堵する話しです。村としては、その責務を果たして来た、と村のことを頼もしく見ています。　―　この点、一般的報奨に与らないような者は一人もいないと思います。さて、ある人物が純然たる好意と気立ての良さから、このような悪漢の追跡に乗り出したのであれば、これは私の意見ではその人物自らの道楽であります。誰もこの道楽を妨げるべきではないでしょう。この道楽で共同体に害を与えるとか、あるいはその他の騒擾につながるのでない限り。教師殿はこの悪漢を本当に捕えたら、この悪漢と一緒に逃げることはないでしょう。教師殿にはただ静かにこの悪漢を連れて来て頂きましょう。後ほど、我々はこの悪漢をどう処分するか、職務的に判断することになりましょう」。

「あの娘は相変わらず眠っているのか」と牧師はその妻に尋ねた。妻は、村長のかなり長い話しの間、家の中を見て、耳を澄まし、また園亭へ戻って来たのであった。

「死人さながらです」と返事があった。

「教師殿がこの与太者を連れて来て、我らが両人の浮浪者カップルを対面させたら、後ほどのその娘の目覚めは一層楽しいものとなりましょう」と村長は言った。すると、―。

「ネッダーマイヤー、その折りにはきっと立ち会いをお願いしましょう」とガンゼヴィンケルの牧師夫人はとても顕著な丁重さで語った。しかしこの健気な男は残念ながら、この丁重さを単に、一面からのみ、つまり丁重さの面からのみ判断していたのであった。

副校長のエッカーブッシュはガンゼヴィンケルの牧師館に、自らの長いパイプの一つを置いていたことは、自明のことであった。この時彼はすでに二回目、このパイプに詰めて、はなはだ強く煙を吹き出して、絶えず片手で目の前から匂いのいい雲を払い除けて、垣根越しに森の方を眺めていた。この森は次第に長い影を森の周囲の野原や田畑に投げかけて

いた。

「きっと相変わらずまだ木の切り株に座っているであろうあの老婆の姿がこの心中から消え去ったらいいのだが」と老エッカーブッシュは溜め息を吐いた。「人間は、日々の恥辱や欠乏に対し、次第に必要な諧謔を備えて、日常生活を続けてもいいし、死去してもいいように準備や用意をして来たつもりでも、しかし何たることか。各瞬間ごとに、何かピカピカ光るものが、それに対し何の備えもしていないものが出現する。これに比べれば、天候が予報者をからかう悪戯も物の数ではない。さて、私はここに座っている。一週間前からここに座るのを楽しみにしていたわけだが。そしてあの老婆の詰まらぬ胡椒の実を噛まなければならない。それに貴殿らが私にその育った話しを聞かせてくれたあの小さな娘がこの家にいる。これで夏の夕べが幾らかもっと快適になったかな。...それにヴィントヴェーベルだ。...彼の花嫁に対し彼のことで責任がなければ、彼は好きなだけ駆けて行って構わんのだが。しかし私が彼を連れずに帰ろうものなら、何とも結構な話しになってしまうではないか。諸君、申し上げるが、誰も幽霊を信ずる必要は全くないとはいえ、しかし然るべき時、然るべき気分の時に、ドアの背後で、あるいは近くの古い柳の木の下で、いきなり白いハンカチが現れて、錯覚しかねない。この鐘は何だ。...おい、おい、　ー　もし、　ー　彼が彼を殺してしまったら」。

「いや、エッカーブッシュよ」とガンゼヴィンケルの牧師館一同が叫んだ。

「あり得ないことではない」とガンゼヴィンケルの村長が語った。

「ご覧なさい、あの方でさえ保証していない」と副校長は人差し指で示しながら、ますます興奮して早口で続けた。「私は彼が、この一帯や周辺に馴染みの血への衝動からそれを実行したと言うつもりはありません。しかし惑乱している人間を、ともあれ信頼できますか。いや、どんなに気の良い者でも、興奮したら何を仕出かすか、私の生徒達に尋ねてみてください。全く冷静な意識ならば、私は決して誰の頭にも、親父のツンプト[Karl Zumpt 1792-1849『ラテン語文法』1818]やマトヴィッヒ[Johan Nikolai Madvig 1804-1886 ギリシア文法家]、『義務について』のキケロを投げないことでしょう」。

「その通り、それは私も分かります。そんなものです」と村長は物々しく請け合った。「しかし我らの類いは普通、この世界に分別を教えるために、堆肥用フォークとか柵の杭を用います」。

「私の夫はそのような場合、神の言葉や聖書を用います、ネッダーマイヤー」と牧師夫人は叫んだ。「でも私は、親愛なるエッカーブッシュ、私とイーダは、私どもは皆、懸命に辛抱して、理性的理由で働きかけようとします、エッカーブッシュ」。

「二本脚で進むすべての化物の野獣どもが、正しい場所に鼻と目と口があるからと言って、早速、自分は人間であると考えさえしなければいいのです」と村長は呟いた。「今は分別ある私どもの中ですから、貴女も簡単に話されましょう、牧師夫人。しかし万事、その時節があり、その法則があります。人間がどうしていいのか分からない、八月の蠅とか憤懣とかなりますと。こうしたことをお考えください、牧師夫人」。

「貴方の知識や予言に私が惚れ込んだ時には、早速貴方にお知らせしましょう、ネッダーマイヤー」とビラ・ヴィンクラー夫人は鋭く、刺すように短く応じた。「貴方は自分の心配事にまだ結末が見えていません、エッカーブッシュ。一体どんな理由から貴方は、ホラッカーが私どもの友ヴィントヴェーベルの首をへし折るであろうとお考えなのですか」。

「透明な、純然たる不安からです、最良の奥方。私は全くホラッカーの身になって考えます。そして彼の一切の体験と惨めな困窮の中で、何を仕出かすであろうか考えるのです。貴女は私をご存じで、ヴィンクラーも私を知っており、私は貴女らお二方を存じ上げています。しかしそもそも二本脚のこの動物、村長がたった今話したこの動物について、誰が知っていましょう。愛する友の女性、貴女が私を狩り立てるとします。あるいは貴女が狩り立てられるとします。我々二人のどちらも、可能ならば、自分自身の頭を追跡者の足の間に投げ入れて、追跡者を転倒させることが出来ましょう。さて、私はこう仮定します。この不幸なホラッカーが、私の長い脚の同僚ヴィントヴェーベルが最後の審判となって、その上我らの友[検察官]ヴェーデキントを背後に有していると思うとします。　ー　絶望に彼は襲われます。そして彼は我が同僚を捕まえます。いや、優しい天よ、私が同僚を連れずに家に帰ったら、彼の最愛の妻に何と言ったら良いでしょう。それに私自身の妻がいます。...忠誠ノ神ニカケテ。私が妻の友ヴィントヴェーベルを無事な元気な姿で連れて帰らなかったら、妻は私に何と言う顔をすることでしょう。ヘラクレスにかけて、九柱戯場で球を外す人間について他の俗物達と一緒に笑うのとはこれは別です、それにまた別なのは、　ー」。

「ガンゼヴィンケルの牧師の庭で同様に笑われることですね」と牧師夫人は言った、「エッカーブッシュ、私のことを悪く受け取らないでください。でも世間は本当に貴方のことを奇妙な方と思っています。政府のことも私は分からない。いずれにせよ、クリスティアンが言っているように、政府が副校長職を廃止しようとしているのはとても不当なことです」。

するとガンゼヴィンケルの牧師クリスティアン・ヴィンクラーも笑った。しかし重苦しいものであった。

牧師は普段、立派な、正直な、声高な笑い方をしていた。話すこと、そして自分の言葉を会話に挿む術を彼は心得ていた。しかし今日彼は終始静かにしていて、語って笑うよりも、むしろ溜め息を吐いていた。彼が話しても、いつも彼は数百もの他の事柄を考えているかのような印象を与えていた。しかし彼はただ一つのことを考えていた。難儀そうに立ち上がると、彼は友を妻との威勢の良い小競り合いに残し、嘆息し、頭を振りながら家に忍び込んだ。すると彼らは　ー　早速彼について話題にした。

それから彼が戻ってきて、黙ってまた自分の席に着くと、彼らは一種おずおずと、彼が再度談笑を始めるのを待っていた。そしてかなりの間待つことになった。

ようやく彼が述べた。

「あの娘は相変わらず眠っている、しかし、とてもとても不安そうだ」。

「私が先ほど側に行ったとき、あの娘は静かでした」とビラ夫人は言った。

第十三章

さてしかし我らの話しが我らにとってさえもほとんど余りにゴタゴタして来て、いわば我らに崩れ落ちて来た壁のようなものになっている。多彩な煉瓦や石材が我らの上に転がって来て、ほとんど空しい思いで喘ぎながら仕事をして、背や肘で頑張ってゆらゆらする瓦礫の下で埋葬されないようにする。いや、オランダ人は以前モルッカ諸島で何と賢い商

人であったことか。彼らは高貴な薬味の市場価格を値崩れさせるよりは、ニクズク[肉荳蔻]の収穫全体をむしろ焼き払った。我らも彼らをお手本にしよう。そして現今の章の中、我らの両手の中に生えて来る立派な事柄の少なくとも三分の二を、すべて我らのために確保することにしよう。

自制しよう。我々は出来事が多い中、自制し、とりわけ出来事の描写を自制しよう。我らの記述を真実であって、信頼できるものにしよう。我々よりももっと正直な手仕事を行っていると思う人々がいつも十分に存在することであろう。しかし勿論、自分達が投げかけるすべての質問に関し、全く屈託なく、当然また全く無意識に、ほら吹きの一家に数えられたいと願い人々がいかに多くいるか、これは奇妙なほどである。これに数え入れられる者に、国家公務員、いとも尊敬され、裕福な人々、自分達の義務を果たして成功し、金輪際どこかの誰か他の人の頭を自分の肩に載せようとは思わない、ましてやその上着を着ようとは思わない人々がいる。

「ホラッカーがまた殺害した。ガンゼヴィンケル出身の或る男が、そのことを丁度、新市門の所で染物師のブルメスターに語った。...ホラッカーが一人の老学校教師を撲殺した。...ホラッカーが二人の学校教師を殴り殺した」。

「隣人殿、その彼らは学校教師であると、文書の証明書を携帯していたのですか。...」。

「お隣さん、それは言えません。ひょっとしたら外見でそう判断したのかもしれません」。

「はい、人々は二人が頭をやられて倒れているのを藪で見つけたのです。　ー　とても恐ろしいことです。それに藪には一枚の紙片があって、殺害者はそれに二人のことをからかって書いているのです」。

「ディックブーレン出身の老婆が薪を盗みに行って、二人を見つけました。それから二人は担架で村へ運ばれました。　ー　一人は更に十五分間存命であったそうです。ガンゼヴィンケルの村長が自らこのおぞましい知らせを馬で町へもたらし、市長と裁判官達もすでにこのことを承知です。彼らが今何と言っているのか私は知りたいところです。これが人間のやること、文明の世界のことでしょうか。我々は税金を払っているのに、そもそもこんなことが考えられますか。学校の教育はどうなっています。国や警察が頼りになりますか、我らの世紀の最中にこんなことが起きて、しかしこれが国や警察によって笑い事として済まされたりしたら、ええ。いや、貴方がまあ玄関の前で、然るべき時に掃除をしなかったら、疑う余地なく、貴方の上には、神によって定められたお上なるものが存在すると分かろうというものです。...結局私はホラッカーがますます荒れ出すとしても、それを遺憾に思うことは全くありません」。

「貴方の仰有る通りであろう。まあ、結局自分らの犬が羨ましくなるわな、この犬は、首に鑑札を掛けて貰ったら、静かに何の不安もなく、散歩出来るからな」。

このように恐ろしい作り話しが、それに付随する、尾鰭の付いた注釈と一緒に穏やかに夕陽の中に横たわっている小都市に広まった。昨年のボヘミア戦争以来、この土地で風評[Fama]が再びかくもその器官を利用したことはなかった。家から家へ、路地から路地へ、風評は飛んで行き、時折一軒の家や一個人を飛び越えながら、激しい風の中、猛火のようであった。そして決して眠り込んでは窺うことのない彼女、大地の一番末の娘で、怒りの中、大地から生まれ、神々への復讐のために、自分らの愛する巨人達、健気な息子達の殺害のせいで、その復讐のために生まれている彼女[Aeneis Ⅳ,178f.]、風評の女神[Pheme]、

伝説と評判の女神、この女神が正しくまた我らの現実の女友達へートヴィヒ・ヴィントヴェーベルを見つめていて、彼女の耳に最近作り出された絵空事を囁いた。

「まあ、神様、私のヴィクトルが」と小柄な女性は叫んだ、巨人族を倒すためにオリンポスの神々と共に贖罪していた、「副校長殿と森へ行った夫のことだわ」。

彼女にその知らせをもたらした善良な友人の名前は後世のために保存しておこう。その人間はユーレケと言う。彼は自分の知らせの効果に満足することが出来たであろう。阿呆にとっては、ある噂を伝えることによって、とにかく面白く思われ、自らを面白い人物と思うことがいつも大事なのである。

震える手で日傘を引き寄せて、この哀れな小柄な女性は一瞬、快適に好意的に邪悪な俗物の顔を見つめて、それからよろめく足取りでそこから駆け出して行った。勿論自分の住まいの方ではなく、副校長エッカーブッシュの家の方であった。

「哀れな女性だ」と頭を振りながら、実直な友にして隣人の男は急いで駆けて行く女性を目で追いながら、言った。「まあ、私自身はこの話し全体を相変わらず根も葉もないことと思っている。人々の信じやすさにはあきれる。まあ、明日になれば、もっと詳しいことが新聞に載るであろう。私自身としてはそれを待つことにしよう。個人的に急ぐ気持ちはない。しかし、　ー　勿論少しばかり好奇心はある」。

副校長エッカーブッシュ夫人は自分の窓の前で植木鉢越しに鼻を持ち上げたが、この鼻は、世界史とか、ここでの話しのように画期的なものとなる定めのものすべてと同様、少しばかり好奇心が強く見える鼻であった。しかし灰色髪の老罪人、エッカーブッシュ同僚がそれについて何と言おうとも、それは町や田舎で最も勇敢な鼻の一つで、その上、すでに我々が承知しているように、少しも町や田舎で無名のものではなかった。

「これはまた突然、何というひそひそ話しや右往左往かしら」とイーダ夫人は、角縁眼鏡を鼻骨から持ち上げて、編み物道具を膝の間に休ませて、尋ねた。「神様、どこも火事ではないでしょう。違う、　ー　有り難や、　ー　火事だったら、すでに鐘の音やプウプウラッパの音が聞こえるでしょうし。イエス様、またあの娘、ヴィントヴェーベル夫人は何を思い付いたのか。あの娘には、分別と、路地での冷静な足取りを説教すべきでしょう。まあ、ご覧、また駆け出した。すでに彼女には百度となく言い聞かせたのに、そんなことをしたら町全体から叱られる、と。いや、あの娘と私の夫のことだ。あの娘自身の夫については話したくもない。　ー　あの娘の夫は生まれつきドタバタしているから。さて、あの娘は少なくともこちらへ向かって来る。それでこの土曜日何の椿事があったのか、私どもは静かに聞くことになりましょう」。

そして、静かにまた編み物の靴下を取り上げたこの女性は、窓から全世界が興奮状態にあることを見ていたが、この女性を老エッカーブッシュは自分の活性剤妻[Proceleusmatica]と呼んでいた。

弱　ー　弱　ー　弱　ー　弱！

実際少しばかり乱れた恰好で、　ー　恐怖で青ざめて、貫禄御夫人の部屋へ駆け込んで来て、若々しい同僚夫人がほとんど中途半端な反復の声で叫んだ。

「最愛の、　ー　最良の、　ー　副校長夫人、　ー　ここにいらっしゃいますか。私は

死にそうです。...ホラッカーです、...二人の学校教師が撲殺されました。　ー　私の夫に貴女の夫です。　ー　私の夫を今日家から出さなければ良かった。私のヴィクトル、私のヴィクトルが、哀れな私のヴィクトルが、...この両人が、ホラッカーに撲殺されて、森の中で見つかったのです」。

「愚かなことを」と老レディーは言って、上体を直立不動に起こした、「今回は本当にとびきり阿呆なことが人々の口の端にかかっているように見えます。阿呆な人、何をご存じです。落ち着いて、きちんと息が出来るようになったら、一体どんな戯言を話されたのか、筋道立てて仰有ってください。まずは一言、誰からその戯言を聞いたのです」。

間近の椅子に座って、ヘートヴィヒはこの厄災鳥の名前を吐き出した。

「ユーレケね」とエッカーブッシュ夫人は繰り返した。この名前にまことに否定的軽蔑を添えていた。「娘さん、その人は、人類がその愚かさを私に披露せざるを得なくなった折には、私自身が仕方なく指名していたであろう人物ですよ」。

「でもその方は自分で考え出したのではないのです」と不幸な、若い妻は嗚咽して、両手を揉みながら、再度飛び上がった。「窓からご覧ください。どの玄関でも、町全体があの方と同じことを言っているのが分かります。ご覧なさい、人々は貴女の方を覗いています。これらの顔や表情を見て、静かに座っておれますか。いや、神様、神様、すでに数ヵ月前から私の気持ちの上に重苦しい雲のように不安が取り憑いてさえいなければ」。

「あなた、馬鹿なことを」と老レディーは、半ば同情し、半ば立腹して言った。「すでに随分昔から、そのような状態のときには、出来るだけ無用な興奮を一切避けるよう助言致しましたでしょう。ヘートヴィヒ、お願いです、分別を持ってください。私の夫が、ー　老エッカーブッシュが、ー　ガンゼヴィンケルのヴィンクラー牧師までの散歩の際、撲殺され得ると、どのようにしてお考えになるのです。その考えは余りに滑稽です」。

「でも、私には滑稽ではありません。私の夫は副校長と出掛けました。私のヴィクトルのことは良く知っています。夫が殺害者の手に落ちたということを、誰も夫に関して、滑稽なこととは思わないでしょう。誰でも夫の場合、有り得ると思っています。それで私は、ー　いや、お仕舞いです」。

「私も段々とお仕舞いでしょう。しかし、腹立ちの余りのお仕舞いです」。

「ご覧なさい、　ー　ほら、すでに判事のナーゲルマンが巡査のフュンフラートと一緒に走って行きます。石や壁、窓、それにすべてのドアが四方八方からそのことを私に叫び立てています。ー　あそこでは人々がミュラーの店に押しかけて、両手を打ち合わせています。まあ、ヴィクトル、私のヴィクトル」。

「何かが起きました」と老レディーは呟いた、「しかし何が起きたか、神様のみがご存じでしょう。まあ、すぐにそれは分かるでしょう。またしても私の御老体の悪戯でなければいいけど。夫は今回いつもの別れの時よりも、とても怪しげに私には見えました。またしても突拍子もないことをして、人々の噂になっていたら、堪らない。いや、あの人、きっとまた阿呆なことを仕出かしたのでしょう。　ー　もう夙に長いこと気付いていました。このところ、すでに夫について町で噂になることが少なすぎる、と。...間違いないわ、またしても仕出かしたのね。リンヘン、　ー　リン　ー　ヘン」。

夫人は、三回目この小間使いを呼ぶ必要はなかった。すでにこの娘は赤い顔をして部屋に駆け込んで来た。

「リンヘン、あなたね。　ー　ではね、向こうのミュラーの店まで走って行き、私からと挨拶して、尋ねなさい、　ーー」。

「私はすでに行って来ました。　ー　いや、最愛の神様、副校長夫人」とその娘は嘆いた、「いや、神様、仏様、神様、すべては、噂の通り、その通りでした。哀れな私どもの旦那様。ガンゼヴィンケルの居酒屋のテーブルに伸びていらしたのです。ビルケンホーフからの森林官が旦那様を森で発見しました。脳漿が出ていたのです。ヴィントヴェーベル殿は旦那様から二十歩離れたところに横たわっていて、もっとひどい状態であったそうです。どちらかの一方がその後三十分存命で、ホラッカーの仕業であると書き残したのです。騎兵達がすでに出発し、裁判所は郵便宿駅に特別馬車を用意させました。今日の昼には旦那様は子牛の焼き肉のことで私を褒めてくださったのに、哀れな旦那様。　ー　いや、誰が予見出来たことでしょう、副校長夫人。　ー　ソースでさえ今回は旦那様に合格でした。でもこれが最後のソースになろうとは」。

「夫がこれを聞いたら、満足して私の前から消えて行くことでしょう」と活性剤妻は語った。

「それからここ私の部屋で浮かれ騒ぎがあることでしょう。...いや、最愛の天よ、ただ半ば失神して、すっかり痙攣していて、その上参っている状態のこの娘にはお手上げだわ。...いや、ヘートヴィヒ、いい加減分別しなさい。思慮深い女性として振る舞いなさい。まだ分からないの、このエイプリルフールの裏に隠れているのは、ただ私の老公一人なのだ、と」。

「それで私の夫について、どこに今私の夫は横になっているのか、ミュラーの店では誰も何か言っていなかったのですか」と嘆きの若い妻は叫んだ。震える両手でリンヘンの腕を握り締めていた。

「いいえ、スケッチ教師夫人、でも多分やはり居酒屋だと思います。使者がガンゼヴィンケルを出発してから、人々はようやく私どもの旦那様、副校長殿を村に運んだのです」。

「嗚呼」とヘートヴィヒ夫人は今や呻いた。顔に涙を溢れさせ、善良な中年の同僚夫人の胸元に沈み込んだ。

「この騒ぎが、夫のせいであろうと、なかろうと、この騒ぎの責任を取って、夫が年金生活に入っても、私は構わない」とイーダ夫人は呟いた、「今回、人々は夫に楔を打ち込んで、きっと何年も願っていたように夫をお払い箱にすることでしょう。この茶番に終止符を打つ冷静な頭を四方探してもどこにも見えない。　ー　この哀れな阿呆娘のための医者すらいない。...この娘は結局、私をもじたばたさせることに成功することだろう。一人の冷静な、理性的人間を探し出すためなら、私がいかほど出す気でいるか、言えないほどだ」。

「あそこに町参事官ボックベーゼ殿が行かれます。あの方にお尋ねになったらどうです、副校長夫人」とリンヘンが窓辺で叫んだ、「貴女はご存じです、私もあの方のことを承知しています。　ー　あの方への奉公からこちらへ私は移りました。　ー　冷静な方です。あの方の家での町参事官夫人に対する言葉は三言目にはこうです。私は頭をカッカとさせない」。

「羊の頭です。次回、人々はユーレケンを市長とすることでしょう」とエッカーブッシュ同僚夫人は言い、年若の同僚夫人を穏やかにソファーに座らせて、自分のリンヘンを窓

から引き離し、今や自ら冷静な頭脳を求めて、薔薇やゼラニウムの植木鉢越しに眺めた。

「今晩は、町参事官様、一言、　ー　貴方は町での愚かなお喋りについてどのようなお考えですか」。

「私ですか、副校長夫人、そうですね、　ー　私は出来る限り、長く冷静でいるように努めています。しかし　ー　残念ながら、　ー　今回は事実その通りだと申し上げます」。

「どうぞ私から奥方様によろしくお伝え願います」とこの活性剤妻は答えて、部屋の両人の方に振り向いて、叫んだ。

「あなた方の言う通りです。私の評価は間違っていないでしょう」。しかし彼女は心の中で鈍く憤然となってこう付言していた。

我慢するにもほどがある。私は老公にこの楽しい晩のことを許さない。

同じ時、同僚ノイバウアーが市場の角を曲がって来て、例外的に全く適した時にやって来た。　ー　これは同僚夫人、イーダ・エッカーブッシュ夫人にとってもそうであった。

この人間は、自分が周囲に惹起するか、耳にする喧噪の中に実際暮らしていず、自分の胸に温めている静寂の中に暮らしていた。高等学校教諭ノイバウアーが両手を背に置いて、動じない表情と、澄んで明るい目をして歩いて行くのを目にする人は、実際ここに一人の男が、すでに原理に基づいて、自分の情緒の安定を不動に維持したいと願って歩いていると言わざるを得なかったであろう。左手の背の表面で、『一八六六年叙事詩』の作成されたばかりのヘクサメターの調子を叩きながら、プレッツミルツィッツ[Königgrätz近郊の村、1866 年の戦い]の言葉を今一度味わいつつ、韻律を測って、この同僚は角を曲がって来た。過たぬ矢の名手アポロンほどに[遠矢を射たもうアポローン：『イーリアス』1,370,呉茂一訳]美しくはないが、しかし全体的に神々しい軽蔑を鼻翼に浮かべていた。

「あら、同僚のノイバウアーがやって来る」とエッカーブッシュ副校長夫人が叫んだ。彼の姿を目にして初めて安堵の息を吐いていた。「私が呼んだかのように、こちらへやって来る。この人は多分、この町で私以外に実際まだ冷静な唯一の人間でしょう。この男の方は、私にとっていつもおぞましかった。でも、　ー　仕方ない。運命はおそらく、喉が渇けば何でも一つの梨になり得るとこの人の例で私に示すために、ただそのためにこちらのギムナジウムに派遣されたのでしょう。...高等学校教諭殿、同僚殿。同僚殿、ほんのちょっとの間、お願いです。　ー　さあ、ヘートヴィヒ、しっかりなさい。ノイバウアー博士の前で、ご自分や私を笑いものにしないでくださいよ。貴女は私同様、あの方をご存じです。ですから、愛らしい、分別ある娘になってください。　ー　新しいハンカチを差し上げます、あなたの涙を拭いて、理性的女性のように振る舞ってください。すでに階段を上がって来ます。　ー　トン、トン。この方は歩調を崩さない唯一の人間です。そうです、　ー　これは、結構、娘さん。私自身のためにこの方を呼んだのではありません、本当に。ノック、ノック。ほらあの方です。...どうぞお入り、ノイバウアーさん。いや、　ー　罪深い御老体、あの夫ヴェルナーが家に帰って来るのが待たれます」。

高等学校教諭ノイバウアー博士は、エッカーブッシュ同僚夫人の窓からの珍しく好意的な呼びかけで、サドヴァ[Königgrätz 近郊の村]への詩的行程を妨げられて、勿論四方八方を見回して、ようやく自分に依頼がなされた箇所に身を向けて、それから上がって来たのである。

高く黒い帽子を持ち上げ、また下げながら、彼は良くカールされた髪の頭を傾けた。

「衷心より喜びまして」
そして引用した。

「いや、信じ難いことに見えるが、哀れな男、私は信じなければならない。
サビーナの巫女の声が私の心を乱して響き、
マルスィ族の呪文のように、私の頭を砕く。
彼女は何をする気だ」。[ホラティウス、エポドン、17原文引用はVoß 訳：情けないけどこの僕は/サビーナの女の祈りなどが/人の心を乱すとか、/マルスィ族の呪文により/頭が割れるという話は/今まで信じていなかったが/鈴木一郎訳]

しかし彼はラテン語で引用して、エッカーブッシュ同僚の家の階段を上がって来た。
「私は元来ただこの娘のせいでご足労をお願いしたのです、親愛なる博士殿」とイーダ夫人は言った、「私が分別を持つよう話しても甲斐がありません、ノイバウアーさん。貴方がまあ話しかけてください。今回貴方は私の夫代わりです。貴方が丁度角を曲がられたとき、あたかも全ギリシアとローマが私にこう呼びかけているように思われました。我らがすぐに夫の許へ派遣しましたぞ、先ほど夫の許へ派遣しましたぞ、と」。
「貴女はとても好意的です、親愛なる同僚夫人」と高等学校教諭は愛敬ある微笑で語った。「私の知る限り、　ー」。
「まあ、この娘さんをご覧ください。この娘さんは流布している埒もないない噂のせいで我を忘れています」。
「何の噂のせいです、質問して良ければ、レディーの方々」。
「ホラッカーが彼女の夫を撲殺して、その上私の夫エッカーブッシュも撲殺したのです」と老レディーはこの高等学校教諭殿を少しばかり脇の方から見て言った。
「本当ですか。私も若干驚いたことにそのことをたった今聞きました」と同僚はカラーを真っ直ぐに立てながら、答えた、「その噂は本当ではないと分かればいいですが」。
ヘートヴィヒ夫人は小声で哀泣した。イーダ夫人はますます目を大きくしてこの同僚を見つめた。
「貴方はこの話しを私どものように、　ー　いや、私のように、何の根拠もない、卑劣な、没趣味の作り話とは思わないのですか」。
「お許し願って、奥様、腰掛けます」とノイバウアー博士は穏やかに、事務的に言った。「我々が最近ホラッカーについて冗談を言ったのは、いつだったでしょうか。勘違いでなければ、最近のある夕方です。貴女の御主人、我らの善良な副校長殿は、冗談の身振りでドアに挟まれたその雄猫を真似て、大いに受けていました。敢えて貴女をそのようにお呼びして良ければ、いとも尊い同僚夫人、この滑稽な冒険に関しまして、私は完全に貴女のご意見に与するものであると貴女は確信していらっしゃると願っています。しかし　ー」。
「しかし、ですか」とイーダ・エッカーブッシュ夫人は叫んだ。ただかろうじて自分の性急さを抑制していた。
「しかし実際、私が町を通って行きますと、勿論物事に余り頓着しておりませんが、同じくまた気付いたのですが、検察官殿がその書記官と一緒に丁度郵便宿駅で馬車に乗ってガンゼヴィンケルの方へ向かって行ったのです」。

甲高い叫び声を若い夫人は上げて、両手を揉みながら、部屋の中を走った。

「私が申しましたでしょう」と小間使いのリンヘンは叫んだ。エッカーブッシュ同僚夫人は、しかし、憤然と微笑して、語った。

「ノイバウアーさん、悪く受け取らないでください。しかし貴方は私には少しばかり泰然自若とし過ぎているように見えます。貴方はこの問題でも他のすべての方々よりもひどい方だとすぐに思わざるを得ないほどです」。

「私はもう堪らない。いや、私はもはや辛抱できない」と哀れなヘートヴィヒは嘆いた。「私も」ガンゼヴィンケルに馬車で行きます。私もガンゼヴィンケルに行きたい。　ー　私は徒歩でガンゼヴィンケルに行きます。まあ、私のヴィクトル、私の愛する、愛するヴィクトル」。

「皆して、私を狂わそうと頭を使っています」と老レディーは叫んだ、「人類はこんなにも愚かで、同時にこんなにも意地悪なものなんでしょうか」。

「最高度に意地悪で、　ー　また愚かです」と高等学校教諭殿は出来るだけ一層穏やかに、一層友好的に囁いた、「ただ文献学を専攻しさえすれば、ただ学校教師でありさえすれば、日々その経験を、　ー　するばかりでなく、その経験を増やせます」。

「ガンゼヴィンケルへ、いや、神様、ガンゼヴィンケルへ」とヘートヴィヒ夫人は哀泣した。今やイーダ・エッカーブッシュ夫人も、両手を揉み始め、部屋の中をあちこち歩いた。

「私は幾多のことを、私の生涯で、エッカーブッシュと一緒に体験しました。しかしこんなことがあるとは思っていなかった」と彼女は叫んだ、「こんな与太話が熱病のように頭に昇って来ます。ノイバウアーさん、私は馬鹿でした。貴方には、お静かにひょろ長い足取りでの進行を更に続けさせるべきでした。しかしともあれ貴方はこちらへいらっしゃった。だから貴方も、良い方、お引き留め致します。　ー　貴方も一緒にガンゼヴィンケルへ馬車で参りましょう」。

早速､スケッチ教師ヴィクトル・ヴィントヴェーベルの若い妻が夫人の首元にすがって、痙攣しながら嗚咽した。「そうです、そうです、　ー　お願い、すぐに、すぐに、　ー　すぐに出発しましょう、このまま向かいましょう」。

そして老レディーは、貫禄女性の訳知り顔の視線を、可愛い、嘆きやつれて、涙に濡れ、震える新婚妻に投げかけて呟いた。

「彼女はすっかりやつれている。私は彼女のことが余りに好きだから、これから自分好みの独り相撲は止めましょう」。

苛立って泣きそうに彼女は大声で語った。

「お馬鹿さん、いい加減落ち着きなさい。貴女に申し上げます、馬車で行きましょう。貴女のためです、私も他の人々同様本当に一度阿呆になりましょう。でも、私の老公オイレンシュピーゲルが存命と判明したら、いや、...ノイバウアー同僚、即刻一台の馬車を手配してください」。

同僚ノイバウアーは、すべての人間的耳打ちに、神々しい無関心さで対処し得ると思っていて、差し当たり全くきょとんとして立っていた。

「私がですか、奥様、私も。貴女は私を一緒にガンゼヴィンケルにお連れなさるつもりですか」。

「はい、貴方を、ノイバウアーさん。貴方も、私ども哀れな二人をこのような事情の下、二人っきりで、殺害者ホラッカーどもで一杯の夜と森の中へ、きっと馬車で向かわせないことでしょう。途中貴方のお顔を眺めて、一つの慰めを見いだしたいのです。急いでください。フリッケが御すことでしょう。リンヘン、すぐ博士殿と出掛けて、黄色の車輪に緑のぼろ馬車が押し付けられないようになさい」。

第十四章

「全能の神様、私の悪い予感が的中しているのかしら。あれに乗ってガタガタやって来るわ」と副校長夫人が叫んだ。「黄緑色号」が警告を発したにもかかわらず、鈍くガタゴト、角をよろけてやって来た。「思った通りだわ。でもこの恥辱の乗り物が全く自余の事件、冒険にお似合いだ」。

「郵便宿駅長殿が丁重にお詫びを申し上げています、副校長夫人。でもこれは宿駅で最後の馬車です」とフリッケが御者席から上方の窓に叫んだ。「しかし私が、立派に油は注されていると保証します。クッションは昨日も埃を叩き落としていますし、陽に当てました。衣蛾の痕跡はもはやありません。座席でべた付くことは考えられません」。

「副校長夫人、私どもは出来る限りのことをしました」とリンヘンは叫んだ。彼女はフリッケの側の座席から飛び下りた、「私と高等学校教諭殿とで。褐色の馬車で検察官ヴェーデキントが出掛けて、一台は結婚式用、一台は洗礼用です。青いクッションの馬車は馬具屋の許です。ノイバウアー博士殿はこの馬車の中です」。

勿論ノイバウアー博士殿はその中に座っていて、今やかなり惨めな顔を黄緑色号の窓から突きだしていた。

「レディーの方々、御者はまだほとんど暗くならないうちに、ガンゼヴィンケルに着くであろうと言っています」。

「もう真っ暗になっても構わないわ」と老レディーは自分の窓から下の方へ呟いた。「この四輪の怪獣は私にとって死の宣告。それに座って通りをガタゴト進まなければならない恥辱のことは、言うまでもなく。まあ、エッカーブッシュよ、エッカーブッシュ。小間使いさん、きちんと家の留守番を頼みます。同僚殿、五分したら、下の貴方の許へ参ります。ヘートヴィヒ、私のショールの一つを取りなさい。貴女の家には立ち寄れません、町と田舎のこんなスキャンダルの中では」。

「私は出来るだけ、出来るだけ早く夫の許へ行きたい」とヴィントヴェーベル同僚夫人は嗚咽した。

「今では私もそうです」と精力的にイーダ夫人は語った。そして十分後、彼女らは実際黄緑色号の中に座っていて、高等学校教諭ノイバウアーの従順な、うんざりした顔と向かい合って、出発し、市門に向かっていた。その前に副校長夫人はなおこう尋ねていたのであった。

「何故少なくとも覆いを下にたたまなかったの、フリッケ。こんな素敵な夕べというのに、窒息させるつもり」。

「下ろせるものなら、下ろしてみてください」とフリッケは答えた、「装具を一度試してください、びくともしません。此奴のすべては、生き物であるかのように、手に負えま

せん。屈服するなんて、微塵も思っていません、副校長夫人。このガラクタ馬車も、結局は我らの如く、一本気にその頭を年金生活にかけています。いや、車輪の方は、有り難や、まだかなり順調です。それに神様の御加護もあって、　ー　そら行け、そら行け、　ー　進み出しました」。

彼女らは出発し、その途上にあった。町の大半の者が、この出発を見守った。しかし今回は、古くて、町に馴染みの黄緑色号に通常のヤジや冗談を添えて、市門外へと送り出すことはなかった。人々の気持ちは余りに別の方向へ導かれていた。夕方の両レディーの旅立ちは、勿論、興奮をかなり高めていた。ホラッカーは、我々が承知しているように、すでに一度ならず町や田舎の人々の感情を奇妙にかき混ぜていた。しかし今回ほどかき混ぜたことはまだなかった。

皆が、　ー　友人も敵も、　ー　この黄緑色号がガタゴト進む路地の窓辺や玄関にいた。人々はすでに、殺害された者達を法外に称え始めていた。しかしながら、我々は、単にユーレケ殿が極めて驚いて発した言葉を反復しさえすればいい。

「まあ、聞くがいい」と彼は言った、「私自身は副校長殿のことは良く存じ上げていて、評価していた。しかし如何に普段人々が副校長について判断し、語っていたか、それに従いまた如何に彼をからかっていたか考えると、実際今日まで自分は知らなかったことになる、つまり一体彼は何という名誉であったか、一体何という健気な、学識ある男であったか、と。今彼が、如何に人々が至るところで彼について好意的に考えているか、如何に彼のことが我々皆にとって残念なことであるか、耳にしたら、彼自身きっと喜ぶことだろう。これが後々に言われるのであれば、早速世間はその冗談や楽しみをそのまま味わえばいいわけだ。...まあ、噂を聞くがいい。...副校長夫人も気の毒だ、それに哀れな若い夫人も。

ー　スケッチ教師殿とは勿論我々はまだ少しばかり馴染みでない。しかし彼女らが新しい高等学校教諭ノイバウアーと一緒に古い黄緑色号のお化け馬車いるのは一つの慰めだ。この人は明晰な頭と言われている。書籍に従って、彼女らを慰めてくれよう。見ろよ、休暇でも町に残っているギムナジウムの生徒らが、古いぼろ馬車の後を駆けて行く。馬車の後尾に乗りたいところであろう。副校長は彼らの間で人気があるからだ。いや、これで終わるとは思えない。これでホラッカーを大地に沈めることが出来ないのであれば、ホラッカーは大胆不敵に次の日曜日、管区総監督殿を教会への途次、殺してしまうであろう。哀れな小柄なレディーが震えている姿を、私は自分の最期まで目に留めるであろう。この女性のために、とても賢明で称賛される新任の高等学校教諭殿も一緒に馬車に乗り込んでおり、私は若干安心した」。

我らはこの町とユーレケを後にして、この「軽二輪」の後を追う。フリッケはこうこの馬車を色々な呼称の他に呼んだのである。此奴、ぼろ馬車、街道お化け、黄緑色の町の恥が、今やかなり滑らかに立派な国道を転がって行き、警察官殿が背後に舞い上げる埃の雲の後を追った。丁度七時四十五分になった。まだ太陽は地平線上に浮かんでいたが、しかしもはや長く続くことはない。この夕べは素敵であった。しかしこれに関連して意見を述べることは、高等学校教諭ノイバウアー博士殿には出来なかった。彼はそもそも旅の会話をしなかった。自分が突然、思いがけず陥った状況は、少しも自分に似合ったものではない。自らが滑稽に思われる皮肉屋の感情に触れることは、すでに多量の人間的惨めさを必要とする。

博士殿は、その上、自らがはなはだ野暮に思われた。何の良心の呵責も覚えずに、彼は二人の女性を絞殺し得たであろう。ドイツの幾つかの領邦首都で、彼は自分同様に日常の瑣事から解放された上流階級の友を有していた。彼は憤然と、その人々が皆、黄緑色号の中の彼に微笑する姿を思い浮かべた。慄然として彼は、賢明であるが、しかし全く貴族風ではない中年同僚夫人の顔を再度見た後、上品な白いハンカチの中へ咳き込んだ。

夫人が別の者を呼んだかのような振りを、自分は出来なかったのであろうか、と彼は考えた。そして丁度、例えば、貴女、貴殿、愛しい隣人女性や、尊敬する隣人男性のように、つまりあなたが、同じように好意的合図に余りに安直に従ってしまい、そのことを後悔したときのように、考えたのである。

今日から、私はこの下劣な町では何も耳を傾けないことにしよう。私は誓って、自ら口を開けることさえしないぞ。　ー

「ノイバウアーさん、貴方が今この時、何をお考えか、言ってよろしいでしょうか」と副校長夫人が全く思いがけず尋ねた。

「私がですか、...貴女が」と自分の立派な計画を並べているとき、突然邪魔されて、彼はどもった、「私といたしましては、　ー　大いなる関心を抱きまして、　ー」。

「結構、でも貴方が後で私にこう仰有ったら、エッカーブッシュ夫人、貴女は間違っています、と、これは貴方の嘘となります。貴方はただ全く単純にこうお考えでしょう。どうして自分は　ー　一緒にこの話しに巻き込まれたのであろう。　ー　自分は、とても賢明な若者で、こうした一切のものに超然としていて、ただ偶然こちらに捕まっただけなのに。...どうして自分はこんな目に遭っているのか、と貴方はお考えでしょう。でも私は貴方に申し上げます。まさにその理由で同行して頂きました。仮に私が選び出すことになったとしても、私は他ならぬ貴方を選び出していたことでしょう。だから落ち着いて満足げな顔をなさってください。貴方は逃れられません、今日は私に喜劇並びに悲劇分の貴方の分担金を払って頂きます」。

「奥様、　ー」

「いや、ご立派な方、教育省は無駄に私どもの許に貴方を派遣されたわけではありません。人間は互いに何か学習するために、このために人間は地上にいるわけです。それに謙虚さは飾りのようなものですから、私は全く率直に申します。私は貴方のような人間をこれまで存じ上げなかった。でも、貴方のことを機会あるごとに、もっと良く知るようになることは、私にとって真の喜びでございます。これに対し、私と私の老夫とが貴方に対し差し出し得るもの、これは貴方が夙に自由に取捨選択できるものです。それをまことに楽しく利用されたか、これはご自分が最も良く承知されていることでしょう」。

博士殿は優雅な文献学者として、ベルリン、ハイデルベルク、カールスルーエ、ミュンヘンで極めて洗練された人々と交際して来た。現実の枢密顧問官達が彼を「我が親愛なる友」と呼び、現実の枢密顧問官夫人達が「親愛なる博士」と呼び、伯爵令嬢達が彼のことを「我らの若い、興味深い学者」と話題にしていた。さてこの恐るべき人物、エッカーブッシュ副校長夫人が彼のことを「ご立派な方」と呼んで、この瞬間から彼はこの恐ろしい老夫人に対する一つの武器すらも棄ててしまった。背を曲げ、肩をすぼめて、彼は蒸し暑い馬車の空気の中に座っていて、自分の世間知の本の頁を一頁ずつ熱に浮かされた如く急いでめくっていたが、この途方もない女性を畏怖させるような文言は見つからなかった。

今回、　ー　ここガンゼヴィンケルへの途上の黄緑色号の中で、この活性剤夫人はどんな彼の枢密顧問官達に対しても、どんな彼の伯爵令嬢達に対しても、どんな彼のキリスト教徒やユダヤ教徒の銀行員夫人達や枢密顧問官夫人達に対しても劣るものでなかった。この恐るべき老女性はユヴェナリス[Iuvenalis 紀元60頃-127]やハインリヒ・ハイネ殿でさえも、　ー　最新の諷刺家達のことは全く言うまでもなく、　ー　途方に暮れさせたことであろう。同僚エッカーブッシュのドアに挟まれた雄猫は、挟まれた高等学校教諭に比べたら、物の数ではなかった。膝と膝をつき合わせているこの犠牲者の様を同僚夫人は巧みに表現して見せてくれているのである。

ウエー、　何という旅か。この老蜘蛛、このカニディア[ホラティウス、諷刺、Ⅱ,1，48、魔女]、この毒殺女はまことすでに数ヵ月前からこのことを楽しみにし、準備していたように見えた。夫人はともかく自分の意見を述べ始めたので、かなりの間、話しを止めなかった。

「私は最初から、妻は一体何という、古代人の意味での、狂想の女流詩人であることか、察知していなかっただろうか。まことに、同僚殿、妻は即興を心得ている。私はこれを大胆に一つの才能と呼ぼう。これは公の広場で聞いても、許されるもので、ただ馬車の中でのみ聞くものではない。まことに、ノイバウアーよ、これは『一八六六年叙事詩』を越える調べだ」と両手を擦りながら、老エッカーブッシュは、そこに居合わせたら、クスクス笑ったことであろう。そこに居合わせたノイバウアー博士殿は、当初、自分の魂の奥底で次の発言しか出来なかった。

私は御者席の酔っ払った奴が、我々を溝に落としてくれたら、一ターラーのチップをやることだろう、と。

しかし彼はこのことを、勿論、内心の計画、願望として述べたのであるが、その同じ時、イーダ夫人は初めて彼から目を逸らし、哀れな、小柄な、臆して隅にうずくまっている同伴の女性に目を向けたのであった。

「それで、愛しい方、どんな具合」。

「いいです、いいです。まず、到着しさえすれば」。

「いいですか、いいですか、勿論、あなたを見れば、分かるけど。...それでは、ノイバウアーさん、貴方に今一度お尋ねします。相変わらず、良心の呵責を覚えませんか。貴方がこの方、この哀れな女性をこんな風にさせて、相変わらず何の痛痒も感じませんか。ここのこの哀れな、可愛い、阿呆な娘です。この娘は今、法律のせいで、全く静かに、心地良く、そのソファーに寝ていなければなりませんが、この荒野の中に、この愚かさの中に盲目となって追い込まれているのです。貴方には本当に母親はいなかったのですか。本当にただ月の世界から、文献学に、ヘクサメターの詩文の中に、この新たな北ドイツ同盟の中に大人として落っこちて来たのですか」。

ノイバウアー同僚は、黄緑色号の激しい突き上げと、イーダ・エッカーブッシュ同僚夫人、副校長夫人に平手打ちをしたいという一層激しい願望しか感じなかった。

「済みませんが、私が何をしたと、　－」。

「貴方は何もしていません。貴方は貴方の権威、貴方のご立派な権威を、天秤での私の理性的側に投げかけようとなさらなかった。貴方は冗談を述べられた。いつものように。そこで、私は今や貴方と小柄な女性と一緒に上述の愚かな冗談の最中にいます。ここは森

で、薄暗くなり始めています。ご立派な方、まあ、待ってください。突き上げは何の問題でもありません。旅は始まったばかりです。　ー　いや、親愛なる同僚殿、エッカーブッシュ副校長夫人とのガンゼヴィンケルへのこの楽しい旅行をいつか貴方が思い出されることを願っています」。

彼らは実際森に達していた。国道は最初予見されていたようには、上等なものではなく、ー　より良くなることはほとんど考えられなかった。国道は次第に悪徳の道との格別な類似を有するようになった。この道は、歌によると[ゲレルト『美徳の戦い』]、同様に最初、「沃野を通っての広い道」であるが、しかしその出口には色々な危険が見られ、その結末は「闇夜と戦慄」で終わるのである。

懇ろに案じて、今やレディーは、腕を年若な被保護者の女性に回した。

「娘さん、落ち着いて、落ち着いて。フリッケは私のことを承知していて、誰を乗せているか、分かっています。状況によっては、誰を相手にすることになるか、幸い同じように分かっています。ハロー、フリッケ」。

彼女は馬車の窓から身を乗り出して、最後の言葉を発して、フリッケは御者席から後を振り向いて、下の彼女に向かって言った。

「副校長夫人、何でしょう」。

「御老体、ここから森でしょう。ここから道路管理局がその道を大いに恥辱と感ずるところでしょう。それで、フリッツ、私の背後で下から軋む音は何ですか」。

「ご安心ください、副校長夫人。この軋む音は、貴女からも、馬車からも生じていません。ここからもすでに聞こえています。これは単に恥ずかしい左側奥の車輪のせいです。忌々しい、脆いスポークの外輪をきちんと車大工に修理させたのです。道はまた全くしなやかに続いています。森林官ラウヴェッダーの十字架に来たら[1821年、Sollingで殺された森林官Mittendorfがモデル]、ようやく副校長夫人、他のお二方の偉いさん達とご一緒にどうぞ少しばかりもっと用心して座られてください。山からの細い流れが左手にあって、時にかなりの悪さをしています」。

「手遅れの事態でなければ、慰めは言ってくれないわね」と老レディーは呟いて、再度慎重に御すよう警告し、その他の用心を述べて、頭を引っ込めた。

「お静かになさってください、副校長夫人」とフリッケは更に彼女に呼びかけた、「私は経験のある御者として、この箇所は熟知しています。最悪の事態になったら、私は全く穏やかに左手の山側に寄せます。右手は山が下りになっていて、真っ逆さまに転落するなんて、嫌なことです」。

さて森林官ラウヴェッダーの十字架はいつでも途中での由々しい目印であった。今回、極めて不吉に思われた。

およそ十五年前、この箇所で、馬上の森林官ラウヴェッダーがある密猟者に撃たれて、発見された。高く黒い記念碑がこの殺害の地で、相変わらずその不気味な横木を茂みから伸ばしていた。この茂みは夙にまた以前の円形空き地を覆い隠していた。しかしまさに中途半端な隠れん坊で、ここは一層恐ろしげに見えて、この一帯の者は誰でも、この道を行くとき、思わず視線を脇に向けて、茂みの中の十字架を探して、そしてそれを見つけると、また真っ直ぐ前方を見て、このおぞましい、昔の蛮行とは別なことを考えるようにするものであった。

「では私もそれを道端で見てみたいわ」とイーダ・エッカーブッシュ夫人は小声で溜め息を吐いた。「私個人としては、何百人もホラッカーがいて、黄昏時であるとしても、少しも気にならない。私に関しては、殺害者の十字架で一杯のどんな森を抜けようと、落ち着いた良心で進みます。鼻風邪みたいな、　ー　アブルッツェンという名前のナポリの盗賊山岳であってさえ構いません。でもこの小柄な女性は、心にホラッカーという味気ない男のことを考えていて、この人には無事ここを抜けて欲しいわね。さて、丁度の時、気散じが奏功すればいいけど」。

「フリッケ」とこの時、ノイバウアー高等学校教諭殿が叫んだ。彼も馬車の窓から乗り出していた。

「博士殿、何のご用でしょう」。

「殺害の地に我々が着いたら、つまりかの射殺された猟師の記念碑のことだが、できれば一時止めて欲しい、　ー」。

軽い嘆きの様子で、若い女性は中年の友の女性を見つめ、その腕を握った。

「私は、用心のため、下りて、馬車の側面を歩いて行きたい。レディーの方々、場合によれば、この実際ますます奇妙な音色を発している馬車を左面か右面かに横倒しにする必要があれば、その手仕事を致しましょう」。

「分かりました、博士殿。とても結構です、高等学校教諭殿」とフリッケは御者席から後方に叫んだ。しかしエッカーブッシュ副校長夫人はこれまでの一瞬間半、立腹と憤懣で無言で座っていたが、それを、　ー　つまり言葉を、　ー　倍加したエネルギーで取り戻していた。

「どこでも止まりません、誰も下りてはなりません。聞いていますか、フリッケ。分かりましたか、私の言うことが分かりましたか」と彼女の窓から叫んだ。「進んで行きなさい。ガンゼヴィンケルで止まるのは、牧師館の前です。フリッケ、了解ですか。この馬車を注文したのは私です。高等学校教諭殿は自分の指定席に残られます。このぼろ馬車の後か前かが壊れていようと、後か前かで鳴き声が上がろうと、構いません」。

「とても結構です、副校長夫人」とフリッケはがらがら声の返事をし、高騰学校教諭殿は実際座ったままであったが、しかしパラス・アテナ女神によって、ただその生徒達の中で最も愚かな生徒が、その極端に当惑し、白痴の段階の時に授けられたような顔をしていた。

「しかし、奥様、　ー」。

「勿論、ご立派な方、全世間がこれまで私をはなはだ物静かな、鈍重な女と見なしてきていまして、私の夫はそのせいだけで私に対し苛々する綽名を付けてきました。しかし今ここでは、天の我らが主でさえも、我慢できないことでしょう。あの娘は馬鹿げた不安の余り、半ば気を失っています、それで貴方にとって、貴方の軽薄な冗談を披露するこの機会が当然、ますます好都合に思えるのかもしれません。そうでしょう、貴方はラウヴェッダーの十字架をこの馬車の中へ取り寄せたいと切望しているのでしょう。まあ、それを持っていらっしゃい。でも、同様に貴方に申し上げておきましょう。ノイバウアー同僚殿、善意や慈悲心のないところでは、洒落を言っても始まりません。それが洒落というのであれば、そのようなもの、残念ながらかなり多くの人々が獲得出来ましょう。神様はご承知のことですが、貴方お一人のみが洒落の特権を付与されていると自惚れないことです。私

の申し上げることが、お分かりになりましたか、ご立派な博士殿」。

これは一つの疑問文であった。口笛を吹くことは普通、勿論、どんな状況下でも、とても卑俗であると思っていた立派な博士は、自分の歯の間に生じたメロディーを思い浮かぶ順に、勝手に、小声で口笛にした。一つの返答とか、自分の品位や自負の保持とかあるいはむしろ再建のための十分な弁舌をまた思案したが、無駄であった。エッカーブッシュ副校長夫人は次の十五分間、ただ唯一、彼女の同伴の女性のために尽くした。

「大事な方、阿呆な十字架のことは心配するに及びません」と夫人は囁いた、「後部座席の、素っ気ない、軽薄な若造のことは更に気にかけなくてよろしい。私どもの夫らと亡き森林官ラウヴェッダーは何の関係もありません。　ー　小一時間もしたら、きっと悪漢どもに然るべくその十字架を背負わせましょう。しかしこのノイバウアー殿は、復讐の女神ご本人が、この私どもの黄緑色号に乗せたのです。この人を自分の向かい側に座らせる機会を私はすでに長いこと待ち望んでいました。たとえあの人が今この時から、嘲笑を倍増させて、私のご老公夫の年金生活を待機するとしても構いません、　ー　私にとっては全くどうでもいい。あの人を私どもの席に座らせましょう。あの人の好きなように副校長エッカーブッシュを片付ければいい。でも差し当たり、老エッカーブッシュ夫人には手出しさせません。学校教師がケーニヒグレーツ近郊での戦いでは最近勝利したと、相変わらず人々はそんなことをお喋りしています。でもヘートヴィヒ、あなたに質問があります。一体どちらの学校教師が勝ったのですか、若い方ですか、年取った方ですか、と。私の知るところでは、唯一ただ古参の学校教師のみです。新しい方々は一体どんな勝者の種類をその櫛で引き出すのか、まず拝見させて頂きましょう。

直立不動にピンとピンと
すべてを一本の櫛で、

私と私の老公にはどうでもいいことです。私どもは有り難や、多くのことを楽しむという諧謔のセンスを有しています。しかし若い人々は気の毒でなりません。何らかの形式の演習先生を生涯手放さないのです。揺り籠から学校を経て、その番号を付された涼しい墓地に入るまで。若い人々は私の老公ヴェルナーを学識ある最後のモヒカン族[Cooper作]と呼んでいると十分に私は承知しており、夫は最後の副校長であるとこれも私は承知していて、また三番目に良く承知していることは、夫はすでに前期二級生のとき、皆と一緒にヴァルトブルク[1817年10月18日、民主主義的学生のヴァルトブルク祭典]へ馬車で出掛けていたであろうということです、仮に、当時夫が郵便馬車料金とその他の旅費を捻出出来て、人々が夫を同乗させていたらの話しですが、しかしまた、こうすることはひょっとしたら今日十万人もの他の人々と隊列を組んで、同じ歩調で行軍するよりも、もっと明敏なセンス、熟慮、歓喜力を必要としたかもしれない、とそのように承知しています」。

「私はただ私の愛しい、愛しいヴィクトルが無事でいて欲しいのです。私が思うことが出来るのは、ただ私のヴィクトルとホラッカーだけです」とヘートヴィヒ・ヴィントヴェーベル夫人は呻いた。するとイーダ夫人は唐突に、高等学校教諭の方を向いて、そしてとても思いがけない、明瞭な、落ち着いた質問をした。

「どうして、親愛なるノイバウアーさん、物も言わずに座っていらっしゃるのです。健

気なホラッカーを威勢良く料理して見せてください。貴方は他に案ずる人はいないのでしょう」。

さて、これは実際、彼女の奇妙に脱線的な鎮静剤的お喋りの奔流が注入される全くの活性剤であった。囁き声の調子であったけれども、博士はその大部分を指で拍子付けることが出来、多分『一八六六年叙事詩』の韻律論の害とはならなかったであろう。

この高等学校教諭が、その返事の調子と表現に関し、彼のクラスの全く道徳的に打ち砕かれた少年に似ていたのは、一つの奇蹟であった。それに彼がその際、自分の手の背で、まず目の上を、次に鼻の下を滑らせなかったのも、一つの奇蹟であった。

「いとも尊い御夫人、貴女はこれまで最良の会話を披露なさいました」と彼はろれつの回らぬ言い方で言った、「私はただただ拝聴するのみ、　ー　いつも拝聴するのみでした。誰が貴女のように、かくも楽しいことを教訓的なことと結び付けることが出来ましょう。ここの馬車の空気がかくも言いようもなく蒸し暑くなければ、この奇妙な旅は私の生涯で最も陽気な思い出の一つに数え入れられましょう、きっと数え入れることになります」。

「そう希望します」とエッカーブッシュ副校長夫人は語った。するとノイバウアー同僚は、内奥の胸の中で、この詰まらぬ魔女の首を即刻ねじ切りたい衷心からの願望を感じた。

「それでも夫人はこれを自分の鈍重さと呼んでいる」と彼は呟いた、「それでは私は後に自分のを何と呼ぼうか」。

かくて彼らは幸い、無事にラウヴェッダーの十字架を通過した。屈服させられた高等学校教諭はただそれに一瞥の視線を投じた。しかしイーダ夫人はすぐに背を真っ直ぐに伸ばして言った。

「同僚殿、そのままお気楽に、　ー　私どもの首にはまだ目もありますから」。

黄昏は次第に進行し、夜風が、温かく、穏やかであったが、それでも森でそよぎ始めた。フクロウやコウモリが飛行を始めて、その猟区を偵察していた。御者席のフリッツが話した。

「背後のどちら様から今晩素敵な酒手を頂けるか、訝しく思っています。いや、実際、途中、まことに結構な、生き生きした会話と取っ組み合いでした。特に副校長夫人はお見事。しかし水車小屋も今は止まったように見えます。実際馬車の中も奇妙に静かに整然として来ました。私はただ、小柄な、涙ながらのご夫人がいらっしゃらなければ、今私はこの御者席からホラッカーの話しをしたいところです。これに関連して、副校長殿のことも存じています。副校長殿の家の方々を私がお連れして来て、このことを副校長殿が少しも予感していないのであれば、洒落た冗談と思われましょう。立派な酒手目当てに、今回皆様を案内して来たわけではありません。いや、十五分したら、神の御加護で、ガンゼヴィンケルのヴィンクラー牧師館に到着します。ホラッカーがいようといまいと、最良のことは、この牧師館がいとも名誉ある礼儀正しい家であって、御者を素面のまま放置せず、ご配慮下さり、何が礼節かご存じでありまして、ただ屋内での楽しみのみを考えるのは礼節に悖るとご承知であることです。それでまともな老御者ならいつも陸路での喜ばしい再会に自らの口上を述べます。つまり最も大事なことを述べ、接吻の類いはその後で、それでこちらで、『今日は姉ちゃん』、あちらで『今日は兄ちゃん』となり、『御用意ですかな』となります。家の人々のご配慮です。だって小間使いが御者用に盆を持って現れるのですから。冬には何か温かいものです。今晩は、この折手許にあるものでしょう。これが嫌な

奴は、辞退することです」。

黄緑色号の中で我らの三人が肉体的にまた精神的にこの遠路の旅で、即ちこの冒険的探検の最後の六分の一、更に耐えなければならなかった、この全ガタンゴトンを記録しようと思ったら、この陽気な一行がガンゼヴィンケルに着くまでに、きっと真夜中を過ぎてしまうことだろう。しかし次第に、その地に到着したいという衝動が強まって来た。暦には月光が記載されていたか、確認できない。しかし天は大地同様に次第に極めて穏やかな夏の夜の薄明かりに包まれて、それで勿論森や道がまさにより明るくなることはなかった。その上国道は数回かなり急に山を下っていて、その上更にその都度鋭く森の角を曲がっていた。その上、この「益体もないぼろ馬車」は原野のように絶えず不気味な音色を自ら発していた。そしてこのぼろ馬車があるとき、不安げに、「がきっ」と言うと、高等学校教諭ノイバウアー殿でさえ、「イエス様」と叫び、ヘートヴィヒ・ヴィントヴェーベル夫人は声高に金切り声を上げて、イーダ・エッカーブッシュ夫人は言った。

「余りにひどすぎる。こんなでは、私はならず者のホラッカーが悪事の廉で、絞首刑に処せられるとき、その梯子を喜んで支えます」。

「皆さん、ガンゼヴィンケルです」とフリッケが御者席から叫んだ。博士は右手の窓から、副校長夫人は左手の窓から頭を出して、両人は眼前に木々の間から揺らめく一つの明かりを見た。

「我がヴィクトルよ」と若い夫人は口ごもった。

「エッカーブッシュ、　ー　エッカーブッシュ」と老レディーは呟いた。

同僚ノイバウアー殿はくしゃみした。これは人々がよく、心的にほっとしたとき、いつでもそうするものである。

第十五章

まともな歴史記述者は、以前の自慢屋のスペイン国王[カール五世]、がそのぼろの国を有して、我が帝国内では陽は沈まないと言ったのとは、全く別の君主である。

我らの帝国での本当の太陽、真の世間の太陽が決して全く沈んでしまうことがあってはならない、このことは自明である。そして別の太陽、　ー　いや、この別の太陽は、我らがまさに好きなように昇らせたり、沈ませたりしている。

この瞬間、太陽は、沈みつつあったが、まだガンゼヴィンケル上にあり、我らの両インドの現在の族長と言える、つまりガンゼヴィンケルのクリシャン・ヴィンクラー牧師の黒いビロードの帽子上にあった。彼は家から戻って来て、庭の園亭の一行にこう報告してから、まだ三十秒も経過していなかった。

「あの娘は相変わらず眠っている、しかしとても落ち着いていない」。

「私が先ほど様子を見たときには、とても静かに寝ていました」とビラ夫人は述べていた。そして我々は我らの二つの太陽[スペイン帝国の沈まぬ、朝日と夕陽か]がガンゼヴィンケルの牧師館の小さな低い窓、雨樋のすぐ下の窓に射し込んでいる美しく、赤い、炎のような光線を目で追った。

すると丁度全く静かに横になりながら、その後すぐにまことに落ち着かず眠っていたその娘の姿があった。　ーー　我々が側に寄ったその瞬間には、また静かに横になっていた。

しかし目を開けていて、　ー　側面に寝て、両手を前で組み合わせ、全く動かずにいた。その娘は見つめていた。しかし何を見つめていたか。動物どもや子供ら、民衆の目の中のこの恐るべき真剣さについて、誰が語る賢明さを有していよう。この恐るべき真剣さは、通常、我々教養人をまことにびっくりさせるもので、我々は我ら自身の身分の一人の不幸な男や、一人の不幸な女の目の中でこれに遭遇すると、かなりの間、由々しい気分になるものである。

ロットヘン・アハターハングは、外の輝きの海から森や野原、村の屋根、牧師館庭園の木々を越えて、小さな寝室へ滑って来る美しい陽光をまさに見ていた。現実に現存したもの、生起したものの、断片的映像や、それからまた単に夢想されたものにすぎない映像が、彼女の哀れな頭の中に去来した。これらの映像の舞いが馬鹿げているほど、まさに彼女にとって、自分が、随分以前と同様に、勤勉に、いそいそと、熱心に、急いで、素早く、楽しくまた手足を動かすであろうということが信じ難く思われた。

いや、とても遠い昔だ。彼女が異なる民で一杯の広大な国々を経由して、ベルリンの向こう側からこちらまで、恐ろしい道に踏み込んで、　ー　ガンゼヴィンケルまで、この寝室に戻るまでの、一切の過去の事柄は、何と遠方に去ってしまったことか。実際この寝室は、遠い、遠い遠い、はるか昔、自分に任されていた領域だったのである。

今や彼女は、果てしなく恐ろしい国道で、健気に持ち堪えて来た両脚を実感した。両脚はとても痛んだ。　ー　そして太陽はその途次、ほとんど余りに好意的であった。　ー　そして夜は、勿論、夏であったが、それだけに一層冷たく思われ、星々にもかかわらず、一層暗く思われた。

朽ちた煉瓦小屋の中で、突然麦藁の中から起き上がったあの老人は何と言ったのか。

「あの人はそのかすれた声で、私のことを『戦友』と呼んだ。灰色の、凍える朝の薄明かりの時だった。ひょっとしたら、そのかすれ声の言葉は、惨めな境遇の中で、少しも悪いことを意味していなかったのかもしれない。でも高く湿った穀物畑の中、狭い道を歩いて行くのは、恐ろしいことだった。...」。

「あの道では、ハムスターが垂直に起き上がって、吠え立て、私に向かって飛びかかろうとした、...」。

「動物どもは、怒ったらひどいことになる、とコルトは言っていた。でもコルトはこうした動物どもの心が分かっていた。　ー　これは村人があの人の能力と認めていた、唯一のものだ、　ー」。

「そのとき私は叫んで、耕地を横切って走り、穀物を踏み倒した。　ー　神様、その罪をお許しください。霧がとても濃くて、暑い太陽がまた新たに昇って来たとき、それはまことに清涼剤だったわ、...」。

「今度は私もきっと新聞に載ることだろう、きっと間違いない。ネーレケ牧師殿が私のことも新聞に伝えたに違いない。いや、コルトよ、コルト。　ー　これからは、有り難や、私ども両人が他の悪漢どもと一緒に、広大な世間でお尋ね者になるのだ、...愛しい私のコルト」。

「それでは、ここまでで、これ以上先には進まないのか、怪物よ」と全く同じ時刻にスケッチ教師のヴィクトル・ヴィントヴェーベルは、森の最後の木々の下で、両手を杖の握りに置いて、叫んだ。「一人の人間の内実を余りに良く知ってしまうと、一体何と悲しい

ことか、まことに良く分かる。知らないままだと、愛しい貴殿は、相変わらずぶん殴られるに値すると思っていることだろう。では、ホラッカーの母上、貴女はどのように思いますか。我々は彼の素朴な羞恥心に配慮すべきか、それとも、何も頓着せず、彼を引っ張って行くべきか」。

老いて、襤褸を着たおっかさんが、反対側のよろよろした盗賊を、最後の力を振り絞って真っ直ぐに支えていたが、スケッチ教師を惨めに、請うような表情で見つめていて、言った。

「いや、最愛の旦那様、貴方はお心の中で私どものことを泣いていらっしゃるから、私どものことをお笑いになるのでしょう。生涯、私のことは、お慰みにお笑いくださいまし。貴方のご好意は、私の今際の時にも忘れません。モイゼベルクの湿地からここまでの途次、貴方がこの若者のために、その上私のためにも、何と骨を折られたことか。他にこの広い世界の中で、誰がこのような不逞の輩、このような不潔な奴、このような哀れな人間を、嫌がらずに腕で連れて来ながら、ほとんど何もお代を要求なさらない方がありましょうか。でもその代わり、貴方御自身が上手く行かない時や、気が晴れない時、私のことを思い出してください。親愛なる、親愛なる旦那様、貴方がもはや国王様や皇帝様を考えたくないときには、その時にはただ未亡人ホラッカーをお考えください。...そして今この時、愛する旦那様、私どもに最後のお慈悲をくださいまし。私どもをここに、私と私のコルトを座ったままになさって、お一人で村へ、二，三歩向かってください。そして牧師殿に、私どもはここにいるとお知らせください」。

同僚ヴィントヴェーベルはくしゃみした。奇妙な当惑状態の時、人は時折そうするものだが、しかし少しも心の裡で気が楽になることはなかった。ちなみに否定し得ないことであるが、モイゼベルクの湿地以来、ホラッカーに関し、若干手を焼いていた。未亡人がいなければ、ベクセンダールで脅迫しても、このルンペンを更に歩かせることに格別効果はなかったであろう。そして二人はこの老母がまだ木の切り株に残っているのを見つけた。そしてこの老母が結局、同僚ヴィントヴェーベルにとって、ガンゼヴィンケルへの途次、この盗賊に関して相談できる最良の救援の友であった。老母は、早速、「反対側」から手を伸ばして、勇気付けるために大量の涙を流した。

「私が我ら三人、当時腕を組んでよろめいていた様を等身大の油絵にしていたら、そなたは今日、ドイツ国民の中で、最も著名な男達の一人の妻となっていよう」とこのスケッチ教師は後に何度か自分のスケッチブックをめくりながら、溜め息を吐いた。しかしそれは単に今一度返事を聞くためであったろう。

「ヴィクトルヘン、そのままのあなたでいいのよ」。　ー

転けながら、倒れながら、起き上がりながら、彼らは、我々がすでに承知しているように、森の縁に達した。スケッチ教師は一度ならず、この風景の地方色やその他の色合いについて観察する時間を得た。野外の、近くの木々の幹の間に輝く明かりを見て、彼は思わず叫んだ。

「いや、何と爽やかな景色だ」。

それから話されたことについて、我々はすでに報告した。盗賊の頭は、再び長く伸びて、鼻を地面に向けていた。ホラッカー未亡人は彼の側にしゃがんで、絶えず彼の上着の裾を掴んでいた。スケッチ教師、ヴィントヴェーベルは、　ー　くしゃみして軽快になった後、

ー　先に進んで行く用意があって、立派なクリスティアン・ヴィンクラーに、ホラッカー未亡人の言葉通りに、「私どもはここにいる」と伝えると宣言した。

ゆっくりした歩調で、興奮して、絶えず肩越しに両人を振り返って見ながら、この同僚教師は森の縁から、村と牧師館庭園の生垣木戸に通ずる隘路を下って行った。しかし彼の歩行は、彼が森をはるか後にすると、一層飛ぶようになった。彼は今日の午後、自分の長い脚にすでにかなり負担をかけていた。しかし今は脚の方が彼に対し働きかけて、自ずと飛び始めていた。随分後になってから、彼は自分に自問した。何故かの時はあんなにも駆けたのか、知りたいものだ、と。

彼の長い脚は実際、彼と一緒に駆けていて、彼のはるかに一層長い影も、彼に先駆けて素早く駆けていた。

「彼がやって来るぞ。丁度私が考えていた通りに、　ー　単独で。悪人に追われているかのようだ」と突然、同僚の副校長エッカーブッシュは叫んで、園亭のベンチから飛び上がった。すると皆が彼の真似をして飛び上がり、極めて期待で緊張し、興奮して、生垣の上から頭を突き出した。

「彼が駆けて来る、...転けている、...いや、有り難や。...やって来るぞ」。

ガンゼヴィンケルの牧師は自分の庭園の木戸を可能な限り開け放って、ほとんど蝶番から外れそうであった。最後六歩遠く跳ねて、新参者が飛び込んで来た。帽子を振っていた。

「万歳」。

「何、...万歳だと、...」居合わせた一同が尋ねた。

「万歳」とヴィントヴェーベルは繰り返した。すると人々は皆、彼の方に駆け寄り、彼のここかしこを掴み、彼を前後左右に引っ張り、各自が叫んでいた、「彼を解放しろ、まず息を整えさせろ」。

勿論、老エッカーブシュが最も貪欲に、いや、いわば毒づいて、彼を責め立てていた。老公は自分の両親指を早速上着の両襟折り返しの最上のボタン穴に押し込んで、彼を二度と手放すことのないよう、自分の爪で掴んでいるように見えた。彼を他のすべての人がようやく解放したとき、老公は相変わらず彼を鋸引きにして、手前に、後方に押しながら、ー　出来事を孕んだ現在の中へ引き入れていた。

「同僚殿、奴を本当に捕まえたのか」。

「捕まえました」。

「おう」とガンゼヴィンケルの牧師館は言った。

「奴はどこだ」とエッカーブッシュ同僚は喘いだ。ビラ夫人は再度、全く間近に迫って、客人の上着の裾を掴んで、叫んだ。

「いや、私もそのことを知りたいのです。エッカーブッシュ、揺さぶるのを止めてください。...それで、もうじたばたなさらないで、ヴィントヴェーベル。仰有るように彼を捕まえたのであれば、どこに彼はいるのです」。

息を求めて、口を開けながら、スケッチ教師は自分の親指の一つで、肩越しに森の方を示した。皆の視線がその方向を向いた。

「おう」と一同は二回目発した。しかし今回は極めて多様な感情や情感の奇妙な混淆で、この箇所では、他のどこでよりも更に、まさにすべての読者が直接この話しに居合わせたわけではないことが遺憾に思われざるを得ない。

「そのせいで貴方はそんなに叫んでいらっしゃるのですか」とビラ・ヴィンクラー夫人は喘いで言った。

「フム、フム」と当地の牧師は呟いた。自分の帽子に手を当てて、微笑して、若干沈思してから言い添えた。

「いや、勿論、実際彼はすでに三週間前からあそこにいる」。

「いや、何を言う」とネッダーマイヤー、当地の村長は言った。「まあ、町の殿方はそんなものです。しかし我らの楽長、ベクセンダールもすでに同じ洒落を述べています、スケッチ教師殿」。

副校長エッカーブッシュに関しては、彼は、最後に一突きして、同僚をほとんど庭の生垣に押し込んで、彼の上着の襟を最後に憤然と引っ張って放し、自ら、　ー　全く黙って腰掛けた。

「是非何か飲み物を切望します。そうしなければ、詳細を話すことは全く出来ません。同僚殿、追跡は大したことではなかったのです。しかし引き連れて来るとなると、　ー　皆さんに申し上げますが、それは大ごとでした」と同僚のヴィントヴェーベルはある偉大な、まだ誤認されている事の完遂について一切の尊厳を添えて語った。「まあ、とにかくモイゼベルクの湿地からあそこの原生林の縁まで、彼を引っ張って、押し込み、持ち上げ、引きずり、揺すって、導いてご覧なさい。あの未亡人の加勢がなければ、差し当たり私の尽力の跡は何も見当たらないことでしょう」。

第十六章

彼、つまり親愛なるヴィントヴェーベルは、自分の最後の言葉の効果に関し、とても勘違いしていた。彼が、更に言及せずに、黙って素っ気なく口をつぐんでいたら、きっと、少なくともビラ・ヴィンクラー夫人は彼自身に対する関心の残りを呈示していたかもしれない。しかし彼はすべての友好的、客あしらいの良い関心を根本的に自分から転じて、他の人物へ振り向けてしまった。一同は再度ただ彼に向かって来た。しかしテーブルや家や地下貯蔵庫に有する飲み物を持ってではなく、まことに彼のためではなく、再度人々は彼に対し駆け寄って来て、それは全く顕著に高ぶって興奮していた。

「何だって、どこだ、何だと。...いや、何、それ。...そんなことが有り得るのか。...ヴィントヴェーベルよ、我らを誑かしているのではないだろう。...熱中症のせいとか、森の幽霊が一芝居打っているのではないだろうな」。

「いや、まあ、私を揺すって見なされ。　ー　落ちて来るものすべて、ご自由にお考えください」と同僚のスケッチ教師は笑った。「お望みなら私を逆さに立ててみてください。事実は転倒せず、そのままです。そこに居合わせたのは私なのです。私が彼を連れて来たのです。あそこの森の縁に彼は自分の母親と一緒にいます。さて、　ー　ようやく皆様とまともな話しが出来ます」。

「話してくれ、話してくれ、ヴィントヴェーベル」と牧師、牧師夫人、副校長エッカーブッシュは異口同音に叫んだ。村長は三回目こう語った。

「何、それ」。

同僚ヴィントヴェーベルは再度汗を拭いた。満足げに一人一人見つめながら、彼は実際

短いスピーチを行ったが、奇妙にもこのスピーチを大部分村長に向けていた。

「親愛なるネッダーマイヤー」と彼は言った、「私の亡き父は人間達について、あるいは一層ひどく、一人の人間について、怒るとき、すさまじく罵る習慣でした。どんな言葉も、高尚すぎるとか、低級すぎるとか、善良すぎるとか、劣等すぎるとかいうことはなくて、自分の憤懣を発散しました。いや、老父は中傷の術を心得ていました。ガンゼヴィンケル全員が、老父にとっては、肩の間に頭を押し込んでのみ、忍び寄って来られるのでした。それで、村長殿、どのような罵り方かと貴方にお尋ねしましょう。全く単純です。『我々、やくざな獣どもがまたしても教室から出て騒いだのか。我々忌まわしい下智劣根。我々救い難い道化師。我々、没趣味な屑阿呆』。　ー　老父が自らを除外せず、決して除外せずに、いつも一緒に教室の中にいようとしていたことは、結構な点です。しかし私はこの父の息子です、ネッダーマイヤー殿。さて私は残忍な盗賊の頭、ホラッカーと腕を組んで、教室から、つまり森から出て来て、そして我々は（未亡人ホラッカーも含めて）一緒に語り合いました。そして我々は次の結論に達しました。即ち、我々と皆にとって一番良いのは、これ以上不必要な騒ぎを起こさずに、とりわけ村では大騒ぎをせず、共同体の参事官も、勇敢な青年団も我々のことで森へ出向く必要はないということで、　ー　要するに、我々が今自発的に申し出ましたように、つまり全く静かに我々を受け取るならば、それが一番良いというものです」。

「何のスキャンダルも起こさずに」と副校長エッカーブッシュは呟いた。「同僚殿、続け給え。またしても貴方の別な一面を知り得た」。

「何のスキャンダルも起こさずに」。

「親愛なるヴィントヴェーベル、貴方が更に話される前に、本当にまず飲み物を一つ差し上げてよろしいでしょうか」と当地の牧師夫人がまことに母親らしい優しさで尋ねた。

「そう願います、　ー　村長殿、哀れな罪人ども以外は何のスキャンダルも起こさずにです。貴方が今この時、この案件では北ドイツ同盟の中で最も重要な男性です。ただ貴方のお力によってのみ、最良のことをなし、カワカマスを陸地に上げることが出来ます。ガンゼヴィンケルを全面的に遠ざけて、自ら帽子を置いて、出来るだけその椅子にしっかりと座っていらっしゃることです。彼は、自分を連れに牧師殿がお一人でお見えになることを願い出ました。村人が一緒に来ると、彼はまた逃げ去って、我々の釣り道具も一緒に持ち去る。それからは、誰であれ、池の自分を覗きたいものは、覗くがいい。自分個人としては、自分の餌を持って、家へ帰る、と」。

「ビラよ、私の帽子と杖を取って来てくれ」とガンゼヴィンケルの牧師は言った。

「御老体、早速取りに向かっています」と実際すでに歩き出している夫人が叫んだ。

ネッダーマイヤーは呟いた。

「私が貴方の話しを理解し、把握した限りでは、私はここにいるのが良いのだな。自分に連れて来て貰えるものを、私は確かに自ら連れに行かないことにしよう、スケッチ教師殿」。

副校長エッカーブッシュは、自分の眼鏡のレンズをハンカチで拭きながら、間近の庭園小径のブナの木の囲いの間を行き来していた。彼は思案した[ruminierte]。　ー　我々は、しかし、ラテン語の辞書を引くと、それに記載されている。rumen:喉、　ー　ruminare:反芻する、何かあれこれ考える、吟味する、熟慮する。彼はぶつぶつ思案して、突然、咄

嗟に眼鏡をまた掛けて、大股で、しっかりと、散策している同志の前に立って、再び上着のポケット蓋を掴んで、強調して言った。

「同僚殿、私は新たに我らの教授団の名誉として、貴方のなされた貢献に対し、祝意を申し上げる」。

そして顎と鼻、眼鏡を掛けた目を天に向けて、彼は夕刻のゼウスに対する自分の快適さを表明して、こう付言した。

「いや、彼は全く奇妙な奴だ」。

四人の慎重な、分別のある、思慮深い男性達をビラ夫人は園亭に残して、自らは勿論、家の中に戻る途次、殊に入る時に、これらの瞬間と情緒のすべての感興に浸っていた。クリスティアンは彼の帽子と杖のために彼女を送り出していた。彼女が自分に委託されたことだけに専念していたら､彼女は我らの主の御心にかなった妻とは言えなかったであろう。

彼女は玄関の階段でスリッパを片方失って、それを拾ってまた履くという手間を取らなかった。何に対しても時間はあった。ただ自分の感情に浸るという彼女の欲求を満たす時間はなかった。言葉に　ー　騒動　ー　村のスキャンダル、火事である。いや、あの素朴な男、村長がいて、　ー　この実直な隣人ネッダーマイヤーが十分静かに園亭で、他の殿方と一緒にいて、それどころかはなはだ物静かに、その聖職者司牧の帽子と杖とを待って座っている。ホラッカーか。ネッダーマイヤーは、果たしてガンゼヴィンケルで更に騒ぎを引き起こそうとするだろうか。

「ホラッカーだ」と玄関で牧師夫人は喘いで、言った。台所のドアの中で彼女はただこう叫んだ､「ここでは何一つ動いていないわ。十五分したら彼を夫が連れて来る。その時にはすべてがてんやわんやだ」。

そう言って、すでに家の二階に通ずる階段にいた。次の瞬間、彼女の老公の部屋で、帽子を釘から外し、隅の杖を握っていた。

また別の、もっと梯子状の階段が古い牧師館の屋根裏部屋に通じていた。一瞬ビラ夫人は、脆い手摺りに手を置いて、躊躇った。しかし誘惑は余りに強かった。

「あの娘がまだ眠っていたらいいけど」とこの善良な女性は囁いた､「あの愚かな、阿呆な娘が更に静かに眠っていたら一番良いのだが。悲鳴が上がったら、お仕舞いだ」。

夫人はすでに二番目の階段をそっと上がっていて、寝室のドアを出来るだけ静かに開けた。用心して夫人は頭を差し入れた。　ー

「まあ、何てこと」と夫人は叫んだ。夫人は背を伸ばして座っているロットヘンの広く開かれた目を真っ直ぐに見つめた､「思った通りね、夕方になったら、フクロウのように元気になって」。

実際、夕方になっていた。活気ある明かりの緋色の光線が小さな寝室から漏れて来た。ロットヘン・アハターハングはすでにかなり以前からベッドの端に垂直に座っていた。我らの友ヴェーデキント[検察官]はその連れと一緒に丁度森林官ラウヴェッダーの記念十字架の側を馬車で通り過ぎていて、エッカーブッシュ副校長夫人は黄緑色号の一行と一緒に丁度町から出て、森の縁に達していた。我々にとって時間規定を出来るだけ正確にすることが肝要である。自ら計算したり、頁を後戻って確認し、かくて我らを少しばかり手助けするよう、我らも読者に要請したいところである。

検察官がガンゼヴィンケルに到着すると、クリシャン・ヴィンクラーは丁度、ホラッカ

ーと未亡人ホラッカーと一緒に森の縁から村へ帰る途中であった。副校長夫人がノイバウアー同僚とヴィントヴェーベル同僚夫人と一緒に到着したとき、彼は　ー　つまり正義の手は、　ー　彼の、　ー　つまり犯罪者の　ー　襟をすでに掴んでいた。そこでこの話しは、多くの人が言うであろうように、本来かなり結末に近付いていた。

「私は自分の帽子が欲しいときには、皆さん、思うに、自ら帽子を取りに行く必要がありましょう、帽子をかなり長く待つべきでない場合」とガンゼヴィンケルの牧師は言った。

牧師クリシャン・ヴィンクラーは自分の帽子を待っていた。我々の男性読者、女性読者は、我らの報告の終わりを待っている。　ー　世間と人生の混乱を覗き込んでいる人物にとって、その周囲の世界が与える印象は、いつもその世界は何かを待っているかのようである。何を待っているのか。勿論単に、何らかの、しばしば珍しく取るに足りない、間近にある、しかし常に是非とも不可欠である事象の出現、あるいは到来である。あれこれのこと、それは単に起きる必要、生起する必要がある。すると人はそのときから、どんな永遠世界に至るまで、とても満足して、自らと世界とに完全に自足して、この世の他のどんな交易にも対処する用意があると称することだろう。しかし我々は、待たない人間を見いだすと、いや、それは単に、何かを待っているのではないかのような印象を与えるにすぎない人間であれ、その人間を見いだすと、いつも強力な印象を受けると承知している。主に、このように静かになった個人の目は、ぎょっとさせるものである。これには何かが感じられて、これは通常の、無造作な観察者の目を引き、自分の驚きを表明するよう強いられたりする。

「娘よ、どうしたの、どうしてそうまじまじと見るの」とビラ・ヴィンクラー夫人は叫んだ。

この質問に対する返事は難しい。そして牧師夫人は返事を全く予期していなかった。

「いい、人をそんなに愚かに見つめるのは、良くありません。あなた、阿呆な愚図が、最後の審判の日のような顔を私に向けるよう、あなたを休ませたわけではありません。勇気を出して、あなた、　ー　ロットヘン。また動けるようであれば、下の台所に行きなさい。きちんと夕食を食べたら、他の何よりあなたには効き目がありましょう。あの阿呆な若者、コルト、　ー　あなたのならず者、ホラッカーに関しては、多分すぐにガンゼヴィンケルへのあなたの到着を嗅ぎつけています。向こうの森の角に、彼は座っていて、更にこちらへ下りて来るのを、少しばかり気取って遠慮しています。シュネレ老嬢が、医師は彼女に浣腸を処方していたときに、私の御老体を最後の牧師慰問と言って呼び寄せた時以来、そのようなことはまだないことです。あなたいい、　ー　牧師殿が直接出向いて、ホラッカーを連れて来るのです。ホラッカーの依頼なのです。下の園亭で、私の御老体は杖と帽子を待っています。私の意見では杖だけで十分なんだけど。私は背中に杖を持って、ただ辛抱強く、静かに、落ち着いて、庭の木戸で時間を待つことにしましょう」。

「ビラ、どこにいるのだ」とこの時、いつもは辛抱強い善良な司牧の尋常でなく苛立った声がした。

「こちらです、...今参ります」と司牧夫人は叫び返した。そして大急ぎで夫人はまた階段を小走りに下りて、とても好意的ではあったのだが、しかしどのような気分にベッドの端の自分の庇護する娘を陥らせたままであったか振り向いて見ることもなかった。幸い牧師のクリスティアンも、自分の年齢に似合った素早さで畑道を森の方へ上がって行ったと

き、少しもこのことを予感していなかった。
先ほどは何ももはや待機していなかったあの両目は、今やかなりの時間、閉ざされたままであった。

第十七章

さてこの牧歌は、どの観点から判断しても、本当に素敵な本に似始めている。つまりこのような本は、一握りの誤植もなく、惨めな装幀もなく、馬鹿げた宣伝もなく、愚かな批評もなく、何の傷もないという風に記述される必要があろう。あらゆる我楽多、ナンセンスの中から、無分別の世界から、憎悪、嫉妬、憤怒、憤慨というあらゆる切迫した混乱の中から、それは再三新たに浮かび上がって来る。喜ばしげに、屈託なく、それで、　ー在るが儘のガンゼヴィンケルをご覧あれ。相変わらず牧歌のように見えないか。その中から、それについて報告しなければならない諸々にもかかわらず、とても優しい代物ではないか。
午後の間に人間の情熱で、邪悪な権利とならないものがあろうか。優しい、微笑している時間の間に、何という恥辱の行動が話題になることか。ひょっとしたら我々には見逃されている行動でも、この大地の一角を占める人間の種族が自らに認める恥辱の行動があるのではないか。
例えば我々は強姦、強盗、殺人について聞いたことがないか。小鳥のさえずりの中に、嫉妬と愛の苦悶のざわめきが混じっていないか。緑の葉叢の中に、他人の不幸を喜ぶ黄色の目の微光を感知しないか。朽ちた羊皮紙の過去自らが、その痩せて、埃っぽい前足を伸ばして来て、憤怒や邪悪さを家から家に運びながら、夏の穏やかな気候をかき乱すのではないか。
「奥ベルリンから」の長い道中、ほとんど強烈過ぎる飢餓と悲哀が甘受されなかったか、
そして　ー　その間に、『一八六六年叙事詩』のかなりの詩作が、それも同僚高等学校教諭のノイバウアー博士によってなされなかっただろうか。
ほとんど余りに多くの酵素が、叙事的悲劇的醸造酒に、余りに多くの誤植が牧歌に見られる。しかしながら、何という牧歌か。わいわいがやがやの世界の上の何と雲一つないエーテルか。ここかしこに、一つの心を通じて、何と涼しく平和な微風が、誤植や宣伝、批判のない全く珍しい別世界から吹いて来ることか。
「貴方は情熱や、情熱表明の動詞をどのように用いますか、ヴィントヴェーベルよ。私は喜ぶ、私は歓喜する、私は愛でる、私は称える、私はお祝いを述べる、私は感謝する」と副校長は「夢見るように」尋ねた。するとヴィントヴェーベルは笑って答えた。
「質問が多すぎます」。
「次の方どうぞ。ヴィンクラー、君はどうだ」。
するとガンゼヴィンケルの牧師も同様に微笑して語った。
「エッカーブッシュ、私の間違いでなければ、副文構文でだな」。
「あるいは、不定形と対格だな。いや、何と不思議な晩だ。自分は腰掛けて、学校のノートを訂正しており、周りの宇宙は傷と美しさで一杯だとよくよく考えると、砂糖漬けのチーズになりたくなるところだ。我を忘れているのかって。いや、ただ尋常でなく動揺し

ており、心が満足している。村長殿、貴方はこれを勿論貴方の土地の大気のせいになさろう。貴方も私同様、賢明なセネカは、彼の書簡の一つでこう述べているとご承知であろうが。我々ハ皆人生ノ部分ニツイテ熟慮スルガ、誰モ全体ニツイテ熟慮シナイノデ、我々ハ罪ヲ犯ス、と」[Episteln、Ⅷ,2]。

「副校長殿、私は何も何かのせいにはしません」とネッダーマイヤーは言った、「その書簡に関しましては、ただ私の楽長や、牧師殿の話される新訳聖書関係のみを存じています。私が貴方のラテン語に対し返事することをお望みであれば、ただ静かにドイツ語で尋ねてください」。

「我々は皆、個別の点については思案するけれども、人生の全体については気にかけないが故に、我々は間違いを犯している」とエッカーブッシュ同僚は語った。

「それは何かこの地の村長たる私に対しての諷刺ですか」とネッダーマイヤーは尋ねた。

「とんでもない。この意地悪な異教徒ルキウス・アンナエウス[セネカ]はただ私のみを狙っています。ほら、そこの牧師殿は笑っています。お気楽に笑ってくれます」。

太陽は森の背後に沈んだ。しかし夏の夕べの甘美な明るさがまだしばらく大気中に漂っていた。

検察官のヴェーデキントと哀れな、小柄な娘、つまりヘートヴィヒ・ヴィントヴェーベル夫人はガンゼヴィンケルへ馬車で向かっていた。しかし結局、クリシャン・ヴィンクラーは自分の帽子と杖を手に取ることになった。それもこう言葉をかけられた。

「それではこれから神と共に出掛けてください、ご老体。私どもを余りに長く待たせないでください。本当に、喜劇が幕となる潮時です。ヴィンクラー、今やあなたがこの件を手中にしているのだと、ロットヘンにすでに私は仄めかしました」。

この最後の言葉のせいで、この善良な男はほとんどもうしばらく引き留められるところであったろう。しかし自分の妻を憂わしげに見つめて、そして屋根の下の小さな窓の方を二回目、見上げた後、彼は更に別れの言葉を述べずに、素早く庭園木戸から出て行った。

「同僚殿、この大地の幾多の地点で、そこに雑草が生えずにいると、何と不毛で情けなく見えることかと、今日ほどかくも明瞭に、自分の全生涯でまだ感じたことがなかった」と副校長は、スケッチ教師に向かって、言った。「緑はいつでも緑だ。野道を彼が長靴で行く様を見てみるがいい。私は固く確信しているが、彼がそのキャベツと大根の間で生えている、このろくでもない代物を今このとき踏み付けて感ずる物悲しい楽しみに勝って、ガンゼヴィンケルで彼に楽しみをもたらす庭野菜、堅牢な作物はない、と。ネッダーマイヤーよ、悪魔がその中間に種をまいたのだと、仰せかな[マタイ、13,24-30]。彼にそう言いなされ。私は自分の首を賭けて申し上げるが、彼はまさにその反対を説明することだろう。そして主にこの楽しみごとのために感謝することだろう。不滅の神々にかけて、私もそうだ。ここに静かに座っているのは、悪魔に頼もう。むしろ、三日間の禁固刑がましだ。…ヴィンクラーよ、おおーい」。

そう叫んで、再度彼の方でも帽子と杖を握った。これらは幸い取って来るよう頼む必要がなかった。そして灰色髪の友の後を追った。

「勿論です」とビラ夫人は言った、「私もその言葉を待っていました。言い出せなかったけど」。

しかし我々は、夫人と村長とヴィントヴェーベル同僚と一緒に静かに園亭で検察官の到

着を待つことにしようか。あるいはそれとも牧師とエッカーブッシュ副校長と同行しようか。

全人生、人生の全体を気にかけよう。我々は副校長殿と牧師と同行しよう。

「おおーい、ヴィンクラー」と副校長は叫んだ、「よくよく考えると、私はこの場合、教会と学校の分離に反対だ。この分離に関し、他のときの私の意見は別にして。私は君と一緒に行く。そうしちゃいけない法はなかろう」。

「ホラッカーが反対意見でなければ」と牧師は微笑して言った。急ぎ足の、短足の友を待っていて、それから腕を差し出した。「私は親愛なる君が承知しているように、どんな道でも君の同行を喜んで受け入れている」。

「我々はすでに長年、幾多の道で、腕を組み合って遍歴して来た。クリスティアンよ、君が大抵は師父[Mentor]であり、私はテレマコスだ[オデュッセウスの息子、Mentorは師]。しかし時折、それは逆でもあった。いや、君は、私がいなかったら、かくも長く、ガンゼヴィンケルで耐えられたであろうか。そして私は、君がいなかったら、同じようにかくも長く、森の背後の忌まわしい小都市で耐えられたであろうか」。

「我々は互いに勿論、折々に、あらゆる苦境、難儀の際に助け合ったな、ヴェルナー」。

「それで古参の若造よ、その際最も素敵なことは何だったかな」。

「何だ」と牧師は若干期待に満ちて尋ねた。

「どちらも相手の受難、苦難を、指をくわえて見ていなかった」。

「そう思うかい」と牧師はとても疑わしげに尋ねた。

「私はそう思うばかりでなく、十分に確信している。ちなみに、誰かが私の威勢の良い外見や内面に関し、自分の満足感をごく追従的に表明してくれない週はほとんどない。我々は青いままだった。　ー　クリシャン・ヴィンクラーよ、君に請け合うが、我々は青いままだった。我々の妻も含めて、万物の無常迅速にもかかわらずに」。

「友よ、この珍しい若々しさに関し、我らの良き妻達はどの程度貢献しているのかな」。

「それはだな、それに関しては考えたことすらなかった」と同僚エッカーブッシュは言って、即刻立ち止まって、憂わしげに両手を下半身の前で重ねて、言った、「活性剤妻よ、万歳」。

「私の言う通りかな、親愛なる友よ」。

「当たり前だ。昨日なんかも、私は妻を掴まえて、最後の審判の日に、私の肉体の肉体であった者として、妻に生じ得る一切のことに注意を向けさせたのだ」。

「例えば？」。

「例えば、私は妻に言った、『イーダ、そなたの臨終の時を考えてご覧。永遠の正義が存在すると考えてご覧。いつか主なる神がそなたにこう尋ねたとき、何と答えるか。つまり、イーダ・エッカーブッシュよ、旧姓ヴェーニガーよ、そなたに主なる神の私が、かくも誠実な人間を夫として与えたこの幸運を、そなたはどのように活用したかな』と」。

「すると彼女は何と答えたのだ、ヴェルナー・エッカーブッシュ」。

「ウエー、あの老婆」。

「彼女は静かにその質問について考えるために、出て行ったのか」。

「ドアを自分の背後で閉めた、その後でか。いや、今回は違う。彼女はただ静かに、粗暴になったのだ。私の鼻の下に、指を突き付けて、こう答えた。『よろしいこと、私の子、

ご覧なさい』　ー　『何だ』と私は言った、　ー　『いえね』と彼女は言って、私がクロートー、ラケシス、それにアトロポスの運命の女神三人を彼女の化身として祭壇に導いたかのような印象を与えた。　ー　『いえね、エッカーブッシュ、ご覧なさい。私がいかに少しずつ、時間の経過と共に、この結婚指輪を苦労して削り取って行ったか。ただ単に、あなたが全く遠慮なく、馬鹿げた振る舞いにおだを上げて、私とあなたとを虚仮にすることが出来るようにするためです』と」。

「的確だな」とガンゼヴィンケルの牧師は叫んだ。彼は立ち止まっていた。

「少なくともイーブンだ。いや、いや、クリスティアンよ、我々は十分に訳があって、我らの趣味にはまっている。　ー　私は天気予報だし、君は、クリスティアン・フュルヒテゴット・ゲレルト命だ。しかしそのときは、普段でも全く頼りにならぬハパランダの予報官を助けに呼ぶわけに行かなかった。しかし幸い丁度同僚のノイバウアーがノックして、そこで私は素早く『お入り』と叫んで、かくて当惑から逃れ出て、この理想的少年の頭に、あらゆる考えられる限りの美学的、情感的、文学的陶磁器を投げ付けて、その耳の側を飛んで行くようにさせたのだ」。

「彼がまた辞去してからは、ヴェルナー」。

「私も同様に勿論出来る限り迅速に退去して、九柱戯場に行った。しかし率直に言って、私はその時、立派な投げ方をしなかった。投げ損ねや外れがあって、家の妻の阿呆な念力のせいであった」。

「それでまた君が家に帰って来てからはどうだった」。

「いや、私のポケットは、町の噂話、それにホラッカーの話しで一杯で、もはや我らのプライベートーベトな件は話題にならなかった」。

ホラッカーの話しだ。この言葉で二人はしばらくまた素早い歩調で森に向かった。それも物思いに耽って黙っていたが、突然ヴィンクラーが発した。

「町ではそんな具合に進むだろう。しかしここガンゼヴィンケルで、私は、私のビラがいなかったら、どうなっていただろうか。私は自分の人生を、時に自分の利となるようにするために、同時に引き受けざるを得ない条件が多すぎるほどにあった。個別の嫌な点を数え始めたら、ポケットのゲレルト教授をもってしても、私は根本的に破滅に至ろう。もう一方の人間が、片方の人間にはすぐに息が詰まるときでも、快適に自分の本性のままピチャピチャと水浴びできるのは何という幸せであろうか。外部からの苦難が欠けるとすれば、私の善良なビラはせいぜい一週間しか保たないであろう。二週間目に彼女はきっと額にスカーフを巻いて、神経痛の頭痛に苦しむことだろう。しかしこれは大抵遅くとも水曜日までだ。それまでには通常、我らに欠けているものが発見されるのだ。すると我々はまた、この地上で何か戦って、勝ち取らなければならないものがあると分かる。白いスカーフは消えて、いずれにせよ戦闘旗が土曜日夕方まで翻る。そのとき私は自分の説教の準備をし、かくて、今まで、有り難いことに、牧師館では静かに栄えて来た。　ー　いや、親愛なるエッカーブッシュよ、そんなわけで、いつもいつも、我らの最良の意志に反して、重要な物事の中に、より重要でないものが、どうでも良いことが侵入して来る。それでとにかくまたこの厄介な祝賀の話し、四季支払金の話しを考えてみるといい。そんなわけで我々は、この嘆かわしいコルト・ホラッカーを文明世界に連れ戻すために出掛けている。私の心全体、この風変わりな悲惨な人間のことで一杯だ。　ー　しかし私は疑問を禁じ得

ない。どのようにしたら、この愚かしい出来事を片付けられるのか、どのようにしたら我々はこの新たな滑稽に憐れむべき茨の茂みから逃れられるのか、と。ここに我々は出掛けて、数多くの強大な大地の悲劇の一つを、最善の微力を尽くして、解決しようとしている。そして絶えず、まことに不安な気持ちでこう考えている。今また妻は下の園亭で、ネッダーマイヤーに向かい合って座っている。いや、ヴェルナーよ、我々はまさに平和を衣装のように着ていて、　ー」。

「衣装は背後が裂けているとき、我々は前面を繕っている。クリスティアヌスよ、私は君のナイトガウンを知っている。君はそれを着潰している。そしてビラが時々それに継ぎを当てている。いや、この地上の嘆きの谷では、平和を保つために奇妙な事がある。生地は単純に保たない。私個人としては極めて威勢の良いカラフルな柄で着用している。しかしパッドはまことにただ肘の部分だけ透けて見えているのではない。いやまことパッドだ。イメージや比喩が押し寄せて来る。クリシャンよ、我々はむしろ文部省や宗教局を仕立屋稼業に引き入れずに、むしろ打ち切ることにしよう。しかし君の敬虔な教区民との君の現今の騒動に関しては、君は私を君の子羊の群れの自由土地保有者や日雇いの一人と数える必要はないという点、これは相変わらず幸せな点と評価して良いと思うぞ。君は私に対し、モーゼが主に対してそうしたように、蛙のことで叫ぶべきであろう。[主はモーゼの願い通りにされ、蛙は、...死に絶えた、出エジプト記、8, 1-12]。この話しは全く私の諧謔と合っており、いずれにせよ、同僚のベクセンダールは一人の通の前で、その新年の歌を歌うことになろう。その時は私は村長と君の百姓達の味方をすることになろう。いや、君は私の許にきっとやって来て、君はまこと昔から取り決められていた精神的、芸術家的お返しをしないでは、聖堂区謝金を受けないことだろう。それは君に請け合っておく」。

「それは全く必要ない、エッカーブッシュ」とガンゼヴィンケルの牧師は語って、同行者の肩を叩いた。「君の更なる請け合いを私は必要としない。私はまこと君の声を十分に高く沼地のコーラスの中で聞き取ることだろう。とても緑色の大きな口の様で、君は葦の間から私を覗くことだろう。君を眺めるために、ビラは勿論イーダ宛に書く必要があろう。しかし我々は森へ着いた、　ー　この厭わしい話しは打ち切ろう。あそこに未亡人がびっこを引き引きやって来る。　ー　いや、ヴェルナーよ、私の妻、私のビラが、あのロットヘンをとても健気な娘に育てていなかったら、このホラッカーに対して語る言葉を持ち合わせないことだろうな？」。

ガンゼヴィンケルの牧師は思慮深い、厄介な質問をした。しかし副校長は、返事を手短に考える暇すらなかった。というのはホラッカー未亡人がとても素早く、びっこながら迫って来たからである。涙を滂沱と流しながら、嗚咽し、めそめそ泣いていた。

「牧師様、牧師様、あそこに息子はいます。...いや、今晩は、牧師様、本当にまことに貴方がわざわざこちらへいらしたのですか。そこに息子は横になっています。別の立派な殿方に約束致しました通りに、何でも甘んじて受ける覚悟です。それで何と仰有いますか」。

「ヘカベー[トロイの不幸な女王、『ハムレット』Ⅱ,2]が私に何の関係があろう」と副校長は何か言わざるを得なくて、呟いた。「お願いですから、落ち着いてくだされ、落ち着いてくだされ、老いたるレディー、落ち着いてくだされ。万事順調に経過しています。...このようにこの世で走り回っていると、ここにヘカベーは何の用かと問う人も出て来ます」。

未亡人の質問を受けていたガンゼヴィンケルの牧師は、何の返事もしなかった。彼はた

だ穏やかに彼女の手を握って、彼女と一緒に森の最初の木々の下へ戻って行った。
「コルトよ、...コルトヘン」とホラッカー未亡人が金切り声を上げた。屈服して、屈服させられた哀れな罪人はめそめそ言った。
「こちらだ」。
「コルト、勿論そなただな」と牧師は語った、「そなたを見ると、私の心は出血する」。

「ウンザリシ、恥ズカシク、後悔シ、
反吐ガ出テ、嘆カワシイ」。[ラテン語文法記憶詩]

と副校長は呟いた。上体を前後に揺すっていた、「感情励起の素敵な混乱だ。すべての動詞は当該人物の対格と一緒だ、いや、親愛なる神よ」。
最初のコウモリが夕方の灰色薄明かりの中を飛んで行った。ホラッカーは草むらから起き上がって、跪き、痩せた両腕を突き出した。
「あの陽気な殿方が、今や私にとって、飢餓と悲惨さの極みで、万事どうなとなれの状態であると正しく報告されたのですか。牧師殿、貴方が彼の言葉を信用されて、百姓どもを連れずにお出で下さったことに感謝します。全世界が今や私に襲いかかることでしょう。
ー　構いません。私は好んで劣等な人間になったのではありません。しかしともかく、劣等な人間になってしまったわけで、それを引き受けましょう。...忌まわしいのは、　ー」。
ガンゼヴィンケルの牧師は、そのガンゼヴィンケルの放蕩息子の痩せた両腕の一方の手首を掴んだ。
「コルト・ホラッカー」と彼は叫んだ。するとこのならず者は、頭上に片方の肘を持ち上げた。自分に応分の止めを刺す一撃が本当になされるかのようであった。
しかし一撃はなされなかった。クリシャン・ヴィンクラーは杖を腋に抱えて、この罪人の肩を叩いて、言った。
「何故そなたが私を頼りにしたか、そなたは承知しておろう、我が哀れな少年よ。　ー
一緒に静かに村へ下りて行こう。そなたと、そこの殿方、母親に、私だ。すでにそこの殿方とは面識があろう。私ともな。コルト・ホラッカーよ、忌まわしいのは誰だ。この世のすべてか。私はこの世の者の一人で、一人の老いた男、戦友が互いに話し合うが如く、そなたと話すために、ここまで来たのだ。　ー　父が息子に語るようにな、　ー」。
「ならず者の息子の許にな」と副校長エッカーブッシュが呟いた。「あたかもこの調子について知らず、この調子が何の役に立つのかも知らないかのようにな。しかしさあ行け。私には全く二重写しに自分が見える。生徒達の前に私は立っていて、若者の良心に訴えている。　ー　然るにまた一方、　ー　私はここベンチに盗賊の頭と一緒に座っていて、あらゆる後悔に感動し、引き込まれている」。
「それでは行こう、コルト・ホラッカー」と牧師は言った。微笑しながらこう考えていた。今このときほど、自分がいかに劣等な弁士であるか、明瞭に自覚したことはない、教区民がしばしば空の教会で自分を説教させて来たのは、きっと自分自身にその責任があることに違いない、と。「行こう、」我が子よ。我々は出来るだけ無駄口を叩かずに、そなたを困窮と悲惨さから救い出し、森から切り拓かれた道路上に導きたい。黄昏時だ。下の方では人々が間もなく明かりを点そう。今一度振り返って見て、それからまた在るが儘の

人々の許へ向かおう。それが最善だ。村は夕食の準備をしている。そなたを待ち伏せてはいない。待っているのは、私の妻に、スケッチ教師のヴィントヴェーベル殿、　ー」。

「それに村長のネッダーマイヤーと小間使いロッテ・アハターハング」とエッカーブッシュ同僚が叫んだ。そして盗賊のホラッカーはクリスティアン・ヴィンクラーの腕にすがった。

「まあ、神様、ロットヘンも」とホラッカー未亡人は叫んだ。

「彼女は奉公先からそなたのために逃げて来たのだ」とエッカーブッシュは呻った。「そなたがまた礼儀正しい、まともな人間になったら、そなたは彼女に対し、そのお礼を述べる権利があろう。牧師館に向かって出発。私自身が今日のうちにも家に戻るであろうかは、神々のみ知ることであろうが」。

「母上、母上、聞かれましたか」とコルトは嗚咽した。

「息子よ、聞きました」。

「牧師殿、本当、まじ本当ですか」。

「本当のことだ。全く救い難いそなたら浮浪者どもだ。彼女にははなはだ驚かされた。しかしそなたが時と共に、長く結構な人生を過ごして、この馬鹿げた娘の人生を容易なものにし、その行路を平坦な穏やかなものにしてから、然る後健気な老人となってこの世を去って欲しいと私は願っておる」。

さて彼らは有り難や、本当にようやくりんりんと鳴くコオロギで一杯の田畑を抜けて下って行った。煙は真っ直ぐにガンゼヴィンケル村の煙突から上げっていた。そして色々な快適な匂いが快適に漂っていた。エッカーブッシュ同僚は何度か、その匂いを大いに楽しんで吸い込んだ。

第十八章

「この靴を即刻、この家から運び出し、村の小川へ、教区民の他の用済みの革製品の許へ投げ入れなさい。間もなく古い長靴や植木鉢で一杯過ぎるほどになるだろうし、私もそこを通り過ぎるたびに、何度か立腹しました。でもこの不吉な襤褸革は、うちのゴミの中でさえも見ていたくない。即刻この家から小川へ運びなさい。三日経ってもあの哀れな娘は静かにベッドの中にいることでしょう」。

つまりビラ・ヴィンクラー夫人は、ロットヘン・アハターハングの到着後、一時間して、今の女中に語りかけていた。勿論、夫人の指示は実行された。両靴、即ち、長靴の惨めな残骸は、夙に村路地の村の小川に、ガンゼヴィンケルの他の用済みの革製品の許に置かれていた。「哀れな娘」はこの両靴を履いて、その遠い道のりを歩いて来たのであった。そしてこの娘は屋根裏部屋に寝ていて、今この時ほどに、今まで、奥ベルリンからの途次でさえ経験ないほどに、一足の靴を、　ー　自らの靴を、いやこの話題の両靴を、思いの中で必要としたことがなかった。

一つの戦場を抜け出すために、一頭の馬を求めること、その代償に一王国を申し出ることは、かなりより悲劇的に聞こえるが、しかしながら場合によっては、人生舞台での自らの悲劇に出演している者にとって、悲劇的である場合よりもましである。つまり一頭の馬の代わりに王国を呈示する方が、　ー　一足の靴のために全世界を呈示するよりましであ

る。[馬をくれ！馬を！代わりにこの國をやるぞ、馬をくれ、シェークスピア『リチャード三世』Ⅴ,4福田恒存訳]

我々は承知している、つまり牧師館の以前の女中は、切迫している事象の息継ぐ間もない報告の印象の中、両目を閉ざしていたこと、そして牧師夫人はその寝室に入って来た時と同じ素早さでその寝室を去ったことを、承知している。両友人のヴィンクラーとエッカーブッシュは、夙に描写された具合に、また優美な、同様に報告された通りに会話をしながら、森へ散策して行ったのであるが、その後ロットヘン・アハターハングは再び、現世のこと、自分の案件のことを考えていた。

「あの人が連れて来られる」と。　ーー

そのとき彼女は垂直に座っていて、彼女の目は再度大きく見開かれていた。しかし何も待機しないという驚くべき落ち着きはまこともはやその目には見られなかった。震えながら、手探りする両手で、その娘は衣服を求めた。その衣服はこの家の女性用洋服掛けの中から集められていたものであった。彼女はよろめきながら、目眩を覚えながら、両足で立った。しかしながら、その哀れな、疲労の蓄積された肢体の中で、少しも衰弱、消耗を感じていなかった。

「あの人が連れて来られる」。　ーー

あの人が連れて来られる。...彼女はその言葉を絶えず口ごもった。その間、彼女は心を震わせ、指を震わせて、服を着た。この言葉を聞くと、我らの中で、全く大衆心理となって、他の人々に混じって、他の人々同様につま先立ちにならない者がいようか。「今あの人が連れて来られる」と。

この叫び声は、怒りや嘲りであれ、愛や憎しみであれ、冗談や真面目であれ、大衆や個々人に対するその効果を失ったことがあろうか。　ー　あの人がとうとう連れて来られるとき、すでに全身全霊で、何らかの具合、どこかで、それに関係しない者があろうか。部隊でさえ、その瞬間には、悲劇であれ、茶番であれ、劣等極まる作品であってさえも、平土間から最上階の天井桟敷に至るまで観客に対するその効果が外れることはめったにない。しかし現実の玄関や通りの角ごとに、教会墓地ごとに、市場や裁判所ごとに、勿論、この声高な呼び声、この囁き声は、全く別様の芝居効果となる。つまり、

「今あの人が連れて来られる」。

人はそのとき、ほとんど椅子にじっとしておれない。鉋台にも、台所の竈にも、あるいは書き物机にもじっとしておれない。賢いソクラテスは、誰かが連れて来られたら、いつも見に出掛けた。カントは早速ペンを置いて、窓辺に近寄って見た。現著者は、いつもこうした折、首を出来るだけ伸ばして、自分の前に立っている頭越しに眺めた。　ー　全く特殊な場合であるロットヘン・アハターハングは、自分のなくした靴のことは構わず、急な階段でも自分の痛んだ足のことを少しも感じずに、両手を両耳に当てて、そっと下って行き、　ー　あの人が連れて来られたとき、　ー　居合わせるようにした。

家の誰も彼女のこっそりした足音に気付かなかった。誰にも見つからず、彼女は玄関の間を越えて行き、突然（「幽霊のように」と後で牧師夫人は言ったが）、園亭の中、両殿方の前に、つまり村長のネッダーマイヤーとスケッチ教師のヴィントヴェーベルの前に立

っていて、ビラ夫人の小声の悲鳴を誘い出し、泣きながら、とても不分明な、途切れ途切れの言葉を吐き出した。

「どうか、どうか、あの人が連れて来られたとき、私もここにいさせてください。どうか、どうか、それが許されなければ、私は死んでしまいます」。

「まあ、あなた、何という恰好です。いや、ロットヘン」と牧師夫人は、この思いがけないけれども、ただ夫人自身のせいで姿を現すことになったやむにやまれぬ女性のことを理解すると、言った。「あなたね、何という姿です。どうしてそんな恰好で人々の前に現れるのです。上の寝室に鏡がないのは、残念なことです。縞梟よりもひどい。即刻また家の中へ入って、ベッドに入りなさい。ネッダーマイヤーさん、笑わないでください。たとえ私の衣装箪笥が案山子になっているのを何千回もご覧になっても、笑わないことです。最愛のヴィントヴェーベル殿、後生です」。

村長は指関節で鼻を擦って、司牧夫人の前で、そしてその言葉を聞いて敢えて笑う場合のように、実際ただ笑った、即ち彼は露骨ににんまりした。この悲惨な状況に対する正しい解決を見いだしたのは、またしてもヴィントヴェーベル同僚で、放恣に高く笑い声を上げていた。

「それでは、この娘が、　ー　愛しい子よ、　ー　小間使いのロッテ・アハターハングですか」と叫んで、段階的にこの上ない陽気さから、この上ない真剣さへ移行していた。「これがかの有名なロットヘンですか。さても、さても、これは荒野の我が友、獲物に全くお似合いだ。私には　ー　この娘は、とても美しく、めかしている。いや、愛しい子、我が命よ、我が可愛い娘、そなたは勿論、主演女優、どんな状況下でも　ー　居合わせることになる。ここでそなたよりも大きな権利を有する者は誰もいない。それに牧師夫人もあの人が牧師殿と一緒に現れたら、そなたが居合わせることに少しも異存はない。ロットヘン、しかしあの人は連れて来られるのではない。私は、あの人を連れて来る楽しみを断念したのだ。彼は迎えられるのだ。それも牧師殿によって。だから、大胆に我らと一緒に生垣越しに覗いて見なさい。ネッダーマイヤーさん、いつか我々の方が何らかの具合で連れて来られる立場になるか、分からないものです。そのときでもヘートヴィヒ[妻]が居合わせたら、慰めでしょう、親愛なるビラ夫人」。

「それで少なくともあなた用に、一足の古いスリッパを取って来ましょう」とガンゼヴィンケルの牧師夫人は叫んだ、「ロッテ、それが私の運命に違いないわ。あなたが私の鼻先で裸足で現れたのは、初めてではありませんよ。私の衣装箪笥の上には、一足の夫の古いスリッパがあります」。

「しかし、まずは万歳だ。いや、森から、正しく、凱旋行列がやって来る」と村長が、野道の高台の方を示しながら叫んだ。「副校長殿が先に旗を持っている、　ー　いや、この折にはそれが相応しい。ひょっとしたら私は村でイルミネーションを準備するよう言いましょうか」。善良なるクリスティアンの履きつぶされたスリッパは、差し当たりもはや言及されなかった。

畑の高台にはまず同僚エッカーブッシュが出現した。村長が凱旋の旗と呼んだのは、単に帽子であって、これを同僚エッカーブッシュは自分の杖の握りの上、高く空中に上げて、この遠征の最終的、完全な成功のシグナルとしていた。

副校長の後を牧師が、罪人ホラッカーの腕を掴んで、歩いていて、この行列の殿[しん

がり]は、ホラッカー未亡人であった。鋭く人の影が、灰青色の、その方向に静かに澄んだ夕方の空に浮かび上がった。

ヴィントヴェーベル同僚も再び空中に帽子を振った。

「万歳」。

「私は、何と言ったらいいか、教えて」と牧師夫人は語った。全く、意志もなく、遠方の出来事に没入していた。

「しかし私は、それでも、おぞましい状況と呼びたい」とネッダーマイヤーは呟いた。しかしロットヘン・アハターハングは、　ー　またしても飛び出した、それも素早くのことで、あたかも「奥ベルリン」からの遠い、邪悪な道はこれまで歩いたことがないかのようであった。

「彼女は　ー　自由にさせなさい」とヴィントヴェーベルは、ビラ・ヴィンクラー夫人が娘のひらひらするスカートを掴もうとしているその手を握って、言った。

野道で牧師は、自分の教区のろくでなしを解放し、副校長と一緒に立ち止まっていた。一方コルトは駆けていた。ホラッカー未亡人は、耕地境界石の一つに腰掛けて、両手の間に頭を保っていた。このような昔からの、生涯にわたって植え付けられた、苦難の末の習慣は、簡単に忘れるものではない。このような場合、徹底した人間の教育者や道徳家であってさえも、自分自身に対し教育し、道徳を施すのはしばしば全く空しいものである。

粘土と陶土のこの世界で、炎と明かりの周りに何と優しく美しい者がいることか。五分間、人々は皆、この浮浪者カップルに時間を与え、互いに挨拶させた。老ヴィンクラーと老エッカーブッシュが二人を見守るときの微笑に比べられるような芸術作品はこの世には少ない。我々は単に手の中で育って来るペンに従って、描写することにしよう。

「まあ、　ー　あなた」とロットヘン・アハターハングは嗚咽した。

「いや、分かるだろう、　ー　そなたか」と盗賊の頭ホラッカーは吠えた。それから二人は完全に言葉を言い尽くしたように見えた。しかし、我々は、あたかも時の経過の中で、多くの言葉を無駄に、幾多の場所で消費して来たかのような憂わしい思いに襲われた。

いや、諸君、見給え、...我らの唯一の慰めは、いまやすべての用心、配慮は無益で、村中が突然、ホラッカーの再度の出現を承知していて、我々は自分達の個人的感情を抱えたまま、誰にも気付かれずに、多くの人々の感情の中に侵入出来るという点にあった。しかしガンゼヴィンケルの人々を仕事仕舞いの休みから、呼び声をかけて、出て来るようにしたのは誰の仕業であったのか。

「あの人は捕まえられた。あの人は連れて来られる。ホラッカーは捕まえられた、ホラッカーがまた出現した」。

勿論誰も若干遅くの問い合わせに、情報を与えることは出来なかったであろう。沼地に一撃があると、一気に蛙一同が沈黙する。堆肥に一個石を投げると、雀どもが甲高く鳴いて飛び立つものである。

いわばガンゼヴィンケルの全員がまた外に出て来た。それに人々と一緒に家畜も出て来た。家々から老いも若きも飛び出し、教区のすべての犬どもが我を忘れて、家畜小屋では牛が吠え、どんなに疲れた農耕馬も頭を上げた。鵞鳥や家鴨ががあがあ、しゅっしゅっと鳴いた。農家の雄鶏は、同じように皆の興奮に加わり、それぞれすでにベッドに就寝していた女将が鶏小屋へ下りて来て、一体何が起きたのか調べるよう促していた。

「万歳、彼奴がいる。それにロットヘン・アハターハング、お手本の王女様が、その上わざわざ、全く自発的に駆け付けて来たのだ。これが何より素晴らしい。...牧師館にこの御両人は座っている。ー　牧師夫人が、これはまこと心温まると話された。牧師殿のことは、我々は承知だ。しかし有り難や、我らのネッダーマイヤーもいて、この件を協議している。明日になったら、あの者らは多分全く別のところにいるであろう。ようやくまたあの者達の騒ぎが収まることになろう」。

「牧師館に彼はいます、いとも尊い殿方」と楽長ベクセンダールは、わざとらしい勿体ぶりと丁重さで、村へ侵入して来た検察官の馬車扉に踏み込んで来て、言った。「私は彼を若い頃から知っています。彼は私の授業を受けました。彼が副校長のエッカーブッシュ殿とスケッチ教師のヴィントヴェーベルを撲殺したというのは、単なるデマです。私はこちらで教師をして五十年です、尊敬する殿方。私は皆を知っています、全員、　ー　皆を知っています」。

「牧師館へ」と友のヴェーデキントは御者に向かって叫んだ。そして若い司法の同行者に向かって、こう語った。

「貴方はガンゼヴィンケルの老ヴィンクラーをまだご存じないのか。いや、彼との交誼は楽しいものだ。将来彼との職務上や職務外での縁を遠ざけないよう心掛けたらいい。私も同じように長いことこの地方で役人をしていて、人々皆を知っている。　ー　いや、私も全員、　ー　皆を知っている。ホラッカーにしても、クリシャン・ヴィンクラーにしても、その中の劣等な者なんかではない。...それに友のエッカーブッシュだ。それに臆病兎のスケッチ教師、　ー　何という名前だったか、　ー　友のヴィントヴェーベルだ。...全く殊の他、心温まる夕べとなろう。私の言葉を信じ給え、親愛なる友よ。私の職務では、この世のこのような旅行で、健気なフォスとか、老ゲレルト、グライム親父、ヴァントベックの使者[マティアス・クラウディウス]に至ることはない。ナーゲルマン同僚、貴方は勿論まだ若く、ハイネに夢中だ。それでこのような職務旅行にすっかり対処できるようになるまでには、まだ数年の経験が必要となろう」。

第十九章

大体において、人類は世界史に対し、立派な主婦がその家庭内の出来事に対処するように振る舞っている。祝日の鐘が鳴り、ケーキがテーブルに置かれ、あるいは棺が黒い台架に置かれると、ようやく主婦の中でパトスが点火される。そして発進する。しかしそれまで主婦はとても非情熱的に、身を粉にして働き、このような祝日が欠けるのであれば、この不安な実存の中、耐えられないことであろう。勿論個々人にとっても、人生の偉大な時と危機に対し、準備している間に、時折パトスが生じて来る。検察官の到着の後、四十五分間、村によろよろとやって来る別の馬車を更に一瞥して見よう。フリッケが御者席から下に屈んで、鞭の柄で、ガンゼヴィンケルの黄昏の最初の明かりの方を示して以来、ヘートヴィヒ・ヴィントヴェーベル夫人は我を忘れていた。すっかり自分の心の動揺に圧倒されて、彼女はエッカーブッシュ副校長夫人の両腕の中にいた。副校長夫人は、同様に最高度に興奮して、自分のパトスを同様に発散していたが、しかしそれは全く夫人に特有のパトスであった。

「ノイバウアーさん、貴方は汗をかかれています、私もそうです。同僚殿、どうぞ更に汗をかいてください。来年の今日まで、不安の汗を出して頂きとう存じます。ここのこの娘は気を失って、私の首にかじりついています。余りといえば余りです。ヘートヴィヒよ、ヘートヴィヒ。後五分間しっかりなさい。五分したらあの二人の軽薄な浮浪者の頭に文句を言えます。有り難いことに、私の挨拶は諳んじています。ノイバウアーさん、それはお任せください。貴方の旅を私が暑苦しいものにしたのであれば、今度は私の老カティリナ[ローマの反逆者、キケロによって摘発された]に対し牧師館庭園の園亭でそれを味わって貰いましょう。これからキケロを教える度に、夫は私のこと、今晩のことを思い出すことでしょう」。

「私もそうだろう」と不幸な高等学校教諭、旅の同行者は口ごもった、「誰もが破滅する。しかしそれは各自に適した遣り方、流儀であることが望ましい。私がこの吸血鬼、この毒殺女の手にかかって、破滅するのは、余りにむごい、神々の嘲笑だ、運命の女神の罠だ」。

しかしより大きな声で、はなはだ内気に彼は語った。

「大事な同僚夫人、園亭ではどうぞ言い過ぎないようお願いします。どうぞどの言葉も私の誠意からのようにお話しください」。

「私の話しのことですか。愚かなことを。何も私は貴方の誠意からのように話しません。私は私の舌の回る通り、話します。　ー　待って、フリッケ。ちょっとここで止まりなさい。ヘートヴィヒ、頭を出して見てご覧なさい。製材所の厚板の上にガンゼヴィンケル人がようやく二人座っています。おーい、お二人さん、こちらへいらっしゃい。今日こちらでホラッカーに関し、何が起きたか、お二人のうちどちらかご存じではありませんか」。活性剤夫人の鋭い、異端審問官風な呼びかけが、製材所の樫の幹から不意になされて、少し躊躇った後、本当に黄昏の中、馬車まで近寄って来たのは、ガンゼヴィンケル[鵞鳥の隅]の愛するカップルであった。

「いや、何のご用です。私どもを呼んだのですか」。

「ホラッカーのことはどうなっているのか、尋ねているのです」。

「おや、ホラッカーのことですか。...ご夫人、あの人は捕らえられています、座っています」。

「座っているとは」。

「はい、牧師館のキッチンです。あのロットヘン・アハターハングも奥ベルリンから突然また出て来たことは、貴女もご存じでしょうか。この娘も牧師夫人のキッチンにいます」。

「それで牧師殿と牧師夫人はどうです。それにあの殿方らは、　ー　町からの」。

「皆さん、庭の生垣の園亭のランプの許に座っています。そこで楽しまれています」。

「皆生きているのですか」。

「かなり畑を越えて遠くまで彼らの声が聞こえます。貴女もその関係者ですか」。

「多少ね」とエッカーブッシュ同僚夫人は語った、「フリッケ、出発。出来るだけ物静かに進めるのよ。不意打ちするつもりなら、最後まで不意打ちになるよう徹底しなければいけません。それで、ヘートヴィヒ、いかが」。

小柄な夫人は当初答えなかった。彼女は全く小声で、善良な老女友達の胸元で嗚咽していたが、とうとう一気に起き上がり、真っ直ぐに座って、長く深い溜め息を吐いて、叫ん

だ。

「いや、ひどい話し。でも　ー　とても幸せ過ぎます。...」

しばらく間を置いて、彼女は付け加えた。

「でもヴィクトルにはこのことを分かって貰います」。

「おや、ご覧なさい、可愛い娘!?　私がすでに言った通りでしょう。カティリナ、ドレホド長ク我ラノ忍耐ヲ試スッテンダ。貴女は、いいこと、今日よりもっと落ち着いて、結婚生活での忍耐を学ばなければなりませんよ。でも半世紀、私どものギムナジウム生活を続けたら、貴女も次第にそのコツを覚えて、古代ギリシア人やローマ人、その他の古典作家を引用出来るようになります。これはまことに遺憾ながら、若い娘時分に想像するよりも簡単なことなのです。そこで、貴方、そこの最前列の若い古典作家殿」。

最前列の若い古典作家、『一八六六年狂想詩』作者、高等学校教諭にして哲学博士ノイバウアーは同様に一層姿勢を伸ばして腰掛けていた。胸の上で両腕を組んで、次のようなことを考えていた。

おぞましい。まことに滑稽におぞましい。しかしこの恐るべき午後も、私の揺り籠の許で予言され、歌われていた。この没趣味の両輩と一緒に閉じ込められて、この出しゃばり女どもと結婚生活絶望の一切と膝突き合わせて、私は十分に動機付けられながらも自殺を敢行しないで来た。賢い男はこの空騒ぎや泣き言から、無傷デ、滑ラカニ、上手ク逃れる[ホラティウス、『諷刺』Ⅱ,7,86]しかし一人の女が私の心を捉えてみるがいい。一人の詩人にして情緒の消息通の私を。しかし結婚とはならない。　ー　決して、　ー　絶対に。このように運命はその召命者達を日々の瑣事を通じて認識へ導く。完全に愛敬ある夫というのは、自らの利己心全体をその妻の許で集中させる者のみであろう。それで現実の詩人は未だかつて全面的に愛敬ある夫となったことはなく、通常全くその逆である。いや、ミューズの女神達よ、これからも汝らの息子を守り給え。そこの遣り手婆、町の取り持ち女、これが今一度私に対して、暗示や仄めかし、提案、耳打ちをしてみろ。まこと将来は、微笑して断るなんてことでは済まなくなるぞ。素っ気なく私はその下らぬ女性種族についての見解を述べることにしよう。　ー　かくて私は、いずれにせよ、この二羽の鵞鳥によってガンゼヴィンケルまで拉致されたが、全く利点がなかったわけでもなかろう。

その間、フリッケは更に平和な村の中を進んで行った。そして今や村の小川を抜け、それも哀れな靴の上を通り過ぎた。ロットヘン・アハターハングが哀れな道中、履いて来た靴である。更に一突き、がたがた喘ぐ音がし、黄緑色号はガンゼヴィンケルの牧師館の前で止まった。　ー　ヘートヴィヒ・ヴィントヴェーベル夫人は、すでに長いこと、馬車の扉の取っ手を震える手で握っていた。両駄馬が静止に導かれる前に、夫人は扉を開いて、真っ先に飛び下りようとしたが、夫人は年上の同僚夫人にスカートを掴まれて、引き戻された。

「落ち着いて、子供じゃないのだから。あの方がいます。分かるでしょう、まずは同僚殿に下りて頂きます。敏捷な、愛想の良い方を名誉の騎士として手許に有するのは、いつも重宝なものです。ノイバウアーさん、用心なさって。この小柄な女性をお願いします。...大地だわ。フリッケ、出来るだけ静かに、居酒屋へこっそりと馬車で向かいなさい。あなた方は、いいですか、後生ですから、ヘートヴィヒ、お芝居を台無しにしないよう、そっと、そっと、家の中へ向かいます。つま先立って、　ー　ノイバウアーさん、お願いです、

つま先立って、あの人らに世界の没落を教えてやるのですから。いや、私はあの人に活性剤を投与したくなった。同僚殿、貴方は全く素敵な韻文や詩を作るのでしょう。ですから、お願いです。つま先立って歩いて、私の言うことを聞いて、こっそりと、復讐の到来の時のように、歩いてください。後で貴方が詩や韻文にきちんと仕上げられるように。一同は全員、園亭に整然と座っていて、私どものことは一切考えていません。あの人らが、私どもを結局玄関で早くも察知したら、残念なことです。こっそりと、いいですか、こっそりと、この不面目への仕返しと、少なくとも部分的に旅の費用も取り戻したいものです。あの人らは座っています。やれやれです。ランプの許で、私には我が御老体の顔が分かります。愛する天よ、今の今までまこと私は気付かなかった、自分の感情というそのようなものが今やこれほど完全にこの世に存在しているなんて」。

「私もそうです、いや、神様、私は幸せすぎる」。

「良い子、あなたの愛する魂をただわずか、唯一の一瞬間だけ確かに保つのです。あなたの心の中でのことを、長々と述べる必要はありません。いや、私どもはほとんどあの人らを手中にしています。これからも、有り難や、あの人らは人生を苦いものにしてくれましょう。ノイバウアーさん、つま先立って、それから雷鳴のようにあの人らの頭上で轟きます」。

「私はすべて貴女と感情を分かち合っていて、大いに楽しんで、貴女の使嗾に従っているとお分かりでしょう」とノイバウアー同僚は微笑した。それは、有り難や、また彼の馴染みの微笑であった。このような微笑家は必要に違いない。この微笑がガンゼヴィンケルのこの旅ですっかり消滅して、二度とまた、その知人一同の中で、彼を抗い難く、魅力的で快適な者にすることがなくなったら、実際まことに寂しいことであったろう。

さて彼らは実際、ガンゼヴィンケルの牧師館の廊下を忍び足で進んだ。両レディーが前方で、同僚殿が後方であった。彼らは牧師館の中を聞きとがめられず、見とがめられず抜けて行った。誰も彼らを出迎えに飛び出て来ず、我々は　ー　彼らを忍び足で行かせ、そして我々も、園亭の他の人々同様に、彼らの不意打ちを受けるのを最良だと見なすことにしよう。これが正しい成り行きであると、我々は皆確信していると信じたい。

彼は、つまりホラッカーは、牧師館庭園の園亭の多様なグループの中に、いわばまた人々の中に連れて来られた。人々皆が彼を取り囲んだ。そして彼はほとんど今一度、もう一度倒された。しかし主演人物、　ー　つまりロットヘンは彼から引き離されなかった。彼女は彼をしっかりと真っ直ぐに抱き締め、村長のネッダーマイヤーとビラ夫人に向かい合っていた。

「恐ろしいこと、こんな姿になっているなんて、思いもしなかった」と牧師夫人は金切り声を上げて、頭上で両手を打ち合わせた。「この子は、この子は、あなたの姿を見たら、石ころの心でも憐れむことでしょう。クリスティアン、お願いです、村長殿、　ー　貴方、エッカーブッシュ考えられますか」。

「この世では色々なことが可能です。ただ我らは隔離されていて、必ずしもこのようなことを経験するとは限りません」と賢明な老エッカーブッシュは言った。「まあ、ヴィントヴェーベルにお尋ねになってください。彼は広く遍歴の経験があります」。

「彼はすぐベッドに就く必要があります。差し当たり一人使者を出して、ドクトルを呼びましょう。そしてあなた、ロッテは、これも驚きだけど、もうまた両足で立っているけ

ど、早速台所へ行って、火を新たに熾して、出来る限り、お湯を沸かしなさい。待って、むしろすぐに洗濯室で火を熾しましょう。台所ではすぐ鶏スープの用意をして貰いましょう。すぐ三羽喉を絞めさせなさい。この様は本当に木石[ステッキ]をも泣かせます。クリスティアン、私はこれから生涯、教会では放蕩息子の喩えの時に、この子の他は何も思い出さないことでしょう」。

「彼は町の当局へ呼び出されるまで、消防小屋に寝泊まりさせるのが最も安全だろう」と村長は言った。しかし彼、ネッダーマイヤー村長は、　ー　脇へ押し退かされた。

「消防小屋ですか。...貴方がご自分で彼を森から連れて来たのであれば、それで結構でしょう。消防小屋ですか。差し当たり私は彼をここ牧師館に留めます。消防小屋なんて。いや、新年にこの件では更に話し合いましょう。でも今はどうぞまたお掛けになってください、村長殿。そして差し当たり貴方には何も関係ないことを気にかけないでください。ホラッカーの女将さん、お掛けになって、女将さんは母親でしょう。これがこの状況の下、どういうことか、私は分かっています。皆さん、そんなに押さないで。ロッテ、しっかりなさい。クリスティアン、ロッテに言い聞かせて」。

さてクリスティアン・ヴィンクラーはこのことを出来る限り試みていて、エッカーブッシュとヴィントヴェーベルも幾多の立派な言葉を添えていた。しかし十五分間ほど単に混乱した騒音の中への語りかけが続いていた。勿論、家の仲間達は最初からこれらの出来事の一切に衷心から関与して来ていた。それから、　ーー　申し上げたように村中が侵入して来た。

「ホラッカーがまた現れた」。

生垣越しに頭が並んで覗かれた。教区の参事官がやって来て、ベクセンダールが現れた。ロットヘン・アハターハングは嗚咽したが、理由がないわけではなかった。

「いや、コルト、愛するコルト。あの人らが私どもを殺すのであれば、私ども二人を殺すことでしょう。コルト、恥ずかしく思うことはありません。私も思わない。私どもを殺せばいい。あなたのことが新聞で読み上げられて、私もそのためはるばるやって来たのです。コルト、牧師殿と牧師夫人もこの話しを知っています」。

「ロッテ、おまえは阿呆な女だとしか、私の目には見えない、　－」。

「それに立派な娘だ」とガンゼヴィンケルの牧師が口を挿んだ。「それで今、親愛なるネッダーマイヤーさん、我ら両人のうち、どちらがまず、我らの隣人や友人にこう請け合えることだろう、即ち、人々は今差し当たりここで目にすべきことをすべて目撃したのであって、　ー　我らのホラッカーは実際また我らの許に戻って来たのであり、貴方と私は確かに責任をもって保証するものである、つまり彼は自らと教区民にとって利点を有しないわけではなく、　ー　いや、利点を有しないわけではなく、　－」。

「このような気分転換を我らの牧歌的生活にもたらしたのであります」と副校長エッカーブッシュは叫んだ、「済まん、クリシャン、　ー　話す手間は要りません、村長殿。私はようやくまた一言喋りたくなった。ご夫人、貴女の優しい御心のままに、この盗賊の頭、やくざなリナルディーニと彼のローザを静かにキッチンに連れて行ってください。ホラッカー未亡人も一緒にです。　ー　この怪物に全く物静かに餌をやり、その体を洗い、洗髪されたい。　ー　二，三の好意的言葉、ここ公衆の前で、村の前、周りの世界の前で語るべき言葉を私が代弁しよう。ヴィントヴェーベルよ、私をベンチの上に乗せて、人々に私

が見えるよう加勢してくれ」。

「若輩の私は今日この世にはお呼びでないですな」とネッダーマイヤー呟いた。

「親愛なるエッカーブッシュ、君の希望ならば」と牧師は少しばかり心配して言った、「話すがいい」。

「いや、エッカーブッシュ、話してください。昔からの友、どうぞあなたの誠意を語ってください。そのお心に私は従いましょう」と牧師夫人は叫んで、盗賊と、これと共にロットヘンと未亡人、それに牧師館の下男、下女を牧師館の方へ連れて行った。

「テーブルに大胆に上がって、明確に話してください、エッカーブッシュ」と夫人は庭に面するドアの階段からもう一度振り返って叫んだ。　ー　エッカーブッシュはすでにテーブルの上に立っていて、本当に分かりやすく集まったガンゼヴィンケルの人々に話しかけた。「摂理が自らその日に彼を我らの許に遣わしたのだ」と後に度々ガンゼヴィンケルの牧師館では話題になった。「彼は心得ている」。　ー　「上層部で人々が彼に対し、とても敵意を抱いているというのは、根拠がないこととは考えられない」と老クリシャンは頭を振りながら、微笑して言い添える習慣であった。「つまり彼はその気になれば、話す術を心得ているということ、これは良く知られていることだ」。

副校長エッカーブッシュ殿が、色々な人間や動物の種族の物真似をして、その種族の苦しみや喜びを表現する才能に恵まれていること、このことは我々にも同様に知られている。今この緊張に満ちた瞬間ほどに、彼が時を告げる雄鶏に似ていたことは、これまでなかった。

「ガンゼヴィンケルの諸君」と彼は時を告げた、「ガンゼヴィンケルの御臨席の諸君。人類の揺籃の地、カシミールでは、　ー　いや、これは少しばかり離れすぎていて、少しばかり話しが散漫になろう。というのは、私は単に話すために、諸君に話しかけているのではなく、諸君に傾聴され、出来れば理解して貰うために話しているからである。諸君は皆、諸君が鼻をかんだり、鼻をかむのを手伝って貰う限り、明敏な人間であることを、世間は承知している。それでカシミールに用はない。従って、親愛なる友人にして旧来の仲の良い知人よ、私に好意を見せて、少なくとも五分間、口を閉ざしていて欲しい。とりわけ余り押し合わないことだ。そこの生垣の向こう側の諸君は、雄叫びを止めなさい。それから少なくともちょっとの間、乙女らは静かにしなさい。金切り声やクスクス笑いには誰も我慢できない。ベクセンダールはどこかな」。

「ここです、副校長エッカーブッシュ殿」と群衆の中から尋ねられた男が声を上げた。「何のご用でしょう」。

「同僚殿、どうぞこちらへ出て来られたい。　ー　どうぞこちらのテーブルの側に寄られたい。椅子の上には、教育学的配慮から、上がらせるつもりはない。貴方、即ち、数世代にわたって村の裏面を知っていて、教育して来た貴方と是非とも今この時、私は対面したいと念願している。親愛なる同僚殿、私が貴方を指名して、ここの列席者達に、諸君はこの人のことを知っているか尋ねることを許されたい。...私は周りの顔を見るに、これらの顔は『はい』と承諾を述べている。黄昏が深まって行く中、しかし一人以上の者が、両肩を竦めて、手を　ー　背中の方に伸ばしているのが見えるが、しかしこれは『知らない』を意味するものではないと思う。

ガンゼヴィンケルの諸君。ここ諸君らの立派な学識ある教師殿、ここ我が価値ある愛す

る同僚の鼻先で、つまり諸君らの、的確な、その上役の当局によっていとも高く評価され、諸君らによっては、残念ながら長いこと十分には評価されていない楽長のベクセンダールの鼻先で、本当に、途方もなく、　ー　勝手に、我が友にして、諸君らの逃亡者、ホラッカーよりも自分はすぐれていると言えますかな。ここベクセンダールの鼻先で、諸君は本当に、道化師、与太者、悪漢、ならず者について話す勇気がありますかな。親愛なるベクセンダール、話されたい」。

「我がいとも尊い副校長殿、私が述べるべきでありましたら、　ー」。

「同僚殿、一言も言わなくてよろしい。貴方が仰有りたいことは承知しています。それで十分です。今は勿論夕方です。暗さが募って来ます。しかし私もまことしょっちゅう、日中に、明るく澄んだ日中に、日曜日にまた平日に、ここガンゼヴィンケルにリフレッシュに出掛けて来ました。私はそのたびにリフレッシュしました。私はここ黄昏の中でも、周囲の顔を皆、存じています。誠実な自然らしさ、実直な率直心、気取らぬ名誉心、根源的質朴さ、生来の器用さ、それにわけても無邪気さと徳操とがとりわけ私に対し微笑みかけてくれます。そして、我が尊い同僚ベクセンダールよ、　ー　しばしば、やむを得ずであるが、　ー　致し方なくて、　ー　その中に斬りかかるとき、私は貴方のことを思い出したものだ、　ー　貴方のことを思い出して力を得て、そこから勇気を貰ったのだ。

いや、ホラッカーと限りなき思いだ[ゲーテ、『限りなきシェークスピア』]。ここに私は立っていて、諸君に今一度好意的にお尋ねする。諸君は老エッカーブッシュをご存じか。諸君は、いそいそと何ら騒がず、各自順次忍び戻るご意向であるか、それとも本当に私がより明確に述べるようお望みか。例えばそこでシャーパー君はにやりと笑っているのが見える。いや、私は木材取引は一体どのようなものかより正確に述べなければならんのか。こんな年寄りの町の学校教師でもマルター[ジャガイモの単位]とクラフター[木材の単位]の違いは承知している、と。　ー　まあ、家へ帰りんしゃい。...

諸君よ、諸君。私が文芸に造詣が深いであろうことは、私の眼鏡を見れば分かろう。しかし村の噂話にしても、これも私は良く承知している。私の生涯を通じて、諸君の許へ散策に出掛けたことは無駄なことではない。諸君は一人の学校教師の機嫌を損ねたら、いかなる事になるか、ご存じかな。そこに我が同僚、ベクセンダールが立っている。同僚殿、ご意見をどうぞ」。

「私が申し上げてよろしいのであれば、いとも尊い、　－」

「忌憚なく申せ。さすれば、完全に正しい。それに強調することだ。私も完全に貴方と同意見だ。その通り、我が諸君よ。私も即刻このテーブルから下りて、一つならず村の噂話を書いて、それも法と正義と公正さに基づいて、強調して、一つならず諸君の噂話を書き上げましょうぞ。...いやはや、グックアプおばん、おまえさんをまた拝顔しているのかな。光栄至極の至りかな。さて、私の妻もおまえさんによろしくと申し上げている。おまえさんが、また老いぼれのボロ鵞鳥を売りつけたいのであれば、おまえさんは、　ー　いや、行ってしまったか。いや、今日でもまだ分からない、あのおばんが、無数の数の籾殻、麩[ふすま]を、ヴァンダル人国王[Genserich,390頃-477、鵞鳥の響き]のこの不幸な粗末な骸骨の胃の中に、体重を増やさんと、詰め込む仕掛けをどのように始めたのか。いや、我々はまた、有り難や、ホラッカーを得た。しかしこの募って行く暗がりの中でも、あちらこちらにまだ残念ながら消え失せない者がいる。然るに私は村長の、我が旧友ネッダーマイヤ

ー殿に質問する関連事項に達しているわけで、この村長はまさに耳の後ろをかいていて、私に同意を表されているのであるが、即ち質問というのは、ここのガンゼヴィンケルの彼の教区民の中で、いつか天使として飛び立つであろう者について、確信を持って言えるものは誰かという質問になります。ネッダーマイヤー殿、時間を取って考えられたい。自らも勘定に入れることをお忘れにならないようにされたい」。

「副校長殿、私の生涯において、　－」。

「今ほど、貴方にとって、明確になった時はないのではありませんか、つまり統計学は全く特殊な、全く奇妙な学問である、と。ヴィントヴェーベルよ、牧師殿が貴殿の背後に立っている、　ー　脇に退いて、我が旧友クリシャン・ヴィンクラーを私に近寄らせてくれ、　ーー」。

「エッカーブッシュ、何のことだ」　ー　とガンゼヴィンケルの牧師は叫んだ、しかしやはり近寄らなかった。

「私の言いたいことは、ただ君の教区民にとって、夜のこの暗さのために、君に預けられた教区信者の恥じ入った頬が次第に君の視線から逃れて行っているということだ。ガンゼヴィンケルの諸君、諸君の中で今やこっそりと逃げ去りたい者は、さっさとそうしろ。というのはこれから諸君の中での唯一の天使について、一言話すつもりだからだ。　ーいや、彼すでに去って行く。多分台所を覗いて、一体ホラッカーはどのような扱いを受けているのか、覗きたいのであろう。夜は余りに暗過ぎず、諸君の恥辱を、ガンゼヴィンケルのホラッカーの三倍悪太郎の諸君よ、覆い隠すほどではない。...有り難や、あちらさんも同様に去って行った。　ー　さて我々は、身内ばかりだ。誰ももはや強制されることはない。従って、　ー　今一度諸君に話しを戻そう。何だと。諸君は、諸君の地上的幸せと、永遠の幸せのために働くという[牧師の]喜びを、つまり自分への称賛を聞きたくないが故に、我らに背を向けたような人間の喜びを少しばかり台無しにしたいのか。諸君は、牧師が諸君の下で働いて過ごさなければならなかった生涯を、これまで経験した以上に辛いものにしたいのか。牧師は、彼の健気な心に従って、自分と諸君の冷酷な罪人心情との間に、拝金欲望を今後侵入させたくないからと言って、諸君は、諸君の古い書類や特権を彼に突き付けているのか。諸君は、彼の善良な妻の部屋、つまり諸君の、神によって遣わされた司牧夫人の部屋を覗いて、諸君の根性を更に台無しにするのか。同僚ベクセンダールよ、任せ給え。私は貴方の新年の歌の手伝いをしよう。テーブルの周りの大事な者達よ、心配するな、大晦日に私がやって来て、一緒に祝賀する。一片の書類を持って来て、諸君と我が旧友クリシャン・ヴィンクラーの間に置くことはしない。私は例えば神学も更に専攻しなかっただろうか。そして私が、老副校長エッカーブッシュが、ここガンゼヴィンケルの牧師になるかどうかは、一本の糸に掛かっていたことではないか。まこと私は諸君に告げる。他の者ならば、時に、頭上の太陽と共に、草叢、クローバ、麝香草の中を転がることに憧れるように、私はこの機会に、まことに　ー　願ってもなく入りたいのは、...いや、奴さんらが去って行く。...皆だ。彼らは皆、何故こっそり忍び去るのか、まことに良く承知しているのだ。...ネッダーマイヤーさん、貴方も我らの許から去りたいですかな」。

「貴方が私をもう必要としていないと、私は確信していますのに、私はまだ残ることでしょうか、こん畜生」と村長は呟いた、「副校長殿、勿論貴方は有能だ。誰もが認めましょう。しかし実際、少なくとも今ホラッカーは立派な手許にありますから、我らは残余の

ことは成り行きに任せて良いと考えます。私の意見はこうだからです。つまり、どの立場であれ、時間をかけて、まずは法律家とそれから自らの良心と相談することなのです」。

彼は去って、村の残りの人々を連れて行った。

「貴方は完全に私の思いの丈を[誠意を]話されました、いとも尊い副校長殿」と楽長ベクセンダールは語った。「貴方は実際、人間はいかなる者で、主なる神、人間の創造主は、人間に対し何と辛抱をしなければならないか、ご存じです。どこで復讐心が馬鹿馬鹿しさに移行するか、その要点をご存じです。ただ二点私には残念です」。

「一体どの二点です、楽長殿」とヴィントヴェーベル同僚が叫んだ。

「第一に、旦那様、我々がそもそも古いゴミを掻き回したという点で、第二に私の妻は居合わせず、これを聞き逃しました。妻も我を忘れたことでしょう」。

「我らの女房どもも、今この時、同じように我を忘れるであろうか、ヴィントヴェーベル、貴方の意見は」とエッカーブッシュは尋ねた。「ちなみに実際、私の活性剤妻もここにいて、　ー　これを聞いて貰いたかったな」。

「どのようにして家に帰りますか。何時に帰宅となりましょう。私の哀れな妻に何と言ったものだろう」と若い方の夫は然るべき不安を覚えて呟いた。

「むしろまずご自分の良心に尋ねられて、その後、　ー　私に尋ねられたい」と年上の、鉄面皮の悪漢はにやりと笑った。この　ー　一言で言うと、この「エッカーブッシュ」は、残念ながら「町中が正しく査定している」人で、丁度彼の実存の、いわば衷心から願われたベターハーフならぬ六分の五実権妻が、時折そう主張していたようなものである。

しかしこの時牧師が、白い閉ざされたガラスの覆いの下の庭園ランプを手に、再び牧師館から出て来た。彼は愛らしい夏の夕べを照らし出して、自分の庭園が空になっていて、友のエッカーブッシュと同僚のヴィントヴェーベル、それに彼の楽長のみが、まだ庭園に残っているのを見て、その驚きを隠さなかった。彼は四方八方を照らして、それから眉毛をつり上げて、彼の友エッカーブッシュの好意的、しかし若干しかめた顔を照らし出した。躊躇いながら彼は最後にランプをテーブルに置いた。そして最後に言った。

「我らのホラッカーは相変わらずがつがつ食っている。私は彼のむさぼる様を見ていて、見飽きなかった。しかしここで何があったのだ、親愛なるベクセンダール、　ー　エッカーブッシュ、案ずるに、　－」。

「案ずることはありません、牧師殿」と楽長は叫んだ、「いとも尊い副校長殿が貴方に言及されたとき、貴方がいらっしゃらなかったのはただ残念です。牧師夫人も拝聴されていたら喜ばれたことと私は確信しています。人々は皆全く静かに家へ帰りました。副校長殿が貴方とそれに私、並びに四季支払金について必然的なことを述べられた後のことです。実際、教区民もいよいよ肝腎なことに注意が向けられる潮時です」。

「私は全く単純に、クリシャン、君のことをあり得ないほどに激賞して、君の雄羊の群れ、君のガンゼヴィンケルの百姓の屑どもを、この上ない鈍感さと暗示してやって、私が君の立場であれば、きっと牧神のフルートを別のテンポで吹くことになるぞと示したのだ。君にも分かるだろうが、私の話しの言葉は効果があった。君の奥さんが居合わせなかったのは、私自身にとっても残念だ」。

牧師はますます不安げに、頭蓋の上で帽子を前後に揺すった。

「エッカーブッシュよ、君は私のことで料理をかき混ぜすぎはしなかったと、確信を持

って言えるかい。私は窒息して、引退に追い込まれることはない具合に」。

副校長は何か「オルガン音楽の米の粥」といったことを呟いた。そして今や突然ベクセンダールも、重々しく真剣な沈思の中から、起き上がって、勿体ぶって頭を振り、同様に帰宅の許可を伺い出た、このこともいずれにせよ、憂わしいことであった。

彼は去った。彼は歩いて行った後、自分の楽長宅の玄関で、報じられているように、侵入して来た検察官にガンゼヴィンケルの当座の状況について最初の報告を行ったのであった。

「さて、少なくとも、一つの私の安心は、誰からも奪われない」と牧師は言った、「つまり、我々は我が哀れなホラッカーの安全を確保している。これが枢要な点だ。自余のことは、神の御加護と老ゲレルトの英知で、多分次第に収まるであろう。親愛なるヴィントヴェーベル、私は貴方にとりわけ今一度、衷心より感謝申し上がる」。

「私にですか」とスケッチ教師は極端にびっくりして尋ねた。　ーーー

「ビラ夫人、貴女のキッチンに彼は座っているのですか」とただその夕方、少し後、検察官が尋ねた。「素晴らしい。ガンゼヴィンケルの人々全員が肉眼による検査で、我々は彼を確保していると納得したことでしょう。本来は職務上、周りの者全員をこちらに呼ぶ必要がありましょう。...今晩は、エッカーブッシュ。今晩は、我が最良のヴィントヴェーベル殿。　ー　ヴィンクラーさん、こちらは全く居心地良く[gemütlich]見えます。皆さん、村長は事情を承知ですか」。

「エッカーブッシュが村長を疾うに家へ帰しました」と牧師夫人は叫んだ。「村長の言う消防小屋同様に、ホラッカーは安全に、私ども二人の目の下、見守られています。その上、彼の母親と私のロットヘンも、一緒に彼を注視しています。ネッダーマイヤーさんは、消防小屋と言っていますが、それは牧師館でも、公共の安全と皆のモラルの安心のために、配慮できることです」。

「奥様、貴女は町での話しを実際ご存じないように見えます」。

「どういうことです」。

「確かなこととされていますのは、彼は副校長エッカーブッシュばかりでなく、スケッチ教師のヴィントヴェーベルをも撲殺したということです」。

副校長エッカーブッシュは飛び上がった。しかしヴィントヴェーベルは腰掛けた。

「天よ、お慈悲を、　ー　ヘートヴィヒよ」。

「ナーゲルマン、従って、調書作成のために準備されたい」と検察官はメランコリックに年若の司法の同志の方を向いて言った。「村長を我々はまたここに呼んで尋ねる必要があろう。そう思わないか。犯罪者を連れて来られたい。...ヴィンクラー、ここは実際すがすがしい夕べだ」。

第二十章

「こっそりと、こっそり、こっそり」と活性剤妻は囁いた、「貴方は普段からこっそりの忍び足は若干習得されています。ノイバウアーさん、今回もつま先立って、血に飢えたインディアンの如くにです、同僚殿。ヘートヴィヒ、一歩一歩、先の人の足跡の上を行きます。それから、　ー　三頭の虎のように襲撃します。...あの人らはランプの周りに座っ

ています。　ー　おや、検察官は既に一個レモンを手にしている。ビラは砂糖ハンマーを手にしている。我が御老体は勿論ポンス酒用スプーンを持って、大口を叩いている。何と言っているのだろう。私のことかしら。あの人はあなたのヴィントヴェーベルを肘で突いて、肩で何か得体の知れないことを示している。...おや、それどころかあの人らはうちらをからかっているのだわ。もう我慢ならない。皆、襲いかかれ、あなたはあなたの夫に、私は私の夫に、ノイバウアーさん、貴方は一味徒党全員に。...いや、この罪人ども、このならず者の、良心のない、神に見捨てられた罪人ども、現行犯よ。撲殺されて、この有様なの。エッカーブッシュ、あなたの道化芝居の一つに違いありません。そして、あなたは、　ー　あなたは、　ー　いや、貴様、百姓どもを唆して、町に送り、自分は殺されたと証言させた、エッカーブッシュ、私が即座に見抜かなかったなんて、糞」。

いずれにせよ、彼らは襲撃した。そして不意打ちは完全に成功した。これまでガンゼヴィンケルの牧師館の平和な園亭は、このような蜂起を経験したことがなかった。

ヘートヴィヒ・ヴィントヴェーベル夫人はヴィクトルの喉に嗚咽しながら、死ぬほど接吻していた。イーダ夫人は夫エッカーブッシュの襟を掴んでいた。検察官は両手にレモンの片割れを一個ずつ持っていて、無言で座っていた。クリスティアン・ヴィンクラーは単純に茫然として座っていた。ナーゲルマンは暗闇で食事をしていた。ビラ夫人は両手を、暗いけれども、しかし雲のないガンゼヴィンケルのエーテルの空に上げていた。

「これは今日の出来事のすべてに凌駕しています。空からやって来たのですか。夜空から落ちて来たの」。

「いや、ヘートヴィヒ、我が命、我が子よ、我が哀れな、甘美な妻よ。今ようやく分かった、　ー　三十分前からだが、　ー　何と、　ー　何と私のことで心配かけたに違いないことか、と」とヴィントヴェーベルはどもった。「そなたの身に何事もなかったか」。

「いえ、いえ、ありません。私はとても幸せです。あなたは無事でしたから」と若い妻はすすり泣いた。

「婆さん、そう締め上げないでくれ。私も同じく無事だったのだ」とエッカーブッシュはにやりと笑った。

「白状なさい、あなたはガンゼヴィンケルの悪太郎どもを唆し、教唆し、けしかけて、私どもの町に茶番の仕掛けに送ったのでしょう」。

「親愛なるナーゲルマンよ、偶々、義務的に職務上、今晩私と一緒にガンゼヴィンケルへ出掛けることになったことを、まだ後悔しているかな」と老ヴェーデキントは若い司法の同行者の方を向いて尋ねた。「我が友、クリシャンの許では、いつも、　ー　色々な人々と遭遇すると貴方に言わなかったかな」。

「まあ、ヴィクトル」とヘートヴィヒは囁いた、「これはとてもひどい仕打ちではないかしら」。

ヴィントヴェーベル同僚は自分の喉から妻の握り締める両手から、穏やかな仕草であったが、逃れようとしていたが、しかし差し当たり、副校長とほとんど同様に出来ないでいた。

「私に締め上げるなと言っても、勿論私はあなたを『締め上げ』ます」と副校長夫人は叫んで、「私は現行犯のあなたを捕まえたのよ。残念ながら、現行犯でした、あなた、いや、貴様、　ー　ホ　ー　ラッカー。軽薄な罪人、あなたのせいで、どれほど私は苦しん

だことか、ノイバウアーにお尋ねください。　ー　そしてからに、もうあなたを放免するよう要求なさい。いやはや、これが若い方に、英知や、良い作法、規律、　ー　要するに分別を教えようとする遣り方ですか。いや、あなたの同僚ノイバウアーにお尋ねなさい、私が途中、何度となく、一つ以上の理由でお詫びを述べることになった次第について」。

高等学校教諭ノイバウアー博士は、これまでのところ、まだ自ら騒ぎの中に介入することは出来なかった。彼は、自分の尊厳を必ずしも完全無欠に保てないときには、原則して沈黙する習慣であった。ただ至高の教育を受けている者のみが、どのような状況下でも、どのような騒擾、喧噪、混乱の下でも、自らの人生を自らの芸術作品と見なして、そのための糸を手中にしているが、奇妙なことに運命もその者用にその糸を手中にしているのである。ノイバウアー同僚は、そのとき、間接的に彼に向けられた質問には微笑して黙っていて、静かに、ますます満足げなガンゼヴィンケルの牧師からの歓迎の握手に応じていた。

「博士、余りに甘いものは好みではありますまい」と牧師は彼のポンス酒に目を留めて叫んだ。「いや、皆がかくも素晴らしく一堂に会して、とても奇縁です。イーダ夫人、貴女も余りに甘いのは好みではないでしょう。　ー　ヘートヴィヒ夫人には砂糖を添加してよろしいかな。皆さん、余りに素晴らしい。ようやくホラッカーのことを、安心することが出来て、私は全く別人になった思いがしている」。

「そう、甘すぎるのは、妻の好みではない」とエッカーブッシュは喘いで言った。相変わらず彼の活性剤妻に握られていた。「とても不思議だ、とても素晴らしい。　ー　言いようもない。愛しい妻よ、抱擁してくれ、しかし私の喉は絞めないでくれ。...何だと、法に照らしてみると、...流血沙汰はもう十分ではないか。ヴェーデキントよ、頼む、引き留めてくれ。　ー　ナーゲルマンよ、貴方の二回目の調書だ。ここの私のスプーンを取ってくれ。鼻がもげたばかりの人間がどうしてポンス酒に十分な注意を向けることが出来よう」。

「痛がっているあなたのモプス[ちんの一種]の　ー真似をして、吠えなさい。今晩はあなたの十八番が生き写しに再現されるよう私も微力を尽くしましょう。生きたまま鵞鳥を毟る老婆、これもあなたの演目の一つでしょう。ノイバウアーは言っています。その鵞鳥の鳴き声が堪らないのだって。私がいないときには、私の声もそっくり真似るとか。有り難や、今回はエッカーブッシュ、私が見ています。私も実際毟り方を心得ているとあなたで実証しましょう」。

「ヴィンクラー、助けてくれ、検察官、後生だ。聖職者の剣よ、世俗[司法]の剣よ、助けてくれ。ヴェーデキント、妻はまこと本気だ」と副校長は叫んで、息を求めていた。「私のじたばたが止んだら、パパランダの予報官に私から呉々もよろしくと伝えてくれ。　ー　ヴェーデキント、ポットにレモンを入れすぎてはいかん。さもないと明日早朝頭痛の余り、誰も目を開けられんぞ。婆さん、接吻させてくれ。もう十分だろう。さもないとこの男、飲み物を全部駄目にするぞ」。

「では、何はさておき、今晩はでございます」と活性剤妻はまことに顔を輝かせて、一同に両手を差し出しながら、語った。「この話しはまこと栄光のものです。そこのヴィントヴェーベル夫妻を目にするだけで、こちらまで来た甲斐があります。私どもは黄緑色号で参りました、エッカーブッシュ。今居酒屋へ馬車は行っています。町の一同に私どもは見送られました。しかし幸い、私どもはノイバウアーさんと一緒です。彼が明日世間に万

事を正しい明かりの下、照らしてくれることでしょう」。

「同僚夫人、私は出来る限りのことを致します」と同僚は語った。それから人々は実際、然るべく互いに挨拶をした。　ー

我々は、コルト・ホラッカーと彼のロットヘンが邪悪な別離の後、再会した次第を、野道で再び出会った次第を描写した。この野道は、森から、劣等な陰鬱な世界から、彼らの故郷の村へ達する道であった。教養ある人々は、自分達の奇妙な別離の後、これほど無言で再会したわけではなかった。彼らは果てしなく言い合うことがあった。そしてナーゲルマンとノイバウアーが結局、自分達の感情を制御し得たただ二人の人間であった、彼らにとって、時折訳知り顔の合図をすれば十分で、互いにこの感情の応酬の騒ぎの中、主要な点に注目することが出来た。

「私はこの両レディーと一緒に、体験すべきことを体験した。そう貴方に請け合える」とノイバウアーはナーゲルマンに囁いた。「元来この楽しみにどのようにして至ったのか、相変わらず一つの謎だ。この灰色髪の魔女は、私を取り上げ、拉致し、ここに座らせた。ほんの一瞬も、私はその魔法の目から覚めないままであった。この人物は必ずや、怪鳥ロックの卵を抱卵したに違いなく、怪鳥グリフィン[獅子の胴、鷲の頭と翼]によって孵化されたものであろう。しかし私は今晩ほど彼女の前足や爪を感じながら、自分を未熟な乳飲み子と感じたことはなかった」。

「博士、貴方でもですか」。

「いや、私ででもです。...私が差し当たり陥っているこの精神状態では、何のためらいもなく、そう告白できます。錯乱、　ー　いや、錯乱と言って良いでしょう。どうか、私のことは、少なくとも四週間、この期間責任能力なしと勘弁して頂きたい。そして我々の共通の他の人達の許では私の状態をこのように説明して頂きたい。しかしとりわけ、何の動機があって、かくも職責、職務上、滑稽なことをする気になったのか、説明してくれ」。

ナーゲルマンは自分の上司に、慎重な視線を、返事をする前に送った。しかし検察官はまことに美食家的に、感傷的に感動していて、若い夫妻の情緒交換と、飲み物準備に注意を傾注していて、この飲み物準備の方は次第に彼一人に任せられていたのであった。ヴェーデキントは年若な同僚ナーゲルマンに対する耳目の余裕がなく、この同僚は、叱られることなく、囁き返した。

「我々はかなり前から、我らの地区のすべての土地に、彼のお気に入りの嗅ぎ煙草入れを探すために出掛けている。彼はこれをどこでなくしたのか、さっぱり分からないでいるので、この缶を取り戻す希望を放棄してくれたら、実際私には有り難く思えるのだ」。

「それでホラッカーのことは？」

「バーカ」とナーゲルマンは微笑し、軽蔑して両肩を上げた、「ホラッカーか。貴方の許しがあれば、私はこの言葉も貴方の精神錯乱の中に押し込みたいところだ。雨が降っていたら、我々はきっと彼を求めて出かけはしなかったであろう。　ー　貴方はヴェーデキントのことが良く分かっていない。ちなみに、この地の坊主は、私にはその種の劣等なサンプルには見えない。ここいらのこうした灰色髪の元気な連中は、珍しく互いに仲良くつるんでいる。我々当世風の者達が、こうした陽気な、素朴な状態を維持して行くかどうか、それは私には残念ながら、あり得ないことに見える。ノイバウアー、貴方はどう思われるかな」。

今回は高等学校教諭ノイバウアー博士が両肩を竦めたが、しかし黙っていた。

「帰路、私は貴方に我が上司殿の側の我が席を譲ろう。その代わり、貴方は私に小柄なヴィントヴェーベル夫人の側の貴方の席を譲ってくれ。エッカーブッシュ同僚夫人とスケッチ教師も私は引き受ける。副校長はきっと我が検察官殿と一緒だ。よろしいかな、ノイバウアー」。

「この両おっさんのすべての洒落、語り口にすでに私は通じている。しかし　ー　私はこの交換を受け入れよう」とこの文献学者は溜め息を吐いた。「一体どんな神がかの慄然とする老婆の夫を私の向かい側に配置したのか、誰にも分かるまい。いずれにせよ、その神を称える機会にするか。親愛なるナーゲルマン、当方としては、最善を尽くして、これまでの罪のない状態を維持するようにしよう」。

「親愛なる友の皆さん」と有り難や、検察官のヴェーデキントが叫んで、手に一杯に満たされたグラスを持って、差し上げた。「皆様の弥栄を祈念して乾杯。このミックス酒は、私の判断能力に従えば、与えられた素材に負けていないという点に注目して頂きとう存じます。皆様も全員グラスを満たして、どうぞ自らお試しください。個々人の皆の意見集約から、可能な限り客観的な結果と評釈が生ずることになりましょう。皆様一同を見回しますと、快適な思いに包まれます。馴染みのお顔が見えますが、より若い方々には、その身のためにも、我々同様、人生を悲劇的に考えるのは、単にそれに適した時のみであって欲しいものです。(ヴィンクラーさん、最近私はあなたの許に煙草缶を忘れていなかったですか)。勿論私は私の義務として、明日早朝、村長のネッダーマイヤーを通じて、我らの共通の友、ホラッカーを町へ引き渡すようにさせます。しかし我らの義務は、彼のことを悲劇的に考えるよう要請していませんし、親愛なるナーゲルマン、これは貴方も承知であろう。ヴィンクラーさん、ようやく無事にまた捕まったこの犯罪者に関し、必要な審理の際、そこでもまたお会い出来ればと思います。それで招待しますが、その後、私の許で昼食としましょう。皆様は全員、我が尊いホストの女将、我らのビラ夫人に、グラスを満たして貰いましたか。よろしい、それでは敢えて、この私の二回目のグラスをレディー達の弥栄のために空けます。　ー　どうぞ、正直者の小柄な娘、貴女のロットヘンにも一杯お願いします。ホストの女将さん、その健気な哀れな娘さんに、この老ヴェーデキントは、案件について徹底的に究明せずには、公務の旅をいい加減に行うものではない、通常文書には冷静な判断も交えているとお伝えください。エッカーブッシュ、あなたは明日私の許で食事をされたい。他の三人の殿方も同様に招待致します」。

「いつもそういうことになるわね」と副校長夫人は、世間とエッカーブッシュ同僚が馴染んでいる間延びしたリズムで語った。「ちなみに、私も今度こそようやくあの怪物、貴方らのホラッカーと直接知り合いになりたいわ。ビラ、あなたは閉じ込めているのでしょう」。

「私の林檎保管室です。まさに検察官殿の手許で眠り込みました。その母親と私のロッテが側で見張っています。可愛いご夫人、貴女も見てみたいですか」。

「あなたのお許しがあれば」とヘートヴィヒ・ヴィントヴェーベルは夫ヴィクトルを一目見て言った。その眼差しは、私が戻って来たとき、あなたはまだここにいるかといった意味であったろう。　ー　それで三人の女性が、盗賊の容姿を見に出掛けた。どんなに繰り返しても十分ではなかろうが、とても好ましい夜で、一八六七年の一年中で、最も快適

な夜であった。

彼女ら、この三人の善良な魂が、ガンゼヴィンケルの牧師館の果物保管室に入ったとき、ホラッカー未亡人は全く憐れみを請うかのように、口に指を当てた。小さな石油ランプが、麦藁と色々なクッションや毛布から整えられた臥所を照らしていた。この臥所に身の毛のよだつ罪人が、完全に感覚を失って、硬直して倒れ込んでいた。まこと深い眠りに陥っていたのであろう。彼の側に、しっかり目覚めている未亡人の膝に頭を置いて、ロットヘン・アハターハングが同じように深く眠っていた。　ー　最近の日々の難儀な心労と不安の後、今やまた動物的に深く眠っていた。外の世界では、香りや夏の喜びや微かな葉擦れの音が充満していて、同僚ノイバウアー、この一八六六年の叙事詩人は、再度諸グラスを満たした。

「まあ、神様」と町出身の三人の同僚夫人は囁いた。そして活性剤夫人は全く狼狽えて、言い添えた。

「こんな風だとは思っていなかった、ビラ」。

若い夫人は小声で、ハンカチの中に途切れ途切れの調子ですすり泣いた。

「それで　ー　私のヴィクトルが　ー　この人を　ー」。

「では、皆さん」と出来るだけ、さっぱりと、そして背中に両手を当てて、ガンゼヴィンケルの牧師夫人が言った。「皆さん、一年後の今日、すべてがもっと順調に経過しているよう願っています。ホラッカー夫人、泣かないで。私ども三人が力添え出来ること、それはかなえられましょう。この人は感化院で一定期間過ごさなければならないだろうとヴェーデキントは言っています。しかしこれは少しもこの人の害にはなりません。この教区の人々は皆、それなりの方です。ホラッカー夫人、貴女の若者は、私の御老体が新年の祝賀を述べるに当たっての、最低の人間というわけではありません。だから泣くのは止めなさい、ホラッカー夫人」。

「そうホラッカー未亡人、泣くのはお止しなさい」とエッカーブッシュ同僚夫人は言った。「私もガンゼヴィンケルに無駄足を踏んだと思いたくありません。私も約束致しましょう。私の御老体も同様に今日然るべき返礼の仕事をせずして楽しんでいるはずはありません。夫は頼りになります、助言も、実行もしてくれましょう、と」。

フォーゲルザングの文書
(Die Akten des Vogelsangs 1896)

我らは昔、影に本性を与えていたが、
今や本性が影となって、消えて行く。　ペーター・シュレミール[『ペーター・シュレミールの不思議な物語』の第三版にアーダルベルト・シャミッソーが1835年序として添えた『我が旧友ペーター・シュレミールに寄せる』の詩より]。

ある十一月の夕方、私こと（ドイツ徴兵令の文書では疾うに廃止された予備役の少尉の肩書きであるが)、上級参事官、K[カール]・クルムハルト法学博士は、他の郵便物に混じって以下の手紙を受け取った。これは、美しく、堅固な筆跡で、これが一人の女性の手になるものとは、ほとんど信じられないものである。

「親愛なるカール。

フェルテンは最期に今一度、あなた[あんた]によろしくとのことでした。彼は今や亡くなって、私ども両人は本望を遂げました。彼は最期まで一人っきり、ただ自分一人きりでした。勿論、私が彼の遺産継承人に名乗り出たことに、彼は反対出来なかった。これは私の意志でして、この意志により、私はあなた[あんた]に今日手紙を書き、彼の逝去と埋葬の報を送っています。この手紙は、私見によれば、彼の件で（ここではこの言葉が何と滑稽に響くことでしょう）なおも必要な文通の一つなのです。この調子をお許しください。私が筆記している部屋では空ろに響きます。彼、フェルテンは空しさを周りに残しました。それで私は子供のようにあなた[あんた]をカールと呼んで、今一度あんたとか、あんたの洗礼名で呼んでみます。これからも遣い続けるつもりではありません。何か、何年も前に、素敵で、陽気で、歓喜と期待に満ちていたものに咄嗟に最後すがりたいだけなのです。あなた[あんた]の愛するご夫人もこの調子を許してくださるでしょう。もっともご夫人は、私ども女性なら、こんな空虚な部屋にいたら感ずるに違いない不安について、幸い何もご存じないかもしれません。それでも暗闇の中での不安については、ご夫人もその生涯で経験済みでしょう。

ヘレーネ・トロッツェンドルフは怖がる子供なのかしら。　ー　いえ、そんなことはありません。　ー　そういう話しではありません。　ー　この阿呆な我が儘女は、自分が自分の知らせで、あなたら落ち着いたお心の市民的家庭的平穏さを乱してしまったことに、ただお詫びを言いたいのです。これからは、親愛なるカール、私のことを、この友と一緒に死者達の許へ出掛けた一人として思い出してください。言いたいことは、平穏さの中へ出掛けたということです。

あなたらの友人、レオンはとても注意深い人でした。でもフェンシング教師夫人は、埋葬の手配をする権利を私に認めてくださいました。この殿方、[レオン・]デボー商務顧問官殿は、ただ必要な用件の際、私の手伝いをされました。そして今、私は逝った友と二人っきりで、一緒に喜んでいます。桜草の花畑のブナの木枠の間のニワトコの藪の下とか、私どもの子供時代の庭にこの友をまた見いだしたり、山や野原で髪の束を掴んで、彼のことを悪太郎と呼んだり、ひどい人と呼んだりしようと思っています。この友は、昔と同様、今日でもこれに値しましょう。安らぎの中でも、この友は昔と同様に鼻と口の周りに同じ特徴を浮かべていました。つまりこの友が私を憤怒や立腹の余り、泣かせたり、立派な昔からのお馴染みさん、あなたに、ドイツ語やラテン語で古典作家を引用するよう強いたときのようにです。

フェンシング教師夫人は、この大きな、抜け目のない子供を、まことに、この上なく小さく、愚かで、寄る辺ない子供の如く配慮なさっていて、死ぬまで世話していました。夫人は間もなく九十歳で、こう言っています。『私はこうせざるを得なくて、それでこの半年間、足腰が保ちました。この人に私はそう約束していたのですよ。まさか冗談が本当に

なるとは一度も思っていなかったのですけれども』。この友の冗談はいつも本当になると、夫人は知らなかったのです。　ー

私どもは対面していたら、私はまだ沢山あなたに話せることでしょう。でもこれ以上書くことはありません。それに私は疲れました。

あなたとあなたの御家庭に御多幸を祈念致します。

ヘレーネ・トロッツェンドルフ、ムンゴー未亡人」。

「両手で、どうして頭を抱えているの」と私の妻がまことに夕方遅く私に尋ねた。子供達はとうにやって来て、私にお休みなさいの挨拶をしていた。「今日もまた、私どものために割く時間が残っていないの、哀れな旦那様。まあ、何て文書の山なんでしょう。まだ仕事が沢山残っているのでしょう」。

こう言いながら妻は私の椅子の背もたれから身を乗り出して、私の額に冷たい手を当てた。

「今回はこれらの邪悪な文書のせいではない、哀れな嫁さん。もっととても厳しいものだ。驚くことはない。そなたや子供達には直接関係しないものだ」。

私は妻にムンゴー未亡人の手紙を渡した。この手紙のため今夜、私はいつもの時間が過ぎても、居間での毎晩のお喋りに付き合えなかったのである。アンナは手紙を、びっくりしてはいなかったが、しかしとても訝しげに緊張して受け取り、勿論まず署名の方を見た。

「ヘレーネ・トロッツェンドルフからなの？」

「ムンゴー未亡人からだ」。

パイプの火はとうに消えていた。私は立ち上がって、パイプにまた機械的に点火して、それから書斎の中をあちこち歩いた。一方アンナは、私の書き物机の側、私の仕事椅子に座って、勿論山のように高い、彼女にとってとても苛立たしい文書の群れの間に、その愛らしい顔をベルリンからの不気味に奇妙な手紙を読むために傾けて、早速、今や最高度に驚きながら、再びその顔を持ち上げて、私の方に向けた。

「フェルテンが亡くなったの？私どもの　ー　あなたの友、アンドレスのことね。　ー

そして彼女は、　ー　ヘレーネは、　ー　ムンゴー未亡人で、彼の許で、一人っきりなのね」。

彼女が更に読み続けるとき、その手紙は彼女の両手の中で震えた。しかし読み終わるまで、彼女は更に何も言わず、その手紙を下に置いて、それを平らにするために、手でその上を撫でた。

「でも恐ろしい手紙だわ。そのわかりにくさは、私があなたの、　ー　あなた方の話しや物語から想像していた彼女とは全く違って、私のような女は、びっくりしながら、共感しているとしても、また何とコメントして良いかさっぱり分からない。フェルテン・アンドレスは亡くなった。アメリカ人の大富豪の女性が今やその空の屋根裏部屋で一人、通夜の番をしているように見えます。彼女は今何をする気なのか。さっぱり分からない。親愛なる神様、何と人々は純然たる気まぐれから人生をとても難しいものにし、逝去を一つの喜劇の結末にしてしまうことでしょう。何故そんな風に私を見つめるのです。これがとても悲しい真面目なものでなければ、実際こう言いたくなるところです。双方のどちらもそ

の配役から踏み外していない、と。善良なレオンも勿論また現れて、健気な人間のように背景に立っています。この人間は、破局が生じとときに、少なくとも一人は理性的な関係者として頭を振るという風に劇場にいつも居合わせます。でも、勿論　ー　あなたは、この皆の最初の昔からの良き友達、馴染みの者として、これからベルリンの彼女の許へ行かなければならないし、行くつもりなのでしょう」。

「明日、　ー　可能ならばな」。　ー

「どうして出来ないことがありましょう。こうした場合、どの人でも休暇を自ら取ることが許されます。私個人としては、明日この不気味な手紙を明るい日中の明かりの許で読むことにします。これは今、石さながら私の頭に落下して来ました。これから子供達の様子を見てきます。娘達は丁度劇場から帰って来たところです。これが今このとき、この手紙を読んだ後、私の唯一の慰めです。天よ、娘達を余りに過剰な想像力から守り給え。そして娘達に明瞭な頭脳と落ち着いた心を与え給え」。

「愛するアンナよ、私の意見も全く同じだ」と私は溜め息を吐いた。それから私はヘレーネの手紙を文書の山の下に入れて、私の賢明で、澄んで、落ち着いた妻の腕を私の腕の中に引き入れた。そして我々は一緒に子供達の許へ行った。　ー　この子供達は、若いけれども、自らの人生経験と関心とを有する、すでにかなり大人となった若者達であった。子供達はフェルテン・アンドレスとヘレーネ・トロッツェンドルフについては何も知らないか、知っていてもわずかであった。このわずかなことも今では単にロマンチックな関心に過ぎなかったであろう。フォーゲルザング[Krähenfeld がモデル]の記録文書に関し、子供達はもはや関心はなかった。子供達が後年いつかこれらの文書を直接利用することになるか、誰にも分からない。

私の父親がただ地方団体のために創設された第一級功労十字架と参事官の称号の有資格者になったことは、私が若かった頃の時代の、ドイツ民族内における我らの社会的地位についてすべてを物語っている。父親がどの法学的専門分野での役人であったか、これは多分どうでも良いことであろう。しかし父親が一人の有能な役人であることは、彼の上司の皆が認めていて、彼の知識はその職務で頻繁に利用され、その回数は上司達がその上司達に頼る場合よりも多かった。彼の職務では数字が良く問題となった。彼は傑出した数字感覚を有していて、それで、これはついでながら言うと、同時に大抵それに似付かわしい秩序感覚も有していた。この両感覚で、彼は我らの故郷の事務仕事で一つの地位を確立したのであったが、しかしこれは必ずしも我らの家庭的快適さに最良の影響をもたらすものではなかった。というのは、大学で学位を取得せずとも、それでも何か成果を上げたという思いは、父の人生ばかりでなく、我々、つまり私と私の母の人生をも、余りにしばしば苦いものにしたからである。

ちなみに、私は自分の今日の上級参事官の職において、有り難や、自分の部下に同じように有能な紳士達を有しており、自分の職務のために、これらの人々から説明ばかりでなく、助言をも得ている。そして私は、亡き父親の肖像画を、胸に地方団体のために創設された第一級功労十字架を着けて、等身大で（その死後、立派な写真に基づいて作成したものであり）、私の書き物机の上に掛けさせており、父からも今日もなお説明や助言を求め

ている。それは単に仕事のことばかりでなく、人生一般のことであったりする。　ー

私の母親は、その至高の人生の願望や注文が参事官夫人という称号ですっかり満たされてしまった女性であった。彼女は立派な母親で、そして最良の妻とは、夫の見解や意見、言葉、仕事に完全に同化する点にあるとすれば、この最良の妻であった。母は、父が母と自分の家を守るときの躾を快適なものと感じていた。母がかつて父の意志以外の意志を有していたとは、私には思えない。

兄弟姉妹を私は有しなかった。少なくとも一緒に育って、私の人生に影響を与えたような兄弟姉妹はいなかった。この代わりとなったのは、隣人達である。それも極めて豊かな具合にであった。これについて扱っているのが、ここですでに手短に言うと、私が今記している文書である。誰のために書いているのか。誰がそのことを言えよう。いずれにせよ、私自身の魂の安らぎのためであって、一人の人間に静かに耳を傾けて、発現させて、全体が明らかになるまでは口を挿まない、ある人物、あるものへの衷心からの欲求に基づくものである。これは言葉の真の意味での身上書ではないとしても、これらの記録は私の目にとってその価値を何ら奪うものでない。

隣人。これは、残念ながら、ますます多くの人間にとって、苦労して、これまでの快適な色々な読書について反復して熟考を重ねずしては、一つの概念に達し得ない一つの言葉である。まだ隣人を有する我々のような者にとっても、再びドイツ民族の或る町がその住民の数が十万人を越えた、かくて大都市となって、大都市のあらゆる栄誉や長所を獲得して、その代わり隣人感覚を喪失することになったと耳にしたり、読んだりすると、常に一つの戦慄が走る。

我々は子供時代まだこれを有していた、つまり隣人としての共同生活と関与という感覚である。我々は、「フォーゲルザング」では、まだお互いに見知っていて、お互いのことを承知していた。たとえしばしばお互い憤慨しても、別な機会には、また良い意味で、隣人の男女の幸運や不運についてはなはだ関心を示してきた。互いに接し合って、果樹の小枝が互いに達し合っている庭園で、そのスモモやサクランボ、プラム、林檎、梨を生木の垣根越しに分け合う習慣まだ我らの時代には存在していた。まだ都市が「最初の十万人」を越えていなかった時代のことである。この時代に我々は、つまりヘレーネ・トロッツェンドルフ、フェルテン・アンドレス、それにカール・クルムハルトは、オスターベルク[復活祭山]麓のフォーゲルザング[鳥の歌]で、隣近所の子供達であった。まだ我らの時代、建築現場瓦礫、工場灰山積路、下水道仕事等々といったものも、郊外、つまり「フォーゲルザング付近」と呼ばれる所にはなかった。小鳥[フォーゲル]はそこではまだ、大地に賛歌を歌う権利を失っていなかった。小鳥はまだ自分の巣の計画[建築計画]を市の建設課に許可を求めて提出する必要はなかった。我々はその巣に関し、我らの生垣や藪、木々を一杯有し、それを楽しみとしていた。しかしそれでも「猫税」は申し込まず、すべての実直な雄猫を叩き殺したり、撃ち殺したりしていた。この雄猫は、立派な母親たる自然の建築プランに基づいて、その権利に従い、「常に永遠に鼠しか食わない」と言うかのようにうろつき、すべての甲虫や蝿、青虫、蝶、虫どもの世界から善行者としてばかりでなく、復讐者としても敬意を表されてきたものである。

この思い出噺はどこへ向かっているのだろう。上級参事官の法学博士、K.クルムハルトよ、よく思案して、本題から外れるな、筋を逃すな、と汝の友人フェルテンは、かの時代、　ー　我らの時代によく言ったものである。　ー

私の父、上級書記官のクルムハルトは、フォーゲルザングのその家を自分の父親から受け継いでいた。父はまたその父から受け継いでいた。これを越えると所有に関する我らの認識は、諸時代の闇の中に入る。いずれにせよ、古い家で、三回のシュレージエン戦争[1740-42/1744-45/1756-63]ばかりでなく、スペイン継承戦争[1701-14]も同時代のこととして体験していた。隣家、つまりその外観から判断すると、若干より若い隣りの小さな家は、医学博士アンドレスがフォーゲルザングの町とその郊外に定住した際に、購入して所有したものであった。彼の未亡人とその息子は、その居住権と（場合によっては）生活保護権をこの、時代的にはまだ間近の、抵当権帳面への「記入額」にその根拠を求めていた。しかし彼らもその所有権を確かなものと感じていて、最初からここに属していて、つまり古来からの真の意味で隣人であると感じていた。私の父はドクトルの死後、全く自明なことに、後見保護課によって未亡人に対し、「家庭の友」と承認されていた。

ただ緑路地の向こう側の一軒の借家住宅にニューヨークからミセス・トロッツェンドルフが引っ越して来た。彼女の子供[娘]はフォーゲルザングのオスターベルク[復活祭山]麓で市民権を得て、そしてそれを放棄したのだが、その次第についてこの文書が、これに関連するすべての記録と共に詳細を報告することになる。私は単に出来事の記録者としてのみ登場するよう出来るだけ心掛けたい。私が時折、自分の個人的感情や、気分、意志等々の理由によりペン軸を嚙るようなとき、例えばアンドレスに対するトロッツェンドルフの件とか、ムンゴー未亡人に対するフェルテン・アンドレスの件のときなど、この現世生活の裁判官席の紳士淑女の方々に、それに留意なさらぬようお願いしたい。私の妻は昔言っていた。

「あなたが、あなたの他の二人とは違っていることに、神様、私はどれほど感謝していることでしょう。そんなわけで、私どもは少なくとも規則的な生活を送ることが出来て、周りに子供達を置いておけます。でも子供達の分別のある、きちんとした教育にはしっかりと注意を向けることにしましょう。子供達の一人があんなにも野蛮に育っては、私にはたまらない」。　ー

我らの友、フェルテン・アンドレスの父親、ヴァレンティーン、医学博士は真の真っ当な郊外ドクトルで、人の良い人間、立派な医師であったが、ただこの素人愛好家の昆虫好きの医師にとっては、山々やその他の素敵な自然がしばしば余りに近くにありすぎた。ある事故の際とか、あるいはその他、彼の職業上、患者のベッドの側に極めて必要とされる時に、彼はまことにしばしば不在であった。没食子雀蜂についての彼の論文は、当時その専門の仲間内でセンセーションを引き起こして、今日でも専門家達によって評価されている。しかしこのことで衛生顧問官に出世することはなかった。彼が死去して、妻とその息子に、フォーゲルザングの小さな家と庭園の中に残したわずかな財産は、彼由来のものというよりは、彼の父親と祖父由来のものであった。この祖父は我らの概念によれば、とても裕福な男であったと言われている。しかし裕福さや富は、世代が続くと、何と縮むものか。

私個人としては、アンドレス医師に関しては、全くぼんやりした記憶しか有しない。私

の近隣生活関係は単にその息子と「医師夫人」に関するものに過ぎない。しかしガラス・ケースに収まった彼の甲虫や蝶の収集は私に影響を及ぼしていて、今日も続いている。彼の平和なイメージは、今も時々、我等の今日の「大都市」周辺の森への途次、私に随伴して来る。

彼は自分の息子にその路上で出会ったら、頭を振ったであろうか、それとも微笑したであろうか。　ー　彼は自分が人生で得たものの何を息子アンドレスに　ー　我等の友に伝えたかったであろうか。　ーー

さて、アンドレス医師夫人に関しては、その好意的イメージが明るく澄んで私の心の中にあり、この心の中で消えることはない。彼女は私の母がお産のとき、見守ってくれて、私の揺り籠を良き隣人として覗いていた。私は夫人の臨終のとき、居合わせて、棺の中の夫人を目にしている。　ー　これは同様に良き隣人としてであった。(私はこの言葉を、後々この文書でこれに関し言及されるすべてにかかわらず、使用している)。私の揺り籠と夫人の棺の間には、家と家との共同生活のとても多くの立派な、愛らしい長い年月があって、我らはまことに一緒に暮らして来たのであった。私の父は　ー　彼女の家庭の友ではあったが、彼女のことを「理解」することはめったにしかなく、彼女をまことにしばしば不安にさせ、時に更にそれ以上に立腹させたけれども、しかも私の母は、こうしたことすべてに関し、私の父親と同じ見解と意見であり、父よりも「アマーリエ」を理解することはほとんど更に少なかったけれども、[一緒に側に暮らしたのであった]。

勿論すべての誤解の十分の九は、こうした市民的秩序感覚に基づいた現世生活における我が友フェルテンの存在に根差していた。しかし何故後見保護課は、ドクトルの死後、息子の後見人夫人に対し、参事秘書官のクルムハルトを家庭の助言者に任命したのか。勿論このため、元来先鋭ではなかったもの、少なくとも一方の側では先鋭でなかったものの幾つかが先鋭化せざるを得なかった。今日では、　ー　庭園からフォーゲルザングの小鳥も消えた。しかしオスターベルク[復活祭山]の向こうの森では、今日でも、伝統的に小鳥がさえずっており、ひょっとしたらその小鳥の何羽かは、如何にフェルテン・アンドレスは阿呆な鳥であり、その母親は如何に頼りにならない後見人女性であったか、歌っているかもしれない。確かに彼は昔、卵をくすねて、とうとう彼は、　ー　まさに彼の母親によって、こちらの野原でのその素人趣味を叱られて、「残酷で無益な遊び」を禁じられたのであった。勿論彼の亡き父親が全く不当に引き合いに出された、父親は決して小鳥の巣から盗むことはなかったのであるが。

でもご覧よ、そこに父上の甲虫の収集と蝶の収集があります、父上が針でそれらに突き刺すとき、それらは痛くなかったのかなあ、とその医師の息子は母親に返事をし、言い返すことがあったろう。「これで君は卵菓子を作ってみな」と彼は、しかしながら私に言った。生垣越しに、中身のない卵の収集品を私に押し付けていた、「老母は、こんなことをしていたら、もうズボンを繕わないと言っている。老母はおかんむりで、私はむしろ切手でも集めるか」。

我々は昔いつ、フォーゲルザングの隣保夫人アンドレスが「おかんむり」になって言うのを見たであろうか。夫人が泣く場合があることは、我々は承知していた。しかし「おかんむり」になって言うか。この恥ずかしい様が夫人の愛らしく親切な顔に浮かぶのを目撃できたのは、ただ我らの類い、つまり特に夫人自身の血筋を引いている学童で、その学童

の体験や言い草に限定されていたことであろう。夫人は生来高笑いに向いていた。あるいはもっと素敵に、静かな落ち着いたお日様の微笑で、これは何らかな明らかな理由もなしに、まさに深みから湧き出て来るもので、つまり、とにかく哀れな祝福された人間の子が、世界を美しいものと観じているからであった。

いかにも私は今日、ヘレーネ・トロッツェンドルフの手紙を眼前にして、何と素敵にフェルテン・アンドレスの母親は世界を眺めていたか、思い出さざるを得ない。

「夫人は頼りにならない。息子はぐれた屑で、この人らの許で家庭の友を演じて、分別を説教しなければならないということが、義務なのであれば、人間は絶望に追い込まれる」と私の父は叫んで、隣りの家から家に、　ー　我らの　ー　この父親の家に戻って来て、帽子をうんざりして、それでも丁寧にテーブルの上の私のコルネリウス・ネポス[紀元前100頃-25、ローマの歴史家]の教科書の横に置いた。「カールよ、また何を仕出かしたのだ。この新たな愚行の際、そなたは何の役を演じたのだ。奴らは、ハルトレーベンの園亭をほとんど焼き払うところだった、嫁さんよ」。

いや、私はコルネリウス・ネポス[ローマの歴史家、紀元前 100 頃ー25]の本、『クリニアスの息子たるアルキビアデスの生涯』[殺害されたアルキビアデスに遊女ティマンドラは手厚く自分の外套をかけた]を眼前に有して、私の「老公」に対し不安一杯の心地で、目からは涙がこぼれ、熱く、黒く汚れて、震える手であった。私は翻訳の宿題があった。

「シカシ彼ト一緒ニ生活スル習慣デアッタソノ女性ハ、ソノ燃エテイル家ノ中デ、自分ノ女性服ヲ着セタ死体ヲ焼イタ」。

「息子よ、本当のことを話せ。向こうでの話しは、法螺話の嘘しか聞かれない」と私の父は叫んで、私の肩を掴んだ。多分「向こう」では、友のフェルテンを、そして「向かい側」では、小柄のヘレーネ・トロッツェンドルフを掴んで、揺さぶって来たのであろう。いずれにせよ、私からすべて本当のことを揺さぶりだしていた。

「ただハルトレーベンの園亭で、喜劇のお芝居をしたのだ。フェルテンが考え出した。だって、　ー　だって　ー　今　ー　学校ではアルキビアデスを習っているから」と私はすすり泣いた。

「放火で終わる素敵な喜劇だな。お母さん、これに対してお母さんの意見は」。

私の母はただ黙って両手を揉み合わせていた。私の父は母にこの件をもっと明確に説明しなければならなかった。

「嫁さんよ、学校ではギリシア人やローマ人から生徒らの眼前にとんでもない例が呈示されている。これは残念ながら一つの事実だ」と父は文句を言った。「それで実際、ギリシア人の将軍の話しがあって、　ー　アルキビアデスという名だが、　ー　それを子供らはハルトレーベンの地所で上演しようとして、マッチや火薬、コロホニウム[松脂]、知るか、これらでまかなった。その女の子は、アルキビアデス殿、つまりならず者のフェルテンの上に被せようと思った前掛けを焦がして、ハルトレーベンの乾燥した薬草小屋から出て来たのだ。どうしてこんなことを思い付いたのか、不思議で仕方ない」。

「まあ、神様、まあ、神様、カールヘン、今度もあなたは一緒だったの」と私の母はしくしく泣いた。

「フェルテンがすぐにすべてを、両手と、井戸から帽子に汲んだ水で消したのだ」と私はすすり泣いた。

「奴は今、脱脂綿と亜麻仁油を両手にして、座っている」と私の父は文句を言った、「まともに痛いと叫ぶことや哀願することすらしない。このろくでなしは頑固に両歯を噛みしめている。そして時々、不安げにママの方に視線を送る。ママがこの件について何と言うかと。いや、このママだ。神様と正義にかけて、涙にかきくれるべきなのは、この隣保夫人アマーリエに違いないのだ。この阿呆な少年は手ひどい痛みを覚えるべきなのだ。しかし夫人がそうするか。とんでもない。正当なことを説得する隣人兼家庭の友に対し、同意してその責任を軽減させるよりも、死んだ方がましなのであろう。勿論この医師夫人も単の両歯を噛みしめるだけで、単に時々こう言うだけである。『でもフェルテン、余りに愚かなことよ』と。そして私の言葉は、いつもと同じく、当てもなく風に向かって話すのと変わらない」。

「哀れなアマーリエ」と私の母は溜め息を吐いた。

「それでも夫人のことを気の毒に思うのか」と私の父はほとんど粗放に母に発した、「別の、まだましな機会のときに取っておけ」。

そして私の方を一瞥して、父は続けた、「この件については、これ以上話さない。ちなみに、この新たなスキャンダルに関して、(これは、息子よ、言っておくが、そなたも警察当局に出向くことになろう)、徹底的に吟味するために、アドルフィーネよ、私は向こうの、そなたら三人の同窓娘達の三番目の許に出掛けた。あの有名な、(私は別の言葉を遣いたくない)あの有名なアガーテ夫人、　ー　我らの誠実なトロッツェンドルフ夫人の許だ。いや、私が聞かされるであろうこと、これは私自身がすでに前もって自分に対し語ったであろうことに過ぎない。この人物はまたしても早速、高い馬に鎮座ましまして、あたかも北アメリカの全合衆国が夫人のためにその馬に鞍を置いて、馬勒を付けた按配であった。これを彼女の小娘はまさに向こうの、我らがこの地の人生よりも偉大な人生から持参して来ており、彼女の小娘はこの俗世間を(この阿呆女はまこと俗世間と言ったぞ)、彼女の小娘はこの俗世間を、我らの当地の俗物人間の目では(これは勿論私の表現だが)、我らの当地の俗物人間の目では見てござらぬとぬかすのだ。この茶番は幸い無事に済んだそうでございます。ハルトレーベンも、道理正しく説明されたら、多分納得されることでございましょう。娘の焼けた前掛けなど問題に致しません。向こうのニューヨークのこの娘のパパは、前掛けの値段など気に致さないことでしょう。　ー　こう言って夫人は私の両手からこの生意気な小娘を取り上げて、自分の膝に抱き上げた。ニオベが、我らの息子の本の中で、自分の残っていた子供を抱き上げた具合であった。[女神レートーに対して子供が多いことを自慢し、子供を殺された]。このペテン師、ペテン師の親玉、トロッツェンドルフ、彼女の夫の名前が挙がって、私は畏敬の念が失せ、帽子を取って、こう言ったのだ、『それではまともなことを言っても埒があかない』。いや、親愛なる天よ、何という隣人達だ。息子よ、息子。言うことを聞くのだ。そなたの両親の原理原則からは、そなたの教科書と同様、離れてはならん。正確に遵守せよ。そなたがちょっとでもまたこの猿芝居でんぐり返しを仕出かしたら、少なくともそなたをきつくしばくことになるぞ。そなたの市民的な、健全な、素面の五感を大切に守って暮らせ」。

「そうよ、お願いだからね、お願い、最良のカール、そうなさい。あなたの両親や先生

達を泣かさないでね」と私の母親は言った、「いや、お父さん、でも哀れな女達です、このアマーリエにしても、アガーテにしても。その運命に責任があるかしら、自分の哀れな医師をこんなに早く亡くしたり、一方はその夫を　ー」。

母は止めた。私の父はただ呟いた。「いや、そなたのもう一方の女が何の因果で、この地、フォーゲルザングで、また山師風アメリカ人一時寡婦として、居を構えることになったのか、これに関して文書類はまだ必要な書類を揃えていない。アドルフィーネよ、医師夫人にとっては、そなたの釈明が状況緩和に役立っているのかもしれない」。

何という隣人達だ。その通り、これこそが、私の健気な亡き父親の一切の警告や、脅迫、興奮、立腹にもかかわらず、今日まで魅力の魔法を発揮しているもので、私を呪縛しているものである。父親は、この魔力に対する警告で、まことに徹頭徹尾正しいのであるが。私は、今日我々三人の中で、その健全な五感を正確に実用的に保存していて、市民的概念によれば、(とても正当なもので)、この浮沈する現世生活で一つの堅牢な生活を築き上げた唯一の者ではなかろうか。そして今日この昔の魔力は、以前よりももっと　ー　つまり隣人の魔力は、私を捕らえているのではないか。フェルテン・アンドレスとヘレーネ・トロッツェンドルフは別の道を行き、我らの市民的概念によれば、この現世で破滅しており、この現世を獲得したわけではないけれども。少なくとも哀れなフェルテンはそうである。百倍の百万長者夫人であるムンゴー未亡人、旧姓トロッツェンドルフは、この完全に狂った人間、哀れな珍しい奴、かのアンドレスほど必ずしも我々を当惑させるものではないだろう。彼が気の毒である。彼には幾多の才能があり、幾らか成功する多くの良き機会に恵まれながらも、この現世でそれを生かし切れなかったのである。

しかしカール・クルムハルトよ、実用的に、そう実用的に心掛けろ。これはつまり、上級参事官の法学博士たるクルムハルトよ、出来る限り自分のことを対比的に話すようにして、少なくともトロッツェンドルフ対アンドレス、あるいはその逆の関係の中で、自らの立場を明確に語ることだ。これは別の聞き手にとってそうではなくても、自分の子供達にとって多分役に立つことであろう。

我々、フェルテンと私は、およそ十歳から十二歳の頃、子供の遊びや、学校の宿題、あるいは子供の巫山戯の際、トロッツェンドルフの名前が紛れ込むと、私の両親の側では憂わしげに頭が振られ、フェルテンの母親の側では気の毒そうに頭が振られるのに段々と気付くようになった。つまり我らの家ではこう言われた、「こんなこと予測できようか」、隣りの家ではこう言われた、「哀れなアガーテ」。我が家では、「ペテン師の結末はこんなものだ。そして軽率な女、彼の妻を送り返すのだ、また不意にな」。隣りの家では、「こんなに小さな娘と一緒に、また海を渡って来るのね。この小さな娘と一緒に二人っきりで大きな海を渡って来るのね」。

広大な海、ロビンソン・クルーソーがその不思議な島を発見し、我々、フェルテンと私がまさにそうした島を探し出そうとしていた海、　ー　広い海、その海を越えて、船乗りシンドバッドが船に乗り、その千と一の冒険を体験し、その海を越えて、ウィッティントン(三度ロンドンの市長を務めた[14世紀、猫の話しは半ば伝説])は自分の猫を売りに出して、アフリカの国王から、この健気な動物の代金として、砂金三袋を受け取ったのであるが、

この海が、勿論まず我らの少年の空想を刺激したのであった。

「いいか」とフェルテンは言った、「一人の夫人が小さな娘を連れて、アメリカからまたこちらのフォーゲルザングに戻って来るのだ。私の母はその娘の母を知っており、君の母もこの母を知っている」。

「そのことは私ももう知っている。でも私の父と母は、その娘の父親を知っていて、こう言っている。これはろくでなしだ、と」。

「それについては私の母は何も言っていない。しかし私の母もこの父親を知っている。ちなみにこれは私には全くどうでも良い。しかし娘の方だ。地図を見てみろ。こんなヒヨコの娘、澄ました娘が、大西洋を渡るなんて。我々が知っているのは、地理の授業の時、クレープマイヤー博士の話す詰まらぬ御託だけで、いかにそれは広いも知らない。向こうのハルトレーベンの建物の住まいを借りるとか。私の母はその手伝いに行った」。

「私の父と母もそうだ。その連中は上手く行っていなくて、でもこの連中を受け入れなくてはならないそうだ。皆、昔、大人達は良い友達だったらしい。いや、この連中を受け入れることにしよう」。

「構わないよ。自分に出来ることは、尽くすことにしよう。娘っ子はこちらフォーゲルザングではもう多すぎるほどだが､娘っ子一人のことでむかっ腹は立てないことにしよう。至る所娘っ子どもが道を塞いでいて、生垣を越えると娘っ子どもの塊の中に落ちて、その後五分間悲鳴を聞かされる｡『うちらの庭から消えないと､あなたの父親に言い付けるわ』。ちなみに、カールヘンよ、君の『革脚絆物語』[Cooper作、1823-1841]を貸してくれ。この娘っ子が入って来る前に、アメリカについて前もって読んでおきたい」。

「青少年のために編集された」このクーパーの革脚絆物語がどれほどの数のドイツの若者を、その綽名、長い銃や大蛇、狡猾な狐といった男どもの国へ拉致したであろうか。これは、フォーゲルザング出身のチャールズ・トゥロッツェンドルフ氏の場合もそうであったのか、この人物の青年時代に関し、私は文書で確認できない。後年の記録から、これはそうではない、高貴なアンカスも、勇敢なヘイワード少佐も、気位の高い黒髪コーラも、ブロンドの愛らしいアリスも、磁力を発揮して、そちらへ引き寄せたわけではなく、全く別な原因であると、私には判明している。もはや皆目、かの不思議な、嘘っぽく真実な子供達の原始林世界とは関係しない何ものか、つまり全く単純な、栄光の北アメリカ合衆国における**商売**が原因であった。高貴なドイツの祖国からも、緑なすライン川とフォーゲルザングからも、ドイツ人魂は、海を渡って、長い弓や蛇や狐[ルナール]とその商会と立派に付き合えるばかりでなく、自ら適した機会を見つけては、これらをペテンにかけ、それで連中はこのよう競争相手の更なる輸入をすっかり願い下げにしたくなるほどに、完璧に能力を発揮しているのである。しかしこれは父親達の時代の話しである。私は、申し上げたように、チャールズ・トロッツェンドルフ氏に関して、私の文書では余り分からない。我らの故郷の町で、彼は移民のエージェントをしていて、昔自ら移住した。それもやむを得ない理由からであった。彼の妻は、私の母親と隣保夫人アンドレスの女友達であり、同級生であったが、この女性を彼はフォーゲルザングから一緒に連れて行った。彼女はその娘盛りの頃、とても美しかったと言われており、彼がまたしばらく彼女を故郷へ戻したとき、まだ醜い容貌と言われる姿ではなかった。私の父が言うには、「より良い幸運のために備えるための」帰郷で、後に実際そうであったと分かった。

「ミセス」アガーテ・トロッツェンドルフが時折アメリカから手紙を書き送った相手はフェルテンの母親であった。フェルテンは「大きな片付け」の際、多分六通ほどの海外向けの郵便スタンプのある手紙を暖炉に投じた。私が思い出す限り、文章的にも、倫理的にも燃やして消えたものは何もない。いずれにせよ、これらの手紙から明らかになったのは、チャールズ・トロッツェンドルフ氏は、自分の仕事をよく理解している、従って運の良い偉大なペテン師であって、また運を取り戻すことが出来、ともかく不運を凌いで行けるということであった。最後の手紙は、夫がまことに不運なことになって、「劣等な人々によって、途方もなく騙されてしまいました」、それ故、差し当たり自分の家政を整理しなければならないのです、と彼に関して報告していた。我々にとって、つまり私と友のフェルテンにとって、後に判明した事情によれば、この夫は当時、かろうじて刑務所シング・シングへの長目の収監を免れたのであった。いずれにせよ、彼はその当時、まだ若干もっともなことに「遙かな」と呼ばれていた西部に消えていて、妻と娘とをまたフォーゲルザングに送り返していた。フォーゲルザングの我々が、ミスター・フィスクとかエリー鉄道[フィスクによる詐欺、1872年フィスク射殺]、ミスター・トウィード、タマニー・ホール[トウィード設立、ニューヨーク市は詐欺に遭い、1878年トウィード獄死]、シング・シングについて何を知っていよう。

二人はやって来た。ドイツ・アメリカ人の母親と小さなエレン、アメリカ生まれの小さな娘である。二人はハルトレーベンの家屋敷にある、我々が二人のために借りた隣接の住まいに引っ越して来た。我々両人、フェルテンと私が学校に行っているときに、入居となった。我々が家に帰って来ると、我らの両母親は、相当興奮していて、途方に暮れ、震えながら、一緒に座っていて、そして我らは少年らしく、その母親達が、両手を黙って膝の上で揉んでいたり、大声で叫びながら頭上で両手を広げてる様を、聞き入った。あたかも天球ばかりでなく、部屋の天井も頭上に落下しそうな按配であった。

「あの女は、完全な痴女になって帰って来たわ」と私の母が呻いた。

「まあ、まあ、どうなることでしょう」と隣保夫人アンドレスが溜め息を吐いた。

「アマーリエ、どんな気持ちで私がここに座っているか分かる？」

「私どもに　ー　こちらの私どもフォーゲルザングの二人に、ハルトレーベンの別棟はベルリンのウンター・デン・リンデンには存在しないこと、あるいは更にもっと立派に、ニューヨークのアメリカ人の許とか、その他のところに存在しないことの責任があるかのような印象を完全に受けました。それにならず者のトロッツェンドルフが私の夫に準備金として送って来た百ターラー、これは勿論こちらにいらっしゃる私どもの公爵夫人様の家財調度用に、向こうのハルトレーベンの許に発注しなければならない含みなんでしょう。

ー　この私どものミセスのため、レディーのためです、あるいはその他何とお呼び申し上げるのかしら。あなたはどう呼ぶの」。

「哀れなアガーテ」。

「まあ、気の毒とまで思うの。悪く取らないで頂戴、この点、私は別の意見です。私個人としては、後々の次の機会に、遠慮なく私の意見を申します。あの人がこちらの私どもの状況に合わせるべきであって、私どもがあの人の状況に合わせることはありません」。

「まあ、何ともまあ、あの人の状況は」とフェルテンの母親は溜め息を吐いた。

「いえね、私はただこれまでの以前の彼女のご立派な状況を言ったのであって、今の状

況ではありません。マールヘン[アマーリエ]、これも多分あなたの言う通りでしょう。私も個人的に努力して、出来るだけ彼女には快適に物分かりよく過ごせるようにしましょう」。

私は、自ら語りながら、母親達の談笑を、この邪悪な言葉の最良の意味で、文書の中から引用している。我々愚かな少年達が、これを実際記憶していたわけではないことは、自明なことである。我々二人は、　ー　フェルテンと私は、　ー　何か全く規則から外れたもの、全く、少しも快適でないものが、フォーゲルザングの休息を妨げて、快適さを、見定めがたい期間（私の父の表現）阻害しそうになっているとだけ承知していた。ちなみに我々はすぐに、この話しは我々二人には全く影響ないと確信していた。そして「ハルトレーベン家の新しい前掛け娘」とはすぐに学校路や庭園、路地で、他の愚かな鵞鳥どもと同様に、夏の陽光の際、そして冬の雪の際、付き合うことになった。

それで我々は垣根に顎を乗せて、二人のヨーロッパ人インディアンの如く、ハルトレーベンの[インディアン用]テント小屋を覗いた。

「コーラやアリスといった二人のイギリス人娘は、何も私の気を引かない」とフェルテンは言った、「しかし[クーパー作]『開拓者』のユーニタウ[Dew of June、六月の露]のように、この新入り娘が、赤や緑、黄、青と塗られてやって来ると、これはちょっとしたもので、ここ我らの永遠の退屈の中に、繭から這い出て来た何か珍しいものだ」。

「ほら、君の母親があの娘と一緒だ。いや、ちびっ子だ、見ろよ、まだ手を引いて貰っている。　ー　まじ、　ー　勿論今まで泣いていて、その上作り笑いをしている、その引っ張られている様は、君の母親はまこと人食い巨人であって、君らは家でただ子供の肉を食らって生きているかのような按配だ。まあ、フェルテン、君も家に帰りな。多分今日君は一緒の食事だ。　ー　見ろよ、君の母親は庭木戸を、この大きなチビを腕に抱えながら入って行く。それじゃ、あばよ。家では私の名が呼ばれている。君は私の父のことを承知だろう」。

土曜日のことで、午後の授業はなかった。我々はオスターベルク[復活祭山]麓のある茂みに横たわっていた。私はアンドレス家とトロッツェンドルフ家の最初の出会い、スープの夕べについて知らされた。

「そう、二人は我らの許で給食となった」とフェルテンは語った。「英語のマダムも一緒だ。マダムはドイツ語が出来る。しかし時々ドイツ語を忘れたかのような振りをしていた。娘っ子は英語しか出来ない。つまりアメリカ語だな。まこと野生の娘だ。しかし恐ろしく上品で、つまり昔はそうだったのだな。ちなみに、私の母親の方がもっと上品で、少しばかり、私の父のせいで、英語も出来る。これはまあ悪いことではない。それでかなりスムーズに進行した。ただ我が老母から、勿論こう聞かされることになった。テーブルに両肘付いて、だらしない恰好をしているのは、これからは止めなさい、とか、他にも一杯上品でないことがある、と。この娘っ子は目が異常に鋭く、口を歪めて泣き、黄色の豌豆とか、太い豆、スウェーデン蕪、人参、それにその他の我らの餌がこの娘にはまともなものに見えないらしい。この娘はムーア人の女を乳母にしていて、ムーア人の従者がいたとか。しかし最後には我が母親が娘を笑わせて、娘は私に笑いかけた。結局娘の母親だけが、

その嘆きの顔を崩さない唯一の女性だった。そして我が母親の食事の後でも、また何かのことで泣いていた。エレンとこの娘っ子は言って、ドイツ語ではヘレーネだな。そして我が母親はソファーで娘を膝に抱いて、二人を慰めていた。そこで私は姿を消した。だって午後ずっと何か我慢していることは、私には堪えられんことだからな。いや、私は、我が母親の要求するように、同情するのに吝かではない。しかしこの新しい、異国の隣人のために、その上英語までとなると、私は投げ出す。ラテン語とフランス語を学校ではまさに十分に学んでいる。同情だとよ。以前誰かが、我らに同情を抱いたか、カールヘンよ」。

「それはない」と私は言った。

「しかし我らが英語が出来なければ、あの小娘とどう話せばいいのか。我々にもあの娘をおんぶさせようとするだろう。それは確かだな。ちなみに、家を午後ずっと空けることはしないとも、約束しなければならなかった。下の我らの園亭では、一緒に仲間が集まって、同情している。君の母親も一緒だ、クルムハルト」。

さて私の思い出はまた、我々がハルトレーベンの東屋でアルキビアデスの死を上演したかの日の夕べに戻る。フォーゲルザングへのミセス・トロッツェンドルフの帰還以来、すでにその頃、数年経過していた。エレン嬢は、我らの、つまりフェルテンと私の援助により、次第に全く上手にドイツ語を習得し、(彼女にその気があるときは)、ヘレーネ、レーネ、レンヘンの呼びかけに耳を傾けて、そして　ー　我ら三人は皆、まことに真正な、然るべき生意気盛りの年頃となっていた。

このドイツ系アメリカ人娘が、愚かな、ほら吹きの、単純な鵞鳥であることを、我々二人の少年は夙に見抜いていた。そして同様に、それでもこの娘は善良な質であって、つまりこの娘の扱い方をよく弁えておれば、彼女に対し自分の望み通りのことが出来ることも承知していた。私の父は、この哀れな娘が我らに与えた印象を改善するようなことを何もしなかった。勿論私の母は、私の父の見解と変わらなかった。もっとも若干穏やかなグレードであった。ただ隣保夫人のアンドレスは、徹頭徹尾娘には同情しなければならないという意見で、この見解に対し、機会が生ずるごとに、言葉だけでなく、行為も添えた。
ー

いや、私が今考えると、この機会はまことに頻繁であった。北アメリカの合衆国からの、夫であり、父親であるトロッツェンドルフの手紙や送金よりも頻繁であった。この親父は相変わらずまた成功しそうになかった。私の父の口から、次の言葉を私は覚えている。「注意しろよ、アドルフィーネ。いつか、私の今日の言葉を思い出してくれ。やがて彼からの便りは絶えてなくなるだろう。我々とこの町、我々だけが、彼の妻と娘を背負い込んでいるのだ。本国帰還の権利といった問題ではなかろう。しかしペテン師が自分の家庭に対する義務を十分に果たしていると思い込んでいる場合とか、あるいはこちらが多分に実情に近いと思われるが、このペテン師がどこか向こうで一本の木に高く紐で吊り下げられてしまう場合、共同体はどこへ彼女らを追放したら良かろう。彼はこの地にいるとき、すでに上方出世志向であった。しかしこちらで彼に対し対処しているのは単にまともな役所や裁判官であって、アメリカの開拓者の私刑システムとは関係ないのだ」。

このような話しがその父親について話されている家では、この異国の罪人の母親も娘も、このフォーゲルザングの誠実な隣人関係に本来似付かわしいほどに快適であるとか、比較

的安全であるとは感じていなかった。すると隣保夫人アンドレスの小さな家と部屋はより快適な隠れ処となっていた。そこでは　ー　我らの許よりも、はるかに容易にどんな罪人も許されていた。これらの我が文書で、我が子孫に何か有益なことを私が残したいのであれば、私は正直に語るべきであろう。それで私自身、我が両親の許で正義の者達の一人に数えられるよりも、フェルテンの母親の許で罪人の一人に数えられるのがましに思われたと吐露しておく。

従って今一度、あの災難が生じてしまった。ここで私は今一度、遠い、書き留められなかった過去、我らの子供の日々から、文書に書き留めることになる。フォーゲルザングで火災警報が鳴ったと。私は私の父の手を襟に感じていたし、私の母は両手を揉んでいた。隣人のハルトレーベンは、夫人とその娘を次の三ヵ月の間に路地に追い出すと、この「アメリカ人ども」に脅しをかけること二十回目となっていた。　ー　「その後、滞納の家賃を誰が払ってくれようと、一切構わない」。　ー　レンヘン[ヘレーネ]・ティマンドラ[アルキビアデスの遊女]は、このような折、いつもの如く、オスターベルク[復活祭山]の森に逃げていて、名前を呼んで探しても無駄であった。主役の罪人は、その「無用の前足]をまこと亜麻仁油と脱脂綿で包んで、ソファーの隅で英雄を更に演じていて、自分の小さくない痛みを出来るだけ歯を食いしばって耐え、アマーリエ夫人は溜め息を吐いていた。

「息子よ、息子、亡き父上のことを思いなさい。また二人して涙ながらに父上の不在を思い出す今日の悪戯です。偉大な神様、まあ、フェルテン、あなたが将来どんな風になるか、ひどいあなた、誰も言えません」。

「いや、天よ、それに夫のあなた」とミセス・トロッツェンドルフは呻いた。しかしアンドレス医師夫人はただ両肩を竦めて、拒絶するように言った。

「今あなたにとって問題なのは、ハルトレーベンで、その脅しです、アガーテ」。

「あの野蛮人、恥知らず」とニューヨークはブロードウェイからの以前の百万長者夫人はすすり泣いた。「私の夫がここにいさえすれば」。

「まあ、まあ」とフェルテンの母親が言った、「夫でも余り助けにならないわよ。そうね、あの人、善良な隣人は野蛮だわ。でも本気になって、あなたと哀れな小娘とを路上に放り出しても、仕方ない面があるかもしれない。フェルテン、フェルテン、あなた方は何てことを仕出かしたのよ」。

「ふんだ」と今度は息子アンドレスが叫んだ。包帯の両手を上げて、病気の猿のようににやりと笑った。「我が父上の出番だ」。

「おまえの父親、哀れな亡き父親のこと？」とアマーリエ夫人はどもって言った。「父上は隣人のハルトレーベンとその夫人、その義理の母親の命を六回ほど救ったのだろう。馬車の車輪にハルトレーベンが引かれたとき、父上は命を蘇らせたのだろう。母上、ハルトレーベンは母上に誓ったのだろう、母上は、母上のせいばかりでなく、我が父上のせいで、いつ何時でも昼夜の別なく、ハルトレーベンの許をノックして良い、ハルトレーベンの助けを何か必要とする時には、と。ハルトレーベンも母上を必要とするときには、自分もまた母上の許へやって来ると母上に誓ったのだろう。ハルトレーベンは、いつでも母上の助言を最終的な言葉として受け入れ、母上に感謝すると」。

「でもね、人々の善意を余りに当てにしてはいけません」と隣保夫人アンドレスは、その日とても興奮し、心配したのであったが、微笑して言った。

「アマーリエ、それはまた私への当てこすりなの」と隣保夫人トロッツェンドルフは、ハンカチを準備して、この世一般の劣等さと邪悪さに対する、それにまたフェルテンの母親のに対する自分の問い質す人生嘆き節をぶちまけようとしていた。

「ハルトレーベンさんがやって来て、レンヘンを連れている」。窓からこの開放的言葉をこの「病床の一同」へ放ったのは、私であった。飛び起きて、ドアへ向かって走ったのは、病人の少年で、こう述べた。

「何故娘は叫んでいるんだ。　ー　ハルトレーベンさんがあの娘を、...」。

少年はその話しを終えられなかった。ハルトレーベンは、その「娘」にとって、つまりもう片割れの若い罪の娘にとって、元来、相応しいその家にまで連れ戻していなかった。彼はただ「強情なこのお転婆」の腕を引いて、後に従え、庭を通り、　ー　娘と一緒に[隣りの]家の中、居間に入って、トロッツェンドルフ夫人のことは一切構わず、述べた。

「医師夫人、診てやってください。思いますに、この娘も肘に醜い火傷があります。この娘はオスターベルク[復活祭山]の山上で、顔を草の中に、腕を湿った、涼しい土と苔の中に埋めていました。私は薪を運ぶために、その山上まで行ったのです。脇の茂みで、引きつったようなむせび泣きが聞こえるので、確かめに行ったのです。これが喜劇ですか。何というならず者の一味です。ご夫人、　ー　ミセス・トロッツェンドルフ、貴女もむせび泣くのを止めてください。お願いです、医師夫人、老ハルトレーベンをそんなに毛嫌いして眺めないでください。いや、そう、まずこの娘の方を見てください。そうでしょう、ひどい火傷です。この状態で森の中へ、出来るだけ皆から逃げようと、駆けて行くなんて。痛みがひどくなるほど、この強情、反抗、我が儘は一層頑固になります。いや、いや、この両人はお似合いです。医師夫人、貴女のご子息と、この変わり者の生き物、我らのレンヘン・トロッツェンドルフ嬢です。私は何も申しません。しかしこの二人が年々、近くにいて、更にもっと一緒に遊んで行くと、これは実際、殺傷撲殺の地獄絵図となりましょう」。

「私は反抗的ではありません、強情でもありません。私はただオスターベルクに昇ったの。フェルテンがまた全部を独り占めしようと思って、主役を演じようとしたから。私の方が痛かったわ。フェルテンよりももっと痛かった。カールヘンはフェルテンの正体を知っています。私は皆に泣き虫と言われたくないのよ」と今や、ヘレーネ・トロッツェンドルフは真に涙を迸らせて、両母親の手許で泣き、嗚咽した。これはつまり、本来ただ隣保夫人アンドレスの両手の許であった。というのはミセス・トロッツェンドルフは傷を見ておれなかったからで、いわんやしっかりと力強く握って、手伝うことは適わなかった。

この娘は大きな痛みに耐えた。しかし包帯をする間、娘はこの災難の戦犯少年を見据えて、地団駄踏みながら、叫んだ、「まあ、見ていなさい、愚か者。自分はいっぱしの少年と自惚れないことよ。うちらをハルトレーベンさんが、あんたの悪さのせいで、家から追い出しても、私一人がその罪を被って、また世間に出て、アメリカに渡り、私のパパを探します。でしょう、ママ。パパを見つけたら、うちらはまたフォーゲルザングに、自前の馬車に乗って戻って来て、見下ろすことにしましょう」。

「まあ、聞いておれば、まあ、言わっしゃること」とハルトレーベンはぶつぶつ言った。「それで、このお転婆さんは、私について、私が何をするとかしないとか言わっしゃる。しかしこの娘がともかくこの件のことを口にしたから、この件を申しましょう。医師夫人、ハルトレーベンの家屋敷に関しては、貴女は、フォーゲルザングの貴女として、　ー　十

分相応にご存じです。従って、賃貸住宅の契約、解約等々の件もご存じです。従って、トロッツェンドルフ夫人が私の許にいたくない場合、　ー　しかしこれは、元来、貴女の許にいたくない場合のことですから、夫人はこれを貴女と相談して履行しなければなりません。私に関しましては、夫人は大丈夫です。我々はかつての日々、実際フォーゲルザングの遊び仲間でしたし、沢山迷惑行為をしたものです。しかし私は少しばかり忠告せざるを得ません。盗賊団の首領たるムッシュー・フェルテンに対して、こちらの友人、カールヘン、カール・クルムハルトを時々、自戒用お手本にされたい、と。フォーゲルザングにまだ私が何発もお見舞いするぞと脅す必要も、待ち構える必要もない暴れん坊がいるとしたら、この子がそうです。だから、カールよ、そなたの父親殿によろしく伝えてくれ。そしてこれからも父親殿を喜ばすのだ。ミセス・トロッツェンドルフ、ハルトレーベンはその権利があれば、粗野に、まこと粗野に振る舞うことがあるかもしれません。しかし人でなしではありません。厳しく言っても無駄、宥めて言っても無駄と分かるときには、どうしたらいいか承知しています。　ー　特にレディー達に対しましては。それではお暇します。それで、トロッツェンドルフ夫人、我らの医師夫人が貴女の娘っ子を今夜そのソファーに預かるのであれば、これが最善だろうと私は思います。昔我が亡き小さなハンスをそうして頂いたこともあるのです。この娘は今夜多少少しばかりむずかって、看病が必要でしょう。しかし貴女、令夫人には、それはまこと煩わしいことでしょう。また言い過ぎましたかな。それでは、　ー　同様に良い晩を。医師夫人、これからも我々両人は変わらぬ交誼と行きましょう」。

彼は出て行った。そしてレンヘン・トロッツェンドルフは今夜の臥所を得て、続く幾夜も、アンドレスの家、まことの隣家で過ごした。

「アマーリエ、あなたには感謝します。でも私の神経が痛みます。でもあなたはやはり医師の妻で、自ら半分、女医だわね、愛しいアマーリエ」と隣保夫人アガーテはめそめそ言った。

私は隣人ハルトレーベンにスペースを割いて、彼の発言を記した。この善良な男の在るが儘の姿を私の思い出から描いて、いかに近隣友好のために尽くしていたか記すことは私にとって大事なことであった。合掌、敬虔ナル魂ヨ。彼の遺灰の穏やかならんことを。彼は幾多の教団の騎士たる上級参事官クルムハルト法学博士の形成に寄与したのであり、この騎士は、彼について、公式文書ではないけれども、文書によって、以前フォーゲルザングではいかなる具合に生活されていたか自分の子孫に伝えるため一つの印として書き留めたのである。先の原稿での私に関する彼の言葉は、この点まことに参考にならない。むしろ完全に逆であろう。隣人ハルトレーベンが我が父の息子たる私に対するその見解をこうまとめたら、大いに参考になるかもしれない。

「小僧、私がそなたであれば、昨日ズボンのポケットに両手を突っ込んで立っていて、他の二人が始末しようとするのを見守っていなかっただろうよ」と。

私はそれから実際、次回、大いに尽力して、むしろ一緒に行動した。しかし残念ながら、大抵、ジャケットやズボン、鼻や目ばかりでなく、両親の感情も、隣人ハルトレーベンの意味でのこの改善によってはなはだ傷ついた。「医師夫人」はその場合、鼻血用の洗面器や、腫れ上がった視覚器官のための湿布ばかりでなく、隣の家に穏やかに説得するお詫び

を持って[シラーの詩、『女達の品位』より]、フェルテンの表現では、「飛び込む」必要があった。

「勿論私の息子が主犯なのです、お隣の御主人、その点はご承知ください」。

我が実直な、健気な父上、我が善良な、心配症の母上。二人はまこと、フォーゲルザングで日夜、心労が絶えなかった。しかし残念ながら、地上の営みでは、自分が正当であって、いずれにせよ、正当ですと言われるであろうという確信がいくらあっても、余り慰めとならず、楽しくない。私の両親は完全に正しくて、正しいということも承知していた。しかし二人はこの知識からほとんど楽しい思い出を引き出せなかった。この知識では、両親は精出して、自らの血肉の者を出来るだけ正しい道に進ませて、かくて世の中が存続し、秩序正しく次世代へ引き渡せるように努めるしかなかった。両親は、最良の、誠実極まる、配慮を尽くした諸力を私に傾注して、かくて　ー　有り難や、私の妻と私の子供達はその教育結果に満足している状況下にある。子供らは皆、尊敬して、私の書き物机の上の老参事官殿、「祖父」を見上げて、それから私の妻も多分微笑しながらこう言うことだろう。

「ねえ、あなたは信じないかもしれないけど。でも私はこう思うの。あのママ、つまりあなたの母親が、あの肖像画の夫に反対して自分の意志を貫き通した回数は、私があなたに反対して私の意志を貫き通す回数より多かった、と。主に子供達のことに関してね」。

「いいかい、二人は世間に対してその責任も分け合っていたのだ、お嫁さん」。　ー

いやはや、そのように、書斎の机越しに、親密な冬の暖炉の側で、あるいは庭の園亭で、地上での仕事が片付いた人々について会話がなされる。その墓の上では、草が生え、その隣りにはしばらく人生でのお隣さんがやって来るけれども、結局路面電車や鉄道、あるいは最良の場合耕作の犂がその上を過ぎることになって、もはやその墓の場所も分からなくなるが[そして、もはや天には彼らの居場所がなくなった。黙示録、12.8]、それにまた墓参の人もいなくなるのである。

いや、書き物机越しに、私は今日（実眼ではないけれども）フォーゲルザングの我らの古い教会墓地を想像して見る。そこには参事官クルムハルト、その夫人、アンドレス医師とその医師夫人、それに隣人ハルトレーベンがとても近隣友好的に並んで安らっているのだが、そこに我々、私の子供達や私の妻、それに私、またフェルテン・アンドレスにヘレーネ・トロッツェンドルフがこの最良の教育者達の側に休眠地を見いだすことはないであろう。今ではこのフォーゲルザングの教会墓地も、やはりすでに煉瓦の壁とセメント工芸に囲まれている。当時の昔は、完全にまだ草の中にあって、生木の生垣が周りに見られた。高い木々が影を投げかけ、まだ小鳥の歌声が聞こえた。　ー　当時は小夜啼鳥もいた。そして我々は森へ登る道が余りに陽射しがきつくないとき、ここでシラーやゲーテではなく（これらは、フェルテンの表現では馬に念仏であり）、父のアレクサンドル・デュマを読み、彼同様に、世界を三銃士で征服したのである。

すると、　ー

その門前にスフィンクスが横たわっていた。
恐怖と悦楽のふたなり[半陰陽]で、
体と前足は獅子の如く、
頭部と胸は女人に等しい。[ハイネ、『歌の本』、第三版序、以下井上正蔵訳]

[その門前に伏すスフィンクス
恐怖と快楽こもごも抱き
からだと肢は獅子をかたどり
あたまと胸は女人のすがた]

すると、　ー

小夜啼鳥は歌った、愛よ、美しいスフィンクスよ、
説明されよ、何故御身は、
御身のすべての至福に、
死の苦しみを混入するのか。[ハイネ、『歌の本』、以下井上正蔵訳]

[小夜啼鳥の歌って言うには
「おお　スフィンクス聞かせておくれ
愛の快楽のそのいやはてに
死の苦しみを与えるわけを」]

たとえ、世のすべての学校教師が逆立ちしようと、あるいはむしろ説教壇にしっかりと腰を下ろそうと、彼らは十六歳から二十歳までの生徒世界を道徳的倫理的政治的に純化した詞華集で征服出来はしない。「ナンセンス」、月光、「軽薄な没趣味」、それに小夜啼鳥、「うつけ心」、リンデンの香り、遠方の閃光、月光の中の薄い夏服の可愛い乙女、ローレライならその支持を得られよう。鏡[純化した詞華集]は結構なものである、しかしその背後の鞭はいただけない。....

「フェルテン、雷雨になりそうだ」と私は言った。我々はこの時、月光の中、ある墓の側に立っていた。その墓の簡素な石には、金箔の文字で、医学博士ヴァレンティーン・アンドレスの名前が、生年と没年の年月日と共に記されていて、フェルテン・アンドレスは笑っていた。

「構わないよ、

海の死人は気にしない、
すでに十分に濡れている」。

これはまた、この年頃の者達が好んで引用する詩人[Ferdinand Freiligrath、『海の死者達』1834]からのものだが、もっともこの引用は全く場違いなものである。これは教師先生には古典作家とは認められないフェルディナント・フライリヒラート作のもので、彼本人が古典作家と称しないだろうが、しかし彼は数十万人の、数百万人の無数の学童達に、『エグモント』や『イフィゲーニエ』、『トルクヴァート・タッソー』の詩人[ゲーテ]よりも大きな影響力を有する作家である。

フェルテンは元来単に彼の母親の話しから自分の父親のことを知っているに過ぎない。

「父はただ母と私のために死と関わる仕事をしたに過ぎない。父自身のためではない」とその父の息子は語った、「この在宅の英雄がこの墓地の我らの許に愚かな雷雨を連れて来るなんて。君は勇敢に家まで戻って、老両親が君をまた手放すのであれば、雨傘を一本

持って来てくれ。お嬢と私はこちらに残る。骨の髄までずぶ濡れになってもな。すごい。優しいルーナ[月]が顔を隠し、シェードラー[1813-1884]の『自然の書』に書かれているような結構な按配だ。レンヘン、急いで家に帰れ。そなたの老母のことは良く分かっている。ほんの些細な雷鳴でも悲鳴を上げる人だ。そなたが明日鼻風邪にでもなろうものなら、勿論ただ我が老母と私だけのせいにされよう」。

「私は笑われたくありません」とヘレーネは言った。そしてアンドレス医師の墓石の側にある半ば朽ちた墓石に腰を下ろした。「あなたが言ったように、私はここに残ります。でも私は一人っきりで残ります。自惚れないで、ぼけなす、あなたは明日私のことで自慢したいのでしょう。カールヘン、この人の腕を取って、この人のママのところまで引っ張って行きなさい。いいえ、私はこちらに残ります。そして私の父親のことを思います。ー　私にあなた方の死人や阿呆な天候が、何の関係がありましょう。アメリカでは全く違います。私の父親がうちらをまた迎えに来さえすれば、　ー　いやだ、恐、フェルテン」。

彼女はその反抗的言葉にもかかわらず、小さな叫び声を上げた。最初のどぎつい稲光のせいか、天上からの閃光に素早く続く雷鳴のせいであった。彼女はにわか雨に対しても首を竦めたが、しかし歯を食いしばって、その場に留まっていた。

「レンヘン、阿呆なこと止めて、一緒に帰ろう」。

「いや」。

「カールのためにそうしろ。この哀れな奴は、晴着をだめにして帰ったら、小言を何週間も聞かされるから、その小言にびびっているのだ」。

「カールは帰ればいいのよ。二人とも行って構いません。私は自分一人でも道は分かります。私はアメリカにいる父のことを思います。他にはここに誰も必要ありません。私の母は言っています。父が来たら、こちらの皆よりも、父はもっと金持ちで、もっと上品で、もっと強いのだ、と」。

「まこと、霰が混じっている。カール、これはやばい」とフェルテンはぶつぶつ言った。「ミス・エレンよ、天気が良いときには、そなたが童話の王女様を気取っても、何も反対しない。しかし今は無駄話しを止めろ。言うことを聞かないと、力ずくだとゲーテは言っている[もし来ずば、われは力に訴えん。ゲーテ『魔王』より、山口四郎訳]。そこで、可愛い娘よ、ー

一匹のドブネズミと一匹のヒキガエルが、
ある晩遅く、一緒に
急な山を登りました」。[Lichtwer、1719-83、『ヒキガエルとドブネズミ』]

十六歳のペトルーチオ[シェークスピア『じゃじゃ馬ならし』の人物]は上着を脱いで、それを小娘に、この、両腕で自分の野生的空想的頭をぱらぱら降って来る霰や驟雨の来襲に対抗している小娘に投げ与え、この余り抵抗しない小娘を拾い上げて、更に二級生用古典作家から引用を続けた。

「するとドブネズミはヒキガエルに言いました。
何故今晩遅くに、

この急な山をのぼるのですか、と」。

そして付け加えた。「本来はしかし逆だな、ヒキガエルが言ったのだ。いや、ヒキガエル、じたばたしなされ、小さな、お化けヒキガエルよ。今晩は我らはまだドイツでござる。そなたのママの北アメリカの合衆国とか、その他の偉いさんは、そうだな　ー　行こうぜ」。

ヘレネとフェルテンがどのようにその母親から迎えられたか、私の文書には残っていない。私自身に関しては、私の父は多分こう言ったことだろう。

「そろそろこんな愚行も止める潮時だな。教会墓地で馬鹿騒ぎだと。ちなみにそなたも大部前から、まこと余計な読書に精出しているように見えるぞ、有害だとは言わんが。そなたの現実的な諸本を大事にしろ。かなり昔の詩人でも構わん。しかしそんな愚かな長編小説や、所謂当世の詩人は、家に置くな、息子よ。隣の家で分別を持って話そうとしても無駄だ。隣りでは次第に阿呆話しが盛んとなろう。しかしここ我が家では、分別は分別、センスはセンス、ナンセンスはナンセンス、俗悪は俗悪だ。アドルフィーネ、そなたの意見は？」

「あの少年は骨の髄まで濡れたに違いありません。あの少年が部屋に入るとまこと洪水のようでした。でも、息子のあなた、あなたが少なくとも無事に帰って来たのは、有り難いことです。まだ私は体が震える思いです。　ー　庭は霰や雷雨の後、綺麗に見えるけど。さあ、自分の部屋で、乾いたものを着て来なさい、とりわけスリッパを履いてね」。

私がいそいそとスリッパや「乾いたもの」を、我が哀れな善良な母親の助言に従って、身に着けたであろうことに関し、これらの紙片の読者は私への不快な印象を持たれたであろうか。

私はそうは思わない。

何と色々なものが人間を教育することか。両親の不安や夢の願望は、何と他の様々な希望や危惧によって台無しにされ、余計なことと見なされることか、あるいはせいぜい地上生活における多かれ少なかれ快適な時間潰しと見なされることか。

私は良い忠告を受けた息子として、中年の分別盛りの男として、一廉の家父長として、「声望ある」高級国家公務員として、今日更にフォーゲルザングについて話し、まず最初に、我々は、我らの立派なギムナジウムの最良のラテン人やギリシア人ではないにしても、最良のイギリス人であったと報告したい。国家のこの教育科目のため支給を受けていた高等学校教諭の博士殿のお蔭であったわけではない。彼は丸半年間、「ロンドン」に滞在していたのであるが。これはただ唯一、この「小柄なアメリカ人お転婆」のお蔭であって、彼女がまずフォーゲルザングの我々に呆気に取られる啓示をもたらしたのである。つまりこうした無用の諸言語は、文法書や諸本の中で、惨めにも死んでいるばかりでなく、現実に、またまこと生き生きと使用されているのであって、祖国ドイツの外部の多様な民族の間で、毎日使用され、かくてフォーゲルザングの我々を「畏怖させる」ものであると啓示したのである。

「私は畏怖させられはしない。辞書でnastyを引いてみな」とフェルテンは言った。これは我ら二級生の月光と驟雨のかの夕べ、ポケットと脳と心にハイネやガイベル、それに

ウーラントを忍ばせているかの夕べよりかなり以前のことである。「Boyは少年とか若造等々のことだ、それは私も知っている。しかしあの娘はnasty boy[不潔な少年]と言って、舌を突き出したのだ。その単語が見つからないなら、私にその本を貸してみろ」。

彼は辞書を私の手から奪って、その単語を見つけた。そして　ー　この時から、シェークスピア、バイロン、その他の大小の作家までは再びまたほんの一歩に過ぎなかったのである。

我々が一級生になったとき、ミス・エレン・トロッツェンドルフはとても可愛らしい、賢しらな、我が儘なドイツ人お転婆娘に成長した。しかし自分の英語あるいはアメリカ語をかなり忘れてしまっていた。しかし我々は忘れなかった。フェルテンは優秀で、私は平均的であった。しかしそれでも立派な卒業成績取得のためには、この点、十分に完璧であった。ミセス・トロッツェンドルフは、ニューヨークで取得したフレーズを持参して来ていたが、その程度に留まっていた。ちなみに夫人は、フォーゲルザングの人々に言わせると、年月の経過で、自分の不如意に対して何も出来ない哀れな人物から次第に、完全な痴女になっていた。彼女はこのことにさえ本来責任はなかったが、しかしフォーゲルザングの人々はこの点弁解も許さなかった。例外は隣保夫人アンドレスで、彼女は同情して辛抱強くこう言い続けた。

「哀れなアガーテ」

その通り、我々は皆「哀れなアガーテ」に苦労させられた。各人各様である。最良の具合に苦労したのはアンドレス医師夫人で、最悪の具合に苦労したのはこの本当に哀れなこの女性の実の娘であった。フォーゲルザングの人々がその娘の周りをすべてのニュアンス、陰影、ぼかしでもって包まなければ、何という痴女になっていたことであろうか。ヘレーネ・トロッツェンドルフ、ムンゴー夫人が私にベルリンから寄こした手紙を、私がまた手にしたとき、何というイメージや考えが浮かんで来たことであろう。私はこの手紙を読んで、自分の人生の思い出をこれらの紙片に書き留める気になったのである。

我々が、つまりフェルテンと私が、フェルテンの表現では、いつもの長靴を履き続けていたとき、我らの小娘は、グリム兄弟の童話に見られる魔法をかけられた王女様のように成長した。彼女は賢くて美しかったが、更に一層、賢く、美しくなった。しかし彼女は襤褸を着て、野生の森をただのシャツ姿でさまよい、素足でキッチン用の水汲みに行き、ヒースの野原で鵞鳥番の娘として金髪を梳らなければならなかった。それに残念ながら彼女はフォーゲルザングで魔法にかけられていても、愛しい伝説の惨めな境遇の王女様のようには辛抱強くなかった。オスターベルク[復活祭山]の木々の快適な小枝に彼女も時折、千匹皮[グリム童話、王様に愛される実の娘、毛むくじゃら姫]として止まる場合があった。しかしまたしてもフェルテンの可愛く、的確な表現によると、「その毛はただ内側に張られていた」。彼女を後悔や、感動、屈服の涙へと強いたい者は、上手に始めなければならず、それが出来るのはただ隣保母親のアンドレスだけであった。憤激や邪悪さの涙を彼女から絞り出すのは、全く容易で、この「冗談」は、この母親の息子、フェルテン・アンドレスが行ったが、ただ余りに頻繁であった。ヘレーネ・トロッツェンドルフがフォーゲルザングからその父親の王国へ後々持参した良きものは、その大部分が単にこの両人を徳とするものであった。　ー

「まあ向こうの人々の声のやかましいこと」とこの時期、私の父が言った。日曜日の午

後、園亭でのコーヒーのとき、新聞から目を上げて、言った。「また医師夫人の許では、喧嘩騒ぎだ。　ー　冗談なのか、本気なのか、知らん。通行人は立ち止まり、近所の人は窓から身を乗り出す、それももっともなことだ。あのアマーリエ夫人は笑い声を上げている。二人はもはや子供ではないと夫人も気付きそうなものだが。息子よ、息子、そなたにはせめて無事大学に入って貰いたい。まず覗いてみな、嫁さんよ、そして二人がまた何を仕出かしたのか、そなたのアマーリエに尋ねてみな。　ー　実に、この騒ぎは耐え難い」。

その通り、騒ぎは耐え難い、主に私にとって耐え難い、というのはそのより良い教育や監視にもかかわらず、いやまさにこれが故に、私も一緒に騒ぎたかったであろうからである。しかし　ー

「あなた達、何をしているの」と私の母は、編み物道具を下に置いて、隣の生垣越しに尋ねた。すると彼らが現れて、エレン嬢とフェルテン・アドレスは真っ赤な顔をして、その背後に母親達が見え、ミセス・トロッツェンドルフは涙を流し、　ー　そして医師夫人が、ミセスの肩越しに、いつもの微笑を浮かべながら、言った。

「いえ、ここからまたお言葉を頂く潮時となっています。隣人のクルムハルトさん、分別あるお言葉を話してください。私の分はすっかり話して空になってしまいました」。

その前日に北アメリカから一枚の百ドル紙幣がフォーゲルザングに届いて、ミセス・A・トロッツェンドルフは近所での昔からの借金を清算せずに、早速この日曜日の午後、彼女の分別を発揮させて、フェルテンの賢しらな、恥知らずの説得にもかかわらず、アマーリエ夫人の頭を振っての反対や微笑にもかかわらず、いや夫人の高笑いにもかかわらず、彼女の主張を通し、守ったのである。

夫人、アマーリエ・アンドレス・ドクトル夫人は、その生涯を通じて、とても愛らしい、しかし多義的な高笑いを堅持していた。しかしこの日、その高笑いは、私の健気な父の素っ気ない実直な真面目さ同様、このドイツ系アメリカ人夫人にさほど影響を与えるものでなかった。

海の浮き沈みの中で、第九の波は、多分に神々と幸運の波であろう。そしてこれが風の助けを借りて、水面に本当に生ずる場合、人間生活の浮き沈みの中でも、このような九番目の波が勇敢な泳ぎ手を高みに持ち上げないことがあろうか。時折フォーゲルザングに合衆国から届けられる手紙によれば、チャールズ・トロッツェンドルフ氏は、第八の波とまでは行かないが、少なくともまた第七の波に乗っていて、高みにあった。「彼が哀れな者達、痴女の妻とその娘とを、すっかり投げ出したわけではなく、二人のために姿を消していることは、勿論私には奇蹟的なことに思われる。しかし彼はペテン師であったし、今でもペテン師だ。彼の送金に何が付随していようと、それをすべて私の良心に関係させるわけに行かない」と私の父は言っていた。しかし、　ー

「まあ、親愛なるクルムハルト、最良の隣人のお方」と今や隣保夫人アガーテが叫んだ、「私のチャールズのことよ。私の哀れな素晴らしいチャールズ、私の唯一の夫のことです。私には良く分かっていました、こちらの人々がどのように夫のことを考えているか。この長い、悲しい年月の間、私が気付かなかったとでもお思いですか。言葉では言われなくても、他の遣り方はいくらでもあります。ところがこう書いて来たのです。我々は出直せる、再び蝸牛は触角を出せるぞ、実際そうしている、と。エリー、明後日はきっとお針子が顔を出すのよね。いやね、私が皆様の許に心も弾んで伺っても、皆様は座ったまま、私の幸

せに顔をお顰めになります。ある人はある人なりに、別の人は別の人なりに渋くなります。それで私はほんとに感謝の気持ちが湧いて来て、どれほど皆様の善意に支えられているか肌身に染みます。でもまた私はこうも承知しています。チャールズはきっと皆様に私の借りた分、彼の借りた分を清算するであろう、と。これで、私も、私の哀れな娘も、体にまとっている哀れな代物でお代の検算をする必要もなくなりましょう。それで、ねえ、アマーリエ、ハルトレーベンに対して、差し当たり、まだ、この恐ろしい宿を引き払うとか、町のもっと上品な住まいを見てみたいとか告げないことにします。エレンに聞いても分かることです、私ども二人がフォーゲルザングでどういう目に遭っているか、少なくともこれまでの扱いはどうであったか。後ちょっとの辛抱だ、と夫は書いています。有り難や、だから、お願い、あなた方もどうかほんのしばらく私どもを辛抱してみていてください。皆様を後々向こうで歓迎します。特にあなたに、親愛なるフェルテン言っておきます。勿論あなたのことです。まあ、顔をしかめて、エレンの袖をつまんで引っ張りなさい。この娘は、残念ながら、空腹と苦悶の中で、忘れてしまっているのです、父親と母親のお蔭で、自分は本来何という別世界の人間であることか、を。立派なクルムハルトさん、この観点で、貴方はすっかり私に賛同されましょう、つまり今この善良なアマーリエにあけすけに打ち明けて、この若い男、彼女の息子、我らの善良なフェルテンは、　ー　言うなれば、その環境に対し必ずしも最良の影響をもたらす者ではないと述べる場合です。親愛なるフェルテン、ただ顔をしかめたり、洒落た滑稽な意見を述べたり、その他この種のことで世間は渡れません。後で本当にひょっとして一度ブロードウェイの私どものところにいらしたら、私の素晴らしい夫、エレンの父親がですね、　ー　いえ、大きな世界そのものが、あなたにもっと明確に教えてくれましょう、私がここで教えたいと思っている以上のことを」。

この夏の日曜日の午後は、本来全くフォーゲルザング風に心地良く始まっていたが、またしてもまこと不愉快な結末となった。隣保夫人トロッツェンドルフはとても勘違いをしていて、その思いがけない自分の指摘と哀れなフェルテン攻撃によって、夫人のその他の考え方や、そもそも自分の人生観に対して私の父の賛同を得られると思っていた。

真面目で立派な父にとって、我が最良の友は幾多の点でまともとは言えなかったが、しかしそもそもミセス・アガーテ・トロッツェンドルフとか、それどころか夫のチャールズ・トロッツェンドルフは何一つまともとは言えなかったのである。

さて、このチャールズに関しては、ほとんどいつも放擲するような手の仕草と、長い、煙草の煙の吹き上げで、上級裁判所書記クルムハルトは、このチャールズを完全永久に、空間や時間、因果律から十分に追放できた。

父は要請を受けたので、我が亡き父は、言葉を引き受けて、隣保夫人アガーテに自分の意見を述べて、周辺のすべての友人達の心に銘記された。名誉毀損の廉で訴えられる恐れは皆目生じないような具合に、彼は夫人をかつてフォーゲルザングの調和をそのギャアギャアの鳴き声で乱した鵞鳥どもの中で、最も阿呆な、最も始末に負えない鵞鳥と断じた。父自身は、希望を抱くことはあったろうが、しかし幻想を抱いたことはなく、それで隣人の者の諸幻想は全く不可解なもので、従って理解できなかった。父自身が多かれ少なかれ乏しくアメリカから届く紙幣や手形をドイツの金に両替しなければならなかったが、しかし父は根本的にその金をまともには信じていず、大西洋間の電信が、父とドイツの検察以

前に銀行に届いている筈で、　ー　それもラケダイモン[ラコーニッシュ、スパルタ]風に簡潔に言えば、ペテンという一語であるという感じを抱いていた。父は熱心な新聞読者で、世の中には珍しい事が生じて、珍しい人々が奇妙な幸運に恵まれることがある、それは北アメリカの合衆国ばかりでなく、ドイツの祖国でもそうであると知っていた。しかし父は古参の同級生、チャールズ・トロッツェンドルフのことを、ドイツの祖国でも、北アメリカの合衆国でも信じていなかった。否認にも幻想はある。我らの　ー　この地上の生活での錯覚は、そもそも奇妙な形態や色合いを帯びるものであろう。　ー

園亭のこの狼狽した一群れは、今日でも如何にも明確に私の眼前に残っている。ミセス・トロッツェンドルフは子供っぽく流涕しており、ヘレーネは反抗的流涕である。私の母親は抑制され、当惑した流涕であるが、しかし全く、全体「父の見解」と変わらない。友のフェルテンは片目をつむって、もう一方の目はエレン嬢を見つめているが、全体以下のような顔をしている。「主なる神よ、こんなに素敵な天候と快適な世の中というのに、心ここにあらずという風ですぞ」。そして今回もフォーゲルザングに唯一、完全に匹敵する女性は、「我らのアマーリエ」、彼の母親、隣人ハルトレーベンの言う医師夫人、　ードクトル夫人のアマーリエ・アンドレスである。

根本的には彼女が皆の中で、私の父も尊敬している唯一の女性であり、父が言葉を発して、夫人がその後語るとか、父が耳を傾けるという女性であった。父は「家庭の友」として、彼女に対しても、「当てにならない女ども」という言葉をよく歯の奥で呟くものであったが。夫人は今や、「自分の」娘、　ー　自分の「愚かな息子」ではなく、「向こうから、世界の海を渡って来た哀れな小娘」を引き寄せて、語った。

「親愛なる隣人、クルムハルトさん、お願いです、　ー　でも皆さん、皆さんは何という人々でしょう。それぞれが自分の観点の正しさを主張しては、こちらで相互理解が出来ますでしょうか。最良のアガーテ、私やそれに哀れなフェルテンは、これまでの長い、悲しい年月、こちらの、私どもの家庭の物分かりの良い誠実な友、家庭の友がいなければ、途方に暮れていたことでしょう。それでもどんなに忘恩な振る舞いをしたことでしょう。この方よりうちらの方がまだ良く分かっていたと何度言い張ろうとしたことでしょう。いえ、隣人のクルムハルトさん、貴方がこのようなろくでもない空想家の一同の中に配置され、辛抱なさらなければならなかったのは、まさに貴方の運命です。私は何度、眠れぬ夜、自分を非難したことでしょう。アマーリエ、根本的に一番劣等なのは、おまえだ、と。アガーテ・トロッツェンドルフでさえも、おまえほど、そんなに妄想の雲に乗って、フォーゲルザングの上、青空の中、さまよいはしないのに、と。そこで私はお詫びを探しましたが、最良のお詫びはただ墓地で見つかりました。そこの縁の塚の下に眠っている愛しい夫が、おまえをそんなに甘やかさないで、自分と一緒に天の高みへ引き上げていたら、おまえはもっと理性的に、もっと分別して、日々の事柄、案件に対処し、おまえのフェルテンをもっと良く教育し、上級参事官殿をがっかりさせることが少なかっただろうに、と。ご覧なさい、最良の隣人のお方、しかしこのお詫びは私の改善、フェルテンの改善に関し、まさにその真逆を引き起こしました。私は比較的気楽に涙を拭くことになって、その後横になると良心が安堵して、眠り込むのです。それで、私どもはここで突然、一般的告解の状況に陥っているわけですが、私が言えますことはただ、私はこのような良心呵責の夜の後では、いつも貴方に対するあらゆる種類の、貴方にとっては極めて面白くない反論を抱

いてしまうということです、最良の、誠実な友の方。それで、申しましたように、貴方はまさに私どもに対して、これまでの厳しい年月をずっと辛抱なさらなければならなかったのです。この年月、お隣の御主人、貴方が広大な世界の中、間近の隣人として、私どもの唯一の、誠実な、行き届いた男性支援者だったのです。貴方は頭を振っておられます。私がここで、こんな素敵な日曜日の夕べ、お喋りを始めて、終わり方を知らず、これからアガーテのことに話しが及ぶからでしょう。いや、お隣の方、まずこの私をご覧ください。アガーテに対し、この私が、私に対する貴方のように、いわば空しい誠実な家庭の友の役を演じたわけです。お隣の御主人、貴方の意味で私はアガーテに分別を説き、何の効果も上げられなかったのです。丁度今も貴方自身こちらでお耳にされた通りです。その結果や如何。いつもに同じです。私が貴方に対するが如く、政府書記官殿、半ば涙の洪水で、半ば十本の広げられた、哀れな、防御出来ない、愚かな女の爪です。全く私と同じです。ただ小さな、全く小さな違いがあります。アガーテは相変わらずあり得ない、一つの幸運を信じています。私はただ生来の弱さと、不安症から、辛抱可能な時間を時々台無しにされたくないだけなのです。いや、実際、私ども二人の女にとって、私は我がフェルテンを家から追い出し、アガーテはその愛する娘を預けることにして、より良い躾けとより厳しい監督下に置くことにしたら、その方がもっと良いことかもしれません。でもアガーテは、そのヘレーネを実の父親のために手許に置いておきたいし、私は自問せざるを得ません。亡きヴァレンティーンはこれについてどう言うだろうか、と。亡き父親は、おまえと、おまえのフェルテンに何と言うだろうか、と。するとアガーテに対しても私の手からすべての武器が奪われてしまいます。いや、お隣のお方、貴方は頭を振られることでしょう。貴方の仰有る通りです。私どもは一人の後見人を必要としています。私どもの場合のように、子供や夫のことが、私ども哀れな女にとって関与している時も、いや、特にその時、後見人が必要です。勿論まさにその折に後見人役を演じなければならないというのは、少しも感謝されない仕事です。実際私相手に、残念ながら貴方はこのことを何千回も経験済みです。隣人のクルムハルトさん、それで」　ー　云々、云々と更にかなりの間続いた。

しかし私の父もすでにかなりの間、頭を両手で支えていた、両手で耳を抑えていたと言うべきではなかろうから。彼女、ドクトル夫人アマーリエ・アンドレスが言いたいこと、これを父は多分に承知していた。しかし彼女が展開して行く話しは、木々を越えて、家の庭園ばかりでなく、フォーゲルザング全体に広がった。その上子供達が、　ー　居合わせており、　ー　これらは若い人間で、彼らはこの園亭説教を聞かされて、この説教をいつの日か、人生の無益な愚行を犯したとき、引き合いに出せるのであった。

ただ、ならず者のフェルテンを眺めさえすれば良かった。フェルテンは外面的には喜劇役者めいた死刑囚の顔をし、内面的には、自分の「素晴らしい老母」を愛で、真面目で、誠実に述べる家庭の友を虚仮にし、阿呆と見なしていた。

その上、フォーゲルザング出身の、禁治産宣告に値するアメリカ人母親によって甘やかされたお転婆までいた。今日ハルトレーベンは、この若い娘を、鞭で自分の大事な梨の木から下に下ろしたかと思うと、明日は彼の収穫物をすべて入れた籠とその上に添えられた花束を持って、彼女自ら彼の屋敷にある自分の屋根裏部屋に運び上げさせるのであった。この「小さな猿」は、この若い身空でも一人の男を、その生来の「所作」と人生の万事無益なことから習得した所作により、絶望に導くことが出来た。その習得は、母親の教育の

成果か、ファッション誌や、貸本屋の読書の成果か、森や畑でのフォーゲルザングのすべての若いろくでなし達との付き合いの成果か、どうでもいいことである。　ーー

私はある日曜日のこの午後を、数百もの同様の中から、単に夏ばかりでなく、他の四季の場合もあったのだが、文書風ではなくても、文書の中から出来るだけ明確に色鮮やかに紙面に記した。従ってまだ記述すべく残っているのは、いかに私の父親が、自分の持ち物、つまりパイプや煙草箱、新聞、官報を手に取って、常に、女性のわめき声や愚かさ、悲鳴で耳の聾した、そして湿ったハンカチとあきれる愚行により一切の明晰さを奪われた家父長、家庭の友、善意の隣人として、夏、園亭を去り、冬、家庭の居間を去り、一階段上の自らの世界へ引っ込み、大抵私を一緒に連れて行ったか、その様子を描くことである。私は委細を省く。しかし私は今日でも上腕部に父親の握りを感ずる。私はこの陰気な風と霜の月、ムンゴー夫人の手紙を眼前に、かの無邪気で、至福の、日光に照らされた時代を振り返って考える。それからまた私は、私の書き物机の上の老紳士の写真を、若干の良心の痛みを感じながら、見上げ、そして、　ー　父親の憤然とした、しかし誠実な拳を自分の腕に感じ取るのを、まこと忘れたくないと思っている。更に続く生涯の間ずっと。

しかしながら。いかなる嫌悪感、反抗心、多少とも明確な抵抗心と共に、私はかの時代、単なる思い出となる以前、私はかの善良な握りを甘受していたことか。いかにしばしば私は父から自由になろうとし、そしてこのフォーゲルザングの二人の友と一緒にフォーゲルザングへ、またオスターベルクへ、低地から高地へ、平日から日曜日へ、ギリシア語とラテン語文法から、千夜一夜へ、ヴェガ[Vega、1754-1802]対数から、数学や代数から、時間と空間の一致した現実世界へ、フェルテン・アンドレスとヘレーネ・トロッツェンドルフの時空のない青春空想世界へ往還していた。

オスターベルクへ我々三人はまた一緒にかの日曜日の晩､登っていた。私が丁度記した嵐のような家庭の午後、隣人同士の日曜日午後に続く夕べのことである。他の二人はいつものように、独自の道を進んでいて、私はこっそりと若干遅れて行った。私はフェルテンの秘かな合図、知らせに従っていた。森自体すでに当時、上方でかなり手入れの良い小道が通じていて、湯治場で今日「プロムナード」と呼ばれるものになっていた。ここかしこにそれどころか、すでに人類の自然愛好家や慈善家がベンチを置いていた。大方は森の中や藪の中であったが、しかし一つか二つ、この丘の縁にもあって、谷や、愛する故郷の町、高貴な領主の宮殿も眺められた。この宮殿は半ば谷の中、半ば平野部にあった。

森の縁のこのベンチの上、自然のこの全く深い平和の中、今回もまた私はこの二人のひどい騒擾者を見つけた。罪深い若者はその一方の端に押し付けられ、罪深い娘は別の端の方で、かくて完全に中央部に善良な友たる私にとって、席が残っていた。暦には新月が記載されていて、この夕方はかなり暗かった。上の個別の星は数えられなかった。ただ深みにある町の明かりとその通りや広場のガス燈が目に着く明かりを放っていた。領主の宮殿では､「何事かが起きた」かのように見えた。というのはこの宮殿は、それどころか、とても明るく温かい夏の夜の中でも輝いていて、オスターベルクからも眺められたからである。森の中は静かであった。夜間森の中で目覚め、人に察知されていたであろう野獣はもはや森に存在しなかった。我々の周りを飛んでいたコウモリの数は静かで数えられる数で

なく、その優しい翼は自然の平和を乱していなかった。ただ時折機関車の汽笛や蒸気の音が聞こえ、三軒のビヤ・ガーデンやコンサート場から最後のウインナ・ワルツや『タンホイザー』からの大行進曲、『ホーエンフリートベルク行進曲』が調和的に混じり合って聞こえ、ここ上の方の夕方の平穏を少しばかり乱していた。

「そうか、君達はまたここか」。

「その通り、君も来てくれて有り難い、敬虔な息子、カールよ。有徳かぶれよ。ここでこの娘と五分間であれ、二人っきりでは保ちそうになかった。全く困った代物だ。下の家でのあの騒ぎ、騒動、お喋り、戯言がこの娘の神経に障っている。その通り、クルムハルトよ、我々はまさに君を必要としている。私は我が母親の遣り方では彼女の役に立てないので、君が君の父親殿の遣り方で試みてくれ。君自身の脳を使って、彼女に分別を説いてくれ。我らの母親は、　ー　つまり我が母親と彼女の母親は、　ー　奇妙な植物を育ててしまった。クルムハルトよ、聞いてやるんだ、聞いてやるんだ。いや、エリー、　ー　エレン・トロッツェンドルフ嬢よ、話し続けろ。フォーゲルザングのお隣さんは、皆傾聴するぞ」。

「フェルテン、あなたに母親がいなければ、私はあなたを、　ー　私はあなたを、　ー」。

「絞め殺し、窒息させ、毒殺し、いずれにせよ両手の爪で頭の毛を掴んで、両手に頭皮を持って、山を下り、家に駆け戻るわ。では、スクウォー[インディアン女性]嬢、我が頭皮に手を伸ばし、剥がし給え、残りの皮も剥がして構わん。私は何も気にしない」。

私が二人の間に身を置く潮時であった。というのはヘレンヘンは、立った今呈示された許可に関し、完全に遂行する用意があったからである。フォーゲルザングの彼女の最良の友が、彼女の好きにしろとそのもじゃもじゃ頭を差し出していた。しかし彼女はただベンチから飛び出して、我らの前、オスターベルクの縁に立って、我らに拳を振り回し、食いしばった歯の間から、嗚咽しつつ、泣き言を言った。

「でも私は私の父親を信じています。皆さんは好きなように言いなさい。鼻を歪めたり、皺を寄せたりし、頭を振りなさい。私のママのことをとろい女と好きに言いなさい。でも私は私のママを信じています。それに私の哀れな父親を信じています。父親は何をしようと良いのです。ここフォーゲルザングの皆さんが父の何を知っているかしら。私はただの襁褓の赤ん坊としてこちらに連れて来られたけど、あなた方皆より現実世界のことをもっと知っています。　ー　フェルテン、あなたの母親は別よ。でもあの人もメルヘンの王妃様です、　ー　そこの下界の、下の方の滑稽な領主宮殿の小さな妃殿下よりも、はるかに高貴な王妃様です。あれがその窓で、　ー　ご覧なさい、　ー　それで私の鏡のホールもいつか輝くことになって、それもはるかにもっと明るく輝くのです。あなたの母親は頭上にシャンデリアを必要としないし、トルコの絨毯も必要としません。仮にあなたの母親が私の母親で、私はその子供であったら、私もシャンデリアや絨毯も欲しがらないでしょう。でも今私は私の父親と母親の子供であって、自由な共和国主義者、アメリカ人女性です。私は自分の父親を信じていて、私もやはり自分のサロンを持ちたいし、従者、黒人や白人の従者、小間使い、高い窓、シャンデリア、絨毯、乗馬用馬、馬車、馬、劇場での自分の桟敷席、その他の諸々一切を持ちたい。そうね、だからさっさと帰って、フェルテン、そしてあなたの母親に私の話したことを話しなさい。でもこのことも、伝えて、私は叫ばざるを得ない、と。何故かは分からないけど、ただあなた達皆がそのように仕向けたせい、

人それぞれに仕向けたせいなのです。いや、神様、私は何と哀れな娘で、この世で何とかくも不幸なのでしょう」。...

一年前であれば、まだフェルテン・アンドレスは、この「天上的洒落」か、この「素晴らしい喜劇」かのせいで、満足の余り甲高い声を上げて、オスターベルクのベンチの前で逆立ちをしていたことだろう。彼はもはや笑わず、もはや飛び上がらず、私の父親よりももっと鋭く私の腕を握って言った。やはり歯を食いしばっていた。

「聞いてやるのだ、育ちの最も良い、大事に育てられた、我ら一同の中で最も分別臭く、賢人ぶった若造よ、　ー　一同と言っても何も下の公爵領領主町のことではない。フォーゲルザングが、私の母親と君の父親が、　ー　それに私が、この蚊や蛾で一杯の頭の娘を落ち着かせるために何が出来よう。勿論その素晴らしい展望を有するパパ・トロッツェンドルフ万歳だ、パパ自身のために、レンヘンのために、我らの最も素晴らしい最良の女性、レンヘンのママのために万歳だ。しかし捕獲していない魚は焼けないとすでに賢いキケロが満員の元老院で我が愛する友カティリナに向かって言った。[カティリナ弾劾、しかし引用は創作]。だから、　ー　風変わりなお姉さん、おまえのベンチの箇所に、健気なカールの横、私は差し当たりまた腰掛けることにしよう。何だと、座る気はないのか。今日私は怒ってばかりであったが、それでもまだ足りないのか。見ろよ、猫みたいに闇の中、目が光っているぞ。何だと、こちらの原生林の中に消えたいのか。それとも倒けつ転びつ、ハルトレーベンの家屋敷、自宅へ帰りたいのか。そうか、では私もズボンのポケットから手をだして、立ち上がってもいいぞ。私もおまえと世間に対し、立って説教が出来よう、そうするか、おい」。

すると彼は、飛び起きず、ゆっくりと立ち上がった。すると彼女は実際彼の前で、身を屈め、彼が彼女の肩を押さえつける必要はなかった。そして彼女は「馬鹿な人」と言って、ベンチの自分の席、私の横に再び腰掛けた。しかし彼は立ったまま、自ら夏の夕べにナンセンスな話しを、私の父ならきっとそう形容したであろう話しを語った。

「クルムハルトよ、元来彼女の言う通りだ。楽しい午後だったよ。それもとても彼女を犠牲にしてのことだ。しかし私も、愛する親戚、立派な隣人が我らの下、炭を掻き立てている間、彼女と一緒の同じグリルでローストになっていなかったか。我らも八月十日頃[258年に処刑された、カトリックの聖人、ラウレンティウス、その記念日の伝説]というわけだ。また一つ流れ星だ。君らは何を見ているのだ、クルムハルトよ。聖ラウレンティウスの涙だ。私より君が学校で良く知っている筈だ。天でさえも我らのために流れ星となる。更に一つだ。天全体が保証を合図しているときに、願いを抱かぬ者がいようか。雌子猫よ、流星の落下と同時に、願い事を述べるよう留意するんだ。すると万事都合良く行く、あたかも世の政府が、フォーゲルザングも含めて、証文と印璽を与えて、君の父親が、クルムハルトよ、天上の官房で記録書に記載したかのようにな」。

「アンドレスよ、いい加減、私の父のことは話しから外してくれ」。

「どうしてだ、私はこの人に反論したことないぞ。何も異議はない。この人は今日の午後も徹頭徹尾正しくて、自分が何を望んでいるか知っている唯一の男であった。私自身自分の母親を除外しない。母親といえども、一人の女だからな。そうだ、エリー、我ら二人は単に我らの母親によって育てられたという点がまさに我らの嘆きだ。母親どもは有翼の天使のように我々を両腕の下に抱えて、我々を一緒に高みへと連れ去ろうと望んでいる。

それぞれの流儀でな。クルムハルトよ、君の父親は、その流儀で君に対し同じ事をしようとし、我々に対しても立派な隣人として我々を正しい大地にしっかり立脚させようとしているのであれば、誰がそれに対し何か反対意見を述べられよう。私は実際出来ないし、ー　その上卒業試験間近だ。...またしても一つの流れ星だ。それでカールヘン、君は丁度何を考え、願ったかな」。

私は否定し得ないことだが、この言葉を聞いて、その同じ瞬間に私のすべての考えと願いはこの試験の許にあった。　ー

「君は大丈夫だ」とフェルテンは笑った、「勿論1の成績でだな。当然君の父親ばかりでなく、君の母親も。この栄誉を君の許で体験しよう。しかし小娘よ、おまえはこの星が落ちたとき、何を考え、何を願ったかな」。

「私は星を見ていなかった。でも同じことです。私にとって星は幾つ落ちようとも構わない。私はいつもただ一つのことを願っています。私が小さな子供時分に、向こうのアメリカで過ごしていたような具合にまたなることです。私がこちらのフォーゲルザングで悲惨な目に遭わないうちに、私のママが片腕に抱いた私と一緒にここあなた方のフォーゲルザングで悲惨な状態に陥らないうちに」。

「おまえの願いは叶うぞ、　ー　ほら一つ落ちた」とフェルテンが歓声を上げた。「それで、クルムハルトよ、君の願いは何だ、...更に続けてくれ、不幸の汝、極楽鳥よ、迷子の熱帯の天使よ」と彼はそれから呟いた。「そうかい、それがハイ[Wilhelm Hey、1789-1854]とスペクター[Otto Spekter、1807-71、Heyと共に絵本『子供のための五十の寓話』を出版、1833]を母親アンドレスとその息子フェルテンの許で研究した結果か。

厚く雪が降り、吹く風は冷たい、
食い物はなく、やがて凍えて死にそう。
良き人々よ、私を中に入れ給え、
行儀良く振る舞うと約束します。　[先の第二の寓話より]

何だと。我ら二人は黒い肌になれと言うのか、善良なカール・クルムハルトと邪悪なフェルテン・アンドレスのこの御両人が、昔のおまえのお仕着せの黒人代わりとなるように。そしてクルムハルトよ、君の父親は怒ってはいけなくて、私の母親は、所謂「子供の情動」のまま、完璧な英知を備えるべきなのか。まあ、それだったら、まことトロッツェンドルフの親父さんには、実際またの然るべき幸運を祈って止まない。一等船室に乗って、おまえを四頭馬車で迎えに来て、おまえに付随する一切合財をまた持ち去って欲しいものだ。私にとって、　ー　つまりハルトレーベンにとって、どうでも良いことだ。私の母にとっては、　ー　また一つ流れ星だ」。

再度ヘレーネ・トロッツェンドルフは飛び上がった。今度は激しく怒って泣いていた。彼女は近隣の最良の友に対してほとんど叫んで、地団駄踏んで言った。

「私はあなたにカール同様言います。父親のことは放っておいてよ。あなた方のフォーゲルザングで、あなたの母親にお世話になったこと、とても優しくて良い方だと私は思っていて、これはあなたに教えて貰う必要はありません。それにあなたの阿呆な流れ星願い、ー　先の流れ星のとき、あなたは何を考えていたの。私よりあなたは願い事をきちんと

分別正しくしましたか。あなたのこと私は分かっています。空想家のあなた。その通りよ、上級政府書記官殿は全く正しい、あなたをそう呼んでいます。　ー　あの人があなたを一人の空想家、綱渡り芸人と呼んで、いつかあなたは首の骨を折ると予言されたことがあったでしょう。あなたが今、学校の卒業試験に受かるかどうか構いません。あなたが靴屋になるか、仕立屋になるか、大臣閣下になるか、アレクサンダー大王になるか知った事じゃありません。フォーゲルザングでのあなた方の御善行についてあなたの講釈を聞こうとは一切思いません。今また一つ流れ星が落ちました。今私は考えました。自分がいつか家に、つまり海の向こう側に帰って、自分らの家で、この人とフォーゲルザングとこの人の愛しい母親、それにこちらの皆がうちらにしてくれたことにお返しが出来ますように、と」。

「阿呆、おまえが願い事を言い終えないうちに、星は落ちたぞ」とフェルテンは言った。

「そうかしら、だったら、あなたは次の流れ星のときに、お望みのことを祈りなさい。私は今日もまたご当地の茶番を十分に堪能しました。家に帰ります」。

「浄福なディオゲネスの樽を私は所望しよう」とフェルテン・アンドレスは笑った。「『ローラントの近習』[ムゼーウス作、1735-1787]の幸運のヘック銅貨、魔法の親指サック、それに魔法の布巾を、袋の中の棍棒を、ペルセポリスに放火する[アレクサンダー大王、紀元前331]楽しみを願ったし、サラ・イ・ゴメス島[シャミッソー作、島での難破船者の孤独な生活と死]での平和な結末を願った。星々よ、落ちよ。そして保証の目配せをしてくれ。ちなみに小生も今晩愚行はもう十分だ。それで

我が美しき御令嬢、貴女に
我が腕と護衛を申し出てよろしいかな」
[もし、美しいお嬢さん。不躾ですが、この肘を
あなたにお貸申して、送ってお上げ申しましょう。森鴎外訳『ファウスト』2605]

彼女は拳を作って、殴るために後に振り上げた。しかしその固めた小さな手を彼の額に押し当てた。

「フェルテン、あなたはただの阿呆な少年よ。カール、行きましょう。この人、樽の中に収まればいいわ。そして一人っきりでオスターベルクを転がり落ちればいい。　ー　この町全体とフォーゲルザングを越えて転がって行きなさい」。

「流れ星がまた一つ」とアンドレスが笑った、「願いは叶えられるぞ」。

彼がそれでも差し出した手を彼女は撥ね付けた。しかし彼は彼女の腕を自分の腕の下に引き寄せた。

「しかし真面目になって、馬鹿なことは止めよう。今日はまだ御令嬢のための銀製のランタン付き馬車は走っていない。それに最近、貧民のブナの木の下で、ある人がまず滑稽な曳き裾のせいで、茂みに引っかかり、根元に鼻から転がって、最良の友フェルテンに助けを求めて泣き叫ぶ騒動があったが、これは二度と御免だ。いや、聖なるラウレンティウスの涙よ、下の連中は眠る前に今一度我らに素敵な説教をすることだろう。もう自分の母親に会うことが楽しみだ」。

「あなたの母親は、あなたに対し余りに甘すぎるわ」とミス・エレンは叫んだ。今一度袖を目の上に持って行った。最後の怒りの涙のせいであった。

「その通りだな。おまえは今晩初めて正しいことを言った」とフェルテンは言った、「人類の厭わしさに関し、母の概念は余りに漠然としている。それで私は出来る限りのことをして、段々と母がより明確な概念を抱けるようにしているのだ」。

彼はすでに当時そのような考えと言い回しが出来た。彼はある世界の領主であったが、しかしそこは残念ながらこの世とのつながりが余りなかった。[ヨハネ、18,36:わたしの国は、この世には属していない]。公文書としてではないが、私はそのことを私の文書に収めている。私はこれらすべてを、記述も記録もされていないもの、スタンプも印璽も押されていないものから作成し、これを保証している。しかし私は今日、魂の奥底から汲み出してこなければならない、つまり当時、オスターベルクで、かの年の八月十日頃、我々フォーゲルザングの子供達は、聖ラウレンティウスの涙をそのように落下するものと見て、そしてその輝く落下に奇妙な戯れの考えを随伴させていた、と。

残念ながら私は公文書風に、彼、フェルテン・アンドレスは、実際卒業試験に落第して、またフォーゲルザングに対して、彼が滞在している間に、再三新たに負い目があると思われる諸幻滅や諸名誉回復の一つをこの善良な地に用意することになったと証することになる。

「哀れな母親に、彼をすぐそのまま留めておいて、彼を靴屋にしろと助言することさえ出来ない」と私の父親は、私の「卒業証書」を手にしたまま言った、「ひょっとしたら、あの風袋小僧、喜劇役者達の一人としてなら、最良の成績であったろうに。我が息子よ、そなたはこのことの必然性が分かるだろう。向こうへ行って、ついでに嘆き節を聞いて来い。いや、私は単に家庭の友であるばかりでなく、向こうの後見人でもある必要があったかもしれない」。

「だったらあなたはそのことでもっと立腹していたことでしょう、最良のクルムハルト」と私の母は言った。我ら自身の家庭の誇りに正当な満足感を覚えて、私を両腕に抱いていた。私自身はこの日以下のような事情にあった。つまり勿論私は目標に無事達して喜んでいたが、しかし手放しで喜んでいたわけではなかった。フェルテンは私にとって余りに仲の良い友であったし、彼が私より如何に多くのことを知っていることか、彼が失敗したのは、根本的には単に数学のせいであると余りにも正確に分かっていたからである。彼、フェルテンが、彼の表現によれば、脳に隙間があって、そこの私の箇所は内部が一杯詰まっていて、外見上は瘤になっているという点に彼の責任があろうか。確かに馬鹿げたことであろうが、しかし私は後々、何度も息子どもの頭を握って、入念に瘤や窪みを調べたものである。つまり息子どもに黄金の平凡さ[ホラティウス、頌歌Ⅱ,10,5]の広い通りへの静かな往来の才能を保証するはずのものである。そして、私の妻が、哀れな餓鬼どもの一人について、尋常でない、スマートな頭の持ち主であると述べようとすると、とても心配になるのであった。　ー

そこで私は友人より先にフォーゲルザングを離れ、私の父の願望あるいは意志に従い、当然法学を専攻することにした。そして　ー　ライン川での見張りか、ネマン川[リトアニア]での見張りの要請が私にはあったので、私は中部ドイツの大学を選んだ。そこで私は出来るだけ少ない費用で、ローマ法と当時有効であったドイツ式鉄砲について、少なくと

もその基本部分を学ぶ機会を得た。
この時代、私は次の手紙を文書として得ている。

「親愛なる友、
シラーにもかかわらず、そして貴兄と私の間のどんな素敵な親密さをも一つの不可能事にする定めのすべての威厳にもかかわらず、貴兄のことを「親愛なる友」と思っているのだ。[シラーの詩、『見知らぬ娘』、第三連：彼女の側に寄ると浄福であった。/皆の心が開かれた。/しかしある威厳、ある高貴さが/親密さを遠ざけていた]。このこと、我らの間のこれまでの快適な関係がもはや相応しくないのであれば、貴兄はそのことを私に言うか、書いてくれたらいい。
ただ貴兄は立派なことであった。数学は優、ラテン語は良、 ー ギリシア語はほぼ良、 ー 歴史とその他が良、 ー ドイツ語と文学は可。お主、神々の寵児よ、貴兄は差し当たり、貴兄のご立派な頭蓋を余り必要としないであろうから、次の復活祭のとき、ただ一週間だけ私に貸してくれ。誓って、折り返し、とても大事にされた頭蓋が返却されよう。しかしその頭蓋を被って、十人の参事官[ヴェネツィアの悪評高い委員会、ここでは試験委員]の前で、その頭蓋と共に綱渡りしてみるという考えは、はなはだ私を有頂天にさせて、それで早速私の老母に尋ねられてしまった。『息子よ、また何を思い付いたの』と。しかし『カールヘン・クルムハルト宛に、彼のことをお手本にすると書くのだ』と返事すると、老母は、有り難や、宙を見据えている私の視線に関し、すぐに安心してくれた。母親からも貴兄によろしくとのことだ。 ー しかし私自身、残念ながら、もう一度恥をかくという再試験のことは余り関心がない。しかし老母に悲哀を、貴兄のご立派な生殖父親殿にメランコリックな喜びを、我が恥辱に関し再度完璧に味わって貰いたいとは思わない。私はガリ勉をしている。然るに貴兄という雄牛は束縛もなく甘美に暇を味わっているのだろう。そして貴兄はその若い放恣な花咲く牧草地から帰郷したら、国家や教会の誠実な関係者達が早速貴兄に山盛りの飼い葉桶と温かい馬小屋を準備してくれるわけだ。これまでこちらフォーゲルザングでは私のためには単にロバ用牧草地が花咲いている。仮に私が私でなく、我が老母が老母本人でなければ、我が底なしの怠惰に関する無駄話故に、こちらの件は単に打ち切られていたことだろう。いや、実際、我らのいとも恵み深い御領主が、つまりむしろ我らのいとも恵み深い国母様が、私を直接呼び出されて、私の良心に語りかけるということをなさっていなかったら、そのうち私の母は、私のことを尋ねる各人にこう伝えていたことだろう。『ソファーの下に潜んでいます。誘い出してください。もはや脅してもすかしても私はその下から息子を取り出せないのです』と。 ー カエサルとその幸運だ。[嵐の海でカエサルは船頭にこう言って励ました、カエサルとその幸運が乗っている、と]。この話しはとても巧妙で、私の老母の苦悶の涙を乾かしてしまった。我が少年よ、貴兄にこれを報ずるのは、この話しが他人からの手紙の中で貴兄に届いたとき、適正な尺度に縮ませるためだ。本来はただナンセンスな話しに過ぎない。そのとき居合わせたものが他にいなくて、私にお鉢が回って来て、私がぼんやり君を人間社会のために救出することになった。...木綿と詰め綿とキッド革手袋の哀れな、情けない代物を知っているだろう。この貴族の単細胞が ー エヘン、オホン、 ー 氷の脆い箇所に到達して、落っこちようと思い付いたのだ。しまったあーとミセス・トロッツェンドルフなら金切り声を上げたことだろう。し

かしエリーは、この高慢ちきな阿呆がほとんど一緒に破滅へと道連れにしたのであろうが、幸いただ穴の横に悲鳴を上げて座っていた。間抜けな奴を飲み込んだ穴の横だ。自余のことは貴兄なら想像出来よう。途方もない曲芸と、若干冷静な生まれだ。窓ガラスにぶち当たる蠅のような頭で、水の深みの中、迷いながら、出口を求めて空しく、まさに冗談じゃない。その上、もう一方のブリキの頭蓋の脳天を支えて、一緒に上方へ運び上げる使命がある。すると彼は長く息をし、深く息をして、天上的明かりに挨拶する。　ー　シラーは実際に下へ潜ったわけではない、さもないと彼の潜水夫の詩は目立って短くなって、多分、「ブルル、チェッ、畜生」だけになり、せいぜい「二回目は御免だ」と補足されたことだろう。我々が　ー　このぼんやり君と私が、必要以上に水の中にいなかったことを、誰も咎めないで欲しい。要するに、私は名士のヒヨコを無事にまた連れ戻したのであり、首都の半ばの者達がこの危険な箇所の周りに用心して離れて集まっているのを見いだした。残りのことは歌い手の謙虚心故に話さないことにする。フォーゲルザングの女どもの顔のように愚かな泣きわめく顔を私は自分の周りに二度と見たくない。　ー　この世の最も栄光ある鼻風邪を得ても、御免である。女どもは皆、目から涙を流し、私は鼻水を垂らし、若干左手の関節を挫いていた。

方舟が再び乾いた大地に収まるまで、丸二週間かかった。我が老母は当然、足を再び大地に置いて、こう言った最初の女性であった。『息子よ、これから運も良くならないかしら』。

『カエサルとその幸運です、雑草は不滅です、母上』。

我らのお転婆はいつものようにこの話しで途方もなく振る舞って、かぶりつきたくなるが、また当然ぶん殴りたくもなる。この娘の苦悶も可愛い。しかしこのお転婆は何故私を袖にして、類人猿のぼんやり君と氷上を散歩するのだろう。カルロス[カール]よ、この娘が私の代わりに貴兄を相手にするのであれば、何も文句を言わないのだが。

貴兄ガ無事ニ暮ラシテイルノデアレバ、コチラモ幸イダ。もっとも愚かな左手は、差し当たりまだ大事に包帯をしていなくてはならない。

V.アンドレス」

「ぼんやり君」とは救出された同級生の名前ではなく、単に綽名である。その本名は私の文書中にある。ちなみにこの名前の保有者は、我らの領邦首都の社会で支配階層に属しており、私は彼の妹と結婚をし、良き配偶者と思っている。

いや、手に最良のカルタを持っていても、それを利用しないならば、何の役に立とう。

ぼんやり君の父親が、フェルテンとフェルテンの母親に対し、一度以上の訪問をし、彼のことを率直に大事に贔屓すると請け合っても、フェルテン・アンドレスにとってそれが何の役に立ったか。領主殿下と妃殿下とが、彼を自己紹介させ、同様に丁寧な好意を約束しても、それが何の役に立ったか。

皆無である。彼の本性は変わらなかったからである。

彼に対し、人生が木製のスプーン用に、黄金の鉢を鼻先に突き出そうが、彼の手に黄金のスプーンを渡し、陶器の鉢をテーブルに置こうが、(実際これは起きた)、同じことであった。彼自身が変わらなかったからである。つまりフォーゲルザングの「永遠に何をするか分からない奇妙な奴」のままであったのである、　ー　「悪意はなくて、その気にな

れば才能もある者」で、そのようにケンブリッジでは、世の理性的人間の判断では、同様に余り成功しない者について形容されているのである。[Percy Fitzgerald:『ローレンス・スターンの生涯』、1864、スターンはケンブリッジで神学を専攻した]。彼は単に自分が損をするだけであったので、彼がどのような具合に自分の能力を発揮するか、誰にも余り関心を持たれなかった。

「まさにメルヘンに記されている愚かな奴だ、幸せなハンスというところだな。馬から象に移り、象からロバに移り、そのように交換して行きながら、最後はいつか平たい大地に仰向けに寝ることになろう」と私の父はこの頃私に書いて来た、「偶然の救出劇で、この地の上流社会で自分の両手に入った利点を彼はまたしっかり擦ってしまった。我らの事務所での話しでは、陛下は氷の下に落っこちた同級生の父親殿に、疾うにこう述べざるを得なかったそうだ。『あの若者のことは残念だ、目に留めて贔屓しようと思っているのだが』と。　ー　私の唯一の慰めは、我が息子よ、そなたが少なくとも差し当たり、彼からの汚染的影響を受けずに済んでいることだ。間もなく彼が試験に受かるかどうか、誰が知ろう。受からなかったら、彼はどうなるか、そなたに分かるか」。...

さて私は実際まずこの一年半の期間のことを詳しく思い出してみなければならない。当時は自分のことにかまけていて、日々が容易に過ぎ去り、この期間のことを正確に紙面に記すのは事実かなり難しい。我々はまだ休暇中、家では一緒であった。私は学生となっていたが、彼はまだ高校生で、私にとってかなりイタい関係であった。彼にとってはそうでもなかった。

ヘレーネ・トロッツェンドルフもまだフォーゲルザングにいた。彼女はもはや緑の生垣や庭の垣根を越えて来ず、また生垣の下をくぐっても来ず、ただ生垣に寄りかかるのみであった。郊外で最も美しい少女であるばかりでなく、町全体でもそうであった。背が高く、金髪、目と眉毛は黒っぽかった。近隣の者達は、この娘は早熟に、だしぬけに大きくなったと言っていた。しかしこれは愚かな、嫉妬したライバルの娘達の言い回しであった。レウコス[クレタ島]の山の森、牧神のアルカディアの地、トラキアのハエムス[バルカンの山々]では、彼女について別様に話されたであろうし、いずれにせよ彼女は、アムニソス[クレタ島]の二十人の木の精達の一人に数えられたことであろう。この木の精達は、カリマコス[紀元前310頃ー240頃]が歌っているように、女神アルテミスが父ゼウスにお供の女性達として願い出たものである。

勿論我が友フェルテンは更に上を行き、これらの文献学的神話学的知識で私をびっくりさせていた。私は学校でこれらについて何も習っていなかった。

「この娘はな」と彼は言った、「よく見てみろ、いいか。この娘は自ら、キュクロプス[一つ目巨人]から鍛冶して貰ったディアナ女神のキュドニア[クレタ島の町]の弓を持っているだろう。そしてこの美形は、日夜、想像して、生みの神の膝を抱いて、自分にこの地上の三十もの町とすべての山岳を贈るよう頼み込んでいるのだ。カリマコスはその賛歌の中でそう歌っている。面白いと思ったら自分で読んでみな。私はもう疾うに、この娘の空想癖のからかいに楽しみを感じなくなっている。諦めてしまったな」。

「しかし君はこのような事柄にはまっているように見えるぞ。一体どこからこうした知

識を仕入れているのだ」。

「大方自分自身の中からだ」とフェルテン・アンドレスは言った。彼は私のほぼ一年後に大学入学資格を認められていた。　ー

当時、向こうのアメリカでは、チャールズ・トロッツェンドルフ氏の件で些細な没落があったように見えた。また母親と娘はハルトレーベンの許に住んでいて、「パパ」の幸運という太陽の全面的日の出を流行の町の一角で待機しているのではなかった。アンドレスの母親は、更に何度も、パン屋達、魚屋達、それに牛乳屋の女将、商人ティーネマンとー　アガーテ・トロッツェンドルフ夫人の間に割って入らなければならなかった。しかし実情はこうである。入れ替わる雲の間からは、雨の日に想像されるよりも、暑く、輝かしい一日が出現したのである。そして時折、「こうした天候を利用」出来る人々にとっては、夕方まで「素敵に」思えるのである。　ー

申したように、この時期のフェルテンとヘレーネに関し、文書にあるものは少ない。私の賢明で実直な父は、フェルテン・アンドレスがほとんど父を頼りにしないように導いて、このような事態を招いている。父はフォーゲルザングでは私をしっかりと操縦していたが、今や珍しく私を自由にさせていた。

私は実際このことに微笑することは許されない。しかし実情はそうである。父の理想は、父が記録として残し、保管室に置くべきものを、私の手で記録として残し、保管室に置くようにさせることであった。「そなたが最良の社会の一員となることが、私の願いだ。我々、そなたの母親と私は、そなたが生まれたときから生涯、その方針であった。私自身は達成できなかったことを、そなたの許で私に体験させてくれ」。

当然私はその後、一つの高貴な結社に加わることになった。この結社にはすでに我らの故郷の領邦首都における最高位の支配者クラスの者達が陽気な青年達として所属していた。私は否認し得ないことであるが、この人生の時期、何度か私は、当時の私の義務や名誉心故に、フォーゲルザングのことを失念することがあって、フェルテン・アンドレスに全く的確に指摘されることになった。彼は、舞い上がった高みからまた大地に私の両足を据えさせて、こう言った。

「若造よ、こちらの下の方から眺めると、　ー　井戸の中の蛙の如く見てみると、君は本当に御立派だ、垂直な風に[ゴシック式に]絵になる。君自身がそのように見ていないのは、残念だ。母上、舞い上がる神々の寵児の姿をいかが思し召す」。

「息子よ、不作法なことを言ってはいけません」とドクトル夫人は言った、「まずはあなた自身が舞い上がったらいいのよ」。

「夢でしか思い浮かばないよ」。

「実生活でも夢以上のものがありますか」と隣保夫人は尋ねた。それで私は当時まだ現実のまことフォーゲルザングの下界に、つまりこの混乱した敵意に満ちた地上で想定し得る限り最良の隣人達の許にいたわけである。

休暇の後、更に一回私はゲッティンゲンの大学へ向かった後、我々隣人の息子同士、また再会することになった。それはベルリンであった。私の旅立ちの日、フォーゲルザングのハルトレーベンの許に一通の手紙が届いて、家もとフォーゲルザングでの万事を変えてしまった。第九の波、幸運と成功の波が転がって来て、金色に輝きながら、この世の一切の素晴らしさと絢爛さで燦然とフォーゲルザングに押し寄せ、ヘレーネ・トロッツェンド

ルフとその母親とを引き返しつつ、掠って行った。チャールズ・トロッツェンドルフ氏が短い手紙を寄越して、無愛想に素っ気なく、あたかも自明なことであるかのように、近々百万ドル長者の十倍長者となって、馴染みの友、皆に挨拶し、同時に妻と娘とを引き取る栄誉を得る見込みとなった旨、伝えていた。

私は一層長くこれらの紙面を記すにつれ、そしてこの紙上に打ち明けることを、一層明瞭、明確に思索として展開するにつれ、上司や部下によって認められて来た私の立派な仕事上の文体は、何と消滅してしまうものか。これまで極めて冷静なものであったことが、今や幽霊めいたものになっている。文書の山は揺らめいて、これらは落ち着かず、四方の壁にある私の引き出しの中で、より一層落ち着かず、段々と私に対し崩落しかねない表情となっている。私はこれに何も出来ない。初めてこの書き物机において、いやまさに、この書き物机において、私の中のペンは私のようではなくなっている。フェルテン・アンドレスがまたこの咎を負っている。私の哀れな父親をその昔、心配させ、うんざりさせたこと、つまりこの「人間」の私への圧倒的影響力、これは今日でもかの昔の日々と変わらない。その昔、彼は生垣越しに、フォーゲルザングの垣根越しに、学校や家庭での日常生活から、当てのない飛行へと連れだし、そして我々は、ヘレーネ・トロッツェンドルフが先駆けて飛んで行かない時には、彼女を一緒に連れ出したのである。

ベルリンで早速私はまた彼の術中に陥った。

私はこの「ぽっと出の狐」[大学一年生前期]を特権的学ラン意識で尊大な雄鶏のように、最初の訪問をした日のことを昨日のように覚えている。大学の事務室で彼の住所を先輩ぶって教えて貰った後であった。

「文学[哲学]部学生、ヴァレンティーン・アンドレス、ドロテーエン通り、00番、奥の建物、四階、フェンシング教師夫人フォイヒト方」と住所は書かれていた。復活祭休暇後の四月の日で、私はポケットにベルリン大学入学許可証を持って、そこへ向かった。奥の建物が、表の建物の約束通りのものであれば、新米の者は世俗生活で運が良かったことになる。しかし通常はそうではない。ここで若干詳しく語るのは、理由がないわけでない。

かなり上品な仕立屋の店（紳士服専門）を過ぎて、ドーム状の玄関ホールを通って、絨毯の敷かれた二階へ通ずる階段を行くと、かなり広い作業場に達する。ここを渡って奥の建物へ行くには、少し神経の弱い人物は、若干躊躇うかもしれない。この建物の所有者は、町の一流の蹄鉄工の一人で、そこを顧客のために利用していた。すべて自分に尻を向けている二列の馬の間を、誰もが好んで進むとは限らない。それにすべての馬が蹄鉄を打たれることに全く好意的であるわけではない。鍛冶の職人、馬子、馬丁、お仕着せを着た御者や、それを着ていない御者が、馬どもや自分の気質に応じて、馬どもの間でその仕事に励み、多かれ、少なかれ騒がしい。側面の建物のホールから鍛冶の炎が輝き、いななき声や、呪い声、宥め声、その他、人間と人間、人間と家畜、獣と人間の諸間の普通の会話に、槌音が混じっていた。ここでフェンシング教師夫人フォイヒトについて問い合わせるとき、実際叫ばなければならなかった。

しかし奥の建物はそこにあって、頭蓋や胸を砕かれずにその奥の建物に達した者は、多分尋ねなくても分かったであろう。そこから階段は四階まで通じていた。

私は当時、幸い、四階に達して、薄明かりの控えの間で鐘を引いた。

「フォイヒト・フェンシング教師夫人ですか」。

「私がそうです」と五十歳から六十歳の小柄な可愛らしい老レディーが言った。

「学生アンドレスがいますか」。

「向こうのあのドアです、若様」。

私は挨拶した。すると小柄な女性は私に完璧な宮廷女官風腰屈めの礼をした。私の友はかの著名なベルリン学生部屋の一つに在宅していて、訪問客がいた。繊細、上品、痩せた若い殿方で、黒髪、若干生気ない顔色で、はなはだ丁重、内気な質の人物であった。有り難いことに、すでに手に帽子を持っていた。

「今日は、クルムハルト」とフェルテンは、あたかもフォーゲルザングの生垣越しであるかのように、私に挨拶した。「こちらへ来たのか。...さようなら、デボー。ちなみにお二人をすぐ引き合わせた方が都合がいいだろう。私の田舎の友、カール・クルムハルト殿で、法学の極めて熱心な学究、　ー　こちらは、表の建物からのレオン・デボー殿、その職業は、　ー」。

「いや、アンドレスさん、お願いです。お邪魔でしょう、　ー　お許し頂いて、　ー」。

「おやおや、私の許では遠慮なく、全く気楽に振る舞い給え。私は当然、貴方の家で同じように振る舞うことだろう」。

「どうぞそうなさってください」とこの興味深い青白い黒髪の男は叫んで、フェルテンと私の双方におずおずとお辞儀をして去った。

「我が表の建物の仕立屋の御曹司だ」とフェルテンは言った。「彼の先祖はルイ九世の下、異教徒と戦った。シモン・ド・モンフォール[1160-1218、英レスター伯、南仏のアルビ派に十字軍]に抗して、トゥールーズを守り、リオン湾で、チュニス、トリポリ、アルジェの長官達に対してガレー船を指揮した。そしてルイ十四世治下では、ナントの勅令とマントノン夫人に従って、自らこのような居心地の良い船の櫂を握った。この一族の一分派は、偉大な選帝侯[フリードリヒ・ヴィルヘルム・フォン・ブランデンブルク、1620-88]の下、こちらのベルリンへ亡命して来て、今日でもその子羊を静かに庇護しているように見える。君がズボン、上着、チョッキを必要とするときには、このデボン商会を君に推薦できると私は思うぞ。この善良な若者の姉はレオニーと言って、表の建物の二階にいる。　ー　ブリュートナー製のピアノの許、ドイツ語、フランス語、英語の文学文庫があって、その他より高貴な娘に相応しいものが揃っている。私は君を紹介していいが、責任は負わない、だってその令嬢はとても可愛いからな。　ー　相変わらず南フランスの香りがする娘だ。レオニー・デボーだ。フリッツやカルリーナの名前の国で、この仕立屋の娘の響きはどうかね。この家族全体、ラングドック[南フランス]の立派なロマン主義を数世紀の間、マルク地方の砂地に救出して来たように思える。まあ、要するに、この一行は相変わらず所謂フランス人コロニーに属していて、私はこのレオンとレオニーの間で自分のフランス語を磨く機会を利用している」。

私は彼が喋るに任せておかなければならなかった。これは私が内心、我がドイツ人学生[学ラン]魂で畏怖させようと願っていた人間であろうか。この一切には早熟な世間知と世慣れした振る舞いの特徴が歴然としており、私は唖然とこう呟くのみであった。

「いや、君は何の支援もなしに、まことに達者に、フォーゲルザングと学校教室の外部

に適応しているように見えるな」。

彼のまだ笑っている顔に一つの暗い影が走った。

「しかし君が支援と呼んでいるものが全くなかったわけでもなかろう。君が女どもも人間の中に数えるなら、女どもが半分は引いて、半分は女どもに押されている」。[ゲーテの詩『漁師』に類似]。

「君はこのより広大な世間、ベルリンに二週間前に来たばかりだろう。ぽっと出の狐として」。

「私は故郷では、エレン・トロッツェンドルフ嬢をフォーゲルザングから、鉄道の一等車に乗せて見送り、フォーゲルザングの垣根越しに我が老母に別れの挨拶をして、元気に暮らすと約束したのだ。愛する少年よ、この関連では、君の父親の不満も同様に的外れだな。まさに私にとっては、女どもが教育者だ。例えば祖父ゲーテ殿は、その『ファウスト』第二部[6216,12110-11]を、ただ自らとぼんくら頭の文学史家のためだけによろめきながら書き綴り、まとめ上げたと思うかい。違う、違う。我が少年よ。私は女どもから教育を受けた、これからも女どもに教育して貰うつもりだ。君は進んで行くがいい。私は母親達の許、女達の許、娘達の許に留まる。ちなみに、いいかい、君は真っ先に、私をフェンシング教師夫人フォイヒトの許に、尋ねて来たのであれば、これはまこと気さくで[先輩ぶって]結構なことであったと思うぞ」。

「夫人はすでに、君が文学部以外の生活で潜り込みたいと思っている前掛けの一つなのか」。

「そうだな」とフェルテン・アンドレスは笑った。

かくて我々はまた一緒になった。私が自らの経験と私の両親の手紙から、フォーゲルザングでの最近の出来事について知っていることを、彼は今一度、当時の言い方に倣えば、私と自分の腑に落ちるように語ることができた。彼は語った。彼は、私が私生活や仕事関係で知り得たすべての人間の中で、いつ、どこで、どのようにして、誰を前にして、自分が滑稽なことをしたか、一切問題にしない唯一の人間であったので、彼の方が多分私よりも、自分の話しの立派な記述者となり得たことであろう。私は彼のことをある瞬間には、予測不能の阿呆、空想家と形容せざるを得なくても、次の瞬間には、彼の言葉や眼差し、身振りに夢中になって、彼の首にすがって、こう言いたくなったことであろう。「フェルテンよ、君はこの世で最も素晴らしい、最良の奴だ。神々が君の途上、ほんの少しでも運を授けていたら、君はサラ・イ・ゴメス島[シャミッソー作、島での難破船者の孤独な生活と死]ではなくとも、ひょっとしたら君のペルセポリスを焼き払った後、バビロンで亡くなっていよう[323年、アレクサンダー大王はここで亡くなった]。しかし、古参の少年よ、我らが子供の頃からの知り合いというのは何と言う幸運だろう。他の多くの者達が君のことを本気にするよう、君自身は要求しないのだから」。

彼はソファーに寝ていたり、脚を背もたれに乗せていたり、椅子に座ったり、テーブルに腰掛けたり、あちこち歩いたりした。その間、彼は私にフォーゲルザングのこと、ヘレーネ・トロッツェンドルフのことを語った。時々彼は自分の髪ではなく、私の髪を握って、私の頭を揺すり、こう言った。

「いいか、笑うなよ、いや、笑うがいい。私自身自分のことを笑うからな。君ら鈍器劣根の一人のように、所謂静かに考える際に、ぶつぶつ呻るからな。いいか、あの女はまこと何も罪はない。あの女はまことご立派な風にやってみせて、嫌な女にみせかけたのだ。向こうのアメリカでも、我々フォーゲルザングでのような具合に進展したら、あの女、ちょっと成功するかもしれない。　ー　そう私の母親も言っている。あの愛らしい、老いた母の口許の皺から判断すると、彼女が薔薇に化けるか、それともおぞましい悲惨さに転落するか、誰にも分からないことだ。ま、要するに、あの娘と母親は去った。そしてフォーゲルザングの一同は、『やれやれ』と安堵した。私もそうだ。もはや誰も連中には耐えられなかったからな。　ー　私の母親でさえそうだ。我らの子供時代のスープの最後の残りを、君はスプーン二，三回、まだ味わったことだろう。しかしこの鉢を徹底的にかき出すこと、この役目を神々は私一人に任せて、それで多分そのために君より一年、卒業が遅れることになったのだな。勿論フォーゲルザングにミスター・トロッツェンドルフの姿を拝見することは、それだけでも楽しいことだった。あのヒキガエルめ。いや、我が母の可愛がるヘレンヘンのことだ。

私は彼女の腕から身を離した、
でも私が思うのは彼女のことだけ。[シラー、『メッシーナの花嫁』813ｆ.]。

後にシラーの許でも言及されている『バザール[市場の意味で、同時に当時の娯楽雑誌]』誌を彼らはすでに長いことハルトレーベンの屋敷でも取っていた。君自らドン・マヌエルの駄弁を読んで、その娘、我が老母、あのいかれたばばあママ、君の両親、老ハルトレーベン、要するに『メッシーナの花嫁』に登場するような栄光を帯びたフォーゲルザングの総体を考えてみ給え。ぼんやり君の類いと家族、つまり上流社会のその他の連中も、この喜劇から除外せずに、彼女らの出発、つまりフォーゲルザングからではなく、ホテル・ヨーロッパからの出発に先立つ四週間を自ら思い描き給え。君の父親が、駅から家へ我々が帰るとき、何と言ったか、分かるか、クルムハルト」。

「何と言った」と私は尋ねた。我が最良の友の鼻に早速一発お見舞いすることになったら、まずいと若干心配しないわけでなかった。

「『残念ながら人間性には余りに卑俗なものが潜んでいる』とお父上は言って、またしても、いつものように、ご正解だ」。

「フェルテンよ、では旧来の友好的隣人関係は少なくとも出発までは保たれていたのだな」。

「その通り。しかし老ハルトレーベンは、長年の接待に対し、トロッツェンドルフのパパとママから何の感謝を得たか、彼に聞くことだな」。

「それでヘレーネは？」

するとこの友は私の肩を掴んだ。

「この娘が我らの許、我が母親の子供となっていなかったら、この駄弁全体、語るに値するであろうか。自らこの娘っ子の教育に関与していなければ、何と陽気な笑い声に弾けて、それで済んでいたことであろうか。今、率直に言うと、クルムハルトよ、私は全く本気だったのだ。カルロスよ、この娘っ子は我らの一員だ。それで私はこの娘っ子を今でも

手放したくない。彼女自身、自分は新たな上流社会、大西洋の向こう側の世界に我らの何という真髄を持って行くか承知している。クルムハルトよ、私は君の前で底なしに滑稽に見えていることを全く意に介していない。私はこの娘っ子をこの世の果てまで追いかける定めであると記載されているのだ」。

「ベルリンを越えてかい」とせめて何か言うために私は尋ねた。

「その通り、ベルリンを越えてだ。私はまだ自分の人生と、同時にまた自分の前途をすべて眼前に有していないかね」。

彼は左腕を上げた。その左手の関節は萎えていて、ただそのため祖国の兵役に就くことが不適格になっていた。

彼の目からは、とても勝利を確信した、高笑いの、厚顔な安心感が輝き、その声は堂々と響き、それで実際、私の肩をかくも健全な、鉄のような右手で叩く必要はなかったことであろう。私はそのため肉体的に跪いたばかりでなく、心的にも打ち砕かれ、縮み上がって、　ー　要するに、小者に思えたのである。

そこで彼はより詳細に、トロッツェンドルフ一家のフォーゲルザング滞在の最後の日々がいかなるものであったか、語った。家庭の父親が自らもたらした栄光は、その影響をフォーゲルザングに及ぼしたばかりでなく、町全体にも及ぼした。これはまたしても単に「ベンガル」ライトのペテンかもしれなかった。しかしその流星はオスターベルクの上方の天に十分に長く留まっていて、民衆に魂消たセンセーションをもたらした。この民衆は元来彼の意見によれば、暗闇の中に座っていたのではなく、自らを平均的にはとても明敏と見なしていたのであったが。珍しいことに、この領邦首都のすべての公的正式な慈善施設、とりわけ侯爵陛下の庇護下にある機関や設立者、並びに孤児院施設、託児所等、更には出所受刑者のための感化院協会は、家族と一緒のチャールズ・トロッツェンドルフ氏の短期滞在と町の一級旅館への滞在をはなはだ喜んで、ただ格別に冷静で、劣等な人物のみが、格別の反応を見せないのであった。かくも短期間に、町の公の新聞に、チャールズ・トロッツェンドルフ氏ほど頻繁に記載されたこの土地生まれの男は他にいなかった。人類の記憶の中で、彼ほど物分かりよく、超短期間に、かくも称賛されることを受け入れた者もいなかった。侯爵の居城の宮殿からフォーゲルザングに至るまで、敏感過ぎる鼻の所有者がいて、従って、彼の匂いは余りに強すぎると分かる人がいたことは、否認出来ないことで、従って、これは不変の事実であった。陛下は謁見を請願されたが、拒絶した。私の父親は「ペテン師」と呟いた。フェルテンの母親は溜め息を吐いた。「我が哀れな、愛しい子」、そして老ハルトレーベンは言った、「いや、医師夫人、私は長いこと思い出してみても、このような喜劇、このような道化師を主演者とするものを、この隣人関係で体験したことがありません。彼奴、あのカールヘンは、何年も前、この地から別れて以来、何という手管を習得したことやら」。

「いいかい、カルロス」とフェルテン・アンドレスは私に言った。「老母はまさにあの刺激的週の間、何度か新約聖書を私に読ませて、当然ながらヨハネの福音書の状況に陥ったのだ。やはり夜で、つまり夕方遅く、我々はランプの許に座っていて、その第三章だった。『さて、ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人達の議員であった。ある夜、イエスのもとに来て、言った』[3、1-2][御子を信ずる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている、といったことをイエスはニコデモに話す]。　ー　『おや、誰かノックして

います』と母が言った。すると我らの娘っ子、彼女であった。その戸口におずおずと立っていて、中へ入る勇気がなかった。　ー　丁度先の尖った顎髭のユダヤ人律法学者のようであった。しかしこの学者がその訪問のとき、この娘のように嗚咽したかは分からないし、多分そうではなかろう。この娘はホテル・ヨーロッパで、緋色の高価なリンネルの服を最新のファッション誌通りに着せられていた。[ルカ、16,19:ある金持ちがいた。いつも紫の衣や、柔らかい麻布を着て]。しかし肝腎なのは、涙に濡れたハンカチだ。このハンカチを手に娘は我が老母の安楽椅子に飛び込んで来て、その前で跪き、両手、両腕で老母の首を引き寄せ、めそめそ声で言った。『アドレスおばさん、私はあなた方から、　ー　あなたから、あなたから離れられません。どうぞ、お許しください。仕様がないのです。それに喜んでもいるのです。今はただ忍んで来て、今一度申し上げに参りました。私はあなた方が、あなたとフォーゲルザングが大好きで、ここから去るのがとても辛いのです、と。あなた方と一緒に行けたらいいのだけど。今は沢山のお金と幸運に恵まれていて、ママがいつも話していて、惨めなとき、慰めに言っていたことが実現しました。でも私の父は笑って、下らぬことと言っています。またしても、私が考え、感じていること一切が、戯言でしかないのです。その通り、フェルテン、あなたはいつも同じことを言っていました。でももう一度そう大胆に私に言うがいいのです。だからといって、私はもはやあなたに平手打ちはしません。全世界が突然、とても愚かに、馬鹿げたことに思えます。私がこの種のものをほんの少し添えたところで、何も変わりません。おばさん、おばさん、最愛の、最良のアンドレスおばさん。私がここから喜んで去ること、そして新しい生活を楽しみにしていることを、罰しないでください。あなたに嫌われると、一切が空しくなります。老いた、愛しいハルトレーベンにも、私の両親がとてもあの方に粗野であったことを、申し訳なく思っているとお伝えください。ようやく夕方にホテルからあなたの許へ抜け出したのです。でもハルトレーベンの許には日中でも夜間でも、勇気がありません。どうか、どうか、あの人に伝えてください、　ー　フェルテン、あなたもよ、あの方はいつも最良の老人であって、私はうちら三人の中で、つまりあなたフェルテンとカールヘン・クルムハルト、それに私の三人の中で、うちらが毎日あの人を死ぬほど立腹させていたのは良くないことだと本当に気付いていたただ一人の者でしたと伝えてください。いや、神様、まだ何と沢山話すべきことがあることでしょう。いや、アンドレスおばさん、接吻は勘弁してください。いえ、構いません、どうぞ接吻してください。　ー　あなた方も許はとても素敵過ぎて、立派過ぎました。私が心の裡で思っていることを、あなたがご存じでなければ、私は救われません』と」。

「フェルテン、君の母上がまざまざと思い浮かぶよ」と私は言った。

「そうかい。いや、君は勿論、私よりいつも才能がある。しかしこれに関しては、君は間違っていると思う。母はこの娘を、痙攣して震えながら、あちこち揺さぶったとでも思ったらな。そんなことは一切ない。この老いた巨人族の女は立派に自制していた。私の趣味としては、悲劇の時なのに、ほとんど余りに泰然としている。しかし翌朝になると、母はまた唯一正しい判断をしていたと分かった。母が我々をしばしば説教したのを覚えているだろう。しかしこの時のように、母が我らの三人の中の一人に、こう話しかけたことはまだなかった。『安心して、行きなさい』と。　ー　あの娘は、その晩、安心してフォーゲルザングから出て行き、庭木戸で小声で泣いた。『あなたの言う通りです。勿論父と母

がまず先頭で行きます。私も喜んで父と母に従って行きます。でも、マーレおばさん、私のすぐ後に付いて来てください。私はスカートの襞にいつもあなたの手を感じていましょう。　ー　いつか、いつか、　ー　私について、私の父についてと同様、詰まらぬことがここフォーゲルザングに書き送られることがあったら、フェルテンを送って、確認するまでは、その話しを信じないでください。でも私は自ら毎週手紙を書くつもりです」。

私は勿論、ベルリンへは単に学業のために来ていた。今回それは問題にならなかった。我が哀れな父親の最悪の恐れが当てはまった。私は次の期間、故郷のすべての分別ある者達の判断によれば、再びこの友達に由来する堕落に完全にはまっていた。私はまた彼を得て、彼はまた私の襟を掴んでいた。いかにまた同じ羽毛の小鳥が彼の周りに集合するか、これは、この素っ気ない世界で奇蹟を信じない者にとっても一つの奇蹟に違いなかった。

これはまず第一に彼の宿の女将フェンシング教師夫人フォイヒトであった。他の若者なら、百万都市の中で、この女性を数年かけて求めても、探し出すことはできなかったであろう。女将はその現今の若い殿方、「彼女のフェルテン」をすでに数年待ち構えていたように見えた。彼の許で、「とても必須の」母親の地位を代行するためである。

我々は出会って二日目の晩に夫人のドアをノックした。彼はその小柄なレディーにこう言って私を紹介した。

「恵み深い夫人、こちらもフォーゲルザング出身の者です。少しばかり退屈な男ですが、その他にも結構な点があり、教育のし甲斐がありますし、その甲斐性はそれどころか少しばかり文化的不足の程度を上回ってもいます」。

賢しらな舌鋒鋭い青書生に対して「愚かな少年」と反論することが慣例的なことであったろう。しかし私はいつものように今回もこの少年に対し自分の立場を守る気持ちはなかった。

「イエナからですか」と小妖精のような小柄な老夫人は尋ねた。相変わらず手にドアの取っ手を握っていた。

「ゲッティンゲンからです」。

「私の亡き連れ合いの時代でもまだ上品な大学町でした。どうぞ、もっと中にお入りください。私の耳が正しければ、法学専攻のクルムハルトさんですか」。

私はただ肯うことが出来たのみであった。しかし極めて丁重に好意的に返事するために、少しばかり気を引き締めなければならなかった。しかし、　ー

「何故イエナからではないのですか」とフェンシング教師夫人は、今やそのソファーから問い質した。「フェルテン、お掛けなさい。貴方も、クルムハルトさん、どうぞ私の質問を悪く取らないでください。つまり私はイエナの出身で、私の夫はそこに埋葬されています。私は若い時分、そこで過ごしていて、こちらで若い殿方に会うと、そちらのことや昔の時代のことをよく尋ねるのです。まさにこちらベルリンに住んでいて、私どもの誰一人として本来、自分がこちらの者なのか分からないのだけれども」。

彼女は、白髪のおっかさんとして、鋭く、可愛らしい老夫人の顔と目をして座っていた。どんな決闘の際でも、相手に畏怖の念を抱かせるに違いない目つきであり、「私どもの誰一人として」という言い方は、とても自明で、自然、事情通に聞こえ、フェンシング場や

居酒屋の調子があって、それで彼女とフェルテン・アンドレスは人生の調子が合っているに違いないと考える他なかった。ベルリンのフリードリヒ・ヴィルヘルム大学の吹き抜けの事務所で示された住所証明、フェンシング教師夫人フォイヒトは、運命によってただ私の友フェルテンのために選ばれていたのであろう。

「では腰掛け給え」とフォーゲルザング出身の若い賢者は言った。彼はすでにその女将夫人の横、ソファーの隅に座っていた。しかし私は、勿論、まだ立っていて、相変わらず周りを見回していた。ここで全世界が考察されるわけではなかった。しかしドイツ中探しても、これと似た未亡人の居間は考えられなかった。このベルリンの中にいて、ドイツの青春の全体が、イエナとその学友会の画像にまとめられて、見られた。四方の壁がそれで覆われていた。　ー　その間、スペースがありさえすれば、その影絵やその帽子やたすきの[学生組合の]シンボル・カラーで一杯であった。鏡の代わりに決闘のトロフィー[記念品]、決闘の剣、籠手、その他類似のものが掛けられる所にあった。ロマンチックな中世の騎士のレディーといえどもかつて自分の先祖のホールや婦人私室の調度に、このフェンシング教師夫人フォイヒトがその老夫人居間の宝飾や装飾に似合っていたほどには似付かわしくなかったことであろう。それも申したように、このベルリンの中心でのことである。

「クルムハルトさん、貴方も私の許に訪れるすべての人同様、見回して、不思議がっています」と上品な老女は微笑した。「まあ、興じられてください。我らの主なる神自らその剣を鋭いものにします。でも砥石を主のために回すのは、人間達です。古い画像です。　ー　蠅がその上に一杯止まったものです。　ー　これらの画像はこの過去のドイツの歴史を語るものでもあります。我らの主なる神が必要とされた二，三の立派の剣も中にはあります。私どもはこの主のために砥石を回したのです。主とはつまり私の亡き連れ合いのことです。私はただ夫や、あなた方若い人々に、　ー　神様、お許しください、　ー　冗談を言って楽しんだのです。私も若かったものですから、皆さん」。

「それで良いのです、フェンシング教師夫人」とフェルテンは呟いた、「そこの老いた亭主に貴女の若さを自慢なさったらいい。ご亭主も愛でましょう」。

この瞬間ドアがノックされて、すると　ー　「我が仕立屋だ」とフェルテン・アンドレスが笑った。「さて、この世界的都市で、私の現在の知り合いがすべて一堂に会することになる」。

表の建物からの若い殿方、昨日すでにこの友の部屋で出会った男がおずおずとフェンシング教師夫人の部屋に入って来た。

「よろしいでしょうか」。

「どうぞお入りなさい、レオン」とフェンシング教師夫人は言った、「何故貴方の姉を連れて来なかったの。勿論、あの可愛い娘はすでに朝、私の許にいらして、私の相手をしてくれましたけど」。

「それで、生活上の仕立屋の支払いや不支払いの話しとは何か違う話しを聞きたいわけだ」とフェルテンは笑った。

「我々の許ではそんなに沢山その話しをしますか、アンドレス殿」と表の建物からの若旦那、豊かな家の御曹司は少しばかり非難を込めて尋ねた。

「そうじゃない、まこと違う。デボーよ、これまでの私の判断によればな。私は逆に、すでに我が友クルムハルトにこう話している。つまり向こうの君らの許では奇妙に別な風

の音がざわめき、響いている。いかにこれが多彩に混じり合っていることか。トルバドゥール[十二、三世紀の吟遊詩人]の雑音、アルビ派[カタリ派]の剣や槍の物音、ユグノーのオルガンの音や合唱の歌声のようなものだ。ドイツの地方出身のこの少年は、このベルリンでこれに匹敵する仕立屋の店はあるまいと既に確信していよう。レオンよ、勿論貴方のために口利きをしてやったのだ。ちなみに、彼が君らの許でするすべてのつけの保証をしよう」。

「まさか、アンドレス殿」。

「勿論、アンドレスさん」とフェンシング教師夫人フォイヒトは言った。「余りに賢しらで、耳障りなことは良くありません。そんなこと私ども二人は互いにまだ知り合ったばかりで、どんな劣等な洒落にもここ私のフェンシング練習場を譲って保証するとはなりません」。

「カールよ、私はまた誤解された」とフォーゲルザング出身の我が同級生は惨めに嘆息した、「デボーよ、私は貴方が素晴らしい奴だとただ言いたかったのだ。　ー　すべてのその偉大な先祖をナントの勅令以前と以降とに有している素晴らしい人間だと。偉大な選帝侯はその郎党を君らの許に送って、君らの許でその上着をあつらえさせたのではないか。では、私は友のクルムハルトを表の建物に推薦することさえ許されないのか。彼をこの地の最良の社交場に連れて行くために」。

「それはまた悪くない考えです、レオン」とフェンシング教師夫人は言った。

しかしレオン・デボーは、目に涙を浮かべて、フェルテン・アンドレスと握手して、私に恥ずかしそうに言った、「貴方と知り合いになることは、大変名誉なことです。すでに学生アンドレス殿とは面識があって、光栄に存じています」。

「嬉しくもあろう」と「フォーゲルザング出身の若者」は呟いた。

「どのようにして、見るからに、実際劣等でも臆病でもない若者、レオン・デボーという名前のこの仕立屋との知遇を得ることになったのか、とりわけ私に語ってくれ」と私は後に夕方、居酒屋へ向かう途次、この友に尋ねた。

「まあ、時に、すべての美しいもの、有益なもの、善良なもの、快適なものに、またその反対のものに出会う場合と同じで、　ー　偶然だ。昔のぼんやり君と同じで、彼を引き上げたのだ。しかし今回は氷水の中から引き上げたのではなく、火の中からだな、　ー　つまり我らの劣等な喋り方からだ」。

「我らの劣等な喋り方から？」

「詰まらぬ洒落とか、当てこすりとか、喧嘩腰の難癖とか、その他何でも構わんが、好みで、ましだと君に思われる場合だな。称賛と引き換えに初めて孔雀の羽根を陽気にまとったカラスというイソップの寓話、あるいは真実の話し、これを君はまだ覚えていよう。[カラスが他の羽根で飾ったが、むしり取られた]。この寓話を、ワインとオリーブの国、太陽と歌の国の末裔が、再度、世間の舞台で演じていた。それで私は勿論丁度の折に来ていて、それをからかい、後に少しばかり本気でそれに対処した。このロマンチックな牛は、我が当地滞在の最初の日々、赤い宮殿[Schinkelの建てた建築アカデミー]での身体的裁縫術のアカデミーから、老フリッツの記念碑向かい側にある精神的仮装の我らの小屋[ベルリン大学、

ウンター・デン・リンデンにあったフリードリヒ二世の記念碑はサン・スーシ公園に移された]に迷い込んで来た。つまり私も鼻を突っ込んでいた美学の講義に臨時聴講生として忍び込んで来たのだ。これほど愚かなものはない、つまりこれは講義する教授殿のことを言っているのではなく、我が友、レオン・デボーのことだ。しかしこれが分かったのは、私が彼をその家まで訪ねたとき初めて明らかになったのだ。最初彼は私にとって、単に茨の茂みに引っかかっている戯れの羊に過ぎなかった。[創世記、22,13]。俗物どもが彼を襲っている。[士師記、16,9　ペリシテ人とサムソン]。主要な悪漢、背の高いビールの野人、これは管区指導官や行政区長官とかその他の素敵な官職を世襲法的に待機しているのであるが、これはデボーの父親と一緒に借金があって、これはつまり借金が片付いても、更にこの父親と清算をしなければならないのだ。田舎のぽっと出の者がどのようにして、早速このような阿呆な事情を飲み込めて、奇妙なことにこの状況に太刀打ち出来ると私が感じ得たのか、今でも不思議である。多分私の中に生得のものとなっているのに違いない。しかし根本的にはこれはまた純然たるフォーゲルザングの産物であろう。人々はこう言っているのだから。若造ならどんなナンセンスやスキャンダルにも、立派な口を利き、拳をお見舞いできなければならない、と。まずは傾聴して、その後肝要な機知を巫山戯て楽しみ、更に詳しく検討して、冗談をその反対物に逆転させ、その後、通常の科白で結局こうだ。若旦那、愚かな少年とはただ貴方のことですぞ。...肝要な事は、私が理想的な仕立屋を引っ張り出したことだ。その後この学友殿と事の進展に関し然るべく関連することが処理され、ゲーテ全集の一巻に従って、清算された。勿論私は自ら男らしく感じた。そして、

...自分の義務を感じて、
その背の高い悪太郎の顔に
すぐに切り傷を付けてやった。[1810年Rechenschaft]

しかしヴァイマル出身の別のカールは何と言うだろうか。...ジェノヴァの盲人どもが私の足音に耳を澄ましていた。あるいは大体そんなところだ。[シラー『フィエスコの反乱』1-9]。差し当たり私はこの観点で、ここの諸君の偉大な世俗生活で十分によく戦ったと思う。
ー　私は震えている我が仕立屋の御曹司を腕の下に引き入れた。『哀れな泣き虫の鶏よ、気を確かに持て。この混じり合った社会の中で、何をしたいのか、言ってみろ。それでどこに住んでいるのだ。ちなみに私の名はアンドレスだ』。　ー　『私はデボーです、レオン・デボー』とこの生き物はどもった。　ー　『パリからか』。　ー　『ドロテーエン通りからです』。話して見れば、それは一つ屋根の下に近いから、我々は同じ辻馬車に乗って家に帰った。この少年はもはや二本脚で歩ける状態ではなかったのである。彼が翌日我がフェンシング教師夫人の許に私を訪ねて来たのは、作法にかなうことだ、とそう私の母なら言ったであろう。彼が、自分の家族を紹介するために、私も彼の許に来るよう私を招待したのは、余計なことだが。...クルムハルトよ。私は今では君もその家族に紹介できるぞ。デボーの家とレオニー・デボー嬢と知り合いになることは、君にとって満更でもなかろう」。
私が今日、友のこのような言い草とデボーの家とを思い出してみると、私の周りは明るくなり、当時私が案内された人々からは光輝が生じて来る。フォーゲルザング出身の少年、

ギムナジウムを出たばかりの、ローマ法の授業を受け、学友会居酒屋からの少年が、再びこの現世の一片、あるいは世間を知ることになった。これについてのこの少年の知識は皆無で、やはりフェルテン・アンドレスがいなければ、決して経験することのなかったであろうところである。他の同年齢の仲間であっても、このような知識を授けてくれなかったであろう。仕立屋と余りに昵懇になっては、自分達の世界では滑稽に見えはしないか恐れることからして、不可能であろう。　ー

彼女、レオニー・デボー嬢はそのピアノから、我らの許へやって来た。背の高い、落ち着いた娘で、美しい娘、その好意的顔は、その大きな、若干近視の黒い目の上で、時折黒い眉毛が一つに引き寄せられても、崩れることはなかった。その場合意地悪げに彼女が見つめることは稀で、ただ少しばかりより鋭く見るのであった。

「地中海とか、天守閣、鷹狩り、婦人用乗馬、グレーハウンド、ルネ・ダンジュー[1409-80、ナポリ王、詩人タイプ]王の愛の宮廷を君は知らずとも、済むぞ、クルムハルト」とフェルテンは言った、「私はこの一切を自ら既に済ませた。クシー[Coucy]の城代とファイエル[Fayel]のレディーも知った[ウーラントのバラードより]。カールよ、ちなみに君は、昨日、この愛しい小柄な娘の前で、あたかも後期三級生として、ウーラントの素朴役を高等学校教諭クヌットマンの前で朗詠するときのように、阿呆面をしていたぞ」。

彼は勿論このことを彼女の前ではなく、まだドアを閉めた後のことで、こう付け加えた、「それで、この人々のことをどう思うかい」。

「この人々について思うこと」を述べる際には、全く完全にこれに付随していて、切り離すことのできない彼らの環境についての感想を抱くものである。これは全くこの場合に言えた。私はこう答える他なかった。「まことに上品だ」。

今日、私はこう言うであろう。「我々が関係した家は、高貴な家であった、と。しかしそれぞれの人生段階で独自の言い方をするものである。　ー　これは、豊かになる最良の途上にある裕福な家であった。これは私に畏怖の念をもたらした。我が友のフェルテンは皆目心動かされなかった。彼は早速、以前フォーゲルザングのハルトレーベンの許でそうであったように、今やフェンシング教師夫人フォイヒトの許で寛いでいた。フォーゲルザングの緑の生垣の間での如く、同じ関係であった。再び彼にとって垣根に美しい娘が現れた。ただ今回は、彼と喧嘩しては、仲直りし、また喧嘩するというのではなかった。レオニー・デボー嬢はこの世の誰とも喧嘩しなかった。この者は、「私どもの子」、彼女の弟に対し親切であったからである。

「でも二人とも似合いの二人の子供です」と我々二人がより親密になって、全く昵懇となると、後に彼女はこう言った。「貴方のお友達の方と、私の哀れなレオンは、お互い、手と手袋のように合っています。勿論アンドレスさんが手の方です。この二人が出会ったことに、私は喜びを感じています。もっとも、私の馬鹿げた弟のとても滑稽で、悲劇的な愚行のお蔭ですけれども。クルムハルトさん、どうぞ、私の弟をからかわないでください。ベルリンのような都市でも、相変わらずお伽噺のような片隅で育つ場合があります。私ども二人、レオンと私とがそうです。私の父がそうしたのです。(私の母は疾うに亡くなっています)。それで私どもはこんな風になって、　ー　レオンは格別にそうです。弟は私ども二人の中で、いつも心落ち着かない、空想家なのです。でも同時に弟はまともな良き商人でもあるのです。弟は私どもの店で帳簿を管理しています。父は弟にすっかり満足し

ています。でも、私どもが空想や夢想の中で育ってしまった、そのことの責任は本来この父にあります。これは、私どもがルイ十四世の下、偉大な選帝侯のブランデンブルクへ移って以来、一つの世代から次の世代へと伝わっています。いや、クルムハルトさん、仕立屋デボーの子供達は、その家宝と騎士本文庫とをラマンチャの高貴な貴公子ドン・キホーテのように有しています。レオンは貴方にまだ紹介していないのですか。不思議ですね。フェル、　ー　いや、アンドレス殿はよくそこに座っていらして、仰有るには珍しいものをすでに見つけられています。私も貴方のために言ってみましょうか。『ひらけ、胡麻』と」。

「恵み深い御令嬢、それはどうもご親切なことです」。

「いえ、デボー父子商会を冷やかしてくださいまし」。

ここでは実際冷やかす[嘲笑する]理由はなかった。デボー家は、サロンやコンサート用ピアノを、立派な絨毯やシャンデリア、美しい油絵や銅版画、それにその他の現今の趣味として要求されるものと一緒に保有しているばかりでなかった。文庫も保有していて、それに　ー　この十八世紀と十九世紀の素っ気ないベルリンで、　ー　十七世紀に由来する、個別には更に時代や歴史を遡ることもある博物館を保有していた。この一族がいかにしてこれを達成したのか、すでにそれ自体、一つの歴史的奇蹟であった。

「私どもの伝来の家宝は、このマルク地方へはほとんど持参出来なかったのです」とレオニー嬢は説明した。「多くは遺産か、結婚して得たものです。でもすべて本物です。父は仕事柄よくパリへ行きます。それから通常南フランスへも旅します。その父親と祖父もそんな風に過ごしていました。父は自分や子供達に何か向こうのものを持参せずには、家に帰って来ません。どうぞお掛けになってください」。

彼女が部屋の中央にある、重々しい、球状脚の、緑色の掛け布の書き物机の側に腰を下ろすと、このことが分かり、周りのすべてが本物であるばかりでなく、彼女も　ー　彼女の弟もそうで、この部屋の一部であると分かった。

「ここに私どもは座って、昔を振り返ります」とレオニーは言った、「すると父にとりましても、いや、まさに父にとって、当然なことに、現在の一日と仕事が別の地球上にあるかのように思われます。ここで、レオンと私にとって、自分達は最良のことと思いながら、人々の目には、これを持って私どもが現れると当然とても滑稽に映るに違いないものすべてがあります。私は多分当惑しないことでしょう。しかしそこの下の帳場の書き物机にいる私の哀れな弟は、残念ながら時々、当惑します。そんなわけで弟は最近また貴方の大学でそんな具合になりました。でもアドレス殿が、親切に弟の面倒を見てくださいました。弟、レオンは、夢と人生とを区別する術をまだ正しく習得していません。それでしょっちゅう打ちのめされた子供のように家に帰って来ます。この世でまた弟が立ち直れるようになるまでには、ここの空想的小部屋にいては、数週間かかります。私どもは元来この外部の浮世とは大きな付き合いがあります。この世界で弟は古代ギリシア人[ディオゲネス、白昼ランプを点して人間を探した]のように、自分に相応しい人々を探しています。いえ、弟が単に利用され、からかわれるだけならば、私は何も文句を言うつもりはありません。でも、弟は侮辱され、奥深く傷を受ける場合もあります。私は年長の娘であって、最も冷静な質であるといっても、　ー　私が全く幼い子供の時には、年上の兄もいましたが、マルス・ラ・トゥール近郊の戦い[1870年8月16日、激戦]で戦死しました、　ー　度々のことで

は弟を助けてやれません。いえ、一人の人間が側に一人の真の友を有するに値するならば、私の哀れな弟はそうでありましょう。クルムハルトさん、今この時、私のことを悪く取らないでください。今この時、弟はまたしても貴方の友、アンドレス殿をこのような真の友と見なしています。それで私は　ー　このことを貴方に話してよろしいのか、どのように話していいのか分からないのですが、つまり、私は喜んでいるのか、不安なのか、分からないのです。私の弟はこれまで多くの知遇を得て来ました。しかしこれは、私が少しも的確に把握できない初めての知遇です。いえ、貴方御自身が、私よりよく分かっておいででしょう。でも貴方の友の方が、私の愛する戯けたレオンを、他の人以上に、それも単にもっと上品に、つまりもっと手ひどく、哀れな玩具として愚弄なさるのであれば、貴方の友の方は、高貴で善良な方とは申せないでしょう」。

この瞬間ほどに、我が友フェルテンが、フォーゲルザングでの人生での最初の共同目覚めの時以来、彼の内部、表面にあるものすべてを、私の魂の前にかくも全面的に露呈させたことはなかった。私は彼についてもモノグラフィーを執筆して、それで博士号を取得することが出来たであろう。しかしこの時、ここで私が答え得たのは、ただ次のことであった。

「恵み深い御令嬢、ご安心ください。フェルテンがからかうのはただ自分だけです。フォーゲルザングに問い合わせてください。そこでは彼はこの点評判が良いというつもりはさらさらありません。元来、彼のことを全く正確に知っているのは、三人だからでして、それでこう申さざるを得ません。彼の母親に、私、それにエレ、...ヘレーネ・トロッツェンドルフ令嬢です」。

「貴方のこのお友達の方の愛するおばさんなのですね」とレオニーは尋ねた。私は実際まず一瞬、この質問は誰のことなのか考え込んだ。しかしこれは仕方ないことであった。その当時、ムンゴー夫人の旧姓は、初めてデボー姉弟の史的夢想の小部屋で発せられたのであった。

その後、その名はしばしば言及された。それはとても親しい響きであった。

「ほら、カールよ、どこでも相性の良い人々は見つかるものだ。我ら四人が現在、今ここで一緒にいるように、昔はまさに同じように我らフォーゲルザングの三人は、オスターベルクの森に座って、下の可愛い領主町を見ていたではないか。我らは今晩同じようにこのベルリンを眼下にしていないか。いつもただ物事の上にいて、出来るだけ物事とは捕らわれたくない。こちらの両法[ローマ法と教会法]の専攻生にお尋ねなさい、レオニー嬢。此奴は試補試験前で、野暮天に関する貴女のどんな質問にも完全に答えます。レオン、貴方は私を羊のようにぼんやり見ていても、巨匠だ。ちなみに、レオニー嬢、貴女は我が小娘の最近のニューヨーク情報に関し、何とコメントされますか。向こうの連中は哀れな小娘をすでに誑かしているように見えます。この小娘も今晩こちらにおればと思う。ここでその頭を冷やせばいい。その際、手伝って頂けましょうな、レオニー嬢」。

「貴方はとても可愛らしいお手紙を頂いています、アンドレスさん」とレオニー・デボーは小声で言った、「彼女は上流生活をしているように見えます。それでも苦労して、誠実な　ー　友達関係を、維持しようと、相手の、　ー　相手の、　－」。

「相手はフォーゲルザング、オスターベルク、要するにドイツの子供部屋だな」とフェルテンは笑った、「私も彼女にそう助言しようと思ったのだ」と少しばかり下唇を噛みしめて、そしてほとんど聞こえないほどの声で付け加えた、「彼女も、彼女が存命の間、私が彼女を手放さないと承知しているのだ」。

レオニーは、しかし、この最後の言葉を聞いていた、「この世にそんなに確かな握り締めがあるのかしら」。

「『意志のあるところ、道が拓ける』と我らの故郷のギムナジウムの老高等学校教諭のランゲマン博士は言っています。御令嬢、クルムハルトにお尋ねください。この者も人生観もやはりこの言葉に従っていて、勝者として墓に入ります」。

「フェルテン、阿呆なことを言うな」。

「私は今晩、この壁に見られる老ユグノーの牧師と若いアルビ派騎士の目の下でほどに、堅い信条を吐露したことがありません。この二人はひょっとしたらその昔、生きたまま焼かれたのかもしれない。しかし、この両人は今日でも我が親密な友、アルビ出身のレオン・デボー氏の襟を確かに握り締めていないだろうか。ちなみに我々は、このレンヘン[Helene]と私は、レオニー嬢、貴女の質問以前に、オスターベルクで賭けをしたのです、つまり我々両人のうちどちらが最も確かな握り締めを有するのか、そして相手を自らの下に連れて来るのか、と。勿論当然、現在のところ彼女が優勢で、私は家の我が老母のため、力を割けない。私はアメリカの彼女の許へ行かなければならないだろう」。　ーーーー

これは文書として、明文化されていないものである。我々は当時、ベルリンの町のレオンとレオニーのロマンチックな魔法の小部屋で、このような会話を行っていた。フェルテン・アンドレスが話題にした、このような手紙、つまりヘレーネ・トロッツェンドルフが父親や母親に隠れて書き送った手紙は、その部屋で手から手に渡された。この帝国の首都の、この他の路地で、我々はいかに大人びた、分別ある冷静な人間として振る舞おうとも、レオニー・デボーの帝国では我々はまだこのように未熟な民であって、新教徒の子供の天国の中で[マルコ、10,13以下]至高の名誉席、地位を要求して、許可されていたようなものである。しかし我々は勿論そうとは自覚せず、逆に自らを殊の他世間知に勝れていると見なしていた。レオニー嬢はひょっとしたらこの例外かもしれないが。

彼女は自分の弟の新しい友、この戯けたフェルテン・アンドレスを、次第に募る、より鋭く、より不安げな眼差しで見つめていた。私は勿論このことに気付いていたかは明言できない。私はこれらの頁を記述し、　ー　そして頁数を付け、そのことをしながら、私自身にとって、過去の大方がようやく明瞭明確なものとなって来て、論理的関連を得るようになったのであり、このことはどんなに繰り返し言っても十分でない。

彼こと、フォーゲルザングのこの少年が、この大きな、最初喜ばしげな、そして次第に真剣な、悲しげな目となったこの女性の持つ意味を、その生涯で自覚したことがあったのか、私には分からない。人は自分の周りの瞬きや盗み見、目配せを十分に注意しながら、立腹や苦悶、不安、嫌悪、絶望をそこから引き出しながら、多くの誠実に案ずる愛する目許からの視線を見失ってしまうものである。

奇妙なことに、レオニー・デボーは、私に最大の信頼を寄せていて、私を通じて次第に私同様に、フォーゲルザングの外観を知るようになった、あるいはむしろ彼女はクルムハルト一家、その父、母、息子を知ったばかりでなく、また老ハルトレーベンとミセス・ト

ロッツェンドルフも、　ー　この女性の薄暗い点も、眩しく輝かしい点も知るようになった。彼女は緑の生垣のすべてに寄りかかり、園亭のすべてに腰掛けた。彼女はオスターベルク[復活祭山]とこの森の縁の可愛らしい遊歩道とベンチについて、その下の谷の小さな可愛らしい領邦首都の眺めを知った。しかし彼女が最も詳しく熟知したのは、これは、ー　彼の母親、アンドレス・ドクトル夫人とその小さな家、　ー　つまり我らの隣の、間近に接して、登記簿での所有地の区分となっている、イボタノキや、スグリ、フサスグリの生垣の背後にある家であった。いや、私は今これを書きながら、ようやく、いかに彼女が彼の母親のことに通じていたか、確認している。　ー　すでに当時、　ー　彼女の手にドアの取っ手を委ねたら、彼女はオスターベルク麓のこの小さな家の地下室から屋根裏まで通暁していたことであろう。いや、何としばしば我々は溜め息を吐いたことか。「いや、かくかくしかじかでありさえしたら、万事はとても簡単に改善し、　ー　最も良く解決していたことであろう。とても簡単で、目の前にあることであった。かくかくしかじかの時、あるいは瞬間に、手を伸ばしさえすれば、生涯の長い、立派な、至福の道のために適切なことを行えたであろう。我々がかくも盲目で、愚かでなかったら、右手から左手への一転回、あるいはその逆で、完全に十分であったろう」。　ー　しかしこれについて実際、我々が何を知っていよう。　ーーーーー

フェルテンとレオンの関係、つまりフォーゲルザングの最良で、最も明敏な頭脳と、ベルリンの町の最良の、最も無邪気な、最も混乱した頭脳の関係は、同様にますます深くなっていった。この関係は、とても高貴で美しい次の関係ほどに美しくて高貴な比喩を知らない。つまり、愛する、賢い、死に至るほど、滑稽に見えるほど誠実な犬とその主人、飼い主兼　ー　最良の友との間の友情である。当時の話しである。

フェルテン・アンドレスの中に、仕立屋出身のこの哀れな、幸せな、金持ちの家の御曹司は、自分がこれまでベルリンと広大な世界の中、一家の魔法の塔の外部で探して見つけられずにいたものすべてを見いだしていた。　ー　つまり、自分同様に一般的な軍用道路からはぐれた仲間、然るべく自分のことを笑って、すべての高笑いや微笑と共に、肩を戦友のように叩く度に、耳たぶを引っ張る度に、自分の心をも高めてくれる人物である。いや、心ではない、ただ頭である。　ー

犬にしろ、女性の恋人にしろ、この人生の中で、その恋人、主人、友人を、レオンとレオニー・デボーほどに、すべての言葉、すべての目配せ、すべての動作を、静かに並んでいるときや、人々で一杯の社交室にいるときに、これほどより正確に注視し、より不安げに喜んで、すべての人生の喜劇の場面で、フェルテン・アンドレスが言ったりなしたりすることのすべてを、　ー　あるいは言わなかったり、しなかったりすることのすべてを見守っていることはないであろう。彼が私同様にこのことを明確に承知していたか、私には分からない。彼の後々の人生行路は、承知していなかったと証している。彼が慣れ親しんだやり方は、人々が彼を注視して、彼は人々の方に注目せず、人々を通じて自分の世界を自分の流儀で覗くのであった。このやり方は、　ー　我らのやり方と一致することはとても稀なのであった。我らのやり方と一致しようか。というのはしばしば私は故郷、フォーゲルザングにいたとき、そこの分別ある人達がこう言うとき、承認せざるを得なかったからである。即ち、「この少年は全く狂っている」と。　ー

向こうのフェンシング教師夫人フォイヒトの許、フェルテンの最初の学生部屋、昔のド

イツ人兼フランス人の仕立屋とその子供達の魔法の思い出の部屋での生活は奇妙に快適なものであった。外見では、ドロテーエン通りの家を見ても、その内奥に隠されている内部のものは分からない。私こと法学のドイツ人学生が、ベルリンへやって来たのは、当地で自分の学問を更に一層充実させるためであったが、このことを日に日に私は忘れて行った。この関連で、私の滞在が私の父によって、ほんの短期間と定められていたのは、一つの幸運であった。私がこの学期の時、家で説明することの出来た唯一の女性は、アンドレス・ドクトル夫人であった。しかし勿論夫人はすでに承知していて、この帝国首都[ベルリン]からの手紙の山を示して、悲しげに微笑した。

「いえ、私も承知しています。あの娘は向こうのアメリカでまた自分の仲間に帰依するであろうと分かっていました」。

軽い溜め息と、すぐ間近のものに目を向けるときの息子の仕草で、夫人は付言した。夫人は自らの言葉を固く信じていた。

「親愛なるカール、息子のことはご存じでしょう。それに私は以前からほとんど影響力がないということも」。

このように女達は、幸運や不運、最良のことや最悪のことを、この地球の上で伝えるとき、話すものである。　ー

しかし彼は私の友であったし、私は彼の友であった。私は彼の人生を共に体験した。しかし、まさに今ここで、この紙片を前に、私は一頁ごとに、これについて語るという使命に私はほとんど適していないという感慨に襲われる。私は自分に出来ることすべてを達成した。彼は　ー　世間の人の言葉では、　ー　何も達成しなかった。　ー　それでも、　ー　彼に対する羨望を自らの裡で生じさせないようにするために、私は何と気を取り直さなければならないことか。私は彼の墓塚に立っていて、私に対し、そして我らの世間に対する彼の凱旋的訴訟において、ただの素っ気ない記録筆記者に留まる他ない。しかし私には、この「放蕩して果てた」、この　ー　無所有の人間に対して、愛する妻や、愛する子供達を救助に呼びつけることも出来ない場合、何が残るであろうか。　ー

申し上げたように、私は帰郷して、最初の法学の試験を受けなければならず、彼をベルリンの或る仲間、あるいはむしろ同志の中に残していた。この同志は当時すでにデボー一家に限定されるものではなかった。

内容並びに形式から判断して、フォーゲルザングからの最良のものいえるものは、ベルリンのドロテーエン通りに存在した。いかにフェンシング教師夫人の部屋では、昔の故イエナ剣闘士の、レオンがフランス年代記で見つけた言葉では、フェンシング師範の、トロフィー[記念品]が、その内奥の心地よさを微かにカタカタ鳴らせて表現していたことか。いかにフェンシング教師夫人は、時々自分の「とても馬鹿げて、愛しく、愚かな少年」の耳を引っ張って叫んだことか。「幼い狐小僧の貴方、お聞きなさい。私どもは一本の槍に取り掛かっている七人のシュヴァーベン人ですか[衆愚の例]、一頭の駄馬に乗ったアイモンの四人の息子達ですか[名声の例]。私には実際分かりません。それで、貴女、レオニー嬢の意見は？この人、一体真面目さをどう考えているのか、本当に分からないと、私同様思いませんか。いや、この人、かつて生涯、何かを真面目に考えたことがあるのかしら。

私個人としては、長いこと、今ほど度々私の亡き連れ合いが生き返って欲しいと願ったことはありません。この若い軽薄な空想家に、正しい剣さばきを教え込んで、その人生途上で、暴漢に襲われたりして、国道溝に捨て置かれるという目に遭わないようにして欲しいものです。フェルテンよ、フェルテン、フェンシング教師夫人フォイヒトのこの言葉を受け入れなさい。私は昔、幾多のしっかりした手許から幾多の立派な剣が叩き落とされるのを見て来ました、と。決闘では、空中で光り輝くものすべてが、後に正しい流儀通りに、立派な成果を収めるとは限りません。アンドレスさん、好きなようにお話しなさい。貴方のような、小心者を挑発する才能にだけは長けた、哀れな、無邪気な、戯けた、犬のような無鉄砲者を、私はイエナでも、ここベルリンでも、その他私の長く愛しい人生の中でも見たことはありません。レオンさんに私はご意見を伺いません。デボー嬢、貴女のご意見はいかがです」。

「サラ・イ・ゴメス島[シャミッソー作、島での難破船者の孤独な生活と死]の路地やで国道で人々に踏まれて死ぬ場合もあります」とレオニー・デボーは小声で言った。当時その言葉は、陽気な談笑の笑いの中で、いつものように私の側を通り過ぎて行った。ひょっとしたらせいぜいほんの一瞬、どうしてこの娘はこう言ったのか私は不思議に思ったかもしれない。今日、私の視線は、私の書き物机から、近隣の家の屋根を越えて、鬱蒼とした丘の山頂に釘付けになる。これはオスターベルク[復活祭山]で、この山頂で我々は子供時分、流れ星、聖ラウレンティウスの涙が落ちるのを見て、流星を見る度に一つの願いを述べて、その実現を祈念しようと試みたのであった。

サラ・イ・ゴメス島での死、これは孤独な死である。しかし　ー　当時フェルテン・アンドレスは世界征服者の行程と勝利を願っていた。

彼の願いは成就した。彼は世界を征服し[ヨハネの手紙、5,4]、ただ一人っきりで亡くなった。[ゲーテ、『悲劇エッセクス伯のエピローグ』]　ーーーーー

そんなわけで、申したように、私は彼をベルリンに残して、故郷で忝くも、そしてまさに父も望んでいたように、最初の私の司法試験に合格して、私のためにポストを見つけてくれる最寄りの役所に、司法専門の助手として採用され、上司の問い合わせに対応し、私の父の言う、二番目の「より強力な明かり」に対し、つまり次の試験に対し、不当とは言えない自信を持って、立ち向かうことになった。彼は何度か休暇の際に、母親の許へ帰省した。　ー　彼は　ー　フォーゲルザング並びに領邦首都に自分の友、レオン・デボー氏を紹介した。彼はそのとき、レオンに対し、ドクトル夫人の屋根裏にある学童部屋の自分のベッドを譲って、自らはソファーに寝て、(私を通じても) この首都でこう広めていた。レオンの家族は、諸世紀の間、「子爵」の肩書きを使用しないでいたが、しかしフランス共和国はレオンのことを認めていて、この内気な若い人間は、自分との交誼の術を心得ている者すべてに、その父親の家での無尽蔵の信用を保証してくれる、と。

「これはぼんやり君以上のことだ」と故郷の我らの同時代の仲間は嘆息し、しかしながら安んじてこう付言した。「いや、彼はまたしてもこの使い道が分からないだろう。そして、自分の立派なカルタを、愚行からではなく、全くの思い上がりから、また失うことだろう」。

「こちらの貴顕氏達に一体私について何の法螺話を吹き込んだのです」と多分シュプレー河畔のベルリンにおける現在最も裕福で著名な仕立屋の御曹司にして継承人は、いつも

のように内気に当惑して両手を揉んで、尋ねたことであろう(そしてそれも当然である)。「この魅力的な地の人々が、私に対してかくも愛想が良いのは、きっと私自身の力によるものではないでしょう」。

「レオン、単に君の力のせいだ。私はただ偶々こう打ち明けただけだ、つまり貴方は私の良き友であって、貴方の父親殿は私に対し、その家と無制限の信用貸しとを、即ち途方もないつけを提供してくれている、クルムハルトが証人で、我らの老母も証言してくれよう、とな、子爵殿」。

「そうですね」とドクトル夫人アンドレスは笑った、「親愛なる友の方、安心なさい。人々の間でのそのようなひどい評判は甘んじなければなりません。路地で人々に振り向かれるとき、この話しは当惑しても、ひどすぎる話しではありません」。

「指ヲ指サレテ」[指を指されて、この人がそうだ、と人々が言うのを耳にする。A.P. Flaccus,34-62]と私は当然口に出した。すると自ずと当然、フェルテン・アンドレスも引用を続けた。「ソシテ、コノ人ガソウダト言ワレルノヲ耳ニスル」と勿論続け、しかもにやりと笑っていた。「いやはや、これにも引用か。レオンよ、今日の午後は、カジノのコンサートに行って、上流の異邦人役を演じたいか、それともむしろシュルダー丘の森で、私と一緒に横になって、私の周りの蠅を追っ払ってくれるか」。

「まあ、フェルテン」と隣保夫人アンドレスさえも口ごもった。しかし彼女の裔は言った。

「母上、私は彼の教養に磨きをかけるのです。それでレオン、どうだ。それに君、アウスクラトア[Auskultator無給研修司法官]というかドイツ語で傾聴者、ハイゼ[Heyse1764-1829]の外国語辞典では、会議傍聴者の貴兄はどうだ」。

私もこの小都市の上流、あるいは最上流の社交の庭園コンサートを断念して、かくて我々は丘の森林を少年時代と同様、今回もまた散策した。そして我らの戦友、ヘレーネ・トロッツェンドルフもまた我らと一緒であった。つまりフェルテンは彼女の手紙をポケットに持っていたのである。この手紙について、彼は自分の母親とすでに何度も話していて、今やシュルダー丘でも我々により詳細に説明した。　ー

我々は今日、この友と私は、以前の我らの魔法世界のメルヘンの片隅をすべて再訪し、そして我々は、「帝国首都からの高貴な客人」に対して、少しも気兼ねしなかった。ちなみにフェルテン・アンドレスがかつて何らかの具合に気兼ねした相手がいたであろうか。

彼は我々を案内した。茂みから木々へ、岩から池へ、魔法の森全体を絶えずこう言いながら、「カールヘン、まだ覚えているか、クルムハルト、まだ忘れていないか」、最後にシュルダー丘の奇妙に枝の絡んだ高い樫の木まで来た。勿論この木にはフォーゲルザングの三人の近隣の子供にとって、本当の冒険の思い出がぶら下がっていた。　ー

この木にかつて彼女はよじ登り、彼は彼女をこの空中、揺れる小枝からまた下ろして、固い大地に再び彼女を立たせることが出来なくなっていた。私は町へ助けを求めて駆け下り、隣人のハルトレーベンに、加勢の人や、梯子と綱による救出を叫ばなければならなかったのである。

太陽はすでに沈みつつあった。しかしこの丘では太陽はまだ茂みの森を通じて輝き、梢

は陽を受けて燃え上がっていた。フォーゲルザング出身の我ら両人は、高い草の間に横になり、レオン・デボーは木の切り株に腰掛け、膝の上で上品な貴族の両手を組み合わせて、天頂を見上げ、周囲を夢想的に眺め、この友を見て、嘆息した。

「いや、あなた、　ー　私がどんな気分か、お話し出来ればと思います。これはまた、何と不思議な一日だったことでしょう。　ー」

「貴方はシュタンゲン[1868年設立のドイツ旅行会社]によって、金色のオレンジとレモンの国、オリエント、それにノールカップを旅し、アルビ出身で、ドイツの偉大な選帝侯を名親に有し、ベルリンの最も趣味の良い、裕福な仕立屋を父親に有し、レオン・デボーと自らを称し、プロイセン王室領の商務顧問としていつか本物の芸術家に墓碑の製作を依頼することになるであろう人間です。レオンよ、最も不思議なものは、まだ貴方のために残されていて、これからようやく耳にすることになろう。この夕べは、勿論、それに相応しいものだ」。

彼、フェルテン・アンドレスはこのことをとても不機嫌に、仏頂面で忌々しそうに話したので、私は肘で起き上がり、彼を一層良く眺めた。レオンはほとんど不安げに彼を見つめていた。

彼は、草の中に寝ていて、両手は頭の下にあったが、私の義兄、「ぼんやり君」を救出した際に半ば麻痺した手を取りだして、高く示した。

「カルロスよ、上のあの太枝だったな。彼女がそこによじ登って、ぶら下がり、かじりついて、金切り声を上げた。私は普段夢も見ず眠る。しかしその日の私の不面目は、夜眠っている時、相変わらず時々不意打ちしてくれる。あれは私のだ。　ー　つまり私の枝だ。先祖の猿の真似をして、出来る限りのことをして、高く登ったつもりであった。デボーよ、私の最初の現実の人生戦闘における敗北であった。このクルムハルトの悲鳴を私はまだ覚えている。この悲鳴の後、唯一の正しい俗人の考えを彼は思い付いて、谷を駆け下りて、隣人のハルトレーベンを上まで連れて来て、我々を下に下ろすことにしたのだ。いいかい、諸君、人間はそんなもので、この木、それにこの木に付随していたこと、この木に付随しているもの、これと私は、どんな人生の茶番劇の際でも、縁切り出来ないのだ。これは、私がこの世で、人間の至らなさを、自ら経験した最初の出来事だ。どんな戦場での敗北の英雄も、その体系における挫折した哲学者も、この午後以来、何か新しいことを私に教えてくれるものではない。レオンよ、この平日仕様の世界では、英雄主義の余地はない。それ故、私は今朝から固く決心している。兜や甲冑は釘に掛けておく、すべての羽根飾りを羽根箒として寄贈する、とりわけ学術上のインク壺を側溝に注ぎ出し、プラトンとアリストテレスの本をパタンと閉じて、仕立屋になるぞ、と。私の老母はこの決心を承諾している。既に、デボーよ、貴方の父親にも伝えてある。君らはどう思うか。面白いと思うか、痛みを感ずるか」。[『ファウスト』鴎外訳：おや。どうしたのです。感心したのですか。せつないのですか]。

レオンと私は、真っ直ぐに両足で立って、下の彼をまじまじと見つめた。

「フェルテン、気でも狂ったのか」。

「いつもと変わらない。しかしそれ以外にただ、新たな、無駄飯食いのナンセンスとフォーゲルザングで言われるだろう」とフォーゲルザングの現実の英雄は、以前ヘレーネ・トロッツェンドルフ嬢がよじ登った、樫の木の下で笑って、より一層快適に説明した。「い

や、諸君、そういうことだ。そんなわけで、我々は自らを自由と見なして、鎖に繋がれる。鉄で出来た鎖が最も頑丈だとは限らない。蜘蛛の巣でじたばたする蠅どもはどれもそうぼやくことだろう。レオンよ、貴方と貴方の親愛なる姉上も同様だ、しかしだ、敬虔で阿呆な夢に虚けた目で、　ー　頼むから、デボーよ、そんな風に愚かな真似は止せ。それが現実だ、まこと神々の些細な好意なんてない、君らプロヴァンスの青い天の中の子供らは、マルク・ブランデンブルク地方とベルリンの町の上、君らの黄金の糸にすがることが許されるとしても。...クルムハルトよ、今この時ほど、君の議事録作成者風な顔が私にとって好都合に思えたことはない。君がいつか君の子供達に、この青春の友について語るとき、忘れずに、この友を弁解するためにメランコリックに頭を振りながら、こう述べることだな。この哀れな奴はどうしようもなかった。あの娘が此奴の鼻を通じて、自分の金髪の毛の一本を通して、それで引き寄せたのだ。　ー　かくて、彼は仕立屋となって、大西洋の向こう側で、学会からは消えてしまったのだ、と。この木は無駄に立っているわけではない。私がこの木の下で寝ているのは理由がないわけではない。下のフォーゲルザングでは、私の老母がアメリカとの文通にいそしんでいる。私はここで、ポケットにミス・エレンのサラトガからの最近の手紙を持っている。この娘は今一度無謀によじ登った。私はまた追いかけなければならない。これに対しては、救助の術も防御の術もない」。

彼も今や両足で立っていた。彼がこれほど美しく、誇り高く、憤然と見えたことはなかった。彼は、威嚇するように、健全な右手を我らの上の厄災に満ちた枝の方、彼らが以前ぶら下がっていた空中の高みに上げた。つまりフォーゲルザングの二人の子供が、一方は震えながら死の不安で泣き声を出していて、もう一方は助けることが出来ず、もがいて空しく、無気力に空中にぶら下がっていたのである。

「その手紙を我らに読ませる気はないのか、あるいは朗読する気は？フェルテンよ」。

彼は躊躇いながら、ポケットから手紙を引き出して、私に差し出し、すぐに引っ込めた。

「駄目だ。行間を沢山読み込む必要がある。君らにその才があるか。カール、君は全然駄目だ。ひょっとしたらそこの夢想家レオンはまだ幾らかましかもしれない。しかし阿呆なことだ。ここに、デボーよ、貴方の姉の御令嬢がいないのは残念だ。御令嬢なら、その愛らしく、誠実な、賢い目で最も明瞭に見抜くことだろう。私の母の意見はこうだ。この娘は我らにとって失われた。この猿はフォーゲルザングにとって無謀に高く登っている。チャールズ・トロッツェンドルフ氏はこの娘に対する自分の権利を、利子と共に得た、と。そうかもしれない。しかし母の確信が私に何の関係があろう。私にはこの哀れな娘が、その高笑いの行間の間に、金切り声を上げて私の名前を叫んでいるのが聞こえる。昔のあの上の太枝のときと同様に。しかし今回君は隣人ハルトレーベンの許に、綱と梯子を求めて駆け下りることは許されない、古参の少年よ。私は無謀な登攀から、今回他人の助けを借りずに、連れ戻す。今回ほど自分の人生で何か確証を抱いたことはない。その通り、貴方の姉上が、レオニーがここにいたら、姉上は正しい目で、私の目で、この阿呆な殴り書きの行間を読んで、私に正しく戦勝祈願を述べることだろう。我ガ勇敢ナ騎士殿、救出ニカカッテクダサイ。かくてこうなるわけだ。私は遠方の西部世界で、聡明なドイツ人博士としてばかりでなく、紳士服専門の世界を股にかけた旅行者として名を上げることだろう。半年間だけ、貴方は、貴方の父親殿の商売の帳簿職を私に任せる必要があろう、レオン・デボー殿。フェンシング教師夫人フォイヒトの許で、この件につき委細を話し合うことに

しよう。しかしクルムハルトよ、言っておくが、そんな阿呆面をするな」。

下の谷で、彼の母は私にこう言った。

「哀れな息子。カール、息子は今計画していることを、あなたに話したでしょう。息子に、千もの理由を上げて、反対しても無駄です。私は残念ながら、反対するアドヴァイスをしても無視されるのが嬉しい始末です。あそこにここ数年間、私が哀れな娘と交わした手紙の束があります。通常の悲劇的茶番です。通常の世界、卑俗な世界が、またこの娘を私どもから奪って行きます。トロッツェンドルフ商会の思い通りです。しかし神の精神がどのような時代でも水面の上に漂って、[創世記、1,2:神の霊が水の面を動いていた]、その正義をあらゆる方法で主張します。とても風変わりな仕方であっても主張します。幻想もまさにこの手段の一つであって、この大地を緑色にし、美しく保とうとします。それであなたの奇妙な同級生[フェルテン]は自分の幻想を手放さないのです、親愛なるカール。息子はあの娘をまだ諦め切れないのです。それに息子が、あの娘も相変わらず彼だけを待っていても、彼に助けを求めていると述べるとき、息子は真実を語っています。私に力があるとして、私はこれを変えたいと思うでしょうか。違います、違います。全く確かに違います。私も、やれやれ、相変わらず、私の幻想を確かに抱いています。息子のように心から高笑いして抱いているわけではありませんが。あの娘も、あなた方の子供時代、私の子供として育っています。私は彼女の心根が、どのような状況下でも、　ー　どんなであっても、　ー　その変わらぬ心根が分かっています。たとえ彼女の心が彼の許から去って行こうともです。息子が遠方に行ったら、このことを、眠れぬ不安な夜ばかりでなく、私の窓辺に陽光が輝くときでも、自分なりに考える時間がありましょう。親愛なるクルムハルト、あなたの善良な、誠実なお父上は、現在、以前よりも頻繁にここ私の許にお出でで、昔と同様、また私と私の子供を教育してくださいます。現在お父上のご意見では、私の息子は今、その人生で初めて、実用的考えを有するようになったと仰有います。それで私のような者は、その不安や憂慮はともかく、笑っていいのではないでしょうか。ベルリンからのあなた方の親切な、金持ちの若い友、あなた方のレオンさんは、親愛なる友の方、この点でも大きな貢献をなさいました。レオンさんは、あの人、つまり善良なあなたのお父上に対して、少なくとも私のフェルテンの信頼欠如に関し、少なくとも幾分かとりなしてくださいました。神様、私どもは一体何という諸力に支配されていて、あちらこちらと引っ張られていることでしょう。　ー　『私はこの若者がかくも実際的であると思ったことはなかった。私が少なくとも半分は間違っていたのであれば、確かに嬉しいことだ、お隣のご夫人』とあの方、あなたのお父上は仰有いました。偉い、現実の商人達が若干彼のことを評価していて、その戯けた試みでも、彼のことを贔屓していると知ってからのことです。ご覧なさい、あなた、私はただ率直に、腹蔵なく、あなたと話しています。ここフォーゲルザングの私ども皆の中で、あなたは本当に分別のある唯一の方であり、あなたの心と情緒も、やはり私やヘレーネ、あなたの友のフェルテンのものと同じですし、　ー　あなたも私のフォーゲルザングの子弟の一人だからです。だから私の話す戯言から、いつかあなたが利用出来るかもしれないことを引き出してください。広大な世界の眼前ではなくても、あなた御自身の眼前で、私どもに当地での権利を与えるためです。だってそうでしょう。まさに私は世間の意味での、私のフェルテンの成功を信じていないから、まさにそれ故、フェルテンの哀れな、不安で一杯の母親として、一人の方を得たいのです。正しい仕方で、他

人に対してではなくても、自分自身に対して、私どもについて、完全に了解して語る人、私どもの運命をすべて意義づけることの出来る方を得たいのです」。

人間が自分自身について不思議がるときほど大きな不思議はない。

私はこの原稿を書き始めたときには、固くこう確信していた、つまり、暦からのように或る思い出から別の思い出へ移り、素っ気なく、真実に、実直に、色を付けずに続けて行き、これを多かれ少なかれ、分別ある論理的結論へと導く、と。しかしこれがどうなったか。私がペンを再度、取ることになった日夜から、更に何が生ずるであろうか。こうしたこと一切が、いかに私自身を自らの中から取り上げ、一緒に拉致し、私を自らの生活圏から亡き友の世界へ導いたことか、いや、投げ入れたことか。私は自分の肩に彼の固い手を感ずる。そして彼の超然たる高笑いが、絶えず私の耳許で聞こえる。いや、然るべくこれを紙片にまとめることが出来ればいいのだが。しかしまさにそれが出来ない。かくて自らに課した重荷は、しばしばとても辛いものになって、私がフェルテン・アンドレスについて実際文書に有するものすべて、記録や証人によって証明出来るすべてをもってしても、形式面でも色合いの面でも、その不十分さを補えるものでない。

私が故郷の町裁判所の試補として、再びベルリンに彼を訪ねたとき、彼は自分の人生の夢物語を更に再度本当のものとしていて、デボーの父親の帳簿の許に座っていた。私の帳場に来て、かつて私が目にした中で、「一番珍しい見習」と愛想の良いこの老デボー殿は形容していた。

「試補殿、私の息子がいかに彼に心酔しているか」と彼は付言した、「貴方は信じられないでしょう。しかし私の娘、私のレオニーも以前からそうであって、私のどんな憂慮にも反論して、いつもこう言っていたとは、更に信じられないでしょう。この若い殿方の計画されていることは、愚行とか、冗談、気まぐれではなく、自分の望みを良く承知しているのです。私もこの人の立場であれば、きっと全く同じことをすることでしょう、と。つまり、彼は合衆国で自分の運を試したいのです。それでやはりそれは正しいことなのでしょう。哲学の我らのドイツ人博士では、この点向こうで多分芽の出るのは遅くなりましょう。老いた祖国ドイツは既に若干かなり多くこのような精神的に過剰な者達を送りつけています。それで老いたドイツ人仕立屋ともなれば、新世界でも結構顔が広くて、哀れな変人努力家に対しても、十分な収入が得られるよう援助協力出来るかもしれないのです。貴方の友人殿のことを哀れな変人と私の子供らに話すことは勿論許されません、試補殿。だから子供らには私のこの表現を耳に入れないでください。この建物内では、奥の建物を含めまして、我々は奇妙な仲間です。時々私はこう思います。我らすべての中で、唯一分別ある者が奥の家に住んでいる、と。つまりフェンシング教師夫人です。いや、この夫人も我らのドクトルのことでは、両手を打ち合わせてショック状態です。彼女はイエナとかその他の大学町で幾人かの変人若造と知り合っています。しかし貴方の友人アンドレスほど破天荒な者は知らないと彼女は言っています。唯一幸いなことは、夫人がコロニー、　ー

阿呆のコロニーと呼ぶとき、自分を例外にしていないことです。こちらのドロテーエン通りで寄り集まるとかいうコロニーの話しです。ちなみに、この話しで私が本当に心配に思っているのは、ただ一人の娘のことで、試補殿、私のレオニーのことです。私の息子は

既に現実生活に適応しています。この現実生活のために、我々はコロニーから、これは我らのフランス人のコロニーのことですが、その素質才覚[Anlage]を昔、我らの選帝侯に持参して来ており、用立てております。息子は商務顧問にはなれなくても、取次業顧問にはなれましょう。あるいは息子が望もうと望むまいと、仕事柄そのような者になります。しかし娘の方は、　ー　あなた方や我らのドイツ人の血から、最近の二百年間にこの娘の中に流入して来たものがありまして、これは完全に私の計算の埒外にあります。私の哀れなレオンなら、私はかなり正確に、自分自身から、必要なとき、理解出来ます。しかし私のレオニーの方は、　ー　試補殿、私でも彼女の飛躍に付いて行けると自信を持って言えるためなら、惜しみなく金を注ぎ込まなければなりません。娘は、デボー家の他の者同様に、デボーと称しているのでなければ、我々プロイセン王室領国家の市民誰一人、この娘も所謂ダンス教師の民族に由来するとは気付かれないことでしょう。いや、私は奥の建物との交際に微塵も反対しておりません。しかし娘を探して、問い合わせると、娘がただフェンシング教師夫人の許にのみ見いだされるのは、私にとって若干行き過ぎに思えます。私は娘を眠レル森ノ美女と呼んでいます。娘を通常の生活に連れ戻すために若い衆や郎党の一人を送り出す必要が再三あるのです」。　ー

これはまた騒がしい作業場で、そこにこの大都市の最も高貴な馬が最も著名な蹄鉄工とその助手達の治療に任されるのであった。再び暗い入口と、急な狭い階段が現れて、フェンシング教師夫人とその入れ替わる借間学生達の群れに通じていた。ドアの鐘はまだ以前と同じ甲高い音であって、ドアを開ける者は、以前と同じ小柄な騎士宮廷風女性であった。そして一番変わっていない人がこのフェンシング教師夫人フォイヒトで、いつものように両手に編み物道具を持ち、左の腋にそのための糸玉を持っていた。このような愛らしい、年金と昔の思い出を拠り所にしている老レディーが編むこれらの靴下はどこへ行くのであろう。フェンシング教師夫人の両手から出来上がったものについて、ベルリンのフリードリヒ・ヴィルヘルム大学の事務員は、何学期も渡って統計学的に全く正確に立証することが出来よう。　ー

夫人は私をすぐには見分けなかった。最後の出会いと今日の訪問との間には、二回の国家試験が終了していた。

「貴方ですか」とそれから夫人は叫んだ、「ようやくまたですね。私がこの世で一人の人間を待ち構えていたとしたら、貴方がそうです」。

私に自分の部屋を開けながら、夫人は私を中に押し込んだ。

「レオニー、フォーゲルザングからの二番目の方です。クルムハルト試補さん、でもまずは私と決闘です。鼻の上の切り傷が故郷の緑のテーブルの専門家達の間で貴方に実害を及ぼしていないのは、明白です。下のデボーの後継者御曹司の許での、もう一人の呉服屋の番頭、勘定台へジャンプした者ときたら。貴方は、学友殿、まだレオニー・デボー嬢を覚えていらっしゃるでしょう？」

いや、私はまだよく覚えていた。愛しい娘は、以前と同様、風変わりな、老いた女友達の向かい側の安楽椅子から起き上がった。彼女は更に一層、静かに美しく、堂々と高貴な風になったように見えて、微笑した。

「フォイヒトお母さん、自分の立派な友をそう簡単に忘れはしません。わけても、フォーゲルザング出身となれば、　ー」。

「そしてベルリンへ来て、ようやくまた『薔薇物語』[1225-1280]からの最も白い手に接吻したく存じます」。

彼女は私に微笑して手を差し出した。しかし接吻のためではなかった、そして言った。「こちらへ、試補殿、いつもの仕立屋の工房とロマン主義の心の作法通りに。ようこそ。私ども古びた、馬鹿げた玩具も、貴方のお心には、相変わらず誠実なものとして正しく評価されていましょう。プレ・オー・クレール[パリの聖職者の牧場]のシャルル[カール]殿」。

「書記の牧場です」と上品な皮肉を解しながら、私は叫んだ、「その通りです、その通りです。恵み深い御令嬢、恐れも知らず、欠点もない騎士[バヤール]は下の、表の建物の城代殿の帳簿の背後、ペンを耳に挟んで、その三脚の椅子に、その昔、至上のキリスト教界の自由なフランス王国を守るために甲冑をまとっていた騎士よりも、上手にまたがっています。それでフェンシング教師夫人フォイヒトも、ザーレ河畔[イエナ]の騎士領を守るために剣を立派に構える前に、既に打ち倒　ー　負かされています」。

「まず若い人で、イエナ派に属して、[イエナ近郊の]ハウスベルク、その狐塔から世界を一望すべきであったとすれば、我がフェルテン殿が相応しかったことでしょう」とフェンシング教師夫人はうんざりし、また悲しげに嘆息した。「いや、このベルリンです。どうしてドイツの学生が、ベルリンでその学業を始めながら、ベルリンで行き詰まってしまうのでしょう。その上、私の亡き連れ合いなら感涙にむせいだであろうそのような天賦の才に恵まれたこの子のような場合です。左手は萎えているけれども、現在この地で見いだせる最良の剣士が、　ー　今や帳簿のテーブルの奥に平伏しています。四方の壁から石灰が落ちます、つまり訳が分かりません」。

「フェンシング教師夫人の仰有ることは分かります」とレオニーは微笑した。

「向こうの貴方の友の部屋の壁は、勿論悲しげに、その高度な技の凱歌を上げる勝利について語ることでしょう。試補殿、私の弟を見ても、分かりましょう。世の中は転倒しています。仕立屋が決闘を始め、ゲルマンの若い英雄が、仕立屋の裁縫台ではなくても、複式記入の帳簿界に入ります。そして、...」。

丁度外部の通路のドアで鍵の音がして、通路で足音がした。若いレディーは、顔を赤らめて、驚いたように、話しを止めた。

「低い谷よ、隆起せよ、
　高い山よ、沈下せよ。
　邪魔だ、邪魔、
　最愛の人が見えない」。[フランスの古民謡]

と外でフランス語の民謡が聞こえた。我々に以前、レオニー・デボーが表の建物の自分のサロンのピアノに合わせて時々歌っていたのであった。

「[ペローの]『鵞鳥おばさん[マザーグース]のお話し』[1697]からの食卓仲間がまたもほぼ完全に揃っているな」とフェルテン・アンドレスが叫んだ。私は再び眼前に、青年ならバイロン卿を、高齢者なら若いゲーテを思い浮かべるように、旺盛な彼の姿を見た。大胆な、高笑いする、勝利を確信している目と、口許の悪漢めいた特徴、　ー　神々とフォーゲルザングの寵児、恩寵による軽薄さの世界征服者である。私はこのフェンシング教師夫人フ

ォイヒトのトロフィー[記念品]の下、このときのような彼とは再会したことがなかった。彼は我々に、間近な未来に対する計画について、子供のように語った。あたかもこの世でおよそどんな人間でも計画するであろうことで、極めて自明なことについて話しているかのようであった。

彼は私が述べる反対意見をことごとく片付けた。　ー　老いた騎士宮廷風女性とレオニーは、彼に対抗する武器を有しなかった。ちなみにこの美しい娘は、そのメランコリックで内気な、大きくて、憧れるような目の他には、何の武器も有していない。その目はその愛らしい威力を単に彼の背中の背後でのみ、告知するもので、彼に捧げられているこれらの奇蹟的富について彼は何も知らなかったのである。

我々はこの朝とても「陽気」であった。特に、この人生の朝方、この若い世界都市の最も優雅なティーアガルテン騎士団の一員であるレオンも長靴と拍車姿で加わったとき、盛り上がった。

「私は先ほど、貴方の事務机の奥の三脚椅子から飛び下りたとき、名誉回復も果たした」とフェルテンは言った、「貴方のお父上が私の肩を叩いて、こう仰有った、『親愛なる友よ、貴方の教授陣は、講義をし、試験を課し、卒業証書を授与するばかりではない。この証書があれば、貴方のような文学青年も世間に打って出て、世間で若干の地位を確保できるのだが。貴方はまこと既に、世間知において、我が息子より、鼻先何倍か先んじている。半年したら、私は貴方を、息子の代わりに抜擢して送ろうと考えている所がある。アンドレス殿、有り体に言えば、貴方の悪しき影響から息子を守るためだ。大西洋を渡った向こうで紳士服専門店に、貴方のドイツ人の情緒を注入する、かくて貴方は向こうで大胆に開店できよう。当地のこちらで、私の祖父、レイモン・ギ・デボーが開店した具合にな。祖父の父は、我らの家の記録では、クーナースドルフの戦い[1759、プロイセン敗北]の後で、老フリッツ[フリードリヒ二世]にキュストリーンの廃墟[1758、ロシアによる]の中、短白衣と二条の襟飾り姿で、フランス語で説教し、慰謝することを許されていたのだ』と」。

彼が今になっても、運命の意志に従って、隠れたところからすべての行路とすべての言葉に同伴している目について、何も知る定めになかったのは、何と残念なことか、何と残念なことか。

私が、フォーゲルザングのこの文書を校合することを始めて以来、美しい冬と呼ばれるものを、　ー　つまりさわやかな季節に適った霜、呻る嵐は少なくて、多くの積雪を得ることになった。私が書き進めている今夜も、今また雪が降っている。午後以来、絶えず、白い渦巻きがさらさら舞い降り、大地を静かに、滑らかに、綺麗にする。私が窓辺に寄って、間近のガス燈に目をやると、この美しい光景から離れるのは難しいことになる。すべての自然現象の中で、降雪は、(温かい部屋から眺めると)、最も快適な映像と夢の時間をもたらしてくれる。雪は心を温める。雪に覆われていながら、家も故郷もない空腹の遍歴者として、国道で疲れて眠り込み、心地悪い、苦い現実から穏やかに逃げ出て夢想する状態を快適な風に想像する人々、利己主義的軟弱者どもを私は知っている。

低い谷よ、隆起せよ、

高い山よ、沈下せよ。
邪魔だ、邪魔、
最愛の人が見えない。　ー

この古いフランスの歌が、どこかのドイツの歌であるかのように、　ー　一晩中私の心から消えないのは、一体どうしてなのか。雪が降って、谷が埋まり、山々に雪が白く、単色に積もって、山々が押し付けられると、私はこれを再三ハミングせざるを得ない。

我らにレオニー・デボーがこの歌をベルリンのドロテーエン通りで初めて歌ってから、既に何年も経過している。地上の高い山々、低い諸谷、広大な海も、フェルテン・アンドレスとヘレーネ・トロッツェンドルフが再会することを妨げなかった。二人が地上での生活のために結ばれなかったことは、やはりこれら所為であったわけではない。

フォーゲルザングの青春の友は、約束を守った、つまり自分は娘を手放さない、娘がどこへ無謀によじ登ろうとも、自分は娘の後を追いかける、しかし今度は勿論隣家の友が谷へ駆け下りて行き、シュルダー丘までフォーゲルザングの救助を求めることをしないという約束を守った。

彼は、世界旅行開始前に、ただ一度だけ家に帰って、母親と我々から別れた。私も既に当時嫁探しであって、惚れた若者はどのようなもので、自分の最愛の誠実な同級生に対する気持ちはどのようなものか、承知している。このような人生段階の不安や希望、悩みや喜びは、もはや我らの段階のものとは違う。簡単に「達者でな、馴染みの少年」と別れがなされる。最良の友達同士でも。通りの角とか、駅、あるいは港の波止場で迅速に済まされる。稀な場合、　ー　（相変わらず、上述の状況の下だが）、　ー　両者の側の一方の者、オレストかピラデス、カストルかポルックス、ダヴィデかヨナタン[サムエル記上、18]、この一方の者の葉巻が感動の余り消えてしまい、例外的にこれが生ずると、これは最も感動している方で、これはほとんどいつも残る方であり、それで別れて行く者に火を求めることが許されることになる。　ー

この別離者に駅までの見送りを申し出た者は、今回もはや近隣の者達一同ではなかった。私の白髪の両親は、頭を振って、その責務を感じていなかった。「これは余りに馬鹿げた旅だ。私はこの若者に対しても、老母に対しても、この旅立ちに相応しい笑顔が出来るか、自信がない」と私の父は言っていた。私の母はこう言っていた。「アマーリエが私どもの側からのこうした心配りを必要としているか、私も疑わしく思います。アマーリエは良いことにしろ、悪いことにしろ、私どもの意見を受け入れたかしら。この二人ともいつも自分の頭で判断します」。　ー

これらの紙面は、私が自覚して、この紙面を書いていなければ、何の意味があろう。根本の奥底で、私は自分の両親の意見と完全に同じであった、　ー　両親が言葉を発して、分別あることを話す場合のことである、しかし同様に根本的に再三、間近の隣人たるこの別の二人の無言の説得力に屈していた。フェルテンが笑って、私の肩を叩いて、彼の母親が私に頷きかけるとき、それでもう十分であった。賢明な老夫人が更にこう付言すると、勿論、更に説得力があった。

「友のカール、阿呆の言うことは聞かないで。静かにご自分の道を行きなさい。そして世間を真っ直ぐに導きなさい、ここフォーゲルザングの中でばかりでなく、またフォーゲ

ルザングのためにも」。

駅での今回の別れの際も、このようなものであった。別れる友の人生への意気込みと勝利の確信は、私がまだ駅まで持参していた素面の知ったか振りを完全に凌駕していた。更にフェルテンが私にこう言うと、

「君はきっと私の老母に対して私の代役をしてくれるものと固く確信している、場合によっては応分の面倒も見てくれよう」。すると、私はこう自問するだけであった。

いや、これは有り得ることだろうか。いつか必要になることだろうか。

しかし、私はこれを約束し、まこと目を潤ませ、心は語っていた。　ー　つまり、最善を尽くして、我が隣家の竈で彼の役を果たし、その「老母」を一人っきりで寂しい思いにはさせない、彼は世間での勝利を勝ち取ってくれ、と約束した。　ー

我々は、以前ヘレーネ・トロッツェンドルフを見送ったように、彼を見送った。丁度、別の列車、行楽の列車が到着した。興奮して、見たところとても満足げな人々の雑踏が我々に押し寄せて来た。これらの人々は我らの町と風光明媚な一帯を訪問しようと考えていたのであろう。素敵な朝で、陽が輝き、陽気な酌のテーブルが、思慮深い委員会によって設定されていた。外国人の声楽団員、男性合唱団が、その音楽的祝典ばかりでなく、多くの喉の渇きも持ってこちらに到着し、故郷の吹奏楽団が高らかに歓迎の音響を鳴らしていた。この町と領主居城はチャールズ・トロッツェンドルフ氏が自分の妻と娘を迎えに来た日以来、拡大され、美化されていた。そして現在のこの駅、私が今や隣保夫人、友の母親を家まで連れて帰ることになったこの駅は、その当時はまだ計画中で、王侯領建設局の机上にあった。　ー

「ドクトル夫人」はその腕を私の腕に絡ませていた。晩年の年齢まで軽快な浮かぶような足取りを堅持していた夫人も、この帰路では支えを必要とした。私は心の内奥で、この友に誓った約束を繰り返していた。

我々が雑踏を後にしたとき、夫人は驚いたように見回した。あたかも何かとても大事なもの、あるいは何か価値あるものをなくした思う場合、見回すような按配であった。それから夫人は私の腕を両手で掴んで、立ち止まり、きらきらした目で私を見上げて、叫んだ。

「立派なカール、あなた自身、認めなくてはなりませんよ。あなた方は皆、これまで息子に対していつも不当であった、と。いえ、どうか反論しないでください。勿論私は今この時から、息子に対する気持ち、息子に対する信頼、息子に対する希望を以前よりももっと必要とするのです。あなた方皆です、皆。私どもは、これまでの生涯ずっと仲の良い隣人でした、　ー　このまま続けましょう、　ー　残っている者はわずかになってしまいました。ほら、愚かな私はこんな空想的なことを考えているのです、つまり、今や五分間前とは既に光と色合いの全く異なる世界になっているのだ、と。私は息子の目を覗きました。その目にこの世に対する息子の勝利と私の勝利を見ました。すると背後のこの恐ろしい吹奏楽です。...どうして人々はかくも楽しげに、かくも忙しい仕事風になれるものでしょうか。少しもっと急いで歩きましょう。　ー　一体どうしてこの喧噪、この恐ろしい世間の忙しなさがあるのでしょう。この世間で息子がやって行けるのかしら。息子は、他の人々のようには、忙しいものとはやって行けず、万事に時間をかけ、好んで一人っきりで過ごします。息子がこの阿呆な老母に似てそうするのは、残念ながら私のせいなのです。どうか、あなたのご両親にもお伝えください。差し当たり、少なくとも私を一人っきりにさせ

てください、と。少なくともまた落ち着いて何か心が静まるまでは。私ども母親が、子供達の旅路に自分の最良のものを与えながら、それで不幸にするとしたら、私ども母親が悪いのでしょうか。私どもが錯覚していたとすれば！息子がその意志を貫徹して、私の意志も一緒に遂行して、それでいて、結局お伽噺の妄想、壁に映る嘲笑的ただの影絵でしかなかったら、空しすぎます。息子があの娘をこちらに連れて来ても、その娘が生きられる条件は向こうの世界であるとしたら。急いで、　ー　急いで帰りましょう、最良の少年のあなた。駝鳥はその頭を砂の中に突っ込む習慣です。この老アンドレス医師夫人もその頭をフォーゲルザングに突っ込みます。でも、お願い、しばらくは、あなたの親愛なる善良なお父上を私から遠ざけていてください。あれは、車椅子の隣人のハルトレーベンでないかしら、温かい夏の大気を浴びに出ているのかしら。...その通り、お隣さん、息子は就中、貴方に呉々もよろしくとのことです。貴方が今晩小一時間、私の許へ車椅子を回していらっしゃれば、嬉しく存じます。息子のことを少しばかり一緒に話すことが出来ましょう。これからは以前に増して、私ども二人は誠実に堅く協力し合う必要がありましょう、お隣さん」。

「その通り、お隣のご夫人。殊に今日、私は健康状態不良のため、地所を売却しましたので、まあ、家と三反ほどの庭を除きます。庭は少なくとも今しばらく窓から緑のものを目にしたいと思っているわけです。医師夫人、まさに貴女の向かい側に大きな缶詰工場が出来ることでしょう。いやいや、世間は気付かないうちに、様変わりしています。聖書にも書かれている通りです。お隣のご夫人、我らのフェルテン殿を駅まで見送りに同伴出来なかったのは、実に残念です。殊に今回の場合、ひょっとしたら永遠の別れとなるかもしれないのですから、こればかりどうしようもありません、医師夫人。我々老人はここフォーゲルザングではもはや若造ではありませんし、大きな海の向こう側の世界で、一体人間の身に何が起きるものか、これについては毎日新聞に、幸運や不運の信じられぬ類いが記されています。まあ、あのならず者が、　ー　悪しからず、ご夫人、　ー　向こうで無敵の畜生となって、無尽蔵の百万長者となったのであれば、我らの若君も多分やり遂げることでしょう。まあこの若君が、ひょっとしたらその上若い妻と一緒に故郷に錦を飾るとしたら、まだフォーゲルザングに存命の者が、きっとつま先立って、音楽での祝典を準備し、丁度また駅から山々へ行進してゆく吹奏楽祝典の三倍の酔狂となりましょう。しかしどのような結果となろうとも、お隣のご夫人、人々がフォーゲルザングで我々の間に醜悪な建物を建てようとも、変わらないことがあります。私どもの間の互いの眺めは阻害されません。息子さんは私にも約束されました。一度私にも手紙を書きますと、我が永遠のぶったまげた殿が、我らのオッタマゲーション君が。私は息子さんを何度か急き立てなければならなかったし、あの娘もそうでした。つまり、我が出窓の住まいの小さなヒキガエル娘です。それも必ずしも丁重な愛情のこもった言葉ではなかった。しかし医師夫人、彼から一通の手紙が来たら、それを私に合図して知らせてください。私は今のこの忌々しい痛風の老骨であっても、車輪を回して参ります。そして彼の望むとおり、世界の反対側で打ち立てた彼の生活事蹟に対し、貴女と吠えるか、一緒に私の両手を揉みます。またしても一つの比類のないことが生ずるであろうこと、これは確かです。しかし勿論この確信は、息子さんと知り合い、友となったことから育って来たもので、我が所有する森の中の一本の幹のようなものです。そしてまさにこの新しい旅路を前にして、私は実際、自分の考えごと

の木の枝に登って、こう尋ねたものです。この無茶な子はまた何を始めるのか、と。いや、最良、最愛のお隣のご夫人、そんな邪険な顔をなさらないでください。いずれにせよ、千回もの経験で、次のような慰めは得られます。つまり母なる自然は息子さんに九つの生命を贈っているのだ、と。貴女らは皆、私より息子さんのことをご存じでしょう。しかし一人の者が息子さんのことを正確に分かっているとしますと、これは老ハルトレーベンに他なりません。と申しますのは、私は何回となくこの若衆の後を追いかけ、息子さんのことをかんかんに怒ったり、手当たり次第、棍棒や木片を持って、あるいは両手を腹の前に置いて、息子さんに対する楽しみを満喫しようとしたり、この悪漢に少しも気付かれないようにしたものです。そうです、息子さんにとって、すべての五大陸の中で、取って来るべきものを隠している壁はどれにしても乗り越えられないものではありません。この世でうんざりして、頭で打ち破るほかないこの壁に関しましても、息子さんはまさに打ち倒すか、あるいは迂回路を見つけましょう。これに関して、私は同様にここフォーゲルザングで、この私の先の地所で、ありとあらゆる経験をしました。ですから、お隣のご夫人、余りに息子さんのことを案ずるに及びません。息子さんが道化師、カールヘン[チャールズ]・トロッツェンドルフのように富豪となって家に帰って来るか、あるいは或る晩ノックして、こう言うか、『ハルトレーベンさん、ただ今帰りました。今回は成功しなかった。貴方が今夜、麦藁の寝場所と早朝に千マルク紙幣とを私の再出発のために用立ててくださるなら、有り難く存じます』と言うか、息子さんの場合、問題ありません。しかし後の場合、医師夫人、貴女の慰めとして一言申し上げます。ここフォーゲルザングで、静かに、貴女のご子息を観察していた者がいるなら、この私を措いていません。そして承知しています、ご子息は決してそのようにノックはしない、と。最後の麦藁の枕をご子息に勧めるには、大変、繊細に、丁重に申し出る必要があります。この若輩の悪魔は、ここフォーゲルザングで最も柔らかな心の持ち主です。　ー　カール殿、試補殿、貴方の前でこう話すことをお許しください。　ー　しかし、一度この心が凍ったら、これは氷の塊となりましょう。これで人類全体の頭蓋を叩き割ることが出来ましょう。それで、お隣のご夫人、それにクルムハルト殿、貴方らをかくも長く引き留めてしまってご容赦ください。私も今日、生涯私の心に匹敵していた一つの所有物から別れて来たのです。それで私は自分の思いの中で、貴方らと一緒に駅まで同伴しました。ここフォーゲルザングの中では、他の誰よりも一緒だったのです。それで、最愛のお隣のご夫人、お気持ちが分かります。試補殿、貴方も以前の頃であれば、今の私の言葉は聞いたこともなければ、思いもかけないものでしょう。隣のハルトレーベンは老いた粗野な男だとただ笑っておられたことでしょう。しかしこのような惨めな車椅子に乗ると、人間の腕の力、足の力、健康な肺の力が残っていません。すると我らのような者も、自らの個人的な感懐を述べることに躊躇しなくなります。それで、試補殿、医師夫人はお一人でご自分の思いに浸りたいように思われます。だから家まで静かにお送りして、それに貴方のご両親にもよろしくお伝えください。私は新米の年金生活者として、プロムナードの辺りをこの車椅子で覗いてみます。　ー　主なる神よ、五年前に誰がこのような楽しみを私に予言したでありましょうか。それではお二人とも、まことに良い朝を、...」。

　かくて私はフォーゲルザングでの語りを、そのまま文書にした。百もの言葉を一つにまとめて見た、この間、今日の冬の夜の雪が絶えずさらさらと舞い落ちていた。私は書きな

がら、左手を目の方へ持って行かなければならなかった、あたかも太陽が余りに眩しく照り付けているかのように。そうではなかったし、またそうでもあった。目を消えた陽光、青春の輝きへの視線よりも潤ませたものは何だったのか。

私はしばしば職業柄、世間の行方不明者を捜す任務がある。行方不明者をある期間まで呼び出して、現れない場合、死亡と宣言し、その遺産を相続人や国庫に引き継がせるのである。行方不明になり、探し出す必要のある者は、大抵は哀れな、惨めな人々である。しかし時々は、その経歴で、どんなすれっからしの役人であれ、自らの許では御免であっても、他人の許でなら不可思議なことを体験してもいいという人間の欲求や空想を抗い難く刺激する行方不明の男や女がいる。

これは我らの友フェルテン・アンドレスの場合、皆目そうではなかった。神秘的なこと、ロマンチックなことは少しも記すことがない。彼はいつも我々と文通していて、ハンプトン、ブレーメン、ハンブルク経由での通信経路、いや、海底の電信をも利用して、出来る限りフォーゲルザングと連絡を取り合っていた。私がまさに彼の生涯において、不分明のままであるのは、　ー　彼自身のことについてに他ならない。しかしこれは彼の責任ではない。これはここでは単に私が至らぬからである。そしてこのような場合は、人々が想像するよりも多い。

ちなみに今私がこれらの頁を一杯書いているのは、出来る限りのことをして、私の同世代仲間で自分に最も馴染み深い者の一人の人間について理解を深めたいからだけであろうか。しかしいつも、ゴブラン織りの絨毯から糸を引っ張りだして、拡大鏡の下に置いて、巨匠がこの織物全体に費やした高度な技について知ろうとするかのような思いがする。

かつて一人の人間が、どんな形態や条件の下での人生であれ、対応出来るように準備したとすれば、かつて一人の人間が出来る限りのことをして、自分の防御用と攻撃用の武器を鋳造したとすれば、フェルテン・アンドレスがそうであった。オフェーリアが数え上げるすべての長所や徳操に恵まれながら、デンマークの王子はこれらを発揮しなかったのであるが、確かに彼はまこと[ハムレットの学んだ]「ヴィッテンベルク」を離れて北アメリカの合衆国へ渡り、そしてその後は我が道を進んだのではなかった。[実学の素養もあって、オフェーリアを求めていた]。

他の者なら苦手とするに違いないのに、ある人が苦もなく、あるいは見たところ苦もなくやってのける時、これに相応しい表現がある。「彼は苦もなくやってのける」[付け焼き刃]と人は言い、この天賦の者を羨むが、しかし多分憂わしげに両肩を竦めて、「でも全体辛抱強いたたき上げ」を優先する。この辛抱強いたたき上げもその長所があって、それに相応しい席を後、温かい暖炉の側の肘掛け椅子や六月の陽光の中に、震えながら、しかし快適に十分な権利と共に得る。彼、我が友は、その短い生涯で、何でも屋であった。学者、商人、気球乗り、兵士、水夫、新聞記者、　ー　しかし彼は市民概念に従えば、何も成功しなかった。それに私はこの文書にこうも記せない、つまり彼が本当に傾注したことは、フォーゲルザング出身の小柄な娘、今日のシカゴ出身のムンゴー未亡人より他のことはなかった、と。

低い谷よ、隆起せよ、
高い山よ、沈下せよ。
邪魔だ、邪魔、
最愛の人が見えない。

いつもは、メランコリックな、しかし醒めた下種の後知恵に終わるものである。しかし今晩もまた私は溜め息を吐かざるを得ない。もし彼が故郷の人の甘い声に傾ける耳を、深く、誠実な、悲しげな視線に対する目を持っていたら、彼の生涯は何と別様なものになっていたことだろう、と。内気に、おずおずと、こっそりと彼の後を追っていて、最後はどうなろうと、最後まで彼を見守っていたであろう視線に。[もう一人のオフェーリア]

ちなみに、デボー家、つまり老旦那と友のレオンと、彼は活発に文通をしていた。そして彼が一度、冗談の如く、少なくともドイツ国内では、まことに裕福な男として登場したとき、これは実際大部分は、ベルリンのドロテーエン通りの大店による付け焼き刃であった。宗教性と商売感覚とが敵対関係にないことは、イスラエルの商家[ユダヤ人]だけが証しているわけではない。メイフラワー号で「向こうに」渡った敬虔な追われし民も[1620]、ナントの勅令によるマルク・ブランデンブルクへのこれら昔のユグノー達同様にその才能を証している。そして彼らは今日でも全世界を股に握手を交わしている。シナゴーグ、教会、そして相場である。デボー家は、一人の友に、ニューヨーク宛、あるいはニューオリンズ宛推薦状を託すことが出来て、このため、この友の道は平坦なものとなり、上昇が容易になった。この友が来たのは、単に、哀れな仲間の娘が無謀な木登りをしているので、連れ戻す二度目の試みであって、その他の現世の名士達には余り関心がなかったかもしれないが。

彼の二度目の成功はなかった。フォーゲルザングからの救援は今回何も奏功しなかった。昔、老ハルトレーベンが梯子と綱とで助けに来たように、今や彼の母親が、その心配や不安、苦悶の中でも、常に陽気な手紙を彼宛に書いて、彼の手紙は、彼の流儀で、彼がより深く、「詰まらぬことに拘泥して」、この人形喜劇で糸を操る加勢に乗り出すにつれ、ますます快活に、ますます勝利を確信したものになって行こうと、それが何の役に立ったろう。二人は自ら愛らしい、感動的な喜劇を上演していた。それは、隣人達の誰をも、高笑いや微笑に誘わない喜劇であった。

「信じられない思いがした」と私の父はとても真面目に言った、「あの若造は、それまでの虚けぶりが全く無駄ではなかった按配に見える。私は丁度、裁判所からの帰り道、ゼーリヒマッハーと息子商会の支配人に呼び止められた。向こう[アメリカ]からの一通の個人的手紙を見せられた。チャールズ・トロッツェンドルフ商会からの手紙だ。つまり、お母さんよ、我らのカール・トロッツェンドルフだ。その中で、彼について、つまり隣の若造について、私には決して本当とは思えない具合に言及してあった。あの詩人気質の道化師は、完全にその逆のものに化けたように思われる。いや、彼は向こうのジャーナル世界で一つの地位を得ていて、ある商業雑誌で、一種の自分の口説を文書にする仕事をしていて、それで偶然にしろ、知遇を得て、それで思うに向こうの大物達の一人の尊敬を、大物と言っても、金銭に関してだが、獲得しているように見える。これはまことに結構な、喜ばしいことであろう。それで彼は、あの娘、若いレディーとの仲は水泡に帰したけれども、

諦めが付くことだろう。ゼーリヒマッハーと息子商会には、今朝向こうの家族から、つまりトロッツェンドルフ家から、娘の婚約案内状が送られて来たそうだ。お隣のご夫人も、すでにもっと詳しいことを知っているか、息子は今この件にどう対応するつもりか、そなたはご夫人の許に伺う必要があろう。しかしこれはただついでに尋ねることだ。私はアルネマンの許にも出掛けた、 ー 彼は私の条件を受け入れることにもはや消極的ではない。確かに当地の心地良い情緒を手放すことは忍びがたい。しかし次第にここフォーゲルザングでは余りに多く周辺が様変わりしてしまった。ハルトレーベンの地所に立つ工場は、オスターベルクへの最後の眺望を妨げることだろう。それで、我らの試補のためにも、現今の生活環境の変化の下、領邦政府がここの小市民の許にいる試補を訪ねて来る必要はないことが望ましいだろう。お母さんよ、我らは来週、家と庭園の売却について契約を結ぶことにしよう」。

「クルムハルト、あなたがその意見であれば」と私の母は震える声で言った。

「思うに、我々はこの勿論真面目な事柄について、既に十分検討して来ていて、ほとんどもはや言うべきことは少ないだろう。我々をここに引き留める事柄が、他にまだ何かあるだろうか。そこの奥の新たな耐火壁が我が薔薇園に投げかけるあの影だけでも、私の趣味への楽しみは大方損なわれている。工場のあの臭いの下では、庭でコーヒーを飲む気にならん。フォーゲルザングの最後の緑地としての我らの場は、墓地管理課の書類に確保されている。だから、息子カールよ、クルムハルト試補殿、変更はない。老ペリカンは自分の子孫のために今一度胸を叩き割る。我々は町へ引っ越す。環境の変化故だ。そなたが公爵領の政府参事官となる姿を私が見られるのであれば、自分の薔薇栽培や桜草栽培を断念することなど大したことではない。やむなくば、ヒアシンスやゼラニウムでも満足出来よう。その代わり、思うに、我が息子よ、そなたにはいつでも陽の当たる部屋が、そなたの社会的立場、住まいの関係を考慮して、老両親のためと同様、用意されるだろう。例えば、母親と私が最近見たアルヒーフ通りの物件では、奥の方に伸びていて、それでも陽の当たる側に隠居分があった。下級の隠居した上級裁判所書記官が、期待に応えてくれる息子と一緒に住むには、 ー 息子よ、今やそなたをそう呼んで良いだろうが、 ー 適したところだ、あたかも建築主が、その昔、自らその必要を感じて、そこに留意しているかのようであった。そうだろう、お母さん、我々は、息子のために、環境の変化に適応するつもりだろう」。

「そうです、そう、私には辛く思えますけど」と善良な老母は嗚咽した。「勿論こちらの新奇なものは、私どもの体に応えます。窓から外を見ても、古いものはもはやありません。でも、昔と同じような思いに襲われます。私どもの幼女に棺の蓋が置かれようとしたとき、私はどうしてそうする必要があるのか、信じられない思いでした。もはや自前の洗濯室はないし、自前の庭に洗濯物を干す場所もありません。でも、正しい選択でしょう。すぐこちらの緑の生垣に隣接しているダンスホールは、私どもの環境にすら合いませんし、カールにとっては全く合いません。クルムハルト、あなたの言う通りです。両親の役目は、その子供を高みへ導くこと、一層より良い社会へ、出来ることなら最良の社会まで導くことです。これは勿論ここフォーゲルザングでは、実現出来ないことでしょう。だから ー なるがままに。私は人生で沢山妥協しなければならなかった。ここでも妥協しましょう。子供も望んでいましょう。ひょっとしたらこの息子の子供達も、その父親と母親とがこの

息子に対してなしたことを納得することでしょう。そして私どもが墓場に入っても、偲んでくれましょう」。

この件に正しい照明を当てるために、私は今一度これに反対することが出来たであろう。しかし何の役に立ったであろうか。この二人の誠実、実直な魂をその根ごと大地から引き抜き、晩年の日々に余所の土壌に移したのは、まこと私ではなかった。義務、責務、長所、利点、名誉、称賛、名声、幸運を丁度そこに見る愛しい人間的愚行のせいであった。地上生活における同胞の兄弟姉妹たるその他数百万人も。　ー　まさに同じことをそこに見ているのである。二人はフォーゲルザングはもはや自分達には「合わない」、自分達はフォーゲルザングに合わないと確信していた。

「契約書が作成される、嫁さん」と私の父は言った、「そしてそなたの都合が良ければ、アルネマンは今日にも仕上げと署名のためにやって来よう。今となっては、これ以外にもはや安心して眠れない」。

つまり私の母はこの日、もはや隣保夫人アンドレスの許に行って、アメリカからのゼーリヒマッハーと息子商会宛の個人的手紙や、フェルテンとヘレーネ・トロッツェンドルフについてもっと委細を聞きに行き、自分の関心を披瀝し、出来れば慰めを保証するということをしなかった。しかし私は夕方頃今一度、我々の子供時代の抜け穴を通って、つまり隣家の庭園の間の生きた生垣の中にある、奇妙な、当時はすでにまた生い茂った抜け穴を通り抜け、昔ながらのドアの取っ手、その握りは人間が思い出す限り頻繁に握られたものであるが、それを新たに押して、こちらのドクトル夫人の許で、本来ここで世間は最大の変化を見せたのであるが、地上での天候の交替の中、陽を受けても壊れず残っているもので、自分を落ち着かせようとした。ドクトル夫人は、フォーゲルザングで一人っきりで、合衆国からの彼女の[自分の]手紙を読んでいた。

私が不安な重い心で隣保夫人の許に来たとき、夕方の太陽は夫人の窓辺に射し込んでいた。彼女、アンドレス隣保夫人は、泣いていたことが見てとれた。ゼーリヒマッハーと息子商会の許で私の父が目にした上品な葉書が、やはりドクトル夫人の裁縫台にあって、その横にフェルテンの同封の手紙があった。葉書はムンゴー夫妻が、合衆国のすべての友人、知人に、互いに幸運のときも、不運のときも、健康なときも、病気のときも、死のうと生きようと、盟約を結んだ二人として挨拶していた。

友人の母親はその濡れたハンカチを窓台の植木鉢の間に押し込んだ後、私に手を差し出して、言った。「そうね、カール、親切に有り難う。自分の周りの世界が変化したときには、昔からの馴染みの若者が最も心落ち着きます。つまりまだ翌日の自分達の権利を予期していて、陽気に新しい流れの中を泳いで、時代に対する若々しい権利によって、老人達の心ではなくても、頭を少しばかり訂正出来る若者達です。エリーは結婚しました。フェルテンがそう書いて来ました。これが彼の手紙です。読んでください。私にとってフォーゲルザングがかくも変化するとは思っても見なかったことです。自分の最愛の希望が人生から消え去ることがあると人間は信じられない場合、まさにそう思えるものです」。

夫人はこの居間で、ベルリンのドロテーエン通りのフェンシング教師夫人がその思い出に囲まれているように、すべての思い出に囲まれて座っていたが、苦悶に満ちた眼差しで見回した。「どうして一切が、人間に対して突然全く別の表情を見せるのでしょう。でも

それは単にあの小さな肖像、箪笥の上の小さな写真に過ぎないのです。その愛らしい笑っている目が、老婆の私の家を荒らして、一切を混乱させています、引っ越しや、火事の後のように。　ー　彼の手紙を読んでください。フォーゲルザングの老母が全く正気を失わないよう、息子は出来る限りのことをして、勿論息子なりに配慮しています。息子はこれでへこたれてはいません。でも行間を読んで、息子の昔からの流儀を思って、自らがへこたれてはならないのです」。

いや、この両人は、極微細な神経繊維に至るまで、極瞬間的な魂の気分に至るまで、触知し、追感出来た。二人は互いに何もごまかせなかった。そしてこのことが、例外的に、二人にとって大きな幸せであった。他の人々や、残念ながら、この大地で互いに間近に直に関係する者達大多数にとって、これは勿論その反対を意味するであろう。二人とか、数人の、互いに関係する者達が、余りにも良く理解し合っていると、これは必ずしも快適極まることではない。少なくとも繁栄する小屋掛け、共同生活のための唯一の可能性は、ただ上下関係での意思疎通であろう。これは私も私の仕事や職務経験からはなはだ多くの証言を文書で得ている。　ー

フェルテンは書いていた。

「母上、彼女は我々から奪われました。彼らは、彼らの意見では、最良のものを彼女のために選んだということで、申し分なく正しいことをしています。私は彼女を失った。しかし、今回、地上での幸せを取り逃がしたことに、私の責任はありません。故郷の家では、母親の許で、しばしばこの責任が臭わされたものです。そして侮辱された私の鼻がぶたれた学童のようではなく、ただ素っ気なく、意地悪げに皺を寄せると、人間的性格のすべての劣等さばかりでなく、絶対的、底なしの、放恣な、性格欠如について語られたものです。私は自分の責務を果たし、いかなる時も、日々も、週も、月も、年も、日夜、自分が果たす一切のことに関し、熟考し、熟慮して、この美しい蝶を、自らのために、　ー　我々のために取り押さえようとしました。さて、私は再び一学童のように立っていて、指に逃げた蝶の羽根の多彩な鱗粉を眺めていて、とりわけ家の老母のことを考えています。母上は座って、自問されることでしょう。息子は今回どのような鼻をしているだろうか、と。ー　母上、私の　ー　我らの愛する、哀れな、小柄の娘さん、涙に暮れる愛する息子だったら、母上の何の役に立ちましょうか。ですから、　ー　深呼吸して、強く飲み込み、馬鹿げた人生経験に対し、木曜日までは晴だったのに、金曜日土砂降りになったカレンダーの週に対するように十字を切ることです。我らの愛するお転婆を私は少しも責めません。

ー　そもそも一人の人間の子に自分の運命の責任を負わせられましょうか。鏡面の反射光を受けた雲雀が、それで青空から発送箱とフライパンに向かうことになっても、それに文句を言えましょうか。その邪悪な輝きで、彼らはフォーゲルザング出身の我らの愛する歌鳥をもその下の彼らの網へ落下させ、その娘の哀れな愚かな小さな頭蓋、脳髄ばかりでなく、その美しく広い心をも潰してしまいました。彼女は堂々たるムンゴー夫人となります。現在当地のセントラル・パークにあるクレオパトラの針[1880年運ばれた古代エジプトのオベリスク]は、既にエジプトで沢山のことを目にし、こちらの国でも日々多くのことを目にしていますが、これまでこれほど綺麗な、高貴な女人が、自分の側、その影を通り抜けて行くのを見たことがなかったことでしょう。そのようにこれは常に泥土の中から、ナイル河畔であろうと、ハドソン河畔であろうと、関係なく育ちます。家の老いた母上、私の

シャツの袖にはボタンが欠けています。しかしエリーはボタンを縫い付けてくれないでしょう。このことは確実なこととして、フォーゲルザングの時から、人生の至福として当てにしていたのですが。大西洋がこの手紙を飲み込まなければ、間もなくこの手紙が置かれるであろう母上の古い裁縫台を思い出します。同時に母上の安楽椅子とその横の空の『床几』、蔦の蔓越しの、庭園の向こう側の眺め、つまり隣人ハルトレーベンとその家屋敷（一時寡婦のトロッツェンドルフ夫人とその娘っ子を含んで）、それにフォーゲルザング全体への眺めを思い出します。私はまたしても窓辺の安楽椅子の老夫人だけを頼ることになります。一人の放浪者、　ー　人生の渡り鳥で、　ー　以前よりも零落しています。ちなみに私は当地の環境に適応していまして、最新の友人達に訝しく思われるようなことはありません。母上は私ともチャールズ・トロッツェンドルフ氏のように百万長者として再会することをお望みですか。それともドイツ系アメリカ人の政治家、手本としてはカール・シュルツ[48年革命の亡命者、1829－1906]がよろしいですか。我らの娘っ子のせいで、私のフォーゲルザングでの英語勉強は、今見事に役立っています。ウッシッシと陽気な人々の群れを、ウェーウェーと嘆く群れに変換し、人間と呼ばれる政治的動物を、鼻に輪を付け、あるいは口周りに紐を付けて、クリオ女神の永遠の黒板と日々の石筆にとって記述に値するものとして調教するために、フレーズや言葉の調子を学ぶことは容易なことです。友のクルムハルトが、つまり我らのカールヘンが、　ー　親父の方ではなくて、その仕事経験からいつか新たな高貴なキンケル氏[先のシュルツによって救出された急進派作家、1815-1882]を糸巻き車と殉教者の栄冠と共に、愛する故郷で、海外からの英雄的解放者として採用するというのであれば、私はそれに応ずる用意があって、古き良き仲間意識から私に優先権を与えて欲しいものです。新しいドイツ帝国出身の殉教者に対する一個の共和主義的市民の王冠です。残念ながらこれは見つけるのが難しいだろうと思います。昔の真実の射手オットー[キンケルの詩文『射手オットー』1846、ここではOtto von Bismarckを連想]をその麻の屑拾いや羊毛巻き上げから帝国議会に誘うにしても、彼自身、現在の黄色と白色の胸甲騎兵の帽子に上手く似合うか難しいことでしょうから[難儀なキンケルの苦役も、ビスマルクの難儀な国会運営に等しい]。しかしベルリンのドロテーエン通りのレオニー・デボー嬢はどのように歌っていたでしょうか。

アタシハ眠ラズ、目覚メテモイマセン。
コノ子ノ為ニ私ハ休マラナイダロウ。

そこでまた私は、我が　ー　五番街[ニューヨーク]の魔法をかけられた哀れな娘のことを考えます。ゲーテの『悲劇エセックス伯のエピローグ』にあります。

これが結末だ、万事終了。
これ以上事は起きない。国も、海も、
帝国も、教会も、裁判も、軍も、
すべて消えた、すべてもはやない。

いやはや、この世界では、何と人々は幸福や名声を求めて、また世界の改善のために様

々なことを計画し、その結果、この世を支配する阿呆な国王は、　ー　シラーの『オルレアンの乙女』[Ⅲ,6この世はな、このうえなしの阿呆のものなんだから：石川實訳]によると、我らを足蹴にし、すべての賢人や、英雄、逃げ出す学童は、自ら歯痛に悩む歯科医の気分に陥るのです。母上はこのことをご存じです。人々の恐れ、つまり人類の前で、即ち同類の縁者達の前で、滑稽な事になることへの恐れ、これが残念ながら私にはいつも余りに欠乏していたとお分かりでしょう。しかし自分自身にとって究極にまた滑稽な事とだ思え、それでこの世の事柄に対する適正な尺度を再び獲得したいという憧れは、これまでのところ、たっぷりと十分だという具合には満たされていません。フォーゲルザングの家であれば、これはもうごく簡単に達成されていたことでしょう。母上の愛する籐椅子に向かい合って、母上の裁縫台に『ヴァントベックの使者[通信]』、亡き父上の愛好の初版、オリジナル版[マティアス・クラウディウス作]があり、母上のブナの木と花々の花壇越し、私のスグリの生垣越し、我らの緑の生垣越しの隣人ハルトレーベンの家屋敷への唯一の眺望があるところです。そこでは多分最もそのことは容易に思えましょう。その本の大切な先祖に対して、つまり従兄弟アンドレス[『ヴァンツベック通信』の人物]や健気な従兄弟ミヒェル[ドイツの小市民]に対して、私自身の胸中で正しく判断できることでしょう。しかし、　ー　そもさん。

この点についてはカールにその意見を尋ねてください。しかし、　ー　まあ、止めましょう。質問者がこのような折、返答者とその返事を前もって正確に承知していても、ここでは今日も、何ら本質的なことではありません。しかし母上の手紙からでも、私はフォーゲルザングの母親の許も次第に装飾物が変化していて、旧友の彼は、　ー　最近とてもその地に馴染めなくなっていると分かります。茂みは木々となって、木々は家の壁となり、緑地は灰色になっていましょう。果実を盗む（勿論大抵はそう唆されてしまう）学童どもは、最良の統治役人や政府参事官、あるいは厳格な検察官となりましょう。そして　ー　フォーゲルザングの最もやくざなならず者が（少なくともこれは私もやれますが）、最も栄光ある放浪者、かつて世間の路上で上品な通行人達に戦慄と恐怖を掻き立てた最も輝かしい浮浪者となって、この者はある市門で身分証を求められた時、そのようなものを持ち合わせず、ひょっとしたらどこかのベッドフォードの牢獄に鋳掛け屋[John Bunyan1628-88ジョン・バニヤン『天路歴程』]として入るかもしれない者で、かくて巡礼課程に関し、自らの人生の巡礼行路に関し、最終決算を行うものでしょう。

私の愛する、愛する母上、母上に責任はありません。私の父上にもありません。このようなものが私の揺り籠では歌われていたのです。でも母上が母上の『ハルバーシュタットのブーコ』[Burchard II. von Halberstadt、1028－88]とか『眠れ、子供よ、眠れ、一頭の子羊が外を行く』を歌ったからではありません。人間の運命の最初の揺れる小舟には、反対側に常にもう一人の歌い手がうずくまっていて、魔女の無精髭の中でその歌を口ずさむのです。これははるか昔の母達に由来する歌で、これのみが決定的な歌なのです。

だから、母上の愛しい勇敢な顔から、とにかくまた不安と不機嫌の皺を取り除いて、更に雑草はそう簡単にくたばらないという父祖の経験知を頼りにしてください。我ら独自の、譲渡し得ない、不壊の高貴な生まれに対する昔からの信頼と共に言えばいいのです。『またこの愚かな息子』と。　ー　そして動じないことです。我々は、フォーゲルザングで、我らの脳や心に微塵も不安を過らせなかった二人だったのです。これを変えてはなりません。装飾品が変わろうと、我らに影響はありません。我らの家で、母上の居場所をしっか

りと、私には私の居場所を確保していてください。私は勝利者として、丁度　ー　チャーリー・トロッツェンドルフのようにまた帰って来ます。この世には様々な人々の肩竦めがあります。私も私なりのやり方で、彼がその肩竦めや、世間の呆気に取られた羨望を得たように、私に対する肩竦め等を、同様に然るべく得たら幸いです。このような未来に対する極楽とんぼの展望が若干白々しく、途方もないと思われるのでしたら、ここに友人カール・クルムハルトを我らの垣根越しに呼び寄せて、その意見を聞いても構いません。　ー

故郷では、殊にフォーゲルザングでは、私は差し当たり何の役にも立ちません。母上の役にも立ちません。哀れな、勇敢な母上様。ちなみに我々二人はいつでも一緒にいましょう。たとえ数滴の海水や、数屑の土塊以上のものが二人を引き離していても。忠誠の足許に私は座り続けます。愛の足許で、麻屑を紡ぐ幸せは恵まれなかったけれども。女王オムファーレの糸巻き竿の後は、まこと人はネメアーの獅子、レルネーのヒュドラー、エリュマントスの雄猪、とりわけステュムパーロスの鳥、アウゲイアースの家畜小屋を楽しみにします。[以上ヘラクレスの難事業]。私が母上にまさにヘスペリスたちの庭から黄金の林檎を持ち帰るであろうか、これについては私自身若干懐疑的です。しかし次のことは、お任せください。これについては近隣の人々に話してよろしいし、自慢出来ましょう。私はきっと冥府からケルベロス[冥府を守る怪犬]を連れて来ましょう。単に永遠の夜という大きな恐怖を短い生命の日光の下で、出来るだけ正確に、心地良く、眺めるという目的に過ぎなくても。これは哲学研究と呼ばれています、つまり学生の講義聴講による筆記ノート参照ですが、友のクルムハルトにお確かめください。彼は見栄体裁のためにその一部を筆記している筈です。そして哲学教授の講義壇からデボー家の裁縫台までもまたほんの一歩に過ぎません。[崇高から滑稽まではわずか一歩である、ナポレオンの言葉、モスクワ退却の時]。私は友のレオンをおんぶしたわけですから、勿論投げ出すことは出来ません。デボー家の父親が書いて来ています。この息子は、私の目が届かなくなってから、日に日に父親の手許で阿呆になって行き、この少年を私の許に送りつける以外手段がない、と。私の案内で、地球一周の旅行をすることが、父親にとって、この空想家を将来の商務顧問、取次業顧問へと目覚めさせる最後の手段となっています。そこで私は、これを少なくとも私自身の世界遍歴の最初の段階として、今一度荷物をまとめざるを得ません。それで父親に返事をしました。その御曹司は来てよろしい、私は信頼に応えるよう努めましょう、と。その通りです。人々の許での信頼が大事です。老母上、変わらず私への信頼をお願いします。

母上の息子にして相続人

フェルテン・アンドレス」。

私がこれを文書に綴じ付けたのは、冷たい夜であった。しかし私の肩甲骨が震えて縮み上がったのは、この手紙の最後の頁からの澄んだ冷たい息吹のせいで、窓辺の外気の冬の天候のせいではなかった。そして　ー　当時　ー　この書状を町の知人達、人々に回覧させていたら、皆がこう言っていたことであろう。

「昔ながらの、永遠に逆上せた脳錯乱だ。変わらない、自分の出世の頼りにしているのは、酩酊者の幸運と、未熟者達を見張っている摂理だけだ」。　ー

私は私の周りですぐ近接して起きた別の事について更に語ることにしよう。

フェルテンの後、フォーゲルザングを去って、この友人とは違い、二度とこの地に立ち寄ることのなかった最初の者は、隣人のハルトレーベンであった。彼は最後にその車椅子を我らの庭木戸に止めたとき、言った。

「いや、お若い方、クルムハルト試補殿、申し上げますが、かくも惨めな袋となって、劣等な食欲、夜間の痛みや不眠に見舞われて、自分の荒れた家屋敷の周りを回ることは、楽しみでも何でもありません。でも、これが人間です。空気を飲み込める限り、呼吸を諦められません。それでこんな風に、存命の間、古くからの路上で旧交を温めているわけです。オスターベルク奥の上の我が森のことだけが、絶えず頭にちらつくのでなければ、勿論もっとこうした嘆きに楽しく耐えられましょう。これが頭痛の種です。今、快適極まる夏というのに、専らこのことです。緑に茂って、好ましい挨拶を寄こしているのに、材木販売や取引の相手に、勿論製材所業者は言うまでもなく、ただ返事に萎えた手を前後させられるのみです。上級裁判所書記殿、我がシュルダー丘の上方ではいかにこれが陽光の中にあっても、神の青空の下、私はからかわれて、忌々しいことに、遺産相続人達の間に、我らの愛する神に値しない不埒者がいるぞと争いになりそうです。惨めなものです、　ー

惨めなもの　ー　惨めなものです。上級裁判所書記夫人、貴方らは、貴方らの家屋敷に関する件をアルネマンと正しい解決に導きまして、結構なことです。貴方らは間もなく引っ越します。我が余生の数年に残っているのは、ドクトル夫人のみです。いや、そのように次第に人間のすべての善きもの、快適なものが、奪われて行きます。時々本当にこう思われます。つまり天上から我々のために配慮されており、ここ下界からの別れを辛くさせないためのものだ[早く死にたいものだ]、と。それに若い人達の動静を耳にされましたかな。我らのフェルテン殿は、この我らの試補殿よりも真っ先に「我らの少年」と呼びたくなりますが、　ー　日本から手紙を寄越して、自分は今、高貴なベルリンの友人、以前ここフォーゲルザングでも見かけたこの友人と一緒に、日本に滞在していて、ご機嫌よろしくと書いています。隣人殿、覚えていてください。彼奴はまさに我らのカールヘン・トロッツェンドルフ同様に、この我らの同級生同様、外に出て一廉の者となりましょう、　ー　もっとも必ずしも結末が同じ具合に行くとは限らないでしょう。この最後の結末に関しまして、人生におけるすべての楽しみ事の正しい査定に至るためには、今の私のように一頭立て馬車で、背後から押して貰って進むまで待つ必要がありましょう。昔楽しんだ善きことの思い出は、残念ながら、最も不快なものでもありますが、やはり今も変わらず最良のものです。ここ私の許にいて、フォーゲルザングの我らの間で育ったあの小娘にしましても、我らのフェルテンにとっては無になってしまったように見えます。残念なことです。あのマダム、あるいはミセスは確かに鵞鳥そのものでした。しかし小娘は、今大西洋の向こう側で六頭馬車で行くそうですが、今も変わらず私の快適な思い出の一つです。カルルちよ、

ー　試補殿、諸君、諸君らは隣人ハルトレーベンを憤然とならせて、楽しませてくれた。諸君らをもう一度鞭の柄でもって庭の中を追いかけたり、隣の敷地や森の中へ追い払うことが出来るのであれば、今日大枚をはたくことだろう。しかし、貴方は腋に書類を抱えていらっしゃる、試補殿。仕事なんでしょう。貴方を我がお喋りでお引き留めして、申し訳ない。このような拷問椅子にいては、唯一無駄口を叩くしかありません。貴方らの引っ越

しの際に、書記殿、それに書記夫人、私が別の普通の馬車でお手伝い出来るのであれば、喜んでそう致しましょう。この老ハルトレーベン、この無学の男について、彼は畢竟立派なフォーゲルザングの隣人ではなかったか、と町の衆に言われなくてどうしましょう。後々の友好的交誼は、町からこちらへ来られても、こちらから町へ入るとしても、少しばかり難しくなりましょう。まあ、私がここ数年ほどは、貴方らが新生活の場から、こちらへ古巣をお訪ねになった折、このような車椅子での姿をお見せしましょう。愛する皆さん、どうぞ良い晩を。私の背後の若い衆、もう一軒先まで、この片輪を押してくれ。医師夫人が私に更に夫人のフェルテンからの最近の手紙の数行を読み上げると私に約束してくださったのです。あの悪魔の少年は、いつもその滑稽譚や、アバンチュール、私見や見解を披露して、シュナップス[焼酎]を一杯飲んだ按配になります。私はいつも言っています。ハルトレーベンよ、いつかそなたは奴と再会しなくちゃならねえぞ、たとえどんなに長く、その母親とフォーゲルザングを待たせることになってもな、と」。

四週間後に我々は彼、隣人のハルトレーベンを埋葬しなければならなかった。そして翌年の復活祭の時に、我々クルムハルト一家、父親に母親、そして息子もフォーゲルザングを去った。私の両親は、二人の意見によれば、私のために人生から要請されているより高度の注文に従っていて、私はこの子供思いの両親に従った。誰が自分の父親と母親の愛情に抵抗しよう。たとえその愛は、もはや無用の心配事や、卒業した愚行や、根本的には滑稽で、いや、苛立たしく思える幾つかの他の事柄と関連していようとも。

そして私にとって何か縁遠く思われるに違いないのは、まさにこの土地での現世の生活における人間の土着の感情や気分からの離脱であろう。文書に私はそれを記していない。しかし、深く、私の内奥の意識の中に、自分が大事な、昔から馴染んだ故郷の地を、今日では慄然と憂鬱な郷愁の思いで、この冷たい冬の夜、私の心を満たす一切と共に、当時は、この二人の哀れな老親よりも容易に、はるかに容易に自由に呼吸しながら、断念したのであった。

人生の舞台では、すべての場面の交替のたびに、監督の呼び鈴を聞くわけではない。交替した書き割りの中や、変化した背景の中にいながら、それを少しも奇異に思わない。上手に演ずるか、下手に演ずるか、その役目は各人の体に合わせて裁断されており、同様に芝居ごとにコスチュームも決まっている。しかし多分何人かは奇妙に静かな瞬間に、自分の額を打って、こう言う。『いや、一体どうしてこうなっているのか。そなたとそなたの周りは、他に仕様がなかったのか。一体どうしてこういう次第だ。そなたは本当にここの者か。そなたが今ここで演じていること、演じなければならないことは、本気なのか、冗談なのか。誰のため、何の役に立つのか』。

これは勿論とても奇妙な思い付きである。未知の慄然とする外部からのように、これは劇場の明かりの下、冷たく異様に人の心を襲い、大抵は、舞台がいつか自分の周りで空になったときである。しかし時々は満員の場面、つまり宮廷の高貴な人々や騎士、市民、レディー、また、僧侶や殿方や夫人、伝令、役人達、兵士達の混雑の中、要するに永遠に変遷し、永遠に同じ芝居に全体属する民衆劇の場面でもある。出来るだけ素早くこの考えは追い払うことである。このような瞑想は、はなはだ分配された配役の遂行を困難なものにし、ただ遅滞を引き起こし、立派な観客は、宮廷のロイヤルボックスから、天井桟敷に至るまで、皮肉な微笑を浮かべ、遺憾そうに肩を竦めて、嘲笑の笑いがけたたましく、口笛

や舌打ちとなる。それも全くもっともである。実存の悲喜劇のために人が収めなければならない入場料は高いのである。「おまえ、科白を忘れるな。舞台の王であれ、乞食であれ、不快な思いにさせるな。満足感を覚えるとかとても言えたものじゃない」。

残念ながら、直に私の周りの舞台では、少なくとも一瞬間、とても空になって、生きるか死ぬかについてのどのような独白をも許される空間となって、どちらが良いか云々と続くことになった。[『ハムレット』Ⅲ,1 生か、死か、それが疑問だ：福田恒存訳]。つまり引っ越した先の環境は全く私の両親に相応しくなかった。ここで私はこの紙片の上に深く額を垂れることになる。両親が晩年になって、私のために慣れぬ環境に適応し、順応する能力を自ら余りに高く評価していないか、もっと再考するよう促す必要があったのではないか、そうすべきであったのではないか、と。そして私が両親に対し、家へ、いや、家ではなくて町の中の賃貸の住まい[マンション形式]に連れて来た花嫁は、そこは町の「最良の地]とは言え、フォーゲルザングのことを何も知らず、ただ私のためだけにこのアルヒーフ通りに陽光を持参したのであった。窓台での花鉢の世話は、私の父にとって、郊外の庭園の代わりとはならなかったであろうし、上品な町の一角は、私の哀れな母親にとって、生垣越しや、隣の花咲く林檎の木から、自らの確かな土壌、大地の上の林檎の木へと吊された洗濯綱越しの付き合いの代わりとはならなかったであろう。これらと結び付いている快適なうんざり感、うんざりさせられる快感も消えてしまった。私が今、片手に頭を支えて、考えてみて、両親の、上昇志向のこの二人の路上、私の路上で、快々としていても勝者として落命するという意志を通させないために自分に何が出来たか、『どうしようもない』と私が言うしかないとき、これは確かに一つの慰めではあるが、しかしほんのわずかな慰めでしかない。そしてまず自らの子孫やこれらの者の慰めを考えて初めて、ようやくまたこのような、ここに現前している文書の束を前に、より安心して、より気楽に安楽椅子で姿勢を直せるのである。　ー

その通り。私の道は国の年鑑の位階、市民階級の社会で上昇して行った。私の両親は亡くなって、　ー　母がまず亡くなり、父がすぐ母の後を追った。そして私は結婚した。私が「ぼんやり君」の妹を愛する花嫁、立派な娘として、両親の許に入れたことは、二人の善良で愛する老親にとって、最後の喜びとなって、私もまた立派な、健気な息子であったという両親の確信に最後の印璽を押すことになった。つまり私が彼らの期待のすべてに応え、私はこれから先も、我らの世間の立派な至高の名誉、満足のために、どんなに些細な点でも尽力するであろうし、従って、すべて、この二人の全く誠実な両親としての生活を通じて費やされた不安や、苦労、苦悶、断念に値する者となろうという確信である。

まことに私は、これらの紙面で喜劇を演じ、この手稿のどこかの箇所で落ちた涙について寓話を話し、馬鹿話をするために、記述しているのではない。(いや、私自身自ら、この話し全体どうして突然かのベルリンからの手紙、ヘレーネ・トロッツェンドルフ、ムンゴー夫人から送られた手紙の結果、私の書き物机の上の記録交換帳に書き込まれることになったのか、良く分かっていないのである)。しかし私は再び　ー　休止して、　ー　書き物机の上の肖像、しかつめらしいドイツ人書記官の顔をして、胸に地方自治体に設けられた第一級名誉十字勲章を付けている老いた誠実な殿方を、メランコリックに感謝しながら見上げているのである。

この人ほどそなたのことを良く考えていた人がいたか。　ーーー

フォーゲルザングの向こう側の墓地への道は、相変わらず我らの以前緑の茂っていた幼年時代の路地を通って行く。以前ハルトレーベンの広大な家屋敷があって、私の両親の家、私の父の家、彼らの父祖の家があった場所を通り過ぎて行く。

「私はこの地にはめったにしか来ない」という言い回しがある。これが心にどんなに辛いものか、これは私の父の埋葬の日、完全に味わうことになった。

私はその地に義務以上に頻繁に行ったことがなかった。そしてこの地がいかに変わってしまったか、それは我らの幼年時代からではなく、隣保夫人アンドレス、医師夫人が我々皆からそこに置き去りにされた日以来変わってしまったか、良く知るまさに適した機会となった。

またこう言う言い回しもある。「今までこれに気付かなかった」。そして突然、このことが一層切実に人の心に迫って来る瞬間や時、一日がある。私は実際、自分の個人的人生の案件、自分個人に関することに大いに腐心していて、自分の背後にあることを、それがたとえ自分の身近にあっても、ほとんど気にかけずに来ていて、フォーゲルザングでもこれは無縁ではなかった。　ー

工場や賃貸の家々、ダンスホールの新しい壁に囲まれて、老夫人、フェルテンの母親は一人っきりであった。夫人は息子に約束したように、自分の故郷の地を離れずに、そして自分の四方八方から不快に、嘲笑的に、いや、脅威的に迫って来る新しい生活にもかかわらず、自分の小さな家、小さな庭、緑の生垣を堅持して来ていた。私の両親はこのため、いかにこの数年間、夫人の分別に訴えて説得を試みて無駄であったことか。

「息子は自分の意志を通そうとして来ました。そして、陸路、海路、世界を股にかけています。私の意志はここフォーゲルザングです。たとえ単に、息子が帰って来て、息子に、『それで、フェルテン、外はどんな具合だったの』と尋ねようという気まぐれのせいでありましょうとも、といった風に様々なヴァリエーションで（季節にも応じて異なり）ドクトル夫人アンドレスがフォーゲルザングで、家の不動産屋や、専門家の友人や、好意的女友達が、夫人の意志を挫いて、良かれと思って助言しようとどのような説得を試みても、そのように答えるのであった。この夫人に対しては、相変わらず、以前私の父親が「家庭の友」として、夫人との教育方針をめぐる議論から家に帰って来た時と同様、手に負えなかった。

さて、父が最後にこの小さな頑固な小家屋を訪ねてから、一週間も経っていなかった。父はいつもの誠実な友としての隣人らしいやり方で、この「以前の隣保夫人」に対し、立腹したり、また和解したりしたのであった。さて、父の棺には、フォーゲルザングの最後の家屋庭園から、貴重な花輪が置かれることになった。フェルテンの母親が花輪を自ら持って来て、私と私の若い妻と一緒に、妻はフォーゲルザングについてもはや何も知らなかったのであるが、黒い棺の側に座って、私の膝に何度か手を置いて、溜め息を吐いた。

「あなたの立派なお父上が亡くなられて、私はとてもとても寂しい、最良のカール。それでオスターベルク麓の老人達の中では、私が最後の者となります。時々、向こうの私の周りの喧噪の中にいると、窓辺で自分の編み物道具から見上げる時など、あたかも自分ももはやここの世界の者ではないかのような気が本当にします。でも私は息子に約束したのです、息子はいつでもこちらの自分の父親がいた世界、自分が昔いた世界に私を見いだすはずです、と。だから私はもうしばらく残らなければなりません。『お隣のご夫人、一言』

と言って、窓からちょっと覗いて、訪問された後、また残された私に、なお一層しっかりと、側や向かい側に、最良で最愛の隣人の方々がいらっしゃるという確信を抱かせる人が残っているでしょうか。あなた方若い方々がいらっしゃると、救い出される丁度五十年前に、一瞬目覚めたいばら姫のような思いがします。この姫は外套を着て、羽根飾りのビレッタ[帽子]とタイツ姿の王子様ではなく、生垣を抜けて来る素人写真家を垣間見るのです。いや、ご覧なさい、親愛なる、哀れなご子息、老いた医師夫人アンドレスはいつもの阿呆なお喋りをあなたのお父上の棺の側でもしています。自分の大切な、善良な友というのに。でも、いいこと、あなた方がお父上を明日早朝、フォーゲルザングを通って、野辺送りなさるとき、垣根越しに一人の女友達が、目を潤ませて、胸を一杯にしてお見送りします。そして言います。『そなたに運命がそこの生垣の側に配置してくれた一人の男が埋葬されるのだ。アンドレス母親よ、そなたの生涯の手本となるように、と』。すべては息子達のためです。勿論お父上は、お父上の方法で、私は私の方法です。お父上のやり方が良かったことは、最も良く、ここにいらっしゃる小柄な、ハンカチを湿らせているお嫁さんが証明しています、カール。お嫁さん、ハンカチをちょっと引いてくださいな、そして私に一回接吻して。ではお休みなさい。これからも二人仲良く暮らして、そして私ども老人には、眠るときが来たとき、休ませてください」。

我々が我が父を埋葬した朝は、素敵な晴れた朝であった。父が多分に満足感を覚えるであろうような堂々たる随行員で、普段葬儀の折には、このようなことはほとんど考えないことであるが、この折、生涯の頂点といった感じで、何かとても父には願わしいこと、努めるべきことに思えたかもしれない。父は我らの居間の窓から、何としばしば、馬車の数を数えたことか。これはこのような折、民衆の中の最良の者達の哀悼の念を、空馬車ではあるが、威厳をもって表明するものである。私がより高次の観点から、このようなものを無視したかったというのではない。いや、私は我が父親の正統な息子として、誰が父と私に対し然るべき名誉を添えて、誰がそうしなかったか、とても正確に注目していたのである。　ー

しかしフォーゲルザングでは、クルムハルト家が代々、父から息子へとこの観点で統計学的見解を述べていた窓は、　ー　この　ー　家そのものが、他人によって同じ具合に数えられるようになる時まで、どこにあったのか[どこに消えてしまったのか]。アルネマンは古い一家の地所に、四階建ての家を建てていて、地階から屋根まであらゆる種類の一ダースもの顔が、「立派な葬儀」を眺めるために、新しい窓辺に見られた。そしてその他の、田畑や庭園の路地における愛らしく、その他残余のものとしての飾りとなっていたもの、ドクトル夫人アンドレスの一片の緑の生垣は、これは往時を全く生き延びて来た何ものかであって、まだその命脈を保っているが故に、ただ惨めで、滑稽な印象を与えていた。

そしていかに、この喪の日、悲しみの行列の中、私の目はただこちらのすべての目新しく見慣れぬ四壁の間に、この緑の地点のみを求めて、この地の以前の市民として、一種郷愁の思いで、そこにしがみつこうとしていたことか。　ー　そして今や　ー　丁度クルムハルト家とアンドレス家の家屋敷の前で、二人の威厳のある聖職者が、私は二人の間、棺の後を歩いていたが、とても誠実に好意的に適切な言葉を私に向けたので、私は左右の彼

らの方に耳を向けていなかったら、まことに不作法なことと思われたであろう。それで当時、こうしたすべてにかかわらず、ほんの瞬時を捉えて、朽ちた脆い庭木戸にいる老いた女友達、隣保夫人に対して挨拶することしか出来ず、夫人は一人っきりでその勇敢に維持して来た帝国の小門に立って、その家庭の友が通り過ぎるのを見守っていたわけではないということをすっかり見逃していた。しかしまた、　ー　フェルテン・アンドレスがこの朝、その庭園から早速私の側へ寄って来ても、行列の邪魔となっていたことであろう。
ーーー
彼は行列の最後に接続して、かくて真面目に、突然の思いがけない再会という突発的不作法な興奮で混乱を招かないよう配慮していた。しかし墓地そのものでは、以前の友情が現在も出来るだけ良好な近隣関係を維持していて、その所有権を土地台帳に、抵当権帳簿ではないが、しっかりと一緒に記帳させて、彼は十分に私を驚かせた。
彼の父親のすぐ側に私の父の墓塚が掘られた。(隣人ハルトレーベンはほんの数歩離れたところに眠っていて、その他のフォーゲルザングの者達が周りに、ここはまだ相変わらず緑に覆われて、オスターベルクとシュルダー丘が眺められた)、肥沃な庭園の土の、新鮮に掻き集められた塊の中へショベルが埋葬随行員達の愛や名誉や敬意の手向け用に立てられ、用意されていた。
全くどうでも良い官房の同僚や、退屈極まりないクラブや常連客仲間がこれらのショベルルで最後の手向けをすると、間近の周囲ばかりでなく、全世界の明かりが全く薄暗くなって、書き物机とかロンブル遊びのために用をなさなくなる。しかしそなたの父親、そなたの母親、そなたの子供を埋葬しなければならない、そのとき、まさに明かりではない明かりの中で、誰がそなたの手に「大地に大地を」帰すための道具を手渡すか、そしてそなたは更に誰にそれを手渡すか、注意しなければならない。...
我々キリスト教徒の手にそれを渡すのは、それが願われたときには、律法と不文律により教会である。私の手から、側にいる間近な者がそれを取って、言った。
「これは善良な、健気な、賢い男クルムハルトであった。汝の末裔の子孫でも、なお甘美な果実を、その実直な枝ぶりの生命の木から放たんことを、...」。
フェルテンだ、...フェルテン・アンドレスだ。そこで私は作法を無視して、私の後でショベルを手にする予定の故人の上司の足を踏んで、後へ向かった。この上司にショベルを渡したのは、フェルテンであった。「済みません、上級裁判所長官殿」。
後にはもはや何の混乱もなかった。このような機会になされ、話される習慣のことが、ただなされ、話された。他人よりも（また友人よりも)、故人の長所について知っていて、その長所を確信していた私は、父について全く真実でないことは何も話されなかったと証言出来よう。我々がそれから父を土に帰し、父に最後の礼を尽くした各人が、このような日常の仕事の経過の中断の後、家に徒歩や馬車で帰る時、我々父と息子は、多かれ少なかれ逸話風に上級裁判所書記クルムハルトの経歴から取り出されて来る事柄を勿論同様に受け入れなければならない。そしてやがて身近な日々の生活の会話は、永眠の者を、その間近な善良な隣人の側、つまり自分の妻と医師ヴァレンティーン・アンドレス博士の側で永眠へと放置することになる。　ーー
彼は私と一緒に家へ馬車で帰らなかった。彼は墓地で私にこう言っただけであった。「我が少年、後でだ。時間はたっぷりある」。しかし墓地の門のところの馬車まで私に同行し

て、以前の上級裁判所書記クルムハルトの偉い上司とその息子を馬車に乗せて、扉越しに今一度私と握手した。「君とは今日のうちにももっと折り入って話せることだろう。良い朝を、お馴染みさん」。

「試補殿、風変わりな御仁でしたな」と偉い、職務上クルムハルト家の上司である殿方は言った。私が彼に可能な限り説明すると、彼は言った。

「フム、フム。おぼろげに覚えているな。郊外医師の息子で、数年前まで、頓狂なキリスト教徒だな。以前ここの陛下が彼に若干の興味を示されましたかな。そうだ、そうだ。全くその通り。アンドレスね。しばらくこの若者は本当に将来を嘱望されていましたな。試補殿、貴方と彼とは隣同士でしたか。今でも彼とは昵懇の間柄に見えます。昔彼は若い天才と見なされていた。しかし彼は、よくあるように、それからやがて全く視界から消えてしまいましたな。実際、彼の現在はいかなるものか、少しばかり興味津々なんだが」。

多分この立派な男性は、私が彼に不十分な説明しかしなかったのを、自分がこの願望を述べたときの、[埋葬という]時期や状況のせいにしていたと思われた。　ー

家に帰ると、このような仕事から家に帰って来たとき、よく見いだされるものが見いだされた。家は出来る限り、掃除され、片付けられていた。　ー　破局の後、出来るだけ新鮮な、陽の当たる日常の雰囲気が出来るだけ取り入れられて、　ー　出来るだけ万事旧来の仕来りのままで、出来る限り、ステアリンや塩素や花の匂いは抑えられ、いつも通りに古くからの調度はあって、自分の周りは、ただ若干より痛々しい、　ー　自らの内部に空隙があり、空虚感、空漠感があって、これは当然、それぞれの状況により、多かれ少なかれ鋭敏に感じられるものである。しかし私は真っ黒い真面目な様子の喪服姿の善良な小柄な嫁さんを腕に抱いて、「ぼんやり君」ことこの国の最も若い参事官である私の義兄や若干の他の、私の妻への弔問、見舞いのために来ている妻の一族に対してその弔意に感謝した。

「あなたに今回自分の親戚がいないのは、本当に悲しいことです」と私の妻は、自分の義務をすべて済ませて、皆が帰った後、言った。彼女は私の書き物机の、私の側に寄り添って、有り難や、とても密着して座った。「哀れな人、でもあなたには私が付いています。でしょう。やはり、慰められるでしょう。これからはもっとしっかりと支え合いましょう。そしてますます好きになりましょう。　ー　でしょう、　ー　哀れな人、愛しい人。でもあなたがすぐにまた自分の仕事部屋に腰を下ろしたのは、これはとても良くないことです。そうするものではありません。あなたには今日あなたの妻が必要です。たとえあなたが私の許に寄って来なくても、私がここあなたの許に参ります。すでに外部にはこう知らせてあります。緊急のご用以外は、どなたもご遠慮ください、と」。

人間がこの地上で、かつて神々の好意、神の善意と呼んで来たものすべてに掛けて、私がこの地上で確実な所有物として、富として獲得したもの、つまりこの悲しい喪の日までの私の行路で、私に与えられたものが、これ以上私に明確になり得たであろうか。　ー

我々はこの日ずっと我々二人だけであった。私が　ー　私の小柄な妻にフェルテン・アンドレスの帰郷について語ると、彼女は言った。

「あら、あの人は勿論私どもの一員で、あなたの最良の友です。私は元々、あの人のことはほとんど知りません。でも、何としばしば私どもの許、私の両親の家で、あの人について、私の兄に対してあの人がなした事について、話されたことでしょう。あの人が私ど

ものために命がけのことをしたとき、私はまだほんの幼い子供で、その英雄的行為のことを全部理解することは出来なかった。でも私は今日でも、私の母が気を失い、また泣きじゃくっていて、私の父が我を忘れていたのを思い出します。後になってからは、残念ながら、あの人のことは余り良い風に話されなくなりました。父は苛立ってこう言っていました。彼には全くとりつく島がない、残念だ、と。その後、私は段々と大きくなって、自分の意見を持つようになり、あなたと知り合い、あなたの助けも借りて、つまりあなた自身が最も良く分かっているでしょうけど、私は自分の父の家から出るばかりではなく、神様や世間についてのあらゆる様々な考え方を知るようになり、あなたに相応しい者になりました。それで私は今ではほとんどあなた同様、昔のフォーゲルザングのこと、ヘレーネ・トロッツェンドルフのこと、ドクトル夫人アンドレス、それにあなたのフェルテン、その他すべてに通じています。　ー　勿論、私が一人の人間に注目しなければならないとすれば、それはあなたのフェルテンです。この人のことは、あなた方の誰も、まともに理解して来たようには見えないけど、この言葉はご免なさい。それで、あなた方の描写通りに、昔と全く変わらずに、この人は今でもそうであるように見えます。私が彼だったら、今頃は疾うにあなたの許に来ているでしょうに。　ー　その上、今日のように、とても恐ろしく、辛く、悲しい日という時には」。

そのように妻はお喋りして、再三、左の人差し指で、私の額の皺を平らにして、「この悲しい喪の一日」をより容易にやり過ごせるよう協力していた。

世間は我々二人を放置していて、あるいは入口のドアの掲示に従ってそうせざるを得なくて、静かであったけれども、奇妙に、幽霊の騒ぐような一日、落ち着かない一日であった。フォーゲルザングの教会墓地の新たな塚のせいではなかった。そのようなものは人間をただ片隅に、場合によれば、薄暗い片隅に追いやり、空になった大型安楽椅子とか、より低い子供用床几に座らせて、その重たい手を目の上とか額の上に置かせる。これは肢体に不穏な気持ちを生じさせない。しかし私は一日中、肢体に不穏な落ち着きのなさを感じていた。というのは私はフェルテンが今どこにいるのか、私の妻よりも分かっていなかったからである。

錯覚であった筈はない。私は彼が突然、教会墓地で私の側に立っているのを見たのだ。彼は私に話しかけた。私は相変わらず私と握手した彼の手の圧力を感じていた。　ー　私は部屋の中をあちこち歩きながら、自分はもはや彼のことを信じない、彼が故郷に帰って来たという一つの保証を文書に記さないぞと思う瞬間があった。彼がそれから黄昏にやって来たとき、彼を見て、私は帝国刑法、過失の偽証罪の条項に没頭することになった。そして頭を振りながら、こう確信した。大方の司法犯罪はこの種のものが多くて、恋人達の誓いについて笑うジュピターは、この点に権限のある裁判官達の判断にしばしば歯ぎしりすることになろう、と。　ー　しかし私がこのようなことを今ここに記述しているというのは、今日、この冬の夜、雪が相変わらず間断なく降り積もっている時、かの薄暗い、不穏な夏の日曜日、つまり私が私の父を埋葬し、フェルテン・アンドレスが父に対し、彼の母の家から、最後の礼を尽くした日は、いかに遠くのものとなったか、示しているに過ぎない。

しかし、彼、我が友フェルテンは、以前同様、私の安楽椅子側にまさに幽霊の如く立っていて、私の肩に手を置いて、尋ねた。

「それで、昔馴染みよ、まだ遊びに飽いていないのか」。

すると私は、この今日の、冷たい、色合いのない冬の夜、永遠に新たに積もってくる文書の塊を周りに置いて、あらゆる幻滅や、不安、苛立ちを感じながら、これらは公の人生でも、私生活でも感ずるものであるが、この迫って来る時に対して嫌悪感や、幻滅、退屈、反吐の思いを抱いて、憤然と戦いながら、今一度「否、飽いていない」と言った。私の生活圏では本質的にフェルテン・アンドレスという名前であるこの誇り高く、落ち着いた影に向かい合って、否と言った。

私は私の子供らの遺産分を持ち、確保する。この地上における人間の玩具、これは実際いつか私の両手から滑り落ちることであろうが、子供らがこれを拾い上げるであろう。そして私は　ー　この私は子供らに対し、まだその責任を感じている。　ー

しかしこの友人がフォーゲルザングの緑の生垣の最後の部分から身を乗り出して来たかの夏の日、彼に対し国から指定された後見人、あるいは「家庭の友」に対し、この老上級裁判所書記クルムハルトに対し、最後の礼を尽くした日のことは、まだこの紙面では終わっていない。黄昏はこの時期、夜の深更に及ぶ。そして申したように、この友は黄昏にようやくやって来た。新たな朝がオスターベルクの上に輝いて、それからまた彼は出て行った。別れの際、彼は微笑した。

「それでは私は、シェーラザードか、バグダッドの隊商宿でのお伽噺の語り手を十分に演じたかな。ほら、　ー

赤茶けた外套に包まれた朝日が、

向こうの東の露を帯びた高台に昇る。[『ハムレット』Ⅰ,1　おお、あの空、朝日が、茜色の被衣をひろげ、露を踏みしめながら、東の尾根を越えてくる：福田恒存訳]

しかし、君達がそう望んだのだ、小僧どもよ。一つのことだけは確かだ。私の生涯のことをほとんど私同様君達も今は承知している。恵み深い　ー　若いご夫人の意見はいかがかな。でしょう、ご夫人は後で、自分の最良の所有物たる夫を一層しっかりと腕に抱き締めて、若干不安げにこう言うことでしょう。『まあ、カール、この恐ろしい人とあなたはフォーゲルザングで育ったのね。近年この人のことが話題になるとき、私にはとても立派な風に話していたわね。でも神様は随分早く見抜いておられ、この人を世界のあらゆる通りへ追放なさって、この人には、ただ草と波、太陽と風のみを与えられ、あなたのためには良かれと、この私を哀れなあなたに預けています。だから愛する神様には、私ども両人ともとても感謝しなければなりませんね』と」。

「貴方はそれでも、少なくともしばらくの間、こちらの私どもの許へ滞在なさるのでしょう」とぼんやり君の妹は尋ねた。しかし彼は再び私の方を向いた。

「あちら、フォーゲルザング最後の生垣の背後に老ヒロインがいる。私がこの母にサウサアンプトンから私の帰還を告げていた手紙は、やっと今朝こちらに届いたのだ。それで母は、私が昨日夕方、庭木戸に寄りかかっている姿を見つけることになった。母が君のところ、君の父親の棺から帰宅した時のことだ。私は少なくとも一年間かけて、このたび母

に味わわせた驚愕を癒やす必要があろう。いや、何と言うか、母を両腕に抱いて、昔からの調子の、昔からの立派な話しぶりを聞いてやるのだ。いや、私は異郷で、何としばしば、母の『馬鹿なあなた』という言葉を耳にしたことか。　ー　それをまた笑い声と涙声の間で言わせるつもりだ。一時間ほど私は垣根で待っていたかな。すると母が家の鍵を持って帰って来て、この逃げ去っていた犬を入れたわけだ。そこで私は、新たなご立派な壁建築を眺める暇があった。　ー　この壁の中で、母は　ー　ただ母だけが母の建物を　ー　我らの建物を維持して来たわけだ。　ー　誰のためか、誰のためか。ほら、ここにその阿呆が、蝶を追いかけ、シャボン玉を追いかけて、帰郷した阿呆が立っている。そして右を見て、左を見て、向かい側の昔からの友人や木々を見て、　ー　周りに見えるのは、見知らぬ他人や見知らぬ壁だ。奴らはそれを建てて、母のもの、日の当たる、緑に茂る、花咲く、高笑いの遺産を閉じ込めた。しかし母は、友人や女友達、隣人や隣保夫人、茂みや木々が去り、朽ちて行くのを見守って、自分の桜草の花壇の上の影に耐え、窓辺の裁縫台の自分の椅子を動かさなかった。母はすべての前足を払い除けた。それは母のためではなく、私のためだった。...私のために母は、昔のエルサレムのユダヤ人のように、鞍から革紐を、表札からは革をかじり取って、ハルトレーベンの地所の工場の騒音の中、ティヴォリ遊園やセントラルホールのダンス音楽の中、聖遺物を守ったのだ。私が乞食となって帰って来ようと、あるいは昔のチャールズ・トロッツェンドルフのように、百万長者となって帰って来ようと、多分母にとってはどうでも良かったことであろう。母の鉤針や編み物靴下の上、母の愛する眼鏡の奥で、母は単にこう確信していた、『哀れなあの子、あのならず者のことは、余りに良く分かっているから、この子はきっと、今一度私の前掛けの中に隠れて、私のスカートにしがみついて、母さん、母さんと泣き叫ぶだろうと、承知している。私の他に、この阿呆の心が分かる人がいるだろうか。息子が私にあの娘、ヘレーネを連れて来ることが出来れば、これは勿論別の話しになりましょう。でもムンゴー夫人がこのフォーゲルザングの最後の緑の中に馴染もうとしなくても、多分これをあの息子の最悪の運試しと思ってはならないでしょう』。　ー　諸君、もう私を行かせてくれ。その通り、恵み深いご夫人、しばらく私はこの国に滞在します。それでまあ、余りに深刻な顔をなさらないでください。大事に獲得された貴女の所有物の旦那を貴女にお任せします。ほら、友のクルムハルトは微笑している、　ー　悲しい、喪の仕事の後であっても。親密な夕方の話し合いでも、これほど翌朝まで続くものではありませんよ」。

私が微笑したか、私は覚えていない。しかし彼が去った後、我々はまた二人っきりになって、すでに朝方の明かりの中で燃えているランプの許に戻って来たとき、私の妻が、不安一杯になって、私の許に来て、私の首に腕を回して、こう叫んだのを覚えている。

「何という人でしょう。何と愛らしい、不気味な人でしょう。これがあなたのお友達ですか。あの人と一緒にあなたは郊外で育ったのですか。私の両親の家では、誰もあなた方のことは知らなかったけれども。今、私には分かります。あの人は、人の命を救い出しても、ただその人をからかうためだということが。私の兄フェルディーをからかうように。あの人は、馬鹿げた少女のために、自分の母親や祖国、故郷での自分の出世をも投げ棄てることが出来るのです。　ー　そうね、　ー　上手く言えないけど、でも私はそう感じ、これは確かだと思います。つまりあの人は後で、自分の錯覚や幻滅について、母親宛に冗談の手紙を書くのでしょう。これらの手紙はあの人の真心からのもので、かなり冷静な、

哀れな女の私にとっては、少し冷静過ぎる心から書かれるものです。何という微笑を浮かべて、あの人はあなたについて、最良のカール、私の所有物と話したことでしょう。ねえ、私どもは分かりません、あの人が今回、金を持って帰って来たのか、持っていないのか。でもあの人はもはやこの世には、この世に関して、一つの所有物も有していません。そして私にとっても、私どもにとっても、とても悲しいことだけど、それを求めてもいません。あの人は、私ども他の者に喜びとなるものすべてを、まだ必要とするのかしら。そして、あの人の語ったこと、この夜、私どもに話したことすべてから判断して、更にあの人が不安に思い、心が病み、喪失を覚えるものがあるでしょうか。あの人はもはや誰の助けも慰めも必要としていません。　ー　あなたも必要としていません、カール。これはとても危ない人間です。今私は分かります、ここ私どもの小さな世界では、誰もあの人と何か関係することは出来ず、あの人にとって休息の地はどこにもない、と。でもこの人ほどに、あなたの友フェルテンのように、これほど傷つかずに自分の人生への道を進むことが出来て、それが幸福でしょうか。あの人は、私ども他の者が遭遇するものすべてをただ劇場の芝居を見るような具合に関与していて、目の前で上演されるものが、喜劇であろうと、悲劇であろうと、愚作であろうと、極めて賢いもの、醜いもの、美しいものであろうと、どうでも良いのです。それにもっと悪いことに、あの人の心の中であっても、どうでも良いのです。私は多分馬鹿げたことをお喋りしています。でも私はこのようなことがこの世に存在するのだと、どうして私の圏内で経験し得たのでしょうか。人間が生や死について、私ども他の者にとって、大事なもの、甘美なもの、苦いもの一切について、かくも冷静になり得るなんて考えられない。いや、カール、あの人は、あなたがあの人について語っていた人とは全く別な人です。それにもう一つ。ベルリンのあの哀れなレオニーのこと、あなたが私に語っていたあの娘のことは、私には良く分かります。でももう一人の娘、　ー　ここフォーゲルザング出身の娘、これは全く分かりません。彼女、このヘレーネ・トロッツェンドルフが、あなた方馬鹿な愚かな人々相手であっても、全く通常の愚かな鵞鳥とは言えなかったのでありさえすれば、重い責任を自らに引き受けたいたことでしょう。私、個人の見解としては、　ー」。

「それで、嫁さんの意見は」。

「私でしたら、この恐ろしい人を待っていたでしょう。そしてあの人に対する自分の権利をそう易々と棄てなかったことでしょう」。

それは私の父の埋葬の日の後であった。この小柄な妻はすべてのひどい、奇妙な、冒険的興奮の後、消えて行くランプの明かりと昇って来る朝日の間の時、宵越しで、消耗して、いや全く不幸に見据えていたが、私はこの内気に、しかし反抗的に叫ばれた言葉に微笑せざるを得なかった。しかし妻はソファーの角から飛び上がって、ランプを吹き消して、叫んだ。

「いや、あなたが笑おうと、不機嫌に見つめようと、全く構いません。あなたの友、フェルテン・アンドレスは、法外に私の気に入りました。私はここでは少しも自分のために話していないので、それだけ一層冷静にそう言えます」。

「それでは誰のためだい」。

「私どもすべてのためです。その通りです。それは単に、あなたが当然予想されるように、私ども哀れな因習に縛られた女達、何か目新しいことを目にした女達ばかりのことで

はないのです。とりわけあなた方、いや、あなた方男達のことです。だって私どもは、こちらの狭い地平に出現した新しい現象にはせいぜいより深い関心を抱くことになりましょうから。でも、思うに、私が男であれば、その上、当地のような町と社交の出の男であれば､私は時折､このようなそもそも根源的に恐ろしい人間には羨望を覚えることでしょう」。

いや、彼はとても善良で、とても静かに暮らし、当地の仲間の人間に対し、フォーゲルザングでほぼ丸一年、何もしなかった。ほぼ丸一年、このほとんど大都市へと成長した領邦首都で、フェルテン・アンドレスほどに、自分の年金で暮らしている年金生活者で、小市民的である者はいなかった。彼に対する興味はやがて完全に消えた。チャールズ・トロッツェンドルフ氏のようには実際彼は帰郷しなかった。ちなみにフォーゲルザングの現在の隣人達もほとんどこのヨゼフについて何も知らなかった[出エジプト記Ⅰ,8]。つまりこの場合、アンドレス医師とその家族についてである。

すべての同級生やその他の青春時の仲間に対して、彼が応対して言う言葉は、ただ一語であった。

「恐ろしく、疲れた」。

それからひょっとして、欠伸しながら、こう彼は付け加えたかもしれない。

「たっぷり眠って、目覚めるのだ」。そしてこの良き友達が次第に自分の方でも本来何も伝えることがないと自覚するようになると、勿論この双方にとって、最良のことは、このような会話をもはや交わさず、そもそも交際を停滞させることだとなる。明るい目をして、生き生きと、散歩杖を振り回しながら、この「訪問」は次のように固く確信することになる。

またしても袋に余りに大きな干し葡萄[途方もない夢]を持って出て、後で通常の人生での不運を経験した奴だ、残念、老いた、愛しい奴。

私自身､ドクトル夫人の窓辺の椅子から､このような善良な人々の何人かのお伴をして、フォーゲルザング最後の緑の生垣の朽ちた木戸まで歩いて、この生垣に寄りかかって、彼らを見送り、そして時によって、この世界での目覚めと眠りについて自分の思いを巡らしたものである。

しかし私に対してもこの友は、不当と思えるほどに口数が少なかった。この時、私は彼の体験について、年月の経過する中で、自分の母親に彼が書き送っていた以上のことを、彼の口から聞くことは結局なかった。散歩をして、オスターベルクの山上でまたしても以前、我々三人の子供が、彼、ヘレーネ・トロッツェンドルフ、それに私が、聖ラウレンティウスの日の頃、流星の落下を目にしながら、人生での願いを述べた箇所に来たことがあった。

私は彼にそのことを思い出させ､彼は悠然と私の肩に手を置いて､何の興奮も見せずに、微笑もせず、また額に皺も寄せずに言った。

「流星は、私に対しかなり約束を守ってくれた。謙虚な質の者には、必ずやその応分が分配される。他に仕方ないのであれば、それを正しいこととして受け入れる。昔、何を私は願ったかな。勘違いでなければ、三人の『ローラントの近習』[ムゼーウス作、1735-1787]の幸運のヘック銅貨、魔法の親指サック、魔法の布巾だった。私はこのすべてを得たし、

毎日の生活に入用な分、まだ有している。ペルセポリスを燃やす楽しみは断念している、自分の最後の学校ノートを暖炉に投じた時にな。『バビロンでの陶酔的英雄の死』[ハイネの『ロマンツェ-ロ』、「若者達に寄す」、アレクサンダー大王の死「バビロンに酔う凱旋の死よ」井上正蔵訳] ももはや私には拍手喝采のホモ・サピエンスの退場には思えない。阿呆ノ退場だな。私は素面で死にたい、あるいは君がもっと好むのであれば、　ー　完全に酔いが冷めて、死にたい。可能な限り、独自性を欠如してだな。ちなみに、私は立派に記憶していて、君がまさにこの地でかの夏の夕べを私に思い出させることはほとんど必要なかったことだ。ディオゲネスの樽も、当時このような流星の時、話題になっただろう。それで、私は今でも、その樽に入って、下の老母のために、その暖炉の片隅まで転がって行きたいし、それが許されたらと思う。親愛なるクルムハルト、人は何でも甘受しなければならない。それに人々の幻想も壊さないことだな。例えば、下のフォーゲルザングの老母は、今でも変わらずこう思っている。自分の息子は世間をその実行力で征服したのであって、これからも征服して行くであろう、と。私の中に一人の英雄を見ていて、この英雄を私の父、祖国、産婆、そして人類に贈ったのだという冗談みたいな妄想を、母は何年も、そして専ら現在の、この私の長目の不在の間、陽気に、快活に保持してきていて、母のこの幻想を打ち破るのは、一つの罪に思えるほどだ。ここでは私にとって世間との戯れは終わっている。なおも雲となって母の夕陽の前を移って行くのは、余りに劣等な冗談であろう。ところで、私は母のテーブルに、十分に恐縮するほどのドルの山を築いてやったのだ。そこで私は母の前で、私の殻の財布を裏返して、母に言うべきであろうか。『母上、母上がフォーゲルザング最後の緑の庭を、あなたの生粋の被造物たる、あの被造物、愚かな若者、あなたのフェルテンのために保持してきたことは、無駄なことです』と。　ー　私は人生でよく喜劇を演じなければならなかった。主に最近の数年のことだ。そしてアウグスト皇帝のように[皇帝は臨終の時、自分は人生の喜劇劇場で上手く自分の配役を演じた旨同意してくれるよう頼んだとされる。Gaius Suetonius Tranquillusによる]、それに対する自分の才能を自慢することが許されたであろう。しかし今、ここの場所で、我が老母に向かい合っては、眠ることとか、眠り尽くして目覚める必要[寝溜めて睡眠不足解消]について、他人の前同様に冗談を言い続けることは難しい。この冗談は、蠅どもを、つまり阿呆どもを追っ払うためなんだが。いや、いや、太陽の光線は母にとって十分以上に遮られてしまった。母の静かで、タフな、愛する美しい人生において、私を光源としていた明かりを、母に対して消すわけには行かない。私から出ている限り。母から私に対する喜びを奪うわけに行かない」。

私は、そんなわけで、実際私以上にその内実を承知している者のいないこの男とただ黙って握手する他なかった。これに対する口頭の返事はなかった。

フェルテンは微笑した。

「一七六七年のことだった。つまり文学史の最大の利己主義者[ゲーテのこと、ラーベの個人的見解]が十八歳の時だな。彼は友のベーリッシュに助言してこう歌った。

感情を棄てろ。
動じやすい心は、
惨めな財産、
この揺れる大地の上では。[Drei Oden an meinen Freund Behrisch,1767]

そして彼はこれに従って、詩と散文での自分の生涯を律した。彼はそれに成功した。ミセス・トロッツェンドルフのサロンでのことであったが、私があらゆる種類の絵本を偶々めくっていたとき、髪粉の鬘と半ズボン、絹の靴下、尾錠付き短靴姿の早熟なこのヒーローのこの詩行を丁度の時に目にしたのだ。我らの守護霊は、思いの他、頻繁に、このようなきっかけを利用して、我らを両腕に抱えてくれたり、また、ハンスとグレーテルの交際を通じてのこの世の存続のために是非とも必要な分以上に、我らが滑稽なものとならないよう、守ってくれたりする。十八歳の若造からも何か学べるものだ、殊に守護霊が若造の額に触れてくれる時にはな。それは私に、フォーゲルザング出身の我らの娘っ子が初めて全く明瞭に、この揺れる大地で一体何とすべてが惨めな財産となり得るものか、私に教えてくれた社交の晩であった。私は詩行を作ったことはなかった。しかしそれでも喜劇的なことにしろ、悲劇的なことにしろ、その場の対象となるものを、その気になれば、絵のようなもの、劇的なものを、その都度、十分に心ゆくまで、完全に精神上明確に、客観的に把握する能力を私は有している。私はかの晩、老ゲーテなら、重要な晩と言うであろうが、トロッツェンドルフ親父の愛蔵版からその頁を切り裂いて、それを綺麗にたたんで、胸ポケットに収めた。我が人生の船における幾多の漏れ口は今日までこの詩行で閉じ込められている。それで　ー　今、思うに、美しい自然を、この眺望地点から、以前我らが流れ星に我らの願い事を結び付けていたこの地点から、十分に日中眺めたと思う、それでは行こうか」。

我々は向かった、　ー　今一度、オスターベルクのジグザグ道を下りて行った。今回もはやエリーは、貧乏人のブナの木の下、根につまずいて、鼻血を出すこともなかった。その道は「地ならし」されていた。美しく、古く、朽ちた木がその枝を道の上に広げている所では、今や、白く塗られた錫の像が立っていて、「カノヴァのヘーベ」[Canova,1757-1822, 青春の女神像]の模造であった。その側では、別の手入れの良い小道に沿って、一本の手の指示板が「神経疾患者のための保養院」を示していた。この院の繁栄をシュルダー丘の森の所有者、ハルトレーベン親父は幸いもはや知ることもなかったのであり、それで自分の墓地で休めない事態にもならなかったのである。午後の遅くにはこの一帯は散歩の男女でまことに賑わっていた。我々は、我々に挨拶してくれて、私が挨拶しなければならない何人かに出会って、また彼らはしばしば肩越しに私の同伴者の方へ視線を投げ返していた。彼から何かを「引き出す術を心得ていた」であろう人、あるいは、単に近似値的にも正しく彼を、人間の状況や運命に関連付けて、自分の人生の規則や人生経験に組み入れることが出来たであろう人に出会ったかどうか、私はこの文書では言えない。

私の義兄、「ぼんやり君」はこれが出来たとは全く言えないであろう。彼も我々に向かってやって来て、その道を、木々に付いた一種赤や黄色の印に従って、　ー　治療の印で、　ー　幸いにただ憂鬱症の気配のある心臓疾患をその芽のうちに摘もうとしているのである。

「おや、お二人の似たもの同士。下の、お宅らフォーゲルザング鳥籠からの二羽のラブバード[御神酒徳利]。フェルテン、君の母上の許、町に名高い、珍奇な最後の生垣越しに、拝顔致した愛らしい老レディーのご健在ぶり、まことに喜ばしい、恐悦至極。羨望するご神経のご母堂だ。ティヴォリ遊園からのコンサート音楽を聞きながら、王侯領知性新報を

読み、更に親しく、隣人の健康状態までご下問される。ご尊顔にはとても快適なご表情を浮かべて。しかし貴君は、　ー　当地の人類の古い人間にして謎である貴君は、いかなるご機嫌にておわすや。フェルテンよ、ほとんど貴君の責任とは言えないが、いかにも貴君はこの当地の日常世界に対して、貴兄にまだ関与する限りの人間に対して、混乱を招いておられますぞ。貴君の姿は見えない、貴君の言葉は聞こえない。次第に貴君に好意的贔屓筋の者でさえも、警察に行って、貴君のことを尋ねる必要があったり、それどころかこの高貴な警察筋に貴君のことを注目させたりする始末。世界征服者はそのような具合に帰郷されますのか、それともこれは単に貴君の新しい流儀、連邦首都の人民に、いかにして人は世界征服者となるかの問題を解いて見せる流儀でありますかの」。

「世界征服、及び世界克服に関する最も古くて、最も単純で、最も快適な方法だな、親愛なる政府参事官殿」とフェルテン・アンドレスは言った。

「人民は町の中で、眠り尽くして目覚める必要性についての貴兄の言説を触れ回っております」と義兄は言った、「故地方裁判所参事官インマーマンの男爵フォン・ミュンヒハウゼン[1838/39、世間から離れて、若い時分の睡眠不足を寝溜めで解消]も類似のことを言っている。そうだ、カールよ、君は最近私にそのことを指摘したな。残念ながら、我が輩らはそのような類いをほとんど読まない。私は実際時間がなくて、我らに対する君の教示がどの程度そこの冗談の名残なのか、その本に当たって調べられない。しかし、アンドレス、ひょっとしたら貴君自身、時に親切に、その点をより詳細に説明してくれるかもしれない。しかし私は既に余りに長くお二人をお引き留めしたようだ。　ー　まあ、中年になった昔の仲間、同級生が、このような昔馴染んだ路上で出会ったら、まさにいつも変わらぬ景色だ。親愛なるお二人さん、素敵な良い晩を。クルムハルト、君の嫁さんに私からもよろしく」。

フォーゲルザングでは、私も小一時間、ティヴォリ庭園からのコンサート音楽を聞きながら、この友とその母親と一緒に座っていたこともある。いずれにせよ彼は、自分の感情を失った心を、十分に隠す術を心得ていて、そしてこの揺れる大地の上、この堅固な箇所で、以前同様、動揺し易くて、真の意味で互いに人間的親近感を抱かせるすべての明かりや、色彩、影の中で、心の演出を行った。今や、私の両親と私の地所から我々の許へ落ちて来る高い耐火壁の影が、また何と明るくなることか。我らの子供時代、フェルテンと私の子供時代からの、そしてアマーリエに、アガーテ、アドルフィーネも子供で、若い娘達、花嫁や若夫人であった時代からの夕陽のように、木の枝からただ千もの影が小さな園亭に、またそのテーブルの上に投げかけられているようであった。そのテーブルではフェルテンの父親がまだオスターベルク麓のすべての近隣住民に対して処方箋を書いているのである。勿論また大冒険の話しがあるわけではない。ニューヨーク五番街でのサロンの愛蔵版から千切られた一枚の紙片について語られることも更にない。愛しい過去の話しが当然また蒸し返され、優に一時間新たに正当に彼が話す。母上まだ覚えていますか。母が正当にまた話す。あなた方悪太郎はまだ覚えていますか。　ー　隣人ハルトレーベンがスリッパでならず者、フェルテンに対する最近の告訴状を持って、路地を渡って来て、医師夫人から結局、「マダム」・トロッツェンドルフの家賃を猶予し、夫人に対しては新しい壁紙を貼るという約束に丸め込まれることになる。　ー　「そこでその娘っ子ですが」と隣人はぶつぶつ言う、「いや、お隣のご夫人、その娘っ子は貴女にしがみついて、虫一つ殺した

ことなく、今日私のプードルの毛を刈ったことなどないかのようなしおらしい顔をしています。この犬を連れて来ようと思ったのだが、自らの不格好を恥じて、ぶっても、焼きソーセージを出しても、ソファーの下から出て来やしない。母親の化粧鋏を持って、そのお転婆が追いかけて行き、この犬の毛を苅ってしまい、もう出て来ません。自然の自分の居場所の世界に出て来ません。いや、医師夫人、神様のご褒美もここでは十分でありません、貴女のご褒美が添加されているに違いありません、私はこのような心地良い賃貸人を一年また一年と甘受させられまして、それどころか有り難く思わされている状態でありまして」。

我々は子供で、　ー　若い民で、　ー　フォーゲルザングで最も美しい少女が乙女としてフェルテンの母親に寄りかかっている。「あなたの許に、どんなに離れていても、一緒にいます。どうか、どうか、父の手紙を貰ってからの後、母が今日あなたに言ったことを悪く取らないでください。私どもがどこにも居場所がないのは、母の責任ではありません。私もそうなのです。最愛の最良のアンドレスおばさん、私はあなたの善意、愛情、慈悲心を頂いているのに、母よりもまだ居場所がないのです」。...

いや、まだ覚えていますか、フェルテン。クルムハルト、まだ思い出しますか。　ーー「質問して良ければ、息子ども、明日の学校の宿題はどうなっている」。これは私自身の健気な、心配症の父親、亡き父親で、ナイトガウンと室内帽姿で、長いパイプと共に生垣にやって来た。生垣には今や隣家の高い耐火壁が聳えている。私の母が手に編み物道具を持ち、腋には糸玉を抱えて、やはり我らの園亭から近寄って来る。段々とフォーゲルザングにとって、現実の再現である。血と肉を備えて、あらゆる身振り、口調で、皆がまたドクトル夫人アンドレスの許に出現する。皆がまた上がって来て、そして　ー　快活で美しい老女の隣りの男にとって、最も生き生きとした瞬間となる。この男は胸にベーリッシュ宛の第三オーデの最初の詩行の紙片を有している。

感情を棄てろ。
動じやすい心は、
惨めな財産、
この揺れる大地の上では。

そして憤然と真面目に、今や自分の生涯をこの詩行に適合させて来たと思っている。

それから私が家に帰ると、ひょっとしたら私の義兄が私の妻の側に座っていて、彼が私にこう尋ねるかもしれない。

「それでは、相変わらず君はまだこの自堕落な、底なしに退屈な、全体荒廃した旦那、このミスター、セニョール、あるいはムッシュー・アンドレス、君の友フェルテンとの縁が切れないでいるのか。いや、お願いだ、そんな旧式な、非難を込めた流儀で見つめないで頂きたい、親愛なるクルムハルト。いや、どんなに衷心からの感謝の念も、段々とこのような近寄りがたい、得体の知れない、永遠に欠伸をして、永遠ににやりと笑う若造[学ラン]相手では、消滅して行くものだ。天もご承知だが、我々は昔、出来る限りの報恩の念を抱いて、彼に対処して来た。しかし、今、故郷に帰って来た彼の姿を見ると、時々、昔私を冷たい沼地から救い出したのは別人であれば良かったと思うことがある。そして明

日の夕刊で名指しされるのでなければ、こう私は言いたい。『おまえさん、私の前に二度と現れないでくれ、さもないと、私は公衆保健協会に貴方のことを通報し、公共にとって危険人物と告発しますぞ』と」。

彼、我が哀れな故ぼんやり君義兄は、洒落に欠けているわけではなかった。彼は一年前に一つの心臓の不調で、我々から消えたわけではなかったのである[心と心臓の不調]。

私は再びこれらの頁に取り掛かり、額を両手の間に置いていて、再度不審に思って、どうして、何故、このような具合に、既に幾多の長い冬の間、私のこれらの頁には、このような言葉や映像が充満するのか、明らかにしようと試みた。

しかし今日、レッシングの文学的遺稿から或る頁を目にすることになった。このヴォルフェンビュッテルの図書館司書はその「匿名の者」についてこう書いている。[Samuel Reimarus,1694-1768,レッシングはGoezeに対し擁護した]。

「彼とはもはや私は一つの屋根の下で、二人っきりで住もうと思わないので、私は彼を世間へ引き出した」。

私は、これだ、と思う。　ー　あるいは、これに類似することである。私は、全生涯、このフェルテン・アンドレスと一つ屋根の下に暮らさなければならなかった。然るに、彼はその心も脳も、必ずしも快適至極の類いの同居人ではなかった。　ー　彼は他の人々の生活習慣とは必ずしも簡単に調和しようとしない注文の多い同宿人であった。しばしば堅気の地上の民の全神経を逆撫でする不当な要求の相棒であって、事物が見かけ上もはや整然としなくなるのであった。彼が外を徘徊し、私自身は家に留まっている時に、私は彼を路地へ追い出そうと試みて来たし、　ー　その数は数知れない。これは無駄なことであった。そして今や　ー　彼は永遠に外出したというわけで、彼は以前にも増して、自分の宿泊権を一層強く主張しようとした。しかし彼とはもはや私は一つの屋根の下で、二人っきりで住もうと思わない。かくて私は更に書き続けることになる。　ー

私の長男が生まれた。私は当然フェルテンを名親に頼んだ。しかし彼は名親を断った。これと関連する教会の規則のせいであった。

「その子に私がいつかその生涯で役立つであろうなら、喜んで引き受けるが、しかし年齢が違いすぎるので、これは疑わしい」と彼は言った、「まあ、我らが後々人生でいつか互いに出会うことはないとは言えない。その子が私を必要とするときには、その父親の友らしいことはしよう。今はただ静かにその子をフェルディナントと名付けたらいい、君の義兄のぼんやり君にあやかってな。この義兄と君がおれば十分、この子をお襁褓からズボンへと育て上げられよう。君の小柄な、善良な夫人にも、君は尋ねていないのだろう。夫人が本当に率直に、私をその赤ん坊の願わしい導きの随行者と思っているのか、この世間という野蛮な森の中においても[『神曲』冒頭風]、幸い夫人はこの世間のことは何もご存じなかろうが、しかしまたご当地の習慣化された生活圏においても、こちらは幸い夫人は熟知されていようが、戸籍簿と教会台帳に記入するに相応しい名前と思っているのか、この双方、君は問い合わせたのか、そして夫人は同意したのか、これに私は懐疑的だ」。

一方に関し、彼は間違っていたし、他方に関し、彼は間違っていなかった。

「あなた」と私は妻に質問を受けていた、「あなたはこの件を注意深く考えてみたのですか。ヴァレンティーンという名前は今ではとても馴染みが薄い。それに、　ー　フェル

テンよ、...フェルテンですよ。いや、この名前について、まさにこの町で、そして私の家で、いつも奇妙な風に話題になるのでなければ良かったのでしょうが。私は、ほんとあなたの友に対し、何も含むところはありません。　ー　逆に、あなた自身承知しているでしょう、いかに興味深いか、彼が訪ねて来ると、すべてが、話しが何に及ぼうと、すべてが、流儀や色合いが、私や私どもが私どもの圏内でこれまで眺めていた具合とは全く異なったものになります。あなたも実際、とても善良で、分別ある人間で、私の親愛なるお馴染みさんのまま変わりません。彼が、子供の時からあなたの最良の友であるというのに。　ー

いや、いや、いや、この点、私は何も案じていません。しかしこちらに来て、この子を見てください、　ー　ほら、眠って可愛い口許に小さな手をベッドの中、置いています。どうか、どうか、フェルテンと名付けないでください。あなたの友は、それは善良で、賢く、気高い。しかしあの人は実は厳しい。あるいは、その人生が厳しいものとなっています。しかし私は我が子を、私どもの愛しい息子を、こちらの私どもの許に置いておきたいのです、私どもの通常の、習慣的な人生の中に。　ー　これをどのように言い、表現していいか、分かりませんが、しかし今は、私はこの哀れな赤ん坊をフェルテンとは呼べません。そして私が後々、老母になったとき、この子が家に戻って来て、今の私の愛しい老夫人、フォーゲルザング出身のあなた方のドクトル夫人のように、あなたの友フェルテンを目にするなんて勘弁してください」。

当然私の義兄のフェルディナントが私の長男を洗礼盤から取り上げた。　ー

そして今や私自身にとってまた、本来我らの故郷の町への最後の彼の滞在について、その町からの再度の最終的離郷の他、何も有意義なことを書けない、その事の次第を明確にしなければならない。「そんなものだ」と人々は言う。私自身もこの太古からの人間の経験の言葉に対し、対抗し得るものを何も手に有していない。

フェルテン・アンドレスと私の間でもそうであった。　ー　彼は私に対し余り言うことはなかった。私は彼に対し元来何も言うことはなかった。私の職務の仕事はこの夏まさに増大していて、その上家では子供が生まれた。この子供に対して、彼はある観点に立っていたが、この観点には私の妻が他の観点以上に嫌っていた。

「あの人が子供に何の関心も示さないのであれば、何も文句は言いません」と妻は完全に憤然として言った、「あなた方男の人には、そんなこと期待していません、たまたまその家の一員でない場合には。でもあの人が赤ん坊を取り上げ、赤ん坊の前や後を眺めて、鼻であしらい、嫌な笑い方をして、頭を振るときの流儀や作法、そのときの話し方や話しぶりは、これは私、　ー　私ども、　ー　少なくともフェルディーと私には我慢なりません。それに夫のあなた、あなたがよくこのことをしれっと聞き流すことも、理解出来ません。可哀想な赤ん坊。その上、その母親が聞いているところで、元いたところにいた方が良かったであろうに、阿呆な奴、馬鹿の見本と呼ぶのですから、これはいけません。私の兄のフェルディナントのとても詰まらない洒落の方が、このあなたのお友達よりもまだましです。この方の冗談は、残念至極だけど、とても辛辣な深刻な味がして、この人が気の毒で、私は全く気まずくなって、すぐにあの方の両手から私の赤ん坊を取り上げるのです。あの方自身が、有り難や、自らすぐにまた私に戻さない時には」。

自分の夫の友人であっても、自分の子供の揺り籠で、その友人を我慢出来ないとなると、家と家との付き合い上、重大な障害要素となる。私はただ唯一好意的土曜日の午後を思い

出すが、その日、我らの乳母車もフォーゲルザングの隣家の最後の生垣の中へ押し込まれて、私の妻はこう叫び声を上げることになった。

「まあ、神様、愛らしいこのレディーも年を召されて。私がこのフェルディナントをまた家に戻ったら、接吻するような具合に、このレディーもあなたの友フェルテンを両腕に抱いて、接吻なさっていたことでしょうね」。　ー

九月の半ば頃になっていた。二週間か三週間前から、我々はまた互いに住まいを訪問することがなくなっていて、散歩でも出会わずにいたが、或る温かい、静かな午後遅くに、突然、自分は一つの怠慢なことをしていて、フォーゲルザングで弁解の余地のないことだという思いに襲われた。この感情はとても痛切なものとなって、私は苛立って帽子を手に取り、こう呟いた。「彼奴の方が我々よりもっと暇だろうに」と。

私は彼の許へ行き、　ー　三十分後に私の妻にこう知らせる使者を送った。妻は夕方のお茶のとき、私を待つ必要はない、ひょっとしたら、少しばかり夜遅くになって、帰宅するかもしれない、と。胸に乳飲み子を抱えている妻に、まさにこの夜、帰宅を遅らせて驚かす何事があったのであろう。

昔からの狭いブナの木の通路を通って、この友は小さな家から我らの青春時代の最後の緑の生垣まで出て来た。彼がまた我らの許に「馴染んで」以来、またすべての世間に向けている顔の表情であった。このような顔は、仲の良い、あるいは最良の友に対してであっても、容易に別の顔に移れない。

「おや、これはまたご親切に」と彼は言った。私はドクトル夫人の開いた窓の方を見た。しかし夫人がいつものように好意的にそこから私に頷く姿が見えなかったので、普通人がそうするように尋ねた。

「母上はどうされた」。

「母も。君に会うと喜ぶだろう」。そして我々は握手をして、隣保夫人アンドレスの家に入った。「今一度会う、というのがより正確な言葉であろう、親愛なるお馴染みさんよ」とフェルテン・アンドレスは言った。そして同時に勿論私の腕を鉄製の手のように握って、私をしっかりと、びっくりさせたまま取り押さえていて、そしてその表情は、世間を一つの立派な冗談、　ー　あるいは劣等な冗談と見ている者、いずれにせよ単に一つの冗談と見ている者のようではなかった。...。

「母上は、　ー　君の母上は、　ー」。

「母は、一週間前から具合が良くない、しかし昨日から、...」。

「具合が良くなったのか。しかし、おい、このすべて何も聞いてないぞ。これは良くないぞ。分かっているだろう、困っているときは、...」。

「昔からの付き合いだからな。勿論だ。母の気兼ねだな。『親しい人々を煩わせてはいけません』と母は言って、いつものように陽気な母の人生で、正解を言う。古くからの下半身の痛みで、最近またぶり返したのだ。しかし実際今、快方に向かっている。ではこちらへ来て、自分で見てみろ。私は格別の友人達の間で、サン・フランシスコの中国人の間で、しばらくアティ・カムバング[Hans Hermann Behr,1818-1904の仮名]、ドイツ語で衛生顧問官殿として働いていたことがある。いや、母は快方に向かっている」。

私は自分の側の人間に対して覚えた不快の念、自責の念、怒りを抑えて、再びまた以前のフォーゲルザングの「医師宅」の踏み減らされた、馴染みの敷居を越えて行った。

外部から今この仲にどのような影が射し込もうと、どんな甲高い音色が侵入して来ようと、内部は何も変わっていなかった。万事、何年も前と同じ場所にあった。この友人の生徒用写字台が父親の書き物机の側にあった。彼の書架には、ラテン語やギリシア語の古典作家のすり切れた教科書版、ロビンソンから航海士ジギスムント・リュスティヒ[Frederick Marryat,1792-1848の小説]や革脚絆物語を経て、ドイツ古典作家の廉価のシラー版に至るまでのクリスマスや誕生日プレゼント文芸が収まっていた。家族写真の間や側に見られる壁には、普通そこに見られるものの他に、先のフェルテン・アンドレス[父]の甲虫や蝶採集の自家製ガラスケースがあった。私自身の家や居間、つまり私がこの夜、このことを私の文書から取り出して来て、改訂して、再度付加しているこの居間の内容物よりも、私にとっては今日もなお生気のある事物ばかりなのである。

私が夫人の声を耳にしていない数日の間に、何とこの大事な、馴染みのある声は変わってしまったことか。家族の居間の奥にある寝室からその声は聞こえて来た。

「フェルテン、　ー　後生です、...」。

「息子よ、まだいるの。列車は六時に出ます。起きなさい、フェルテン。六時に列車は出ます。列車は六時に出発よ、まだあなたは荷をまとめなければならないでしょう。起きなさい、息子よ。トランクが良く締まらないわ。あなたは起きなくちゃいけません。フェルテン、列車は六時に出ます。旅行バッグをまとめなくちゃならないでしょう、フェルテン。息子よ、六時に列車は出ます」。

「昨日から母の想像力と表現能力はこの点に限定されている。母はその立派な、快活な人生を静かに、座って過ごしたのだ。然るに母も落ち着かない思いにとらわれている。母の現在の状態と同じで、我々人間は、時々こうなって、自分のためか、それとも他人のために、旅用の荷物をまとめさせるか、自らまとめるわけだ。まさに丁度、旅が終わって、道を歩み終えた時にな。もっと間近に寄って、腰掛けてみろ、君の訪問で母が邪魔に思うことはない」。

「哀れな友よ」。

「そうだな、この愛しい姿も間もなく消える」。

「息子よ、息子。起きなければ、列車に遅れます。起きなさい、フェルテン、トランクに詰めなさい。列車は六時に出ます。旅行バッグをまとめなさい」と臨終の女性が枕元から聞こえた。付き添いの女性は、フォーゲルザング出身の、私とも昵懇の老いた女性、リークヘン・シュレンバウムであったが、こう言った。

「医師夫人は、ただ少しばかり落ち着きません。でも、幸い、苦痛や不安をもはや何も感じていません、フェルテンさん」。

「その通りだな、クルムハルト。母のすべての心配事は、母が私を間に合うようにベッドから起こして、私が自分の旅行バッグやトランクを詰めて、忘れ物が何もないようにして、列車に無事乗り遅れないようにすることなんだ」と息子は言って、母親を覗き込みながら、こっそりと優しく母親の手を取った。

「フェルテンよ、フェルテン、本当に列車に遅れます。起きて、トランクを詰めなさい。ほら、陽がもう昇って来た」。

こっそりと息子は母親の額を撫でて、私の方を向いた。

「この最後は、新しい言葉だ。他の言葉は、言ったように、昨日から一日半、繰り返し

ている」。

「晴れるけど、暑い一日になりましょう」と臨終の夫人は小声で嘆息して呟いた。それから夫人は静かになって、全く何も思わない、夢も見ない眠りに沈んだように見えたが、ただその呼吸は段々と難しいものになって行った。

「私が見た中で、最もひどいご臨終の一人が、老ハルトレーベンでした、フェルテンさん」とリークヘン・シェレンバウムは、慰めの言葉をかけようとするかのように言った、「あの人の体の上に、その臨終の日夜、シュルダー丘全体が、つまり所有している森がのしかかって来たのです。すべて伐採された材木が。そのすべてがあの人の上に転がって来ようとしたのです。いや、厳しい戦いでした。でも、アンドレスさんが全く正しく仰有っているように、そんな風に私どもは空想するのでしょう」。

「肺浮腫は多分夜になって、ようやく出現するだろう」とフェルテンは言った、「母の一日が終わる。素敵な、穏やかな、とりわけ暑すぎることのない一日であったことだろう。母の心配事はすべて私に関することだった。私が今になっても、時間に間に合うこと、これが今も最後の心配事だ。肉体上の心臓の麻痺が少しばかり早まろうと、遅くなろうと、今となっては意味はないだろう。母上、我が母上。親愛なる、老いた母上、唯一の本当の友よ、私が故郷に持参したのは、あなたの前でも喜劇を演ずることが出来、あなたの優しいこの世の夢を邪魔しないという我が演技でしかなかったのです。いや、いや、友のカルロスよ、私も言えるぞ、私はこの一年を通じて上手に我が役を演じた、と。母はこう確信して眠っていよう、私に母の心と同じ、豊かで、動じやすく、堅固で、勝利を確信した不屈の心を残した、と。...」。

「フェルテンよ」。

彼は、我らすべての近隣家庭にとって、「リークヘン・シェレンバウム」と呼ばれる老いた六十歳の付き添いの女性に向かって、黙って合図をした。それから彼は私の腕を取って、その寝室から私を連れ出し、私に葉巻を一本勧めた。彼は葉巻に点火して、我々はまた小さな庭の我らの青春時代の最後の緑の生垣に寄りかかった。私は我が両親の屋敷からの冷たい壁影の中、震えて、彼に何と言葉をかけていいか、分からなかった。それで私も、無意識のように、彼に向かってではなく、自分に対して、かの恐ろしい助言を語っていた。

感情を棄てろ。
動じやすい心は、
惨めな財産、
この揺れる大地の上では。

「奴[ゲーテ]はそのヴィルピウス[ゲーテの妻、旧姓、1808年ゲーテの母の死後、遺産の整理をした]をマイン河畔フランクフルトに送って、母親の家財を競売にかけさせた。しかしこの阿呆は、自らすでに長いこと家財を収集していて、収集を続け、それを相続人達に残し、そしてこの相続人達に面倒をかけた。ま、諸君は、そんなものだ、カール・クルムハルトよ。君も同様にまことに快適に、君の丈夫な四つの壁の中にいるが、しかしこの古い、消えてしまった古巣から、昔この左手にあった古巣から、幾多のものを新しい家に持ち運んで行った。いつか、子供達やその孫達に重荷となろうものだ」。

さて、彼は活気ある、埃っぽい、卑俗な郊外路地から向きを転じて、自分の両親の家の方を見たが、しかしそれ以上何も言わなかった。しかし私はしばしば、何度も、彼の視線と、萎えた左手での随伴する動作とを考えざるを得なかった。その度に、私の四つの大きな壁は、脅すように、不安げに私に迫って来た。私は不安な喘息病者のような気分になった。私には天井の飾りのスタッコも信用ならなかった。いや、私はその度に、自分の四つの柱[家]、それにそもそも地上の生活が、まことに不快に感じられた。

彼、友の言う通りであった。夕方遅く、瀕死の息となって、朝方四時頃、「この愛しい絵柄も消滅した」。誰が或る微笑、或る声の響き、或る額の傾き、或る手の動作、圧力、温かさを、　ー　文書に再現出来よう。

私が九時頃、フェルテンの所へ行くと、すでに彼は静かに埋葬のために必要な用意や書類の仕事に取り掛かっていた。私はこの友を、私の妻の依頼もあって、その空の家から一緒に我らの客間へ連れて行こうとした。しかし彼は望まなかった。微笑して、彼はこの切なる依頼、繰り返しの懇願を断った。

「私は有り難く思っている」と彼は言った、「嫁さんに赤ん坊がいなかったら、多分応ずることだろう。赤ん坊をモロクに犠牲にするカルタゴの母親みたいな気分に君の嫁さんをするわけに行かん。[火の神モロクに毎年一人の子供を犠牲にするカルタゴ人の慣習]。私に赤ん坊を抱かれたら、炎の偶像の両腕の中にいるような思いが嫁さんにはするのであろう。嫁さんは、この最近、健気な女性の流儀で、私のことを知り過ぎてしまった。多分私は一度、君らの揺り籠を覗き込んで、その赤ん坊の指を握る必要があろう。しかし、カールよ、友情と不信、好意と反撥の間でのこうした揺れを嫁さんに免除することにしよう。ちなみに隣で静かに眠っている老母も、私にとっては相変わらずまだ仲間であって、相談事をしたり、慰めとなっている。馴染みの友よ、我々は君達にとても感謝している。しかしここ数日の最後の会話は、ただ二人っきりで行うことにしたい。まだ二人は若干互いに話すべきことがあって、この時には、最も好意的な友達でも第三者だから、遠慮して貰いたいのだ」。

これに対しては何も言えなかった。しかし肩を竦める仕草も出来なかった。そこで私はこの友にただ葬儀の日に再会した。

我々はドクトル夫人アマーリエ・アンドレスに対しても、最後の見送りの礼を尽くした。

ー　今回はささやかな随行であったが、しかし墓の周りには、全く名誉正しい一団が見られた。フォーゲルザング出身の最長老や中年の人々（大方は貧しい身分の者達）で、その墓塚の下、現在眠っている近隣の人々すべてを生前知っていたのであった。大方は多かれ少なかれ内気に近寄って来て、フェルテンと私に対し、手を差し出して、こう言った。「ご母堂は愛らしい夫人でした。先に逝かれたのは父親殿、ドクトル先生でしたな、フェルテンさん。私ども老人はお二人をよく覚えています。今は神様の思し召しでご一緒です。余りにお力落としにならぬよう願い上げます。フェルテンさん、アンドレス殿」。

子供達は今ではもはや月光の夕べでもフォーゲルザングの墓地では遊ばない。高い堅牢な壁が墓地の周りに建てられ、重たい鉄製の格子門が墓地を閉めきって、厳密な墓地規則で墓参は定められている。そして、　ー

その門前にスフィンクスが横たわっていた。
恐怖と悦楽のふたなり[半陰陽]で、
体と前足は獅子の如く、
頭部と胸は女人に等しい。[ハイネ]

その朝　ー　その年の最初の秋の日は、霧が深く、灰色で、雨が降りそうであった。誰か読者がいたら、私はこの文書の束の最初の頁を読者に示すことが出来よう。やはりスフィンクスがフォーゲルザングの墓地にいるのであろうが、ただ、月光を浴びたロマンチックな実存の魔法の宮殿を前にしているのであって、人生そのものの前ではなく、「人生の家」つまりベト・ハイム[Beth-Chaim、プラハのユダヤ人墓地、『ライラックの花』参照]の前であった。

「あのユダヤ人[ハイネ]、あるいはセム族のギリシア人は、詩人としての自分の権利を正しく使用していると言える。彼が、我々他の散文家も同じだが、獅子の前足の謎メイタ美女を違う門[人生の家]の番人として、あるいは謎かけの女人として置いた時にはな」とフェルテンは言った。我々が教会墓地からの帰路、かの我らの子供遊びの夕べ、月光の夕べに言及したときのことであった。[ハイネはシェークスピアや自分を陽気な現実的ギリシア人と霊的キリスト教徒の総合と見ているらしい]。

それから私が彼を今一度、強要し、少なくともこれから我が家で客人として過ごしてくれと切に頼んだとき、彼は答えた。

「私は実際無用だな。余りに安易に人をその途次、その気もないのに他人を受け入れるものではない。君は偉大な光栄な[快適な]付き合いをしている。私はその邪魔をする気はない。しかし愛するお馴染みさんよ、君自身少しも私にとって支障ではない。だから君が私の許へ来れば良い。私だって、最良の社交、快適極まる談笑の世話が出来ると思うぞ」。

ー

従って彼は自分の小さな家に留まった。そして私が当然早速翌日また彼の許に訪れて、これから先の彼の計画について尋ねた時、彼は微笑して言った。

「それは確定している。君も、それにそのことに関心のある者皆、この点では安心しろ。まさに、この町ではないが、しかしまさにこの町で、未来をもっと確かなものにするこの上なく素晴らしい機会が得られるのだ。私はただ暖炉を熾す最初の日を待っている」。

「最初の暖炉の火か」。

「今年の冬ほど、私の人生にとって、私の出発のための冬として相応しい時はない。その通り、間もなく我々は暖炉に取り掛かるだろう、クルムハルトよ」。

いや、彼はその言葉とほぼ同じであった。レオミュールによる彼の父の温度計が、その両親の居間で十二度以下になると、彼は暖房を始めた。それもフォーゲルザング由来の自分の遺産で暖房した。彼は家具を燃やして暖を取った。

最初の暖房火入れの後、私の許ではなく、私の妻の許に来て、こう知らせたのは、リークヘン・シェレンバウムであった。

「亡き医師夫人の裁縫台で始めました。あの人がその台を中庭で二つに折って、その脚を燃やすよう、私に仰有ったとき、私はほとんど死にそうでした。引き出しや、その中にあったものすべてで、あの人は自ら更に暖を取っています。哀れな殿方、一度試補殿がい

らして、ご様子を伺われたらどうでしょう。今朝はあの人、亡き父親殿の書き物机を壁から取り外しましたよ。私がこの町まで来たのも、単に鋸を求めて来るようにとのことなのです」。

「カール、私のあの人への好意的対応はご承知でしょう」と私の妻は叫んだ、「私はあなたのために、あの人を好きになろうと、最善を尽くして来ました。でも、私の勘が間違っていたかしら。あなたは好きなように今仰有ればいい。私はこう言います。いやはや、一人の人間が、この人のように、あなたのお友達のように、なれるものかしら、と。あの人の両腕に代父として、あなたはあなたの子供を、私の哀れな息子を預けようとなさったのです。まあ、神様、一人の人間が、やれやれ、あなたのことではないけど、こんなに無慈悲になれるものかしら」。

「破天荒な人間だ」とそこにやって来たぼんやり君が高笑いして言った。「彼がかつてその人生の何らかの時、まともな時があったのか、分からない。しかし義弟殿、この新たな奇想を聞いては、彼を後見することが君の義務となるのではないか。君の家族は実際すでに何代か、アンドレス家を後見する義務を有しているのだろう」。

私はその日ずっと本当に、書斎から離れるわけに行かず、幾重にも幾重にも人間的嫌悪や、多くの人間的不安や、悲惨さを消化しなければならなかった。しかし私は彼を放念出来なかった。いや、人間界の添え物が一層多く私に押し寄せて来るにつれ、一層放念出来なかった。大方はまた単に所有の問題に過ぎず、それに私も解決の言葉を述べなければならず、引っ張り合い、吠え声、憤怒や嘲笑、これらが多かれ少なかれ、人間に生まれついている正義の仮面の下、花咲いていた。それからまた、私の静かな、快適な我が家、我が妻が胸に赤ん坊を抱いて、低い床几の上で小声で子守歌を歌っている暖炉の許から、フォーゲルザングの暖炉への別の移行があった。暖炉の前で、この奇妙な友人が寛いでいて、

ー　これは案件から寛いでいるのではなく、人間の魂の中で、案件に付随しているもの、魂を重苦しくしたり、安堵させたりするもの、要するに、我々が他人の人生において、幸運とか不運と呼ぶ習慣であるものから、寛いで[自由になって]いるのであった。

私は入室したとき、こうとしか言えなかった。

「フェルテン、君のところは不気味なほど温かい」。

「心地良いぞ。...ドイツ風に心地良い[情緒的 gemütlich]、だろう。これは君らの表現だ。この表現は世界で自分らのみであると自慢している。だから、クルムハルト、遠慮せず寛ぎ給え」。

「アンドレス、出来るだけ冷静に話し合おう、　ー」。

「私はミス・シェレンバウムを、今朝鋸を求めるよう町へ送り出した。勿論君達のところに来て、頭の上に両手を上げて、精神錯乱状態であったろう。我がカルロスよ、もう私のために禁治産宣言の書類を持参したのか」。

「我々は少なくとも平凡な日々の中で、君がここで始めたことについて承知しており、実際これは続いているように見える。しかし我々の日常生活とは言え、私と他の者達との区別を君は知っていよう。フェルテン、これはどういうことだ」。

「心を片付けるために、外部を片付けているのだ、最愛の友よ。動じやすい心、等々だ。

ー　偉大な教師達の最も賢明な格言といえども、一時的な気分のためにしかその格言を援用しなかったら、何の役に立とうか。巨匠自身がその格言を適用していないと指摘され

ても、何も変わらない。巨匠がその動じやすい心を八十年間ずっと引きずっていたとしても、それはその巨匠の問題であって、ひょっとしたら文学史の利点に、　ー　この文学史をもっと面白くするために、　ー　なったかも知れない。だからといって、他の者は、大地の重荷と自分とを結び付けている糸を切断してはならないのかね。いや、私はこの冬、実にしっかり築かれた大地[ゲーテ、詩『人類の限界』、揺れる大地の逆]での当地の所有物によって、フォーゲルザング産の我が愛用品によって暖を取るのだ」。彼は「愛用品」という言葉を日常語としては聞き慣れない具合に発音した。

いや、彼はこの奇妙な冬、すべて、他の人ならば、忍びがたく、他に仕様がなくて、時にただ目に涙を浮かべて別れることになるもので暖を取った。そして彼はこの件を極端に組織的に敢行して、その際私を観客、参加者にした。私は、「フェルテン、これもか」と叫んで、両手で介入し、この火刑を止めさせようと思っても、彼の冷静さで抑え込まれてしまうのであった。

私は日々この奇妙な破壊作業に、ますます関心を募らせ、これに抵抗して空しかった。私の妻に対して、このおぞましい、「無分別な人間」のことを更に弁護する試みをやがて私は放棄した。しかしやがて、私はただこっそりと家からフォーゲルザングへ忍んで行くことが必要となったであろう。

「カールよ、カール」と私の哀れな、善良な嫁は嘆いた、「カール、お願い、お願い、あの人のようにはならないで、お願い。いつも私どものこと、揺り籠の赤ん坊のこと、それにほんの少し私のことも考えて。あなたの友を放っておくつもりはなく、放っておくことは出来ないとしても。勿論あの人には、あなたのように家族はいません。でも私は昨夜も夢を見たのです、あなたも、赤ん坊を抱いた私を、　ー　つまり最近の写真を焼く夢を見たのです、　ー　あの人が自分の両親と、幼児の頃亡くなったその妹の写真を焼いたように。いや、お願い、私ども、フェルディーと私とを、むしろ今すぐに一緒に連れて行って、私どもを、フォーゲルザングのあなた方の暖炉に投げ入れたらいい」。

私自身がこのような心を狂わせる嘆きの声を無視してしまい、私の長男の連れ節の泣き声にも耳に栓をして、毎日昔の家跡地に向かうことになった魔力はどこから来ていたのか。この家跡地は今や破壊の地となっていたのである。

まことそれは、不動の、不惑の心のせいではなく、全くその反対の心のせいであった。

私にとって、フェルテン・アンドレスのこの火葬場ほどに、自分の「最良の年月」を不穏な現在の中に呼び戻す機会が一人の人間にとって恵まれたことは多分めったになかったことであろう。色々なことにかかわらず、我々が近隣のフォーゲルザングの中で、それでも一つの家族のように暮らして来たことを、私は今更の如く潤沢に経験することになって、かくて私の生活記録を極めて願わしい具合に完成させることが出来た。揺れる大地の上のこの遍歴者が自分の家財から暖炉や台所の竈に押し込んだもので、それに対し私にとっても一つの思い出が詰まっていないものは一片もなくて、それと共に燃え、灰になるのであった。地下室から屋根裏までこの小さな家で、昔の日々、私にとって何かが思い出されない釘は一本もなかったし、その日々、我々は人生の門の前で謎を出す女人[スフィンクス]について、まさにその頭部と胸に従って承知していたが、まだその獅子の前足に従っては承知していなかったのである。

それは類のない過去の日々の追想であり、再現であった。我々がこの家の屋根裏、物置

部屋の片付けに従事していたこの週のことを私は生涯忘れないだろう。我々が、と記したのは理由がないわけではない。「医師夫人」の家庭のガラクタの何と一切を我々は掻き回したことか。夫人は以前、夫と息子にとって大事であったもの、そして飽きたものを何一つ手放すことが出来ないでいた。夫人は二人の目からそれを遠ざけていて、自ら、いわば家庭博物館を造り上げていた。いかにこの息子は父親の杖[ツィーゲンハイン製]を手で量って、いかに彼は色々な古い外科用器具の入った箱から父の学生組合帽を取り出して、両手で回していたことか。私が屋根裏から取り出して来た揺り木馬を見て、私はいかにかのクリスマスの晩を思い出したことか。我々がそれに初めて乗って、フェルテンがこう言ったのであった。「私は願い事の紙に、車輪と本物の皮の付いた動物と書いたのだ。しかしそのことは何も言っていない」。彼はそれを当時すぐに私だけに譲った。それは彼の好みではなかった。しかし私は彼に尋ねたかったであろう。「これも暖炉か」、そして頼みたかったことであろう、「私の息子に譲ってくれ」と。

何故私がその質問も、その願望も述べず、自らそれを肩に担いで、階段の下の彼の台所の竈まで運んだのか、これについては心理学的哲学的論文が書けたことであろう。いや、

ー　彼は今では私も部下にしていて、私の所有欲心から言っても、彼の所有疲れに対して、何の反撥感もなかった。私は彼が自分の家を空にして、この世の所有から自由になる手伝いを彼に対して行った。　ー

人生でのこの憤然とした、休息の必要な、浮浪者と化した客人にとって、我々法学者の表現では、使用価値の張り付いているものすべてが燃やされたのではない。金属、グラス、陶器は燃えない。しかし彼は、これから先の途上で、誰が今、自分の父のインク壺にペンを浸し、自分の母の愛用カップから飲み、またアンドレス家で正確な一日の時間を知ろうとしたとき、当てにならないブロンズの時計が、しかしこの時計はそのはっきり鳴る鐘の音で、これまで立派に幾多の始まりの時、終わりの時を告げて来ていたのであるが、これが古物商に売られて、どの箪笥の上にあることになるのか、想像して悩みたくなかったのである。我々はこれも片付けた。破壊は建設よりも容易である。これは我が哀れな父が、当時同様に実践に移した、古くからの真実の言葉で、私は妻と子供の許に戻って来たとき、私の妻は真夜中や朝方に肘を付いて起きて、私の額を撫でて、叫んだものである。

「まあ、またも夜通しね。あの人はまだ終わらないの。私はもはやこれ以上我慢出来ません、あなたもそうでしょう」。

「騒ぐなよ、頼む、　ー」。

「こんな怪物があなたを私の両手の中で取り替えて、段々と別人にして行くとき、落ち着いておれますか。そうじゃなくって。あなたにとって、日毎に、人生で大事な幾多のことが、疎ましく、どうでも良くて、重荷になっていると、私が気付いていないと思っているのですか。また私の最良のカール、私ども、フェルディーと私とが、あなたにとってもいつか重荷になるのであれば、どうしましょう。あなたの恐ろしい友にとって、自分の家具、自分の家が、あなた方の不気味な恐ろしいフォーゲルザングで重荷になった具合に」。

この揺れる大地の上で、動じやすい心は惨めな財産であるのか、この心から自由になろうとする友人が正しいのか、この夜、次第に私の心の中ではまた若干疑わしくなった。

彼は世界史のパンテオンのために、ヘロストラートのように[紀元前356年、神殿に放火して有名になろうとした]振る舞っていると、当時の冬の終わり頃、ただ昔からの立派な洒落た知人達、我が義兄ぼんやり君やその仲間の類いは主張し、それを大いに笑った。彼について知っている町の住民の大多数は、彼は国の精神病院に入る資格があるという意見であった。しかしその気分は段々と彼に賛同するものの変わった。それはいつものように少数意見のお蔭であった。この少数意見は大抵ついでのように彼について述べるのであるが、しかし彼の方ではいつも彼らの頭に対して訴えているに違いないもので、彼らの言葉に、何人かの者や、大方が何か賛同するのである。「奇妙な奴だ。しかし状況によっては、本来羨望すべきもの、真似たいことだ」と私に一人の偉い上司が言った時、私は完全なる承諾ばかりでなく、羨望も混じっている弁であって、いずれにせよ、「テーベの砂漠をフォーゲルザングに移そうと思っているように見える」の弁には、この人間へのかなり長い思いやりのある関心が感じられた[エジプトのテーベには、三世紀初期キリスト教徒隠者が暮らしていた]。しかしこの最後の言葉は領邦首都の司法界からのものではなく、神学界からのものであって、この町の目下の人気説教家（独身）がそう語っていた。　ー

三月初頭、彼にとって、それにしばしば私にとっても、一つの思い出が張り付いていて、楽しみとしてであれ、有益なものとしてであれ、他の人々の手許とか所有に彼がしたくなかったものすべてが消された。壁の色褪せた絨毯では、より濃い染みは、絵の掛かっていた箇所を示していた。本棚や書架に関しては、そこの中でも、坊主や床屋、家政婦とか姪とかが部屋の清掃打ち上げをした後、こうした別の、より著名な空想家達の書斎の景色よりも寒々としたものに見えるということはなかった[『ドン・キホーテ』。前編、6章、騎士の本の弾劾処分参照]。後代の孫は、自らの四つの壁を見回して、何らかの具合に、自分にとって何か語りかけることを有し、親密で親愛なる形態、色合いを有しているものすべてを消去して、想像し、この後、打ち上げ片付けについて具体的に感想を述べるという面倒を、私に免除して欲しいものである。かつてこの地上で、自らの所有物が一度でも自分に対し真正な具合に不安の念を覚えさせたのであれば、頭を振る真正なやり方も習得することだろう。確実な所有物からの離脱や、一時的な快適さという軽い冗談も、これとはほとんど関係がない。しかし彼本人、フェルテン・アンドレスは、彼のフォーゲルザング悲劇の全員退場を、ギリシアや英国のお手本に従って、更にサチュロス劇を付加させて、このため今回はほとんど　ー　衛生局とではなくても、警察と悶着を起こしそうになった。

彼はフォーゲルザングの人々をクリスマス・ツリーのむしり取り略奪といった具合に家へ招待した。

彼は自分にとって何の意味もないものをすべて近隣のまだ在住のすべての善良な知人達に供して、それで当然ある人だかりを引き起こし、数時間路地の交通を完全に麻痺させた。

彼は私をこの最後の打ち上げのために招待していなかった。しかし私はやって来た。それも私の妻の腕を取って、オスターベルクを経由しての午後の散歩からであった。

「あなた、あなたの友の家前で何ごとかしら」。

妻は上の森で、最初のアネモネの花やスハマソウを見つめていて、摘んでいて、その春の花束を持って不安げに私に身を寄せて来た。

「ほら、あの人がしたのよ、人々があの人の家に押し寄せている。またあの人は何か、　ー　破廉恥なことを始めたのかしら、　ー　あなたの　ー　お友達よ」。

実際、危険な風に見えた。人間で一杯の庭を抜けて、玄関にまで達するのに、我々は難儀した。玄関のドアを彼は蝶番から外させて、それを肩に担いだ以前の隣人ハルトレーベンの老いた下僕が、人混みの中、屋外に運ぼうとしていた。さてしかし、彼がこの「最後の路地」へ、フォーゲルザングの垣根へ、彼が招待していたのは、全体善良な昔からの馴染みや友人達ばかりであると分かった。彼は、「よろしいか、皆さん、自分でまだ使えるガラクタがあるか見て頂きたい」と福音書の国王のように、民衆をその祝宴に招待していた。[マタイ、22,10：善人も悪人も皆集めて来たので、婚宴は客で一杯になった]。彼らはまた出来るだけ道を空けてくれて、帽子を取り、相手が私の身分に遠慮して、握手をしてくれないような場合には、自ら相手の手を取らなければならなかった。「いや、お久しぶり、楽しげな按配ですな」。

「まあ、試補殿の仰有る通りです。このようなことはフォーゲルザングで前代未聞です。このようなことは、全く唯一、我らの亡き医師夫人と我らのフェルテン殿、そのご子息に独自なものです」。...

勿論、単に貪欲に進行したばかりでなく、陽気でもあった。近所のティヴォリ庭園から、群衆となって、ウェイターやウェイトレスばかりでなく、丁度そこに居合わせた「寄席」のすべての芸人をも引き寄せていて、「その冗談の見物」に来ていた。この世で最強のレディーであるミス・アトレータ、現在の最大の驚異の的、火を吐く人間、シニョール・ヴォルカーノ、跳躍世界記録保持者のジョン・アーデン、国際的に新奇な女性歌手、ラルゼン三人姉妹、金管楽器ピストン奏者ミランダ譲、「発見された中間肢体[猿と人間の間、ピテカントロプス・エレクトゥス、直立歩行の類人猿]」と人類学で呼ばれている、旧世界と新世界での比類ない猿演技者のゲルマン・フェル殿で、彼らは皆、あたかもフェルテン・アンドレスによってその打ち上げに呼ばれたものの如く、昔からのフォーゲルザング出身の招待者と共に、医師夫人の「縁取り花壇」の周り最後のブナの木枠に踏み潰していて、新たに引っ越して来て、頭を振っている近隣住民や、呆気に取られている警察から、この件に対して、完全な了解を持参して来ている唯一の人々と見なされていた。

そしてフェルテンもこのことを承知しているように見え、彼らをとても歓迎して、名誉ある客人として扱っていた。この略奪の最中、彼は学問上長く、切に求められていて、ようやく発見された、犬歯剥き出しではない擬人と握手する時間を見つけ、またアテラータ嬢とも握手した。しかしこの際、彼は痛みを感じて、左脚を高く上げ、下唇に置かれた歯の間から空気を吹き出した。

我が名士の家育ちの娘、我が妻、ぼんやり君の妹は、この時、ここでほど途方もなくいかがわしい連中と一緒になったことはなかった。我々が今やドアもない家の玄関に近付くにつれ、オスターベルクのユキノハナの花束を持った愛らしい小さな手はますます不安げに私に寄って来た。

「まあ、あなた」と妻は囁いた。この友が、この友を笑いながら親しげに取り巻いているラルゼン姉妹、三人の国際的新奇な女性歌手達の中から、妻にも微笑して手を差し出したのである。

「これは、恵み深いご夫人、ご親切なことです。でもどうしてこんな遅くに」。

「恐ろしい人、あの人は、私もあのような人間嫌いのような、最後の片付けのお手伝いをすべきだと思っていらしたのかしら」と私の哀れな小柄な妻は帰路言った。そしてその

後も、それでも、彼のことが言及される度に、なおよく言っていた。その時は、差し当たり、妻はただどもってこう返事した。

「アンドレス様、偶々、オスターベルクを経由して参りました。そしてフォーゲルザングに寄ったのです」。

「まあ、よくお出でくださいました、試補夫人、恵み深い奥様」と我らの背後で、半ば涙で、半ば笑いで詰まった女性の喘ぎ声がした。一人の厳しい、働きづめの女性の拳が、現在の最大の脅威の的、火を吐く人間ヴォルカーノを道から退かせて、私の上腕を掴み、我らを、私の妻と私を、ドクトル夫人の玄関へ押しやって、それから、　ー　フォーゲルザング最良の夫人の息子を震える人差し指で示しながら、リークヘン・シェレンバウムが金切り声を上げた。

「いえ、カール、　ー　つまり試補殿聞いてください。町中に集まれと言えとのことです。いえ、あなた方は丁度のときにいらしてくださった。あの方に言ってください。これは罪だ、恥ずかしいことだ、と。こちらの試補夫人に、フェルテン殿、すでに数ヵ月前から、私の惨めな気持ちを夕方訴えて参りました。でも今日は、これ以上私は持ちません。ここで皆様の前で、私は自分が辛抱して来たこと、耐えて来たことを叫び、吐き出さなければなりません。私はもう精神病院にいるのかしら。それともこれから入るのかしら。いえ、神様、フェルテン殿、私を亡き母親様が一緒に静かな墓地に連れて行かれたら良かったと思っています。　ー　この冬、夫人の高価なものさえも私の前掛けに入れて、暖炉や台所の竈に運ばなければならないなんて、これより墓地に入っていた方が、一万倍ましだったことでしょう。親愛なる試補殿、可愛いカールヘン、私は貴方とも一緒であって、貴方を両腕に抱き、貴方の愛しいご両親の元に、良き日々、出入りを許されまして、そしてこんな邪悪なことにぶつかりました。あなたはこう証言してくださるでしょう、私はじっと我慢して来ていた、それであの人の足許に立派な愛しいものを投げ付け、前掛けを頭から投げ棄て、狂った女のようにこの人の家から逃げ出すことはなかったのだ、と。それでご覧なさい。私をここでティヴォリ庭園からの黒いムーア人の顔がにやりと笑っているでしょう。でしょう、試補殿。亡きシュプークマイヤーの柵草地からこちらの貴方の父親の地所で、若い子守娘としてあの人にも歩行を教えてさしあげたこともあるのに、あの人は、今やこうした人々をこちらに招いて、あの人がご自分の父親と母親の家を一戸の火災の家、盗賊の巣窟にするのを一緒に見ていなければならないなんて。あの萎えたブラントの女は、洗濯桶で自分の所有物として不浄にも運んで行きます、あの桶で私はあの人の泣きお母上のシャツを洗ったのです。私の目の前を、あたかも私一人は何者でもなくて、私の体に心はない扱いのようで、私の心は悲哀と毒素に当たって、潰れそうなのです。私一人がこの歓喜の中で、涙で窒息する運命のようです。宙返りのお嬢、そこを退いて頂戴。　ー　まあ、まことに神様、賤民の一味が　ー　私の、　ー　いや、亡き医師夫人のキッチン箪笥を引きずって行きます。私が今もその鍵をポケットに持っているのに、嘲笑うかのよう。誰が来ようと、この鍵は渡さない。いい気味だ。四十年間、これを取り扱っていて、すべて承知しているというのに、それは関係なしです。　ー　すべて犬どもにくれてやるかのようで、上等の歯を持っている者は、まず噛んでみろです。　ー　まあ、人間の屑ども。最後の審判の時のよう。そうだ、最後の審判の日だ、アンドレス殿、その時に貴方のお母上も目覚めて、貴方に仰有いましょう。これは実際、人間的に正常なことではありません、

異常です、と。そうでしょう、試補殿、そうでしょう、試補夫人」。

彼女は今や彼に対して、鼻と鼻とを突き合わせて、密に対峙していた。以前彼女が両腕に抱いたことのあるフォーゲルザングの寵児に対し、この寵児の母親の臨終の番をした彼女が、自分にこのような仕打ちをした者に対し、向かい合っていた。彼女の拳は震えて、ぴくついていて、殴りかかる寸前に見えた。

「残念ながらそうだね、リークヘン」とこの怪物は微笑した。「キッチン箪笥は賤民街からのシュタインバイス一家のものだ。しかしその鍵はそなたが有する。玄関のドアもすでに愛好家のものだ。しかしその鍵はまだ私が持っている。　ー　これが私がフォーゲルザングで所有する最後のものだ。そなたはこれを所望か」。

彼はその鍵を高く上げた。子供や犬に何か望みのものを見せる按配であった。私の妻はますます密に私にしがみついて、囁いた。「おぞましい」。しかしこのアンドレス家の古くからの忠実な召使いは、何か空中に消えたものを求めるかのように、まず両腕を大きく広げて、干涸らびた拳を突き出し、金切り声を上げた。

「勿論です。世の中の感謝と報酬の印として、父親殿と母親夫人の思い出のために、フェルテン殿。貴方のせいで、ご両親が墓場で慟哭されないことを願います。これが私の最後の願いです、さようなら、アンドレス殿」。

彼はその空の、あるいは空にされた父親の家の鍵を、今や毒素と胆汁のせいで震えている老嬢の手に渡した。この女性がこの世で彼の最初の歩行を手伝い、彼の母親の臨終の床で、母親を納棺のために抱いたのであった。シェレンバウム嬢はその鍵を取って、それを持って出た。それも傷ついた獣のような発声を伴っていて、フォーゲルザングの人は笑って彼女を見送り、ティヴォリ公園の寄席の一座も同様で、あたかも、「この冗談好きで、奇天烈な御仁」が今や最良の洒落を「気前よく」、おまけに提供したかのようであった。

「皆さん、自分が有する以上に与えるものは悪漢です」としかし、彼は今や、玄関に直立して叫んだ。そして祝典の客人達に好意的に、しかし断固と、庭の生垣の木戸を示した。そして彼の周りは、その家の中同様空になった。この家の中からは、勿論取り出せるものは、もはや何もなかった。フォーゲルザングの古くからの友の最後の遅刻者は、垂木や厚板、板を持っていて、完全な破壊を示しながら、我らの側を引っ張って行った。しかし彼らのうちの何人かはそれでも、内気に当惑していて、この件に呆気に取られたかのように、手を差し出して、こう言った、「アンドレスさん、まことに有り難う」。

寄席の一座も冗談を十分に堪能して、辞去した。皆が、類人猿を除いて、とても陽気であった。類人猿は、突然、自分に対しすべての学問により、ダーウィン[1809-1882]や、ヘッケル[1834-1919]、ヴィルヒオ[1821-1902]、ヴァルダイヤー[1836-1921、いずれも進化論者]等によって課されたその価値を断念したいかのように見えた。この芸術家は更に一瞬躊躇い、内気であった。あたかもまだ何か言いたくて、上手く表現出来ない様子であった。しかし突然、「動物という鈍重な枷」[シラー詩『芸術家』]が、観客としてのホモ・サピエンスを明るい歓声に弾かせそうな物真似、身振りの下、外れた。彼はいわば、この狒々やゴリラの中から抜け出して、しなやかな筋肉が強張り、そして　ー　「人類が曇りのない額に現れ出た」[シラー詩『芸術家』]。しかしこのゲルマン・フェル氏は、フェルテン・アンドレスにぎこちなく歩み寄って、彼に手を差し出して言った。このぎこちない様は、私の官房関係の様々な中年紳士の意見では、彼の株をとても上げるであろうものであった。

「貴殿、貴方は、ここ数ヵ月の間、時折私の許へもお見えになりました。それで、私が今日ここ貴方の許へお邪魔致しましたことをお許しください。かくも短い、漠たる関係の下では、　ー　もっと良い言葉があるかもしれませんが、　ー　私が貴方との交誼を求めるとしたら、適切ではないかもしれません。しかし私が時に、他の猿どもより若干ましであるからといって、貴方は私のことを軽蔑なさらないことでしょう。気の重い暇な徒然に、私はいずれにせよ、相変わらず、他の霊長目同様に、超越論的人類の研究と取り組んでいます。私は同様に、ヴィッテンベルク[大学、前出ハムレット風]で若干の学期、勉強しまして、それから類人猿に加わりました。貴殿、貴方の評判は、先の週の間、我々の許にも聞こえ、従って私の耳にも入りました。私はそれから時に、興味深く、小一時間一緒に貴方の暖炉の前に座ったものです。ほら、と私は自分に言いました、ここにもまた一人いる。自分の性分を脱却して、一皮剥けた男だ。他の者は単に自分の性分に腹を立てるばかりなのに、と。それでは、まことに良い晩を祈ります。今日の一日ばかりでなく」。

「いや、殿方」と今やフェルテン・アンドレスは叫んだ。彼はこの寄席からの不気味な隣人の話しを、ますます驚きを募らせて聞いていた。「どうか、より正確に本名を教えて頂ければ、光栄に存じますが、　ー」。

「殿方、すぐ間近の枝の者です。イグドラシル[世界樹]の間近の枝の者です。それによじ登るには、必ずしも一種類とは限りません。我らの身上調書に関しましては、互いに伏すのがよろしいでしょう。市民階級の固い大地の上に、どちらもまた相棒を下に下ろす手伝いは出来ないでしょう。しかし少なくとも我々は枝から枝に握手致しましょう。殿方、貴方に感謝申し上げます」。

彼が何に対し感謝したのか、彼は更に言わなかった。私の妻はそれが分からずにいたが、しかし私は妻にそのことを強いて分からせようとはしなかった。奇妙なことに私の友フェルテンもその手を機械的な具合に差し出して、この件を元来正確には理解していない風であった。ゲルマン・フェル氏は握手して、その手を放ち、世界樹へのこの近しい無謀な登手の当惑した顔を全くメランコリックなチンパンジーの真面目な表情で見つめ、いわば全くまた、人生を征服するその技の中に滑って行き、背中を丸めて、出来る限り四本手猿となって、寄席の一同に従って行った。この一同は、冬の半ば、私の父の地所の背後、ティヴォリ庭園の、「シュプークマイヤーの柵の浄福の草地」で、私の青春の友にとって、この町と郊外での最も理解の深い隣人であったわけである。

さて、この荒れた幼年時代の牧歌が我々だけのものとなった。私の妻はこっそりと私に近寄った。しかし出来るだけ早くこの空漠たる空虚の地を去り、私を連れて行きたいという願いを囁く勇気さえ妻にはない状態であった。しかし、私はまだ別れられなかった。私は、かくも憤然と攻撃され、防御されて来た哀れな友を、そのドアのない玄関に一人きり、残しておけなかった。私はゲルマン・フェル氏の後、フォーゲルザングからの我らの最後の別れについて述べなければならなかった。その調子は多かれ少なかれ作為的なものになったが、私は友の肩を笑って叩いた。

「上を見な、古参の戯けた兄貴。動じやすい心は、この揺れる大地では、惨めな財産だ。この言葉の完全な同意書[副署]を君は丁度奇妙な具合に貰った。君らの同類は今でも存在していて、単に昔、テーベの砂漠や、オリンピアへの街道にのみ[富を棄て、息を止めて亡くなったとされるディオゲネスのこと]存在していたわけではないと新聞で読むことになっても、

この周りの人々は新聞を信じないことだろう。君は君の意志を持っていて、貫いた。そこで、我らにも好意を示して、少なくとも故郷での最後の日々と晩、我らの家へ来たらどうだ」。

我々は今や、彼の両親の居間に立っていた。彼はここで徹底的に自分の最良の所有物を処分していた。所有に飽きた男、自由な世界遍歴者であった。彼は目を上げて、周りを見た。額に打撃を受けて、自己意識をようやくまた取り戻している者のようであった。私は心底、彼が気の毒に思えた。彼の救いようはなかった。彼は自分の荒れた父の家から、イグドラシル[世界樹、北方神話]の枝の隣人を自分と一緒に遙かな自分の行路、生涯ずっと引きずって行かなければならない。私と私の震えていて、その不安と涙とを飲み込んでいる妻とを、彼はきっとその家での最後の晩の思い出から消したかもしれない。しかし、ゲルマン・フェル氏を消したはずはない。この氏は残っていることだろう。　ー

「私は今日、この近くの上演を今一度見ていたい。この混雑の中、肘を脇腹に当てられると、自分に相応しい同類が分かることになる。だろう、カール。ティヴォリ庭園の類人猿を友人、客人、客人の友として、貴女の許に連れて行くことは許されないことでしょう、恵む深いご夫人。だから、諸君、我々は出来るだけ、このうようよいる世界では、我らの実存によって気兼ねすることのないようにしよう。勿論、仕事上の件で、私もホテル・ドイツ宮廷から、君を煩わせることになろう、親愛なるカルロス」。

私は私の妻の腕がますます私の胸元で強く震えるのを感じた。妻はその熱い手に、相変わらず、最初の春の花の花束を持っていた。しかしそれが彼女の手から落ち、壊れた食器の破片や絨毯の細片、家具の無価値になった瓦礫の中、汚れて踏みしだかれた床に落ちた。

「一緒に家へ帰りましょう」と妻は囁いた。「私はもはやこれ以上我慢出来ません。家には、哀れな小さな、可愛い子供が待っています。行きましょう。子供の許に戻らなくては。　ー　あの人にあなたが誑かされても、子供は奪われません。私はこの地で、私の所有物を守ります。あなたは、お望みでしたら、残ればいい。私は家に帰ります。子供の許に。いえ、残って、残って、あの人と、あの人の別のお友達、奇怪な類人猿と一緒に、私どもの哀れな愛しい人生から、あなたも出来るだけ高みに登ればいい。私は子供の許に、この世の私の所有物の許に戻ります」。

妻は走り去った。目の前に腕と肘を当て、自ら、打撃を恐れている子供のようであった。

「お休み、フェルテン」。

「お休み、クルムハルト、...」。

私は私のアンナにようやく二番目の通りの角まで来たとき、追い付いた。私が私の所有物をまた身近に引き寄せようとすると、これ[妻]は幾つかの路地の間、拒んだ。ほとんど意地悪な視線で、この小柄な妻は、私の腕を取る代わりに、フォーゲルザングを振り返って示した。

「私は管区総監督殿に誓いました。良い時も、悪い時も、あなたに付いて行きます、と。私は自分自身に誓っています。カール、あなたがいるところ、向かうところ、立っているところにのみ従って留まります、と。でも　ー　あなたは十頭の馬をもってしても私をあちらへ連れて行くことはできません。私はあちらへは生涯二度と足を運びません。まあ、神様、この美しい世界をあなたの同類は何という風になさることでしょう」。　ー

私はこの友に生涯二度と会わなかった。彼は翌日私の許に来ず、私は夕方、ホテル・ド

イツ宮廷に彼のことを問い合わせたとき、彼がその勘定を支払ったことを知ったのみで、彼がまだこの町に滞在しているか、分からなかった。

ロンドンから彼は私と文書にて、我らのリークヘン・シェレンバウム、彼女に「唯一の記念」として渡されている家の鍵に対し、その「新たな宅地」、新しいフォーゲルザングの最良の宅地の一つである箇所も属する旨、正式に公的に明記すると取り決めた。

私はこの古いフォーゲルザングの年代記、歴史を編集し、執筆することをかなりの期間休まなければならなかった。私がこの最後の頁を文書に入れたとき、まだ雪が降っていた。そしてまた緑色の微光がオスターベルクの上に見られ、私の子供らは手に一杯、自分の母親がフェルテン・アンドレスの荒れて、空になった屋敷で手から落としていたのと同じあの春の花々を家に持って来た。

我々は家で多くの心配事があった。長男、かつてフェルテンが洗礼盤から取り上げようとしなかったこの長男がチフスで亡くなるのではないかと、我々は恐れた。しかしこの息子は命を取り留めて、再び元気に歩き出し、私はこの長男の家の記録のために新たに筆を取った。我々は今、人生の新年の三月にあって、私に昨年の十一月ベルリンからムンゴー夫人によってベルリンから送られて来た手紙を私はまた手にしている。

「フェルテンは最期に今一度、あなた[あんた]によろしくとのことでした。彼は今や亡くなって、私ども両人は本望を遂げました。彼は最期まで一人っきり、ただ自分一人きりでした。この世に所有物もなく、...」

私は彼女に、　ー　ここからヘレーネ・トロッツェンドルフ宛、手にペンを持ってこう言えたらいいのだが。

「それでこれから先を書いて頂きたい、この文書記録を終えて頂きたい」と。　ー

私はこの長い年月、ほとんどこの友についてほとんど何も耳にしなかった。

彼の場合、その家が破壊された後、この表現がまだ使えるとしても、家にまた戻って来ることはなかった。それに私宛に手紙もなかった。しかし私はこの小さな領邦国家での私の立場上、ベルリンへ行くことがあって、デボー家とは若干の絆が残っていた。レオン・デボー、　ー　商務顧問デボーは、夙にこの帝国首都での最も重要な銀行家、資本家の一人であったが、「我らの大学時代」からの古き良き関係をまだ保持していた。ドロテーエン通りでの父親の商売はもはや存在せず、(仕立屋からは多分商務顧問の肩書きへは到達しないのであろうか)、レオン自身決してそのことに言及せず、それに話題が及ぶと、話題をよく他のことに転じていた。私も今では彼の仕事部屋とは何も関係ないので、私が彼と付き合うのは単に、上品な郊外にある彼の邸宅での家庭や社交の場に過ぎない。彼も結婚していて、立派な、彼に似合いの妻を得ている。二人の子供、一人の息子と一人の娘の父親である。息子はフリードリヒ、娘はヴィクトリアと呼ばれる。ラングドックのデボー家の伝統的古代フランス人の家系の洗礼名は、単に子供達の洗礼証書に記載されているのみである。現在のデボー夫人は、もはやドロテーエン通りの一族の不思議な片隅については何も知らない。そこの片隅で、レオニー、そしてレオン・デボーが、彼らの、彼らの父の、そして彼らの父祖の所有物を伝来のもの、新たに稼いだものとして確保し、その上に自らの人生の誇りを築き上げたのであった。彼女、ヴェーラ・デボー夫人は、先の、某劇

場の二番人気の女優で、善良なレオンと的確に歩調を合わせることが出来たのであった。彼女は有能なベルリンの主婦で、同時に高貴な女性で、自分の夫の対面を良く守る術を心得ていた。しかしアルビ派[カタリ派]とかシモン・ド・モンフォール[1164-1218、第5代レスター伯、南仏アルビ派への十字軍]、レーモン・トゥールーズ[1156-1222、親アルビ派、破門される]、ピエール・ド・カステルノー[教皇特使、1208年暗殺され、アルビ派への十字軍を誘発]について彼女は何も知らず、サン・バルテルミの虐殺[1572年8月24日]については単にマイヤーベーア[1791-1864]の『ユグノー教徒』[オペラ、1836]からのみ知っていて、そしてナントの勅令については、...

「これに対しては私は本来、言いようもなく天に感謝しなければなりませんね」と彼女はあるとき笑いながらお茶の席で私に言った。「これがなければ、おそらくレオンと私とはこの世で出会っていなかったことでしょう、上級参事官殿」。

この愛らしい、無邪気な、好意的カップルの両子供、フリッツとヴィッキーは単に、セダン、グラヴロット[1870年、普仏戦争]、パリの三回目の占領[1871年3月1日]、それにヴィルヘルム皇帝、その「忠臣達」、レオニー伯母さんの忠臣達について知っているに過ぎない。それ以上は知らない。彼らはまさに、セダン、メッツ、パリの三回目の占領の後かなり経って、ドイツの世の中に生を享けており、父親の側の彼らの先祖の所有物は、彼らにとってほとんど大した意義を持っていなかった。ドロテーエン通りでまだ敬虔に集積されていたものは、デボー家の現今の邸宅では、小部屋の中で、ただあちらこちらの飾りとして見られ、商務顧問官夫人のサロンでは、最初のブランデンブルク参入の先祖、アントワーヌ・デボー、昔、偉大な選帝侯と握手した人物が、壁の明暗法の肖像として、真面目に、しかしまた悠然と日々の外光派景色を覗いていた。この絵は美術価値がある。これからなおこの絵はいかほどの壁から見知らぬ人々を見下ろすことであろう。

それでレオニーは、レオニー・デボーはどうしたのか。

レオニーについて、その弟の子供達は単にこう言うのみであった。彼女はとても善良で、でもただ一度だけ、比較的長期に自分達の許、自分達の父母の許にライン地方からやって来ました。家では誰も、その他誰も病気で寝ていたわけではなかったけれども、と。

レオニー・デボーはフェルテン・アンドレス同様に、この世での自分の所有物を処分していた。彼女はカイザースヴェールトの奉仕女[ディアコニッセ]になっていて、今はドイツ・ロレーヌ[ロートリンゲン]の「作業所」で主に仕えていた。私はやはり彼女の文体でペンを執ることは出来ないので、このことを文書に収めておき、更にフェルテン・アンドレスと　ー　ヘレーネ・トロッツェンドルフの件を書き進めることにする。　ーーー

私はまたこのフォーゲルザング年代記の冒頭の頁に来ている。

「あなたは皆の第一の良き昔からの友としてベルリンへ行く必要があり、その気なのでしょう」と私の妻はかの十一月の晩に尋ねていた。そして、「明日、私の都合がつけば」と私は妻に返事していた。それから二人、妻のアンナと私は、我らの若い民[子供]の許へ行って、少なくともまだこの地上で皆無事であると確認した。翌日の昼、私はベルリンに着いた。領邦国家での私の地位のため、私は少なくとも数日間の必要な休暇を自らに用意することが出来た。

「御老体、風邪を引かないでね」と私の妻は言った、「リューマチのことを忘れないで。それに少しばかり自分の年齢のこと、それに十一月ということを忘れないで」。

私は特急列車の中で、勿論色々なことを考えた。少なからず、数えれば四十八歳になる年月を考えた。私が今一度、一人の従者が開ける私のドアのことや、快適なセントラル暖房、将来の職務上の展望、閣下と呼ばれる肩書きについて、いや、今一度妻や子供達について話すことになれば、これは既に話したことの反復になることであろう。或る不快なレストランで昼食を摂りながら、私はこれから先の案内を任せるために、まず商務顧問官のデボーをその邸宅に訪ねた方がいいか、それともホテル・カイザーホーフのムンゴー夫人に自分の到着を告げる方がいいか、考えた。午後の三時と四時の間、私は一人でドロテーエン通りの家の前に立っていた。昔のユグノーの一家が最終的にその生活の記念品を集積していた家で、フェルテン・アンドレスが無所有となって、自分の道を終えたところである。私は自分の学生時代以来、町のこの一帯へ再び来たことはなかった。路地に面するこの家では、ただ番地のみが同じであった。デボーの父親は町の上流一万人に対してメジャーを用いていず、蹄鉄工はもはやドロテーエン通りで、彼らの馬の蹄鉄を打っていなかった。路地に面する装飾は、私が思い出す限り、完全に変わっていた。十九世紀の八十年代後半の建築様式を見上げながら、私は、家の私の書き物机にあるヘレーネ・トロッツェンドルフの手紙や、私やフォーゲルザングの文書の束を胸に、ただ自らにこう尋ねるのみであった。

「フェンシング教師夫人フォイヒト、間違いではないだろうな」。

私は自分の職業上の経験と、主に故郷での上級検事の職員として働いた二年間に、様々な土地で目的を達成する術を学んでいた。ここでは私は単に新しい建物を歩いて行くだけで、珍しくもこの最新のベルリンで、最古とは言えなくても、かなり古くからのものを完全に元の場所に見いだすことが出来た。蹄鉄工の広大な、騒がしい作業場は、建て増しされていて、噴水のような、明かりのない明かりの間を除いて、消滅していた。しかしフェンシング教師夫人フォイヒトとその帝国に、時は何も手出しが出来ないでいた。この両者は、つまり偉大なデボー商会の奥の建物とフェンシング教師夫人フォイヒト、これは何年も前と変わらないということが分かった。この両者は全く変わっていないか、あるいは単に全くそれと知らずに変わったかであり、一方は燻されて黒く、今や百二十年経ち、もう一方は、白髪で、優美で、まさにメルヘンの女性で、首の上にほぼ九十年が刻まれている。

低い谷よ、隆起せよ、
高い山よ、沈下せよ。
邪魔だ、邪魔、
最愛の人が見えない。

この薄暗い、急な階段、老いた夫人の許へ通ずるこの途上で、我々にこの歌を表の建物の上品なサロンで度々歌って聞かせていた甘美な声が、突然また私の心の中で浮かんで来たのは、一体どうしてであろう。我々はそこのブロセリアンド[伝説による]の魔法の森に集まって座り、そしてベルリンの仕立屋工房の上で、すべてのロマン主義の不思議に囲まれて、プロヴァンスの吟遊詩人や古代フランスの年代記、ユグノーの論難書や賛美歌本をめくっていたのは、元来わずか数年前のことでしかなかった。しかし今や、私にはこの音色、この詩行しか残っていないように思えた。その上、奇妙に、慄然とすることに、ある

後年の冬の夜が記憶に蘇り、そして別の詩行が、フランス語の民謡ではなく、ドイツの古典作家のものが浮かんで来た。フォーゲルザングの静かな、大地での自らの所有物が空になって行く父の家で、フェルテン・アンドレスは、自分の破壊と解放の作業中、我知らず呟いていたのである。

感情を棄てろ。
動じやすい心は、
惨めな財産、
この揺れる大地の上では。

ドロテーエン通り、零番地、　ー　奥の建物、　ー　フェンシング教師夫人フォイヒトの許、　ー　学生ヴァレンティーン・アンドレス。私は四階で丁度眠りから目覚める者のように、鐘を引いて、また昔の響きを思い出していた。

「私ども二人がもう一度人生で出会うためには、このようなことが必要なのでしょう、クルムハルトさん」とそれから全く同じ声が言った。何年も前、私をしばしば好意的に出迎え、時々全く母親らしくたしなめたり、叱ったりした声である。「彼の部屋へ向かわれる前に、まずちょっと私の許へお入りください、上級参事官殿。多分彼女の方はこちらベルリンへ貴方がこんなに早くいらっしゃるとは思っていないでしょう。でも私の許へは早すぎるということはありません。私の年になると何でも気楽に考えられます。でもこの件は私一人では重すぎるものです。朝からまた彼女は彼のベッドに座っていて、膝に肘を突き立てて、両手で頭を抱えています」。

「彼女とは。彼のところで一人っきりですか。ヘレーネのことですか。ヘレーネ・トロッツェンドルフ」。

老夫人はその萎びた、老いて固く、涼しい手で、私の熱い手を握った。

「どうぞお入りください。彼女の許へ行くまで、時間がありましょう。彼女はもはや時間、時刻に関心がなさそうに見えます。しかし彼女が、貴方がいらっしゃると私に告げてから、私はその期待で、一分が一年に思えていました。だって、私の思いの丈を吐き出すには、誰を相手に出来ましょうや。貴方のような方に話す以外、誰がいましょう。最初からこの話しと関係している貴方のような方以外、誰が理解してくれましょう」。

太陽はこの季節、四時半頃に沈む。この町の広い通りや、大きな広場には、まだ日の光の中にあった。フェンシング教師夫人フォイヒトの部屋は、奇妙なことにまだ明るくて、十一月の午後の窓の前の一片の天空は、晴れた夏の朝のように明るい青色で、雲一つなかった。私が初めて、この四つの壁の間に立って、周囲を、まず住人の夫人を、それから壁を不思議そうに眺めてから、およそ二十五年経っていた。さて、また私は同じように立っていた。　ー　長年の間に、私の周辺で元の場所に残っているものは、何もなくなっていたのに、ここでは何も変わっていない。この小柄な、灰色髪の妖精の額の上を時間がその穏やかな手で撫でていたのであるが、この時間も、この周囲でその場から動かしたものは何もなかった。何一つ片隅に投じず、何一つオークションの槌の下に運び入れず、何一つ、ー　ストーブに投げ入れなかった。我ら皆の中で、フェンシング教師夫人フォイヒトのみが、その所有物をまだ完全に保有していた。そして今や彼女は昔と同じように、両手に

編み物道具を、腋には糸玉を持って立ち、そして突然、周囲の勝利の剣や、過去の栄光の決闘学ランの無数のシルエットを示して、嘆息した。

「何故、あなた方の中で、最後の男として私のすべての心を傾注した男が、私の心をかくも苦しめなければならなかったのでしょう。お掛けください、上級参事官殿」。

そしてまた夫人は私に向かい合って座った。窓辺で、フォーゲルザングの医師夫人が、籐椅子に、編み物道具を持って座っている按配であったが、しかしこの度は、膝に撚り糸と糸玉を持っていて、言った。

「彼は向こうで、　ー　今ムンゴー夫人のいる部屋の壁に、自分について一つの詩を書いています。後で読んでください。でも今私は、彼と体験したことを、自分の魂から切り離さなければなりません。　ー　私、この老いた、老いた女が、この子供、若い人間であるこの子供と体験したことです」。

彼女はその年齢故に、そのようにフェルテン・アンドレスについて、また我々他の者達について子供として話す資格があったであろう。そして実際、彼女は黄昏時メルヘンを語る祖母のように話して、私はただ座って、聞くのみであった。

「上級参事官殿、突然見知らぬ老いた人間が、貴方の前に立って、こう尋ねられたら、どのような思いがするか、お考えください。つまり『フェンシング教師夫人、相変わらず、愚かな若者の賄いと住まいの面倒を見ておられますか』、そしてこう言われた場合です、『私はかくかく、しかじかの者で』、そしてただこう返事するしかない場合です、『そうです、じゃ、あなた、お入りなさい』と」。

彼女は勿論この質問への返事を待っていず、私の膝に手を置いて、続けた。

「私はその日を生涯忘れません。先の六月十五日、午後でした。丁度この時刻に、私の呼び鈴が鳴って、どなた様でしょうと私が尋ねると、訪問者は、『私は哲学の学生、フェルテン・アンドレスです。フェンシング教師夫人ご存じでしょう、貴女の部屋広告がまだ吊されていて、私の昔の部屋が偶々空いています。今一度お借りしたいのです』。　ー　上級参事官殿、幽霊が明るい日中に肩を叩いて、名前を墓場からのように告げられたら、貴方でも私ほど甲高くは叫べないでしょう。『何のつもりです。誰だと仰有っています』。優に三十分ほどかかって、私は彼のことが分かりました。私の最低の男、最高の男です。そして私は今一度、親愛なる神様の仕業に驚きました。私がこうしたことを、まだ生きる力が残っていて、分別を失っていない時に、体験するよう、神様の計らいがあったのです。勿論時間がかかりましたが、段々とこの現在の幽霊が以前の私の昔からの愛しい息子であると分かり、彼のことが信じられるようになりました。彼、私のフェルテンが、幽霊のように見えたというのではありません。違います。全く品良くて、灰色髪で、ただ骨の上に少しばかり皮膚が厚くなりすぎていて、肉が少なくなりすぎていました。そして疲れているのです、上級参事官殿。疲れて、疲れているのです。生まれた時から立ちっぱなしであった者のようなのです。若い身空で、その路上で死ぬほど疲れているのです。勿論私はソファーに座らせました。すると彼は座って、何も言いません。しかし笑います。これです。あなた、この高笑いで、私の最後の疑念は消えなければならなかったのです。『こんなことは考えられません。でも貴方の部屋は空いています、フェルテン』と私は言いました。『貴方の荷を取りに人を送りましょうか、それとも自分で持って来ますか。　ー　どこからなのか存じませんが』。　ー　『いや、それは私も知らない』と彼はまた私に笑いかけ

て、テーブル越しにその札入れを私に渡しました。『警察用の私の証明書類と慣例の前払いの部屋代です。この些少を収めてください。私は今日早く寝ます』。　ー　『洗濯物は、本は』。　ー　『何もありません』。　ー　『まあ、神様、それでは貴方はフェンシング教師夫人フォイヒトの許に戻って来たの』。　ー　『そうです』と彼はただ言って、テーブル越しに私に手を差し出しました。私はこの手は少しばかり熱があると感じました。でも私の手はそれだけ一層冷たく思われて、それでしっかりと握って、叫びました。『そのような具合なのであれば、勿論私の許にいなさい。確かに私にとっては日暮れに当たります。でもまだ大丈夫でしょう。神様の御加護があれば、あなたに食事の世話をし、繕いものをしますよ』。いや、いや、上級参事官殿、その時にはこの人のことを『あんた』と呼びましたよ、あたかも腕に抱いている一人の子供に言うように。これがそうではないと、当時まだ私には分からなかった。でも、向こうであの女性が彼のベッドに座っています。クルムハルトさん、貴方をここに長く引き留めておけません。多分貴方は私よりももっと必要とされていましょう。それで手短に申しますと、彼は最後の半年を私の許で過ごし、私の許で亡くなりました。私には苦労もかけなかったし、費用もかからなかった。でも（そしてこの時、ほとんど九十歳の女性の目は、戦場を見渡す老いた将軍の目のように輝いた）、彼は私に今度もまた喜びをもたらしました。彼はだって、あなた方皆の中で、最も戯けた人であり、最も勇敢な人でしたから。彼の神経が繊細過ぎて、そんな風に人生を過ごさざるを得ず、皆にとっての道化師として、あるいは精神病院で没しようと思ったわけではなくても、結局お仕舞いにならざるを得なかったのは、残念なことです。

「動じやすい心は、
　惨めな財産、
　この揺れる大地の上では」。

と私は呟いた。この明晰な白髪の女性の静かな言葉に深く内奥まで震撼させられていた。

「向こうの壁に木炭で彼が書いたものは、それです。今やムンゴー夫人がその前に座っていて、頭を両手で抱えています、哀れな女。あなた方のフェルテンが無所有でこの地上から去ったのは、自分の責任であるかのように。私がこの愛しい女性にこう話しかけて、何の甲斐がありましょう。『あなたね、どうしようもないことです。このような利己主義の男も、この世には、あなた方の許に、単に珍しさのためであろうとも、いなくてはならなかったのです。我が愛しいレオニーのようには、この人は修道院に入ることは出来なかった。この人は多分同情を有していたでしょうが、しかしこの人の中には慈悲深い修道士は潜んでいなかった。いや、フェンシング教師夫人フォイヒトの許で、この二人が初めて再会した時のことと言ったら。ライン河畔の奉仕女[ディアコニッセ]の家からの慈悲深い修道女と、世界のあらゆる通りに詳しい浮浪者が、両人とも所有物を有せずにこの地球上で会ったのです」。

「レオニー・デボーとフェルテン・アンドレスですか」と私はどもった。

「そうです、この両人です。まだ表の建物が残っていて、私ども皆が、私でさえも、まだ若かった時代をまだ覚えているでしょう。それは九月のことでした。彼は私の許で完全に準備をしていました。つまり私が彼のために一切手配しました。私の財布からではあり

ません。彼はその札入れにあらゆる種類の国々からの紙幣を十分に持っていて、それで私はただ半ダースほどのシャツばかりでなく、その他一切も用意することが出来ました。ー　彼の現在の奇妙な生活ぶりでも、まだ数年は持つものです。貸し文庫にも彼のために私は予約する必要がありました。彼はもはや外出しないのです。　ー　いつも左足が痛むと弁解なさっていて、昔からの学生用ソファーや、ベッドに横になって、日がな一日、あるいは時に夜通し、読書していました。すべて、昔、青少年時に気に入っていたもので、いつもずっと昔からの古い、汚い、汚れて千切れた本でした。私が新しい刷り本を持って行くと、彼はそのまま放っておいて、言います。『フォイヒトおっかさん、これはまともなものではない』と。　ー　いや、いや、これについては、何か思うことが生じましょうが、いや、実際、あの人の気まぐれやむら気には付き合わざるを得ません。そうですね、上級参事官殿、今では本当に私の誇り、喜びなのです、このようなもの、つまり気まぐれ、むら気を持っているあの人が、ただ私の許に宿を求めたということが。いや、勿論あの人は、神様の御加護で、私がお世話した学生達の中で、ただお一人だけ、私に対して年長者格の方というわけではありません。でも貴方はただ通りを覗いてご覧になればいいのです。私ども女一人が、青春の弱さを乗り越えて来ていたら、主から私どもに預けられたぐらぐら頭や虚弱な脚に、リンデン通りの角や、フリードリヒ通りの角であろうと、群衆を縫って進む道を教えられるものなのです。あなたの愛するご夫人を、存じ上げませんが、馬鹿になさらないことです、クルムハルトさん、貴方が夫人を今立派に操縦なさっているのであれば、夫人は貴方に対しても更に同じことをなさるでしょう」。

秋の太陽の最後の輝きは夙に、我が窓前の一片の天空から去っていた。速やかに黄昏となった。私はここで記録を手短にしたかったことであろう。しかし今ここで文書に語るべき者がいるとしたら、それはフェンシング教師夫人フォイヒトであって、私は自ら余計な意見を述べて、彼女の話しを中断させるようなことをしなかった。彼女自身言葉を続けた。

「上級参事官殿、すぐに本題に入りますが、しかし私ども女の心はこのような件ではやはり一杯になります」。

私は、彼女が目を拭った後、ただ両の、愛らしい、勇敢な骨張った手を掴むことが出来ただけであった。

「まあ、それから何と私の部屋、あの人の部屋は、過去の蘇った時で一杯になったことでしょう。あの商務顧問官殿が、自分の友がまた戻って来て、昔の宿にいるとどのようにしてご存じになったのか、私は知りません。でも彼もすぐにいらっしゃった。それから二人の間でどのような場面が生じたか、これについても私の他、誰も語る人はいません。あの人が皆さんと一緒に行くよう、何と皆さんが善意で、強引にあの人を引っ張って行こうとしたことでしょう。あたかも以前、あの人にとって、この世の栄光、豪華さが大事であったかのような按配です。あの人も他のすべての人々同様に、生涯を通じて、自らの快適さを得ようと望んでいました。しかしあの人独自の奇妙な流儀で、それで結局、ただフェンシング教師夫人フォイヒトの許でのみ、それを見いだせたのです。そして主なる神は、その上あの人に恩赦を授けられたのです。元来それほど深刻な病気ではなかったのです。あの人の心臓はもはや意欲を失っていると、商務顧問官殿にその医師達が話したそうです。あの人はその後少しも肉が落ちなかった。その逆でした。あの人は、出掛けるより寝ているのを好む傾向を、自分の脚のせいにしていました。でも愚かな心臓にその意欲があった

なら、この脚も十分に保ったことでしょう。心臓はすべてを、すべてを放棄していて、両脚も放棄していました。いえね、上級参事官殿。私は九十歳になりまして、初めて我が哀れなフェルテンから学びました。人間は意欲を出しさえすれば良いというのは、愚かな言い草だ、と。この野蛮な人間は、もはや意欲を有しないのでした。それで、レオニー修道女も、その最善の意志を持ってしても、彼を両足で立たせることは出来ず、レオニーがたとえ望んだとしても、彼を我らのドロテーエン通りの外の喧噪の中へ追い出せなかったことでしょう。でも、既に人間界の喧噪から引退しているというのに、これはやはりレオニー、我がレオニー・デボーらしいことです。彼女は最初、弟と一緒に来ました。でも、それから一人でも来ました。　ー　いや、古い表の建物での、昔の時代を思い出すと、何と彼女は、つまり我がレオニーは美しかったことか、何と素敵に演奏し、何と古いフランスの歌を歌ったことでしょう。すべてこのベルリンの真ん中のことで、異国のメルヘンのようです。　ー　いや、...でもこれは今となっては昔というよりも、むしろ何千倍も別世界からの話しのようです。まあ、お考えください、この二人、まさにこの二人が、またフェンシング教師夫人フォイヒトの許で、その若い日々の空想のような世界から抜け出て来てまた再会する運命を、そして自分の中や周りに、もはや何もこの世の栄光とか、そしてその他人間が、自らの快適さとか喜びのために、所有物として周りに確保するものを一切有せずに、その所有物のためには、決闘用の剣ばかりでなく、口や手、心をも武器として臨むというのに、こうした一切を有せずにいる二人をお考えください。上級参事官殿、私はこのようにその模様を語ることは出来ませんが、先月この二人の人間の間にあったことを理解しましたし、共に感じたのです。二人は一緒になることは出来なかったことでしょう。でも自分達がどのような人生を過ごして来たか、そのことを互いに語ることは出来て、そしてそのことを果たして、そして平和に静かに互いに別れました。　ー　全く平静に、二人が人生の展望をまだ抱いていた以前の表の建物での別れよりも、はるかに、はるかに平静なものでした。でも、　ー　まあ、真っ暗な夜となりました。向こうの哀れなご夫人は、相変わらず明かりを点していません」。

多分完全な夜ではまだなかったのであろう。しかし勿論黄昏が更けていた。

「どうぞ向こうへお出でください。私は明かりを持って、後から伺いましょう」とフェンシング教師夫人は言った。そして躊躇いながら、不安げに私は立ち上がり、麻痺して、かろうじて息をしながら、立っていて、自分の中で何らかのものを、向こうのドアまでのこの奇妙に難儀な、恐ろしい道を、より容易なものに、より明るいものにしてくれそうなものを探して、空しかった。人間の生活の中には、この世で、根本的には、後ほど、「一切は自ら成る」ということを完全に失念する瞬間や、時、状況が存在する。

まさに、この今、私がこのことを開いた窓の許、春の陽光を受けて、仕事のない祭日の朝、フォーゲルザングの記録文書の中に記している今、この古い決まり文句がまたしても完全に正しいものとなった。　ー

春の始まりはいつも三月に当たる。しかし今年は復活祭の祭日もそれに当たった[1894年3月25日、全集版19注]。私は復活祭初日の朝、執筆していて、隣家の屋根越しに相変わらず、建物で遮られずに、オスターベルクの最も高い円頂が、私の書き物机から見える。我

々が最も至福の、予感に満ちた青春の夢を夢想して、流星の落下を見ていたあの愛しい丘がすでに春の陽光を受けて、数週間経っている。若々しいブナの新緑も、オスターベルクから照り輝くことだろう。常にまた自ら成るような具合である。

しかし天と地が若々しく、人類も若々しいということが、人間にとって、その個別の苦しみの際、何の役に立とう。今のところ、私の記録は、天と地の輝きで、目が眩しくて、それで右手でペンを執り続けようとすると、左手で目を覆わなければならない。「良い娘、まず教会へ行きなさい」と私の妻が幸い、非難の調子で、私の音楽好きの長女に言った。さもないと、私も余りに間近な隣室からのピアノとその音色の若々しい春の陽気に自ら防衛に出る必要があったであろう。　ー

私の内奥での慄然とした抵抗にもかかわらず、自ずと、私は、フェルテン・アンドレスが亡くなって、ヘレーネ・トロッツェンドルフがその空のベッドに座っている部屋の中に立っている具合になった。

ヘレーネ・トロッツェンドルフだ。フォーゲルザング出身の我らのエリー、　ー　未亡人ムンゴー夫人、　ー　我らのヘレーネ。肘を膝に立てて、頭を両手で抱えている。十一月の最後の灰色光線の中、　ー　自らの周りの荒涼、　ー　この世で、所有物を失い、所有に疲れている。ニューヨークで合衆国の最も富裕な女性市民の一人に数えられている彼女だ。

「エレン」。

「カール、あなたなの」と彼女は尋ねた。顔をゆっくりと両手から持ち上げた。

我々が互いに相手の声を耳にしなくなってから、何年経っていたろうか。しかしその声は長い年月を経て、何と余所余所しく、また何と馴染みの声に響くことか。

彼女は立ち上がって、堂々たる高さとなった。彼女は思い出の中では、小柄ではなくても、単に中等の背丈で、かなりしなやかであった。オスターベルク周辺のすべての丘、茂み、壁、いや木々も、彼女がいかにすり抜けて行き、跳び、よじ登ることが出来たか、報告できたであろう。さて、彼女はこの十一月の最後の灰色の陽光の中、私が彼女にその大きな痛みの中、救援の手を差し出すべくここ数日思い描いていた女性とは全く異なる風に立っていた。午後の日中遅くの陽射しの許、私は、彼女の金髪は変じて、銀色になっているものの、相変わらず美しい女性であると観察していたことであろう。しかしこのことは文書では、他の幾多のことと同様、余り重要でない。フェンシング教師夫人が今や明かりを持ってやって来た時、私は彼女の白い、賢い、年齢のせいで軽く皺のある額にも、この言葉が記されているのを察知した。

感情を棄てろ。
動じやすい心は、
惨めな財産、
この揺れる大地の上では。　ー

彼女は私にまず片方の手を差し出し、それからもう一方の手も出して、肩越しに空のベッドの方を振り向いて、言った。

「あなたが私の手紙の返事として、こんなに素早くいらしたのは、とても有り難いこと

です。こちらに本来もっと早くいらして頂きたかったけど、でも　ー　あの人がそれを望まなかったの。あの善良なレオニーと私とを、あの人は、快適なのか、不快なのか、周囲に目にしていても、我慢していました。そんなわけで、私は、私どもも本望を遂げたわけです。彼女、あなた方のレオニーは、恐らく既にまた平穏な世界へ戻って行ったことでしょう。でも私は、　ー　私はまだ再出発出来なかった。いえ、カール、私はこちらへ座っていたのです。私はあなたを待っていて、あなたに私ども二人のことを話したかったのです。　ー　あの人と私のことを話して、そして可能であれば、あの人が最後にあなた方の許、　ー　フォーゲルザングで、私について語って以来、あなたが今日まで、あなたの記憶の中で抱いていたに違いない席よりも、まだ良い席を私は占めたいと思ったのです」。

フェルテン・アンドレスが故郷で自分の所有物を処分した時、いかに彼は我らの間で彼女について言及することが少なかったか、私は彼女に告げる必要があったであろう。しかし、幸い、フェンシング教師夫人が入って来て、その時間を私から奪った。

「まあ、哀れな愛しい御寮はん、語り尽くすことです。上級参事官殿はいつでも立派な聞き手でしたから」と彼女は言って、頭を振りながら、付け加えた。「今この時ほど様々な世界から人々が私の許にお見えになることはありません。それで相手に応じて、別の言い方をしなければなりません、レオニー御令嬢、　ー」。

ムンゴー夫人は野蛮に肩を竦めて、立腹したので、老夫人は今一度頭を振って、明かりを少しばかりテーブルの中心へ更に移し、そしてヘレーネ・トロッツェンドルフとカール・クルムハルトを、フェルテン・アンドレスの許、二人っきりにして出て行った。

「あの人は自分の周りに何も置きたくはなかったのです、気違いじみていました」と先ほどフェンシング教師夫人は私に打ち明けていた。「欲しいものはただ机一つと、椅子一つ、それにベッド一つです。まあ、あたかもここでは以前、若い衆は余計なことについて話してばかりであったと言わんばかりです。あの人は、一切ことごとく拒絶して、私をもドアから閉め出しました。いや、向こうで周りをご覧なさい。堅牢な心を得るために、あの人は自分を動物に、一匹の犬にしたのです。　ー　あの人の許で周囲をご覧なさい、上級参事官殿」。

そこで私は小さな明かりの陰気な輝きの下、見回して、この空虚さの中で、地上生活からの解放を何も感じず、逆に以前にもまして、心の中で物質の圧力を重く感じた。百もの棚となって、我らの壁を狭めている塵の世界で、この紙魚の世界で千ものがらくたとなって我らを圧迫している古物の下、[ファウスト、鴎外訳656-659:高い壁に沿うて、分類して百にも為切しきってある棚の物が己の周囲を隘せばめているのも、これも塵ではないか。この紙魚しみの世界で、己を窮屈がらせている器具、千差万別の無用の骨董も塵ではないか。己の求めているものが、この中で見附けられようか]。私はより自由に呼吸をしたかった。空気が私の前から消えていた。それで、更に一人の人間が私に語りかけた時、夢のように荒れた呪縛からの救済に思われた。女友達、我らの女友達が言った。

「親愛なるカール、腰掛けましょう」。そして固い微笑のまま、こう付け加えた。「国王達の死去について、悲しい物語を話しましょう」。

彼女はこの詩人の言葉を英語で語った。「床に座って、国王達の死去についての遣る瀬ない物語を語りましょう」[シェークスピア『リチャード二世』Ⅲ,3]。そして私が椅子に手を伸ばすと、彼女はまた鉄製のベッド台に腰掛けた。先に私が入ったとき、そこから立ち上

がったベッド台であった。そして自分の側の席を示した。

「こちらへ、私の友の方。あなたはまだオスターベルクのベンチを覚えているでしょう。そこから数百年前、私どもは星が落ちるのを見て、神々を試しました。流星と私どもの願望や希望と結び付けて」。

彼女はわたしの返事を待たず、急いで続けた。あたかも話しかけられると、自分の心を発散させるという荒々しい衝動が抑制されるとさえ案じているかのようであった。

「いいこと」(彼女は、あたかもフェルテンはまだ当時と同じように我らの間に座っているかのように語った)、「私は、自分が生涯の幸福と考えていたことを全く本当のことと語るくらいなら、むしろ舌を切っていたことでしょう。あなた方は、私のその幸福について実際十分にご承知です。私の哀れな母の勧めで、そんなことを考えたのです。私はあなた方のにやにや笑いも、高笑いも知っていました。それはあなた方の阿呆な青春の特権です。とりわけあの人はその特権を利用しました。　ー　フォーゲルザングやオスターベルクばかりでなく、上流の生活、向こうのアメリカ、ロンドン、パリ、ローマでもそうでした。そこで私どもはその後互いに出会ったのです。カール、私どもはまた再会したのです。私どもは互いにどんなに反撥し合っても、互いに求めざるを得なかったのです。　ー

死ぬまで、この固いベッドに至るまで、現存在のあらゆる嵐や陽光の中、この十一月の夕べに至るまで。この求めは、まだあの人よりも強力だったのです。あの人は自分をとても強力と思っていたけれども。でも私はあの人の弱さも知っていた。あの人は私に対して他に防御を知らず、いつでもあの人の人生、あの人の思考、あの人の夢、あの人の行動の最中、私を見つめていて、あの人はこの世での所有物の中から私を手放せず、それで結局すべての所有を断念せざるを得ず、すべての所有物を自分から突き放して、そして、　ー

無駄なあがきをして、　ー　あそこの壁にあの詩を書き付けたのです。まあ、本当に、阿呆の少年で、その動じやすい心のまま、まずはかの空虚な言葉に自分自身に対する防御を求めたのです」。

彼女は哀れに白く塗られた壁を示した。フェルテン・アンドレスの地上遍歴についての最後の痕跡であった。それから彼女は両手に顔を抱えて、頭をより深く垂れ、そして悪寒が彼女のうなじに走るように見えた。それから彼女は私の手を握って、握り締め、それで痛みを覚えた。

「カール、私に話さないで。あなたが何を言えましょう。私に語らせて。私が自分のことを話せる相手として、この広大な地球全体の中で誰かいましょうか。自分の意志を持つために、この広大な地球全体を所有物にして、ただ金で一杯の手のみを差し出せば良いようにしている私なのです。あなた方二人は余りに良く承知しているから、私はオスターベルクで自分の意志をそれだけ一層立腹して隠してしまったけど。私は、さながら他の女達同様に世間の市場で一つの商品のように売れた時、それは父親と母親のお蔭であったとか、自分達が売れたことで満足出来るような、そして満足するような他の女達と変わらない女であれば良かったことでしょう。でもそれは一つの嘘でしょう。私は嘘を吐いたことはなく、臆病でもありません。彼が私について知ったこと、それは本当のことです。私がなり得たもの、それは私自身の力であって、私の哀れな母のお蔭とか、ましてや私の父のお蔭ではありません。オスターベルク麓での私どものフォーゲルザングでの私は、現今の私と同じであって、今私はこのベッドの前で寝て、あの人を私の両腕で抱き締めて、コノ人の

最後の言葉を待ったのです。するとあの人は私の額の上を今一度、手で撫でて、微笑しました。『私の好い娘だ』と。これはやはり故郷の森の中と変わらず、彼はそう言って、私に接吻や引っ掻きや、涙や地団駄踏みに誘ったものでした。あなた方の優しい、敬虔なレオニーが、彼と私について何を知っていましょう。故郷での、あなたの愛する家のあなたの愛しい夫人の方が、カール、ひょっとしたらもっと私ども二人のことを知っているかもしれません。だって、ご夫人はただ夢の中でのみ生きているのではなく、あなたや、それに子供達を持っていて、単に何世紀もの前からの父祖の歴史とか、今日の神の世界のみを有しているわけではありませんから。何でこの敬虔な女、優しい女、穏やかな女が、私と彼の間に割り込んでくるわけ。あの女、ここで何を望んでいるの。私よ、私、私、ムンゴー未亡人のみが、権利があって、この空虚な部屋で、彼との戦いを最後まで戦うのです。彼を埋葬するためにも、あなた方の誰一人必要としなかった。レオン殿をも必要としなかった。もっともこの方のご好意は受け入れましたけど。あなた方は、彼の最後の日々や時間、彼の目に最後の輝きを浮かべさせることのできるようなことを話しかけられたでしょうか。私の灰色の髪のことを、この狂った老女のことを笑わないで頂戴。二年前、私はムンゴー未亡人となっていて、私のヨットで、ブリンディジ[イタリア]からアレクサンドリアへ行き、彼は通訳として巡礼船で、スエズ運河を通って、ジッダ[サウジアラビア]へ行きました。そのとき私どもはホテルの食堂で出会いました。あなた方はこの国で、私ども二人について何をご存じです。その時、彼は私のことを老いたナイルの蛇と呼びました。[シェークスピア『アントニーとクレオパトラ』Ⅰ,5]。　ー　いや、私はこの哀れな脳にポキプシー[ニューヨーク、女子大があった]でのすべての学識を動員しなければならなかったのです。マルクス・アントニウスとそのエジプトの女王、彼らも私どもと同じ年齢でした。彼らもやはり老いた人々で、彼は五十歳を越えて、彼女は四十歳です。それでも互いに死に至るまで、両者ともお陀仏になるまで戦わなければならなかった。彼女が最後死にます。いや、私も存命で、まだ私の周りに、自分のすべての栄光を有していて、エジプトの女王がその栄光をアクティウム海戦[紀元前31年]で失ったようには失っていません。そう、お気づきのように、私は彼のために歴史と文学史をも演じたのです。私の本からは別のカップルも出現します。1813年10月18日に、あなた方の老ゲーテは、　ー　もはや若いゲーテ、私どもに有害な詩を、私どもの生を毒した詩を作ったゲーテではありません。　ー　いや、私は何を言いたかったのか。そう、あなた方の老ゲーテは、その最後の素敵な詩を作りました。　ー　自分の寵臣[エセックス伯]の頭を刎ねさせなければならなかったイギリスのエリザベス女王に寄せるものです。これはムンゴー未亡人には、　ー　いや、ヘレーネ・トロッツェンドルフには出来ないことでしょう。たとえどんなに好んでしばしばあの人の心を、あの感情のない心を足蹴にしたことであろうとも。彼女はただ彼の心を握ることが許されただけです。その心を握らざるを得なかった、ここ彼の臨終のベッドで、彼の臨終の時に。ムンゴー未亡人は他にどう仕様があったでしょうか。彼は彼女を絞殺もせずに、また唾も吐きかけないのに、　ー　この哀れな喜劇役者が、この地上で、最も惨めな財産を、動じやすい心を、あなた方の詩人のあらゆる韻律にもかかわらず、あなた方の賢人達のすべての格言にもかかわらず、その胸に抱き続けなければならず、これはとても甘美で、とても辛辣なもので、丁度、私が、この哀れな女喜劇役者が私の心をそうしていたようなものです。私はフォーゲルザングとオスターベルクと一緒にその谷の公爵の居城も、町全

体、それに公爵領の過半を、私のアメリカの鉄道と銀鉱の売り上げで買い占める財産[動じない財産]がありましょうけど。私の空っぽの手の中の、私の空っぽの、空っぽの無所有の手の中の、彼の賢明な、阿呆の頭ときたら。いや、何と残念なのでしょう、あなた、善良な友、カールは、詩人ではありません。詩人だったら、フェルテン・アンドレスとヘレーネ・トロッツェンドルフについて、二人の星々と行路、運命について一つの歌を作る定めでしょう。あなたが一廉の哲学者か、私は存じません。でも、あなたは利口な、善良な、分別ある男であると私は承知しています。それで、これから私どもが互いに別れたら、多分二度と会うことはないでしょう。家のあなたの愛するご夫人の許、愛する子供達の許に戻って、この人達への警告として、ヘレーネ・トロッツェンドルフとフェルテン・アンドレスについて語りなさい。いかにこの二人がすべての地上の所有から解放されて、悲しい最期に至ったか。そのことをこの人達のために、より長く残るよう紙に記したいときは、まこと素っ気ない散文で記すことです。私が今でもあなたの善良なお父上の腕の下に見かけていた、青色の厚紙表紙の冊子に、あなたの遺稿として残しなさい。お父上なら、その表紙に『フォーゲルザングの文書のために』と記されるでしょうから、あなたも見習ってそうなさったらいい。それから、家庭の文庫に入れて、　ー　少しばかり、あなた御自身の家庭の記録とは別個にして」。　ー

　これらの頁は、私が　ー　今回は忠実ではあるが、しかし奇妙な記録作成者として、ー　彼女の意志に従ったことを示しているが、しかし私の人生記録と我が家の人生記録と別々に仕上がることにはならないであろう。フォーゲルザングの文書類は一つのまとまりのあるもので、この全体から私と私の家とはほとんど分離出来ないし、またフェンシング教師夫人フォイヒトの許の鉄製ベッド台や、哀れなムンゴー夫人の富も分離出来ない。この地上の人類の現存在は、いつも新たに形成されるが、しかしそれは外部の周辺からではなく、いつも中心部からである。我らのドイツ民族においても、このことは根本的に別様ではないと分かっている。

　それで私はもはやこの件で追記すべきことは余りない。　ー

　「ヘレーネ、私と一緒に私の家へ来ないか」と私はこの悲しい席から立ち上がった後、また言った。「少なくとも、しばらくの間だ。私の妻と会えば、そなたの愛しい女友達になれる女と分かることだろう。私の子供らも気に入って貰えよう。こんな具合に、このままお別れとはしないでおこう。我らの許へ来たらいい。私と一緒に故郷へ戻り、そこで春を待てばいい。オスターベルクのベンチはまだある。そこで一緒に一度、夕陽の中に座って、森や、丘、谷、世界、フォーゲルザングに今一度話しかけて貰って、この揺れる大地での助言を聞いてみよう。この森らも、こちらの暗い壁や、そこの無益な格言とは別な話し方をするであろうとはそなたも思わないだろう。この格言に一番従わなかったのはこの著者なんだから」。

　彼女は頭を振った。哀れな金持ちの女性、ムンゴー未亡人で、以前、フォーゲルザングでのドアと窓のなくなった家でのフェルテン同様であった。

　「私を放っておいて、最良の友」と彼女は言った、「ムンゴー未亡人にとって、あなたの愛する子供達やあなたの善良なアンナが何の関係がありましょう。カール、私はあなた

を彼の埋葬の時でも望まなかった。外のあの老夫人に聞けばいい、私がここで、　ー　今　ー　この世での自分の所有、所有物、財産のことでどんなに幸せであったか。あの聖女、フランス人女性、あなた方の、　ー　彼のレオニーが、その死んで、聾となった耳に何を囁きかけることが出来たというのよ。でも私は、この私は出来ました。彼の両目を閉じさせて、彼を腕に抱いた後、夜通し出来たのです。私は彼に沢山語った。彼が私の父の家で本からあの頁を引き裂いた夜から、私の生涯で起きたことを、すると彼は私を許してくれた。だって分かるでしょう。彼は今、自分の意志が満たされて微笑したからです。この微笑が、私の野蛮で、阿呆で、病んだ脳内にあるかの微笑を追い払ってくれました。彼がニューヨークで、その頁を示して、感情を棄てろと示した時の微笑を。分かるでしょう、これ、　ー　彼の、彼の、彼の死後一時間しての彼の善良な高笑い、これが今や、私のもの、永劫私のもの、永劫、私の唯一の所有物です。そのような私の所有物で、誰にも私はこれについて話題にもさせません。だから私はあなたともあなたの家に行けないのです。故郷は私と彼に対して、余りに煩わしく話しに介入して来ることでしょう。そしてこの世の私の唯一の所有物を引っ張ったり、むしり取ったりしましょう。故郷の山々や谷にしても、ただ私どもの間、フェルテン・アンドレスとヘレーネ・トロッツェンドルフの間に割り込んで来ましょう。私は故郷の山々に二度と再会できません、私が一昨日布を被せたときのあの人の顔を、私は忘れたくないのです」。　ー

そこで私は、日々の生活の中で見知らぬ女となった彼女を私の家に、愛する病人の客人として招待することを断念せざるを得なかった。昔、フェルテンを断念したように。しかし彼女はフェンシング教師夫人フォイヒトに接吻して、夫人の肩に頭を置いて、嗚咽して言った。

「お母さん、あなたが私と一緒に行かないであろうこと、これは分かっています。だから、私ども、つまりあなたと私が、ここから決して追い出されないよう、私はこの家を購入しました。あなたの愛しい小部屋とここの四つの壁のためです。あなた方の友人、レオンさんが、その際手伝ってくださった、親愛なるクルムハルト。皆さん住み続けていいし、生活や商売を外、この路地で続ければいい。これは何も問題ありません。でもこの家にこれから先権利を有するのは、フェンシング教師夫人フォイヒトとヘレーネ・トロッツェンドルフです。私はしばしば遠く世間に出て行かなければならないでしょう。善良なる皆さん。でも私はどこにいようと、この私の所有物の安全を確保するつもりです。だって、でしょう、お母さん、この部屋は私のものであって、壁のこれらの言葉が上塗りされ消されないよう頼みます。そして、私があなたの許に来たときには、私を　ー　あの人同様に扱ってくださいますよね」。

「でも、私は九十歳ですし、　ー」。

「私がフェルテン・アンドレスのように扱われず、あの人があなたを必要としていたように、あなたが私を必要としている場合、すぐに察して、私がどこにいようと、気付くように致します。差し当たり、ここから遠くへは行きません。私の申したように、お願いします」。　ーーーーー

さて我々、ムンゴー未亡人と私は町の人での多い露地を歩いて行った。我々の周辺では、人々は実際、地上の所有と所有物に対し、別様の激しい、情熱的関心を抱いているように見えた。私は人々の間で、一体どのような国家的、政治的、社会的問題が生じているのか、

実際知らないし、どのような集会が招集され、散会したのか、どのような問題についてまたしても一致を見ていないのか、知らない。騒動の中の指導者達の名前が我らの周りで、喧しく、　ー　その日々の中、とても著名で、新聞に相応しく、　ー　憤激や嘲笑、嘲罵、あるいは拍手喝采でもって、名指しされ、叫ばれていた。きっと高尚な事柄に関するものであったろう。しかし私の腕の喪服の夫人が誰であり、人類の嫉妬を呼び起こし、人間を幸福にするどんな資産を有しているのか、知っていたら、この未亡人ムンゴーに丁重に道を譲るであろう人々がこの雑踏の中にいかばかり多くいたことであろう。

彼女は勿論この町で最も有名なホテルに泊まっていて、私はその玄関まで彼女を連れて行った。

「これからこの夜、どうしましょう」と彼女は明かりの光輝の中、駆け寄る従者達の間で尋ねた。「小一時間一緒に上へ上がりませんか。今少し、他の事柄について話しましょう。今朝、アメリカの公使夫人が、私に書いて来て、今晩夫人の許へ顔を出すよう懇願されたのです。私の同伴をしませんか。とても歓迎されると思います。アーヴィング氏、著名な喜劇役者が [Henry Irving,1838-1905]、お忍びでロンドンからこちらへ来ています。この人の『生か死か』のモノローグを聞きたいと思いませんか。この殿方はアメリカでの巡業のため私にサーヴィスすると思いますよ」。

「ご機嫌よう、ヘレーネ。お互い、今一度再会するよう、両人とも心掛けよう。この揺れる大地の上で、互いによりしっかり、とな」。

「そうできるかしら。そうね、今日のところは、ご機嫌よう。我が友よ、我が友、私の許へ来て頂いて、有り難う。他に呼び寄せられる人がいなかったのです」。

かくて我々は再び互いに別れた。永遠にか、誰が知ろう。これから今回私は友のレオンをもベルリンで訪問することが出来たであろう。しかし姉のレオニーはもはや彼の許にはいないであろうと分かっていた。実際、私は今、彼の人生の快適さに対し、まことの関心を示すのは無理であった。彼の妻ヴェーラの歌を聞き、彼のヴィクトリアのピアノ演奏を聞き、彼と一緒に、先祖の吟遊詩人の竪琴、アルビ派の槍、それにユグノー教徒の剣の相続人たる、彼の健気なフリードリヒについて、リヒターフェルデ[ベルリン南西]の士官学校から、一家のあらゆる想定される新たな武勲と共に、閣下の称号にまで付き合うのは出来かねた。

私はホテルで、眠れない夜となった。それから朝となり、帰郷である。「陰鬱な日、田畑」[『ファウスト』鴎外訳、曇れる日、野原]、森や田畑、村々、町、滴る十一月の雨と霧の中、混雑する駅。午後遅く、雨と霧、双方に包まれて、オスターベルクに、　ー　最初の一息。

家だ、妻だ、子供達だ。...かくて真夜中頃、温かい暖炉の許で、レオン・デボーのような一切の快適さの中、アンナの溜め息。

「まあ、それでは、彼女はその無数の百万もの富で何をしていいか分からないの」。

「いや、分かっている。彼女は地球の陸地や海が自由になる。彼女は宮殿や病院を建て、本や絵画、立像を購入し、支援するのは、　ー」。

「でもそれでも大したことではないのね。彼女も世間もびくともしないのね。いや、彼女の立場になってみたい」。

「そなたがか」と私は緊張して尋ねた。「それでは、その沢山の金で何をしたいのだ」。

「そうね、　ー　私には子供達がいるわね」。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

これを紙片に記しているのは、明るい緑色の、素敵な春の日である。私はこの頁に、今一度我が最新の裔[多分孫]を伴って、オスターベルクのベンチで本日の陽光を浴びる様を描けよう。しかしこのフォーゲルザングの文書をここで終えることにする。

解説

恒吉法海

今回はラーベの中期、後期からの作品紹介となった。底本としたのは昨年に引き続き旧東独の五巻本であり、この一巻と二巻が著作集１となり、今回はその三巻と五巻を選んでおり、前回作品数は4編であったので、もう1編短篇『ドイツの月光』を別の全集版から選び、著作集２とした。普通なら三巻と四巻を選ぶべきであろうが、ラーベの晩年の境地を早く知りたくて、目次の通りとなった。またラーベのこのリポジトリ翻訳は、私の翻訳では、これまで予想以上にダウンロード数が多い。それでこれはひょっとしたら昨年の付録のせいもあるかもしれないと思って、遠慮なく自分が普通に面白いと思うドイツ文を添えることにした。今回はクライストの『逸話集』である。ただ眺めるだけで、それでドイツ語が楽しく簡単に読めるようになりますと請け合えば宣伝にもなるし、人の言葉を安易に信ずるものではないという教訓にもなるであろう。

今年は2025年で、ドイツのジャン・パウル研究家達は張り切っていることであろうと推察される年である。11月14日が祥月命日で、没後200年に当たる。それで日本でも心ばかりの記念の企画を考えて、この解説を全体、ジャン・パウルの影響下のラーベという視点でまとめることにした。訳了して、さほどジャン・パウルの影響は感じられず、むしろゲーテの影響が露わであるが、本稿の213頁にルターや、ゲーテ、ジャン・パウルと記されているように、ラーベにとっては、ジャン・パウルはルター級、ゲーテ級であることが分かる。特に『ドイツの月光』では、最後に作中の語り手は息子の誕生日に贈り物としてジャン・パウル全集を考えている。実はこの結びの頁、本稿241頁故に、にわかにこの短篇を訳出した次第であって、これに言及すれば、もう没後200年の日本での行事としては十分であろう。

内容面ではジャン・パウルの影響としては、シラーがゲーテ宛の手紙で、ジャン・パウルのことを「月から落ちて来た者のように見慣れぬ者」(fremd wie einer, der aus dem Mond gefallen ist. An Goethe,28.6.1796)と形容しているように、方法としての異星人の視点を援用していること、これは特に『アブ・テルファン』で顕著であるように思われた。異星人が面従腹背している処世が『アブ・テルファン』というわけである。『フォーゲルザングの文書』に関しては、そのモットーがシャミッソーの『影を失くした男』から採用されていることから、これは「消滅を怖れている原初的自己愛」[オットー・ランク]による二重自我の世界と解釈することにした。二人の主人公、カールとフェルテンをジャン・パウル風なドッペルゲンガー、ジーベンケースとライプゲーバー、『生意気盛り』のヴァルトとヴルトと見なすわけで、文書にこだわっていることが何よりの証拠である。『ホラッカー』に関しては、田舎の牧師や教師達が中心人物でやはりジャン・パウル的であり、普通に知性を発揮すれば、知性は自ずと面従腹背となって、戦争では勝利もし、デマをも見抜けて、家庭も収まると説かれているように思える。

以下以上の大枠の下、個別の小説紹介に移る。

１．『アブ・テルファン』1867

異星人の面従腹背

『アブ・テルファン』の時代設定は1860年頃から65年頃までで、主人公は40歳頃、従って若い頃の話しはそれより遡る。あらすじを述べると、主人公レオンハルト・ハーゲブーハーは神学志望であっが、決闘により退学処分、1845年出奔して、スエズ運河掘削に関わりながら、遂にはアフリカ、アブ・テルファンという地で十一年間奴隷となる。フロイト的に深読みすれば、性奴隷の面も排除できない。そこからある白人動物商により解放されるが、故郷に帰っても、今浦島で、仕事探しに苦労する。頼りにしたのが、従兄弟のヴァッサートレーターで、彼は1817年の学生運動の左派くずれで、恩赦により道路検査官という下級公務員に収まって、お上に対し面従腹背の処世をしている。ゲーテを見習えである。この従兄弟の斡旋で、主人公はコプト語の教授の助手に採用される。更に主人公は今浦島として、帰朝報告をホールで催すに至り、その場では弁士中止とはならなかったものの、以後の報告会は禁止となる。この会場で主人公は自分を救い出した動物商と再会する。この動物商は、主人公が故郷での相談相手としていたクラウディーネ夫人、従兄弟ヴァッサートレーターも頼りにしているその夫人の息子と判明し、作中の最初のヒロインの元恋人と分かる。このヒロインは因果なことに、悪代官風な男と結婚してしまい、この男は日本で言えば、仲代達矢主演の『切腹』風事件で処分される。仲代役はキント少尉。主人公はコプト語の教授の娘に求婚するが、娘には丁度昔の恋人、研究所所長の求婚の手紙が届いており、作者は主人公を間の悪い、またしても遅刻した男として片付けて、読者の笑いを取っている。

a) 月よりの使者

ヒロイン、アインシュタイン嬢曰く、＜「レオンハルト・ハーゲブーハーさん、貴方は月から落ちた方です」＞[拙訳20頁] 。クラウディーネ夫人曰く、＜「ハーゲブーハーさん、貴方は月から落下されました」＞[47頁]。要するに今浦島の主人公は以上のように形容されているわけである。作者はまたいばら姫等の睡眠者と比較している。

＜彼は勿論まだベッドに寝ていて、ここで彼の感情や気分に正確に移入するために、彼と同じようにトゥムルキー州での捕囚から戻って来る必要はない。エピメニデス[57年間眠り続けたといわれるクレタの奇蹟の人]、デキウス皇帝の統治下、洞穴に入り、テオドシウス皇帝の統治下、155年後にまた出て来た、エフェソスの七人の眠り聖人、そして最後に『リップ・ヴァン・ヴィンクル』[アメリカの小説家ワシントン・アーヴィングによる短編小説であり、作中の主人公、20年眠る]が夙に、彼のすべての感情に移入出来るようにしている＞[12頁]。

主人公の述懐。＜「私はいばら姫のように眠りに陥りました。大変不愉快な苛立たしい夢で一杯の眠りでした」＞[14頁]。

これは馴染みの地上世界を異化してみる方法といては有効であろうと思われる。勿論日の下に新しいものは何もないという見方もあろう。ジャン・パウルは若い頃「明日死のうが三十年後に死のうが差異はない」と日記に記しているとされる。聖書には「千年といえども御目には昨日が今日へと移る夜の一時にすぎません：詩編90,4」とあるらしい。しかし現代社会に生きる人間にとっては、十年間、例えば冬眠状態であったとしたら、目覚めてから、時代に適応するのは難しい面があろう。訳者にとっては、昔のドイツ語学者ほどの力量がなくても、パソコンを使える今の世では、はるかに翻訳が簡単になっていると思っている。息子の一人は、私が貰った手書きのドイツ語クリスマス・カードをスマホの写

真レンズに写しながら、翻訳ソフトで読み上げてくれた。要するに訳者は玉手箱を開けなかった今浦島なわけである。仮に訳者が若い頃の今浦島ならば、コンビニで買い物も出来ないであろう。玉手箱を開けて、むしろカフカのように、虫に変身した方が無難かもしれない。

b）恋愛小説

2021年にフライタークの『貸しと借り』の解説でドイツの恋愛小説のパターンについて述べたことがある。「ここ三年ほど『巨人』、『嵐の前』、『貸しと借り』の三長編小説を訳したが、これらの長編小説を恋愛小説として読めば、共通している点に気付く。それは主人公が本命と見なされる女性と出会いながら、恋敵に出会って、恋人を奪われ、二番手の本命と結ばれるという構造である」。e=mc２乗から思い付いた公理であるが、勿論作家はいつもこの公理をそのまま使うわけではない。当然飽きが来る。しかし大方この構造で、結果が違うことになる。ラーベでは進化して、二番手の本命とも結ばれない。『アブ・テルファン』では主人公はヒロインのアインシュタイン嬢とはクラウディーネ夫人の許の同じ門下生という仲であるが、初めからすこし距離感があって、二番手の本命、セレナ・ライエンシュラーガー嬢とも結ばれない。訳者にとっても、作者にしてやられた思いであったが、しかし二人のやり取りは楽しく書かれている。[拙訳178－182頁参照]

先に主人公は性奴隷の過去が疑われると書いたが､それが仄めかされているのは一箇所。講演の前、緊張状態にある主人公の描写。＜緑色の覆いのある小卓と二本の蠟燭の背後、講演者の三回のお辞儀があり、かつてアブ・テルファンを去ったという鈍い後悔の感情があり、早速向こうへ戻って、顔を深く、深く、深く、クラ・グラ夫人の膝の中へ埋めたいという、深い憧憬があった。　ー＞[112頁]

その他ライエンシュラーガー教授が、結婚するとき、妻となる女性の罠に嵌まって行くさまを知らない風に語らせる作者の手腕もいいが、この教授が独身生活を去るときの心境描写も作者の異星人風視点、異化効果が感じられる。＜「我が煙草箱、我が収集本、我が靴脱ぎ器、いや、我が昔からのナイトガウン、これらすべて、これまで我が友人で、我が所有物であったものが、今や一気に余所のもの、私に対しまだ奉仕してくれるが、しかしすべての素敵な親密さを厳格に自分から切り捨てる諸力に変わっていた。我が新しい幸せが、その影を私の古い快適さに投げかけたのだ。最初これは何か実際不気味であった」。

「まあ、この父君、...何て可愛いことを」とセレナは藪の背後で呟いた。＞[102頁]

c）枢密顧問官ゲーテを隠れ蓑にする従兄弟ヴァッサートレーター、面従腹背の擬態宣言

ジャン・パウルは『ヘスペルス』で、頭の中で現実を模倣して、そのまま喜劇劇場とする擬態の笑いを考案している。この種の精神が手本とする師を上げても、同時にその師は擬態として隠れ蓑でしかない。

転向左翼のヴァッサートレーターの言葉、＜「...四十巻の世界的名声、そして享年八十二、そしてわずか四週間の曇りなき幸運、あるいはもっと良く言って、本来の快活さだ。[エッカーマンとの対話：1824年Ｉ月27日]　ー　このヴァイマルの王侯廟墓にいる古参の少年は、我々皆にとって、何という慰めであろう。偉大な詩人にして政治家であろうと、ちっぽけな阿呆の道路検査官であろうと、結局は、こん畜生、同じなのだ」＞[37頁]。

主人公の言葉、＜「従兄弟のヴァッサートレーターは、そのコーヒーを沸かしから見上げながら、叫びました。あの男[ゲーテ]はほとんどいつも正しい。貴殿はこの枢密顧問官殿を頼りとしなさい、従兄弟殿。私は四十年以上、ニッペンブルクで暮らして来た。それに個人的にも彼と知り合っている。ただ後ろ姿を見た関係だが。というのは残念ながら黄金の孔雀亭にやっと出入りするようになったとき、彼は長い外套を着て、馬車に乗って冬の旅に出掛けたからな。ニッペンブルクに四十年間いて、彼はただの一度も私を苦境に立たせなかった、従兄弟殿。[ゲーテ、1749-1832、ラーベ、1831-1910、従兄弟は1798生まれと推定される]。

そなたの運命は決まった、作法に従え。
道は始まった、旅をやり遂げよ。
不安と苦悶に惑わされるな。
これらは永遠にそなたの平衡を乱す。[『西東詩集』箴言の巻]」＞[95頁]

ゲーテに関し、ラーベがよく引用しているのは、『ファウスト』とかもあるが、割と箴言とか処世訓が多い。日本では、箴言とか処世訓を書く作家は少ないように思われる。処世術は鼻から馬鹿にされよう。例えば『人間失格』の著者である太宰治が処世訓を説いても、似合わない気がする。しかしドイツは違う。ゲーテは自殺するヴェルター青年を描きながら、ヴァイマルの枢密顧問官である。論より証拠でその箴言に説得力があるのであろう。日本でも箴言、格言、諺は多くあるが、しかしこの類いは相反するものが多い。「義を見てせざるは勇なきなり」、であるが、「君子危うきに近寄らず」。「一国は一人を以て興る」が、「一人を以て亡ぶ」。「徳不孤」であるが、「徳ありとて頼むべからず。顔回も不幸なりき」『徒然草、第211段』である。

ｄ）不正を見つけたとき、どう対応するか。

主人公は帰朝報告会の後、自分を解放してくれた恩人と再会する。この恩人の許へ案内したキント少尉から、少尉と恩人の仇敵について知らされる。この仇敵は、キント少尉の娘に手をつけるために、キントを少尉に昇進させて遠ざけ、その娘の婿候補を罠にかけ、この娘婿に殺されそうになりながらも、一命を取り留めたという悪者で、その時、娘婿を咄嗟にキント少尉は殺害しており、主人公の恩人もこの仇敵に恩人の父親も含め、因縁のある関係である。結局キント少尉が単独で決闘をし、二人とも果てる。

問題はこの不正を聞かされてからの主人公の振る舞いである。主人公は仇敵の妻となっているヒロインのニコラ・アインシュタインを恩人の母親の許へ避難させるが、それ以上のことはしていない。何故仇討ちに参加しないか。次のように告白している。

＜何と空しい世界か。何の考えも、何の願いも、何の計画も、次の十五分間継続しない。アブ・テルファンに捕囚されて、鈍重に瞑想を重ねた方が、あるいはヴァン・デル・モーク氏の流儀で、全世界を股に、野蛮に無謀に突撃した方が、この正義に対する徒な煩悶、この熱に浮かされた探索よりも勝るのではないだろうか、クラウディーネ夫人。この世では誰もが正当な目に遭うのではないか。だから各人の運命に任せればいい。水牛のように体に鞭が当てられているのではないのに、動いてしまう阿呆は誰だ。かくも何千年分の経

験をした後で、相変わらず、迷える騎士の演技をし、人類の頭脳、心、胃を正しく働かせようとはりきる馬鹿がいるだろうか＞[165頁]。

要するに主人公は自分の運命に従うのみであり、この運命は市民社会に面従腹背して行くということであろう。しかし作者の運命は、この不正に関与するそれぞれの者の運命をその立場に応じて詳述することであろう。

e）帰朝報告会の成果

＜一人の書籍商がやって来た。彼は宮廷の書籍商ではなかったが、警察長官の禁止にもかかわらず、講演に至らなかった部分を紙の本にして、自分の書店で出したいとのことであった。一人の写真家が現れた。彼はハーゲブーハー氏の胸像と全身像が世間に深い感銘を与えるものになり、立派な売り上げになろうと固く確信していた。様々な喫茶店での知り合いがこの「良き友」との私生活ので交誼を求めていた。二人の痩せたレディーが現れた。二人は、この「試練を経た男性」を信心のミッションという有り難い目的のために活用したいと願っていた。一人の若い男がやって来た。彼は現代の叙事詩の素材を求めていて、このアフリカ人の冒険にその素材を見いだしたと信じていたが、ハーゲブーハーは彼に対し、同時代や後世の人々の感情を斟酌せずに、こう述べた。自分を放置してくれ、ちなみに自分は、誰かが詩文を作れないならば、これをこの時代の全く紛れもない詩人的才能の一つの印だと思っている、と。政治的諸党派がその触角をこの朝の中へ伸ばして来た。要するに、付き合いが十分に活発化して、始動して来た＞[173頁]。下線を引いた箇所が特に印象的で、すでにラーベがこのような見解を述べていることを面白く思った。

ｆ）天然の学者

すでにジャン・パウルも学者の特徴を、放心、天然に見ているが、ラーベもそのように類型的に学者を見ている。ライエンシュラーガー教授の振る舞い全体がそうである。ジャン・パウルの描く医師、カッツェンベルガー程奇矯ではないが、それでも滑稽に描かれている。

<確かに娘っ子と義理の息子は、自分らと一緒に異郷へ移住し、自ら協力して、国際的施設を教育学的に完璧な至高の段階まで高めて欲しいと提案した。しかしこのとき教授は本気で粗野になって、ギリシアとラテンのすべての神々を証人に呼び出して、自分はこのようにして、正直なゲルマン文献学という誠実なドイツ人学者の徹底性と高貴な先祖達に対して罪を犯すぐらいなら、生きた体のまま火刑台に登るのが千倍好ましいと述べて、それで娘には自分が述べられる限りの父親としての祝福を与えて、娘を去らせ、玄関より先には娘の同伴をせず、閂をして書斎に閉じこもり、完全に存命の者達の世界から消えた>[220頁]。

日本でも、結婚式に招かれて、別なホールに座っていた学者とか、子供に結婚式に出てくれるか心配された学問没頭の親父とか耳にするし、古くは、阿字阿字と唱ふるぞやと言った明恵上人、上人の感涙いたずらになりにけり、といった『徒然草』の言葉が思い出される。

ｇ）東独版の解釈の問題点

底本にしたのは東独版であるが、その解説に以下のようなものがあった。

＜モーリッツ・ハルトマンは、当時シュトゥットガルトで暮らしていた民主主義的オーストリア人作家であるが、一八六八年の『アウグスブルク一般新聞』の第七週号において、この長編小説の初版について論じ、並外れて賢く、繊細な批評をしている。しかし彼はラーベの解決の問題点を見逃していない。ハルトマンの疑問は、何故この著者は、「自分の主要人物達をとても好ましい人物に描いて、それで我々が結局、幾多の葛藤、戦いの末に、ある無条件の絶対的幸福を願いたくなるようにしているのか、というものである。その上、我々は余りに詩的な気分にさせられて、それでひょっとしたらまさにこの同じ読み方のせいで、こう思いたくはなかろう、つまり我らの主人公は、その俗物ぶりがあからさまに描かれているこれと同じ世界で、自分の楽しい日々の晩年を過ごして、自ら俗物と化してしまうのだと思いたくはなかろう。しかしまた他方、十九世紀の申し子として、余りに実用的に描かれていて、主人公が、心地良い、無為徒食を忘れているのも見たくはなかろう」。東独版はこの疑問が未解決であると見ている＞。(Raabes Werke, Bd.3. S.398. Aufbau-Verlag. 1976)

しかしこれは主人公の処世は、市民社会に「面従腹背」する他なくて、それが嫌なら、作者のように「面従腹背」の主人公を描く作家になるしかないという点を理解していないようである。ゲーテが手本であり、ヴァッサートレーターが手本であるとすると、例えば道路検査官は俗物ではないし、また過剰に面従もしないであろう。作者は具体的職を明言していない。しかし何の職であれ、主人公がその職に従事すれば、俗物の見せかけではあっても、俗物そのものではないし、その職に過労死するほど適応するとも思えない。具体的職を上げよというのは、笑止なことで、作中の少尉が『ファウスト』を手本に土壌改良と灌漑事業に励むようなもので[167頁]、滑稽なことであろう。小説に具体的に将来の素敵な職業を求めるのは、阿呆なことで、作家は現在の問題点を呈示できれば、それがそのまま問題解決に等しいものであろう。訳者の職業は、語学教師であったが、その昔、岡山の先輩教授達は、世を忍ぶ仮の姿と自らの職業を笑っておられた。この仮の姿という点を押さえれば、『アブ・テルファン』における今浦島の職業選択は解消するであろう。

2.『フォーゲルザングの文書』　1896

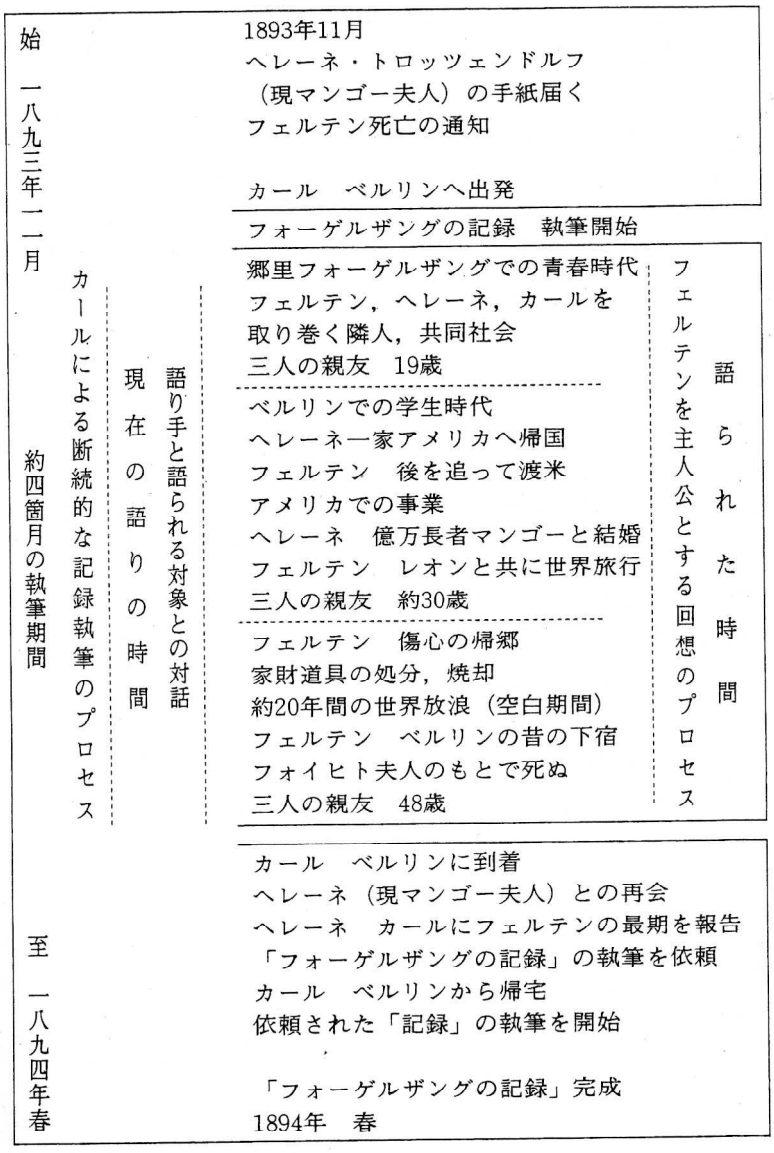
ドッペルゲンガーとしてのカールとフェルテン

この作品のモットーはシャミッソーの『影を失くした男』から採られている。「我らは昔、影に本性を与えていたが、今や本性が影となって、消えて行く」。どうしてこれがドッペルゲンガーの問題となるのか、もう簡単には説明できないが、オットー・ランクの古典的名著『二重自我』で、シャミッソーの作品はそのように取り扱われている。その末尾の結論を引くと、これは二重自我一般のことであるが、und so kommt es, daß der die narzißtische Selbstliebe verkörpernde Doppelgänger gerade zum Rivalen in der Geschlechtsliebe werden muß oder daß er, ursprünglich als Wunschabwehr des gefürchteten ewigen Unterganges geschaffen, im Aberglauben als T'odesbote wiederkehrt.「かくて、ナルシス的な自己愛を体現した二重自我はまさに性愛のとき、ライバルにならざるを得ないし、あるいは、怖れていた永遠の消滅に対する願望的防御として本来創造されたものが、迷信では死神の使者として再来するということになろう」。要するに、二重自我の問題の根底にあるのは、死を恐

れている原初的自己愛であって、それ故、作家はとにかく文書化して、死神に抵抗するというわけで、これを引用するのは、結局訳者にとって、この解釈が一番妥当であると思われるからである。

この作品については、すでに日本でも幾つか論文もあり、梗概も紹介されている。それを引用してもいいが、やはり超簡単に済ませたい。一人の富豪と結婚して今は未亡人の女性Cから手紙が語り手の主人公Aのもとに届く、昔の共通の友達Bが亡くなった、と。Aは法学専攻で、地方都市で一応名士として、出世しており、妻子もいる。BはAの隣りに住んでいた友で、文学部専攻で、太宰治風。Cはアメリカに移住した一攫千金を夢見る父の影響下とBの母親の影響下に育ち、結局富豪と結婚する。一方Bは、ベルリンでフランス文化を出自としながらも父親は商業人であるDという控え目な女性と知り合い、Dの父親に弟子入りして、ランボー風に商売人を目指して、Cを得ようとするが、結局は結ばれない。ベルリンでAと会ったCはこの自分らの偉大な恋を文書にまとめるよう頼む。Aは子孫への警告を主に考えながら執筆する。

カール・クルムハルト：作中人物としての語り手



左記の表は
平田達治：ラーベの『フォーゲルザングの記録』。（ドイツ近代小説の展開、郁文堂、1988、138頁）

Aはカール・クルムハルト
Bはフェルテン・アンドレス
Cはヘレーネ・トロッツェンドルフ
Dはレオニー・デボー

a) 恋愛小説 ー 『サイコ』喜劇

まず恋愛小説の公理から見ると、この小説も、フェルテンの恋愛を主に見れば、本命のヘレーネと、二番手の本命レオニーが現れていて、普通ならば、レオニーで収まる話しであるが、作者はこれをずらして、フェルテンはレオニーの愛の視線に気付かなかったとしている[392 頁等]。勿論気付かないふりがドイツ人でも作法であろう。そこで二人の女性の分担を分析すると、ヘレーネは心も良いが、金持ち志向、つまり肉体派の美人、レオニーは勿論美女であろうが、心が格段に良い。そこでフェルテンはやはり男で、ヘレーネが忘れられない。それで結末は、ヘレーネが臨終のフェルテンに手遅れの変わらぬ愛の誓いを告白するという喜劇的サイコ劇に仕上げている。作者の腕は確かで、一読すると悲恋物に見えるが、解説を書くとなるとどうしても喜劇に見える。訳者がこの悲恋物で面白いと思った点は次の二点である。

まず一点目は、フェルテンの後の母親代わりのフェンシング教師夫人がカールにヘレーネを紹介するとき、わざとかどうか不明であるが、ヘレーネのことを二番手の本命レオニーと呼び間違える点である。

＜「まあ、哀れな愛しい御寮はん、語り尽くすことです。上級参事官殿はいつでも立派な聞き手でしたから」と彼女は言って、頭を振りながら、付け加えた。「今この時ほど様々な世界から人々が私の許にお見えになることはありません。それで相手に応じて、別の言い方をしなければなりません、レオニー御令嬢、 ー」。

ムンゴー夫人は野蛮に肩を竦めて、立腹したので、老夫人は今一度頭を振って、明かりを少しばかりテーブルの中心へ更に移し、そしてヘレーネ・トロッツェンドルフとカール・クルムハルトを、フェルテン・アンドレスの許、二人っきりにして出て行った>。
[457 頁]

この後気分を害した、ヘレーネがレオニーのことを嫉妬して以下のような展開。自分がフェルテンの本命、本妻格であると主張する。

＜「...するとあの人は私の額の上を今一度、手で撫でて、微笑しました。『私の好い娘だ』と。これはやはり故郷の森の中と変わらず、彼はそう言って、私に接吻や引っ掻きや、涙や地団駄踏みに誘ったものでした。あなた方の優しい、敬虔なレオニーが、彼と私について何を知っていましょう。故郷での、あなたの愛する家のあなたの愛しい夫人の方が、カール、ひょっとしたらもっと私ども二人のことを知っているかもしれません。だって、ご夫人はただ夢の中でのみ生きているのではなく、あなたや、それに子供達を持っていて、単に何世紀もの前からの父祖の歴史とか、今日の神の世界のみを有しているわけではありませんから。何でこの敬虔な女、優しい女、穏やかな女が、私と彼の間に割り込んでくるわけ。あの女、ここで何を望んでいるの。私よ、私、私、ムンゴー未亡人のみが、権利があって、この空虚な部屋で、彼との戦いを最後まで戦うのです」＞[459 頁]。

つまり、フェルテンの最後は肉体（大富豪）の妻、心の妻、心のお母さんと合計三人が現れて、これは誰が見ても幸せな人生であろう、手遅れではあったが。終わり良ければ、すべて良し。もっとも学者先生の見方は異なるようであるから、読者はそれぞれこのフェルテンの人生をどう見るか、各自判断されたい。

次にこのフェルテンとヘレーネの恋愛で顕著なのは、文学趣味に毒されている点である。

ギムナジウムの時代に、語り手のカールを含めてこの三人は、火事騒ぎを引き起こして

いるが、それは、古典の宿題を劇化した遊びである。父に対して語り手は釈明している。

<いや、私はコルネリウス・ネポス[ローマの歴史家、紀元前 100 頃ー25]の本、『クリニアスの息子たるアルキビアデスの生涯』[殺害されたアルキビアデスに遊女ティマンドラは手厚く自分の外套をかけた]を眼前に有して、私の「老公」に対し不安一杯の心地で、目からは涙がこぼれ、熱く、黒く汚れて、震える手であった。私は翻訳の宿題があった>[350 頁]。

更に臨終の回想では、ヘレーネは自分とフェルテンの関係をシェークスピアを引き、更ゲーテを引いている。

＜「マルクス・アントニウスとそのエジプトの女王、彼らも私どもと同じ年齢でした。.... そう、お気づきのように、私は彼のために歴史と文学史をも演じたのです。私の本からは別のカップルも出現します。1813年10月18日に、あなた方の老ゲーテは、　ー　もはや若いゲーテ、私どもに有害な詩を、私どもの生を毒した詩を作ったゲーテではありません。

ー　いや、私は何を言いたかったのか。そう、あなた方の老ゲーテは、その最後の素敵な詩を作りました。　ー　自分の寵臣[エセックス伯]の頭を刎ねさせなければならなかったイギリスのエリザベス女王に寄せるものです」＞[459 頁]。

要するに現実と同時に文学作品の世界があって、自分達の恋愛も何か文書化されたら、文書化されていない、世間の普通の現実世界の恋愛よりましだと思っている気配がある。現実に結ばれなくても、文章として残ればいいわけで、ヘレーネは事実文章化を頼んでいる。

これは逆に考えれば、現実に二人が結ばれていたら、文書化は必要ないわけである。従って、フェルテンが振られるのは、文学趣味からすれば、必然なわけで、誰も読者は金満家同士の縁組みは読みたくもないであろうから、極貧で野垂れ死にに近い方がいいわけである。太宰治は文学通でこの間の事情をこう述べている。

「トランプの遊びのように、マイナスを全部あつめるとプラスに変るという事は、この世の道徳には起り得ない事でしょうか」。[太宰治『ヴィヨンの妻』]

文学世界では、このマイナスを集めて、『サイコ』仕立てにし、ベストセラーを狙い、成功する場合があるし、これはプラスを集めるより成功し易い。例えば『清貧の思想』、これは『サイコ』と同じ、精神の問題に金は関係ないと説いて、儲ける仕掛け。

しかし勿論現実には野垂れ死にの可能性もあるのであるから、『サイコ』仕立てはリアリティーがある。アインシュタインは現代社会を以下のように見ている。

Wir haben das Fliegen gelernt und können mit Hilfe elektrischer Wellen Nachrichten und Neuigkeiten ohne Schwierigkeit über die ganze Welt verbreiten.

Dagegen ist die Produktion und Verteilung der Güter so wenig organisiert, daß ein jeder in der beständigen Furcht lebt, aus dem ökonomischen Kreislauf ausgeschlossen zu werden und dem Elend anheimzufallen.「我々は飛行を習得し、電波の助けを借りて、情報やニュースを支障なく全世界に伝達できる。これに対し、財産の生産と分配はほとんど組織化されていないので、誰もが経済的循環から排除されて、悲惨な目に遭うかもしれないという絶えざる恐怖の中で暮らしている」[出典は手許にない、昔作成の文法教科書より]。

アインシュタインという抜群の知性の持ち主でも、現代社会を生き抜くことには恐怖を覚えるというのであるから、普通の凡庸な我々が、無意識に息苦しさを覚えるとしても、それは普通のことであろう。恐ろしい世の中ではある。

b) 引用世界　ー　馬子にも引用

すでに冒頭の手紙の中でフェルテンの引用癖は指摘されている。＜あなたに、ドイツ語やラテン語で古典作家を引用するよう強いたときのよう＞な表情の臨終であったとされる[344 頁]。幼い頃の「流れ星」の願掛けも、八月十日頃[258年に処刑された、カトリックの聖人、ラウレンティウス、その記念日の伝説]、フェルテンは＜「聖ラウレンティウスの涙だ」＞[371 頁]と出典を述べている。作者本人が、自在に様々な作家を引用しているから、個々の作中人物の引用と区別するのは、難しいが、特に印象的なものは、やはり詩句のフレーズで、特に以下の二つはよく反復され、それで一つの芝居の中での、お囃子、通奏低音の効果を上げているように思われる。

一つはレオニーの歌で、フェルテンはこれでヘレーネのことを想うという二重の仕掛けになっている。

＜低い谷よ、隆起せよ、
高い山よ、沈下せよ。
邪魔だ、邪魔、
最愛の人が見えない＞[フランスの古民謡][402 頁他]。

もう一つはゲーテの詩で、現実はこの内容の反対という仕掛けになっている。

＜感情を棄てろ。
動じやすい心は、
惨めな財産、
この揺れる大地の上では。[Drei Oden an meinen Freund Behrisch,1767]＞[428 頁他]。

なおカールとフェルテンが二重自我に近いことは、作中人物も言っている。

＜「おや、お二人の似たもの同士。下の、お宅らフォーゲルザング鳥籠からの二羽のラブバード[御神酒徳利]」＞[429頁]。これはカールの義兄の言葉であるが、二羽のラブバードの原語は、die zwei Inséparables、これはもう二重自我と言っていいだろう。

c) 断捨離芸と類人猿役者

フェルテンは母親の死後、故郷を去るとき、家の処分をし、まず馴染みの家具を燃やして、暖を取り、最後は近所の人々に自由に持って行かせている。これは今の日本では、断捨離として、格別珍しい光景ではないであろうが、当時のドイツでは、女中や主人公の妻から薄気味の悪い行為として嫌がられている。日本の建物は数百年持つものは稀であるのに対し、ドイツの建物は日本のよりはるかに頑丈であるという違いはあるが、しかしこれはさほど騒ぐ問題ではあるまい。このフェルテンの行為は、本来無一物といった思想家的発想に基づく決意の表明で、宗教家にはよく見られることであろう。「かの人参禅のはじめ家の財宝を持ち出して海に沈めんとす。...俗なれどかくの如く財宝を捨ててこそ、善人とも云われけれ」『正法眼蔵随聞記』

この断捨離の際に、近所の公園の寄席一座の芸人達が居合わせて、その中の一人にその頃進化論の研究の火付け役となったであろう類人猿役の者がいて、フェルテンに対し、自分と同じ境遇の者、即ち現市民社会では、どうしても異端となってしまう境遇の者として語りかけている。

<「気の重い暇な徒然に、私はいずれにせよ、相変わらず、他の霊長目同様に、超越論的人類の研究と取り組んでいます。私は同様に、ヴィッテンベルク[大学、前出ハムレット風]で若干の学期、勉強しまして、それから類人猿に加わりました。貴殿、貴方の評判は、先の週の間、我々の許にも聞こえ、従って私の耳にも入りました。私はそれから時に、興味深く、小一時間一緒に貴方の暖炉の前に座ったものです。ほら、と私は自分に言いました、ここにもまた一人いる。自分の性分を脱却して、一皮剥けた男だ。他の者は単に自分の性分に腹を立てるばかりなのに、と。それでは、まことに良い晩を祈ります。今日の一日ばかりでなく」>[446頁]。

この類人猿役の芸人の出現を見て、訳者はカフカの『断食芸人』を思い出した。フェウルテンの断捨離芸と類人猿役者を背景にすれば、カフカの断食芸人もこの一座に入るものと 思われる。[念のために調べると断食芸人は亡くなっていた]。

ついでにカフカに「掟の門」という謎めいた問答があったと記憶するが、フェルテンの墓場でのハイネの『歌の本』からのフレーズは、カフカのこの門の一解釈に適用出来そうに思われたので紹介する。

<その門前にスフィンクスが横たわっていた。
恐怖と悦楽のふたなり[半陰陽]で、
体と前足は獅子の如く、
頭部と胸は女人に等しい。[ハイネ]
（中略）
「あのユダヤ人[ハィネ]、あるいはセム族のギリシア人は、詩人としての自分の権利を正しく使用していると言える。彼が、我々他の散文家も同じだが、獅子の前足の謎メイタ美女を違う門[人生の家]の番人として、あるいは謎かけの女人として置いた時にはな」とフェルテンは言った。我々が教会墓地からの帰路、かの我らの子供遊びの夕べ、月光の夕べに言及したときのことであった>[438頁]。

3. 『ホラッカー』 1876

『一八六六年叙事詩』と牧歌

ＡＢＣ三人の高校教師を軸に話しが展開する。Ａは副校長で、恐妻家、Ｂは美術教師で新婚。Ｃは新進気鋭の『一八六六年叙事詩』を練っている文学青年。Ａ、Ｂが徒歩旅行に出掛け、山で空腹の老婆に出会う。聞くと、当時恐ろしい強盗とされるホラッカーの母で未亡人、息子ホラッカーは飢えているという。この老婆は、息子19歳を連れてきて、息子は空腹で、道端で寝て休んでいる夫人から食べ物を失敬しただけなのに、大騒ぎになっている、感化院を逃げたのは、自分の彼女の心を確かめるためだったと証言する。しかしＢがホラッカーをスケッチしながら、検察官も喜ぶだろうと発したことから、ホラッカーが逃げる。Ｂが追いかける間に、Ａは目的地の旧知の牧師館へ下って、この出来事を語る。その間、ホラッカーに関する新聞記事を知った、ホラッカーの彼女がベルリンから徒

歩で村に帰って来ており、村人によって牧師館へ連行されて来る。牧師夫妻がこの娘とホラーカーの保護司役であったのである。Ｂも牧師館に戻って来て、ホラッカーは牧師の迎えを待っていると告げる。その間、教師二人の町では、二人がホラッカーに殺されたという噂が広まっている。腑に落ちないＡの妻が、青ざめているＢの妻を連れて、用心と教育のためにＣを連れて、馬車で不確かな時間を共有して、牧師館へ向かう。検査官も、実はパイプ探しが主目的であったが、牧師館へ到着して、元来すべて大袈裟であったと判明する。その前に、副校長のＡは、村人に対し、ホラッカーの三倍悪太郎の諸君と話しかけ、牧師の肩を持って、説教をしている。事件は1867年7月25日のことであり、その前年1866年は普墺戦争である。一般にこの作品は小説舞台の牧歌的雰囲気とこの舞台の外の大きな出来事との落差に注目すべきであろう。ジャン・パウルの牧歌でも、牧歌の世界の外は、フランス革命等動乱であり、その反動として作者は牧歌を守ろうとするのであろうが、人心はやはり血が騒いでいると察せられる。（Ａはヴェルナー・エッカーブッシュ、Ｂはヴィントヴェーベル、　Ｃはノイバウアー）

a)　作者自身が意図してこの牧歌世界の外部の事件を詳述している。コピーして張り付けるだけなので以下引用しておく。

＜一八六七年の七月、この月は珍しい月であった。驚くほど、あらゆる紛糾する出来事が世界で生じて、すでに混乱した人類に、更に慎重に考え、熟慮するよう要請がなされた。パリでは万国博覧会が開かれ、ルイ・ナポレオン、つまりナポレオン三世[在位1852-71]は，メキシコのマキシミリアーノ[Maximilian Joseph 1832-67 、ナポレオン三世によってメキシコ皇帝]がまさにケレタロで劣等なファレス[Benito Juarez 1806-72、フランスに抵抗]によって射殺されてしまっても、自分にとっては、とても簡単なことで、まことに心楽しい気分であるかのような振りを相変わらずしていた。レディーの髷の中では美食の胞子虫類が発見された。サンタ・アンナ[Antonio Lopez de Santa Anna 1797-1876]、以前のメキシコ共和国の大統領もこの年に亡くなった。[ラーベの勘違い]。ハインリヒ六十七世[1789-1867]、侯爵領、ロイス家の、弟系家系の支配の君主もその父祖の許に身罷った。ゲーラ市[チューリンゲン]は喪である。ギリシアの国王オットー[バイエルンの王家出身、1862年追放]が逝去した。しかしアテネが悲しんでいるのか、定かでなかった。いずれにせよ、ドイツではトゥルン・ウント・タクシス侯が四百年間の郵便特権を放棄したとき[プロイセンの圧力、1867]、誰も弔意を表さなかった。相変わらず一八六六年の戦争については多くの本や冊子等が現れている。しかし最大の驚異はこの月末に生ずるであろう。トルコ人たちがライン河畔に登場するのである。スルタン、アブドゥル・アジス[1830-76]がコーブレンツに国王ヴィルヘルムを訪問する＞[245頁以下]。

ｂ）芸術家の問題点

ノイバウアーは徒歩旅行に誘われても、辞退しているように、その創作魂は、現実の経験よりは、書斎での本と格闘しながらの、空想力が勝負と見ている。これはジャン・パウルを初め、ラーベにも基本的には当てはまる態度であろうが、しかし瑣末な人間関係からなる現実世界を無視しては、結局は観念化し、行き詰まる態度であろう。所謂ロマン派と呼ばれる作家は、才能があっても、現実逃避では行き詰まるというのが、普通の文学史の

理解の筈である。ノイバウアーを批判することは容易であるが、しかしこのキャラは矮小化された巨匠達の創作魂と見た方がよさそうである。また美術教師のヴィントヴェーベルは格別問題なさそうであるが、しかし対象素材の人間を見つけたとき、その人間の現在の苦境を無視しがちになるように、絵の為にはローマを燃やしても構わないといった風な芸術家魂に通ずるものが窺われる。もっとも問題とするレベルではない。この美術教師について訳者にとって一箇所、すこぶる印象に残った。それで引用しておく。

＜彼は世間を経由しての自分の道程を振り返ってみて、舌に色々な酸っぱく、甘く、苦い後味を感じた。色々な衝突なしには、平凡な画家にして、立派なスケッチ教師にはなれない。　―　＞ [288 頁]。

c)『一八六六年叙事詩』の意味、ドイツ人教師礼賛

作中ノイバウアーは『一八六六年叙事詩』を練っているそうであるが、これは作中の出来事の前年に当たり、プロイセンの勝利した戦争のことであろう。この戦争の勝利に関して、注釈によると、プロイセンの教師がしっかり生徒を教えているから勝利したのであって、勝利はプロイセン教師のお蔭という言い方が流行ったらしい。従って、ノイバウアーが張り切る背景が分かるわけである。日本でも明治以来、富国強兵策で教育の重要性は承知であろうが、現在でも教育への投資は、間接的防衛費と同じであって、防衛費を増やそうと思うなら、教育費、大学の運営費を減らすなど論外とわかるであろう。

この教師礼賛の注釈は以下であるが、他に238頁参照。

＜「ここにモルトケ[Graf von Moltke,1800-1891,1866年ケーニヒグレーツで勝利]がいる」と副校長は叫んだ。そして栓は分別して、より高度の戦術的知性に従った。かくて、この場合、全く特別に、　―　ドイツ人学校教師に従った。[ドイツ軍はプロイセンの教師効果で、規律正しく、1866年の戦いで勝利したとされた]＞[258頁]。

＜学校教師がケーニヒグレーツ近郊での戦いでは最近勝利したと、相変わらず人々はそんなことをお喋りしています＞[307頁]。

d）訳語に迷った箇所

＜「私はまた捕まったら、更に二年間服することになろう。老婆はそれで楽になることもない、　―」。

「皆さん、息子が逃げ出したのは、つまり、恋心の故です」とホラッカー未亡人は嗚咽した＞[266 頁] 。　Es war nämlich von wegen der Liebe, meine Herren, daß er durchgegangen ist!　最初下線の箇所を「母親思いのせい」としていた。ホラッカーが奥ベルリンの恋人の許まで行ったのか、どのようにして恋人が奥ベルリンにいると分かったのか、今でも釈然としないのであるが、ここはやはり普通に恋心と変えた。ホラッカーが恋人ロットヘンと会っているのであれば、ロットヘンが慌てて『走れメロス』風に村まで駆けつけるのも絵になるようであり、ホラッカーが奥ベルリンまで走る姿も普通ドイツ人は『走れメロス』風に脳裏に浮かべているのかも知れない。本稿では、太宰がよく思い浮かぶ。

e） 高台からの眺め。

『ホラッカー』は高台からの眺望の描写で始まる。これまでラーベの作品を翻訳して、よく高台から自分の町を眺める場面が多いのに気付いた。面倒なので、一々列挙しないが、パリのモンマルトルは高台だとラーベ視線で知った。『フォーゲルザングの文書』ではオスターベルクが印象的であるが、ドイツの地方都市の高台に関して、『アブ・テルファン』で、ラーベは以下のように説明している。

＜しかしながら、常にその周辺には、大地の自然的、あるいは人為的高台を有しており、そこから人々はその華麗さを一望し得るのであって、この高台に当地の人々は、折々に、その客人を案内して、客人の驚く様、喜ぶ様を、謙虚な誇りと共に好んで満喫するのである＞[78頁]。

ｆ）ドイツ人のGemütlichkeit

若い頃、ドイツ人からドイツ人には Gemütlichkeit というのが伝統的にあって、これは日本人の「わびさび」に匹敵する独特のものだ、と聞いたことがあった。これまで色々訳して来たが、この概念を直接呈示しているのは、ラーベが初めてであった。勿論他に多くの作家が使用しているのであろうが、「わびさび」同様に今は懐かしい概念かもしれないと推測出来た。

＜しかし彼らはその満足げな姿で、ドイツ国民に対し、更に何千年も続く心情の豊かさ[Gemütlichkeit]を保証していることに気付いていなかった。これは、空ろな手の中の三つのどんぐりに似て、一つの森全体を意味するかもしれないようなものであった＞『アブ・テルファン』[223 頁]。

＜「今晩は、エッカーブッシュ。今晩は、我が最良のヴィントヴェーベル殿。　ー　ヴィンクラーさん、こちらは全く居心地良く[gemütlich]見えます。皆さん、村長は事情を承知ですか」＞『ホラッカー』[336 頁]。

＜「心地良いぞ。...ドイツ風に心地良い[情緒的 gemütlich]、だろう。これは君らの表現だ。この表現は世界で自分らのみであると自慢している。だから、クルムハルト、遠慮せず寛ぎ給え」＞『フォーゲルザングの文書』[439 頁]。

４.『ドイツの月光』 1873

これは『フォーゲルザングの文書』と同じ二人の主人公の話しであり、要するにドイツの市民社会に面従腹背するにはカールのように上手にしなければならず、適応障害になると、フェルテンのように野垂れ死にするか、この作品のもう一方のように、精神がおかしくなるぞというもので、面従腹背の一番のお手本はジャン・パウルである、という結論。

5. ジャン・パウル、ラーベ、ヘッセ、グラス

本年はジャン・パウル没後200年ということで、偶然知ったことを記しておきたい。昨年のラーベ翻訳の解説で、『飢餓牧師』の作中の長老牧師のことを、ヘッセを思わせると苦し紛れに書いていた。まあ、勘は当たっていて、ヘッセ[1877-1962]は1909年、78歳のラーベを訪問しており、『ヴィルヘルム・ラーベ訪問』として発表しており、すでに邦訳もある。以下その邦訳のごく一部を引用する。

「その間にジャン・パウルの本もたくさん読んでおり、今度は数年のうちにラーベの本を一ダース以上読んで、この人物を深く尊敬するようになった。彼は一八五〇年から八〇年のドイツを本当に詩的に描写した唯一の人間であり、夢想的な物語作家であると同時にたくましい批評家であり、厳格だがとても心暖かく自分の民族を愛していた。そしてこれらの厳かな特徴より私になお深い印象を与えたのは、彼の日くありげなユーモアであり、しつこいほどの道楽と遊びであり、回り道や長い道のりへの愛着であり、癖のある扱いづらい人間への嗜好であり、鋭くて時折嘲笑に傾くが、背後には気高い信仰と大きな人間愛を隠し持っていそうな彼の人間理解力だった」。(『ヘルマン・ヘッセエッセイ全集』第四巻、高橋修訳　43頁)

ヘッセとラーベを検索しているとき、次の文芸記事と思われるものを見つけた。
Wilhelm Raabe ist ein Autor geblieben, dessen Modernität noch immer zu entdecken ist - mit allerbesten Referenzen: von Hermann Hesse nachdrücklich empfohlen, von Günter Grass hoch geschätzt, von Arno Schmidt mit Freuden studiert - auch wenn der verbreitete:„ Raabe verträgt man erst richtig ab 50.“

<ヴィルヘルム・ラーベは、その現代性の発見がまだ汲み尽くされていない作家のままであった、　ー　たとえ最良の諸書評に恵まれて、ヘルマン・ヘッセが明白に推薦し、ギュンター・グラスが高く評価し、アルノー・シュミットが喜んで研究していようとも、それにシュミットはこう喧伝しているのであるが、「ラーベは５０過ぎてからようやく正しく分かるようになろう」と>。

そしてギュンター・グラスとラーベの関係、訳は省略、ネット検索、多分書店宣伝。
Das Buch rekonstruiert Entstehung und Inhalt von Helene Grass ‘ Bücherschrank im Danzig der Vorkriegszeit und dokumentiert seine Nutzung durch den jungen Günter Grass. Neben einem Porträt von Grass ‘ Mutter Helene präsentiert der Band Material für zukünftige Studien zu Grass ‘ früher Lektüre wichtiger Werke der Welt- wie der deutschen Literatur. Zudem bietet er exemplarische Fallstudien zu Grass ‘ produktiven Lektüren von Werken Gottfried Kellers, Gustav Freytags und Wilhelm Raabes, u.a. eine völlig neue Lesart der Hundejahre. Nebenbei ermöglicht die Erfassung des gesamten uns bezeugten Buchbestandes, einen weltberühmten Autor als Namenspaten Oskar Matzeraths ausfindig zu machen.

更にギュンター・グラスとジャン・パウル
Grass: Ja, ja, ja. Allein schon das Wort „Materniaden“ hätte eine Jean-Paul'sche Erfindung sein können, ja. Also ein Autor, den ich sehr schätze. Es ist ein Jammer, dass dieser große Klassiker in Deutschland so unbekannt ist.　　ジャン・パウルは私が非常に評価している作家です。この偉大な古典作家がドイツでかくも知られていないのは、嘆かわしい。

以上。

あとがき

今回も校正は初校の一回のみである。これまでの翻訳で一番ミスが多かったようである。語り手の女性を男性と間違えている箇所が二回あった。英語、ドイツ語は女性言葉がないし、兄弟姉妹で長幼の序も余りない。こなれた日本語が望ましいであろうが、しかしドイツ人の独白が鹿児島出身の男の内面に変わっても変であろう。こなれた日本語で、ドイツ人の内面もこのように日本人風に細やかなのか、と勘違いされたら、それは根本的に異文化理解とはなるまい。男の内面も女の内面も同じようなのかもしれないのが、西洋人であるのかもしれないし、よく分からない。個人的には刑事コロンボの声優達の科白風なものを原型にしている。ああいう調子が発明されて、随分訳しやすくなった気がする。中国文学の先生に、先生の訳は大変上手だが、しかし科白が日本人風に思えますとからかったことがある。西洋人は外見が違うから、訳す言葉は日本人風でも構わないのだ、と少し無責任な発言であった。ドイツ人と英国人の調子の違いを訳し分けなさいと言われても難問であろう。今回は以上。付録でアクセスする人が増えて欲しいと期待するが、次第に焼きが回ってくる印象。

2025年3月11日　　恒吉法海

付録：ハインリヒ・フォン・クライスト[1777-1811]　　逸話集

Heinrich von Kleist: Anekdoten

Tagesbegebenheit

Dem Kapitän v. Bürger, vom ehemaligen Regiment Tauentzien, sagte der, auf der neuen Promenade erschlagene Arbeitsmann Brietz: der Baum, unter dem sie beide ständen, wäre auch wohl zu klein für zwei, und er könnte sich wohl unter einen andern stellen. Der Kapitän Bürger, der ein stiller und bescheidener Mann ist, stellte sich wirklich unter einen andern: worauf der &c. Brietz unmittelbar darauf vom Blitz getroffen und getötet ward.

日常の出来事

先のタウエンツィーン[1760-1824]連隊のフォン・ビュルガー大尉[1765-1813]に、新しい遊歩道で即死したあの労務者ブリーツが言った。我ら両人がその下に立っている[雨宿りしている]木は、多分二人には小さすぎるだろう。別の木の下に移ってくれないか。ビュルガー大尉は物静かな謙虚な男で、本当に別の木の下に移った。その後すぐ直接、かの某ブリーツは、稲妻に当たって、亡くなった。

Franzosen-Billigkeit

(wert in Erz gegraben zu werden)

Zu dem französischen General Hulin kam, während des Kriegs, ein ... Bürger, und gab, behufs einer kriegsrechtlichen Beschlagnahmung, zu des Feindes Besten, eine Anzahl, im Potonhof liegender Stämme an. Der General, der sich eben anzog, sagte: Nein, mein Freund; diese Stämme können wir nicht nehmen. – »Warum nicht?« fragte der Bürger. »Es ist königliches Eigentum.« – Eben darum, sprach der General, indem er ihn flüchtig ansah. Der König von Preußen braucht dergleichen Stämme, um solche Schurken daran hängen zu lassen, wie er. –

フランス人の正義

(鉄に彫り込まれるに値する)

フランス人将軍ユラン[1758-1841]の許に、戦争の間、一人の...市民がやって来て、戦時国際法的接収のために、敵国側の利となるよう、一定の数のポントンホーフにある樹木を申し出た。丁度着衣をした将軍は言った。駄目だ、我が友よ、これらの樹木を接収出来ない。「何故ですか」とこの市民は尋ねた、「国王所有のものです」。　ー　まさにその故にだ、と将軍は、彼をちらと眺めて、語った。プロイセンの国王はこのような樹木を必要としている。彼のようなならず者を縛り首に吊すために。　ー

Der verlegene Magistrat

Ein H...r Stadtsoldat hatte vor nicht gar langer Zeit, ohne Erlaubnis seines Offiziers, die Stadtwache verlassen. Nach einem uralten Gesetz steht auf ein Verbrechen dieser Art, das sonst der Streifereien des Adels wegen, von großer Wichtigkeit war, eigentlich der Tod. Gleichwohl,

ohne das Gesetz, mit bestimmten Worten aufzuheben, ist davon seit vielen hundert Jahren kein Gebrauch mehr gemacht worden: dergestalt, daß statt auf die Todesstrafe zu erkennen, derjenige, der sich dessen schuldig macht, nach einem feststehenden Gebrauch, zu einer bloßen Geldstrafe, die er an die Stadtkasse zu erlegen hat, verurteilt wird. Der besagte Kerl aber, der keine Lust haben mochte, das Geld zu entrichten, erklärte, zur großen Bestürzung des Magistrats: daß er, weil es ihm einmal zukomme, dem Gesetz gemäß, sterben wolle. Der Magistrat, der ein Mißverständnis vermutete, schickte einen Deputierten an den Kerl ab, und ließ ihm bedeuten, um wieviel vorteilhafter es für ihn wäre, einige Gulden Geld zu erlegen, als arkebusiert zu werden. Doch der Kerl blieb dabei, daß er seines Lebens müde sei, und daß er sterben wolle: dergestalt, daß dem Magistrat, der kein Blut vergießen wollte, nichts übrig blieb, als dem Schelm die Geldstrafe zu erlassen, und noch froh war, als er erklärte, daß er, bei so bewandten Umständen am Leben bleiben wolle.

当惑した市当局

H 某都市[ハンブルク]の一兵士が、さほど昔ではない時、自分の将校の許可を得ずに、町の見張りを離れてしまった。太古よりの掟で、この種の犯罪に対しては、昔は貴族の襲来があったせいで、重罪であって、本来死刑と定められていた。それでも、明文によってこの掟は廃止されることなく、これの適用は何百年もなされなかった。それで死刑と処罰する代わりに、この罪を犯した者は、慣例により、単なる罰金刑に、つまりこれを町の出納係に納めるよう処分された。しかし上述の男はこの金を納める気が少しもなくて、市当局が驚いたことにこう言明した。自分は、とにかくそれが然るべきことなので、法に従って、死ぬつもりだ、と。一つの誤解を推測した市当局は、この者に代表者を送って、銃殺されるより、数グルデンの金を納める方がどんなに自分にとって有益なことか理解させようとした。しかしこの男は、自分は人生に疲れており、死にたいと思うと主張を変えなかった。それで流血を見たくなかった市当局は、この悪漢の罰金刑を免除するしかなくて、その上彼が、このように事情が変わったのであれば、生きていてもいいと思うと述べたとき、喜ぶことになった。

Der Griffel Gottes

In Polen war eine Gräfin von P..., eine bejahrte Dame, die ein sehr bösartiges Leben führte, und besonders ihre Untergebenen, durch ihren Geiz und ihre Grausamkeit, bis auf das Blut quälte. Diese Dame, als sie starb, vermachte einem Kloster, das ihr die Absolution erteilt hatte, ihr Vermögen; wofür ihr das Kloster, auf dem Gottesacker, einen kostbaren, aus Erz gegossenen, Leichenstein setzen ließ, auf welchem dieses Umstandes, mit vielem Gepränge, Erwähnung geschehen war. Tags darauf schlug der Blitz, das Erz schmelzend, über den Leichenstein ein, und ließ nichts, als eine Anzahl von Buchstaben stehen, die, zusammen gelesen, also lauteten: sie ist gerichtet! – Der Vorfall（die Schriftgelehrten mögen ihn erklären） ist gegründet; der Leichenstein existiert noch, und es leben Männer in dieser Stadt, die ihn samt der besagten Inschrift gesehen.

神の鉄筆

ポーランドに P 某伯爵夫人という高齢なレディーがいて、とても邪険な人生を送って

いて、特に、その家臣達を吝嗇と残忍さで、血反吐が出るほど苦しめていた。このレディーはその死に際して、自分に免罪を与えた或る修道院に財産を遺贈していた。これの見返りに修道院は墓地に、高価な、鉄で鋳造された墓石を置かせて、この墓石には、この事情が壮麗に言及されていた。その翌日、稲妻がこの墓石に落ちて、この鉄を溶かした。そしてこの文字の中で残されていた文字を合わせて読んで見ると、このように読めた。彼女は裁かれた。　ー　この出来事は（聖書学者は説明したいことであろうが)、出典の明らかなものである。墓石はまだ存在しており、この墓石を上述の銘と共に見たこの町の男達が存在している。

Anekdote aus dem letzten preußischen Kriege

In einem bei Jena liegenden Dorf, erzählte mir, auf einer Reise nach Frankfurt, der Gastwirt, daß sich mehrere Stunden nach der Schlacht, um die Zeit, da das Dorf schon ganz von der Armee des Prinzen von Hohenlohe verlassen und von Franzosen, die es für besetzt gehalten, umringt gewesen wäre, ein einzelner preußischer Reiter darin gezeigt hätte; und versicherte mir, daß wenn alle Soldaten, die an diesem Tage mitgefochten, so tapfer gewesen wären, wie dieser, die Franzosen hätten geschlagen werden müssen, wären sie auch noch dreimal stärker gewesen, als sie in der Tat waren. Dieser Kerl, sprach der Wirt, sprengte, ganz von Staub bedeckt, vor meinen Gasthof, und rief: »Herr Wirt!« und da ich frage: was gibts? »ein Glas Branntewein!« antwortet er, indem er sein Schwert in die Scheide wirft: »mich dürstet.« Gott im Himmel! sag ich: will er machen, Freund, daß er wegkömmt? Die Franzosen sind ja dicht vor dem Dorf! »Ei, was!« spricht er, indem er dem Pferde den Zügel über den Hals legt. »Ich habe den ganzen Tag nichts genossen!« Nun er ist, glaub ich, vom Satan besessen –! He! Liese! rief ich, und schaff ihm eine Flasche Danziger herbei, und sage: da! und will ihm die ganze Flasche in die Hand drücken, damit er nur reite. »Ach, was!« spricht er, indem er die Flasche wegstößt, und sich den Hut abnimmt: »wo soll ich mit dem Quark hin?« Und: »schenk er ein!« spricht er, indem er sich den Schweiß von der Stirn abtrocknet: »denn ich habe keine Zeit!« Nun er ist ein Kind des Todes, sag ich. Da! sag ich, und schenk ihm ein; da! trink er und reit er! Wohl mags ihm bekommen: »Noch eins!« spricht der Kerl; während die Schüsse schon von allen Seiten ins Dorf prasseln. Ich sage: noch eins? Plagt ihn –! »Noch eins!« spricht er, und streckt mir das Glas hin – »Und gut gemessen«, spricht er, indem er sich den Bart wischte und sich vom Pferde herab schneuzt: »denn es wird bar bezahlt!« Ei, mein Seel, so wollt ich doch, daß ihn –! Da! sag ich, und schenk ihm noch, wie er verlangt, ein zweites, und schenk ihm, da er getrunken, noch ein drittes ein, und frage: ist er nun zufrieden? »Ach!« – schüttelt sich der Kerl. »Der Schnaps ist gut! – Na!« spricht er, und setzt sich den Hut auf: »was bin ich schuldig?« Nichts! nichts! versetz ich. Pack er sich, ins Teufelsnamen; die Franzosen ziehen augenblicklich ins Dorf! »Na!« sagt er, indem er in seinen Stiefel greift: »so solls ihm Gott lohnen«, und holt, aus dem Stiefel, einen Pfeifenstummel hervor, und spricht, nachdem er den Kopf ausgeblasen: »schaff er mir Feuer!« Feuer? sag ich: plagt ihn –? »Feuer, ja!« spricht er: »denn ich will mir eine Pfeife Tabak anmachen.« Ei, den Kerl reiten Legionen –! He, Liese, ruf ich das Mädchen! und während der Kerl sich die Pfeife stopft, schafft das Mensch

ihm Feuer. »Na!« sagt der Kerl, die Pfeife, die er sich angeschmaucht, im Maul: »nun sollen doch die Franzosen die Schwerenot kriegen!« Und damit, indem er sich den Hut in die Augen drückt, und zum Zügel greift, wendet er das Pferd und zieht von Leder. Ein Mordkerl! sag ich; ein verfluchter, verwetterter Galgenstrick! Will er sich ins Henkers Namen scheren, wo er hingehört? Drei Chasseurs – sieht er nicht? halten ja schon vor dem Tor? »Ei was!« spricht er, indem er ausspuckt; und faßt die drei Kerls blitzend ins Auge. »Wenn ihrer zehen wären, ich fürcht mich nicht.« Und in dem Augenblick reiten auch die drei Franzosen schon ins Dorf. »Bassa Manelka!« ruft der Kerl, und gibt seinem Pferde die Sporen und sprengt auf sie ein; sprengt, so wahr Gott lebt, auf sie ein, und greift sie, als ob er das ganze Hohenlohische Korps hinter sich hätte, an; dergestalt, daß, da die Chasseurs, ungewiß, ob nicht noch mehr Deutsche im Dorf sein mögen, einen Augenblick, wider ihre Gewohnheit, stutzen, er, mein Seel, ehe man noch eine Hand umkehrt, alle drei vom Sattel haut, die Pferde, die auf dem Platz herumlaufen, aufgreift, damit bei mir vorbeisprengt, und: »Bassa Teremtetem!« ruft, und: »Sieht er wohl, Herr Wirt?« und »Adies!« und »auf Wiedersehn!« und: »hoho! hoho! hoho!« – – So einen Kerl, sprach der Wirt, habe ich zeit meines Lebens nicht gesehen.

先のプロイセンの戦からの逸話

イエナ近郊にある村で、フランクフルトへの旅の折、居酒屋亭主が私に語った。戦闘の後、何時間かして、村ではすでに全フォン・ホーエンローエ[ドイツ南西部]皇子の軍が去って、占領を確信したフランス軍に取り囲まれていた時、一人のはぐれたプロイセンの騎兵が姿を見せました、と。そして私に請け合った。この日戦闘に参加した兵士が皆、この者ほどに勇猛であったら、フランス軍は打ち負かされていたに違いありません。仮にフランス軍が実際よりも更に三倍強かったとしましても、と。彼奴は、と亭主は語った、全く埃まみれで、私の居酒屋に現れまして、こう叫びました。「亭主殿」と、そこで「何でしょう」と尋ねますと、「火酒を一杯」と答え、自分の剣を鞘に収めながら、「喉が渇いた」です。おやまあ、と私は言います。友よ、逃げようとなさっているのですか、フランス軍は村の直前に迫っています。「それがどうした」と彼は言って、手綱を馬の首の上に引き、止めます。「一日中何も食べていないのだ」。そこで私は、もうおかしくなっていると思いました。　一　おい、リーゼと私は叫んで、彼にダンツィヒ火酒を一本取って来させ、ほら、と彼の手にその瓶を丸ごと渡しました。「いや、そんなもの」と彼は言って、瓶を受け取らず、そして帽子を取って、「この駄瓶をどこで飲めというのか」。そして「それを注いでくれ」と言って、汗を額から拭います。「時間がないのだ」。さては死神に魅入られていますぞ、と私は申します。ほら、と私は言って、注ぎます。さっさと飲んで行きなされ。多分旨かったのでしょう。「もう一杯所望」と彼奴は言います。その間銃声がすでに四方八方、村中に響いて来ます。私は言いました。もう一杯ですか、ご冗談でしょう。「もう一杯だ」と彼は語って、私にグラスを突き出します。　一「分量を間違うなよ」と彼は語って、髭を拭って、馬上から下に鼻をかみます。「現金で払うからな」。いや、誓いまして、冗談じゃありません。ほら、と私は言って、要望通りにまた二杯目を注ぎ、そして飲み終わると、更に三杯目を注ぎまして、尋ねます。ご満足ですか。「いやさ」　一

と奴さんは首を振ります。「火酒は結構であった。さてと」と彼は言って、帽子を被って、「幾らだ」です。要りません、要りません、と私は答えます。悪魔の名にかけて、早

く消えなされ。フランス人どもがすぐに村へ入って来ます。「さてと」と彼は言って、長靴に手を伸ばします。「それでは悪魔に褒美をやろう」、そう言って、長靴からパイプの燃えさしを取り出し、火口に息を吹き付けた後、言いました。「火を着けてくれ」。火ですか、と私は言って、お気は確かですか。　ー「火だ」と彼は言い、「煙草を一服したいのだ」。いやさ、百万の悪魔に駆られていなさる。おい、リーゼと私は給仕娘を呼びました。彼奴がパイプに煙草を詰めている間に、娘は火を着けます。「よろしい」と彼奴は言って、自分で愛用のパイプを口に持って行き、くゆらせながら、「これからフランス人を痛い目に遭わせよう」。そして帽子を目深に被って、手綱を握り、馬の向きを変えて、攻撃にかかります。無頼漢だ、と私は言い、とんでもない暴虎憑河のならず者だ。飛んで火に入る夏の虫ですぞ。見えませんか、三人の猟騎兵です。もう市門前に止まっています。「あんなもの」と彼は言って、唾を吐きます。そしてこの三人を瞬きしながら目に留めます。「あんな奴らは十人いても、怖くない」。そしてこの瞬間、三人のフランス人が村の中に駆け込んで来ます。「バッサ・マネルカ[あんぽんたん]」と彼は叫んで、馬に拍車をかけ、彼らに突進して行き、実際まことに彼らに飛びかかり、向かって行きます。あたかもホーエンローエ家の軍を全部引き連れている按配です。それで猟騎兵達は、まだ村に更にドイツ軍が潜んでいるかもしれないと案じて、一瞬いつになく怯んで、いやはや、彼奴は一瞬の掌返しの間に、鞍上の三人皆に斬りかかって、広場を駆け回る馬どもも捕まえて、私の側を通り過ぎながら、「バッサ・テレンテテウム[すっとこどっこい]」と叫びました。「亭主、見たかな」そして、「さいなら」、そして「また会おう」。そして「ホホー、ホホー、ホホー」です。　ーー　こんな奴は生涯初めてでした、と亭主は語った。

Mutwille des Himmels

Der in Frankfurt an der Oder, wo er ein Infanterieregiment besaß, verstorbene General Dieringshofen, ein Mann von strengem und rechtschaffenem Charakter, aber dabei von manchen Eigentümlichkeiten und Wunderlichkeiten, äußerte, als er, in spätem Alter, an einer langwierigen Krankheit, auf den Tod darniederlag, seinen Widerwillen, unter die Hände der Leichenwäscherinnen zu fallen. Er befahl bestimmt, daß niemand, ohne Ausnahme, seinen Leib berühren solle; daß er ganz und gar in dem Zustand, in welchem er sterben würde, mit Nachtmütze, Hosen und Schlafrock, wie er sie trage, in den Sarg gelegt und begraben sein wolle; und bat den damaligen Feldprediger seines Regiments, Herrn P..., welcher der Freund seines Hauses war, die Sorge für die Vollstreckung dieses seines letzten Willens zu übernehmen. Der Feldprediger P... versprach es ihm: er verpflichtete sich, um jedem Zufall vorzubeugen, bis zu seiner Bestattung, von dem Augenblick an, da er verschieden sein würde, nicht von seiner Seite zu weichen. Darauf nach Verlauf mehrerer Wochen, kömmt, bei der ersten Frühe des Tages, der Kammerdiener in das Haus des Feldpredigers, der noch schläft, und meldet ihm, daß der General um die Stunde der Mitternacht schon, sanft und ruhig, wie es vorauszusehen war, gestorben sei. Der Feldprediger P... zieht sich, seinem Versprechen getreu, sogleich an, und begibt sich in die Wohnung des Generals. Was aber findet er? – Die Leiche des Generals schon eingeseift auf einem Schemel sitzen: der Kammerdiener, der von dem Befehl nichts gewußt, hatte einen Barbier

herbeigerufen, um ihm vorläufig zum Behuf einer schicklichen Ausstellung, den Bart abzunehmen. Was sollte der Feldprediger unter so wunderlichen Umständen machen? Er schalt den Kammerdiener aus, daß er ihn nicht früher herbei gerufen hatte; schickte den Barbier, der den Herrn bei der Nase gefaßt hielt, hinweg, und ließ ihn, weil doch nichts anders übrig blieb, eingeseift und mit halbem Bart, wie er ihn vorfand, in den Sarg legen und begraben.

天の悪ふざけ

一個歩兵連隊のあるオーダー河畔フランクフルトで亡くなったディリングスホーフェン[Diringshofen, 1776 年逝去]将軍は、謹厳実直な性格の男であったが、同時に幾多の癖、風変わりな点を有していて、晩年、長患いをして臨終の床に臥せっていた時、湯灌婆の手に触れられることへの嫌悪感を述べた。彼は明確に命令して、誰も、例外なく、自分の体に触れてはならない、自分が息を引き取ったときは、すっかりその時の状態のまま、つまり身に帯びているナイトキャップ、ズボン、ナイトガウンの姿のまま、棺に納められ、埋葬されたい、と述べ、そして彼の連隊の当時の従軍牧師、自分の家の友人であったＰ某に、自分の遺言の執行の際、面倒を見てくれるよう頼んだ。従軍牧師Ｐ某は、そのことを将軍に約束した。牧師はどんな偶発事にも邪魔されないよう、将軍が身罷るであろう瞬間から葬儀まで、将軍の側から離れないように努めた。その後何週か経過した後、ある日の早朝、侍従がまだ眠っている従軍牧師の家にやって来て、将軍は真夜中の丁度その頃、すでに穏やかに安らかに、予期されていたように亡くなられたと伝えた　従軍牧師Ｐ某は、自分の約束を忠実に守って、すぐに着替えて、将軍の家へ赴いた。しかし彼は何を目撃したか。

一　将軍の死体はすでにシャボンを塗られて、床几に座っていた。命令に関して何も知らなかった侍従が、一人の床屋を呼び寄せて、上品な供覧のために髭を剃らせていた。従軍牧師はこの奇妙な状況のとき、何が出来たであろうか。牧師は侍従がもっと早く自分を呼ばなかったことを叱責しながら、将軍の鼻をつまんでいた床屋を追い出して、他にどうしようもなかったので、シャボンを塗ったまま、剃り残しの半分の髭のまま、将軍を棺に納めて、埋葬させた。

Charité-Vorfall

Der von einem Kutscher kürzlich übergefahrne Mann, namens Beyer, hat bereits dreimal in seinem Leben ein ähnliches Schicksal gehabt; dergestalt, daß bei der Untersuchung, die der Geheimerat Herr K., in der Charité mit ihm vornahm, die lächerlichsten Mißverständnisse vorfielen. Der Geheimerat, der zuvörderst seine beiden Beine, welche krumm und schief und mit Blut bedeckt waren, bemerkte, fragte ihn: ob er an diesen Gliedern verletzt wäre? worauf der Mann jedoch erwiderte: nein! die Beine wären ihm schon vor fünf Jahr, durch einen andern Doktor, abgefahren worden. Hierauf bemerkte ein Arzt, der dem Geheimenrat zur Seite stand, daß sein linkes Auge geplatzt war; als man ihn jedoch fragte: ob ihn das Rad hier getroffen hätte? antwortete er: nein! das Auge hätte ihm ein Doktor bereits vor vierzehn Jahren ausgefahren. Endlich, zum Erstaunen aller Anwesenden, fand sich, daß ihm die linke Rippenhälfte, in jämmerlicher Verstümmelung, ganz auf den Rücken gedreht war; als aber der Geheimerat ihn fragte: ob ihn des Doktors Wagen hier beschädigt hätte? antwortete er: nein! die Rippen wären ihm schon vor sieben Jahren durch

einen Doktorwagen zusammen gefahren worden. – Bis sich endlich zeigte, daß ihm durch die letztere Überfahrt der linke Ohrknorpel ins Gehörorgan hineingefahren war. – Der Berichterstatter hat den Mann selbst über diesen Vorfall vernommen, und selbst die Todkranken, die in dem Saale auf den Betten herumlagen, mußten, über die spaßhafte und indolente Weise, wie er dies vorbrachte, lachen. – Übrigens bessert er sich; und falls er sich vor den Doktoren, wenn er auf der Straße geht, in acht nimmt, kann er noch lange leben.

シャリテ[慈善]病院での出来事

最近ある馬車に轢かれた男、バイヤーという名前の者は、すでに三回その生涯で類似の事故に遭遇していた。それで枢密顧問官K殿が[Kohlrausch,1780-1826,医師]、シャリテ病院で彼に対して行った診察の際、滑稽な誤解が生じた。最初、彼の両脚が曲がって、捻れて、血に覆われているのに気付いて、この顧問官が、この脚が傷を受けたのかと彼に尋ねると、これに対しこの男はこう答えた。違います。その脚はすでに五年前、別のドクトルによって轢かれたものです、と。この後、この顧問官の横に立っていた一人の医師が、彼の左目が弾けているのに気付いた。しかし、車輪はここの目に当たったのかと尋ねられると、彼は答えた。違います。その目はすでに十四年前に一人のドクトルによって轢かれ出されたものです。最後に居合わせたもの皆が驚いたことに、彼の左側の肋骨部分が惨めに損傷して、すっかり背中の側に回転しているのが分かった。しかし顧問官が、ドクトルの馬車はここを損傷させたのかと尋ねると、彼は答えた。違います。その肋骨はすでに七年前、あるドクトルの馬車で全体轢かれたものです、と。やがてようやく、最近の事故では、左側の耳の軟骨が聴覚器官の内部へ押し込まれているのが判明した。この出来事は、この記事作成者[クライストではなさそう]がこの男本人から聴取したものであり、広間の周りのベッドに寝ていた瀕死の病人達でさえ、彼がこのことを述べる際の冗談めいた投げやりの調子に笑わざるを得なかったものである。　一　ちなみに彼は回復しており、彼が通りに出掛けた時、ドクトル達に用心しておれば、彼はまだ末永く存命であろう。

Der Branntweinsäufer und die Berliner Glocken

Ein Soldat vom ehemaligen Regiment Lichnowsky, ein heilloser und unverbesserlicher Säufer, versprach nach unendlichen Schlägen, die er deshalb bekam, daß er seine Aufführung bessern und sich des Brannteweins enthalten wolle. Er hielt auch, in der Tat, Wort, während drei Tage: ward aber am vierten wieder besoffen in einem Rennstein gefunden, und, von einem Unteroffizier, in Arrest gebracht. Im Verhör befragte man ihn, warum er, seines Vorsatzes uneingedenk, sich von neuem dem Laster des Trunks ergeben habe? »Herr Hauptmann!« antwortete er; »es ist nicht meine Schuld. Ich ging in Geschäften eines Kaufmanns, mit einer Kiste Färbholz, über den Lustgarten; da läuteten vom Dom herab die Glocken: › Pommeranzen! Pommeranzen! Pommeranzen!‹ Läut, Teufel, läut, sprach ich, und gedachte meines Vorsatzes und trank nichts. In der Königsstraße, wo ich die Kiste abgeben sollte, steh ich einen Augenblick, um mich auszuruhen, vor dem Rathaus still: da bimmelt es vom Turm herab: ›Kümmel! Kümmel! Kümmel! – Kümmel! Kümmel! Kümmel!‹ Ich sage, zum Turm: bimmle du, daß die Wolken reißen – und gedenke, mein Seel, gedenke meines Vorsatzes, ob ich gleich durstig war, und trinke nichts. Drauf

führt mich der Teufel, auf dem Rückweg, über den Spittelmarkt; und da ich eben vor einer Kneipe, wo mehr denn dreißig Gäste beisammen waren, stehe, geht es, vom Spittelturm herab: ›Anisette! Anisette! Anisette!‹ Was kostet das Glas, frag ich? Der Wirt spricht: Sechs Pfennige. Geb er her, sag ich – und was weiter aus mir geworden ist, das weiß ich nicht.«
xyz.

火酒の呑み助とベルリンの鐘

以前のリヒノフスキー[1789-1845]連隊の一兵士、救い難く、改善の見込みのない呑み助が、その為に蒙った無数の打擲の後、自分の振る舞いを反省し、火酒を控えたいと約束した。実際、三日間、その言葉は守られた。しかし四日目にはまた飲み潰れてある溝の中で発見された。そして一人の下士官によって、逮捕された。聴取されたとき、何故、自分の約束にもかかわらず、再度酩酊という悪癖に陥ったのかと尋ねられた。「大尉殿」と彼は答えた、「私のせいではありません。私はある商人に仕事を頼まれて、染料木材の箱を持って、遊園地を横切っていました。すると大聖堂から鐘の音が下に響いて来ました。『ポメランツェン、ポメランツェン、ポメランツェン[焼酎名]』と。畜生、鳴りやがれ、鳴りやがれと私は言って、自分の約束を考えて、何も飲まなかったのです。ケーニッヒ通りで、そこで私は箱を引き渡す予定でしたが、ちょっと休むために市役所の前で立ち止まりました。すると塔の上から下へ鳴ります。『キュンメル、キュンメル、キュンメル、　ー　キュンメル、キュンメル、キュンメル[焼酎名]』と。私は塔に向かって言いました。雲も裂けるほど、鳴りやがれ、　ー　そして誓って、私は自分の約束を考えました。喉が渇いていたけれど、何も飲まなかったのです。しかし帰路、シュピッツェル市場を渡るとき、悪魔に襲われました。丁度、三十人以上の客がいたある居酒屋の前に来たとき、シュピッツェル塔の上から下に聞こえて来たのです。『アニゼット、アニゼット、アニゼット[焼酎名]』と。一杯幾らだ、と私は尋ねました。亭主は言いました。六ペニヒです。それをくれと私は言って、　ー　その後私はどうなったか覚えていません」。

Anekdote aus dem letzten Kriege

Den ungeheuersten Witz, der vielleicht, so lange die Erde steht, über Menschenlippen gekommen ist, hat, im Lauf des letztverflossenen Krieges, ein Tambour gemacht; ein Tambour meines Wissens von dem damaligen Regiment von Puttkamer; ein Mensch, zu dem, wie man gleich hören wird, weder die griechische noch römische Geschichte ein Gegenstück liefert. Dieser hatte, nach Zersprengung der preußischen Armee bei Jena, ein Gewehr aufgetrieben, mit welchem er, auf seine eigne Hand, den Krieg fortsetzte; dergestalt, daß da er, auf der Landstraße, alles, was ihm an Franzosen in den Schuß kam, niederstreckte und ausplünderte, er von einem Haufen französischer Gensdarmen, die ihn aufspürten, ergriffen, nach der Stadt geschleppt, und, wie es ihm zukam, verurteilt ward, erschossen zu werden. Als er den Platz, wo die Exekution vor sich gehen sollte, betreten hatte, und wohl sah, daß alles, was er zu seiner Rechtfertigung vorbrachte, vergebens war, bat er sich von dem Obristen, der das Detaschement kommandierte, eine Gnade aus; und da der Obrist, inzwischen die Offiziere, die ihn umringten, in gespannter Erwartung zusammentraten, ihn fragte: was er wolle? zog er sich die Hosen ab und sprach: sie möchten ihn in den ... schießen,

damit das F.. kein L... bekäme. – Wobei man noch die Shakespearesche Eigenschaft bemerken muß, daß der Tambour mit seinem Witz, aus seiner Sphäre als Trommelschläger nicht herausging. x.

先の戦からの逸話

ひょっとしたら、この地球が存続する限り、人間の唇に生じた最大の途方もない洒落を、先に行われた戦争の時に、一人の鼓手が発したのかもしれない。私の記憶では、当時のフォン・プットカマー連隊の一人の鼓手である。すぐに耳にされる通り、ギリシアの歴史にもローマの歴史にもこれに匹敵する人物は見られないであろう。この鼓手は、イエナ近郊でのプロイセン軍敗退の後、武器を調達していて、独力で戦争を継続していたのである。彼は国道で、自分の射程圏に来たフランス人を皆、撃ち倒して、略奪していたので、彼は察知された。彼はフランス人憲兵隊の一群によって捕獲され、町へ連行され、そして然るべきこととして、銃殺刑に処されることになった。その刑が執行される広場に彼は足を踏み入れたとき、自分の正当化のための言上はすべて無駄と分かると、この分遣隊の指揮を執っていた大佐に一つの恩赦を願い出た。大佐、それに彼を取り巻いていた将校達が、何ごとかと緊張して歩み寄って来て、何を所望かと尋ねたとき、彼はズボンを引き下げて、語った。自分のここ[肛門]を狙って撃って欲しい、F[皮、肌]にL[穴]が出来ないように、と。　ー　かくてこの[太鼓]鼓手は、その洒落によって、鼓手として自分の世界を忘れていなかったというシェークスピア的性格に人々は気付かざるを得ないであろう。

Anekdote［Bach, als seine Frau starb...］

Bach, als seine Frau starb, sollte zum Begräbnis Anstalten machen. Der arme Mann war aber gewohnt, alles durch seine Frau besorgen zu lassen; dergestalt, daß da ein alter Bedienter kam, und ihm für Trauerflor, den er einkaufen wollte, Geld abforderte, er unter stillen Tränen, den Kopf auf einen Tisch gestützt, antwortete: »sagts meiner Frau.« –

逸話

バッハは自分の妻が亡くなったとき、葬儀の準備をすることになった。しかしこの哀れな男は、万事妻を通じて手配する習慣であった。それで昔からの従者が来て、自分が購入しようと思う喪章の紗の帯の代金を要求した時、バッハは、静かに涙に暮れて、頭をテーブルの上で支えて、答えた。「私の妻に言ってくれ」。　ー

Französisches Exerzitium
das man nachmachen sollte

Ein französischer Artilleriekapitän, der, beim Beginn einer Schlacht, eine Batterie, bestimmt, das feindliche Geschütz in Respekt zu halten oder zugrund zu richten, placieren will, stellt sich zuvörderst in der Mitte des ausgewählten Platzes, es sei nun ein Kirchhof, ein sanfter Hügel oder die Spitze eines Gehölzes, auf: er drückt sich, während er den Degen zieht, den Hut in die Augen, und inzwischen die Karren, im Regen der feindlichen Kanonenkugeln, von allen Seiten rasselnd,

um ihr Werk zu beginnen, abprotzen, faßt er mit der geballten Linken, die Führer der verschiedenen Geschütze（die Feuerwerker）bei der Brust, und mit der Spitze des Degens auf einen Punkt des Erdbodens hinzeigend, spricht er: »hier stirbst du!« wobei er ihn ansieht – und zu einem anderen: »hier du!« – und zu einem dritten und vierten und allen folgenden: »hier du! hier du! hier du!« – und zu dem letzten: »hier du!« – – Diese Instruktion an die Artilleristen, bestimmt und unverklausuliert, an dem Ort wo die Batterie aufgefahren wird zu sterben, soll, wie man sagt, in der Schlacht, wenn sie gut ausgeführt wird, die außerordentlichste Wirkung tun.

Vx.

模倣すべきフランス人の教練

ある戦闘の端緒に、ある砲兵中隊の位置を、敵側の大砲を計算に入れて、あるいは破壊するために、配置を正確に定めようと思っている一人のフランス人砲兵隊長は、まず選別した地の中心に立つそうである。それは墓地であろうと、穏やかな丘であろうと、森の先端であろうと構わない。この隊長は、剣を抜いて、帽子を目深に被って、敵の砲弾の雨あられの中、四方八方がらがらと音立てて台車から砲身が外され、その仕事の開始のために準備がなされる際、左手を固めて、様々な砲台のその砲兵の（火付け師[軍曹]の）胸を掴んで、そして剣先で地面の一点を示して、こう語るのである。「ここでそなたは死ぬ」、そして相手を見つめる。　一　そして別な砲兵に、「ここでそなただ」、　一　そして三番目、四番目、そして皆と続く。「ここでそなただ、ここでそなただ、ここでそなただ」。　一　そして最後の者に「ここでそなただ」。　一一　砲兵中隊が死ぬべく配置される所で、このように砲兵へ、明確に、文章化もせずに指示することは、それが上手く遂行されると、戦闘で並外れた効果を発揮すると言われている。

Rätsel

Ein junger Doktor der Rechte und eine Stiftsdame, von denen kein Mensch wußte, daß sie mit einander in Verhältnis standen, befanden sich einst bei dem Kommandanten der Stadt, in einer zahlreichen und ansehnlichen Gesellschaft. Die Dame, jung und schön, trug, wie es zu derselben Zeit Mode war, ein kleines schwarzes Schönpflästerchen im Gesicht, und zwar dicht über der Lippe, auf der rechten Seite des Mundes. Irgend ein Zufall veranlaßte, daß die Gesellschaft sich auf einem Augenblick aus dem Zimmer entfernte, dergestalt, daß nur der Doktor und die besagte Dame darin zurückblieben. Als die Gesellschaft zurückkehrte, fand sich, zum allgemeinen Befremden derselben, daß der Doktor das Schönpflästerchen im Gesicht trug; und zwar gleichfalls über der Lippe, aber auf der linken Seite des Mundes. –

（Die Auflösung im folgenden Stück）

謎々

法学のある若い博士と一人の修道会レディーとが、二人は互いに関係があることを誰にも知られていなかったが、あるとき、町の司令官の許、数多くの声望ある人々の社交の場で出会うことになった。そのレディーは、若くて、美しく、その当時の流行で一つの小さな黒い黒子を顔に付けていて、それもすぐ唇の上、口の右側であった。何らかの偶然で、その社交の人々が一瞬その部屋を遠ざかり、ただ博士と上述のレディーだけが、その部屋

に残ることになった。社交仲間が戻って来ると、この人々が一様に訝しく思ったことに、博士が顔に黒子を付けていた。それも同様に唇の上であったが、しかし口の左側であった。
（その謎解きは次作）［勿論不要］

Korrespondenz-Nachricht

Herr Unzelmann, der, seit einiger Zeit, in Königsberg Gastrollen gibt, soll zwar, welches das Entscheidende ist, dem Publiko daselbst sehr gefallen: mit den Kritikern aber（wie man auch aus der Königsberger Zeitung ersieht）und mit der Direktion viel zu schaffen haben. Man erzählt, daß ihm die Direktion verboten, zu improvisieren. Herr Unzelmann der jede Widerspenstigkeit haßt, fügte sich diesem Befehl: als aber ein Pferd, das man, bei der Darstellung eines Stücks, auf die Bühne gebracht hatte, inmitten der Bretter, zur großen Bestürzung es Publikums, Mist fallen ließ: wandte er sich plötzlich, indem er die Rede unterbrach, zu dem Pferde und spach: »Hat dir die Direktion nicht verboten, zu improvisieren?« – Worüber selbst die Direktion, wie man versichert, gelacht haben soll.

通信員の報告

しばらく前から、ケーニッヒスベルクで客演をしていたウンツェルマン［Unzelmann, 1753-1832］氏は、肝腎のことであるが、当地の観客にはとても受けていた。しかし批評家達や（ケーニッヒスベルク新聞から分かるように）、それにまた監督とは色々問題があった。監督は彼に対して、即興を禁じたと噂されている。ウンツェルマン氏はすべて反抗心を嫌っていて、この命令に従っていた。しかしある作品の上演のために舞台へ連れ出された一頭の馬が、観客が大変狼狽したことに、糞を垂れた時、彼は突然、話しを中断して、馬の方を向いて、語った。「即興は監督に禁じられておろうが」と。　ー　これに対しては監督さえも笑ったのは間違いないと人々は請け合っている。

Anekdote［Ein Kapuziner begleitete einen Schwaben...］

Ein Kapuziner begleitete einen Schwaben bei sehr regnichtem Wetter zum Galgen. Der Verurteilte klagte unterwegs mehrmal zu Gott, daß er, bei so schlechtem und unfreundlichem Wetter, einen so sauren Gang tun müsse. Der Kapuziner wollte ihn christlich trösten und sagte: du Lump, was klagst du viel, du brauchst doch bloß hinzugehen, ich aber muß, bei diesem Wetter, wieder zurück, denselben Weg. – Wer es empfunden hat, wie öde einem, auch selbst an einem schönen Tage, der Rückweg vom Richtplatz wird, der wird den Ausspruch des Kapuziners nicht so dumm finden.

逸話

あるカプチン派僧侶が、とても雨脚の強い天候のとき、一人のシュヴァーベン人に付き添って、絞首台へ向かった。この死刑犯罪者は途中何度か神に対して、こんなにひどい、詰まらない天候のときにかくも辛い歩行をしなければならないことを嘆いた。このカプチン派僧侶は、この犯罪者をキリスト教徒らしく慰めて、言った。阿呆だな、そんなに大層に嘆くことはない。そなたはただ行きさえすればいいのだ。私の方は、この天候のときに、また同じ道を戻らなければならないのだ、と。　ー　天気の良い日であってさえも、処刑

場からの帰路はいかに陰鬱に思われるものか、実感したことのある者は、このカプチン派僧侶の言葉をそれほど馬鹿げたことには思わないであろう。

Anekdote［Zwei berühmte englische Baxer...］

Zwei berühmte englische Baxer, der eine aus Portsmouth gebürtig, der andere aus Plymouth, die seit vielen Jahren von einander gehört hatten, ohne sich zu sehen, beschlossen, da sie in London zusammentrafen, zur Entscheidung der Frage, wem von ihnen der Siegerruhm gebühre, einen öffentlichen Wettkampf zu halten. Demnach stellten sich beide, im Angesicht des Volks, mit geballten Fäusten, im Garten einer Kneipe, gegeneinander; und als der Plymouther den Portsmouther, in wenig Augenblicken, dergestalt auf die Brust traf, daß er Blut spie, rief dieser, indem er sich den Mund abwischte: brav! – Als aber bald darauf, da sie sich wieder gestellt hatten, der Portsmouther den Plymouther, mit der Faust der geballten Rechten, dergestalt auf den Leib traf, daß dieser, indem er die Augen verkehrte, umfiel, rief der letztere: das ist auch nicht übel –! Worauf das Volk, das im Kreise herumstand, laut aufjauchzte, und, während der Plymouther, der an den Gedärmen verletzt worden war, tot weggetragen ward, dem Portsmouther den Siegsruhm zuerkannte. – Der Portsmouther soll aber auch Tags darauf am Blutsturz gestorben sein.

逸話

二人の著名なイギリス人ボクサー、一人はポーツマス生まれ、もう一人はプリマス生まれで、何年も前から、出会わないまま、互いの評判を耳にしていたが、二人がロンドンで出会ったとき、この二人のどちらがより強いか栄誉の決着をつけるために、公開試合をすることに決めた。それで両人は、人々の見守る中、拳を固めて、ある居酒屋の庭で対峙した。プリマス人がポーツマス人の胸を、数瞬の後、相手が血を吐くほどに殴ると、ポーツマス人は、口を拭きながら、でかしたと叫んだ。　ー　しかし間もなく、二人が再度向かい合って、ポーツマス人がプリマス人のボディーに、固めた右手で、したたかに殴り付けて、相手が目を回して、倒れたとき、プリマス人は叫んだ。これも悪くはない。　ー　この後人々は輪になって見守っていたが、甲高く歓声を上げた。腸にダメージを受けたプリマス人が亡くなって運び去られる間に、ポーツマス人に勝利の栄誉が認められたのであった。　ー　しかしこのポーツマス人もその翌日出血過多で亡くなったそうである。

Anekdote［Ein mecklenburgischer Landmann...］

Ein mecklenburgischer Landmann, namens Jonas, war seiner Leibesstärke wegen, im ganzen Lande bekannt.

Ein Thüringer, der in die Gegend geriet, und von jenem mit Ruhm sprechen hörte, nahm sichs vor sich mit ihm zu versuchen.

Als der Thüringer vor das Haus kam, sah er vom Pferde über die Mauer hinweg auf dem Hofe einen Mann Holz spalten und fragte diesen: ob hier der starke Jonas wohne? erhielt aber keine Antwort.

So stieg er vom Pferde, öffnete die Pforte, führte das Pferd herein, und band es an die Mauer.

Hier eröffnete der Thüringer seine Absicht, sich mit dem starken Jonas zu messen.
Jonas ergriff den Thüringer, warf ihn sofort über die Mauer zurück, und nahm seine Arbeit wieder vor.
Nach einer halben Stunde rief der Thüringer, jenseits der Mauer: Jonas! – Nun was gibts? antwortete dieser.
Lieber Jonas, sagte der Thüringer: sei so gut und schmeiß mir einmal auch mein Pferd wieder herüber!

逸話

ヨーナスという名前の一人のメクレンブルクの百姓が国中でその強靱な体のせいで有名であった。

この一帯に入って来た一人のチューリンゲン人がヨーナスの評判が高いのを聞いて、この男と競って見る決心をした。

このチューリンゲン人が家の前へ来て、馬上から壁越しに中庭で一人の男が薪を割っているのを見たので、この男に尋ねた。こちらに力自慢の男ヨーナスが住んでいるのか、と。しかし返事はなかった。

それで彼は馬から降りて、木戸を開けて、馬を中へ入れ、壁際に繋いだ。

かくてこのチューリンゲン人は自分の意図を打ち明けて、この強力のヨーナスと力試しをした。

ヨーナスはこのチューリンゲン人を捕まえて、すぐに壁の外へ投げ飛ばし、また自分の仕事を続けた。

三十分後に、このチューリンゲン人は壁の向こう側から叫んだ。ヨーナス、と。　一今度は何だ、とヨーナスは返事した。

親愛なるヨーナスよ、とチューリンゲン人は言った。済まないが、私の馬もまたこちらへ投げてくれ。

Sonderbare Geschichte, die sich, zu meiner Zeit, in Italien zutrug

Am Hofe der Prinzessin von St. C... zu Neapel, befand sich, im Jahr 1788, als Gesellschafterin oder eigentlich als Sängerin eine junge Römerin, namens Franzeska N..., Tochter eines armen invaliden Seeoffiziers, ein schönes und geistreiches Mädchen, das die Prinzessin von St. C... wegen eines Dienstes, den ihr der Vater geleistet, von früher Jugend an, zu sich genommen und in ihrem Hause erzogen hatte. Auf einer Reise, welche die Prinzessin in die Bäder zu Messina, und von hieraus, von der Witterung und dem Gefühl einer erneuerten Gesundheit aufgemuntert, auf den Gipfel des Ätna machte, hatte das junge unerfahrne Mädchen das Unglück, von einem Kavalier, dem Vicomte von P... , einem alten Bekannten aus Paris, der sich dem Zuge anschloß, auf das abscheulichste und unverantwortlichste betrogen zu werden; dergestalt, daß ihr, wenige Monden darauf, bei ihrer Rückkehr nach Neapel, nichts übrig blieb, als sich der Prinzessin, ihrer zweiten Mutter, zu Füßen zu werfen, und ihr unter Tränen den Zustand, in dem sie sich befand, zu entdecken. Die Prinzessin, welche die junge Sünderin sehr liebte, machte ihr zwar wegen der Schande, die sie über ihren Hof gebracht hatte, die heftigsten Vorwürfe; doch da sie ewige

Besserung und klösterliche Eingezogenheit und Enthaltsamkeit, für ihr ganzes künftiges Leben, angelobte, und der Gedanke, das Haus ihrer Gönnerin und Wohltäterin verlassen zu müssen, ihr gänzlich unerträglich war, so wandte sich das menschenfreundliche, zur Verzeihung ohnehin in solchen Fällen geneigte Gemüt der Prinzessin: sie hob die Unglückliche vom Boden auf, und die Frage war nur, wie man der Schmach, die über sie hereinzubrechen drohte, vorbeugen könne? In Fällen dieser Art fehlt es den Frauen, wie bekannt, niemals an Witz und der erforderlichen Erfindung; und wenige Tage verflossen: so ersann die Prinzessin selbst zur Ehrenrettung ihrer Freundin folgenden kleinen Roman.

Zuvörderst erhielt sie abends, in ihrem Hotel, da sie beim Spiel saß, vor den Augen mehrerer, zu einem Souper eingeladenen Gäste einen Brief: sie erbricht und überliest ihn, und indem sie sich zur Signora Franzeska wendet: »Signora«, spricht sie, »Graf Scharfeneck, der junge Deutsche, der Sie vor zwei Jahren in Rom gesehen, hält aus Venedig, wo er den Winter zubringt, um Ihre Hand an. – Da!« setzt sie hinzu, indem sie wieder zu den Karten greift, »lesen Sie selbst: es ist ein edler und würdiger Kavalier, vor dessen Antrag Sie sich nicht zu schämen brauchen.« Signora Franzeska steht errötend auf; sie empfängt den Brief, überfliegt ihn, und, indem sie die Hand der Prinzessin küßt: »Gnädigste«, spricht sie: »da der Graf in diesem Schreiben erklärt, daß er Italien zu seinem Vaterlande machen kann, so nehme ich ihn, von Ihrer Hand, als meinen Gatten an!« – Hierauf geht das Schreiben unter Glückwünschungen von Hand zu Hand; jedermann erkundigt sich nach der Person des Freiers, den niemand kennt, und Signora Franzeska gilt, von diesem Augenblick an, für die Braut des Grafen Scharfeneck. Drauf, an dem zur Ankunft des Bräutigams bestimmten Tage, an welchem nach seinem Wunsche auch sogleich die Hochzeit sein soll, fährt ein Reisewagen mit vier Pferden vor: es ist der Graf Scharfeneck! Die ganze Gesellschaft, die, zur Feier dieses Tages, in dem Zimmer der Prinzessin versammelt war, eilt voll Neugierde an die Fenster, man sieht ihn, jung und schön wie ein junger Gott, aussteigen – inzwischen verbreitet sich sogleich, durch einen vorangeschickten Kammerdiener, das Gerücht, daß der Graf krank sei, und in einem Nebenzimmer habe abtreten müssen. Auf diese unangenehme Meldung wendet sich die Prinzessin betreten zur Braut; und beide begeben sich nach einem kurzen Gespräch, in das Zimmer des Grafen, wohin ihnen nach Verlauf von etwa einer Stunde der Priester folgt. Inzwischen wird die Gesellschaft durch den Hauskavalier der Prinzessin zur Tafel geladen; es verbreitet sich, während sie auf das kostbarste und ausgesuchteste bewirtet wird, durch diesen die Nachricht, daß der junge Graf, als ein echter, deutscher Herr, weniger krank, als vielmehr nur ein Sonderling sei, der die Gesellschaft bei Festlichkeiten dieser Art nicht liebe; bis spät, um 11 Uhr in der Nacht, die Prinzessin, Signora Franzeska an der Hand, auftritt, und den versammelten Gästen mit der Äußerung, daß die Trauung bereits vollzogen sei, die Frau Gräfin von Scharfeneck vorstellt. Man erhebt sich, man erstaunt und freut sich, man jubelt und fragt: doch alles, was man von der Prinzessin und der Gräfin erfährt, ist, daß der Graf wohlauf sei; daß er sich auch in kurzem sämtlichen Herrschaften, die hier die Güte gehabt, sich zu versammeln, zeigen würde; daß dringende Geschäfte jedoch ihn nötigten, mit der Frühe des nächsten Morgens nach Venedig, wo ihm ein Onkel gestorben sei und er eine Erbschaft zu erheben habe, zurückzukehren. Hierauf, unter wiederholten Glückwünschungen und Umarmungen der Braut, entfernt sich die Gesellschaft;

und mit dem Anbruch des Tages fährt, im Angesicht der ganzen Dienerschaft, der Graf in seinem Reisewagen mit vier Pferden wieder ab. – Sechs Wochen darauf erhalten die Prinzessin und die Gräfin, in einem schwarz versiegelten Briefe, die Nachricht, daß der Graf Scharfeneck in dem Hafen von Venedig ertrunken sei. Es heißt, daß er, nach einem scharfen Ritt, die Unbesonnenheit begangen, sich zu baden; daß ihn der Schlag auf der Stelle gerührt, und sein Körper noch bis diesen Augenblick im Meere nicht gefunden sei. – Alles, was zu dem Hause der Prinzessin gehört, versammelt sich, auf diese schreckliche Post, zur Teilnahme und Kondolation; die Prinzessin zeigt den unseligen Brief, die Gräfin, die ohne Bewußtsein in ihren Armen liegt, jammert und ist untröstlich –; hat jedoch nach einigen Tagen Kraft genug, nach Venedig abzureisen, um die ihr dort zugefallene Erbschaft in Besitz zu nehmen. – Kurz, nach Verfluß von ungefähr neun Monaten (denn so lange dauerte der Prozeß) kehrt sie zurück; und zeigt einen allerliebsten kleinen Grafen Scharfeneck, mit welchem sie der Himmel daselbst gesegnet hatte. Ein Deutscher, der eine große genealogische Kenntnis seines Vaterlands hatte, entdeckte das Geheimnis, das dieser Intrige zum Grunde lag, und schickte dem jungen Grafen, in einer zierlichen Handzeichnung, sein Wappen zu, welches die Ecke einer Bank darstellte, unter welcher ein Kind lag. Die Dame hielt sich gleichwohl, unter dem Namen einer Gräfin Scharfeneck, noch mehrere Jahre in Neapel auf; bis der Vicomte von P..., im Jahr 1793, zum zweitenmale nach Italien kam, und sich, auf Veranlassung der Prinzessin, entschloß, sie zu heiraten. – Im Jahr 1802 kehrten beide nach Frankreich zurück.
mz.

往時、イタリアで起きた奇妙な出来事

一七八八年のこと、ミラノの聖Ｃ某地公妃の宮廷に一人の若いローマ人女性が付き添い女官として、あるいは元来歌姫として、名前はフランチェスカ・Ｎ某という貧しい傷病海軍士官の娘、美しい機知豊かな少女がいて、この聖Ｃ某地公妃は、その父親が自分に尽くした功績を多として、この娘を若いときから、自分の手許に引き取っていて、自分の家で育てていた。メッシーナの湯治場へ向かい、そしてここから天候と、健康回復の思いで勇気付けられて、エトナ山頂へと向かったある旅の折、この若い、世慣れない少女は、一人の伊達騎士、Ｐ某子爵、この旅の一行に加わったパリ出身の旧知の男性にとてもおぞましく無責任な具合に騙されてしまうという不幸に遭遇した。かくて娘はその数ヵ月後、ナポリへ帰った際、公妃、つまり自分の母親代わりの女性の足許に身を投げ出して、涙ながらに、自分の陥っている状態を白状する他なかった。この若い罪の女性をとても愛していた公妃は、この娘が自分の宮廷にもたらした恥辱の廉で、極めて激しく非難したが、しかし娘が、永遠の更生と、その生涯ずっと修道院に隠棲し、質素に暮らすと約束し、それに恩恵を受け、慈しみ深い公妃の家を去らなければならないと考えると、耐え難く思われると訴えると、公妃は隣人愛に溢れ、いずれにせよ、このような場合寛大に許しがちな自分の心情が強く出てきた。公妃はこの不幸な娘を床から起こして、後の問題はただ、自分らに降りかかって来そうな恥辱をいかに乗り越えるかという問題だけになった。こうした事件の場合に、女性達に洒落た知恵や必要な創意工夫が欠けることは、周知のように、ほとんどない。数日が経過した。そして公妃は自ら自分の女友達の名誉回復のために次のような些細な小説を発案した。

まず公妃は夕方、あるホテルで、トランプ遊びに興じて座っていたが、夕食に招待され

た何人かの客人達の目の前で一通の手紙を受け取った。公妃は開封して、ざっと読み、フランチェスカ嬢に向かって言った。「お嬢」と彼女は言った、「シャルフェネック伯爵、若いドイツ人が、ローマで二年前あなたと会った方ですが、この冬過ごしているヴェネツィアからあなたに求婚の手紙を寄越しています。　ー　ほら」と更に公妃は付け加えながら、再びトランプに手を伸ばした、「自分で読んでご覧なさい。高貴な品位ある名誉の騎士で、この方の申し込みに何ら恥じることはありません」。フランチェスカ嬢は赤面して立ち上がった。彼女は手紙を受け取り、通読した。そして公妃の手に接吻をしながら、彼女は言った。「恵み深い公妃、伯爵はこの書状で、自分はイタリアを祖国にして良いと言明されていますので、公妃の手を借りて、この方を私の夫として受け入れます」。　ー　この後、その書状は賀詞を受けながら、手から手へ渡った。誰もが、この誰もが知らない求婚者の人柄を尋ねて、この時からフランチェスカ嬢は、シャルフェネック伯爵の花嫁として認定されることになった。その後、新郎の到着する予定日に、この日には新郎の希望ですぐに結婚式となる筈であったが、四頭立ての旅行馬車が駆けて来た。シャルフェネック伯爵である。この日の祝典のために、公妃の部屋に集まっていた一行の全員が、好奇心一杯に窓辺に急いだ。人々は、若々しい神のような、若くて美しい青年が下車するのを見た。　ー　しかしすぐに、一人の先に到着していた侍従によって、伯爵は病気であり、隣室で控えざるを得ないという噂が広まった。この思わしくない知らせを聞いて、公妃は当惑して花嫁に向かって行った。そして両人は短い会話を交わして、伯爵の部屋へ入った。その後、およそ一時間の経過の後、牧師が、二人の後に続いて入った。その間一行の人々は、公妃の家中の騎士によって、食事へ招待されていた。高価で贅を尽くした饗応を一行が受けている間に、この騎士を通じて、次の知らせが広まった。つまりこの若い伯爵は、真のドイツ人の殿方として、病気というよりはむしろ単に、一人の変わり者に過ぎなくて、この種の祭典の際の社交を苦手としているに過ぎない、と。やがて遅く、夜の丁度十一時に、公妃がフランチェスカ嬢の手を取って現れ、集まっている客人達に、婚礼はすでに執り行われたと言明しながら、シャルフェネック伯爵夫人を紹介した。人々は起き上がり、びっくりし、喜び、歓声を上げ、尋ねた。しかし人々が公妃から聞かされたことの一切は以下の通りで、つまり伯爵は元気である、ほんの短い時間でも伯爵はここにわざわざご足労の皆様一同に挨拶を申し上げたいのであるが、しかし緊急の用が発生して、翌朝早朝にヴェネツィアへ戻らざるを得なくなっている、ヴェネツィアで自分の叔父が亡くなって、遺産相続の手続きをしなければならないのである、ということであった。この後、花嫁に対して賀詞と抱擁とが繰り返され、一同は去った。そして翌朝早く、伯爵はすべての従者達が見守る中、再び四頭立て馬車に乗って去った。　ー　その後六週間して、公妃と伯爵夫人は、黒い封のある手紙を受け取った。シャルフェネック伯爵はヴェネツィアの港で溺死したという知らせであった。つまり、伯爵は、大胆な騎乗の後、水泳をするという無茶を犯したのであった。伯爵は即刻、卒中に見舞われ、彼の体はまだ今この時まで海中で見つかっていない、と。　ー　公妃の家中の者皆が集まって、この恐ろしい知らせに対し、弔意と哀悼を表した。公妃はこの不幸の手紙を見せ、伯爵夫人は気を失って、嘆き、　ー　悲しみに暮れた。　ー　しかし数日後には回復し、ヴェネツィアに旅立って、当地で自分のものとなった遺産を継承することになった。　ー　要するに、およそ九ヵ月の後、(というのは、手続きはそれだけ要したからで)、夫人は戻って来た。そして夫人はとても可

愛く小さなシャルフェネック伯爵を披露した。天がその地で恵んでくれた子供であった。自分の祖国の偉大な系譜学的知識を有する一人のドイツ人が、この陰謀の根底にある秘密を嗅ぎつけて、この若い伯爵に対し、優美な手書きで、その紋章を送って来た。それは一つのベンチの片隅を表現したもので、その下に一人の子供が寝ていた[私生児の印]。しかしながらこのレディーはシャルフェネック伯爵夫人の名前で、更に何年かナポリに滞在した。やがてＰ某子爵が、一七九三年、イタリアへ二回目、滞在したとき、公妃の薦めで、伯爵夫人と結婚する決心をした。　一　一八〇二年両人はフランスへ戻った。

Hochwohlgeborner Herr,
Hochzuehrender, Hochgebietender, Vester und
Strenger Herr Hauptmann!

Sintemal und alldieweil und gleichwie, wenn die ungestüme Wasserflut und deren schäumende Wellen einer ganzen Stadt Untergang und Verwüstung drohen, und dann der zitternde Bürger mit Rettungswerkzeugen herzu eilet und rennt, um wo möglich den rauschenden, brausenden und erzürnten Fluten Einhalt zu tun: so und nicht anders eile ich Ew. Hochwohlgeboren bei dem jetzigen Jahreswechsel von der Unverbesserlichkeit meiner, Ihnen gewidmeten Ergebenheit bereitwilligst und dienstbeflissentlichst zu versichern und zu überzeugen und dabei meinem Hochgeehrten Herrn Hauptmann ein ganzes Arsenal voll aller zur Glückseligkeit des menschlichen Lebens erforderlichen Bedürfnisse anzuwünschen. – Es müsse meinem Hochgeehrtesten Herrn Hauptmann weder an Pulver der edlen Gesundheit, noch an den Kugeln eines immerwährenden Vergnügens, weder an Bomben der Zufriedenheit, weder an Karkassen der Gemütsruhe, noch an der Lunte eines langen Lebens ermangeln. Es müssen die Feinde unsrer Ruhe, die pandurenmäßigen Sorgen, sich nimmer der Zitadelle ihres Herzens nähern; ja, es müsse Ihnen gelingen, die Trancheen ihrer Kränkungen vor der Redoute Ihrer Lustempfindungen zu öffnen. Das Glacis Ihres Wohlergehns sei bis in das späteste Alter mit den Palisaden des Segens verwahrt, und die Sturmleitern des Kummers müssen vergebens an das Ravelin Ihrer Freude gelegt werden. Es müssen Ew. Hochwohlgeboren alle, bei dem beschwerlichen Marsch dieses Lebens vorkommende, Defiléen ohne Verlust und Schaden passieren, und fehle es zu keiner Zeit, weder der Kavallerie Ihrer Wünsche, noch der Infanterie Ihrer Hoffnungen, noch der reitenden Artillerie Ihrer Projekte an dem Proviant und den Munitionen eines glücklichen Erfolgs. Übrigens ermangle ich auch nicht, das Gewehr meiner mit scharfen Patronen geladenen Dankbarkeit zu der Salve Ihres gütigen Wohlwollens loszuschießen, und mit ganzen Pelotons der Erkenntlichkeit durch zu chargieren. Ich verabscheue die Handgriffe der Falschheit, ich mache den Pfanndeckel der Verstellung ab, und dringe mit aufgepflanztem Bajonett meiner ergebensten Bitte in das Bataillon Quarré Ihrer Freundschaft ein, um dieselbe zu forcieren, daß sie mir den Wahlplatz Ihrer Gewogenheit überlassen müsse, wo ich mich zu maintenieren suchen werde, bis die unvermeidliche Mine des Todes ihren Effekt tut, und mich, nicht in die Luft sprengen, wohl aber in die dunkle Kasematte des Grabes einquartieren wird. Bis dahin verharre ich meines

Hochzuehrenden Herrn Hauptmanns

respektmäßiger Diener N. N.

七年戦争時、自分の大尉宛一人の砲兵軍曹による新年の賀詞

いとも高貴な出自の尊台、
いとも称えられるべき、いとも確かに指揮される、断固として
峻厳な大尉殿

狂暴な洪水や咆哮する高波が一つの町全体に消滅と壊滅をもたらしかねないとき、そして震える市民が救命道具を持って、ざわめき、轟き、荒れ狂う大波を必死にせき止めようとするとき、まさにそれ故に、かかるが故に、まさにそのように、是非に及ばず、不肖私は、高貴な出自の閣下に、目下の年の改まる時節、劣器鈍根の身ながら、帰順忠誠の覚悟と勤勉奉公の意志をお誓い、披瀝して、同時に我がいとも尊い大尉殿に、人間生活の多幸のためには必須の必需品すべてが完備された兵器庫を誓願申し上げる次第です。　一　我がいとも至高に尊い大尉殿におかれましては、高貴な健康という火薬も、常世の享楽という弾薬も、満足という爆弾も、情緒の安定という焼夷弾も、長寿という火縄も不足することがなきよう祈願致します。我らの休息を妨げる敵、勇猛なハンガリー騎兵隊並の憂慮が決して貴方の御心の砦に忍び寄ることのなきよう発願致します。貴方の侮辱への交通壕が貴方の快適感覚の角面堡の前に開けますよう願立て致します。貴方の御安寧の胸壁は、最晩年に至るまで、祝福の柵杭で守護されますように、そして苦悶の攻城梯子が貴方の歓喜の半月堡に掛けられても無駄となるように願掛け致します。いとも高貴な尊台におかれましては、この難儀な人生の行軍においてぶつかるすべての隘路を、何の損失損害もなく通過でき、いかなる時でも、貴方の願望の騎兵にとって、貴方の希望の歩兵隊にとって、貴方の発案の騎馬砲兵隊にとって、その糧食と弾薬に関し、幸いなる成功に欠けることがなきように結願致します。ちなみに私も、我が実のある弾薬を装填した感謝の銃を、貴方の善意の御好意に対する祝砲として発射し、そして謝意のすべての分隊と共に装填することを欠かしません。私は偽りの手管を嫌い、偽装の火皿蓋を退けます。そして我が恭順の願いを装着した銃剣と共に、貴方の友情の方陣大隊へ、この友情を強化すべき参加致し、かくて貴方のご愛顧による配置を有り難く頂戴し、そこで私は死神の避けがたい爆弾がその効果を発揮して、私を空中に爆発させないまでも、壕の暗い耐爆掩蔽へ宿営させるまで、自分の持ち場を離れないつもりです。その死に至るまで、私は以下の者です。

いとも尊い大尉殿の、
忠誠紛れもない僕、N.N.

Der neuere（glücklichere）Werther

Zu L..e in Frankreich war ein junger Kaufmannsdiener, Charles C..., der die Frau seines Prinzipals, eines reichen aber bejahrten Kaufmanns, namens D..., heimlich liebte. Tugendhaft und rechtschaffen, wie er die Frau kannte, machte er nicht den mindesten Versuch, ihre Gegenliebe zu

erhalten: um so weniger, da er durch manche Bande der Dankbarkeit und Ehrfurcht an seinen Prinzipal geknüpft war. Die Frau, welche mit seinem Zustande, der seiner Gesundheit nachteilig zu werden drohte, Mitleiden hatte, forderte ihren Mann, unter mancherlei Vorwand auf, ihn aus dem Hause zu entfernen; der Mann schob eine Reise, zu welcher er ihn bestimmt hatte, von Tage zu Tage auf, und erklärte endlich ganz und gar, daß er ihn in seinem Kontor nicht entbehren könne. Einst machte Herr D..., mit seiner Frau, eine Reise zu einem Freunde, aufs Land; er ließ den jungen C..., um die Geschäfte der Handlung zu führen, im Hause zurück. Abends, da schon alles schläft, macht sich der junge Mann, von welchen Empfindungen getrieben, weiß ich nicht, auf, um noch einen Spaziergang durch den Garten zu machen. Er kömmt bei dem Schlafzimmer der teuern Frau vorbei, er steht still, er legt die Hand an die Klinke, er öffnet das Zimmer: das Herz schwillt ihm bei dem Anblick des Bettes, in welchem sie zu ruhen pflegt, empor, und kurz, er begeht, nach manchen Kämpfen mit sich selbst, die Torheit, weil es doch niemand sieht, und zieht sich aus und legt sich hinein. Nachts, da er schon mehrere Stunden, sanft und ruhig geschlafen, kommt, aus irgend einem besonderen Grunde, der, hier anzugeben, gleichgültig ist, das Ehepaar unerwartet nach Hause zurück; und da der alte Herr mit seiner Frau ins Schlafzimmer tritt, finden sie den jungen C..., der sich, von dem Geräusch, das sie verursachen, aufgeschreckt, halb im Bette, erhebt. Scham und Verwirrung, bei diesem Anblick, ergreifen ihn; und während das Ehepaar betroffen umkehrt, und wieder in das Nebenzimmer, aus dem sie gekommen waren, verschwindet, steht er auf, und zieht sich an; er schleicht, seines Lebens müde, in sein Zimmer, schreibt einen kurzen Brief, in welchem er den Vorfall erklärt, an die Frau, und schießt sich mit einem Pistol, das an der Wand hängt, in die Brust. Hier scheint die Geschichte seines Lebens aus; und gleichwohl (sonderbar genug) fängt sie hier erst allererst an. Denn statt ihn, den Jüngling, auf den er gemünzt war, zu töten, zog der Schuß dem alten Herrn, – der in dem Nebenzimmer befindlich war, den Schlagfluß zu: Herr D... verschied wenige Stunden darauf, ohne daß die Kunst aller Ärzte, die man herbeigerufen, imstande gewesen wäre, ihn zu retten. Fünf Tage nachher, da Herr D... schon längst begraben war, erwachte der junge C..., dem der Schuß, aber nicht lebensgefährlich, durch die Lunge gegangen war: und wer beschreibt wohl – wie soll ich sagen, seinen Schmerz oder seine Freude? als er erfuhr, was vorgefallen war, und sich in den Armen der lieben Frau befand, um derentwillen er sich den Tod hatte geben wollen! Nach Verlauf eines Jahres heiratete ihn die Frau; und beide lebten noch im Jahr 1801, wo ihre Familie bereits, wie ein Bekannter erzählt, aus 13 Kindern bestand.

新しい（より幸せな）ヴェールター

フランスのＬ某知に若い商売奉公人、シャルル・Ｃ某という者がいて、その主人、裕福であるが、しかし高齢の商人、Ｄ某という名前の男の夫人を秘かに愛していた。この若者は夫人のことを有徳で正直であると知っていたので、夫人からの愛を得ようという試みを一切しなかった。自分の主人に対し、感謝と畏敬の幾多の絆で結ばれていただけに、尚更そのような試みをしなかった。健康を次第に損なって行く彼の状態に同情を抱いた夫人は、幾つかの口実を設けて、若者を家から遠ざけるよう夫に要求した。主人は若者を行かせることに決めていた一つの旅を日に日に延期して、最後に、若者を自分の帳場で欠かすことは出来ないとはっきり言明した。或る日Ｄ某氏は、自分の妻と一緒に田舎の友人の許へ旅

した。主人はこの若いＣ某に、取引の仕事を任せて、この若者を家に残した。夕方、すでに皆が寝静まっていたとき、この若い男は、いかなる情動に駆られたのか、知るよしもないが、更に庭を通って散歩することにした。彼は大切な夫人の寝室の側を通りかかり、立ち止まって、取っ手に手を掛け、部屋を開けた。夫人が休む習慣のベッドを目の当たりにして、彼の心は高鳴った。そして要するに、自分の心と散々戦った末、誰も見ていなかったので、愚行を敢行し、服を脱いで、ベッドに入った。夜、彼がすでに数時間、穏やかに静かに眠っていたとき、何らかの、ここで記すのはどうでも良い特別な理由により、この夫妻は思いがけず家に戻って来た。老主人が妻と一緒に寝室に入ると、二人は若いＣ某を見つけた。Ｃ某は、二人が引き起こす物音で、びっくりして、ベッドで半ば身を起こしていた。この光景で彼は恥辱と困惑に襲われた。夫妻が狼狽して向きを変え、再び自分達が通って来た隣室へ消えると、彼は立ち上がって、服を着た。彼は人生に疲れて、自分の部屋へこっそり入った。この出来事を釈明する短い手紙を夫人宛に書き、壁に掛かっていたピストルで胸を射た。ここで彼の人生の物語は終わったかに見える。しかしながら（十分奇妙なことに)、ここでようやく初めて始まるのである。というのは、この射撃は狙い定めていたこの若者を殺す代わりに、隣室にいた老主人に卒中を引き起こしたからである。Ｄ某氏は、呼び寄せた医師達の技も、彼の命を救い出し得ず、数時間後に身罷ったのである。五日後、すでにＤ某氏が埋葬されていたとき、この若いＣ某は目覚めた。その射撃は肺を射抜いたけれども、命に別状はなかったのである。何と言って良いのか、何が起きたのか彼が知ったときの、そして愛する夫人の両腕の中にいる自分を見いだしたときの、彼の痛みというか、彼の喜びを、誰が描写出来よう。この夫人のために彼は死のうと思ったのである。一年後に夫人は彼と結婚をした。そして両人はまだ一八〇一年存命であり、二人の家族はすでに、一人の知人が数えるところによれば、十三人の子供がいるそうである。

Mutterliebe

Zu St. Omer im nördlichen Frankreich ereignete sich im Jahr 1803 ein merkwürdiger Vorfall. Daselbst fiel ein großer toller Hund, der schon mehrere Menschen beschädigt hatte, über zwei, unter einer Haustür spielende, Kinder her. Eben zerreißt er das jüngste, das sich, unter seinen Klauen, im Blute wälzt; da erscheint, aus einer Nebenstraße, mit einem Eimer Wasser, den sie auf dem Kopf trägt, die Mutter. Diese, während der Hund die Kinder losläßt, und auf sie zuspringt, setzt den Eimer neben sich nieder; und außerstand zu fliehen, entschlossen, das Untier mindestens mit sich zu verderben, umklammert sie, mit Gliedern, gestählt von Wut und Rache, den Hund: sie erdrosselt ihn, und fällt, von grimmigen Bissen zerfleischt, ohnmächtig neben ihm nieder. Die Frau begrub noch ihre Kinder und ward, in wenig Tagen, da sie an der Tollwut starb, selbst zu ihnen ins Grab gelegt.

母性愛

北フランスのサントメールで、一八〇三年、珍しい出来事が生じた。当地で、すでに何人かの人間を損傷させていた大きな狂犬が、二人の、玄関の下で遊んでいた子供達に襲いかかった。丁度この狂犬が下の子に噛み切って、その子が噛まれて血まみれに転がっているとき、側の通りから、水を汲んだバケツを頭に乗せた母親が現れた。この母親は、犬が

子供達を放して、自分に飛びかかって来る間に、バケツを側の下ろしていた。そして逃げることは出来ず、この獣を少なくとも自ら片付ける決心をして、憤怒と復讐心とで鋼鉄と化して、四肢を使ってこの犬を締め上げた。母親は犬を絞殺したが、狂暴に噛まれて傷だらけになり、失神してこの犬の側に倒れた。この母親は更に自分の子供達を埋葬し、自らは数日後、狂犬病で亡くなり、自分の子供達の墓に埋葬された。

Unwahrscheinliche Wahrhaftigkeiten

»Drei Geschichten«, sagte ein alter Offizier in einer Gesellschaft, »sind von der Art, daß ich ihnen zwar selbst vollkommenen Glauben beimesse, gleichwohl aber Gefahr liefe, für einen Windbeutel gehalten zu werden, wenn ich sie erzählen wollte. Denn die Leute fordern, als erste Bedingung, von der Wahrheit, daß sie wahrscheinlich sei; und doch ist die Wahrscheinlichkeit, wie die Erfahrung lehrt, nicht immer auf Seiten der Wahrheit.«

Erzählen Sie, riefen einige Mitglieder, erzählen Sie! denn man kannte den Offizier als einen heitern und schätzenswürdigen Mann, der sich der Lüge niemals schuldig machte.

Der Offizier sagte lachend, er wolle der Gesellschaft den Gefallen tun; erklärte aber noch einmal im voraus, daß er auf den Glauben derselben, in diesem besonderen Fall, keinen Anspruch mache. Die Gesellschaft dagegen sagte ihm denselben im voraus zu; sie forderte ihn nur auf, zu reden, und horchte.

»Auf einem Marsch 1792 in der Rheinkampagne«, begann der Offizier, »bemerkte ich, nach einem Gefecht, das wir mit dem Feinde gehabt hatten, einen Soldaten, der stramm, mit Gewehr und Gepäck, in Reih und Glied ging, obschon er einen Schuß mitten durch die Brust hatte; wenigstens sah man das Loch vorn im Riemen der Patrontasche, wo die Kugel eingeschlagen hatte, und hinten ein anderes im Rock, wo sie wieder herausgegangen war. Die Offiziere, die ihren Augen bei diesem seltsamen Anblick nicht trauten, forderten ihn zu wiederholten Malen auf, hinter die Front zu treten und sich verbinden zu lassen; aber der Mensch versicherte, daß er gar keine Schmerzen habe, und bat, ihn, um dieses Prellschusses willen, wie er es nannte, nicht von dem Regiment zu entfernen. Abends, da wir ins Lager gerückt waren, untersuchte der herbeigerufene Chirurgus seine Wunde; und fand, daß die Kugel vom Brustknochen, den sie nicht Kraft genug gehabt, zu durchschlagen, zurückgeprellt, zwischen der Ribbe und der Haut, welche auf elastische Weise nachgegeben, um den ganzen Leib herumgeglitscht, und hinten, da sie sich am Ende des Rückgrats gestoßen, zu ihrer ersten senkrechten Richtung zurückgekehrt, und aus der Haut wieder hervorgebrochen war. Auch zog diese kleine Fleischwunde dem Kranken nichts als ein Wundfieber zu: und wenige Tage verflossen, so stand er wieder in Reih und Glied.«

Wie? fragten einige Mitglieder der Gesellschaft betroffen, und glaubten, sie hätten nicht recht gehört.

Die Kugel? Um den ganzen Leib herum? Im Kreise? – – Die Gesellschaft hatte Mühe, ein Gelächter zu unterdrücken.

»Das war die erste Geschichte«, sagte der Offizier, indem er eine Prise Tabak nahm, und schwieg.

Beim Himmel! platzte ein Landedelmann los: da haben Sie recht; diese Geschichte ist von der Art,

daß man sie nicht glaubt!

»Eilf Jahre darauf«, sprach der Offizier, »im Jahre 1803, befand ich mich, mit einem Freunde, in dem Flecken Königstein in Sachsen, in dessen Nähe, wie bekannt, etwa auf eine halbe Stunde, am Rande des äußerst steilen, vielleicht dreihundert Fuß hohen, Elbufers, ein beträchtlicher Steinbruch ist. Die Arbeiter pflegen, bei großen Blöcken, wenn sie mit Werkzeugen nicht mehr hinzu kommen können, feste Körper, besonders Pfeifenstiele, in den Riß zu werfen, und überlassen der, keilförmig wirkenden, Gewalt dieser kleinen Körper das Geschäft, den Block völlig von dem Felsen abzulösen. Es traf sich, daß, eben um diese Zeit, ein ungeheurer, mehrere tausend Kubikfuß messender, Block zum Fall auf die Fläche des Elbufers, in dem Steinbruch, bereit war; und da dieser Augenblick, wegen des sonderbar im Gebirge widerhallenden Donners, und mancher andern, aus der Erschütterung des Erdreichs hervorgehender Erscheinungen, die man nicht berechnen kann, merkwürdig ist: so begaben, unter vielen andern Einwohnern der Stadt, auch wir uns, mein Freund und ich, täglich abends nach dem Steinbruch hinaus, um den Moment, da der Block fallen würde, zu erhaschen. Der Block fiel aber in der Mittagsstunde, da wir eben, im Gasthof zu Königstein, an der Tafel saßen; und erst um 5 Uhr gegen Abend hatten wir Zeit, hinaus zu spazieren, und uns nach den Umständen, unter denen er gefallen war, zu erkundigen. Was aber war die Wirkung dieses seines Falls gewesen? Zuvörderst muß man wissen, daß, zwischen der Felswand des Steinbruchs und dem Bette der Elbe, noch ein beträchtlicher, etwa 50 Fuß in der Breite haltender Erdstrich befindlich war; dergestalt, daß der Block (welches hier wichtig ist) nicht unmittelbar ins Wasser der Elbe, sondern auf die sandige Fläche dieses Erdstrichs gefallen war. Ein Elbkahn, meine Herren, das war die Wirkung dieses Falls gewesen, war, durch den Druck der Luft, der dadurch verursacht worden, aufs Trockne gesetzt worden; ein Kahn, der, etwa 60 Fuß lang und 30 breit, schwer mit Holz beladen, am andern, entgegengesetzten, Ufer der Elbe lag: diese Augen haben ihn im Sande – was sag ich? sie haben, am anderen Tage, noch die Arbeiter gesehen, welche, mit Hebeln und Walzen, bemüht waren, ihn wieder flott zu machen, und ihn, vom Ufer herab, wieder ins Wasser zu schaffen. Es ist wahrscheinlich, daß die ganze Elbe (die Oberfläche derselben) einen Augenblick ausgetreten, auf das andere flache Ufer übergeschwappt und den Kahn, als einen festen Körper, daselbst zurückgelassen; etwa wie, auf dem Rande eines flachen Gefäßes, ein Stück Holz zurückbleibt, wenn das Wasser, auf welchem es schwimmt, erschüttert wird.«

Und der Block, fragte die Gesellschaft, fiel nicht ins Wasser der Elbe?

Der Offizier wiederholte: nein!

Seltsam! rief die Gesellschaft.

Der Landedelmann meinte, daß er die Geschichten, die seinen Satz belegen sollten, gut zu wählen wüßte.

»Die dritte Geschichte«, fuhr der Offizier fort, »trug sich zu, im Freiheitskriege der Niederländer, bei der Belagerung von Antwerpen durch den Herzog von Parma. Der Herzog hatte die Schelde, vermittelst einer Schiffsbrücke, gesperrt, und die Antwerpner arbeiteten ihrerseits, unter Anleitung eines geschickten Italieners, daran, dieselbe durch Brander, die sie gegen die Brücke losließen, in die Luft zu sprengen. In dem Augenblick, meine Herren, da die Fahrzeuge die Schelde herab,

gegen die Brücke, anschwemmen, steht, das merken Sie wohl, ein Fahnenjunker, auf dem linken Ufer der Schelde, dicht neben dem Herzog von Parma; jetzt, verstehen Sie, jetzt geschieht die Explosion: und der Junker, Haut und Haar, samt Fahne und Gepäck, und ohne daß ihm das mindeste auf dieser Reise zugestoßen, steht auf dem rechten. Und die Schelde ist hier, wie Sie wissen werden, einen kleinen Kanonenschuß breit.«

»Haben Sie verstanden?«

Himmel, Tod und Teufel! rief der Landedelmann.

Dixi! sprach der Offizier, nahm Stock und Hut und ging weg.

Herr Hauptmann! riefen die andern lachend: Herr Hauptmann! – Sie wollten wenigstens die Quelle dieser abenteuerlichen Geschichte, die er für wahr ausgab, wissen.

Lassen Sie ihn, sprach ein Mitglied der Gesellschaft; die Geschichte steht in dem Anhang zu Schillers Geschichte vom Abfall der vereinigten Niederlande; und der Verfasser bemerkt ausdrücklich, daß ein Dichter von diesem Faktum keinen Gebrauch machen könne, der Geschichtschreiber aber, wegen der Unverwerflichkeit der Quellen und der Übereinstimmung der Zeugnisse, genötigt sei, dasselbe aufzunehmen.

vx.

あり得そうにない真実のこと

ある社交の場で一人の老いた将校が言った。「三つの話しがありまして、いずれも私は自らその話しの完全な信憑性を保証するものですが、しかしながら私が話そうとすれば、私はほら吹きと見なされる怖れのある、そういう種類の話しです。と申しますのは、真実の第一条件として、真実はあり得そうであることが、要請されるからです。しかしながら、このあり得そうという蓋然性は、経験が教えていますように、必ずしも真実の側にはないのです」。

何人かの会員が話してください、話してくださいと叫んだ。　ー　というのは、この将校は、嘘つきの評判は決してない、陽気な尊重されている男として知られていたからである。

将校は笑って、一同に座興として供しましょうと言った。しかし今一度自分は、この特殊な件に関して、この話しの信憑性の高さを主張するものではないと釈明した。

これに対し、一同は前もって、その信憑性は高いものと認めると言って、ただ話すよう要請して、そして聞き入った。

「一七九二年の[フランスとの]ライン戦役のある行軍の際に」と将校は始めた、「我々が敵との間でやり合った戦闘の後、一人の兵士が、胸の真ん中に銃弾を受けながら、銃と荷を持って、直立不動に戦列に就いているのに気付きました。少なくとも前面の弾薬盒の革ひもの中に、弾が撃ち込まれた穴が見えて、上着の背中に、弾がまた出て行った別な穴がありました。この奇妙な光景を見て、自分達の目が信じられなかった将校達は、この兵士に、前線を退き、包帯をして貰うよう、何度も要請しました。しかしこの男は、自分は何の痛みもないと請け合って、自分をこの跳弾のせいで、そう兵士は形容していましたが、連隊から遠ざけないでくれと頼みました。夕方、我々が陣地に戻ったとき、呼ばれた外科医は、彼の傷を調べ、そしてその弾は、肋骨に当たって、それを通過する力が十分でなくて、跳ね返り、肋骨と皮膚の間、この皮膚は柔軟で抵抗せずに、体全体の周りをぐるっと

滑って行き、背骨の末端にぶつかって、この背中でようやく垂直に反転して、この皮膚からまた出て来ていました。この些細な肉体の傷も、この患者に何ら外傷熱をもたらすものではなく、数日の経過の後、兵士はまた戦列に復帰しました」。

何ですと、とその社交の場の何人かの会員が当惑して尋ね、話しはよく聞き取れなかったと思っていた。

弾だろう。それが体全体の周りを回るか。弧を描いて。　一一　一行は哄笑を抑えるのに苦労した。

「今のは最初の話しです」と将校は言って、煙草を一摘まみして、黙っていた。

天にかけて、と地方貴族が弾けた。貴方の仰有る通りです。この話しは信じられないその類いのものです。

「その後十一年して」と将校は語った。「一八〇三年に、私は一人の友人と共に、ザクセンのケーニヒシュタインの地に行きました。その近くには、周知のように、およそ三十分離れたエルベ河畔に、極めて急峻な、三百フィートの高さになろうかという、立派な石切り場があります。労働者達は、大きな塊の場合、道具を持ってしては手に負えない場合、固い物体を、特にパイプの柄を隙間に投入する習慣です。そして、この小さな物体の楔形に働くその力に任せて、この塊を岩場から完全に切り離します。たまたま、丁度この頃、途方もない、数千平方フィートになろうかという塊が、エルベ河畔の平面、石切り場に落下せんとする瞬間が近付いていました。この瞬間は、奇妙に山脈に反響する轟音と、幾つかの他の、計算し得ない、大地の振動に由来する現象のせいで、珍しいものに思えて、町の多くの他の住民に混じって、我々、つまり私の友と私も、毎日夕方この石切り場へ出掛けて、この塊が落下する瞬間を捉えようと待ち構えていました。しかしこの塊は、我々がケーニヒシュタインの旅館で食事をしていた丁度正午に落下しました。そしてようやく夕方頃五時に我々は暇が出来て、外に散歩に出て、この塊が落下した時の状況を調べることにしました。しかしこの落下の影響はいかなるものであったでしょうか。まず最初に、石切り場の岩壁とエルベ河の河床との間には、なおかなりの、およそ五十フィートの幅の大地が見られたということを知っておかなければなりません。それでこの塊は（ここで重要ですが）エルベ河の中に直接落ちたのではなく、この大地の部分、砂の平面に落ちたのです。皆さん、一隻のエルベの小舟が、これがこの落下の効果と言えましょうが、これによって引き起こされた空気の圧力によって、砂地に移されていました。一隻の小舟、これはおよそ縦六十フィート、幅三十フィートで、材木を積んで重たいものでしたが、エルベ河畔の反対側に横たわっていました。この私の目が、小舟を砂地に見たのです。　一　何と申しましょう。この目はまた翌日、労働者達を見まして、彼らは梃子やローラーを使って、小舟をまた浮かべよう、小舟を岸辺から下ろして、また河の中に戻そうとしていました。エルベ河全体が（エルベ河の表面が）、一瞬散って、別の地面の岸辺へと跳ね返って、重い物体としての小舟をその地面岸辺へ置き去りにしたのです。例えば、平らな容器の縁に一片の木片が、この木片を浮かべている水が揺すぶられて、残るようなものです」。

それで塊は、と一同は尋ねた。エルベ河の水中に落ちたのではないのですか。

将校は繰り返した。いいえ[水中ではない]。

奇妙だ、と一同が叫んだ。

田舎貴族は、この方は自分の命題を証する話しを上手に選んでいらっしゃると述べた。

「三番目の話しは」と将校は続けた、「ネーデルラントの解放戦争の時、パルマ公爵によるアントワープ攻撃の際に起きました。公爵はスヘルデ川に、舟橋を造って、妨害しました。しかしアントワープ人としては、器用なイタリア人の指導の許、この舟橋に対して放った火船で、この橋を空中に爆発させようとしました。この火船が、スヘルデ川を下って、橋に近付いた瞬間、皆さん、ご記憶でしょうが、一人の士官候補生がスヘルデ川左手岸辺に現れました。パルマ公爵のすぐ側です。この時、よろしいですか、この時爆発となりました。するとこの士官候補生は、生身のまま、旗も荷も一緒に、この飛ばされる間、何ごともなくて、スヘルデ川右手に立つことになったのです。スヘルデ川というのは、ご存じ頂けるでしょうが、この辺ではちょっとした砲弾の射程距離です」。

「お分かり頂けましたか」。

いやはや、途方もない、と地方貴族は叫んだ。

「以上」と将校は語って、杖と帽子を取って、出て行った。

大尉殿と他の者達は笑いながら叫んだ。少なくとも彼らは、本当の話しと称したこの最後の途方もない話しの出典を知りたいと思ったのである。

この一同の中の一人の会員が語った、放っておきなさい。この話しはオランダの分離独立に関するシラーの歴史の付録に載っている。著者シラーが明瞭に述べている。一人の詩人としては、この事実に関して、利用することは出来ないであろう。しかし歴史記述者としては、出典の間違いのなさと、証言者の一致により、この事実を採用するのは致し方のないことである、と。

Sonderbarer Rechtsfall in England

Man weiß, daß in England jeder Beklagte zwölf Geschworne von seinem Stande zu Richtern hat, deren Ausspruch einstimmig sein muß, und die, damit die Entscheidung sich nicht zu sehr in die Länge verziehe, ohne Essen und Trinken so lange eingeschlossen bleiben, bis sie eines Sinnes sind. Zwei Gentlemen, die einige Meilen von London lebten, hatten in Gegenwart von Zeugen einen sehr lebhaften Streit miteinander; der eine drohte dem andern, und setzte hinzu, daß ehe vier und zwanzig Stunden vergingen, ihn sein Betragen reuen solle. Gegen Abend wurde dieser Edelmann erschossen gefunden; der Verdacht fiel natürlich auf den, der die Drohungen gegen ihn ausgestoßen hatte. Man brachte ihn zu gefänglicher Haft, das Gericht wurde gehalten, es fanden sich noch mehrere Beweise, und 11 Beisitzer verdammten ihn zum Tode; allein der zwölfte bestand hartnäckig darauf, nicht einzuwilligen, weil er ihn für unschuldig hielte.

Seine Kollegen baten ihn, Gründe anzuführen, warum er dies glaubte; allein er ließ sich nicht darauf ein, und beharrte bei seiner Meinung. Es war schon spät in der Nacht, und der Hunger plagte die Richter heftig; einer stand endlich auf, und meinte, daß es besser sei, einen Schuldigen loszusprechen, als 11 Unschuldige verhungern zu lassen; man fertigte also die Begnadigung aus, führte aber auch zugleich die Umstände an, die das Gericht dazu gezwungen hätten. Das ganze Publikum war wider den einzigen Starrkopf; die Sache kam sogar vor den König, der ihn zu sprechen verlangte; der Edelmann erschien, und nachdem er sich vom Könige das Wort geben lassen, daß seine Aufrichtigkeit nicht von nachteiligen Folgen für ihn sein sollte, so erzählte er

dem Monarchen, daß, als er im Dunkeln von der Jagd gekommen, und sein Gewehr losgeschossen, es unglücklicher Weise diesen Edelmann, der hinter einem Busche gestanden, getötet habe. Da ich, fuhr er fort, weder Zeugen meiner Tat, noch meiner Unschuld hatte, so beschloß ich, Stillschweigen zu beobachten; aber als ich hörte, daß man einen Unschuldigen anklagte, so wandte ich alles an, um einer von den Geschwornen zu werden; fest entschlossen, eher zu verhungern, als den Beklagten umkommen zu lassen. Der König hielt sein Wort, und der Edelmann bekam seine Begnadigung.

イギリスの奇妙な訴訟事件

イギリスでは、どの被告人も自分の身分の十二名の陪審員を裁判官とし、その判決は満場一致でなければならず、そしてその決定が余りに長く引き延ばされないように、意見の一致を見るまで、その裁判官達は食事と飲酒抜きで閉じ込められるということが知られている。ロンドンから数マイル離れた所に暮らしている二人の紳士が、証人の居合わせる場で、互いに激しい口論をすることがあった。一方の者が他方の者を脅して、二十四時間経たないうちに、後悔することになるぞと付言した。夕方頃この貴族は射殺されて発見された。勿論嫌疑は、この者に脅迫を行った相手にかかった。人々はこの男を牢に閉じ込め、裁判が開かれ、更に幾つかの証拠も見つかって、十一名の陪審員がこの男を死刑とした。しかし十二番目の者が、同意しないと頑強に主張し、この男は無罪であると思うと述べた。

同僚裁判官達は、何故そう思うのか、根拠を述べるよう頼んだ。しかし彼はその根拠を述べず、その主張を続けた。すでに夜遅くになっていて、裁判官達は激しく空腹を覚えた。とうとう一人の者が立ち上がって、十一人の無実の者達を飢えさせるよりも、一人の罪人を無罪放免とした方が良かろうと述べた。そこで裁判官達は恩赦をまとめたが、しかし裁判がこのような次第になったことの事情も同時に付記した。傍聴者は皆、この一人の頑固者に反撥した。この件は国王の許にまで達して、国王はこの頑固者と面談することを求めた。この貴族は現れて、そして自分が率直に述べても、自分に悪い結果をもたらすことはないという言質を国王から得た後で、自分が暗闇の中、狩をして来ていて、自分の銃を発砲した時、ある茂みの背後に立っていたこの貴族を殺してしまったのであると、国王に説明した。私は自分の行為の証人も、私の無実の証人も有していなかったので、沈黙を決め込むことに決めていたと彼は続けて述べた。しかし一人の無実の男が告訴されたと聞いて、私は万難を排して、陪審員の一人になりました。被告人を殺させるよりは、むしろ自分は餓死しようと固く決めていたのです。国王は約束を守って、この貴族は国王の恩赦を得た。

ドイツ語テキストは Projekt Gutenberg より。
また参照テクストは Heinrich von Kleist:Sämtliche Werke und Briefe. Bd.2. S.262-282. Hanser. このテキストの注やその他佐藤恵三訳『クライスト全集』第一巻を参照した。
ここに訳出したのは、前回紹介したレコードに吹き込まれていたマティアス・クラウディウスの息子宛の手紙の片面にクライストの『逸話集』の一部が収録されていたのを思い出したため。昔のレコードのドイツ語を思い出すと、やはり今浦島である。